

平成 19 年度

真名川ダム定期報告書（案）

平成 20 年 3 月

近畿地方整備局

# 目 次

## 1. 事業の概要

1.1 流域の概要	1- 1
1.1.1 自然環境	1- 1
1.1.2 社会環境	1- 8
1.1.3 治水と利水の歴史	1- 9
1.2 ダム建設事業の概要	1-15
1.2.1 ダム事業の経緯	1-15
1.2.2 事業の目的	1-17
1.2.3 施設の概要	1-18
1.3 ダム管理事業等の概要	1-21
1.3.1 ダム及び貯水池の管理	1-21
1.3.2 ダム湖の利用実態	1-25
1.3.3 下流基準地点における流況	1-26
1.4 ダム管理体制等の概況	1-27
1.4.1 日常の管理	1-27
1.4.2 出水時の管理計画	1-36
1.5 文献リスト	1-39

## 2. 洪水調節

2.1 想定氾濫区域等の状況	2- 1
2.1.1 想定氾濫区域の状況	2- 1
2.1.2 浸水想定区域の状況	2- 2
2.2 洪水調節実績	2- 5
2.2.1 洪水調節計画	2- 5
2.2.2 洪水調節実績	2- 7
2.2.3 洪水時の対応	2- 9
2.3 洪水調節の効果	2-10
2.3.1 流量、水位低減効果の評価方法	2-10
2.3.2 流量低減効果	2-10
2.3.3 水位低減効果	2-12
2.3.4 水防活動の低減効果	2-14
2.3.5 副次効果（流木等流出抑制効果）	2-16
2.4 まとめ	2-17
2.5 文献リスト	2-18

3. 利水補給	
3.1 利水補給計画	3- 1
3.1.1 貯水池運用計画	3- 1
3.1.2 利水補給計画の概要	3- 2
3.1.3 不特定用水	3- 2
3.1.4 発電用水	3- 3
3.2 利水補給実績	3- 4
3.2.1 利水補給実績概要	3- 4
3.2.2 発電実績	3- 6
3.3 ダムの水環境改善事業	3- 7
3.4 ダムの弾力的管理運用	3- 8
3.5 利水補給効果の評価	3- 9
3.5.1 不特定用水補給による評価	3- 9
3.5.2 副次効果(CO <sub>2</sub> 排出量削減効果)	3-10
3.6 まとめ	3-12
3.7 文献リスト	3-12
4. 堆砂	
4.1 堆砂測量方法の整理	4- 1
4.2 堆砂実績の整理	4- 4
4.3 堆砂傾向の評価	4- 6
4.4 まとめ	4- 8
4.5 文献リスト	4- 8
5. 水 質	
5.1 評価の進め方	5- 1
5.1.1 評価方針	5- 1
5.1.2 評価手順	5- 2
5.1.3 真名川ダム貯水池の水質に係わる外的要因	5- 5
5.2 基本事項の整理	5- 8
5.2.1 環境基準類型指定状況の整理	5- 8
5.2.2 定期水質調査地点と対象とする水質項目	5- 11
5.2.3 定期水質調査状況の整理	5- 14
5.3 水質状況の整理	5- 17
5.3.1 水理・水文・気象特性	5- 17
5.3.2 流入河川及び下流河川水質の経年・経月変化	5- 24
5.3.3 貯水池内水質の経年・経月変化	5- 41
5.3.4 貯水池内水質の鉛直分布の変化	5- 92
5.3.5 栄養塩の構成形態別変化	5- 96

5.3.6 貯水池内水質の縦断変化	5- 99
5.3.7 植物プランクトン生息状況変化	5-101
5.3.8 底質の変化	5-104
5.3.9 水質障害発生の状況	5-108
5.4 社会環境からみた汚濁源の整理	5-110
5.4.1 流域社会環境の整理	5-110
5.4.2 流入水質の変化	5-113
5.4.3 社会環境から見た汚濁源の整理まとめ	5-114
5.5 水質の評価	5-115
5.5.1 流入及び放流河川の評価(生活環境項目)	5-115
5.5.2 健康項目の評価	5-129
5.5.3 水温の変化に関する評価	5-131
5.5.4 土砂による水の濁りに関する評価	5-138
5.5.5 富栄養化現象に関する評価	5-143
5.5.6 DOに関する評価	5-152
5.5.7 水質縦断変化による貯水池の影響評価	5-155
5.6 水質保全施設の評価	5-160
5.6.1 水質保全施設の導入背景と導入計画	5-160
5.6.2 水質保全施設の設置状況の整理	5-161
5.6.3 水質保全施設の効果把握と評価	5-162
5.6.4 「真名川ダム濁水対策検討会」による検討事項	5-165
5.7 まとめ	5-167
5.8 文献リスト	5-169
6. 生物	
6.1 評価の進め方	6- 1
6.1.1 評価方針	6- 1
6.1.2 評価手順	6- 3
6.1.3 対象範囲	6- 6
6.2 ダム湖及びその周辺の環境の把握	6- 32
6.2.1 環境の概況	6- 32
6.2.2 ダム湖周辺環境の概況	6- 33
6.2.3 ダム湖およびその周辺の生物の特徴	6- 38
6.3 生物の生息・生育状況の変化の検証	6- 60
6.3.1 ダム湖内における変化の検証	6- 62
6.3.2 流入河川(流入河川、流入支川)における変化の検証	6- 98
6.3.3 下流河川における変化の検証	6-127
6.3.4 ダム湖周辺における変化の検証	6-151
6.3.5 連続性の観点からみた生物の生息・生育状況の変化の検証	6-183

6.3.6 重要種の生息・生育状況の変化の検証	6-188
6.4 生物の生息・生育状況の変化の評価	6-204
6.5 環境保全対策の効果の検討	6-216
6.5.1 環境保全対策の整理	6-216
6.5.2 湖岸緑化試験	6-217
6.5.3 ダム水環境改善事業	6-224
6.5.4 ダムの弾力的管理試験	6-228
6.6 まとめ	6-257
6.7 文献リスト	6-260
6.8 参考資料	6-265
7. 水源地域動態	
7.1 水源地域の概況	7- 1
7.1.1 水源地域の概況	7- 1
7.1.2 ダムの立地特性	7- 2
7.2 ダム事業と地域社会情勢の変遷	7- 3
7.3 ダムと地域の関わりに関する評価	7- 7
7.3.1 地域におけるダムの位置づけに関する整理	7- 7
7.3.2 地域とダム管理者との関わり	7-14
7.4 ダム周辺の状況	7-15
7.4.1 ダム周辺整備の状況	7-15
7.4.2 ダム及びダム周辺のイベント等の開催状況	7-16
7.5 河川水辺の国勢調査（ダム湖利用実態調査）結果	7-17
7.6 まとめ	7-21
7.7 文献資料リスト	7-21

# 1 . 事業の概要

## 1. 事業の概要

### 1.1 流域の概要

#### 1.1.1 自然環境

九頭竜川は、福井県と岐阜県の県境の油坂峠に源を発し、流域の南北に広く分布する多くの小支川と、大野盆地で真名川、福井平野に出て足羽川を合した日野川などの主要支川を合流し、三国町より日本海に注ぐ流域面積 2,934.0km<sup>2</sup>、幹川流路延長 121.9km の北陸屈指の一級河川である。

九頭竜川流域は、北から南にかけて加越山地、越美山地、南条山地に囲まれ、西は丹生山地が分水界となり、北西が日本海に面して開かれている扇状の地形をなしている。これらの山地を水源とする多くの支川が広い地域にわたっていることから、本川と各支川流域における降雨条件が相違して特徴ある出水形態をなしている。また、九頭竜川本川を始め各支川の河道沿いに中小規模の谷平野が発達し、北陸地方の多くの河川に見られる急な渓谷状をなしている所が少なく、この地方では異なった特徴を持つ河川である。

真名川ダムの建設された真名川は、その源を越美山地に発し、途中で雲川を合わせたのち真名峡などの渓谷を流れ、大野市五条方地点で大野盆地に出てから流路を北に向け、盆地の開口部勝山市下荒井地点で九頭竜川に合流する流域面積 356.9km<sup>2</sup>、幹川流路延長 34.5km の主要支川である。

図 1.1 - 1 に真名川ダム位置図を示す。九頭竜川水系真名川ダムは、福井県大野市下若生子に位置し、流域面積 223.7km<sup>2</sup> の多目的ダムである。



図 1.1 - 1 真名川ダム位置図

(1) 地形・地質

九頭竜川本川流域は、北西～南東方向に延びているが、中流域で西流する途中において志比地溝で山が迫り、平地の幅を減じる。しかし、その上流域において左支川真名川・清滝川・赤根川等で平地が広がり、北東～南西方向にその幅を広げており、上流域の真名川流域は袋状の流域形態を呈している。真名川流域には、その上流に能郷白山(標高1,617m)を中心とする全体として標高1,000～1,500mの同じような高さの峰々が連なる越美山地がある。この流域の古生層山地においては、東西方向の地質構造を反映した河川が多く見られる。

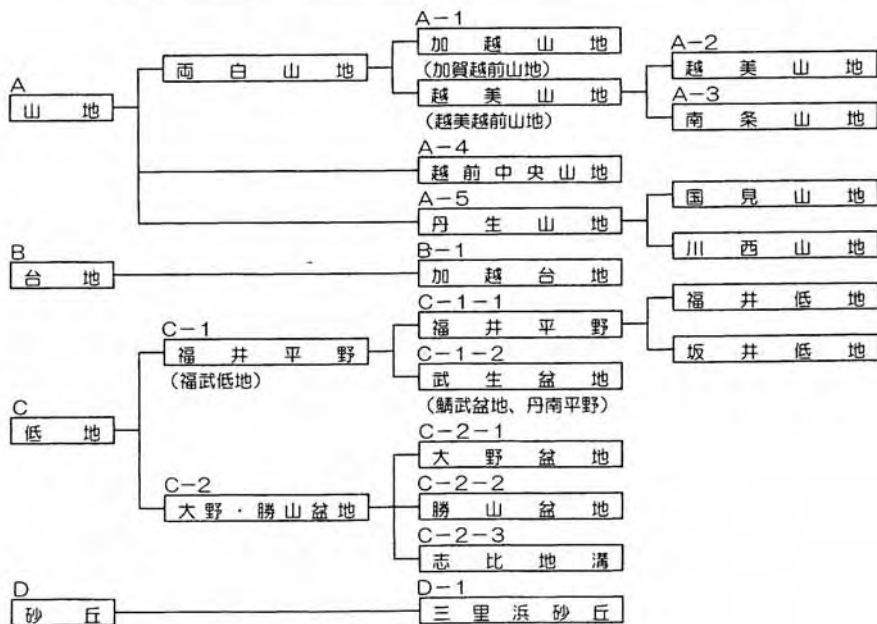
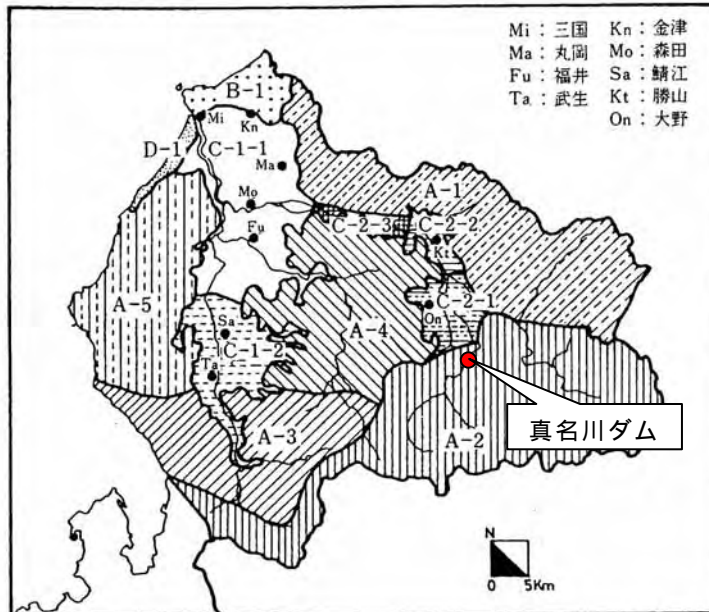


図 1.1 - 2 九頭竜川流域の地形区分

出典：資料 1 - 1



ダム地点は、真名川が大野盆地に至る手前の狭窄部、真名峡に位置する。流域の地質を大きく区分すると、源流付近が古生層の美濃帯の砂岩、粘板岩、苦鉄質火山岩、礫岩等より構成される地帯、下流の大野盆地に向かって中生代の手取層群の砂岩、礫岩、頁岩等よりなる地帯、先カンブリア紀と考えられている飛騨片麻岩類の地帯、古生代末ないし中生代と考えられる船津花崗岩地帯に分けられる。

ダム地点は、飛騨片麻岩類の中でもより上流の手取層群との境界に近い位置にある。



図 1.1 - 3 地質図

出典：資料 1 - 1

## (2) 植生

真名川ダム流域内には、ブナ群落、クリ - ミズナラ群落およびアカシデ - イヌシデ群落、アカマツ群落、コナラ群落、スギ - ヒノキ植林、ススキ群落およびササ群落などの群落分布している。これらの群落の他、河川内にはツルヨシ群落、カワラハハコ群落、タチヤナギ群落、トチノキ群落が成立している。

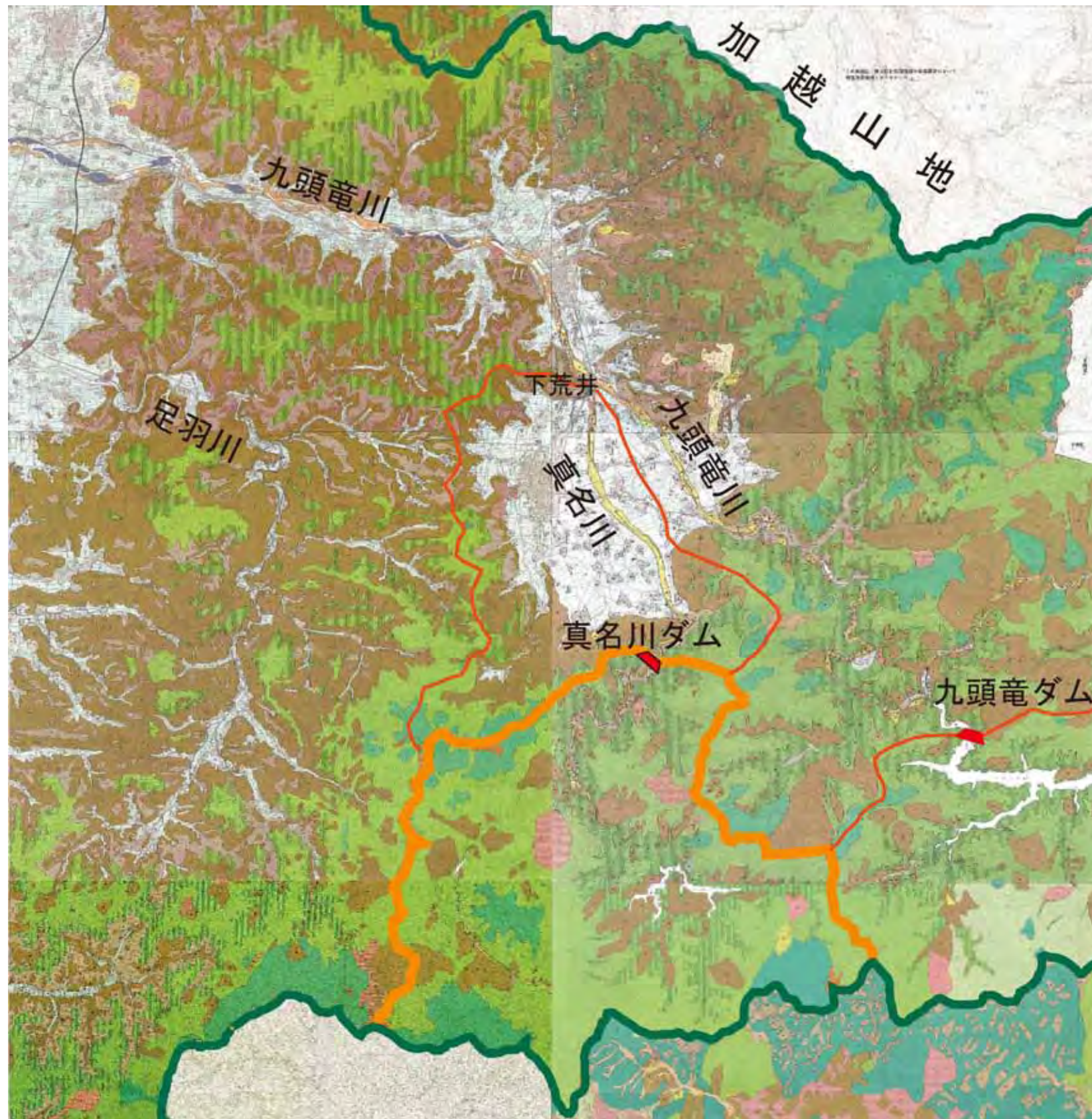
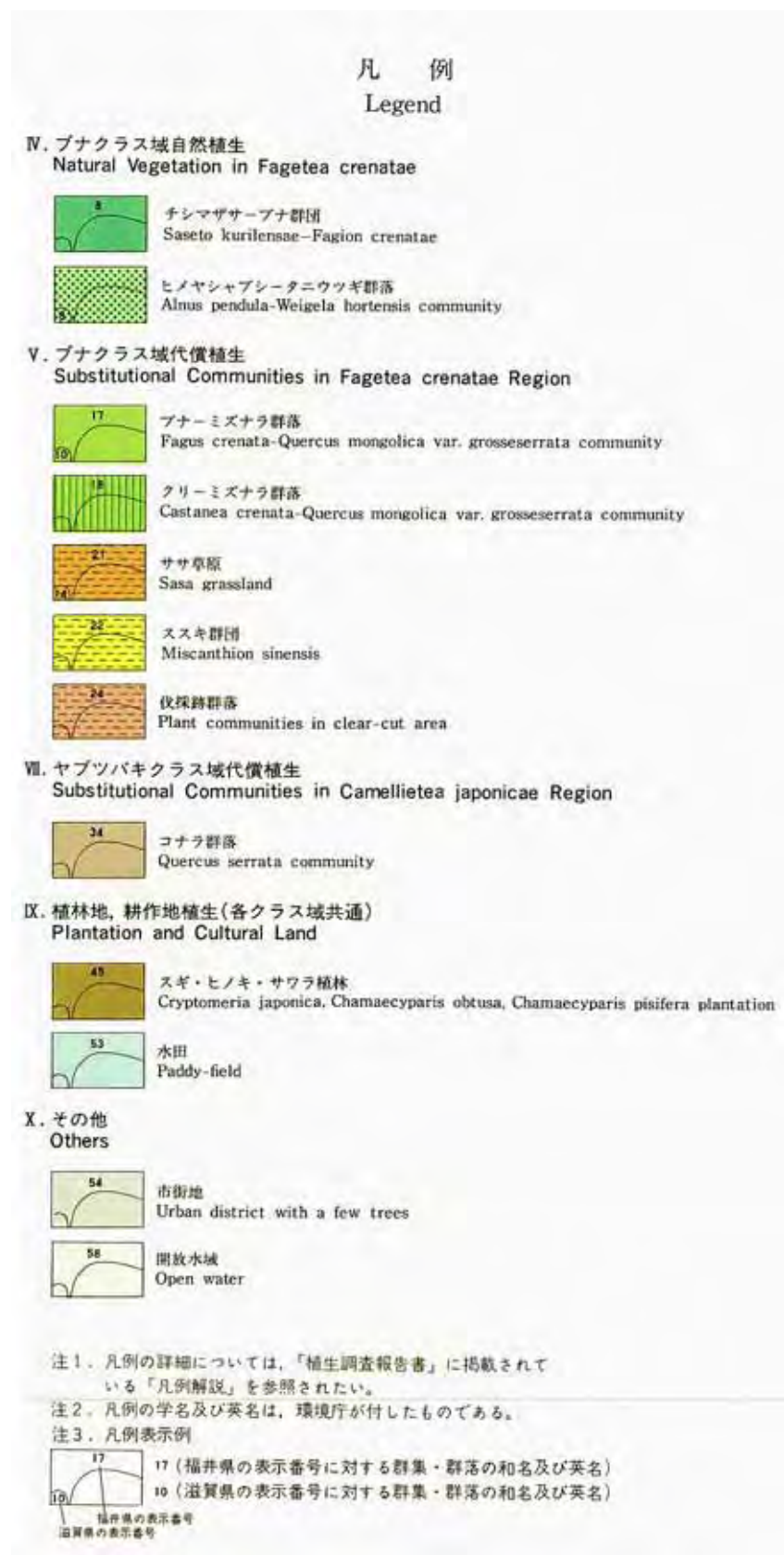


図 1.1 - 4 植生図

出典：資料 1 - 2

(3) 気象・水象特性

福井県の嶺北地方に位置する九頭竜川流域は、冬期に北西からの季節風によって気温が低く雪の降る日が多く、降水量の多い日本海型の気候に入る。年間平均降水量は、図 1.1 - 5 に示すとおり海岸地方で 2,000～2,200mm、山間部で 2,600～3,000mm となる多雨多雪地帯に属している。

図 1.1 - 6 に真名川ダム、福井気象台および大野観測所(アメダス)の年間降水量の経年変化を示す。年間平均降水量は、山間部に位置する真名川ダムが多いが、年間最大降水量は大野観測所の方が多い。なお、福井県の降雪量の平均値は、海岸地方で 100～200cm、平野部で 200～300cm、山沿いでは 600cm に達する。

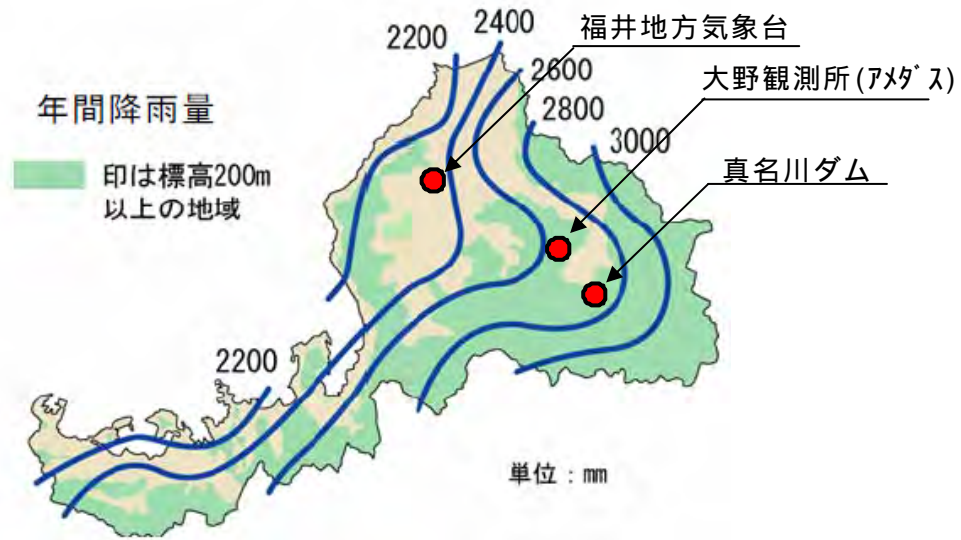


図 1.1 - 5 年間降水量分布

出典：1 - 3

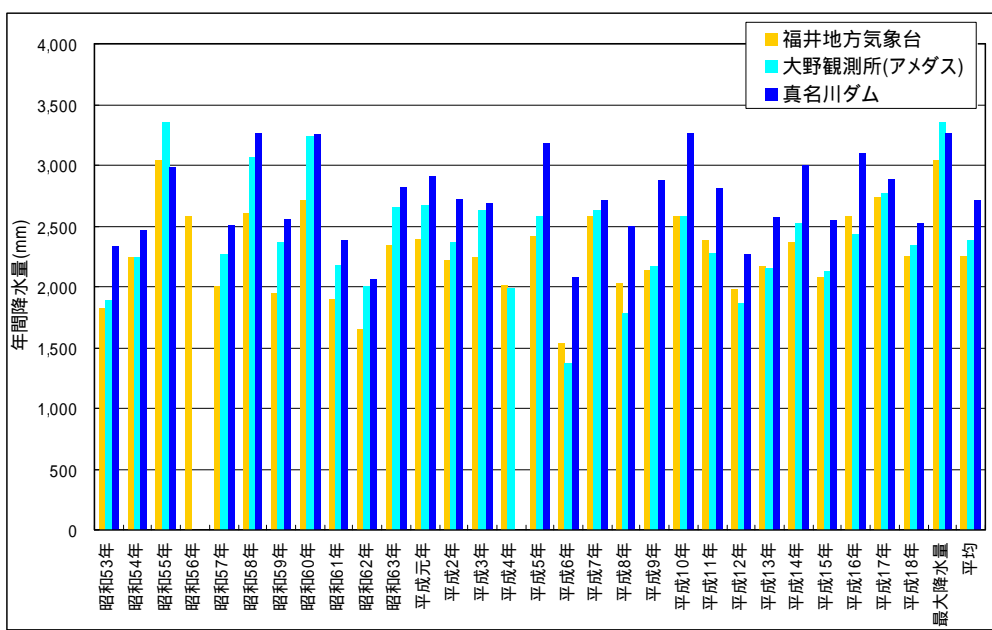


図 1.1 - 6 年間降水量の経年変化

注：昭和 56 年（大野、真名川ダム）、平成 4 年（真名川ダム）は一部欠測のため未記載。

出典：資料 1 - 4 , 1 - 5

九頭竜川流域の気温は、おおむね下流域の福井平野から大野盆地を経て、上流域の山間部に向かって低くなる。



図 1.1 - 7 夏季および冬季の気温分布図

出典：1 - 3

図 1.1 - 8 に至近 10 年間の月平均気温を示す。山間部に位置する真名川ダム地点の月別平均気温が低く、各地点とも冬期でも平均気温が零下とはなっていない。

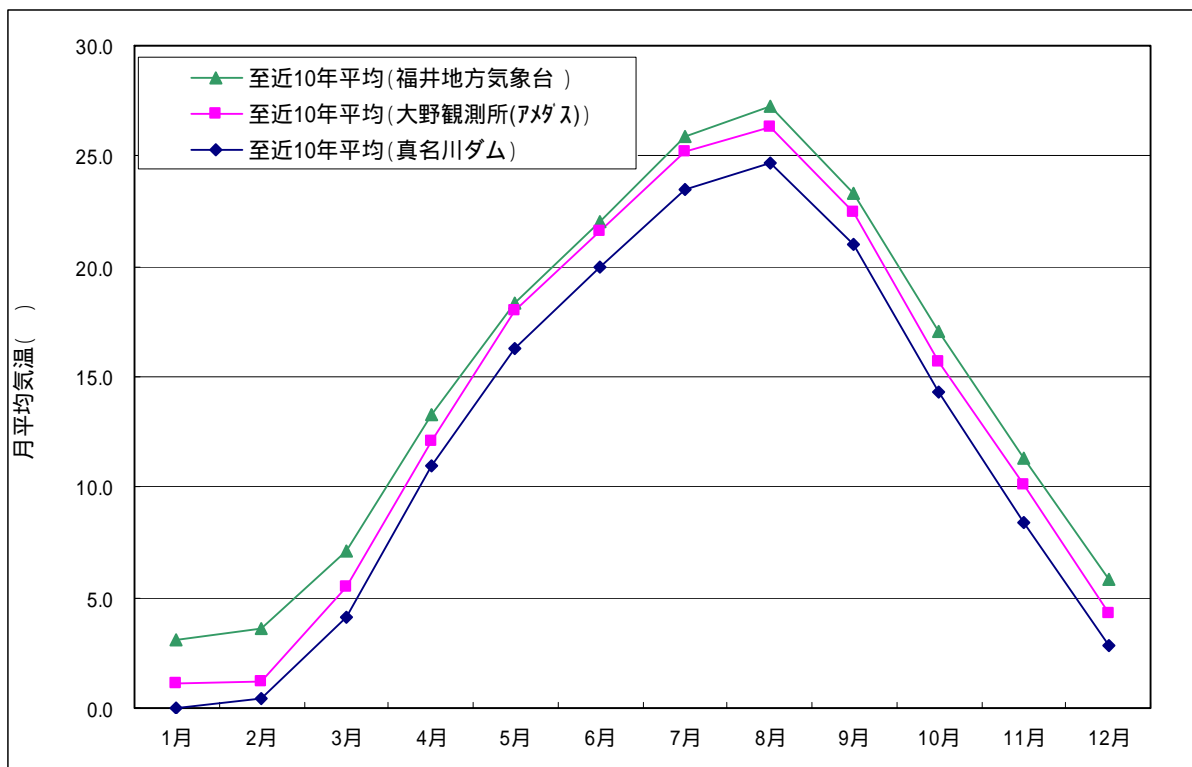


図 1.1 - 8 月平均気温の変遷

出典：資料 1 - 4、1 - 5

### 1.1.2 社会環境

真名川ダムの水源地域は、旧大野市（現大野市は、旧大野市と旧和泉が平成 17 年 11 月に合併）である。旧大野市の人口および世帯数、産業別就業人口、産業別就業人口割合の推移を以下に示す。

#### (1) 人口・世帯数

昭和 40 年から昭和 45 年にかけて急激に人口が減少したのち、真名川ダム管理開始（昭和 54 年）から昭和 60 年までは現状維持で推移したのち、平成 2 年以降は減少し続けている。また核家族化の影響から世帯数は増加傾向にある。

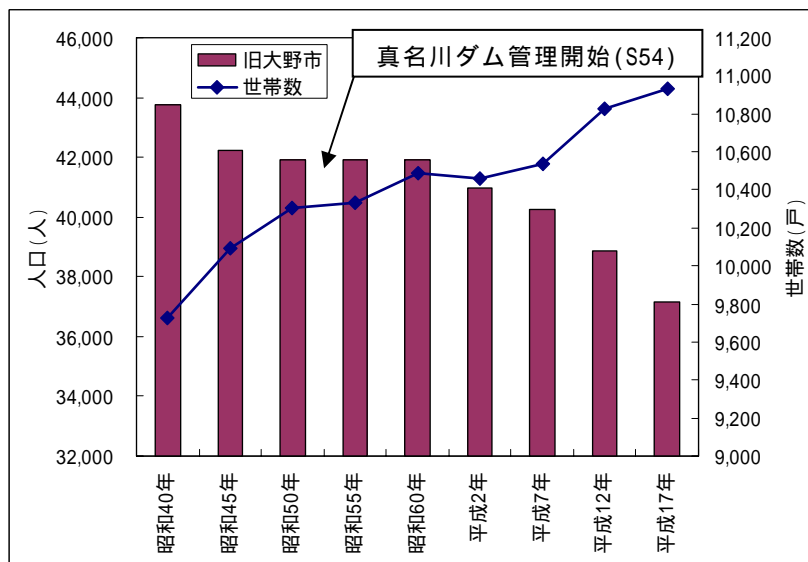


図 1.1 - 9 人口・世帯数の推移

出典：資料 1 - 6

#### (2) 産業

産業別就業者人口の割合の経年変化は、真名川ダム建設工事に従事する第二次産業の就業者が昭和 50 年代に増加しているが、近年では就業者数全体の減少する傾向にあり、第三次産業の従業者数が 5 割を超えている。

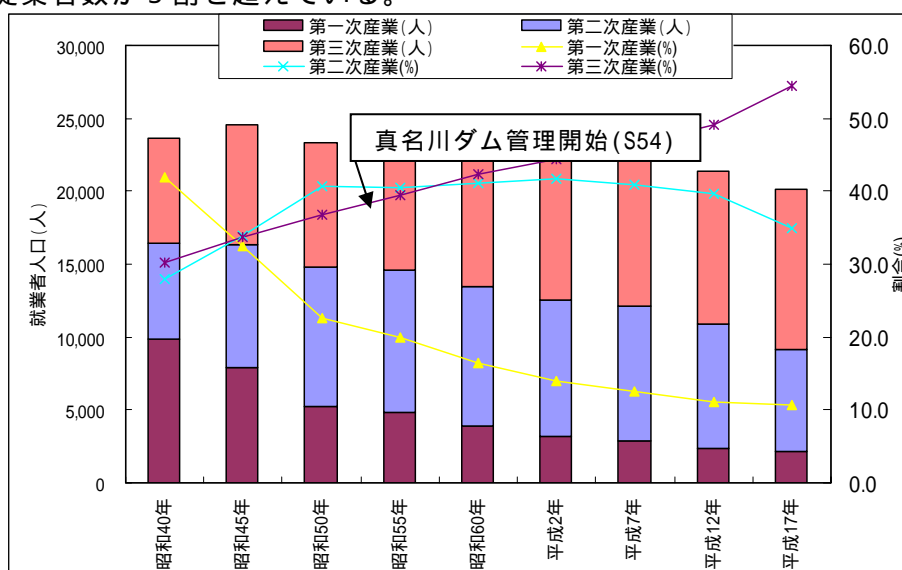


図 1.1 - 10 産業別就業人口の推移

出典：資料 1 - 7

### 1.1.3 治水と利水の歴史

#### (1) 治水

九頭竜川の治水は、伝承として継体天皇が男大迹王として、越前の地にあったとき、当時福井平野が湖水であったのを、三国の河口を開削して海に注ぐようにしたことが、九頭竜川治水工事の始まりと言われている。

その後、江戸時代になっても福井藩による九頭竜川左岸「元覚堤」、日野川の「昼夜堤」など部分的な治水工事のみで、一定計画のもとで河川改修工事を行うという近代的な改修工事が最初に行われたのは、オランダ人技師の設計指導による明治 11 年の九頭竜川河口部の突堤工事（三国港突堤工事）である。

明治 18 年、明治 28・29 年の大洪水による破壊的な水害と明治 29 年の河川法の公布を契機として明治 33 年より九頭竜川改修第一期工事が内務省直轄で実施された。

第一期工事は明治 44 年に、第二期工事は大正 13 年にそれぞれ竣工した。その後、大きな水害もなく安定して経過していたが、昭和 23 年 6 月福井大震災、7 月出水の災害復旧工事は原形復旧で、建設省（現国土交通省）直轄工事として着手され、昭和 28 年 3 月完成した。

昭和 30 年代に入ると、昭和 34（1959）年 8、9 月に大洪水が相次ぎ、同 35（1960）年に布施田における計画高水流量を  $5,400\text{m}^3/\text{s}$  に改訂し、九頭竜ダム等による洪水調節を含めた計画により事業を実施してきた。その後、昭和 36 年（1961）、40 年（1965）とまたしても大洪水が相次ぎ、同 43 年（1968）6 月に真名川ダム等の建設を含めた計画に改訂し、事業を実施してきた。

しかしながら、流域の開発が進み、流域人口が増加し、経済の拡大など資産の増大と、足羽川の計画規模を上回る大洪水などにより、治水の安全度が低下したため、治水計画を再検討し、九頭竜川本川の中角地点での基本高水流量を  $8,600\text{m}^3/\text{s}$  とし、上流のダム群によって  $3,100\text{m}^3/\text{s}$  を調節し、計画高水流量を  $5,500\text{m}^3/\text{s}$  とする工事実施基本計画を昭和 54 年（1979）に改訂した。

平成 9 年の河川法改正により、治水・利水・環境の総合的な河川整備の長期的な方針として「九頭竜川河川整備基本方針」を平成 18 年 2 月に策定した。今後 20～30 年は、河川整備基本方針を受けて平成 19 年 2 月に作成した九頭竜川水系河川整備計画に基づき整備を進めていく予定である。

表 1.1 - 1 治水計画の変遷

工事名	工期・計画策定期	(基本高水流量)計画高水流量(m <sup>3</sup> /s)				
		布施田 (本川)	中角 (本川)	深谷 (日野川)	三尾野 (日野川)	天神 (足羽川)
九頭竜川第一期 改修計画	明治 33 年～明治 44 年	4,170	3,058	1,667		
九頭竜川第二期 改修計画	明治 43 年～大正 13 年				1,389	
九頭竜川再改修計画	昭和 31 年～昭和 35 年	5,400	3,058	2,830	2,010	890
改修変更計画	昭和 35 年	(6,400) 5,400	(5,300) 3,800	2,830	2,040	890
九頭竜川水系工事 実施基本計画	昭和 41 年	(6,400) 5,400	(5,300) 3,800			
工事实施基本系計画 (第 1 回改訂)	昭和 43 年	(8,000) 5,400	(6,400) 3,800	(3,200) 2,830	(2,400) 2,400	
九頭竜川水系工事 実施基本計画 (第 2 回改訂)	昭和 54 年	(12,500) 9,200	(8,600) 5,500	(5,400) 4,800	(3,300) 3,300	
九頭竜川水系河川 整備計画基本方針	平成 18 年		(8,600) 5,500	(5,400) 4,800		(2,600) 1,800

出典：資料 1 - 8

表 1.1 - 2 九頭竜川の主な洪水(昭和 28 年以降)(1/2)

発生年月	降雨の原因	総雨量 (mm)	最高水位	被害状況
昭和 28 年 9 月 23～25 日	台風 13 号	中島 292 福井 221 今庄 316	布施田 不明 中角 8.90m 深谷 不明	災害救助法が発動。日野川では各所で破堤。死者・行方不明者 13 人、負傷者 256 人、流失・損壊家屋 1,252 戸、被害は床上浸水家屋 9,517 戸、床下浸水家屋 8,110 戸、非住家被害 1,061 戸、罹災者数 85,338 人
昭和 34 年 8 月 12～14 日	台風 7 号	中島 492 福井 200 今庄 211	布施田 6.44m 中角 9.46m 深谷 8.45m	九頭竜川、日野川で破堤、決壊が続出。災害救助法が発動。死者・行方不明者 2 人、負傷者 1 名、流失・損壊家屋 60 戸、床上浸水家屋 5,584 戸、床下浸水家屋 7,512 戸、罹災者数 54,516 人
昭和 34 年 9 月 25～26 日	台風 15 号 (伊勢湾台風)	中島 305 福井 105 今庄 213	布施田 6.36m 中角 10.40m 深谷 8.50m	死者・行方不明者 34 人、流失・損壊家屋 101 戸、床上浸水家屋 1,517 戸、床下浸水家屋 5,033 戸、罹災者数 31,616 人
昭和 35 年 8 月 29～30 日	台風 16 号	中島 305 福井 105 今庄 213	布施田 5.57m 中角 8.44m 深谷 6.84m	流失家屋 2 戸、浸水家屋 109 戸。田畑の流失・埋没・冠水 148ha
昭和 36 年 9 月 14～16 日	台風 18 号 (第二室戸台風)	中島 404 福井 122 今庄 173	布施田 7.10m 中角 10.28m 深谷 9.06m	流失・損壊家屋 125 戸、床上浸水家屋 1,740 戸、床下浸水家屋 2,621 戸。農地・宅地の浸水面積 3,264ha
昭和 39 年 7 月 7～9 日	梅雨前線	中島 362 福井 175 今庄 289	布施田 6.32m 中角 9.20m 深谷 8.56m	流失・損壊家屋 125 戸、床上浸水家屋 2,435 戸、床下浸水家屋 3,612 戸。農地・宅地の浸水面積 8,595ha
昭和 40 年 9 月 13～14 日	奥越豪雨	福井 81 今庄 90 本戸 885	布施田 5.95m 中角 9.80m 深谷 7.46m	西谷村に壊滅的な打撃を与えた。死者・行方不明者 25 人、重軽傷者 126 人。流失・損壊家屋 114 戸、床上浸水家屋 3,467 戸、床下浸水家屋 7,504 戸。農地・宅地の浸水面積 14,630ha
昭和 40 年 9 月 15～17 日	台風 24 号	福井 191 今庄 275 大野 173	布施田 6.19m 中角 8.79m 深谷 9.00m	

\* 本戸は福井県の観測所、その他は国土交通省の観測所

出典：資料 1 - 18



表 1.1 - 2 九頭竜川の主な洪水（昭和 28 年以降）（2/2）

発生年月	降雨の原因	総雨量 (mm)	最高水位	被害状況
昭和 45 年 6 月 14 日 ~ 16 日	梅雨前線	中島 214 福井 247 今庄 211	布施田 3.60m 中角 5.80m 深谷 5.72m	—————
昭和 47 年 7 月 9 日 ~ 12 日	梅雨前線	福井 263 今庄 401 大野 298	布施田 4.40m 中角 6.88m 深谷 6.94m	床上浸水家屋 96 戸、床下浸水家屋 1,580 戸。農地・宅地浸水面積 1,347ha
昭和 47 年 9 月 15 日 ~ 16 日	台風 20 号	福井 117 今庄 239 大野 144	布施田 474m 中角 7.61m 深谷 754m	河川・砂防・道路など公共施設に被害が発生した。
昭和 50 年 8 月 22 日 ~ 23 日	台風 6 号	福井 121 今庄 270 大野 153	布施田 4.86m 中角 8.41m 深谷 8.00m	床上浸水家屋 6 戸、床下浸水家屋 369 戸。農地・宅地浸水面積 72ha。
昭和 51 年 9 月 8 日 ~ 13 日	台風 17 号	福井 276 今庄 343 大野 327	布施田 4.78m 中角 8.88m 深谷 7.39m	床上浸水家屋 10 戸、床下浸水家屋 369 戸。農地・宅地浸水面積 72ha。
昭和 54 年 9 月 30 日 ~ 10 月 1 日	台風 16 号	福井 93 今庄 141 大野 80	布施田 2.89m 中角 5.43m 深谷 6.17m	—————
昭和 56 年 7 月 2 日 ~ 3 日	梅雨前線	福井 167 今庄 100 大野 175	布施田 4.67m 中角 8.96m 深谷 6.96m	全壊流失・半壊家屋 21 戸、床上浸水家屋 624 戸、床下浸水家屋 2,356 戸。農地・宅地浸水面積 3,756ha。
昭和 58 年 9 月 26 日 ~ 29 日	台風 10 号 秋雨前線	福井 165 今庄 178 大野 186	布施田 3.52m 中角 6.39m 深谷 6.16m	床上浸水家屋 5 戸、床下浸水家屋 292 戸。農地・宅地浸水面積 234ha。
平成元年 9 月 5 日 ~ 7 日	秋雨前線	福井 94 今庄 115 大野 162	布施田 3.65m 中角 6.82m 深谷 5.74m	床上浸水家屋 6 戸、床下浸水家屋 381 戸。農地・宅地浸水面積約 25ha。
平成元年 9 月 18 日 ~ 20 日	台風 22 号	福井 87 今庄 87 大野 73	布施田 2.52m 中角 4.60m 深谷 4.46m	床上浸水家屋 1 戸、床下浸水家屋 329 戸。農地・宅地浸水面積 22ha。
平成 10 年 7 月 10 日	梅雨前線	福井 111 今庄 110 大野 97	布施田 2.56m 中角 4.24m 深谷 5.01m	被害は床上浸水家屋 68 戸、床下浸水家屋 506 戸。農地・宅地浸水面積 526ha。
平成 10 年 9 月 22 日	台風 7 号	福井 123 今庄 149 大野 101	布施田 3.97m 中角 6.83m 深谷 6.66m	全壊流失・半壊家屋 1 戸、床上浸水家屋 91 戸、床下浸水家屋 314 戸。農地・宅地浸水面積 35ha。
平成 16 年 7 月 18 日	福井豪雨	福井 198 今庄 100 大野 140	布施田 4.36m 中角 6.39m 深谷 7.20m	死者 4 名、行方不明 1 名、全壊流失・半壊家屋 406 戸、床上浸水家屋 3,314 戸、床下浸水家屋 10,321 戸。農地・宅地浸水面積 260ha。

出典：資料 1 - 18

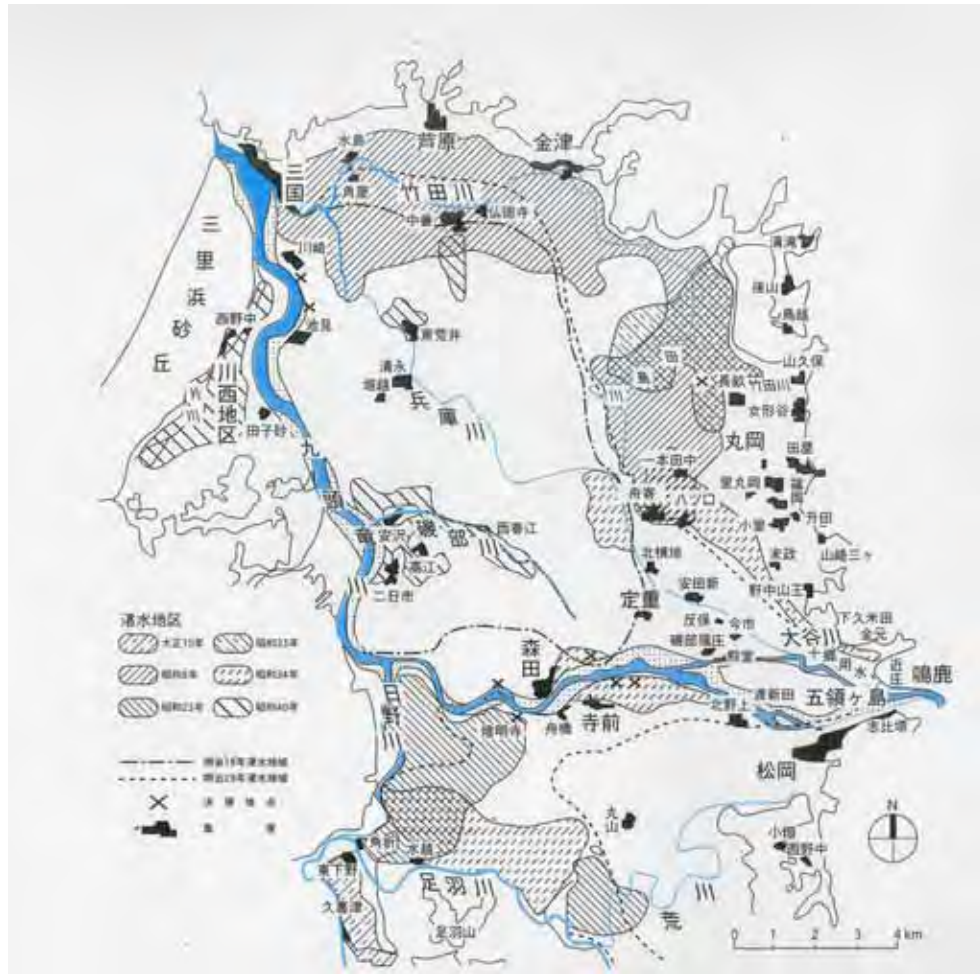


図 1.1 - 11 九頭竜川の氾濫実績図

出典：資料 1 - 1



図 1.1 - 12 平成 16 年福井豪雨の九頭竜川流域の氾濫実績図

出典：資料 1 - 19

(2) 利水

九頭竜川における水力開発は、明治 32 年（1899）に足羽川に水力発電所を建設したことに始まる。その後、昭和 26 年に真名川総合開発事業が計画され、さらに昭和 34 年（1959）に来襲した台風 15 号（伊勢湾台風）による大洪水を契機とした九頭竜川総合開発事業、昭和 40 年（1965）9 月の奥越豪雨を契機として真名川ダムが建設され、上流から下流まで水を有効利用する発電利水体系が形成された。

また、真名川では、昭和 25 年（1952）に県営事業により大野市五条地先に真名川頭首工が建設（昭和 33 年（1958）完成）され、平成 18 年現在、かんがい期最大 12.348m<sup>3</sup>/s の取水により、大野盆地の農耕地約 1,286ha を潤している。



図 1.1 - 13 五条方地点水路詳細図



図 1.1 - 14 発電利水等概況図（上流部）

出典：資料 1 - 9

## 1.2 ダム建設事業の概要

### 1.2.1 ダム事業の経緯

昭和40年9月10日の台風23号、14日の前線による奥越豪雨、17日の台風24号と連続した大出水は、従来の治水計画規模をはるかに上回り、九頭竜川水系の大野市、勝山市、旧西谷村、旧和泉村などで大規模な災害が発生した。特に旧西谷村では壊滅的な被害を受けた。図1.2-1に旧西谷村の被害状況を示す。

そこで九頭竜川水系の治水計画を根本的に再検討する必要が生じ、奥越豪雨を主要な対象洪水として、新たに真名川ダムなど上流にダム群を建設して洪水調節を行う工事実施基本計画の改訂を昭和43年6月に行った。



図 1.2 - 1 奥越豪雨による旧西谷村被災状況図

出典：資料 1 - 1

表 1.2 - 1 ダム事業の経緯

年月		事業内容
昭和 40 年	10 月	真名川筋におけるダム候補地点調査開始
昭和 41 年	3 月	県を通じてダム計画を地元提出
	7 月	真名川ダム規模決定 福井県に連絡（ダム建設計画正式発表）
昭和 42 年	6 月	真名川ダム工事事務所（福井仮庁舎）開設
	12 月	真名川ダム工事事務所（大野市新庁舎）完成
昭和 43 年	6 月	九頭竜川水系工事実施基本計画定まる
	10 月	ダム型式をアーチ式に決定
昭和 44 年	9 月	ダムサイト出張所新築工事着工
昭和 45 年	4 月	仮排水トンネル着工
	11 月	仮排水トンネル完成転流開始 通水式挙行
	12 月	仮締切工事着工
昭和 46 年	4 月	真名川ダム建設に関する基本計画告示
	5 月	本体掘削開始
	9 月	福井県企業庁真名川発電所工事開始
昭和 47 年	9 月	堤体コンクリート打設開始
	11 月	定礎式
昭和 51 年	12 月	1 次湛水開始
昭和 52 年	4 月	福井県企業庁真名川発電所発電開始
	10 月	2 次湛水開始
		真名川ダム竣工
昭和 53 年	3 月	管理事務所庁舎完成
	4 月	ダム水位サーチャージ水位に達する。
昭和 54 年	4 月	真名川ダム管理開始
平成 5 年		真名川ダム水環境改善事業開始
平成 12 年		弾力的管理試験開始
平成 15 年		ダム管理用発電運転開始
平成 16 年	3 月	真名川ダム水源地域ビジョン策定

出典：資料 1 - 8

### 1.2.2 事業の目的

真名川ダムは、洪水調節、不特定かんがいおよび発電を目的とする多目的ダムである。

#### (1) 洪水調節

真名川ダムの建設される地点における計画高水流量  $2,700\text{m}^3/\text{s}$  のうち、既設笹生川ダムと合わせて、 $2,550\text{ m}^3/\text{s}$  の洪水調節を行い、他のダム群と合わせて九頭竜川下流の中角地点における基本高水流量  $6,400\text{ m}^3/\text{s}$  を  $3,800\text{ m}^3/\text{s}$  に低減させる。

#### (2) 不特定かんがい

真名川沿岸の約  $1,700\text{ha}$  の既成田に対して、既設笹生川ダムの補給量と合せてかんがい用水等の補給を行う。

#### (3) 発電

真名川ダムの建設に伴って新設される真名川発電所において、最大出力  $14,000\text{kW}$  の発電を行う。

### 1.2.3 施設の概要


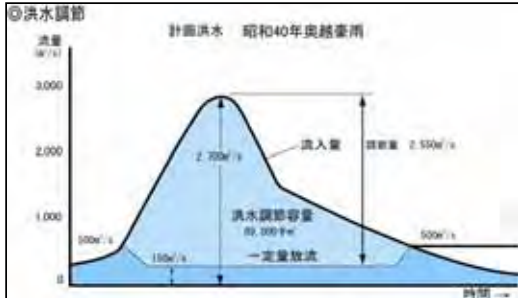
ダム等名 (貯水池名)	水系名	河川名	管理事務所等名	所在地 (ダム等施設)		完成年度	管理者	
真名川ダム (麻那姫湖)	一級河川 九頭竜川水系	真名川	九頭竜川ダム 統合管理事務所	左岸 右岸	福井県大野市下若生子 福井県大野市下若生子	昭和53年度	国土交通省	
<ダムの外観>				<貯水池にかかわる国立公園等の指定、漁業権の設定>				
				公園等の指定				奥越高原国立自然公園
				漁業権の設定				無
<ダムの諸元>				<洪水調節図>				
								
形式	不等厚アーチ式コンクリートダム		目的	[F], [N], A, W, I, [P]				
堤高	127.5 m		総貯水容量	115,000 千m <sup>3</sup>				
堤頂長	357.0 m			有効貯水容量	95,000 千m <sup>3</sup>			
堤体積	507 千m <sup>3</sup>		流域面積		223.7 km <sup>2</sup>		洪水調節容量	
流域面積	223.7 km <sup>2</sup>			第一期洪水期	76,400千m <sup>3</sup>			
			第二期洪水期	89,000千m <sup>3</sup>				
湛水面積	2.93 km <sup>2</sup>		利水容量	非洪水期	47,000千m <sup>3</sup> のうち不特定15,900千m <sup>3</sup>			
				第一期洪水期	18,600千m <sup>3</sup> のうち不特定15,900千m <sup>3</sup>			
				第二期洪水期	不特定6,000千m <sup>3</sup>			
洪水調節		かんがい		発電		工業用	上水道	
流入量 (m <sup>3</sup> /s)	調節量 (m <sup>3</sup> /s)	特定用水 補給面積 (ha)	取水量 (m <sup>3</sup> /s)	最大出力 (kW)	年間発生 電力量 (MWh)	取水量 (m <sup>3</sup> /日)	取水量 (m <sup>3</sup> /日)	
2,700	2,550			真名川発電所	14,000	66,000		
放流設備	種類	施設名		門数等	仕様等			
	洪水調節用 洪水吐	高圧ローラーゲート・圧着式		2門	幅3.900m × 高4.037m			
	非常用 洪水吐	クレスト ラジアルゲート		4門	幅12.000m × 高9.562m			
	小放流用設備	ホロージェットバルブ		1門	1,400mm			
	発電用取水	高圧ローラーゲート		1門	幅2.800m × 高3.300m			
	バイパス放流設備	管理用発電		最大出力490kW、年間発生電力量4,300MWh				
噴水放流設備		放流能力0.11m <sup>3</sup> /s、噴水高さ(最大)66.8m						
		河川維持用水放流設備		最大静水頭約120m、放流量(最大)=1.12m <sup>3</sup> /s				
取水設備	表層取水設備	直線多段式ゲート		1門	6段 取水範囲 EL.331.0m ~ EL.365.0m			

図 1.2 - 2 施設概要

出典：資料 1 - 10



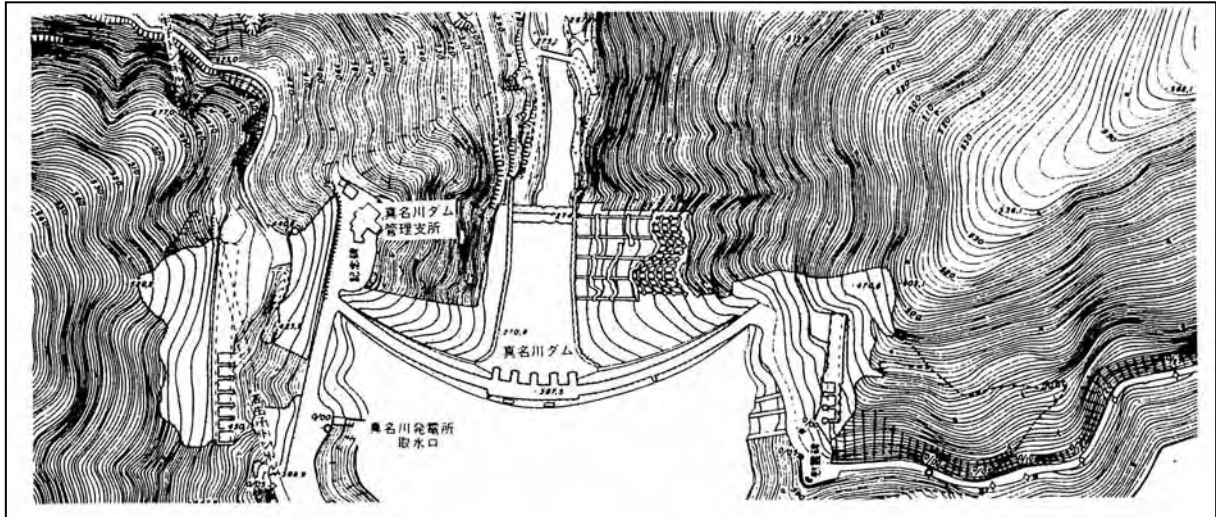
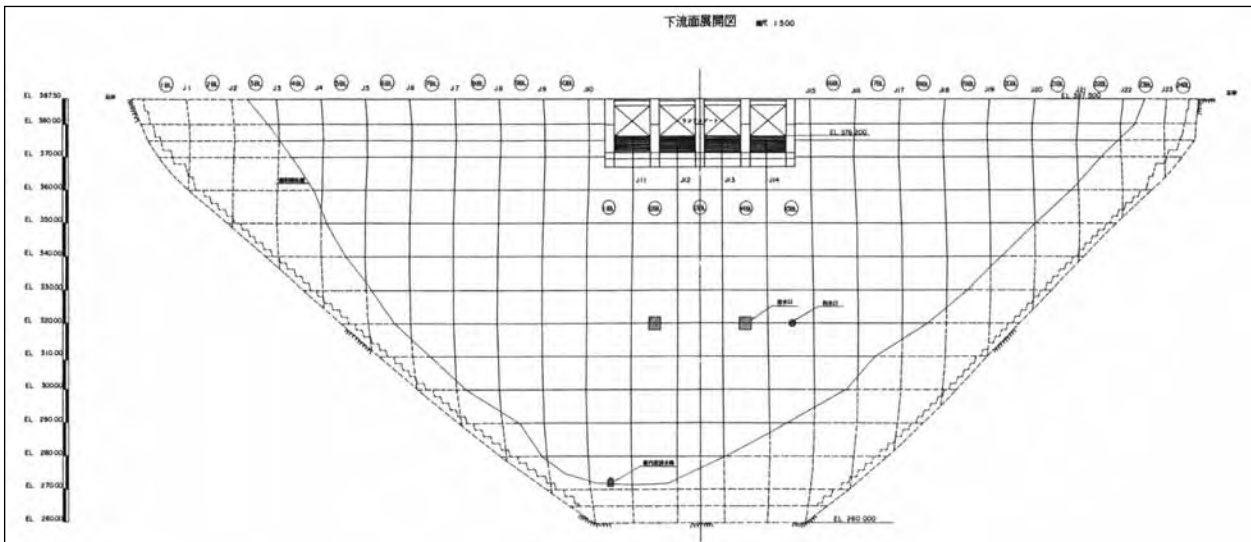


図 1.2 - 3 真名川ダム平面図

上流面展開図



下流面展開図

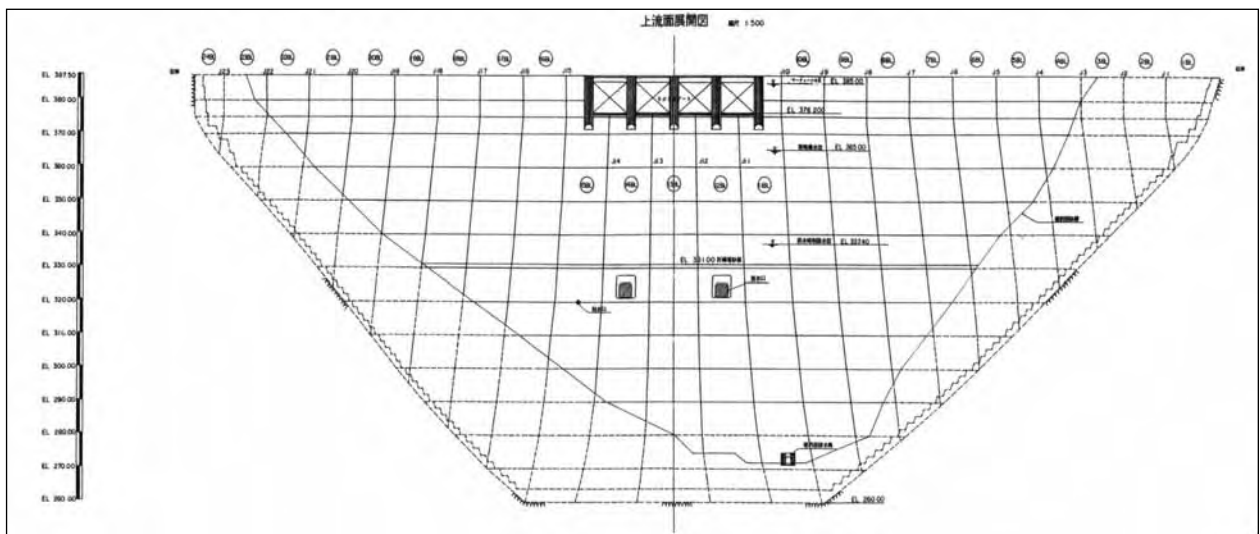


図 1.2 - 4 真名川ダム展開図

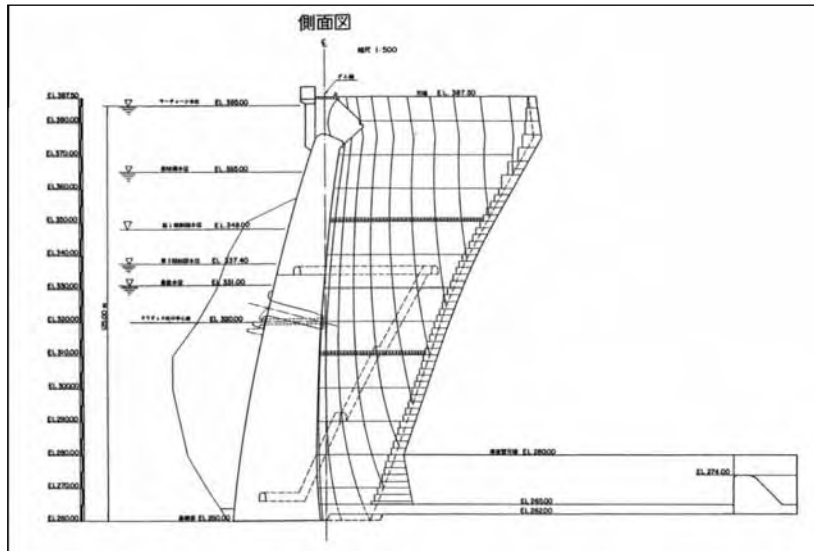


図 1.2 - 5 真名川ダム側面図

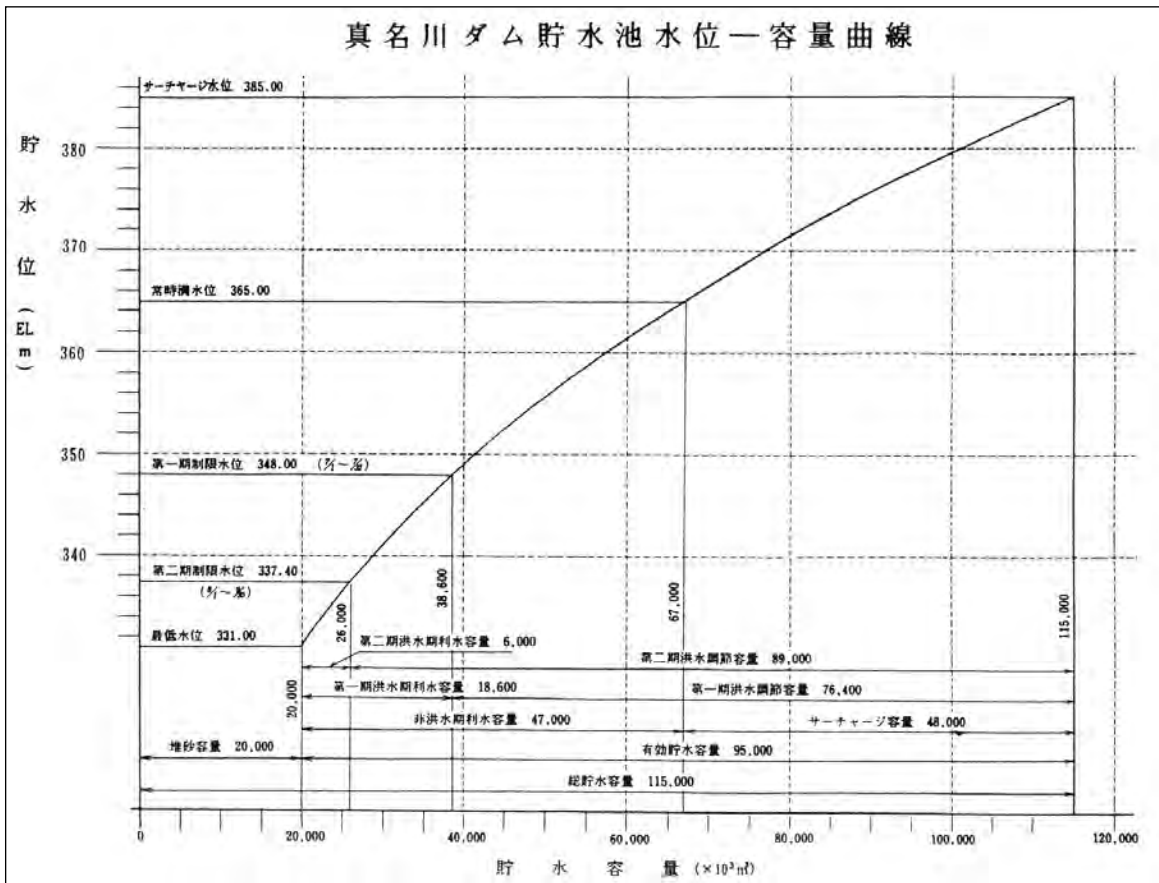


図 1.2 - 6 真名川ダム水位容量曲線

出典：資料 1 - 11

### 1.3 管理事業の概要

#### 1.3.1 ダム及び貯水池の管理

##### (1) 維持管理事業

ダムの管理は、施設管理と維持管理に大きく2分できる。施設管理はダムの構造物、ダム周辺地山及び貯水池周辺の安全を確保し、諸設備をいつも機能し得るような状態に保つために行う点検・維持・補修及び改良などの施設管理に関する業務である。

また、維持管理は、洪水調節、利水補給によるダム機能を十分に発揮させるために行われる観測・操作等の維持管理に関する業務である。近年では、貯水池の弾力的運用による下流河道の良好な河川環境の維持に関する取り組みも実施している。

平成14年からの主な維持管理事業を以下に示す。

維持管理事業内容	事業費内訳 (百万円)	実施期間	備考
真名川ダムキャットウォーク取替工事	390	平成14年～平成19年	継続中
真名川系光ファイバー管路敷設工事	249	平成14年～平成16年	完了
真名川ダム管理支所耐震対策工事	90	平成18年	
真名川ダム放流制御処理装置更新工事	150	平成18年～平成19年	継続中
雲川地区護岸工事	52	平成18年～平成20年	継続中

上表中の各事業費は平成18年度までの合計額を表す。

出典：資料1-12

維持管理費の経年変化を図1.3-1に示す。真名川ダム管理開始後、維持管理費は徐々に増加している。平成16年は真名川光ケーブル敷設工事、平成17年は真名川ダムキャットウォーク取り替え工事、平成18年は真名川ダム放流制御処理装置の更新工事による維持管理費の増加である。

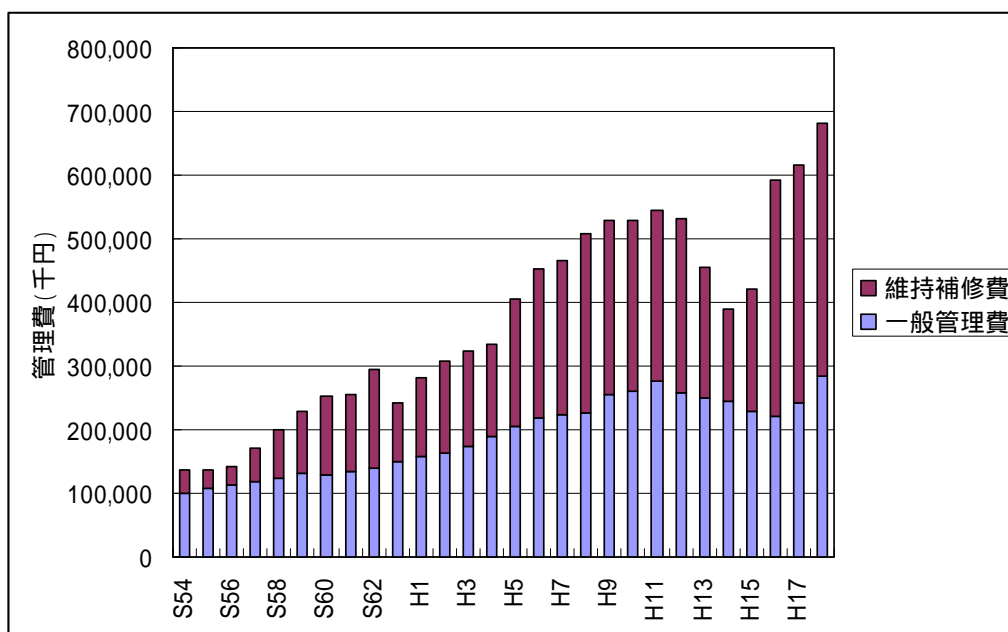


図 1.3 - 1 維持管理費の経年変化

出典：資料1-12

## (2) ダム周辺環境整備

真名川ダムの建設工事が竣工するにあたり、ダム事業により一時的に自然環境の改変された箇所を自然環境との調和をはかって新しく復元、保全する必要がある。また、ダムによって創出される貯水池（麻那姫湖）周辺は、奥越高原県立自然公園（昭和30年10月21日指定）となっており、広く利用されていることからレクリエーションの場を提供するために、貯水池周辺環境整備を実施することは、地域社会に貢献するためにも意義のあることである。

そこで、真名川ダムの建設と合わせてダム周辺環境整備を実施し、ダム湖及び周辺区域の自然環境を活用して、周辺地域の活性化を図ることとした。

真名川ダム貯水池周辺の環境整備を行うにあたり、貯水池周辺を総花的に行うことを避け、ダム、貯水池周辺のうち、ダムサイト周辺地区、若生子大橋周辺付近（貯水池中流部）、中島地区（貯水池上流部）の3ヶ所を重点的に整備し、真名川ダム建設費の限られた枠内で効果的に行うこととした。

環境整備が調和のとれたものとするため、一つの「テーマ」を持った簡明なイメージで整備を行った。このテーマを「四季の変化」とし、各地区に分担させ、植栽によって表現させるようにした（図1.3-2）。

- 1) ダムサイト付近：春をテーマとして桜を基調とした展望の場を左岸、修景の場を右岸という風に植栽並びに整備を行った。
- 2) 若生子大橋付近：夏をテーマとして日の谷橋下の滝周辺を整備し、夏のテーマにふさわしい滝のある景観とし、わずかな休憩スペース、駐車場を整備した。
- 3) 中島地区：秋をテーマにして紅葉のイメージを基調とした植栽を行い、総合公園的な色彩を加えたものとした。

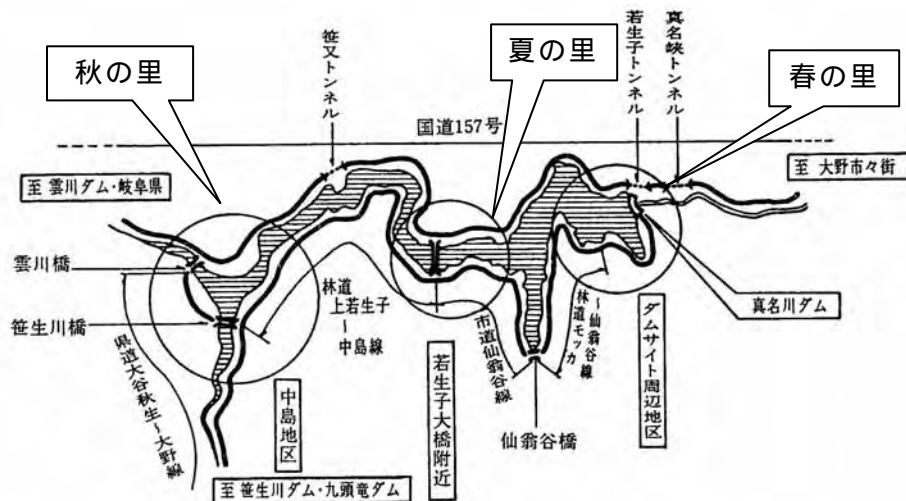


図 1.3 - 2 ダム周辺環境整備位置図

出典：資料 1 - 8

表 1.3 - 1 真名川ダム貯水池周辺ダムサイト地区整備

整備内容	施工内容	数量等
記念碑	コンクリート 舗装（アスファルト・カラー） 石およびモルタル張り モニュメント コンテル材 植栽、低木	95m <sup>3</sup> 270m <sup>2</sup> 324m <sup>2</sup> 2t 540本
案内板	舗装アスファルト 舗装カラー コンクリート 石およびタイル 案内板（黒ミカゲ） 植栽高・低木	480m <sup>2</sup> 453m <sup>2</sup> 29m <sup>3</sup> 12m <sup>2</sup> 275本
慰霊碑	舗装（土間コンクリート） コンクリート（RC） 石工事 レリーフ（ブロンズ 0.75m×2m） 植栽高・低木	10m <sup>2</sup> 28m <sup>3</sup> 7m <sup>2</sup> 340本
展望台	植栽 桜 盛土 芝生	30本 250m <sup>2</sup> 400m <sup>2</sup>
左岸道路沿い整備	舗装アスファルト 手摺り 盛土 コンクリート 植栽	2,000m <sup>2</sup> 260m 1,500m <sup>2</sup> 100m <sup>3</sup> 32本
骨材プラント跡整備	整地 植栽 桜	1式 410本
その他		1式

表 1.3 - 2 真名川ダム貯水池周辺若生子大橋付近整備

整備内容	施工数量	摘要
盛土	700m <sup>2</sup>	縁石工 60m } 景観木 主木等
アスファルト舗装	100m <sup>2</sup>	
砂利舗装	500m <sup>2</sup>	
高木植栽	100本	
中低木植栽	120本	
芝生	150本	ベンチ、くず入れ、灰皿、案内板 等
その他雑工事	800m <sup>2</sup> 1式	

表 1.3 - 3 真名川ダム貯水池周辺中島地区整備

整備内容			施工数量	摘要
切盛		土	100,200m <sup>3</sup>	昭和 53 年度施工
高低		土	112,800m <sup>3</sup>	"
低	木	植栽	4,248 本	"
草	木	植栽	11,045 株	"
種	木	植栽	2,600 株	"
種	子	吹付	44,050m <sup>2</sup>	"
道	子	蒔付	61,740m <sup>2</sup>	"
		路	3,607m	幅員 5m - 185m、2.5m - 2,230m 幅員 4m - 1,112m、1.5m - 80m
アス	舗	舗装	11,670m <sup>2</sup>	"
張		芝	27,380m <sup>2</sup>	"
雑	工	事	1 式	車止め 24 基、排水溝 90m 広場施設 (中央) 1 式

(3) 大野市によるダム貯水池周辺整備

真名川ダム貯水池周辺整備のなかで、表 1.3-4 に示す「秋の里」の中島地区の整備を昭和 53 年より大野市が実施してきた。

また、青少年の健全な旅行の推進を図り、あわせて過疎地域の振興に資する観光施設として、旧運輸省の補助制度を利用し、昭和 40 年 9 月の奥越豪雨によって壊滅的な被害を受けた大野市旧西谷村の跡地に麻那姫湖青少年旅行村 (中島公園) を整備した。

春の里には、平成 4 年に麻那姫湖の由来となった麻那姫像の銅像を建てるなどの整備を実施している。

表 1.3 - 4 真名川ダム貯水池周辺中島地区整備

		施工内容
第一期事業	昭和 53 年	便所 1 カ所 4 穴
	昭和 54 年	給水施設 1 カ所 2 栓
		便所 1 カ所 4 穴 緑の教室 1 カ所 1,200m <sup>2</sup> 駐車場 舗装
	昭和 55 年	ハレコート クレ舗装 1,800m <sup>2</sup> テニスコート クレ舗装 1,400m <sup>2</sup> 便所 1 カ所 4 穴
第二期事業	昭和 56 年	林の遊場 遊具等 1,600m <sup>2</sup> 自然植物園 植栽 2,500m <sup>2</sup> 駐車場 舗装 1,450m <sup>2</sup> 給水施設 1 カ所 2 栓 電気設備 3 ヶ所
		昭和 57 年以降

出典：資料 1 - 11

### 1.3.2 ダム湖の利用実態

ダム湖利用実態調査は、「河川水辺の国勢調査：国土交通省河川局河川環境課」により、平成3年度から3年毎に実施しており、四季を通じた休日5日、平日2日の合計7日の現地調査（利用者アンケート調査：直接ヒアリング、利用者カウント調査）を実施し、年間利用者の推定を行うものである。

利用形態別状況の年間推計値によると、「野外活動」がほぼ大部分を占めており、ダム上流部にある麻那姫湖青少年旅行村の公園（キャンプ場）施設利用が多く、過去の調査結果からみてもアウトドア的な利用が大半を占めている。なお、平成3年度の調査の来場目的の設問は、「スポーツ」、「釣り」、「ボート」、「散策」および「その他」であったが、平成6年度の調査からは、設問に「野外活動」と「施設利用」を追加している。

なお、真名川ダムでは、2つのブロック（1ブロック：ダム本体、2ブロック：中島公園）においてダム湖の利用実態調査を行っている。

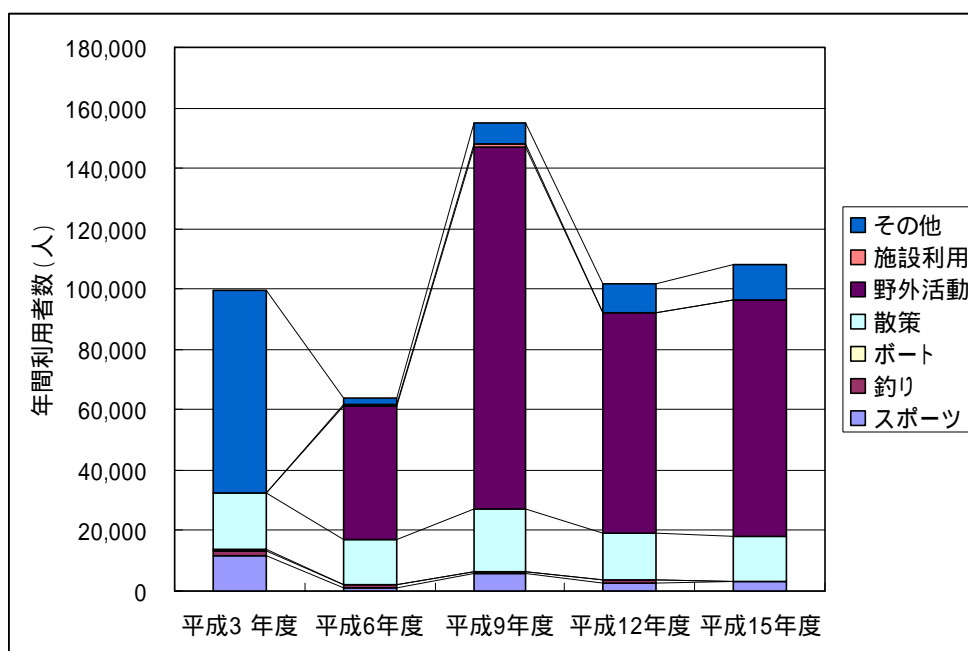


図 1.3 - 3 ダム湖利用実態調査結果

表 1.3 - 5 年間ダム湖利用状況

(単位：千人)

		平成3年度	平成6年度	平成9年度	平成12年度	平成15年度
利用 所別	湖面	2,326 (2.3%)	2,690 (4.2%)	8,076 (5.2%)	1,111 (1.1%)	5,507 (5.1%)
	湖畔	90,369 (90.9%)	59,097 (92.7%)	136,875 (88.2%)	844,513 (83.8%)	88,749 (81.9%)
	ダム	6,684 (6.7%)	1,937 (3.0%)	10,275 (6.6%)	15,860 (15.6%)	14,969 (13.0%)
合計		99,379	63,704	155,226	101,484	108,316

出典：資料 1 - 10

### 1.3.4 下流基準点における流況

真名川ダムの利水基準点の五条方地点の流況を図 1.3 - 4 に示す。

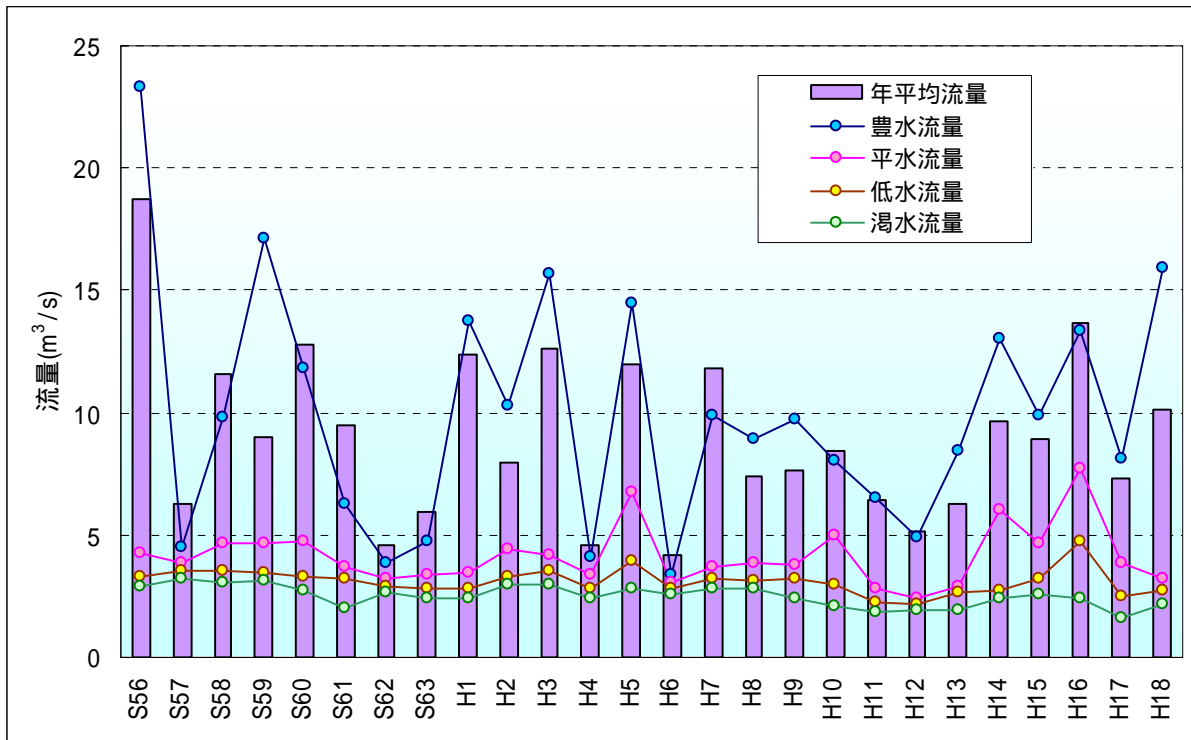


図 1.3 - 4 五条方基準点の流況図

出展：1 - 13



## 1.4 ダム管理体制等の概況

### 1.4.1 日常の管理

#### (1) 貯水池運用

真名川ダムの貯水池運用は、洪水期において、洪水調節を行う場合を除き、水位を下図の標高以下に制限するものとしている。洪水調節は、第一期洪水期（7月1日から7月31日まで）が標高 348.0m から 385.0m までの洪水調節容量 76,400 千 m<sup>3</sup>、第二期洪水期（8月1日から9月30日まで）が標高 337.4m から 385.0m までの洪水調節容量 89,000 千 m<sup>3</sup> を利用して行う。

かんがい期（4月26日から8月25日までの期間）においては、不特定用水補給のために必要な水量（13.97m<sup>3</sup>/s 以内）を笹生川ダムからの補給と合わせて確保するものとする。

不特定用水補給のための貯水容量は、標高 331.0m から 346.0m までの貯水容量 15,900 千 m<sup>3</sup> とし、不特定用水補給、または洪水調節後において水位を低下させる場合を除き、水位を下記の基準日において、それぞれ当該基準日の水位以上に保つものとしている。

また、真名川発電所の取水量は最大 15.0m<sup>3</sup>/s とし、洪水調節および不特定用水の補給に支障を与えないように行うものとしている。

各基準日の水位

基準日	基準日の水位
4月26日	標高 331.0m
5月20日	標高 346.0m
7月15日	標高 346.0m
8月1日	標高 337.4m
8月10日	標高 337.4m
8月25日	標高 333.0m

出典：1 - 1

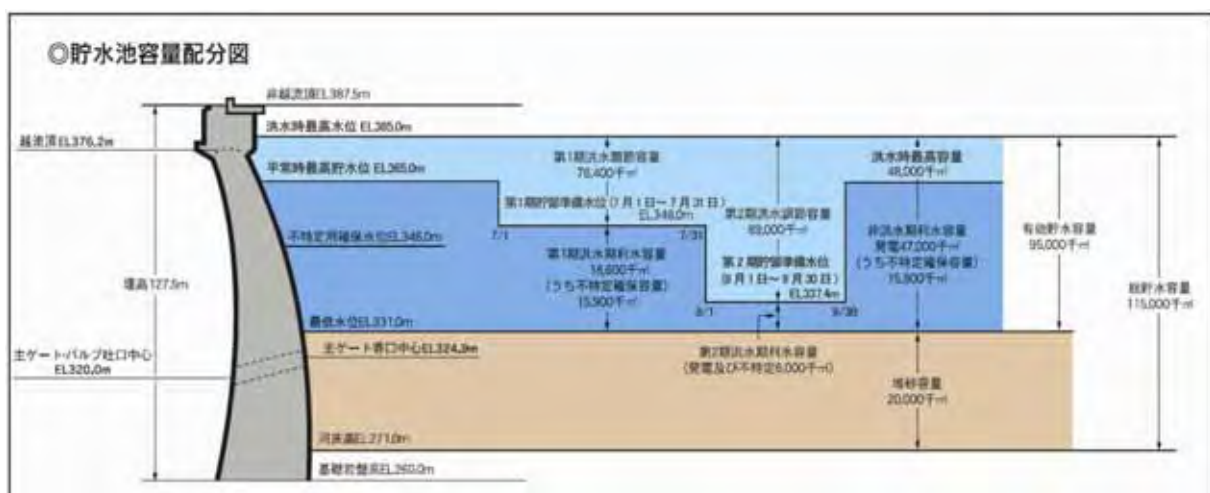


図 1.4 - 1 貯水池容量配分図

出典資料 1 - 14

## (2) 堆砂測量

真名川ダムの堆砂測量は、図 1.4 - 2 に示す測線位置図のとおり、縦断方向に 200m ピッチ（堤体付近は 50m ピッチ）、横断方向に 5m ピッチで行っている。

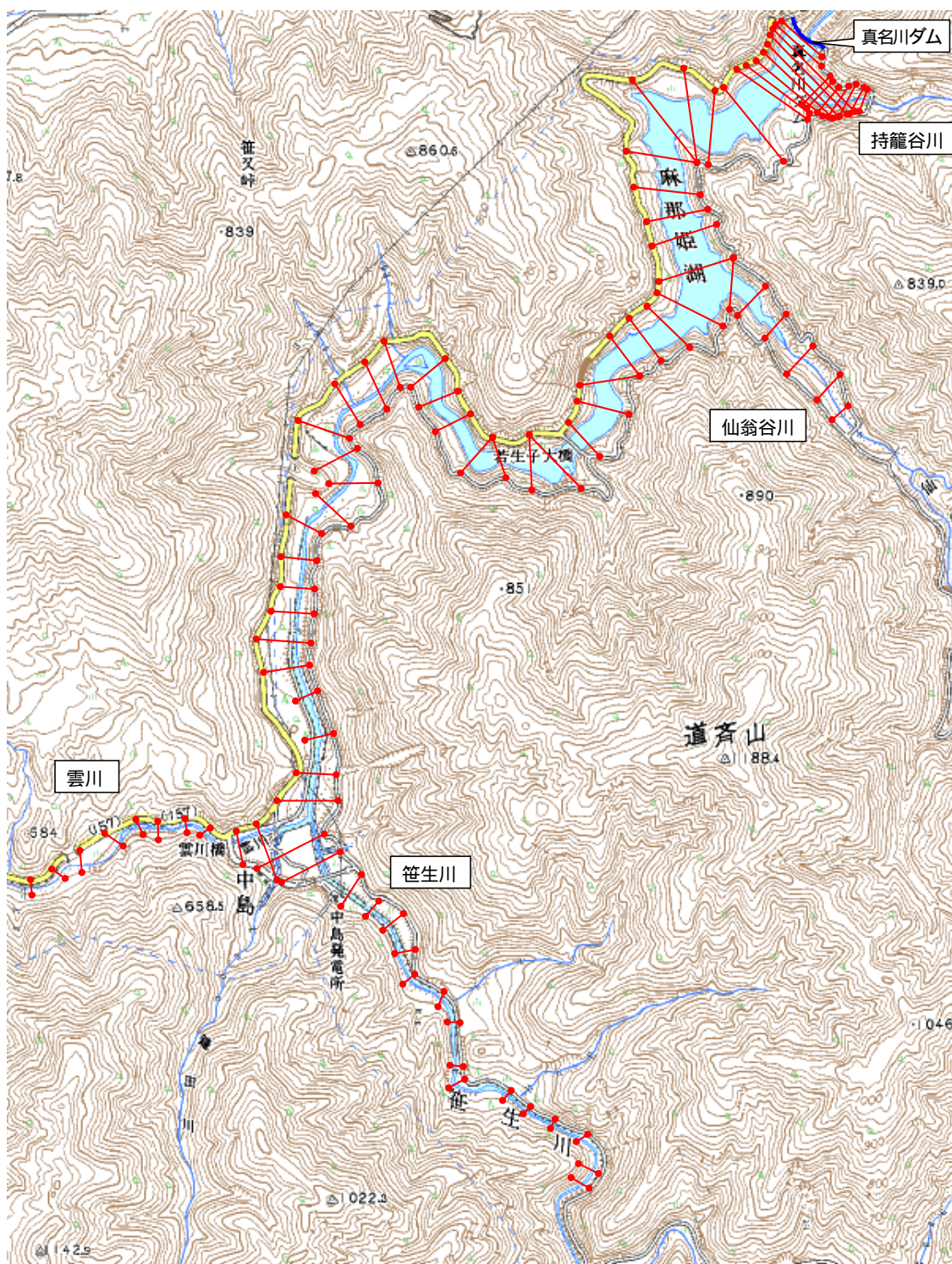


図 1.4 - 2 真名川ダム測線位置図（その1）

出典：資料 1 - 10

### (3) 水質調査

真名川ダムの定期水質調査は、図 1.4-3 に示す水質調査地点で月に 1 回実施している。なお、調査項目は以下のとおりである。また、調査地点「No.1」では、自動観測を実施している。

- ・健康項目
- ・生活環境項目
- ・富栄養化項目
- ・水温、濁度
- ・植物プランクトン
- ・底質調査
- ・大腸菌群数
- ・糞便性大腸菌群数



図 1.4 - 3 水質調査地点位置図

出典：資料 1 - 10

(4) 巡視

1) 定期巡視

貯水池周辺の崩壊、測量杭並びに用地境界杭、その他の標示の移動、河川の敷地、流水の占用または上空の横過、河川の区域内における土石の採取等の状況は、毎週1回巡視を行い、異常を認めた時は速やかに処置するものとする。

ダム上流の直轄区間の巡視

巡視項目	巡視経路図
不審な行為	
不審物	
遮断機の閉状況	
貯水池・河川の状況	
中島観測局舎 ・施錠の確認 ・周辺及び外観の状況 ・その他	
上若生子観測局舎 ・施錠の確認 ・周辺及び外観の状況 ・その他	
生物モニター ・魚の状況 ・確認方法 I T V か目視	

ダム下流の警報局舎等の巡視（週1回実施）

警報局舎名及び水位観測所名	○巡視項目
下若生子(警)	・施錠、外観、維持管理状況、巡視経路の状況、その他
奈良原(警)	
五条方下(水)	
五条方(警)	
佐開(警)	
御給(警)	
友兼(警)	
森政領家(警)	
井の口(警)	
菖蒲池(警)	
麻生島(水)	
堂本(警)	
南新在家(警)	
土布子(警)	



図 1.4 - 4 定期的巡視ルート

出典：資料 1 - 10

## 2) 真名川ダム放流に伴う河川巡視

真名川ダムの放流警報設備および巡視ルートを、図 1.4 - 5 に示す。

放流警報設備は、図 1.4 - 5 に示すとおり、下若生子・奈良原・五条方・佐開・御給・友兼・森政領家・井ノ口・菖蒲池・堂本・南新在家・土布子の全 12 箇所である。



図 1.4 - 5 真名川ダム放流警報経路図

出典：資料 1 - 15

(5) 点検

真名川ダムにおける点検整備基準は、以下のとおりである。

表 1.4 - 1 真名川ダム点検整備基準(1/2)

区 分	細 分	点検及び整備回数	要 領		
ダム本体		1回/月	水叩の洗掘、提体の劣化、磨耗、ひびわれ、漏水、沈下、その他外観上の異常を常に監視し、提体監査廊の各種調査観測設備並びにこれを使用する計器、用具等は常に機能を発揮し得るよう毎月1回点検及び整備をすること。		
ゲート及び捲上機	捲上機	外観	常時	捲揚機の外観上の点検は常に行うものとし、各軸受捲胴軸等のグリスニップル、又はグリスカップには備付のグリスポンプで運転前に充分注油すること。	
		給油	運転前	その都度	
		給油	長期休止時	1回/3ヶ月	長期休止時には3ヶ月に1回必ず、カップグリスを補給しておくこと。軸受の場合は側部から溢れ出る程度に補給しておくこと。捲揚機の歯車にはギヤグリスを全面に塗布しておくこと。歯面に油が切れて金属面が露出し噛合いの阻害を起し、又は金粉砂等の附着した場合は洗油で充分洗滌し、ギヤグリスを塗布しておくこと。
	ゲート	歯車	必要の都度		
		自動制御	4回/年(点検整備) 2回/年(模擬)	ゲートの自動制御装置については、点検整備を毎年4回行なうほか、試験が可能な時期を選び年2回の模擬試験を行うこと。	
		昇降用ロープ	1回/3ヶ月	ゲート昇降用ロープには、ロープ油を全面に塗布すること。	
		点検整備	渇水期実施 1回/年	ゲートの点検整備は渇水時期に行うが少なくとも年2回は給油すること。	
		給油	2回/年		
	止水ゴム及び底板部材	渇水期及び放流後	ゲートの止水ゴム及び底部木部は流木等により損傷しやすいから渇水期及び放流後には必ず点検すること。		
	塗装	1回/5年	ゲートの塗装は5年に1回程度を標準とすること。但し、部分塗装については必要に応じ適時おこなう。		
予備発電機		2回/月	平常時は毎月2回点検及び試運転を行なって整備状況を確認し、特に起動用圧縮機の常用圧力を25kg/cm <sup>2</sup> に保つこと。		
放水管バルブ及び放水ゲート		常時 作動 1回/月	長期にわたる閉塞の場合はゲート内面にさびが浮き運転に支障をきたす恐れがあるので毎月1回ストローグさせて、さびが浮かないようにすること。各填座部分の漏水又は漏油が多いときは、パッキン押えを均等に締め込むこと。しめ代のなくなった時は、パッキンを取りかえること。ウォームギヤに充分注油を行い、ボルトナットのゆるみ等外部の異常の有無を点検すること。制限開閉器が確実に作動し、ゲートが所定の位置で確実に作動し、ゲートが所定の位置で自動停止するかを点検し、確認すること。		
標識手摺照明設備	点検	常時	照明設備は電気工作物巡視点検及び測定基準により点検整備を行なうものとし、塗装は5年に1回程度を標準とすること。		
	塗装	1回/5年			
流量観測設備			低水流量測定に支障を与えぬよう適時コンクリート河床部分における堆積土砂に留意し、清掃を行うこと。		
		1回/月	洪水流量測定を行うための浮子投下設備並びに、これに使用する計器、用具等は常に機能を発揮し得るよう毎月1回点検及び整備をすること。 作業用の船は作業終了後は被害を受ける恐れのない場所に引き上げておくこと。		
自記雨量水位観測所		1回/月	毎月1回ペン、インク、時計等を点検整備すること。		
有線式遠隔水位観測所		1回/月	本機が正常に作動しているかどうか送信部と受信部の指示のよみが一致しているか否か、毎日点検し、一致していない場合はこれを調整すること。		
テレメーター雨量水位観測所	管理支所内	1回/月	管理支所内の設備は日常点検のほか毎月1回各部の状態測定を行い規定状態に調整すること。		
	その他	1回/月	各テレメーター観測所は毎月1回巡視し、点検整備すること。		
	中継所	1回/月	笹生、中島、熊河中継所については、1ヶ月1回巡視し装置の点検整備をすること。特に電源関係機器に留意すること。テレメーター水位観測所は常設とし、テレメーター雨量観測所は4月16日から11月15日まで運用し、11月16日から4月15日までは積雪観測所を運用するものとする。但し気象、水象の状況により変更することがある。		
テレメーター雨量水位観測所	建物	2回/年	観測所の建物内外の清掃は年2回行うものとする。		
放流警報設備	管理支所内	一般点検	毎日	管理支所内の設備は、日常点検のほか、毎月1回各部の状態測定を行い規定状態に保つこと。	
		各部点検	1回/月		
	テスト制御	1回/月 及び必要の都度	毎月1回及び洪水警戒体制又は、ダムからの放流を予想される場合は、その都度管理支所よりテスト制御を行い無線回線及び警報所の電源状態の確認を行うこと。		
	警報所	1回/月	各警報所は、毎月1回巡視し、点検整備を行なうこと。		
	送受信所	1回/月	送受信所の無線設備は1ヶ月に1回巡視し点検整備を行なうこと。		
建物	2回/年	警報所の建物内外の清掃は年2回行なうものとする。			



表 1.4 - 1 真名川ダム点検設備基準(2/2)

区 分	細 分	点検及び整備回数	要 領	
警報用提示板		4回/年	提示板は毎年4回設置箇所を巡視し、員数及び塗装、破損状態を調べ、修理を要するものはその対策を講ずること。	
電気設備			電気設備については、近畿地方建設局自家用電気工作物保安規定により点検整備すること。(S45.6.3改正)	
通信設備電話	所内電話	1回/月	所内電話は常に通話可能な状態に保ち、毎月1回は全回線の通話テストを行うこと。	
多重無線電話設備			多重無線電話装置の性能を常に最良に保ち、障害の発生を未然に防ぐため必要な措置をとること。	
多重無線電話設備	全般	日常ほか定期1回/月	装置は日常点検のほか期間を定めて各回線の測定を行うこと。	
	信号レベル測定	2回/年	多重無線回線は毎年2回、関係回線について相互に信号レベルの測定及びS/N比の測定等を行い回線を正常に保つこと。 この基準によるほか近畿地方建設局電気通信施設の運用及び保守要領によるものとする。(S51.8.2付 建近訓第7号)	
自動車		常時	各自動車並びに原動機付二輪車は、常時良好な状態に整備しておくこと。	
巡視船及び作業船	全般及び試運転	2回/月	洪水警戒体制に入った場合及び波浪その他により被害を受ける恐れのある場合は繫船設備により上限まで揚げて繫留すること。 運転終了後は、機関ジャケットの水を必ず脱水しておくこと。 毎月2回点検及び試運転を行い、機関の異常を調べるとともに船体を清掃すること。	
繫船設備	全般	2回/月	船台掲揚ワイヤーロープには、ワイヤーグリースを3ヶ月に1回は充分塗布すること。 ウインチ、モーター、ブレーキ等は毎月1回注油し、試運転を行なうこと。	
	給 脂	ワイヤーロープ		1回/3ヶ月
	その他	1回/月		
調査測定用機械器具	全般	常時	流量観測用機器、堆砂量測定機器、水中温度計、濁度計、提体測定機器等及びこれらに使用する資材等は常に整備しておき、故障の場合は直ちに修理すること。	
その他			1. この基準のほか必要と思われる箇所については点検事項を加え、また重要な箇所については回数を増やして行なうものとし、ダムの安全管理に万全を期さねばならない。 2. この基準を基に点検シートを作成し、整備すること。	

出典：資料 1 - 16

### 1.4.2 出水時の管理計画

真名川ダムへの出水時における洪水警戒体制時の行動概念図を図 1.4 - 6 に示す。

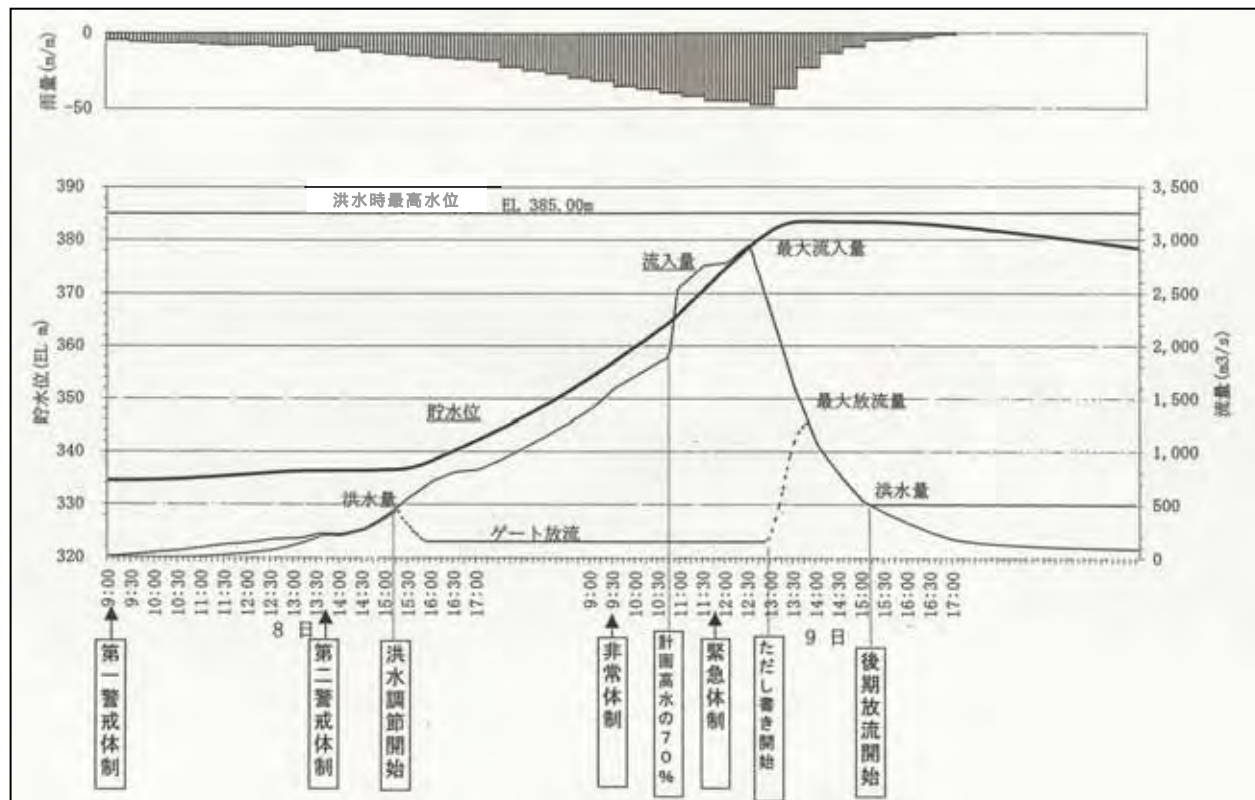


図 1.4 - 6 洪水時の行動概念図

出典：資料 1 - 17

風水害時の防災体制と洪水警戒体制のランクは、以下に示すとおりである。

防災体制	真名川ダム洪水警戒体制	九頭竜ダム洪水警戒体制
注意体制	準備警戒体制	準備警戒体制
第一警戒体制	第一警戒体制	第一警戒体制
第二警戒体制	第二警戒体制	第二警戒体制
非常体制	非常体制・緊急体制	非常体制・緊急体制

各体制の発令基準は、災害対策計画第 6 条と九頭竜ダム操作要領及び真名川ダム操作実施要領（案）に基づく。また、真名川ダム洪水警戒体制で第二警戒体制が発令されたときは、災害対策部は第二警戒体制となる。

九頭竜川ダム統管理事務所河川関係風水害対策部 防災体制発令基準及びダムの洪水警戒体制発令基準を以下に示す。

表 1.4 - 2 各種体制発令基準

	九頭竜川ダム統合管理事務所 河川関係風水害対策部 防災体制発令基準	真名川ダム管理支所 洪水警戒体制 発令基準
注意体制	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 福井地方気象台より、大雨・洪水に関する注意報が発令され、対策部長が必要と認めたととき。</li> <li>2. 台風の本邦上陸が予想され、対策部長が必要と認めたととき。</li> <li>3. 九頭竜ダム上流域、真名川ダム上流域、全流域（以下各流域）のいずれかの流域平均累加雨量が 50mm を越えると予想され、対策部長が必要と認めたととき。</li> <li>4. 真名川ダム操作規則（案）第 13 条、真名川ダム操作実施要領（案）第 52 条の規定により、洪水警戒体制（準備警戒体制）が発令されたとき。</li> <li>5. 真名川ダムの小放流バルブのみの放流操作が予想され対策部長が必要と認めたととき。</li> <li>6. 九頭竜ダム操作規則第 11 条、九頭竜ダム操作実施要領第 4 条の規定により、洪水警戒体制（準備警戒体制）が発令されたとき。</li> <li>7. 対策部長が必要と判断したとき。</li> <li>8. 河川関係風水害対策部長（以下「本部長」）が指示したとき。</li> </ol>	<p>（準備警戒体制）</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 福井地方気象台より、大雨洪水及び台風に関する気象情報が発令され、警戒体制の準備が必要なとき。</li> <li>2. ダム流域内において、何れかの雨量観測所で降り始めてからの雨量が 50mm を越えると予想され、警戒体制の準備が必要なとき。</li> <li>3. 水位が制限水位及び常時満水位を超えると予想されるとき。</li> <li>4. 小放流バルブのみの放流操作が予想され、必要と認めたととき。</li> </ol>
第一警戒体制	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 福井地方気象台より、大雨・洪水に関する警報が発令され、対策部長が必要と認めたととき。</li> <li>2. 台風の近畿地方接近、または上陸が予想され、対策部長が必要と認めたととき。</li> <li>3. 各流域平均累加雨量が 100mm を越えると予想され、対策部長が必要と認めたととき。</li> <li>4. 真名川ダム操作規則（案）第 17 条の規定により、洪水に達しない流水の調節を行うとき。</li> <li>5. 真名川ダム操作規則（案）第 16 条の規定により洪水調節の後における水位の低下を行うとき。</li> <li>6. 真名川ダム操作規則（案）第 18 条の規定により洪水に達しない流水の調節の後における水位の低下を行うとき。</li> <li>7. 真名川ダム操作規則（案）第 13 条、真名川ダム操作実施要領（案）第 52 条の規定により洪水警戒体制（第一警戒体制）が発令されたとき。</li> <li>8. 九頭竜ダム操作規則第 15 条の規定により洪水に達しない流水の調節を行うとき。</li> <li>9. 九頭竜ダム操作規則第 14 条の規定により洪水に調節等の後における水位の低下を行うとき。</li> <li>10. 九頭竜川ダム操作規則第 11 条、九頭竜ダム操作実施要領第 4 条の規定により、洪水警戒体制（第一警戒体制）が発令されたとき。</li> </ol>	<p>（第一警戒体制）</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. ダム流域内において、何れかの雨量観測所で降り始めてからの雨量が 100mm を超えると予想されたとき。</li> <li>2. 流入量が 250m<sup>3</sup>/s を超えると予想されたとき。</li> <li>3. コンジットゲート又は、クレストゲートにより放流を行うとき。 ただし規則第 20 条第 1 項第二号、第三号及び規則第 23 条のうち、事務所長が必要と認めたととき。</li> <li>4. 九頭竜川幹川における中角水位観測所の水位が指定水位を超え、更に警戒水位に達する恐れがあるとき。</li> </ol>

	九頭竜川ダム統合管理事務所 河川関係風水害対策部 防災体制発令基準	真名川ダム管理支所 洪水警戒体制 発令基準
	11. 被害の発生が予想されるとき。 12. 対策部長が必要と判断したとき。 13. 対策本部長が指示したとき。	
第二警戒体制	1. 各流域平均累加雨量が 200mm を越えると予想され、対策部長が必要と認めたとき。 2. 真名川ダム操作規則(案)第 15 条の規定により洪水調節を行うとき。 3. 真名川ダム操作規則(案)第 13 条、真名川ダム操作実施要領(案)第 52 条の規定により洪水警戒体制(第二警戒体制)が発令されたとき。 4. 九頭竜ダム操作規則第 13 条の規定により洪水調節を行うとき。 5. 九頭竜ダム操作規則第 11 条、九頭竜ダム操作実施要領第 4 条の規定により、洪水警戒体制(第二警戒体制)が発令されたとき。 6. さらに甚大な被害の発生が予想されるとき。 7. 対策部長が必要と判断したとき。 8. 対策本部長が指示したとき。	(第二警戒体制) 1. ダム流域内において、何れかの雨量観測所で降り始めてからの雨量が 100mm を超え、更に 200mm を超えると予想されたとき。 2. 流入量が 500m <sup>3</sup> /s を超えると予想されたとき。 3. 洪水に達しない洪水の調節を行うと予想されたとき。
非常体制	1. 真名川ダム操作規則(案)第 13 条、真名川ダム操作実施要領(案)第 52 条の規定により洪水警戒体制(非常体制または緊急体制)が発令されたとき。 2. 九頭竜ダム操作規則第 11 条、九頭竜ダム操作実施要領第 4 条の「規定により洪水警戒体制(非常体制または緊急体制)が発令されたとき。 3. 甚大な被害が発生したとき。 4. 対策部長が必要と判断したとき。 5. 対策本部長が指示したとき。	(非常体制) 1. ダム流域において、何れかの雨量観測所で降り始めからの雨量が 50mm を超えると予想されたとき。 2. 流入量が計画高水流量の 2,700m <sup>3</sup> /s に達すると予想されたとき。 3. 別に定める「計画規模を超える洪水時の真名川ダムただし書き操作要領(案)」(以下「ただし書き操作要領(案)」)の第 2 条第一号に規定する「ただし書き捜査開始水位」の標高 380.3m に達することが予想されたとき。  (緊急体制) 1. 流入量が 2,700m <sup>3</sup> /s 以上のとき。 2. ただし書き操作要領(案)第 3 条に該当する計画を超える洪水時操作への移行等の措置を行うとき。 3. 洪水により広範囲にわたり、災害の発生が予想されるとき。 4. 細則第 9 条第 2 項に該当する放流が予想されるとき。

出典：資料 1 - 15

## 1.5 文献リスト

表 1.5 - 1 使用した文献・資料リスト

No.	報告書またはデータ名	発行者	発行年月日	箇所
1 - 1	九頭竜川流域誌	九頭竜川水系治水百周年記念事業実行委員会	平成 12 年 10 月	地形・地質
1 - 2	現存植生図	環境省	昭和 59 年	植生図
1 - 3	福井県の気象百年			降水量分布 気温分布
1 - 4	真名川ダム管理年報	九頭竜川ダム統合管理所	昭和 54 年～平成 17 年	雨量
1 - 5	気象庁ホームページ	気象庁	昭和 54 年～平成 17 年	雨量
1 - 6	国勢調査（人口・世帯）	（財）統計情報研究会開発 瀬センター	昭和 40 年～平成 17 年	人口・世帯
1 - 7	国勢調査（就業人口）	総務庁統計局	昭和 40 年～平成 17 年	就業者
1 - 8	九頭竜川のダム管理	建設省近畿地方建設局九頭 竜川ダム統合管理事務所	昭和 63 年 3 月	治水計画の変 遷
1 - 9	九頭竜川の流水管理 （パンフレット）	国土交通省近畿地方整備局 九頭竜ダム統合管理所	平成 16 年 9 月	利水
1 - 10	平成 17 年度真名川ダム 管理フォローアップ	国土交通省近畿地方整備局 九頭竜ダム統合管理所	平成 18 年 1 月	施設概要
1 - 11	真名川ダム工事誌	建設省近畿地方建設局真名 川ダム工事事務所	昭和 54 年 7 月	ダム図面
1 - 12	真名川ダム管理所 提供資料	国土交通省近畿地方整備局 九頭竜ダム統合管理所		維持管理
1 - 13	日流量月報、流量年報	国土交通省近畿地方整備局 九頭竜ダム統合管理所	昭和 56 年～平成 18 年	流況
1 - 14	平成 18 年次報告書（真名 川ダム）	国土交通省近畿地方整備局 九頭竜ダム統合管理所	平成 19 年 12 月	ダム管理体制
1 - 15	平成 18 年度九頭竜ダム 統合管理事務所災害対策 部運営連絡計画書	近畿地方整備局	平成 18 年 6 月	警報
1 - 16	真名川ダム点検整備基準	建設省近畿地方建設局 真名川ダム管理支所	昭和 54 年 2 月	ダム点検整備 基準
1 - 17	平成 18 年度ダム管理演 習説明会資料	九頭竜川ダム統合管理事務 所 管理課	平成 18 年 4 月	真名川ダム 演習ハイドロ
1 - 18	九頭竜川水系河川整備基 本方針	福井県土木部河川課ホーム ページ	平成 18 年 2 月策定	治水
1 - 19	平成 16 年福井豪雨の氾 濫実績図	九頭竜ダム統合管理事務所		治水

## 2 . 洪水調節

## 2. 洪水調節

### 2.1 想定氾濫区域等の状況

#### 2.1.1 想定氾濫区域の状況

真名川ダムの想定氾濫区域図は、図 2.1 - 1 に示すとおり、想定氾濫区域面積が 44.76km<sup>2</sup> である。

なお、計算条件等は以下のとおりである。

#### < 計算条件等 >

- (1)九頭竜川本川 26.4km 地点において、計画高水流量 3,800m<sup>3</sup>/s を越す高水が来襲した場合、当地点左岸が破堤し、計画高水流量を超過した流量は堤内に氾濫するものとした。
- (2)高水の低減部においては、破堤部及び本川の水位流量曲線より求めた流量の比で堤内に流入するものとした。
- (3)26.4km 地点の河川断面は台形断面とし河床高を EL20.50m とする。また、破堤部の破堤後地盤高を横断面より EL22.10m とした。

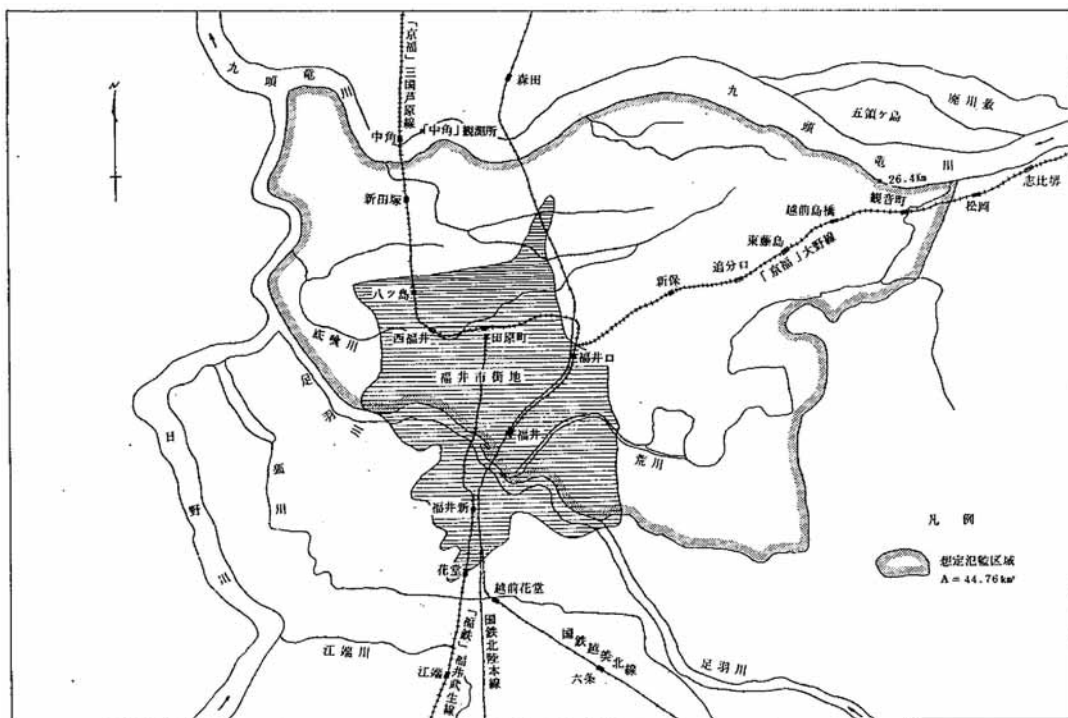


図 2.1 - 1 真名川ダムの想定氾濫区域図

出典：資料 2-1

### 2.1.2 浸水想定区域の状況

平成 14 年 3 月の九頭竜川水系浸水想定区域図を図 2.1 - 2 に示す。

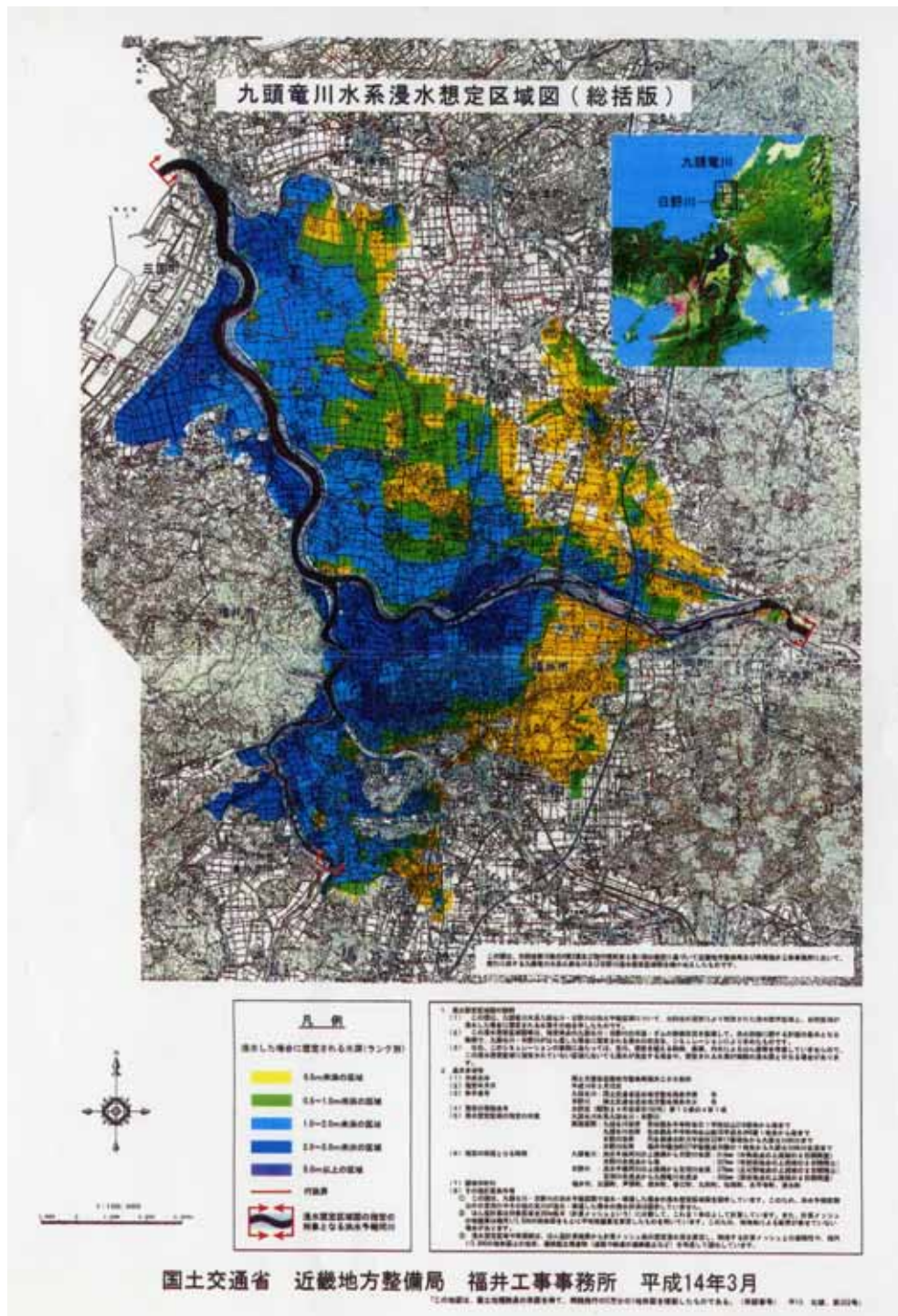


図 2.1 - 2 浸水想定区域図（九頭竜川・日野川）

出典：資料 2 - 2



浸水想定区域図の計算条件を以下に示す。

## 1. 浸水想定区域図の説明

- (1) この図は、九頭竜川水系九頭竜川・日野川の洪水予報区間について、水防法の規定により指定された浸水想定区域と、当該区域が浸水した場合に想定される水深その他を示したものである。
- (2) この浸水想定区域図は、指定時点の九頭竜川・日野川の河道・ダムの整備状況を勘案して、洪水防御に関する計画の基本となる降雨で、九頭竜川・日野川が氾濫した場合に想定される浸水の状況を、シミュレーションにより求めたものである。
- (3) なお、このシミュレーションの実施に当たっては、支川、想定を越える降雨や、高潮、内水による氾濫等を考慮していないので、この浸水想定区域に指定されていない区域においても浸水が発生する場合や、想定される水深が実際の浸水深と異なる場合がある。

## 2. 基本事項等

- (1) 作成主体 国土交通省近畿地方整備局福井河川国道事務所
- (2) 指定年月日 平成 14 年 3 月 15 日
- (3) 告示番号 九頭竜川：国土交通省近畿地方整備局告示第 号  
日野川：国土交通省近畿地方整備局告示第 号
- (4) 指定の根拠法令 水防法（昭和 24 年法律第 193 号）第 10 条の 4 第 1 項
- (5) 浸水想定区域の指定対象 九頭竜川水系九頭竜川・日野川  
実施区間：九頭竜川左岸吉田郡永平寺町谷口 1 字総社山 218 番地から海まで  
九頭竜川右岸吉田郡永平寺町鳴鹿 35 字逆水沖 5 番 1 地先から海まで  
日野川左岸 丹生郡清水町大字朝富 32 字 17 番地先から九頭竜川幹川まで  
日野川右岸 福井市穂池町 27 字勸要道 30 晩の 1 地先から九頭竜川幹川まで
- (6) 指定の前提となる降雨 九頭竜川：洪水予報河川の上流端から日野川合流：414mm  
（中角地点の上流域の 2 日間雨量）  
日野川合流点から海：327mm  
（布施田地点の上流域の 2 日間雨量）  
日野川：洪水予報河川の上流端から足羽川合流：376mm  
（三尾野地点の上流域の 2 日間雨量）  
足羽川合流点から九頭竜川合流点：302mm  
（深谷地点の上流域の 2 日間雨量）
- (7) 関係市町村 福井市、あらわ市、坂井市、永平寺町
- (8) その他計算条件等

この図は、九頭竜川・日野川の洪水予報区間で溢水・破堤した場合の浸水想定区域図を図示している。このため、洪水警報区間以外の足羽川やその他の支川が溢水・破堤した場合の浸水状況は図示していない。

氾濫計算は対象区域を 250m 格子 ( 計算メッシュという ) に分割して、これを 1 単位として計算している。また、計算メッシュの地盤高は縮尺 1/2,500 の地形図をもとに平均地盤高を算定したものを採用している。このため、微地形による影響が表せていない場合がある。

浸水想定区域や等深線は、氾濫計算結果から計算メッシュ毎の想定浸水深を算定し、隣接する計算メッシュとの連続性や、縮尺 1/2,500 の地形図上の地形、連続盛土構造物 ( 道路や鉄道盛土など ) を考慮して図化している。

## 2.2 洪水調節の状況

### 2.2.1 洪水調節計画

真名川ダムにおける洪水調節計画は、真名川ダム地点における計画高水流量  $2,700\text{m}^3/\text{s}$  のうち  $2,550\text{m}^3/\text{s}$  を調節し、他のダム群と合わせて九頭竜川中流部「中角」基準点における基本高水ピーク流量  $8,600\text{m}^3/\text{s}$  を  $5,500\text{m}^3/\text{s}$  に低減させるものである。

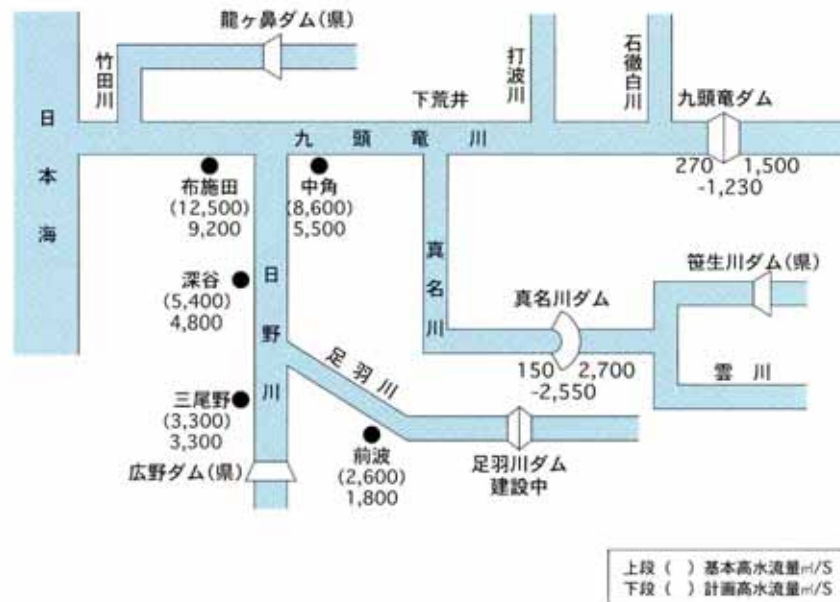


図 2.2 - 1 流量配分図

出典：資料 2 - 3



図 2.2 - 2 中角基準点他位置図

◎洪水調節

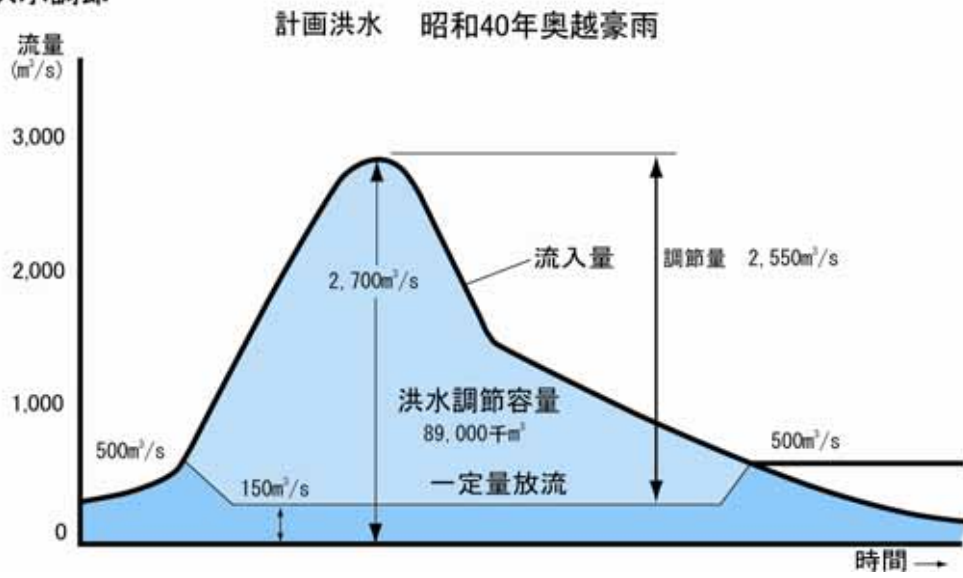


図 2.2 - 3 洪水調節計画図

出典：資料 2 - 4

## 2.2.2 洪水調節実績

昭和 54 年の真名川ダム管理開始以降の洪水調節実績は、平成 16 年 7 月 18 日および平成 16 年 10 月 20 日の 2 洪水である。

表 2.2 - 1 洪水調節実績 (単位: m<sup>3</sup>/s)

洪水調節実施日	要因	最大流入量	最大放流量	最大流入時		中角実績 最大流量
				放流量	調節量	
平成 16 年 7 月 18 日	梅雨前線 (福井豪雨)	1,033.21	166.75	14.65	1,018.56	2,497.02
平成 16 年 10 月 20 日	台風 23 号	542.61	15.50	14.98	527.63	3,290.87

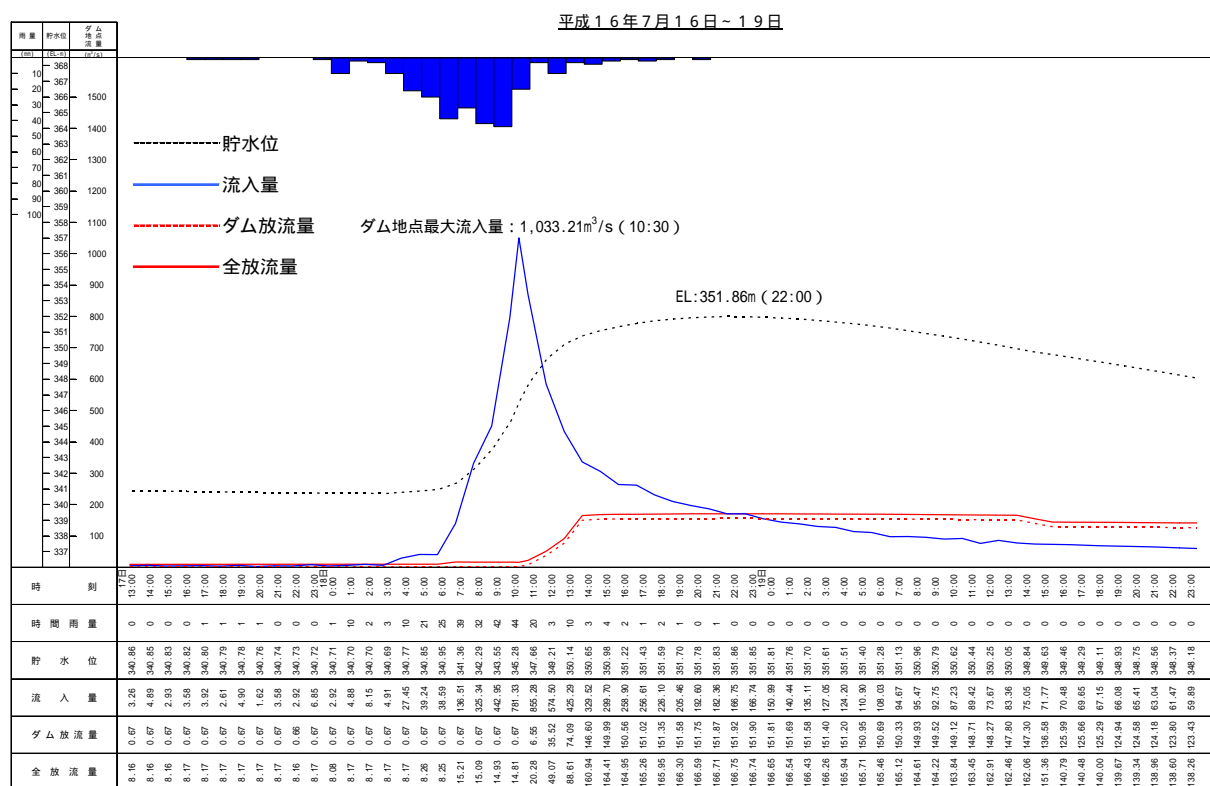


図 2.2 - 4 洪水調節実績 (平成 16 年 7 月 18 日)

平成 16 年 7 月 18 日洪水時のダム操作について

真名川ダムでは、7 月 1 日から 31 日までの期間を標高 348m の第 1 期洪水貯留準備水位としている。

当該出水前は、貯水位が 340m 程度で貯水位に余裕があったため、放流開始水位 346m まで貯留することとしたが、第 1 期洪水貯留準備水位 348m に達するまでに流入量が洪水量の 500m<sup>3</sup>/s に達した。貯水位が 348m に達した時点で、降雨予測がないため、水位低下操作を行わず、150m<sup>3</sup>/s の一定量放流を実施した。

結果として、流入量ピーク約 1,000m<sup>3</sup>/s をほぼ全量カットした。

平成16年10月19日~20日

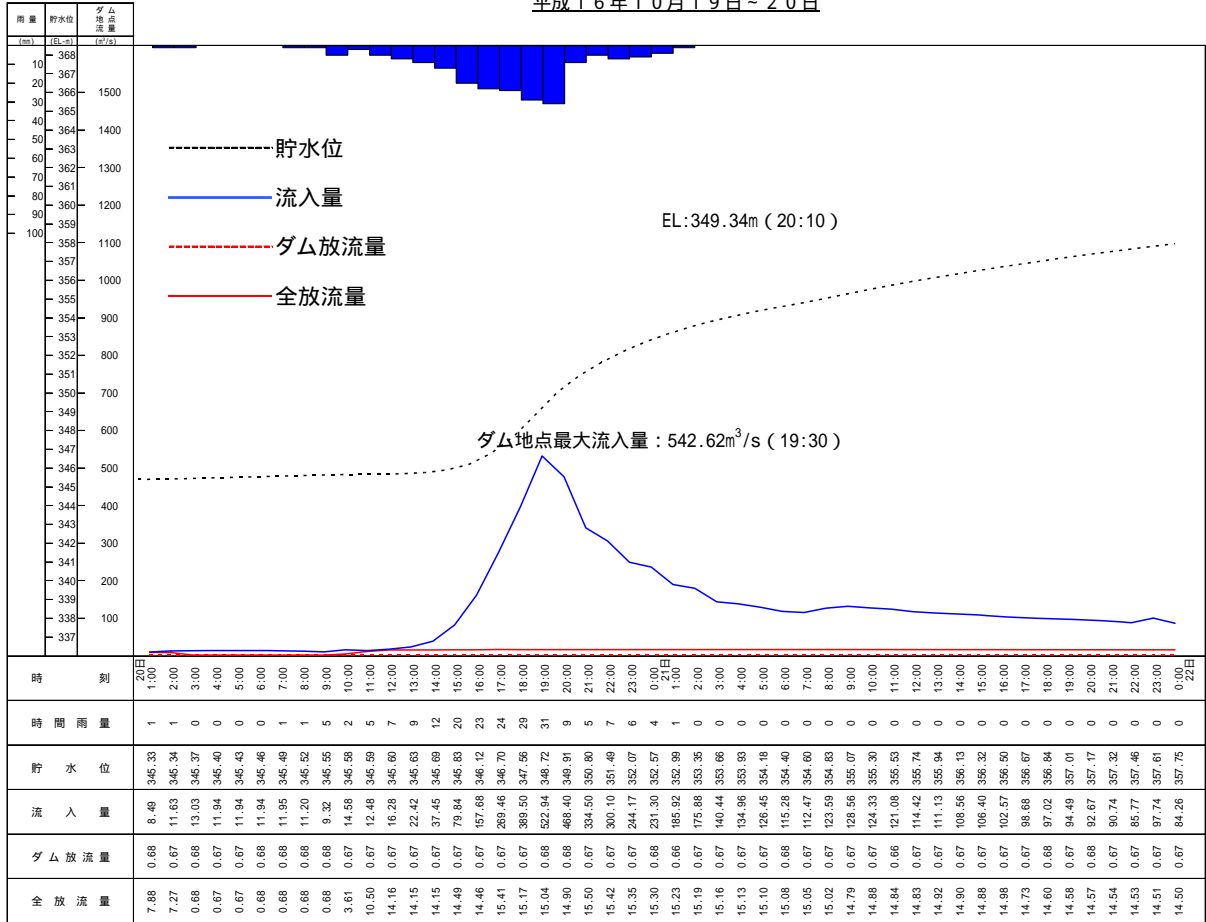


図 2.2 - 5 洪水調節実績 (平成 16 年 10 月 20 日)

平成 16 年 10 月 20 日洪水時のダム操作について

真名川ダムでは、10月1日から6月30日までの期間を非洪水期とし、標高 365m の平常時最高水位としている。

当該出水前は、貯水位 345m 程度であったため、洪水調節開始流量である流入量 500m³/s を超過していたが、貯水位が放流開始水位の標高 363m にまで達しなかったため、放流操作を実施しなかった。

結果として、流入量ピーク約 540m³/s をほぼ全量カットした。

### 2.2.3 洪水時の対応

上記 2 洪水について洪水時の防災対応について整理を行った。

表 2.2 - 2 平成 16 年 7 月 18 日洪水時の防災対応状況

時刻	注意報・警報	体制・発令	放流通知	備考
H16/7/18 16:42	大雨・洪水注意報			
H16/7/18 3:08	大雨・洪水警報			
H16/7/18 8:00		第一警報体制		
H16/7/18 9:10		第二警報体制		
H16/7/18 9:30			放流開始	
H16/7/18 22:30		第一警報体制	洪水調節終了	
H16/7/18 22:58	洪水警報・大雨注意報			
H16/7/19 5:57	洪水注意報			
H16/7/19 11:02	洪水注意報解除			
H16/7/20 22:10		準備警報体制		

出典：資料 2 - 5

表 2.2 - 3 平成 16 年 10 月 20 日洪水時の防災対応状況

時刻	注意報・警報	体制・発令	放流通知	備考
H16/10/20 7:03	大雨・洪水注意報			
H16/10/20 13:30		第一警戒体制		
H16/10/20 15:45	大雨・洪水警報			
H16/10/20 18:40		第二警戒体制		
H16/10/20 22:33				水防警報 (中角出動)
H16/10/21 5:00				水防警報 (中角解除)
H16/10/21 10:00	洪水注意報			
H16/10/21 10:10		解除		
H16/11/21 14:13	解除			

出典：資料 2 - 5

## 2.3 洪水調節の効果

平成 16 年 7 月 18 日および平成 16 年 10 月 20 日の洪水について、ダムありとなしの比較を行い、治水基準点の中角地点におけるダムによる流量低減効果および水位低減効果について評価を行った。

### 2.3.1 流量、水位低減効果の評価方法

ダムありの場合に流量は、実測流量とし、ダムなしの場合の流量は、ダム地点のピーク流量と中角地点のピーク流量より、真名川ダムから中角地点までの到達時間（3 時間）を考慮した上でダムへの流入量から放流量を差し引いた貯留分を、中角地点の実測流量に加えることで推定する。

$$\text{中角地点推定流量} = \text{中角地点実測流量} + (\text{ダム流入量} - \text{ダム放流量})$$

なお、ダムなしの場合の流量をもとに、水位 - 流量曲線（H-Q 曲線）より水位を推定し、水位低減効果の評価を行う。

### 2.3.2 流量低減効果

平成 16 年 7 月 18 日および平成 16 年 10 月 20 日洪水の中角地点における真名川ダムによる流量の低減効果は、表 2.3 - 1 に示すとおり、それぞれ 1,018m<sup>3</sup>/s、508m<sup>3</sup>/s であったと推定される。

表 2.3 - 1 流量の低減効果 (単位：m<sup>3</sup>/s)

年月日	中角地点			ダム地点
	実測流量 (ダムあり)	推定流量 (ダムなし)	流量低減量	調節量
平成 16 年 7 月 18 日	2,362	3,380	1,018	968
平成 16 年 10 月 20 日	3,221	3,729	508	527



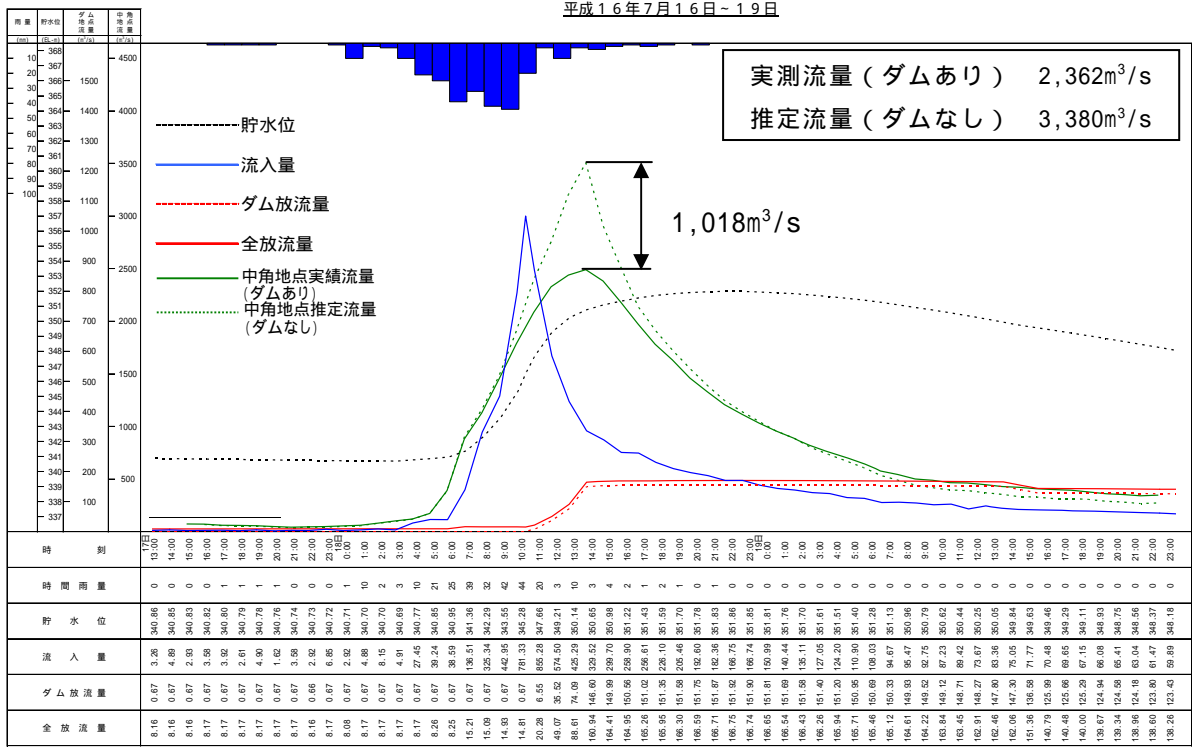


図 2.3 - 1 流量低減効果 (平成 16 年 7 月 18 日)

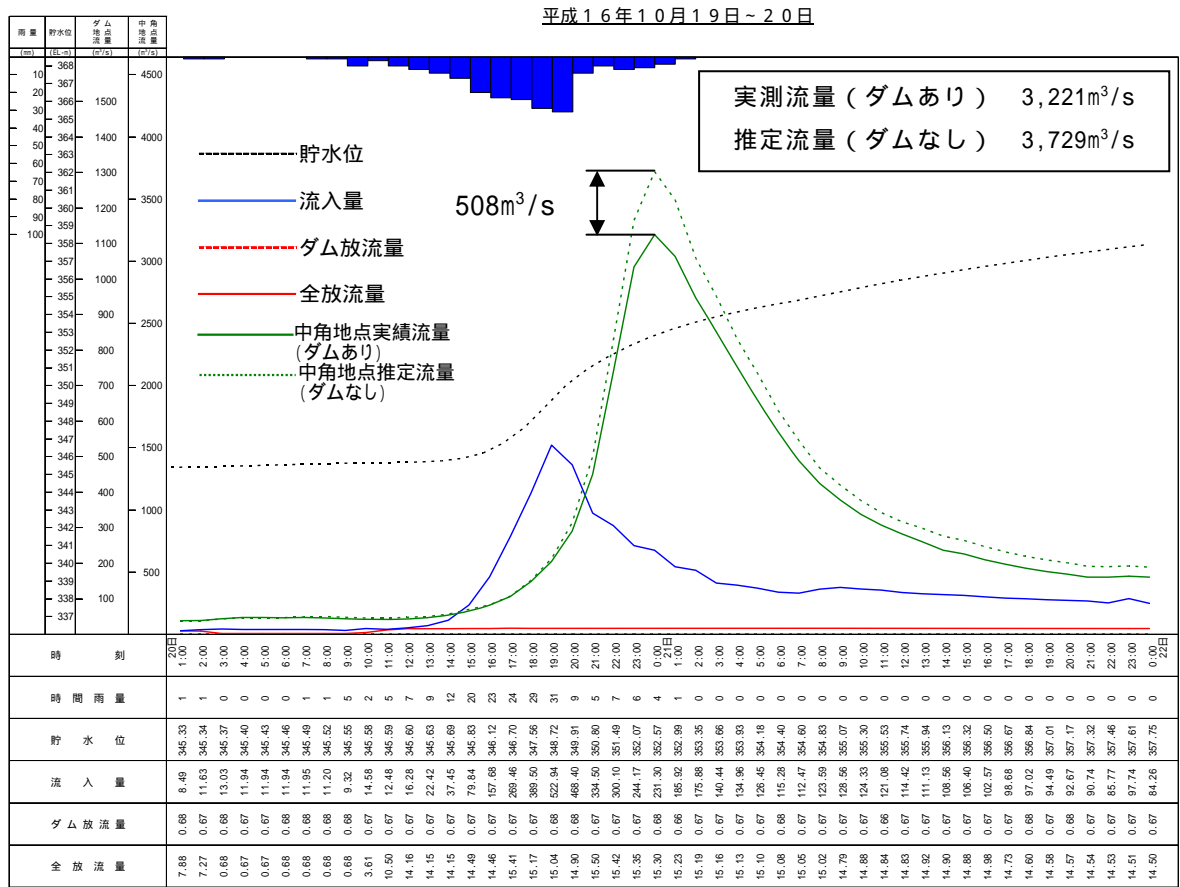


図 2.3 - 2 流量低減効果 (平成 16 年 10 月 20 日)

### 2.3.3 水位低減効果

平成16年7月18日および平成16年10月20日の洪水の中角地点における真名川ダムによる水位低減効果は、表2.3-2、図2.3-3~4に示すとおり、それぞれ1.32m、0.61mであったと推定される。

表 2.3 - 2 水位の低減効果 (単位：m)

年月日	実測水位 (ダムあり)	推定水位 (ダムなし)	水位低減効果
平成16年7月18日	6.58	7.90	1.32
平成16年10月20日	7.54	8.15	0.61

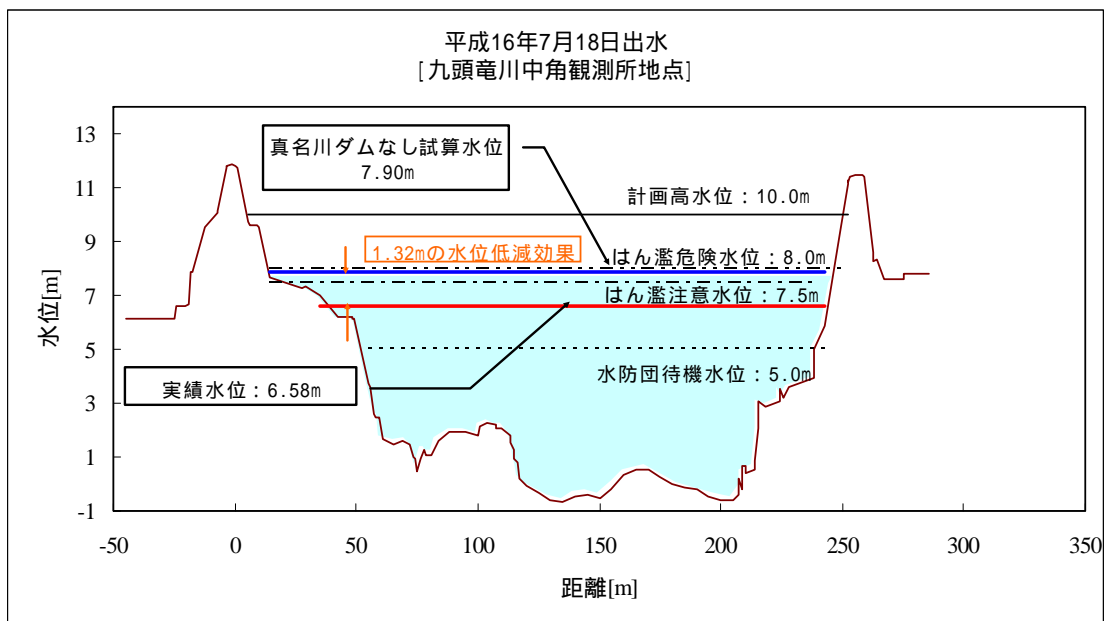


図 2.3 - 3 水位低減効果 (平成16年7月18日)

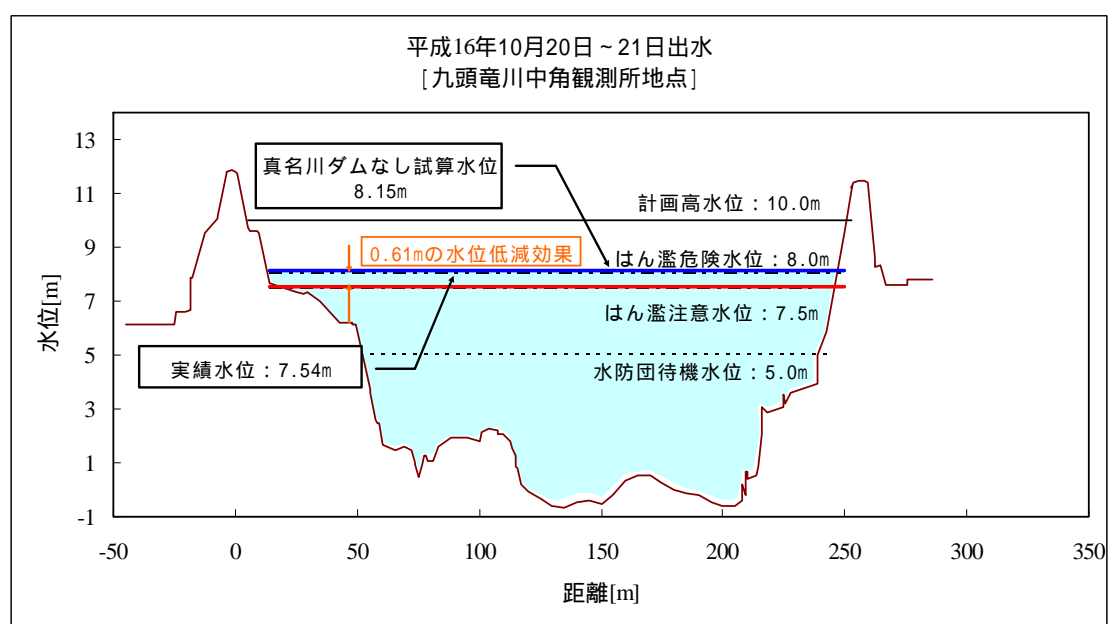


図 2.3 - 4 水位低減効果 (平成16年10月20日)

[ 参考 ]

また、平成 16 年 7 月 18 日の洪水では、九頭竜川筋の既設ダム（九頭竜ダム、真名川ダム、笹生川ダム）の洪水調節による中角地点の水位低減効果により、日野川 2.8k（深谷地点）で 0.54m、日野川 4.2k（足羽川合流点）で 0.43m の水位低減に貢献したと推察できる。

なお、上記の水位低減効果は、九頭竜川筋の既設ダムなしの場合の中角地点水位をもとに日野川の下流端水位を設定し、洪水流量で日野川の不等流計算を行い算出した水位と実績最高水位の比較を行った。

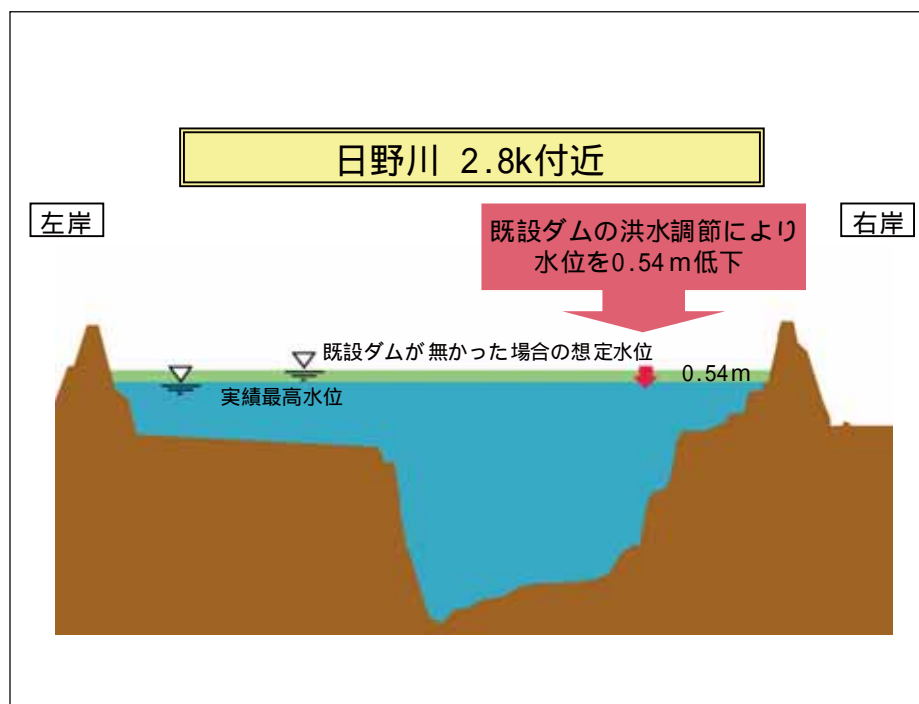


図 2.3 - 5 水位低減効果（日野川 2.8k、深谷地点）

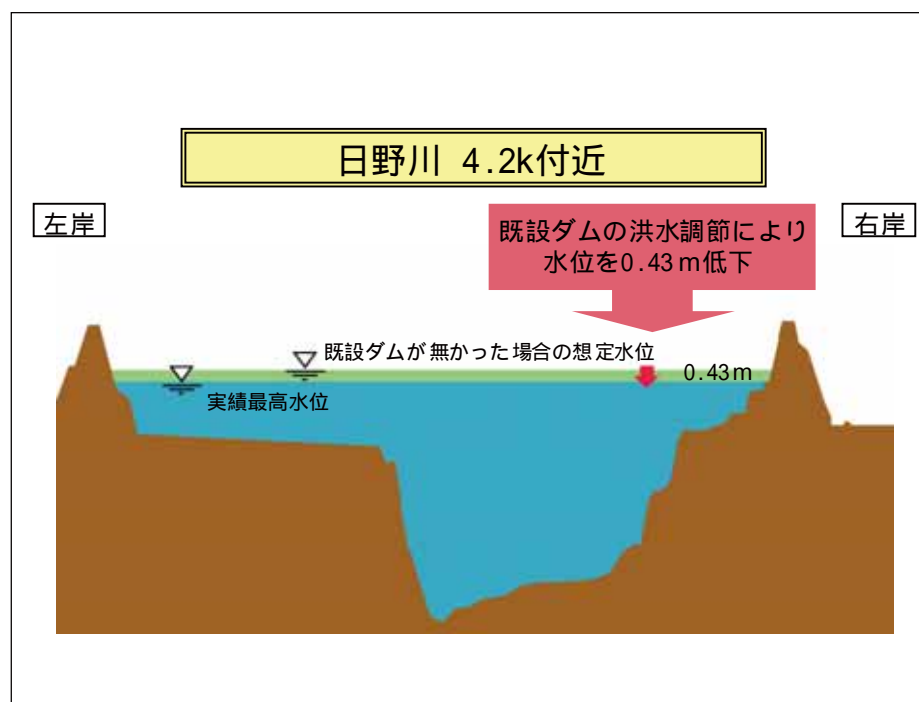


図 2.3 - 6 水位低減効果（日野川 4.2k、足羽川合流点）

### 2.3.4 水防活動の低減効果

ダムによる洪水調節効果により、河川管理者や住民の水防活動に費やされた労力軽減を評価する。

評価にあたっては、図 2.3 - 7～8 に中角地点におけるダムあり実測流量、ダムなし推定流量より水位 - 流量曲線を用いて水位に換算し、はん濫注意水位超過時間の比較を行った。

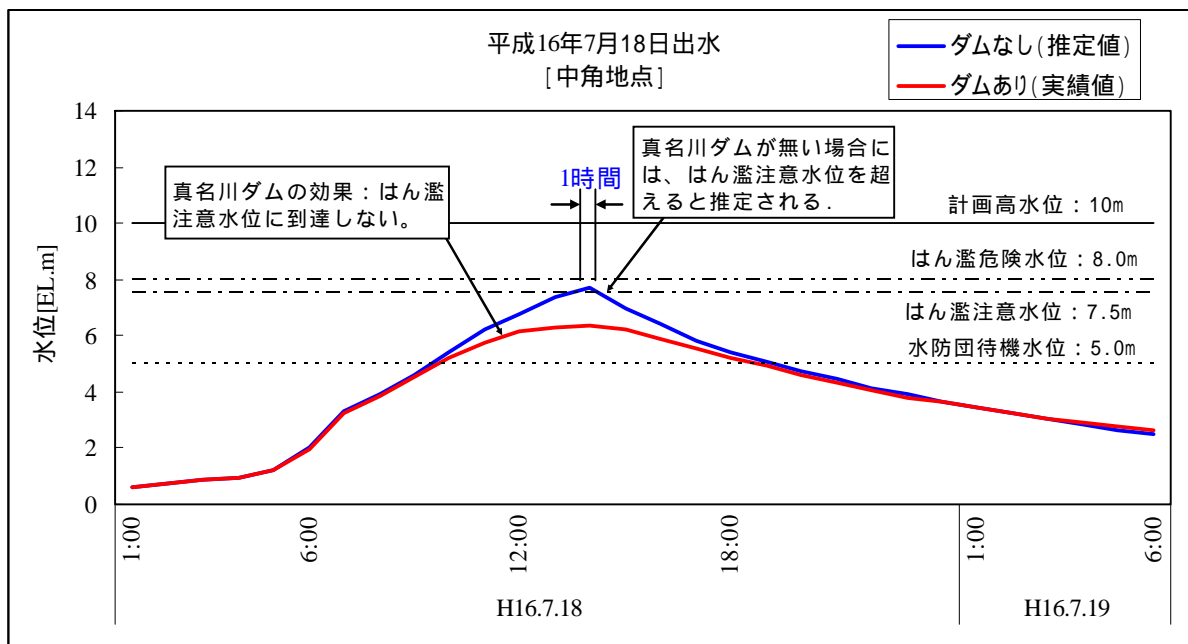


図 2.3 - 7 平成 16 年 7 月 18 日洪水の水防活動軽減効果

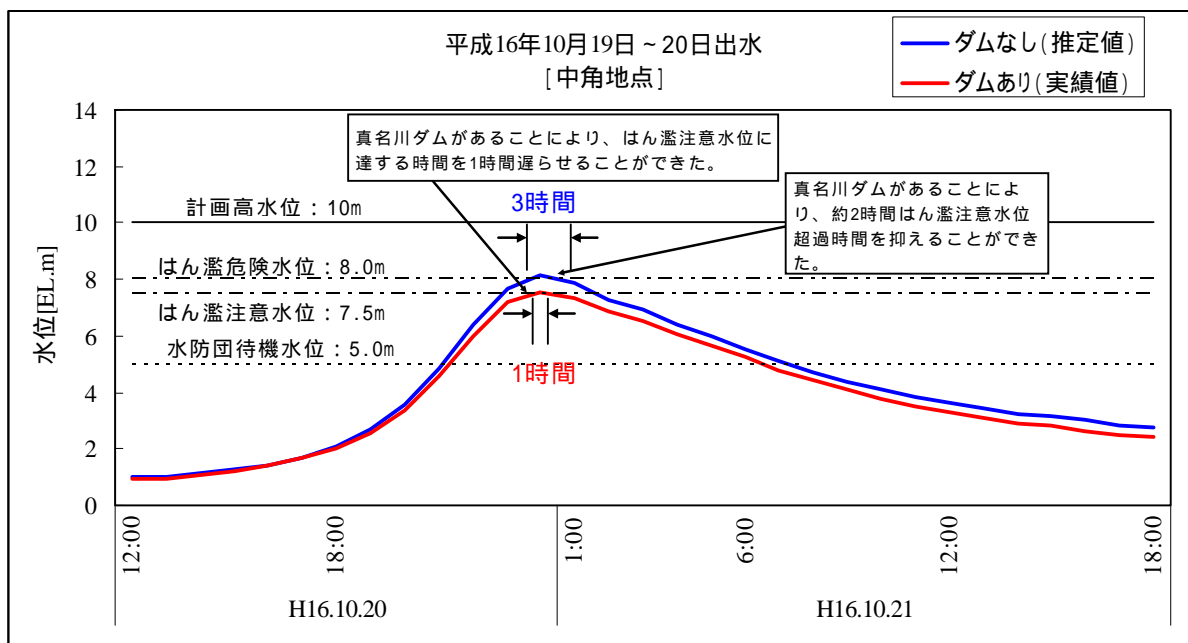


図 2.3 - 8 平成 16 年 10 月 20 日洪水の水防活動軽減効果

平成 16 年 7 月 18 日および平成 16 年 10 月 20 日の洪水の中角地点における「ダムあり」と「ダムなし」の両ケースのはん濫注意水位超過時間の比較を表 2.3 - 3 に示す。

平成 16 年 7 月 18 日の洪水では、ダムがない場合には 1 時間はん濫注意水位を超過していたが、ダムが洪水調節を行うことで、はん濫注意水位以下に抑えることができたと推定される。また、平成 16 年 10 月 20 日の洪水では、ダムが洪水調節を行うことで、はん濫注意水位の超過時間を 2 時間短縮することができたと推定される。

なお、はん濫注意水位等とは、表 2.3-4 に示すとおりである。

表 2.3 - 3 中角基準点におけるはん濫注意水位超過時間の比較

洪水日時	基準水位	はん濫注意水位の超過時間(hr)		
	はん濫注意水位 (m)	実測水位 (ダムあり)	推定水位 (ダムなし)	低減時間
平成 16 年 7 月 18 日	7.50	0	1	-1
平成 16 年 10 月 20 日		1	3	-2

表 2.3-4 はん濫危険水位・はん濫注意水位・水防団待機水位

水 位	内 容
はん濫危険水位	「洪水予報対象河川」の主要な水位観測所に設定される「氾濫の恐れが生じる水位」で、洪水予警報の発表において用いられる。
はん濫注意水位	水防法の「水防警報対象河川」の主要な水位観測所に定められている水位である。同法で定める各水防管理団体が、水害の発生に備えて出動し、又は出動の準備に入る水位である。
水防団待機水位	水防法の「水防警報対象河川」の主要な水位観測所に定められている水位である。同法で定める各水防管理団体が、水防活動に入る準備を行うための水位である。

### 2.3.5 副次効果（流木等流出抑制効果）

真名川ダムには、上流から樹木や枯葉などが洪水時に多く流れてくる。ダムに漂着した流木は、ダム管理上さまざまな障害を引き起こす原因となる。そこでダムにより流木を捕捉し処理することは、副次効果として下流の洪水被害軽減につながる。



真名川ダムの貯水池に溜まっている流木の状況（若生子橋下流付近）

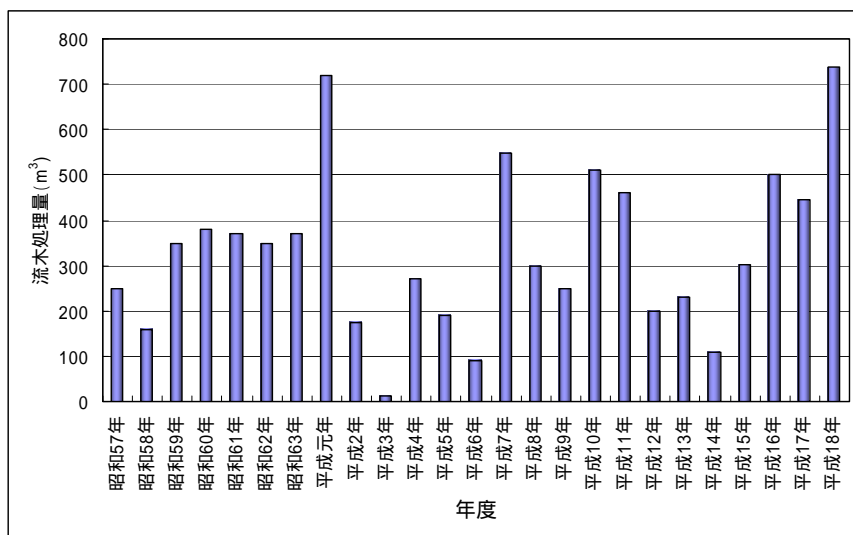


図 2.3 - 9 流木処理の実績

なお、回収した流木は、オガ粉、炭への再生や一般の方々への配布など有効活用している。



木紛（オガ粉）化処理



流木の無料一般配布



炭焼き処理

出典：資料 2 - 4

## 2.4 まとめ

真名川ダムは、昭和 54 年の管理開始から平成 18 年度まで 2 回の洪水調節を行い、下流の洪水被害軽減に貢献している。

平成 16 年 7 月および 10 月の洪水調節時には、中角地点において、それぞれ流量で  $1,019\text{m}^3/\text{s}$ 、 $508\text{m}^3/\text{s}$ 、水位で 1.32m、0.61m の低減効果があったと推定される。

また、平成 16 年 7 月の洪水では、九頭竜川の既設ダム（九頭竜ダム、真名川ダム、笹生川ダム）の洪水調節による中角地点の水位低減効果により、日野川 2.8k（深谷地点）で 0.54m、日野川 4.2k（足羽川合流点）で 0.43m の水位低減に貢献したと推定できる。

水防活動の低減効果については、平成 16 年 7 月 18 日の洪水では、はん濫注意水位以下に抑えることができたと推定され、また、平成 16 年 10 月 20 日の洪水では、はん濫注意水位の超過時間を 2 時間短縮することができたと推定される。ダムが洪水調節を行うことで水防活動の軽減につながったと評価できる。

### < 今後の方針 >

真名川ダムでは、計画規模の大洪水は到来していないが、中小洪水では十分に機能を発揮している。今後も引き続き洪水調節機能が十分に発揮できるよう、ダム管理者として適切に洪水調節を実施していく。

## 2.5 文献リスト

表 2.5 - 1 使用した文献・資料リスト

No.	報告書またはデータ名	発行者	発行年月日	箇所
2 - 1	真名川ダム妥当投資額計算書	建設省近畿地方建設局真名川ダム工事事務所	昭和 52 年 1 月	想定氾濫区域
2 - 2	九頭竜川水系浸水想定区域図（総括図）	国土交通省近畿地方整備局福井工事事務所	平成 14 年 3 月	浸水想定区域
2 - 3	九頭竜川の流水管理	国土交通省近畿地方整備局九頭竜ダム統合管理事務所	平成 16 年 9 月	流量配分
2 - 4	真名川ダム、九頭竜ダム二つの顔が私たちを守る	国土交通省近畿地方整備局九頭竜ダム統合管理事務所	平成 18 年 3 月	洪水調節副次効果
2 - 5	洪水調節報告	国土交通省近畿地方整備局九頭竜ダム統合管理事務所		洪水調節



### 3 . 利水補給

### 3. 利水補給

#### 3.1 利水補給計画

##### 3.1.1 貯水池運用計画

真名川ダムの貯水池運用は、洪水期において、洪水調節を行う場合を除き、水位を下図の標高以下に制限するものとしている。洪水調節は、第一期洪水期（7月1日から7月31日まで）が標高 348.0m から 385.0m までの洪水調節容量 76,400 千 m<sup>3</sup>、第二期洪水期（8月1日から9月30日まで）が標高 337.4m から 385.0m までの洪水調節容量 89,000 千 m<sup>3</sup> を利用して行う。

かんがい期（4月26日から8月25日までの期間）においては、不特定用水補給のために必要な水量（13.97m<sup>3</sup>/s 以内）を笹生川ダムからの補給と合わせて確保するものとする。

不特定用水補給のための貯水容量は、標高 331.0m から 346.0m までの貯水容量 15,900 千 m<sup>3</sup> とし、不特定用水補給、または洪水調節後において水位を低下させる場合を除き、水位を下記の基準日において、それぞれ当該基準日の水位以上に保つものとしている。

また、真名川発電所の取水量は最大 15.0m<sup>3</sup>/s とし、洪水調節および不特定用水の補給に支障を与えないように行うものとしている。

各基準日の水位

基準日	基準日の水位
4月26日	標高 331.0m
5月20日	標高 346.0m
7月15日	標高 346.0m
8月1日	標高 337.4m
8月10日	標高 337.4m
8月25日	標高 333.0m

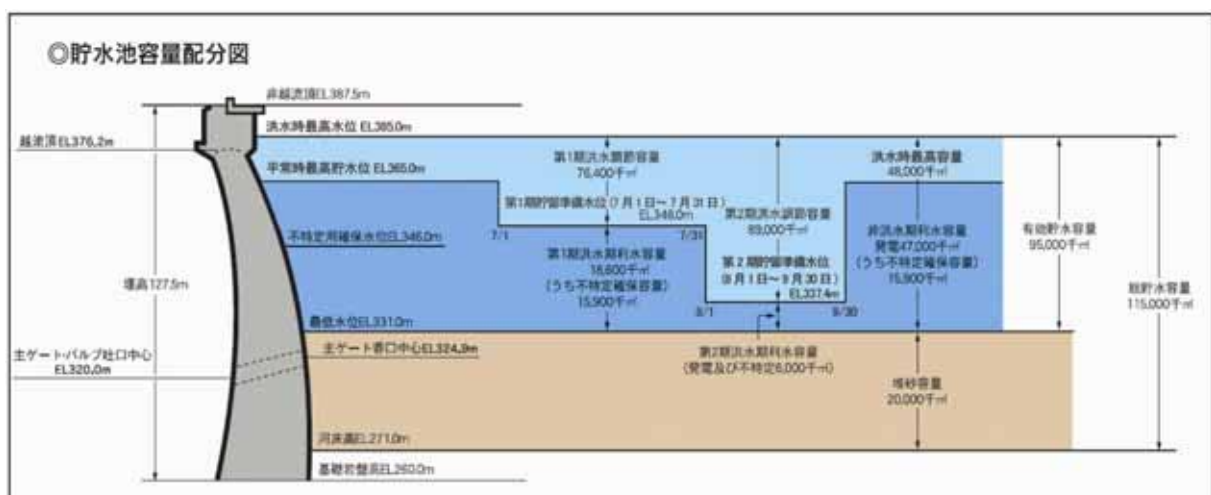


図 3.1 - 1 貯水池容量配分図

出典：資料 3 - 1

### 3.1.2 利水補給計画の概要

真名川ダムは、不特定用水の補給および発電用水の供給を行っている。

#### (1) 不特定用水

下流真名川土地改良区連合等に対してかんがい等不特定用水として  $13.97\text{m}^3/\text{s}$  以内を補給している。

#### (2) 水力発電

真名川発電所は、最大  $15.0\text{m}^3/\text{s}$  を取水し、最大出力  $14,000\text{kW}$  を発電している。

### 3.1.3 不特定用水

不特定用水補給のために必要な水量 ( $13.97\text{m}^3/\text{s}$  以内) を笹生川ダムの補給量と合わせて確保している。

なお、非かんがい期には流水の正常な機能の維持を確保するために最大で  $3.5\text{m}^3/\text{s}$  の補給を行っている。図 3.1-3 に通年の確保流量パターン図を示す。

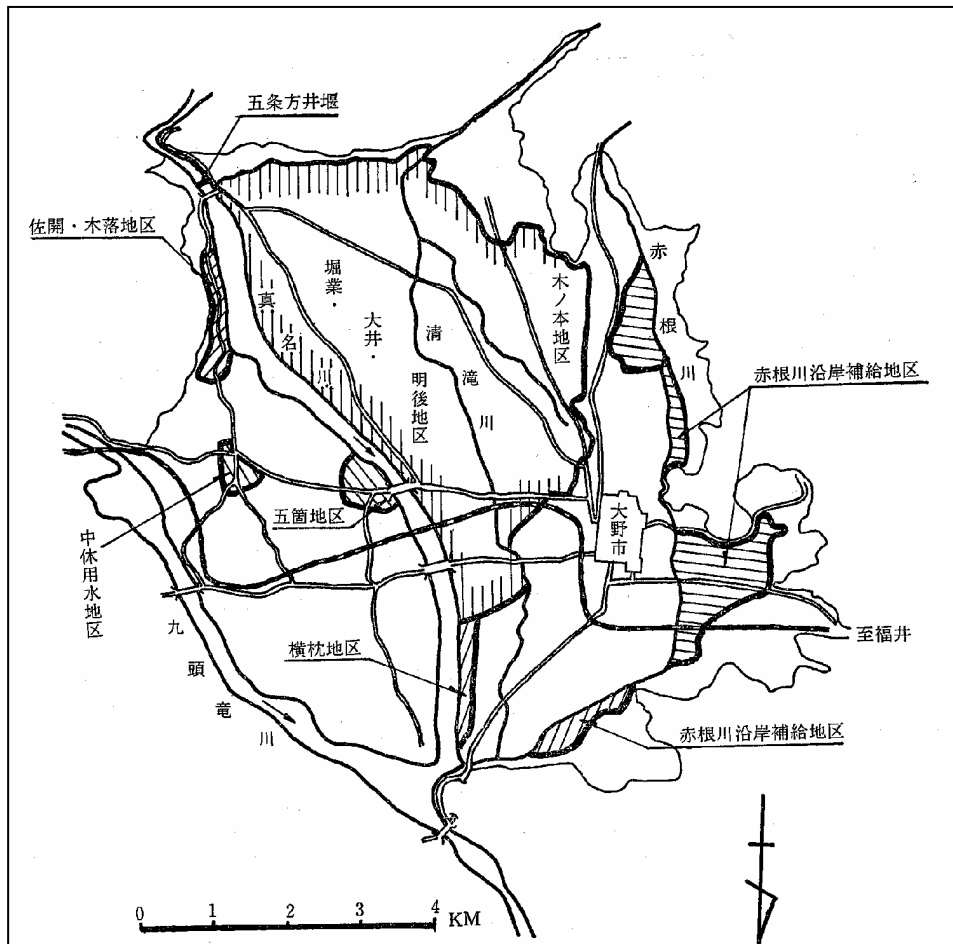


図 3.1 - 2 不特定用水補給区域

出典：資料 3 - 2

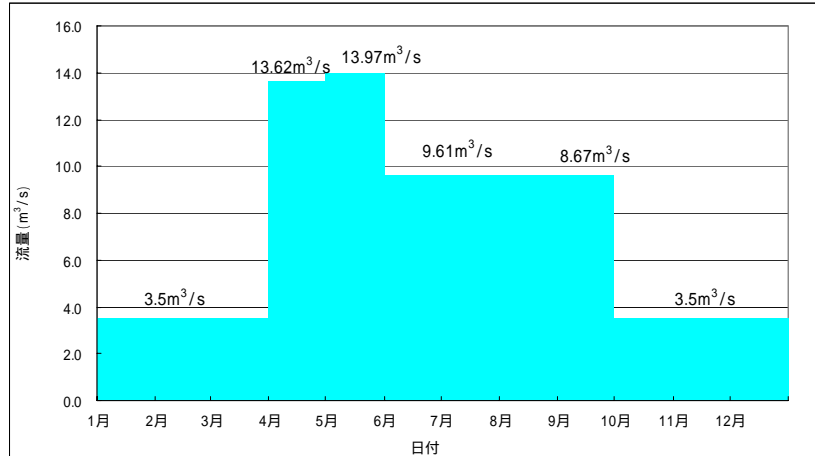


図 3.1 - 3 五条方基準点不特定用水確保流量パターン図

出典：資料 3 - 3

### 3.1.4 発電用水

真名川ダムでは、ダム左岸より取水し、約 2.2km の導水路で既設北陸電力（株）の五条方発電所に隣接して建設された真名川発電所で発電を行っている。発電所諸元等を表 3.1 - 1 に示す。

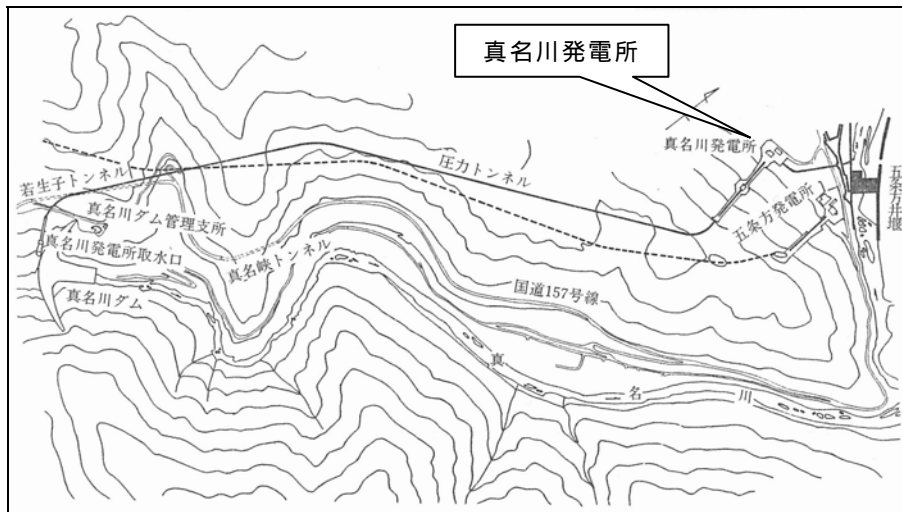


図 3.1 - 4 発電所位置図

出典：資料 3 - 4

表 3.1 - 1 真名川発電所諸元

発電所名	真名川発電所
型式	ダム水路式
最大使用水量	15.0m³/s
常時使用水量	3.37m³/s
最大出力	14,000kW
常時出力	680kW
有効落差（最大）	109.8m
事業者名	福井県企業局

### 3.2 利水補給実績

#### 3.2.1 利水補給実績概要

貯水池運用実績を図 3.2 - 1 に示す。真名川ダムの利水のための補給としては、五条方地点において、不特定かんがい用水等、河道用水および発電取水のための補給を行っている。なお、発電の取水量は、不特定かんがい用水等に従属している。

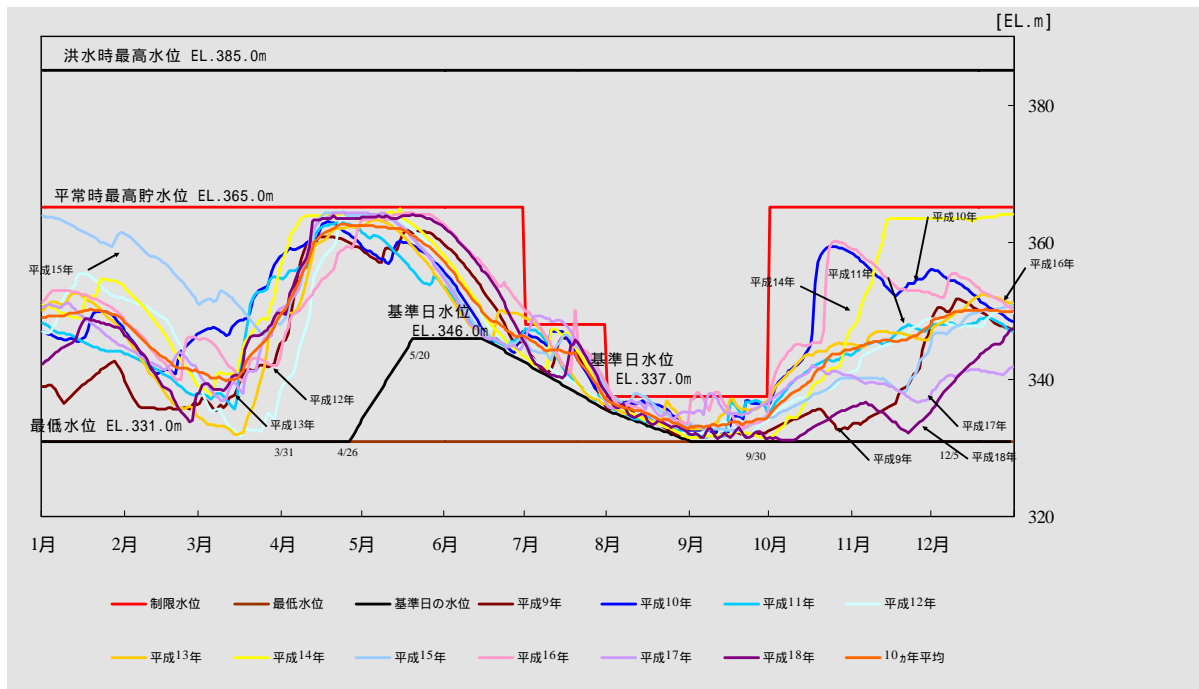


図 3.2 - 1 真名川ダム貯水池運用実績

利水補給実績を図 3.2 - 2 に示す。なお、不特定用水の補給は、主に発電用水を利用して行っている。

真名川ダム直下から約 3km 区間は、発電取水による無水区間が生じており、清流の回復が望まれていた。このため、平成 5 年度から平成 8 年度にかけて真名川ダム水環境改善事業で放流用施設の整備を行い、平成 9 年度から流水の正常な機能の維持のために  $0.284\text{m}^3/\text{s}$  (上流の中島発電所ガイドラインより) の放流を開始した。なお、平成 15 年度からは真名川発電所の運用変更により放流量を  $0.671\text{m}^3/\text{s}$  に増量した。

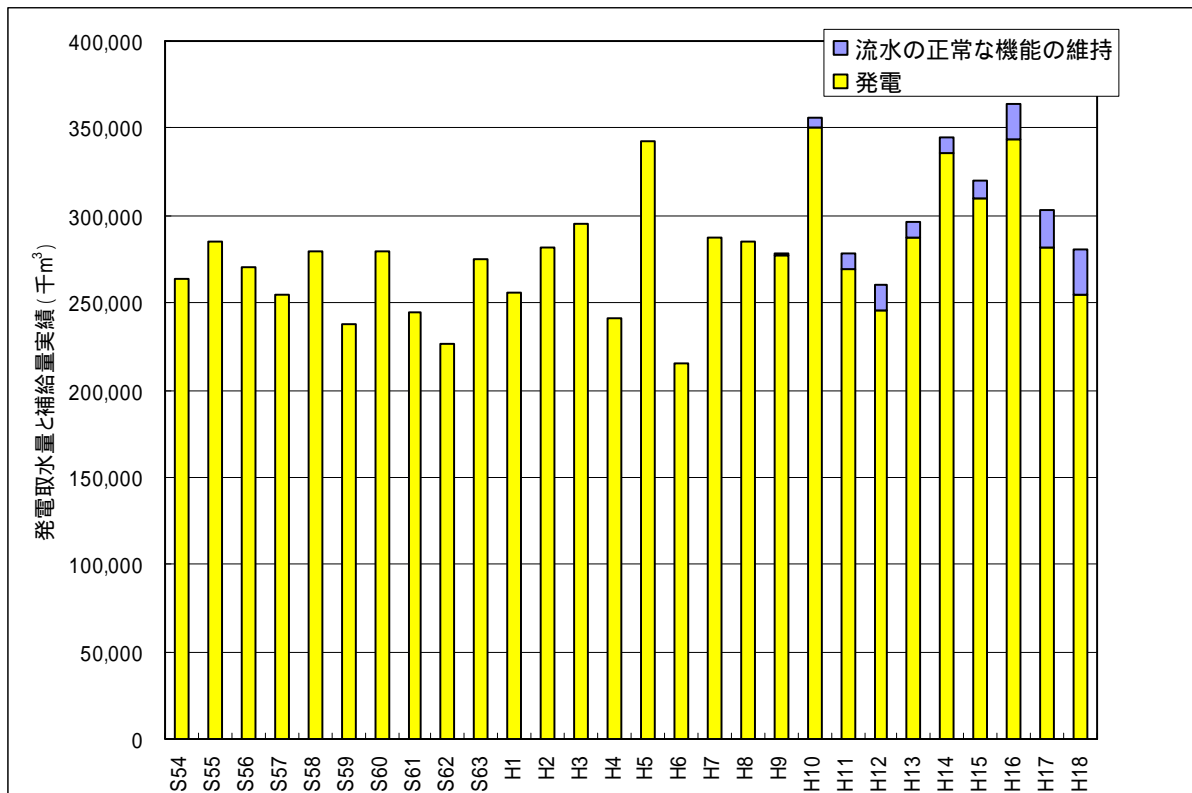


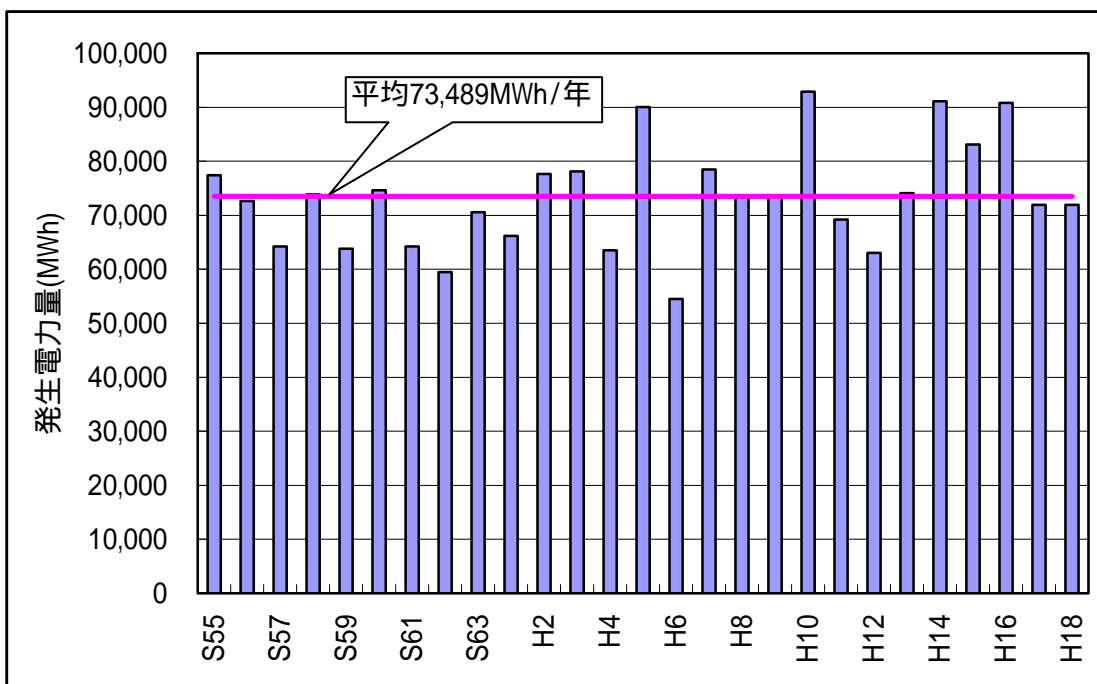
図 3.2 - 2 発電取水量と流水の正常な機能の維持のための補給量実績

### 3.2.2 発電実績

真名川ダムは、昭和55年から平成18年までに平均約73,500MWh/年の発電を行っている。  
これは、約17,500世帯の消費電力に相当する。

73,489MWh/年 ÷ 4,209kWh/年/世帯 17,500世帯

家庭の消費電力：平均約4,209kWh/年・世帯



出典：資料3-5

図 3.2 - 3 発生電力量実績

### 3.3 ダムの水環境改善事業

真名川ダムでは、下流維持流量未設定区間の流水の正常な機能の維持（ダム直下から真名川発電所までの約 3km 区間）のため、「ダム水環境改善事業（平成 5 年から平成 8 年）」を実施し、バイパス放流設備を設置した。平成 9 年から  $0.284\text{m}^3/\text{s}$  の放流を開始し、放流水の一部は、ダム湖水面との高低差を利用した噴水設備により放流を行い、下流河川の水環境改善とあわせて景観の向上も図っている。

また、平成 15 年からは河川維持用水を増量（ $0.284\text{m}^3/\text{s}$   $0.671\text{m}^3/\text{s}$ ）し、バイパス放流設備による放流時の有効落差を活用して「ダム管理用発電（最大出力 490kW）」を実施しており、真名川ダムの管理に使用する電力を賄うとともに、北陸電力㈱に売電を行っている。



図 3.3 - 1 真名川ダム発電計画図（無水区間）



写真 3.3 - 1 ダム管理用発電施設



写真 3.3 - 2 噴水によるダム直下放流の様子

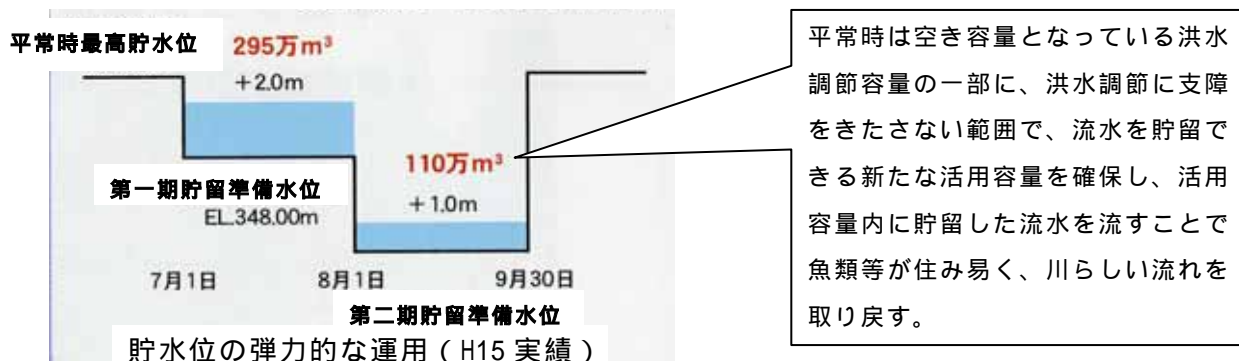
表 3.3-1 真名川ダム管理用発電発電量実績

区 分	単位	H 1 5	H 1 6	H 1 7	H 1 8	備考
発生電力量 ( A )	kWh	810,800	2,681,100	1,675,000	1,191,200	
ダム管理用消費電力量 ( B )	kWh	220,309	675,417	403,873	218,171	
売電電力量 ( C = A - B )	kWh	590,491	2,005,683	1,271,127	973,029	



### 3.4 ダムの弾力的管理運用

ダムによる流水の調節は、洪水調節、不特定かんがい用水補給および下流河川の流況の安定に対しては十分に効果を発揮している。一方、流況の安定は、下流河川における生態系、景観および土砂移動等河川環境に対して影響を与えている。そこで、下流河川における生態系保全、河川の景観保全、河川の土砂移動等の新たな水環境上のニーズに対応するため、平成12年から洪水調節容量の一部を有効活用することにより、ダム下流の河川環境保全等のためダムの弾力的管理試験として、平成13年度は維持流量の増量放流、平成16年度からフラッシュ放流を実施している。



放流後(H15.10.1)



放流前(H15.9.29)



撮影:ダム下流2km

### 真名川ダムの弾力的管理試験

#### 弾力的管理試験の運用実績

実施年	放流方法	ピーク流量 ( $m^3/s$ )	土砂還元
平成13年7月3日～18日	維持流量の増量放流	1.0	
平成15年9月30日	フラッシュ放流	30	
平成16年11月15日	フラッシュ放流	50	約220 $m^3$ (貯水池上流端より八千代橋上流に還元)
平成17年8月2日	フラッシュ放流	30	
平成17年12月8日	フラッシュ放流	45	約200 $m^3$ (君が代橋上流の河道陸地部の掘削・投入)
平成18年11月15日	フラッシュ放流	50	約200 $m^3$ (貯水池上流端より君が代橋上流に還元)

### 3.5 利水補給効果の評価

#### 3.5.1 不特定用水補給による評価

真名川ダムでは、不特定用水の補給を行っている。図 3.5 - 1 に五条方基準点の実績流況を示す。図より、至近 10 年の渇水流量の最も小さい年は平成 17 年である。そこで、平成 17 年のダムあり無しの場合の流況（日単位）は、図 3.5-2 に示すとおりであり、5 月から 6 月の期間に真名川ダムの補給効果が顕著に表れている。

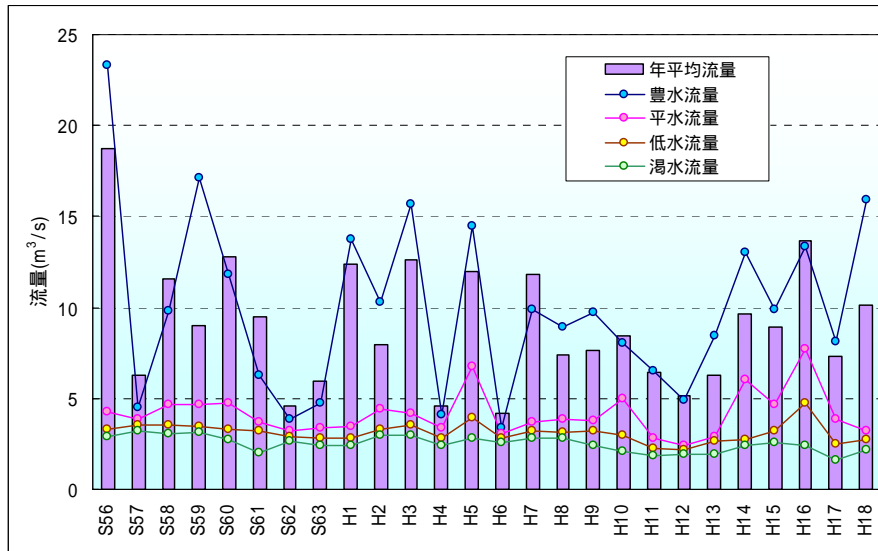


図 3.5 - 1 五条方基準地点の実績流況図

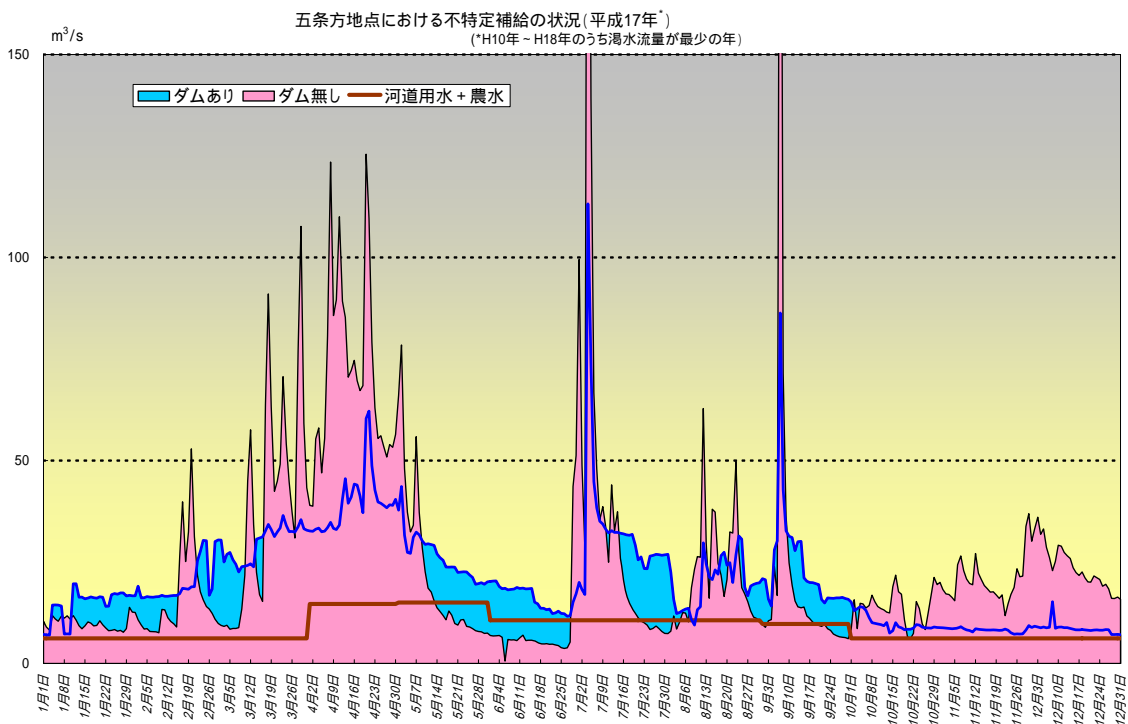


図 3.5 - 2 平成 17 年の五条方基準点の流況比較図（真名川ダムありなし）

### 3.5.2 副次効果（CO<sub>2</sub> 排出量削減効果）

真名川発電所は、豊かで再生可能な水資源を利用する純国産エネルギーで、石油などの化石燃料を使用する火力発電に比べて、CO<sub>2</sub> 排出量が非常に少なく、地球環境に優しくクリーンな発電を行っており、地球温暖化防止に貢献している。

1kW を 1 時間発電する時に発生する CO<sub>2</sub> の総排出量は、以下とされている。

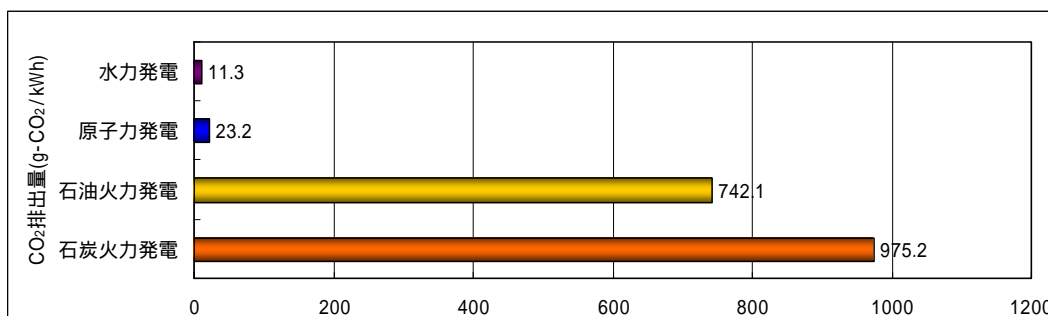


図 3.5 - 3 1kW を 1 時間発電する時の CO<sub>2</sub> 排出量の比較

出典：資料 3 - 6

よって、年間の発生電力量を、水力発電、原子力発電、石油火力発電、石炭火力発電のそれぞれによって発電した場合に排出される二酸化炭素は以下のとおりである。

水力発電による CO<sub>2</sub> 排出量は、  
原子力発電の 1/2  
石炭火力発電の 1/66  
石油火力発電の 1/87

- ・水力発電での CO<sub>2</sub> 排出量 = 73,489MWh/年 × 11.3g・CO<sub>2</sub>/kWh 830t・CO<sub>2</sub>/年
- ・原子力発電での CO<sub>2</sub> 排出量 = 73,489MWh/年 × 23.2 g・CO<sub>2</sub>/kWh 1,0704 t・CO<sub>2</sub>/年
- ・石油火力発電での CO<sub>2</sub> 排出量 = 73,489MWh/年 × 742.1g・CO<sub>2</sub>/kWh 54,536 t・CO<sub>2</sub>/年
- ・石炭火力発電での CO<sub>2</sub> 排出量 = 73,489MWh/年 × 975.2 g・CO<sub>2</sub>/kWh 71,666 t・CO<sub>2</sub>/年

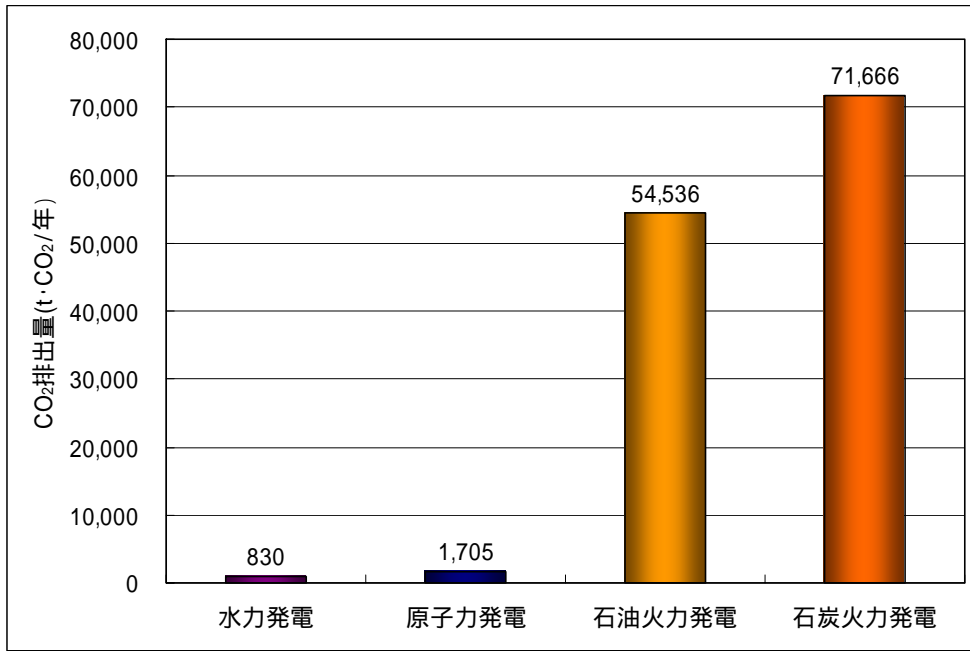


図 3.5 - 4 発電に伴う二酸化炭素排出量の比較

出典：資料 3 - 5

### 3.6 まとめ

真名川ダムは、下流農業地域に安定したかんがい用水等(13.97m<sup>3</sup>/s 以内)の不特定用水の補給を行っている。また、真名川発電所では最大 15.0m<sup>3</sup>/s を取水し、平均約 73,500MWh/年、約 17,500 世帯の消費電力に相当する電力の供給に貢献している。

平成 9 年からは、発電による無水区間を解消して清流の回復を図るため、「真名川ダム水環境改善事業」を実施し、下流河川の環境改善に努めている。また、平成 13 年度からは、ダム弾力的管理に取り組んでおり、下流河川における生態系保全、河川の景観保全、河川の土砂移動等の新たな水環境上のニーズに対応している。

#### < 今後の方針 >

今後も引き続き、安定した不特定用水の補給を行うとともに、地球環境に優しいクリーンな水力発電の実施に貢献していく。さらに弾力的管理の本格的な運用を目指し検討を進めていく。

### 3.7 文献リスト

表 3.7 - 1 使用した文献・資料リスト

No.	報告書またはデータ名	発行者	発行年月日	箇所
3 - 1	真名川ダム、九頭竜ダム二つの顔が私たちを守る	国土交通省近畿地方整備局 九頭竜川ダム統合管理事務所	平成 18 年 3 月	貯水池容量配分
3 - 2	県営かんがい排水事業真名川地区の概要	福井県		かんがい区域
3 - 3	真名川ダム工事誌	建設省近畿地方建設局 真名川ダム工事事務所	昭和 54 年 7 月	確保流量
3 - 4	真名川ダム管理所 提供資料	国土交通省近畿地方整備局 九頭竜川ダム統合管理所		発電所位置
3 - 5	平成 17 年度待機時消費電力調査報告書	(財)省エネルギーセンター	平成 17 年度	家庭における年間消費電力
3 - 6	電中研ニュース No.338	電力中央研究所	平成 13 年	発電効果

## 4 . 堆 砂

#### 4. 堆砂

##### 4.1 堆砂測量方法の整理

###### (1) 測量方法

真名川ダムの堆砂測量は、縦断方向 200m（ただしダム堤体付近は 50m）ピッチ、横断方向 5m ピッチで行っている。

堆砂測量の方法は、陸地部では直接測量を行い、水中部では深淺測量を行っている。なお、深淺測量では、音響測深機を使用し、先に設置した水際杭間にワイヤーロープを張り、測深間隔 5m で往復測量を行い、往のデータを複で確認し、較差が制限内である場合は平均値をもって決定値とする。

なお、堆砂測量の頻度については、平成 16 年度までは毎年行っていたが、平成 17 年度からは過去の測定結果に基づき、ダムの堆砂状況に大きな変化が認められないと判断し、2 年に 1 回の測定としている。

###### (2) 測線位置図

堆砂測量は、真名川ダムから縦断方向に 200m、横断方向に 5m 間隔で実施している。



図 4.1 - 1 測線位置図（その 1）



図 4.1 - 1 測線位置図 (その 2)

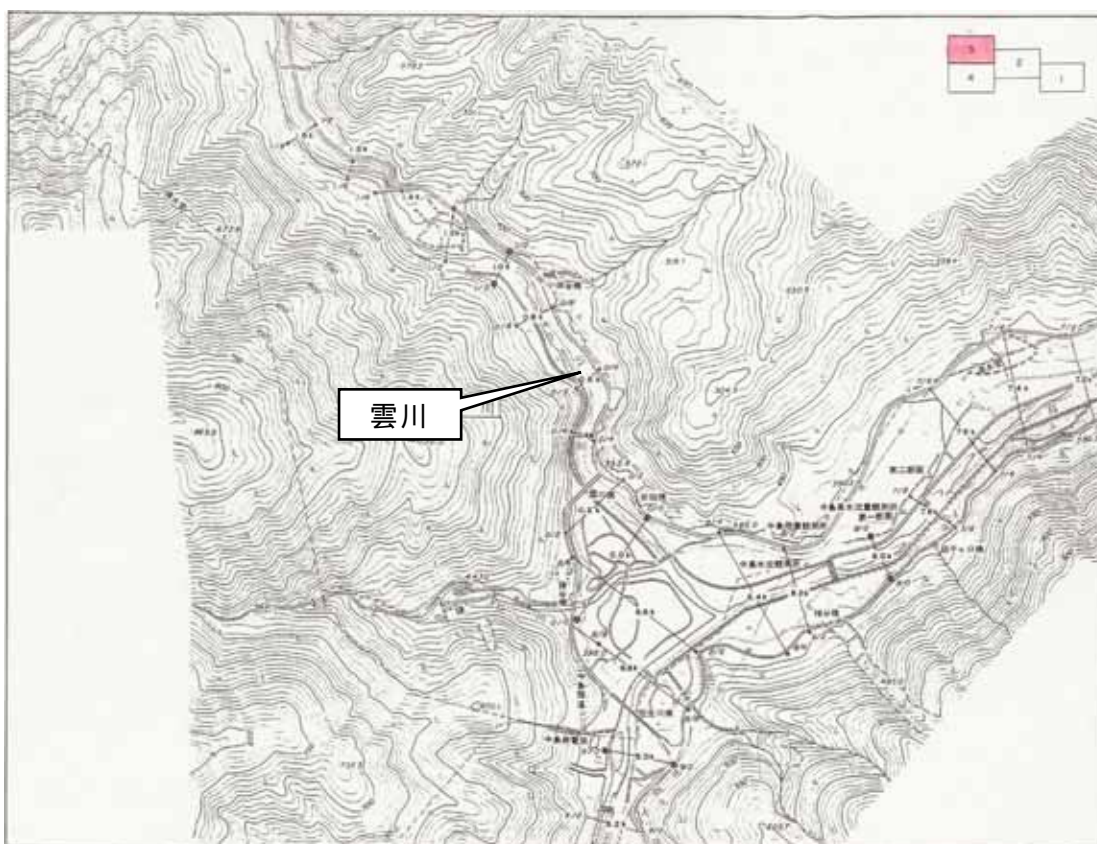


図 4.1 - 1 測線位置図 (その 3)



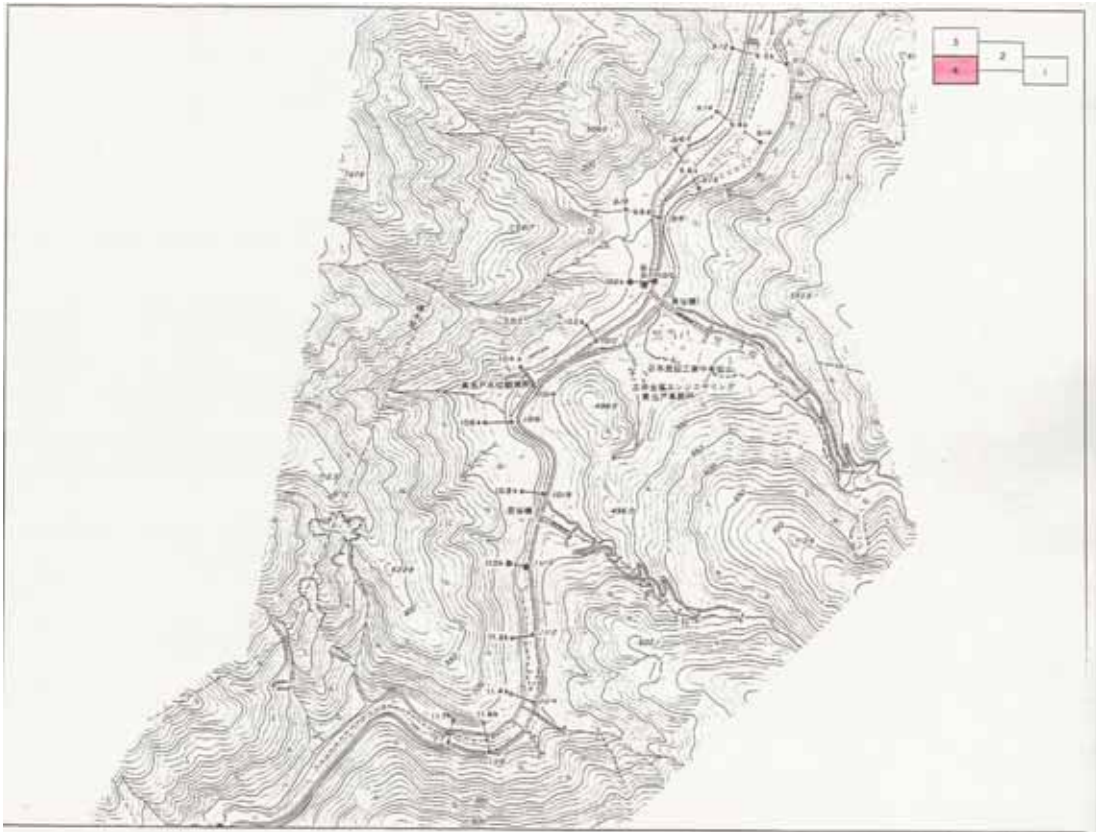


図 4.1 - 1 測線位置図 (その 4)

出典：資料 4 - 1

#### 4.2 堆砂実績の整理

真名川ダムの堆砂状況経年変化を図 4.2 - 1 に示す。現在、湛水から 30 年が経過し、総堆砂量 1,878 千 m<sup>3</sup>、堆砂率 9.4%となっている。

平成 16 年度には、ダム完成後最大規模の出水（福井豪雨）をはじめ出水が相次ぎ、年堆砂量が過去最大値（約 1,000 千 m<sup>3</sup>/年）となった。これは昭和 51 年度～平成 15 年度までの 27 年間の総堆砂量（約 1,110 千 m<sup>3</sup>/年）に相当する。

なお、各年堆砂量における減少理由は、堆砂測量の誤差によるものと考えられる。

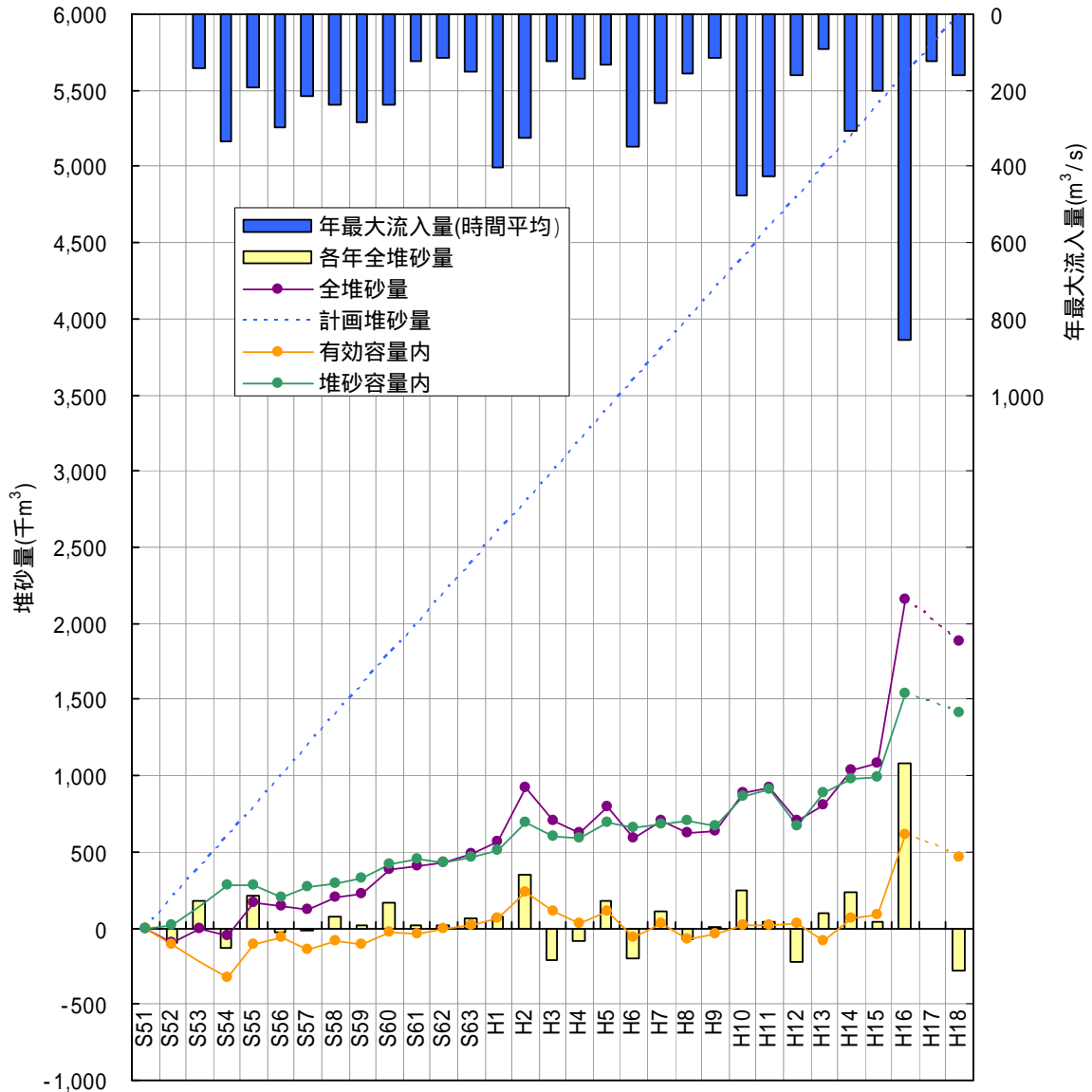


図 4.2 - 1 堆砂量の経年変化

出典：資料 4 - 2

表 4.2 - 1 真名川ダム堆砂状況経年変化

流域面積(km <sup>2</sup> )			223.7 (km <sup>2</sup> )		計画堆砂年(年)			100 (年)	
総貯水量当初(千m <sup>3</sup> )			119,165 (千m <sup>3</sup> )		計画堆砂量(千m <sup>3</sup> )			20,000 (千m <sup>3</sup> )	
有効貯水容量(千m <sup>3</sup> )			95,000 (千m <sup>3</sup> )		計画比堆砂量(m <sup>3</sup> /年km <sup>2</sup> )			1,307 (m <sup>3</sup> /年km <sup>2</sup> )	
年	調査年月	経過年数	現在総貯水量(千m <sup>3</sup> )	現在総堆砂量(千m <sup>3</sup> )	有効容量内堆砂量(千m <sup>3</sup> )	死水容量内堆砂量(千m <sup>3</sup> )	全堆砂率(%)	堆砂率(%)	掘削量(千m <sup>3</sup> )
昭和51年	11月	0	119,165	0	0	0	0.00%	0.00%	
昭和52年	11月	1	119,260	-95	-112	17	-0.08%	-0.48%	
昭和53年	11月	2	119,087	78			0.07%	0.39%	
昭和54年	11月	3	119,212	-47	-328	281	-0.04%	-0.24%	
昭和55年	11月	4	118,995	170	-112	282	0.14%	0.85%	
昭和56年	11月	5	119,020	145	-61	206	0.12%	0.73%	
昭和57年	11月	6	119,039	126	-143	269	0.11%	0.63%	
昭和58年	11月	7	118,960	205	-85	290	0.17%	1.03%	
昭和59年	11月	8	118,945	220	-106	326	0.18%	1.10%	
昭和60年	11月	9	118,778	387	-31	418	0.32%	1.94%	
昭和61年	11月	10	118,761	404	-43	447	0.34%	2.02%	
昭和62年	11月	11	118,738	427	-7	434	0.36%	2.14%	
昭和63年	11月	12	118,678	487	20	467	0.41%	2.44%	
平成1年	11月	13	118,599	566	59	507	0.47%	2.83%	
平成2年	11月	14	118,245	920	232	688	0.77%	4.60%	
平成3年	11月	15	118,461	704	107	597	0.59%	3.52%	
平成4年	11月	16	118,543	622	35	587	0.52%	3.11%	
平成5年	11月	17	118,367	798	106	692	0.67%	3.99%	
平成6年	11月	18	118,570	595	-60	655	0.50%	2.98%	
平成7年	11月	19	118,464	701	24	677	0.59%	3.51%	
平成8年	11月	20	118,537	628	-72	700	0.53%	3.14%	
平成9年	11月	21	118,532	633	-36	669	0.53%	3.17%	
平成10年	11月	22	118,283	882	19	863	0.74%	4.41%	
平成11年	11月	23	118,241	924	19	905	0.78%	4.62%	
平成12年	11月	24	118,463	702	30	672	0.59%	3.51%	
平成13年	11月	25	118,362	803	-84	887	0.67%	4.02%	
平成14年	11月	26	118,125	1,040	62	978	0.87%	5.20%	
平成15年	11月	27	118,088	1,077	91	986	0.90%	5.39%	
平成16年	11月	28	117,010	2,155	614	1541	1.81%	10.78%	
平成17年		29							
平成18年	11月	30	117,287	1,878	463	1415	1.58%	9.39%	

1. 堆砂量 = (当初総貯水容量) - (現在総貯水量)
2. 全堆砂率 = (堆砂量) / (当初総貯水容量) × 100%
3. 堆砂率 = (堆砂量) / (計画堆砂量) × 100%

出典：資料 4 - 2

### 4.3 堆砂傾向の評価

真名川ダムにおける堆砂状況を把握するため、真名川ダムの堆砂形状縦断面図を5年ごとに図4.3-1に示すとおり整理した。

堆砂容量内20,000千 $m^3$ の堆砂量は、1,415千 $m^3$ であり、堆砂率が約7%である。また、有効貯水容量内95,000千 $m^3$ の堆砂量は、463千 $m^3$ であり、堆砂率が約0.5%にとどまっている。

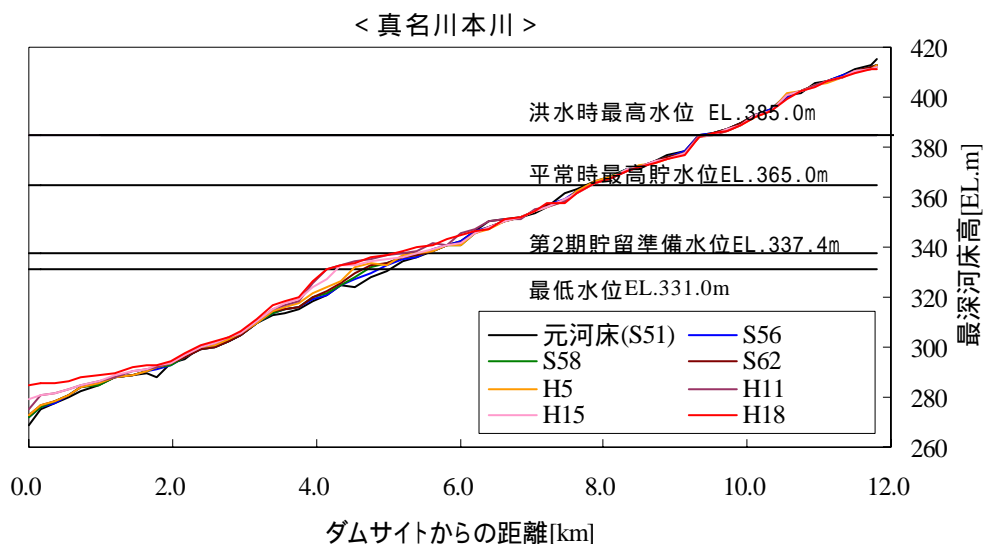


図 4.3 - 1 堆砂形状縦断面図

図4.3-2に雲川の堆砂形状縦断面図を示す。図より、雲川では堆砂が進行していないことがわかる。

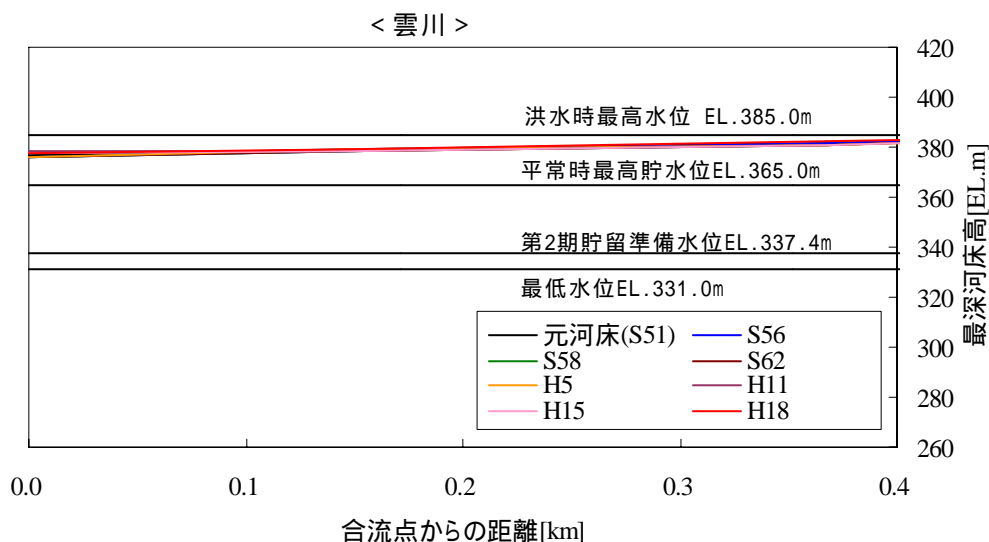


図 4.3 - 2 堆砂形状縦断面図

また、図 4.3 - 3～4.3 - 4 に支川持籠谷川、支川仙扇谷川の堆砂縦断図を示す。図よりダム直上流で合流する支川持籠谷川では堆砂に進行が見られるが、支川仙扇谷川では堆砂が進行していない。

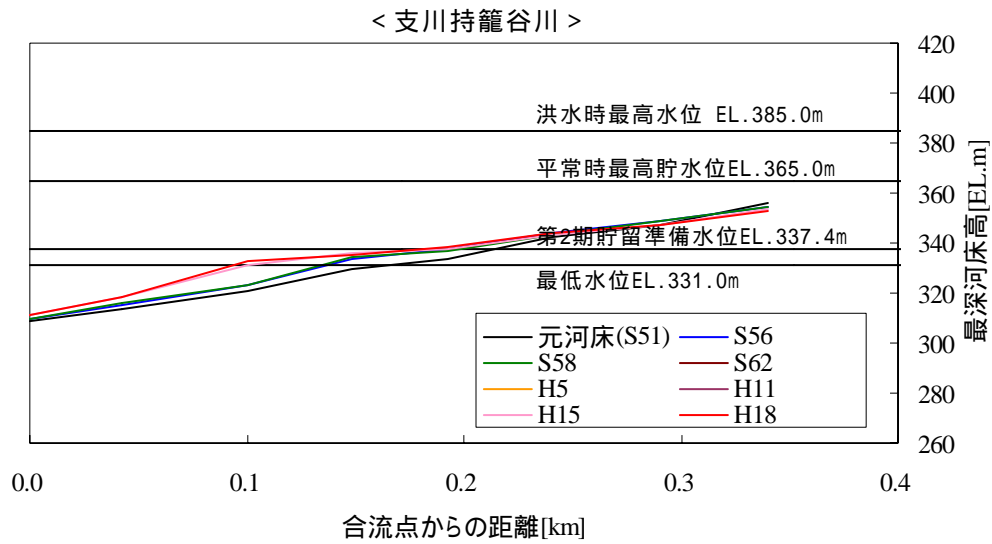


図 4.3 - 3 支川持籠谷川

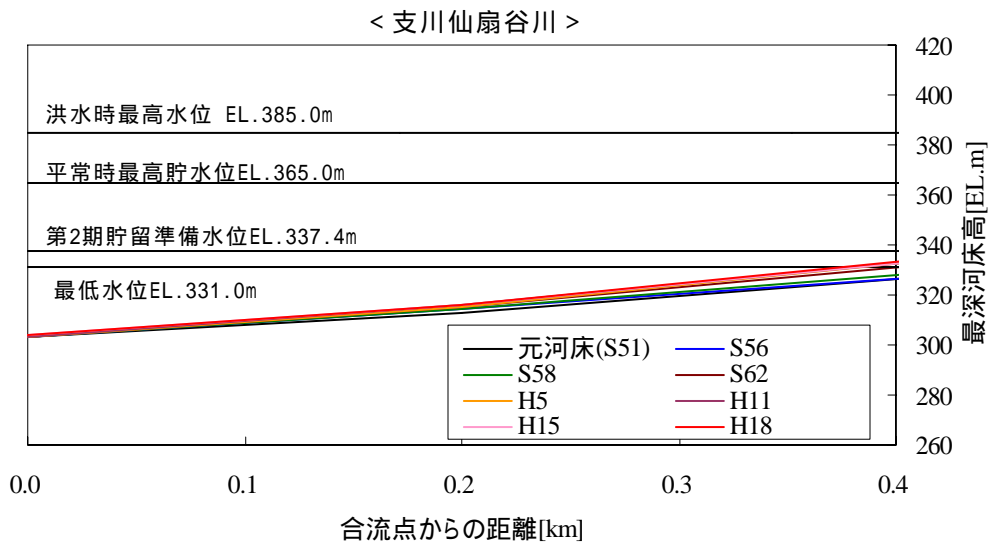


図 4.3 - 4 支川仙扇谷川

出典：資料 4 - 2

#### 4.4 まとめ

真名川ダムの平成 18 年度(管理開始 30 年経過)までの全堆砂量は、1,878 千 m<sup>3</sup>であり、堆砂容量 20,000 千 m<sup>3</sup>の約 9%である。

有効貯水容量内には 463 千 m<sup>3</sup>堆積しているが、有効貯水容量 95,000 千 m<sup>3</sup>の約 0.5%にとどまっている。

#### < 今後の方針 >

現在の堆砂量は、堆砂率が約 9.4%と計画範囲内であるが、流入量が多い年には堆砂量も多くなっているため、今後気候変動に伴い降雨強度の強い雨が増加した場合、堆砂量も多くなることが予想される。今後も継続的に堆砂測量を実施し、堆砂量の監視を行っていく。

また、経年的な堆砂傾向に変化が確認された場合は、ダム上流域の土砂流出状況を確認する調査、検討を行って、原因の把握に努める。

#### 4.5 文献リスト

表 4.5 - 1 使用した文献・資料リスト

No.	報告書またはデータ名	発行者	発行年月日	箇所
4 - 1	真名川ダム堆砂測量作業 堆砂量報告書	九頭竜川ダム統合管理事 務所	平成 16 年	測線図
4 - 2	真名川ダム堆砂測量作業 堆砂量報告書	九頭竜川ダム統合管理事 務所	昭和 51 年 ~ 平成 18 年	堆砂量

## 5 . 水 質

## 5. 水 質

### 5.1. 評価の進め方

#### 5.1.1. 評価方針

当該施設における水質に関する評価を以下の方針に従って行うこととする。

- (1) 評価の方針
- (2) 評価期間
- (3) 評価範囲

##### (1) 評価の方針

「5.水質」では評価として「水質の評価」、「水質保全施設の評価」を行う。

「水質の評価」では、貯水池、流入・放流地点及び下流河川における水質調査結果をもとに、真名川ダム流入・放流水質の関係から見た真名川ダム貯水池の影響、経年的水質変化から見た真名川ダム流域及び真名川ダム貯水池の影響、水質障害の発生状況とその要因について評価するとともに、水質改善の必要性を示す。

「水質保全施設の評価」では、真名川ダムに導入した既存の水質保全施設の導入背景、施設計画、設置状況、施設運用状況を整理するとともに、改善目標とした水質、期待した効果を満足しているかを評価する。

##### (2) 評価期間

真名川の水質データは、昭和48年6月(1973年6月)から下流河川的环境基準点(土布子橋)で観測が開始されており、その他の地点は、ダム竣工の昭和52年5月(1977年5月)から観測されている。

このうち、ダム竣工の昭和52年5月(1977年5月)から、ダム管理開始の昭和54年4月(1979年4月)までの期間のデータについては、ダム工事の影響が含まれるが、水質における評価期間は、ダム建設前の昭和48年6月(1973年6月)から平成18年12月(2006年12月)を対象とする。

##### (3) 評価範囲

水質の評価範囲は、貯水池流入地点(本川:笹生川、及び、支川:雲川)から、九頭竜川合流後の下流河川的环境基準点(荒鹿橋)までとする。



### 5.1.2. 評価手順

当該施設における水質に関する評価を以下の手順で検討するものとする。

- (1)必要資料の収集・整理
- (2)基本事項の整理
- (3)水質状況の整理
- (4)社会環境からみた汚濁源の整理
- (5)水質の評価
- (6)水質保全施設の評価
- (7)まとめ

#### (1)必要資料の収集・整理

評価に必要となる基礎資料として、自然・社会環境に関する資料、真名川ダムの水質調査状況、水質調査結果、真名川ダムの諸元、水質保全対策の諸元を収集整理する。

#### (2)基本事項の整理

水質に関わる評価を行うにあたり基本的な事項となる、環境基準の類型指定、水質調査地点及び対象とする水質項目、水質調査状況を整理する。

#### (3)水質状況の整理

定期水質調査を基本として、流入・下流河川及び貯水池内の水質状況を整理するとともに、水質障害の発生状況についても整理する。

#### (4)社会環境からみた汚濁源の整理

真名川ダム貯水池や下流河川の水質は、貯水池の存在による影響だけでなく、流域の土地利用の変化や生活排水対策状況の変化の影響も受ける。特に水質状況が経年的に変化している場合には流域社会環境の変遷について整理する。

#### (5)水質の評価

水質の評価項目の選定内容を図 5.1-1 に示す。考え方としては、対象水系にあって、ダムが存在することによって水質に及ぶ影響項目を選定する。

まず、ダムの存在によって変化する事象としては、止水環境の形成、洪水の一時貯留、流況の平滑化、ダム湖出現による利活用が挙げられる。これに伴い、水質に及ぶ影響項目としては、水温躍層の形成、洪水後の微細土砂の浮遊、基礎生産者の変遷、流域負荷のため込み、ダム操作が挙げられる。

これら水質に及ぶ影響項目から、ダム貯水池で評価すべき事項として、環境基準項目、水温の変化、土砂による水の濁り、富栄養化、底質、下流河川への影響を取り上げることにする。

### 1) 流入・放流水質の比較による評価

貯水池流入水質と放流水質を比較することにより、貯水池出現による水質変化の状況を把握する。

### 2) 経年的水質変化の評価

流入水質と放流水質の経年変化から貯水池の存在による影響を評価する。

### 3) 冷水・濁水長期化・富栄養化現象に関する評価

真名川ダム建設に伴い、水質障害である冷水現象、濁水長期化現象、富栄養化現象が頻繁に発生している場合、流入・放流量、流入・放流水温、流入・放流SS、管理運用情報等を整理し、発生原因の分析を行い、改善の必要性を検討する。

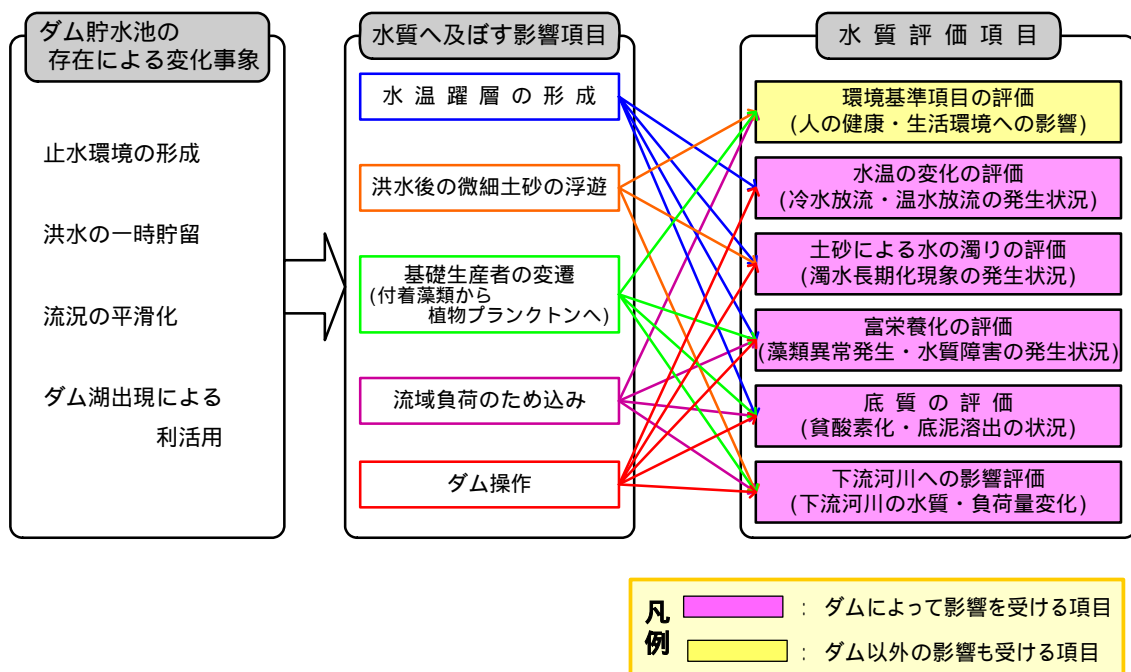


図 5.1-1 ダムの存在によるインパクト - レスポンスを踏まえた水質評価項目の選定

### (6) 水質保全施設の評価

冷水現象、濁水長期化現象、富栄養化現象といった真名川ダム貯水池の出現により生じた、もしくは生じることが予測された問題に関して、各種水質保全対策を設置することにより対策を講じている場合がある。ここでは、これら水質保全対策の設置状況を整理するとともに、これらの効果について評価を行う。

### (7) まとめ

水質の評価、水質保全施設の評価を整理し、改善の必要性等を整理する。

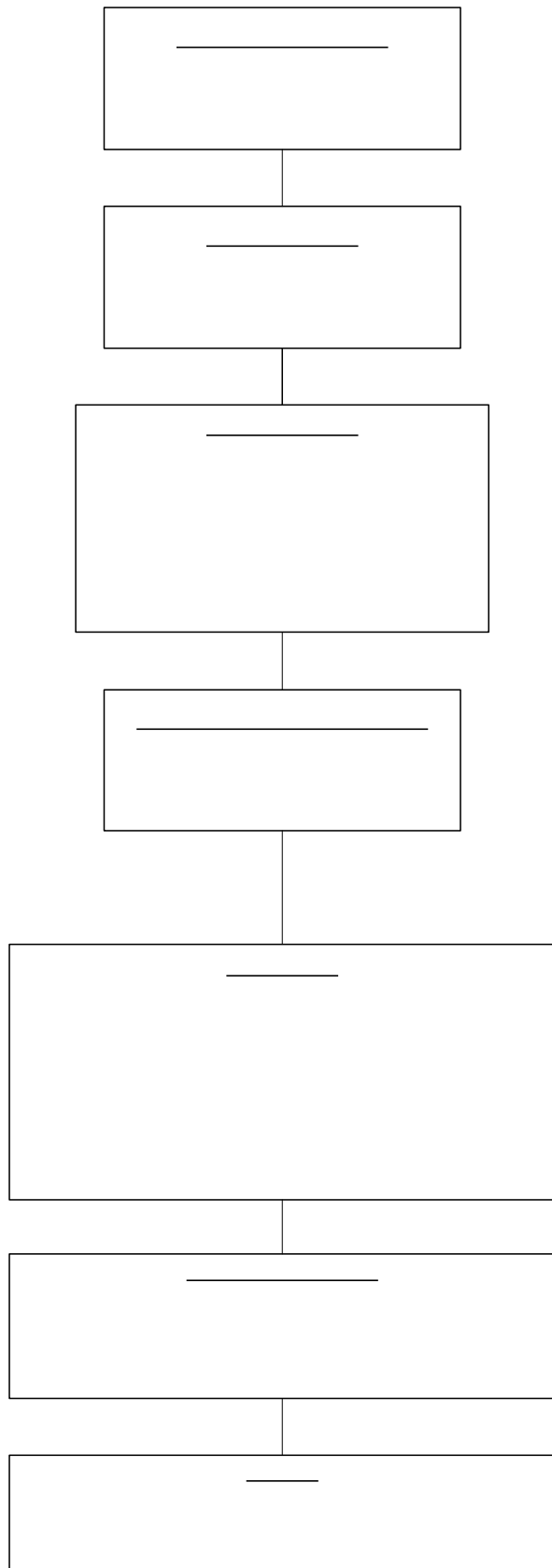


図 5.1-2 水質に関する評価の検討手順

### 5.1.3. 真名川ダム貯水池の水質に係わる外的要因

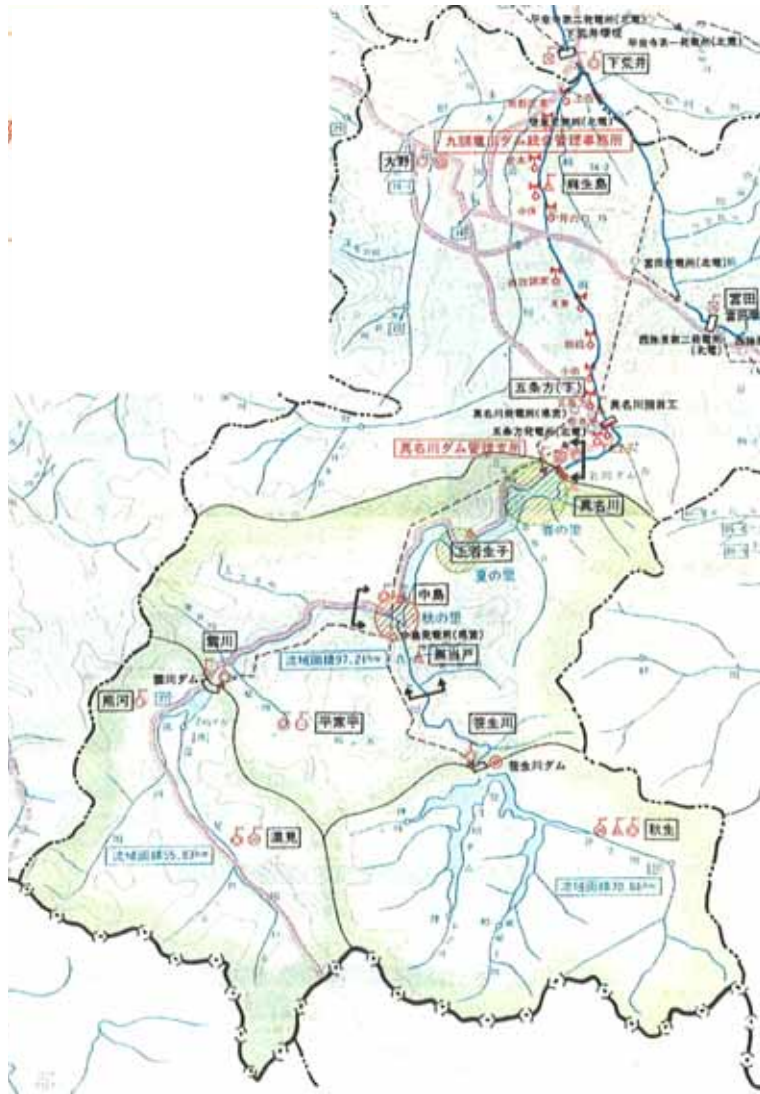
以下に示す真名川ダム貯水池の水質に関する特性・条件を念頭におき、真名川ダム貯水池の水質に関する整理・評価を行っていくものとする。

#### (1) 真名川ダムの流域概要

真名川ダムは九頭竜川水系真名川の上流部に位置し、集水面積 223.7km<sup>2</sup>を有している。

主な流入河川は雲川、笹生川であり、両流入河川の上流には、砂防ダムの雲川ダム、多目的ダムの笹生川ダムが存在し、雲川ダム、笹生川ダムの発電による放流水は、中島発電所を經由し五条方発電所から真名川ダム下流に放流される。

また、真名川ダムの上流域は、冬期を除いて若干の住家が存在するが、森林に覆われた人為汚濁の少ない流域である。



(出典：資料 5-18)

図 5.1-3 真名川ダム上流域の状況

## (2) 回転率が小さいダム

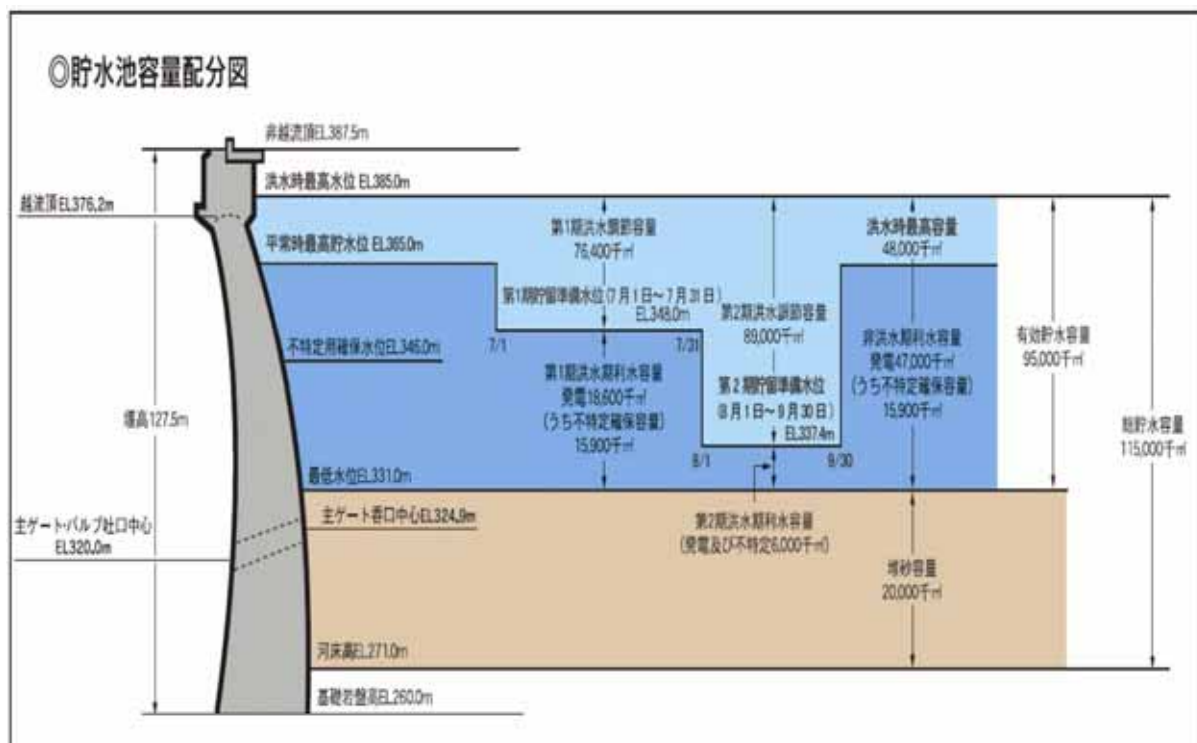
真名川ダムでは、昭和 54 年(1979 年)から平成 18 年(2006 年)の平均年回転率が 9.3 回/年、7 月の回転率が 0.97 回/月であり、回転率と成層の関係から、「成層が形成される可能性が十分ある」に分類される。

一般的に、成層が形成され貯水池表層部の水温が上昇すると、水温躍層上層部に植物プランクトンが増殖しやすい条件(光条件、栄養塩条件、滞留条件など)が形成され、富栄養化現象を生じることがある。また、成層の形成により底層部の流動が小さくなり嫌気化に伴う溶出現象や、ダム運用に伴う下流河川の冷水・温水現象などの影響が生じることがある。

## (3) 貯水位の変動が大きいダム

図 5.1-4 に真名川ダムの貯水池容量配分図を示す。真名川ダムの貯水位管理は、非洪水期、第 1 期貯留制限水位期(旧；第 1 期制限水位、6/16～7/31、EL348.0m)、第 2 期貯留制限水位期(旧；第 2 期制限水位、8/1～9/30、EL337.4m)の 3 段階で行われており、貯水位は毎年約 30m 程度の変動幅で上・下降している。

このような運用を行うダム貯水池では、一般的に水位変動時期において水位低下による冷水放流、水位上昇時期のため込みによる濁水長期化などの現象が生じることがある。

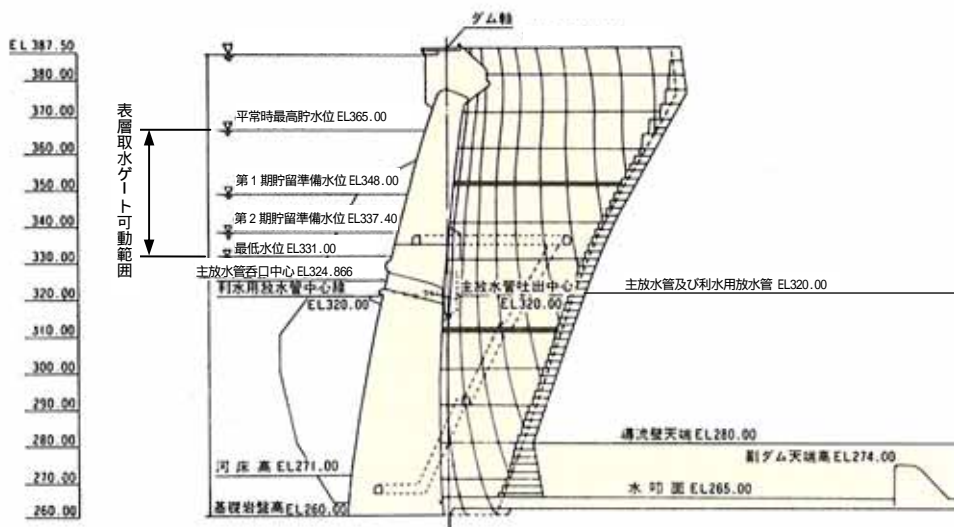


(備考) 各水位の名称について、旧名称との対応は次の通り。  
 洪水時最高水位(旧；サーチャージ水位)、平常時最高貯水位(旧；常時満水位)  
 貯留準備水位(旧；制限水位)

図 5.1-4 真名川ダム貯水池容量配分図

(4) 真名川ダム放流設備の目的

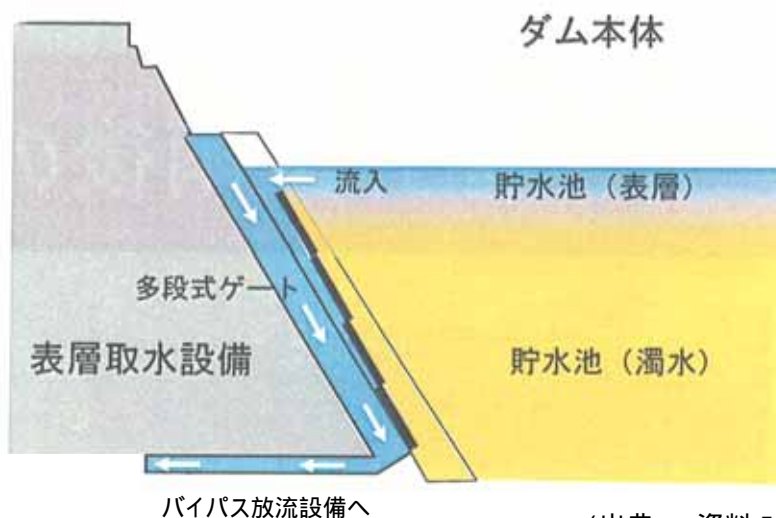
真名川ダムの目的は洪水調節、発電、不特定用水の補給がある。主な放流施設としては、図 5.1-5 に示した、主放水管、利水用放水管がある。また、発電、及び下流の維持用水補給のためのバイパス放流設備がある。なお、本放流設備には表層取水設備があり、平常時は水面下 3m までを取水し、下流域の不特定用水利用等に配慮し、比較的暖かい水を放流している。



(備考) 各水位の名称について、旧名称との対応は次の通り。  
 洪水時最高水位(旧 サーチャージ水位)、平常時最高貯水位(旧 常時満水位)  
 貯留準備水位(旧 制限水位)

(出典：資料 5-18)

図 5.1-5 真名川ダム断面図



(出典：資料 5-18)

図 5.1-6 表層取水設備

## 5.2. 基本事項の整理

### 5.2.1. 環境基準類型指定状況の整理

環境基準とは、人の健康の保護および生活環境の保全のための目標であり、環境基本法第 16 条に基づいて設定されるものである。環境基準は「維持されることが望ましい基準」であり、水質汚濁についても対象となっている。

真名川の類型指定状況は表 5.2-1 及び図 5.2-1 に示すとおりである。

真名川ダム堰堤の上流は貯水池を含め類型指定されておらず、真名川ダム堰堤の下流は昭和 53 年 3 月 31 日に B 類型に指定され、平成 14 年 3 月 29 日には A 類型に改定されている。また、九頭竜川合流後については、石徹白川から日野川合流点までの水域が昭和 47 年 3 月 31 日に A 類型に指定されている。

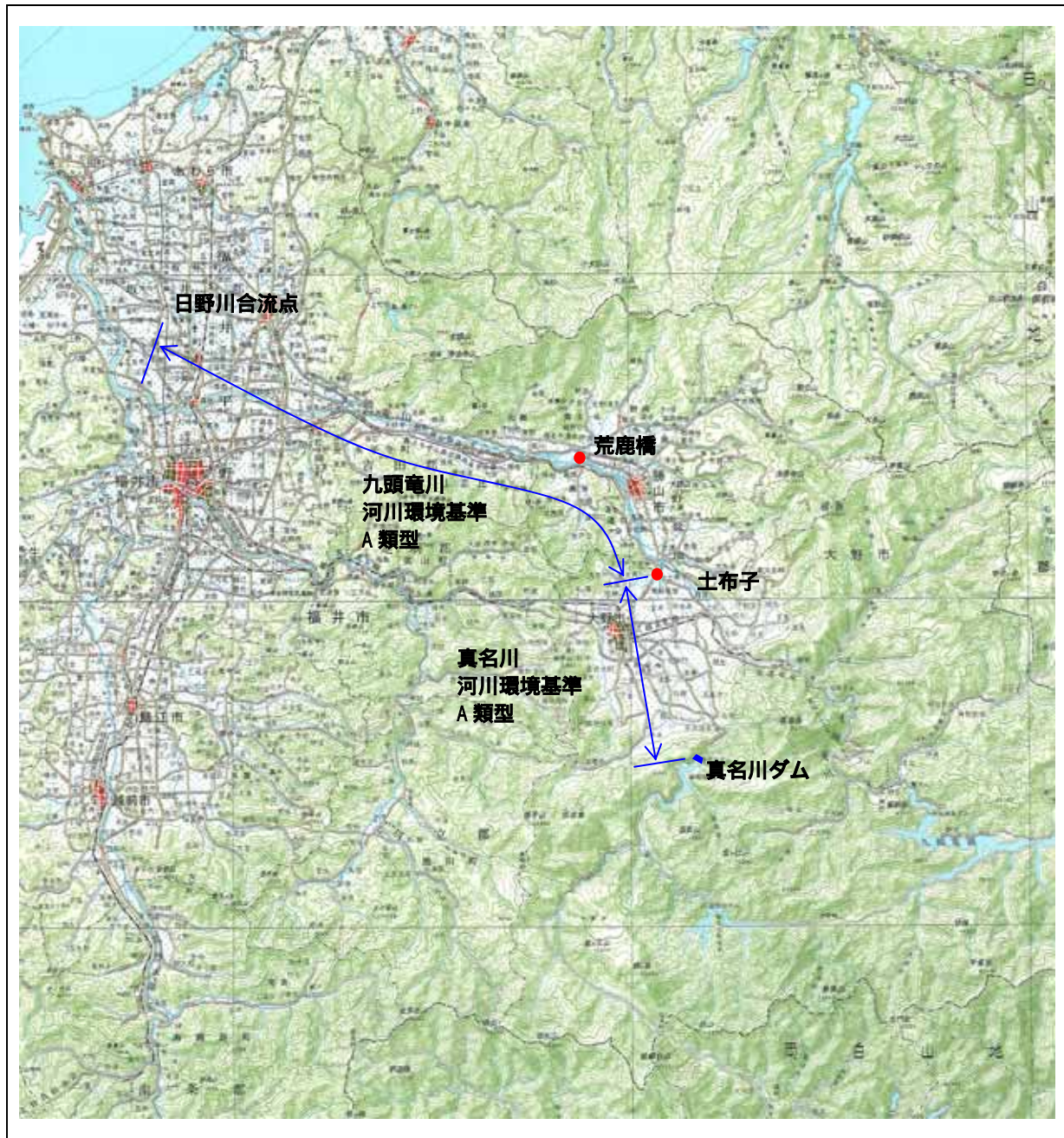
なお、平成 15 年 11 月(2003 年 11 月)には水生生物保全の観点から全垂鉛が生活環境項目に追加され、国において類型当てはめ方法等が検討されているところである。今現在のところ、真名川ダム貯水池では指定されていない。

表 5.2-1 類型指定状況

水域名	水域の範囲	該当類型	達成期間	告示年月日	備考
真名川	真名川ダム堰堤から下流の水域	河川 B	イ (直ちに達成)	昭和 53 年 3 月 31 日	福井県告示第 316 号
		河川 A	イ (直ちに達成)	平成 14 年 3 月 29 日	福井県告示第 311 号
九頭竜川	石徹白川から日野川合流点までの水域	河川 A	ロ (5年以内で可及的速やかに達成)	昭和 47 年 3 月 31 日	福井県告示第 209 号

九頭竜川の類型指定に関しては、真名川が合流する水域のみを表記している。

(出典：資料 5-1)



(出典：資料 5-5)

図 5.2-1 環境基準類型指定状況



表 5.2-2 水質環境基準(河川)

項目 類型	利用目的の 対応性	基準値					該当水域
		水素イオン 濃 度 (pH)	生物化学的 酸素要求量 (BOD)	浮遊物質 量 (SS)	溶存酸素量 (DO)	大腸菌群数	
AA	水道 1 級 自然環境保全 及び A 以下の 欄に掲げるも の	6.5 以上 8.5 以下	1mg/L 以下	25mg/L 以下	7.5mg/L 以上	50MPN /100mL 以下	
A	水道 1 級・水産 1 級 水浴及び B 以 下の欄に掲げ るもの	6.5 以上 8.5 以下	2mg/L 以下	25mg/L 以下	7.5mg/L 以上	1,000MPN /100mL 以下	<真名川> <u>改定後</u> 真名川ダム 堰堤から下 流  <九頭竜川> 石徹白川か ら日野川合 流点まで
B	水道 3 級・水産 2 級 及び C 以下の 欄に掲げるも の	6.5 以上 8.5 以下	3mg/L 以下	25mg/L 以下	5mg/L 以上	5,000MPN /100mL 以下	<真名川> <u>改定前</u> 真名川ダム 堰堤から下 流
C	水産 3 級・工業 用水 1 級及び D 以下の欄に掲 げるもの	6.5 以上 8.5 以下	5mg/L 以下	50mg/L 以下	5mg/L 以上	-	
D	工業用水 2 級・ 農業用水及び E の欄に掲げ るもの	6.0 以上 8.5 以下	8mg/L 以下	100mg/L 以下	2mg/L 以上	-	
E	工業用水 3 級 環境保全	6.0 以上 8.5 以下	10mg/L 以下	ごみ等の浮 遊が認めら れないこと	2mg/L 以上	-	

(注)

1. 自然環境保全 : 自然探勝等の環境保全
2. 水道 1 級 : ろ過等による簡易な浄水操作を行うもの  
水道 2 級 : 沈殿ろ過等による通常の浄水操作を行うもの  
水道 3 級 : 前処理等を伴う高度の浄水操作を行うもの
3. 水産 1 級 : ヒメマス等貧栄養湖型の水域の水産生物用並びに水産 2 級及び水産 3 級の水産生物用  
水産 2 級 : サケ科魚類及びアユ等貧栄養湖型水域の水産生物用並びに水産 3 級の水産生物用  
水産 3 級 : コイ、フナ等富栄養湖型の水域の水産生物用
4. 工業用水 1 級 : 沈殿等による通常の浄水操作を行うもの  
工業用水 2 級 : 薬品注入等による硬度の浄水操作、又は特殊な浄水操作を行うもの  
工業用水 3 級 : 特殊な浄水操作を行うもの
5. 環境保全 : 国民の日常生活(沿岸の遊歩等を含む)において不快感を生じない限度
6. 水産 1 種 : サケ科魚類及びアユ等貧栄養湖型の水域の水産生物用並びに水産 2 種および水産 3 種の水産生物用  
水産 2 種 : ワカサギ等の貧栄養湖型の水域の水産生物用および水産 3 種の水産生物用  
水産 3 種 : コイ、フナ等の水産生物用

### 5.2.2. 定期水質調査地点と対象とする水質項目

真名川ダムでは、貯水池内でダム湖 NO.1、ダム湖 NO.2、ダム湖 NO.3、ダム湖 NO.4、ダム湖 NO.5 の5地点、流入地点で雲川、笹生川、中島公園の3地点、放流及び下流地点として真名川 PS、五条方、五条方 PS の3地点において水質調査を実施している。

これに加え、ダム下流地点の水質を評価するため、環境基準点の土布子橋、荒鹿橋(九頭竜川)も含めて計13地点を対象に整理を行う(図 5.2-2 参照)。

本報告書で評価対象とする水質項目は、以下の通りである。

- 水温、濁度
- 生活環境項目 : pH、DO、BOD、COD、SS、大腸菌群数
- 健康項目 : カドミウム、全シアン、鉛、六価クロム、砒素、総水銀、アルキル水銀、PCB、ジクロロメタン、四塩化炭素、1,2-ジクロロエタン、1,1-ジクロロエチレン、シス-1,2-ジクロロエチレン、1,1,1-トリクロロエタン、1,1,2-トリクロロエタン、トリクロロエチレン、テトラクロロエチレン、1,3-ジクロロプロペン、チウラム、シマジン、チオベンカルブ、ベンゼン、セレン、硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素、ふっ素、ほう素
- クロロフィル a、T-N、T-P、アンモニウム態窒素、亜硝酸態窒素、硝酸態窒素、無機態リン
- 水質自動観測 : 水温、濁度、電気伝導度、pH、DO     ダムサイト網場地点に設置

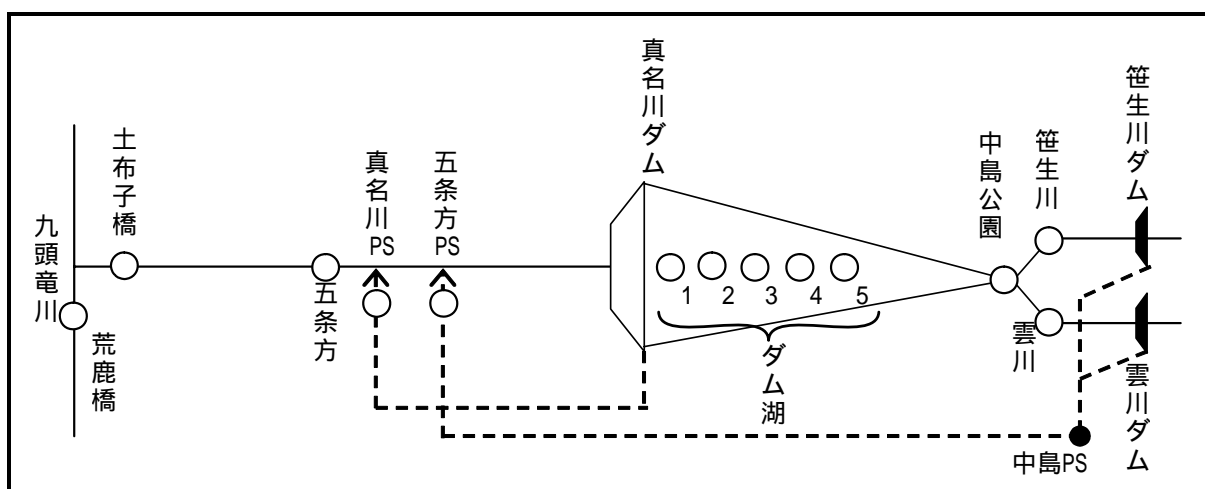
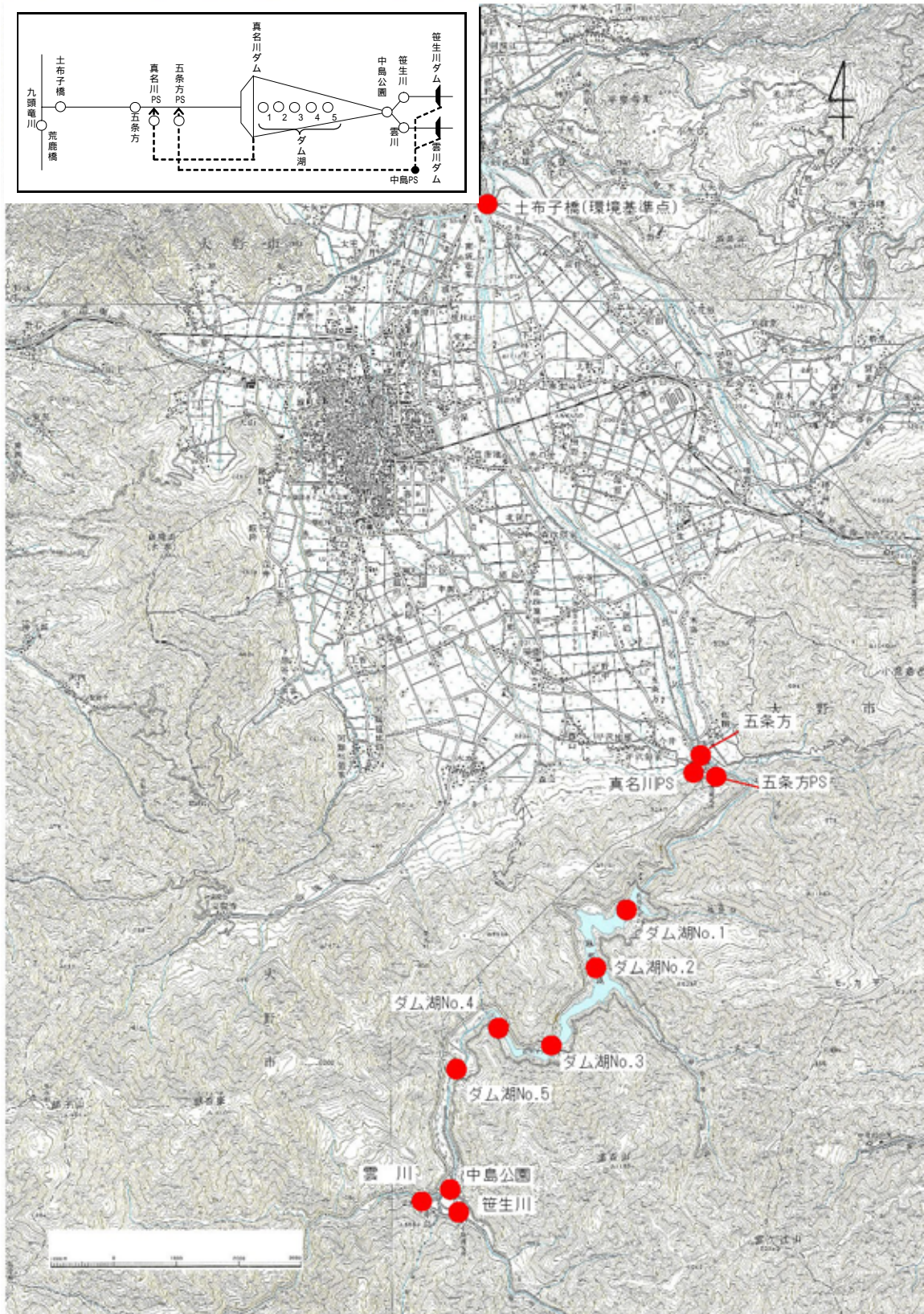
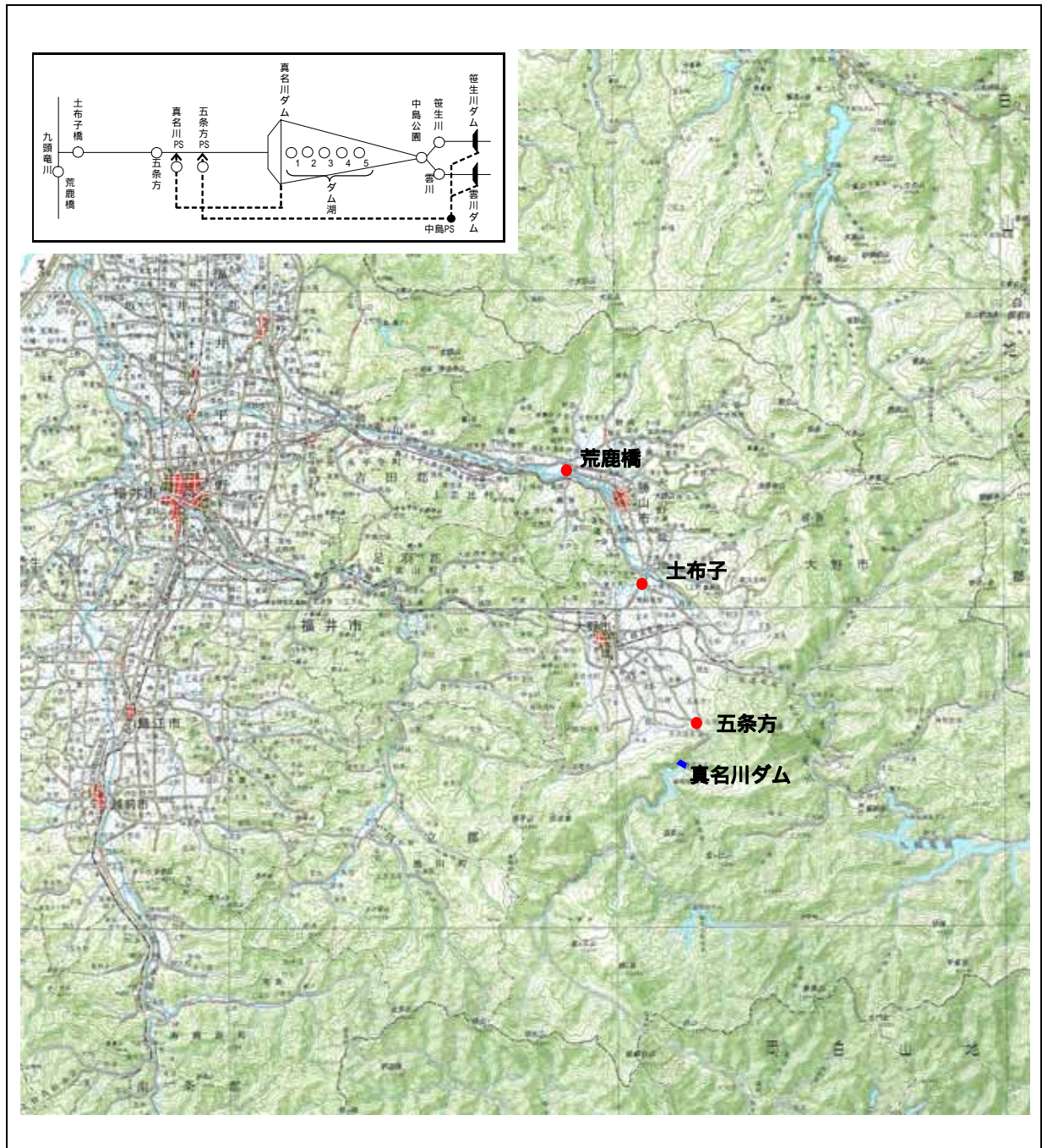


図 5.2-2(1) 水質調査地点位置



(出典：資料5-4,13)

図 5.2-2(2) 水質調査地点位置



(出典：資料 5-5)

図 5.2-2(3) 水質調査地点位置

### 5.2.3. 定期水質調査状況の整理

真名川ダムにおいて実施している定期調査の概要を表 5.2-3 に示す。また、調査項目毎の実施頻度は参考資料に示す。

表 5.2-3 真名川ダム定期水質調査の概要

調査項目	調査地点	調査深度	調査頻度
水温(計器測定)、 濁度(計器測定)、 DO(計器測定)	・ダム湖 NO.1 ・ダム湖 NO.2 ・ダム湖 NO.3 ・ダム湖 NO.4 ・ダム湖 NO.5	・ダム湖 NO.1～NO.5 の計器 測定は原則 0.1m,0.5m,1m 以下 1m～5m 毎	1 回/月 (3月～12月実施)
生活環境項目 (DOを除く) クロロフィル a 無機能窒素、 無機能リン	・ダム湖 NO.1 ・雲川(流入) ・笹生川(流入) ・中島公園(大腸菌群数のみ) ・真名川 PS(発電放流) ・五条方 PS(発電バイパス) ・五条方(下流本川) ・土布子橋(基準地点):福井県 調査 ・荒鹿橋(基準地点):福井県調 査	・ダム湖 NO.1 の調査は 3 層 (0.5m, 1/2 水深、底上 1m) ・真名川 PS、五条方 PS、五 条方は 1 層(0.1m または 0.2m)	ダム湖 No.1、雲川、 笹生川、中島公園、 真名川 PS、五条方 PS、五条方は 1 回/ 月(3月～12月実施)  土布子橋及び荒鹿 橋は 6 回/年
健康項目	・ダム湖 NO.1 ・土布子橋(基準地点):福井県 調査 ・荒鹿橋(基準地点):福井県調 査	・表層(0.5m)	2 回/年  4 回/年
植物プランクトン	・ダム湖 NO.1	・1 層(0.5m)	1 回/月 (3月～12月実施)
底質	・ダム湖 NO.1	・1 層(堆積泥表層)	1 回/年
水質自動監視装置 水温、濁度、pH、 電気伝導度、DO	・ダムサイト網場	・EL280～EL385m の範囲 で 1m ピッチ	1 回/3 時間

- ・生活環境項目(DOを除く):pH,BOD,COD,SS,大腸菌群数,T-N,T-P
- ・健康項目:ガドミウム,全シアン,鉛,6価クロム,ヒ素,総水銀,アルキル水銀,PCB,ジクロロメタン,  
四塩化炭素,1,2-ジクロロエタン,1,1-ジクロロエチレン,シス-1,2-ジクロロエチレン,  
1,1,1-トリクロロエタン,1,1,2-トリクロロエタン,トリクロロエチレン,テトラクロロエチレン,  
テトラクロロエチレン,1,3-ジクロロプロペン,チラウム,シマジン,チオベンカルブ,ベンゼン,  
セレン,硝酸態窒素及び亜硝酸態窒素,フッ素,ホウ素
- ・底 質:強熱減量,COD,総窒素,総りん,硫化物,鉄,マンガン,カドミウム,鉛,6価クロム,ヒ素,総水銀,アルキ  
ル水銀,PCB,チウラム,シマジン,チオベンカルブ,セレン

次に、下流河川の環境基準点(土布子橋)での水質測定開始年(昭和 48 年(1973 年))以降での各水質調査地点における生活環境項目の調査実績を整理して示す。

生活環境項目及びT-N、T-P、クロロフィル a は表 5.2-4 に示すとおりである。昭和 48 年(1973 年)から平成 11 年(1999 年)までは調査頻度、項目にばらつきがあるものの、平成 12 年(2000 年)以降は、冬期 1 月、2 月を除き概ね年 10 回の調査を実施している。

健康項目は表 5.2-4 に示すとおりである。昭和 48 年(1973 年)以降に下流河川の土布子橋で、昭和 53 年(1978 年)以降に貯水池内のダム湖 NO.1 で調査を実施している。ダム湖 NO.1 では、平成 4 年(1992 年)までは冬期 1 月、2 月を除き概ね年 10 回の調査頻度、平成 5 年(1993 年)以降は調査頻度を徐々に削減し、平成 18 年(2006 年)は年 1 回の調査を実施している。また、土布子橋で平成 16 年(2004 年)までは、概ね年 4 回の調査頻度、平成 17 年(2005 年)以降は年 2 回実施している。なお、各地点における水質測定頻度の詳細については「参考資料」に示した。

水質調査の実施方法のイメージを図 5.2-3 に示す。

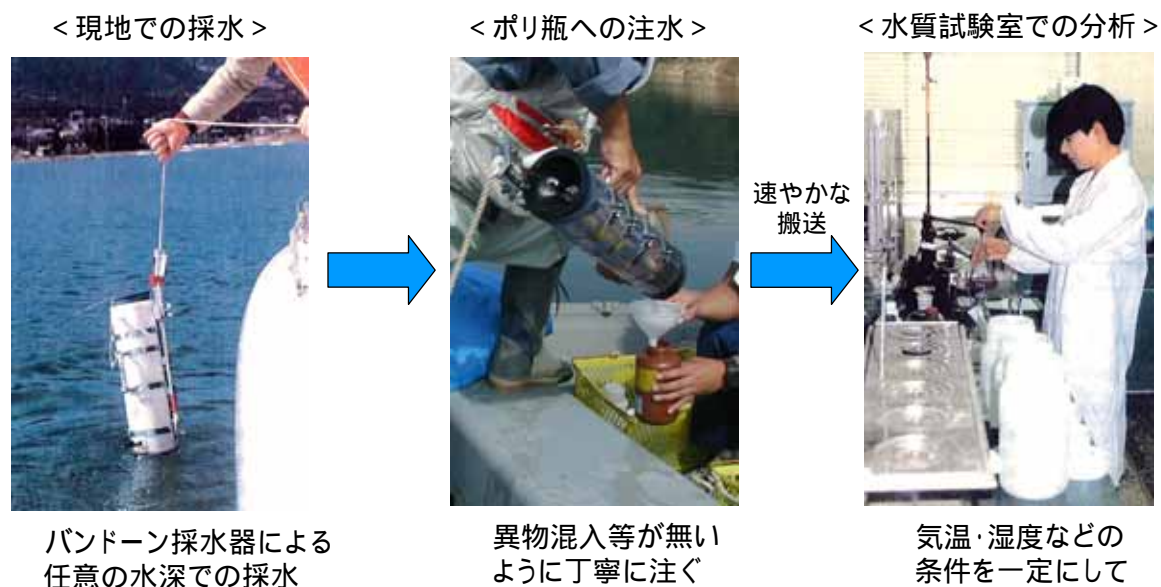


図 5.2-3 水質調査・分析実施の流れ

写真出典：「水質調査の基礎知識 近畿技術事務所 H15.3」

表 5.2-4(1) 主要水質調査状況(流入・下流河川)

水質項目	水質調査地点	S48	S49	S50	S51	S52	S53	S54	S55	S56	S57	S58	S59	S60	S61	S62	S63	H1	H2	H3	H4	H5	H6	H7	H8	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	
生活環境項目	雲川																																			
	笹生川																																			
	中島公園																																			
	五条方																																			
	五条方PS																																			
	真名川PS																																			
	土布子橋																																			
T-N・T-P	荒鹿橋																																			
	雲川																																			
	笹生川																																			
	中島公園																																			
	五条方																																			
	五条方PS																																			
	真名川PS																																			
クロロフィルa	土布子橋																																			
	荒鹿橋																																			
	雲川																																			
	笹生川																																			
	中島公園																																			
	五条方																																			
	五条方PS																																			
健康項目	真名川PS																																			
	土布子橋																																			
	荒鹿橋																																			
	雲川																																			
	笹生川																																			
	中島公園																																			
	五条方																																			

(出典：資料5-13,14)

表中の網掛けは調査実施を示す。  
頻度・詳細調査項目などは巻末の参考資料に示す。

表 5.2-4(2) 主要水質調査状況(貯水池内)

水質項目	水質調査地点	S48	S49	S50	S51	S52	S53	S54	S55	S56	S57	S58	S59	S60	S61	S62	S63	H1	H2	H3	H4	H5	H6	H7	H8	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	
生活環境項目	ダム湖No1																																			
	ダム湖No2																																			
	ダム湖No3																																			
	ダム湖No4																																			
	ダム湖No5																																			
T-N・T-P	ダム湖No1																																			
	ダム湖No2																																			
	ダム湖No3																																			
	ダム湖No4																																			
	ダム湖No5																																			
クロロフィルa	ダム湖No1																																			
	ダム湖No2																																			
	ダム湖No3																																			
	ダム湖No4																																			
	ダム湖No5																																			
健康項目	ダム湖No1																																			
	ダム湖No2																																			
	ダム湖No3																																			
	ダム湖No4																																			
	ダム湖No5																																			
底質	ダム湖No1																																			
	ダム湖No2																																			
	ダム湖No3																																			
	ダム湖No4																																			
	ダム湖No5																																			

(出典：資料5-13,14)

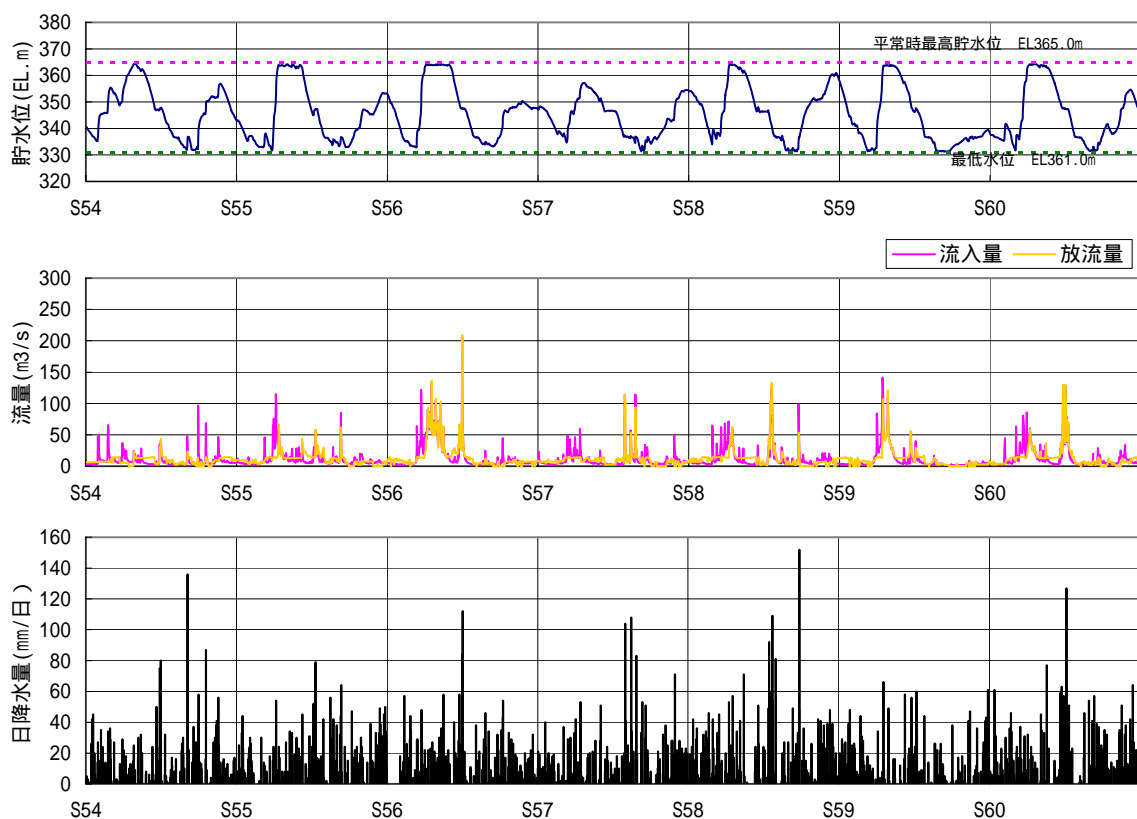
表中の網掛けは調査実施を示す。  
頻度・詳細調査項目などは巻末の参考資料に示す。

### 5.3. 水質状況の整理

#### 5.3.1. 水理・水文・気象特性

##### (1) 流入量と降水量

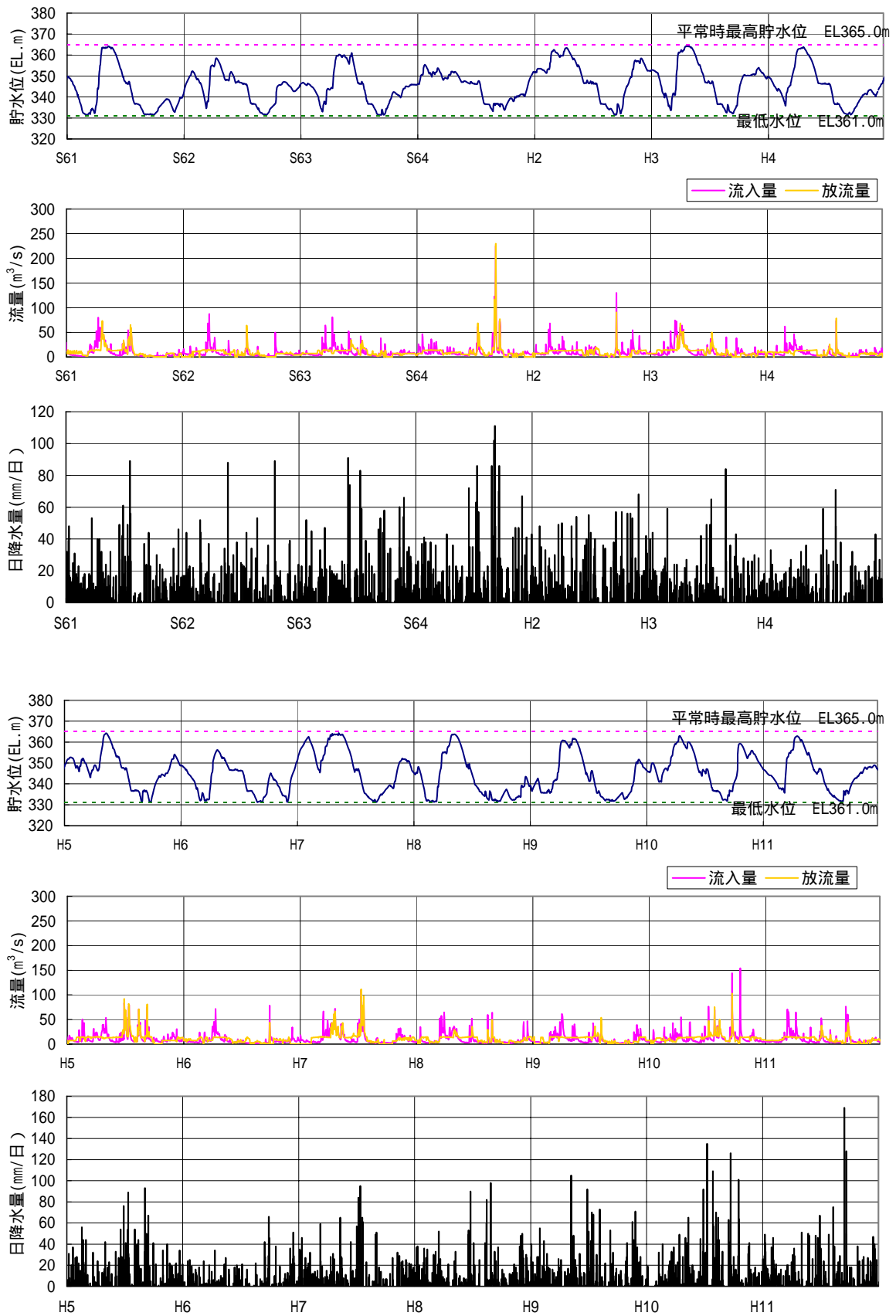
真名川ダム管理開始の昭和54年(1979年)から平成18年(2006年)のダム諸量と日降水量の推移を図5.3-1に示す。貯水池の水位変動は毎年30m程度である。また、年降水量を図5.3-2に示す。年降水量は、昭和54年(1979年)から平成18年(2006年)の平均で2,613mmであり、最大が昭和58年(1983年)で3,385mm、最小が平成6年(1994年)で1,419mmである。



(出典：資料5-8,9,10)

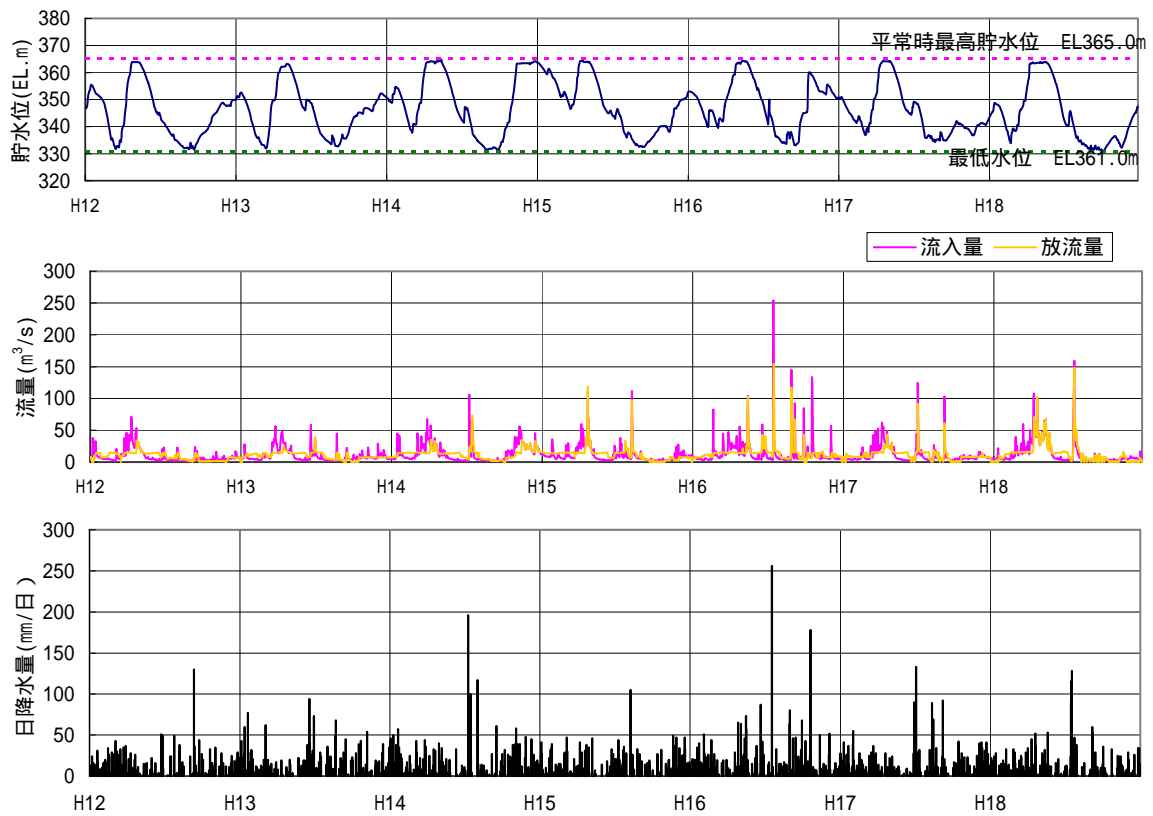
図5.3-1(1) ダム諸量と真名川ダム管理所 日降水量





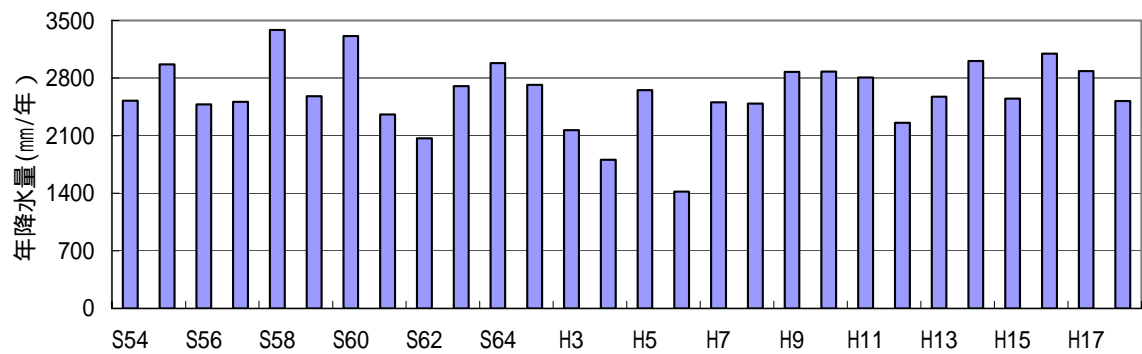
(出典：資料 5-8,9,10)

図 5.3-1(2) ダム諸量と真名川ダム管理所 日降水量



(出典：資料 5-8,9,10)

図 5.3-1(3) ダム諸量と真名川ダム管理所 日降水量



(出典：資料 5-10)

図 5.3-2 真名川ダム管理所 年降水量

## (2) 流況と回転率

### 1) 流況

真名川ダム管理開始以降の真名川ダム流入量の流況を表 5.3-1 及び図 5.3-3 に示す。

年総流入量が  $400 \times 10^6 \text{m}^3$  を上回る年を整理すると、昭和 56 年(1981 年)、昭和 60 年(1985 年)、平成 5 年(1993 年)、平成 10 年(1998 年)、平成 14 年(2002 年)、平成 16 年(2004 年)、平成 18 年(2006 年)が挙げられ、このような年は栄養塩、濁質が多く流入し貯水池に滞留することで、富栄養化や濁水長期化現象などの影響が想定される。

表 5.3-1 真名川ダムの流況 (ダム流入量)

	最大 流量 ( $\text{m}^3/\text{s}$ )	豊水 流量 ( $\text{m}^3/\text{s}$ )	平水 流量 ( $\text{m}^3/\text{s}$ )	低水 流量 ( $\text{m}^3/\text{s}$ )	渇水 流量 ( $\text{m}^3/\text{s}$ )	最小 流量 ( $\text{m}^3/\text{s}$ )	年平均 流量 ( $\text{m}^3/\text{s}$ )	年 総 流入量 ( $\times 10^6 \text{m}^3$ )
昭和54年(1979)	96.66	8.43	5.73	3.52	1.91	1.42	8.77	276.52
昭和55年(1980)	115.17	11.57	6.77	4.98	3.07	2.71	11.34	358.53
昭和56年(1981)	204.57	14.68	5.54	3.53	2.21	1.79	16.46	519.09
昭和57年(1982)	114.29	9.46	5.71	3.60	2.21	1.90	9.54	300.96
昭和58年(1983)	123.91	11.86	6.10	4.01	2.50	2.18	12.57	396.55
昭和59年(1984)	141.18	6.40	3.51	2.23	1.40	1.18	9.74	308.10
昭和60年(1985)	128.83	14.25	5.88	3.42	2.02	1.66	13.19	415.96
昭和61年(1986)	80.03	9.90	4.20	2.34	1.64	1.54	9.92	312.73
昭和62年(1987)	87.21	7.54	4.93	3.44	1.92	1.69	7.69	242.36
昭和63年(1988)	80.70	10.31	6.27	4.57	2.27	1.74	9.30	294.15
平成元年(1989)	225.45	10.08	6.56	4.78	2.66	2.21	11.14	351.25
平成2年(1990)	129.80	9.81	6.31	4.46	1.64	1.33	9.33	294.23
平成3年(1991)	74.26	11.53	6.03	4.27	2.85	2.22	11.35	358.04
平成4年(1992)	73.83	9.20	5.47	3.33	1.83	1.59	7.87	246.79
平成5年(1993)	83.55	15.66	8.16	5.89	4.03	3.45	13.68	431.54
平成6年(1994)	78.26	7.38	4.64	3.16	1.15	0.86	7.16	225.07
平成7年(1995)	109.85	15.96	6.25	3.82	2.20	1.71	12.59	397.18
平成8年(1996)	64.58	9.03	4.73	3.33	1.98	1.82	9.39	296.79
平成9年(1997)	61.09	11.89	5.42	2.92	1.85	1.25	9.56	301.41
平成10年(1998)	154.10	14.33	8.82	5.82	3.56	3.27	13.06	411.87
平成11年(1999)	76.37	9.48	5.26	3.97	2.80	2.21	9.33	294.39
平成12年(2000)	71.21	9.13	4.93	3.46	1.72	1.40	8.80	278.32
平成13年(2001)	58.84	11.62	5.89	4.13	2.37	1.89	9.88	311.50
平成14年(2002)	105.79	20.04	8.03	3.66	1.80	1.49	13.99	441.26
平成15年(2003)	112.08	11.87	7.25	3.85	2.40	2.21	11.23	354.22
平成16年(2004)	254.17	14.47	7.14	4.98	3.45	2.99	14.21	449.46
平成17年(2005)	124.63	11.37	5.79	4.16	2.31	1.72	10.57	333.40
平成18年(2006)	159.21	15.02	5.57	3.71	2.27	1.62	13.75	433.52
平均値	113.92	11.51	5.96	3.91	2.29	1.89	10.91	344.11

(出典：資料 5-8,9)

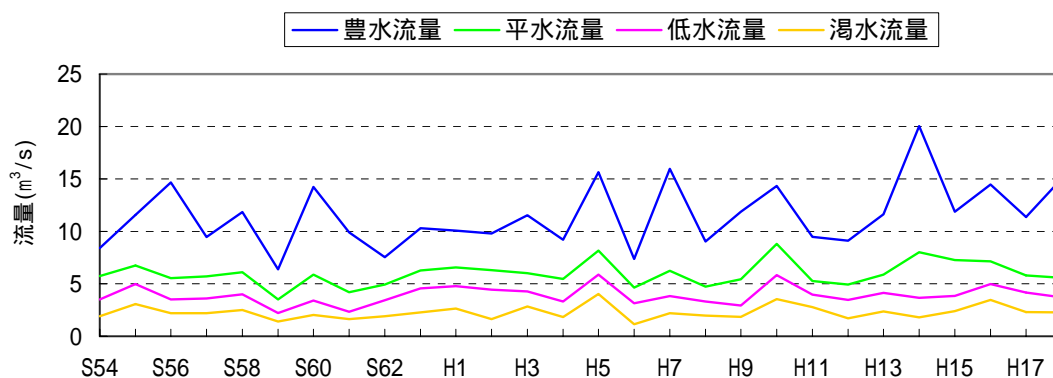


図 5.3-3 真名川ダム流入量の流況推移

## 2) 回転率

次に、回転率の経月的な変化を図 5.3-4 に示す。

真名川ダムの回転率は 4～5 月の融雪出水時、及び 7 月の降雨による流入により大きくなる傾向が伺える。一方で、6 月頃の回転率が低くなる傾向にある。

回転率が大きい場合、ダム流域より栄養塩・濁質分が流入し、長期的に滞留することで貯水池の富栄養化、放流水の濁度が高くなる濁水長期化現象を引き起こすことがある。

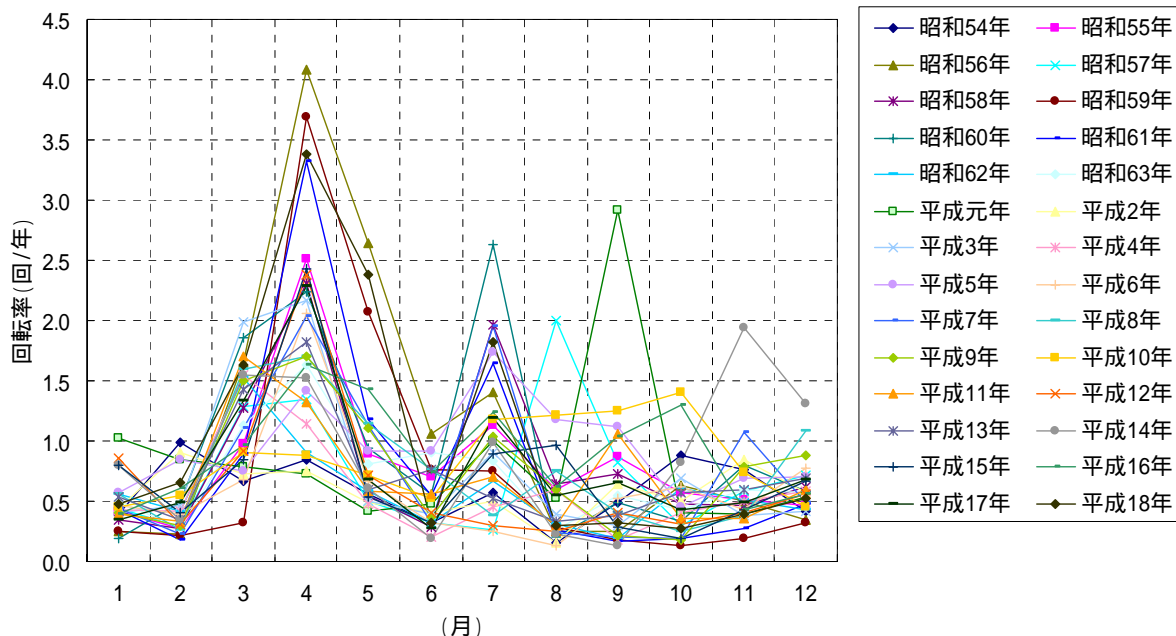


図 5.3-4 月回転率の経月変化

### (参考) 貯水池成層化の可能性

貯水池容量が流入量に比べて大きく、水の滞留時間が長い貯水池では春から秋にかけて表層が温められ、表層に密度の小さい温かい水、底層には密度の大きい冷たい水が存在し、その密度差によって表層水と深層水が分離する。これを貯水池の成層化（水温躍層）といい、成層化により貯水池の富栄養化現象、底層の嫌気化に伴う溶出現象、ダム運用に伴う下流河川の冷水・温水現象などを引き起こすことがある。

一般的な貯水池の成層化の可能性について、回転率をパラメータとした概略判定方法がある。多数の貯水池における調査結果から、年間回転率と水温成層が最も安定化するとされる 7 月の回転率と成層化形成の関係により算出するものである。

真名川ダム貯水池の回転率の状況、並びにダム貯水池の成層状況を判定(下記「参考」参照)するため、年平均回転率と 7 月の回転率を算定した結果を図 5.3-5 に示す。

真名川ダムでは、昭和 54 年(1979 年)から平成 18 年(2006 年)の平均年回転率が 9.3 回/年、7 月の回転率が 0.97 回/月であり、回転率と成層の関係からは、「成層が形成される可能性が十分ある」に分類される。

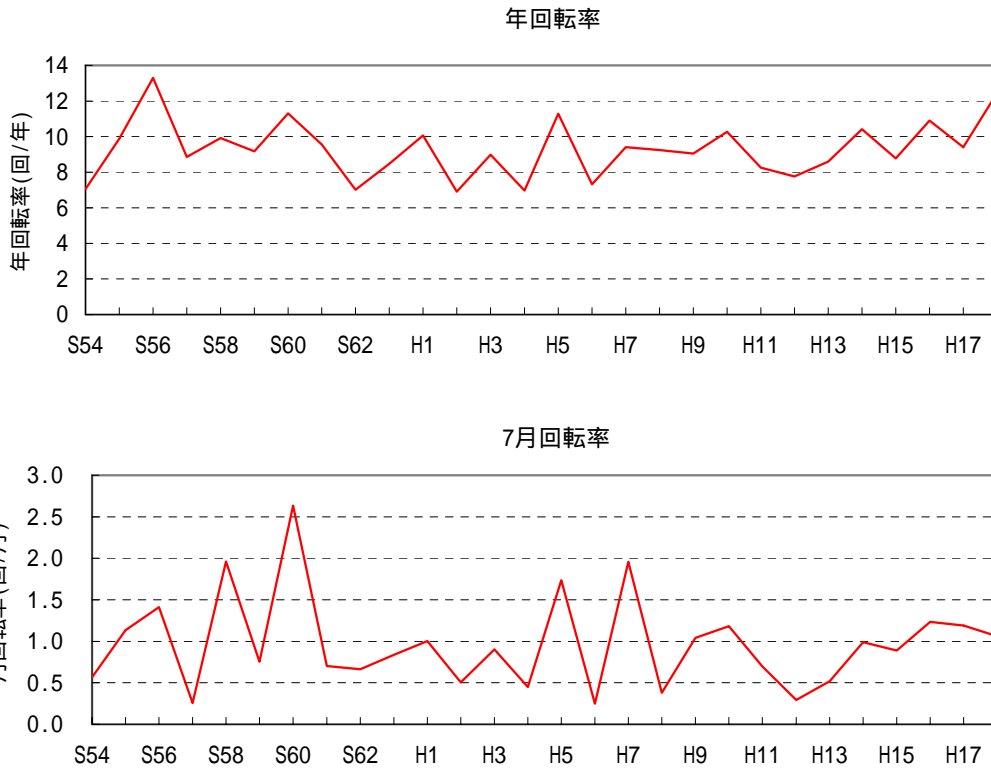


図 5.3-5 平均年回転率と7月の回転率算定結果

【参考:回転率と成層の関係】

評 価		7
成層が形成される可能性が十分ある	<10	<1
成層が形成される可能性がある程度ある	10~30	1~5
成層が形成される可能性がほとんどない	30<	5<

$$=Q_0/V_0$$

$${}_7=Q_M/V_0$$

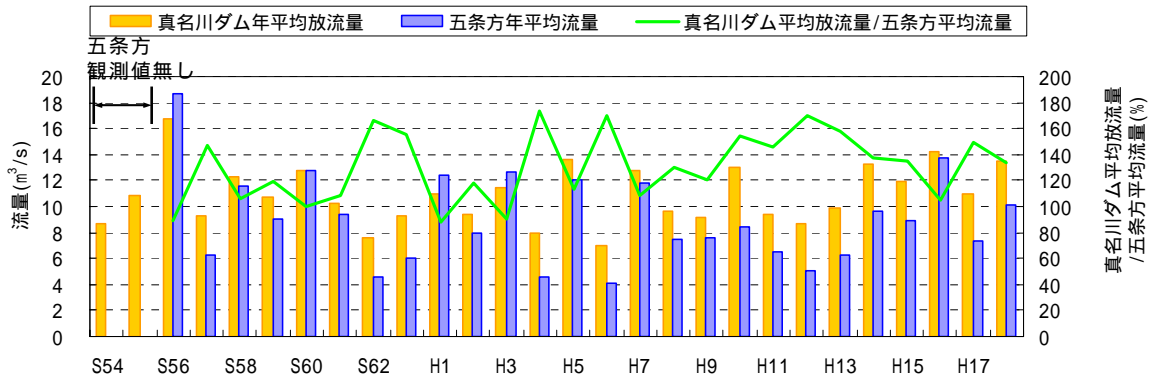
ここで、 $Q_0$ :年間総流入量、 $V_0$ :総貯水容量、 $Q_M$ :7月総流入量、  
 $\bar{\tau}$ :平均年回転率、 $\tau_7$ :7月の回転率

(出典 : 資料 5-22)

(3) 利水基準点流量との比較

真名川ダムの利水計画の基準地点である下流の五条方地点における真名川ダム放流量の寄与率を確認するため、各年で真名川ダム年平均放流量/五条方年平均流量を算定した。その結果を図5.3-6に示す。

これによると、五条方流量に対し真名川ダムの放流量は1倍～1.7倍程度であり、五条方に対し、真名川ダム放流水の影響は大きいと推察される。

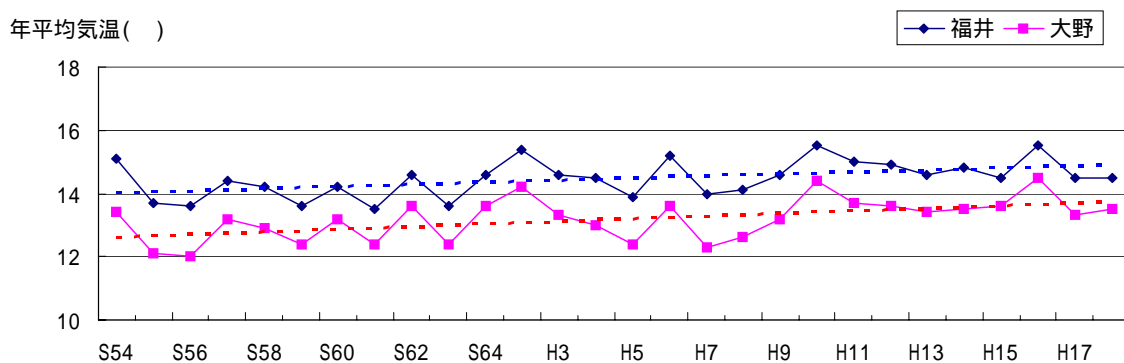


(出典：資料5-8,9,10,11)

図5.3-6 五条方年平均流量と真名川ダム年平均放流量との比較

(4) 気象

真名川ダム流域近傍の気象庁観測所として大野地点と福井地点の年平均気温の経年変化を示す。気温のトレンドとして、昭和54年(1979年)～平成18年(2006年)の間では大野、福井ともに若干ではあるが増加傾向が伺える。このことは、貯水池表層水温の上昇を引き起こし、植物プランクトン種の変化への影響が想定される。



(出典：資料5-12)

図5.3-7 近傍気象観測所における気温の経年変化

### 5.3.2. 水質の経年変化

#### (1) 流入河川及び放流河川

真名川ダムの水質を評価する地点は、流入河川が雲川、笹生川の2地点、下流河川が五条方、土布子橋(環境基準点)、荒鹿橋(環境基準点)の3地点、また真名川ダムからバイパス放流される真名川 PS において調査を実施している。この他、ダム貯水池上流からの笹生川ダム及び雲川ダムの発電取水のバイパスによりダム下流に放流される五条方 PS で調査を実施している。

ここでは、このうちダム流入河川2地点、放流水(真名川 PS)、下流河川3地点の計6地点を対象に、10項目の経年変化をとりまとめた。

経年変化のとりまとめを表5.3-2及び図5.3-8に示す。

経年的な変化としては、BOD75%値は下流河川(土布子橋)、下流河川(荒鹿橋)を除くと平成13年以降0.5mg/L未満とやや改善傾向、T-Nは各地点とも増加傾向が認められた。また、大腸菌群数については平成13年(2001年)以降やや増加に転じている。その他の項目(水温、pH、DO、COD75%値、SS、T-P、クロロフィル a)については経年的な増減の傾向は認められず、出水などの影響を受けた場合以外では、環境基準を満たす良好な水質となっている。

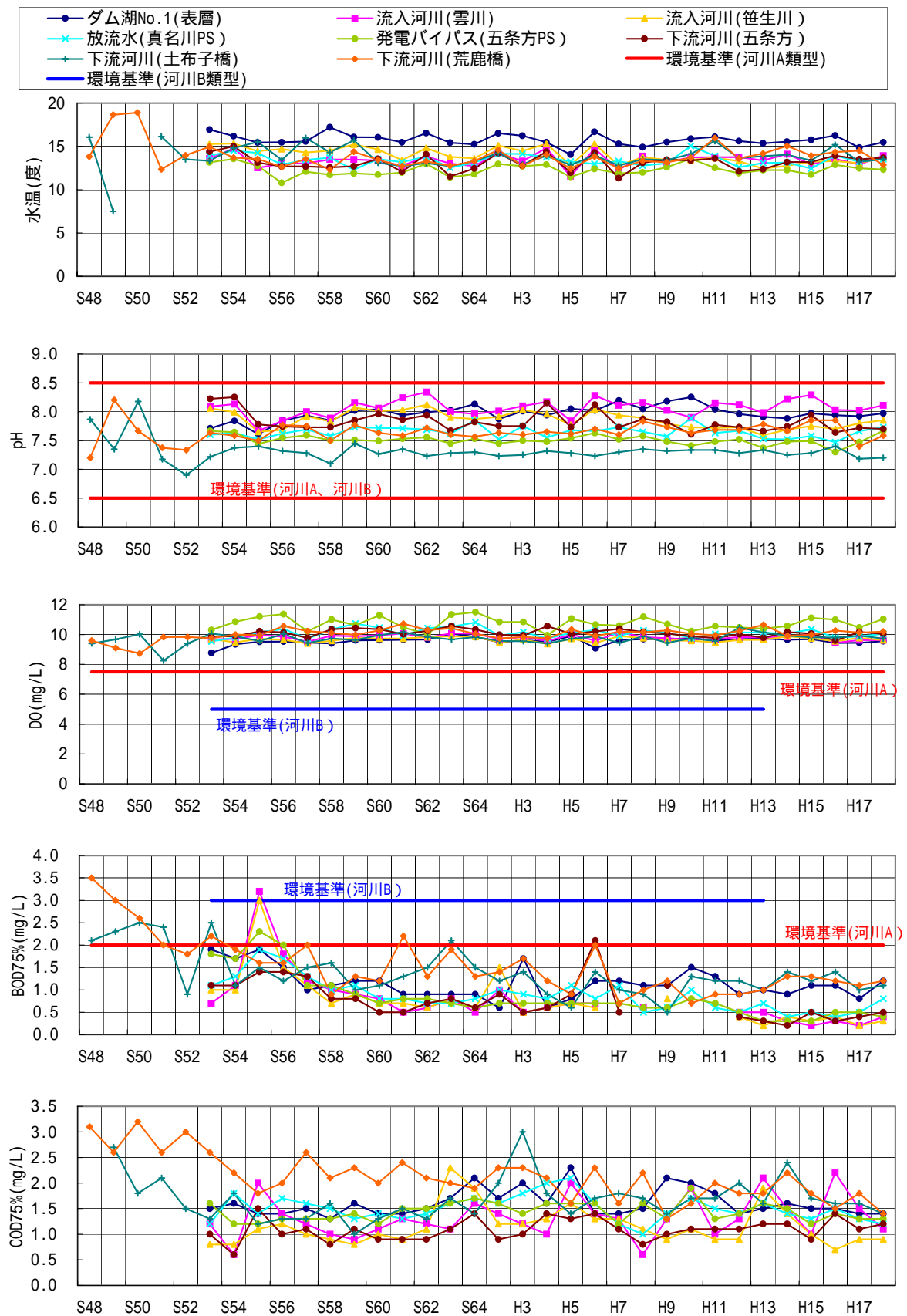
流入河川と放流水、下流河川の比較では、水温は放流水温が若干低い傾向にある。SSは年間平均値では放流水が顕著に高くなる傾向は認められない。クロロフィル a は流入河川に対し、放流水(真名川 PS)がやや高い傾向となっている。

表 5.3-2 流入河川及び下流河川水質の経年変化とりまとめ(S54～H18)

項目 (環境 基準値)	単位	平均値(S54～H18)						内 容
		流入河川		放流水	下流河川			
		類型指定なし		類型指 定なし	A 類型			
		雲川	笹生川	真名川 PS	五条方	環境基準点		
				土布子橋	荒鹿橋			
水温		13.4	14.0	13.4	13.1	13.9	13.6	流入河川(雲川、笹生川)に比べ放流水及び下流河川(五条方、荒鹿橋)が若干低いことがあるが、経年的に増減の傾向は認められない。
pH (6.5 以上 8.5 以下)	-	8.1	7.9	7.6	7.8	7.3	7.7	流入河川(雲川)での 8 前後の高い値に比べ放流水(真名川 PS)及び下流河川(五条方、土布子橋、荒鹿橋)は 7.5 前後の傾向が認められる。経年的な増減の傾向は認められない。
DO (7.5mg/L 以上)	mg/L	9.8	9.7	10.1	10.1	9.8	10.2	各地点とも概ね同程度の値で推移している。
BOD75% (2mg/L 以下)	mg/L	0.8	0.8	0.9	0.8	1.2	1.3	下流河川(土布子橋、荒鹿橋)を除くと、各地点ともに平成 13 年(2001)以降で定量下限値 0.5mg/L 未満を示す傾向があり改善傾向にある。なお、昭和 55 年(1980)に流入で環境基準値を超過するが、サンプル数の不足により出水影響を受けた値が 75%値に採用されたものである。
SS (25mg/L 以下)	mg/L	11.5	5.7	5.4	4.4	5.0	3.2	出水の影響により流入河川(雲川、笹生川)、下流河川(五条方)で基準値を上回る高い値を示す年があるが、下流河川(土布子橋、荒鹿橋)では比較的安定した水質である。
大腸菌群数 (1000MPN/100mL 以下)	MPN/ 100mL	221	525	221	238	-	5,806	昭和 55 年(1980)に流入河川(笹生川)で高い値が認められた後は下流河川(荒鹿橋)を除いて、各地点に大きな差はなく、ともに低い値で推移していたが、平成 13 年(2001)以降やや増加に転じている。また、下流河川(荒鹿橋)では全ての年において環境基準値を超過している。なお、平成 16 年(2004)、平成 17 年(2005)は平成 16 年 7～9 月の出水による影響も含まれる。
COD75%	mg/L	1.3	1.2	1.5	1.1	1.6	2.0	下流河川(五条方)に比べ下流河川(土布子橋、荒鹿橋)が若干高い傾向が認められる他は、各地点ともに横ばい傾向で推移している。
T-N	mg/L	0.34	0.28	0.33	0.42	0.30	-	流入河川、放流水(真名川 PS)に比べ下流河川(五条方)が高い傾向にある。各地点ともに昭和 55 年(1980)から昭和 58 年(1983)まで減少傾向にあったが、近年は増加傾向に転じている。
T-P	mg/L	0.015	0.009	0.013	0.009	0.055	-	昭和 56 年(1981)、昭和 58 年(1983)に下流河川(土布子橋)で高い値が認められたが、その後地点間に大きな差はなく、近年は各地点ともに横ばい傾向で推移している。
クロロ フィル a	µg/L	1.1	1.0	3.8	1.1	-	-	放流水(真名川 PS)がその他地点にくらべやや高い傾向にあるが、各地点とも横ばい傾向で推移している。

表中数値は、各年の平均値(又は 75%値)を算定し、それを昭和 54 年～平成 18 年で平均した値である。  
河川の環境基準値(A 類型)を記載している。

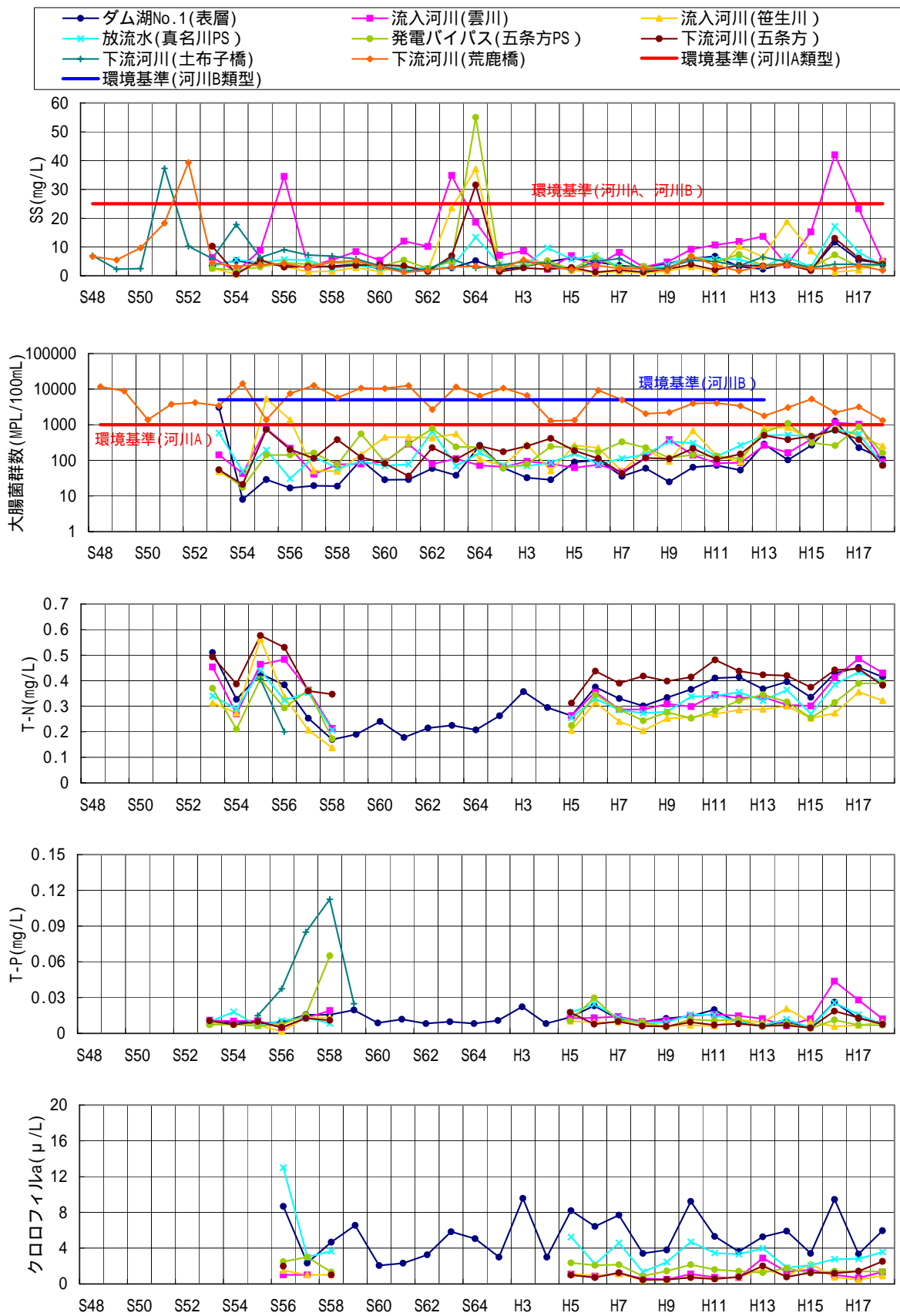




河川の環境基準値(A 類型、B 類型)をグラフ中に表示している。

(出典：資料 5-13,14)

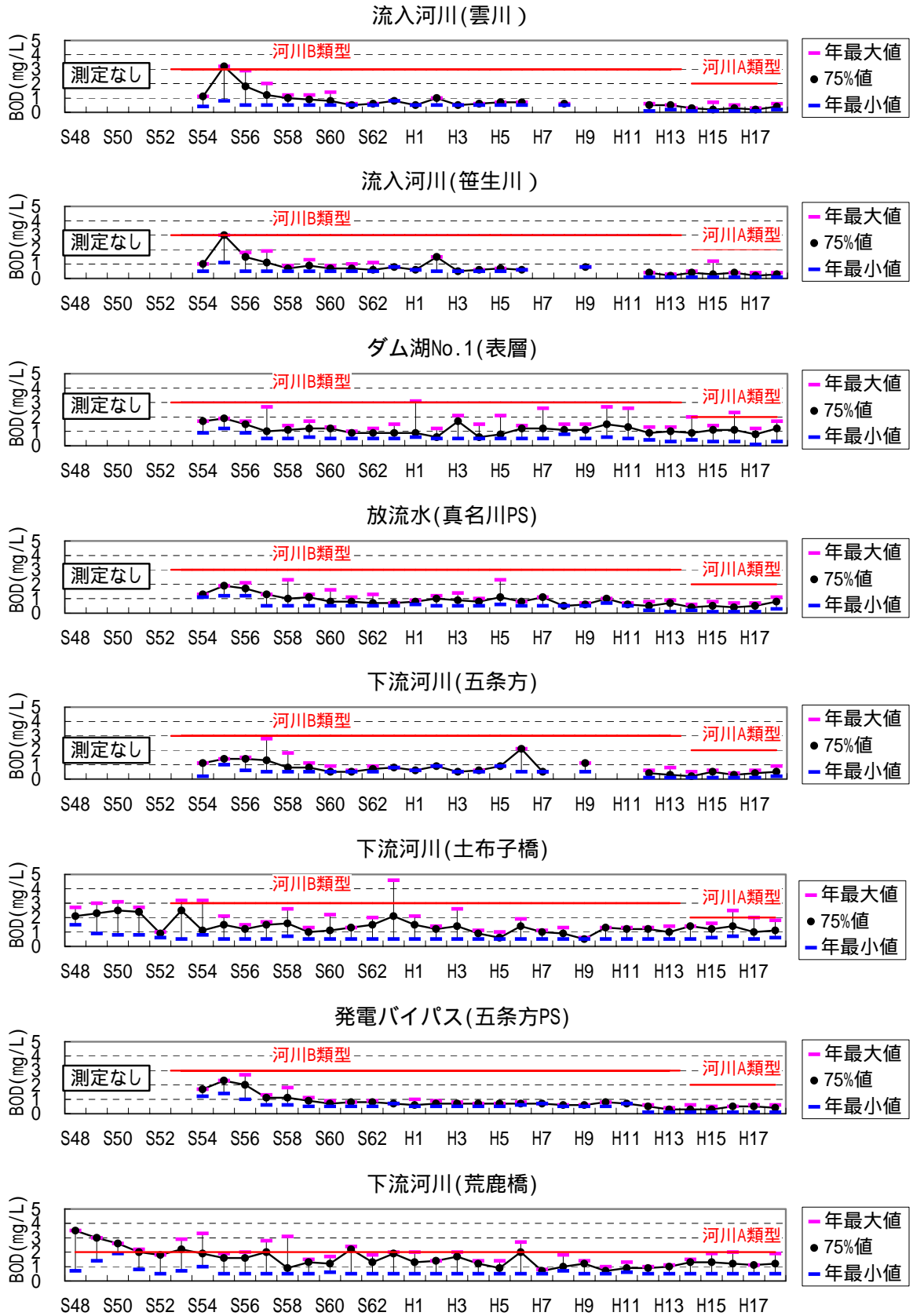
図 5.3-8(1) 流入・放流水質の経年変化



河川の環境基準値(A 類型、B 類型)をグラフ中に表示している。

(出典：資料 5-13,14)

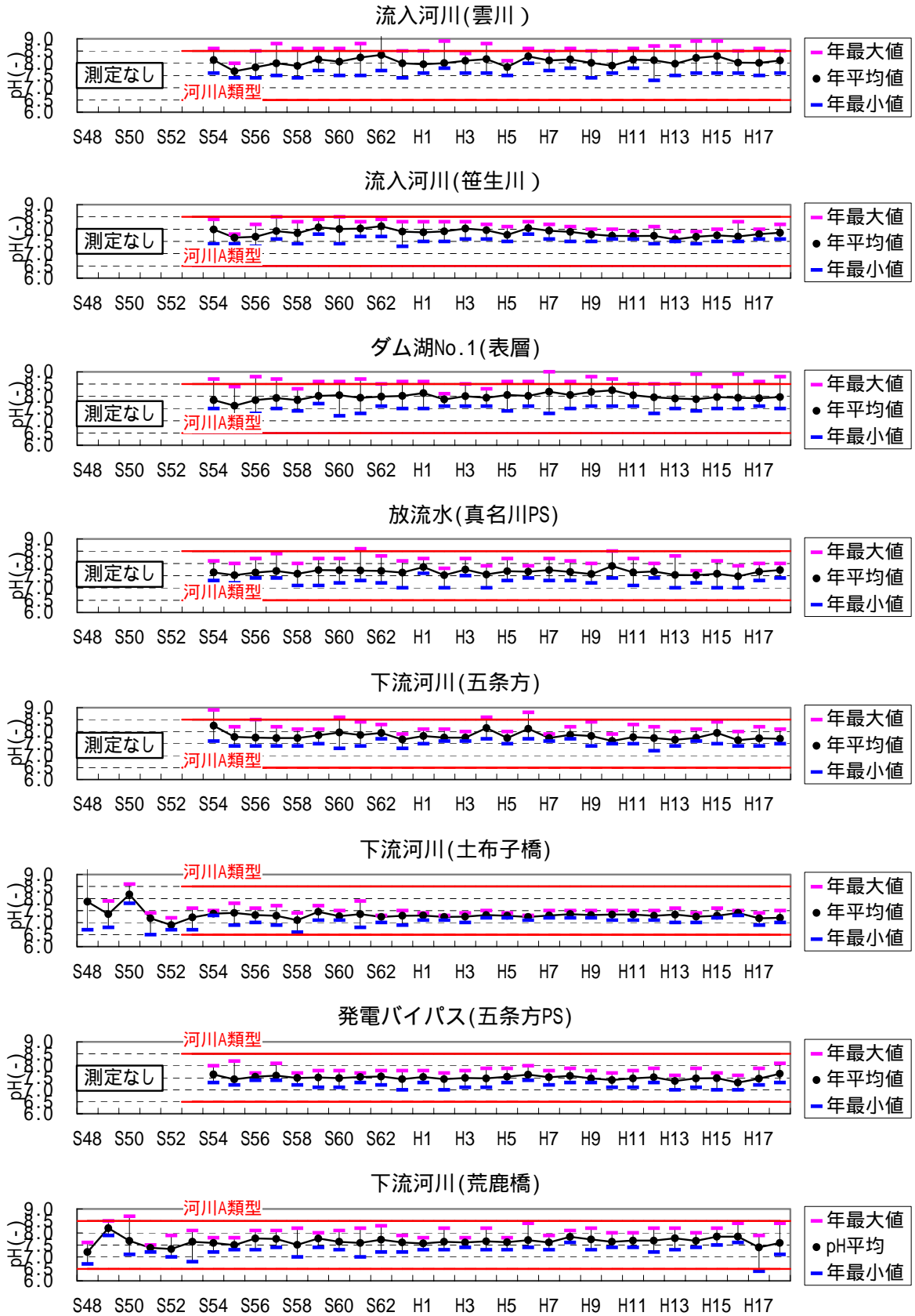
図 5.3-8(2) 流入・放流水質の経年変化



河川の環境基準値(A 類型、B 類型)をグラフ中に表示している。

(出典：資料 5-13,14)

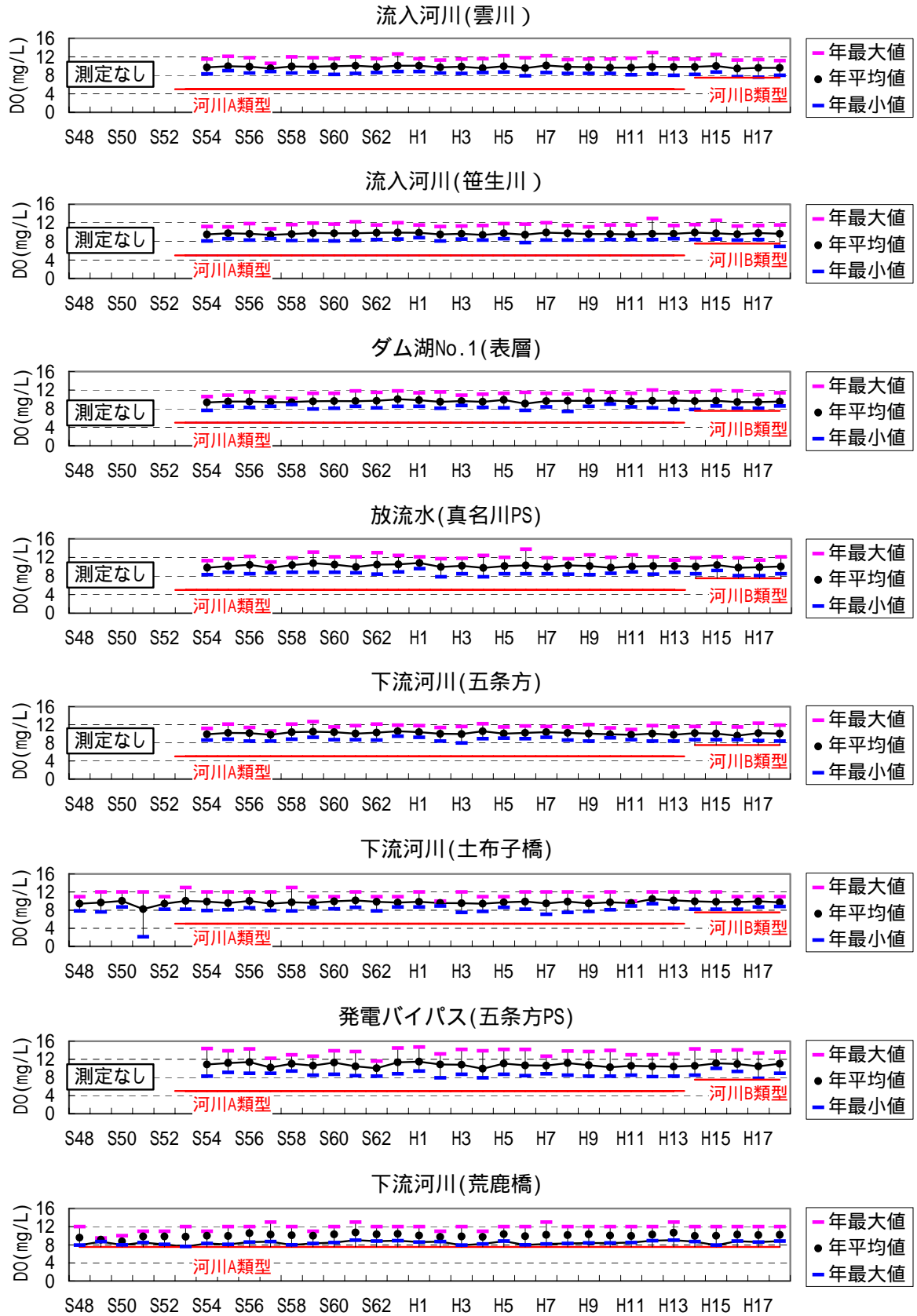
図 5.3-9(1) 地点ごと流入・放流 BOD75%値の経年変化



河川の環境基準値 A 類型(B 類型に同じ)をグラフ中に表示している。

(出典 : 資料 5-13,14)

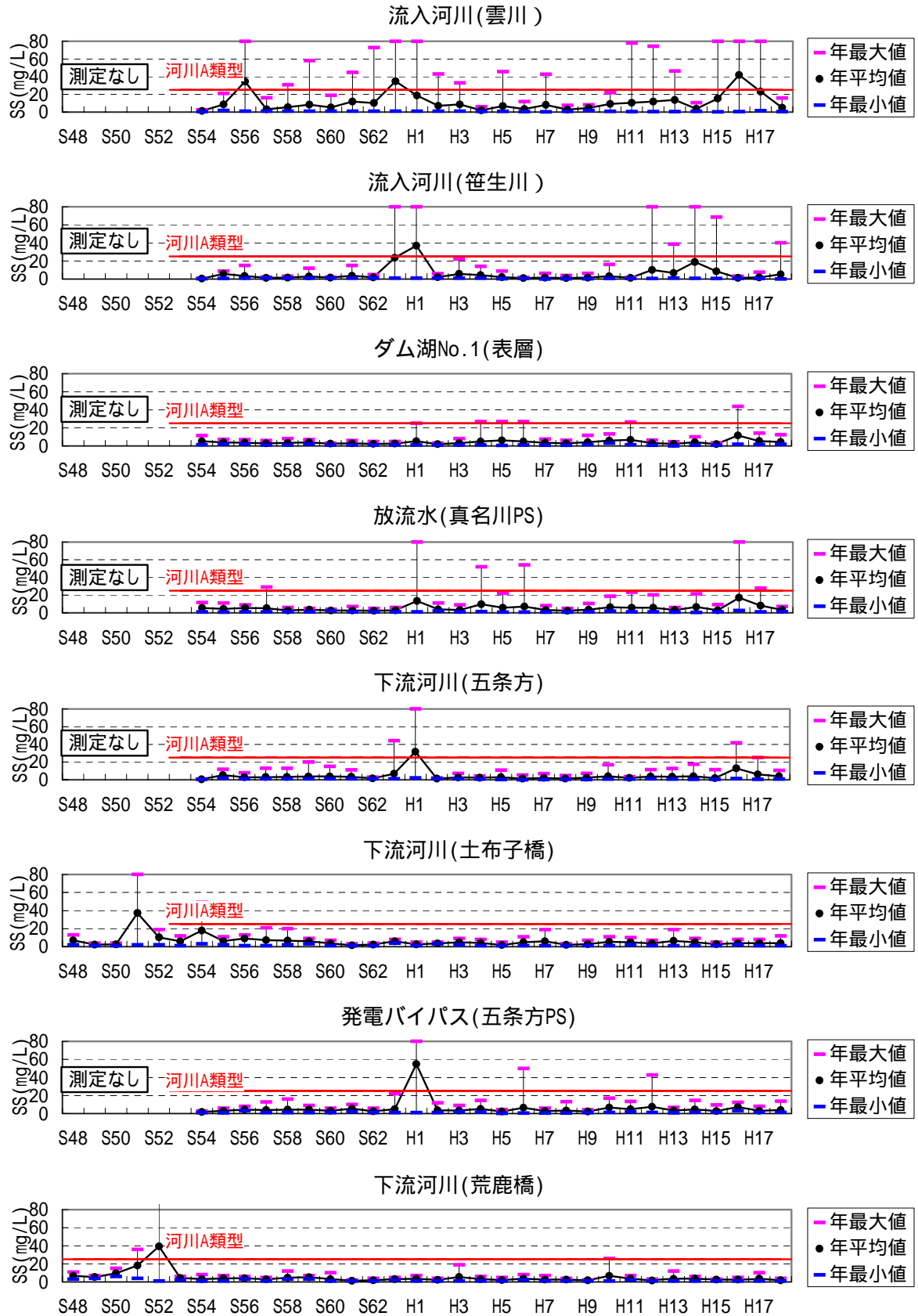
図 5.3-9(2) 地点ごと流入・放流 pH 年平均値の経年変化



河川の環境基準値(A 類型、B 類型)をグラフ中に表示している。

(出典：資料5-13,14)

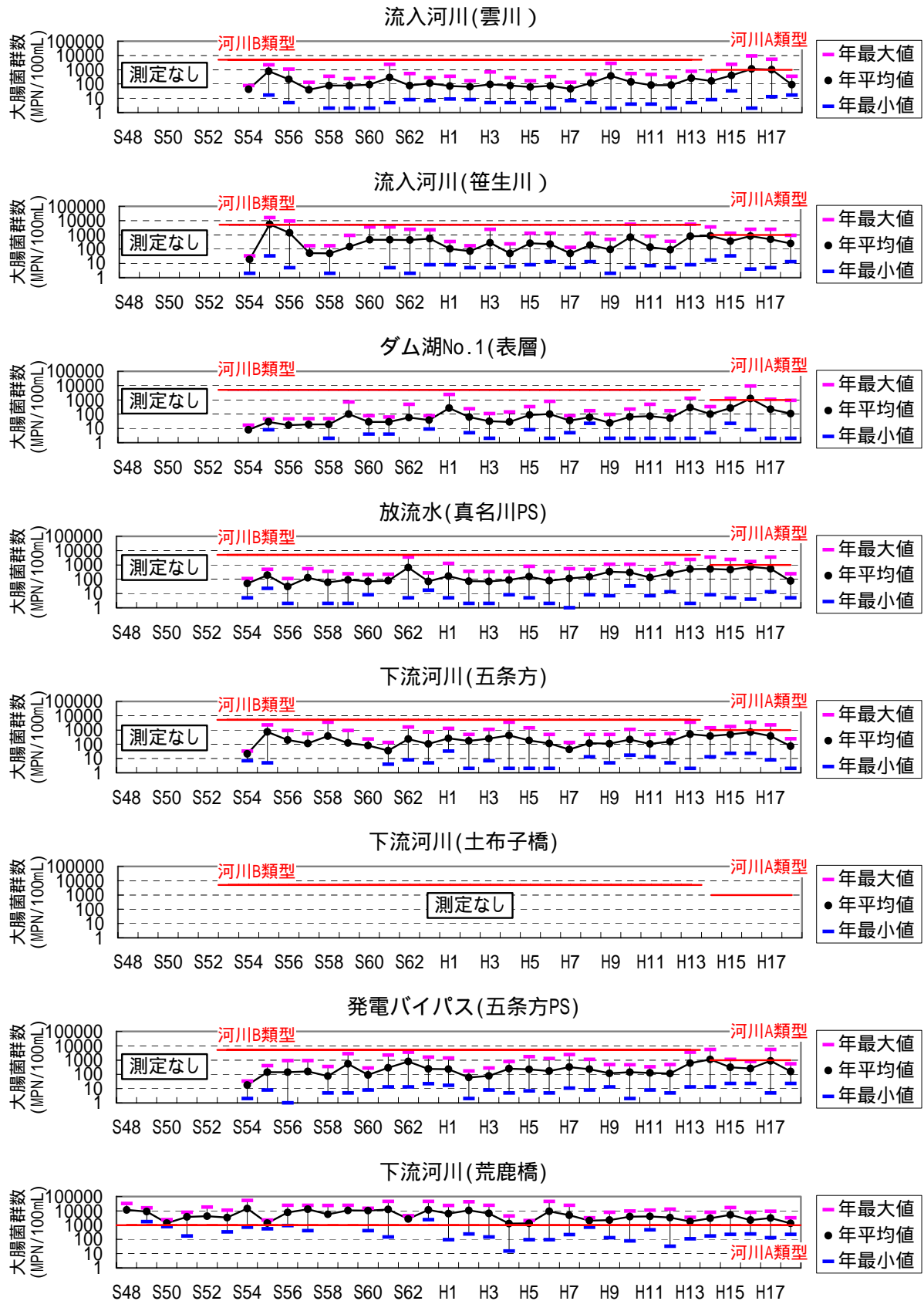
図 5.3-9(3) 地点ごと流入・放流 DO 年平均値の経年変化



河川の環境基準値 A 類型(B 類型に同じ)をグラフ中に表示している。

(出典 : 資料 5-13,3)

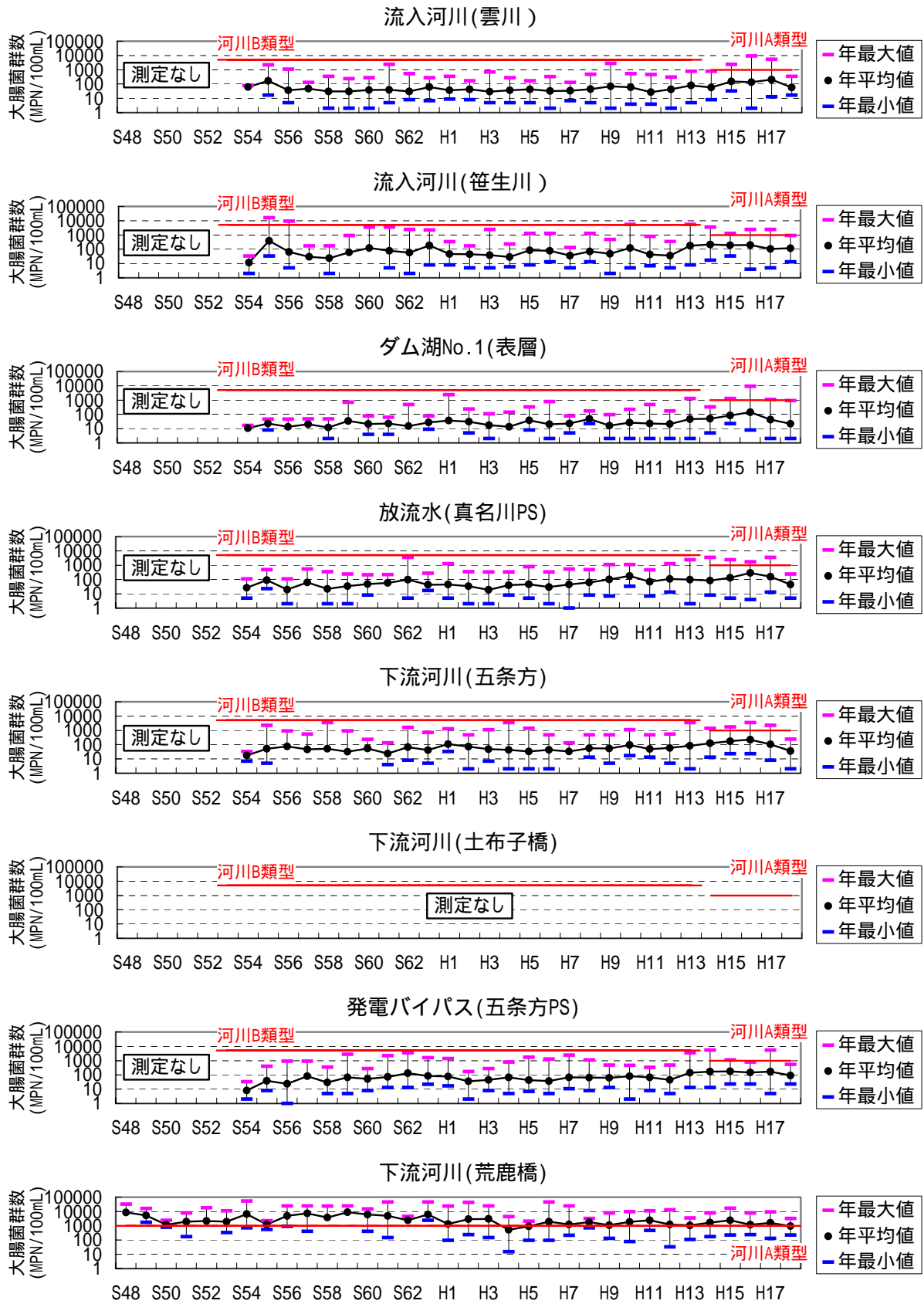
図 5.3-9(4) 地点ごと流入・放流 SS 年平均値の経年変化



河川の環境基準値(A 類型、B 類型)をグラフ中に表示している。

平均値は算術平均 $(x_1+x_2+\dots+x_n)/n$ で算定している) (出典：資料 5-13,14)

図 5.3-9(5) 地点ごと流入・放流大腸菌群数の経年変化(算術平均)

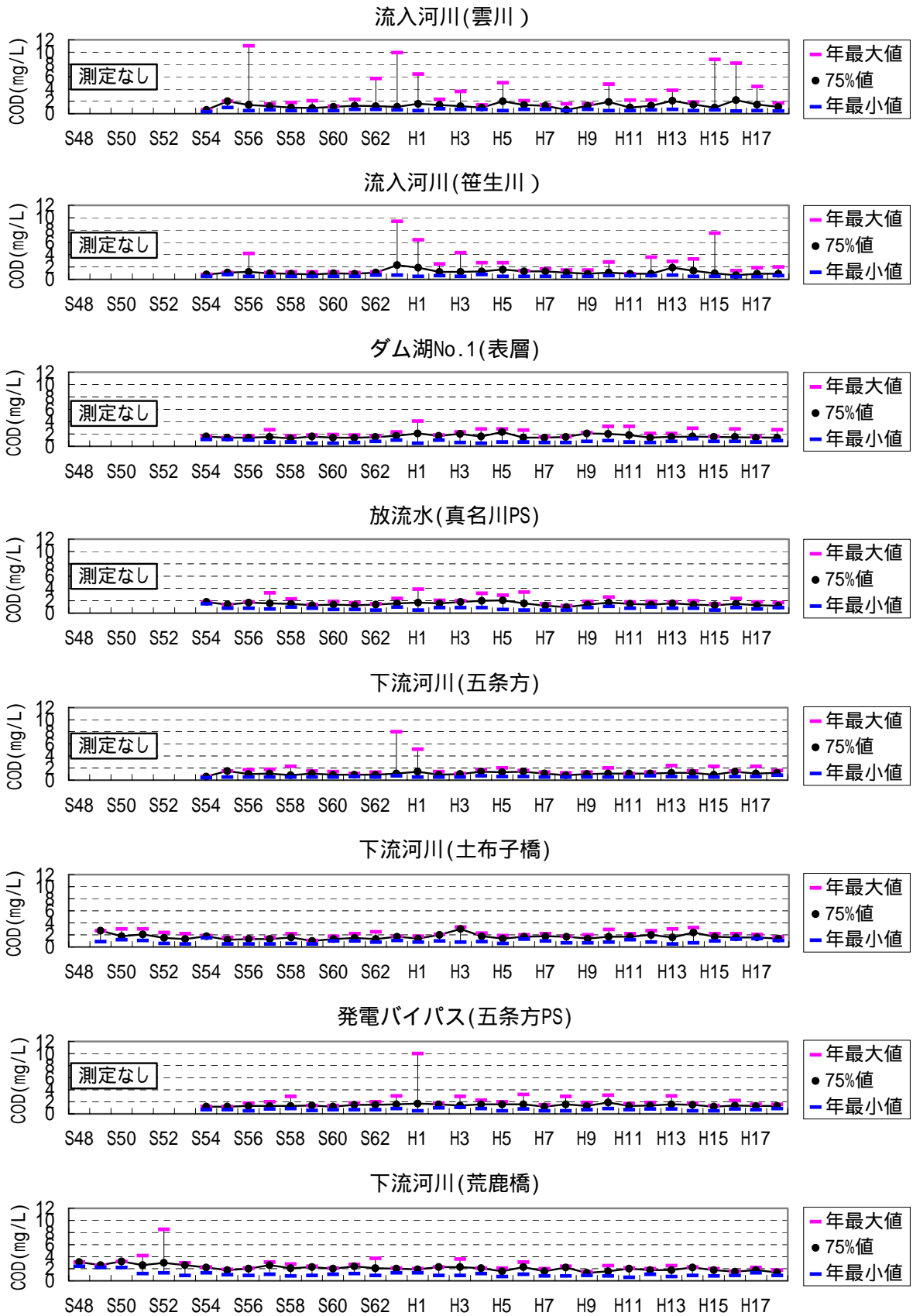


河川の環境基準値(A 類型、B 類型)をグラフ中に表示している。

平均値は幾何平均  $\sqrt[n]{x_1 \times x_2 \times \dots \times x_n}$  で算定している。 (出典：資料5-13,14)

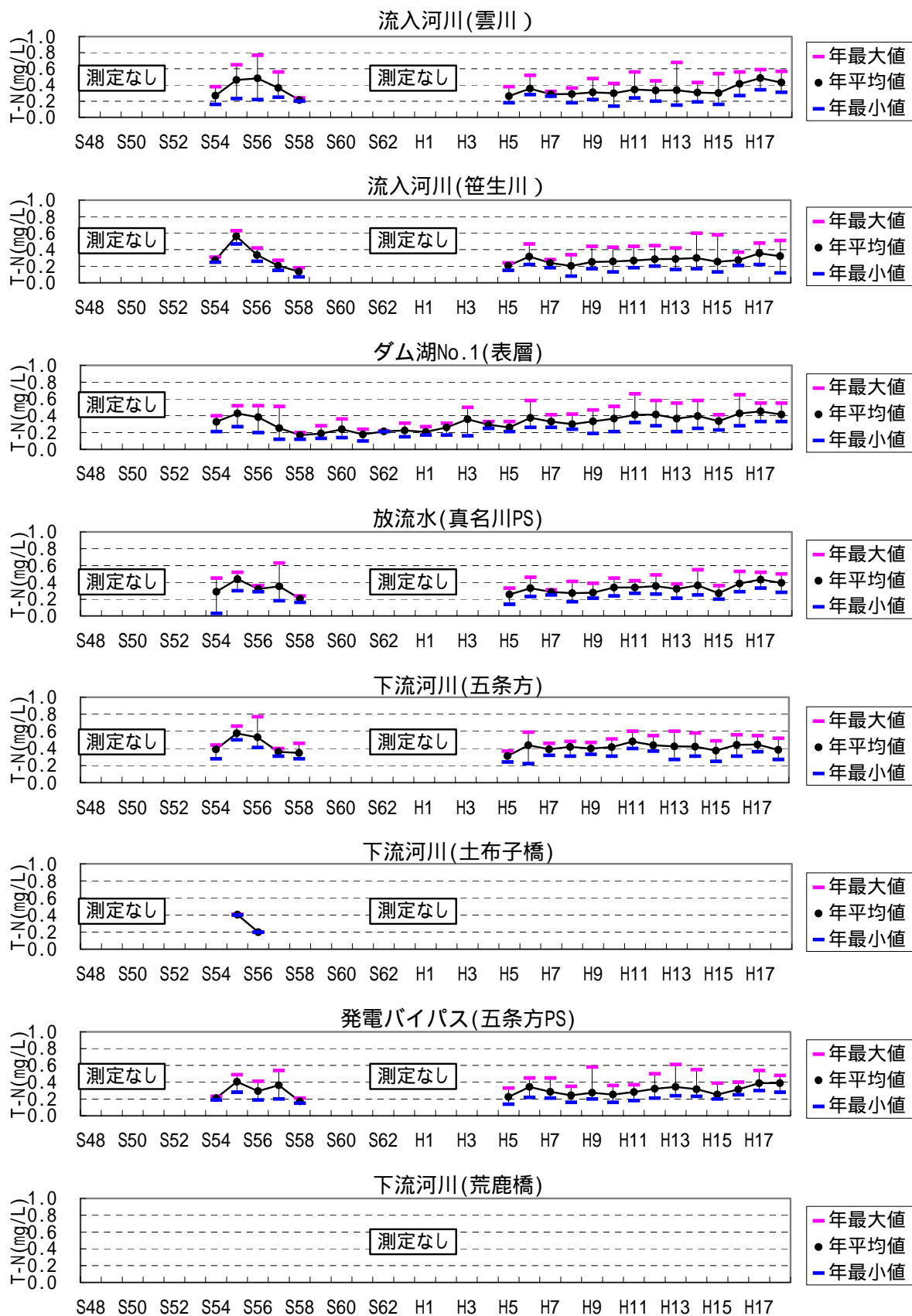
図 5.3-9(6) 地点ごと流入・放流大腸菌群数の経年変化(幾何平均)





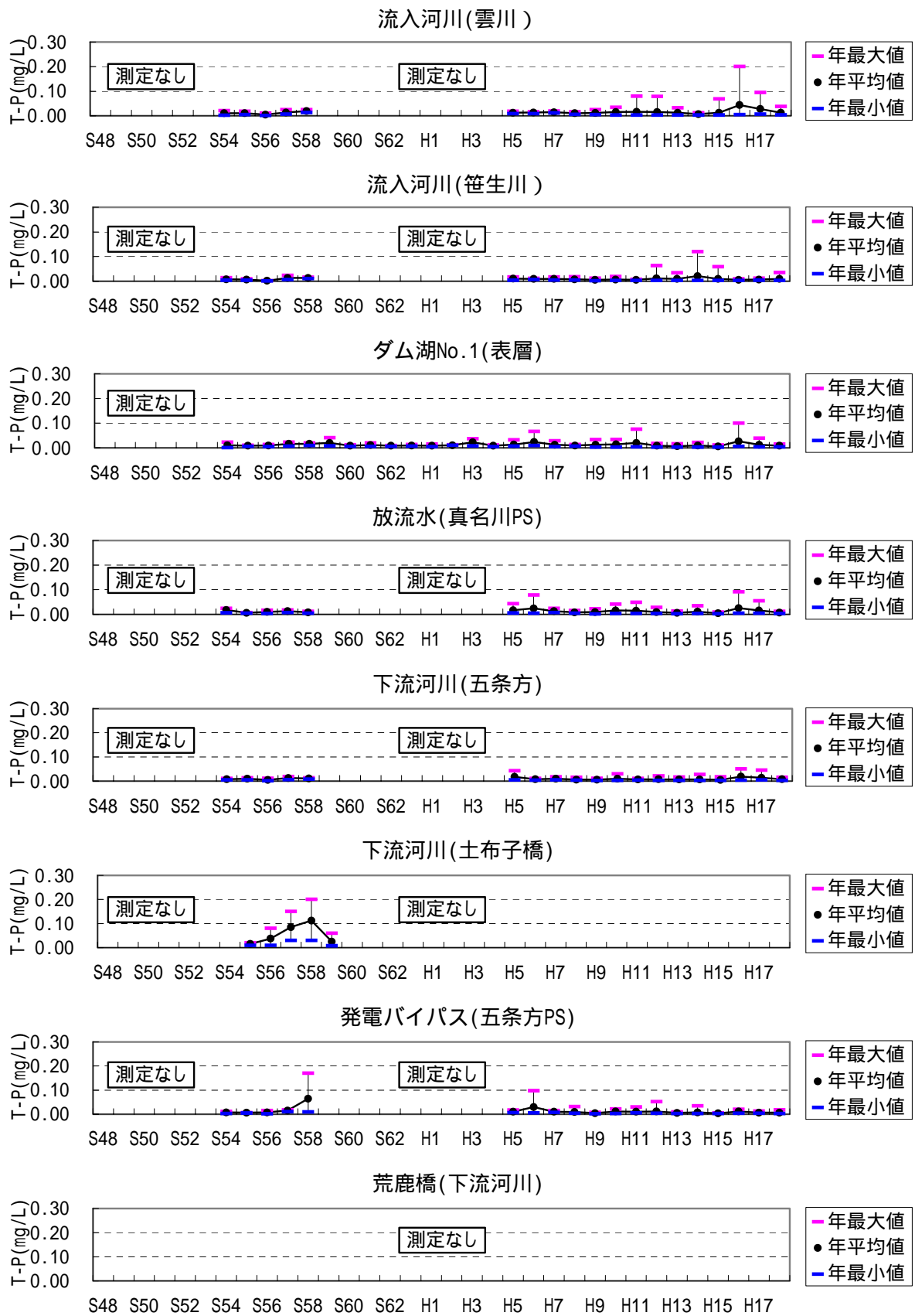
(出典：資料5-13,14)

図 5.3-9(7) 地点ごと流入・放流 COD75%値の経年変化



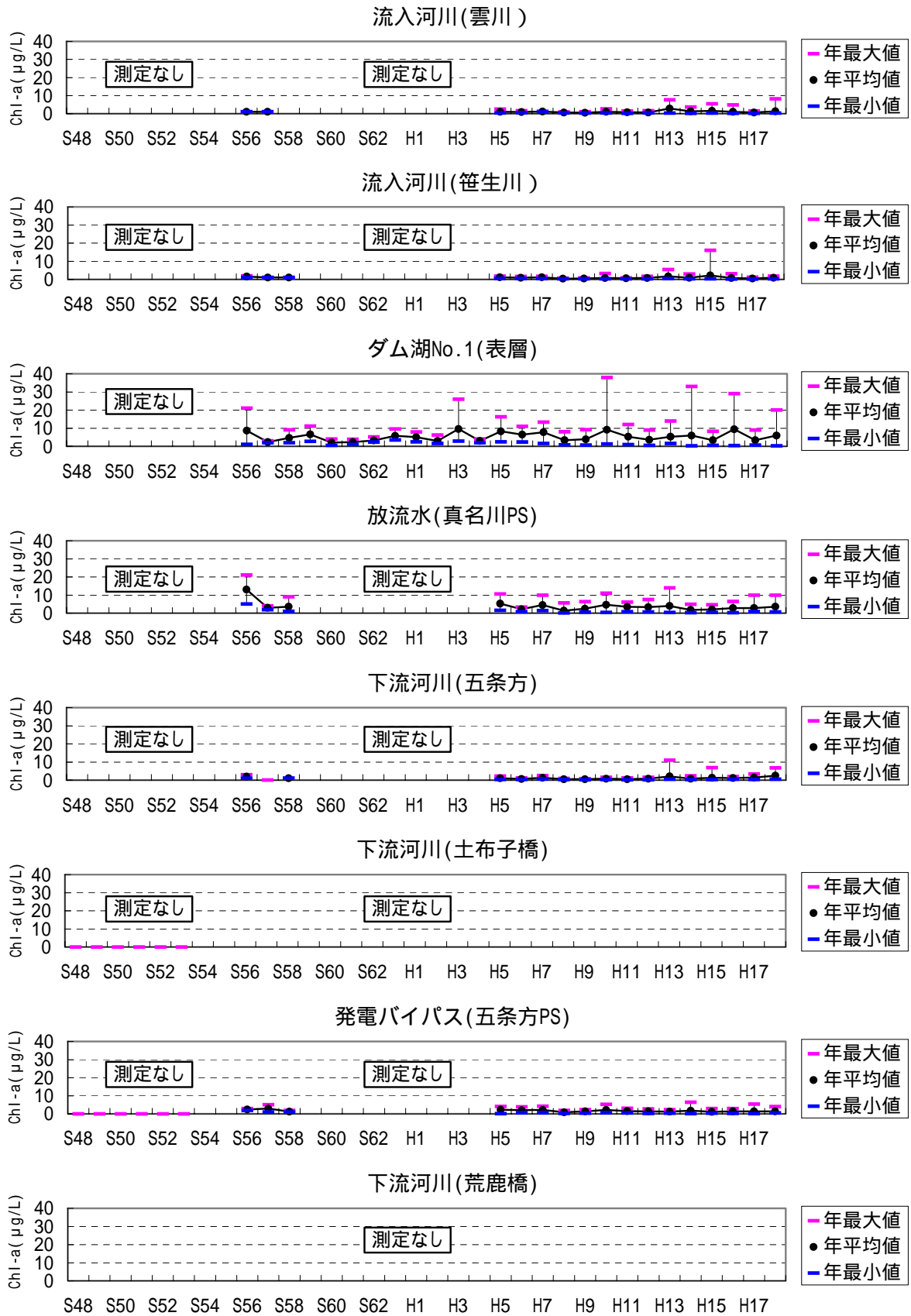
(出典 : 資料 5-13,14)

図 5.3-9(8) 地点ごと流入・放流 T-N 年平均値の経年変化



(出典：資料5-13,14)

図 5.3-9(9) 地点ごと流入・放流 T-P 年平均値の経年変化



(出典：資料5-13,14)

図 5.3-9(10) 地点ごと流入・放流クロロフィル a 年平均値の経年変化

(2)貯水池内

真名川ダム貯水池の水質について、調査地点ダム湖 NO.1 の表層、中層、底層の3層を対象に、10項目の経年変化をとりまとめた。

経年変化のとりまとめを、表 5.3-3 及び図 5.3-10 に示す。

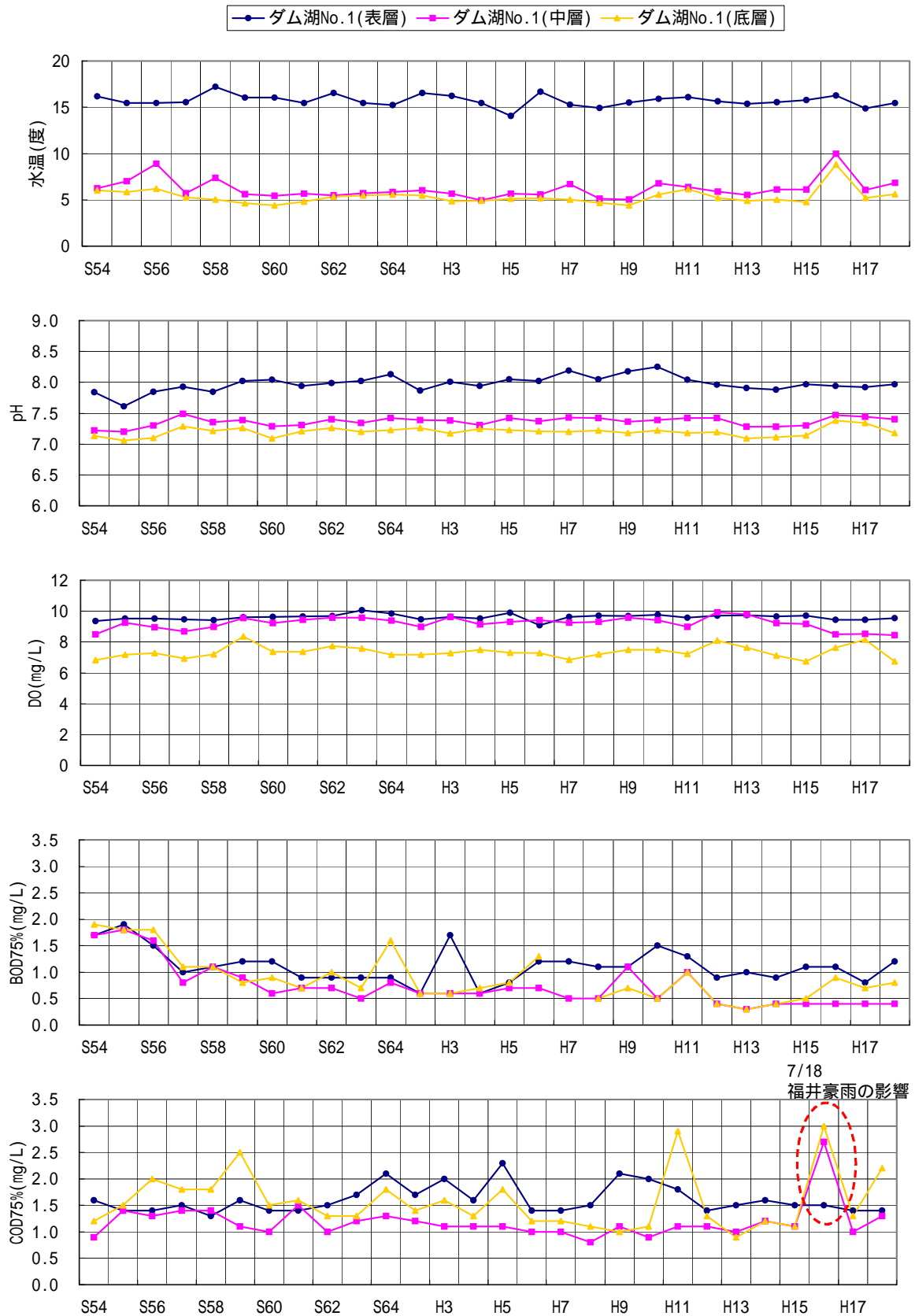
経年的な変化としては、BOS75%値が横ばいか、やや減少傾向にあり、T-N に増加傾向が認められ、その他の項目(水温、pH、DO、COD75%値、SS、大腸菌群数、T-P、クロロフィル a)については経年的な増減の傾向は認められない結果となっている。

表 5.3-3 貯水池内(ダム湖 NO.1)平均水質の経年変化とりまとめ(昭和 54 年～平成 18 年)

水質項目	単位	平均値(S54～H17)				内容
		湖沼類型指定なし				
		ダム湖 No.1 (表層)	ダム湖 No.1 (中層)	ダム湖 No.1 (底層)	三層 平均	
水温		15.7	6.2	5.3	9.1	経年的な変化傾向は認められず、表層は 14～17、中層は 5～10、底層は 4～9 の間で推移している。
pH	-	8.0	7.4	7.2	7.5	管理開始後数年間は上昇傾向であったがその後安定し、表層が 8 前後、中層が 7.4 前後、底層が 7.2 前後で推移している。
DO	mg/L	9.6	9.2	7.4	8.7	経年的な変化傾向は認められず、表層は 10mg/L 前後、中層は 9mg/L 前後、底層は 7～8mg/L の間で推移している。
BOD75%	mg/L	1.1	0.8	0.9	0.9	各層とも管理開始後昭和 60 年頃まで減少傾向に在り 2mg/L 弱から 1mg/L 前後まで低下している。その後表層は横ばい傾向で、中底層は横ばいかやや減少傾向となっている。
SS	mg/L	4.1	6.6	14.5	8.4	各層ともに経年的な変化傾向は認められず、表層は 3～50mg/L、中層は 2～36mg/L、底層は 2～12mg/L の範囲となっている。 また、平成 16 年は、7/18 福井豪雨以降の度重なる出水の影響を受け中層・底層で高濃度となっている。
大腸菌群数	MPN/100mL	131	97	83	104	管理開始以降、各層とも概ね 10～300MPN/100mL で推移していたが、平成 13 年以降増加傾向に転じ、平成 16 年は 7/18 の福井豪雨以降の度重なる出水影響を受け 550～1250 MPN/100mL のピークが認められるものの、平成 17 年には低減する。
COD75%	mg/L	1.6	1.2	1.5	1.4	経年的な変化傾向は認められず、表層は概ね 1～2mg/L、中層は 1～3mg/L、底層は 0.8～3mg/L の間で推移している。 また、平成 16 年は 7/18 福井豪雨以降の度重なる出水影響を受け、中層・底層で高濃度となっている。
T-N	mg/L	0.34	0.4	0.47	0.4	表層が最も低く、次いで中層、底層の順に高い。また各地点ともに昭和 55 年(1980)から昭和 58 年(1983)まで減少傾向にあったが、昭和 60 年頃を境に増加傾向に転じている。
T-P	mg/L	0.012	0.017	0.026	0.018	各層ともに経年的な変化傾向はなく、出水などの影響を受け特異に高い年を除けば 0.05mg/L～0.03mg/L の範囲で推移している。
クロロフィル a	μg/L	5.3	0.9	0.6	2.3	経年的には横ばい傾向であり、表層は 2～9μg/L、中底層は概ね 1μg/L 前後で推移している。

表中数値は、各年の平均値を算定し、それを昭和 54 年～平成 18 年で平均した値である。

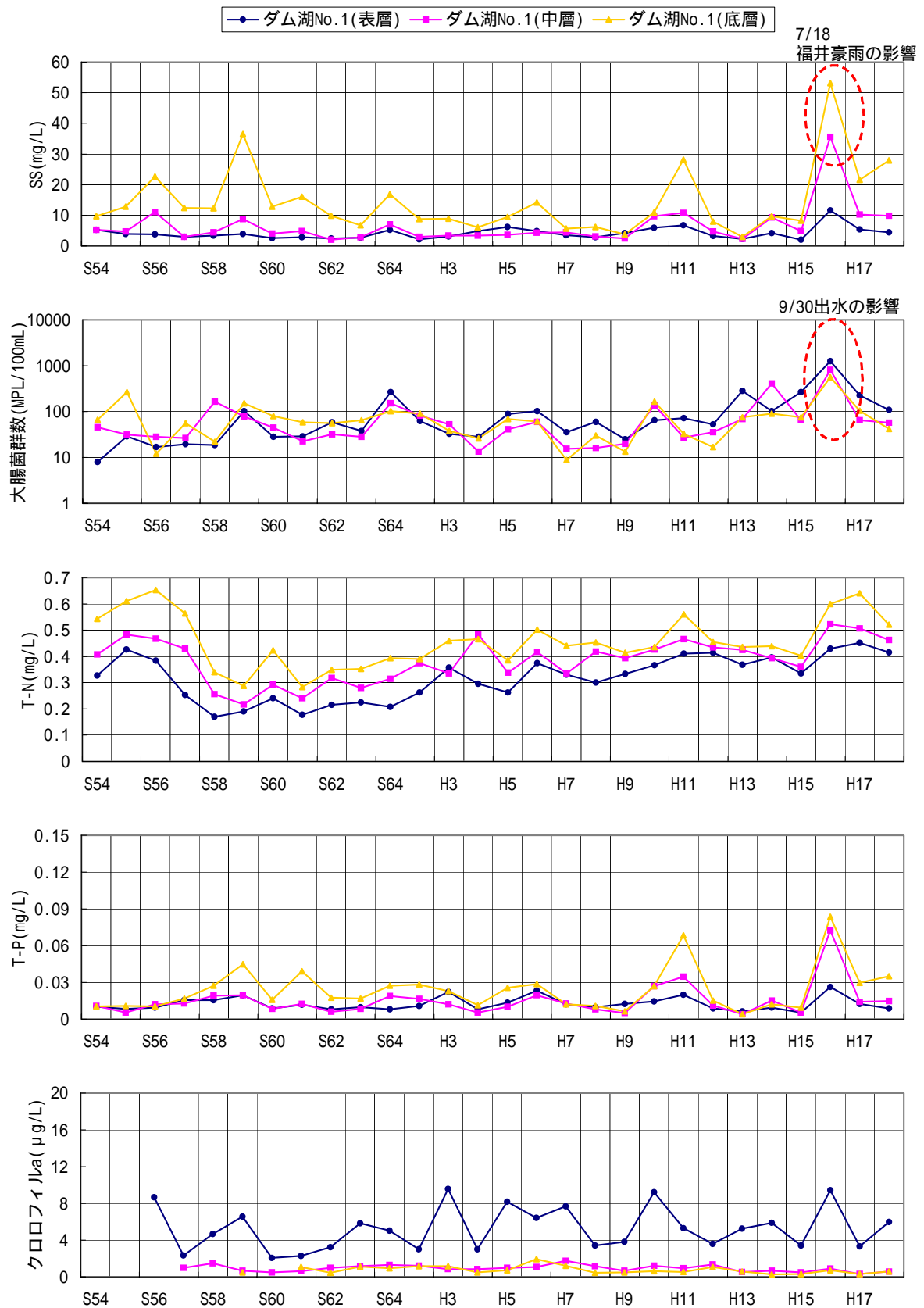
真名川ダムは湖沼の環境基準の類型指定はなされていない。



真名川ダムは湖沼の環境基準の指定がなされていない。

(出典：資料5-13)

図 5.3-10(1) 貯水池水質の経年変化(ダム湖 No.1)



真名川ダムは湖沼の環境基準の指定がなされていない。

(出典：資料 5-13)

図 5.3-10(2) 貯水池水質の経年変化(ダム湖 No.1)

### 5.3.3. 水質の経月変化

流入河川、貯水池内、及び下流河川における水質の経月変化のとりまとめを表 5.3-4 及び図 5.3-11～図 5.3-20 に示す。

流入河川と下流河川で水質の経月的な変化を比較すると、水温で夏期に放流水温の低下が見られる場合がある。また、pH は夏期に流入河川(雲川)で 8.5 を超過することがあり、放流水(真名川 PS)・下流河川(五条方)では同様の傾向であるが、やや低い値を示している。SS については経月的な変化からは出水後に放流水が一時的に高くなる場合が見られる。クロロフィル a は流入河川に対し、特に夏期に放流水(真名川 PS)で高くなる傾向が伺えた。その他の項目(DO、BOD、大腸菌群数、COD、T-N、T-P、クロロフィル a)については、出水などの影響を受けた場合以外では、環境基準を満たす良好な水質であり、流入と概ね同様の傾向を示している。

表 5.3-4(1) 水質の経月変化とりまとめ(流入河川及び下流河川)

水質項目 (環境基準値)	流入河川	放流水・下流河川
	類型指定なし	河川 A 類型
	雲川、笹生川	真名川 PS、五条方、荒鹿橋
水温	冬期から夏期で概ね 3～25 の範囲で季節変動している。	流入河川と概ね同じ変動傾向を示しており、変動特性に大きな差は認められないが、放流水(真名川 PS)や下流河川(五条方、土布子橋)では夏期に流入河川に対してやや低い値となる場合が見られる。
pH (6.5 以上 8.5 以下)	流入が高く夏期から秋期に上昇する変化特性が認められ、雲川はこの時期 8.5 を超過することがある。	夏期に上昇する変化特性が認められ、流入支川よりやや低い値で推移している。
DO (7.5mg/L 以上)	夏期に低く、冬期に高い水温に応じた季節変動を示しており、概ね 8～12mg/L 程度で推移している。	流入河川と同様、夏期に低く、冬期に高い水温に応じた季節変動を示しており、概ね 8～12mg/L 程度で推移している。
BOD (2mg/L 以下)	顕著な季節変化はなく、概ね 0.5mg/L 以下で推移している。	春期から夏期にやや高い季節変動を示しており、九頭竜川合流後の下流河川(荒鹿橋)を除いて、近年は概ね 0.5mg/L 前後で推移している。
SS (25mg/L 以下)	出水時一時的に高くなる期間が見られるが、平常時は概ね 1mg/L 以下で推移している。	出水後に流入水質を上回る場合がみられる。平常時は概ね 1～4mg/L 前後で推移している。
大腸菌群数 (1000MPN/100m/L 以下)	夏期に高くなる傾向があり近年はしばしば 5000MPN/mL を上回っている。	夏期に高くなる傾向があるが、九頭竜川合流後の下流河川(荒鹿橋)を除いては流入に近い値で推移している。なお、下流河川(荒鹿橋)は他の地点と比較して概ね高い値で推移している。
COD	出水時一時的に高くなる期間が見られるが、平常時は概ね 1mg/L 前後で推移している。	出水時一時的に高くなる期間が見られるが、平常時は概ね 1mg/L 前後で推移している。
T-N	概ね夏期に低く冬期に高くなる傾向があり、0.2～0.6mg/L 程度で推移している。	流入水質と同じ傾向を示している。
T-P	出水時一時的に高くなる期間が見られるが、平常時は概ね 0.01mg/L 以下で推移している。	出水時一時的に高くなる期間が見られるが、平常時は概ね 0.01mg/L 以下で推移している。
クロロフィル a	まれに 10 µg/L を超えることがあるが、概ね 1 µg/L 以下で推移している。	春期から夏期にかけて上昇する傾向があり、概ね 5 µg/L～15 µg/L 程度まで上昇する。まれに 25 µg/L を超えることがある。

表中( )は、河川の環境基準値(A 類型)を記載している。



貯水池内水質の経月的な変化では、貯水池表層部においてクロロフィル a が初夏～秋期に増加することがあり、これに応じて pH の上昇、COD の上昇が認められる。また、SS は出水後に上昇が認められた。

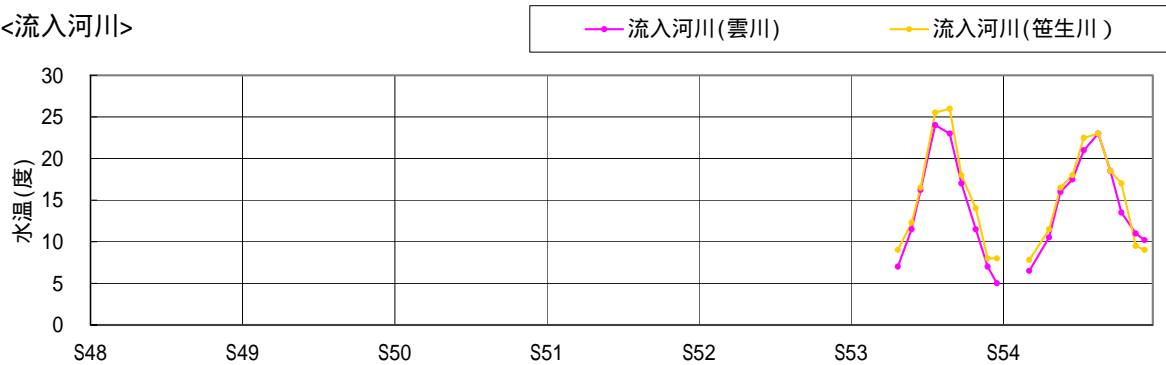
表 5.3-4(2) 水質の経月変化とりまとめ(貯水池内)

水質項目	湖沼類型指定なし		
	ダム湖 NO.1(表層)	ダム湖 NO.1 (中層)	ダム湖 NO.1 (底層)
水温	概ね 8 月に最高水温となり、年間では 4～27 程度で推移している。	秋期以降で最高水温となることが多く、年間では 4～16 程度で推移している。	年間で概ね 4～9 で推移することが多いが、大規模な出水後中層と同一水温となる場合も認められる。
pH	夏期に上昇する傾向にあり、8.5 を越える期間も見られるが、7～8.5 程度で推移している。夏期の上昇は植物プランクトンの光合成によると推察される。	表層ほど大きな変動はなく、7～8 程度で推移している。	中層と概ね同様の変動特性であり、中層よりわずかに低く変動推移している。
DO	夏期に低く、冬期に高い変動特性であり、8～12mg/L 程度で推移している。	表層と概ね同じ変化を示すが、低下時期が秋期及び冬期にずれ込む傾向にあり、7～4mg/L 程度まで低下する。	表層と概ね同じ変化を示すが、低下時期が秋期及び冬期にずれ込む傾向にあり、4～2mg/L 程度まで低下する。
BOD	夏期に一時的に上昇し 2～3mg/L の値を示すことがあるが、それ以外の期間は 0.5～1mg/L 程度で推移している。	夏期に大きく上昇すること少なく、近年は概ね 0.5mg/L 前後で推移している。	中層と概ね同様の変化を示し、近年は 0.5mg/L 未満で変化することが多い。
SS	出水による上昇が見られるほかは、概ね 2～10mg/L の範囲で推移している。	平成 16 年の 7/18 の福井豪雨以降の度重なる出水による上昇が見られる他は概ね表層と同じ傾向を示しており、2～10mg/L 程度で推移している。	表層・中層に比べて高い値を示しており、特に平成 16 年は 7/18 福井豪雨以降の度重なる出水に伴う上昇で 50mg/L を越える場合も認められる。
大腸菌群数	通常 100 MPN/100mL 以下で推移するが、夏期に高い値を示すことがある。また、平成 16 年は 7/18 福井豪雨以降の度重なる出水の影響を受け、9200MPN/100mL と高い値を示した。	表層と同様、通常 100 MPN/100mL 以下で推移するが、夏期に高い値を示すことがある。また、平成 16 年は 7/18 福井豪雨以降の度重なる出水の影響を受け、5400MPN/100mL と高い値を示した。	表層と同様、通常 100 MPN/100mL 以下で推移するが、夏期に高い値を示すことがある。
COD	大きな変動は無く、概ね 0.5～3mg/L 程度で推移している。なお、クロロフィル a の増加に従い夏期に 1mg/L 程度増加することがある。	大きな変動は無く、概ね 0.5～4mg/L 程度で推移している。なお、平成 16 年は 7/18 の福井豪雨の影響を受け、高濃度の値を示した。	大きな変動は無く、概ね 0.5～4mg/L 程度で推移している。なお、平成 16 年は 7/18 福井豪雨以降の度重なる出水の影響を受け、高濃度の値を示した。
T-N	大きな変動はなく、近年は 0.2～0.6mg/L 程度で推移している。	大きな変動はなく、近年は 0.2～0.9mg/L 程度で推移している。	大きな変動はなく、近年は 0.2～0.7mg/L 程度で推移している。
T-P	出水による上昇が見られるほかは、概ね 0.01mg/L 程度で推移している。	出水による上昇が見られるほかは、概ね 0.01mg/L 程度で推移している。	出水による上昇が見られるほかは、概ね 0.01mg/L 程度で推移している。
クロロフィル a	初夏から秋期に 25 µg/L を越えることがあるが、夏期は概ね 5～10 µg/L 程度で推移している。	表層に見られる濃度上昇はほとんどなく、2 µg/L 以下で推移している。	表層に見られる濃度上昇はほとんどなく、1 µg/L 以下で推移している。

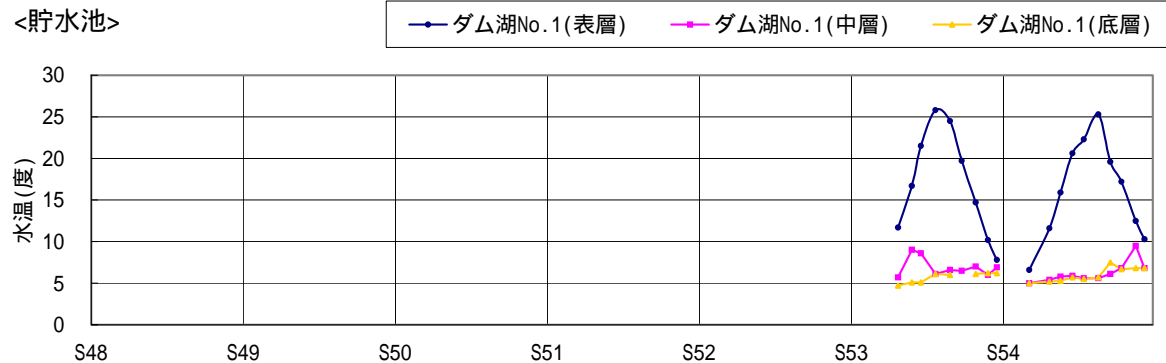
真名川ダムは湖沼の環境基準の指定がなされていない。



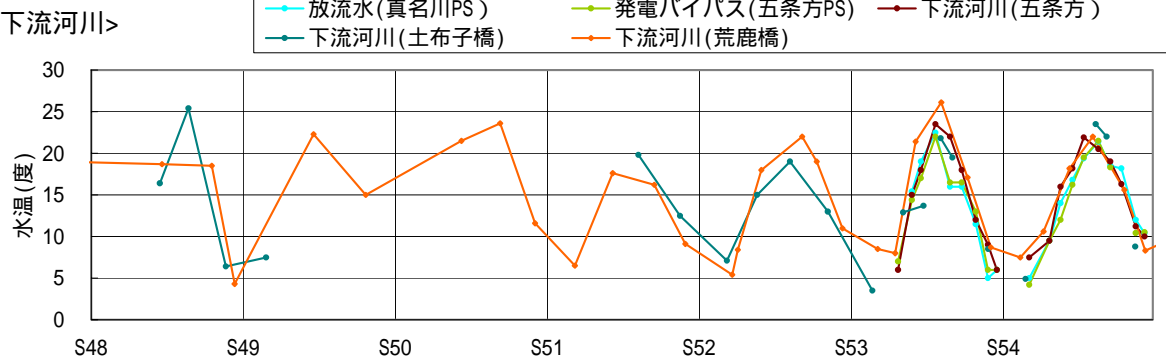
<流入河川>



<貯水池>

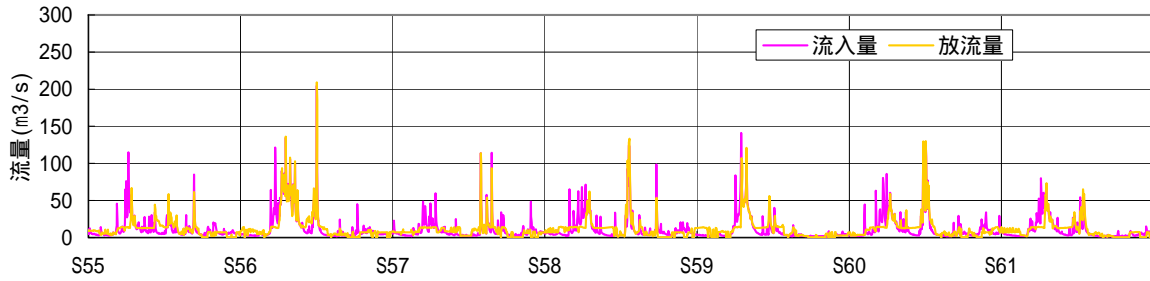
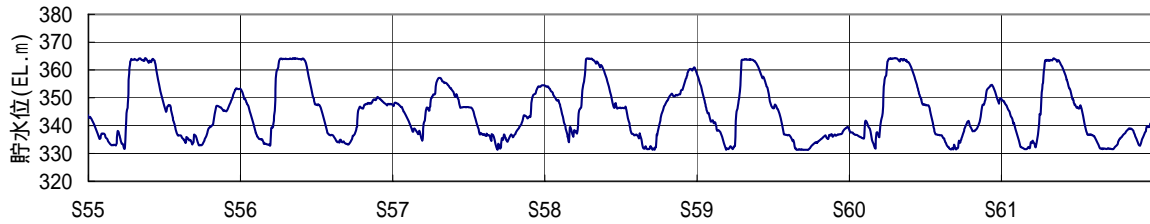


<下流河川>

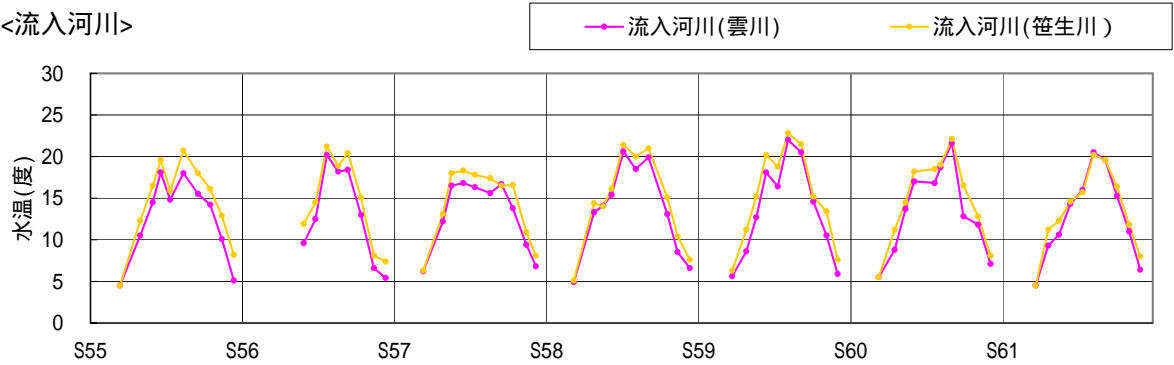


(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

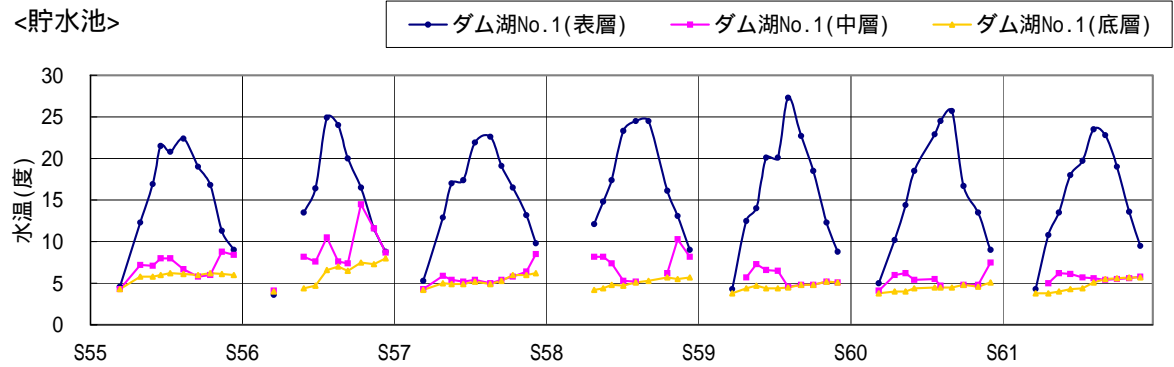
図 5.3-11(1) 流入・放流水質の経月変化(水温)



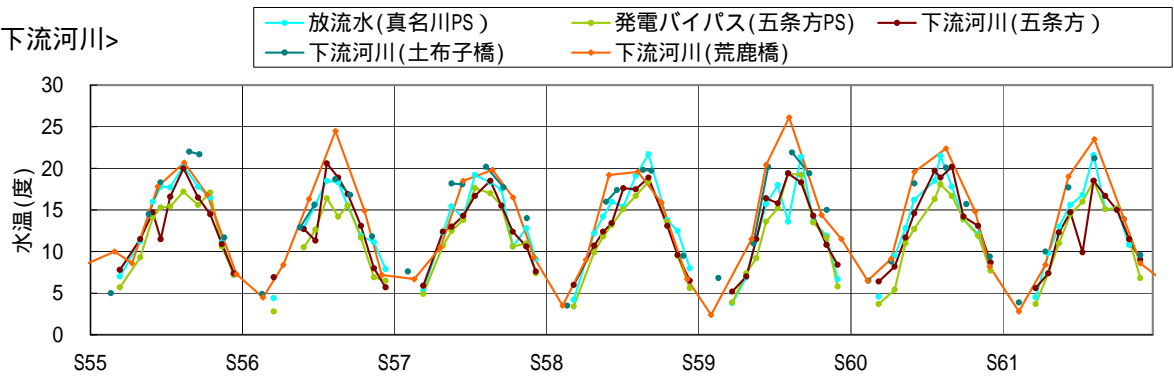
<流入河川>



<貯水池>

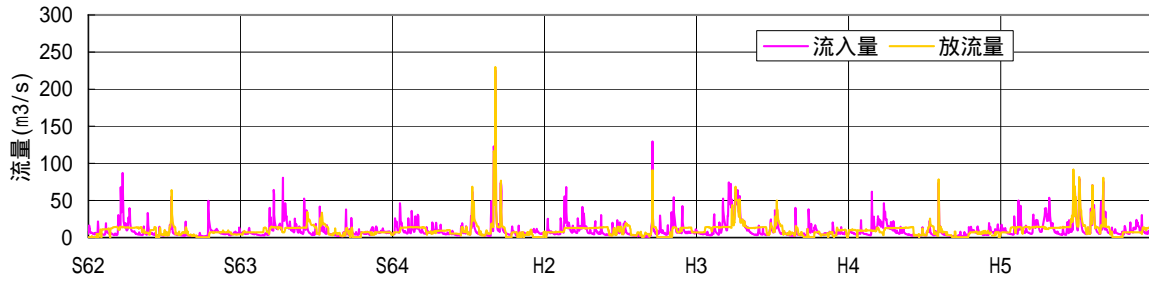
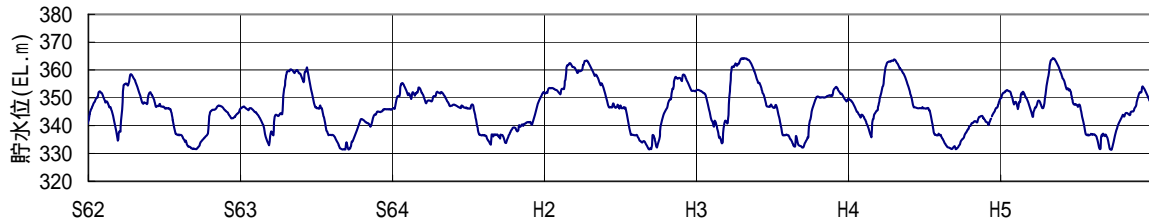


<下流河川>

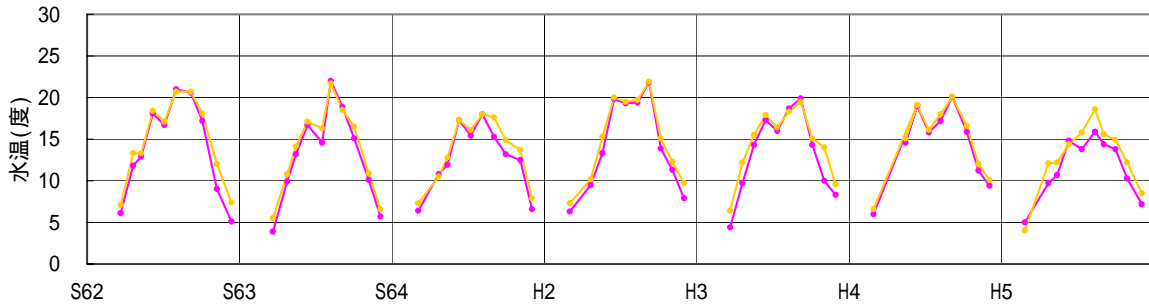


(出典：資料 5-8,9,13,14)

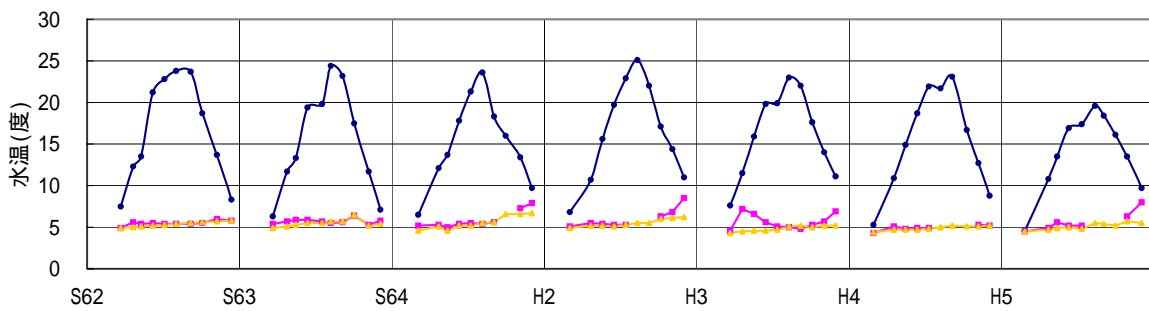
図 5.3-11(2) 流入・放流水質の経月変化(水温)



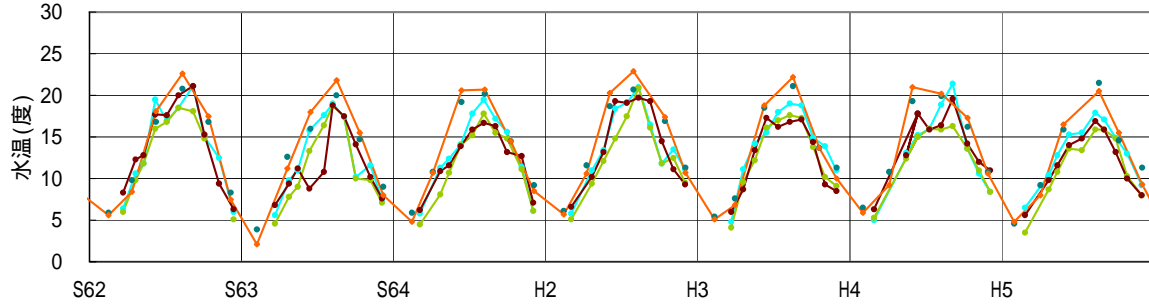
<流入河川>



<貯水池>

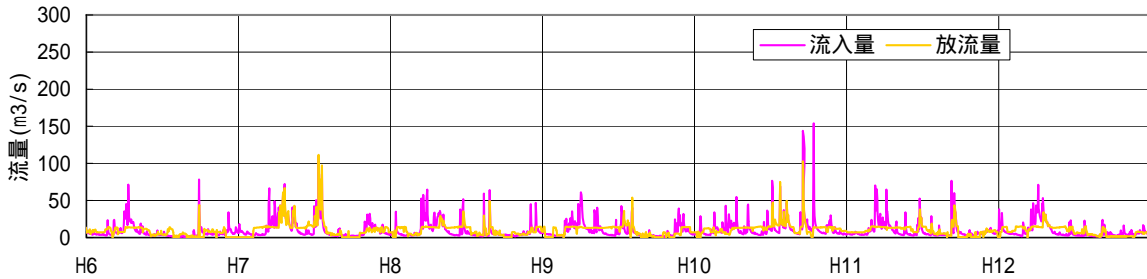
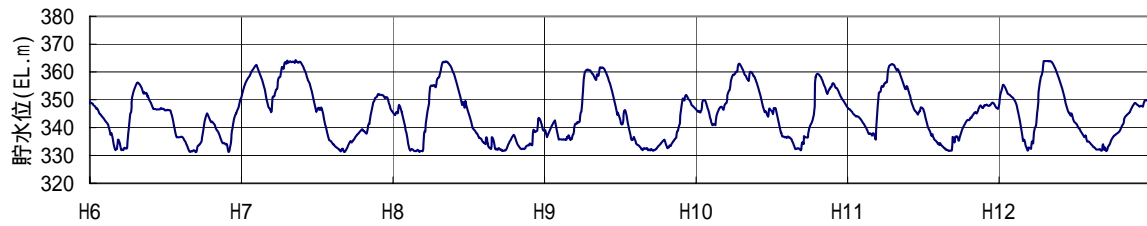


<下流河川>

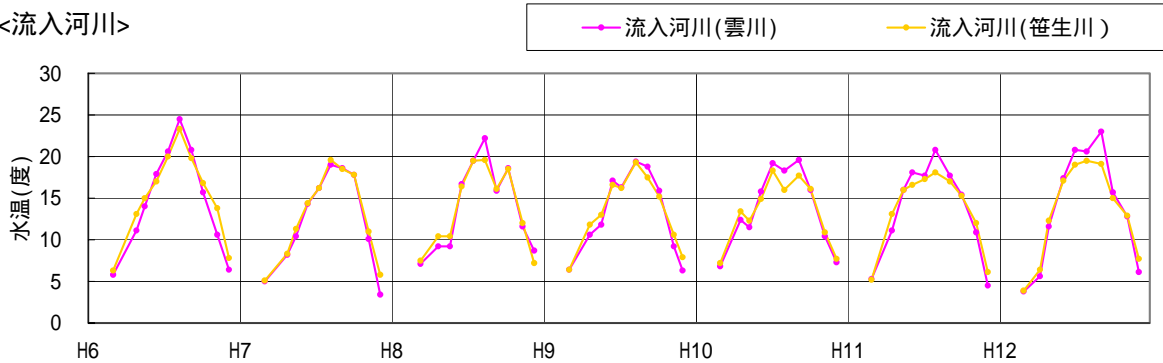


(出典：資料 5-8,9,13,14)

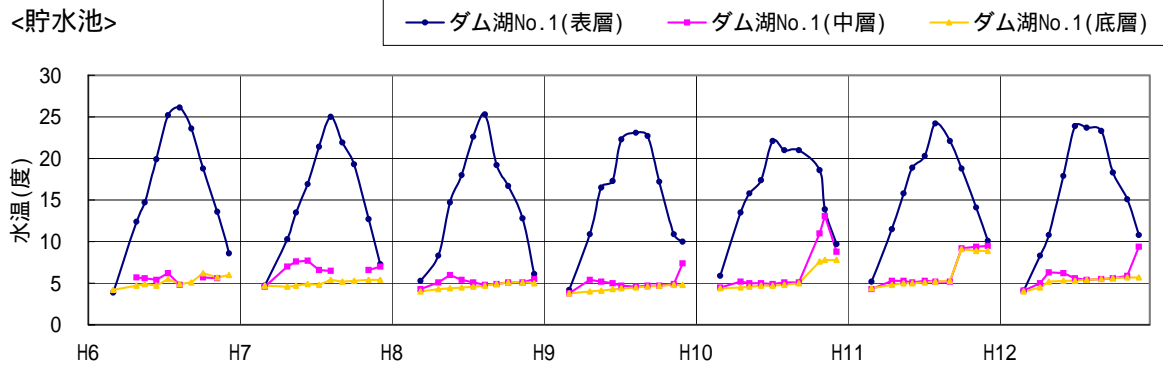
図 5.3-11(3) 流入・放流水質の経月変化(水温)



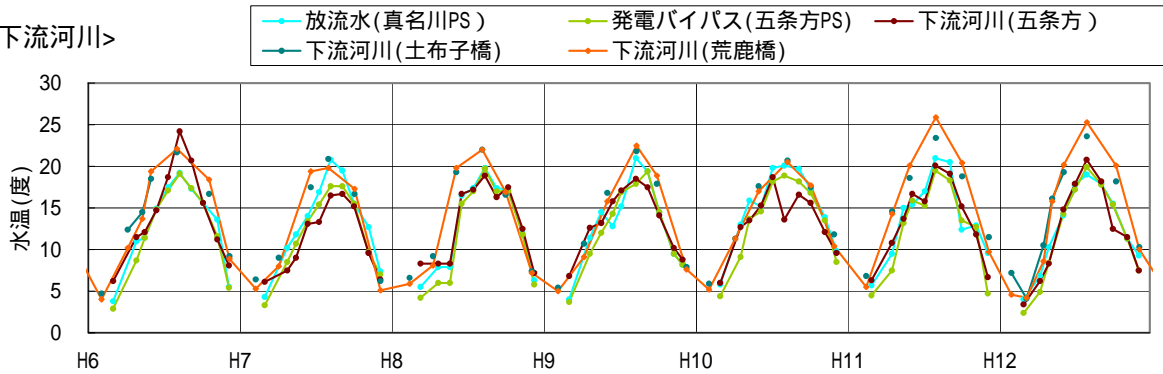
<流入河川>



<貯水池>

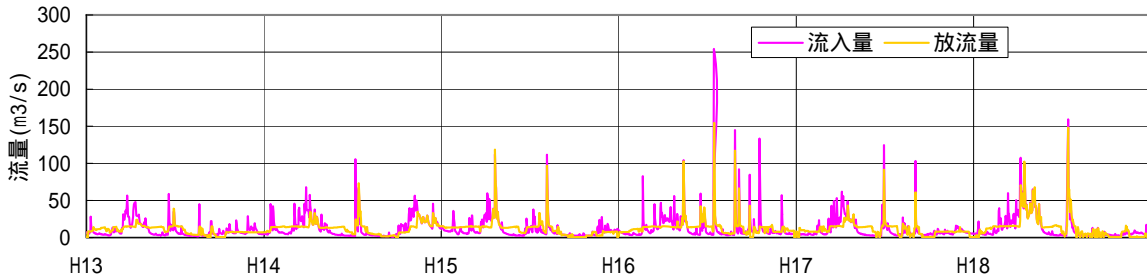
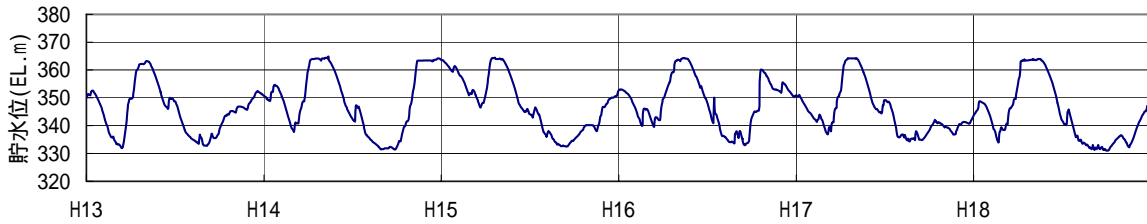


<下流河川>

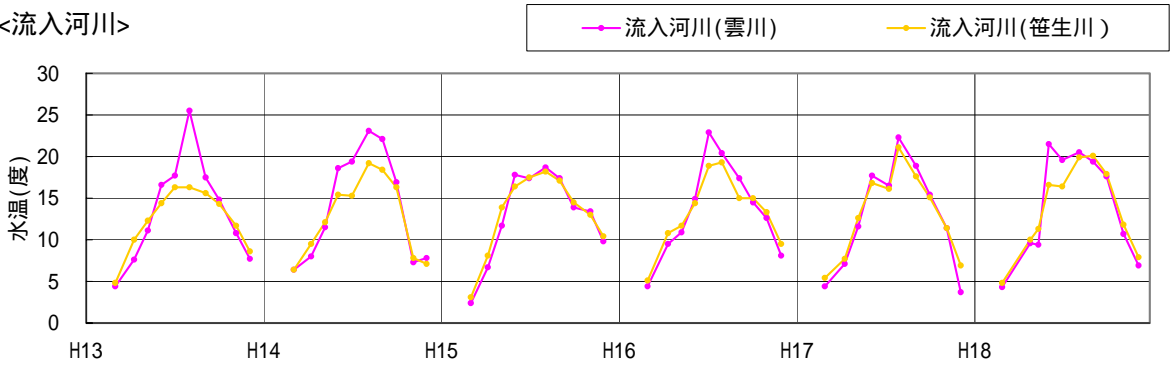


(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

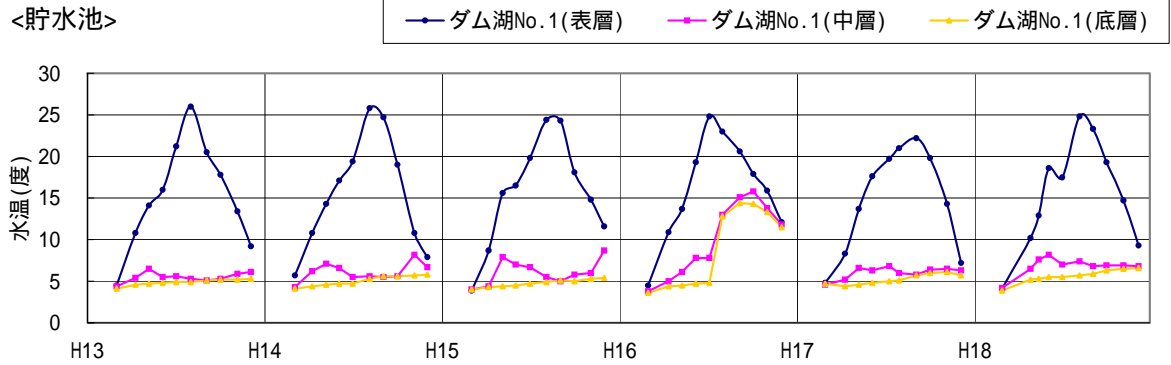
図 5.3-11(4) 流入・放流水質の経月変化(水温)



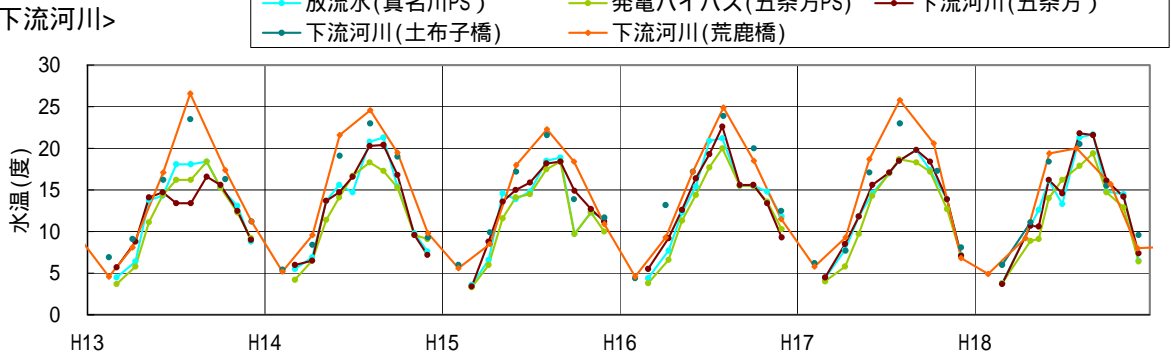
<流入河川>



<貯水池>



<下流河川>

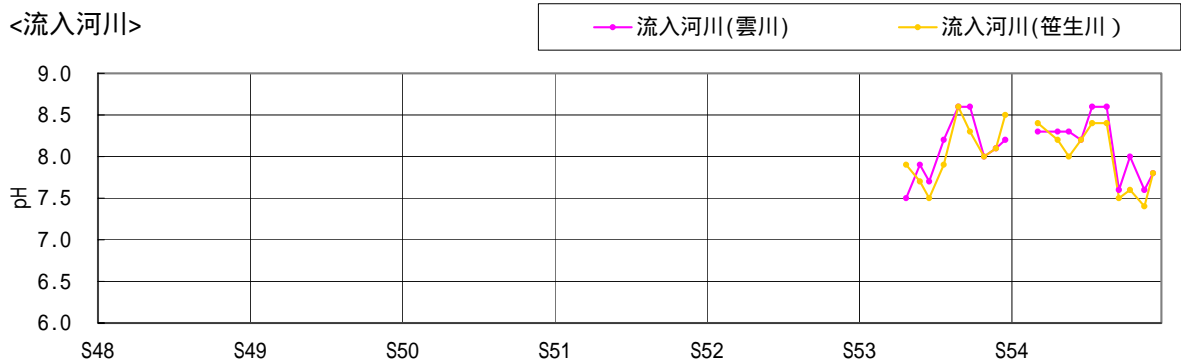


(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

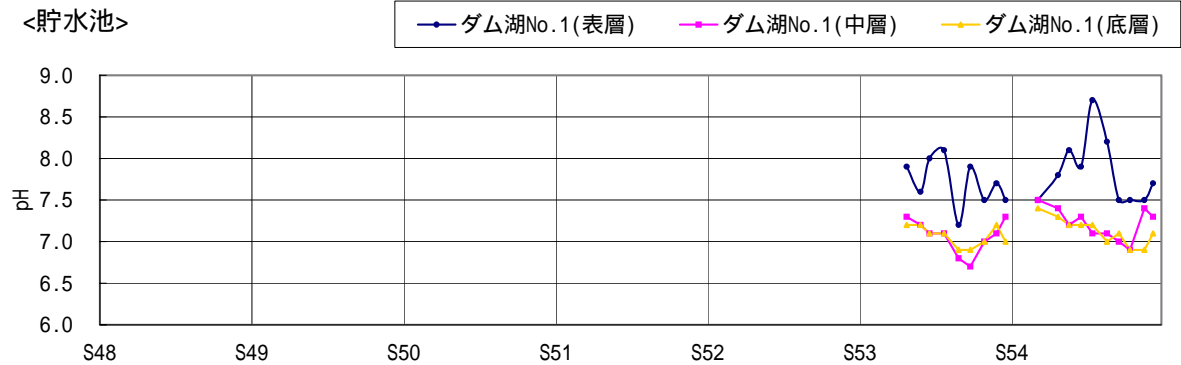
図 5.3-11(5) 流入・放流水質の経月変化(水温)



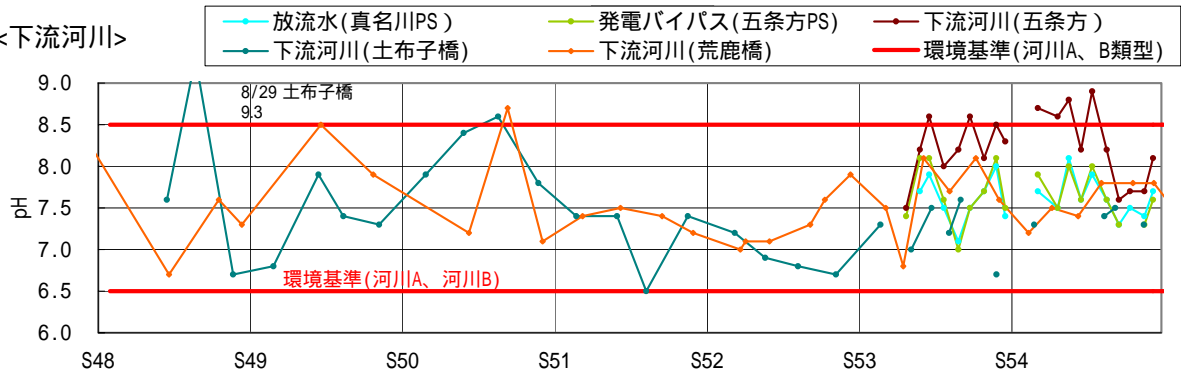
<流入河川>



<貯水池>



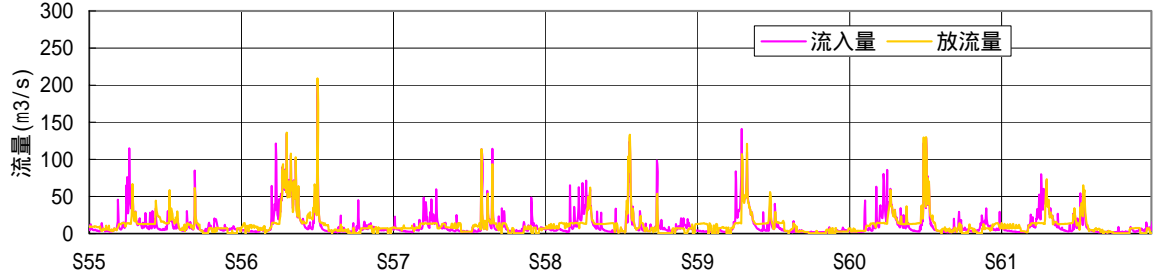
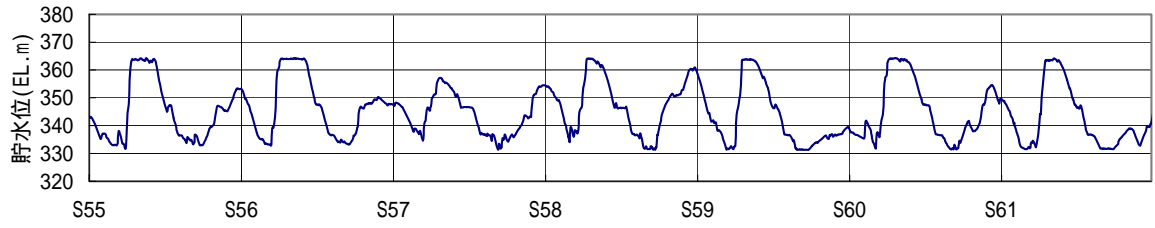
<下流河川>



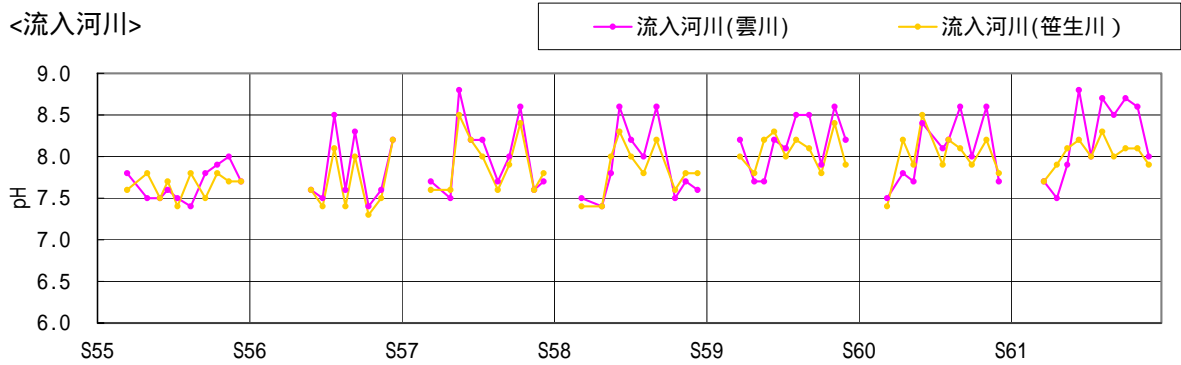
河川の環境基準値(A 類型、B 類型)を記載している。

(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

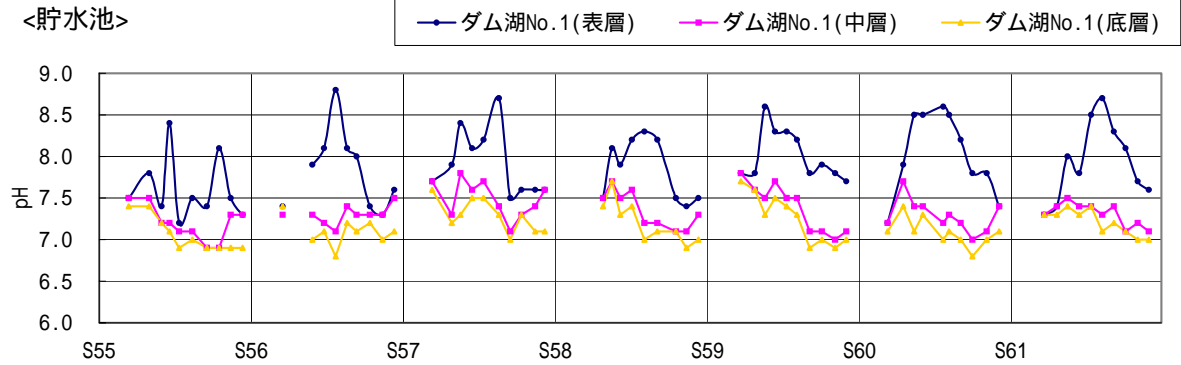
図 5.3-12(1) 流入・放流水質の経月変化(pH)



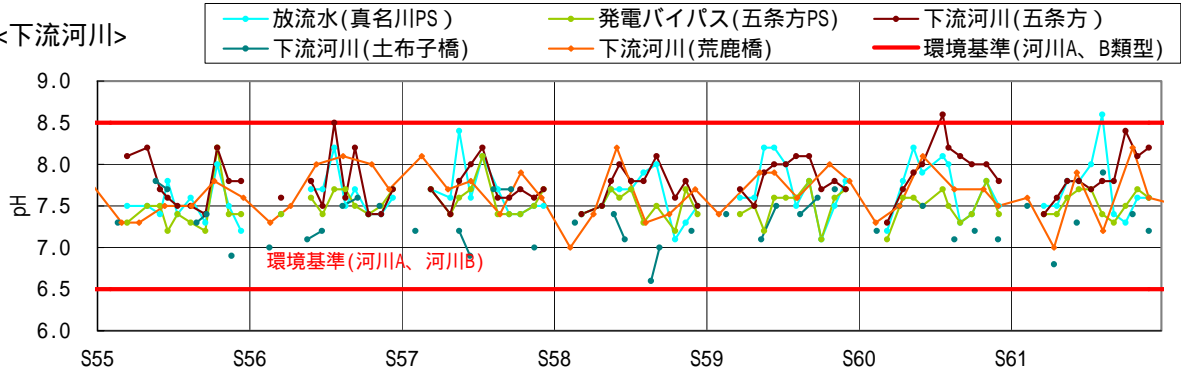
<流入河川>



<貯水池>



<下流河川>

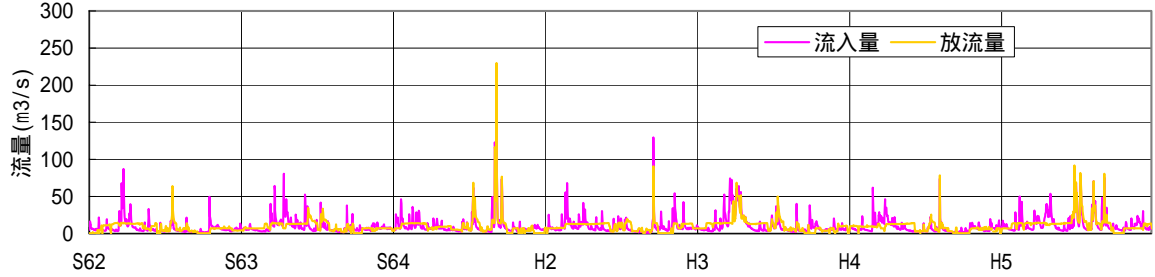
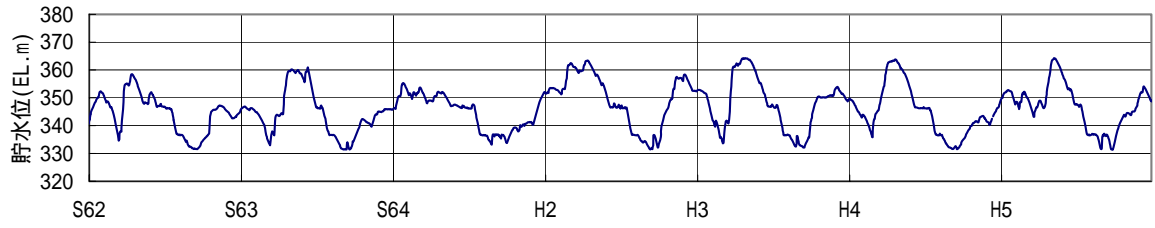


河川の環境基準値(A 類型、B 類型)を記載している。

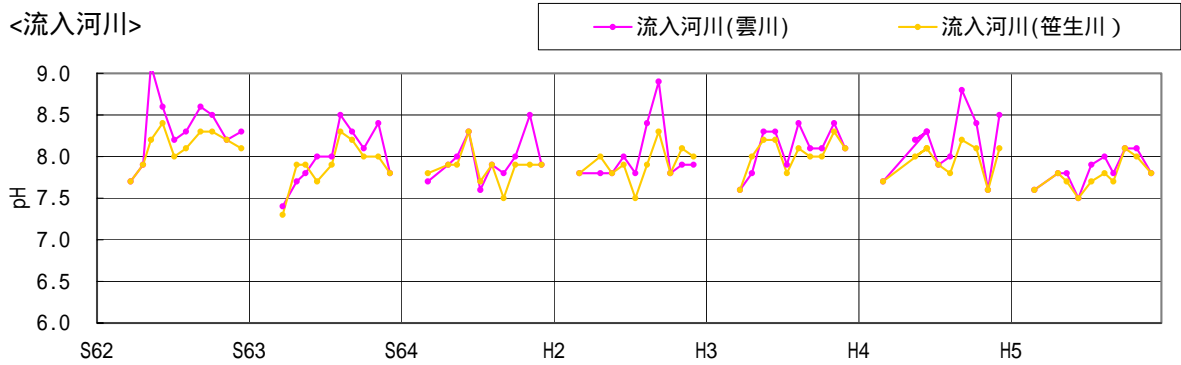
(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

図 5.3-12(2) 流入・放流水質の経月変化(pH)

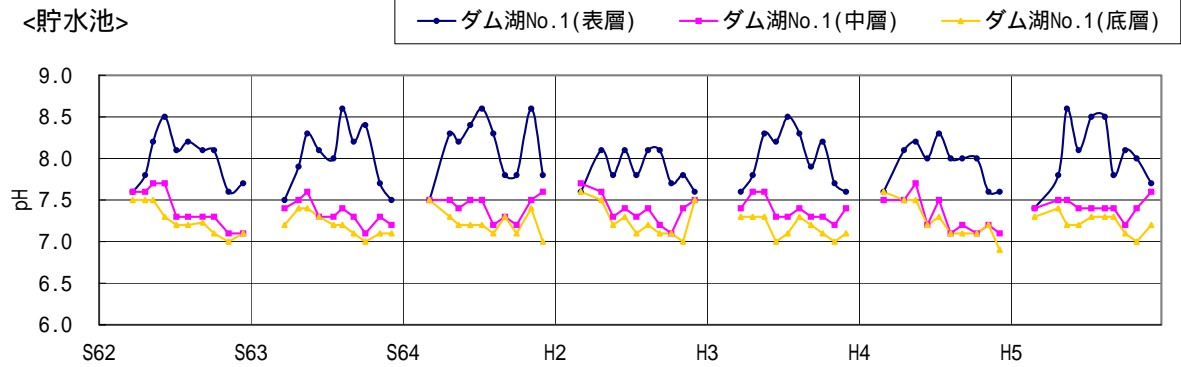




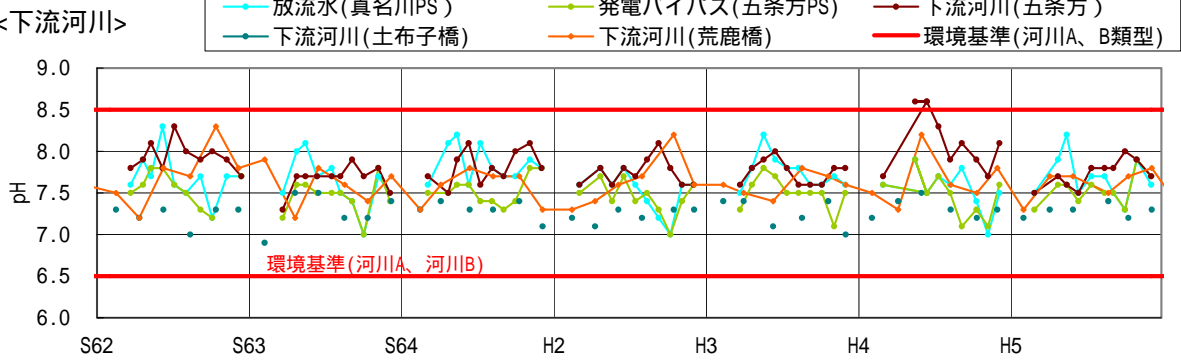
<流入河川>



<貯水池>



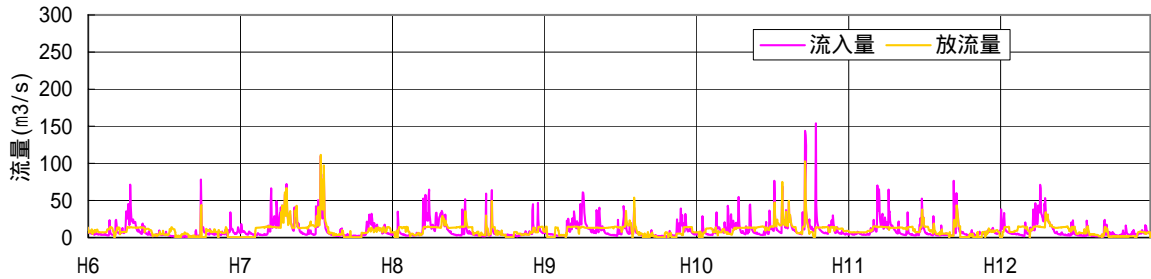
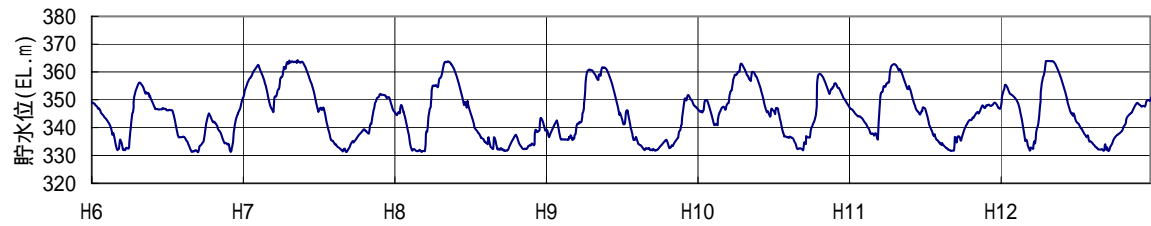
<下流河川>



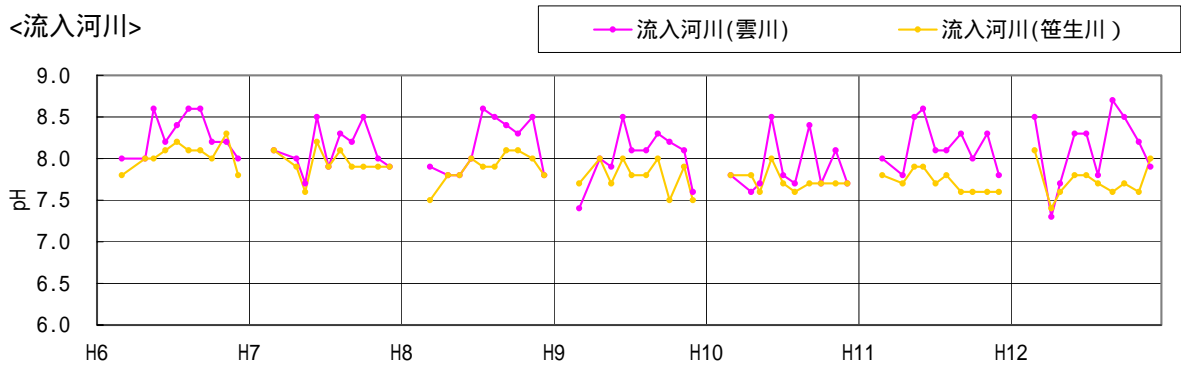
河川の環境基準値(A 類型、B 類型)を記載している。

(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

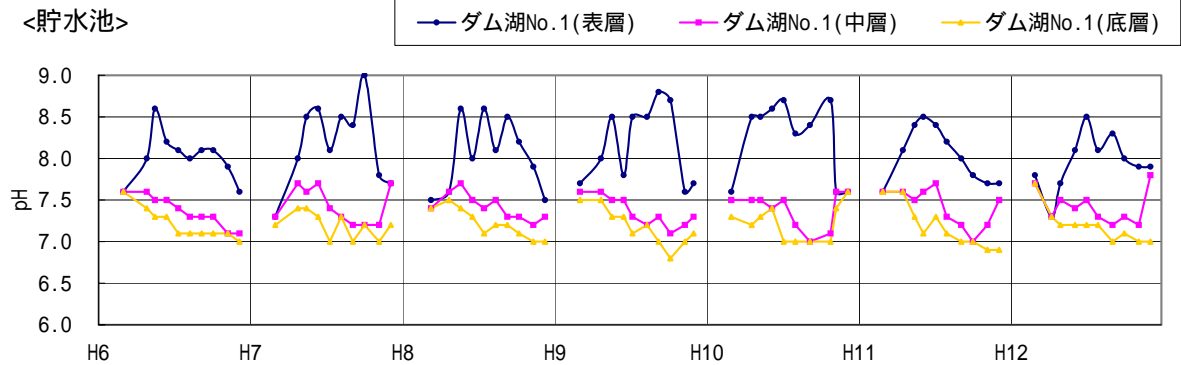
図 5.3-12(3) 流入・放流水質の経月変化(pH)



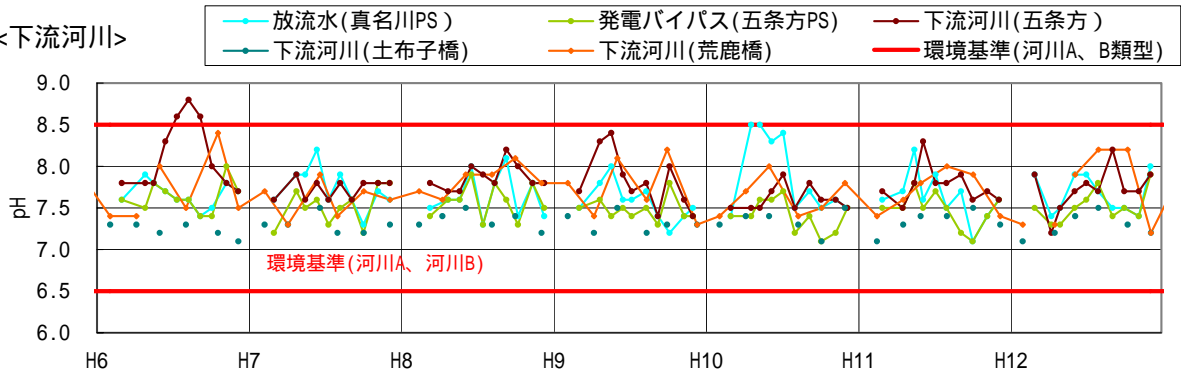
<流入河川>



<貯水池>



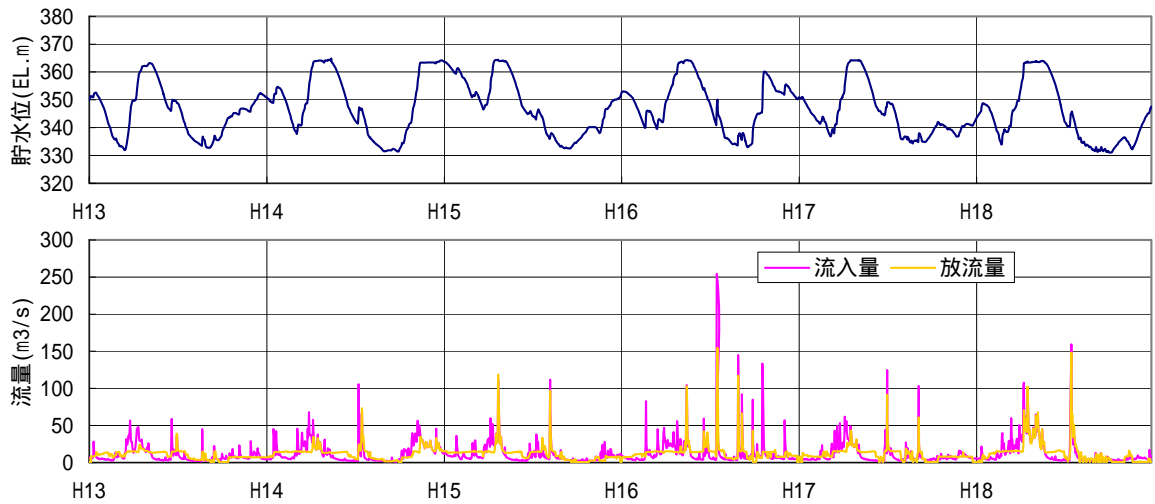
<下流河川>



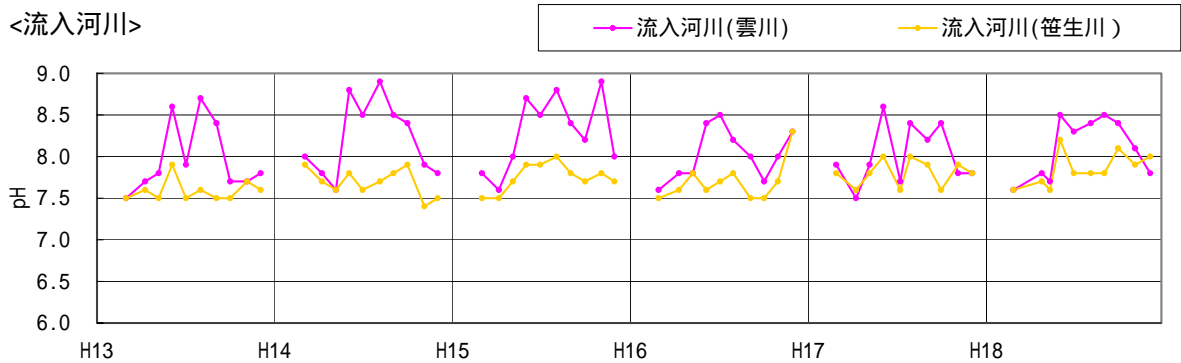
河川の環境基準値(A 類型、B 類型)を記載している。

(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

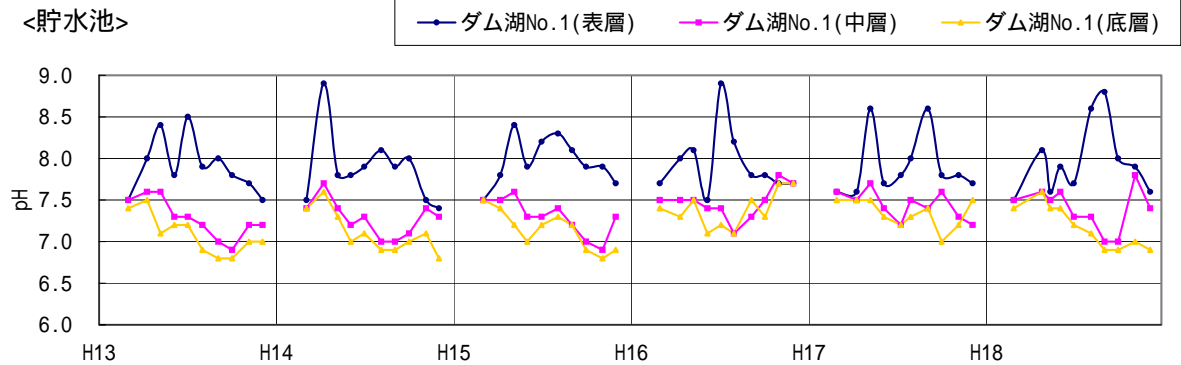
図 5.3-12(4) 流入・放流水質の経月変化(pH)



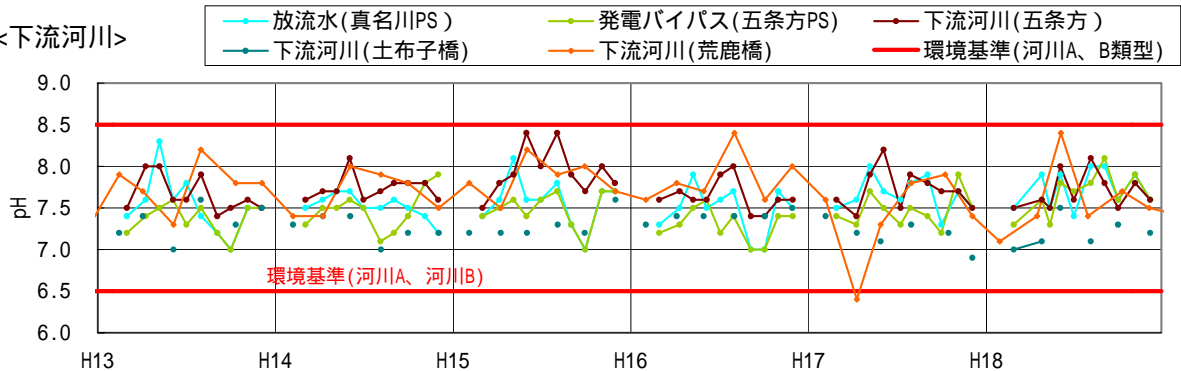
<流入河川>



<貯水池>



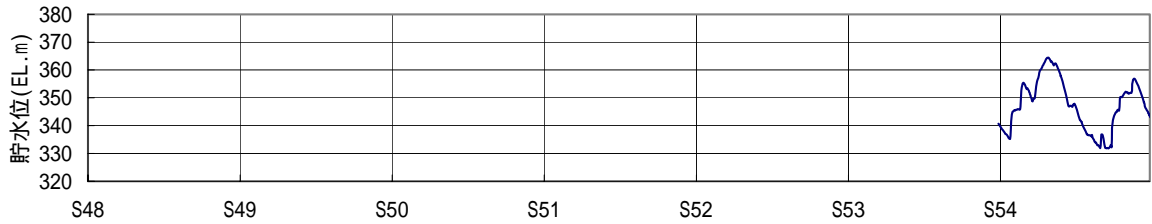
<下流河川>



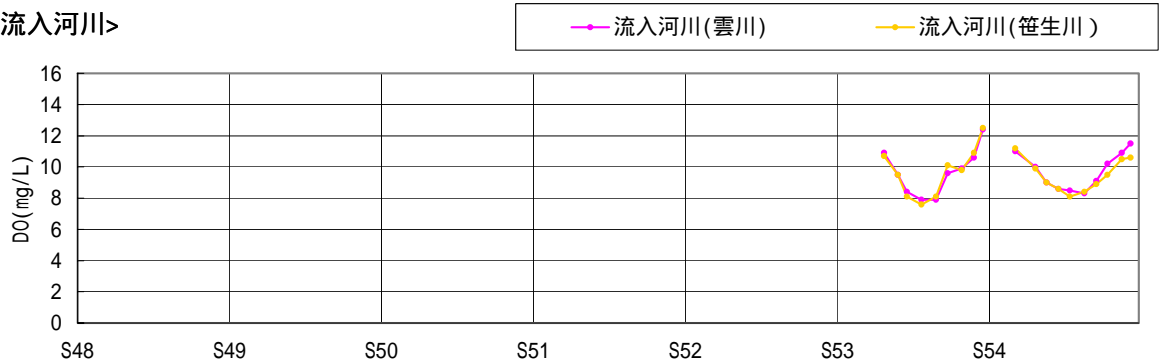
河川の環境基準値(A 類型、B 類型)を記載している。

(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

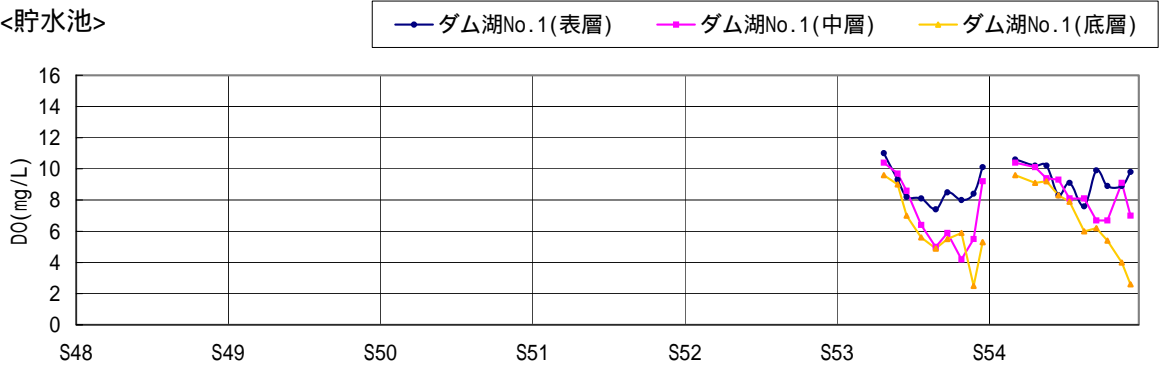
図 5.3-12(5) 流入・放流水質の経月変化(pH)



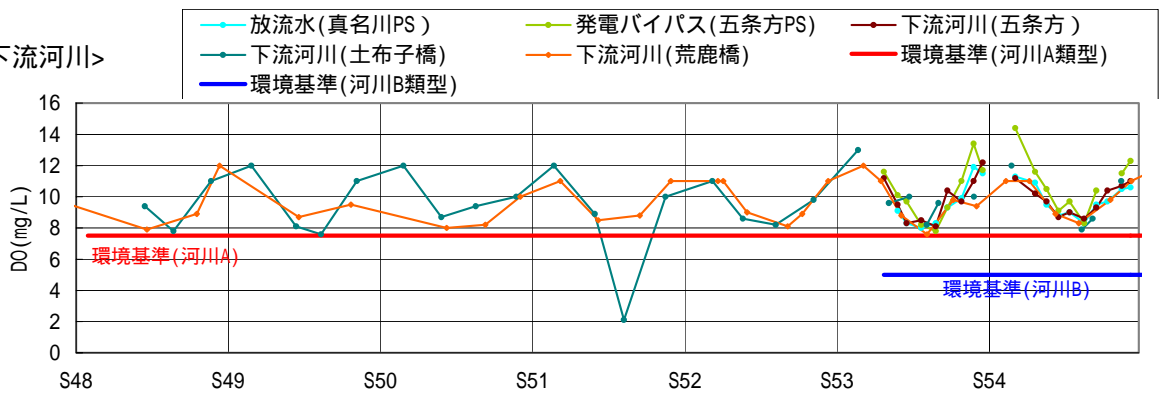
<流入河川>



<貯水池>



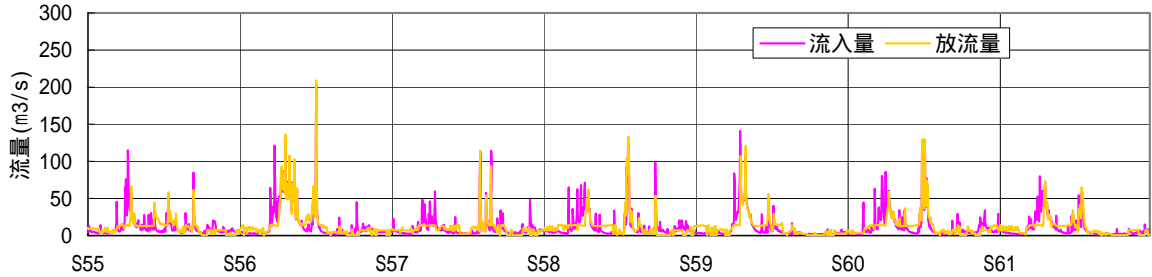
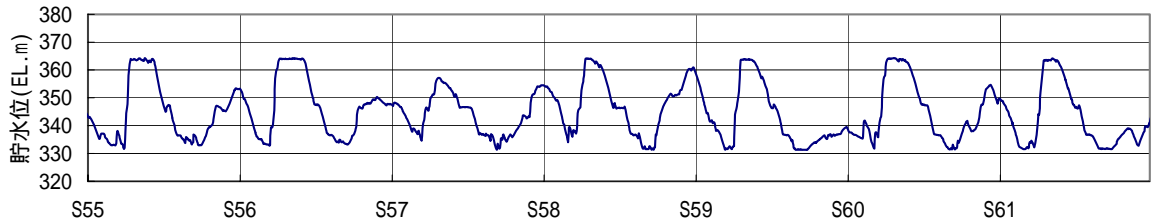
<下流河川>



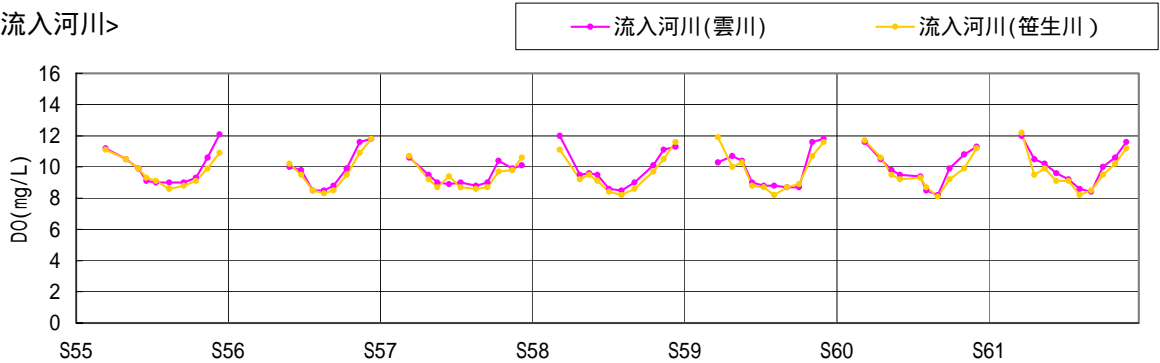
河川の環境基準値(A 類型、B 類型)を記載している。

(出典：資料 5-8,9,13,14)

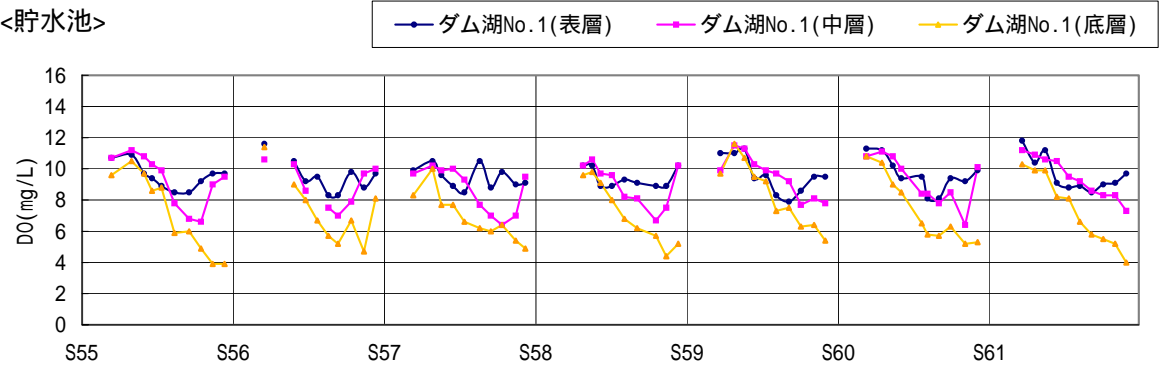
図 5.3-13(1) 流入・放流水質の経月変化(DO)



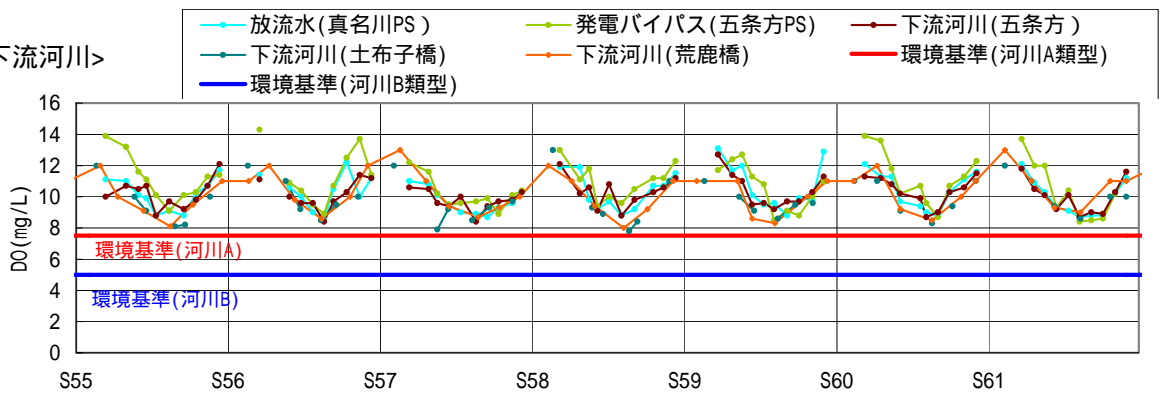
<流入河川>



<貯水池>



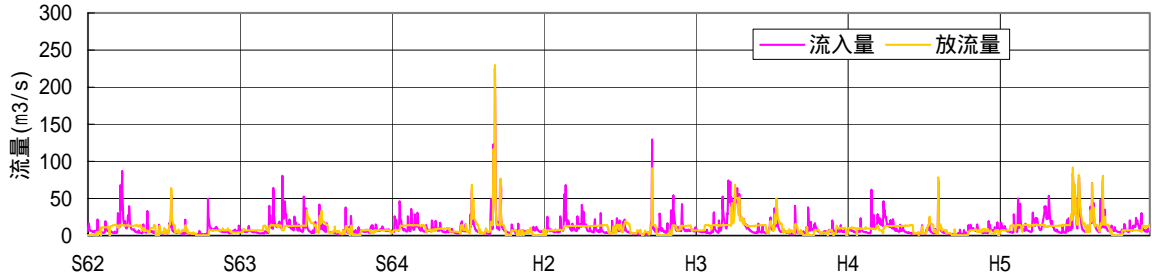
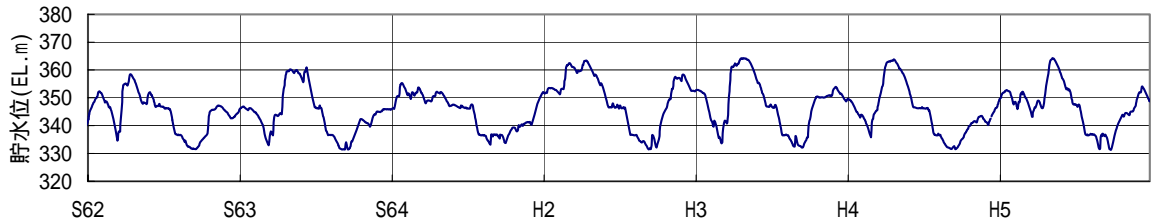
<下流河川>



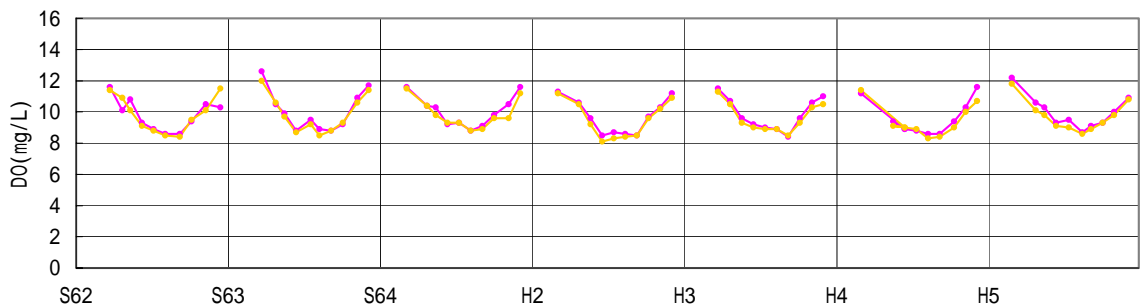
河川の環境基準値(A 類型、B 類型)を記載している。

(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

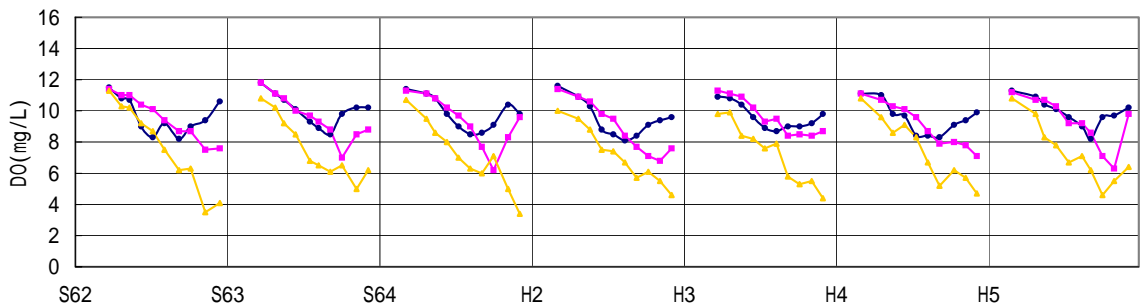
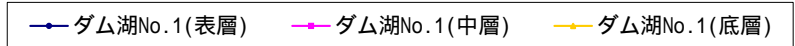
図 5.3-13(2) 流入・放流水質の経月変化(DO)



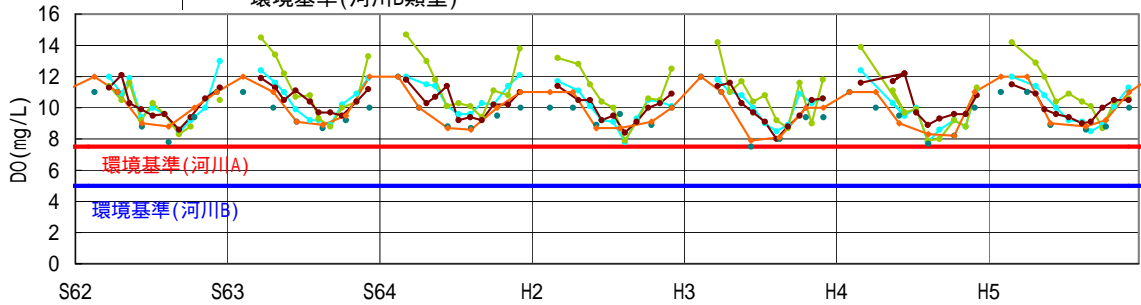
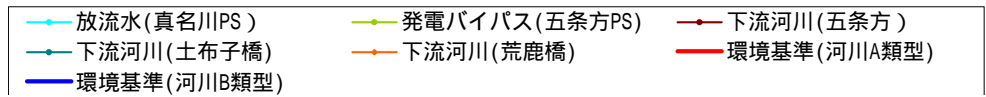
<流入河川>



<貯水池>



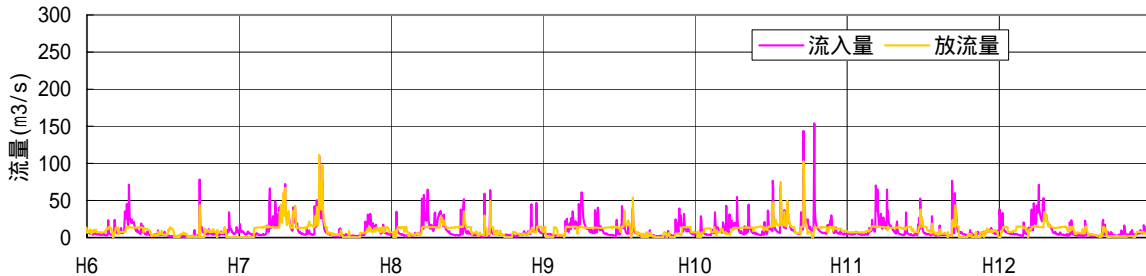
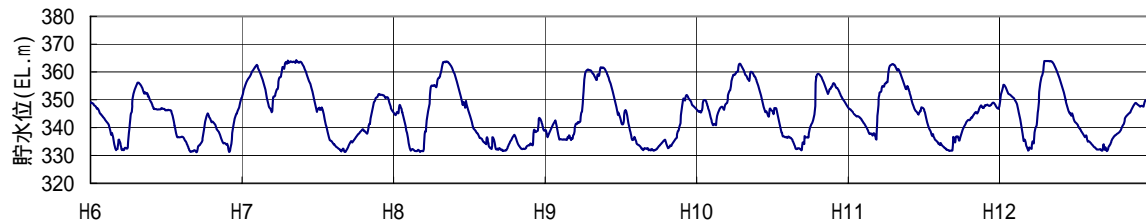
<下流河川>



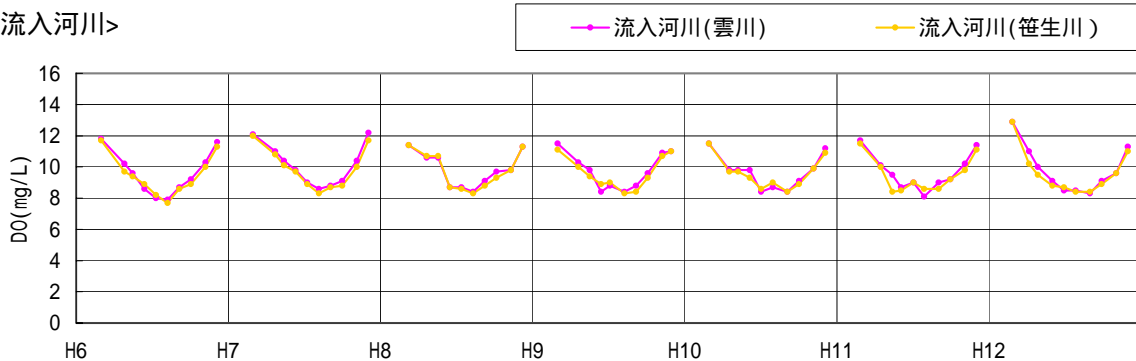
河川の環境基準値(A 類型、B 類型)を記載している。

(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

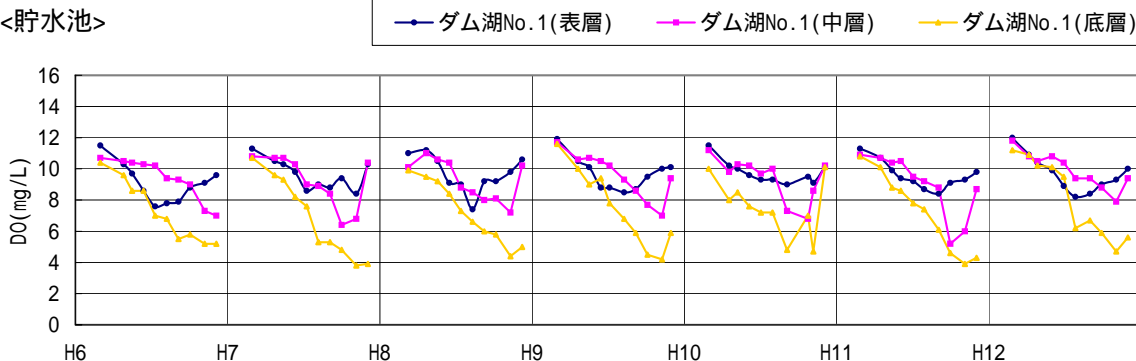
図 5.3-13(3) 流入・放流水質の経月変化(DO)



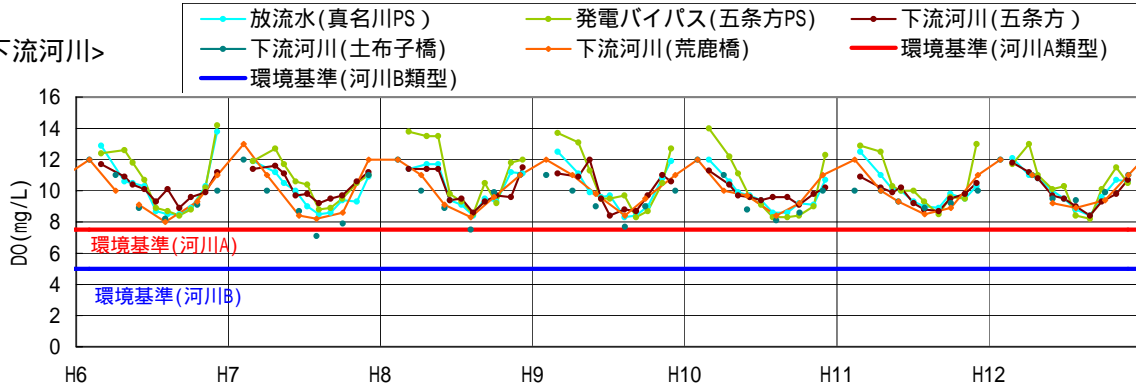
<流入河川>



<貯水池>



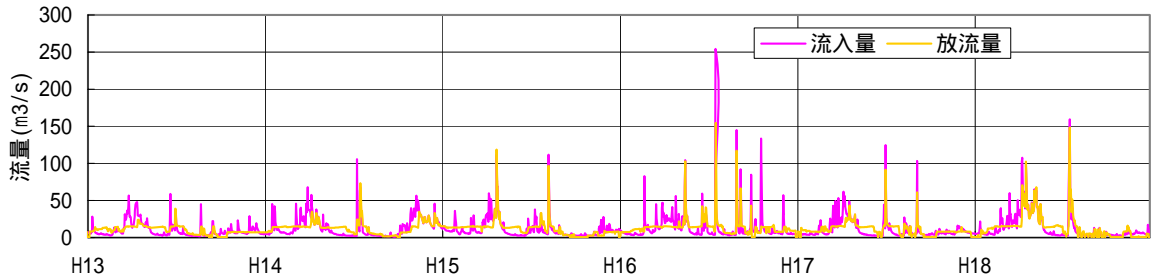
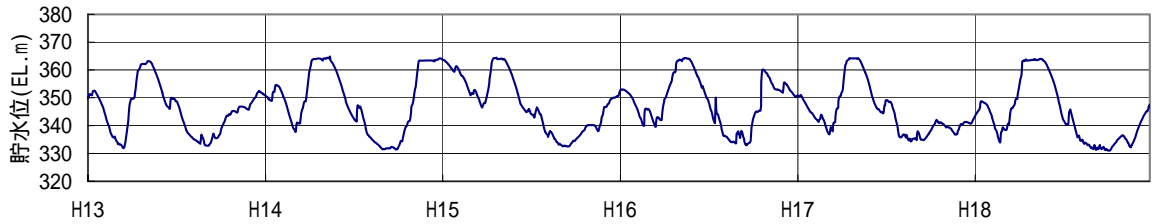
<下流河川>



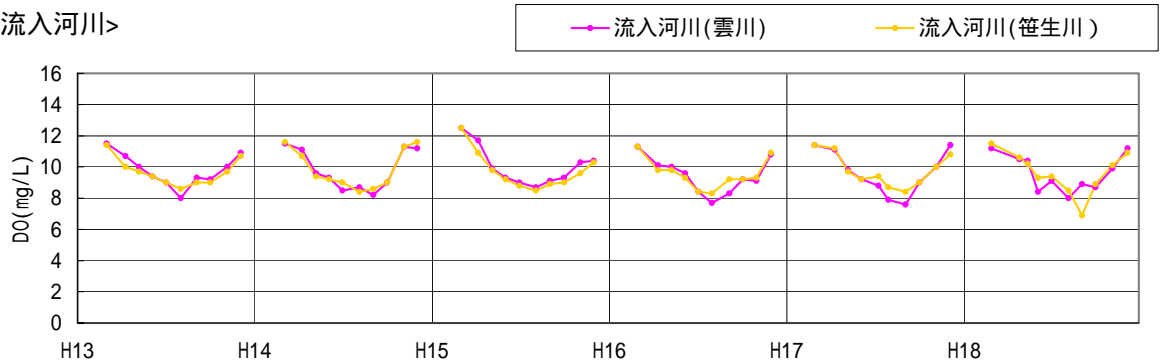
河川の環境基準値(A 類型、B 類型)を記載している。

(出典：資料 5-8,9,13,14)

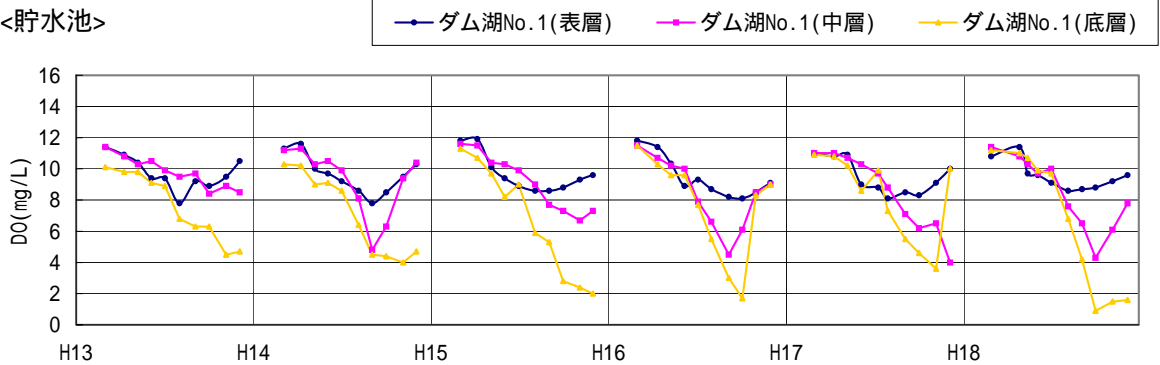
図 5.3-13(4) 流入・放流水質の経月変化(DO)



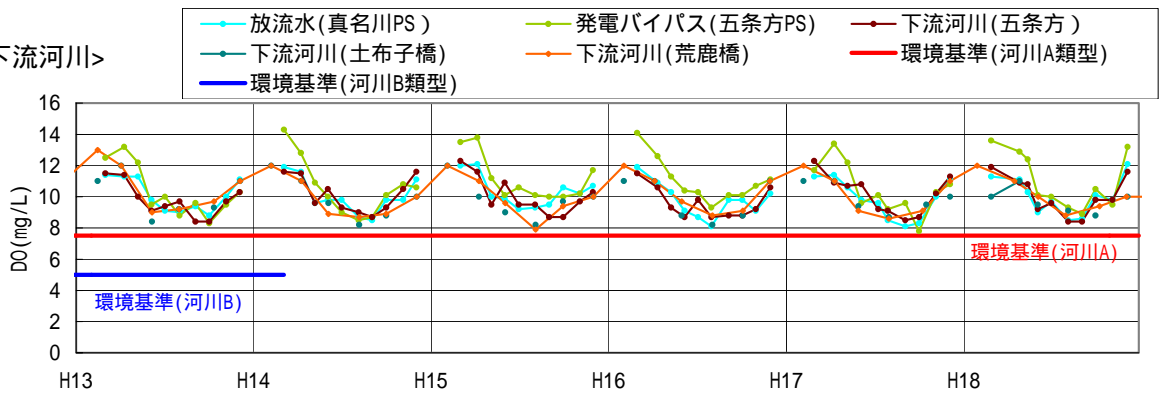
<流入河川>



<貯水池>



<下流河川>



河川の環境基準値(A 類型、B 類型)を記載している。

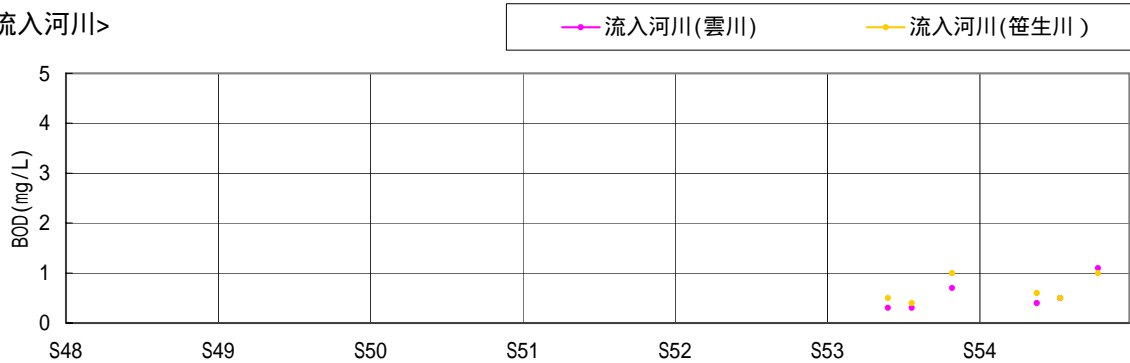
(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

図 5.3-13(5) 流入・放流水質の経月変化(DO)

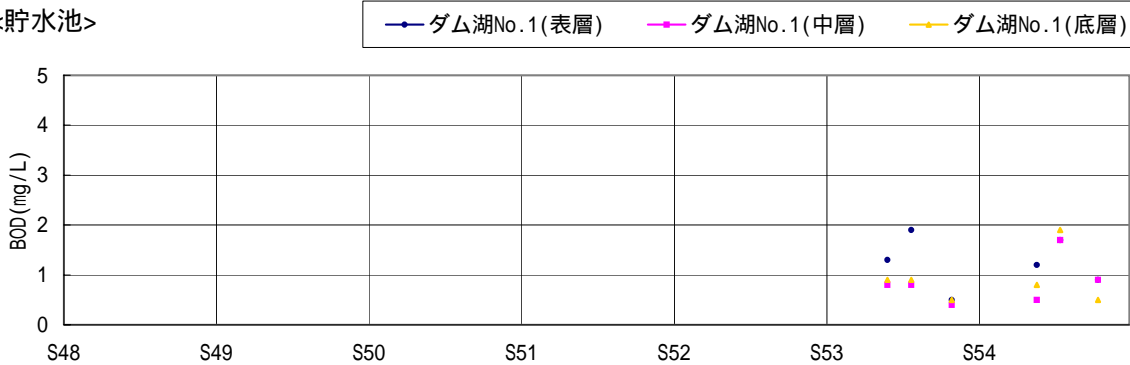




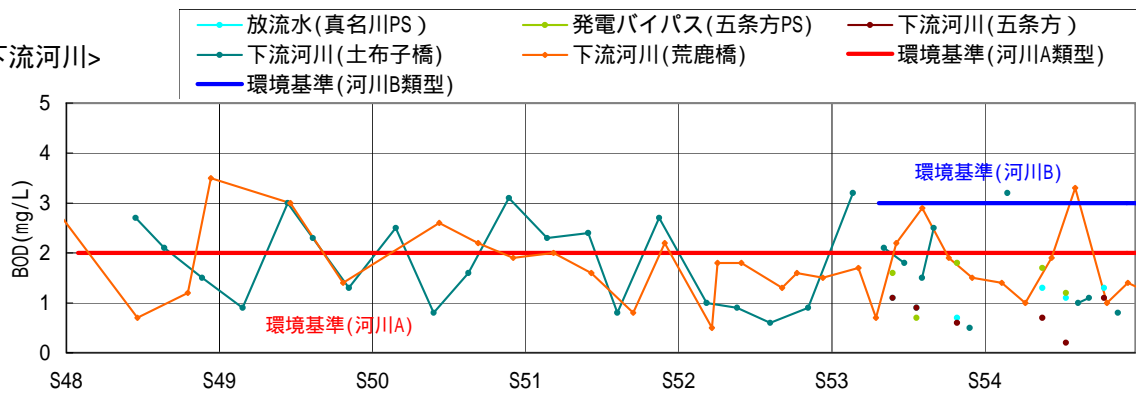
<流入河川>



<貯水池>



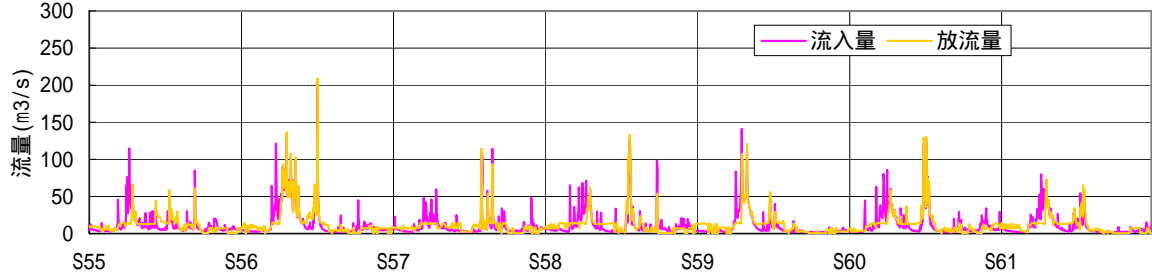
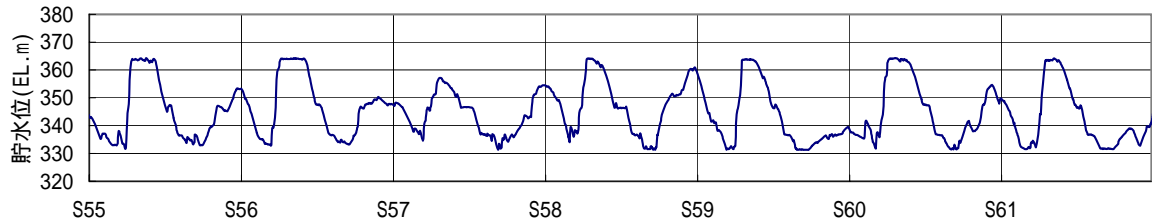
<下流河川>



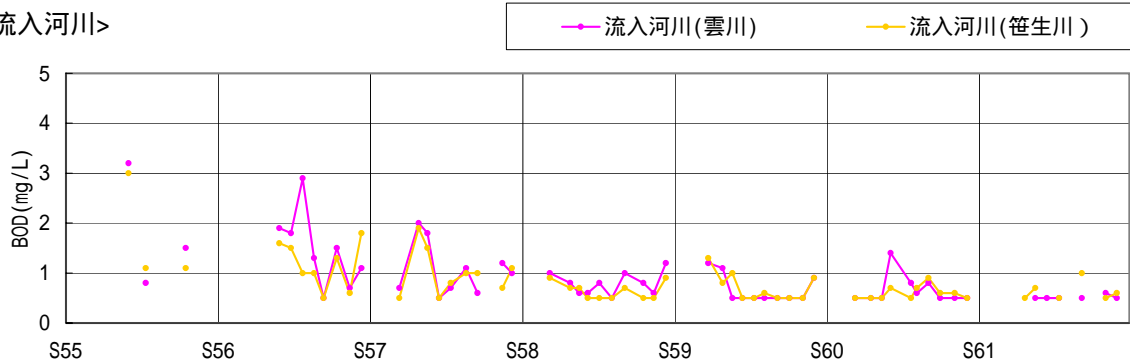
河川の環境基準値(A 類型、B 類型)を記載している。

(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

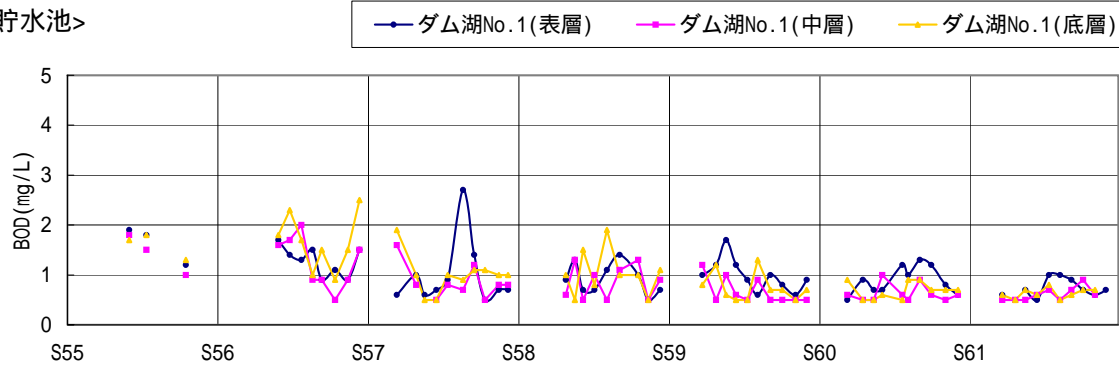
図 5.3-14(1) 流入・放流水質の経月変化(BOD)



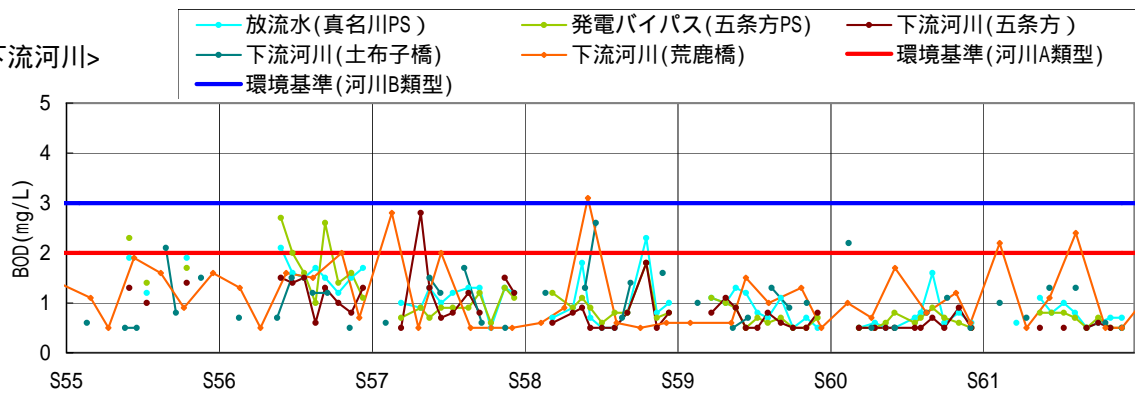
<流入河川>



<貯水池>



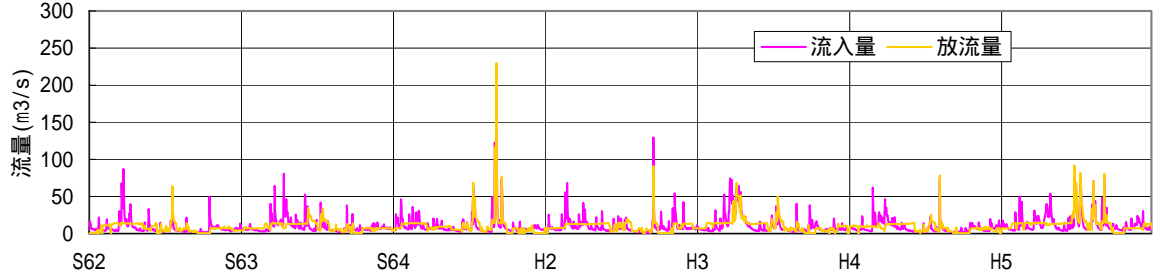
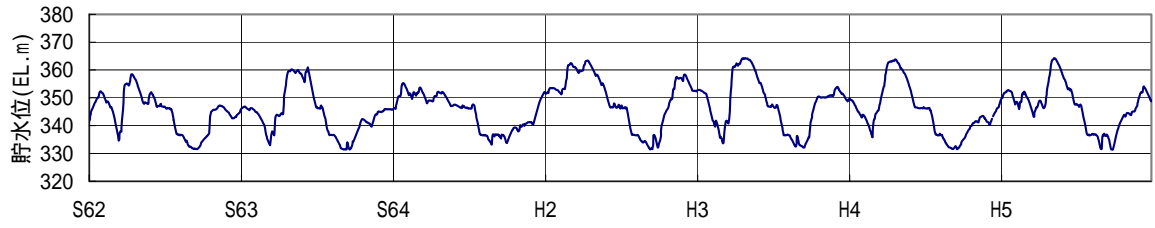
<下流河川>



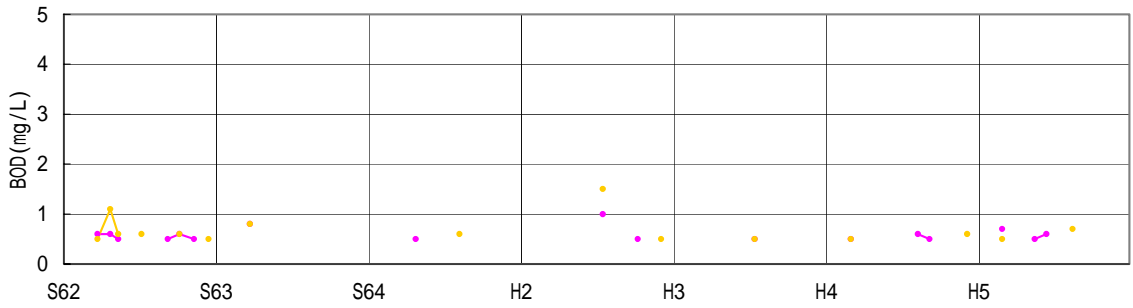
河川の環境基準値(A 類型、B 類型)を記載している。

(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

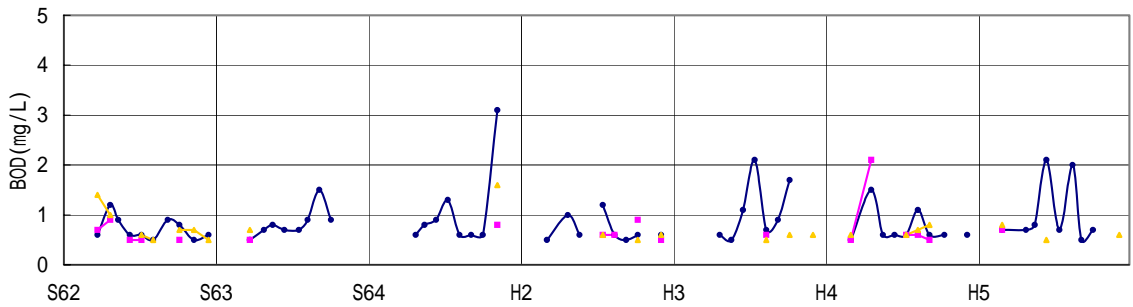
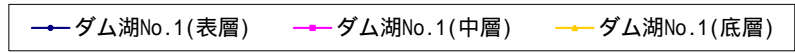
図 5.3-14(2) 流入・放流水質の経月変化(BOD)



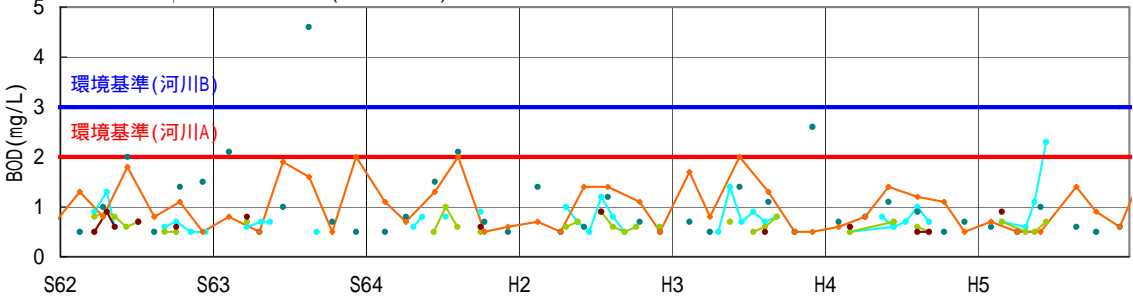
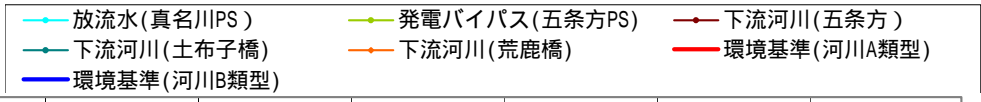
<流入河川>



<貯水池>



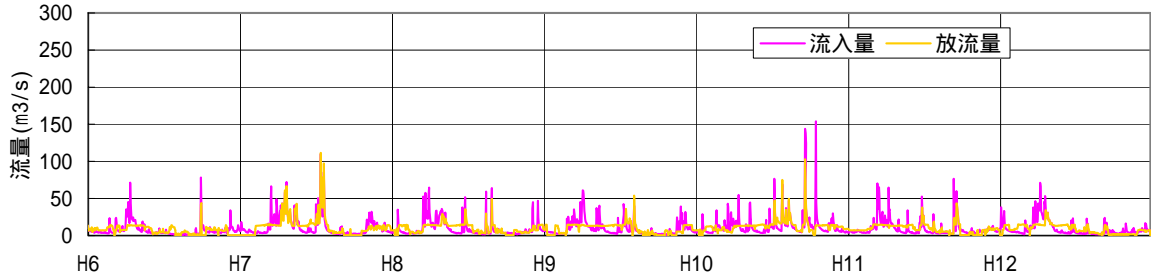
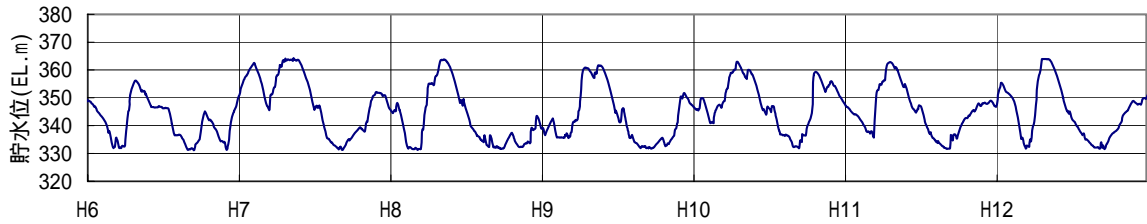
<下流河川>



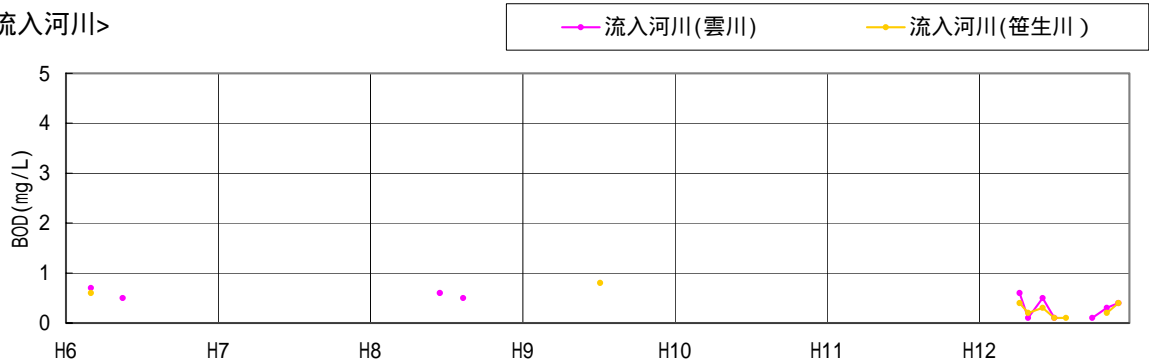
河川の環境基準値(A 類型、B 類型)を記載している。

(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

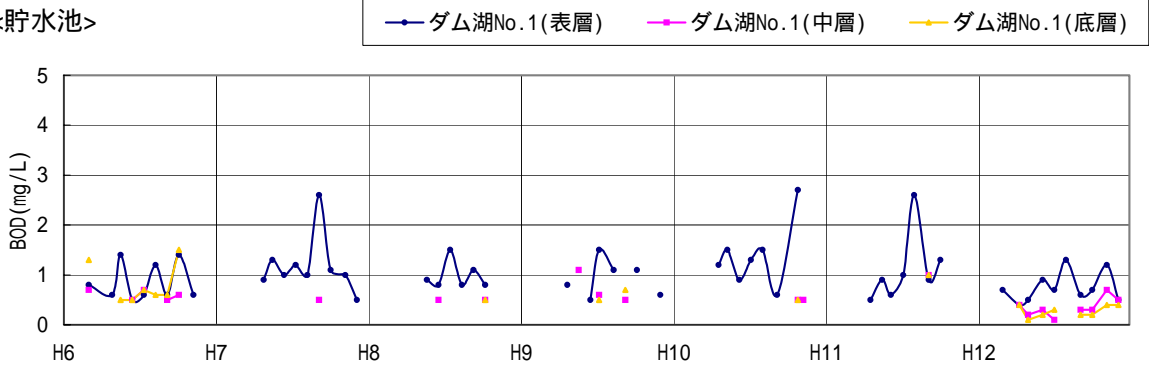
図 5.3-14(3) 流入・放流水質の経月変化(BOD)



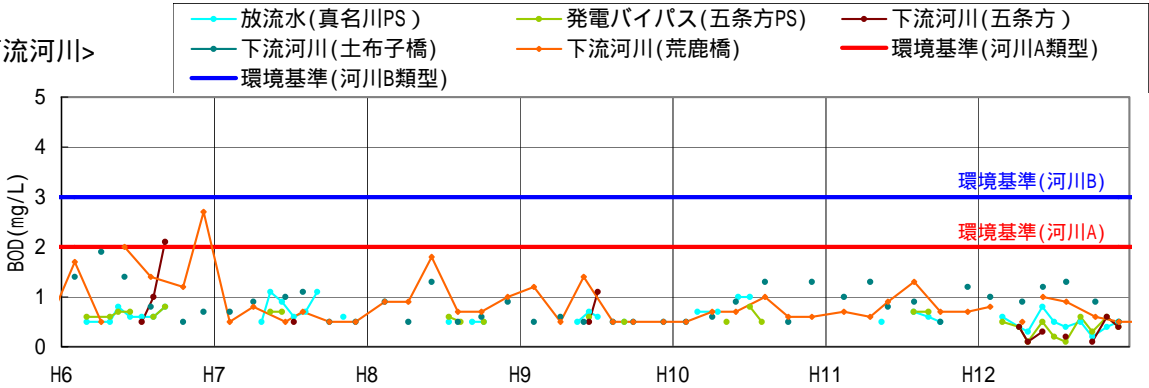
<流入河川>



<貯水池>



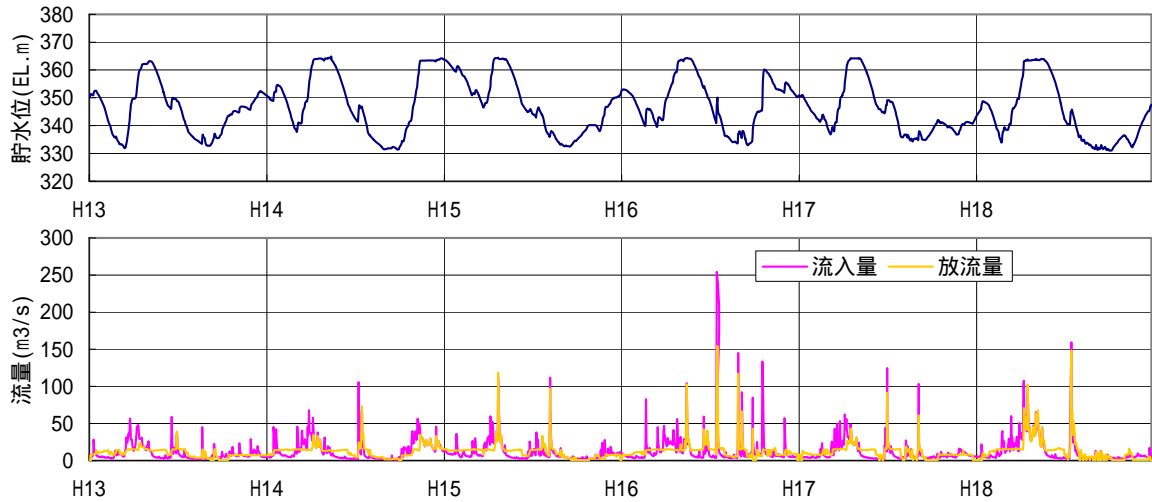
<下流河川>



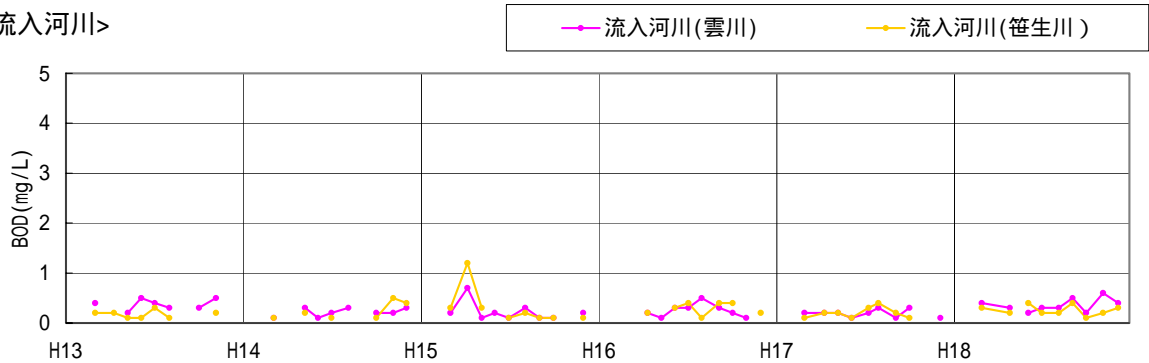
河川の環境基準値(A 類型、B 類型)を記載している。

(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

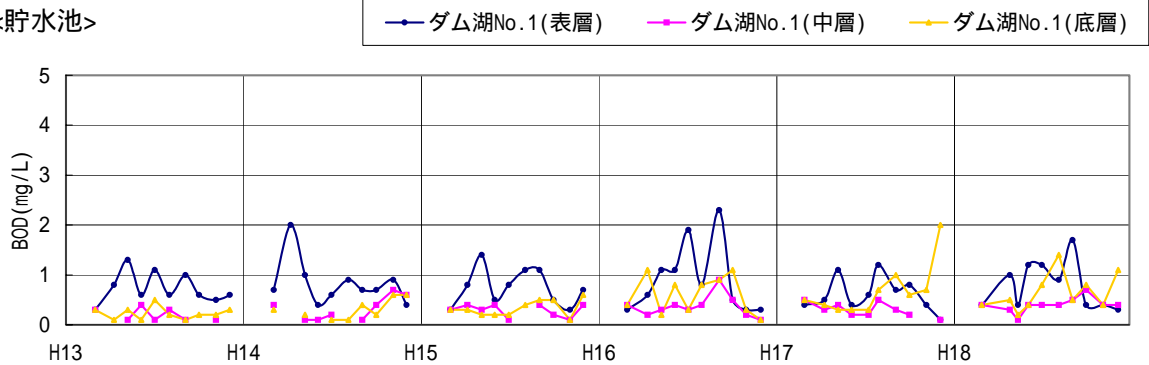
図 5.3-14(4) 流入・放流水質の経月変化(BOD)



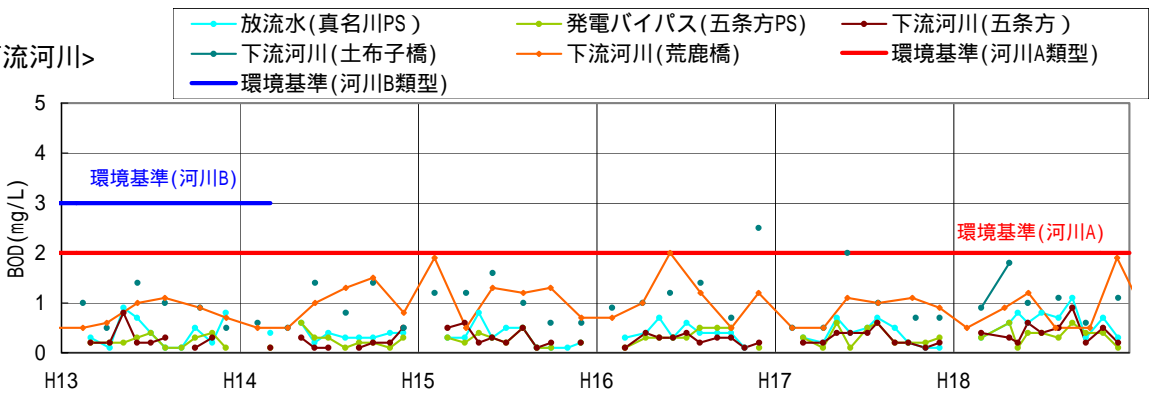
<流入河川>



<貯水池>



<下流河川>



河川の環境基準値(A 類型、B 類型)を記載している。

(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

図 5.3-14(5) 流入・放流水質の経月変化(BOD)



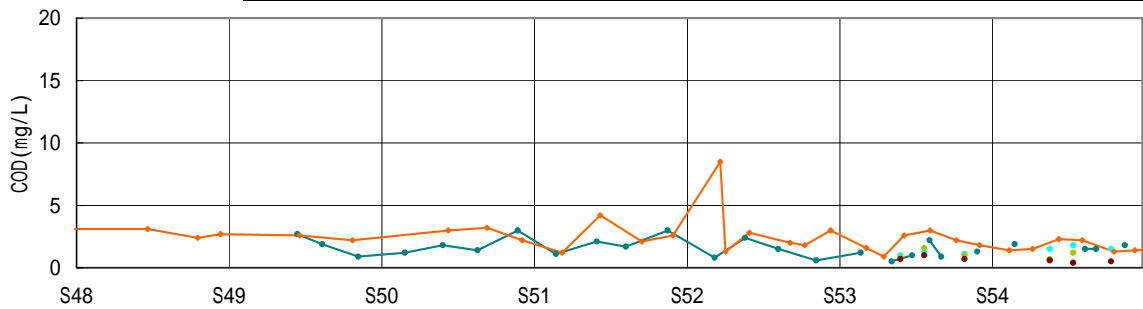
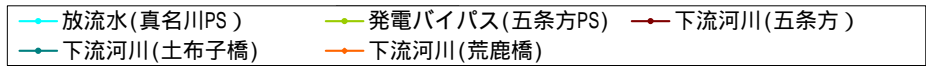
<流入河川>



<貯水池>

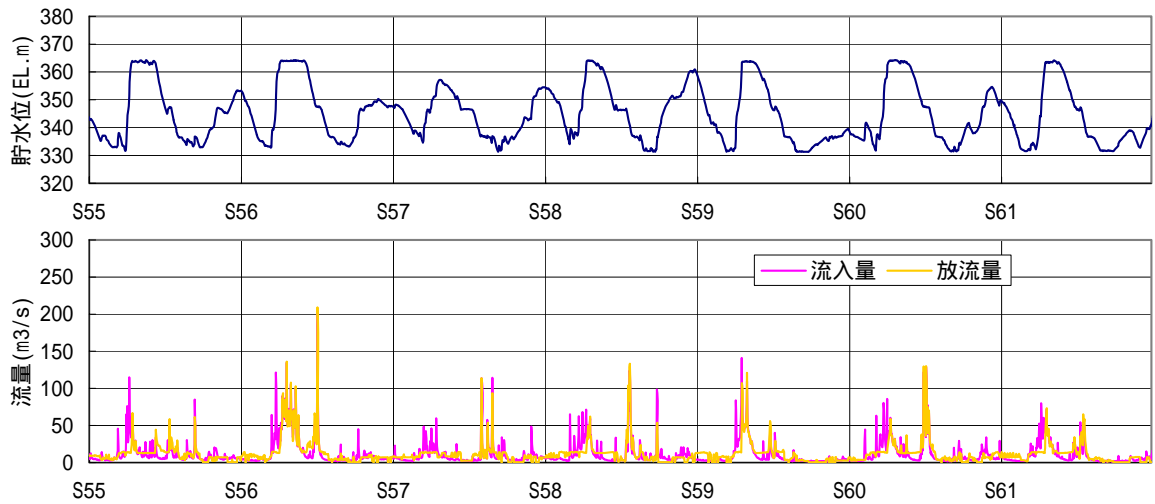


<下流河川>

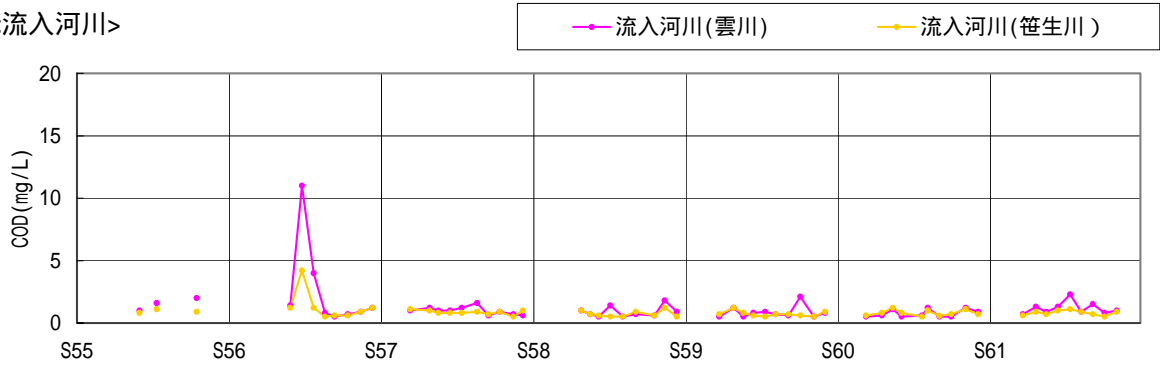


(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

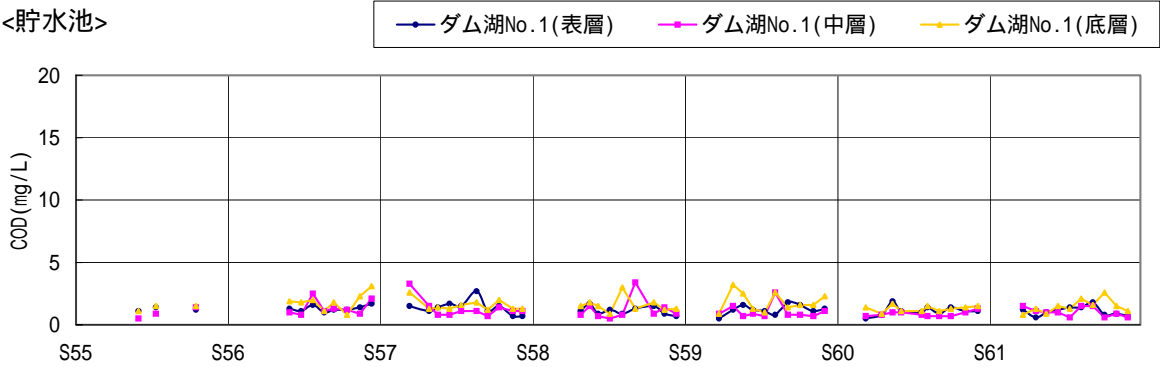
図 5.3-15(1) 流入・放流水質の経月变化(COD)



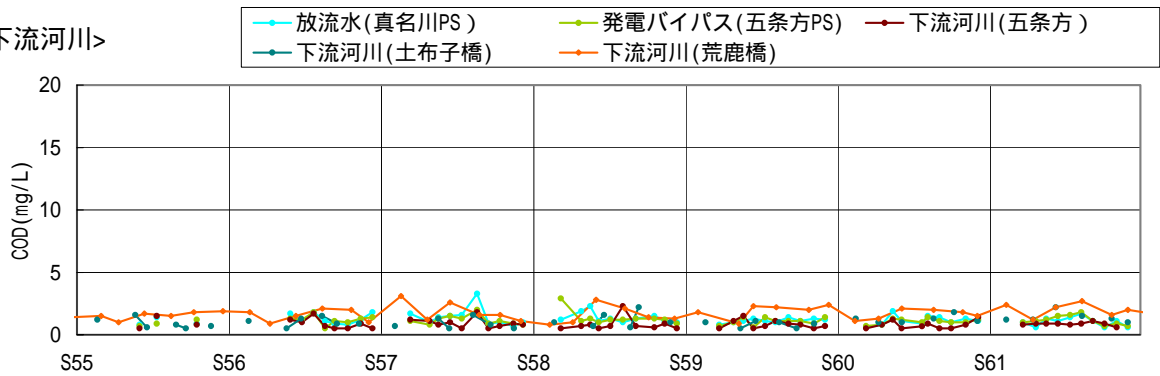
<流入河川>



<貯水池>

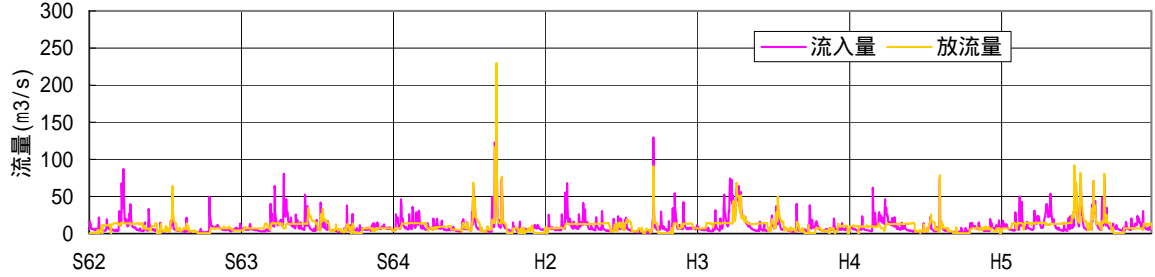
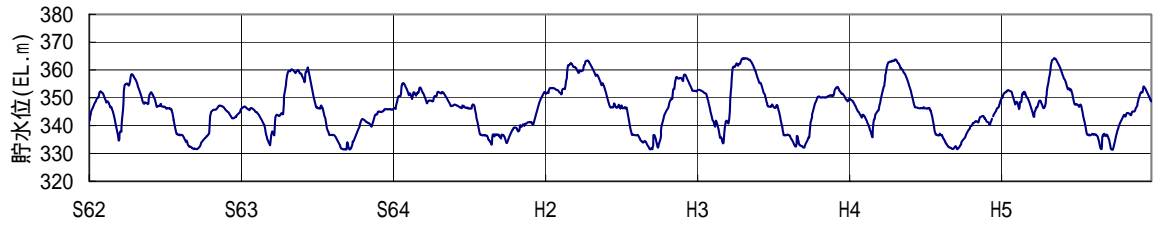


<下流河川>

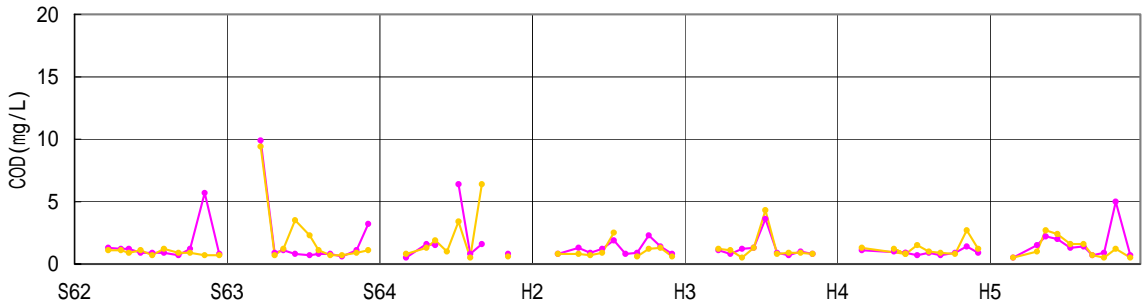


(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

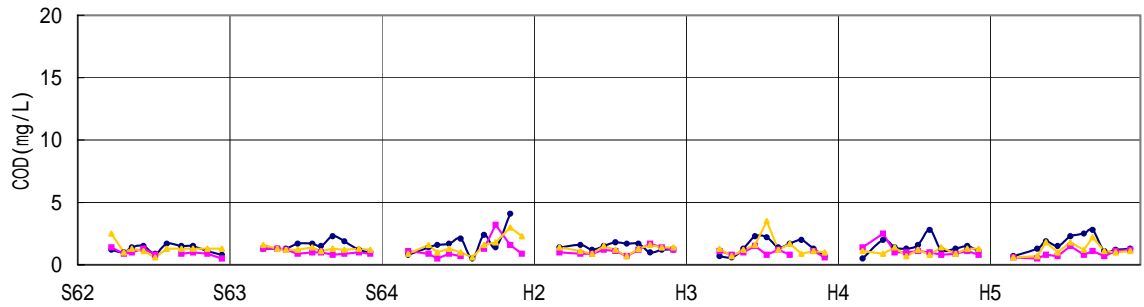
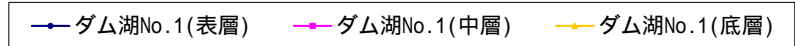
図 5.3-15(2) 流入・放流水質の経月変化(COD)



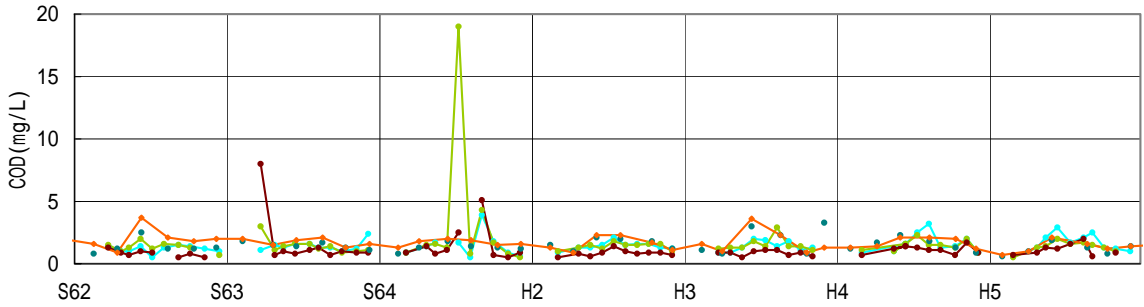
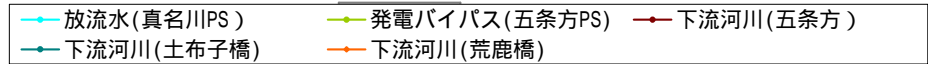
<流入河川>



<貯水池>



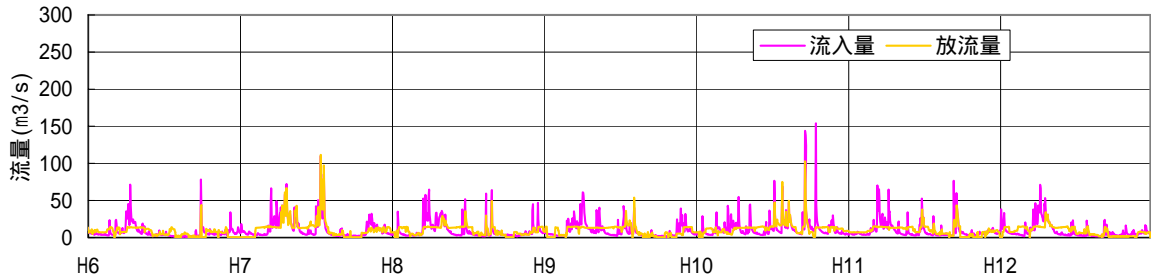
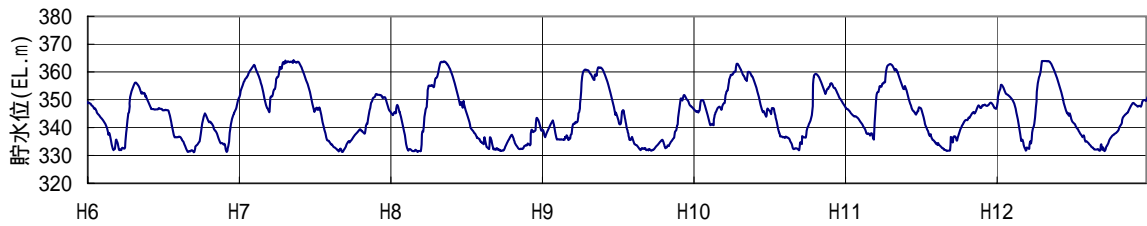
<下流河川>



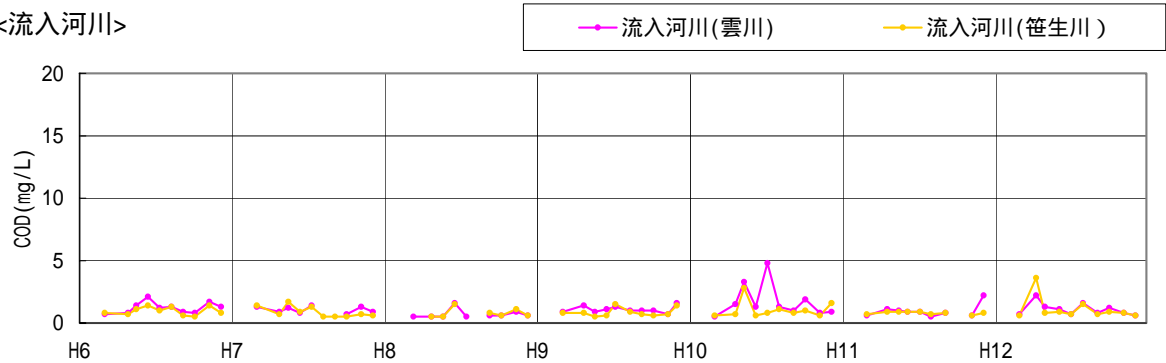
(出典：資料 5-8,9,13,14)

図 5.3-15(3) 流入・放流水質の経月変化(COD)

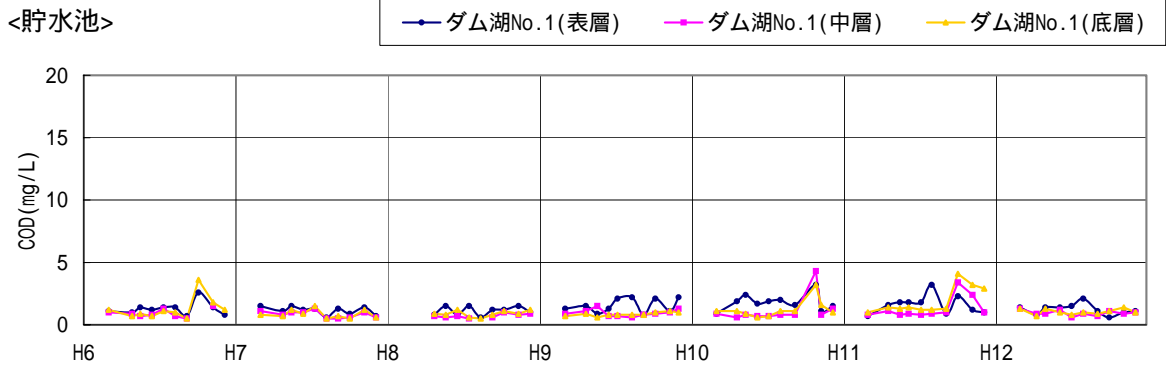




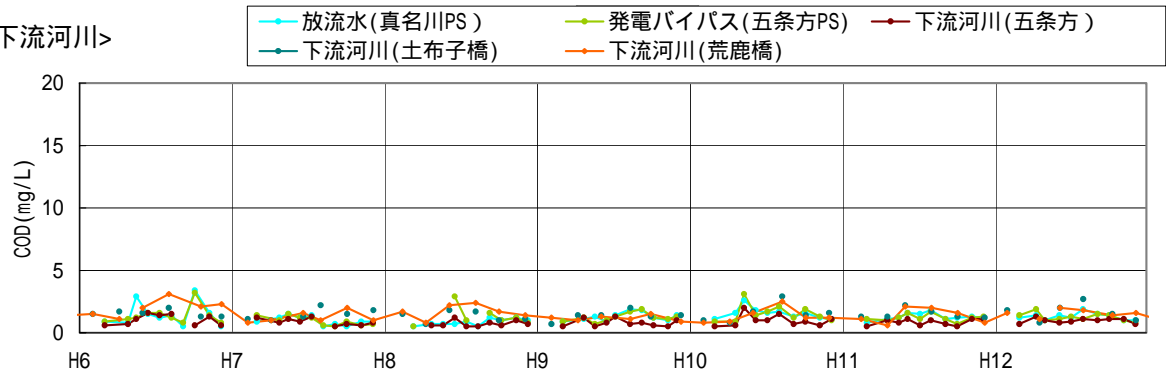
<流入河川>



<貯水池>

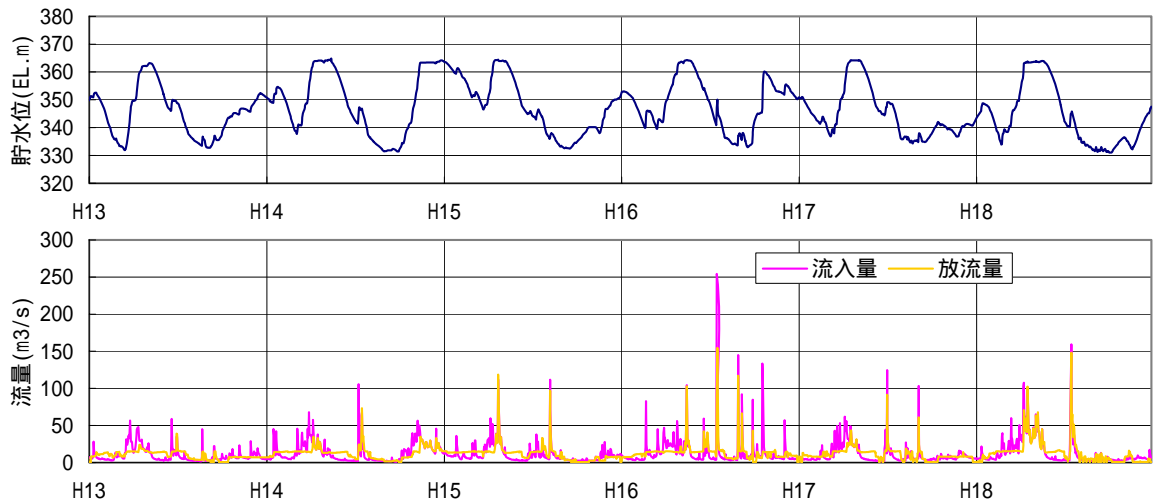


<下流河川>

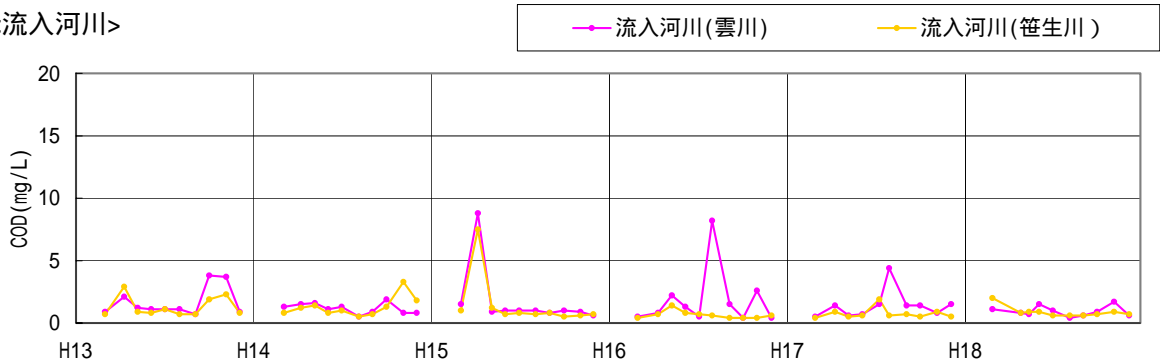


(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

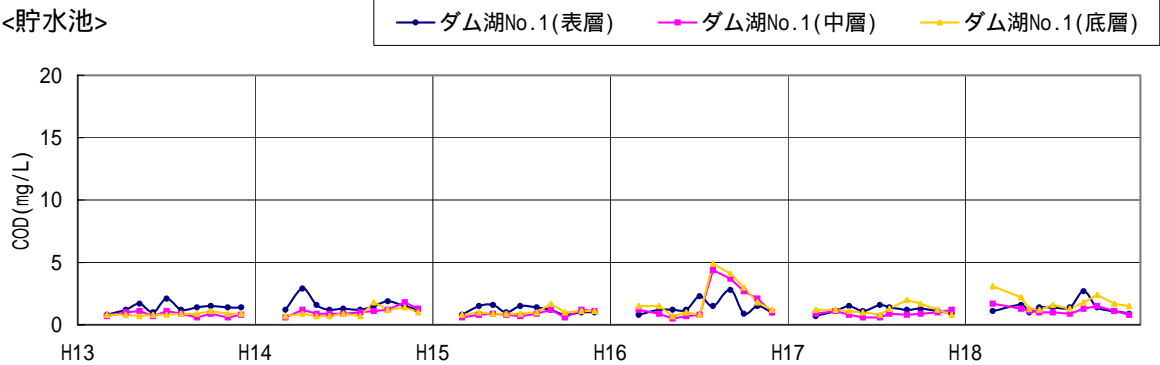
図 5.3-15(4) 流入・放流水質の経月変化(COD)



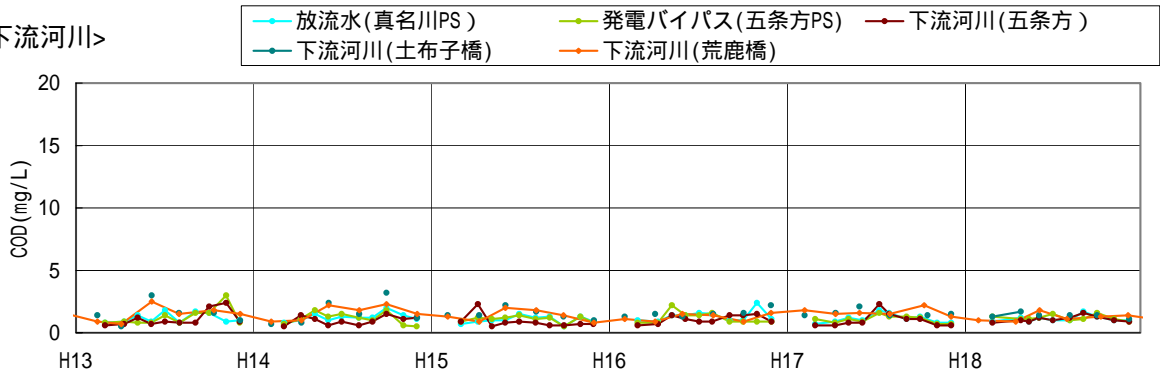
<流入河川>



<貯水池>



<下流河川>

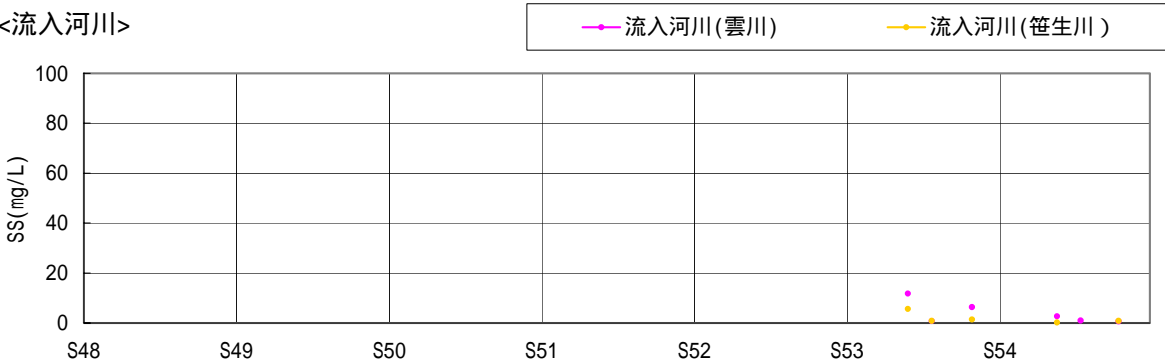


(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

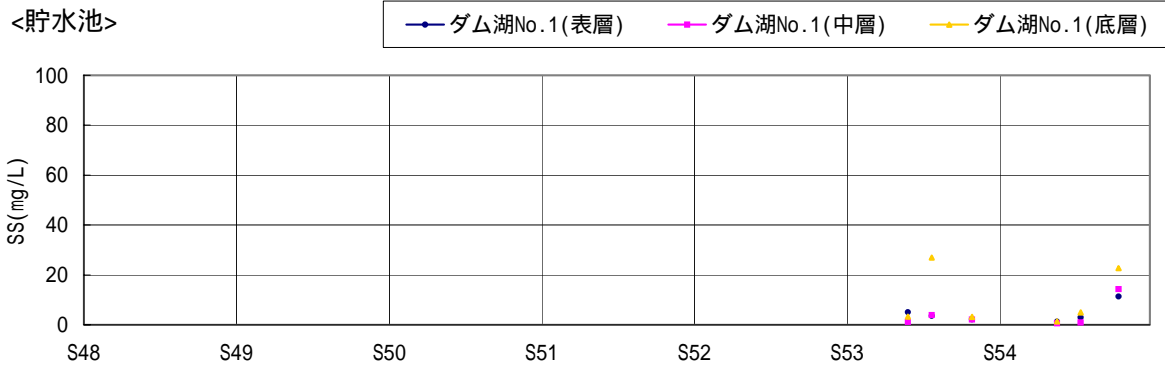
図 5.3-15(5) 流入・放流水質の経月変化(COD)



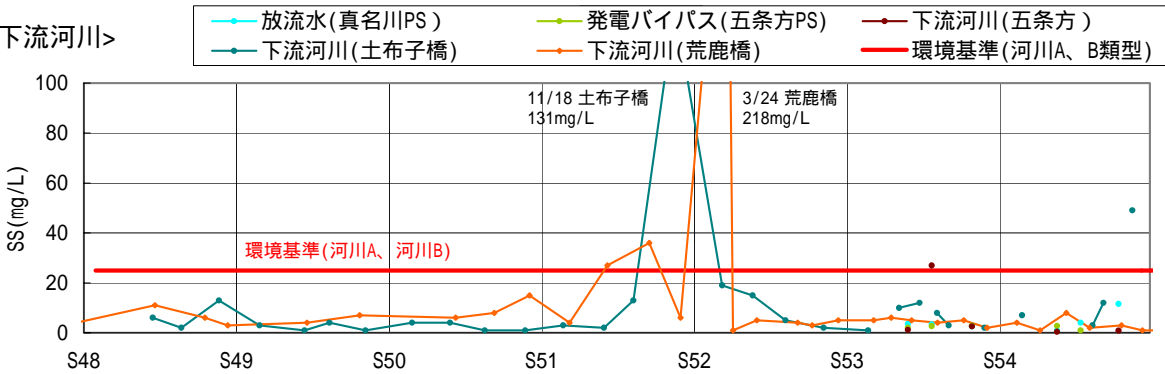
<流入河川>



<貯水池>



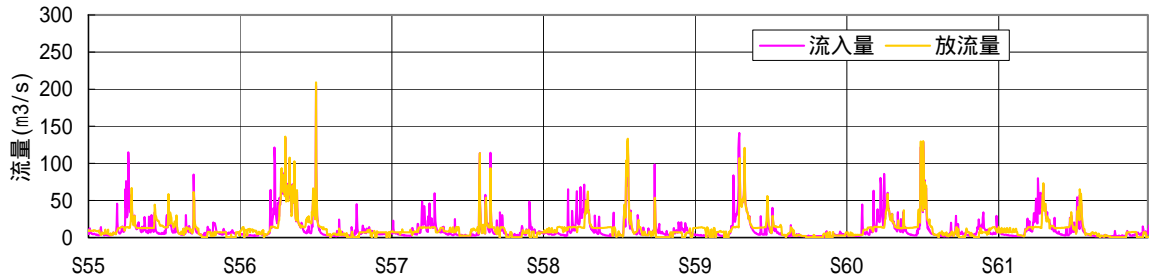
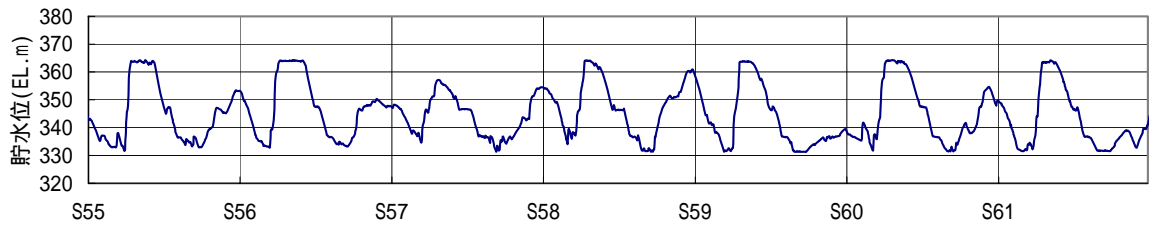
<下流河川>



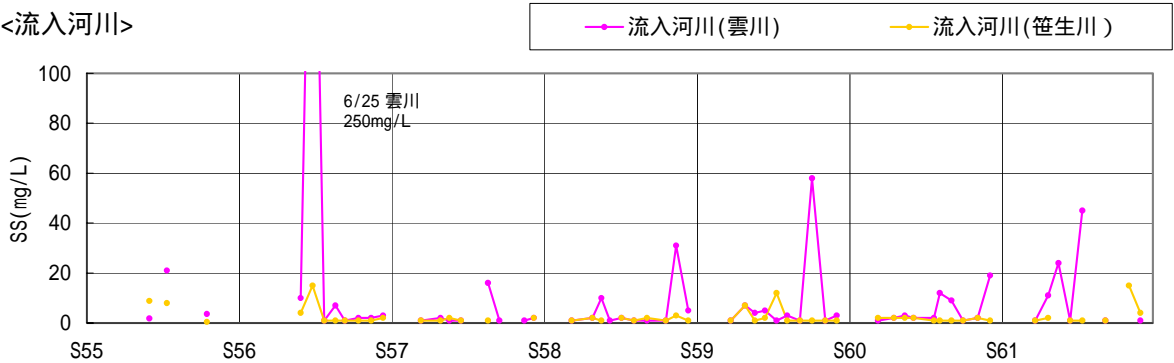
河川の環境基準値(A 類型、B 類型)を記載している。

(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

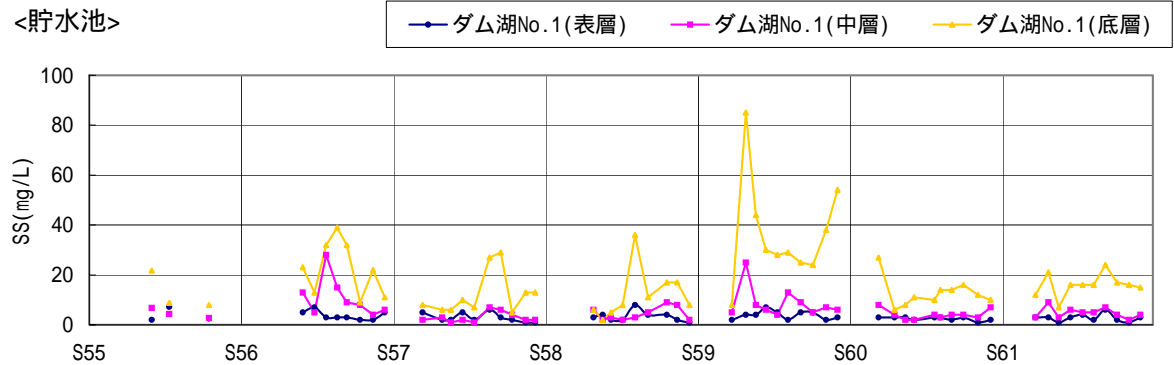
図 5.3-16(1) 流入・放流水質の経月変化(SS)



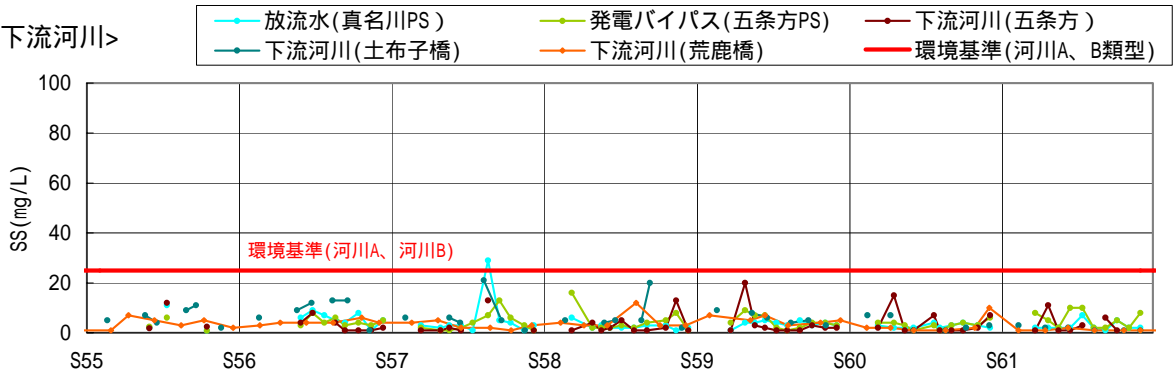
<流入河川>



<貯水池>



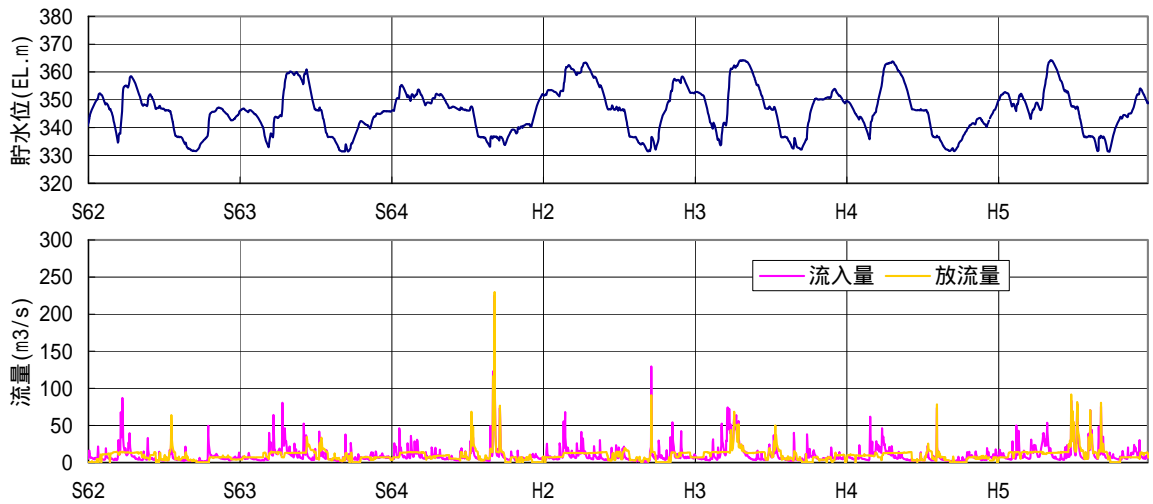
<下流河川>



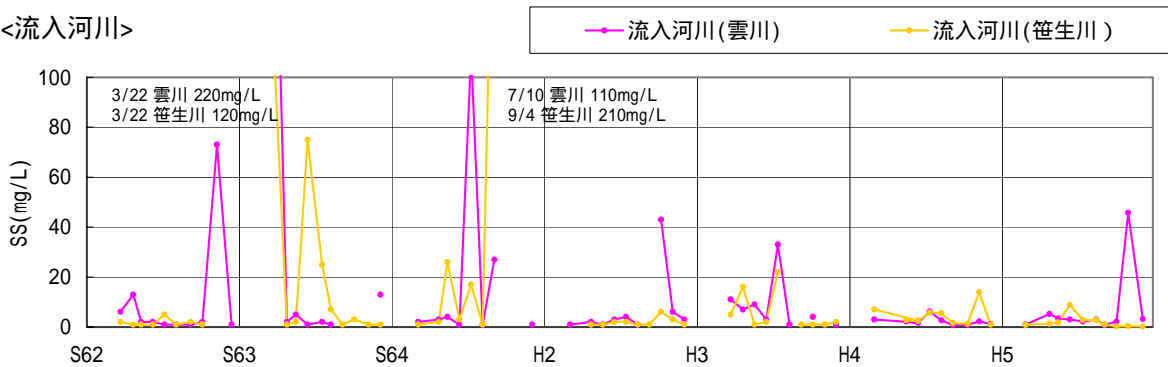
河川の環境基準値(A 類型、B 類型)を記載している。

(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

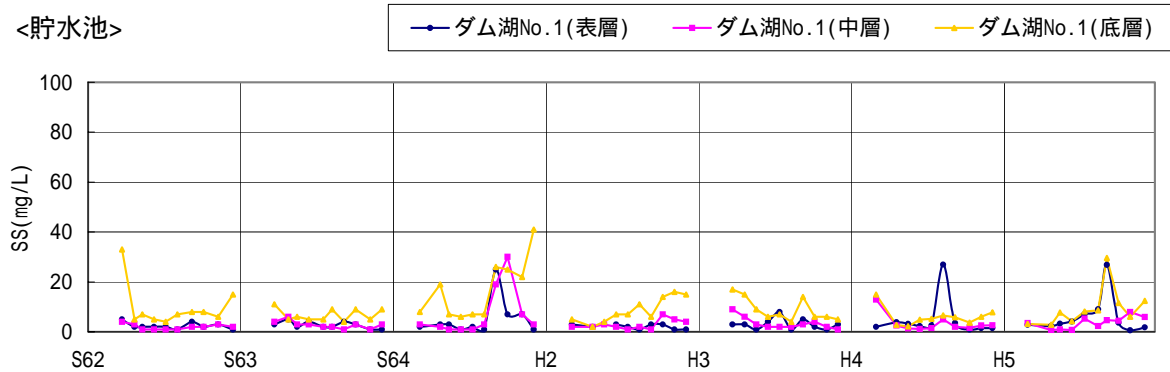
図 5.3-16(2) 流入・放流水質の経月変化(SS)



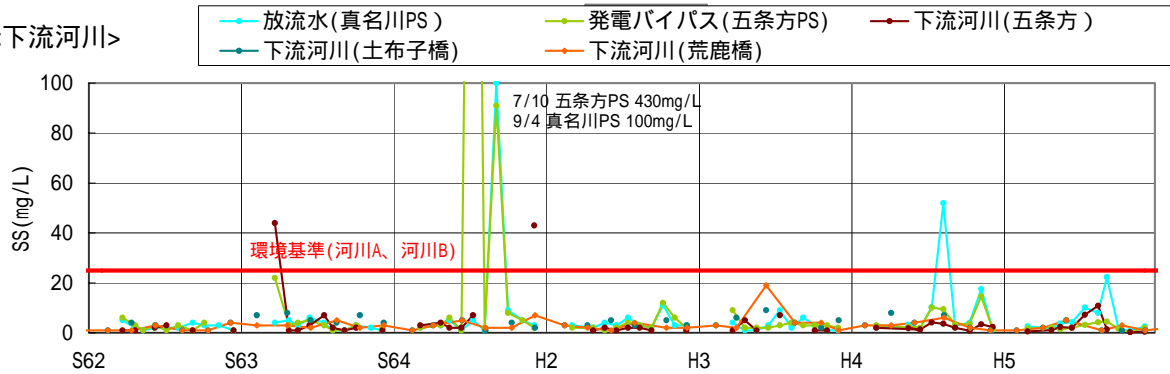
<流入河川>



<貯水池>



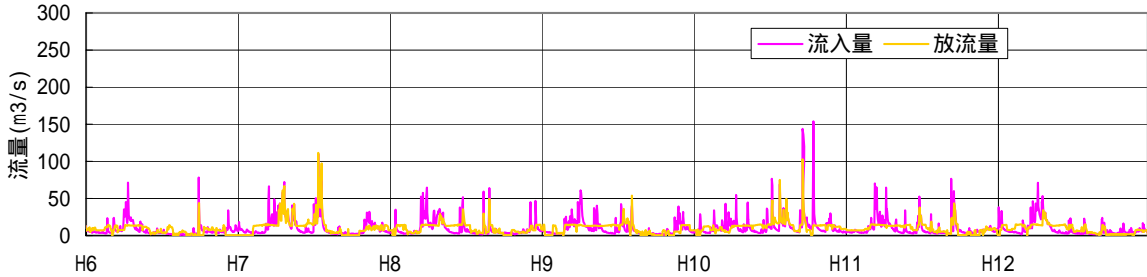
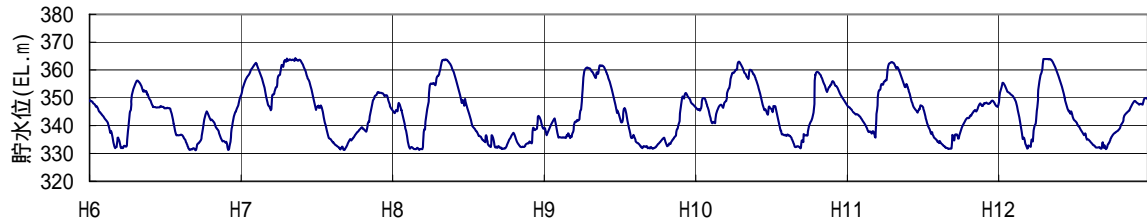
<下流河川>



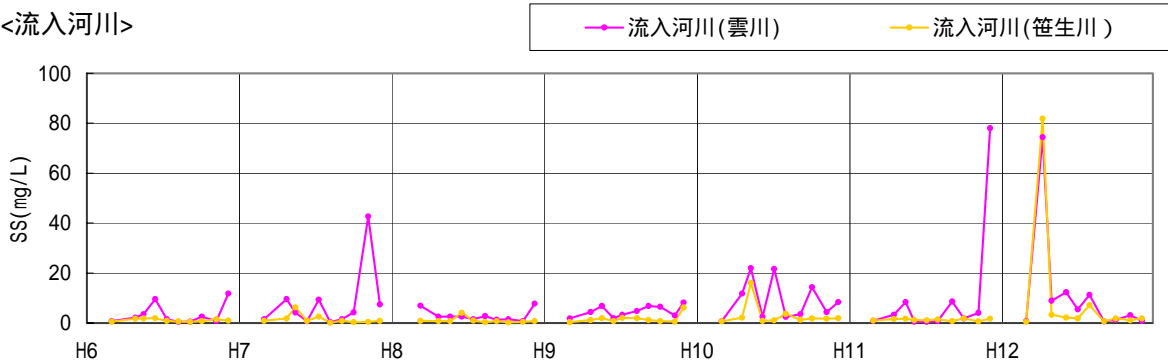
河川の環境基準値(A類型、B類型)を記載している。

(出典：資料5-8,9,13,14)

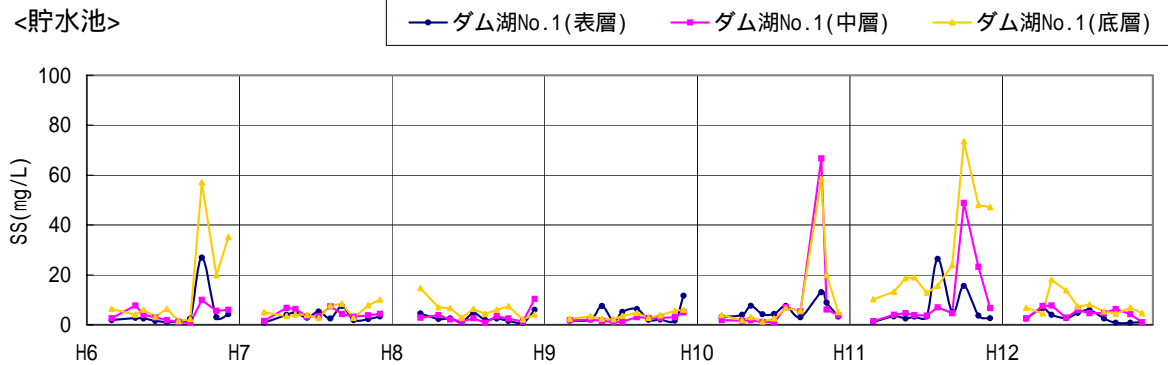
図5.3-16(3) 流入・放流水質の経月変化(SS)



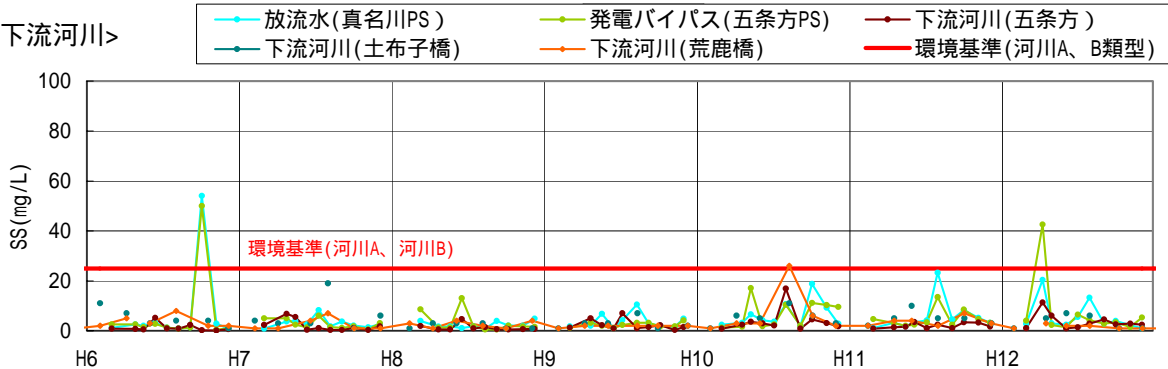
<流入河川>



<貯水池>



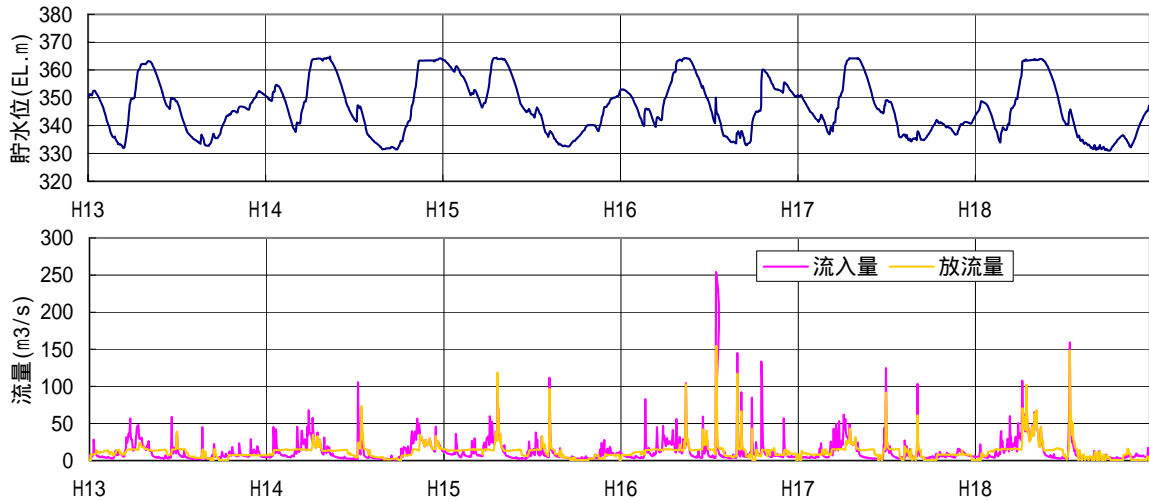
<下流河川>



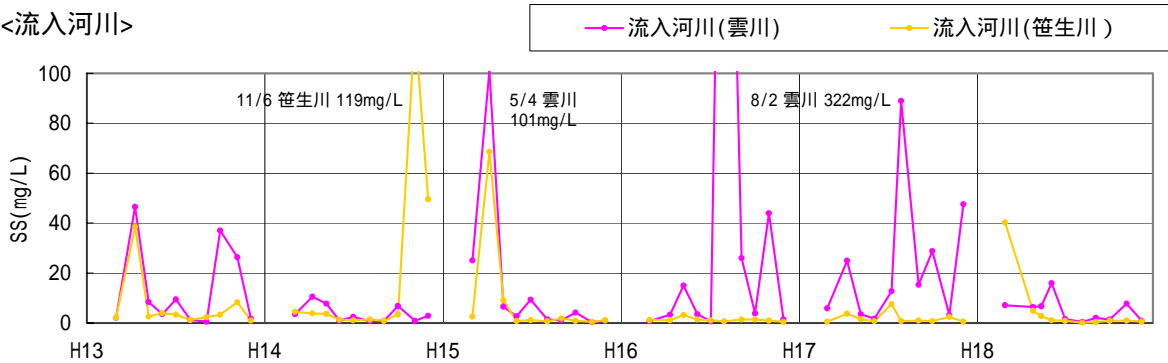
河川の環境基準値(A 類型、B 類型)を記載している。

(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

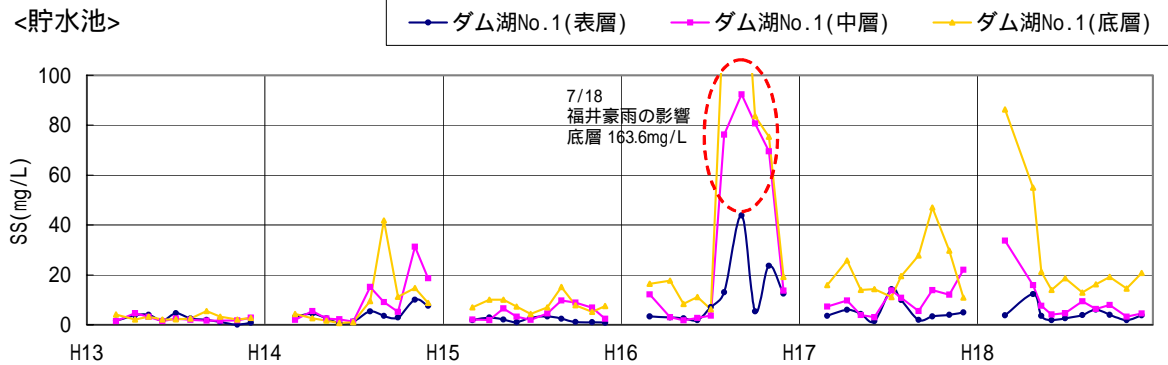
図 5.3-16(4) 流入・放流水質の経月変化(SS)



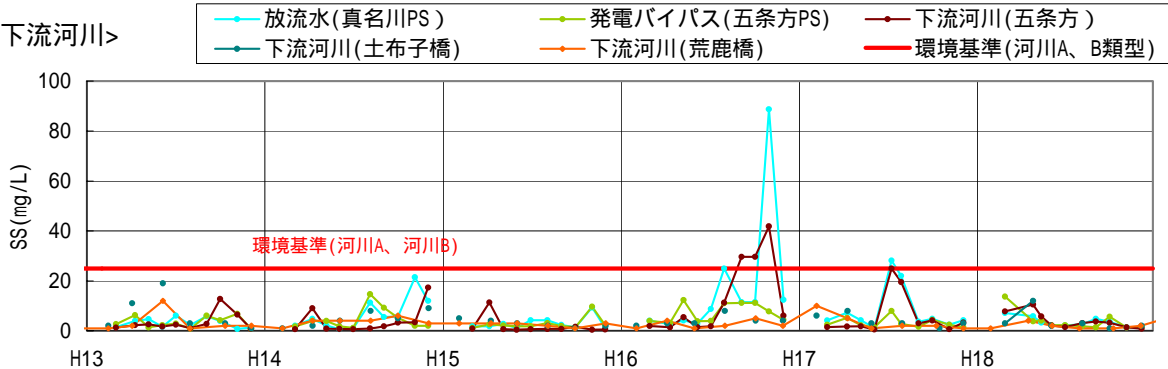
<流入河川>



<貯水池>



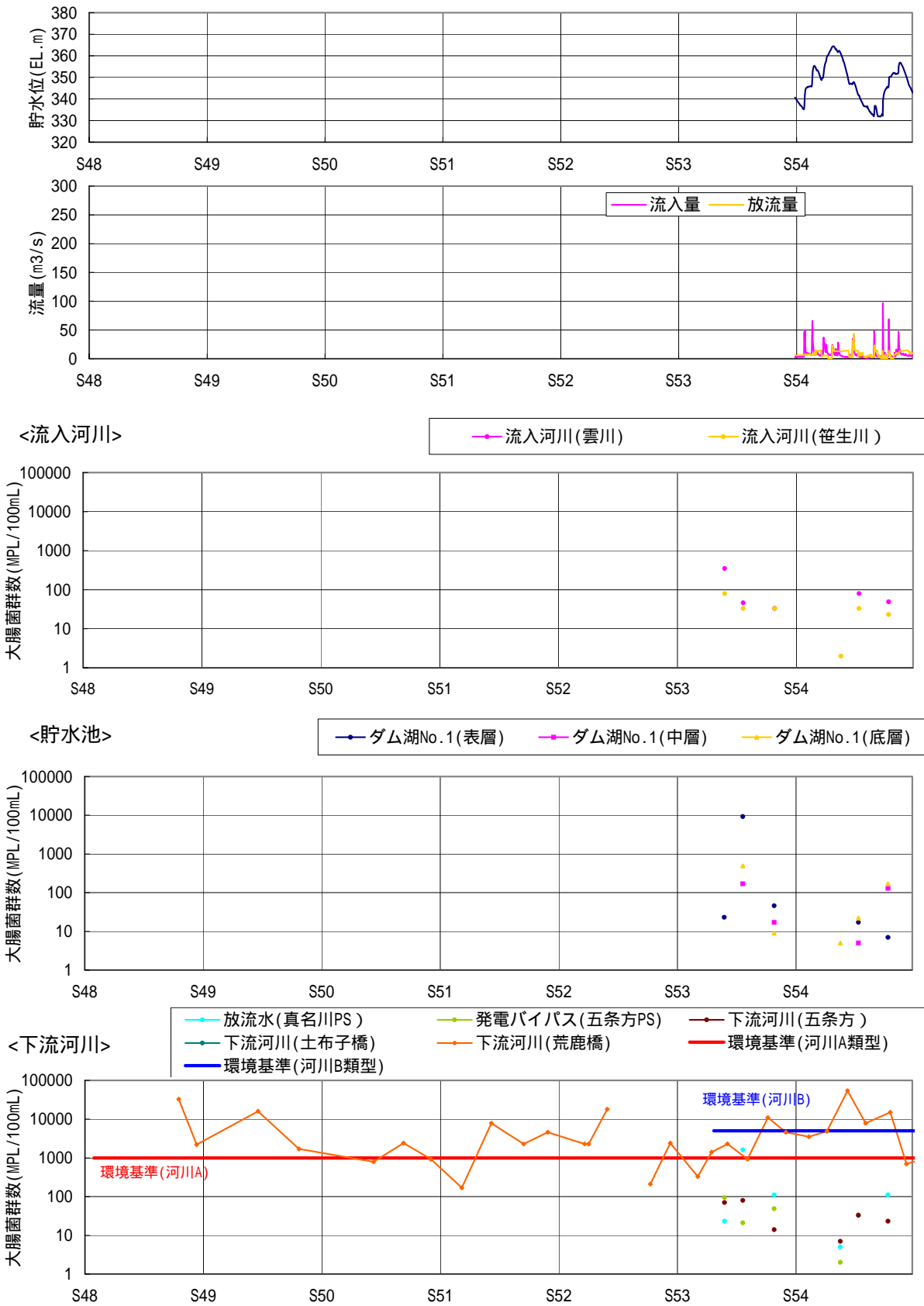
<下流河川>



河川の環境基準値(A 類型、B 類型)を記載している。

(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

図 5.3-16(5) 流入・放流水質の経月変化(SS)

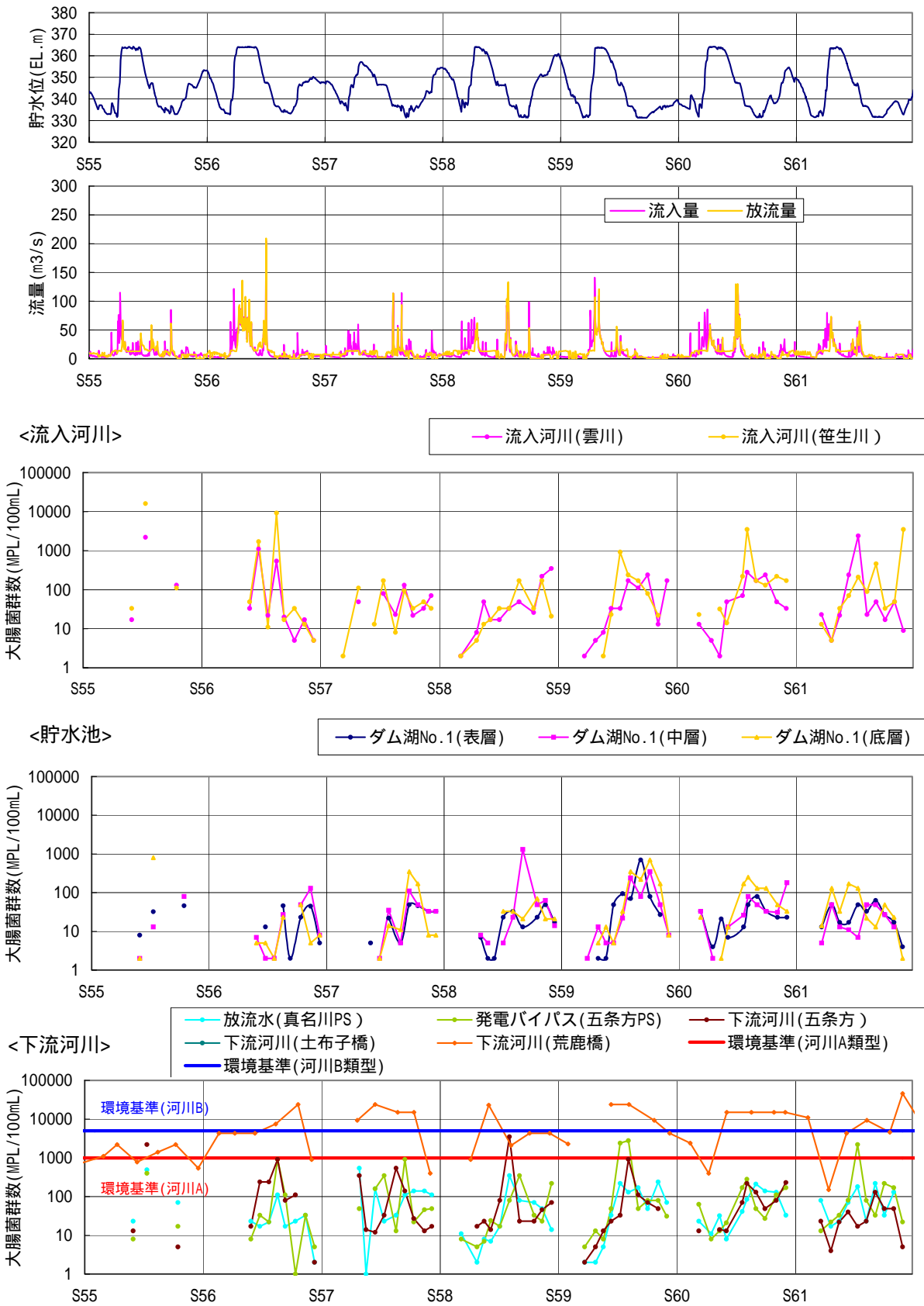


河川の環境基準値(A 類型、B 類型)を記載している。

(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

図 5.3-17(1) 流入・放流水質の経月変化(大腸菌群数)

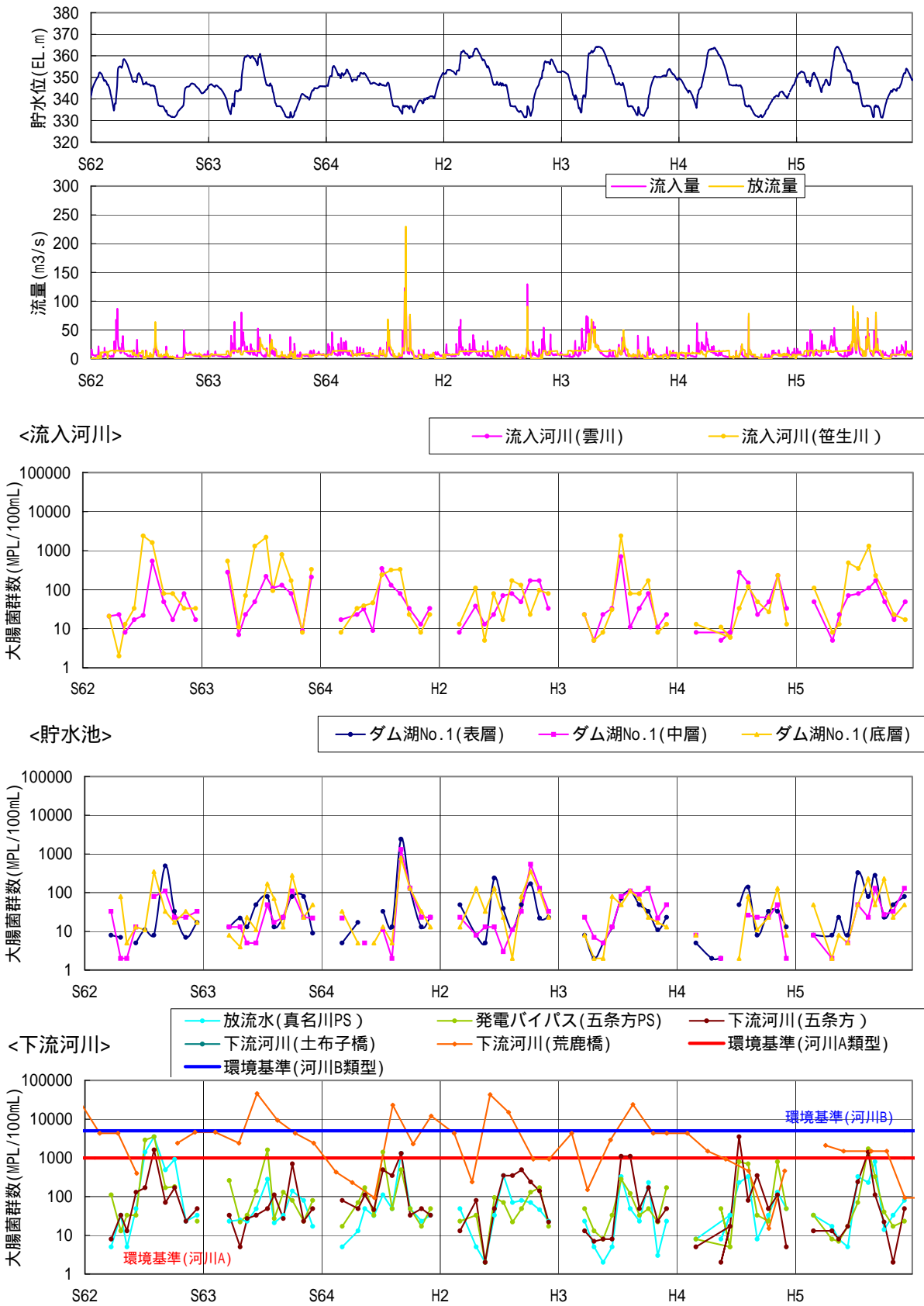




河川の環境基準値(A 類型、B 類型)を記載している。

(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

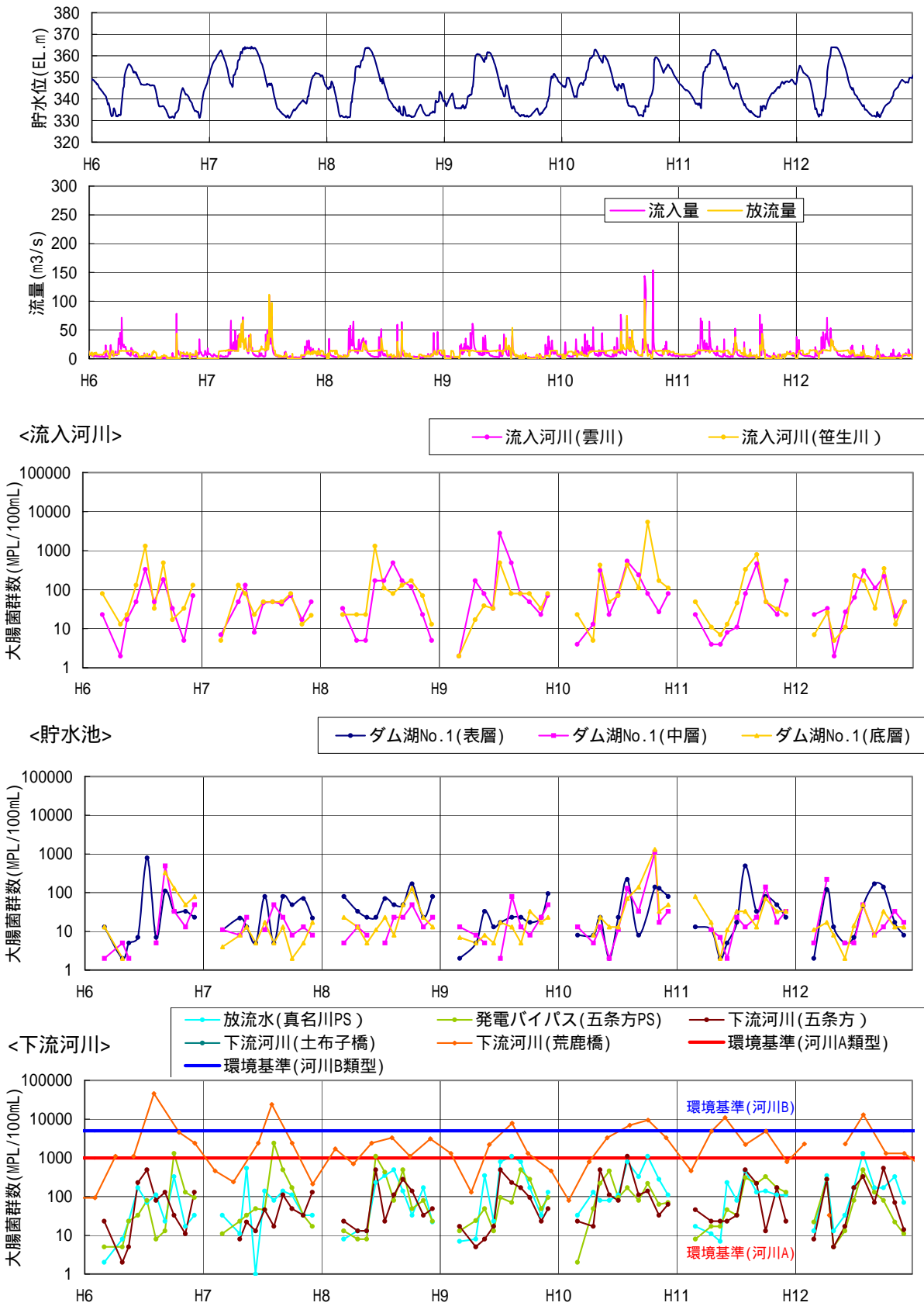
図 5.3-17(2) 流入・放流水質の経月変化(大腸菌群数)



河川の環境基準値(A 類型、B 類型)を記載している。

(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

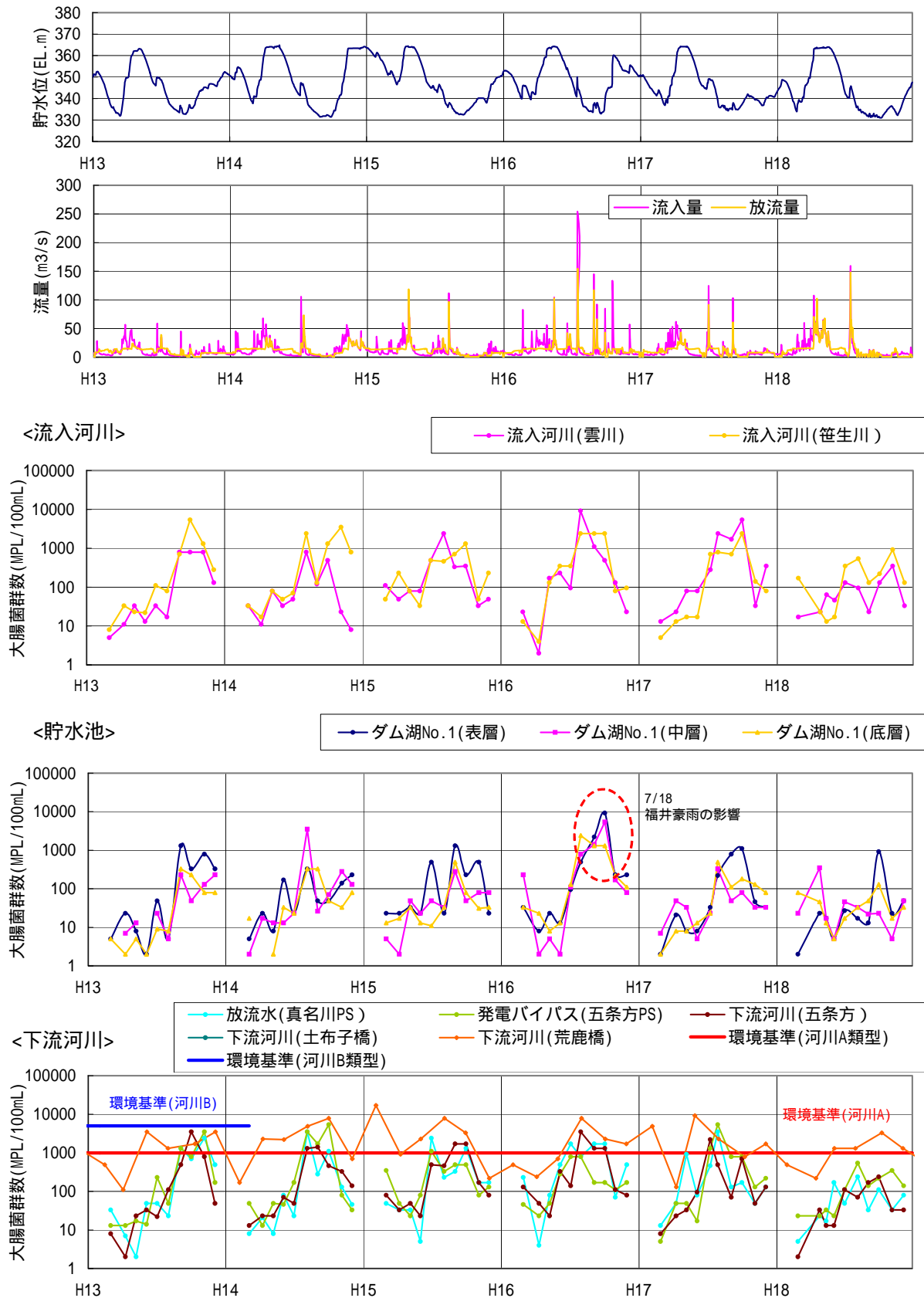
図 5.3-17(3) 流入・放流水質の経月変化(大腸菌群数)



河川の環境基準値(A 類型、B 類型)を記載している。

(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

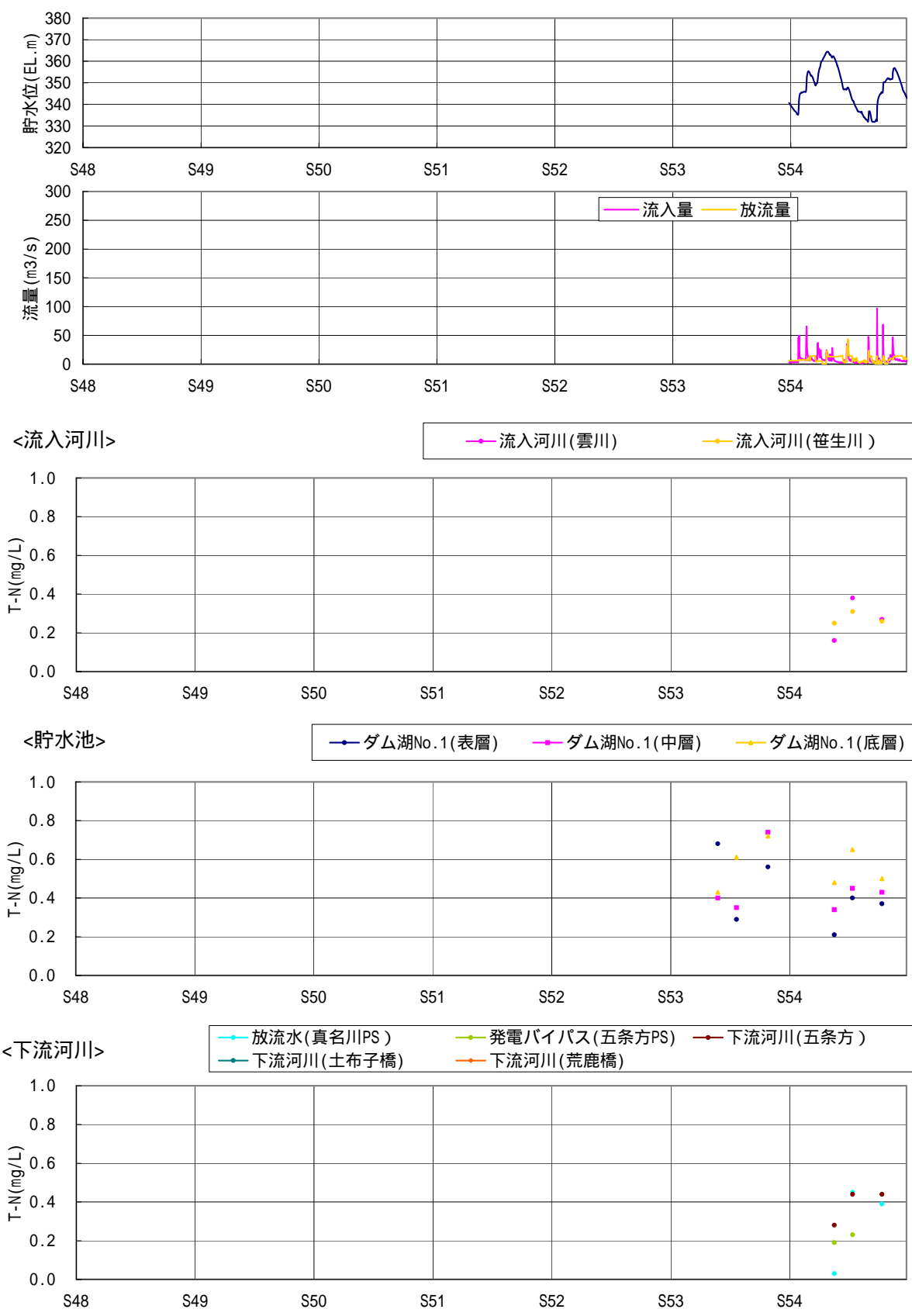
図 5.3-17(4) 流入・放流水質の経月変化(大腸菌群数)



河川の環境基準値(A 類型、B 類型)を記載している。

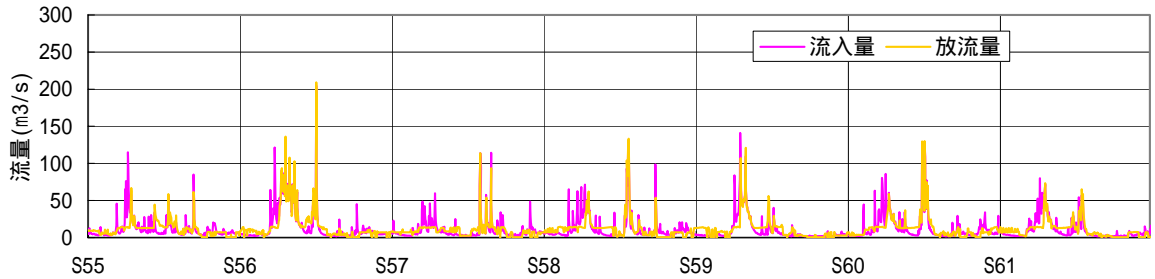
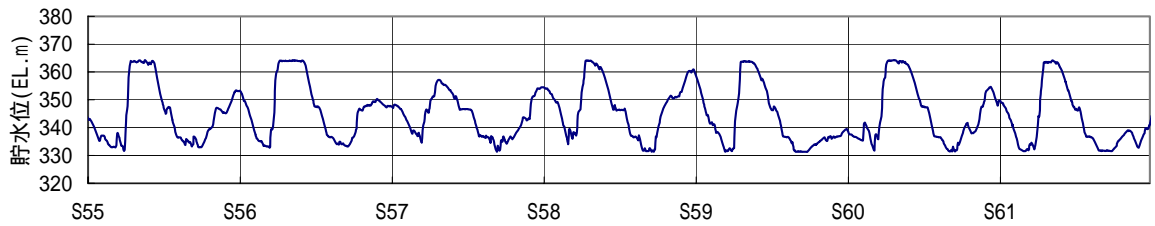
(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

図 5.3-17(5) 流入・放流水質の経月変化(大腸菌群数)

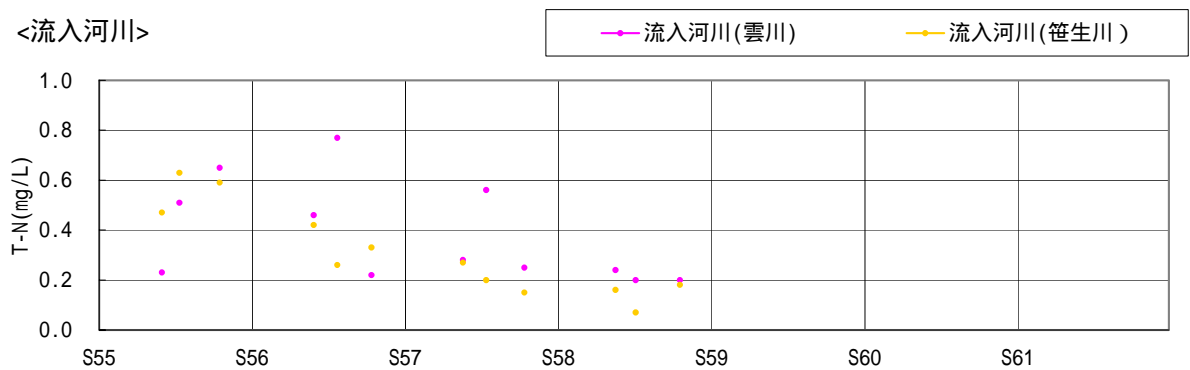


(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

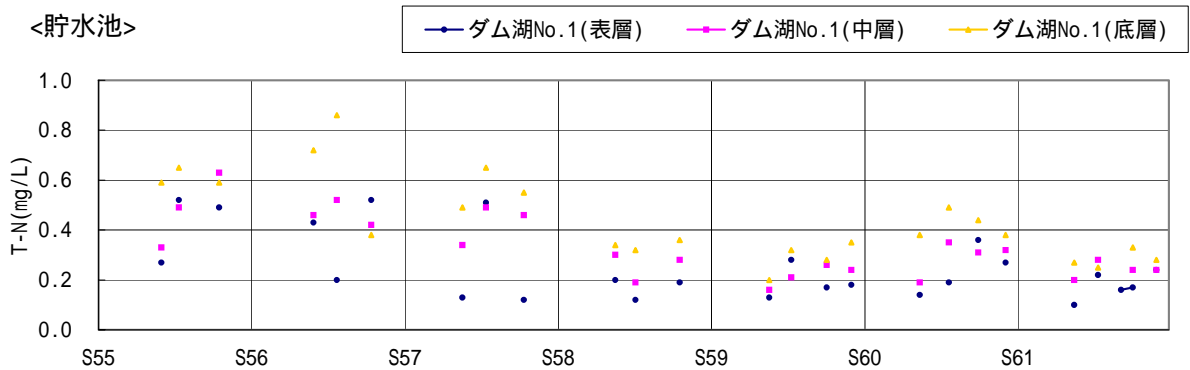
図 5.3-18(1) 流入・放流水質の経月変化(T-N)



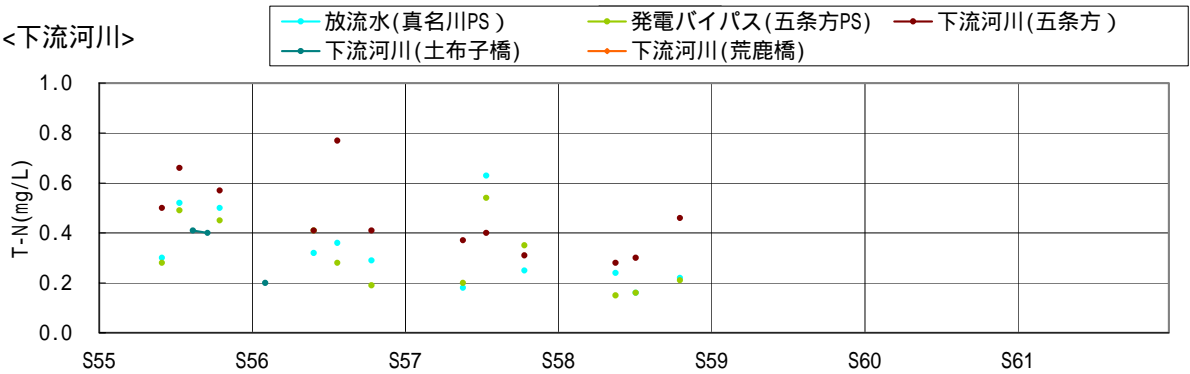
<流入河川>



<貯水池>

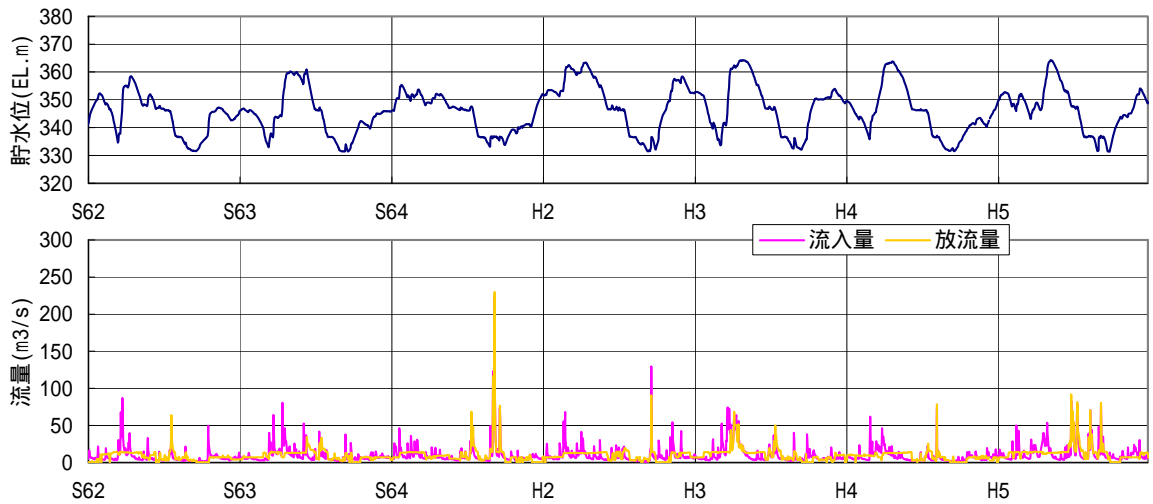


<下流河川>

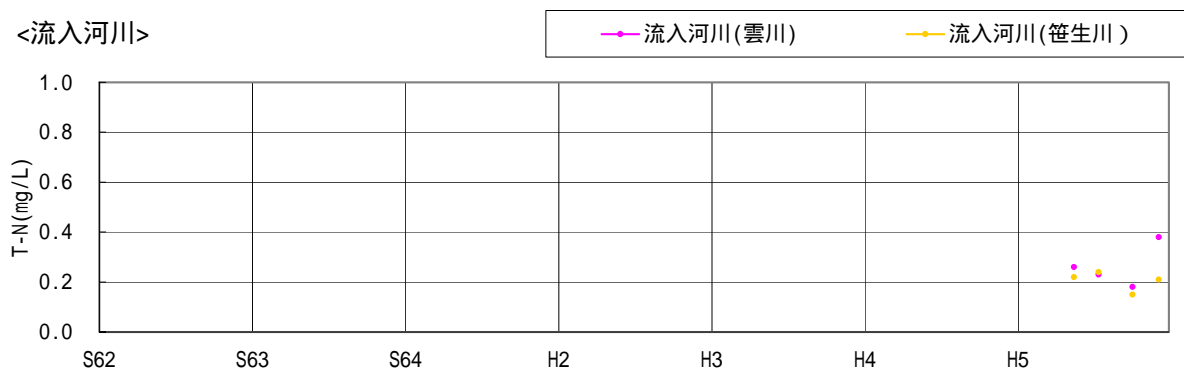


(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

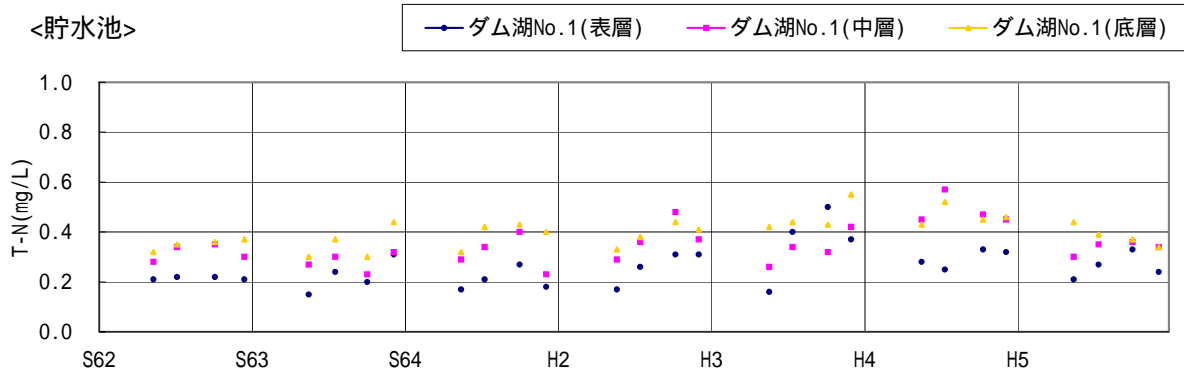
図 5.3-18(2) 流入・放流水質の経月変化(T-N)



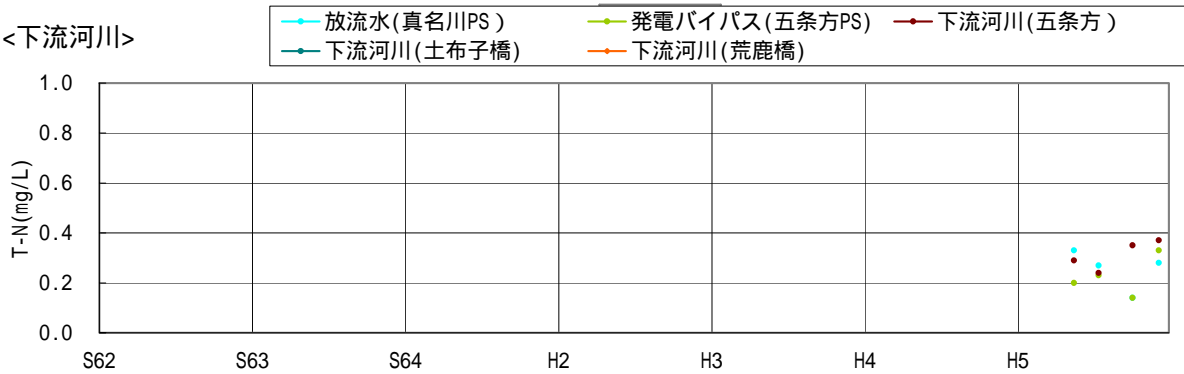
<流入河川>



<貯水池>

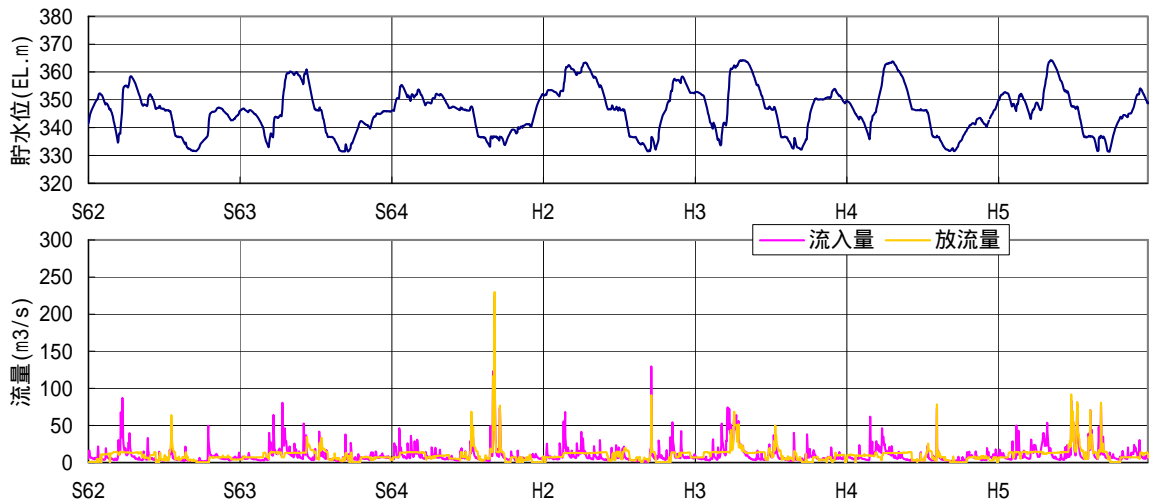


<下流河川>

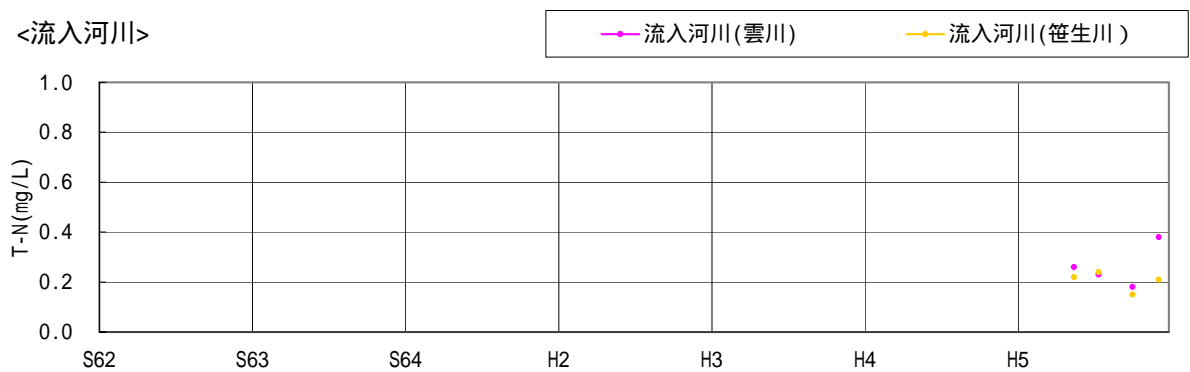


(出典：資料 5-8,9,13,14)

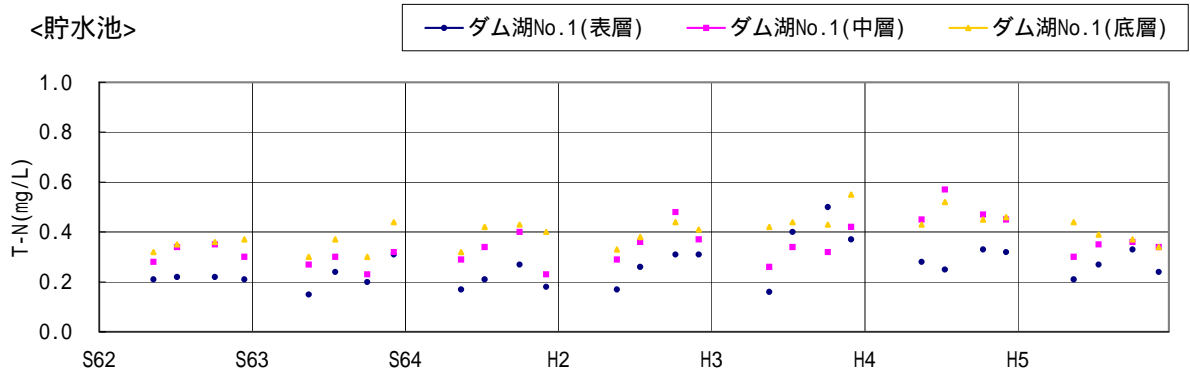
図 5.3-18(3) 流入・放流水質の経月変化(T-N)



<流入河川>



<貯水池>



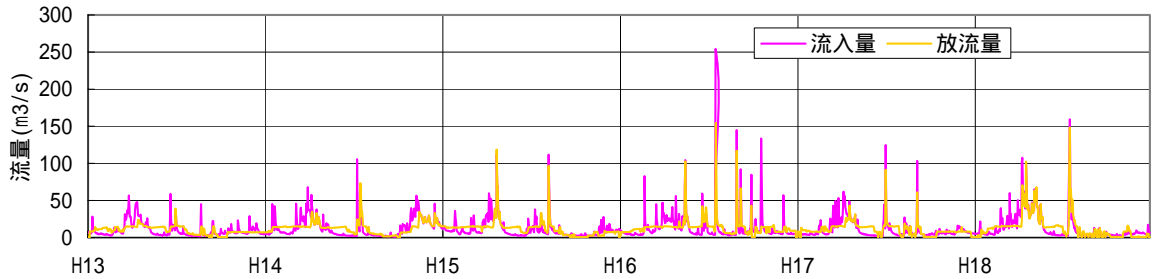
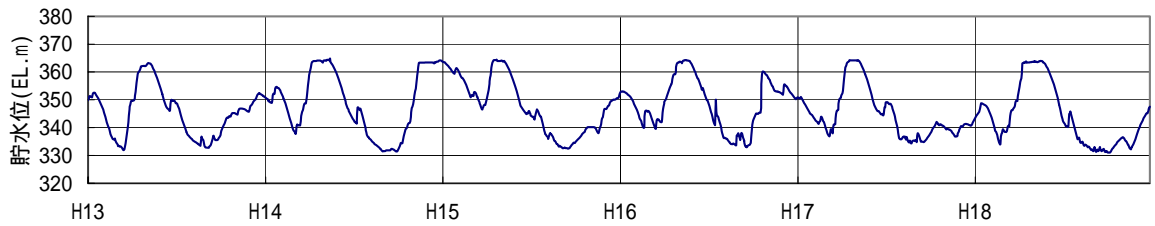
<下流河川>



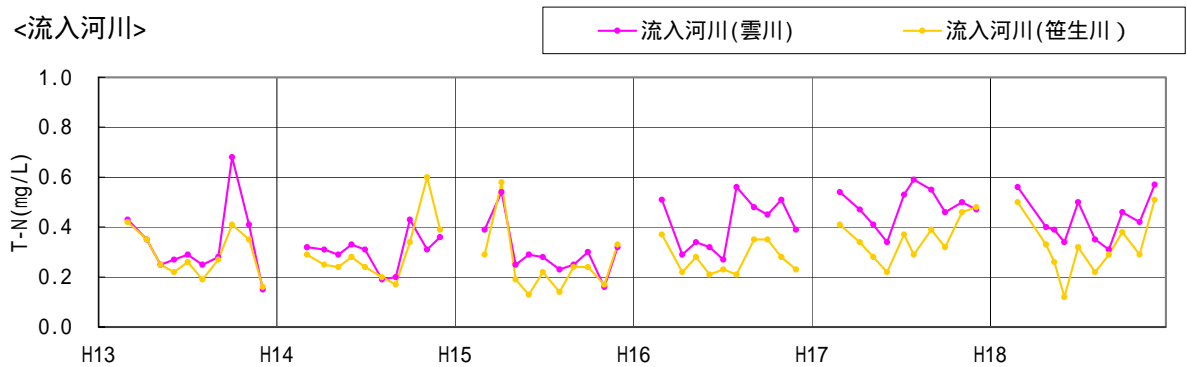
(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

図 5.3-18(4) 流入・放流水質の経月変化(T-N)

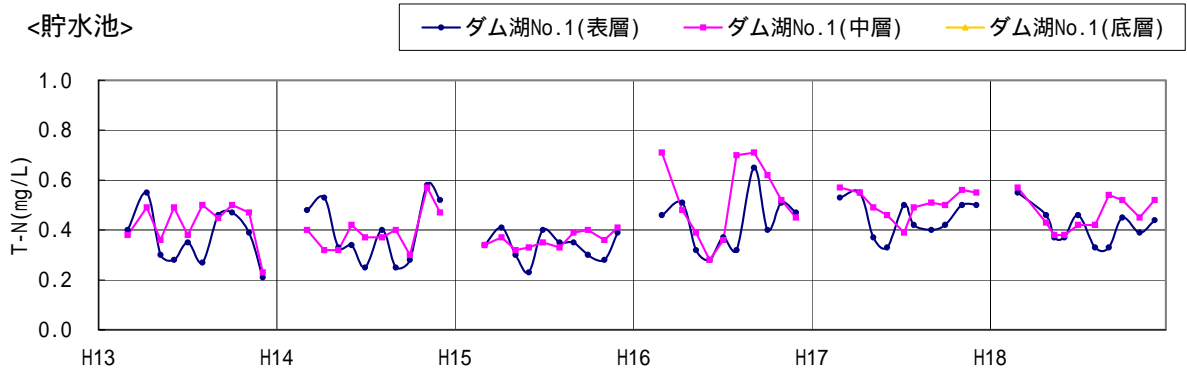




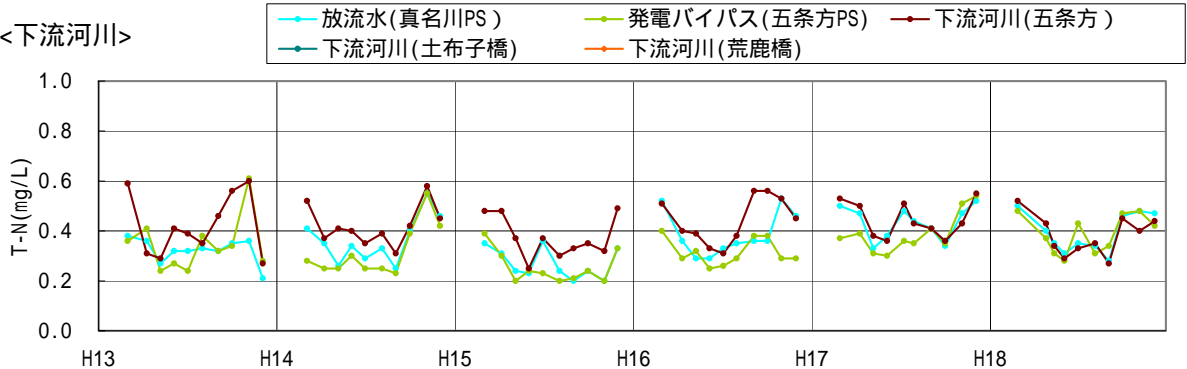
<流入河川>



<貯水池>

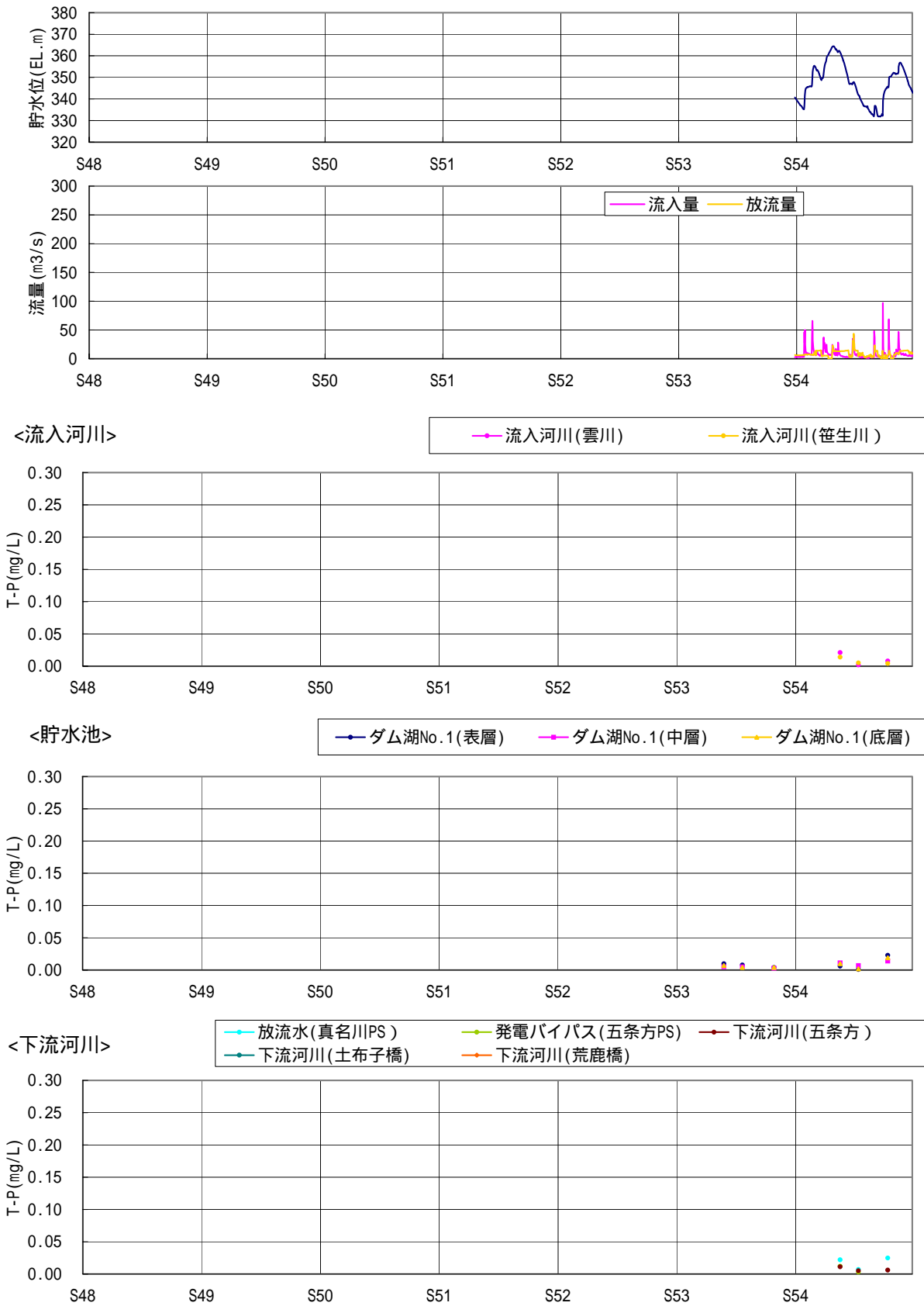


<下流河川>



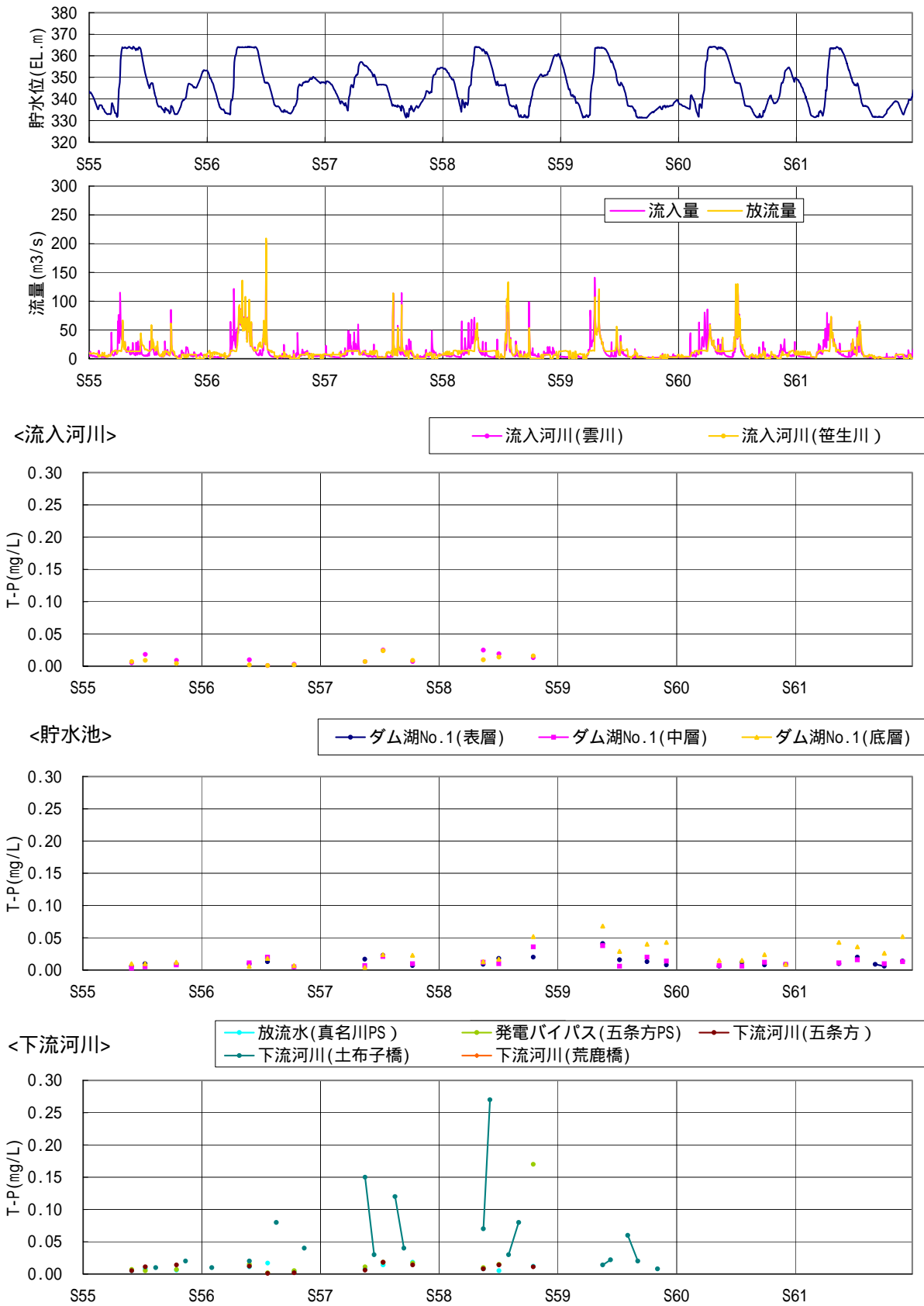
(出典：資料 5-8,9,13,14)

図 5.3-18(5) 流入・放流水質の経月変化(T-N)



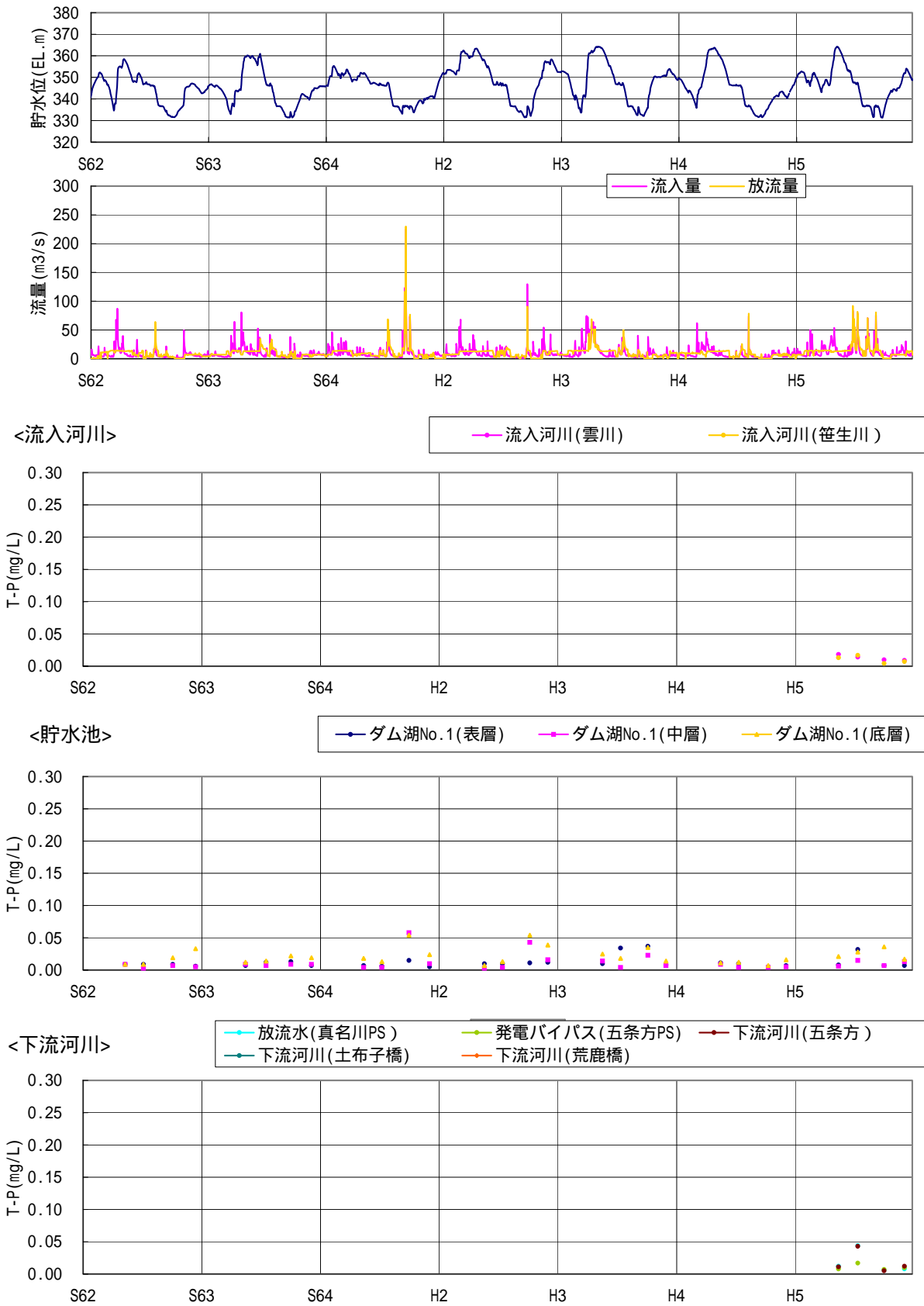
(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

図 5.3-19(1) 流入・放流水質の経月変化(T-P)



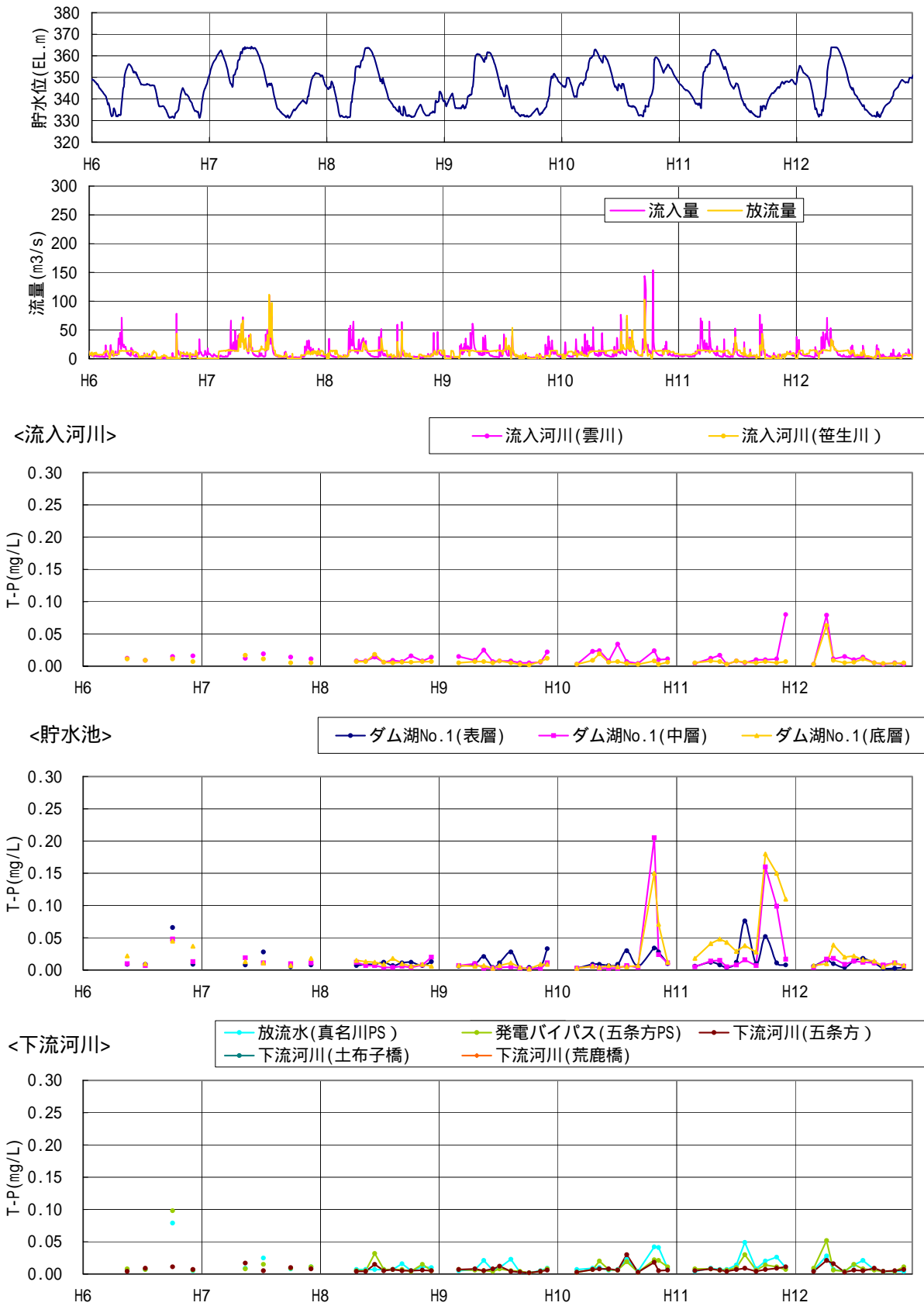
(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

図 5.3-19(2) 流入・放流水質の経月変化(T-P)



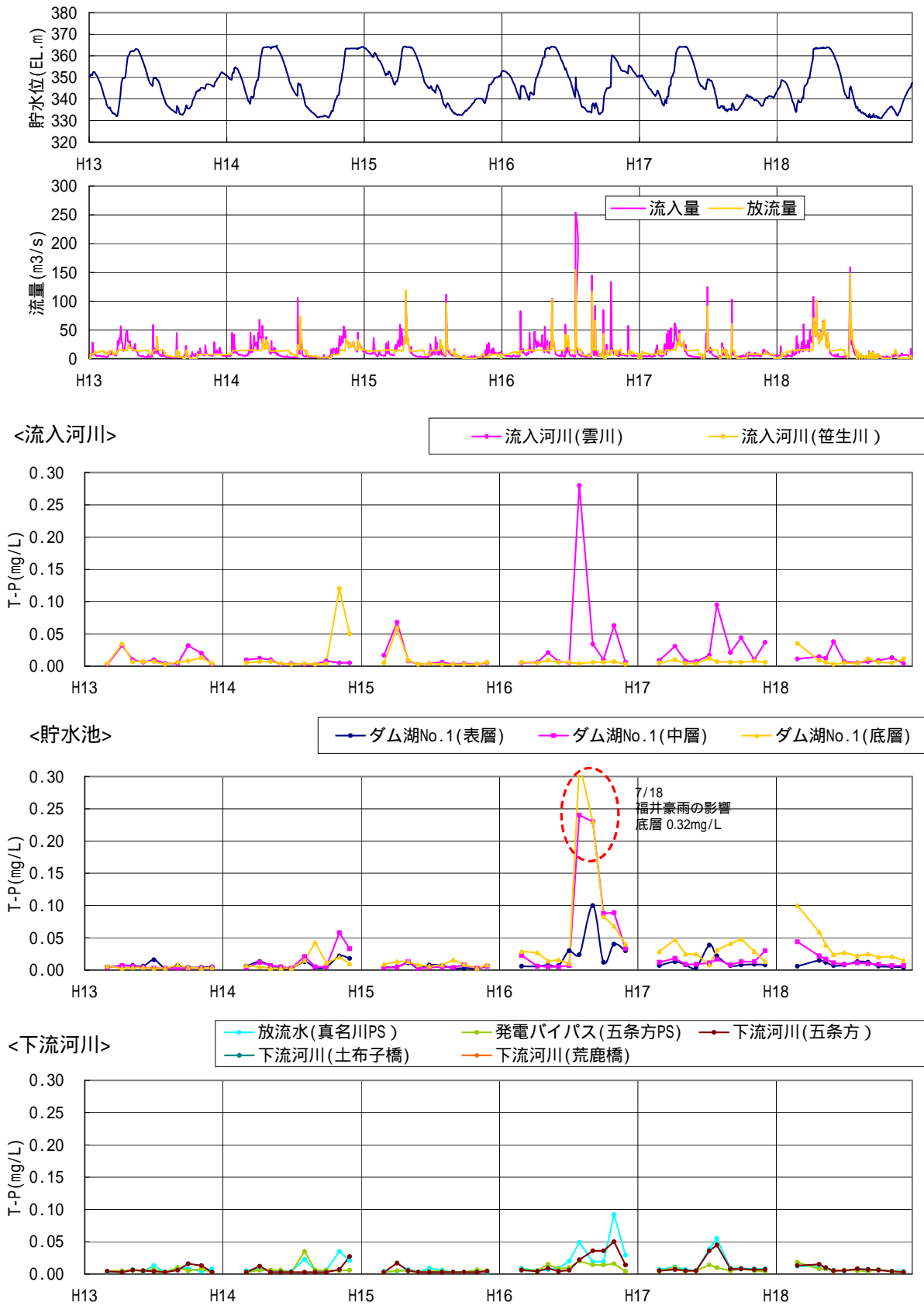
(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

図 5.3-19(3) 流入・放流水質の経月変化(T-P)



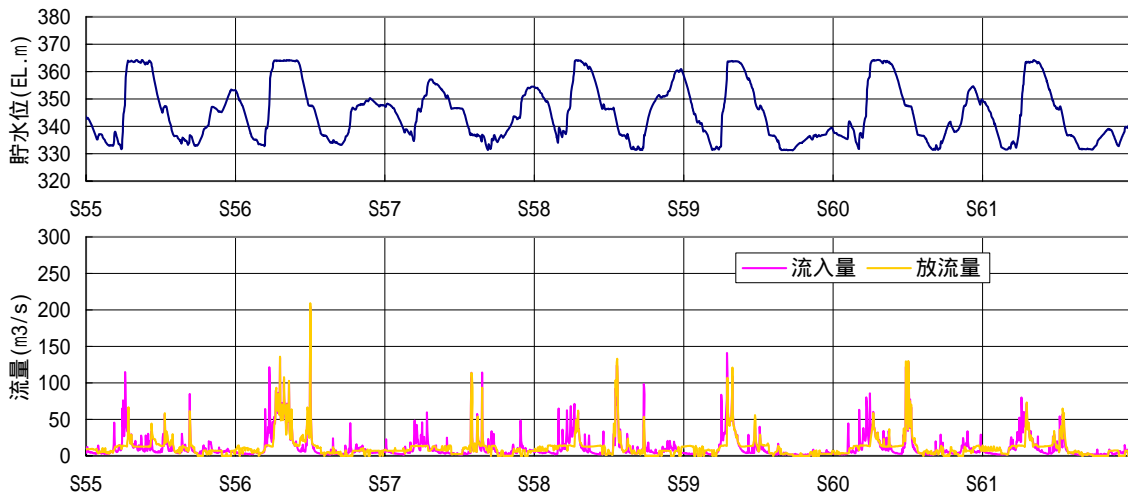
(出典：資料 5-8,9,13,14)

図 5.3-19(4) 流入・放流水質の経月変化(T-P)

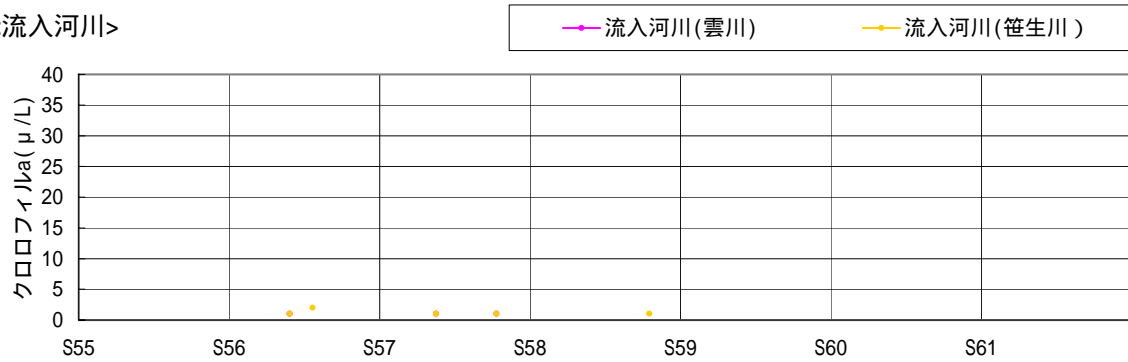


(出典：資料 5-8,9,13,14)

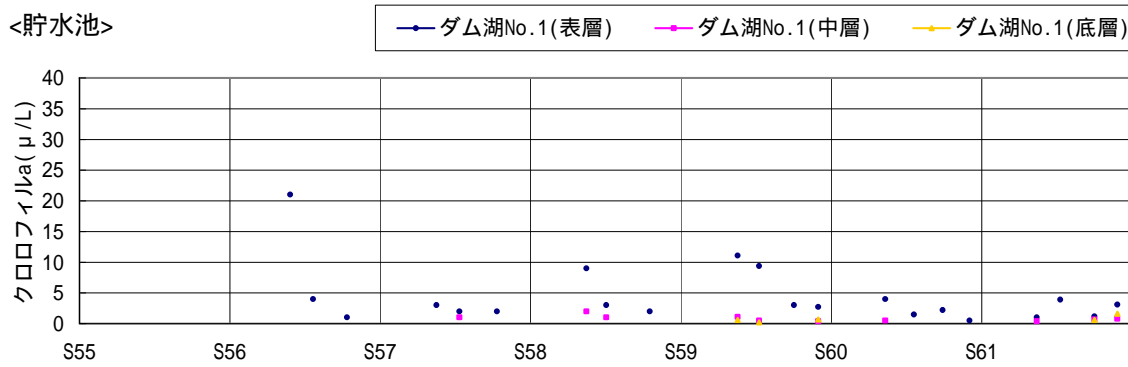
図 5.3-19(5) 流入・放流水質の経月変化(T-P)



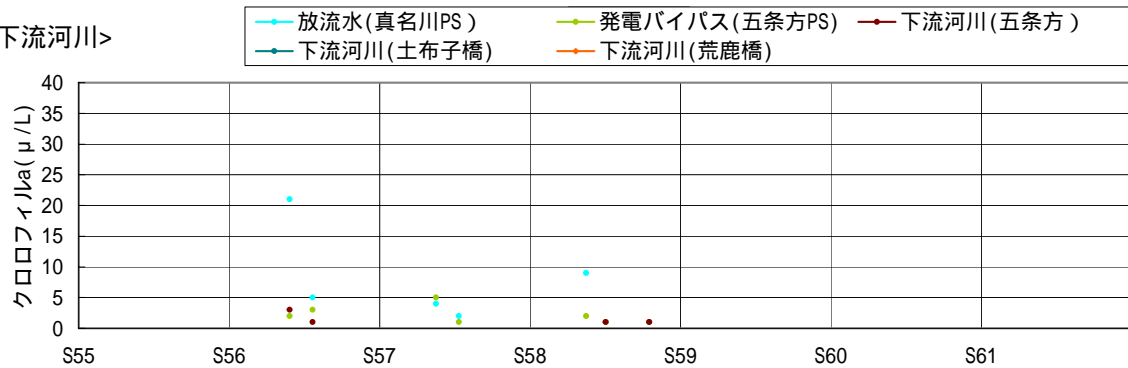
<流入河川>



<貯水池>

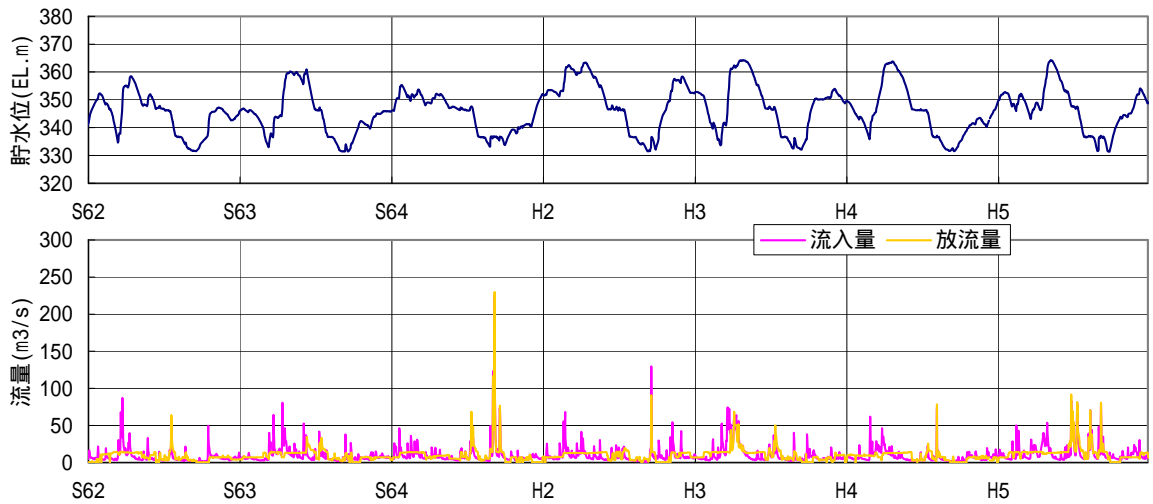


<下流河川>

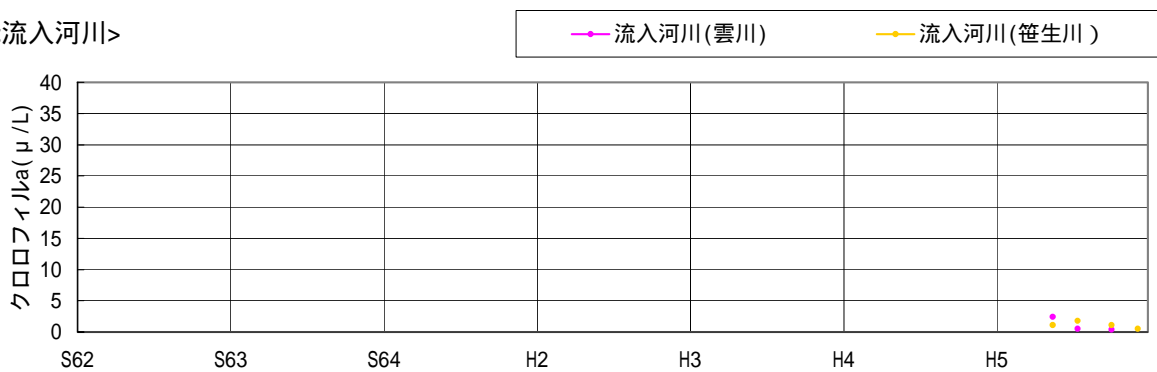


(出典：資料 5-8,9,13,14)

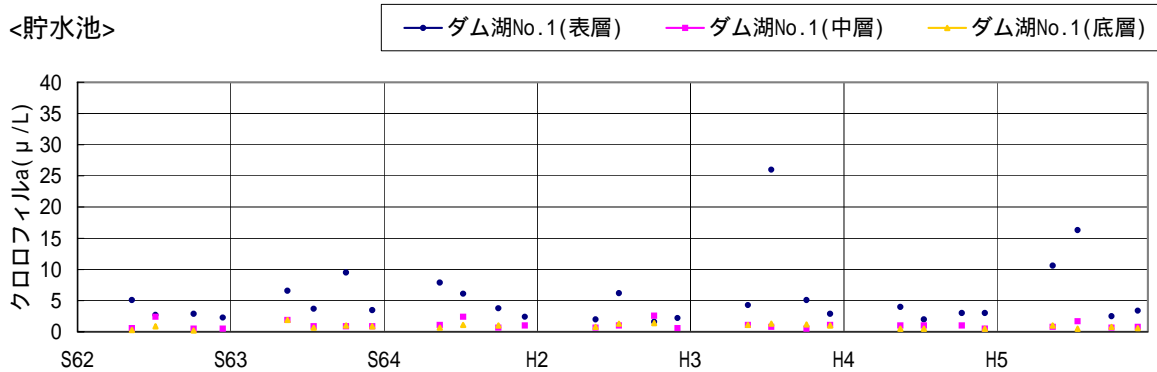
図 5.3-20(1) 流入・放流水質の経月変化(クロロフィル a)



<流入河川>



<貯水池>



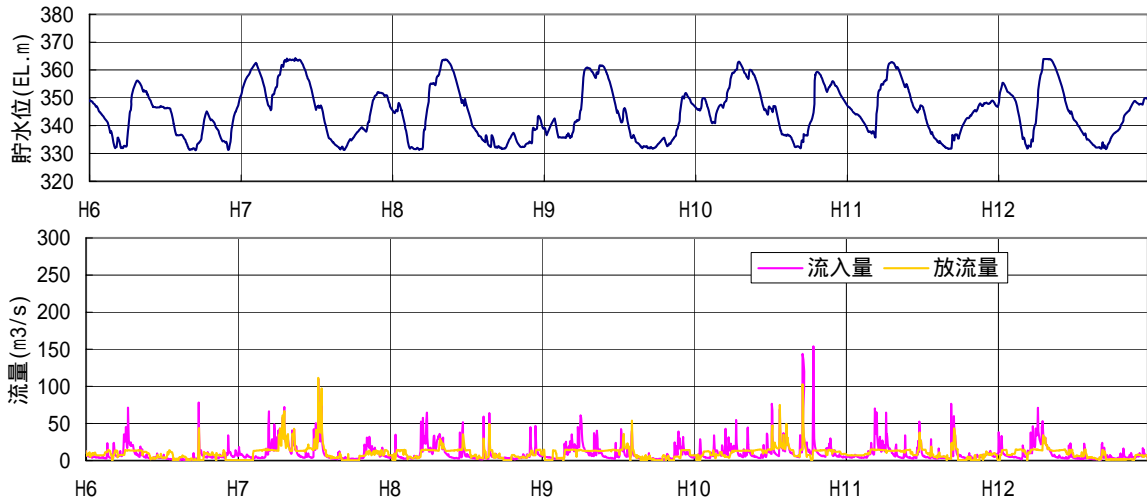
<下流河川>



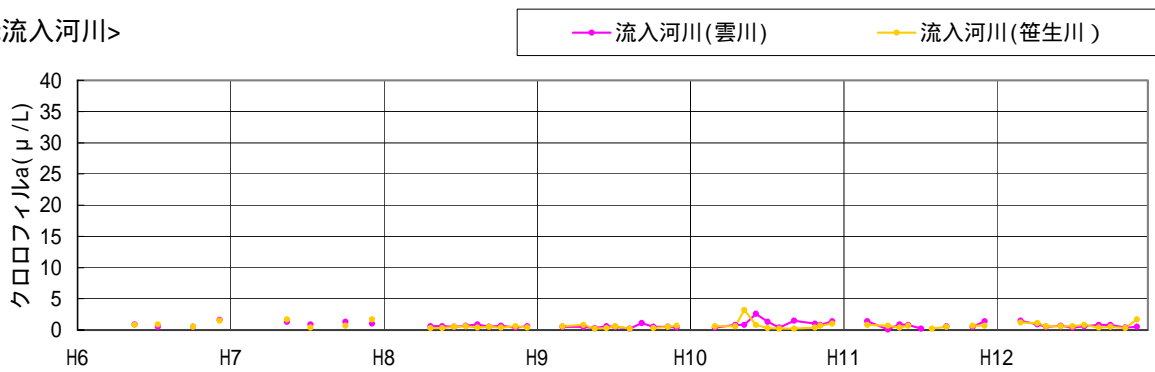
(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

図 5.3-20(2) 流入・放流水質の経月変化(クロロフィル a)

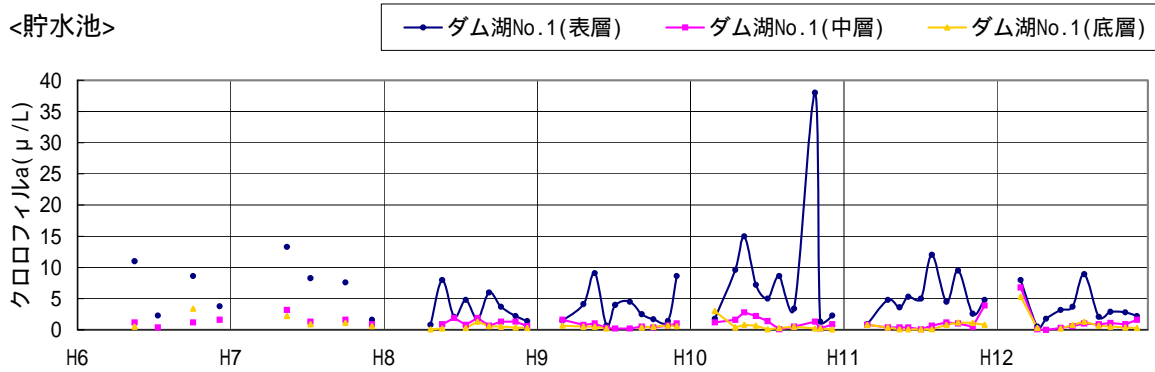




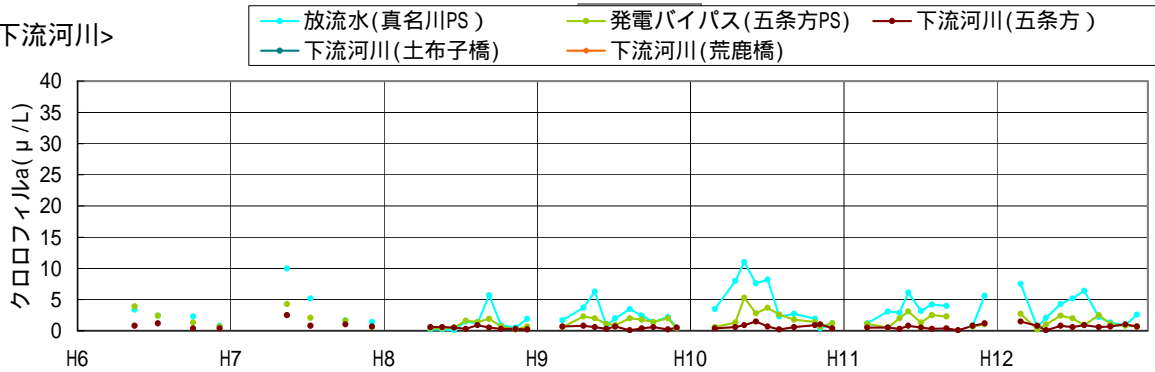
<流入河川>



<貯水池>

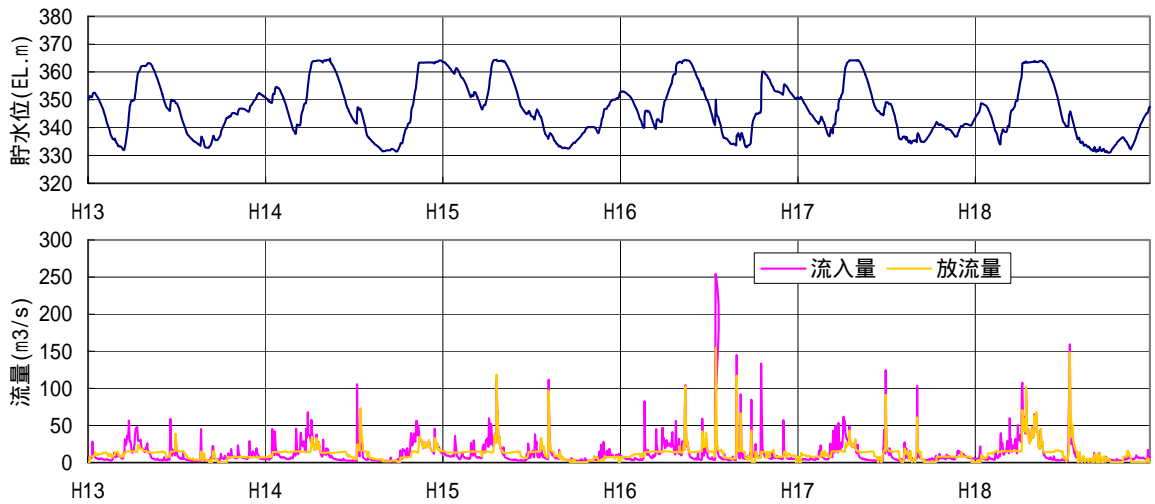


<下流河川>

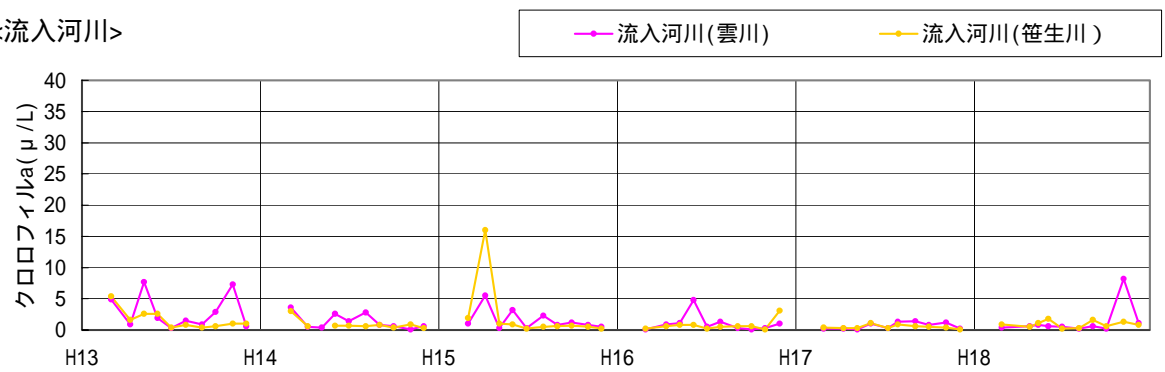


(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

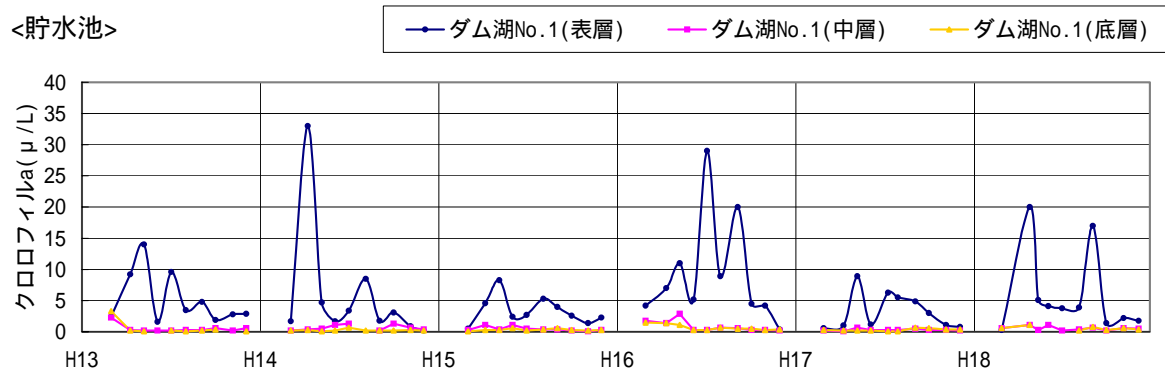
図 5.3-20(3) 流入・放流水質の経月変化(クロロフィル a)



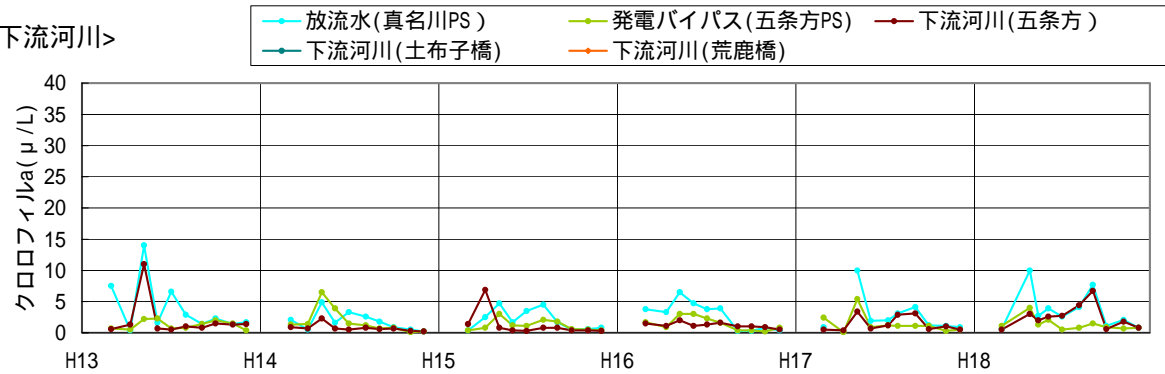
<流入河川>



<貯水池>



<下流河川>



(出典 : 資料 5-8,9,13,14)

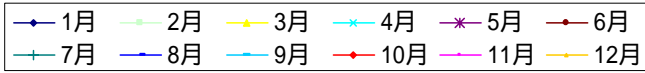
図 5.3-20(5) 流入・放流水質の経月変化(クロロフィル a)

#### 5.3.4. 貯水池内水質の鉛直分布の変化

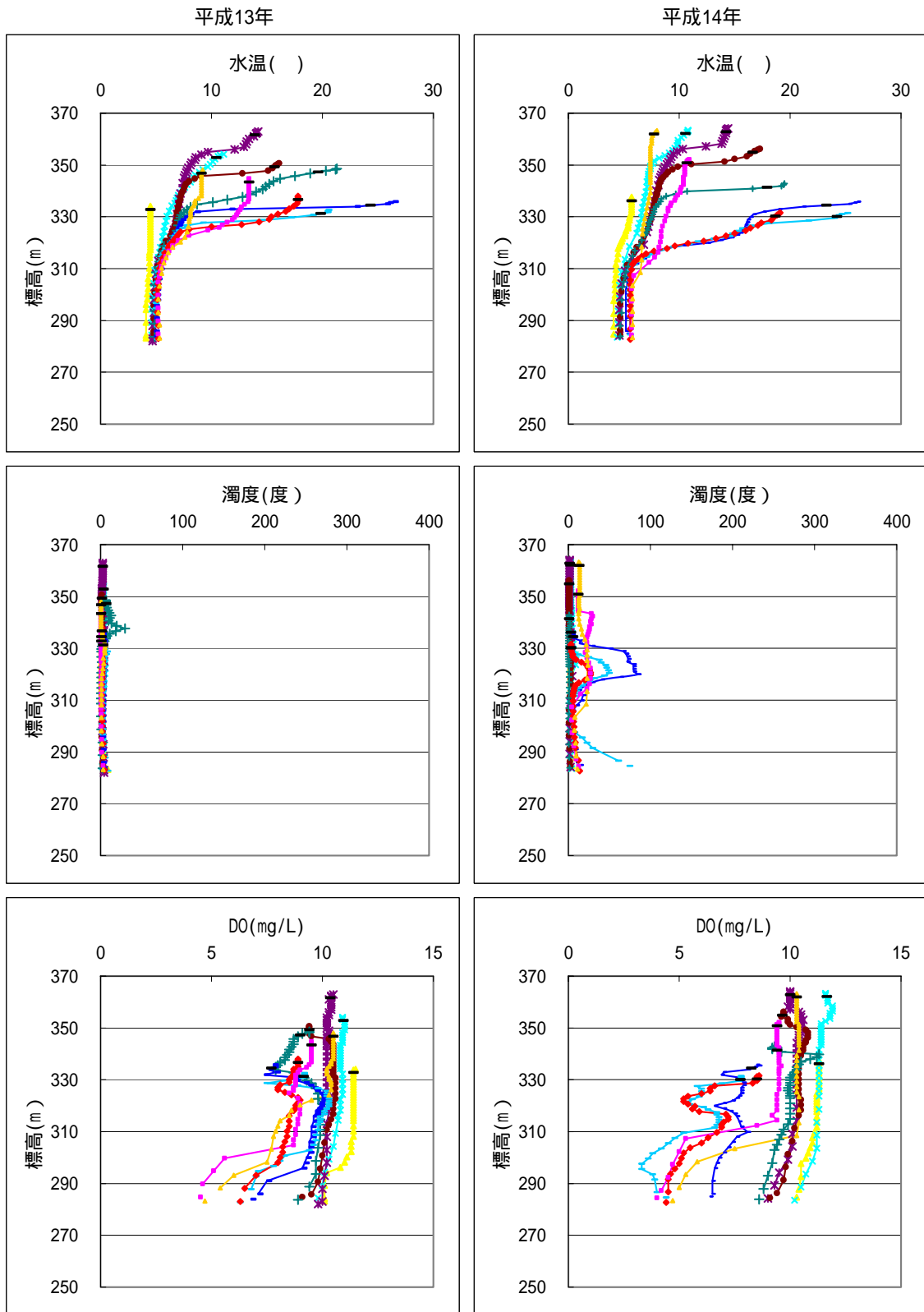
平成13年(2001年)～平成18年(2006年)(近6ヶ年)における貯水池内の鉛直分布として、水温、濁度、D0が同時に測定されているダム湖NO.1の状況を図5.3-21に示す。その結果を受け、水温、濁度、D0鉛直分布の概要を表5.3-5に整理する。

表5.3-5 水温、濁度、D0鉛直分布の概要

調査地点	ダム湖NO.1
水深	概ね75m (EL.290m～365m程度)
水温	<p>平成16年を除く5ヶ年の一般的な変化傾向としては、3月ではまだ躍層が形成されていないことが多く、4月頃からEL.350m付近に1次躍層が形成されるとともに、EL.310m付近以浅の水温が上昇する。さらに5月から6月頃にはEL.350m付近の1次躍層が顕著になる。7月から9月にかけては、第1期制限水位、第2期制限水位と順次水位が低下し、表層水温の上昇と併せ表層からEL.310mまでの間に急激な水温勾配が形成される。10月以降は貯水位の回復とともに、水温が低下し躍層の消失に至っている。</p> <p>平成16年は7月18日の出水(福井豪雨)を挟んで、出水前の7月調査までは例年の水温挙動が見られるが、出水後の8月はEL.310m以深の水温が13℃まで上昇しており(通年は5℃前後)、その後12月においても底層の水温は低下せず、全層が12℃前後の均一な分布となっている。</p>
濁度	<p>大きな出水のなかった平成13年、平成15年、及び平成18年は1次躍層水深に30～40度の濁りが見られる他は、5度未満の様な分布となっている。</p> <p>平成14年及び平成17年は、出水による濁水の1次躍層への貫入が認められ、その後高濁度の分布は低減している。</p> <p>平成16年は7月18日の出水(福井豪雨)の後の8月調査時には表層を除く全層で200度を越える高濁度となっており、全層が循環混合しているものと推察される。その後、11月、12月と底層濁度は減少するものの、中層付近には200度以上の高濁度層が残存している。</p>
D0	<p>年によって変動はあるが、概ね8月頃から底層で減少し始め、10月から12月に最低となる。貧酸素化する場合は概ね湖底からEL.310mの範囲で発生している。3月時点では貧酸素状態は解消されている。</p>

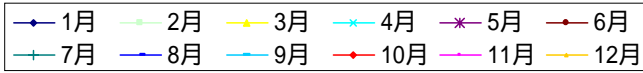


(備考) 「-」の位置は取水標高を示す。

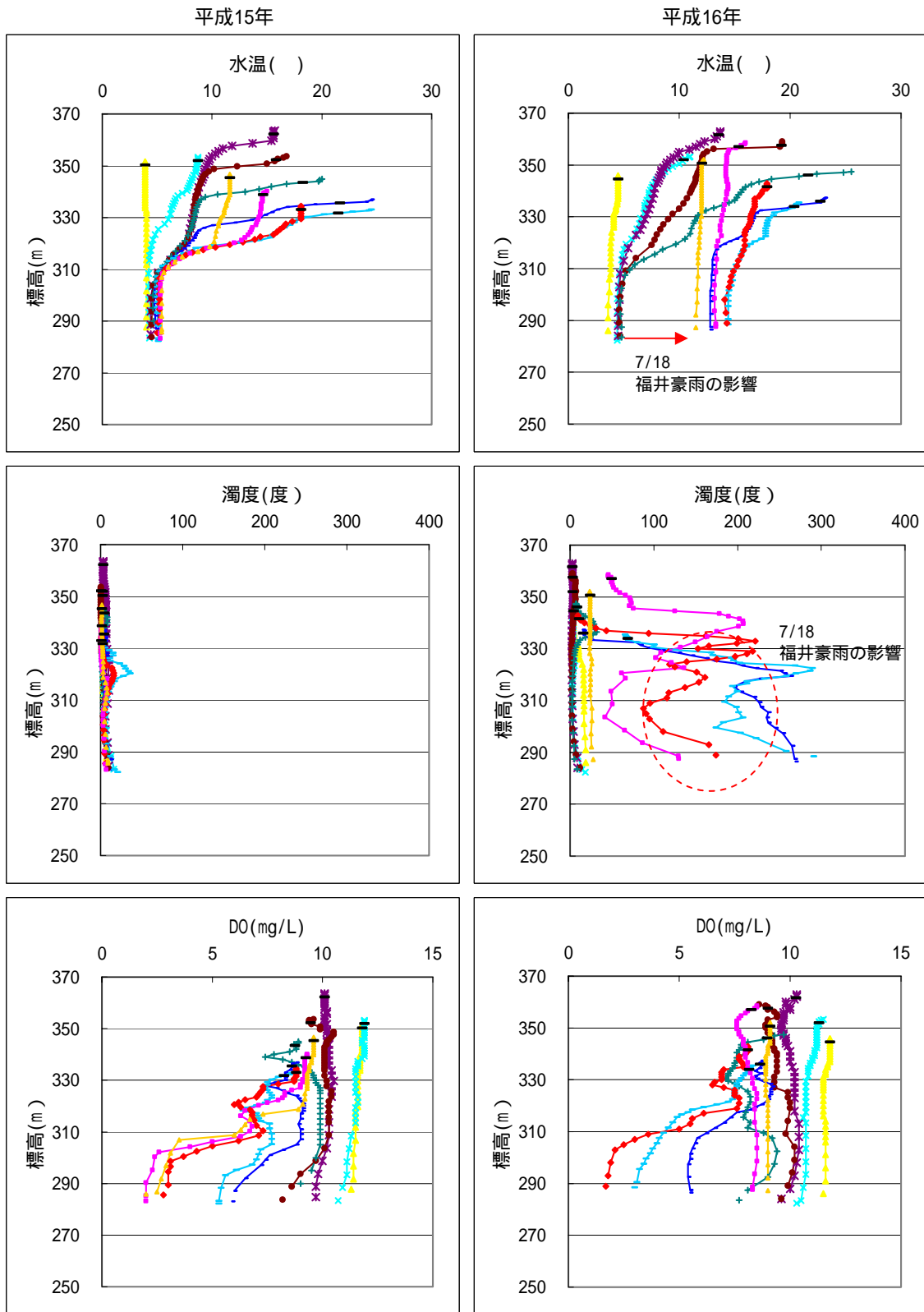


(出典：資料 5-13)

図 5.3-21(1) ダム湖 NO.1 地点 水温・DO・濁度の水質鉛直分布(平成 13 年、平成 14 年)

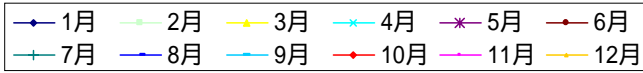


(備考) 「-」の位置は取水標高を示す。

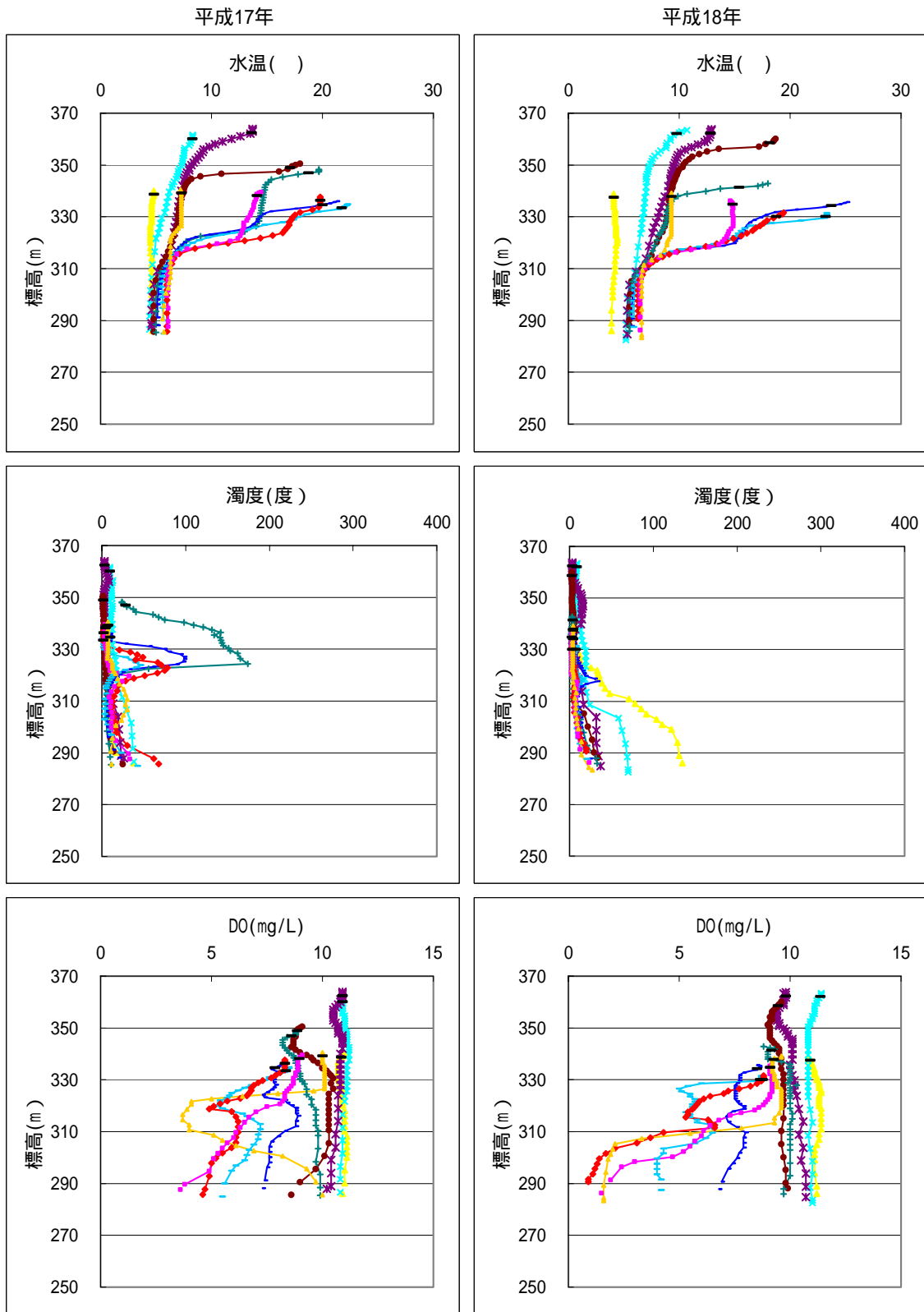


(出典：資料5-13)

図 5.3-21(2) ダム湖 NO.1 地点 水温・D0・濁度の水質鉛直分布(平成 15 年、平成 16 年)



(備考) 「 - 」の位置は取水標高を示す。



(出典 : 資料 5-13)

図 5.3-21(3) ダム湖 NO.1 水温・DO・濁度の水質鉛直分布(平成 17 年、平成 18 年)

### 5.3.5. 栄養塩の構成形態別変化

昭和54年(1979年)～平成18年(2006年)について、流入河川(雲川)、流入河川(笹生川)、ダム湖No.1(表層)、放流水(真名川PS)、下流河川(五条方)、計5地点の全窒素及び全リンの構成形態をとりまとめた結果を表5.3-6、全窒素の構成形態別グラフを図5.3-22、全リンの構成形態別グラフを図5.3-23に示す。

窒素については各地点とも近年増加傾向にあるが、流入河川の窒素の大半が硝酸態窒素であることや、流域の大部分が山林であることから、山地への施肥、気温の上昇による落葉の分解促進に伴う地下水への回帰・流出の増加等、大気汚染の進行に伴う降水中の窒素酸化物の増加が要因にあげられる。

リンについてはT-P、オルトリン酸態リンともにほぼ横這い傾向にあり、構成形態の経年的な変化は認められない。

表5.3-6(1) 窒素の構成形態別平均値のとりまとめ(S54～H18)

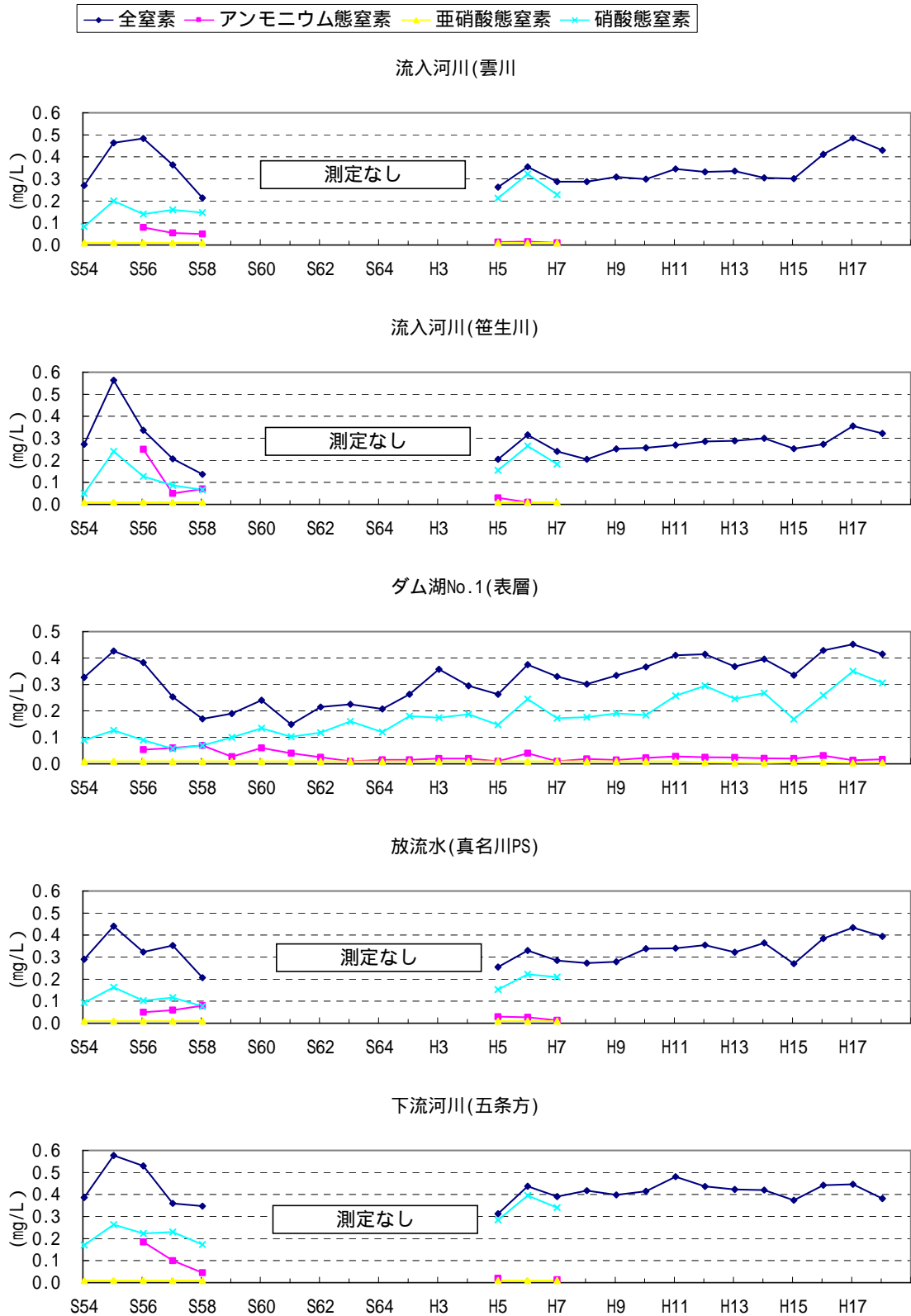
地点	無機態窒素(mg/L)			有機態窒素(mg/L)	内容
	アンモニウム態窒素	亜硝酸態窒素	硝酸態窒素		
流入河川(雲川)	0.037	0.010	0.187	0.110	流入～貯水池～下流にかけての構成形態変化は、総窒素に占める無機態窒素の割合の全期間平均として、それぞれ90%～70%～80%であり大きな変化は生じていない。
流入河川(笹生川)	0.082	0.010	0.147	0.042	
ダム湖No.1(表層)	0.027	0.009	0.178	0.104	
放流水(真名川PS)	0.043	0.010	0.142	0.133	
下流河川(五条方)	0.073	0.010	0.260	0.077	

表中数値は各年の平均値を算定し、それを昭和54年～平成18年で平均した値である。全窒素-無機態窒素により算定。

表5.3-6(2) リンの構成形態別平均値のとりまとめ(S54～H18)

地点	無機態リン(mg/L) <sup>1</sup>	有機態リン(mg/L) <sup>2</sup>	内容
	オルトリン酸態リン		
流入河川(雲川)	0.006	0.008	流入～貯水池～下流にかけての構成形態変化は、総リンに占める無機態リンの割合の全期間平均として、それぞれ60%～35%～50%であり、貯水池内で低下する傾向にある。
流入河川(笹生川)	0.005	0.005	
ダム湖No.1(表層)	0.004	0.008	
放流水(真名川PS)	0.005	0.007	
下流河川(五条方)	0.006	0.003	

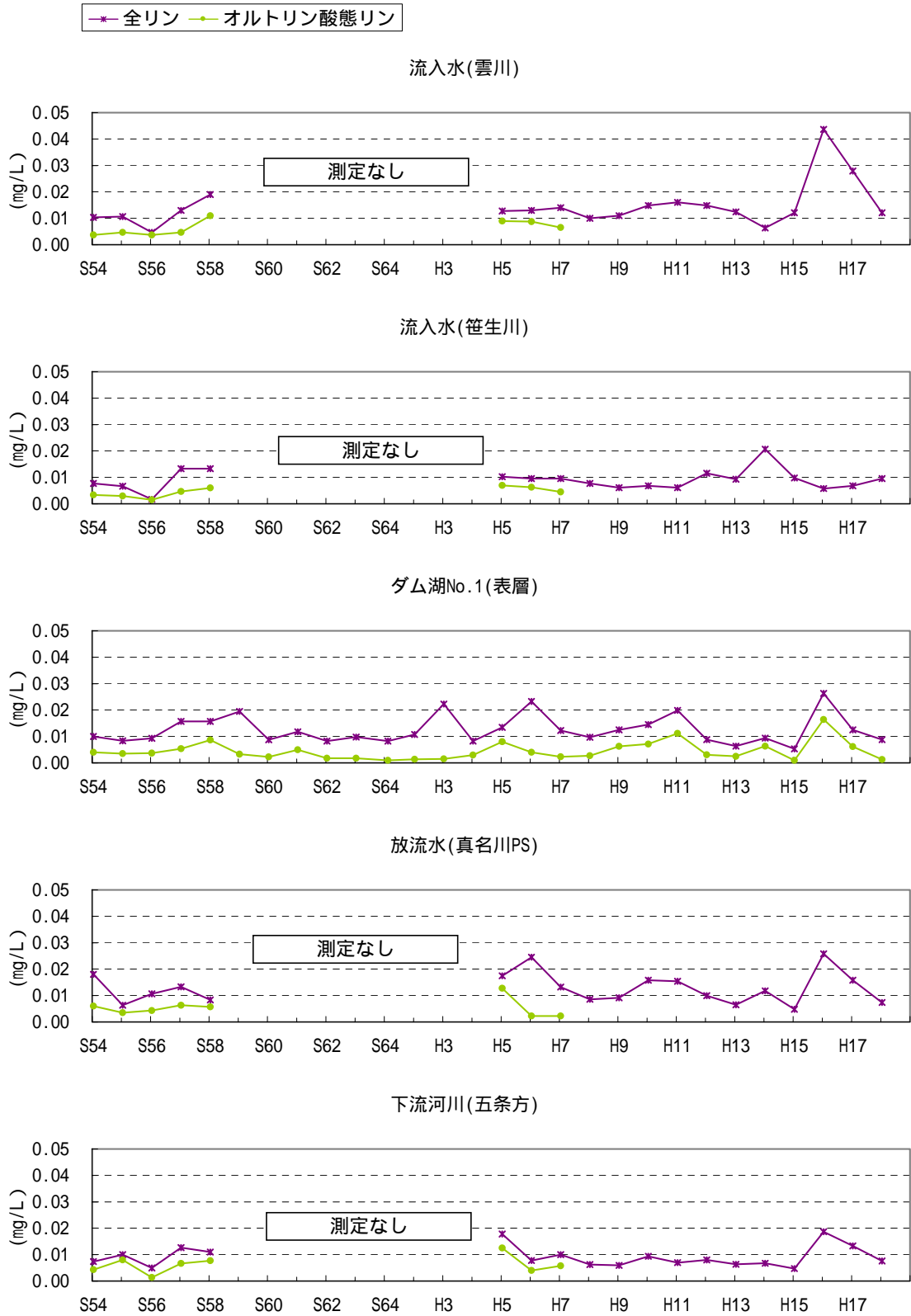
表中数値は各年の平均値を算定し、それを昭和54年～平成18年で平均した値である。  
<sup>1</sup> 重合リン酸とオルトリン酸態リンに分けられるが、代表値としてオルトリン酸態リンを標記  
<sup>2</sup> 全リン-無機態リンにより算定



(出典 : 資料 5-13)

図 5.3-22 窒素の構成別変化





(出典：資料 5-13)

図 5.3-23 リンの構成別変化

### 5.3.6. 貯水池内水質の縦断変化

貯水池内水質は、ダム湖 No1 の他では昭和 55 年(1980 年)と平成 18 年(2006 年)にダム湖 No4 において表層のみ観測されている。図 5.3-24 に近年平成 18 年(2006 年)の両地点の観測結果を比較して示した。

以下に特徴的な点を示す。

- 水温は、8 月～12 月において流入地点に近いダム湖 No4 に対して、ダムサイトに近いダム湖 No1 の方がやや高い値を示す。
- 貯水池の富栄養化現象について、4 月末にダム湖 No4 において Chl-a が 60  $\mu\text{g/L}$  まで上昇しているが、ダム湖 No1 では 20  $\mu\text{g/L}$  程度と低く、流入端において春先に雪解け水などに含まれる栄養塩により植物プランクトンが増殖しやすい環境にあると推察される。
- SS、大腸菌群数などは、表層においては流入部のダム湖 No4 に比べダムサイトに近いダム湖 No1 の方が比較的低い傾向にあり、懸濁物質が流下課程で沈降することによるものと推察される。

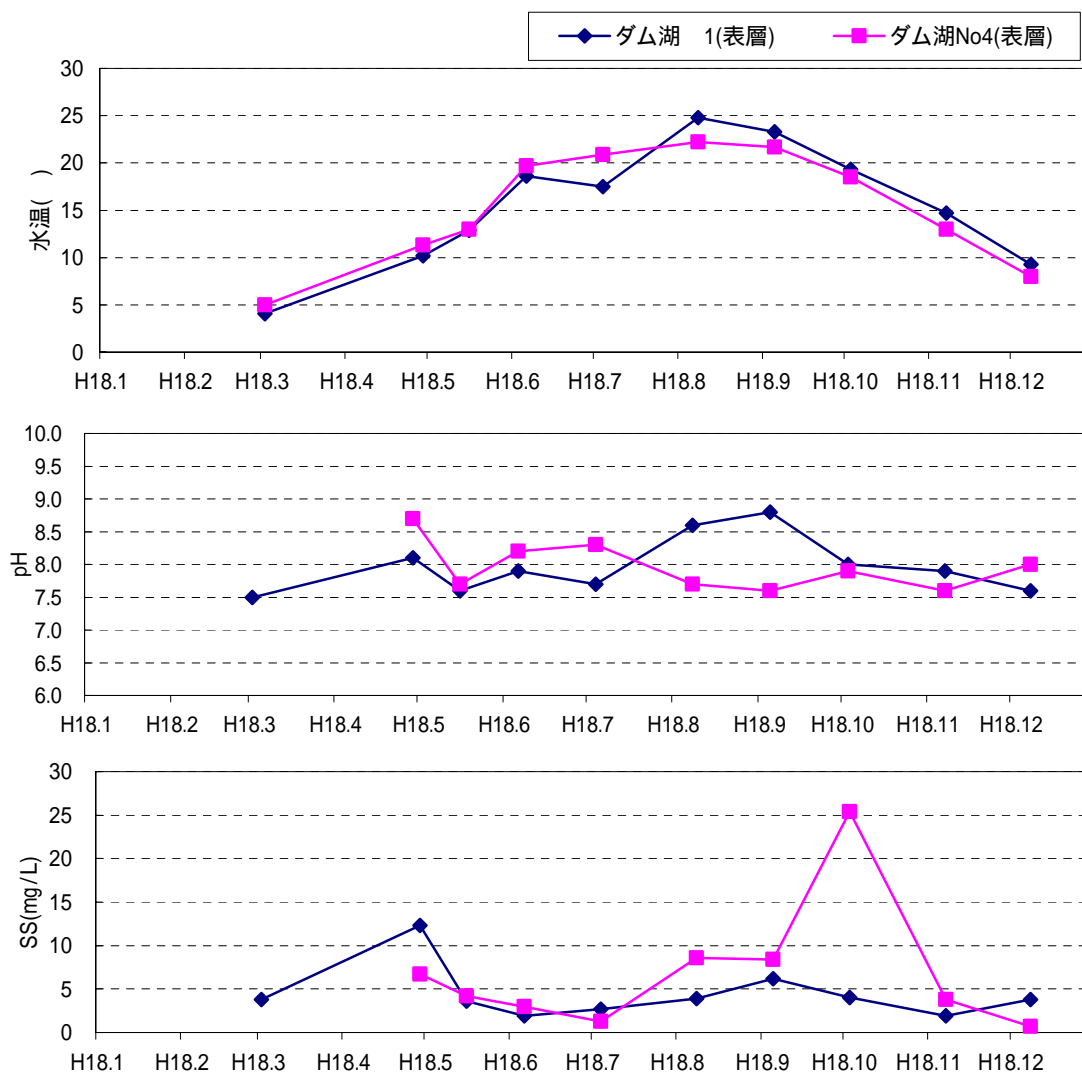


図 5.3-24(1)貯水池内水質の比較

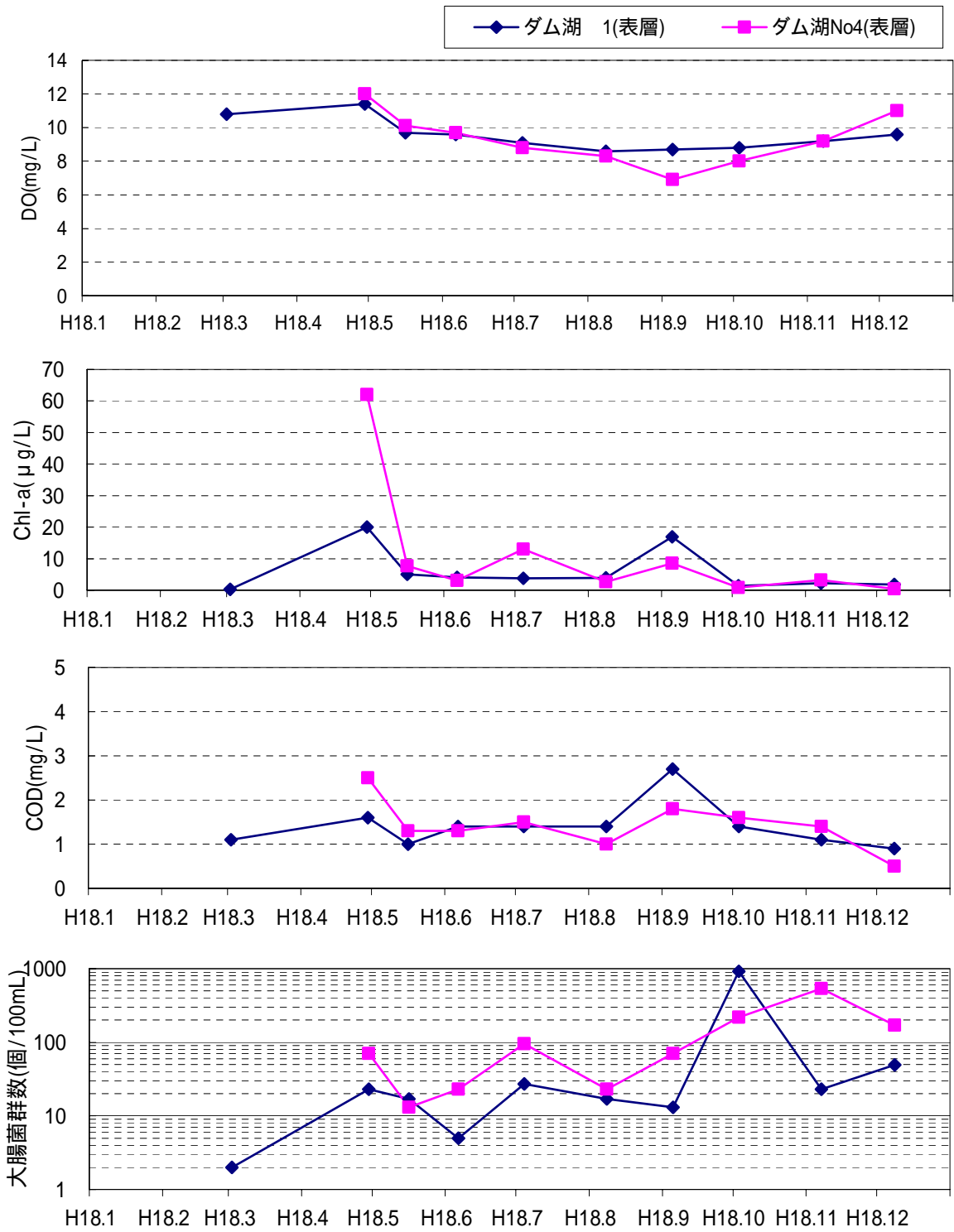


図 5.3-24(2)貯水池内水質の比較

### 5.3.7. 植物プランクトン生息状況変化

#### (1) 植物プランクトンの生息状況

平成元年よりダム湖 NO.1 で調査されている植物プランクトン定量分析結果に基づき、藍藻綱、珪藻綱、緑藻綱、渦鞭毛藻綱の細胞数推移を整理した結果を表 5.3-7、及び図 5.3-25 に示す。

真名川ダムの植物プランクトンの優占種は珪藻綱であり、概ね 4 月から 6 月にかけて多く発生する傾向にある。発生期間、細胞数ともに平成 10 年(1998 年)の 2202cell/mL が最大であった。

また、アオコ等の原因となる藍藻綱はほとんど発生しておらず、最大でも平成 12 年及び平成 14 年の 2cell/mL となっている。

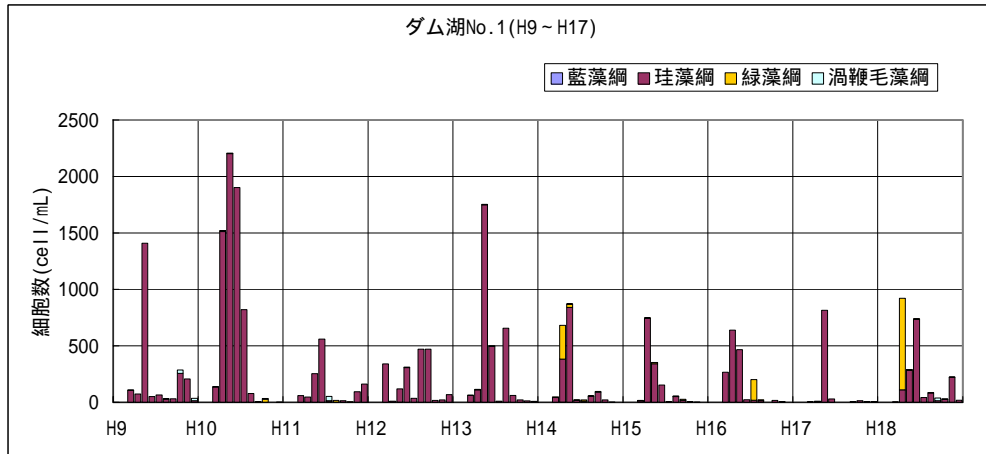
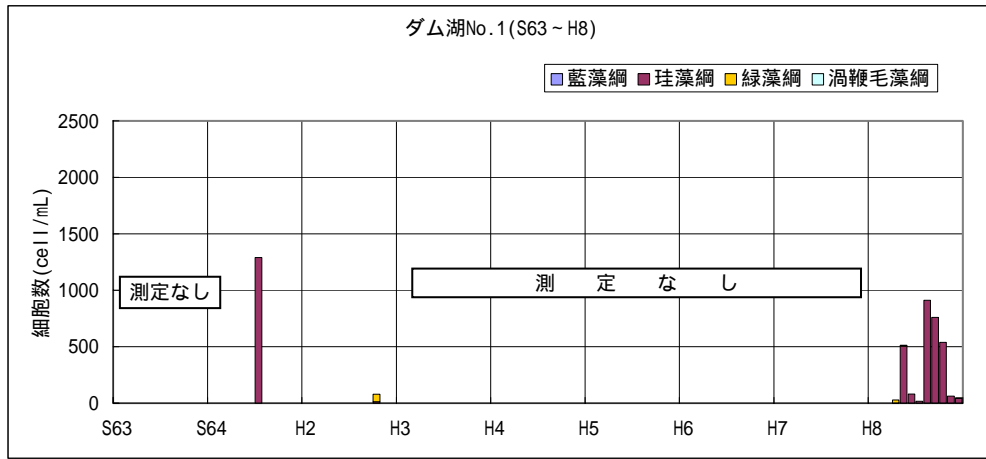


図 5.3-25 植物プランクトンの変遷(ダム湖 NO.1)

(出典：資料 5-13)

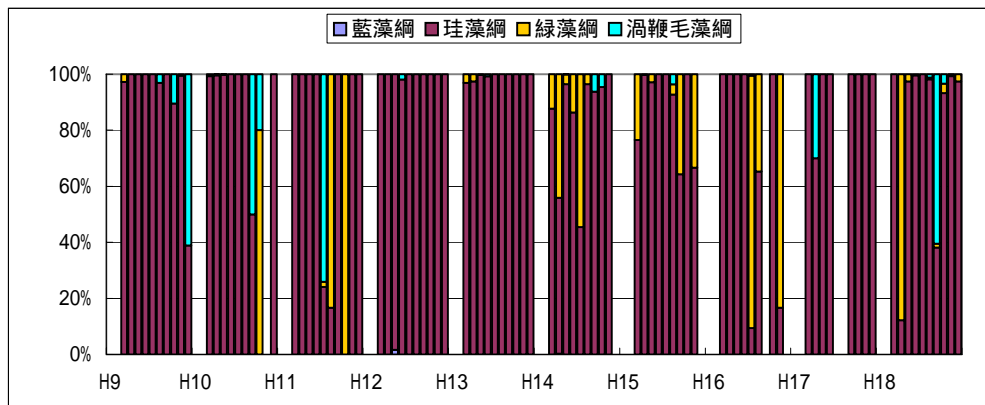
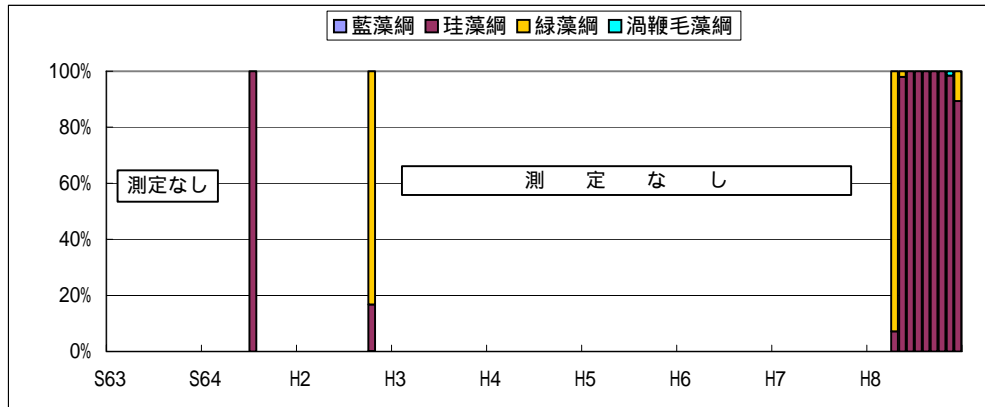


図 5.3-26 植物プランクトン種の割合(ダム湖 NO.1)

(出典：資料 5-13)

表 5.3-7 植物プランクトン細胞数(ダム湖 NO.1)

単位 : Cell/mL

	藍藻綱	珪藻綱	緑藻綱	渦鞭毛藻綱	その他
H1.7.8		1289.2			8486.4
H2.10	0.12	12.96	65.12		16.88
H8.4.23		2	26		
H8.5.21		504	10		
H8.6.18		81			5
H8.7.16		17			
H8.8.13		911			30
H8.9.10		760			60
H8.10.8		539			1
H8.11.12		62		1	
H8.12.10		42	5		10
H9.3.4		106	3		
H9.4.23		75			
H9.5.20		1409			
H9.6.17		52			2
H9.7.8		66			7
H9.8.12		31		1	15
H9.9.9		32			10
H9.10.7		257		30	3
H9.11.11		207		1	4
H9.12.2		14		22	
H10.3.3		137		1	3
H10.4.21		1513	5	2	11
H10.5.12		2202	4		10
H10.6.9		1902			7
H10.7.7		822			3
H10.8.4		79			6
H10.9.8		2		2	5
H10.10.6			28	7	500
H10.11.10					
H10.12.8		2			
H11.3.2		60			36
H11.4.20		47			28
H11.5.18		254			8
H11.6.8		561			10
H11.7.8		13	1	40	8
H11.8.3		3	15		19
H11.9.7		16			25
H11.10.5			4		9
H11.11.9		95			5
H11.12.7		162			4
H12.3.2		341			4
H12.4.11		11			2
H12.5.2	2	117			3
H12.6.6		307		6	
H12.7.4		36			
H12.8.1		470			13
H12.9.5		471			
H12.10.3		17			2
H12.11.7		22			
H12.12.5		69			3
H13.3.2		62	2		
H13.4.10		112	3		4
H13.5.8		1749		4	4
H13.6.5		496		4	8
H13.7.3		10			6
H13.8.2		656			4
H13.9.4		62			4
H13.10.2		22			3
H13.11.6		12			1
H13.12.4		9			1

	藍藻綱	珪藻綱	緑藻綱	渦鞭毛藻綱	その他
H14.3.5		43	6		12
H14.4.9	2	380	301		802
H14.5.8		841	30	1	832
H14.6.4		19	3		37
H14.7.2		10	12		27
H14.8.6		55	2		40
H14.9.3		90		6	40
H14.10.2		21		1	29
H14.11.6		2			13
H14.12.3					5
H15.3.4		13	4		41
H15.4.8		746	2		35
H15.5.7		342	10		45
H15.6.3		154			25
H15.7.2		6			60
H15.8.5		51	2	2	20
H15.9.3		18	10		25
H15.10.2		6			30
H15.11.5		2	1		10
H15.12.2					5
H16.3.2		267			10
H16.4.13		639			6
H16.5.11		467			12
H16.6.8		23			4
H16.7.6		19	182	1	5
H16.8.2		15	8		35
H16.9.7					127
H16.10.5		17			13
H16.11.2		1	5		30
H16.12.2					8
H17.3.2		6			5
H17.4.12		7		3	31
H17.5.10		815			10
H17.6.7		30			5
H17.7.12		0			4
H17.8.1		0			4
H17.9.6		6			30
H17.10.4		15			4
H17.11.8		7			3
H17.12.7		6			3
H18.3.2		4			2
H18.4.29		112	810		150
H18.5.16		282.5	7.5		10
H18.6.6		736	3.5		15
H18.7.4		42.5			5
H18.8.8		83	0.5	1	3
H18.9.5		14.5	0.5	23	10.5
H18.10.3		27.5	1	1	3.5
H18.11.7		223	1	0.5	3
H18.12.8		18.5	0.5		3
H19.3.2		486.5	1		8

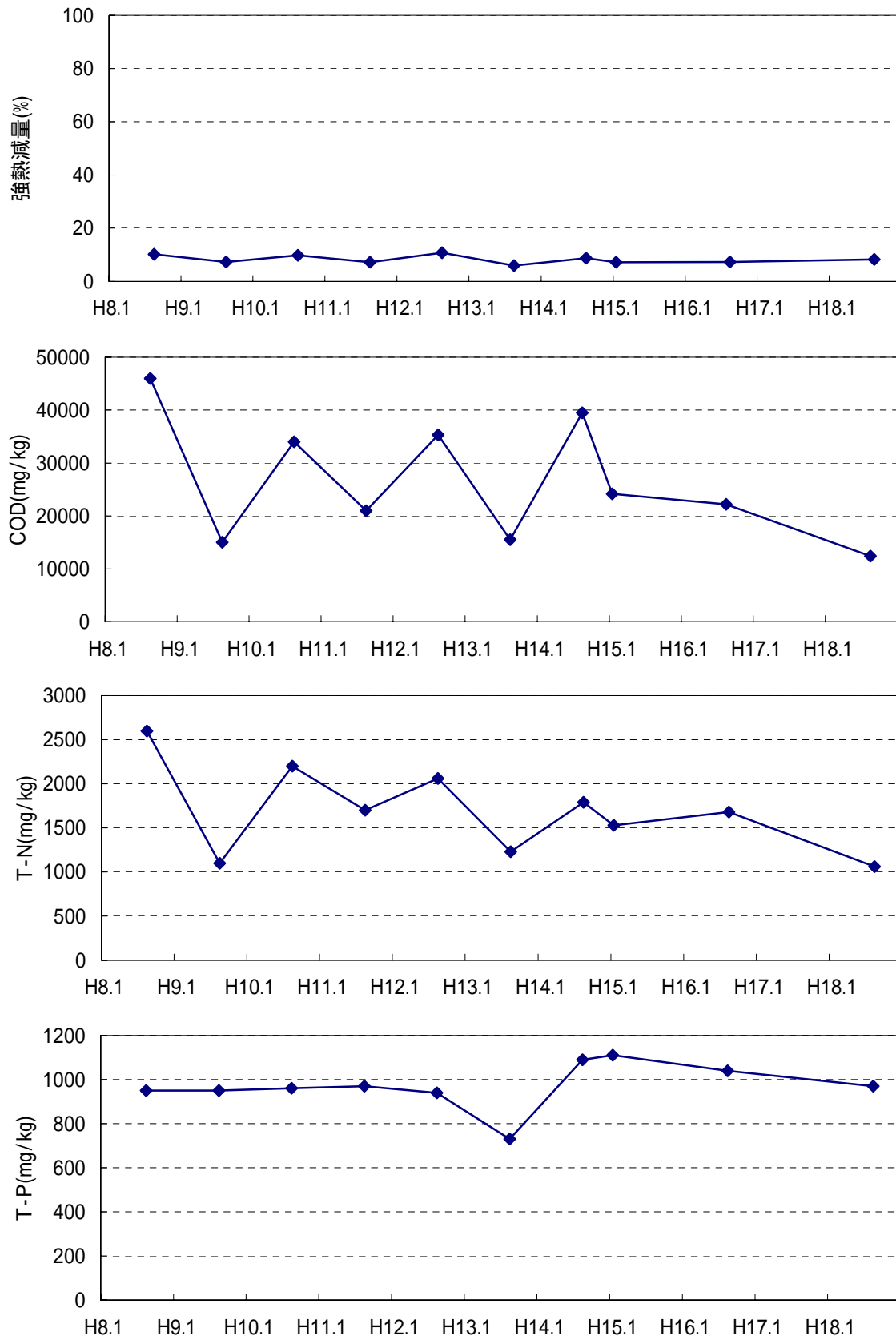
(出典 : 資料 5-13)

#### 5.3.8. 底質の変化

真名川ダムでは、ダム湖 No.1 地点において底質分析調査を実施している。分析対象項目は、強熱減量、COD、総窒素、総りん、硫化物、鉄、マンガン、カドミウム、鉛、6 価クロム、ヒ素、総水銀、アルキル水銀、PCB、チウラム、シマジン、チオベンカルブ、セレンである。平成 8 年(1996 年)～平成 18 年(2006 年)の底質濃度の推移を図 5.3-27 に示す。

いずれの項目も、ほぼ横這いで推移しており、顕著な蓄積傾向は伺えない。

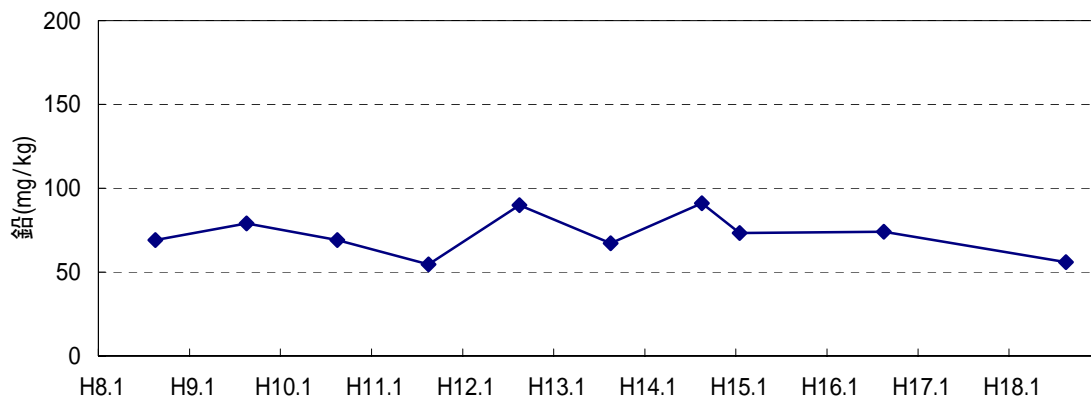
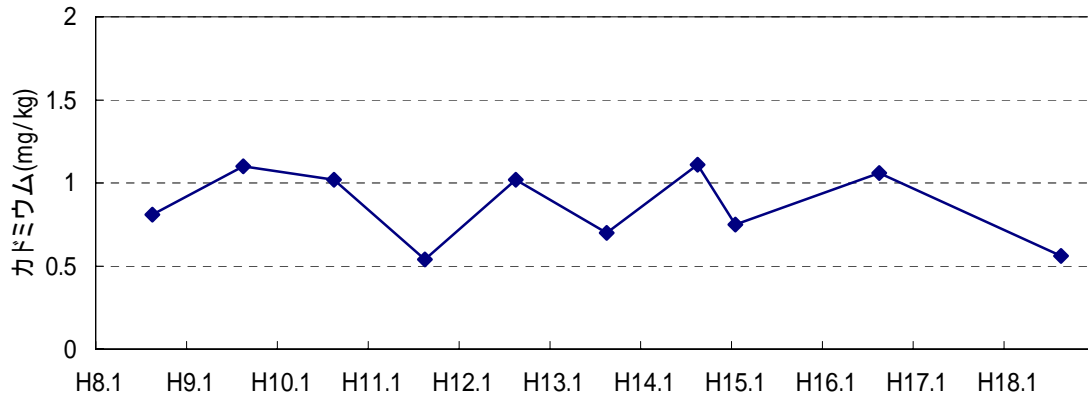
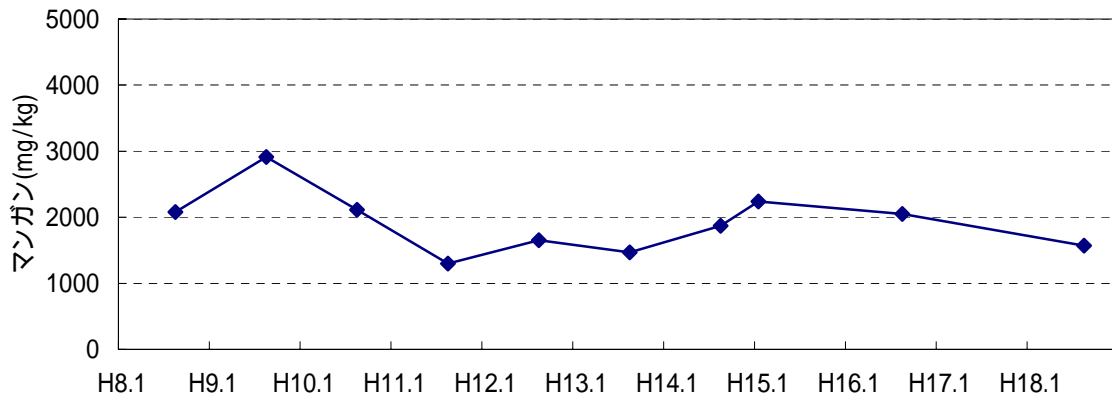
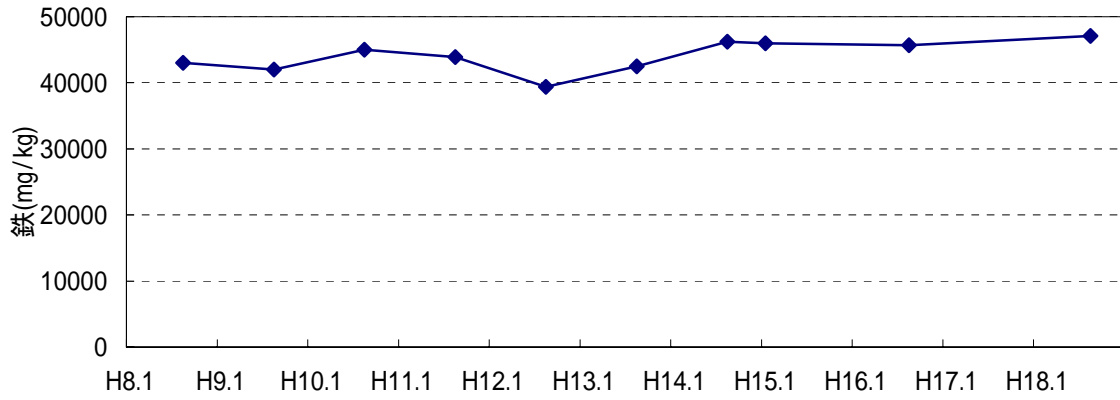
なお、硫化物、6 価クロム、アルキル水銀、PCB、チウラム、シマジン、チオベンカルブは、いずれも定量下限値未満であった。



(出典：資料 5-13)

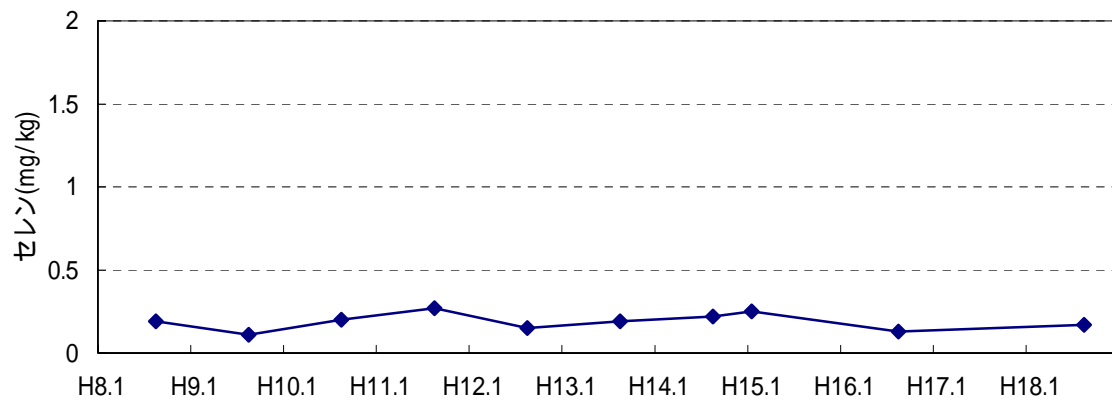
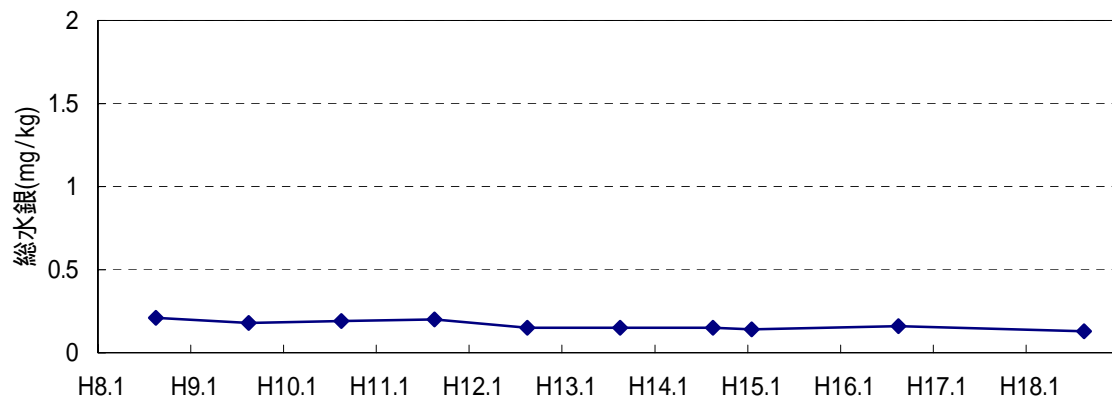
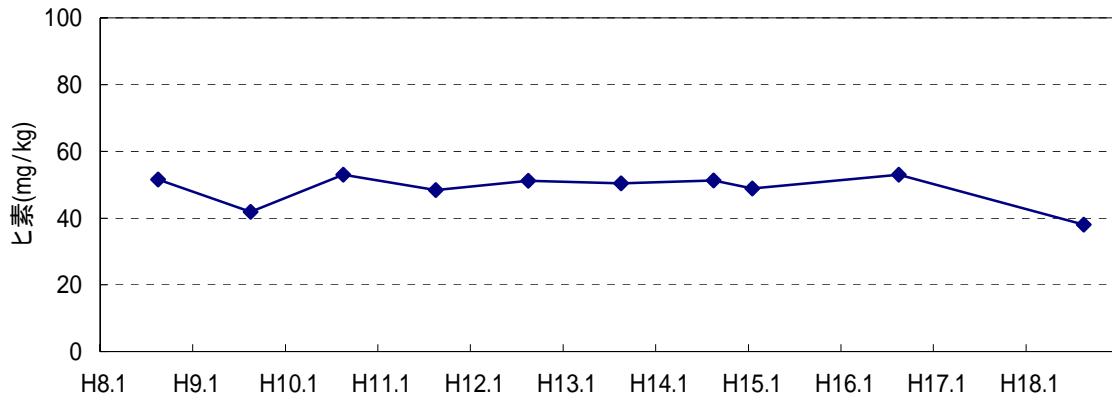
図 5.3-27(1) 地点底質濃度の推移(ダム湖 No.1)





(出典：資料 5-13)

図 5.3-27(2) 底質濃度の推移(ダム湖 No.1)



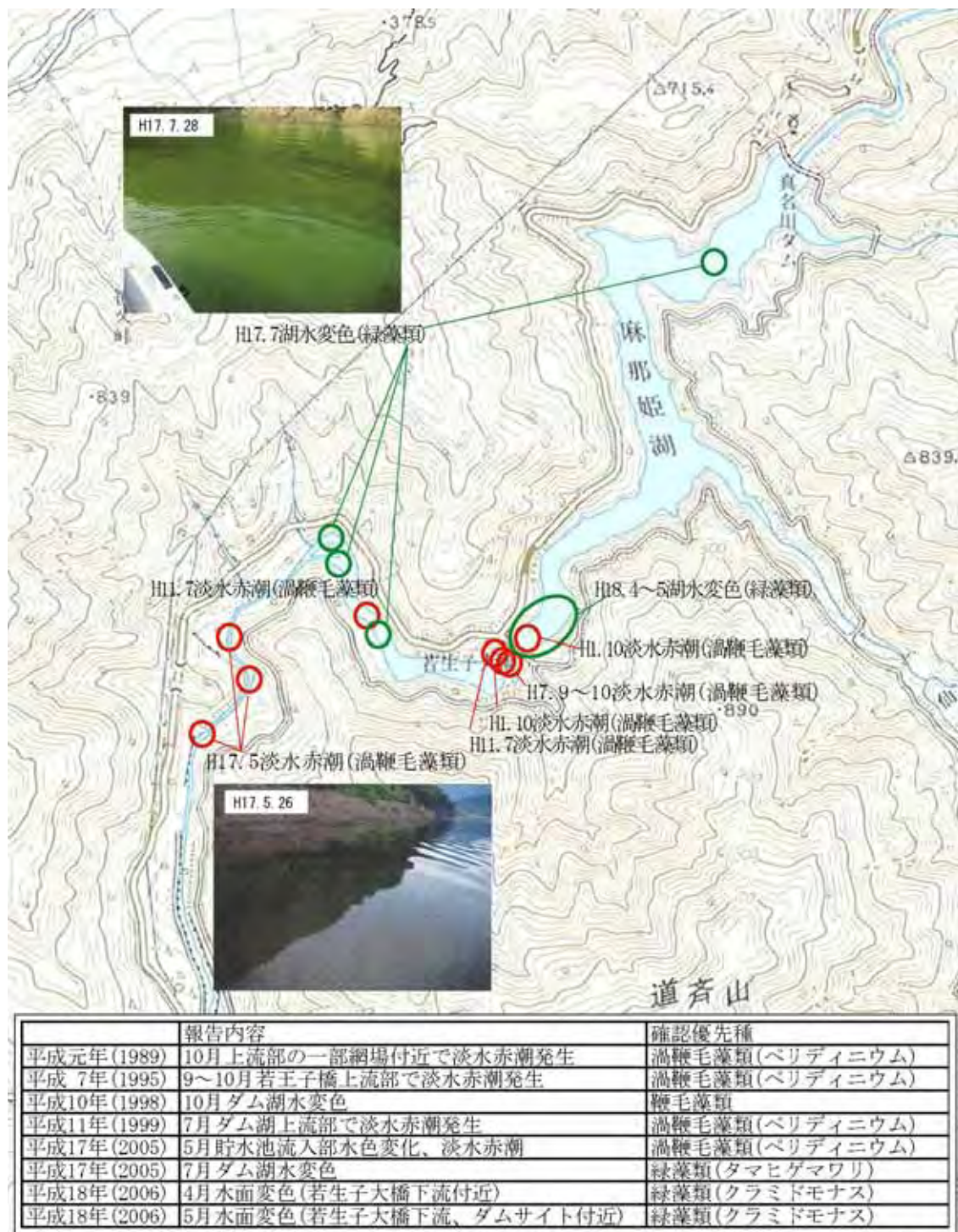
(出典：資料 5-13)

図 5.3-27(3) 底質濃度の推移(ダム湖 No.1)

### 5.3.9. 水質障害発生の状況

#### (1) 生物異常の発生状況

真名川ダムでの植物プランクトンによる生物異常の発生は平成1年(1989年)年から報告があり、主に貯水池流入末端及び若生子橋付近で発生しており、渦鞭毛藻類(ペリディニウム)が優占種となっている。なお、異臭味については発生していない。



(出典：資料5-3,13,15)

図5.3-28 真名川ダムにおける生物異常発生状況

(2)水温に関する障害報告

真名川ダム下流において、水温に関する障害は報告についてとりまとめられたものは無いが、冷水に伴うアユの生育障害に関する苦情が漁協より寄せられている。

(3)濁水長期化に関する障害報告

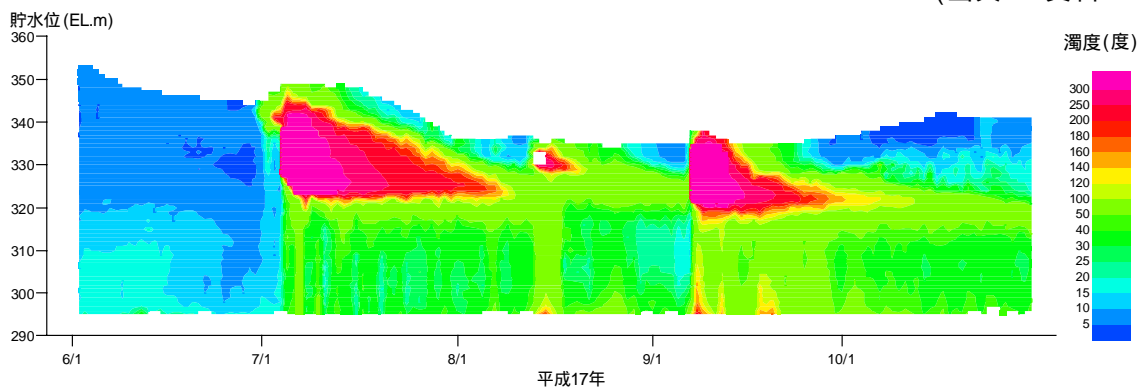
真名川ダムでは管理開始以降、出水のたびにダム貯水池の濁水現象が発生し、平成11年(1999年)頃からは下流河川利用者より濁水長期化に対する苦情が寄せられるようになった。これに対し、平成14年度(2002年)には汚濁防止フェンスを設置しており、平成16年の福井豪雨をうけて濁水長期化が顕著となった平成17年(2005年)10月には学識経験者、流域関係機関による「真名川ダム濁水対策検討会」を設立し、翌年の平成18年度にかけて濁水長期化軽減対策の検討を行った。

濁水発生状況の記録があり整理している近年について、発生した濁水長期化状況を表5.3-8に示す。真名川に発電放流される表層部の濁度は、平成13年(2002年)から平成16年(2004年)にかけての4年間の内2年は、7月に半月程度濁度50度以上が継続している。また、平成17年(2005年)には、7月出水、8月出水、9月出水と出水が発生し、濁水長期化は断続的ではあるが計81日間に及んでいる。

表 5.3-8 濁水長期化発生状況

発生時期	長期化状況	備考
平成13年8月出水	1日 (表層部付近の濁度が50度以上の期間)	
平成14年7月出水	20日 (表層部付近の濁度が50度以上の期間)	
平成15年8月出水	4日 (表層部付近の濁度が50度以上の期間)	
平成16年7月出水 (福井豪雨)	15日(表層部付近の濁度が50度以上の期間)	
平成17年7月出水	37日 (貯水池内網場付近濁度が100度以上の期間)	7/3～8/10
平成17年8月出水	9日 (貯水池内網場付近濁度が100度以上の期間)	8/13～8/21
平成17年9月出水	35日 (貯水池内網場付近濁度が100度以上の期間)	9/8～10/12
平成18年4月出水	16日 (貯水池内網場付近濁度が100度以上の期間)	4/13～4/28 なお、4/29～5/17は欠測のため、確認できない。
平成18年7月出水	12日 (貯水池内網場付近濁度が100度以上の期間)	7/18～7/29

(出典：資料5-16)



(出典：資料5-16)

図 5.3-29 貯水池網場地点濁度鉛直分布観測結果(平成17年6月～10月)

#### 5.4. 社会環境からみた汚濁源の整理

ダム及び下流河川における水質汚濁は、上流域内に存在する様々な汚濁発生源から発生する負荷量が河川へ流出する過程で生ずる。流域の負荷を原因別に分類すると、自然負荷と人為的負荷に大別することができる。自然負荷は、山林、原野など人為的な汚濁源が少ない地域からの物質の流出によるものである。

人為的負荷は、上流域の人間活動によって発生する汚濁物質の流出によるものであり、対象流域の人口、土地利用及び産業などの状況に影響される。

真名川ダムの状況を以下に整理する。

##### 5.4.1. 流域社会環境の整理

###### (1) 真名川ダム上流域の状況

真名川ダム上流域を図 5.4-1 に示す。

流域のほとんどは山林であり、流域内には定住集落はなく、耕作地も少なく、人為的な負荷源は少ない。



(出典：資料 5-5)

図 5.4-1 真名川ダム上流域

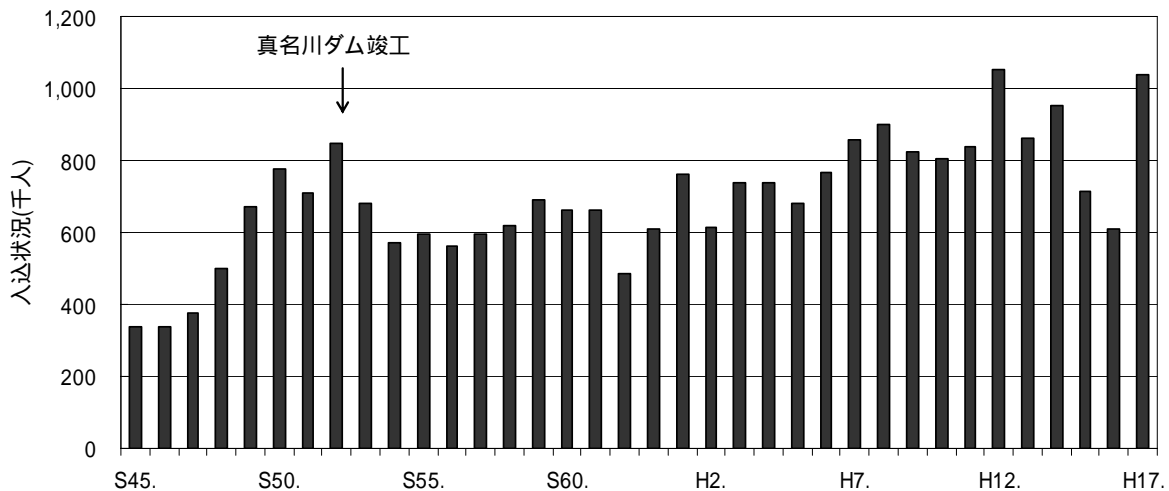
(2) 観光客の推移(観光系)

真名川ダム周辺地域の観光地入り込み状況の推移を図 5.4-2 に示す。また、真名川ダムのダム湖利用実態調査結果を図 5.4-3 に示す。

周辺の観光地入込数は、真名川ダム竣工後昭和 52 年(1977 年)から平成 3 年(1991 年)にかけて低迷した後、平成 8 年(1996 年)にピークを迎えた後、平成 15 年(2003 年)から再び減少し、平成 17 年(2005 年)に再度増加している。

ダム湖利用実態調査は「河川水辺の国勢調査(ダム湖版)(国土交通省河川局河川管理課)」により平成 3 年度(1991 年)から 3 年ごとに実施している。四季を通じた真名川ダム(麻那姫湖)の利用者数は、平成 9 年(1997 年)にピークを迎えその後減少している。利用の目的は「野外活動」が大部分を占めており、ダム湖上流部にある麻那姫湖青少年旅行村の公園施設利用が多い。

(備考) 対象地域は以下の通り。  
六呂師、勝原スキー場、六呂師高原、大野城、  
麻那姫湖、奥越高原牧場、道の駅九頭竜、九頭竜峡



出典：福井県観光振興課「福井県観光客入込数(推計)」

図 5.4-2 真名川ダム周辺地域の観光地入込状況の推移

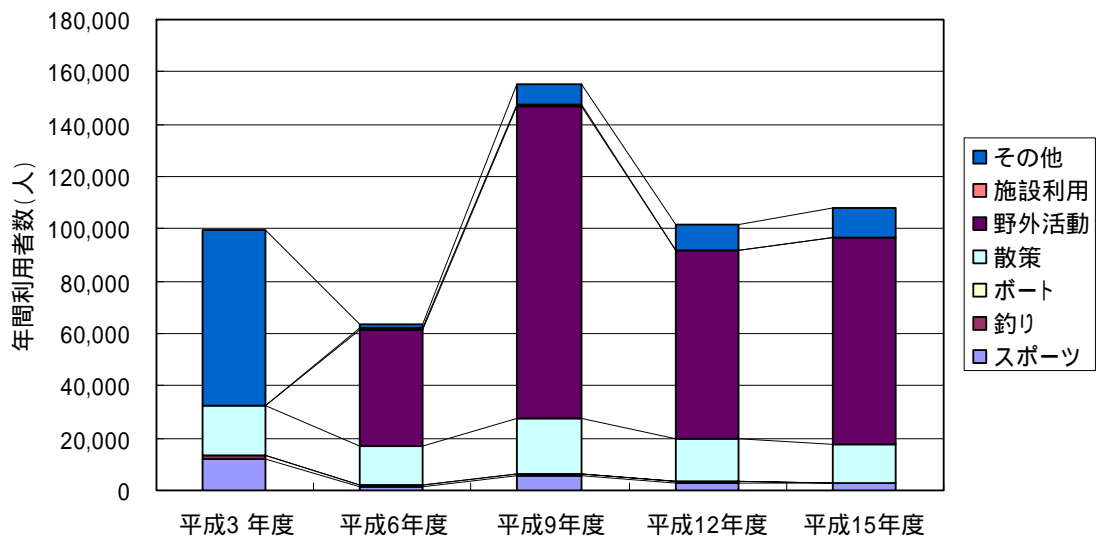
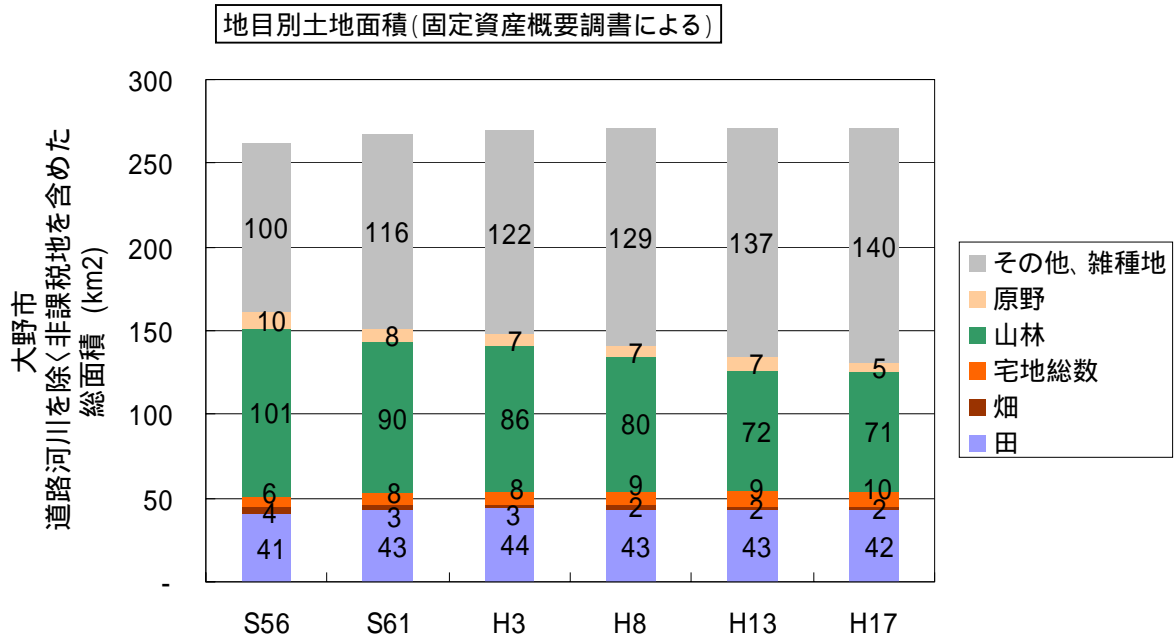


図 5.4-3 河川水辺の国勢調査(ダム湖版)結果

### (3) 土地利用

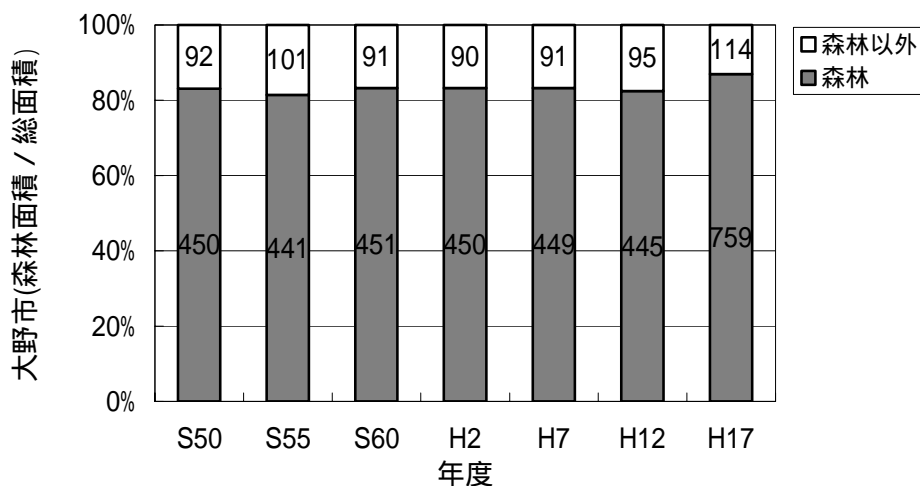
流域の関連市町村として、大野市の昭和56年(1981年)～平成17年(2005年、旧和泉村合併前)の地目別土地利用面積の推移を図5.4-4に示す。また、大野市の面積の内、森林面積の推移を図5.4-5に示す。

図5.4-5によると、大野市の約8割を森林が占めている。その内、ダム上流域は、水面を除くとほぼ全域が森林で占めている。



(出典：資料5-7)

図5.4-4 地目別土地面積



(備考) ・棒グラフ中の数値は、面積を示す。  
 ・平成17年度は、旧和泉村と旧大野市の合計を示す。

(出典：資料5-7)

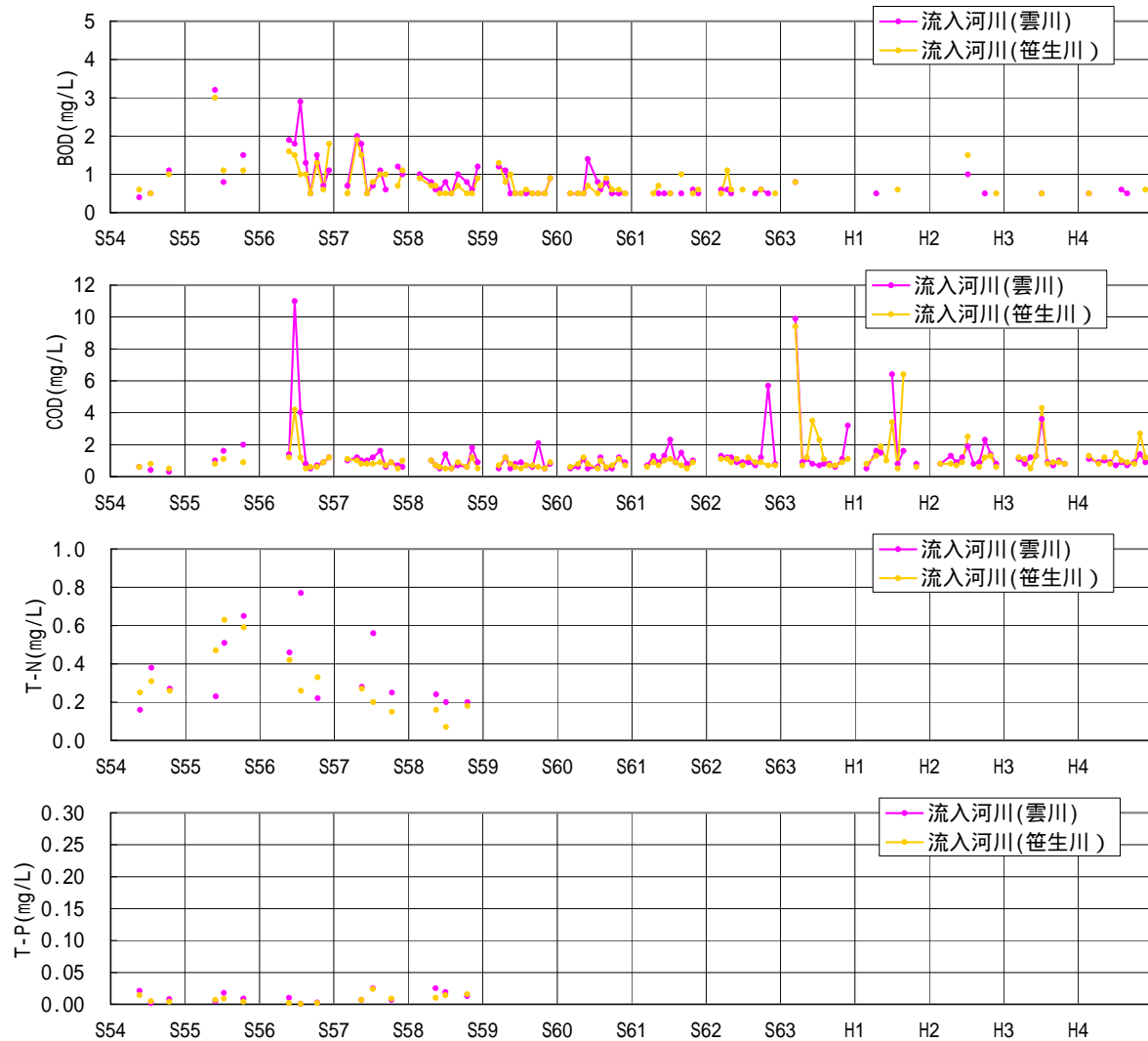
図5.4-5 流域に占める森林面積の比率

## 5.4.2. 流入水質の変化

### (1) 流入水質の変化

ダム湖に流入する雲川、笹生川の水質を図 5.4-6 に示す。

BOD は近年 0.5mg/L 以下で推移しており、COD も出水時を除けば 1mg/L 以下と清澄である。また、T-P は出水時を除き 0.01mg/L 以下と、富栄養化に対する栄養塩濃度としては低い値で推移しており非常に良好である。また、T-N については、0.2mg/L ~ 0.5mg/L の範囲で近年微増傾向が伺える。



(出典 : 資料 5-13)

図 5.4-6(1) 真名川ダム流入水質の状況





(出典：資料 5-13)

図 5.4-6(2) 真名川ダム流入水質の状況

### 5.4.3. 社会環境から見た汚濁源の整理まとめ

以上の水質変化について、真名川ダム上流域の社会環境の変化からとりまとめる。

真名川ダム上流域においては、定住の人家、耕作地などはなく、ほぼ全域が森林で占めている。また、人為的な負荷源としては、主に麻那姫湖青少年旅行村への年間延べ 10 万人前後の利用が挙げられる。

流入河川の採水地点は、キャンプ場の上流にあたることから、窒素の上昇傾向などは上流域からの流出による傾向をとらえたものと推察され、流域の大部分が山林であることから、山地への施肥、落葉の分解に伴う地下水への回帰・流出等が要因にあげられる。

窒素以外では、貯水池への汚濁負荷量としては近年大きな変動はなく、流域負荷源としても比較的小さい。

## 5.5. 水質の評価

### 5.5.1. 流入及び放流河川の評価(生活環境項目)

ここでは、流入河川と放流河川の水質について、環境基準値との比較、流入・放流の比較、経年的、経月的な変動の視点から生活環境項目について評価する。

生活環境項目とは、生活環境を保全するうえで維持することが望ましい項目について基準値が定められているもので、pH、BOD、SS、DO、大腸菌群数が該当する。

環境基準の類型指定は、真名川ダム堰堤から下流の水域で河川A類型であり、五条方、及び、土布子橋地点が指定区間にあたる。なお、真名川ダム貯水池への湖沼の類型指定はなされていない(表5.5-1参照)。

なお、環境基準類型指定区間外の地点についても類型と照らし合わせ水質を評価する。

表 5.5-1 類型指定状況

指定水域	環境基準指定年	類型	環境基準値				
			水素イオン濃度 (pH)	生物化学的酸素要求量 (BOD)	浮遊物質 (SS)	溶存酸素量 (DO)	大腸菌群数
真名川ダム堰堤から下流	昭和 53 年 3 月 31 日	河川 B 類型	6.5 以上 8.5 以下	3mg/L 以下	25mg/L 以下	5mg/L 以上	5,000MPN /100mL 以下
	平成 14 年 3 月 29 日	河川 A 類型	6.5 以上 8.5 以下	2mg/L 以下	25mg/L 以下	7.5mg/L 以上	1,000MPN /100mL 以下

真名川ダム貯水池は、湖沼の環境基準の指定がなされていない

出典:平成 17 年版環境六法(環境法令研究会) より作成

(出典 : 資料 5-1)

#### (1)管理開始以降の平均水質の評価

##### 1)流入河川の環境基準満足状況(生活環境項目)

流入(雲川)、流入(笹生川)の各水質項目の平均値を表 5.5-2 に示す。全項目について環境基準の河川 A 類型を満足しており、大腸菌を除けば AA 類型相当である。

表 5.5-2 流入河川の環境基準満足状況(昭和 54 年～平成 18 年)

項目		pH	BOD75% (mg/L)	SS (mg/L)	DO (mg/L)	大腸菌群数 (MPN/100mL)
雲川 (類型指定なし)	平均値	8.1	0.8	11.5	9.8	221
	環境基準満足状況	満足 (AA 相当)	満足 (AA 相当)	満足 (AA 相当)	満足 (AA 相当)	満足 (A 相当)
笹生川 (類型指定なし)	平均値	7.9	0.8	5.7	9.7	525
	環境基準満足状況	満足 (AA 相当)	満足 (AA 相当)	満足 (AA 相当)	満足 (AA 相当)	満足 (A 相当)

表中数値は、各年の平均値(または 75%値)の昭和 54 年～平成 18 年平均である。

本表は各地点の水質調査項目において満足している類型指定を記載している。

(出典 : 文献番号 5-13)

2) 下流河川の環境基準満足状況(生活環境項目)

下流河川(五条方)、下流河川(土布子橋:環境基準点)の各水質項目の平均値は表 5.5-3 に示すとおりであり(各年の平均値(または 75%値)の昭和 54 年～平成 18 年平均)、全項目について環境基準の河川 A 類型を満足している。

また、流入河川と下流河川を BOD75%値で比較すると、下流河川(五条方)、流入河川の BOD75%値はとも 0.8mg/L と変わらず、管理開始後の定期調査結果の平均的水質レベルではダムの建設による影響は小さいものと推察される。その他の項目についても管理開始後の定期調査の平均水質レベルでは悪化などの状況は認められない。

表 5.5-3 下流河川の環境基準満足状況(昭和 54 年～平成 18 年)

地 点 \ 項 目		pH	BOD75% (mg/L)	SS (mg/L)	DO (mg/L)	大腸菌群数 (MPN/100mL)
五条方 (河川 A 類型)	平均値	7.8	0.8	4.4	10.1	238
	環境基準 満足状況	満足 (AA 相当)	満足 (AA 相当)	満足 (AA 相当)	満足 (AA 相当)	満足 (A 相当)
土布子橋 (河川 A 類型)	平均値	7.3	1.2	5.0	9.8	(測定なし)
	環境基準 満足状況	満足 (AA 相当)	満足 (A 相当)	満足 (AA 相当)	満足 (AA 相当)	(測定なし)

表中数値は、各年の平均値(または 75%値)の昭和 54 年～平成 18 年平均である。

指定されている環境基準を満足していない項目については網掛けをしている。

(出典：文献番号 5-13,14)

3) 貯水池の環境基準満足状況 (参考)

湖沼の類型指定はなされていないが、参考として貯水池内(ダム湖 NO.1)での生活環境項目について表 5.5-4 に整理する。

河川 A 類型で評価した場合、年平均値の期間平均値で見れば、全ての項目について環境基準の河川 A 類型を満足している。

なお、流入河川と貯水池水質を BOD75%値で比較すると、流入河川が 0.8mg/L に対し貯水池では 1.1mg/L と若干高めに現れており、貯水池内での内部生産の影響が窺える。

表 5.5-4 貯水池内の環境基準満足状況(昭和 54 年～平成 18 年)

地 点 \ 項 目		pH	BOD75% (mg/L)	SS (mg/L)	DO (mg/L)	大腸菌群数 (MPN/100mL)
ダム湖 NO.1	平均値	8.0	1.1	4.1	9.6	124
	環境基準 満足状況	満足 (AA 相当)	満足 (A 相当)	満足 (AA 相当)	満足 (AA 相当)	満足 (A 相当)

表中数値は、各年の平均値(または 75%値)の昭和 54 年～平成 18 年平均である。

水質はダム湖 NO.1 の表層水質。

本表は各地点の水質調査項目において満足している類型指定を記載している。

(出典：文献番号 5-13)

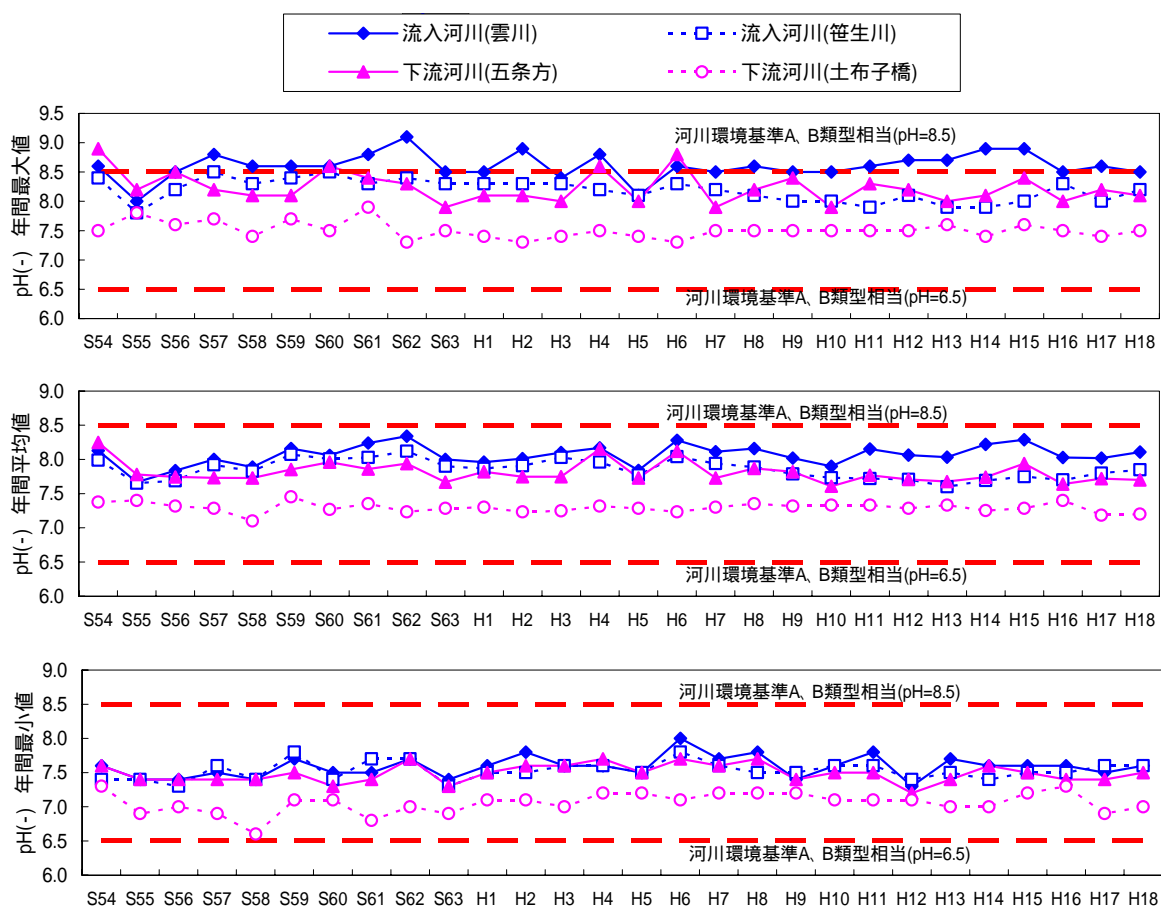
(2)管理開始以降の時系列変化の評価

1)pH

流入河川(雲川、笹生川)の pH は、平均値では全ての年で河川環境基準 A 類型相当であり、経年的にも 5.3.2. (1)に示したように変化は見られない。また、経月的には 5.3.3. に示したように夏期から秋期に一時的に上昇する特性が認められ、特に流入河川(雲川)において最大値が 8.5 以上を示すことがある。この要因としては、流域植生や付着藻類の光合成の活性化などが想定される。

一方、下流河川(五条方、土布子橋)の pH は、平均値では全ての年で河川環境基準 A 類型相当であり、流入河川と比べても低い値で推移しており、経年的にも 5.3.2. (1)に示したように変化は見られない。また、経月的には 5.3.3. に示したように夏期から秋期に上昇する変化特性が認められ、ダム湖 No1(表層)における変化と同様の傾向を示し、流入河川(雲川)ほど頻度は多くなく、値も小さいが、下流河川(五条方)において最大値が 8.5 以上を示すことがある。この要因としては、流入河川(雲川)の影響や、5.3.3. に示したように真名川ダム貯水池内での植物プランクトンによる光合成の活性化などが要因として挙げられる。

流入河川と下流河川を比較すると、流入河川が高い傾向にあり、下流河川の方が概ね基準値範囲内であることから、真名川ダムの存在による影響は小さいものと推察される。



(出典：資料 5-13、5-14)

図 5.5-1(1) 流入河川及び下流河川の pH

表 5.5-5(1) 流入河川 pH の環境基準満足状況(昭和 54 年～平成 18 年)

年	平均値	最小値	～	最大値	環境基準達成月数	
					m	n
S54	8.1	7.6	～	8.6	-	/ 10
S55	7.7	7.4	～	8.0	-	/ 10
S56	7.8	7.4	～	8.5	-	/ 8
S57	8.0	7.5	～	8.8	-	/ 10
S58	7.9	7.4	～	8.6	-	/ 10
S59	8.2	7.7	～	8.6	-	/ 10
S60	8.1	7.5	～	8.6	-	/ 10
S61	8.2	7.5	～	8.8	-	/ 10
S62	8.3	7.7	～	9.1	-	/ 10
S63	8.0	7.4	～	8.5	-	/ 10
H1	8.0	7.6	～	8.5	-	/ 10
H2	8.0	7.8	～	8.9	-	/ 10
H3	8.1	7.6	～	8.4	-	/ 10
H4	8.2	7.6	～	8.8	-	/ 10
H5	7.8	7.5	～	8.1	-	/ 10
H6	8.3	8.0	～	8.6	-	/ 10
H7	8.1	7.7	～	8.5	-	/ 10
H8	8.2	7.8	～	8.6	-	/ 10
H9	8.0	7.4	～	8.5	-	/ 10
H10	7.9	7.6	～	8.5	-	/ 10
H11	8.2	7.8	～	8.6	-	/ 10
H12	8.1	7.3	～	8.7	-	/ 11
H13	8.0	7.7	～	8.7	-	/ 9
H14	8.2	7.6	～	8.9	-	/ 10
H15	8.3	7.6	～	8.9	-	/ 10
H16	8.0	7.6	～	8.5	-	/ 10
H17	8.0	7.5	～	8.6	-	/ 10
H18	8.1	7.6	～	8.5	-	/ 10
最大	8.3	8.0	～	9.1		
平均	8.1	7.6	～	8.6		
最小	7.7	7.3	～	8.0		

年	平均値	最小値	～	最大値	環境基準達成月数	
					m	n
S54	8.0	7.4	～	8.4	-	/ 10
S55	7.7	7.4	～	7.8	-	/ 10
S56	7.7	7.3	～	8.2	-	/ 8
S57	7.9	7.6	～	8.5	-	/ 10
S58	7.8	7.4	～	8.3	-	/ 10
S59	8.1	7.8	～	8.4	-	/ 10
S60	8.0	7.4	～	8.5	-	/ 10
S61	8.0	7.7	～	8.3	-	/ 10
S62	8.1	7.7	～	8.4	-	/ 10
S63	7.9	7.3	～	8.3	-	/ 10
H1	7.9	7.5	～	8.3	-	/ 10
H2	7.9	7.5	～	8.3	-	/ 10
H3	8.0	7.6	～	8.3	-	/ 10
H4	8.0	7.6	～	8.2	-	/ 10
H5	7.8	7.5	～	8.1	-	/ 10
H6	8.0	7.8	～	8.3	-	/ 10
H7	7.9	7.6	～	8.2	-	/ 10
H8	7.9	7.5	～	8.1	-	/ 10
H9	7.8	7.5	～	8.0	-	/ 10
H10	7.7	7.6	～	8.0	-	/ 10
H11	7.7	7.6	～	7.9	-	/ 10
H12	7.7	7.4	～	8.1	-	/ 11
H13	7.6	7.5	～	7.9	-	/ 9
H14	7.7	7.4	～	7.9	-	/ 10
H15	7.8	7.5	～	8.0	-	/ 10
H16	7.7	7.5	～	8.3	-	/ 10
H17	7.8	7.6	～	8.0	-	/ 10
H18	7.9	7.6	～	8.2	-	/ 10
最大	8.1	7.8	～	8.5		
平均	7.9	7.5	～	8.2		
最小	7.6	7.3	～	7.8		

(備考) 環境基準達成月数の欄の n はサンプル数、m は達成月数を示す。また、環境基準が設定されていない地点は達成月数欄に「-」を示した。

(出典：資料 5-13、5-14)

表 5.5-5(2) 下流河川 pH の環境基準満足状況(昭和 54 年～平成 18 年)

貯水池内(ダム湖No.1)						
年	平均値	最小値	～	最大値	環境基準達成月数	
					m	n
S54	7.8	7.5	～	8.7	9	/ 10
S55	7.6	7.2	～	8.4	10	/ 10
S56	7.8	7.3	～	8.8	8	/ 9
S57	7.9	7.5	～	8.7	9	/ 10
S58	7.8	7.4	～	8.3	9	/ 9
S59	8.0	7.7	～	8.6	9	/ 10
S60	8.0	7.2	～	8.6	9	/ 10
S61	7.9	7.3	～	8.7	9	/ 10
S62	8.0	7.6	～	8.5	10	/ 10
S63	8.0	7.5	～	8.6	9	/ 10
H1	8.1	7.5	～	8.6	8	/ 10
H2	7.9	7.6	～	8.1	10	/ 10
H3	8.0	7.6	～	8.5	10	/ 10
H4	7.9	7.6	～	8.3	10	/ 10
H5	8.1	7.4	～	8.6	9	/ 10
H6	8.0	7.6	～	8.6	9	/ 10
H7	8.2	7.3	～	9.0	8	/ 10
H8	8.1	7.5	～	8.6	8	/ 10
H9	8.2	7.6	～	8.8	8	/ 10
H10	8.3	7.6	～	8.7	7	/ 10
H11	8.0	7.6	～	8.5	10	/ 10
H12	8.0	7.3	～	8.5	10	/ 10
H13	7.9	7.5	～	8.5	10	/ 10
H14	7.9	7.4	～	8.9	9	/ 10
H15	8.0	7.5	～	8.4	10	/ 10
H16	7.9	7.5	～	8.9	9	/ 10
H17	7.9	7.6	～	8.6	8	/ 10
H18	8.0	7.5	～	8.8	8	/ 10
最大	8.3	7.7	～	9.0		
平均	8.0	7.5	～	8.6		
最小	7.6	7.2	～	8.1		

下流河川(五条方)						
年	平均値	最小値	～	最大値	環境基準達成月数	
					m	n
S54	8.3	7.6	～	8.9	6	/ 10
S55	7.8	7.4	～	8.2	10	/ 10
S56	7.7	7.4	～	8.5	9	/ 9
S57	7.7	7.4	～	8.2	10	/ 10
S58	7.7	7.4	～	8.1	10	/ 10
S59	7.9	7.5	～	8.1	10	/ 10
S60	8.0	7.3	～	8.6	9	/ 10
S61	7.9	7.4	～	8.4	10	/ 10
S62	7.9	7.7	～	8.3	10	/ 10
S63	7.7	7.3	～	7.9	10	/ 10
H1	7.8	7.5	～	8.1	10	/ 10
H2	7.8	7.6	～	8.1	10	/ 10
H3	7.8	7.6	～	8.0	10	/ 10
H4	8.2	7.7	～	8.6	7	/ 10
H5	7.7	7.5	～	8.0	10	/ 10
H6	8.1	7.7	～	8.8	7	/ 10
H7	7.7	7.6	～	7.9	10	/ 10
H8	7.9	7.7	～	8.2	10	/ 10
H9	7.8	7.4	～	8.4	10	/ 10
H10	7.6	7.5	～	7.9	10	/ 10
H11	7.8	7.5	～	8.3	10	/ 10
H12	7.7	7.2	～	8.2	11	/ 11
H13	7.7	7.4	～	8.0	9	/ 9
H14	7.7	7.6	～	8.1	10	/ 10
H15	7.9	7.5	～	8.4	10	/ 10
H16	7.6	7.4	～	8.0	10	/ 10
H17	7.7	7.4	～	8.2	10	/ 10
H18	7.7	7.5	～	8.1	10	/ 10
最大	8.3	7.7	～	8.9		
平均	7.8	7.5	～	8.2		
最小	7.6	7.2	～	7.9		

(備考) 環境基準達成月数の欄の n はサンプル数、m は達成月数を示す。また、環境基準が設定されていない地点は達成月数欄に「-」を示した。

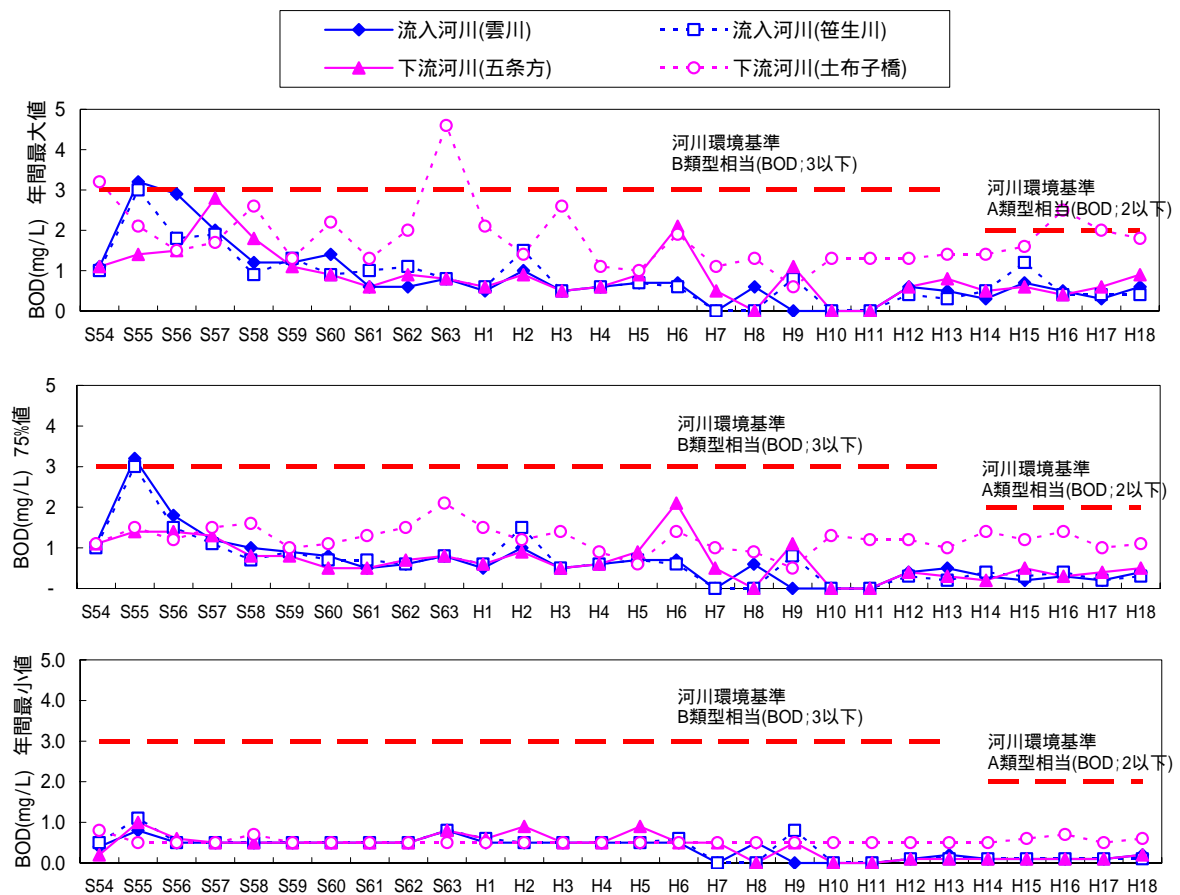
(出典：資料 5-13、5-14)

## 2) BOD

流入河川(雲川、笹生川)のBODは、75%値では流入河川(雲川)の昭和55年(1980年)以外は、河川環境基準B類型(平成13年以前)、A類型(平成14年以降)相当であり、経年的には5.3.2.(1)に示したように若干改善傾向である。なお、昭和55年(1980年)の流入河川(雲川)で満足しなかった理由としては調査回数が不足したことにより出水の影響を受けた最大値が採用されたことが挙げられる。また、経月的には出水の影響を受けた調査日において、若干増加する傾向が伺える。

一方、下流河川(五条方、土布子橋)のBODは、75%値では全ての年で河川環境基準B類型(平成13年以前)、A類型(平成14年以降)相当であり、下流河川(五条方)では流入河川と比べて同程度の値で推移し、経年的にも流入河川と同様に改善傾向が伺える。なお、さらに下流の土布子橋では流入河川と比べるとやや高い値を示しており、下流市街地などからの汚濁負荷の流入の影響を受けていると推察される。経月的には比較的安定した水質を保っている。

流入河川と下流河川を比較すると、下流河川の水質は概ね流入河川と同等の水質を示していることから、真名川ダムの存在による影響は小さいものと推察される。



(出典：資料 5-13、5-14)

図 5.5-1(2) 流入河川及び下流河川の BOD

表 5.5-6(1) 流入河川 BOD の環境基準満足状況(昭和 54 年～平成 18 年)

流入河川(雲川)					単位:mg/L		流入河川(笹生川)					単位:mg/L	
年	75%値	最小値	～	最大値	環境基準達成月数		年	75%値	最小値	～	最大値	環境基準達成月数	
					m	n						m	n
S54	1.1	0.4	～	1.1	-	/ 3	S54	1.0	0.5	～	1.0	-	/ 3
S55	3.2	0.8	～	3.2	-	/ 3	S55	3.0	1.1	～	3.0	-	/ 3
S56	1.8	0.5	～	2.9	-	/ 8	S56	1.5	0.5	～	1.8	-	/ 8
S57	1.2	0.5	～	2.0	-	/ 9	S57	1.1	0.5	～	1.9	-	/ 9
S58	1.0	0.5	～	1.2	-	/ 10	S58	0.7	0.5	～	0.9	-	/ 10
S59	0.9	0.5	～	1.2	-	/ 10	S59	0.9	0.5	～	1.3	-	/ 10
S60	0.8	0.5	～	1.4	-	/ 10	S60	0.7	0.5	～	0.9	-	/ 10
S61	0.5	0.5	～	0.6	-	/ 6	S61	0.7	0.5	～	1.0	-	/ 6
S62	0.6	0.5	～	0.6	-	/ 6	S62	0.6	0.5	～	1.1	-	/ 6
S63	0.8	0.8	～	0.8	-	/ 1	S63	0.8	0.8	～	0.8	-	/ 1
H1	0.5	0.5	～	0.5	-	/ 1	H1	0.6	0.6	～	0.6	-	/ 1
H2	1.0	0.5	～	1.0	-	/ 2	H2	1.5	0.5	～	1.5	-	/ 2
H3	0.5	0.5	～	0.5	-	/ 1	H3	0.5	0.5	～	0.5	-	/ 1
H4	0.6	0.5	～	0.6	-	/ 3	H4	0.6	0.5	～	0.6	-	/ 2
H5	0.7	0.5	～	0.7	-	/ 3	H5	0.7	0.5	～	0.7	-	/ 2
H6	0.7	0.5	～	0.7	-	/ 2	H6	0.6	0.6	～	0.6	-	/ 1
H7	-	-	～	-	-	/ -	H7	-	-	～	-	-	/ -
H8	0.6	0.5	～	0.6	-	/ 2	H8	-	-	～	-	-	/ -
H9	-	-	～	-	-	/ -	H9	0.8	0.8	～	0.8	-	/ 1
H10	-	-	～	-	-	/ -	H10	-	-	～	-	-	/ -
H11	-	-	～	-	-	/ -	H11	-	-	～	-	-	/ -
H12	0.4	0.1	～	0.6	-	/ 8	H12	0.3	0.1	～	0.4	-	/ 8
H13	0.5	0.2	～	0.5	-	/ 6	H13	0.2	0.1	～	0.3	-	/ 6
H14	0.3	0.1	～	0.3	-	/ 8	H14	0.4	0.1	～	0.5	-	/ 6
H15	0.2	0.1	～	0.7	-	/ 9	H15	0.3	0.1	～	1.2	-	/ 8
H16	0.3	0.1	～	0.5	-	/ 8	H16	0.4	0.1	～	0.4	-	/ 7
H17	0.2	0.1	～	0.3	-	/ 9	H17	0.2	0.1	～	0.4	-	/ 8
H18	0.4	0.2	～	0.6	-	/ 9	H18	0.3	0.1	～	0.4	-	/ 9
最大	3.2	0.8	～	3.2			最大	3.0	1.1	～	3.0		
平均	0.8	0.4	～	1.0			平均	0.8	0.4	～	0.9		
最小	0.2	0.1	～	0.3			最小	0.2	0.1	～	0.3		

(備考) 環境基準達成月数の欄の n はサンプル数、m は達成月数を示す。また、環境基準が設定されていない地点は達成月数欄に「-」を示した。

(出典：資料 5-13、5-14)

表 5.5-6(2) 下流河川 BOD の環境基準満足状況(昭和 54 年～平成 18 年)

下流河川(五条方)					単位:mg/L		下流河川(土布子橋)					単位:mg/L	
年	75%値	最小値	～	最大値	環境基準達成月数		年	75%値	最小値	～	最大値	環境基準達成月数	
					m	n						m	n
S54	1.1	0.2	～	1.1	3	/ 3	S54	1.1	0.8	～	3.2	3	/ 4
S55	1.4	1.0	～	1.4	3	/ 3	S55	1.5	0.5	～	2.1	6	/ 6
S56	1.4	0.6	～	1.5	8	/ 8	S56	1.2	0.5	～	1.5	6	/ 6
S57	1.3	0.5	～	2.8	9	/ 9	S57	1.5	0.5	～	1.7	6	/ 6
S58	0.8	0.5	～	1.8	10	/ 10	S58	1.6	0.7	～	2.6	6	/ 6
S59	0.8	0.5	～	1.1	10	/ 10	S59	1.0	0.5	～	1.3	6	/ 6
S60	0.5	0.5	～	0.9	10	/ 10	S60	1.1	0.5	～	2.2	5	/ 6
S61	0.5	0.5	～	0.6	5	/ 5	S61	1.3	0.5	～	1.3	6	/ 6
S62	0.7	0.5	～	0.9	5	/ 5	S62	1.5	0.5	～	2.0	6	/ 6
S63	0.8	0.8	～	0.8	1	/ 1	S63	2.1	0.5	～	4.6	5	/ 6
H1	0.6	0.6	～	0.6	1	/ 1	H1	1.5	0.5	～	2.1	6	/ 6
H2	0.9	0.9	～	0.9	1	/ 1	H2	1.2	0.5	～	1.4	6	/ 6
H3	0.5	0.5	～	0.5	1	/ 1	H3	1.4	0.5	～	2.6	6	/ 6
H4	0.6	0.5	～	0.6	3	/ 3	H4	0.9	0.5	～	1.1	6	/ 6
H5	0.9	0.9	～	0.9	1	/ 1	H5	0.6	0.5	～	1.0	6	/ 6
H6	2.1	0.5	～	2.1	3	/ 3	H6	1.4	0.5	～	1.9	6	/ 6
H7	0.5	0.5	～	0.5	1	/ 1	H7	1.0	0.5	～	1.1	6	/ 6
H8	-	-	～	-	-	/ -	H8	0.9	0.5	～	1.3	6	/ 6
H9	1.1	0.5	～	1.1	2	/ 2	H9	0.5	0.5	～	0.6	6	/ 6
H10	-	-	～	-	-	/ -	H10	1.3	0.5	～	1.3	6	/ 6
H11	-	-	～	-	-	/ -	H11	1.2	0.5	～	1.3	6	/ 6
H12	0.4	0.1	～	0.6	8	/ 8	H12	1.2	0.5	～	1.3	6	/ 6
H13	0.3	0.1	～	0.8	7	/ 7	H13	1.0	0.5	～	1.4	6	/ 6
H14	0.2	0.1	～	0.5	8	/ 8	H14	1.4	0.5	～	1.4	6	/ 6
H15	0.5	0.1	～	0.6	9	/ 9	H15	1.2	0.6	～	1.6	6	/ 6
H16	0.3	0.1	～	0.4	10	/ 10	H16	1.4	0.7	～	2.5	5	/ 6
H17	0.4	0.1	～	0.6	10	/ 10	H17	1.0	0.5	～	2.0	6	/ 6
H18	0.5	0.2	～	0.9	10	/ 10	H18	1.1	0.6	～	1.8	6	/ 6
最大	2.1	1.0	～	2.8			最大	2.1	0.8	～	4.6		
平均	0.8	0.5	～	1.0			平均	1.2	0.5	～	1.8		
最小	0.2	0.1	～	0.4			最小	0.5	0.5	～	0.6		

(備考) 環境基準達成月数の欄の n はサンプル数、m は達成月数を示す。また、環境基準が設定されていない地点は達成月数欄に「-」を示した。

(出典：資料 5-13、5-14)

3)SS

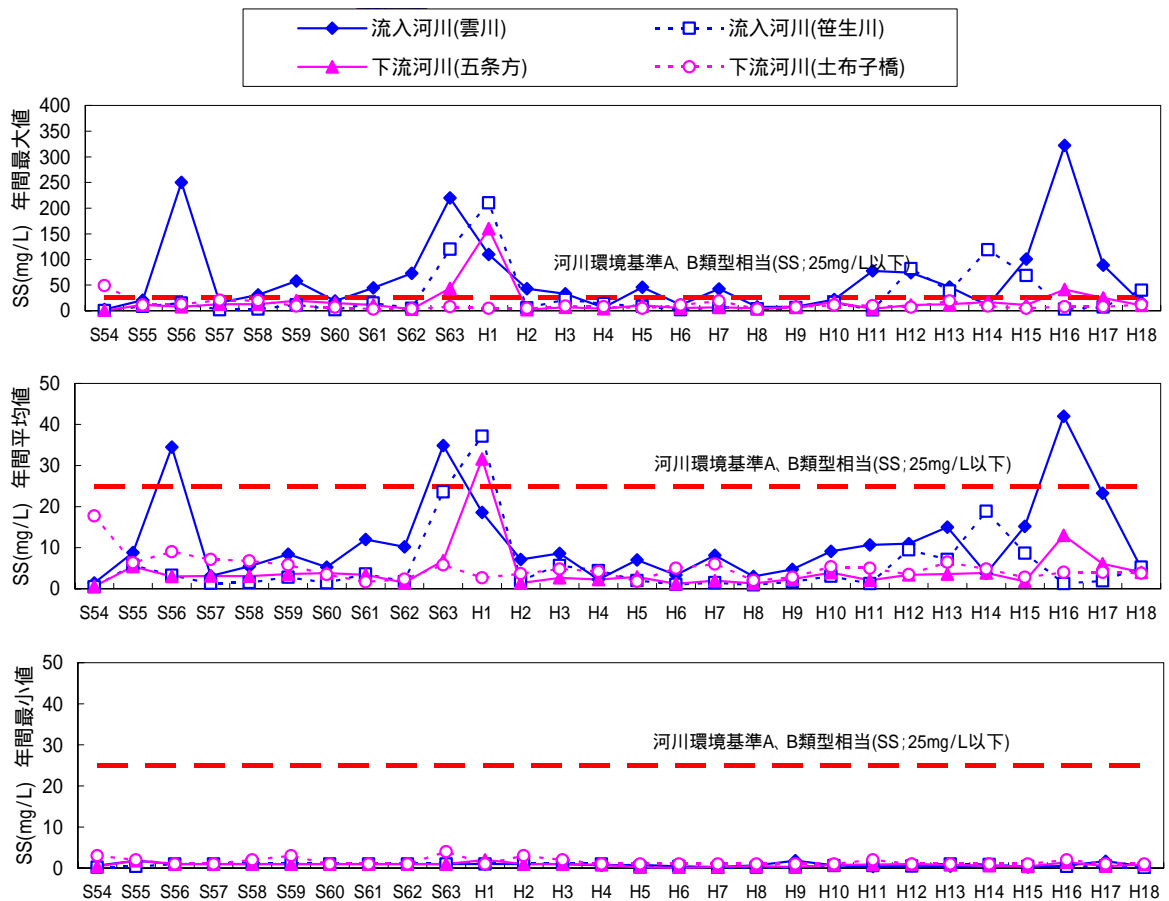
流入河川(雲川、笹生川)のSSは、平均値では河川環境基準A類型相当を満足しない年が数回見られた。また、経年的には特に増加・減少傾向は見られない。また、経月的には5.3.2.(2)に示したように出水に伴い増加する傾向が伺える。

一方、下流河川(五条方、土布子橋)のSSは、平均値では平成元年の下流河川(五条方)を除き全ての年で河川環境基準A類型相当であり、流入河川と比べても低い値で推移しているが、経年的には5.3.2.(1)に示したように、出水時の影響が伺える。

濁水長期化の影響については、5.5.4.において評価を行う。

流入河川と下流河川を比較すると、定期調査結果では流入河川濃度が高く、下流河川の方が清澄な水質を示す結果となっている。ただし、5.3.9.(3)にも示したように濁水長期化の発生が報告されており、真名川ダムが存在による下流河川への影響があると推察される。

濁水の長期化現象については、5.5.4.に示す。



(出典：資料 5-13、5-14)

図 5.5-1(3) 流入河川及び下流河川のSS



表 5.5-7(1) 流入河川 SS の環境基準満足状況(昭和 54 年 ~ 平成 18 年)

流入河川(雲川)					単位:mg/L		流入河川(笹生川)					単位:mg/L	
年	平均値	最小値	~	最大値	環境基準達成月数		年	平均値	最小値	~	最大値	環境基準達成月数	
					m	n						m	n
S54	1.4	0.6	~	2.7	-	/ 3	S54	0.5	0.2	~	0.8	-	/ 2
S55	8.8	1.8	~	21.0	-	/ 3	S55	5.7	0.4	~	8.8	-	/ 3
S56	34.5	1.0	~	250.0	-	/ 8	S56	3.3	1.0	~	15.0	-	/ 8
S57	3.1	1.0	~	16.0	-	/ 8	S57	1.3	1.0	~	2.0	-	/ 6
S58	5.5	1.0	~	31.0	-	/ 10	S58	1.6	1.0	~	3.0	-	/ 9
S59	8.4	1.0	~	58.0	-	/ 10	S59	2.8	1.0	~	12.0	-	/ 10
S60	5.3	1.0	~	19.0	-	/ 10	S60	1.5	1.0	~	2.0	-	/ 10
S61	12.0	1.0	~	45.0	-	/ 7	S61	3.6	1.0	~	15.0	-	/ 7
S62	10.2	1.0	~	73.0	-	/ 10	S62	1.8	1.0	~	5.0	-	/ 8
S63	34.9	1.0	~	220.0	-	/ 7	S63	23.6	1.0	~	120.0	-	/ 10
H1	18.6	1.0	~	110.0	-	/ 8	H1	37.1	1.0	~	210.0	-	/ 7
H2	7.1	1.0	~	43.0	-	/ 9	H2	2.0	1.0	~	6.0	-	/ 9
H3	8.6	1.0	~	33.0	-	/ 8	H3	5.7	1.0	~	22.0	-	/ 9
H4	2.2	0.7	~	6.2	-	/ 10	H4	4.4	1.0	~	13.9	-	/ 10
H5	7.0	0.8	~	45.8	-	/ 10	H5	2.0	0.2	~	8.8	-	/ 10
H6	3.3	0.4	~	11.8	-	/ 10	H6	1.1	0.4	~	1.9	-	/ 10
H7	8.1	0.3	~	42.7	-	/ 10	H7	1.5	0.1	~	6.3	-	/ 10
H8	3.0	0.7	~	7.7	-	/ 10	H8	1.0	0.2	~	4.0	-	/ 10
H9	4.7	1.8	~	8.2	-	/ 10	H9	1.7	0.3	~	6.2	-	/ 10
H10	9.2	0.7	~	22.0	-	/ 10	H10	3.1	0.6	~	16.0	-	/ 10
H11	10.7	0.4	~	78.0	-	/ 10	H11	1.3	0.6	~	1.8	-	/ 10
H12	11.0	0.6	~	74.4	-	/ 11	H12	9.5	0.5	~	81.9	-	/ 11
H13	15.0	0.5	~	46.5	-	/ 9	H13	7.1	1.0	~	38.5	-	/ 9
H14	3.7	0.7	~	10.5	-	/ 10	H14	18.9	0.9	~	119.0	-	/ 10
H15	15.2	0.3	~	101.0	-	/ 10	H15	8.7	0.4	~	68.6	-	/ 10
H16	42.0	0.6	~	322.0	-	/ 10	H16	1.3	0.4	~	3.2	-	/ 10
H17	23.3	1.7	~	89.0	-	/ 10	H17	1.9	0.5	~	7.5	-	/ 10
H18	5.0	0.4	~	15.9	-	/ 10	H18	5.3	0.1	~	40.2	-	/ 10
最大	42.0	1.8	~	322.0			最大	37.1	1.0	~	210.0		
平均	11.5	0.9	~	64.4			平均	5.7	0.7	~	30.0		
最小	1.4	0.3	~	2.7			最小	0.5	0.1	~	0.8		

(備考) 環境基準達成月数の欄の n はサンプル数、m は達成月数を示す。また、環境基準が設定されていない地点は達成月数欄に「-」を示した。

(出典 : 資料 5-13、5-14)

表 5.5-7(2) 下流河川 SS の環境基準満足状況(昭和 54 年 ~ 平成 18 年)

下流河川(五条方)					単位:mg/L		下流河川(土布子橋)					単位:mg/L	
年	平均値	最小値	~	最大値	環境基準達成月数		年	平均値	最小値	~	最大値	環境基準達成月数	
					m	n						m	n
S54	0.6	0.4	~	0.8	2	/ 2	S54	17.8	3.0	~	49.0	3	/ 4
S55	5.4	1.8	~	12.0	3	/ 3	S55	6.3	2.0	~	11.0	6	/ 6
S56	3.0	1.0	~	8.0	7	/ 7	S56	9.0	1.0	~	13.0	6	/ 6
S57	3.2	1.0	~	13.0	6	/ 6	S57	7.2	1.0	~	21.0	6	/ 6
S58	3.1	1.0	~	13.0	10	/ 10	S58	6.8	2.0	~	20.0	6	/ 6
S59	3.6	1.0	~	20.0	10	/ 10	S59	5.8	3.0	~	9.0	6	/ 6
S60	3.8	1.0	~	15.0	10	/ 10	S60	3.5	1.0	~	7.0	6	/ 6
S61	3.4	1.0	~	11.0	7	/ 7	S61	1.7	1.0	~	3.0	6	/ 6
S62	1.5	1.0	~	3.0	6	/ 6	S62	2.3	1.0	~	4.0	6	/ 6
S63	6.9	1.0	~	44.0	8	/ 9	S63	5.8	4.0	~	8.0	6	/ 6
H1	31.6	2.0	~	160.0	5	/ 7	H1	2.7	1.0	~	5.0	6	/ 6
H2	1.4	1.0	~	2.0	7	/ 7	H2	3.7	3.0	~	5.0	6	/ 6
H3	2.7	1.0	~	7.0	6	/ 6	H3	4.8	2.0	~	9.0	6	/ 6
H4	2.3	0.8	~	4.1	10	/ 10	H4	4.2	1.0	~	8.0	6	/ 6
H5	2.9	0.2	~	10.8	9	/ 9	H5	1.8	1.0	~	5.0	6	/ 6
H6	1.2	0.1	~	5.2	10	/ 10	H6	5.0	1.0	~	11.0	6	/ 6
H7	2.0	0.3	~	6.8	10	/ 10	H7	6.0	1.0	~	19.0	6	/ 6
H8	1.3	0.5	~	4.7	10	/ 10	H8	2.0	1.0	~	3.0	6	/ 6
H9	2.3	0.3	~	7.0	10	/ 10	H9	2.8	1.0	~	7.0	6	/ 6
H10	3.9	0.8	~	16.9	10	/ 10	H10	5.3	1.0	~	11.0	6	/ 6
H11	2.0	0.9	~	3.5	10	/ 10	H11	5.0	2.0	~	10.0	6	/ 6
H12	3.4	1.0	~	11.4	11	/ 11	H12	3.5	1.0	~	7.0	6	/ 6
H13	3.6	0.8	~	12.7	9	/ 9	H13	6.5	1.0	~	19.0	6	/ 6
H14	3.9	0.6	~	17.3	10	/ 10	H14	4.8	1.0	~	9.0	6	/ 6
H15	1.8	0.4	~	11.4	10	/ 10	H15	2.8	1.0	~	5.0	6	/ 6
H16	13.0	1.4	~	41.8	7	/ 10	H16	4.0	2.0	~	8.0	6	/ 6
H17	6.1	0.5	~	25.0	10	/ 10	H17	4.0	1.0	~	8.0	6	/ 6
H18	4.0	0.9	~	10.5	10	/ 10	H18	3.8	1.0	~	12.0	6	/ 6
最大	31.6	2.0	~	160.0			最大	17.8	4.0	~	49.0		
平均	4.4	0.8	~	17.8			平均	5.0	1.5	~	10.9		
最小	0.6	0.1	~	0.8			最小	1.7	1.0	~	3.0		

(備考) 環境基準達成月数の欄の n はサンプル数、m は達成月数を示す。また、環境基準が設定されていない地点は達成月数欄に「-」を示した。

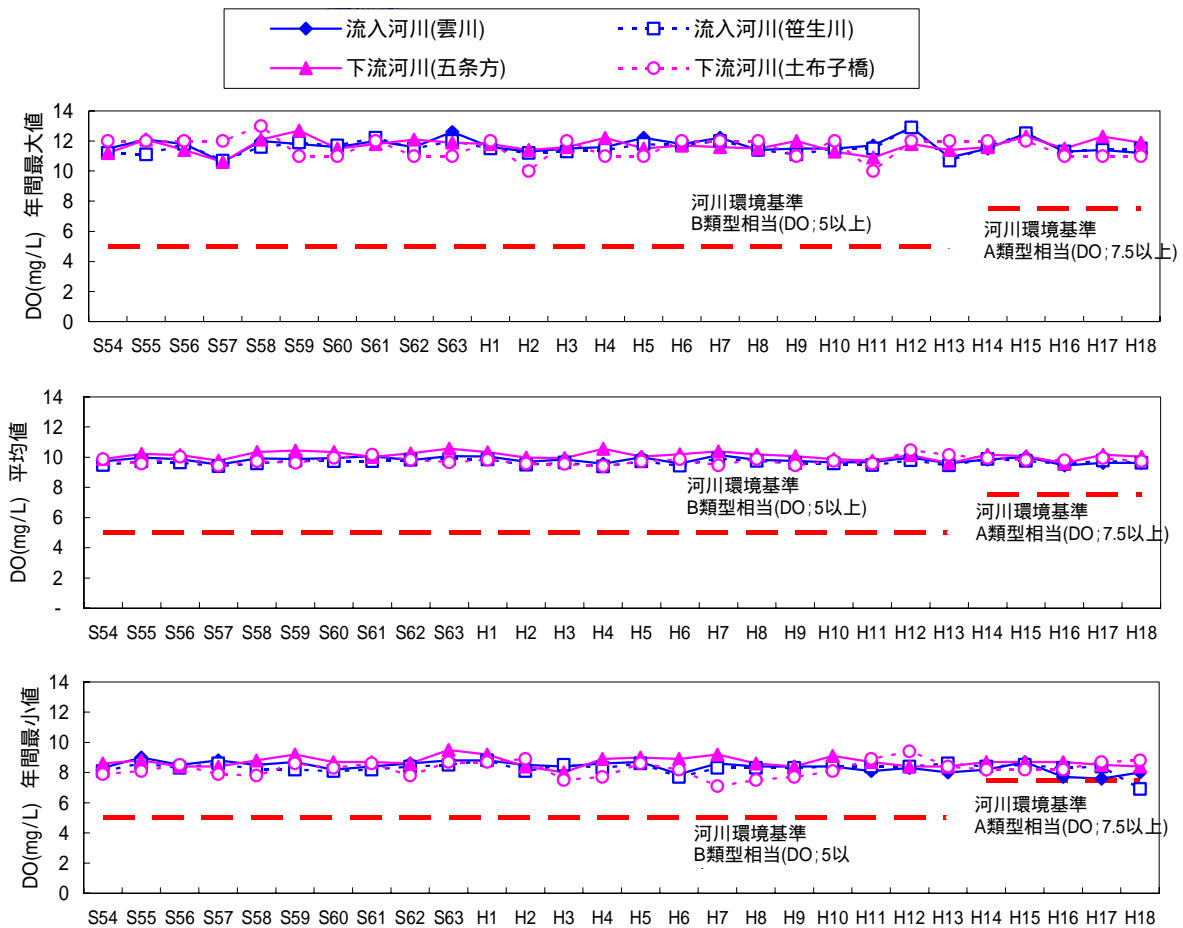
(出典 : 資料 5-13、5-14)

4) DO

流入河川(雲川、笹生川)の DO は、平均値では全ての年で河川環境基準 A 類型相当であり、経年的にも 5.3.2. (1) に示したように変化は見られない。また、経月的には、5.3.2. (2) に示したように夏期から秋期に水温の変動に応じて低下する特性が認められる。

一方、下流河川(五条方、土布子橋)の DO は、平均値では全ての年で河川環境基準 A 類型相当である。なお、流入河川と比べると、下流河川(五条方)においてやや高い値で推移している。この要因として、真名川ダム貯水池における植物プランクトンの光合成により DO が上昇した表層部からの放流が挙げられる。

流入河川と下流河川を比較すると、下流河川(五条方)の方が 0.5mg/L 程度やや高い値を示しており、貯水池における植物プランクトンの増殖に伴う光合成による水質の変化が窺える。ただし、基準値を満たしており変化も小さいため、真名川ダムの存在による影響は小さいものと考えられる。



(出典：資料 5-13、5-14)

図 5.5-1(3) 流入河川及び下流河川の DO

表 5.5-8(1) 流入河川 D0 の環境基準満足状況(昭和 54 年 ~ 平成 18 年)

引川(雲川)				単位:mg/L		流入河川(笹生川)				単位:mg/L			
年	平均値	最小値	~	最大値	環境基準達成月数		年	平均値	最小値	~	最大値	環境基準達成月数	
					m	n						m	n
	9.7	8.3	~	11.5	-	/ 10	S54	9.5	8.1	~	11.2	-	/ 10
	10.0	9.0	~	12.1	-	/ 10	S55	9.7	8.6	~	11.1	-	/ 10
	9.9	8.5	~	11.8	-	/ 8	S56	9.7	8.3	~	11.8	-	/ 8
	9.5	8.8	~	10.6	-	/ 10	S57	9.4	8.6	~	10.7	-	/ 10
	9.9	8.5	~	12.0	-	/ 10	S58	9.6	8.2	~	11.6	-	/ 10
	9.9	8.7	~	11.8	-	/ 10	S59	9.8	8.2	~	11.9	-	/ 10
	10.0	8.2	~	11.6	-	/ 10	S60	9.7	8.1	~	11.7	-	/ 10
	10.1	8.4	~	12.0	-	/ 10	S61	9.7	8.2	~	12.2	-	/ 10
	9.8	8.6	~	11.6	-	/ 10	S62	9.8	8.4	~	11.5	-	/ 10
	10.1	8.8	~	12.6	-	/ 10	S63	9.9	8.5	~	12.0	-	/ 10
	10.1	8.8	~	11.6	-	/ 10	H1	9.8	8.8	~	11.5	-	/ 10
	9.7	8.5	~	11.3	-	/ 10	H2	9.5	8.1	~	11.2	-	/ 10
	9.9	8.4	~	11.5	-	/ 10	H3	9.7	8.5	~	11.3	-	/ 10
	9.6	8.6	~	11.6	-	/ 10	H4	9.4	8.3	~	11.4	-	/ 10
	10.0	8.7	~	12.2	-	/ 10	H5	9.7	8.6	~	11.8	-	/ 10
	9.6	7.9	~	11.8	-	/ 10	H6	9.4	7.7	~	11.7	-	/ 10
	10.1	8.6	~	12.2	-	/ 10	H7	9.9	8.3	~	12.0	-	/ 10
	9.8	8.4	~	11.4	-	/ 10	H8	9.8	8.3	~	11.4	-	/ 10
	9.8	8.4	~	11.5	-	/ 10	H9	9.6	8.3	~	11.1	-	/ 10
	9.7	8.4	~	11.5	-	/ 10	H10	9.6	8.4	~	11.5	-	/ 10
	9.7	8.1	~	11.7	-	/ 10	H11	9.5	8.4	~	11.5	-	/ 10
	10.0	8.3	~	12.9	-	/ 11	H12	9.8	8.4	~	12.9	-	/ 11
	9.6	8.0	~	10.9	-	/ 9	H13	9.5	8.6	~	10.7	-	/ 9
	9.8	8.2	~	11.5	-	/ 10	H14	9.9	8.4	~	11.6	-	/ 10
	10.0	8.7	~	12.5	-	/ 10	H15	9.8	8.5	~	12.5	-	/ 10
	9.5	7.7	~	11.3	-	/ 10	H16	9.6	8.3	~	11.3	-	/ 10
	9.6	7.6	~	11.4	-	/ 10	H17	9.8	8.4	~	11.4	-	/ 10
	9.6	8.0	~	11.2	-	/ 10	H18	9.6	6.9	~	11.5	-	/ 10
	10.1	9.0	~	12.9			最大	9.9	8.8	~	12.9		
	9.8	8.4	~	11.7			平均	9.7	8.3	~	11.6		
	9.5	7.6	~	10.6			最小	9.4	6.9	~	10.7		

(備考) 環境基準達成月数の欄の n はサンプル数、m は達成月数を示す。また、環境基準が設定されていない地点は達成月数欄に「-」を示した。

(出典 : 資料 5-13、5-14)

表 5.5-8(2) 下流河川 D0 の環境基準満足状況(昭和 54 年 ~ 平成 18 年)

下流河川(五条方)				単位:mg/L		下流河川(土布子橋)				単位:mg/L			
年	平均値	最小値	~	最大値	環境基準達成月数		年	平均値	最小値	~	最大値	環境基準達成月数	
					m	n						m	n
S54	9.9	8.6	~	11.2	10	/ 10	S54	9.9	7.9	~	12.0	4	/ 4
S55	10.2	8.8	~	12.1	10	/ 10	S55	9.6	8.1	~	12.0	6	/ 6
S56	10.1	8.4	~	11.4	9	/ 9	S56	10.0	8.5	~	12.0	6	/ 6
S57	9.8	8.4	~	10.6	10	/ 10	S57	9.4	7.9	~	12.0	6	/ 6
S58	10.4	8.8	~	12.1	10	/ 10	S58	9.7	7.8	~	13.0	6	/ 6
S59	10.4	9.2	~	12.7	10	/ 10	S59	9.6	8.6	~	11.0	6	/ 6
S60	10.4	8.7	~	11.5	10	/ 10	S60	10.0	8.3	~	11.0	6	/ 6
S61	10.0	8.7	~	11.8	10	/ 10	S61	10.2	8.6	~	12.0	6	/ 6
S62	10.3	8.6	~	12.1	10	/ 10	S62	9.8	7.8	~	11.0	6	/ 6
S63	10.6	9.5	~	11.9	10	/ 10	S63	9.7	8.7	~	11.0	6	/ 6
H1	10.3	9.2	~	11.8	10	/ 10	H1	9.8	8.7	~	12.0	6	/ 6
H2	10.0	8.4	~	11.4	10	/ 10	H2	9.6	8.9	~	10.0	6	/ 6
H3	10.0	8.0	~	11.6	10	/ 10	H3	9.6	7.5	~	12.0	6	/ 6
H4	10.6	8.9	~	12.2	10	/ 10	H4	9.4	7.7	~	11.0	6	/ 6
H5	10.0	9.0	~	11.5	10	/ 10	H5	9.7	8.6	~	11.0	6	/ 6
H6	10.2	8.9	~	11.7	10	/ 10	H6	9.9	8.2	~	12.0	6	/ 6
H7	10.4	9.2	~	11.6	10	/ 10	H7	9.5	7.1	~	12.0	5	/ 6
H8	10.2	8.6	~	11.5	10	/ 10	H8	9.9	7.5	~	12.0	6	/ 6
H9	10.1	8.4	~	12.0	10	/ 10	H9	9.5	7.7	~	11.0	6	/ 6
H10	9.9	9.1	~	11.3	10	/ 10	H10	9.8	8.1	~	12.0	6	/ 6
H11	9.8	8.7	~	10.9	10	/ 10	H11	9.6	8.9	~	10.0	6	/ 6
H12	10.2	8.4	~	11.8	11	/ 11	H12	10.5	9.4	~	12.0	6	/ 6
H13	9.6	8.4	~	11.4	9	/ 9	H13	10.2	8.4	~	12.0	6	/ 6
H14	10.2	8.7	~	11.6	10	/ 10	H14	9.9	8.2	~	12.0	6	/ 6
H15	10.1	8.7	~	12.3	10	/ 10	H15	9.8	8.2	~	12.0	6	/ 6
H16	9.6	8.7	~	11.5	10	/ 10	H16	9.8	8.2	~	11.0	6	/ 6
H17	10.2	8.5	~	12.3	10	/ 10	H17	9.9	8.7	~	11.0	6	/ 6
H18	10.0	8.4	~	11.9	10	/ 10	H18	9.7	8.8	~	11.0	6	/ 6
最大	10.6	9.5	~	12.7			最大	10.5	9.4	~	13.0		
平均	10.1	8.7	~	11.7			平均	9.8	8.3	~	11.5		
最小	9.6	8.0	~	10.6			最小	9.4	7.1	~	10.0		

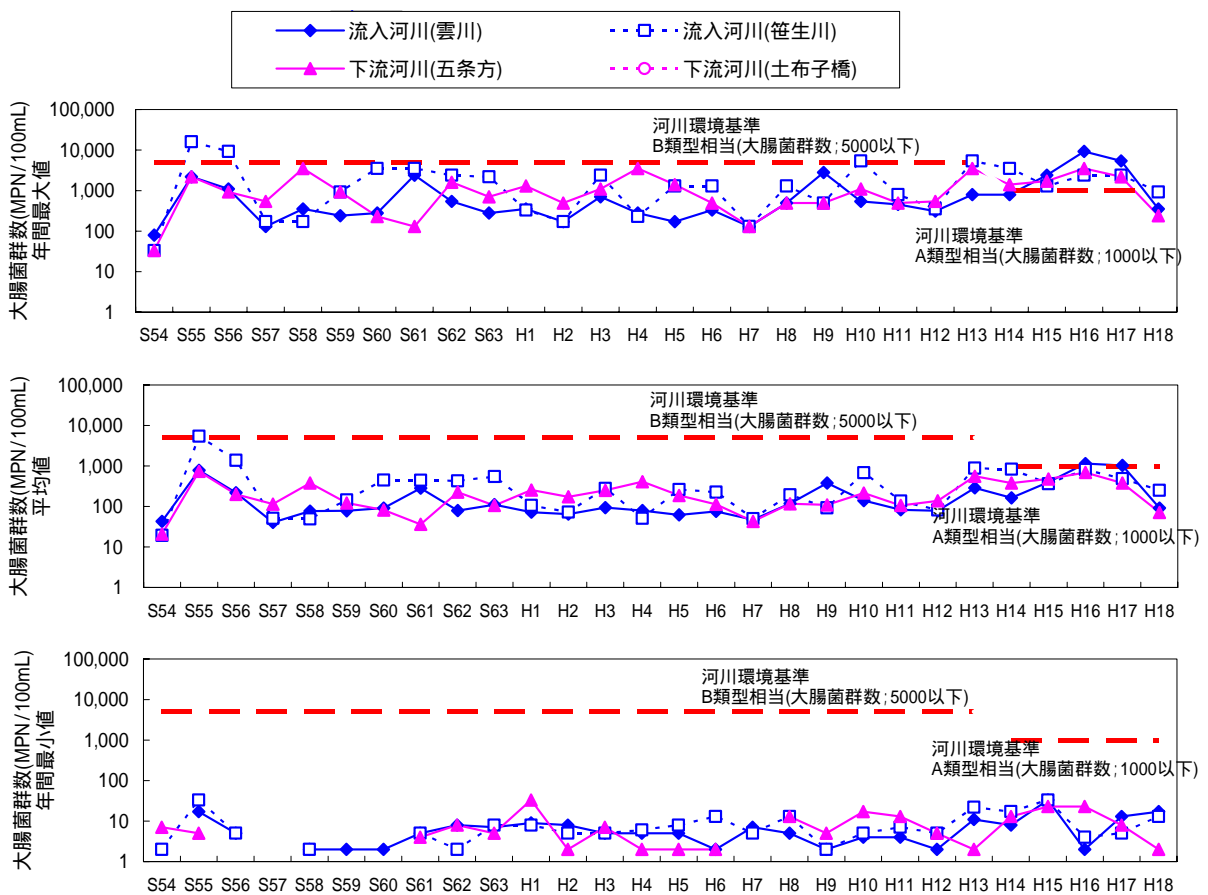
(備考) 環境基準達成月数の欄の n はサンプル数、m は達成月数を示す。また、環境基準が設定されていない地点は達成月数欄に「-」を示した。

(出典 : 資料 5-13、5-14)

### 5)大腸菌群数

流入河川(雲川、笹生川)の大腸菌群数は、平均値では流入河川(雲川)の平成 16 年(2004 年)、平成 17 年(2005 年)、及び流入河川(笹生川)の昭和 55 年(1980 年)を除くと、河川環境基準 B 類型(平成 13 年以前)、A 類型(平成 14 年以降)相当である。経年的な変化傾向は認められない。また、経月的には、5.3.2. (2)に示したように夏期から秋期に水温の変動に応じて上昇する特性と、出水時に応じて上昇する特性が認められ、平成 13 年以降では最大値が 1000MPN/100mL を超過する傾向にある。この要因としては、本流域には大きな汚濁負荷源もなく森林が主体となった土地区分であることから、近年の夏期における水温の上昇、出水頻度の増加などが要因となっていると推察される。

一方、下流河川(五条方)の大腸菌群数は、平均値では全ての年で河川環境基準 B 類型(平成 13 年以前)、A 類型(平成 14 年以降)相当であり、流入河川と比べても同程度の値で推移しており、経年的には流入河川と同様に上昇傾向にある。また、経月的にも 5.3.2. (2)に示したように流入河川と同様に夏期から秋期に上昇する特性が認められており、流入河川と同様の要因によるものと推察され、真名川ダム存在による影響は小さいものと考えられる。



(備考)土布子橋地点の大腸菌群数の分析は福井県公共用水域水質測定計画に含まれていない  
(出典：資料 5-13、5-14)

図 5.5-1(3) 流入河川及び下流河川の大腸菌群数

表 5.5-9(1) 流入河川大腸菌群数の環境基準満足状況(昭和 54 年～平成 18 年)

流入河川(雲川)					単位:MPN/100mL		流入河川(笹生川)					単位:MPN/100mL	
年	平均値	最小値	～	最大値	環境基準達成月数		年	平均値	最小値	～	最大値	環境基準達成月数	
					m	n						m	n
S54	43	0	～	79	-	/ 3	S54	19	2	～	33	-	/ 3
S55	782	17	～	2,200	-	/ 3	S55	5,381	33	～	16,000	-	/ 3
S56	218	5	～	1,100	-	/ 8	S56	1,379	5	～	9,200	-	/ 8
S57	41	0	～	130	-	/ 10	S57	51	0	～	170	-	/ 10
S58	77	2	～	350	-	/ 10	S58	50	2	～	170	-	/ 10
S59	78	2	～	240	-	/ 10	S59	146	0	～	920	-	/ 10
S60	91	2	～	280	-	/ 10	S60	448	0	～	3,500	-	/ 10
S61	284	5	～	2,400	-	/ 10	S61	446	5	～	3,500	-	/ 10
S62	79	8	～	540	-	/ 10	S62	429	2	～	2,400	-	/ 10
S63	112	7	～	280	-	/ 10	S63	551	8	～	2,200	-	/ 10
H1	72	9	～	350	-	/ 10	H1	107	8	～	330	-	/ 10
H2	65	8	～	170	-	/ 10	H2	72	5	～	170	-	/ 10
H3	94	5	～	700	-	/ 10	H3	282	5	～	2,400	-	/ 10
H4	79	5	～	280	-	/ 10	H4	51	6	～	230	-	/ 10
H5	62	5	～	170	-	/ 10	H5	262	8	～	1,300	-	/ 10
H6	76	2	～	330	-	/ 10	H6	225	13	～	1,300	-	/ 10
H7	47	7	～	130	-	/ 10	H7	50	5	～	130	-	/ 10
H8	119	5	～	490	-	/ 10	H8	194	13	～	1,300	-	/ 10
H9	380	2	～	2,800	-	/ 10	H9	93	2	～	490	-	/ 10
H10	139	4	～	540	-	/ 10	H10	680	5	～	5,400	-	/ 10
H11	83	4	～	460	-	/ 10	H11	135	7	～	790	-	/ 10
H12	78	2	～	310	-	/ 11	H12	82	5	～	350	-	/ 11
H13	290	11	～	790	-	/ 9	H13	883	22	～	5,400	-	/ 9
H14	164	8	～	790	-	/ 10	H14	837	17	～	3,500	-	/ 10
H15	397	33	～	2,400	-	/ 10	H15	362	33	～	1,300	-	/ 10
H16	1,146	2	～	9,200	-	/ 10	H16	822	4	～	2,400	-	/ 10
H17	1,036	13	～	5,400	-	/ 10	H17	486	5	～	2,400	-	/ 10
H18	91	17	～	350	-	/ 10	H18	251	13	～	920	-	/ 10
最大	1,146	33	～	9,200			最大	5,381	33	～	16,000		
平均	222	7	～	1,188			平均	528	8	～	2,436		
最小	41	0	～	79			最小	19	0	～	33		

(備考) 環境基準達成月数の欄の n はサンプル数、m は達成月数を示す。また、環境基準が設定されていない地点は達成月数欄に「-」を示した。

(出典：資料 5-13、5-14)

表 5.5-9(2) 下流河川大腸菌群数の環境基準満足状況(昭和 54 年～平成 18 年)

下流河川(五条方)					単位:MPN/100mL	
年	平均値	最小値	～	最大値	環境基準達成月数	
					m	n
S54	21	7	～	33	3	/ 3
S55	739	5	～	2,200	2	/ 3
S56	201	0	～	920	7	/ 8
S57	115	0	～	540	9	/ 10
S58	380	0	～	3,500	8	/ 10
S59	123	0	～	920	9	/ 10
S60	82	0	～	230	9	/ 10
S61	36	4	～	130	10	/ 10
S62	227	8	～	1,600	9	/ 10
S63	106	5	～	700	10	/ 10
H1	254	33	～	1,300	9	/ 10
H2	174	2	～	490	10	/ 10
H3	253	7	～	1,100	8	/ 10
H4	413	2	～	3,500	9	/ 10
H5	187	2	～	1,400	9	/ 10
H6	113	2	～	490	10	/ 10
H7	43	0	～	130	9	/ 10
H8	117	13	～	490	10	/ 10
H9	110	5	～	490	10	/ 10
H10	217	17	～	1,100	9	/ 10
H11	106	13	～	490	10	/ 10
H12	137	5	～	540	11	/ 11
H13	558	2	～	3,500	8	/ 9
H14	381	13	～	1,400	8	/ 10
H15	478	23	～	1,700	8	/ 10
H16	696	23	～	3,500	7	/ 10
H17	380	8	～	2,200	9	/ 10
H18	72	2	～	240	10	/ 10
最大	739	33	～	3,500		
平均	240	7	～	1,244		
最小	21	0	～	33		

(備考) 環境基準達成月数の欄の n はサンプル数、m は達成月数を示す。また、環境基準が設定されていない地点は達成月数欄に「-」を示した。

(出典：資料 5-13、5-14)

### (3) ダム建設前後の水質の比較

ダム建設前後の水質変化について、真名川ダム湛水以前(昭和51年12月以前)から調査を行っている下流河川(土布子橋:環境基準点)において比較する。

土布子橋における湛水開始前の昭和48年(観測開始年)～昭和51年(試験湛水開始前)と、ダム管理開始年の昭和54年～平成18年の各水質項目の平均値(各年の平均値(または75%値)の湛水開始前・後それぞれの平均値)は表5.5-10に示すとおりである。

湛水開始前のデータはサンプル数が少ないこと、ダム建設工事の影響も含まれると思われるため信頼性の問題は残るものの、水質平均値を比較すると湛水開始前に対してダム管理開始後ではpHは0.3の減少、BOD75%値は1.3mg/Lの減少、SSは7.3mg/Lの減少、DOは0.5mg/Lの増加であり、湛水開始前に対してダム管理開始後の各水質の平均値では悪化する傾向は見られない。また、最大値、最小値での評価でも同様である。

表5.5-10(1) 土布子橋地点における湛水開始前後の水質比較(pH、BOD)

<湛水開始前 土布子橋 pH>

年	平均値	最小値	～	最大値	環境基準達成月数	
					m	n
S48	7.9	6.7	～	9.3	2	3
S49	7.4	6.8	～	7.9	4	4
S50	8.2	7.8	～	8.6	3	4
S51	7.2	6.5	～	7.4	4	4
最大	8.2	7.8	～	9.3		
平均	7.6	7.0	～	8.3		
最小	7.2	6.5	～	7.4		

<湛水開始前 土布子橋 BOD>

年	75%値	最小値	～	最大値	環境基準達成月数	
					m	n
S48	2.7	1.5	～	2.7	3	3
S49	2.3	0.9	～	3.0	4	4
S50	2.5	0.8	～	3.1	3	4
S51	2.4	0.8	～	2.7	4	4
最大	2.7	1.5	～	3.1		
平均	2.5	1.0	～	2.9		
最小	2.3	0.8	～	2.7		

<湛水開始後 土布子橋 pH>

年	平均値	最小値	～	最大値	環境基準達成月数	
					m	n
S54	7.4	7.3	～	7.5	4	4
S55	7.4	6.9	～	7.8	6	6
S56	7.3	7.0	～	7.6	6	6
S57	7.3	6.9	～	7.7	6	6
S58	7.1	6.6	～	7.4	6	6
S59	7.5	7.1	～	7.7	6	6
S60	7.3	7.1	～	7.5	6	6
S61	7.4	6.8	～	7.9	6	6
S62	7.2	7.0	～	7.3	6	6
S63	7.3	6.9	～	7.5	6	6
H1	7.3	7.1	～	7.4	6	6
H2	7.2	7.1	～	7.3	6	6
H3	7.3	7.0	～	7.4	6	6
H4	7.3	7.2	～	7.5	6	6
H5	7.3	7.2	～	7.4	6	6
H6	7.2	7.1	～	7.3	6	6
H7	7.3	7.2	～	7.5	6	6
H8	7.4	7.2	～	7.5	6	6
H9	7.3	7.2	～	7.5	6	6
H10	7.3	7.1	～	7.5	6	6
H11	7.3	7.1	～	7.5	6	6
H12	7.3	7.1	～	7.5	6	6
H13	7.3	7.0	～	7.6	6	6
H14	7.3	7.0	～	7.4	6	6
H15	7.3	7.2	～	7.6	6	6
H16	7.4	7.3	～	7.5	6	6
H17	7.2	6.9	～	7.4	6	6
H18	7.2	7.0	～	7.5	6	6
最大	7.5	7.3	～	7.9		
平均	7.3	7.1	～	7.5		
最小	7.1	6.6	～	7.3		

<湛水開始後 土布子橋 BOD>

年	75%値	最小値	～	最大値	環境基準達成月数	
					m	n
S54	1.1	0.8	～	3.2	3	4
S55	1.5	0.5	～	2.1	6	6
S56	1.2	0.5	～	1.5	6	6
S57	1.5	0.5	～	1.7	6	6
S58	1.6	0.7	～	2.6	6	6
S59	1.0	0.5	～	1.3	6	6
S60	1.1	0.5	～	2.2	6	6
S61	1.3	0.5	～	1.3	6	6
S62	1.5	0.5	～	2.0	6	6
S63	2.1	0.5	～	4.6	5	6
H1	1.5	0.5	～	2.1	6	6
H2	1.2	0.5	～	1.4	6	6
H3	1.4	0.5	～	2.6	6	6
H4	0.9	0.5	～	1.1	6	6
H5	0.6	0.5	～	1.0	6	6
H6	1.4	0.5	～	1.9	6	6
H7	1.0	0.5	～	1.1	6	6
H8	0.9	0.5	～	1.3	6	6
H9	0.5	0.5	～	0.6	6	6
H10	1.3	0.5	～	1.3	6	6
H11	1.2	0.5	～	1.3	6	6
H12	1.2	0.5	～	1.3	6	6
H13	1.0	0.5	～	1.4	6	6
H14	1.4	0.5	～	1.4	6	6
H15	1.2	0.6	～	1.6	6	6
H16	1.4	0.7	～	2.5	5	6
H17	1.0	0.5	～	2.0	6	6
H18	1.1	0.6	～	1.8	6	6
最大	2.1	0.8	～	4.6		
平均	1.2	0.5	～	1.8		
最小	0.5	0.5	～	0.6		

(備考) 環境基準達成月数の欄のnはサンプル数、mは達成月数を示す。  
また、環境基準が設定されていない地点は達成月数欄に「-」を示した。

(出典：文献番号5-13、5-14)

表 5.5-10(2) 土布子橋地点における湛水開始前後の水質比較(SS、D0)

<湛水開始前 土布子橋 SS>

年	平均値	最小値	～	最大値	環境基準達成月数	
					m	n
S48	7.0	2.0	～	13.0	3	3
S49	2.3	1.0	～	4.0	4	4
S50	2.5	1.0	～	4.0	4	4
S51	37.3	2.0	～	131.0	3	4
最大	37.3	2.0	～	131.0		
平均	12.3	1.5	～	38.0		
最小	2.3	1.0	～	4.0		

<湛水開始前 土布子橋 DO>

年	平均値	最小値	～	最大値	環境基準達成月数	
					m	n
S48	9.4	7.8	～	11.0	3	3
S49	9.7	7.6	～	12.0	4	4
S50	10.0	8.7	～	12.0	4	4
S51	8.3	2.1	～	12.0	3	4
最大	10.0	8.7	～	12.0		
平均	9.3	6.6	～	11.8		
最小	8.3	2.1	～	11.0		

<湛水開始後 土布子橋 SS>

年	平均値	最小値	～	最大値	環境基準達成月数	
					m	n
S54	17.8	3.0	～	49.0	3	4
S55	6.3	2.0	～	11.0	6	6
S56	9.0	1.0	～	13.0	6	6
S57	7.2	1.0	～	21.0	6	6
S58	6.8	2.0	～	20.0	6	6
S59	5.8	3.0	～	9.0	6	6
S60	3.5	1.0	～	7.0	6	6
S61	1.7	1.0	～	3.0	6	6
S62	2.3	1.0	～	4.0	6	6
S63	5.8	4.0	～	8.0	6	6
H1	2.7	1.0	～	5.0	6	6
H2	3.7	3.0	～	5.0	6	6
H3	4.8	2.0	～	9.0	6	6
H4	4.2	1.0	～	8.0	6	6
H5	1.8	1.0	～	5.0	6	6
H6	5.0	1.0	～	11.0	6	6
H7	6.0	1.0	～	19.0	6	6
H8	2.0	1.0	～	3.0	6	6
H9	2.8	1.0	～	7.0	6	6
H10	5.3	1.0	～	11.0	6	6
H11	5.0	2.0	～	10.0	6	6
H12	3.5	1.0	～	7.0	6	6
H13	6.5	1.0	～	19.0	6	6
H14	4.8	1.0	～	9.0	6	6
H15	2.8	1.0	～	5.0	6	6
H16	4.0	2.0	～	8.0	6	6
H17	4.0	1.0	～	8.0	6	6
H18	3.8	1.0	～	12.0	6	6
最大	17.8	4.0	～	49.0		
平均	5.0	1.5	～	10.9		
最小	1.7	1.0	～	3.0		

<湛水開始後 土布子橋 DO>

年	平均値	最小値	～	最大値	環境基準達成月数	
					m	n
S54	9.9	7.9	～	12.0	4	4
S55	9.6	8.1	～	12.0	6	6
S56	10.0	8.5	～	12.0	6	6
S57	9.4	7.9	～	12.0	6	6
S58	9.7	7.8	～	13.0	6	6
S59	9.6	8.6	～	11.0	6	6
S60	10.0	8.3	～	11.0	6	6
S61	10.2	8.6	～	12.0	6	6
S62	9.8	7.8	～	11.0	6	6
S63	9.7	8.7	～	11.0	6	6
H1	9.8	8.7	～	12.0	6	6
H2	9.6	8.9	～	10.0	6	6
H3	9.6	7.5	～	12.0	6	6
H4	9.4	7.7	～	11.0	6	6
H5	9.7	8.6	～	11.0	6	6
H6	9.9	8.2	～	12.0	6	6
H7	9.5	7.1	～	12.0	5	6
H8	9.9	7.5	～	12.0	6	6
H9	9.5	7.7	～	11.0	6	6
H10	9.8	8.1	～	12.0	6	6
H11	9.6	8.9	～	10.0	6	6
H12	10.5	9.4	～	12.0	6	6
H13	10.2	8.4	～	12.0	6	6
H14	9.9	8.2	～	12.0	6	6
H15	9.8	8.2	～	12.0	6	6
H16	9.8	8.2	～	11.0	6	6
H17	9.9	8.7	～	11.0	6	6
H18	9.7	8.8	～	11.0	6	6
最大	10.5	9.4	～	13.0		
平均	9.8	8.3	～	11.5		
最小	9.4	7.1	～	10.0		

(備考) 環境基準達成月数の欄のnはサンプル数、mは達成月数を示す。  
また、環境基準が設定されていない地点は達成月数欄に「-」を示した。

(出典：文献番号 5-13、5-14)

5.5.2. 健康項目の評価

健康項目とは、人の健康に被害を生じるおそれのある重金属や有機塩素系化合物などを対象に26項目が挙げられ、それぞれ基準値が全国一律で指定されている。健康項目についてはダム湖NO.1で測定されており、下流の環境基準点である土布子橋についても整理した。

表 5.5-11 健康項目の基準値

項目	基準値 (mg/L)	項目	基準値 (mg/L)
カドミウム	0.01以下	1,1,1トリクロロエタン	1以下
全シアン	検出されないこと	1,1,2トリクロロエタン	0.006以下
鉛	0.01以下	トリクロロエチレン	0.03以下
六価クロム	0.05以下	テトラクロロエチレン	0.01以下
砒素	0.01以下	1,3-ジクロロプロペン	0.002以下
総水銀	0.005以下	チウラム	0.006以下
アルキル水銀	検出されないこと	シマジン	0.003以下
PCB	検出されないこと	チオベンカルブ	0.02以下
ジクロロメタン	0.02以下	ベンゼン	0.01以下
四塩化炭素	0.002以下	セレン	0.01以下
1,2-ジクロロエタン	0.004以下	硝酸態及び亜硝酸態窒素	10以下
1,1-ジクロロエチレン	0.02以下	ふっ素	0.8以下
シス-1,2ジクロロエチレン	0.04以下	ほう素	1以下

基準値は年間平均値とする。ただし、全シアンに係る基準値については最高値とする。

「検出されないこと」は定量下限値未満であり、以下の項目は「報告下限値」を下限とする

全シアン 0.1mg/L (JIS K 0102 38.1.2 及び 38.2 または 38.3)

アルキル水銀 0.0005mg/L (昭和 46 年 12 月環境庁告示第 59 号付表 2)

ポリ塩化ビフェニル 0.0005mg/L (昭和 46 年 12 月環境庁告示第 59 号付表 3 又は JIS K0093)

(出典：資料 5-1,6)

(1)貯水池内(ダム湖 NO.1 表層)の評価

ダム湖 NO.1 表層における各年の健康項目分析結果を整理し表 5.5-12 に示す。

各項目とも環境基準を満足している。また、いずれの項目とも増加傾向などは認められない。

なお、貯水池内では表層のみ調査を実施している。

表 5.5-12(1) 健康項目の評価(ダム湖 NO.1 表層:昭和 54 年～平成 4 年)

調査月日	基準値(mg/L)	: 基準値を満足														
		S54	S55	S56	S57	S58	S59	S60	S61	S62	S63	H1	H2	H3	H4	
カドミウム	0.01以下	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	<0.001	<0.001	<0.001
全シアン	検出されないこと	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND
鉛	0.01以下	<0.05	<0.05	<0.05	<0.05	<0.05	<0.05	<0.05	<0.05	<0.05	<0.05	<0.05	<0.05	<0.02	<0.02	<0.02
六価クロム	0.05以下	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02
ヒ素	0.01以下	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
水銀	0.005以下	<0.0005	<0.0005	<0.0005	<0.0005	<0.0005	<0.0005	<0.0005	<0.0005	<0.0005	<0.0005	<0.0005	<0.0005	<0.0005	<0.0005	<0.0005
アルキル水銀	検出されないこと	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
PCB	検出されないこと	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ジクロロメタン	0.02以下	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
四塩化炭素	0.002以下	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1,2-ジクロロエタン	0.004以下	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1,1-ジクロロエチレン	0.02以下	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シス-1,2-ジクロロエチレン	0.04以下	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1,1,1-トリクロロエタン	1以下	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1,1,2-トリクロロエタン	0.006以下	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
トリクロロエチレン	0.03以下	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	<0.002	<0.002	<0.002
テトラクロロエチレン	0.01以下	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	<0.0005	<0.0005	<0.0005
1,3-ジクロロプロペン	0.002以下	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
チウラム	0.006以下	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シマジン	0.003以下	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
チオベンカルブ	0.02以下	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ベンゼン	0.01以下	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
セレン	0.01以下	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素	10以下	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
フッ素	0.8以下	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ほう素	1以下	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

(出典：資料 5-13)





### 5.5.3. 水温の変化に関する評価

#### (1) 水温変化の発生要因と評価の視点

ダム貯水池は河川と比較して水深が深く滞留時間が長いため、春期～夏期にかけて水面に近いほど水温が高くなる現象が見られる。この場合、取水方法・位置によっては流入と放流に水温差が生じる可能性があるため、その度合いを把握・評価する必要がある。

「水温の変化」としては、冷水放流と温水放流が挙げられ、これらの現象の評価は流入水温に対して放流水温がどの程度変化しているのかにより行うものとする。

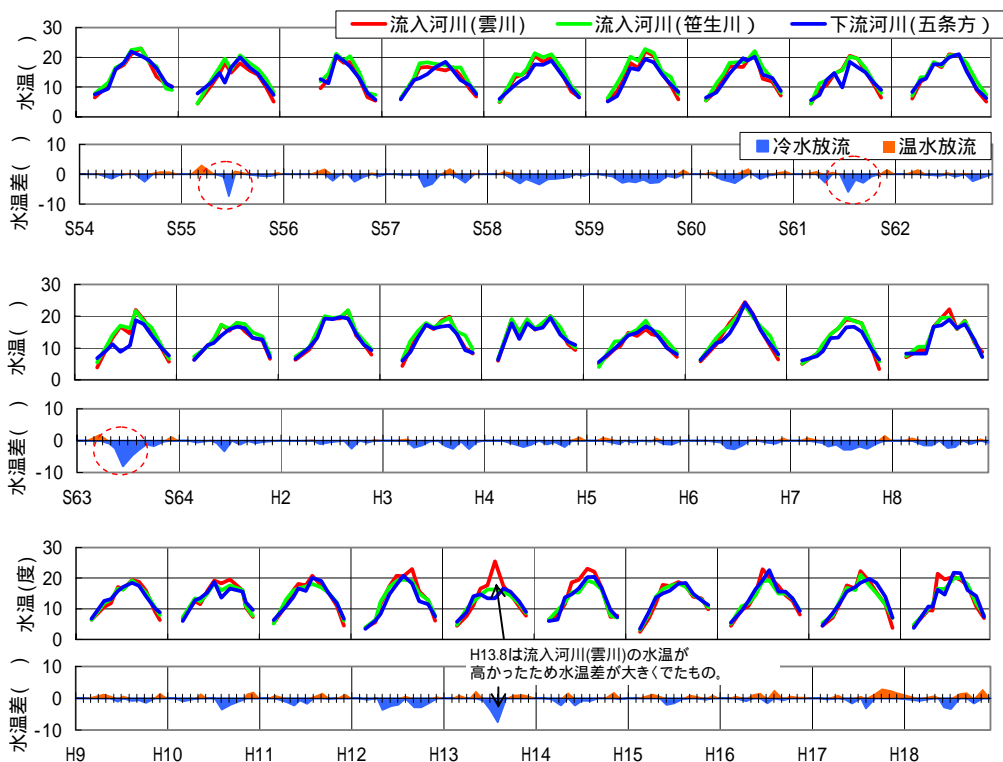
冷水放流は、ダム貯水池底層部からの放流や出水時の攪拌により、流入水温より低い水温が放流されることであり、一般に流入水温が上昇する時期に、ダム貯水池の水温上昇が遅れて進行する受熱期(春期～初夏)において発生することがある。

温水放流は、流入水温が低下していく時期に、ダム貯水池の水温低下が遅れて進行する放熱期(秋期～冬期)において発生することがある。

#### (2) 冷水現象の把握

真名川ダム貯水池による下流河川水温への影響を把握するために、流入・放流水温の経月変化、冷水放流、温水放流の発生状況を図 5.5-2 に示す。

流入水温(雲川及び笹生川の平均水温)と放流水温(五条方)で水温を比較すると、水温差が 5 以上と顕著な冷水放流が発生しているのは昭和 55 年(1980 年)7 月 11 日の-7.4、昭和 61 年(1986 年)7 月 15 日の-6.0、昭和 63 年(1988 年)6 月 13 日の-8.1 である。また、5 以上の温水放流は確認されていない。



(備考)水温差は、下流河川水温(五条方) - 流入水(雲川と笹生川の平均水温) (出典：資料 5-13)

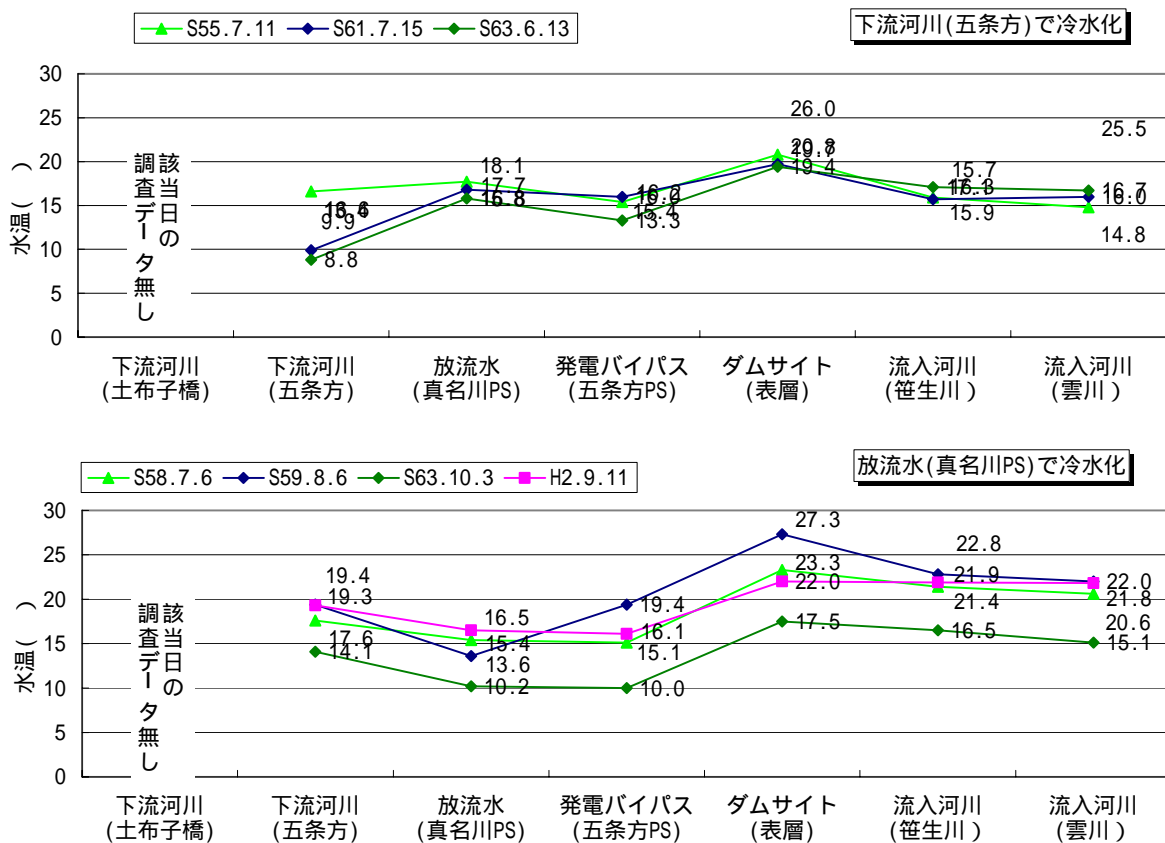
図 5.5-2 流入水温と放流水温の経月変化(昭和 54 年～平成 18 年)

図 5.5-3 には流入河川(雲川、笹生川)の平均水温に対して下流河川(五条方)で水温差 5 以上の冷水化が認められた調査日と、放流水(真名川 PS)で冷水化が顕著に認められた調査日について水温の縦断変化を示している。

下流河川(五条方)で冷水化した場合は、放流水(真名川 PS)、発電バイパス(五条方 PS)に比べ、さらに水温低下しており、ダムの小放水設備等により貯水池中層からの冷水放流による影響を受けたものと推察される。

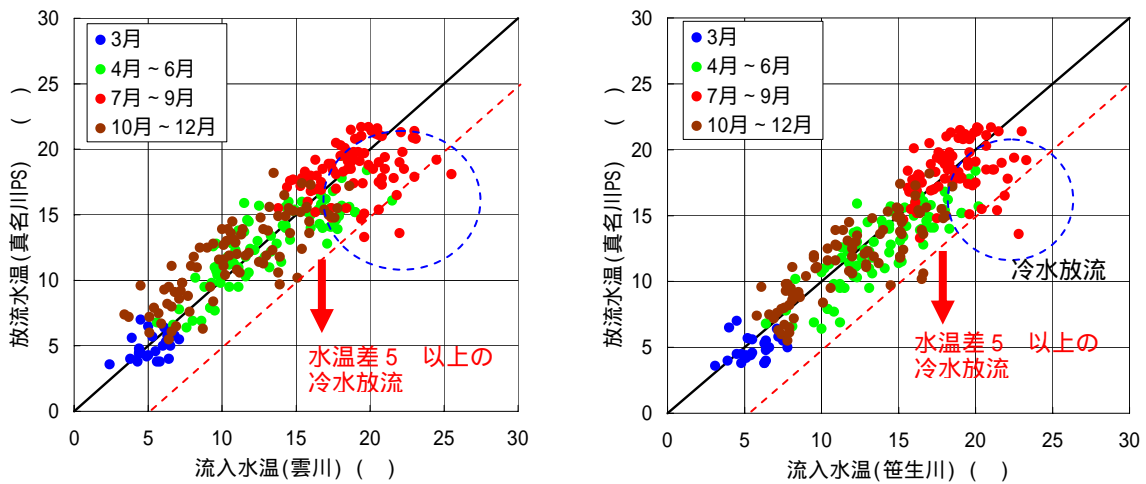
一方、放流水(真名川 PS)で冷水化した場合は、いずれも「ダム放流量」=「発電取水量」であったことが確認されており、表層取水単独による利用によっても冷水放流が見られる、ダム直下放流及び残流域流入により下流河川(五条方)で水温が回復したものと推察される。

また、図 5.5-4 には流入水温に対する放流水(真名川 PS)の水温を散布図で示す(ダム直下～真名川 PS 流入地点までの水温観測はない)。これによると、流入水温と表層取水による放流水温の関係を期別に整理すると、冷水放流が顕著となる時期は 7～9 月に多いことがわかる。



(出典：資料 5-13)

図 5.5-3 水温縦断変化(冷水放流発生日)



(出典：資料5-13)

図 5.5-4 流入・放流水温の比較(昭和 54 年～平成 18 年)

### (3)冷水放流の発生要因

#### 1)貯水位低下時(貯留準備水位への移行時)

真名川ダムでは、8月1日～9月30日までの運用上最も低い貯水位である第2期貯留準備水位(旧；第2期制限水位)に移行するため、出水ではない場合においても、発電取水設備に加えて小放水設備からも放流を行なうことがある。

図 5.5-5 には、冷水現象が比較的多く発生する7月～9月の貯水池内の水温鉛直分布図を示す。

小放水設備は、EL.320.0m に設置されているため、図 5.5-5 に示すように、水温躍層以下の冷水層より放流することとなる。

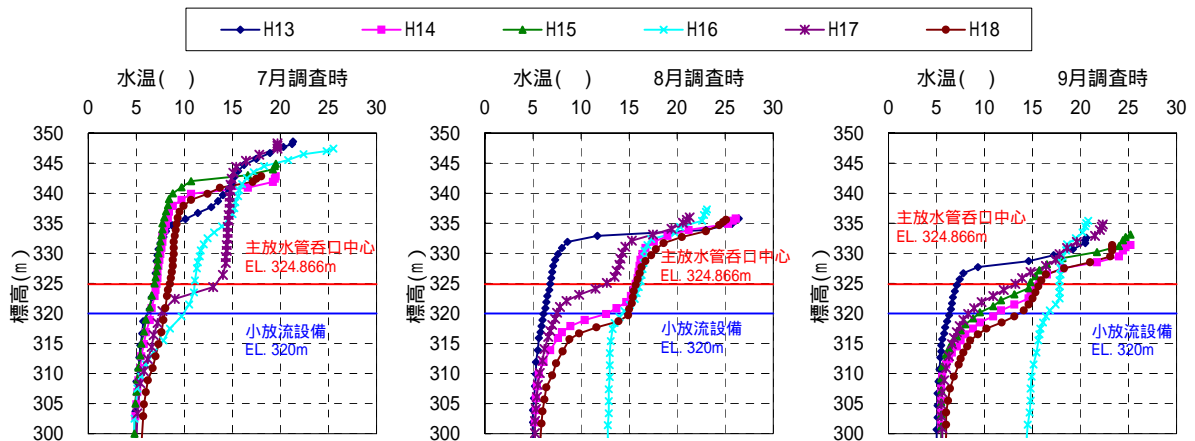


図 5.5-5 冷水現象が発生する貯水池水温鉛直分布(ダム湖 No1 地点；平成 13 年～平成 18 年)

次に、近年網場地点で測定している水温連続データを元に、ダムの放流状況、放流標高と水温分布の関係を整理した結果を、図 5.5-6 に示した。

小放水設備 (標高 EL320m) から放流が行われる場合、特に夏期の放流時には表層水温に対して、5 以上低い水温層から放流することもある。ダムサイト直下から、発電バイパスが合流する地点の間で冷水化が生じていたことが推察される。

このことから、小放水設備の選択取水化により冷水放流を回避することや、曝気循環設備の導入により表層の温水層と混合することで、小放水設備標高付近の水温を上げることも有効と考えられる。

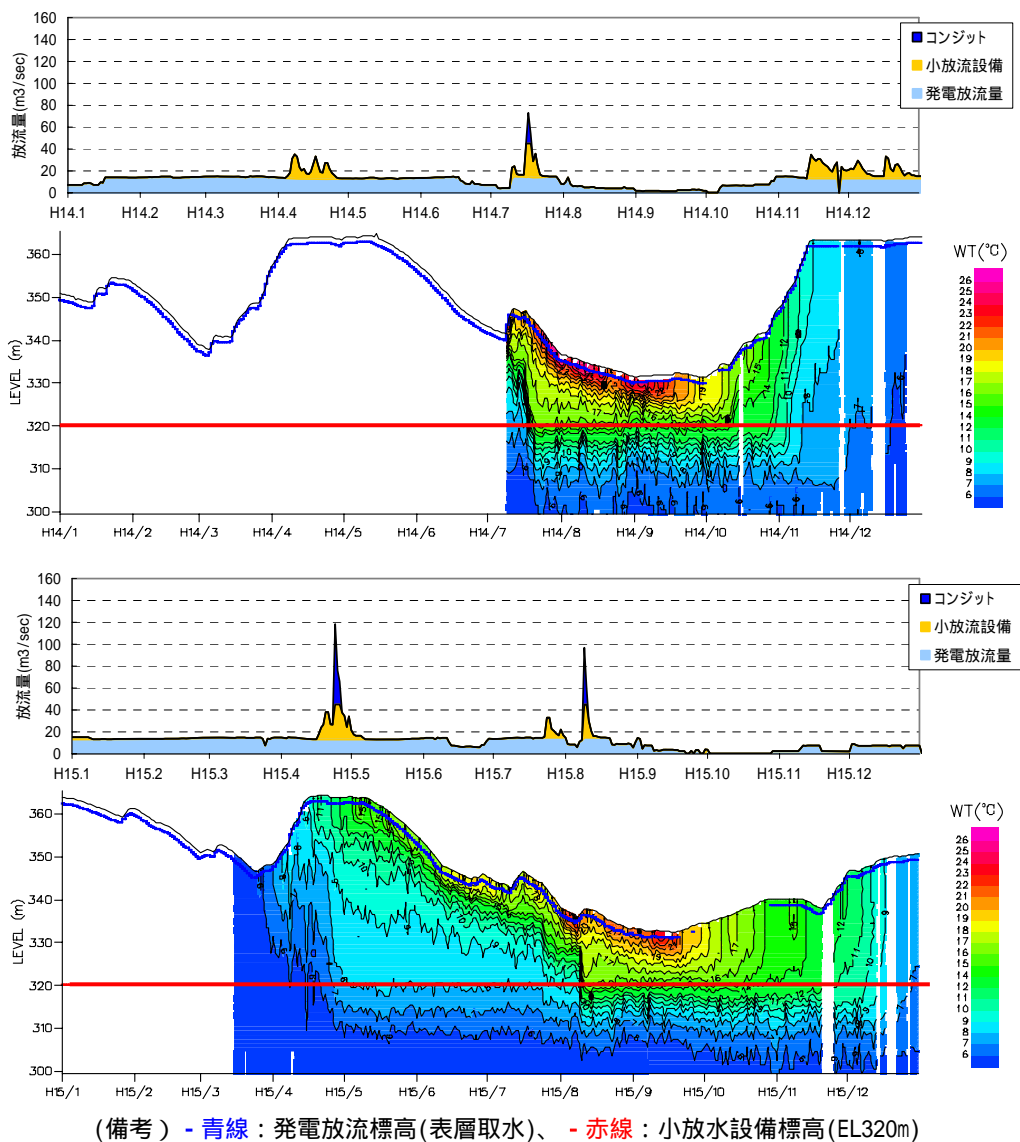
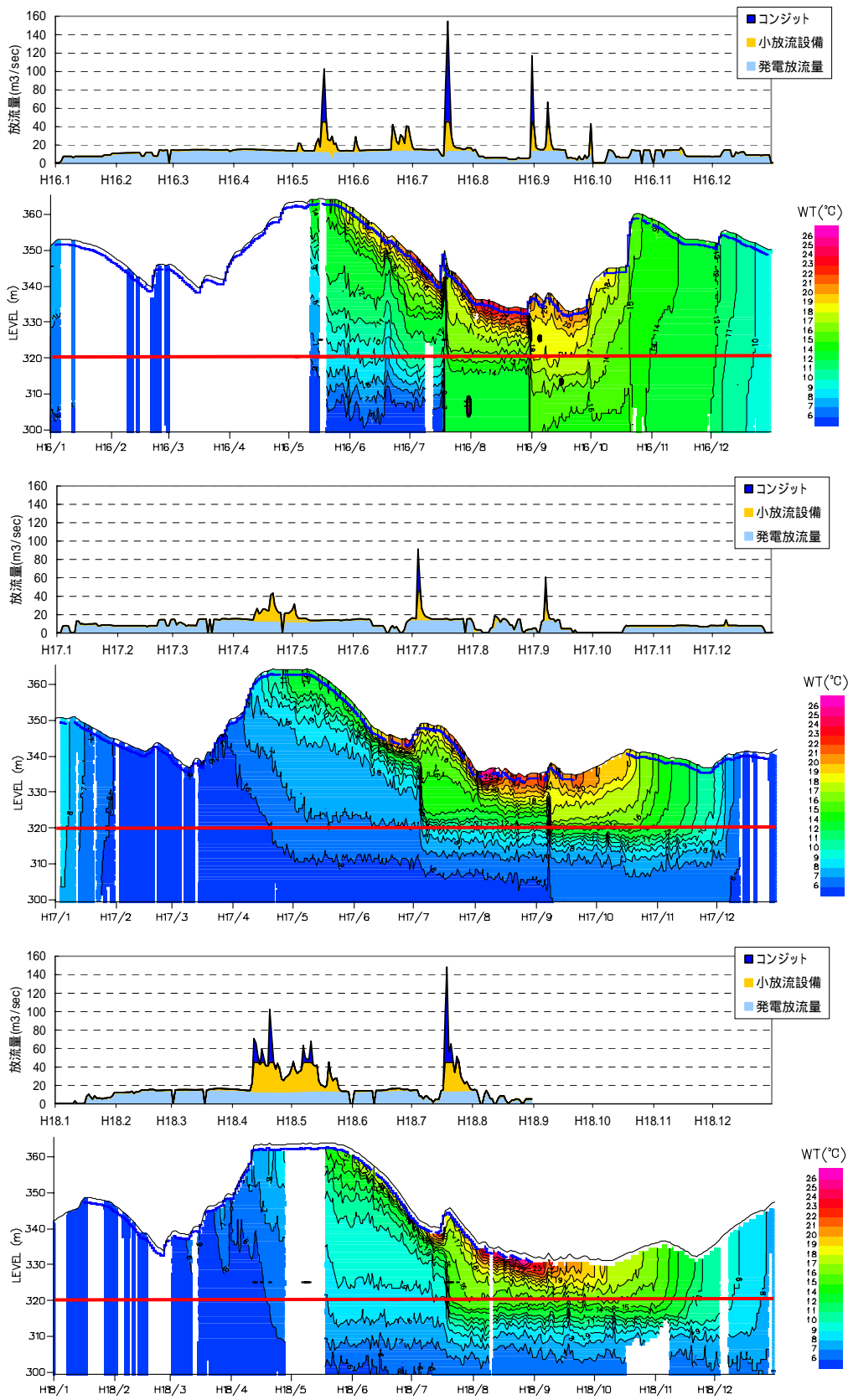


図 5.5-6(1) 各放流施設標高の水温分布の確認



(備考) - 青線: 発電放流量標高(表層取水)、- 赤線: 小放水設備標高(EL320m)

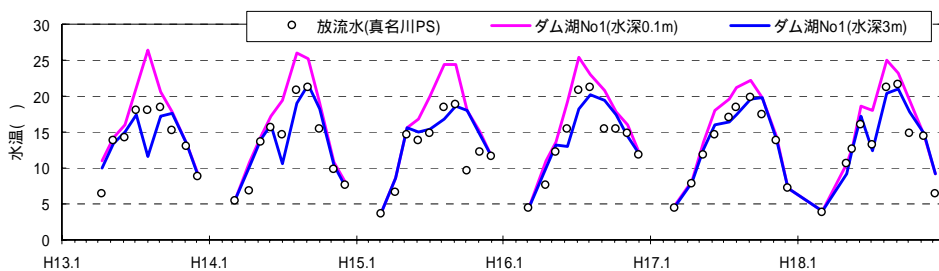
図 5.5-6(2) 各放流施設標高の水温分布の確認

2) 平常時（発電取水のみの場合）

真名川ダムでは、平常時は貯水池水面から水深 3m までの表層取水により下流放流を行っているが、図 5.5-5 に示したように真名川ダムの貯水池水温鉛直分布を見ると、7 月～9 月の水温は表層部分で強固な躍層を形成しており、取水深 3m までの水温差は 5 を上回ることが多い。また、図 5.5-7 に示したように真名川 PS の水温は、貯水池水深 3m 付近の水温とほぼ同等であり、水面から 3m の表層取水を行った場合でも、3m 付近の冷たい水を下流に放流していることがわかる。

図 5.5-8 に貯水池表層部の水温差の状況と、冷水発生時期を比較して示すが、平成 13 年 8 月（2001 年 8 月）、平成 14 年 7 月（2002 年 7 月）、平成 18 年 7 月（2006 年 7 月）において、水面下 3m の水温低下が激しい調査日に冷水放流が発生している状況がわかる。

以上のように、真名川ダムでは 7～9 月の夏期において水面下 3m 付近の水温の急激な変化により、表層放流水温は躍層下側の冷水層から取水され、冷水現象の要因の一つと考えられる。



(備考)貯水池のデータはダム湖 No1 地点データより整理

図 5.5-7 貯水池表層部の水温と真名川 PS の水温の関係

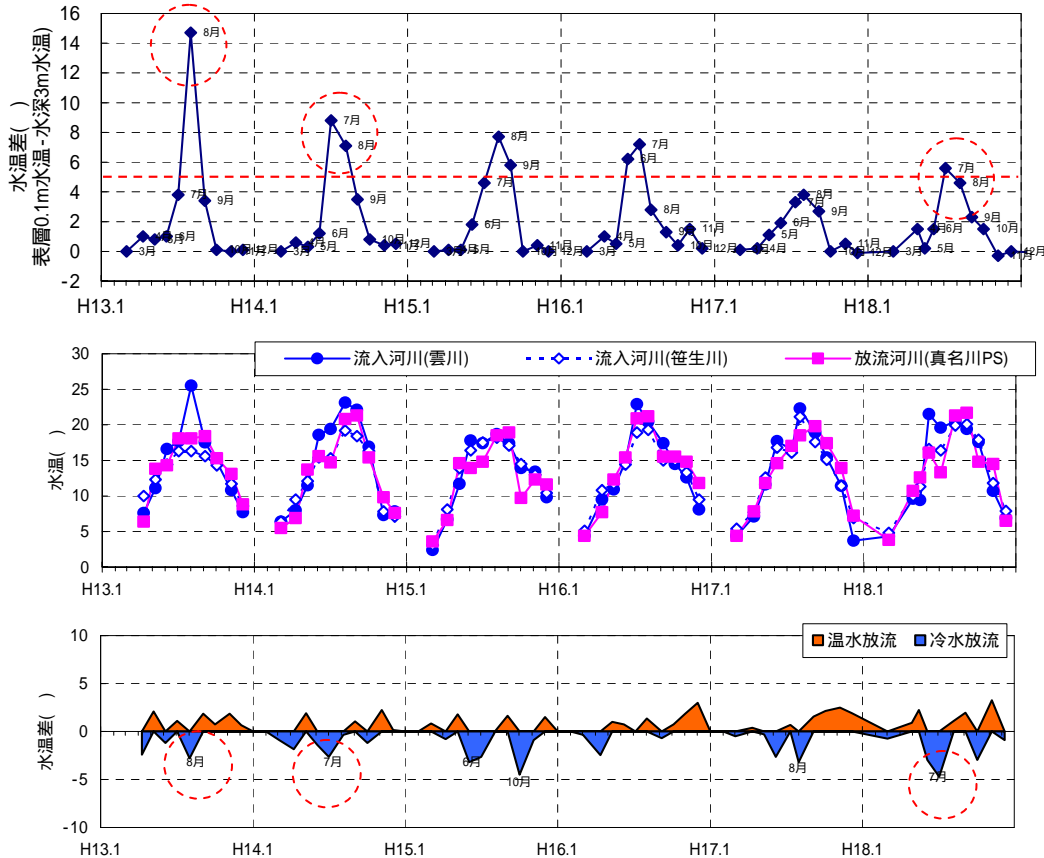


図 5.5-8 貯水池表層部の水温差と冷水発生時期の比較

#### (4)冷水放流の評価

以上のように、真名川ダムでは流入河川に対し下流河川で - 5 を超える冷水化が認められる場合がある。また、下流河川でのアユの発育不良に関する苦情が漁協からも寄せられており、真名川ダムの運用に伴う冷水放流による下流生息魚類への影響が懸念される。

なお、現時点では、小放水設備等、ダム直下放流への冷水放流現象なども含めたモニタリングが十分できていないことから、今後流入水温、各放流設備からの放流水温、下流河川(五条方)水温の連続監視を行い、現象を十分把握し冷水放流現象を分析する必要がある。また、小放流設備の選択取水化、表層放流設備の改良、曝気循環施設の導入などの対策について検討を行う必要がある。



#### 5.5.4. 土砂による水の濁りに関する評価

##### (1)濁水長期化現象の発生要因と評価の視点

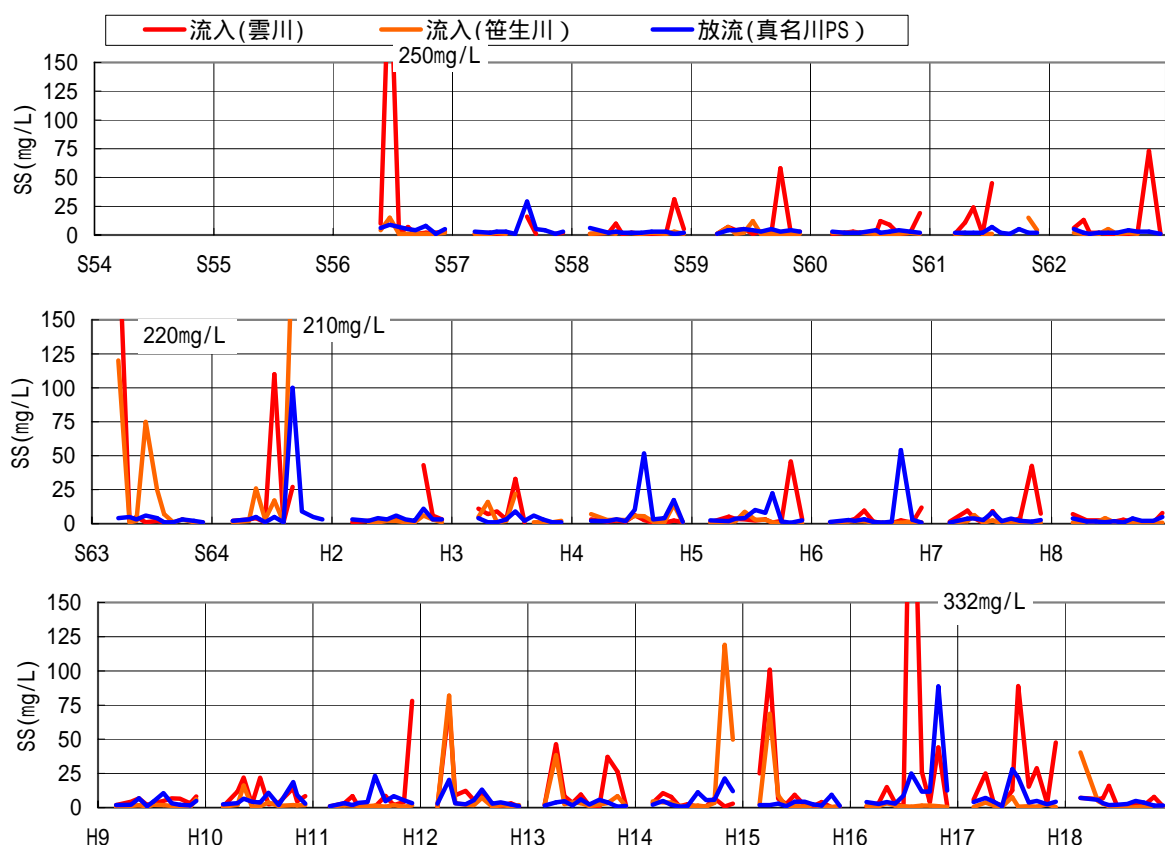
ダム貯水池の存在により、洪水時に河川から流入してくる微細な土砂が、長期間にわたって貯水池内で沈むことなく浮遊する現象が見られることがある。この場合、取水方法や位置によっては、流入濁度と放流濁度に差が生じる可能性があるため、その度合いを把握・評価する必要がある。

「土砂による水の濁り」による影響としては、濁水長期化現象が挙げられ、真名川ダムにおいてもその発生が認められ、「真名川ダム濁水対策検討会」(平成 17 年～平成 18 年)を設立し、その軽減について検討を行った。

##### (2)SS 経月変化の整理

真名川ダム貯水池における SS の変化の状況を把握するために、流入・放流 SS の経月変化の比較を行った。その結果を図 5.5-9 に示す。

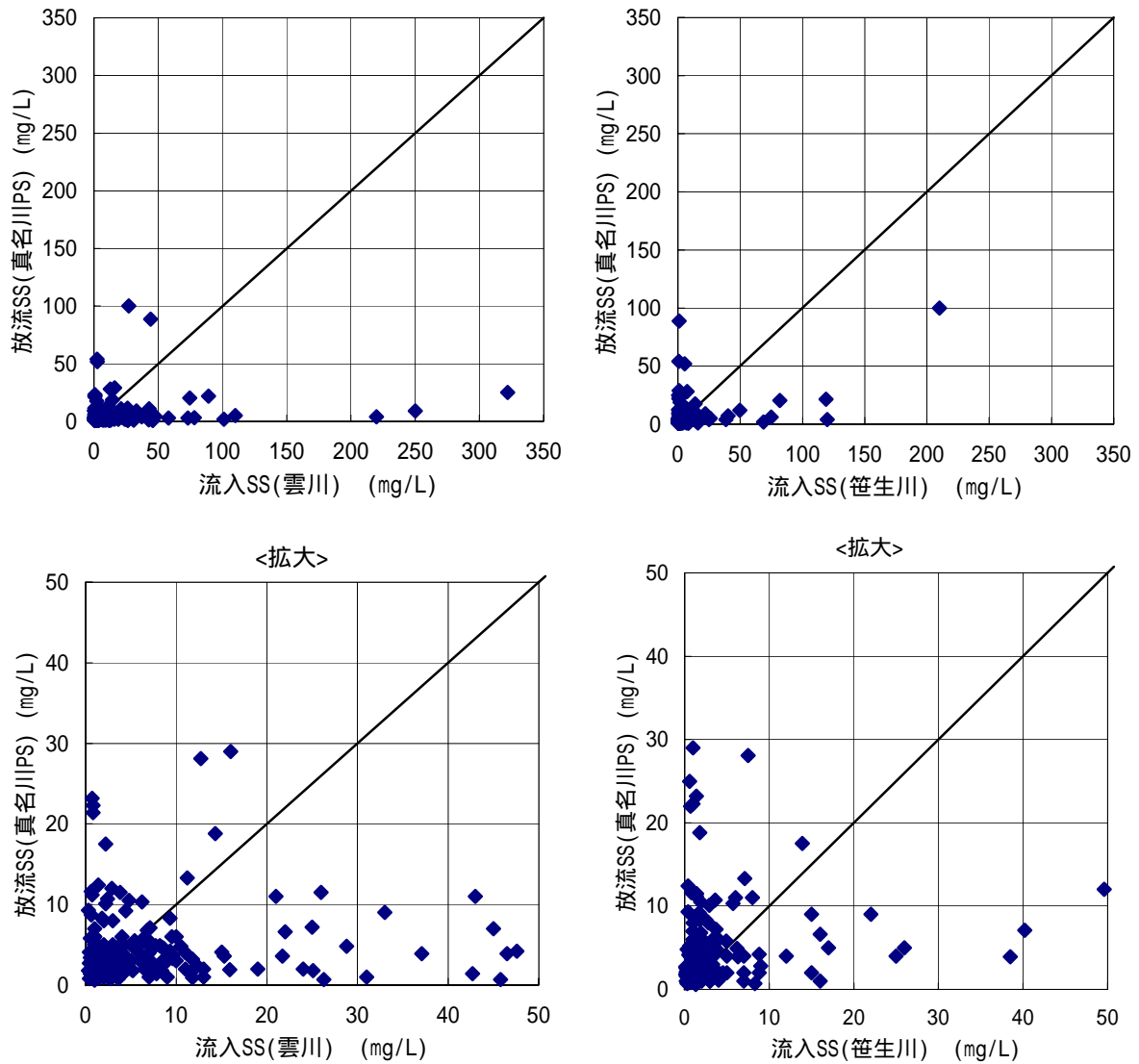
昭和 54 年(1979 年)から平成 18 年(2006 年)までの調査において、放流 SS が流入 SS を上回る回数は調査回数 245 回のうち 93 回である。このうち、放流 SS と流入 SS の差が 5mg/L 以上の調査回数は 19 回、10mg/L 以上の調査回数は 9 回である。



(出典：資料 5-13)

図 5.5-9 流入 SS と放流 SS の経月変化(昭和 54 年～平成 18 年)

また、流入 SS(雲川、笹生川)と放流 SS(真名川 PS)の比較を図 5.5-10 に示す。水温とは異なっ  
て 45° 線(流入と放流水質が同一)から散らばっており、放流 SS が流入 SS よりも低い状況も確認  
できるが、流入 SS が 5mg/L 程度以下の状況でも、放流 SS が 10mg/L 前後を上回る期間が多く認め  
られ、貯水池による濁水化の状況も認められる。



(出典：資料 5-13)

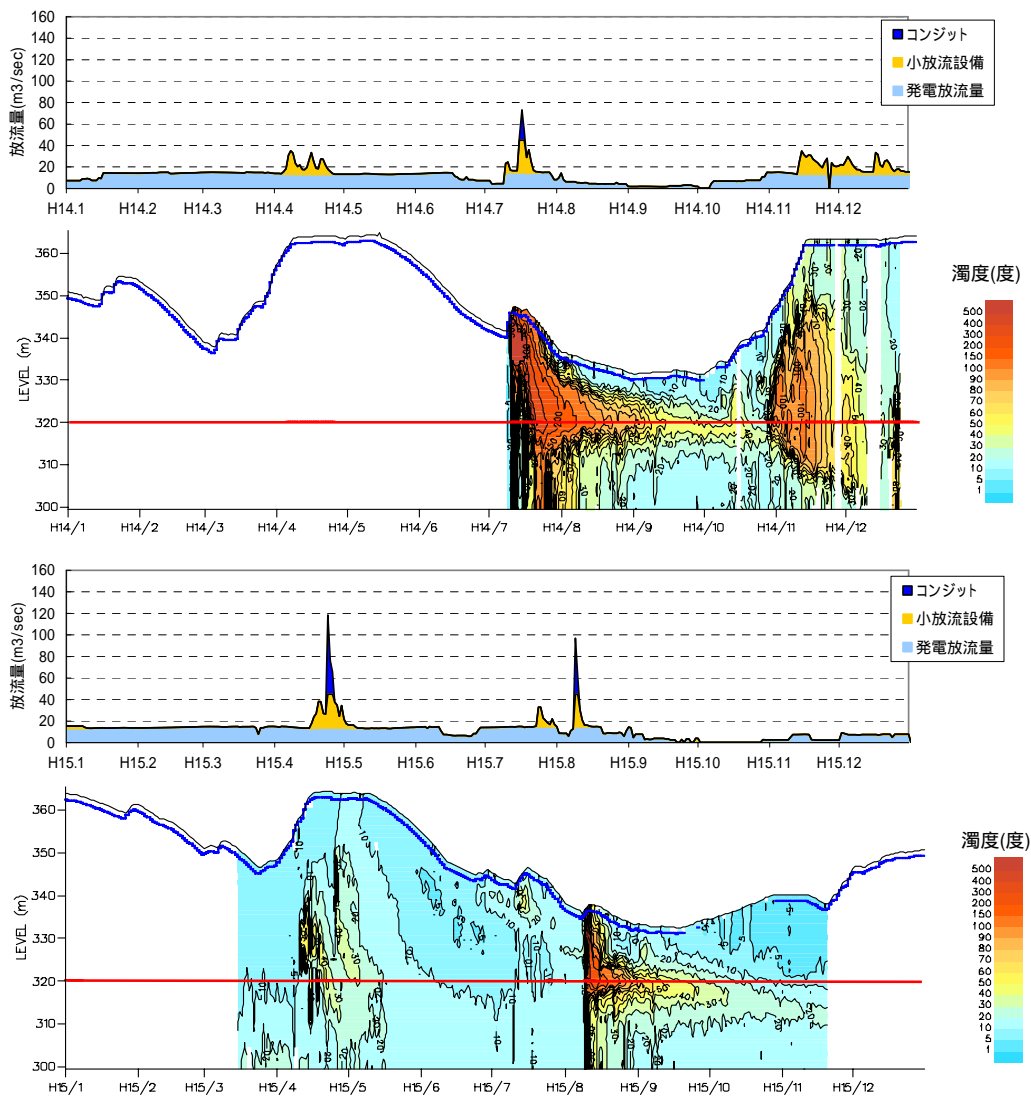
図 5.5-10 流入・放流 SS の比較(昭和 54 年～平成 18 年)

(3)濁度連続監視データによる濁水長期化現象の評価

月1回の定期調査では、濁水長期化現象の発生有無を把握するのは難しいため、近年測定されている網場地点の濁度連続データを用いた整理を行った。図5.5-11には、網場地点の濁度連続データによる鉛直分布の時系列図を示した。

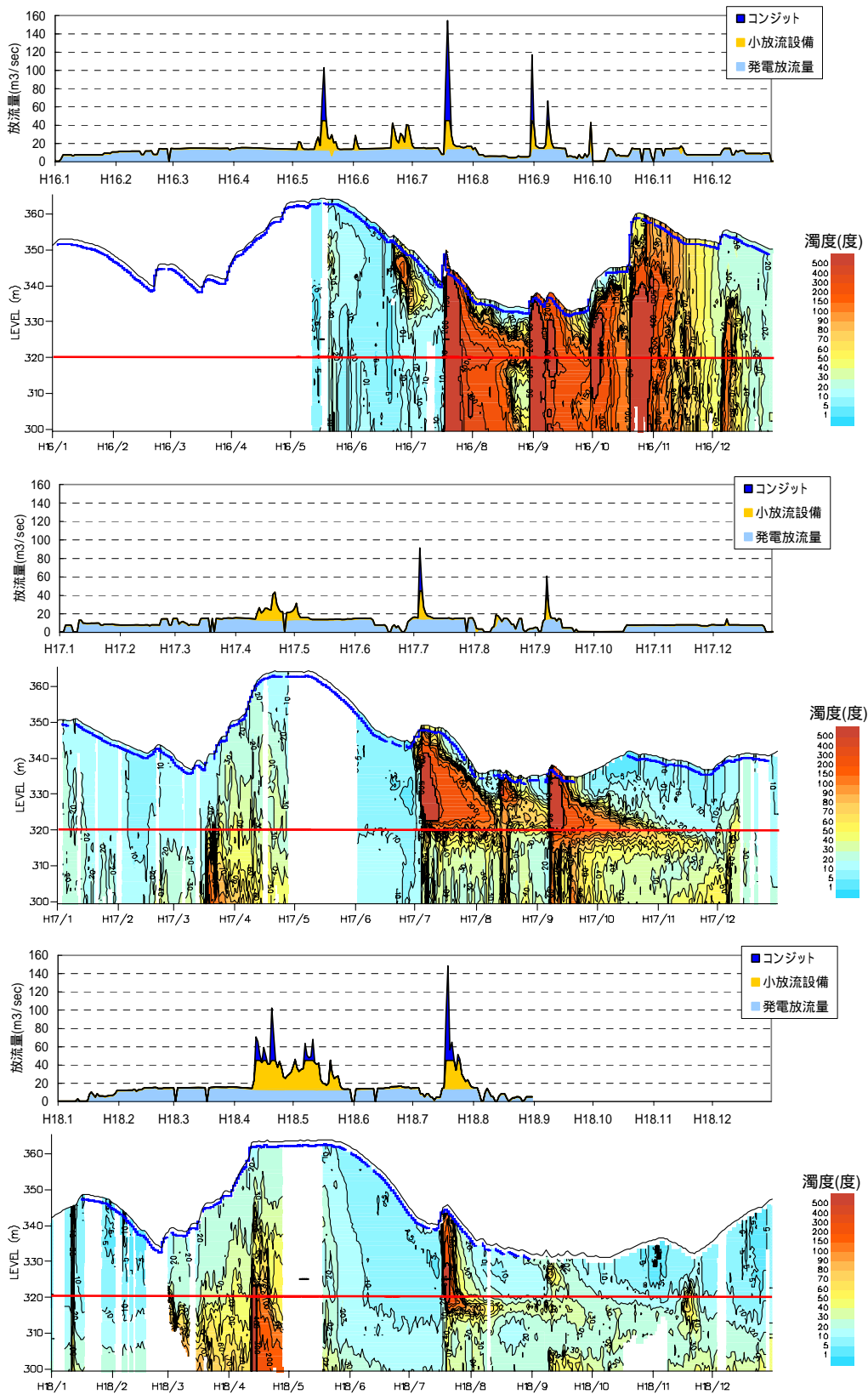
出水直後には、ほぼ貯水池全層に渡り高濁度状況となるが、小放水設備の位置する放流標高(EL320m)付近の高濁度層は出水後も長期的に残存する。このため出水後においてもダムサイト直下への濁水放流が生じる場合があると推察される。

一方、表層付近は比較的早期に清澄化しており、濁水長期化の軽減のためには小放水設備の選択取水化により出水後の表層清澄化後は小放水設備呑口を表層に切り替えることも有効な手法と考えられる。



(備考) -青線：発電放流標高(表層取水)、-赤線：小放水設備標高(EL320m)

図 5.5-11(1) 各放流施設標高の濁度分布



(備考) - 青線 : 発電放流標高(表層取水)、- 赤線 : 小放水設備標高(EL320m)

図 5.5-11(2) 各放流施設標高の濁度分布

#### (4) 苦情発生状況

真名川ダムでは管理開始以降、出水のたびにダム貯水池の濁水現象が発生し、平成 11 年(1999 年)頃からは下流河川利用者より濁水放流に対する苦情が寄せられるようになってきている。表 5.5-14 にその状況を示す。

これに対し、平成 14 年(2002 年)には汚濁防止フェンスを設置しており、前述のとおり平成 17 年(2005 年)10 月には学識経験者、流域関係機関による「真名川ダム濁水対策検討会」を設立し、濁水長期化軽減対策について検討し、その結果を受けて平成 18 年から対策を実施している。

表 5.5-14 濁水長期化に対する苦情の状況

番号	苦情年月日	相手	濁りの場所等
1	H11.9.20	九頭竜川中流部漁協	9月15日の出水以降の九頭竜川の濁り
2	H11.10.2	九頭竜川中流部漁協	9月15日の出水以降の九頭竜川の濁り
3	H11.10.6	九頭竜川中流部漁協	9月15日の出水以降の九頭竜川の濁り
4	H12.6.30	大野市漁協	真名川の濁り
5	H13.6.22	大野市漁協	真名川の濁り
6	H13.6.28	九頭竜川中流部漁協	九頭竜川の濁り
7	H13.7.16	九頭竜川中流部漁協	九頭竜川の濁り
8	H13.8.25	九頭竜川中流部漁協	九頭竜川の濁り
9	H13.9.18	九頭竜川中流部漁協	九頭竜川の濁り

(出典：資料 5-18)

#### 5.5.5. 富栄養化現象に関する評価

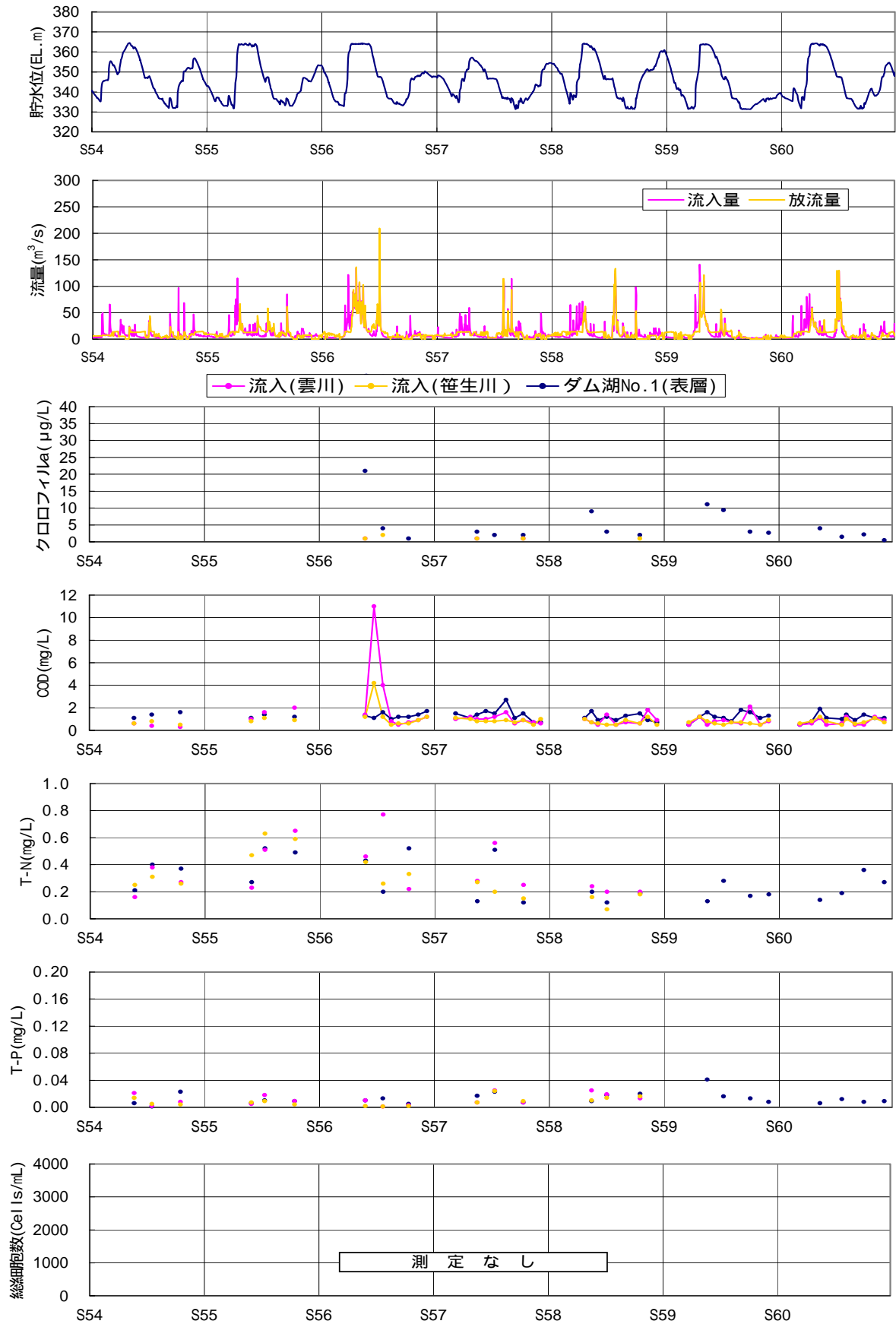
一般に富栄養化現象とは、貯水池内の栄養塩類の増加により、植物プランクトンの異常増殖が発生することである。これにより、アオコの原因種となる藍藻類等の異常増殖を起こすこともある。富栄養化の状況を把握するために、流入水質と貯水池表層水質の経月変化、水温及び回転率からみた植物プランクトンの増殖時期の特徴、既往の水質障害発生状況等から整理評価した。

##### (1) 流入水質と貯水池表層水質の経月変化

真名川ダムの富栄養化傾向を確認するため、水質調査を実施している昭和54年以降における流入(雲川)、流入(笹生川)、ダム湖 NO.1 のクロロフィル a 濃度、COD 濃度、T-N 濃度、T-P 濃度、植物プランクトン細胞数の推移を図 5.5-12 に示す。

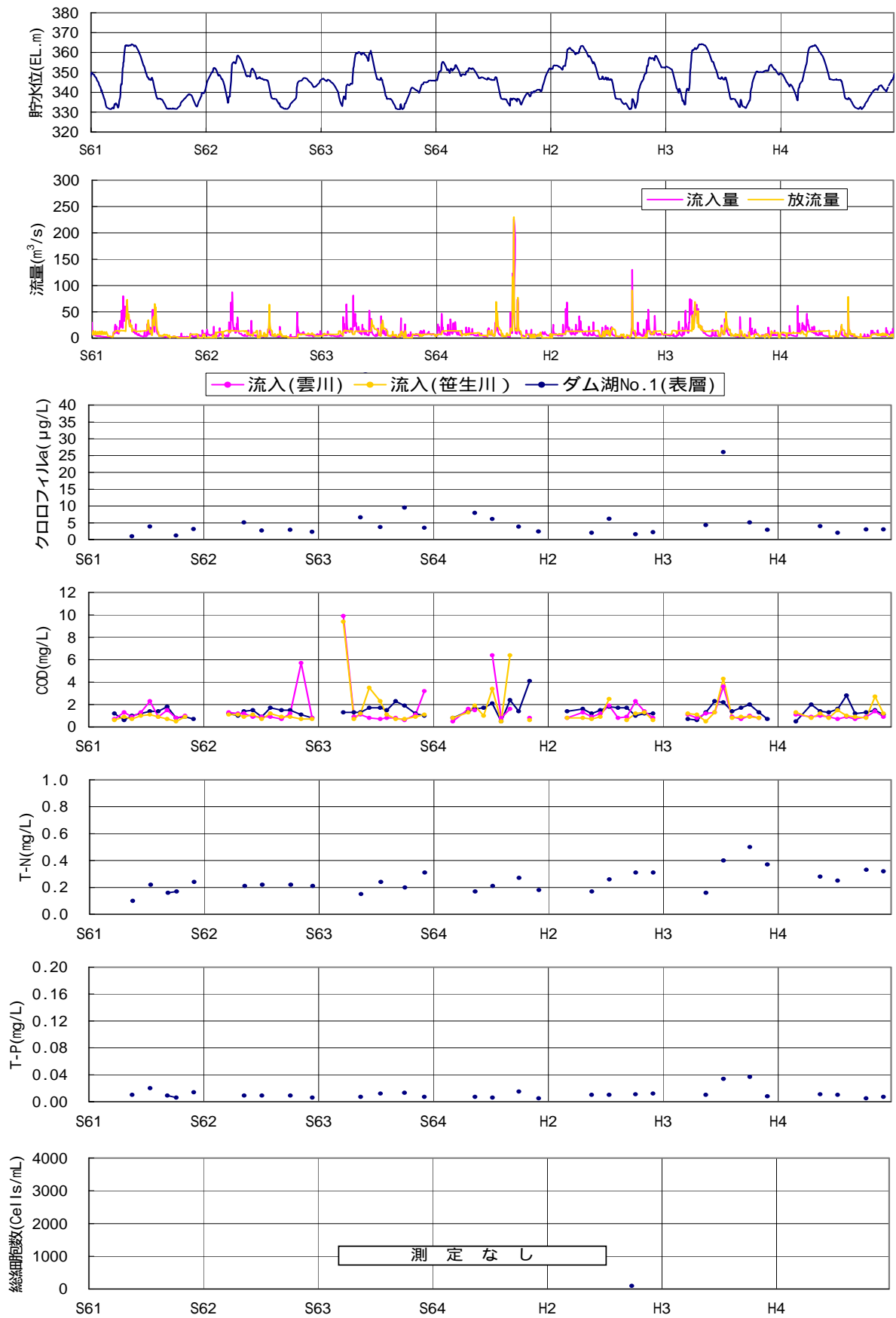
流入水質は、T-N 濃度がやや増加傾向にあるが、T-P が 0.02mg/L 未満と植物プランクトンの増殖環境としては低い値であり、リン制限となっていると考えられる。このような環境条件にあるため、貯水池表層水質は概ね COD が 2mg/L 以下と良好である。ただし、クロロフィル a の上昇する初夏～秋にかけて 20 µg/L を超える傾向にあり、植物プランクトンの増殖に伴う内部生産の影響を受けた結果となっている。また、年間平均値は経年的に 5 µg/L 前後の横ばい傾向で推移している。

真名川ダムで増殖する植物プランクトン種としては、5.3.7. に示したように4月～5月に珪藻綱の増殖が顕著となっている。その他の種では、継続的な調査が開始された平成8年(1996年)以降、藍藻はほとんど発生しておらず細胞数は最大でも 2cell/mL と低い。また渦鞭毛藻類細胞数も最大 40cell/mL 以下と低い値で推移している。



(出典：資料 5-13)

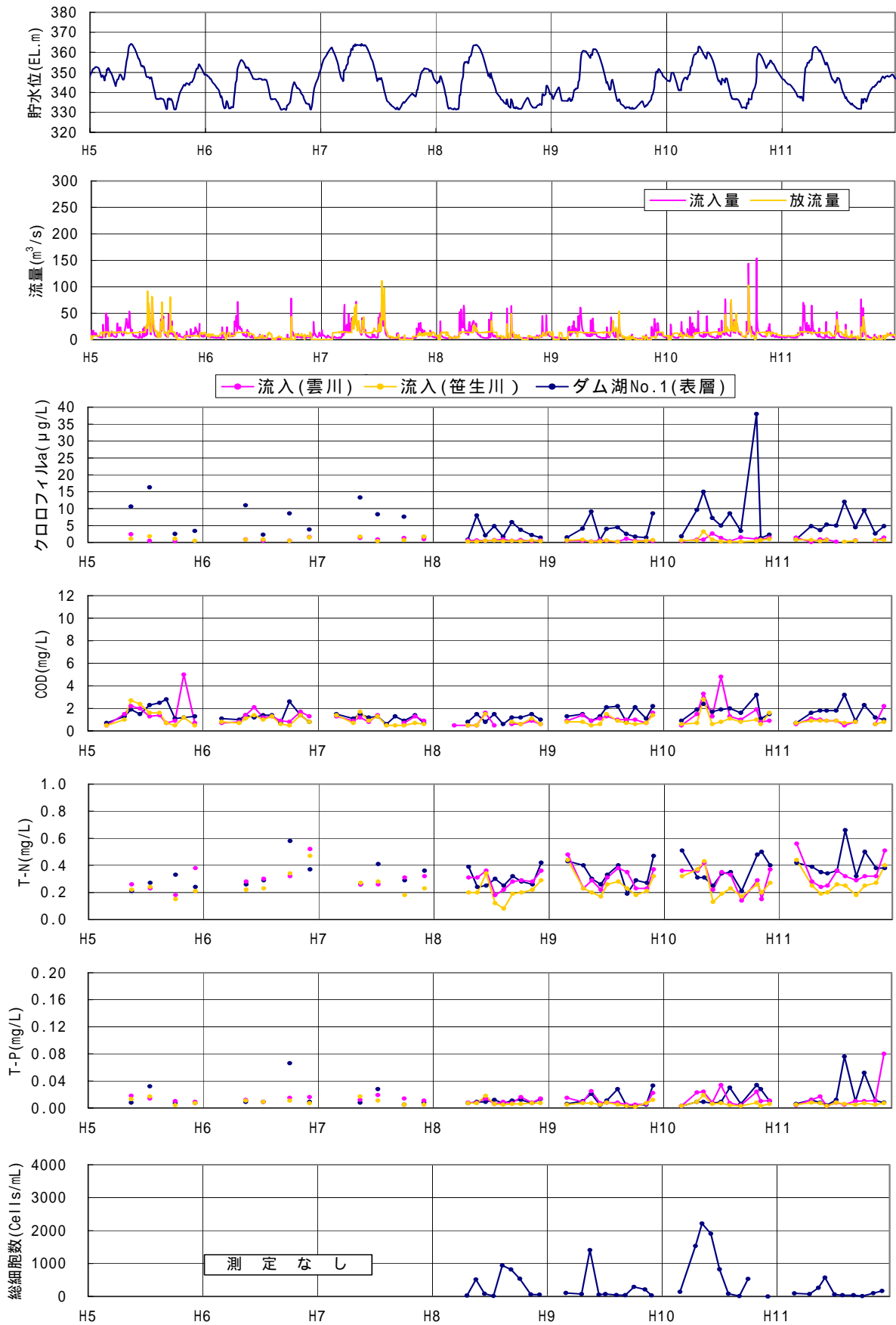
図 5.5-12(1) 富栄養化評価関連項目の経月変化



(出典：資料5-13)

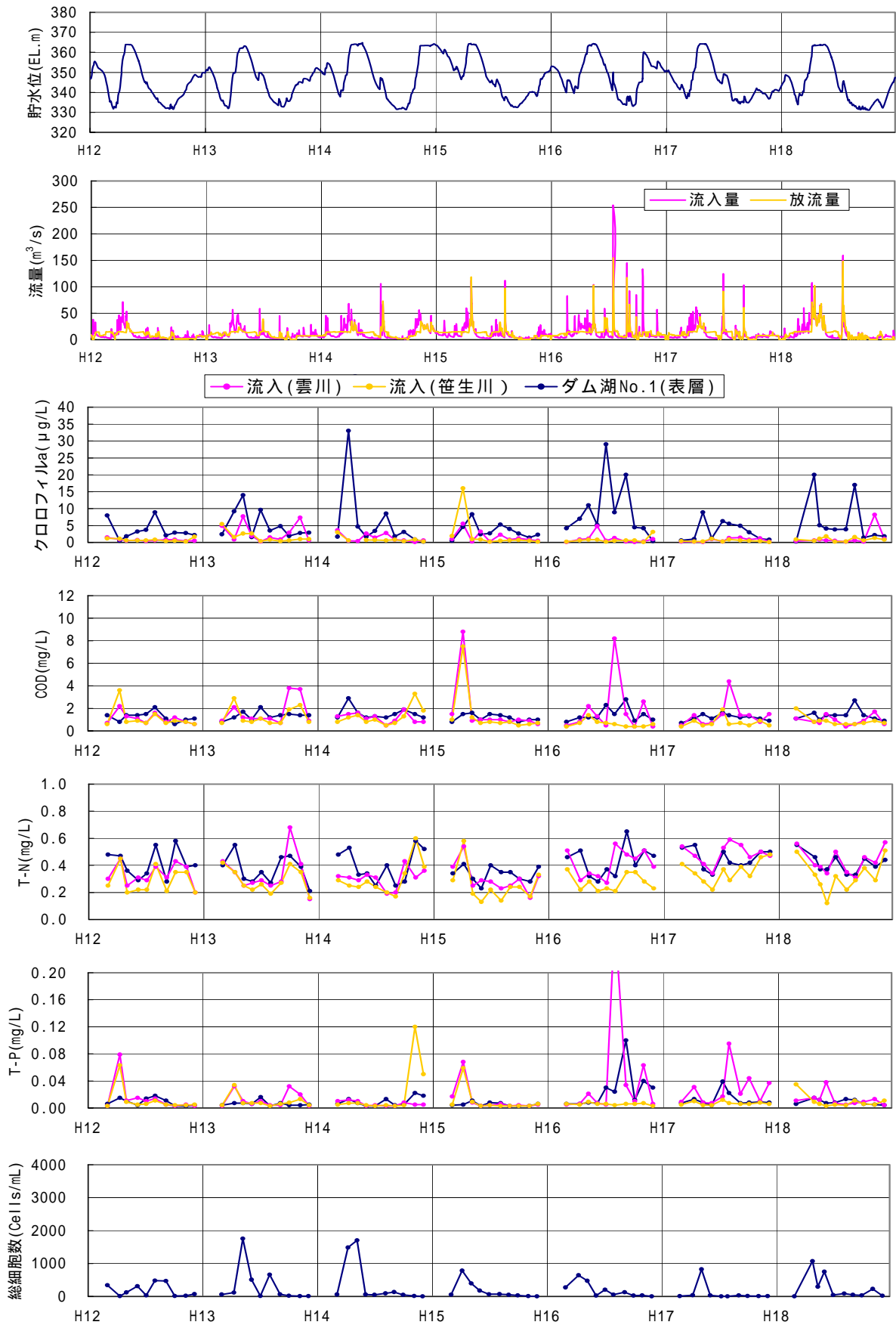
図 5.5-12(2) 富栄養化評価関連項目の経月変化





(出典：資料5-13)

図 5.5-12(3) 富栄養化評価関連項目の経月変化



(出典：資料5-13)

図 5.5-12(4) 富栄養化評価関連項目の経月変化

(2) 真名川ダム貯水池における植物プランクトンの増殖時期

一般的には、貯水池表層水温が 10～20 前後で珪藻類、25 前後で藍藻類の増殖が見られる。

図 5.5-13 に示したように、真名川ダムでは、4 月～6 月頃において、珪藻類が増殖する傾向が伺える。この要因として、真名川ダム貯水池表層水温が珪藻類の増殖しやすい 10～20 前後の時に、5.3.1. (2) に示したように融雪出水により 4 月～5 月の回転率が増加し、貯水池内に植物プランクトンの栄養塩が多く流入すること、また、6 月の回転率は低く貯水池は滞留傾向にあることから増殖傾向にあるものと考えられる。

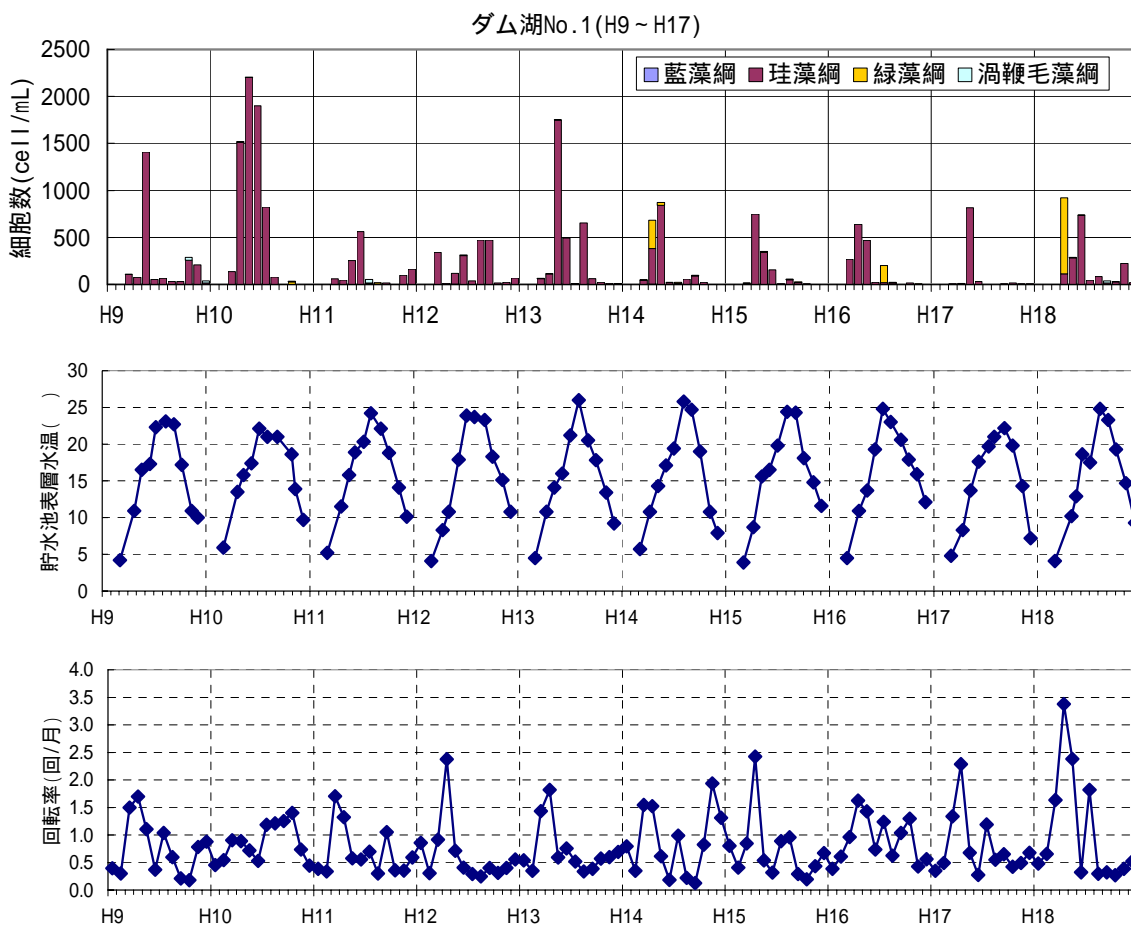


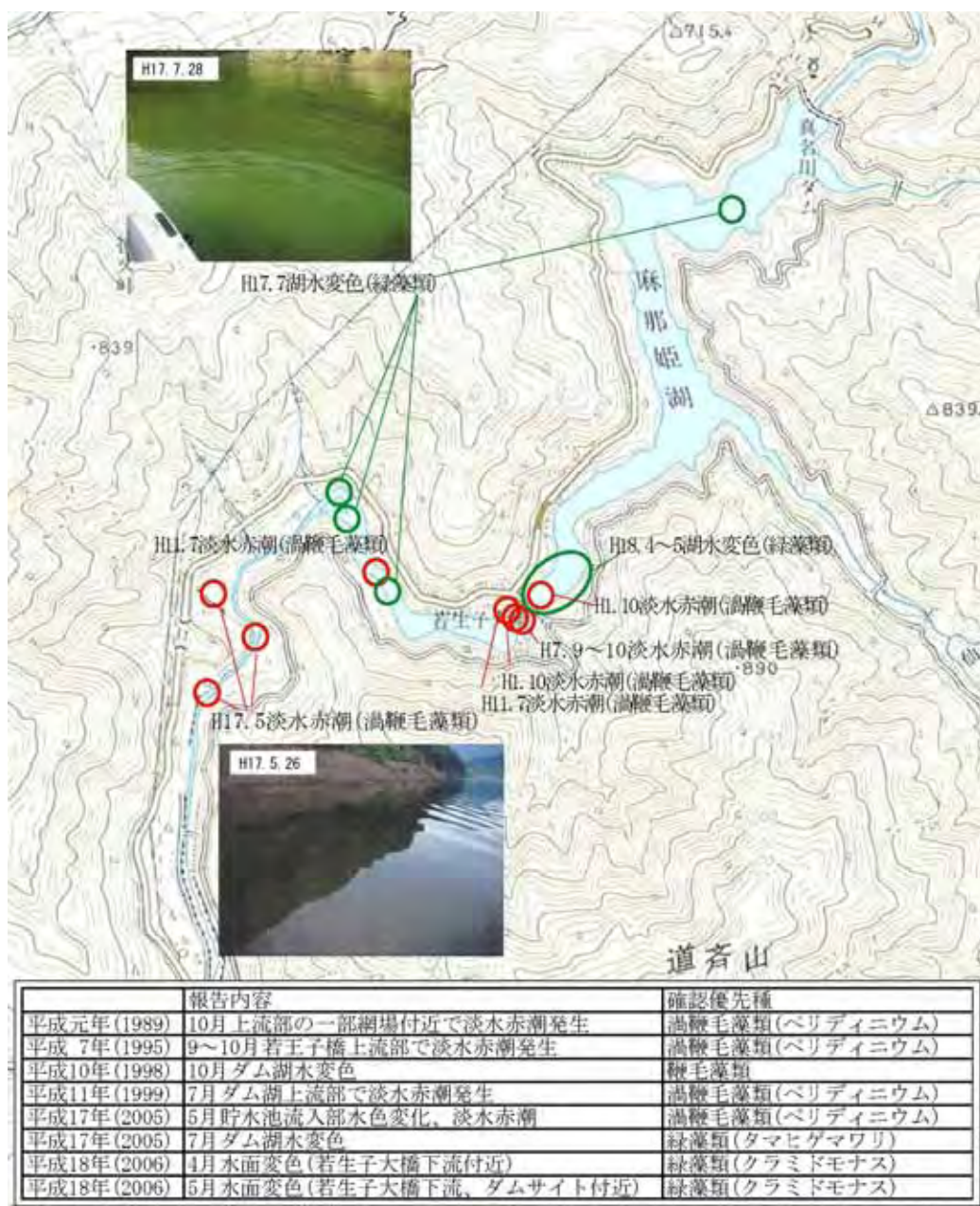
図 5.5-13 貯水池表層の水温及び月回転率と植物プランクトンの関係  
(ダム湖 No.1 表層；昭和 54 年～平成 18 年)

(3)水質障害の発生状況から見た評価

真名川ダムでは湖面水色の変化が報告されており、その状況を図 5.5-14 に示す。

貯水池上流部または流入部において、淡水赤潮(ペリディニウム)の発生が、また、貯水池上流部、及び、ダムサイト付近では緑藻類(タマヒゲマワリ)による水色変化が報告され、景観上は好ましくない状況もあるが、利水上・景観上の障害などは報告されていない。なお、直下での水道用水の利用は無い。

また、アオコの発生は認められておらず、植物プランクトンの優先種は珪藻類であることから、貯水池で大きな水質障害を引き起こすような富栄養化現象は発生していない状況にあるが、引き続き富栄養化の動向に対する注意が必要である。



(出典：資料 5-3,13,15)

図 5.5-14 真名川ダムにおける生物異常発生状況

(4) 各研究者による富栄養化判定

近 10 ヶ年を対象に、真名川ダム貯水池の富栄養化ポテンシャルを評価するため、Vollenweider モデルを適用した。その結果を図 5.5-15 に示す。

Vollenweider モデルによれば真名川ダムは「富栄養化現象発生の可能性が低い」と評価される。

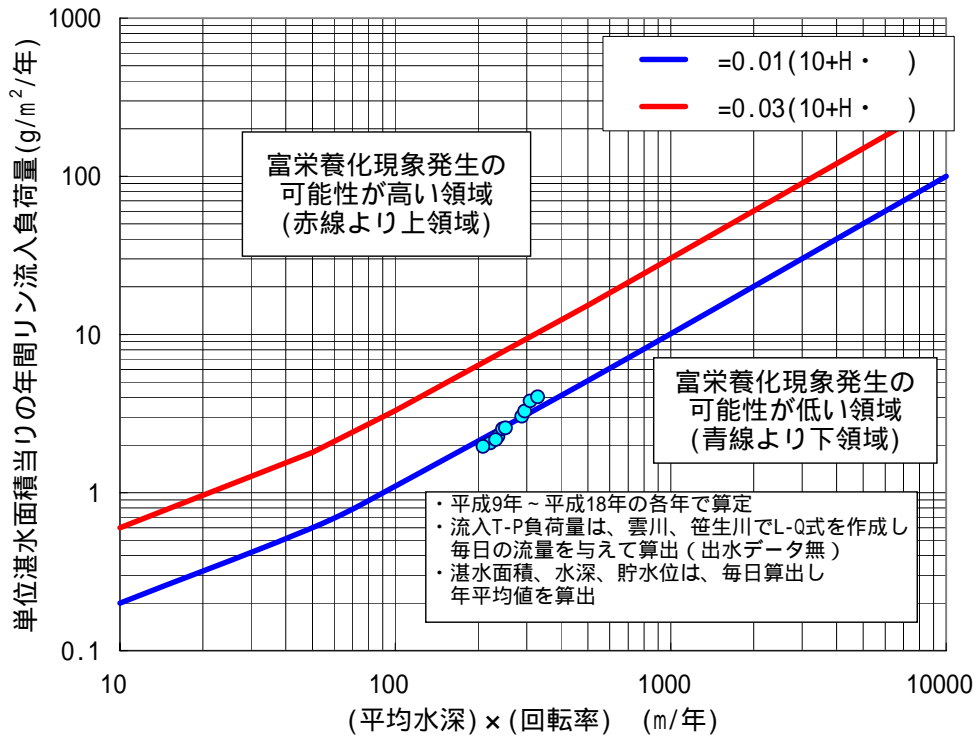


図 5.5-15 Vollenweider モデルによる真名川ダム富栄養化評価

(参考) :ポレンバイダー(Vollenweider)モデルの定義

自然湖沼やダム貯水池における富栄養化現象発生の可能性を概略的に予測するモデルである。

横軸に平均水深と年回転率の積を、縦軸に年間リン流入負荷量を取り、 $L=0.01(10+H)$ より下方に図示される範囲は富栄養化現象の可能性が極めて低く、 $L=0.03(10+H)$ より上方に図示される範囲は発生の可能性が高いとされている。

評価	L
富栄養の状態	$L > 0.03(10+H)$
中栄養の状態	$0.03(10+H) < L < 0.01(10+H)$
貧栄養の状態	$L < 0.01(10+H)$

$$L=P(V_p+H)$$

ここで、L: 単位面積当たりの総リン負荷 ( $g/m^2/年$ )、

P: 貯水池の年間平均総リン濃度 ( $mg/L$ )、

$V_p$ : リンの見かけの沈降速度 ( $m/年$ )、

H: 平均水深 ( $m$ )、 : 年回転率 ( $回/年$ )

#### (5)富栄養化現象に関する評価のまとめ

真名川ダムにおける富栄養化現象に関する評価を以下にまとめる。

- 流入水質は、T-P が 0.02mg/L 未満と植物プランクトンの増殖環境としては低い値で推移している。
- クロロフィル a については、年間平均値は 5 µg/L 前後で横這いであり、植物プランクトンの増殖に伴う内部生産の影響を受けた初夏～秋にかけて 20 µg/L とやや高くなる傾向となっている。
- 植物プランクトンについては、アオコの原因種となる藍藻はほとんど発生しておらず、珪藻類が 4～6 月に発生する。4～5 月の融雪出水による栄養塩の流入、6 月の貯水池の回転率の低下に伴うものと考えられる。
- 貯水池内でのアオコ、淡水赤潮の発生による下流への影響や障害および苦情等は今のところ報告されていない。
- Vollenweider モデルによれば、真名川ダムは「富栄養化現象発生の可能性が低い」と評価される。

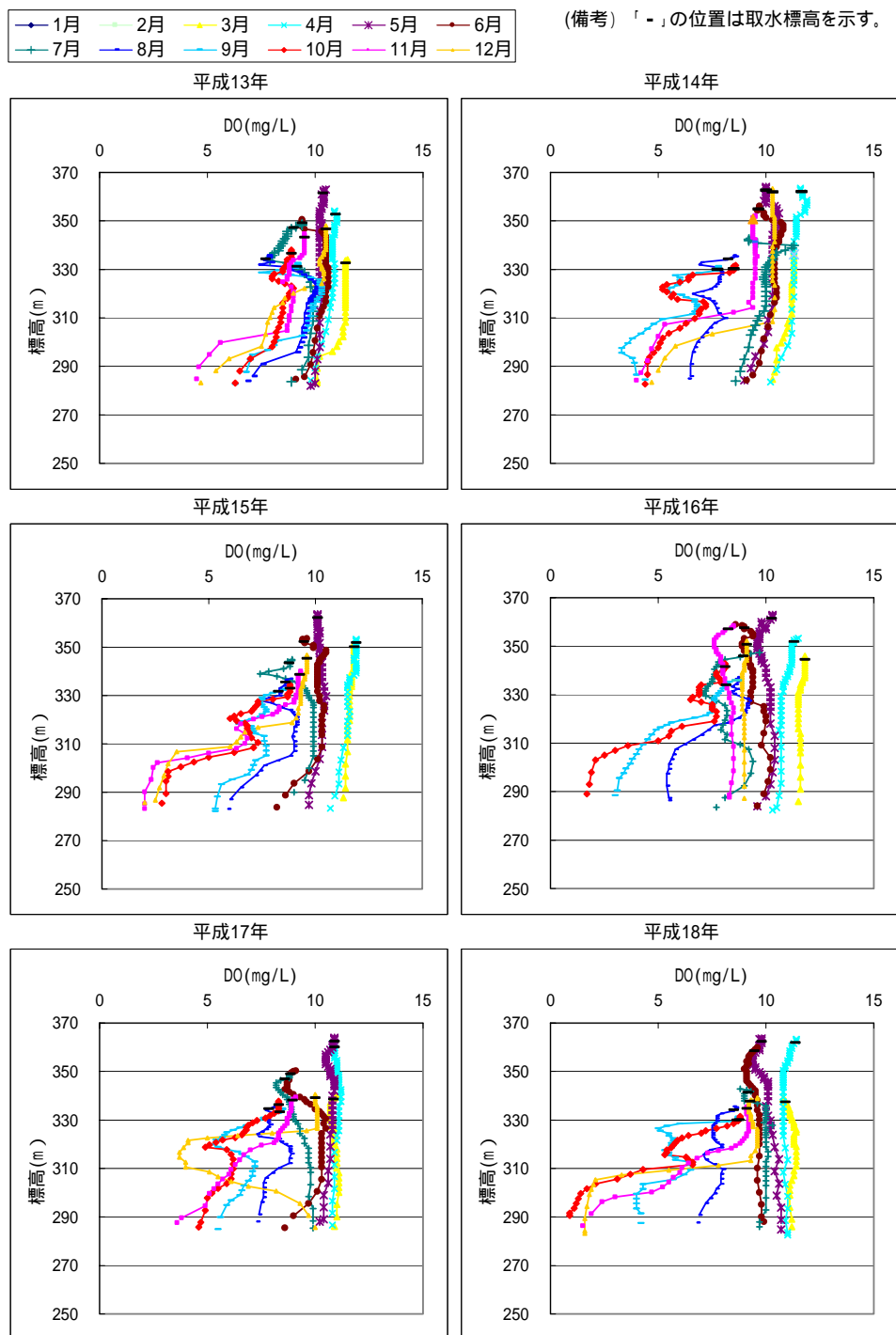
以上のことから、真名川ダム貯水池における富栄養化現象に関しては、緊急的な課題ではないと考えられるが、赤潮発生はしばしば確認されていることから、継続した監視体制が必要であると考えられる。

### 5.5.6. DO に関する評価

#### (1) 貯水池 DO の鉛直分布の経月変化

至近 5 ヶ年における DO 濃度鉛直分布を図 5.5-16 に示す。

真名川ダム貯水池のダム湖 NO.1 地点では、例年 9 月頃から底層の DO が低下し始め、10 月頃底層で貧酸素水塊が形成されることがある。これは、底部水塊の停滞が原因と考えられる



(出典：資料 5-13)

図 5.5-16 DO 鉛直分布図(ダム湖 NO.1)

(2)貯水池下層の嫌気化に伴う底泥溶出からみた評価

一般に、貯水池底層の DO が低下し嫌気化が進むと、無機態であるアンモニア態窒素(NH<sub>4</sub>-N)、リン酸態リン(P<sub>04</sub>-P)等が底泥より溶出し濃度上昇が見られることがある。

貯水池表層及び底層の DO と各態の窒素、リンの経月変化を図 5.5-17 に示す。図によると、貯水池底層の DO は 9 月頃から低下し最低で 2mg/L 前後となることがある。

各態の窒素の経月変化によると、特にアンモニア態窒素(NH<sub>4</sub>-N)について見ると、DO の低下に伴う顕著な上昇は見られない。また、リンの経月変化においても、平成 16 年(2004 年)の 7 月出水後の 8 月~9 月調査時を除くと、リン酸態リン(P<sub>04</sub>-P)の顕著な上昇は見られない。

従って、底質の溶出影響を及ぼすような嫌気化状態には至っていないと推察される。

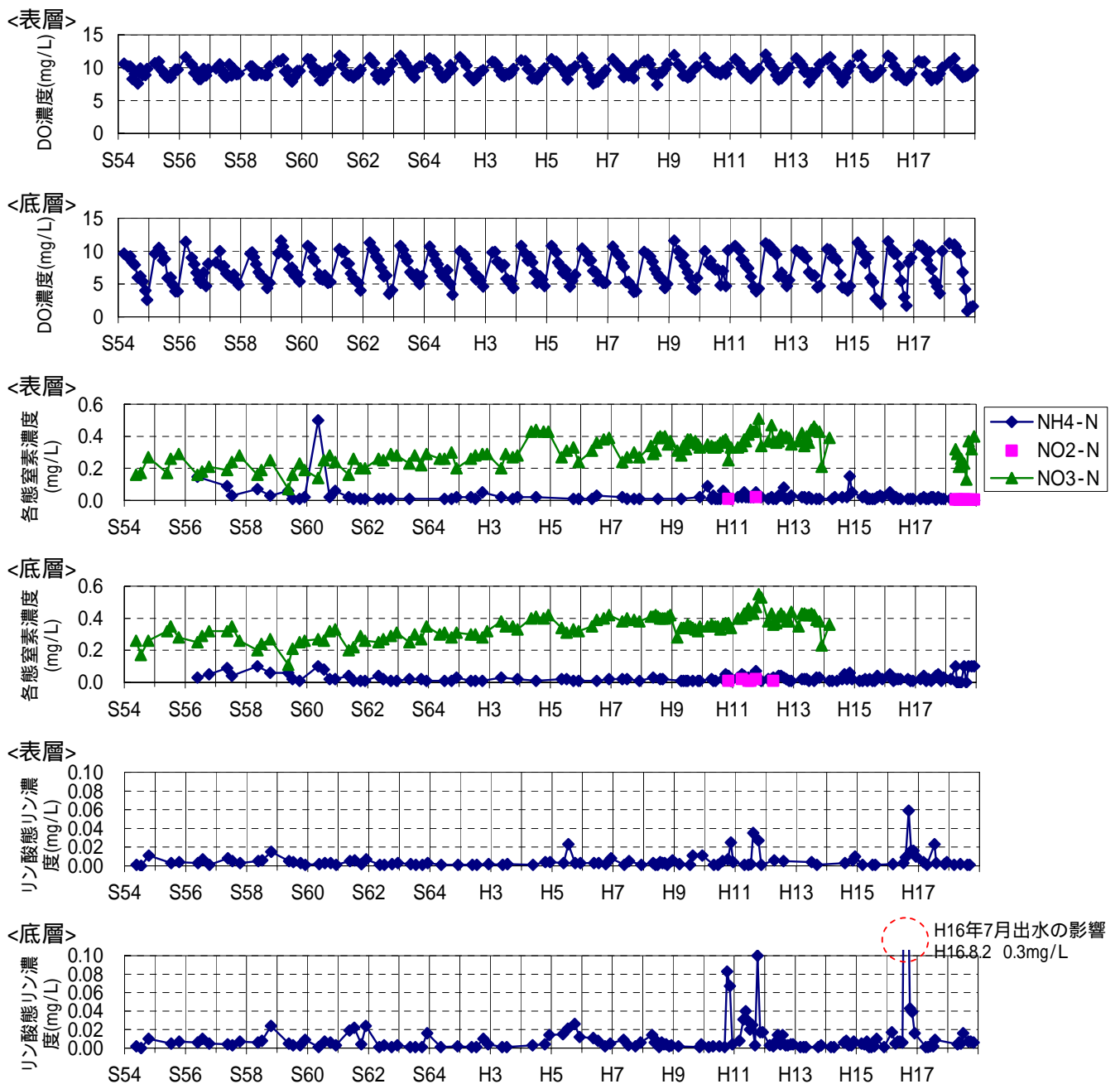


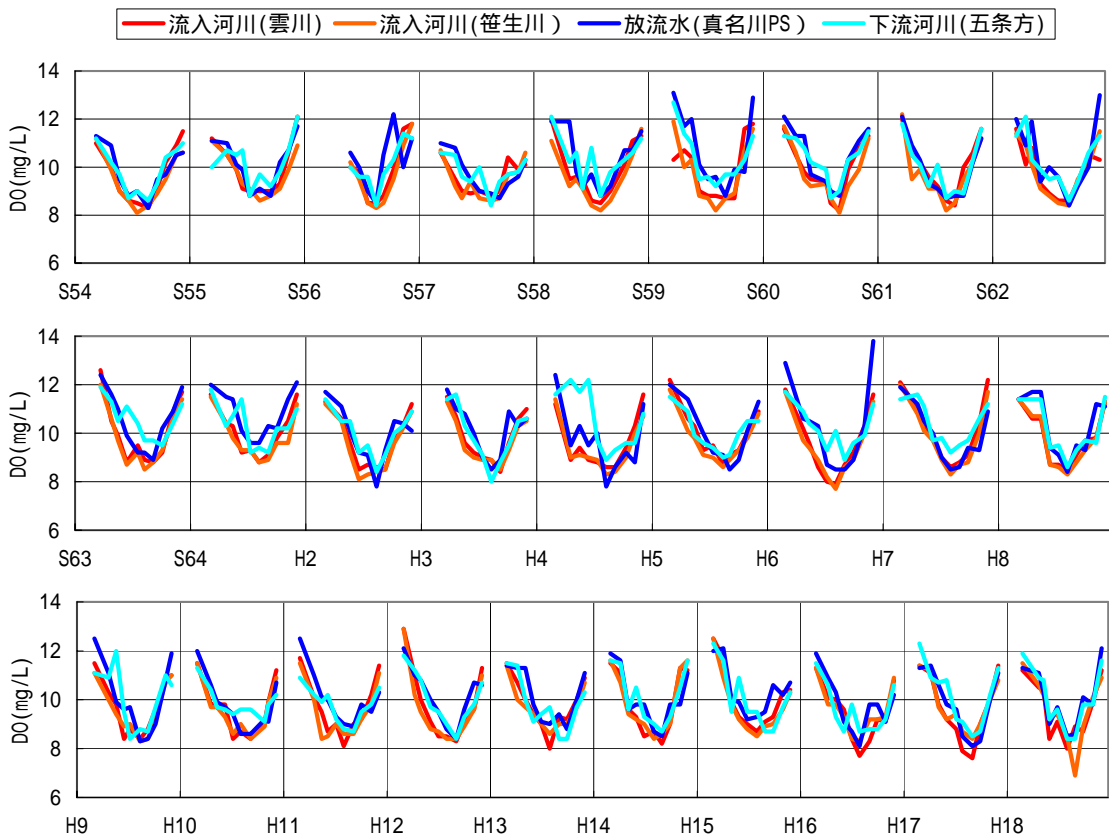
図 5.5-17 貯水池表層及び下層の DO と各態窒素、リンの関係(ダム湖 No.1 ; 昭和 54 年 ~ 平成 18 年)



(3)放流水の DO に関する評価

至近 5 ヶ年における DO 濃度鉛直分布を図 5.5-16 に、下流河川(五条方)における DO 濃度推移を図 5.5-18 示す。

真名川ダムは、平水時は表層取水ゲート(EL.331.0m~EL.365.0m)から、出水時は常用洪水吐きゲート(EL.324.866m)及び小放流設備(EL.320.0m)から放流を行うが、貯水池内の貧酸素水塊は概ね EL.310m 以深で形成されており、放流 DO の調査結果とも合わせてみれば、貧酸素水は放流されていないものと考えられる。また、仮に貧酸素水を放流した場合でも、ダム直下では再曝気効果による DO の回復が得られることから、DO に対する影響はないものと考えられる。



(出典 : 資料 5-13)

図 5.5-18 放流水(真名川 PS)及び下流河川(五条方)における DO 濃度推移

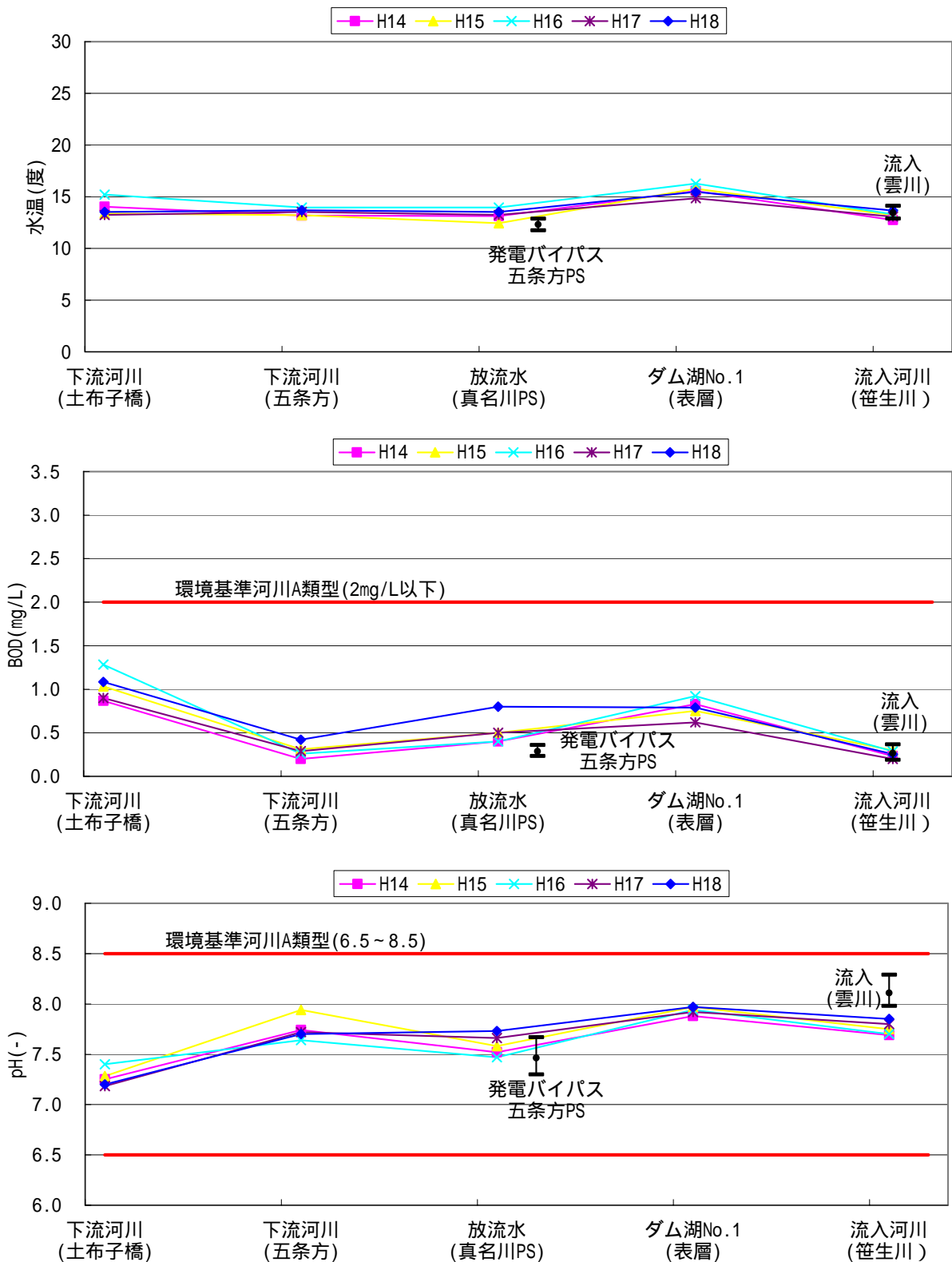
### 5.5.7. 水質縦断変化による貯水池の影響評価

近5ヶ年(平成14年～平成18年(2001年～2006年))を対象に、真名川ダムの水質縦断変化として流入河川(雲川及び笹生川)から下流河川(五条方)まで流下するに伴って水質がどのように変化しているのかを図5.5-19に示す。また、これを基にダム貯水池の影響について評価した結果を表5.5-15に示す。

年平均値、または年間75%値による評価では、ダム貯水池による下流への影響は認められないが、5.5.3. に示した冷水放流や、5.5.4. に示した濁水長期化現象が確認されており、下流漁協などからも苦情が上げられていることから、ダム貯水池による下流への影響は明らかである。

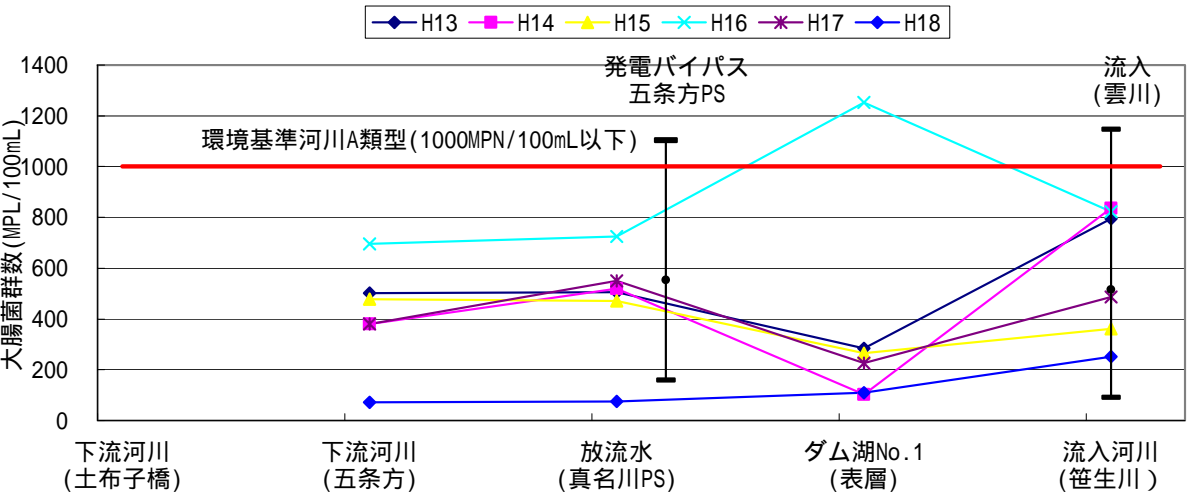
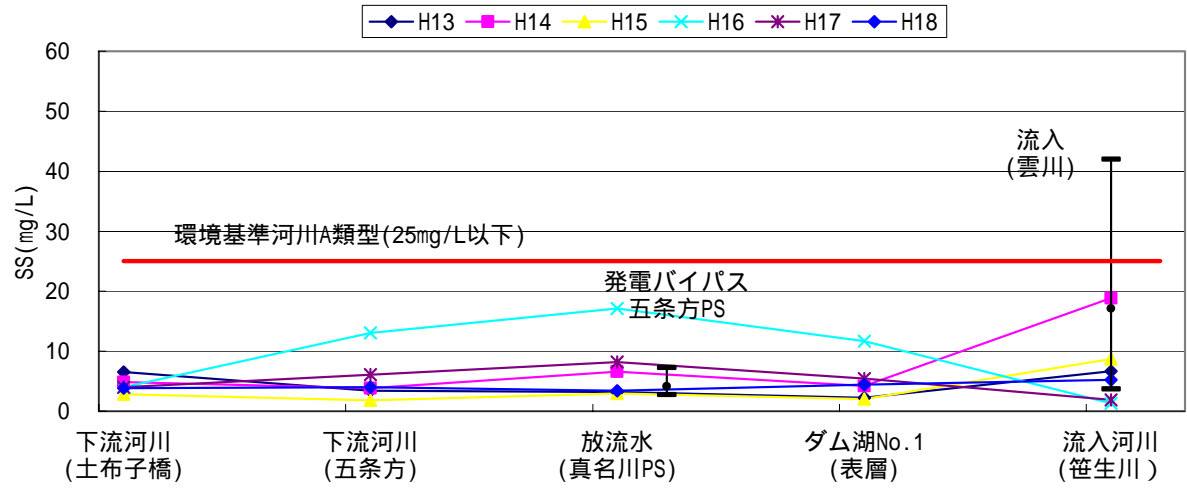
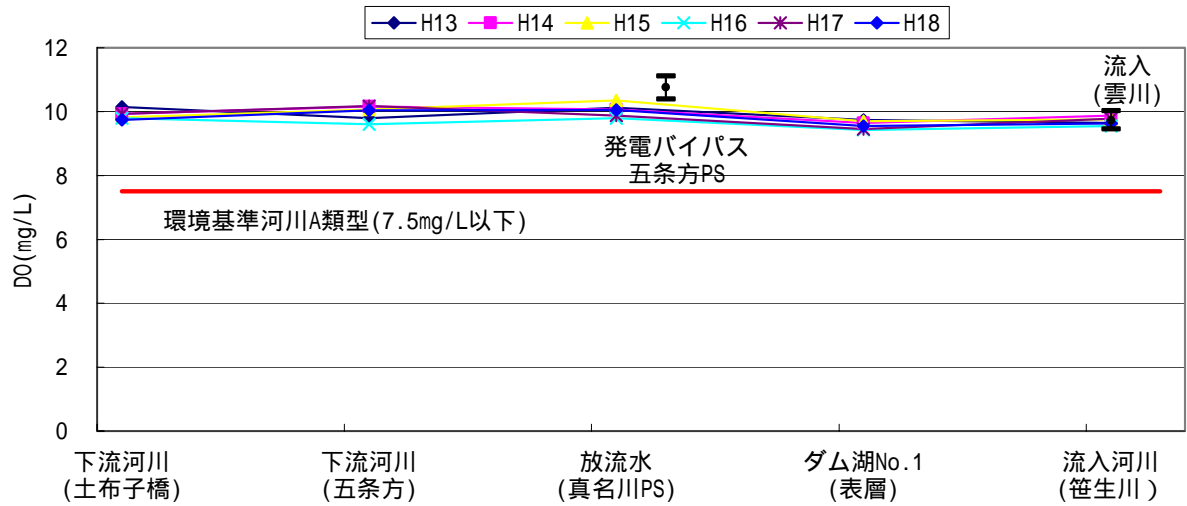
表 5.5-15 水質縦断変化による貯水池の影響評価

項目	貯水池の影響評価
水温	流入河川に対しダム湖表層でやや上昇するものの、放流水(真名川PS)、下流河川(五条方)では流入と同程度まで低減しており、年間平均値レベルではダム貯水池による下流河川への影響は認められない。 ただし、5.5.3. にも示したように、定期調査結果による経月的な変化を見ると、貯水池表層部の水温躍層が強固となる7月～9月にかけて、冷水放流となっていることから、ダム貯水池への下流への影響には十分注意が必要である。
BOD	流入に対しダム湖表層はやや高い値を示すが、平均値では環境基準(A 類型)相当以下である。また、下流河川(五条方)では、流入河川と同程度まで減少しており、ダム貯水池による下流河川への影響は小さい。
pH	流入河川に対しダム湖表層でわずかに上昇するが、放流水(真名川PS)、及び、下流河川(五条方)は流入河川と同程度である。また、いずれの地点も環境基準(A 類型)相当の範囲内での変化であることから、ダム貯水池による下流河川への影響は認められない。
DO	流入河川からダム湖表層、放流水(真名川PS)、下流河川(五条方)にかけて大きな変化はなく、いずれも環境基準(A 類型)相当以上であり、ダム貯水池による下流河川への影響は認められない。
SS	定期調査結果による年間平均値では平成14年(2002年)、平成15年(2003年)、平成18年(2006年)は、流入河川に対しダム湖表層、放流水(真名川PS)、及び下流河川(五条方)ともに低い値で推移しており、流入河川水質と下流河川水質に差は見られない。 また、平成16年(2004年)、平成17年(2005年)は、流入に対しダム湖表層、及び、放流水(真名川PS)で高めの値を示しているが、下流河川(五条方)、又は、下流河川(土布子橋)では低減しており、年間平均レベルでは流入河川と下流河川には差は見られない。 しかしながら、5.5.4. (3)にも示したように、貯水池表層の連続観測結果によると、放流水の濁水長期化が明らかとなっており、下流漁協などからの濁水長期化に対する苦情もあることなどにより、ダム貯水池による下流への濁水長期化の対策を行っている。
大腸菌群数	年により変化傾向がやや異なるものの、平成16年(2004年)を除くと、流入に対しダム湖表層では減少する傾向にあり、放流水(真名川PS)、及び下流河川(五条方)では再び増加する傾向にあるが、流入河川より低いレベルであり、ダム貯水池による下流河川への影響は認められない。
COD	流入水質は年により若干異なるが、その変化幅は1mg/L～2mg/Lと小さい。ダム湖表層では流入水質とくらべ、若干上昇する傾向が見られるが、放流水(真名川PS)、下流河川(五条方)では低減しており、ダム貯水池による下流河川への影響は小さい。
T-N	流入河川からダム湖表層にかけて、0.1mg/L 程度の増加が見られるが大きな変化ではなく、ダム貯水池による下流河川への影響は小さい。
T-P	平成16年(2004年)、平成17年(2005年)を除き、流入河川からダム湖表層にかけて大きな変化はなく、ダム貯水池による下流河川への影響は認められない。
クロロフィルa	流入河川に対しダム湖表層で上昇するものの、放流水(真名川PS)から下流河川(五条方)にかけて、流入河川と同程度まで低減しており、ダム貯水池による下流河川への影響は小さい。



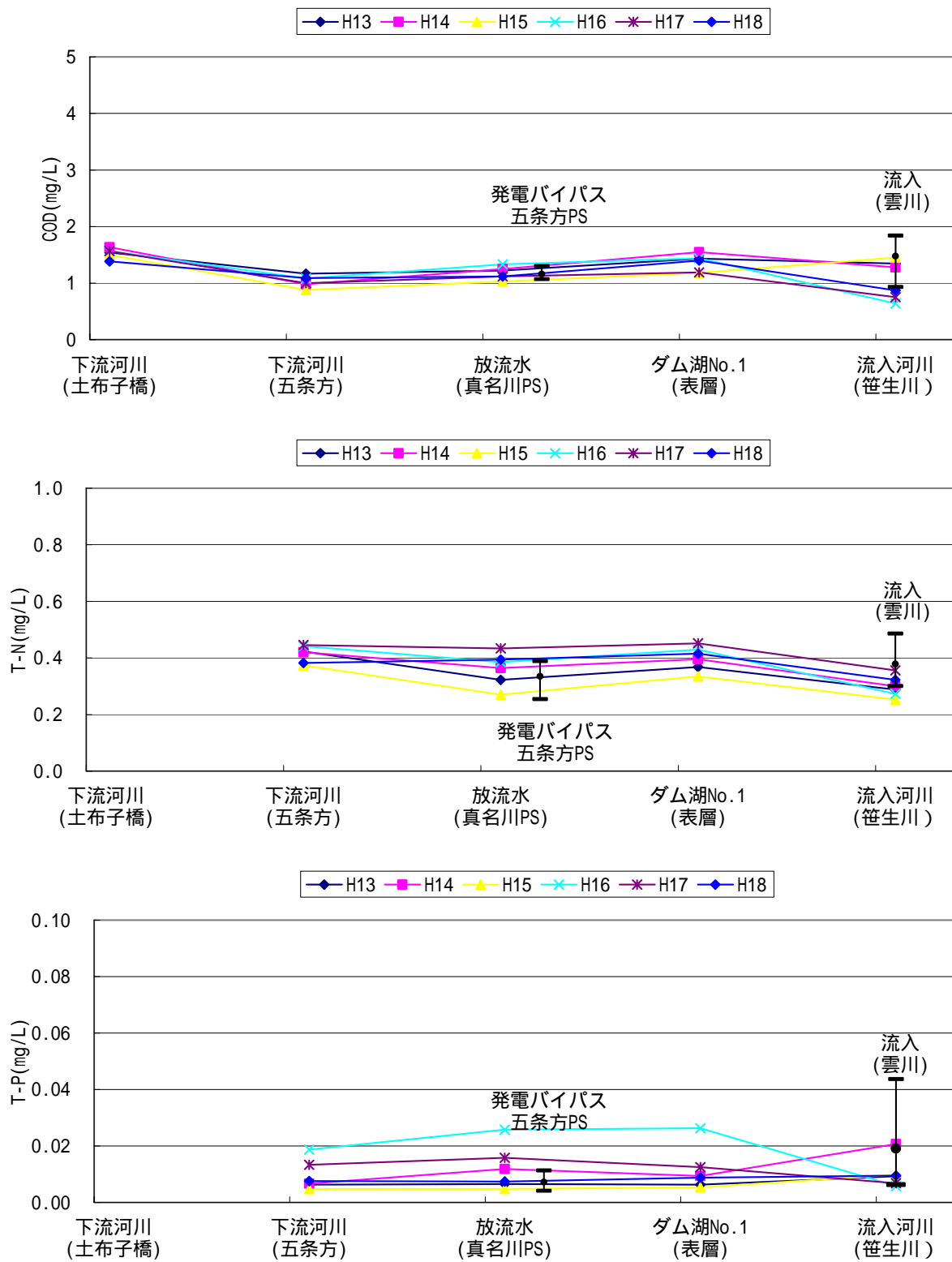
(出典 : 資料 5-13)

図 5.5-19(1) 水質縦断变化



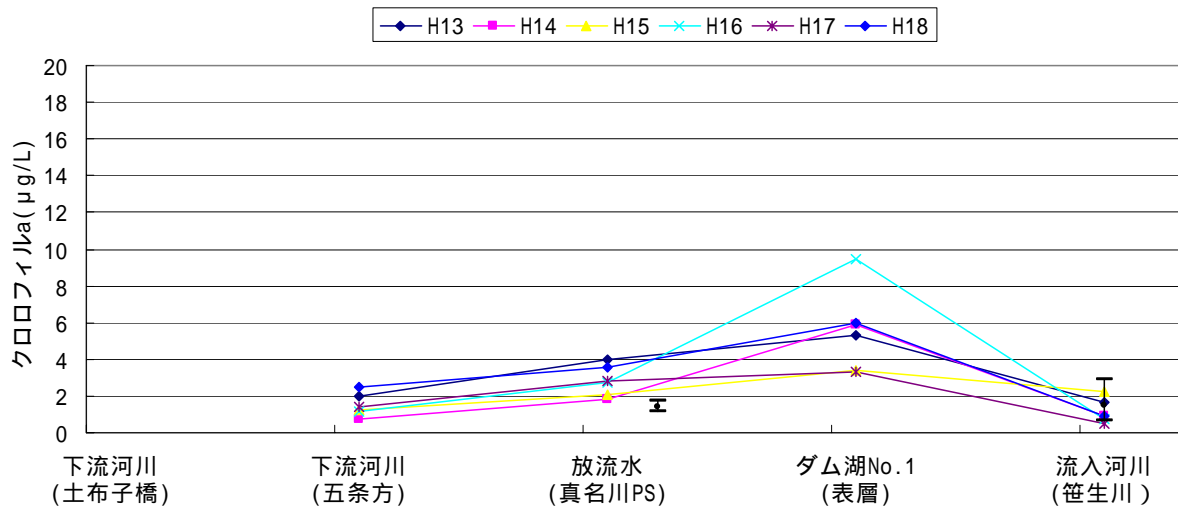
(出典：資料 5-13)

図 5.5-19(2) 水質縦断变化



(出典 : 資料 5-13)

図 5.5-19(3) 水質縦断変化



(出典：資料 5-13)

図 5.5-19(4) 水質縦断変化

## 5.6. 水質保全施設の評価

ここでは、既存の水質保全施設の導入背景、施設計画、設置状況を整理するとともに、改善目標とした水質、期待された効果を満足しているかを評価する。

### 5.6.1. 水質保全施設の導入背景と導入計画

真名川ダムでは、5.5.4. (4)に示したように、下流への濁水長期化影響により下流河川の九頭竜川中流部漁協、大野市漁協などからの苦情が平成 11 年より寄せられていたこともあり、ダム貯水池の濁水長期化に伴う下流への影響軽減を目的として、平成 13 年度(2001 年度)に表 5.6-1 に示すような濁水防止フェンスによる対策が計画され、平成 15 年 3 月からは供用を開始している。

しかし、「平成 16 年 7 月福井豪雨」や相次ぐ台風の来襲を起因とした洪水による土砂流出、流域の荒廃なども相まって真名川ダムの濁水長期化が以前にも増して顕著となってきたことから、平成 17 年度に「真名川ダム濁水対策検討会」を設立し、種々対策案が提案された。その後、平成 18 年 5 月には洪水時のフェンスの捲れ上りを考慮したフェンス改良を行い、現在に至っている。

表 5.6-1 真名川ダム濁水対策計画(平成 13 年度(2001 年度))の内容

項目	内容	備考
計画の目的	真名川ダム下流への濁水長期化影響の軽減を目的に、真名川発電所取水濁度の低減を図る。	
計画の目標	対策効果出現箇所: 真名川 PS 効果期待時期 : 6 月 ~ 11 月 対象出水規模 : 中 ~ 小の出水 改善対象濁度 : 現状濁度 30 ~ 10 度 保全目標 : 濁度 10 度以下にする	
対策施設計画	濁水防止フェンス(H=15m)の貯水池内への設置(1箇所)	洪水時のフェンスの捲れ上りを考慮し、平成 18 年 5 月にフェンスを H=10m に改良。
設置年月	平成 15 年(2003 年)3 月に設置完了	

(出典 : 資料 5-19)

### 5.6.2. 水質保全施設の設置状況の整理

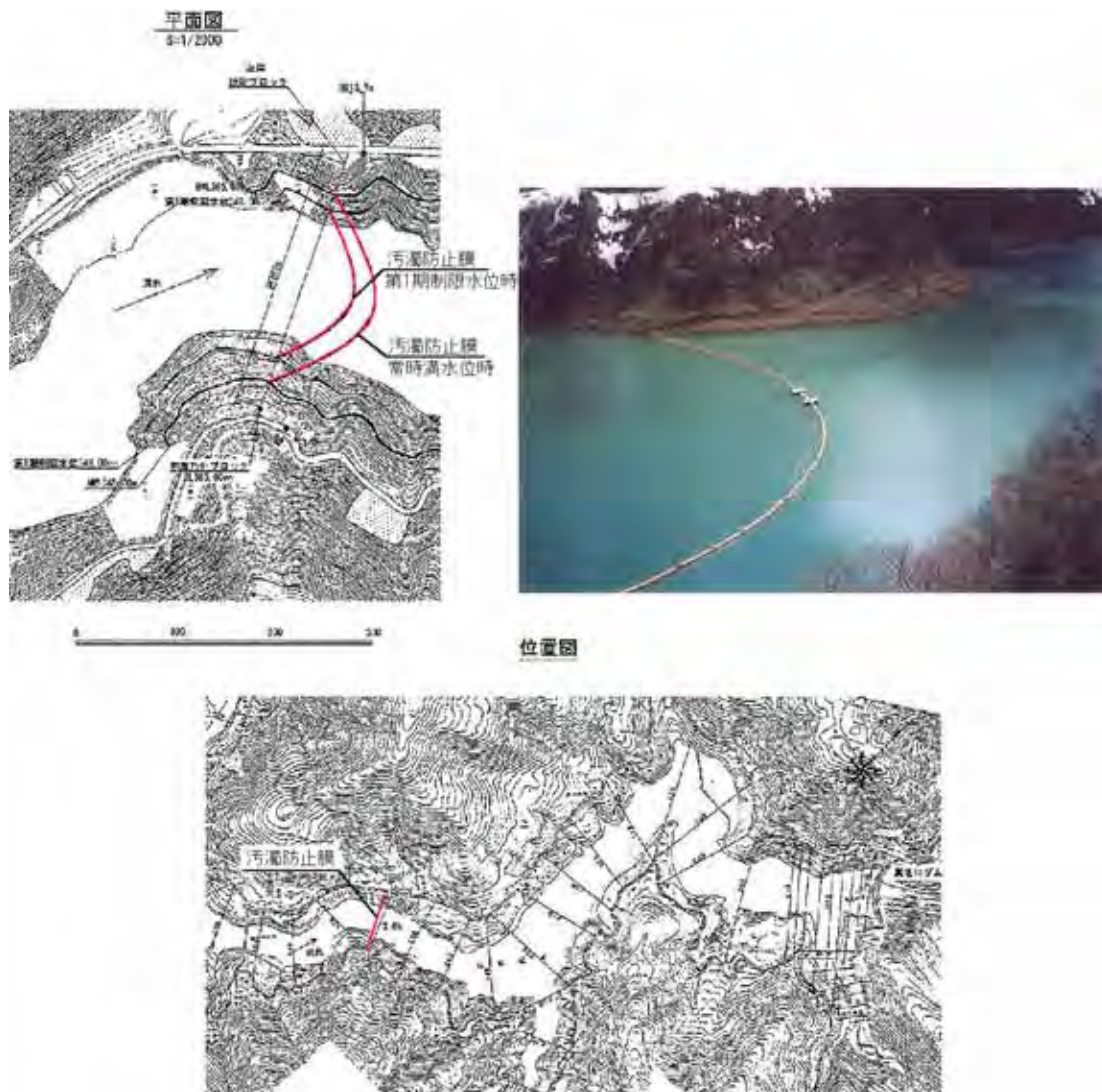
真名川ダムでは濁水の長期化軽減を目的として、濁水防止フェンスを平成 14 年度(2002 年度)に設置している。

設置したフェンスの仕様を表 5.6-2 に、設置状況を図 5.6-1 に示す。

表 5.6-2 濁水防止フェンス施設諸元

	施設仕様	備考
形式	フロート式	
膜長さ	190m	通船ゲート長除く
膜深さ(水中部)	10m	洪水時のフェンスの捲れ上がりを考慮し、平成 18 年 5 月にフェンスを H=15m から H=10m に改良。
膜素材	ポリエステル	

(出典：資料 5-20)



(出典：資料 5-20)

図 5.6-1 濁水防止フェンス設置状況



### 5.6.3. 水質保全施設の効果把握と評価

#### (1)水質予測シミュレーションによる濁水防止フェンスの効果

計画検討時における水質予測シミュレーションによる濁水防止フェンスの効果に関する検討結果を以下に整理する。

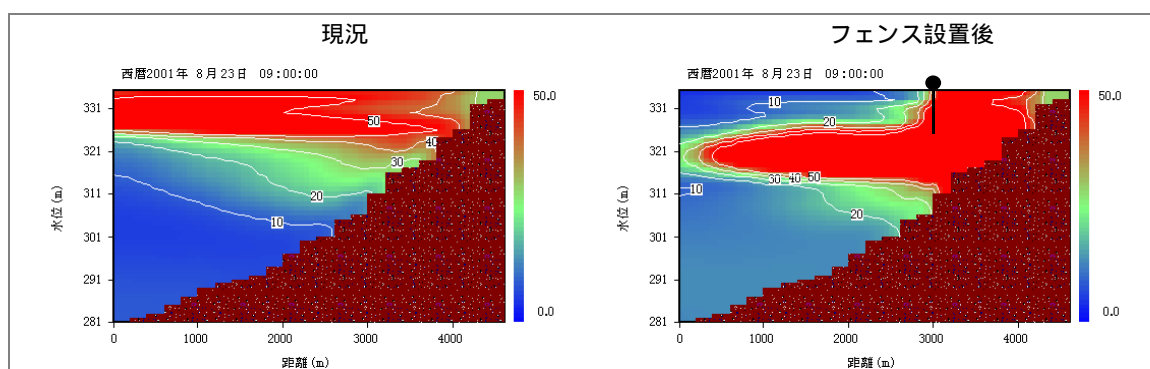
検討は平成9年(1997年)～平成13年(2001年)の5ヵ年について実施しており、それぞれの出水に対する効果を整理し表5.6-3に示す。また、効果の予測結果を図5.6-3及び、図5.6-2に示す。

フェンスの設置により放流濁度の軽減が図られる結果が得られている。

表 5.6-3 濁水防止フェンスの効果のシミュレーション

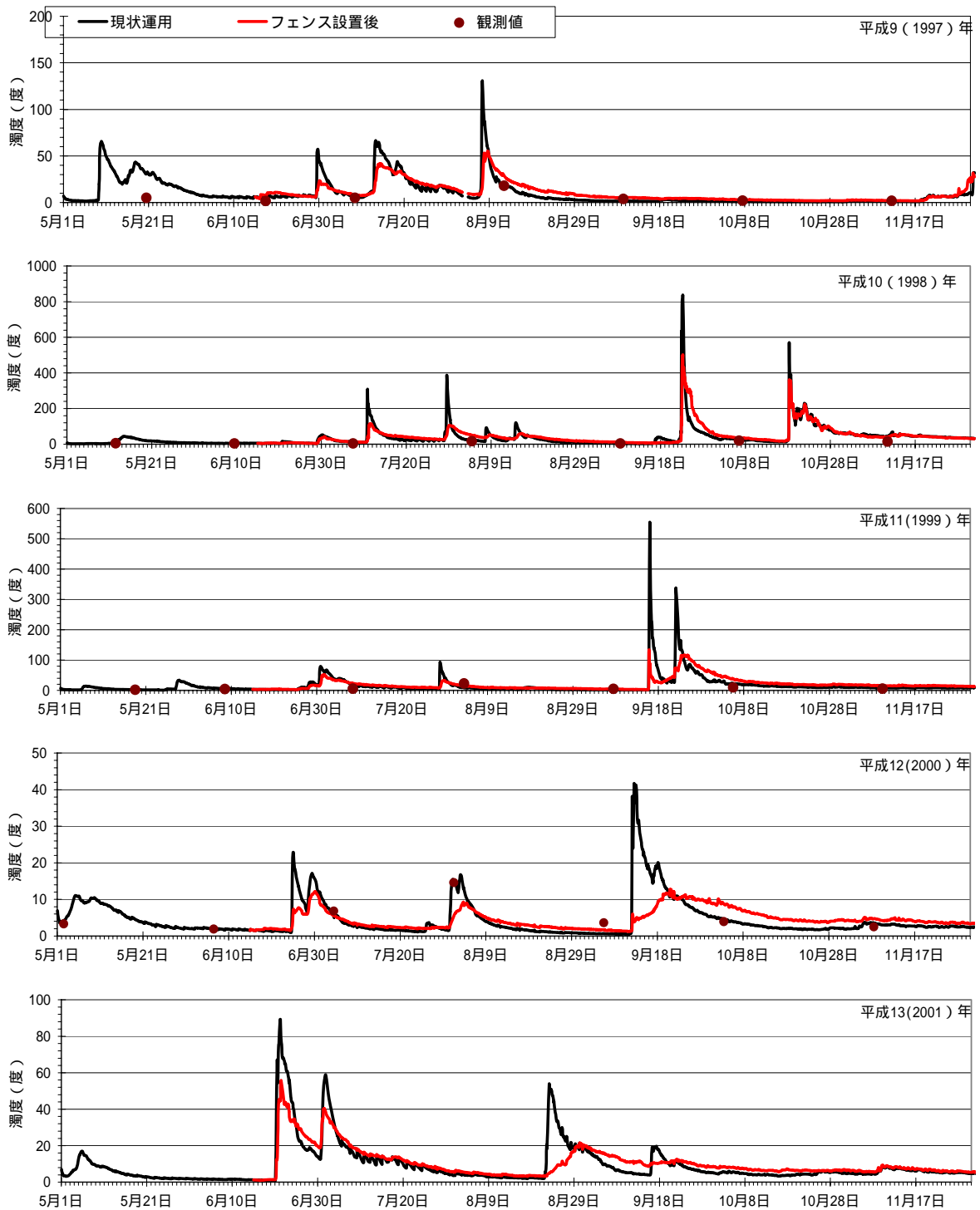
対象期間 (5月～11月)	濁水軽減効果	備考
平成9年(1997年)	出水時の放流濁度が半分程度まで低下。	取水直後の放流濁度を10以下には維持出来ない。
平成10年(1998年)	出水時の放流濁度が半分程度まで減少。	望ましい濁度レベルまでは減少せず。
平成11年(1999年)		
平成12年(2000年)	小規模の出水に対し放流濁度のピークを半分以下まで減少させ、その後放流濁度を低く維持。	
平成13年(2001年)		

(出典：資料5-19)



(出典：資料5-19)

図 5.6-2 濁水防止フェンスの効果予測結果



(出典：資料 5-19)

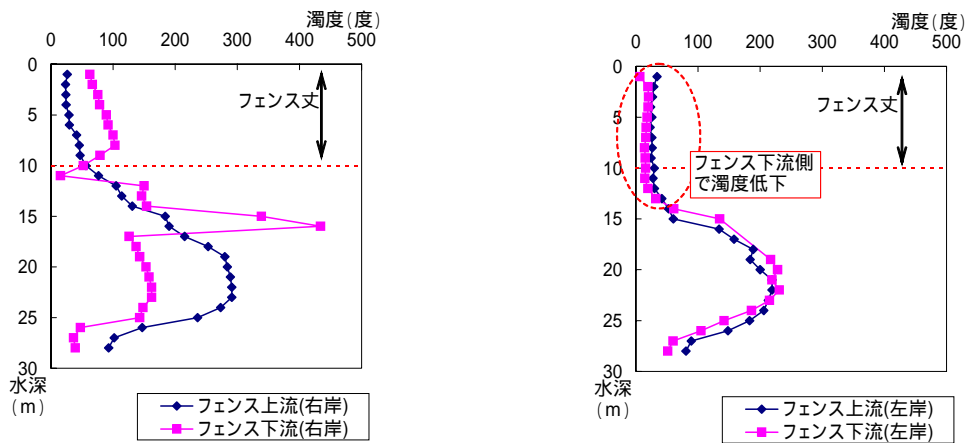
図 5.6-3 放流濁度予測結果

(2) 現地観測結果による濁水防止フェンスの効果

濁水防止フェンスの効果把握のため、平成 18 年 7 月(7 月 13 日～19 日の間で総降水量 417mm)の出水後にフェンス上下流において濁度鉛直分布観測を行った。観測結果及び出水期間中の写真を図 5.6-4 に示す。

図 5.6-4 によれば、水衝部にあたる左岸側では、フェンスの上流側に対して下流側の濁度が若干低下しているが、水裏部にあたる右岸側では、フェンスの上流側に対して、下流側の濁度が増加する結果となっており、水裏部に湧昇流が発生し下層の濁度が浮上したものと推察される。また、写真では、出水初期の平成 18 年 7 月 19 日には目視でも濁水防止フェンスの上流側に対して下流側で濁りが軽減されていることを確認できるが、出水直後の平成 18 年 7 月 20 日は、上下流ともに濁りの差は確認できない。

以上から、固定式フェンスでは十分な濁水防止が困難であると判断され、可動式フェンスの設置や放流設備の改良・運用などとの組み合わせにより、さらなる効果的な濁水防止対策について「濁水対策検討会」の検討結果が出された。



(調査日：平成 18 年 7 月 20 日)



(出典：資料 5-17)

図 5.6-4 出水時の濁水防止フェンス効果調査結果

#### 5.6.4. 「真名川ダム濁水対策検討会」による検討事項

「平成 16 年 7 月福井豪雨」や相次ぐ台風の来襲を起因とした洪水による土砂流出、流域の荒廃なども相まって真名川ダムの濁水長期化が以前にも増して顕著となってきたことから、平成 17 年度 10 月に「真名川ダム濁水対策検討会」を設立した。

この検討会の中で表 5.6-4 に示す濁水軽減対策案が提案されている。

このうちフェンス丈の改良については平成 18 年 5 月に、底質除去対策については平成 18 年度に、図 5.6-5 の箇所において実施済みであり、この他の対策の早期着手と、対策効果を把握するためのモニタリングを実施していく必要がある。

表 5.6-4 濁水軽減対策案

対策域	対策案		内 容	備 考
貯水池内	汚濁防止 フェンスの 改良	フェンス 改良	洪水中のフェンスの捲れを考慮し、濁水軽減効果を確実に発現できるように、フェンス丈を 10m に改良する。	平成 18 年 5 月に実施済み
		可動式 フェンス	フェンスを可動式とすることで、より効果的な濁水軽減を図る。	平成 19 年設計、平成 20 年設置予定
	貯水池運用の 工夫	選択取水	洪水中に現在の表層取水から高濁水層取水に切り替え、積極的に濁水の排出を行う。	
		コンジット 活用	洪水中に濁水塊がダム近くまで流下した時点よりコンジット放流を始める。	
	底質除去		出水時に貯水池流入末端に堆積した細粒土が攪拌され流出してしまうため、貯水池上流 4～6km の堆積土を除去する	平成 18 年より実施
貯水池 上流域	流域濁水発生源対策		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 森林整備(土砂崩壊防止、土砂流出防止等の森林機能の改善)</li> <li>・ 治山対策(崩壊の防止、山腹工等による植生の導入)</li> <li>・ 地すべり防止対策(地表水排除工等による濁質の流出防止)</li> <li>・ 流域の乱開発の防止(各種工事に伴う掘削による裸地の発生対策)</li> </ul>	

(出典：資料 5-18)

土砂の撤去は、平成 18 年度は真名川ダム 5.2km 付近の流入末端に堆積した、粘土・シルト質の底質からなる裸地について 10,900m<sup>3</sup> を対象として実施した。



土砂撤去箇所(5.2km 付近(A エリア)土砂堆積状況)

(出典：資料 5-18、5-21)

図 5.6-5 濁水軽減対策実施位置(土砂撤去)

## 5.7. まとめ

### (1)水質評価

水質の評価を取りまとめ、表 5.7-1 に一覧で示す。

表 5.7-1 水質評価一覧表

項目	検討結果等	評価	改善の必要性
年間値からの評価	<p>流入水質の昭和 54 年から平成 18 年までの平均は、水温:13.7、pH:8.0、BOD75%値:0.8mg/L、SS:8.6 mg/L、DO:9.7mg/L、大腸菌群数:373MPN/100mL、T-N:0.31mg/L、T-P:0.012mg/L、クロロフィル a:1.1 μg/L となっている(p5-24 参照)。</p> <p>ダムサイト表層の昭和 54 年から平成 18 年までの平均は、水温:15.7、pH:8.0、BOD75%値:1.1mg/L、SS:4.1mg/L、DO:9.6mg/L、大腸菌群数:124MPN/100mL、T-N:0.32mg/L、T-P:0.012mg/L、クロロフィル a:5.3 μg/L となっている(p5-38 参照)。</p> <p>放流水質の昭和 54 年から平成 18 年までの平均は、水温:13.4、pH:7.6、BOD75%値:0.9mg/L、SS:5.4mg/L、DO:10.1mg/L、大腸菌群数:221MPN/100mL、T-N:0.33mg/L、T-P:0.013mg/L、クロロフィル a:3.8 μg/L となっている(p5-24 参照)。</p>	<p>流入から貯水池内、下流河川にかけて、水質に大きな変化は見られない(p5-155 参照)。</p> <p>生活環境項目、健康項目ともに全ての項目で概ね環境基準値を満足している(p5-115 参照)。</p>	<p>現時点で必要なし (現状調査の継続)</p>
水温の変化	<p>昭和 54 年から平成 18 年までで放流水温が流入水温に対して 5 以上低下したのは 278 日中で 4 日で 6 月～8 月に発生しており最大水温差は 8.1 である。(p5-131 参照)。</p> <p>真名川ダムの冷水放流により下流河川でのアユの発育不良に関する苦情が漁協からも寄せられており、真名川ダムの運用による冷水放流が下流生息魚類に影響を及ぼしていると推察される。</p>	<p>流入水温に対して放流水温が低下し冷水放流が発生している。このため、下流河川の生物への影響が懸念される。</p>	<p>今後、流入河川とダム下流河川での水温連続観測によるモニタリング調査により、現象を十分把握し、表層取水設備の改良等の検討が必要である。(現状調査の継続)</p>
土砂による水の濁り	<p>昭和 54 年から平成 18 年までの定期観測結果で放流 SS が流入 SS を上回る日数は 93/245 日である。このうち、放流 SS と流入 SS の差が 5mg/L 以上の日数は 19 日、10mg/L 以上の日数は 9 日である。さらに、放流標高の濁度観測結果によると、10 度以上の濁水化が毎年 2 ヶ月程度発生している状況が確認された。また、濁水長期化に伴い下流漁業者より苦情が寄せられている。(p5-138 参照)。</p>	<p>出水後、貯水池内に濁水塊が長期に渡り滞留し、下流への濁水放流が長期化しており、下流河川の生物への影響が懸念される。</p>	<p>今後、「真名川ダム濁水対策検討会」による検討を踏まえ、長期化軽減方策の実施が必要である。また、対策効果の把握に向けたモニタリング調査の実施が必要である。</p>
富栄養化現象	<p>継続的な調査が開始された平成 8 年(1996 年)以降、アオコ発生の原因となる藍藻類はほとんど発生しておらず、最大でも 2cells/mL であり、渦鞭毛藻類細胞数も最大 40cells/mL 以下と低い値で推移している(p5-101 参照)。また、貯水池表層のクロロフィル a の年間平均値は経年的に 5 μg/L 前後の横ばい傾向で推移しており、富栄養化が問題となるレベルとはなっていない(p5-24 参照)。ただし、貯水池流入末端などにおいて、淡水赤潮や緑藻類の増殖などによる変色が確認されており、景観への影響が懸念される。</p>	<p>真名川ダム貯水池では大きな水質障害を引き起こすような富栄養化現象は発生していないが、貯水池の色の变化なども認められており、引き続き富栄養化の動向に対する注意が必要である</p>	<p>引き続き富栄養化の動向に対する注意が必要である。 (現状調査の継続)</p>
DO	<p>貯水池内において貧酸素水塊が概ね EL.310m 以深で形成されているが、貯水池底層部での溶出によるアンモニア態窒素などの溶出は認められず深刻な嫌気状態には達していない。また、放流先への影響について放流 DO の調査結果より貧酸素水は放流されていないものと考えられる。また、仮に貧酸素水を放流した場合でも、ダム直下では再曝気効果による DO の回復が得られることから、DO に対する影響はないものと考えられる(p5-152 参照)。</p>	<p>貯水池底層においても極度の嫌気状態には達しておらず、溶出を促進される状態ではない。また、放流先へは貧酸素水は放流されておらず、また、仮に放流されても再曝気により DO 回復が得られることから、ダムによる影響はないと考えられる。</p>	<p>現時点で必要なし (現状調査の継続)</p>

## (2) 課題の抽出

水質評価を受けて、今後の水質監視に向けた課題点としては以下の点が挙げられる。

### (水温)

下流への冷水放流に対する現象把握が十分なされていないことから、今後モニタリング調査を実施した上で、小放流設備の選択取水設備の設置、表層取水設備の改良、曝気循環施設の導入等の対策案の検討を行うことが課題として挙げられる。

### (土砂による水の濁り)

濁水長期化現象に対する水質保全対策について、「真名川ダム濁水対策検討会」において、可動式濁水防止フェンスの設置の提案がなされた。

今後は、濁水防止フェンスの改良、選択取水設備の設置やコンジットを活用した貯水池運用、堆砂土の除去、流域濁水発生源対策などを鋭意実施するとともに、水質保全対策の実施前から実施後にかけて計画的に対策効果の把握調査を実施し、対策効果の評価を行った上で、水質保全対策を改善していくことが課題として挙げられる。

### (富栄養化現象)

真名川ダムでは流域に大きな汚濁源もないこともあり、藍藻類などによるアオコの集積は見られず、またクロロフィル a の年間平均値では  $5 \mu\text{g/L}$  前後であり富栄養化が問題となるレベルではない。ただし、淡水赤潮や緑藻類の増殖などによる湖水の変色などの報告もあることから、今後も継続的にモニタリングを実施し、現象を把握しておくことが課題として挙げられる。

## (3) 今後必要な調査事項

以上の課題点を踏まえて、今後必要となる調査事項としては以下の点が挙げられる。

### (水温)

今後モニタリングにより、貯水池網場地点における水温鉛直分布の連続観測を継続し貯水池内の水温の挙動を把握するとともに、貯水池流入水温及びダム放流設備から放流されるダム直下の放流水温、下流河川(五条方)での水温について連続観測を行い、ダム放流時の下流への冷水放流現象、対策検討資料の蓄積が必要である。

### (濁水対策の効果把握)

濁水対策として、実施されている濁水防止フェンスの効果把握する上で、今後もフェンス上下流での濁度鉛直分布調査の継続的実施が必要である。

また、今後実施する各種濁水対策の効果把握する上で、濁水対策の実施前の段階から計画的に貯水池流入端、貯水池放流水の濁度・水温の連続観測、貯水池網場地点における濁度・水温鉛直分布の連続観測の継続を行い、流入水に対する放流水の濁水長期化現象の把握、貯水池内の高濁水塊の滞留状況の把握のための資料の蓄積が必要である。

### (富栄養化現象)

今後の貯水池の富栄養化現象の動向を把握するため、湖面の定期的観察・記録。変色時における植物プランクトンの臨時調査を今後も継続実施し、増殖種の経年的変化、発生時期、発生箇所を把握しておく必要がある。

## 5.8. 文献リストの作成

表 5.8-1 使用資料リスト

区分	No.	文献資料名	調査実施年度	調査対象
自然環境・社会環境	5-1	福井県告示第 316 号、第 311 号	-	環境基準類型指定状況
	5-2	九頭竜川ダム統合管理事務所管内図	-	水系、流域界
	5-3	国土地理院地形図(1/25000)	-	水質調査地点
	5-4	国土地理院地形図(1/50000)	-	流域界、水質調査地点
	5-5	国土地理院地勢図(1/200000)	-	流域界、水質調査地点
	5-6	河川水質試験試験方法(案)1997 年版(建設省河川局)	-	流域界、水質調査地点
	5-7	福井県統計年鑑	昭和 50 年～平成 17 年	大野市、
ダム管理情報	5-8	真名川ダム管理年報	平成 4 年～平成 18 年	ダム貯水位、流入量、放流量、降水量
	5-9	真名川ダム時間データ	昭和 54 年～平成 3 年	ダム貯水位、流入量、放流量
	5-10	真名川ダム日雨量データ	昭和 54 年～平成 18 年	ダム降水量
	5-11	流量年表	昭和 54 年～平成 18 年	中角流量
気象	5-12	福井地方气象台気象資料、アメダス大野観測所気象資料	昭和 54 年～平成 18 年	気温、降水量
水質調査	5-13	水質調査業務(真名川ダム)報告書・デジタルデータ(国土交通省九頭竜川ダム統合管理事務所)	昭和 52 年～平成 18 年	水質調査結果、植物プランクトン分析結果
	5-14	福井県公共用水域水質測定結果	昭和 48 年～平成 18 年	水質調査結果(土布子橋、荒鹿橋)
	5-15	九頭竜川ダム統合管理事務所 HP(記者発表資料など)	-	貯水池水面変色報告など
	5-16	貯水池濁度鉛直分布調査結果	平成 14 年～平成 18 年	水質調査結果(貯水池 No.1 網場地点)
	5-17	出水時濁水フェンス上下流濁度調査	平成 18 年	水質調査結果(フェンス上下流地点)
水質保全対策	5-18	真名川ダム濁水対策検討資料(国土交通省九頭竜川ダム統合管理事務所)	平成 17 年	濁水対策検討状況
	5-19	平成 13 年度真名川ダム濁水対策検討業務報告書平成 14 年 3 月(国土交通省九頭竜川ダム統合管理事務所)	平成 13 年	濁水対策検討状況
	5-20	濁水防止フェンス設置工事完成図書平成 15 年 3 月(国土交通省九頭竜川ダム統合管理事務所)	平成 14 年	濁水対策実施状況
	5-21	真名川ダム貯水池堆砂土砂撤去工事平面図(国土交通省九頭竜川ダム統合管理事務所)	平成 18 年	濁水対策実施状況
その他	5-22	ダム貯水池水質用語集 平成 18 年 3 月(財団法人 ダム水源地環境整備センター)	-	貯水池内流況の判定



## 6 . 生 物

## 6. 生 物

### 6.1 評価の進め方

#### 6.1.1 評価方針

##### (1) 評価の方針

真名川ダムでは、ダム管理開始後の「河川水辺の国勢調査(ダム湖版)」(以下、「国勢調査」という)の結果と、生物に関する環境保全対策の効果を確認するために実施した調査の結果を活用して、ダム建設後の生物の生息・生育状況に変化が生じているかどうかを検証・評価し、今後の方針を整理した。

##### (2) 調査の実施状況

真名川ダムは昭和 42 年 4 月に建設着手し、昭和 54 年 3 月に完成した。生物調査は表 6.1-1 に示すとおり実施している。

表 6.1-1 真名川ダムにおける生物調査の実施状況

調査年	ダム事業 実施状況	自然事象の状況 (出水・湧水等)	自然環境調査の実施状況										
			魚類	底生 動物	動植物 プラン クトン	植物	鳥類	両生類 爬虫類 哺乳類	陸上昆 虫类等	湖岸緑 化試験	水環境 改善 事業	ダム弾 力的管 理試験	
昭和40年 (1965年)		奥越豪雨(9月)											
昭和42年 (1967年)	建設着手 (4月)												
昭和53年 (1978年)	竣工 (10月)												
昭和54年 (1979年)	管理開始 (4月)												
平成2年 (1990)													
平成3年 (1991)													
平成4年 (1992)													
平成5年 (1993)													
平成6年 (1994)													
平成7年 (1995)													
平成8年 (1996)													
平成9年 (1997)													
平成10年 (1998)		台風7号(9月)											
平成11年 (1999)													
平成12年 (2000)													
平成13年 (2001)													
平成14年 (2002)		台風6号(7月)											
平成15年 (2003)													
平成16年 (2004)		福井豪雨(7月) 台風16号(8月) 台風23号(10月)											
平成17年 (2005)		台風14号(9月)											
平成18年 (2006)		梅雨前線(8月) 平成18年豪雪											

注) 1. : ダム事業者の実施した調査(国勢調査)

: ダム事業者の実施した調査(国勢調査以外)

2.平成2年~13年までの魚類の調査は、エビ・カニ・貝類を含む。

### 6.1.2 評価手順

真名川ダムにおける生物の評価手順を以下に記すとともに、そのフロー図を図 6.1-1 に示す。

#### (1)資料の収集

真名川ダムで実施された国勢調査等の生物調査結果について収集し、実施状況を整理した。また、評価に必要な生物以外の資料（流況、水質等）についても収集した。

#### (2)ダム湖及びその周辺の環境の整理

既存資料や現地調査の結果から、ダム湖周辺環境情報図等を作成し、ダム湖及びその周辺の環境の概略を把握した。

#### (3)生物の生息・生育状況の変化の検証

真名川ダムの存在及び供用に伴って影響を受けると考えられる場所（ダム湖内、流入河川、下流河川、ダム湖周辺）ごとに環境の状況と生物の生息・生育状況を経年的に比較、検討した。また、重要種、外来種についても、確認地点や確認時の生息・生育状況を経年的に比較、検証した。

その結果、生物の生息及び生育状況に変化が見られた場合には、それがダムの存在及び供用に伴う環境変化によるものか、あるいはその他の環境変化によるものかの観点から変化要因の検討を行い、真名川ダムとの関連を検証した。

なお、重要種、外来種については、本報告書において以下のとおり定めるものとする。

重要種の選定根拠
・国、県、市町村指定の天然記念物（文化財保護法） ・「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」における国内希少野生動植物種 ・レッドデータブック（環境省編）の掲載種（平成 18 年、19 年に公表した見直しリストの掲載種） ・福井県レッドデータブックの掲載種（平成 14 年の動物編、平成 16 年の植物編の掲載種） ・「自然公園法（白山国立公園）」の指定植物

外来種の選定根拠
外来種については、「外来種ハンドブック」（日本生態学会，平成 14 年）をもとに、その起源により国外外来種と国内外来種に分けて整理を行った。なお、植物については「日本帰化植物写真図鑑」（清水矩宏ほか，平成 13 年）と「日本の帰化植物写真図鑑」（清水建美ほか，平成 15 年）も参考とした。
国外外来種のうち、特に外来生物法により指定された種については「特定外来生物」とし、外来生物法に指定されていないが生態系へ悪影響を及ぼしうる種については「要注意外来生物」として整理を行った。それぞれの定義は以下に示すとおりとする。なお、国内外来種については、明確に判断することが困難なため、本報告では国外外来種のための整理を行った。
・国外外来種 : おおよそ明治時代以降に人為的影響により侵入した国外由来の種
・国内外来種 : おおよそ明治時代以降に人為的影響により侵入した国内由来の種
・特定外来生物 : 国外外来種のうち、生態系、人の生命、身体、農林水産業へ被害を及ぼすもの、または及ぼすおそれがある種として、外来生物法により指定された種
・要注意外来生物 : 国外外来種のうち、生態系等に対する被害について指摘があり、科学的知見の集積や利用に関する実態の把握が必要であり、適切な利用に向けて関係者への普及啓発を行うことが必要とされている種

(4)生物の生息・生育状況の変化の評価

「(3)生物の生息・生育状況の変化の検証」における検証結果について、評価の視点を定めて場所ごとに評価を行い、改善の必要のある課題を整理した。

(5)環境保全対策の効果の評価

真名川ダムでは環境保全対策として湖岸緑化試験(裸地対策)、弾力的管理試験及び水環境改善事業が行われているため、これらの保全対策について目標と現状とを比較することにより、その効果の評価を行い、改善の必要性のある課題を整理した。

(6)まとめ

以上の検討結果より、ダム湖及びその周辺の環境全体について、改善の必要のある課題をとりまとめた。

(7)文献リストの作成

定期報告書の作成に際して、使用した文献等のリストを作成した。

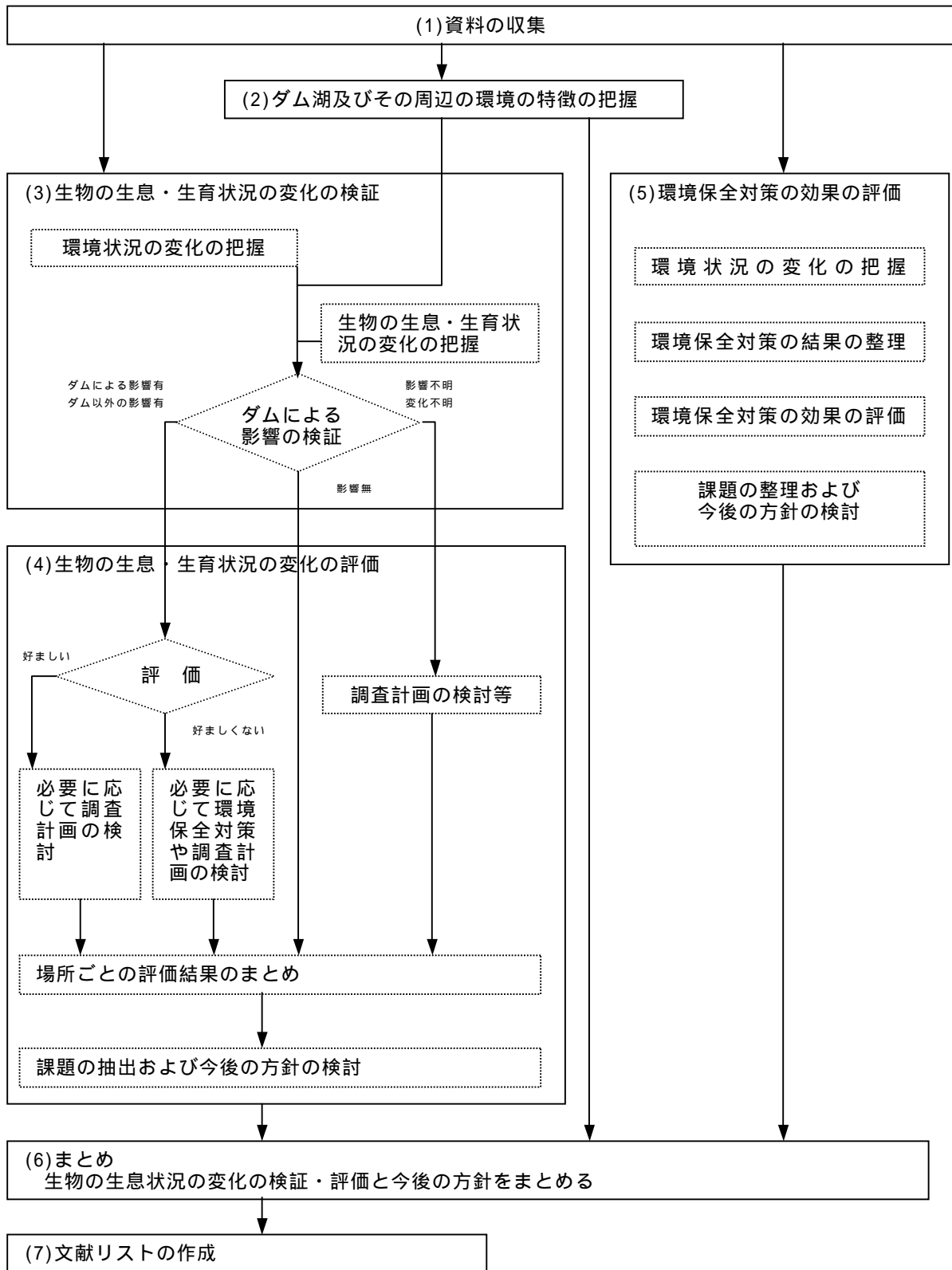


図 6.1-1 真名川ダムにおける生物の評価手順フロー図

### 6.1.3 対象範囲

#### (1)対象範囲

真名川ダムにおいて、生物の生息・生育状況の変化の検証を行う場所を、表 6.1-2 及び図 6.1-2 に示す。

表 6.1-2 生物の生息・生育状況の変化の検証を行う場所（真名川ダム）

場所		真名川ダムにおける 設定状況	設定根拠
ダム湖内		真名川ダムのダム湖 平常時最高貯水位（旧常時満水位） EL365.0m を基本とする。	湛水域として直接冠水する範囲 魚類、底生動物、動植物プランクトンの 調査地点を設定しており、検証及び評価 が可能である。
流入 河川	流入河川 （真名川） （笹生川） （雲川）	真名川は「ダム湖内」から、笹生川、 雲川合流点まで、笹生川と雲川はこ の合流点から、笹生川は細ヶ谷合流 点付近まで、雲川は中島トンネル上 流付近までの河川域及び周辺陸域	各生物調査の地点を設定しており、検証 及び評価が可能である。 ここより上流では、真名川ダム自然環境 調査の地点を設定していない。
	流入支川 （持籠谷川） （仙翁谷川） （日の谷川）	「ダム湖内」から、持籠谷川は約 100m上流、仙翁谷川は約 1 km上流、 日の谷川は「ダム湖内」との境界付 近までの河川域及び周辺陸域	
下流 河川	本川 （真名川頭首工下流側） （真名川頭首工上流側）	佐開橋から真名川頭首工まで、及び 真名川頭首工から真名川ダム堤体 までの河川域及び周辺陸域	各生物調査の地点が設定されており、検 証及び評価が可能である。 ここより下流では、真名川ダム自然環境 調査の地点が設定されていない。
ダム湖周辺		平常時最高貯水位（旧常時満水位） と接する水際線から概ね 500m以 内の範囲からダム湖内を除く陸域	植物、鳥類、両生類・爬虫類・哺乳類、 陸上昆虫類の調査地点を設定しており、 検証及び評価が可能である。

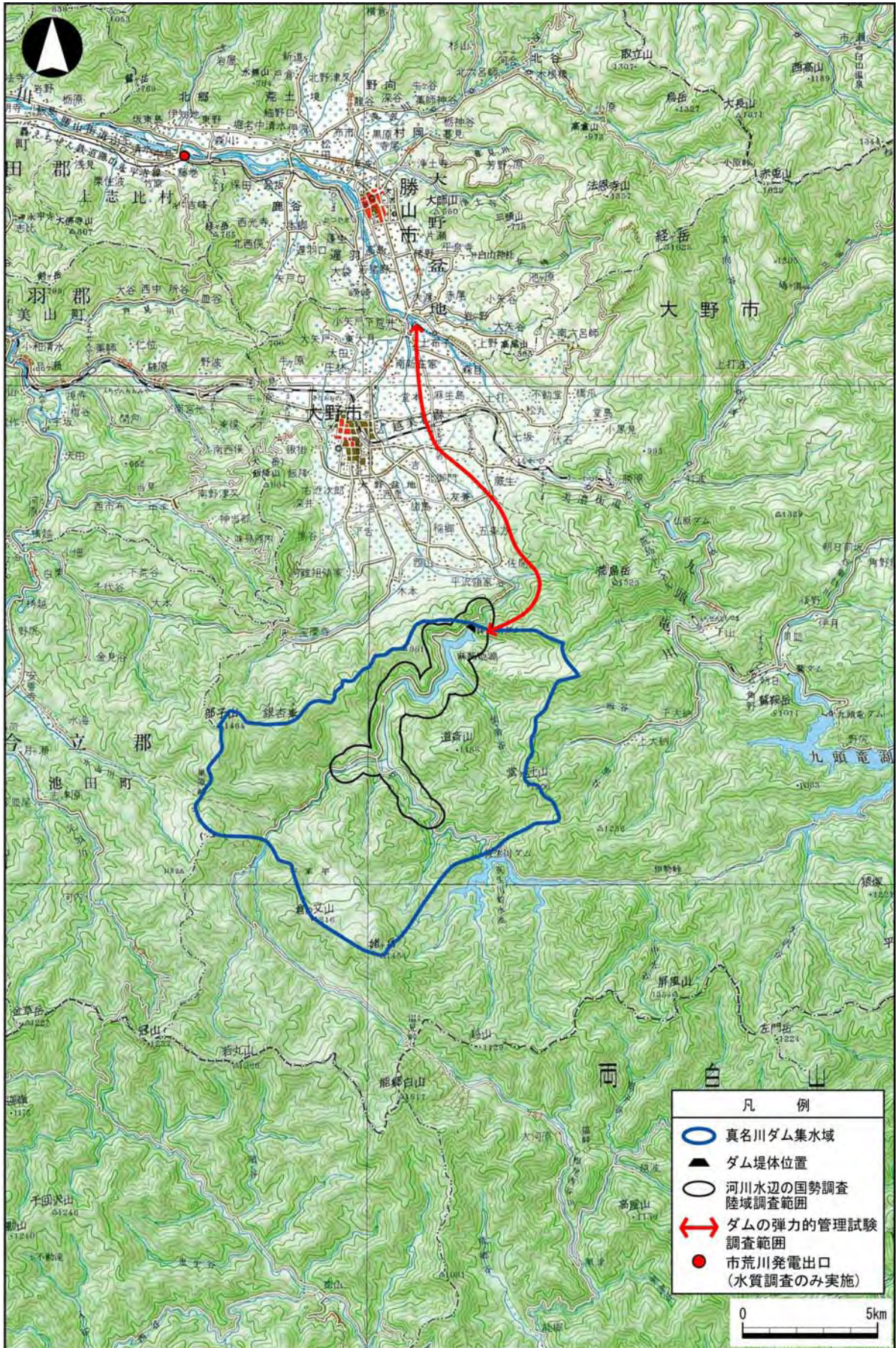


図 6.1-2(1) 生物の生息・生育状況の変化の検証を行う場所 (真名川ダム: )



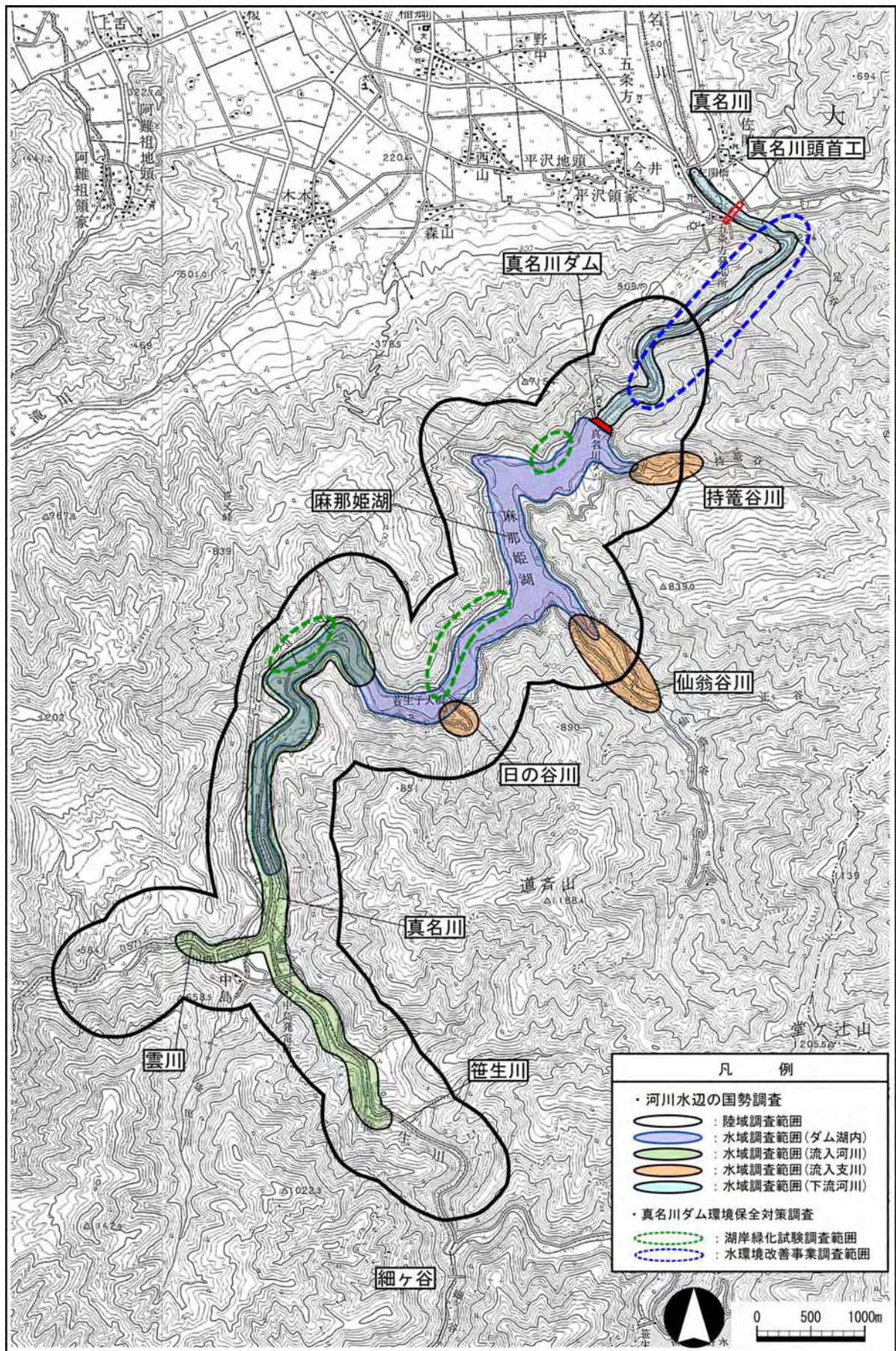


図 6.1-2(2) 生物の生息・生育状況の変化の検証を行う場所 (真名川ダム: )

(2)資料の収集

真名川ダムにおいて、収集した資料を表 6.1-3 に示す。

表 6.1-3 生物に関する資料収集の対象（真名川ダム）

区 分	資 料	発行者	発行年	備 考
国勢調査	ダム自然環境調査	近畿地方整備局 九頭竜川ダム統 合管理事務所	平成2～18年	生物の生息・生育状況の 変化の把握等に使用
真名川ダム 関連調査	真名川ダム湖岸緑化試 験調査結果	近畿地方整備局 九頭竜川ダム統 合管理事務所	平成6～10年	生物の生息・生育状況の 変化の把握等に使用
	真名川ダム水環境改善 事業調査結果	近畿地方整備局 九頭竜川ダム統 合管理事務所	平成9～10年	生物の生息・生育状況の 変化の把握等に使用
	真名川ダム弾力的管理 試験調査結果	近畿地方整備局 九頭竜川ダム統 合管理事務所	平成12～17年	生物の生息・生育状況の 変化の把握等に使用
環境関連資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ダム貯水位データ</li> <li>・ダム流入量、放流量デ ータ</li> <li>・ダム湖水温・水質デー タ</li> <li>・流入河川、下流河川の 水温、水質データ</li> </ul>	近畿地方整備局 九頭竜川ダム統 合管理事務所	昭和54年 ～平成18年	環境条件の変化の把握 に使用

(3) 調査実施状況

真名川ダムで実施された生物に関する既往調査報告書を収集・整理し、調査実施状況を表 6.1-4 に示す。

表 6.1-4(1) 年度別調査実施状況の整理

年度	調査番号	調査件名	調査区分	対象生物							保全対策			その他		
				魚類	底生動物	動植物プランクトン	植物	鳥類	両生類・爬虫類・哺乳類	陸上昆虫類等	湖岸緑化試験	水環境改善事業	ダムの弾力的管理試験			
昭和53年(1978)	1	真名川ダム貯水池周辺植生調査	その他の調査													*1
平成2年(1990)	2	水生生物(魚貝類)調査	国勢調査													
平成3年(1991)	3	水生生物調査	国勢調査													
平成4年(1992)	4	ダム自然環境調査	国勢調査													
平成5年(1993)	5	ダム自然環境調査	国勢調査													
	6	ダム自然環境調査	国勢調査													
	7	ダム自然環境調査	国勢調査													
	8	ダム自然環境調査	国勢調査													
平成6年(1994)	9	ダム自然環境調査	国勢調査													
	10	ダム自然環境調査	国勢調査													
	11	ダム自然環境調査	国勢調査													
	12	真名川ダム湖岸裸地対策調査	その他の調査													
平成7年(1995)	13	ダム自然環境調査	国勢調査													
	14	真名川ダム湖岸裸地対策調査	その他の調査													
平成8年(1996)	15	ダム自然環境調査	国勢調査													
	16	真名川ダム湖岸裸地対策調査	その他の調査													
平成9年(1997)	17	ダム自然環境調査	その他の調査													
	18	ダム自然環境調査	国勢調査													
	19	ダム自然環境調査	国勢調査													
	20	真名川ダム湖岸裸地対策調査	その他の調査													
平成10年(1998)	21	ダム自然環境調査	その他の調査													
	22	ダム自然環境調査	国勢調査													
	23	真名川ダム緑化現地調査	その他の調査													

注) 1. : ダム事業者の実施した調査(国勢調査)

: ダム事業者の実施した調査(国勢調査以外)

\*1: 試験湛水(EL385.0m)により水没したダム周辺の現存植生分布及び樹木生存・枯損状態に関する調査

注) 2.平成2年～13年までの魚類の調査は、エビ・カニ・貝類を含む。

表 6.1-4(2) 年度別調査実施状況の整理

年度	調査番号	調査件名	調査区分	対象生物						保全対策			その他
				魚類	底生動物	動植物プランクトン	植物	鳥類	両生類・爬虫類・哺乳類	陸上昆虫類等	湖岸緑化試験	水環境改善事業	
平成11年 (1999)	24	ダム自然環境調査	国勢調査										
平成12年 (2000)	25	ダム自然環境調査	国勢調査										
	26	ダム自然環境調査	国勢調査										
	27	真名川ダム弾力的管理環境現況調査	その他の調査										
	28	真名川ダム弾力的管理試験評価検討	その他の調査										
平成13年 (2001)	29	ダム自然環境調査	国勢調査										
	30	真名川ダム弾力的管理環境現況調査	その他の調査										
	31	弾力的管理試験事前生態調査	その他の調査										
	32	放流鮎生態事前調査	その他の調査										*2
平成14年 (2002)	33	ダム自然環境調査	国勢調査										
	34	ダム自然環境調査	国勢調査										
	35	真名川ダム弾力的管理試験効果調査	その他の調査										
平成15年 (2003)	36	ダム自然環境調査	国勢調査										
	37	真名川ダム弾力的管理試験効果調査	その他の調査										
平成16年 (2004)	38	ダム自然環境調査	国勢調査										
平成17年 (2005)	39	ダム自然環境調査	国勢調査										
	40	ダム自然環境調査	国勢調査										
	41	真名川ダム弾力的管理試験効果調査	その他の調査										
平成18年 (2006)	42	ダム自然環境調査	国勢調査										
	43	ダム自然環境調査	国勢調査										
	44	真名川ダム弾力的管理試験効果調査	その他の調査										
	45	ダム自然環境調査環境情報図	国勢調査										*3

注) 1. : ダム事業者の実施した調査 (国勢調査)

: ダム事業者の実施した調査 (国勢調査以外)

\*2: ダム直下から五条方までの区間における放流直後のアユの生息域に関する調査

\*3: 国勢調査結果を基にした環境情報図の作成

注) 2.平成2年～13年までの魚類の調査は、エビ・カニ・貝類を含む。

(4) 調査内容

調査項目ごとの実施状況を表 6.1-5 に示す。また、調査地点図を図 6.1-3 に示す。

表 6.1-5(1) 調査種別ごとの実施状況の整理（魚類）

年度	調査番号	調査件名	調査範囲	調査地点	報告書調査地点番号	調査時期	調査方法
平成2年 (1990)	2	水生生物（魚貝類）調査	流入河川 （真名川）	St.24	No.16	平成2年6、10月	捕獲調査（刺網、投網）
			下流河川 （真名川頭 首工下流側）	St.1	No.15	平成2年7、10月	
平成3年 (1991)	3	水生生物調査	ダム湖内	St.5 St.10 St.16 St.19	St.1 St.2 St.3 St.4	平成3年6、9月	捕獲調査（投網、刺網、カゴ、ビンドウ）
平成5年 (1993)	8	ダム自然環境調査	ダム湖内	St.6 St.10 St.17 St.20	No.1 No.2 No.3 No.4	平成5年9月	捕獲調査（刺網、投網、タモ網、セルビン、どう、カニかご）
			流入河川 （真名川）	St.20	No.4		捕獲調査（投網、タモ網）
			流入支川 （持籠谷川） （仙翁谷川） （日の谷川）	St.6 St.10 St.17	No.1 No.2 No.3		
平成8年 (1996)	15	ダム自然環境調査	ダム湖内	St.8 St.15 St.6 St.12 St.17 St.21	No.1 No.2 No.3 No.4 No.5 No.6	平成8年5、10月	捕獲調査（刺網、どう、カニかご）見つけ取り法
			流入河川 （真名川） （笹生川） （雲川）	St.21 St.26 St.28	No.6 No.8 No.9	平成8年5、8、10月	捕獲調査（刺網、投網、タモ網、セルビン）見つけ取り法
			流入支川 （持籠谷川） （仙翁谷川） （日の谷川）	St.6 St.12 St.17 St.14	No.3 No.4 No.5 No.7		
			下流河川 （真名川頭 首工上流側）	St.2	No.10	平成8年5、10月	捕獲調査（刺網、投網、タモ網）、見つけ取り法
平成9年 (1997)	17	ダム自然環境調査	下流河川 （真名川頭 首工上流側）	St.4 St.3	No.1(1) No.1(2)	平成9年5、8、10月	捕獲調査（刺網、投網、タモ網）
平成10年 (1998)	21	ダム自然環境調査	下流河川 （真名川頭 首工上流側）	St.4 St.3	No.1(1) No.1(2)	平成10年6、8、10月	捕獲調査（刺網、投網、タモ網）
平成13年 (2001)	29	ダム自然環境調査	ダム湖内	St.9 St.16 St.5 St.10 St.23 St.19	No.1 No.2 No.3 No.4 No.5春 No.5秋	平成13年5、10月	捕獲調査（刺網、どう）
			流入河川 （真名川） （笹生川） （雲川）	St.25 St.22 St.27 St.29	No.9春 No.9夏・秋 No.11 No.12	平成13年年5、7、9～10月	捕獲調査（刺網、どう、セルビン）
			流入支川 （持籠谷川） （仙翁谷川） （日の谷川）	St.7 St.11 St.18 St.13	No.6 No.7 No.8 No.10		
			下流河川 （真名川頭 首工上流側）	St.3	No.13	平成13年5、10月	捕獲調査（刺網、投網、タモ網）

注) 1. 調査番号 2 と 3 で、河川水辺の国勢調査 1 回分の調査である。

注) 2. 平成 5 年度、平成 8 年度調査において、ダム湖内及び流入河川の調査地点番号が重複しているが、実際の調査は河川流入部の上・下流でそれぞれ実施しており、調査票もダム湖内と流入河川に分けて記録されている。

注) 3. 平成 2 年～13 年までの調査は、エビ・カニ・貝類を含む。

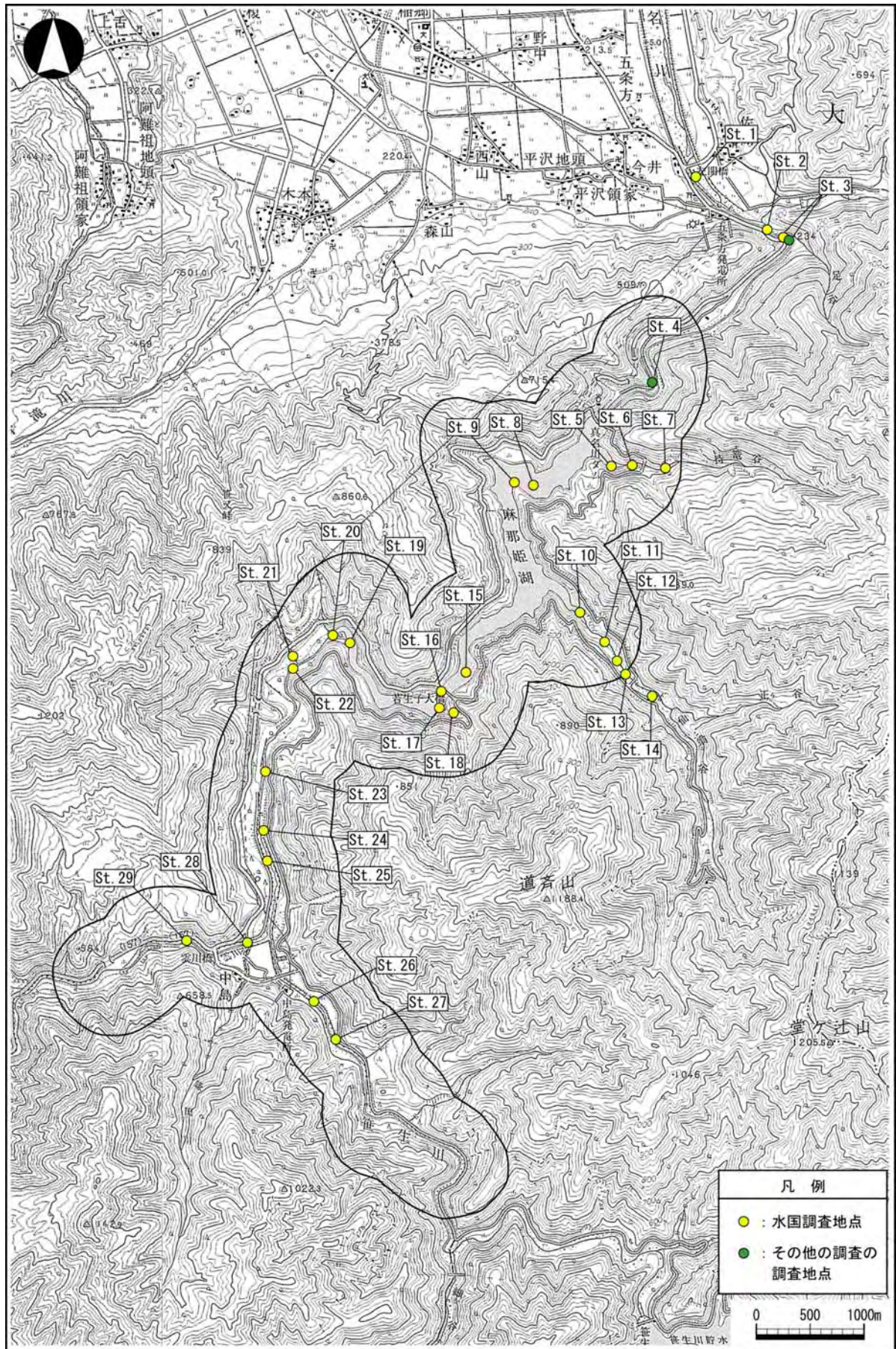


図 6.1-3(1) 魚類調査地点位置図

表 6.1-5(2) 調査種別ごとの実施状況の整理 (底生動物)

年度	調査番号	調査件名	調査範囲	調査地点	報告書調査地点番号	調査時期	調査方法	
平成6年 (1994)	10	ダム自然環境調査	ダム湖内	流入部 (持籠谷川)	St.2	No.1	平成6年 5、8、11 月	定点採集:エクマンバ ージ型採泥器(15 cm ×15 cm)を使用。 定性採集:0.5 mm目合 いのハンドネットを 使用。
				最深部	St.7	No.2		
				中心部	St.9	No.4		
				流入部 (仙翁谷川)	St.13	No.5		
				流入部 (真名川)	St.19	No.7		
			流入河川 (真名川)	St.20	No.8	定量採集:サーバーネ ット(50 cm×50 cm) を使用。 定性採集:0.5 mm目合 いのハンドネットを 使用。		
			流入支川 (持籠谷川) (仙翁谷川)	St.5 St.14	No.3 No.6			
平成9年 (1997)	18	ダム自然環境調査	ダム湖内	流入部 (持籠谷川)	St.2	No.1	平成9年 5、8、11 月	定点採集:エクマンバ ージ型採泥器(15 cm ×15 cm)を使用。 定性採集:0.5 mm目合 いのハンドネットを 使用。
				最深部	St.7	No.3		
				中心部	St.9	No.4		
				流入部 (仙翁谷川)	St.11	No.5		
				若生子大橋	St.15	No.7		
			流入部 (真名川)	St.16	No.8	定量採集:サーバーネ ット(50 cm×50 cm) を使用。 定性採集:0.5 mm目合 いのハンドネットを 使用。		
			流入河川 (真名川)	St.22	No.9			
流入支川 (持籠谷川) (仙翁谷川)	St.4 St.14	No.2 No.6						
平成14年 (2002)	33	ダム自然環境調査	ダム湖内	流入部 (持籠谷川)	St.2	No.1	平成14年 5、7~8、 11月	定点採集:エクマンバ ージ型採泥器(15 cm ×15 cm)を使用。 定性採集:0.5 mm目合 いのハンドネットを 使用。
				St.3	No.2			
				最深部	St.7	No.4		
				ダムサイト周辺	St.8	No.5		
				中心部	St.9	No.6		
				St.10	No.7			
				流入部 (仙翁谷川)	St.11	No.8		
				St.12	No.9			
			流入部 (真名川)	St.16	No.11			
			St.17	No.12				
			流入河川 (真名川)	St.23	No.13	定量採集:サーバーネ ット(50 cm×50 cm) を使用。 定性採集:0.5 mm目ハ ンドネットを使用。		
			流入支川 (持籠谷川) (仙翁谷川)	St.6 St.14	No.3 No.10			
ダム湖内	最深部	St.7	St.1					
	若生子大橋	St.15	St.2					
	流入部 (真名川)	St.21 St.18	St.3春 St.3夏・秋					
流入河川 (笹生川)	St.24	St.4	平成18年 6、8、11 月	定量採集:サーバーネ ット(50 cm×50 cm) を使用。 定性採集:0.5 mm目合 いのタモ網等を使用。				
流入支川 (仙翁谷川)	St.14	(St.6)						
下流河川	St.1	St.5						

注)平成18年度のSt.6の調査は、6月に1回実施した。

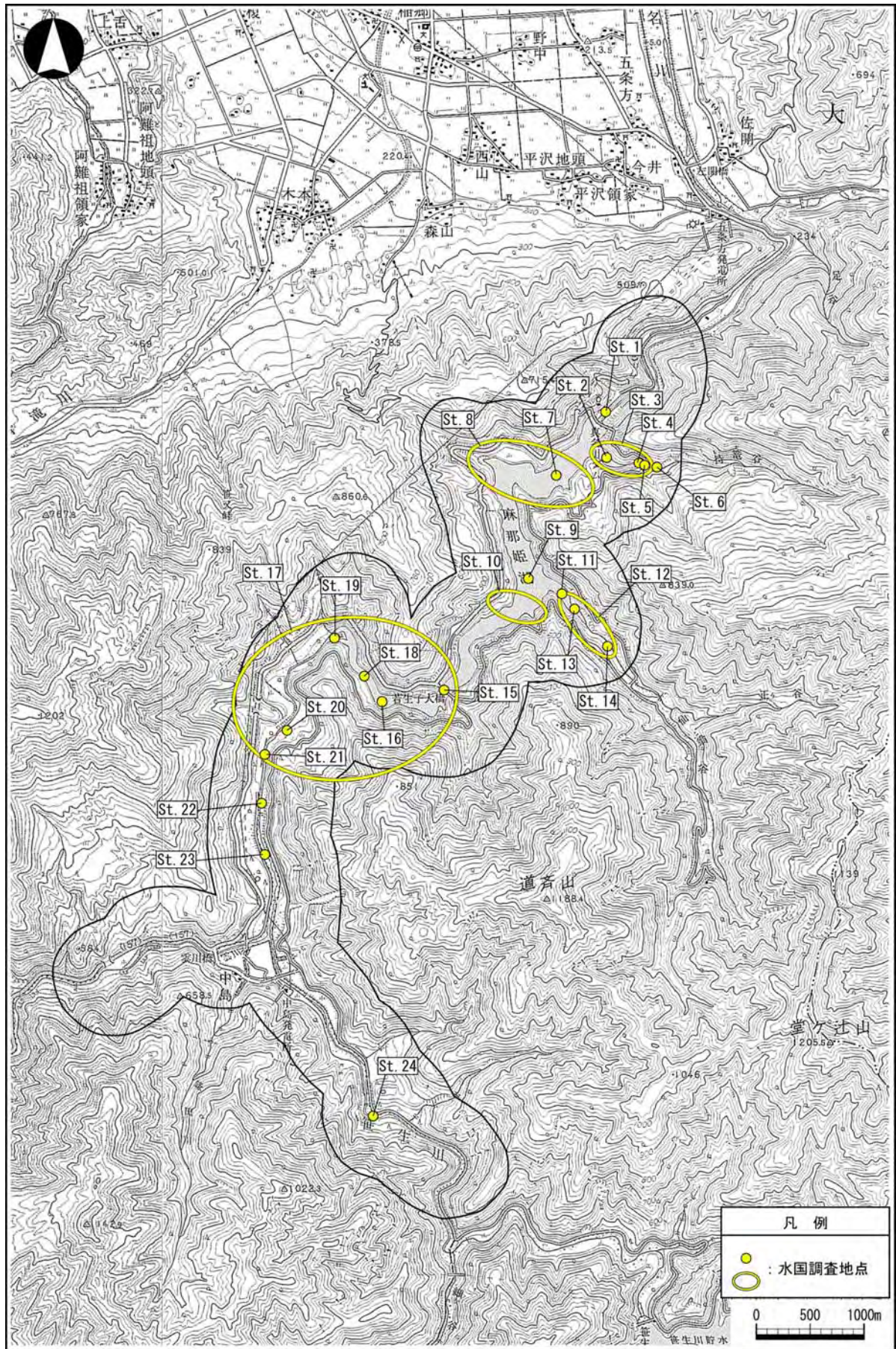


図 6.1-3(2) 底生動物調査地点位置図



表 6.1-5(3) 調査種別ごとの実施状況の整理 (動植物プランクトン)

年度	調査番号	調査件名	調査範囲		調査地点	報告書調査地点番号	調査時期	調査方法
平成6年 (1994)	11	ダム自然環境調査	ダム湖内	湖心部	St.1	No.1	平成6年 5、8、10、 12月	採水法(植) ネット法(動)
				河川流入部	St.2 St.7	No.2 No.3		
平成12年 (2000)	26	ダム自然環境調査	ダム湖内	湖心部	St.1	St.A	平成12年 5、8、 10、12月	採水法(植) ネット法(動)
				河川流入部	St.2 St.3 St.4 St.6 St.8 St.9	St.B夏・ 秋 St.B冬 St.B春 St.C夏・ 秋 St.C冬 St.C春		
平成17年 (2005)	40	ダム自然環境調査	ダム湖内	湖心部	St.1	St.A	平成17年 5、8、 10月	採水法(植) ネット法(動)
				河川流入部	St.2 St.4 St.5 St.9	St.B夏・ 秋 St.B春 St.C夏・ 秋 St.C春		
平成18年 (2006)	43	ダム自然環境調査	ダム湖内	湖心部	St.1	St.A	平成18年 7、8、 11、12月	採水法(植) ネット法(動)
				河川流入部	St.5 St.9	St.B夏・ 秋・冬 St.B春		

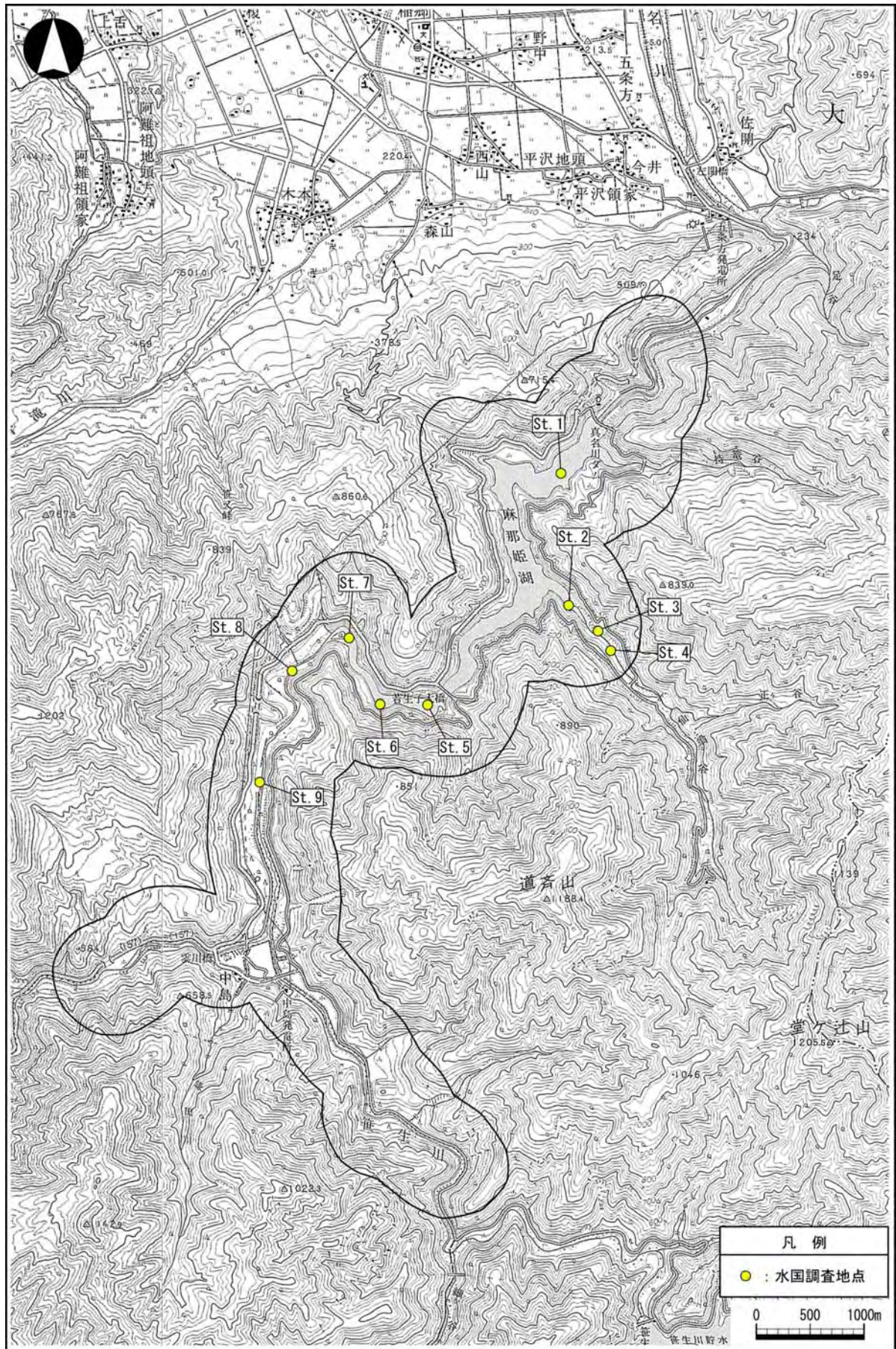


図 6.1-3(3) 動植物プランクトン調査地点位置図

表 6.1-5(4) 調査種別ごとの実施状況の整理 (植物)

年度	調査番号	調査件名	調査範囲	調査地点	報告書調査地点番号	調査時期	調査方法
昭和53年 (1978)	1	真名川ダム貯水池 周辺植生調査	流入河川 ダム湖周辺	-	全域	昭和 52 年 9、10 月	現存植生調査、 樹木枯損 生存調査
平成7年 (1995)	13	ダム自然環境調査	流入河川 下流河川 ダム湖周辺	St.3 St.4 St.5 St.6 St.10 St.17 St.14	St.1 St.2 St.3 St.4 St.5 St.6 St.7	平成 7 年 5 ~ 11 月	植生分布調査、 植物相調査、 コドラー ト調査
平成10年 (1998)	22	ダム自然環境調査	流入河川 下流河川 ダム湖周辺	St.3 St.4 St.5 St.6 St.10 St.18 St.15	St.1 St.2 St.3 St.4 St.5 St.6 St.7	平成 10 年 5 ~ 11 月	植生分布調査、 植物相調査、 群落組成 調査、植生断 面調査
平成15年 (2003)	36	ダム自然環境調査	流入河川 下流河川 ダム湖周辺	St.8 St.2 St.16 St.12 St.9 St.7 St.1 St.11 St.13	No.1 No.2 No.3 No.4 No.5 No.6 No.7 No.8 No.9	平成 15 年 5 ~ 10 月	植物相調査、 群落組成調査

注)「-」は、調査位置が特定できないことを示す。

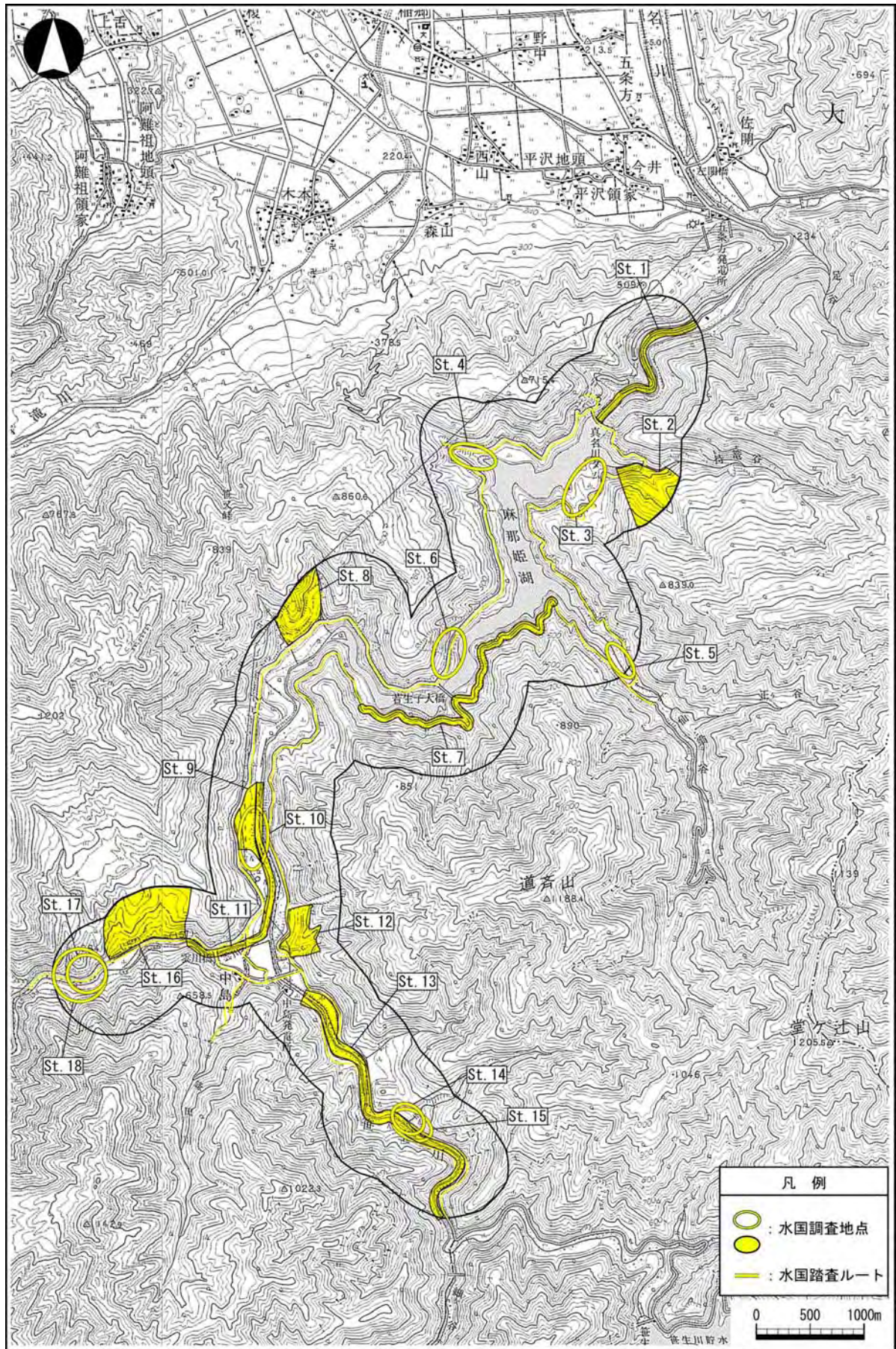


図 6.1-3(4) 植物調査地点位置図

表 6.1-5(5) 調査種別ごとの実施状況の整理 (鳥類)

年度	調査番号	調査件名	調査範囲	調査地点	報告書調査地点番号	調査時期	調査方法
平成4年 (1992)	4	ダム自然環境調査	ダム湖内	St.3	No.4 カモ用ライン	平成4年11月	ラインセンサス法(1季×1回)
			ダム湖周辺	St.1 St.6	No.1(ライン) No.1(定位)	平成4年11月、平成5年1月	ラインセンサス法(2季×2回)、定位記録法(2季×2又は3回)
				St.10 St.11	No.2(ライン) No.2(定位)		
平成5年 (1993)	5	ダム自然環境調査	ダム湖周辺	St.14 St.16	No.3(ライン) No.3(定位)	平成5年5、6月	ラインセンサス法(2季×2回)、定位記録法(2季×2又は3回)
				St.1 St.6	No.1(ライン) No.1(定位)		
				St.10 St.11	No.2(ライン) No.2(定位)		
平成9年 (1997)	19	ダム自然環境調査	ダム湖内	St.4	No.4 カモ用ライン	平成9年11月	ラインセンサス法(1季×1回)
			ダム湖周辺	St.2 St.7	No.1(ライン) No.1(定位)	平成9年6、10月、平成10年1月	ラインセンサス法、定位記録法(3季×1回)
				St.10 St.11	No.2(ライン) No.2(定位)		
平成14年 (2002)	34	ダム自然環境調査	ダム湖内	St.14 St.17 St.16 St.18	No.3(ライン) No.3夏(定位) St.3秋(定位) St.3冬(定位)	平成14年6、10、11、12月	ラインセンサス法(3季×1回)
				St.5	カモ用ライン		
			流入河川	St.12	No.7		
ダム湖周辺	St.8	No.1	ラインセンサス法(3季×1回)				
	St.15	No.2		定位記録法(3季×1回)			
	St.13	No.3					
St.9	No.6	ラインセンサス法(3季×1回)					

注) 1. 調査番号4と5で、河川水辺の国勢調査1回分の調査である。

注) 2. ライン：ラインセンサス法、定位：定位記録法の略

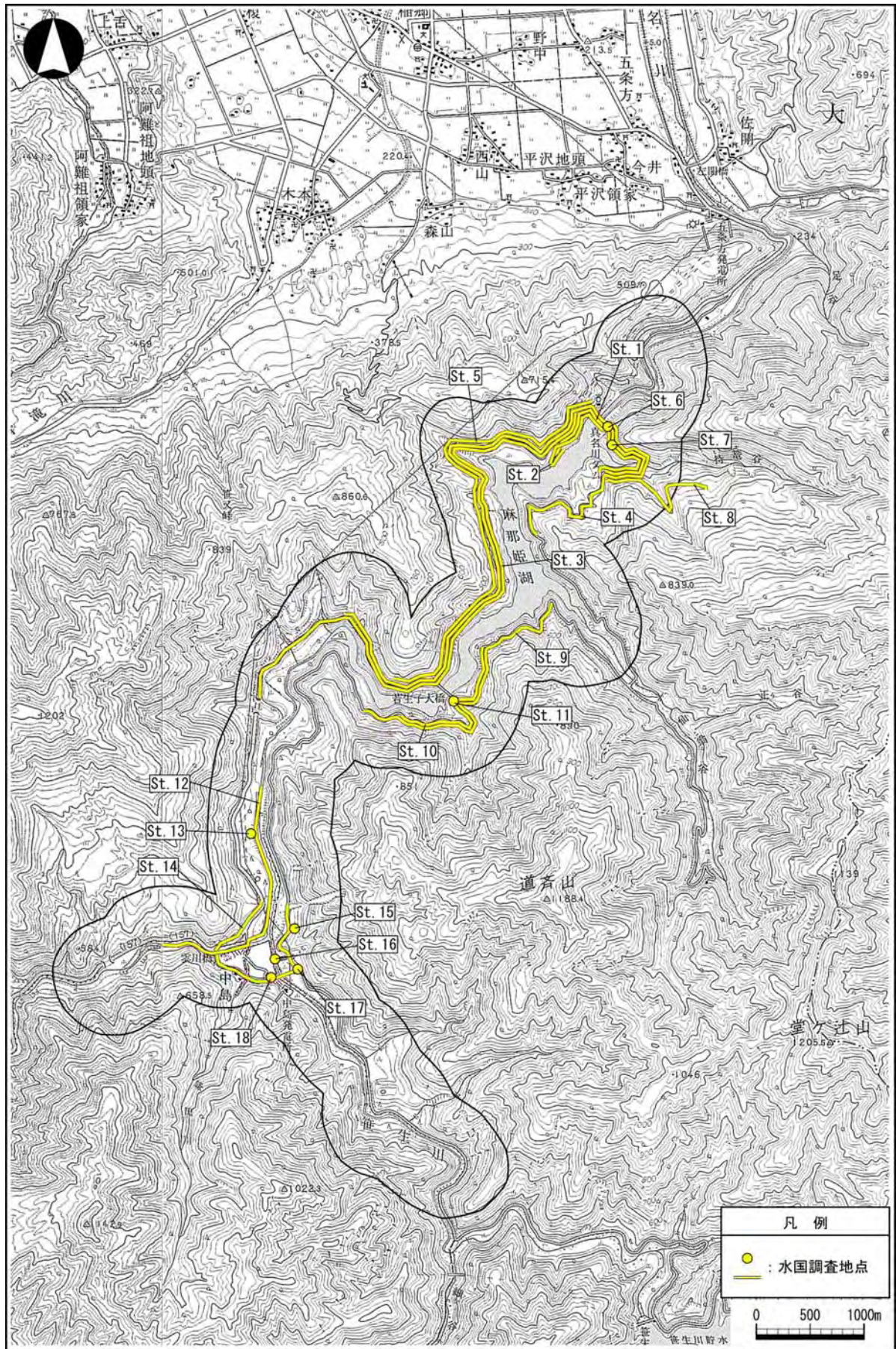


图 6.1-3(5) 鳥類調査地点位置图

表 6.1-5(6) 調査種別ごとの実施状況の整理 (両生類・爬虫類・哺乳類)

年度	調査番号	調査件名	調査範囲	調査地点	報告書調査地点番号	調査時期	調査方法
平成5年 (1993)	6	ダム自然環境調査	ダム湖周辺	-	St.1 (ダムサイト周辺)	平成5年 5・6月(春季) 7・8月(夏季) 10月(秋季)	現地確認(目撃)およびフィールドサイン法
				-	St.2 (仙翁谷)		
				-	St.3 (中島周辺)		
平成6年 (1994)	9	ダム自然環境調査	ダム湖周辺	St.4 St.6	No.1 (トラップ法)	平成6年 5月(春季) 7月(夏季) 11月(秋季) 平成7年 1月(冬季)	目撃法・フィールドサイン法 トラップ法:パンチュートラップ 30個(餌はピーナッツ、ドライソーセージ) モールドラップ 10個
				St.10 St.12	No.2 (トラップ法)		
				St.14 St.18	No.3 (トラップ法)		
平成12年 (2000)	25	ダム自然環境調査	ダム湖周辺	St.5 St.6	St.1 (トラップ法)	両生類・爬虫類 平成12年 5・6月(春季) 8月(夏季) 10・11月(秋季)  哺乳類 平成12年 5・6月(春季) 8月(夏季) 10・11月(秋季) 平成13年 1月(冬季)	[両生類・爬虫類] 捕獲確認、目撃法  [哺乳類] 目撃法・フィールドサイン法 トラップ法: パンチュートラップ・シャーマントラップ 30個×2季(餌はピーナッツ) 金網製捕獲カゴ(イタチ用トラップ)3個×2季(餌は鶏肉・魚のアラ) モールドラップ 20個×1季
				St.11 St.12	St.2 (トラップ法)		
				St.13 St.15 St.19	St.3 (夏)(トラップ法) St.3 (春・秋)(トラップ法)		
平成17年 (2005)	39	ダム自然環境調査	流入河川	St.21	St.6	両生類・爬虫類 平成17年 5月(春季) 8月(夏季) 10月(秋季)  哺乳類 平成17年 5月(春季) 8月(夏季) 10月(秋季) 12月(冬季)	[両生類・爬虫類] 捕獲確認、目撃法  [哺乳類] 目撃法・フィールドサイン法(夜間調査時にバットディテクター使用) トラップ法: パンチュートラップ 30個×2季(餌はピーナッツ) 金網製捕獲カゴ 10個×1季(アジ、イワシ) モールドラップ 10個×2季
			下流河川	St.1	St.4		
				St.2 St.3	St.1 (トラップ法)		
				St.8 St.9	St.2 (トラップ法)		
				St.17 St.18	St.3 (トラップ法)		
				St.7	St.5		
				- St.16 St.23	その他の調査区域  モグラ類 トラップ 設置地点		
	St.20 St.22	トガリネズミ類 トラップ設置地点					

注) 1. 調査番号 6 と 9 で、河川水辺の国勢調査 1 回分の調査である。

注) 2. 「-」は、調査位置が特定できないことを示す。

注) 3. 河川環境を中心とした調査地点のみ流入河川または下流河川とした。

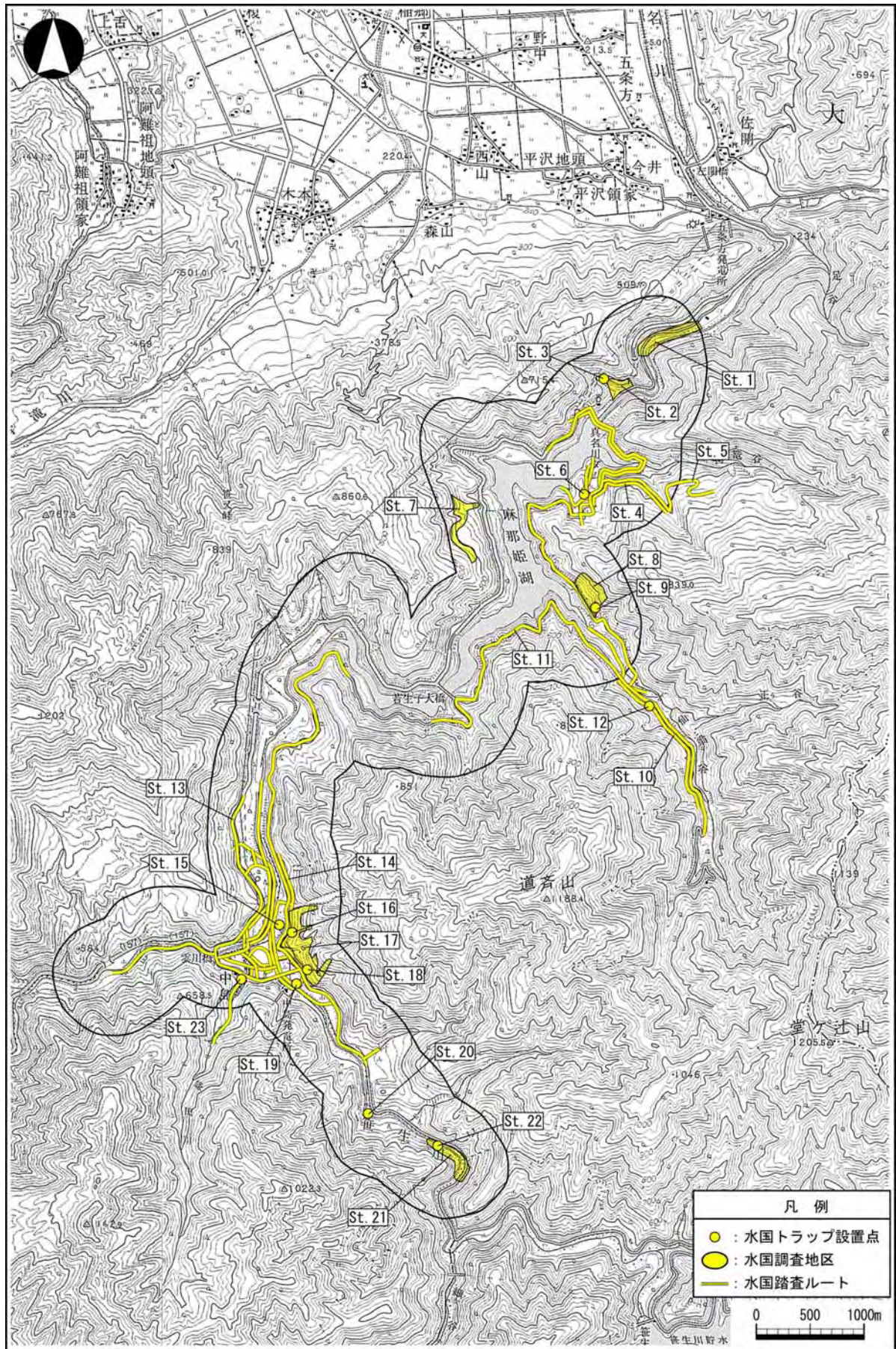


図 6.1-3(6) 両生類・爬虫類・哺乳類調査地点位置図



表 6.1-5(7) 調査種別ごとの実施状況の整理（陸上昆虫類等）

年度	調査番号	調査件名	調査範囲	調査地点	報告書調査地点番号	調査時期	調査方法
平成4年 (1992)	4	ダム自然環境調査	流入河川	St.18 St.31 St.19 St.28 St.32	St.3(任意) St.3(ライト) St.3(ビット) St.3(ビット) St.3(ビット)	平成4年9月	任意採集法 ライトトラップ法(カーテン法、500wの水銀灯1灯を日没後～22時まで点灯) ビットフォールトラップ法(1地点に25個設置、餌は焼酎と黒砂糖の混合液)
			流入支川	St.13	St.2(任意)		
			ダム湖周辺	St.2 St.3 St.6	St.1(任意) St.1(ビット) St.1(ビット)		
平成5年 (1993)	7	ダム自然環境調査	流入河川	St.20 St.21 St.22 St.24 St.19 St.27 St.32	St.3(任意) St.3(ライト) St.3(ライト) St.3(ビット) St.3(ビット) St.3(ビット) St.3(ビット)	平成5年5、6、7、8月	任意採集法 ライトトラップ法(カーテン法、500wの水銀灯1灯を日没後～22時まで点灯) ビットフォールトラップ法(1地点に20～35個設置、餌は焼酎と黒砂糖の混合液)
			流入支川	St.12	St.2(任意)		
			ダム湖周辺	St.4 St.3 St.6	St.1(任意) St.1(ビット) St.1(ビット)		
平成11年 (1999)	24	ダム自然環境調査	流入河川	St.17 St.23 St.29  St.33 St.30 St.25	No.3(任意) 3-1(ライト) 3-2.3-3.3-4.3-5.3-6(ライト)  3-1.3-4(ビット) 3-2.3-5.3-7(ビット) 3-3.3-6.3-8(ビット)	平成11年5、6、7、9月	任意採集法 ライトトラップ法(カーテン法、100wの紫外線灯と150wの水銀灯の2灯を日没後～22時まで点灯) ビットフォールトラップ法(1地点に10～30個設置、餌は焼酎と黒砂糖の混合液)
			流入支川	St.11	No.2(任意)		
			ダム湖周辺	St.5 St.3 St.6 St.7	No.1(任意) 1-1.1-5.1-7(ビット) 1-2.1-4.1-6(ビット) 1-3(ビット)		
平成16年 (2004)	38	ダム自然環境調査	流入河川	St.34	No.5(任意)	平成16年5、6、7、8、9、10月	任意採集法 ライトトラップ法(ボックス法、6wの紫外線灯1灯を点灯) ビットフォールトラップ法(1地点に30個設置、餌は焼酎と黒砂糖の混合液)
			下流河川	St.1	No.6(任意)		
			ダム湖周辺	St.8 St.10 St.9	No.1(任意) No.1(ライト) No.1(ビット)		
				St.26 St.27 St.27	No.2(任意) No.2(ライト) No.2(ビット)		
				St.15 St.16	No.3(任意) No.3(ビット)		
				St.14	No.4(任意)		
				St.23	No.7		
ライトトラップ法(カーテン法、100wの紫外線灯と100wの水銀灯の2灯を日没後～22時まで点灯)							

注) 1. 調査番号4と7で、河川水辺の国勢調査1回分の調査である。

注) 2. 任意：任意採集法、ライト：ライトトラップ法、ビット：ビットフォールトラップ法の略

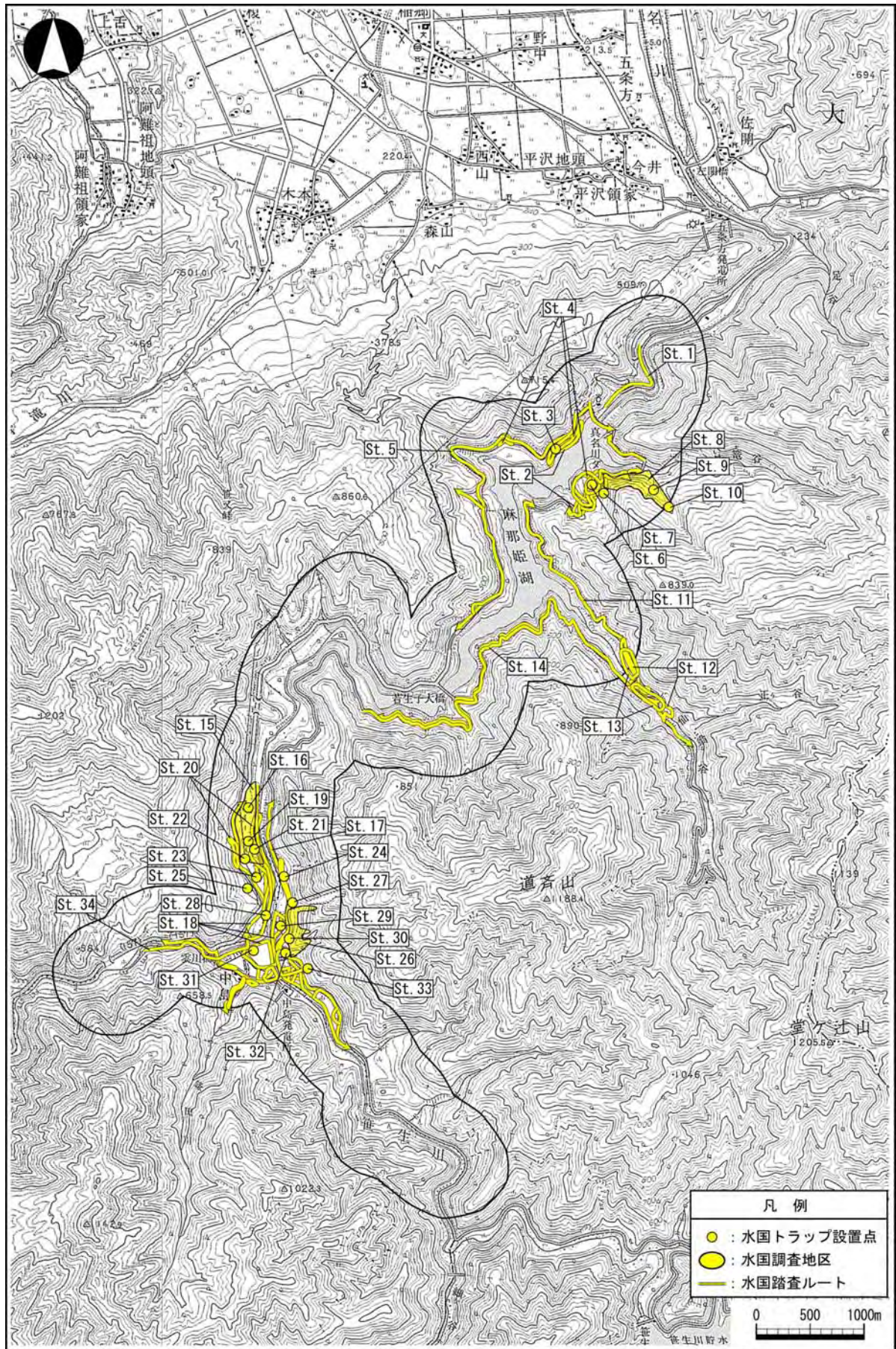


図 6.1-3(7) 陸上昆虫類等調査地点位置図

表 6.1-5(8) 調査種別ごとの実施状況の整理（保全対策：湖岸緑化試験）

年度	調査番号	調査件名	調査範囲	調査地点	調査時期	調査方法
平成6年 (1994)	12	真名川ダム湖岸裸地対策調査	真名川ダム湖岸法面	St.1、2、3	(不明)	土壌、植生調査
平成7年 (1995)	14	真名川ダム湖岸裸地対策調査	真名川ダム湖岸法面	緑化試験地	平成7年10月3日～11月22日(気象・冠水) 平成7年10、11月(植物の生育状況・法面の安定状況) 平成7年10月(土壌)	気象、冠水状況、植物の生育状況、法面の安定状況(法面・土壌)
平成8年 (1996)	16	真名川ダム湖岸裸地対策調査	真名川ダム湖岸法面	緑化試験地	平成7年11月23日～平成8年10月24日(気象・冠水)、平成8年8月、9月、10月、(植物の生育状況・法面の安定状況)	気象、冠水状況、植物の生育状況、法面の安定状況(法面・土壌)
平成9年 (1997)	20	真名川ダム湖岸裸地対策調査	真名川ダム湖岸法面	緑化試験地	平成8年10月25日～平成9年9月10日(気象・冠水) 平成9年8、9月(植物)	気象、冠水状況、植物の生育状況、法面の安定状況(法面・土壌)
平成10年 (1998)	23	真名川ダム緑化現地調査	真名川ダム湖岸法面	緑化試験地	平成10年9月(植物・法面の安定状況)、平成10年10月(湖岸全体の状況)	植物の生育状況、法面の安定状況(法面・土壌)、湖岸全体の状況(裸地の分布状況、法面の状況、)
			湖岸全体	No.1～16		

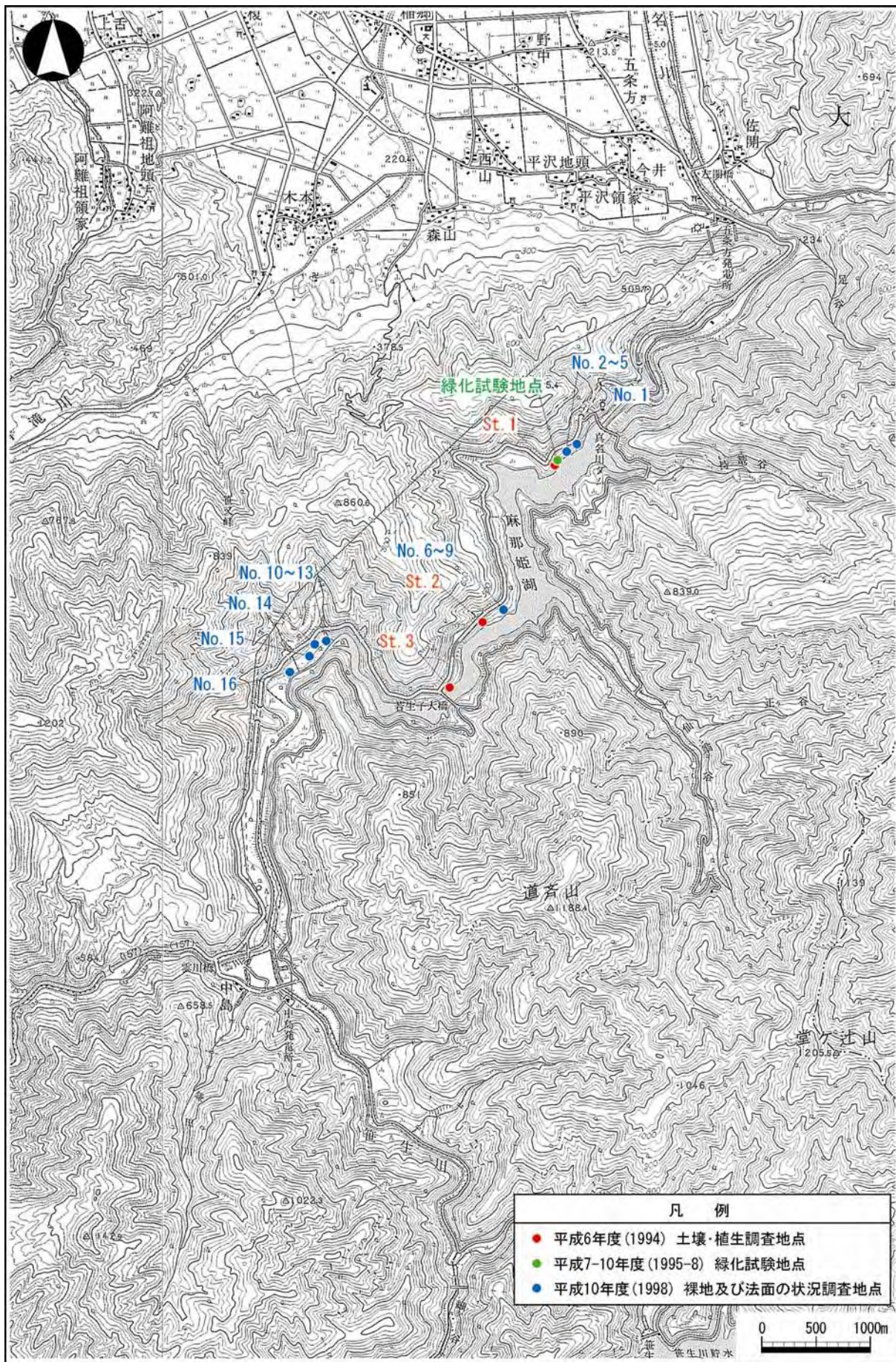


図 6.1-3(8) 緑化試験調査地点位置図

表 6.1-5(9) 調査種別ごとの実施状況の整理（保全対策：水環境改善事業）

年度	調査番号	調査件名	調査範囲	調査地点	調査時期	調査方法
平成9年 (1997)	17	ダム自然環境調査	下流河川	No.1(1)、(2)	平成9年 5、8、10 月	魚類捕獲調査 (刺網、投網、夕 毛網)
平成10年 (1998)	21	ダム自然環境調査	下流河川	No.1(1)、(2)	平成10年 6、8、10 月	魚類捕獲調査 (刺網、投網、夕 毛網)

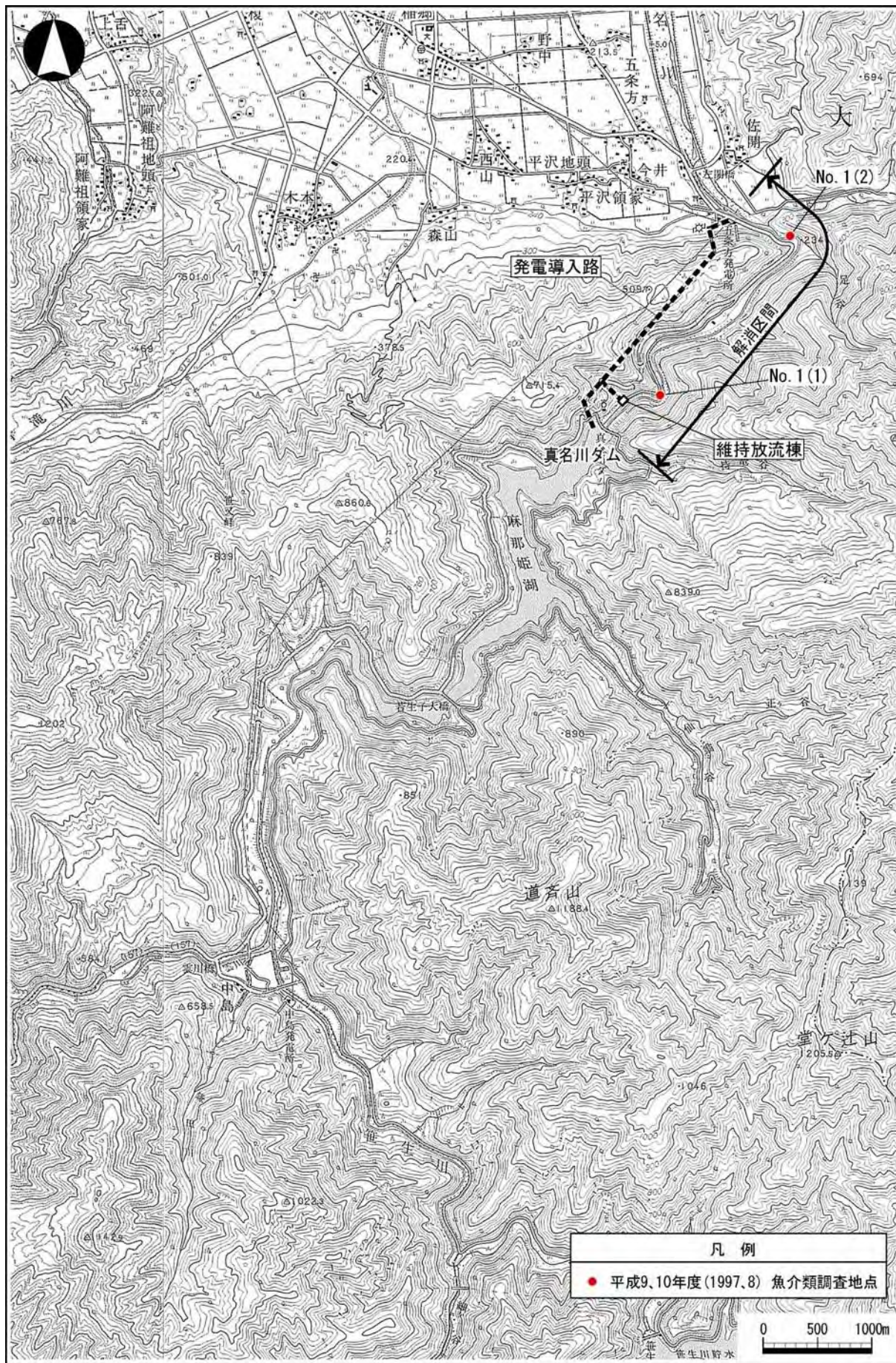


図 6.1-3(9) 水環境改善事業調査地点位置図

表 6.1-5(10) 調査種別ごとの実施状況の整理（保全対策：ダム弾力的管理試験）

年度	調査番号	調査件名	調査範囲	調査地点	調査時期	調査内容等
平成12年 (2000)	28	真名川ダム弾力的管理試験 評価検討	下流河川 (ダム直下- 富田大橋)	プラント前、佐開橋、 八千代橋、君が代橋、 富田大橋、	平成12 年7、8、 9月	水質調査、流量、魚類、 付着藻類、河床材料
平成13年 (2001)	31	弾力的管理試験事前生態調 査	下流河川 (ダム直下- 九頭竜川合 流点)	ダムサイト、真名川溪 谷、プラント前、八千代 橋、	平成13 年6、月	水質調査、ハビタッ ト、鮎、付着藻類
平成14年 (2002)	35	真名川ダム弾力的管理試験 効果調査 これまでの調 査・検討業務の概要	下流河川 (ダム直下- 君が代橋)	ダムサイト、プラント前、 プラント前下流、真 名川溪谷、佐開橋、八 千代橋、君が代橋	平成14 年6、8、 9月	ハビタット、水質調 査、魚類、付着藻類、景 観、小滝の落ち込み分 布
平成15年 (2003)	37	真名川ダム弾力的管理試験 効果調査	下流河川 (ダム直下- 真名川大橋)	ダムサイト、プラント前、 佐開橋、八千代橋、君 が代橋、富田大橋、真 名川大橋	平成15 年7、8、 9、10月	水質調査、物理環境、 アコ捕獲、付着藻類、 河道状況
平成17年 (2005)	41	真名川ダム弾力的管理試験 効果調査	下流河川 (ダム直下- 九頭竜川合 流点、及び市 荒川発電出 口)	ダムサイト、プラント前 真名川溪谷、佐開橋、 八千代橋上流、八千代 橋、君が代橋土砂設置 上流、君が代橋土砂設 置下流、君が代橋、富 田大橋、九頭竜川合流 地点、市荒川発電出口	平成17 年7、8、 12、 平成18 年2月	アコ調査、付着藻類、 水温・水質調査、河道 状況等
平成18年 (2006)	44	真名川ダム弾力的管理試験 効果調査	下流河川 (ダム直下- 九頭竜川合 流点、及び市 荒川発電出 口)	ダムサイト、八千代 橋、上1、君が代橋土 砂投入場、下1、君が 代橋、下2、下3、下 4、富田大橋、市荒川 発電出口	平成18 年11月	物理環境調査、水質調 査、水位観測、還元土 砂の流下状況調査、還 元土砂調査

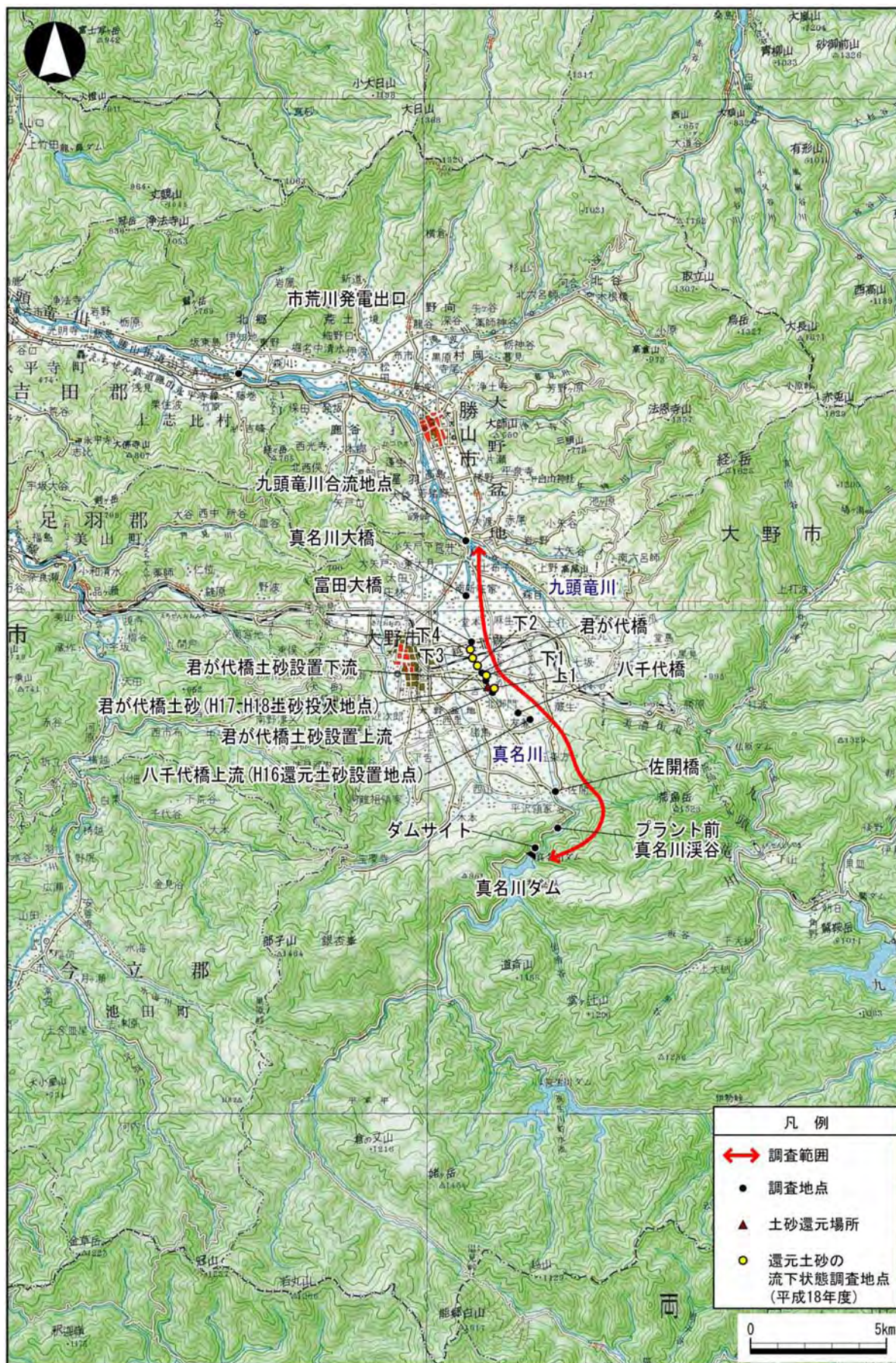


図 6.1-3(10) ダムの弾力的管理試験調査地点位置図



## 6.2 ダム湖及びその周辺の環境の把握

### 6.2.1 環境の概況

真名川ダム湖周辺環境情報図（広域図）を図6.2-1に示す。

真名川ダムの位置する真名川は、九頭竜川の支川で大野盆地を流れ、下荒井で九頭竜川に合流する。流域面積は356.9km<sup>2</sup>で、真名川ダムの上流には笹生川ダムと雲川ダムが存在する。流域面積の80.4%は山地で、ブナ - ミズナラ林等の豊かな山林に広くおおわれている。また、真名川ダムを含む流域の一部は奥越高原県立自然公園に属し、ダム湖周辺は鳥獣保護区に指定されている。気候は日本海型気候の多雨多雪地帯に属し、平均年間降水量は、平野部で2,000～2,400mm、山間部で2,600～3,000mmとなっており、降雪量は平野部で2～3m、山沿いで6m以上に達する。

出典：6-52 「九頭竜ダム・真名川ダムパンフレット」

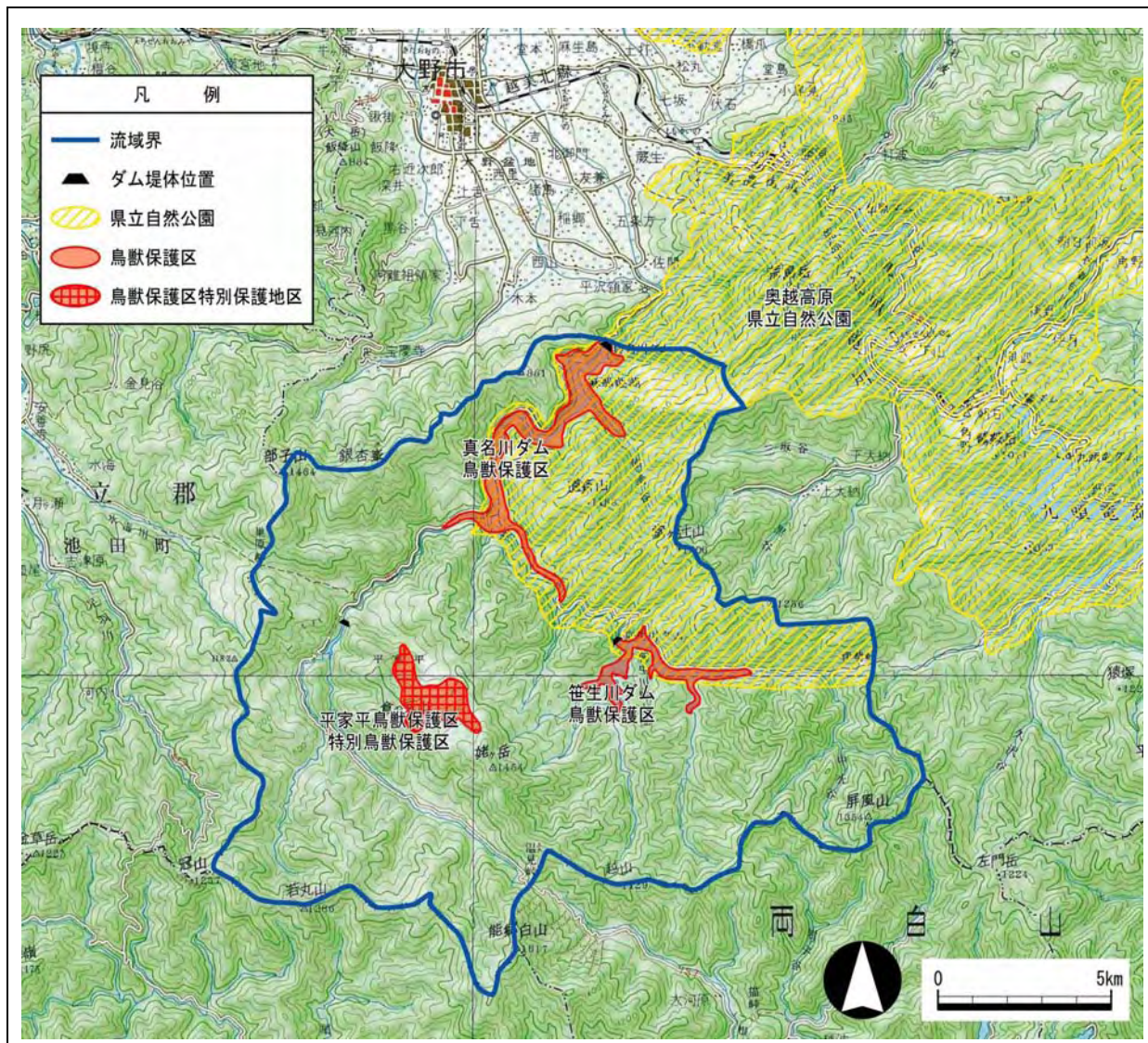


図 6.2-1 真名川ダム周辺環境情報図（広域図）

## 6.2.2 ダム湖周辺環境の概況

### (1)自然環境の概況

真名川ダムの周辺には、落葉広葉樹林（クリ・コナラ群落等）が広く分布し、谷沢には自然植生のトチノキ - サワグルミ群落が点在する。

これまで実施した河川水辺の国勢調査で、134科 1060種の植物、14科 24種の哺乳類、35科 97種の鳥類、6科 10種の両生類、5科 10種の爬虫類、252科 2649種の陸上昆虫類等を確認している。ツキノワグマ、カモシカ等の大型哺乳類や、クマタカ、アオバト、オオアカゲラ等の山地森林性の鳥類、ナガレヒキガエル、カジカガエル等の渓流性の種などの出現が特徴である。

水域では、9科 21種の魚類、4科 4種のエビ・カニ・貝類、106科 309種の底生動物、7綱 116種の植物プランクトン、10綱 56種の動物プランクトンを確認している。ダム湖内では、コイやギンブナ等の止水環境を好む魚類や、陸封化されたアマゴなどを確認している。流入河川や下流河川ではアブラハヤ、カジカ等の渓流環境を好む種を多く確認しているほか、持籠谷川や仙翁谷川等の流入支川ではイワナ、ノギカワゲラ等の主に水温の低い源流域に生息する種も確認している。

### (2)重要種<sup>注)</sup>

天然記念物、環境省レッドデータブック掲載種、福井県レッドデータブック掲載種等の重要種は、魚類はハス、アジメドジョウ、カジカ等の8種、底生動物はミネトワダカワゲラ、ミヤマノギカワゲラ、オオナガレトビケラの3種、鳥類はオシドリ、クマタカ、ハヤブサ、ヤマセミ等の21種、植物はノダイオウ、ツメレンゲ、エビネ等の42種、両生類・爬虫類・哺乳類はヒダサンショウウオ、イモリ、イシガメ、カモシカ等の9種、陸上昆虫類等はムカシトンボ、オオムラサキ、フクイアナバチ等の15種を確認している。

カジカ、クマタカ、ヤマセミ、イモリ、カモシカ等の重要種は経年的に確認しており、ハヤブサは平成13年に営巣場所が発見されて以降、4年連続で繁殖に成功している。ダム湖及びその周辺が多く的重要種の生息・生育環境として利用されている。

注) 河川水辺の国勢調査のマニュアル改訂により、「特定種」の名称が「重要種」に変更された。

### (3)外来種

特定外来種による生態系等に係る被害の防止に関する法律に基づき規制される生物リストの掲載種、要注外来生物リストの掲載種、外来種ハンドブックの掲載種等の外来種は、魚類はニジマス、鳥類はドバト、哺乳類はハツカネズミとハクビシン、植物はイタチハギ、ハリエンジュ、アレチウリ、オオハンゴンソウ等の78種、陸上昆虫類等はオオタバコガ、ブタクサハムシ、セイヨウミツバチ等の5種を確認している。

これらのうち、植物のアレチウリとオオハンゴンソウが特定外来生物に、魚類のニジマス、植物のイタチハギ、ハリエンジュ等21種が要注外来生物に該当する。なお、オオハンゴンソウは平成7年度の調査より継続確認しており、アレチウリは平成15年度の調査で初めて確認した。

(4)その他トピックス

a)魚類の放流実績

真名川では大野市漁業協同組合に対し「内水面にかかる共同漁業権」が免許されており、真名川における漁場の区域は図 6.2-2 に示すとおり大野市堀兼真名川堀兼えん堤下流端より九頭竜川合流点までである。なお、漁場の区域には真名川ダム湖内及び真名川ダムの上流域は含まれない。

大野市漁業協同組合の漁場区域における魚類の放流量及び漁獲量は表 6.2-1 に示すとおりである。昭和 61 年～平成 18 年の間に、同組合によってコイ、フナ、アユ、イワナ、ニジマス、ヤマメ、アマゴが放流されている。また、平成 15 年～平成 18 年の間に、コイ、フナ、アユ、イワナ、ヤマメ、アマゴが漁獲されている。

なお、真名川ダム上流では、釣人によるアユの私的な放流が行われている。

表 6.2-1(1) 漁業協同組合による魚類の放流量及び漁獲量

区間	対象魚類名	稚魚・成魚放流量 kg/年															放流場所	備考	
		S61	S62	S63	H1	H2	H3	H4	H5	H6	H7	H8	H9	H10	H11	H12			H13
ダム下流	アユ	2350	2870	2350	2805	3200	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	真名川大橋～佐開橋	
		-	-	-	-	-	-	1503	1563	1659	1704	1750	1500	3290	-	-	-	真名川大橋～佐開橋	琵琶湖産
		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1750	1500	1895	1710	1940	土布子橋～佐開橋	琵琶湖産 福井県産
	イワナ	0.3 <sup>*</sup>	-	-	-	7 <sup>*</sup>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	不明	
		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	-	-	-	-	佐開橋～太郎丸	
	ニジマス	-	-	-	-	-	-	-	0.2 <sup>*</sup>	-	-	-	-	-	-	-	-	佐開橋～太郎丸	
	ヤマメ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	40	15	24	八千代橋～佐開橋
アマゴ	-	-	-	-	-	-	9 <sup>*</sup>	11 <sup>*</sup>	-	91	168	300	-	-	-	-	佐開橋～太郎丸		
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	91	168	200	203	223	120	100	110	佐開橋～八千代橋	岐阜県産
ダム下流 (真名川支流)	コイ	0.075 <sup>*</sup>	10 <sup>*</sup>	10 <sup>*</sup>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	不明	
		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	150	-	-	-	-	赤根川清滝神社付近	
	フナ	-	10 <sup>*</sup>	10 <sup>*</sup>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	不明	
	アユ	-	-	-	-	-	-	-	150	-	71	-	-	-	-	-	-	清滝川下郷橋付近	琵琶湖産
	アマゴ	-	-	-	-	-	-	-	1 <sup>*</sup>	4 <sup>*</sup>	-	15	-	-	-	-	-	清滝川木ノ本上流	
流入河川・ダム下流	アマゴ	46 <sup>*</sup>	51 <sup>*</sup>	49 <sup>*</sup>	60 <sup>*</sup>	60 <sup>*</sup>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	雲川ダム～中島付近 佐開橋～国道158号線付近		

注 1) \*: 千尾/年で表されている数値

注 2) 流入河川・ダム下流のアマゴは、2箇所放流されたことを示す(放流量は2箇所の合計のみが記載されていた)。

出典：6-1 「平成 2 年度水生生物(魚貝類)調査作業報告書」

6-12 「平成 8 年度ダム自然環境調査業務報告書(魚介類)」

6-33 「平成 9 年度ダム自然環境調査業務報告書(魚介類)」

6-34 「平成 10 年度ダム自然環境調査業務報告書(魚介類)」

6-19 「平成 13 年度ダム自然環境調査業務報告書(魚介類)」

表 6.2-1(2) 漁業協同組合による魚類の放流量及び漁獲量

対象 魚類名	稚魚・成魚放流量			
	kg/年			
	H15	H16	H17	H18
フナ	-	-	20	20
アユ	2500	3080	3550	3020
イワナ	200	150	200	130
ヤマメ	50	140	200	110
アマゴ	150	156	200	180

出典：6-49「大野市漁業協同組合聞き取り結果」

表 6.2-1(3) 漁業協同組合による魚類の放流量及び漁獲量

対象 魚類名	漁獲量			
	kg/年			
	H15	H16	H17	H18
コイ	50	-	-	-
フナ	50	40	50	50
アユ	10500	7000	7500	21000
イワナ	720	1000	1100	3000
ヤマメ	2000	5000	5500	6000
アマゴ	480	500	1200	5000

出典：6-49「大野市漁業協同組合聞き取り結果」

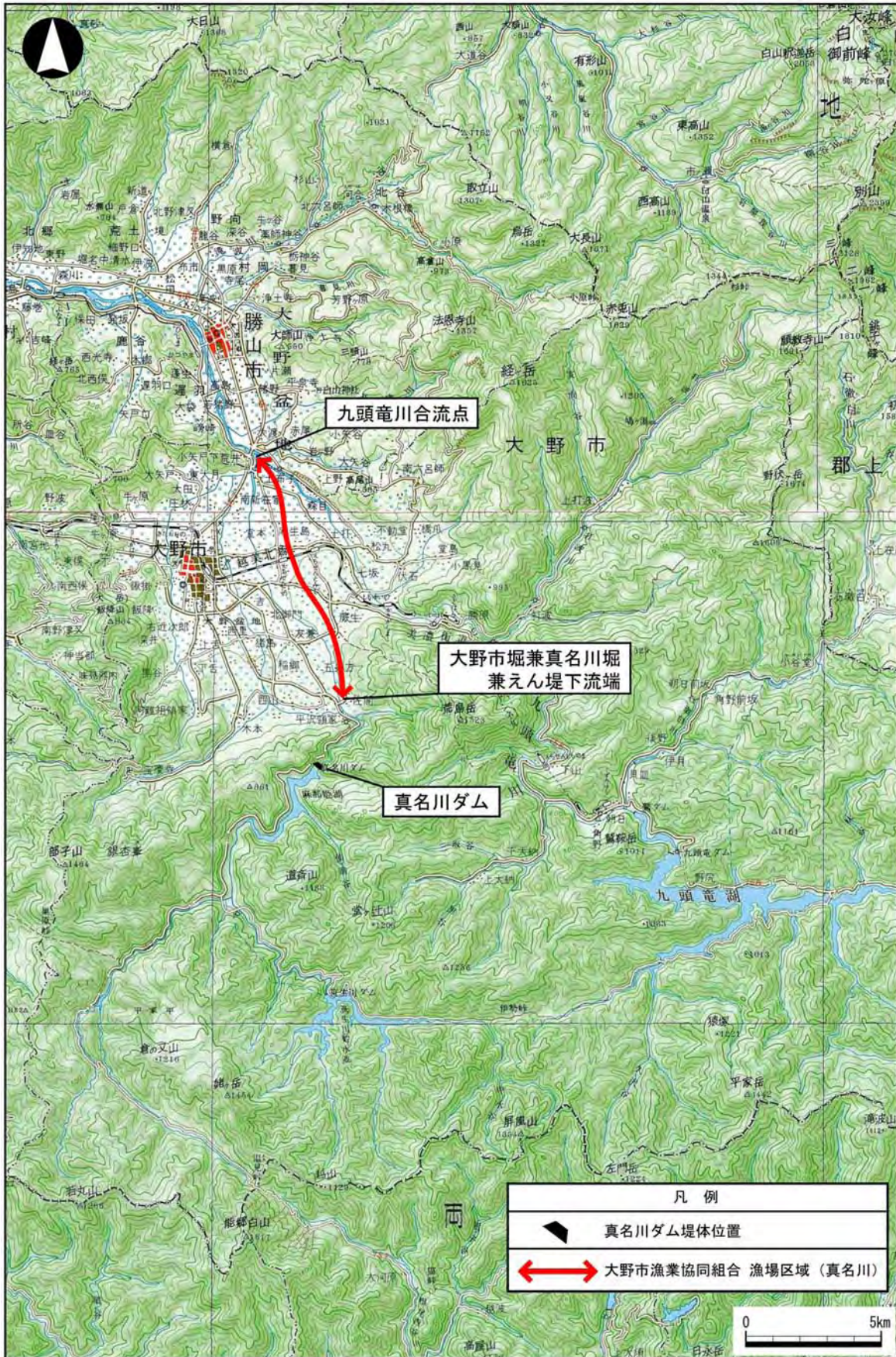


図 6.2-2 真名川における大野市漁業協同組合の漁場区域図

(5)環境情報図

真名川ダム周辺環境情報図（全体図）を図6.2-3に示す。

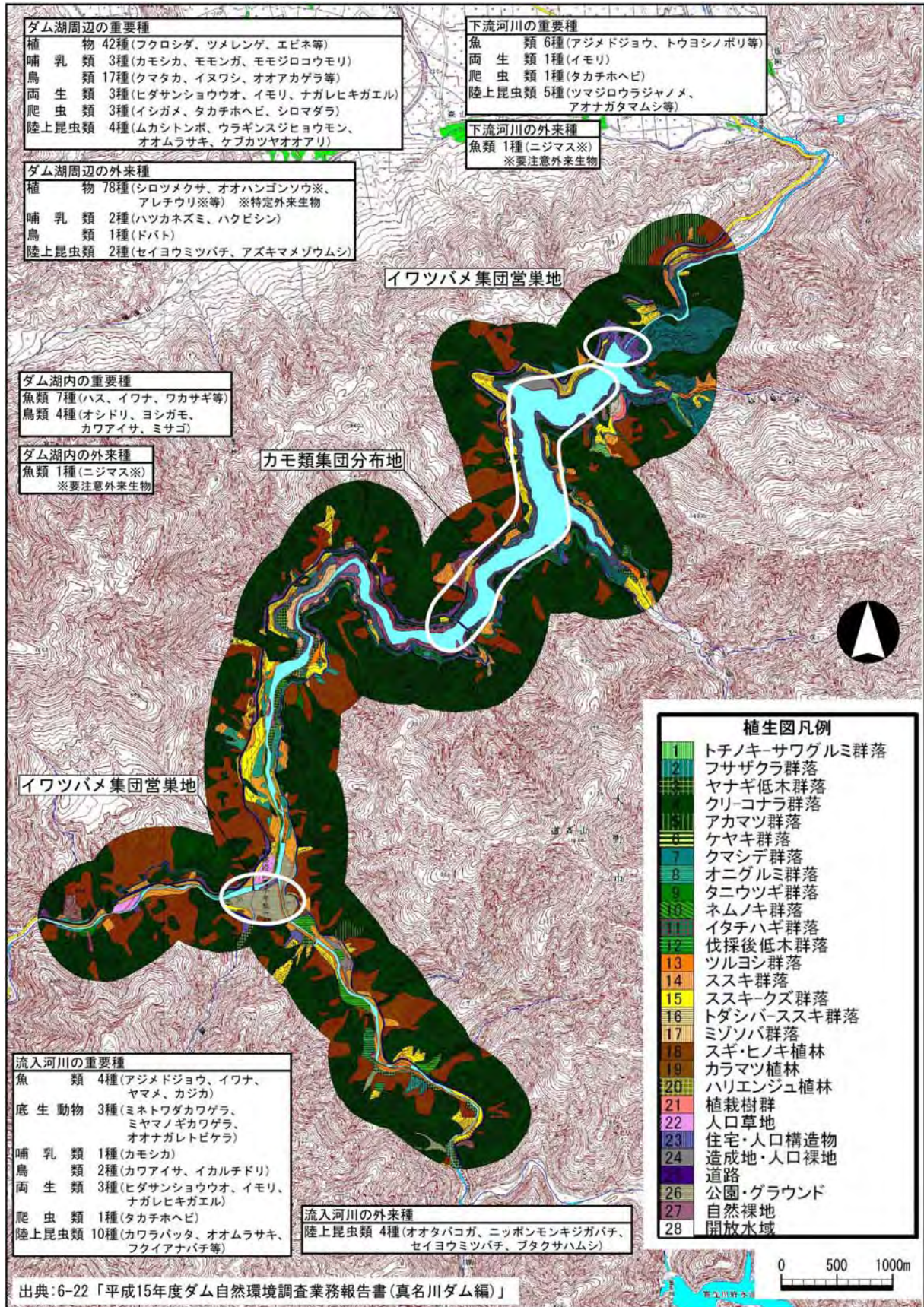


図6.2-3 ダム湖周辺環境情報図（全体図）

### 6.2.3 ダム湖およびその周辺の生物の特徴

#### (1)魚類

##### 1)確認種の概要

これまでに実施した4回の国勢調査で、表6.2-1(1)に示す5目9科21種の魚類を確認した。

確認種の中ではコイ科に属する種が多く、コイ、ギンブナ、オイカワ、タカハヤ、ウグイなど10種を確認し、次いでサケ科に属する種をイワナ、ヤマメなど4種確認した。また、オイカワ、アブラハヤ、ウグイ、カマツカ、アユ、イワナ、アマゴ(サツキマスは平成13年度に確認)、カジカの8種は、全ての調査年度で確認した。

表6.2-2(1) 魚類の確認状況

No	確認種			調査年度				重要種	外来種
	目名	科名	種名	平成2-3年 (1990-1)	平成5年 (1993)	平成8年 (1996)	平成13年 (2001)		
1	コイ目	コイ科	コイ			○			
2			ギンブナ		○	○	○		
-			フナ類	○					
3			ハス	○		○			●
4			オイカワ	○	○	○	○		
5			アブラハヤ	○	○	○	○		
6			タカハヤ			○	○		
7			ウグイ	○	○	○	○		
8			ビワヒガイ					○	
9			カマツカ	○	○	○	○		
10			ニゴイ		○	○	○		
11		ドジョウ科	アジメドジョウ			○	○	●	
12	ナズ目	ギギ科	ギギ		○	○	○		
13		アカザ科	アカザ			○	○	●	
14	サケ目	キュウリウオ科	ワカサギ	○	○	○		●	
15		アユ科	アユ	○	○	○	○		
16		サケ科	イワナ	○	○	○	○	●	
17			ニジマス		○	○	○		●
18			ヤマメ	○		○	○	●	
19			アマゴ (サツキマス)	○	○	○	○ (○)		
-				○	○	○			
20	カサゴ目	カジカ科	カジカ	○	○	○	○	●	
21	スズキ目	ハゼ科	トウヨシノボリ		○	○	○	●	
確認種数				12	14	20	18	8	1
				21					

注)1. 重要種の選定基準は以下のとおりである。

- ・国、県、市町村指定の天然記念物(文化財保護法)
- ・「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」における国内希少野生動植物種
- ・レッドデータブック(環境省編)の掲載種(平成19年に公表した見直しリストの掲載種)
- ・福井県レッドデータブックの掲載種(平成14年の動物編の掲載種)

注)2. 外来種の選定基準は以下のとおりである。

- ・「外来種ハンドブック」(日本生態学会, 平成14年)の国外外来種
- ・「特定外来生物」及び「要注意外来生物」

出典: 6-1 「平成2年度水生生物(魚貝類)調査作業報告書」

6-2 「平成3年度水生生物調査作業報告書」

6-7 「平成5年度ダム自然環境調査報告書(魚介類)」

6-12 「平成8年度ダム自然環境調査業務報告書(魚介類)」

6-19 「平成13年度ダム自然環境調査業務報告書(魚介類)」

6-57 「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-4 汽水・淡水魚類」

6-63 「哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物Ⅰ及び植物Ⅱのレッドリストの見直しについて」

6-64 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 福井県レッドデータブック(動物編)」

6-100 「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律に基づき規制される生物リスト」

6-101 「要注意外来生物リスト」

6-102 「外来種ハンドブック」

## 2)重要種

重要種は、ハス、アジメドジョウ、カジカ等、表 6.2-2(2)に示す 7 科 8 種を確認した。

表 6.2-2(2) 魚類（重要種）の確認状況

No.	科名	種名	調査年度				選定基準			
			平成2-3年 (1990-1)	平成5年 (1993)	平成8年 (1996)	平成13年 (2001)	天然 記念物	種の 保存法	環境省 RL	福井県 RDB
1	コイ科	ハス	○		○				VU	危険Ⅰ
2	ドジョウ科	アジメドジョウ			○	○			VU	危険Ⅱ
3	アカザ科	アカザ			○	○			VU	危険Ⅱ
4	キュウリウオ科	ワカサギ	○	○	○					危険Ⅱ
5	サケ科	イワナ	○	○	○	○				危険Ⅱ
6		ヤマメ	○		○	○				危険Ⅱ
7	カジカ科	カジカ	○		○	○			NT	準危険
8	ハゼ科	トウヨシノボリ		○	○	○				準危険
合計	7科	8種	5種	4種	8種	6種	-	-	4種	8種

注) 1. 重要種の選定基準は以下のとおりである。

- ・国、県、市町村指定の天然記念物(文化財保護法)
- ・「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」における国内希少野生動植物種
- ・レッドデータブック(環境省編)の掲載種(平成 19 年に公表した見直しリストの掲載種)
- ・福井県レッドデータブックの掲載種(平成 14 年の動物編の掲載種)

出典: 6-1 「平成 2 年度水生生物(魚貝類)調査作業報告書」

6-2 「平成 3 年度水生生物調査作業報告書」

6-7 「平成 5 年度ダム自然環境調査報告書(魚介類)」

6-12 「平成 8 年度ダム自然環境調査業務報告書(魚介類)」

6-19 「平成 13 年度ダム自然環境調査業務報告書(魚介類)」

6-57 「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-4 汽水・淡水魚類」

6-63 「哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物Ⅰ及び植物Ⅱのレッドリストの見直しについて」

6-64 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 福井県レッドデータブック(動物編)」

## 3)外来種

外来種は、平成 5 年度以降に実施した 3 回の調査で、要注意外来生物のニジマスを確認している。

表 6.2-2(3) 魚類（外来種）の確認状況

No.	科名	種名	調査年度				外来生物法		外来種 ハンドブック
			平成2-3年 (1990-1)	平成5年 (1993)	平成8年 (1996)	平成13年 (2001)	特定	要注意	
1	サケ科	ニジマス		○	○	○		●	●
合計	1科	1種	-	1種	1種	1種	-	1種	1種

注) 1. 外来種の選定基準は以下のとおりである。

- ・「外来種ハンドブック」(日本生態学会, 平成 14 年)の国外外来種
- ・「特定外来生物」及び「要注意外来生物」

出典: 6-1 「平成 2 年度水生生物(魚貝類)調査作業報告書」

6-2 「平成 3 年度水生生物調査作業報告書」

6-7 「平成 5 年度ダム自然環境調査報告書(魚介類)」

6-12 「平成 8 年度ダム自然環境調査業務報告書(魚介類)」

6-19 「平成 13 年度ダム自然環境調査業務報告書(魚介類)」

6-100 「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律に基づき規制される生物リスト」

6-101 「要注意外来生物リスト」

6-102 「外来種ハンドブック」



## (2)エビ・カニ・貝類

### 1)確認種の概要

これまでに実施した4回の国勢調査で、表6.2-3に示す2科4種のエビ類・カニ類・貝類を確認した。

確認種の大部分は、流入河川または下流河川で確認しており、ダム湖内では平成3年度にスジエビを確認したのみであった。

表6.2-3 エビ・カニ・貝類の確認状況

No	確認種			調査年度				重要種	外来種
	目名	科名	種名	平成2-3年 (1990-1)	平成5年 (1993)	平成8年 (1996)	平成13年 (2001)		
1	エビ目	カワニナ科	カワニナ			○	○		
2	エビ目	テナガエビ科	スジエビ	○		○	○		
3		ヌマエビ科	ヌマエビ			○			
4		サワガニ科	サワガニ			○	○		
確認種数				1	0	4	3	0	0
				4					

注)1. 重要種の選定基準は以下のとおりである。

- ・国、県、市町村指定の天然記念物(文化財保護法)
- ・「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」における国内希少野生動植物種
- ・レッドデータブック(環境省編)の掲載種(平成18年に公表した見直しリストの掲載種)
- ・福井県レッドデータブックの掲載種(平成14年の動物編の掲載種)

注)2. 外来種の選定基準は以下のとおりである。

- ・「外来種ハンドブック」(日本生態学会,平成14年)の国外外来種
- ・「特定外来生物」及び「要注意外来生物」

出典:6-1 「平成2年度水生生物(魚貝類)調査作業報告書」

6-2 「平成3年度水生生物調査作業報告書」

6-7 「平成5年度ダム自然環境調査報告書(魚介類)」

6-12 「平成8年度ダム自然環境調査業務報告書(魚介類)」

6-19 「平成13年度ダム自然環境調査業務報告書(魚介類)」

6-59 「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-6 陸・淡水産貝類」

6-60 「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-7 クモ形類・甲殻類等」

6-63 「哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物Ⅰ及び植物Ⅱのレッドリストの見直しについて」

6-64 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 福井県レッドデータブック(動物編)」

6-100 「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律に基づき規制される生物リスト」

6-101 「要注意外来生物リスト」

6-102 「外来種ハンドブック」

### 2)重要種

確認種の中に重要種は含まれていない。

### 3)外来種

確認種の中に外来種は含まれていない。

(3)底生動物

1)確認種概要

これまでに実施した4回の国勢調査で、表6.2-4(1)に示す106科309種の底生動物を確認した。なお、確認状況の詳細は資料編に示す。

確認種の中では、カゲロウ目、トビケラ目、ハエ目など昆虫類に属する種が多く、274種を確認した。ダム湖内(最深部)ではイトミミズ類が優占していたが、流入河川や下流河川では溪流性のフタバコカゲロウ、シロハラコカゲロウ、マルツツトビケラ、シマトビケラ属、アシマダラブユ属等が優占していた。

表6.2-4(1) 底生動物の確認状況(確認種数)

門名	綱名	目名	調査年度				重要種	外来種				
			平成6年 (1994年)	平成9年 (1997年)	平成14年 (2002年)	平成18年 (2006年)						
			科数:種数	科数:種数	科数:種数	科数:種数						
海綿動物門	普通海綿綱	サラカイメン目	-	-	-	1	-	-				
刺胞動物門	ヒドロ虫綱	無鞘目(花クラゲ目)	-	-	-	1	-	-				
扁形動物門	渦虫綱	順列目	1	1	1	2	-	-				
紐形動物門	有針綱	ハリヒモムシ目	-	-	-	1	-	-				
類線形動物門	ハリガネムシ綱	ハリガネムシ目	-	-	-	2	-	-				
軟体動物門	腹足綱	盤足目	-	-	1	1	1	-	-			
		基眼目	-	-	-	-	1	-	-			
	二枚貝綱	マルスダレガイ目	-	-	-	-	1	-	-			
		オヨギミミズ目	-	-	-	-	1	-	-			
環形動物門	ミミズ綱	イトミミズ目	1	1	1	1	2	10	-	-		
		ツリミミズ目	-	-	-	-	2	2	-	-		
	ヒル綱	無吻蛭目	-	1	-	-	1	1	-	-		
節足動物門	クモ綱	ダニ目	-	-	-	-	6	6	-	-		
		軟甲綱	ヨコエビ目	1	1	1	1	1	1	-	-	
	昆虫綱	ワラジムシ目	1	1	1	1	1	1	-	-		
		エビ目	3	3	3	3	2	2	-	-		
		カゲロウ目	9	25	8	30	7	30	9	45	-	-
		トンボ目	5	7	2	5	3	4	5	7	-	-
		カワゲラ目	6	17	6	18	8	22	6	25	-	2
		カメムシ目	1	1	-	-	-	-	1	5	-	-
		ヘビトンボ目	1	2	1	2	1	2	1	3	-	-
		アミメカゲロウ目	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-
		トビケラ目	12	20	14	32	13	33	22	51	1	-
ハエ目	4	12	6	12	7	27	14	67	-	-		
コウチュウ目	2	6	3	7	3	6	8	21	-	-		
苔虫動物門	被口綱	掩喉目	-	-	-	-	1	1	-	-		
合計			47	98	46	113	49	132	94	260	3	0

注)1. 重要種の選定基準は以下のとおりである。

- ・国、県、市町村指定の天然記念物(文化財保護法)
- ・「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」における国内希少野生動植物種
- ・レッドデータブック(環境省編)の掲載種(平成18年、19年に公表した見直しリストの掲載種)
- ・福井県レッドデータブックの掲載種(平成14年の動物編の掲載種)

注)2. 外来種の選定基準は以下のとおりである。

- ・「外来種ハンドブック」(日本生態学会,平成14年)の国外外来種
- ・「特定外来生物」及び「要注意外来生物」

出典:6-9「平成6年度ダム自然環境調査報告書(底生動物)」

- 6-13「平成9年度ダム自然環境調査業務報告書(底生動物)」
- 6-20「平成14年度ダム自然環境調査業務報告書(底生動物)」
- 6-27「平成18年度ダム自然環境調査業務報告書(底生動物)」
- 6-58「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-5 昆虫類」
- 6-59「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-6 陸・淡水産貝類」
- 6-60「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-7 クモ形類・甲殻類等」
- 6-62「鳥類、爬虫類、両生類及びその他無脊椎動物のレッドリストの見直しについて」
- 6-63「哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物Ⅰ及び植物Ⅱのレッドリストの見直しについて」
- 6-64「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 福井県レッドデータブック(動物編)」
- 6-100「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律に基づき規制される生物リスト」
- 6-101「要注意外来生物リスト」
- 6-102「外来種ハンドブック」

## 2)重要種

重要種は、表 6.2-4(2)に示すとおり、ミヤマノギカワゲラ、ミネトワダカワゲラ、オオナガレトビケラの3種を確認した。

表 6.2-4(2) 底生動物(重要種)の確認状況

No.	科名	種名	調査年度				選定基準				
			平成6年 (1994)	平成9年 (1997)	平成14年 (2002)	平成18年 (2006)	天然 記念物	種の 保存法	環境省 RL	福井県 RDB	
1	トワダカワゲラ科	ミネトワダカワゲラ			○						要目
2	ヒロムネカワゲラ科	ミヤマノギカワゲラ	○	○	○	○					要目
3	ナガレトビケラ科	オオナガレトビケラ	○	○						NT	
合計	3科	3種	2種	2種	2種	1種	-	-	1種		2種

注)1. 重要種の選定基準は以下のとおりである。

- ・国、県、市町村指定の天然記念物(文化財保護法)
- ・「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」における国内希少野生動植物種
- ・レッドデータブック(環境省編)の掲載種(平成18年、19年に公表した見直しリストの掲載種)
- ・福井県レッドデータブックの掲載種(平成14年の動物編の掲載種)

出典:6-9「平成6年度ダム自然環境調査報告書(底生動物)」

6-13「平成9年度ダム自然環境調査業務報告書(底生動物)」

6-20「平成14年度ダム自然環境調査業務報告書(底生動物)」

6-27「平成18年度ダム自然環境調査業務報告書(底生動物)」

6-58「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-5 昆虫類」

6-59「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-6 陸・淡水産貝類」

6-60「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-7 クモ形類・甲殻類等」

6-62「鳥類、爬虫類、両生類及びその他無脊椎動物のレッドリストの見直しについて」

6-63「哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物Ⅰ及び植物Ⅱのレッドリストの見直しについて」

6-64「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 福井県レッドデータブック(動物編)」

## 3)外来種

確認種の中に外来種は含まれていない。

#### (4) 植物プランクトン

##### 1) 確認種概要

これまでに実施した4回の国勢調査で、表6.2-5に示す7綱116種の植物プランクトンを確認した。なお、確認状況の詳細は資料編に示す。

また、優占種は調査年度や調査時期で異なるが、大部分は *Asterionella formosa*、*Cyclotella stelligera*、*Stephanodiscus* spp.等の珪藻類であった。

表 6.2-5 植物プランクトンの確認状況

門名	綱名	調査年度				重要種	外来種
		平成6年 (1994年)	平成12年 (2000年)	平成17年 (2005年)	平成18年 (2006年)		
		科数:種数	科数:種数	科数:種数	科数:種数		
藍色動物	藍藻綱	1: 1	1: 1	1: 3	1: 1	—	—
クリプト植物	クリプト藻綱	—: —	—: —	1: 1	1: 1	—	—
渦鞭毛植物	渦鞭毛藻綱	2: 2	2: 2	2: 2	1: 2	—	—
不等毛植物	黄金色藻綱	1: 1	1: 2	1: 1	2: 3	—	—
	珪藻綱	9: 57	10: 46	9: 54	6: 21	—	—
ミドリムシ植物	ミドリムシ藻綱	1: 2	1: 1	1: 2	1: 1	—	—
緑色植物	緑藻綱	3: 4	8: 10	10: 12	7: 9	—	—
合計		17: 67	23: 62	25: 75	19: 38	0	0
		116					

注)1. 重要種の選定基準は以下のとおりである。

- ・国、県、市町村指定の天然記念物(文化財保護法)
- ・「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」における国内希少野生動植物種
- ・レッドデータブック(環境省編)の掲載種(平成18年、19年に公表した見直しリストの掲載種)
- ・福井県レッドデータブックの掲載種(平成14年の動物編、平成16年の植物編の掲載種)

注)2. 外来種の選定基準は以下のとおりである。

- ・「外来種ハンドブック」(日本生態学会、平成14年)の国外外来種
- ・「特定外来生物」及び「要注意外来生物」

出典: 6-10 「平成6年度ダム自然環境調査報告書(動植物プランクトン)」

6-18 「平成12年度ダム自然環境調査報告書(動植物プランクトン)」

6-26 「平成17年度ダム自然環境調査業務報告書(動植物プランクトン)」

6-28 「平成18年度ダム自然環境調査業務報告書(動植物プランクトン)」

##### 2) 重要種

確認種の中に重要種は含まれていない。

##### 3) 外来種

確認種の中に外来種は含まれていない。

(5)動物プランクトン

1)確認種概要

これまでに実施した4回の国勢調査で、表6.2.6に示す10綱56種の動物プランクトンを確認した。なお、確認状況の詳細は資料編に示す。

また、いずれの調査年度も、ゾウミジンコ科の *Bosmina longirostris* をはじめとする甲殻類、テマリワムシ科の *Conochilus unicornis*、ツボワムシ科の *Keratella quadrata* 等のワムシ類等が優占種(個体数の多い種)となっていた。

表 6.2-6 動物プランクトンの確認状況

門名	綱名	調査年度								重要種	外来種
		平成6年 (1994年)		平成12年 (2000年)		平成17年 (2005年)		平成18年 (2006年)			
		科数	種数	科数	種数	科数	種数	科数	種数		
肉質鞭毛虫門	葉状根足虫綱	3	3	2	2	2	2	2	2	—	—
	糸状根足虫綱	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—
	真正太陽虫綱	—	1	—	—	—	1	—	—	—	—
繊毛虫門	キネトフラグミノフォラ綱	1	2	1	1	1	2	—	—	—	—
	少膜綱	1	1	—	—	1	2	1	1	—	—
	多膜綱	4	4	2	2	2	2	2	2	—	—
輪形動物門	単生殖巣綱	7	10	9	16	10	14	5	8	—	—
	ヒルガタワムシ綱	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—
線形動物門	—	—	1	—	1	—	1	—	—	—	—
節足動物門	甲殻綱	5	9	5	9	4	6	5	6	—	—
	昆虫綱	—	—	2	2	2	2	—	—	—	—
合計		21	31	23	35	22	32	15	19	0	0

注)1. 重要種の選定基準は以下のとおりである。

- ・国、県、市町村指定の天然記念物(文化財保護法)
- ・「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」における国内希少野生動植物種
- ・レッドデータブック(環境省編)の掲載種(平成18年、19年に公表した見直しリストの掲載種)
- ・福井県レッドデータブックの掲載種(平成14年の動物編、平成16年の植物編の掲載種)

注)2. 外来種の選定基準は以下のとおりである。

- ・「外来種ハンドブック」(日本生態学会、平成14年)の国外外来種
- ・「特定外来生物」及び「要注意外来生物」

出典:6-10「平成6年度ダム自然環境調査報告書(動植物プランクトン)」

6-18「平成12年度ダム自然環境調査報告書(動植物プランクトン)」

6-26「平成17年度ダム自然環境調査業務報告書(動植物プランクトン)」

6-28「平成18年度ダム自然環境調査業務報告書(動植物プランクトン)」

2)重要種

確認種の中に重要種は含まれていない。

3)外来種

確認種の中に外来種は含まれていない。

(6) 植物

1) 確認種概要

これまでに実施した 3 回の国勢調査で、表 6.2-7(1)に示す 134 科 1060 種の植物種を確認した。なお、確認状況の詳細資料編に示す。

また、ダム湖周辺の植生の大部分は、クリ・コナラ群落をはじめとする代償植生の木本群落で構成されているが、ツルヨシ群落やススキ群落等の草本群落も分布している。

表 6.2-7(1) 植物の確認状況

分類群				調査年度						重要種	外来種
				平成7年(1995)		平成10年(1998)		平成15年(2003)			
				科数	種数	科数	種数	科数	種数		
シダ植物				16	76	16	79	17	85	5	—
種子植物	裸子植物			5	5	5	5	5	7	—	—
	被子植物	双子葉植物	離弁花類	65	381	68	399	64	386	13	27
			合弁花類	27	192	28	205	29	191	15	31
		単子葉植物		13	185	13	196	13	175	9	20
合計				126	839	130	884	128	844	42	78
				1060							

注)1. 重要種の選定基準は以下のとおりである。

- ・国、県、市町村指定の天然記念物(文化財保護法)
- ・「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」における国内希少野生動植物種
- ・「自然公園法(白山国立公園)」の指定植物
- ・レッドデータブック(環境省編)の掲載種(平成19年に公表した見直しリストの掲載種)
- ・福井県レッドデータブックの掲載種(平成16年の植物編の掲載種)

注)2. 外来種の選定基準は以下のとおりである。

- ・「外来種ハンドブック」(日本生態学会,平成14年)の国外外来種
- ・「日本帰化植物写真図鑑」(清水矩宏ほか,平成13年)の掲載種
- ・「日本の帰化植物写真図鑑」(清水建美ほか,平成15年)の掲載種
- ・「特定外来生物」及び「要注意外来生物」

- 出典: 6-11 「平成7年度ダム自然環境調査業務報告書(植物)」  
 6-15 「平成10年度ダム自然環境調査業務報告書(植物)」  
 6-22 「平成15年度ダム自然環境調査業務報告書(真名川ダム編)」  
 6-61 「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-8 植物Ⅰ(維管束植物)」  
 6-63 「哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物Ⅰ及び植物Ⅱのレッドリストの見直しについて」  
 6-65 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 福井県レッドデータブック(植物編)」  
 6-81 「日本帰化植物写真図鑑」  
 6-82 「日本の帰化植物写真図鑑」  
 6-100 「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律に基づき規制される生物リスト」  
 6-101 「要注意外来生物リスト」  
 6-102 「外来種ハンドブック」

2)重要種

重要種は、表 6.2-7(2)に示す 26 科 42 種を確認した。また、42 種のうち、自然公園法による指定植物は 13 種、「植物 及び植物 のレッドリスト見直しについて」( 環境省,平成 19 年 )の掲載種は 6 種、「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック (植物編) -」( 福井県,平成 16 年 )の掲載種は 31 種であった。

表 6.2-7(2) 植物 (重要種) の確認状況

No.	科名	種名	調査年度			選定基準					
			平成7年 (1995)	平成10年 (1998)	平成15年 (2003)	天然 記念物	種の 保存法	自然 公園法	環境省 RL	福井県 RDB	
1	ハナヤスリ科	ナガホノツツノハナワラビ			○						要注目
2	チャセンシダ科	イトトラノオ	○	○							危険Ⅱ
3	メシダ科	イワヤシダ		○							危険Ⅱ
4		フクロシダ			○						危険Ⅰ
5	ウラボシ科	ナガオノキシノブ			○						要注目
6	ニレ科	コバノチヨウセンエノキ		○							危険Ⅰ
7		ハルニレ			○						準危険
8	タデ科	ハルトトラノオ	○	○	○			●			
9		ノダイオウ	○							NT	危険Ⅱ
10	ナデシコ科	オオヤマフスマ			○						準危険
11	ウマノスズクサ科	フタバアオイ			○						要注目
12		ウスバサイシン	○	○	○						要注目
13	ボタン科	ヤマシャクヤク		○						NT	危険Ⅱ
14	ベンケイソウ科	ツメレンゲ			○					NT	危険Ⅰ
15	バラ科	オオダイコンソウ	○	○							危険Ⅱ
16	スマリ科	エイザンスミレ	○	○	○						準危険
17		アカネスミレ	○	○							要注目
18	セリ科	ハナビゼリ	○	○							要注目
19	ツツジ科	イワナシ	○	○	○			●			
20		サツキ		○	○						要注目
21	モクセイ科	シオジ	○	○	○						危険Ⅱ
22	シソ科	アキギリ	○	○	○			●			
23	ゴマノハグサ科	サツキヒナノウスツボ									危険Ⅱ
24	イワタバコ科	イワタバコ	○	○	○			●			
25	スイカズラ科	オトコヨウメ			○						要注目
26	キキョウ科	ヤマホタルブクロ	○					●			
27		シデンジャジン	○	○	○						要注目
28	キク科	チョウジギク			○			●			
29		カガノアザミ	○	○	○			●			危険Ⅱ
30		ハクサンアザミ		○	○			●			
31		ノニガナ	○	○							危険Ⅱ
32		オタカラコウ	○	○				●			
33		ヒメヒゴタイ	○							VU	危険Ⅰ
34	ユリ科	カタクリ	○	○	○			●			
35		ショウジョウバカマ	○	○	○			●			
36		マルバサンキライ			○						危険Ⅰ
37		エンレイソウ	○	○	○			●			
38	アヤメ科	カキツバタ		○						NT	危険Ⅱ
39	サトイモ科	アシウテンナンショウ			○						要注目
40	カヤツリグサ科	タタラカンガレイ		○	○						危険Ⅰ
41	ラン科	エビネ		○	○					NT	危険Ⅱ
42		セッコク			○			●			危険Ⅰ
合計	26科	42種	21種	26種	29種	-	-	13種	6種		31種

注)1. 重要種の選定基準は以下のとおりである。

- ・国、県、市町村指定の天然記念物(文化財保護法)
- ・「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」における国内希少野生動植物種
- ・「自然公園法(白山国立公園)」の指定植物
- ・レッドデータブック(環境省編)の掲載種(平成 19 年に公表した見直しリストの掲載種)
- ・福井県レッドデータブックの掲載種(平成 16 年の植物編の掲載種)

- 出典: 6-11 「平成 7 年度ダム自然環境調査業務報告書(植物)」  
 6-15 「平成 10 年度ダム自然環境調査業務報告書(植物)」  
 6-22 「平成 15 年度ダム自然環境調査業務報告書(真名川ダム編)」  
 6-61 「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-8 植物Ⅰ(維管束植物)」  
 6-63 「哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物Ⅰ及び植物Ⅱのレッドリストの見直しについて」  
 6-65 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 福井県レッドデータブック(植物編)」

3) 外来種

外来種は、表 6.2-7(3)に示すシロツメクサ、ブタクサ、オオオナモミ等の 22 科 78 種を確認した。このうち、アレチウリとオオハンゴンソウは特定外来生物、イタチハギ、ハリエンジュ、セイタカアワダチソウ等の 21 種は要注意外来生物に該当する。

表 6.2-7(3) 植物（外来種）の確認状況

No.	科名	種名	調査年度			外来生物法		外来種 ハンドブック
			平成7年 (1995)	平成10年 (1998)	平成15年 (2003)	特定	要注意	
1	タデ科	ヒメスイバ			○			●
2		ナガバギシギシ	○	○				●
3		エゾノギシギシ	○	○	○		●	●
4	ヤマゴボウ科	ヨウシュヤマゴボウ			○			●
5	ナデシコ科	オランダミナグサ	○	○	○			●
6		ムシトリナデシコ	○	○	○			●
7		コハコベ	○	○	○			●
8	ヒユ科	アオビユ(ホナガイヌビユ)	○	○				●
9	オトギリソウ科	ココマバオトギリ	○	○				●
10	アブラナ科	シロイヌナズナ	○	○	○			●
11		ミチタネツケバナ	○	○	○			●
12		マメゲンバイナズナ	○	○				●
13	ベンケイソウ科	ツルマンネングサ	○	○				●
14	バラ科	オランダイチョ	○	○				●
15		ユキヤナギ		○	○			
16	マメ科	イタチハギ	○	○	○		●	●
17		エシシダ	○	○	○			●
18		アレチヌスビトハギ	○	○	○			●
19		ハリエンジュ	○	○	○		●	●
20		ムラサキツメクサ	○	○	○			●
21		シロツメクサ	○	○	○			●
22	トウダイグサ科	オオニシキソウ			○			●
23		コニシキソウ	○	○				●
24	ニガキ科	シシジユ			○			●
25	ウリ科	アレチウリ			○	●		●
26	アカバナ科	メマツヨイグサ	○	○	○		●	●
27		オオマツヨイグサ			○			●
28	ヒルガオ科	アメリカネナシカズラ	○	○			●	●
29		マルバルコウ	○	○	○			●
30	シソ科	ヒメオドリコソウ	○	○	○			●
31	ナス科	ホオズキ	○	○				
32		ワルナスビ			○		●	●
33	ゴマノハグサ科	タチイヌノフグリ	○	○	○			●
34		オオイヌノフグリ	○	○	○			●
35	オオバコ科	ヘラオオバコ			○		●	●
36	キク科	ブタクサ	○	○	○		●	●
37		ユウゼンギク	○	○				●
38		アメリカセンダングサ	○	○	○		●	●
39		フランスギク	○	○				●
40		アレチノギク		○				●
41		オオアレチノギク	○	○	○		●	●
42		ベニバナボロギク	○	○	○			●
43		タカサブロウ	○	○	○			
44		ダンドボロギク	○	○	○			●
45		ヒメムカシヨモギ	○	○	○		●	●



表 6.2-7(3) 植物（外来種）の確認状況

No.	科名	種名	調査年度			外来生物法		外来種 ハンドブック
			平成7年 (1995)	平成10年 (1998)	平成15年 (2003)	特定	要注意	
46	(キク科)	ハルジオン	○	○	○		●	●
47		チチコグサモドキ		○				●
48		ブタナ	○	○	○		●	●
49		オオハンゴンソウ	○	○	○	●		●
50		ノボロギク			○			●
51		セイタカアワダチソウ			○		●	●
52		オニノゲン	○	○	○			●
53		ヒメジョオン	○	○	○		●	●
54		ヘラバヒメジョオン		○				●
55		アカミタンポポ			○		●	●
56		セイヨウタンポポ	○	○	○		●	●
57		イガオナモミ			○			●
58		オオオナモミ	○	○	○		●	●
59	ヒガンバナ科	ラッパズイセン	○	○			●	
60	アヤメ科	キショウブ	○	○	○		●	●
61		ヒメヒオウギズイセン	○	○				●
62	イネ科	コヌカグサ	○	○	○			●
63		クロコヌカグサ	○	○				●
64		ノハラスズメノテッポウ	○	○				●
65		ハルガヤ			○			●
66		イヌムギ	○	○				●
67		カモガヤ	○	○	○		●	●
68		オオニワホコリ	○	○				●
69		コスズメガヤ	○	○	○			●
70		オニウシノケグサ	○	○	○		●	●
71		ハガワリトボシガラ		○				●
72		ヒロハノウシノケグサ	○	○	○			●
73		オオクサキビ	○	○	○			●
74		ツルスズメノカタビラ	○	○				●
75		コイチゴツナギ			○			●
76		ナガハグサ	○	○	○			●
77		オオスズメノカタビラ	○	○	○			●
78	ナギナタガヤ	○	○	○			●	
合計	22科	78種	59種	64種	56種	2種	21種	75種

注)1. 外来種の選定基準は以下のとおりである。

- ・「外来種ハンドブック」(日本生態学会, 平成14年)の国外外来種
- ・「日本帰化植物写真図鑑」(清水矩宏ほか, 平成13年)の掲載種
- ・「日本の帰化植物写真図鑑」(清水建美ほか, 平成15年)の掲載種
- ・「特定外来生物」及び「要注意外来生物」

出典: 6-11 「平成7年度ダム自然環境調査業務報告書(植物)」  
 6-15 「平成10年度ダム自然環境調査業務報告書(植物)」  
 6-22 「平成15年度ダム自然環境調査業務報告書(真名川ダム編)」  
 6-81 「日本帰化植物写真図鑑」  
 6-82 「日本の帰化植物写真図鑑」  
 6-100 「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律に基づき規制される生物リスト」  
 6-101 「要注意外来生物リスト」  
 6-102 「外来種ハンドブック」

(7)鳥類

1)確認種概要

これまでに実施した3回の国勢調査で、表6.2-8(1)に示す14目35科97種の鳥類を確認し、この中には、水域環境を利用するカモ類や溪流性のヤマセミ、カワガラス、大型猛禽類のオジロワシ、イヌワシ、樹林性のツツドリ、オオアカゲラ、シジュウカラ等が含まれている。

また、季節移動型をみると、確認種の約半数にあたる46種が留鳥となっており、夏鳥は22種、冬鳥は26種、旅鳥は3種となっている。

表6.2-8(1) 鳥類の確認状況

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種	季節移動型		
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成9年 (1997)	平成14年 (2002)					
1	カイツブリ目	カイツブリ科	カイツブリ	○					冬鳥		
2	ペリカン目	ウ科	カワウ			○			留鳥		
3	コウノトリ目	サギ科	アオサギ	○	○	○			留鳥		
4	カモ目	カモ科	オシドリ		○	○	●		留鳥		
5			マガモ	○	○	○			冬鳥		
6			カルガモ	○	○	○			留鳥		
7			コガモ	○	○	○			冬鳥		
8			トモエガモ	○	○		●		冬鳥		
9			ヨシガモ		○		●		冬鳥		
10			ヒドリガモ	○	○				冬鳥		
11			オナガガモ	○	○				冬鳥		
12			ハシビロガモ				○		冬鳥		
13			ホシハジロ	○	○	○			冬鳥		
14			キンクロハジロ	○	○				冬鳥		
15			カワアイサ	○	○	○	●		冬鳥		
16			タカ目	タカ科	ミスゴ		○		●		夏鳥、留鳥
17					トビ	○	○	○			留鳥
18					オジロワシ		○			●	
19	オオタカ	○				○	●		冬鳥、留鳥		
20	ツミ	○			○		●		冬鳥		
21	ハイタカ				○		●		留鳥		
22	サシバ	○					●		夏鳥		
23	クマタカ	○			○	○	●		留鳥		
24	イヌワシ				○		●		留鳥		
25		ハヤブサ科			ハヤブサ			○	●	留鳥	
26	キジ目	キジ科	キジ	○				夏鳥			
27			ヤマドリ	○		○		留鳥			
28	チドリ目	チドリ科	イカルチドリ		○	○	●	留鳥			
29		シギ科	アオシギ		○			冬鳥			
30	ハト目	ハト科	ドハト		○			●	留鳥		
31			キジバト	○	○	○			留鳥		
32			アオバト			○			留鳥		
33	カッコウ目	カッコウ科	カッコウ	○	○				夏鳥		
34			ツツドリ	○	○	○			夏鳥		
35			ホトギス	○	○	○			夏鳥		
36	フクロウ目	フクロウ科	コノハズク		○		●	夏鳥			
37	ヨタカ目	ヨタカ科	ヨタカ		○	○	●	夏鳥			
38	ブッポウソウ目	カワセミ科	ヤマセミ	○	○	○	●		留鳥		
39			アカショウビン			○	●		夏鳥		
40			カワセミ	○	○				留鳥		
41	キツツキ目	キツツキ科	アオゲラ	○	○	○			留鳥		
42			アカゲラ	○	○				留鳥		
43			オオアカゲラ	○			●		留鳥		
44			コゲラ	○	○	○			留鳥		
-			キツツキ科の一種		○	○			留鳥		
45	スズメ目	ツバメ科	ツバメ	○		○			夏鳥		
46			イワツバメ	○	○	○			夏鳥		
47		セキレイ科	キセキレイ	○	○	○			留鳥		
48			ハクセキレイ	○	○				留鳥		
49			セグロセキレイ	○	○	○			留鳥		
50			ピンズイ		○				夏鳥		
51		サンショウクイ科	サンショウクイ	○	○	○	●		夏鳥		
52		ヒヨドリ科	ヒヨドリ	○	○	○			留鳥		

表 6.2-8(1) 鳥類の確認状況

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種	季節 移動型	
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成9年 (1997)	平成14年 (2002)				
53	スズメ目	モズ科	モズ	○	○	○			留鳥	
54		カワガラス科	カワガラス	○	○	○			留鳥	
55		ミソサザイ科	ミソサザイ	○	○	○			留鳥	
56		イワヒバリ科	イワヒバリ		○		●		留鳥	
57		ツグミ科	コマドリ	○					留鳥	
58			コルリ	○					夏鳥	
59			ルリビタキ	○	○	○			冬鳥	
60			ジョウビタキ	○	○	○			冬鳥	
61			ノビタキ				○		旅鳥	
62			イソヒヨドリ	○					冬鳥	
63			トラツグミ	○	○	○			夏鳥	
64			クロツグミ	○	○	○			夏鳥	
65			シロハラ	○					旅鳥	
66			ツグミ	○	○				冬鳥	
67			ウグイス科	ヤブサメ	○	○	○			夏鳥
68				ウグイス	○	○	○			留鳥
69				オオヨシキリ			○			夏鳥
70				メボソムシクイ		○				旅鳥
71			センダイムシクイ	○				夏鳥		
72		ヒタキ科	キビタキ	○		○			夏鳥	
73			オオルリ	○	○	○			夏鳥	
74		エナガ科	エナガ	○	○	○			留鳥	
75		シジュウカラ科	コガラ	○	○	○			留鳥	
76			ヒガラ	○	○	○			留鳥	
77			ヤマガラ	○	○	○			留鳥	
78			シジュウカラ	○	○	○			留鳥	
79		ゴジュウカラ科	ゴジュウカラ	○	○	○			留鳥	
80		メジロ科	メジロ	○	○	○			夏鳥	
81		ホオジロ科	ホオジロ	○	○	○			留鳥	
82			カシラダカ	○	○				冬鳥	
83			ミヤマホオジロ	○	○				冬鳥	
84			アオジ	○		○			冬鳥	
85		アトリ科	アトリ		○	○			冬鳥	
86			カワラヒワ	○	○	○			留鳥	
87			マヒワ	○	○				冬鳥	
88			ハギマシコ	○		○			冬鳥	
89			ベニマシコ	○	○	○			冬鳥	
90			ウソ	○		○			留鳥	
91			イカル	○	○	○			留鳥	
92			シメ		○			冬鳥		
93		ハタオリドリ科	スズメ	○					留鳥	
94		ムクドリ科	ムクドリ	○					夏鳥	
95		カラス科	カケス	○	○	○			留鳥	
96			ハシボソガラス	○					留鳥	
97			ハシブトガラス	○	○	○			留鳥	
種類数合計				74	71	60	21	1	-	
				97						

注)1. 重要種の選定基準は以下のとおりである。

- ・国、県、市町村指定の天然記念物(文化財保護法)
- ・「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」における国内希少野生動植物種
- ・レッドデータブック(環境省編)の掲載種(平成18年に公表した見直しリストの掲載種)
- ・福井県レッドデータブックの掲載種(平成14年の動物編の掲載種)

注)2. 外来種の選定基準は以下のとおりである。

- ・「外来種ハンドブック」(日本生態学会,平成14年)の国外外来種
- ・「特定外来生物」及び「要注意外来生物」

出典: 6-3 「平成4年度ダム自然環境調査報告書」

6-4 「平成5年度ダム自然環境調査報告書(鳥類)」

6-14 「平成9年度ダム自然環境調査業務報告書(鳥類)」

6-21 「平成14年度ダム自然環境調査業務報告書(鳥類)」

6-55 「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-2 鳥類」

6-62 「鳥類、爬虫類、両生類及びその他無脊椎動物のレッドリストの見直しについて」

6-64 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 福井県レッドデータブック(動物編)」

6-100 「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律に基づき規制される生物リスト」

6-101 「要注意外来生物リスト」

6-102 「外来種ハンドブック」

## 2)重要種

重要種は、表 6.2-8(2)に示すとおり、オシドリ、クマタカ、イカルチドリ等、10科 21種を確認した。

表 6.2-8(2) 鳥類（重要種）の確認状況

No.	科名	種名	調査年度			選定基準			
			平成4-5年 (1992-3)	平成9年 (1997)	平成14年 (2002)	天然 記念物	種の 保存法	環境省 RL	福井県 RDB
1	カモ科	オシドリ		○	○			DD	準危惧
2		トモエガモ	○	○				VU	危惧Ⅱ
3		ヨシガモ		○					準危惧
4		カワアイサ	○	○	○				要注目
5	タカ科	ミサゴ		○				NT	危惧Ⅰ
6		オジロワシ		○		国天	●	EN	危惧Ⅰ
7		オオタカ	○		○		●	NT	危惧Ⅰ
8		ツミ	○	○					準危惧
9		ハイタカ		○				NT	危惧Ⅱ
10		サンバ	○					VU	準危惧
11		クマタカ	○	○	○		●	EN	危惧Ⅰ
12		イヌワシ		○		国天	●	EN	危惧Ⅰ
13	ハヤブサ科	ハヤブサ			○		●	VU	危惧Ⅱ
14	チドリ科	イカルチドリ		○	○				危惧Ⅱ
15	フクロウ科	ヨノハズク		○					準危惧
16	ヨタカ科	ヨタカ		○	○			VU	危惧Ⅱ
17	カワセミ科	ヤマセミ	○	○	○				準危惧
18		アカショウビン			○				準危惧
19	キツツキ科	オオアカゲラ	○						準危惧
20	サンショウクイ科	サンショウクイ	○	○	○			VU	危惧Ⅱ
21	イワヒバリ科	イワヒバリ		○					危惧Ⅱ
合計	10科	21種	9種	16種	10種	2種	5種	12種	21種

注)1. 重要種の選定基準は以下のとおりである。

- ・国、県、市町村指定の天然記念物(文化財保護法)
- ・「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」における国内希少野生動植物種
- ・レッドデータブック(環境省編)の掲載種(平成18年に公表した見直しリストの掲載種)
- ・福井県レッドデータブックの掲載種(平成14年の動物編の掲載種)

出典: 6-3 「平成4年度ダム自然環境調査報告書」

- 6-4 「平成5年度ダム自然環境調査報告書(鳥類)」
- 6-14 「平成9年度ダム自然環境調査業務報告書(鳥類)」
- 6-21 「平成14年度ダム自然環境調査業務報告書(鳥類)」
- 6-55 「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-2 鳥類」
- 6-62 「鳥類、爬虫類、両生類及びその他無脊椎動物のレッドリストの見直しについて」
- 6-64 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 福井県レッドデータブック(動物編)」

## 3)外来種

外来種は、表 6.2-8(3)に示すとおり、平成9年度の調査時に外来種ハンドブックに記されているドバト1種を確認した。

表 6.2-8(3) 鳥類（外来種）の確認状況

No.	科名	種名	調査年度			外来生物法		外来種 ハンドブック
			平成4-5年 (1992-3)	平成9年 (1997)	平成14年 (2002)	特定	要注意	
1	ハト科	ドバト		○				●
合計	1科	1種	-	1種	-	-	-	1種

注)1. 外来種の選定基準は以下のとおりである。

- ・「外来種ハンドブック」(日本生態学会, 平成14年)の国外外来種
- ・「特定外来生物」及び「要注意外来生物」

出典: 6-3 「平成4年度ダム自然環境調査報告書」

- 6-4 「平成5年度ダム自然環境調査報告書(鳥類)」
- 6-14 「平成9年度ダム自然環境調査業務報告書(鳥類)」
- 6-21 「平成14年度ダム自然環境調査業務報告書(鳥類)」
- 6-100 「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律に基づき規制される生物リスト」
- 6-101 「要注意外来生物リスト」
- 6-102 「外来種ハンドブック」

(8)両生類

1)確認種概要

これまでに実施した3回の国勢調査で、表6.2-9(1)に示す2目6科10種の両生類を確認し、この中には、沢などの流水環境で繁殖するヒダサンショウウオをはじめ、草地や森林が隣接する溪流環境に生息するナガレヒキガエル、カジカガエル等が含まれていた。

表 6.2-9(1) 両生類の確認状況

No	確認種			調査年度			重要種	外来種
	目名	科名	種名	平成5年 (1993)	平成12年 (2000)	平成17年 (2005)		
1	サンショウウオ目	サンショウウオ科	ヒダサンショウウオ		○	○	●	
2		イモリ科	イモリ	○	○	○	●	
3	カエル目	ヒキガエル科	アズマヒキガエル		○			
4			ナガレヒキガエル	○		○	●	
-			ヒキガエル属の一種				○	
5			アマガエル科	アマガエル	○	○		
6		アカガエル科	タゴガエル		○	○		
7			ヤマアカガエル	○	○	○		
8		アオガエル科	シュレーゲルアオガエル		○	○		
9			モリアオガエル	○	○	○		
10	カジカガエル		○	○	○			
確認種数				6	9	8	3	0
				10				

注)1. 重要種の選定基準は以下のとおりである。

- ・国、県、市町村指定の天然記念物(文化財保護法)
- ・「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」における国内希少野生動植物種
- ・レッドデータブック(環境省編)の掲載種(平成18年に公表した見直しリストの掲載種)
- ・福井県レッドデータブックの掲載種(平成14年の動物編の掲載種)

注)2. 外来種の選定基準は以下のとおりである。

- ・「外来種ハンドブック」(日本生態学会,平成14年)の国外外来種
- ・「特定外来生物」及び「要注意外来生物」

出典:6-5 「平成5年度ダム自然環境調査報告書(両生類・爬虫類)」

6-17 「平成12年度ダム自然環境調査業務報告書(両生類・爬虫類・哺乳類)」

6-25 「平成17年度ダム自然環境調査業務報告書(両生類・爬虫類・哺乳類)」

6-56 「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-3 両生類・爬虫類」

6-62 「鳥類、爬虫類、両生類及びその他無脊椎動物のレッドリストの見直しについて」

6-64 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 福井県レッドデータブック(動物編)」

6-100 「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律に基づき規制される生物リスト」

6-101 「要注意外来生物リスト」

6-102 「外来種ハンドブック」

## 2)重要種

重要種は、表 6.2-9(2)に示すとおり、ヒダサンショウウオ、イモリ、ナガレヒキガエルの 3 科 3 種を確認した。

表 6.2-9(2) 両生類（重要種）の確認状況

No.	科名	種名	調査年度			選定基準			
			平成5年 (1993)	平成12年 (2000)	平成17年 (2005)	天然 記念物	種の 保存法	環境省 RL	福井県 RDB
1	サンショウウオ科	ヒダサンショウウオ		○	○			NT	
2	イモリ科	イモリ	○	○	○			NT	
3	ヒキガエル科	ナガレヒキガエル	○		○				準危惧
合計	3科	3種	2種	2種	3種	-	-	2種	1種

注)1. 重要種の選定基準は以下のとおりである。

- ・国、県、市町村指定の天然記念物(文化財保護法)
- ・「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」における国内希少野生動植物種
- ・レッドデータブック(環境省編)の掲載種(平成 18 年に公表した見直しリストの掲載種)
- ・福井県レッドデータブックの掲載種(平成 14 年の動物編の掲載種)

出典: 6-5 「平成 5 年度ダム自然環境調査報告書(両生類・爬虫類)」  
 6-17 「平成 12 年度ダム自然環境調査業務報告書(両生類・爬虫類・哺乳類)」  
 6-25 「平成 17 年度ダム自然環境調査業務報告書(両生類・爬虫類・哺乳類)」  
 6-56 「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-3 両生類・爬虫類」  
 6-62 「鳥類、爬虫類、両生類及びその他無脊椎動物のレッドリストの見直しについて」  
 6-64 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 福井県レッドデータブック(動物編)」

## 3)外来種

確認種の中に外来種は含まれていない。

(9)爬虫類

1)確認種概要

これまでに実施した3回の国勢調査で、表6.2-10(1)に示す2目5科10種の爬虫類を確認した。

確認種のうち、林縁から草地環境に生息するトカゲやカナヘビ、水辺環境を好むシマヘビやヤマカガシ等は、全ての調査年度で確認した。

表6.2-10(1) 爬虫類の確認状況

No	確認種			調査年度			重要種	外来種
	目名	科名	種名	平成5年 (1993)	平成12年 (2000)	平成17年 (2005)		
1	カメ目	イシガメ科	イシガメ		○	○	●	
2	トカゲ目	トカゲ科	トカゲ	○	○	○		
3		カナヘビ科	カナヘビ	○	○	○		
4		ヘビ科	タカチホヘビ			○	●	
5			シマヘビ	○	○	○		
6			ジムグリ	○	○			
7			アオダイショウ	○	○	○		
8			シロマダラ		○	○	●	
9		ヤマカガシ	○	○	○			
10		クサリヘビ科	マムシ	○	○	○		
種類数合計				7	9	9	3	0
				10				

注1. 重要種の選定基準は以下のとおりである。

- ・国、県、市町村指定の天然記念物(文化財保護法)
- ・「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」における国内希少野生動植物種
- ・レッドデータブック(環境省編)の掲載種(平成18年に公表した見直しリストの掲載種)
- ・福井県レッドデータブックの掲載種(平成14年の動物編の掲載種)

注2. 外来種の選定基準は以下のとおりである。

- ・「外来種ハンドブック」(日本生態学会,平成14年)の国外外来種
- ・「特定外来生物」及び「要注意外来生物」

出典:6-5 「平成5年度ダム自然環境調査報告書(両生類・爬虫類)」

6-17 「平成12年度ダム自然環境調査業務報告書(両生類・爬虫類・哺乳類)」

6-25 「平成17年度ダム自然環境調査業務報告書(両生類・爬虫類・哺乳類)」

6-56 「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-3 両生類・爬虫類」

6-62 「鳥類、爬虫類、両生類及びその他無脊椎動物のレッドリストの見直しについて」

6-64 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 福井県レッドデータブック(動物編)」

6-100 「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律に基づき規制される生物リスト」

6-101 「要注意外来生物リスト」

6-102 「外来種ハンドブック」

## 2)重要種

重要種は、表 6.2-10(2)に示すとおり、イシガメ、タカチホヘビ、シロマダラの 2 科 3 種を確認した。

表 6.2-10(2) 爬虫類（重要種）の確認状況

No.	科名	種名	調査年度			選定基準			
			平成5年 (1993)	平成12年 (2000)	平成17年 (2005)	天然 記念物	種の 保存法	環境省 RL	福井県 RDB
1	イシガメ科	イシガメ		○	○			DD	
2	ヘビ科	タカチホヘビ			○				要注目
3		シロマダラ		○	○				要注目
合計	2科	3種	-	2種	3種	-	-	1種	2種

注)1. 重要種の選定基準は以下のとおりである。

- ・国、県、市町村指定の天然記念物(文化財保護法)
- ・「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」における国内希少野生動植物種
- ・レッドデータブック(環境省編)の掲載種(平成 18 年に公表した見直しリストの掲載種)
- ・福井県レッドデータブックの掲載種(平成 14 年の動物編の掲載種)

出典:6-5 「平成 5 年度ダム自然環境調査報告書(両生類・爬虫類)」

6-17 「平成 12 年度ダム自然環境調査業務報告書(両生類・爬虫類・哺乳類)」

6-25 「平成 17 年度ダム自然環境調査業務報告書(両生類・爬虫類・哺乳類)」

6-56 「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-3 両生類・爬虫類」

6-62 「鳥類、爬虫類、両生類及びその他無脊椎動物のレッドリストの見直しについて」

6-64 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 福井県レッドデータブック(動物編)」

## 3)外来種

確認種の中に外来種は含まれていない。



(10) 哺乳類

1) 確認種概要

これまでに実施した 3 回の国勢調査で、表 6.2-11(1) に示す 7 目 14 科 24 種の哺乳類を確認し

この中には、ニホンリスやスミスネズミ等の小型哺乳類、タヌキやアナグマ等の中型哺乳類に加えて、ツキノワグマやカモシカ等の大型哺乳類も含まれていた。

表 6.2-11(1) 哺乳類の確認状況

No	確認種			調査年度			重要種	外来種	
	目名	科名	種名	平成6年 (1994)	平成12年 (2000)	平成17年 (2005)			
1	モグラ目(食虫目)	モグラ科	ヒミズ	○	○	○			
2			アズマモグラ			○			
-			モグラ属の一種			○			
3	コウモリ目(翼手目)	キクガシラコウモリ科	キクガシラコウモリ		○	○			
4		ヒナコウモリ科	モモジロコウモリ			○	●		
-			ヒナコウモリ科の一種			○			
-			コウモリ目(翼手目)の一種			○			
5	サル目(霊長目)	オナガザル科	ニホンザル	○	○	○			
6	ウサギ目	ウサギ科	ノウサギ	○	○	○			
7	ネズミ目(齧歯目)	リス科	ニホンリス		○	○			
8			モモンガ			○		●	
9			ムササビ			○	○		
-			リス科の一種			○			
10			ネズミ科	スミスネズミ	○				
11		アカネズミ		○	○	○			
12		ヒメネズミ		○	○				
13		カヤネズミ				○			
14		ハツカネズミ		○				●	
-		ネズミ科の一種	○	○					
15	ネコ目(食肉目)	クマ科	ツキノワグマ			○			
16		イヌ科	タヌキ	○	○	○			
17			キツネ	○	○	○			
18		イタチ科	テン	○	○	○			
19			イタチ	○					
-			イタチ属の一種				○		
20			アナグマ			○	○		
21	ジャコウネコ科	ハクビシン	○	○	○		●		
22	ウシ目(偶蹄目)	イノシシ科	イノシシ	○	○	○			
23		シカ科	ホンドジカ		○	○			
24		ウシ科	カモシカ	○	○	○	●		
種類数合計				14	18	19	3	2	
				24					

注)1. 重要種の選定基準は以下のとおりである。

- ・国、県、市町村指定の天然記念物(文化財保護法)
- ・「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」における国内希少野生動植物種
- ・レッドデータブック(環境省編)の掲載種(平成 19 年に公表した見直しリストの掲載種)
- ・福井県レッドデータブックの掲載種(平成 14 年の動物編の掲載種)

注)2. 外来種の選定基準は以下のとおりである。

- ・「外来種ハンドブック」(日本生態学会, 平成 14 年)の国外外来種
- ・「特定外来生物」及び「要注意外来生物」

出典: 6-8 「平成 6 年度ダム自然環境調査報告書(哺乳類)」

- 6-17 「平成 12 年度ダム自然環境調査業務報告書(両生類・爬虫類・哺乳類)」
- 6-25 「平成 17 年度ダム自然環境調査業務報告書(両生類・爬虫類・哺乳類)」
- 6-54 「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-1 哺乳類」
- 6-63 「哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物 I 及び植物 II のレッドリストの見直しについて」
- 6-64 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 福井県レッドデータブック(動物編)」
- 6-100 「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律に基づき規制される生物リスト」
- 6-101 「要注意外来生物リスト」
- 6-102 「外来種ハンドブック」

## 2)重要種

重要種は、表 6.2-11(2)に示すとおり、モモジロコウモリ、モモンガ、カモシカの 3 科 3 種を確認した。

表 6.2-11(2) 哺乳類（重要種）の確認状況

No.	科名	種名	調査年度			選定基準				
			平成6年 (1994)	平成12年 (2000)	平成17年 (2005)	天然 記念物	種の 保存法	環境省 RL	福井県 RDB	
1	ヒナコウモリ科	モモジロコウモリ			○					要注目
2	リス科	モモンガ		○						準危惧
3	ウシ科	カモシカ	○	○	○	特別				
合計	3科	3種	1種	2種	2種	1種	-	-		2種

注)1. 重要種の選定基準は以下のとおりである。

- ・国、県、市町村指定の天然記念物(文化財保護法)
- ・「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」における国内希少野生動植物種
- ・レッドデータブック(環境省編)の掲載種(平成 19 年に公表した見直しリストの掲載種)
- ・福井県レッドデータブックの掲載種(平成 14 年の動物編の掲載種)

出典:6-8 「平成 6 年度ダム自然環境調査報告書(哺乳類)」

6-17 「平成 12 年度ダム自然環境調査業務報告書(両生類・爬虫類・哺乳類)」

6-25 「平成 17 年度ダム自然環境調査業務報告書(両生類・爬虫類・哺乳類)」

6-54 「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-1 哺乳類」

6-63 「哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物 I 及び植物 II のレッドリストの見直しについて」

6-64 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 福井県レッドデータブック(動物編)」

## 3)外来種

外来種は、表 6.2-11(3)に示すとおり、ハツカネズミ、ハクビシンの 2 科 2 種を確認した。

表 6.2-11(3) 哺乳類（外来種）の確認状況

No.	科名	種名	調査年度			外来生物法		外来種 ハンドブック
			平成6年 (1994)	平成12年 (2000)	平成17年 (2005)	特定	要注意	
1	ネズミ科	ハツカネズミ	○					●
2	ジャコウネコ科	ハクビシン	○	○	○			●
合計	2科	2種	2種	1種	1種	-	-	2種

注)1. 外来種の選定基準は以下のとおりである。

- ・「外来種ハンドブック」(日本生態学会, 平成 14 年)の国外外来種
- ・「特定外来生物」及び「要注意外来生物」

出典:6-8 「平成 6 年度ダム自然環境調査報告書(哺乳類)」

6-17 「平成 12 年度ダム自然環境調査業務報告書(両生類・爬虫類・哺乳類)」

6-25 「平成 17 年度ダム自然環境調査業務報告書(両生類・爬虫類・哺乳類)」

6-100 「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律に基づき規制される生物リスト」

6-101 「要注意外来生物リスト」

6-102 「外来種ハンドブック」

(11)陸上昆虫類等

1)確認種概要

これまでに実施した3回の国勢調査で、表6.2-12(1)に示す16目252科2649種の陸上昆虫類等を確認した。

また、確認種は、カワラバッタやアイヌハンミョウ等の河原環境を利用する種、チビゲンゴロウ等のゲンゴロウ類をはじめとする止水環境を利用する種、樹林環境や草地環境等に依存する種で構成されていた。

表6.2-12(1) 陸上昆虫類等の確認状況

目名	調査年度						重要種	外来種
	平成4~5年 (1992~3年)		平成11年 (1999年)		平成16年 (2004年)			
	科数	種数	科数	種数	科数	種数		
クモ	15	63	16	87	13	54	—	—
カゲロウ	—	—	—	—	3	4	—	—
トンボ	6	16	5	17	6	14	1	—
カマキリ	1	2	1	2	2	3	—	—
ハサミムシ	2	2	1	2	2	2	—	—
カワゲラ	1	2	1	1	2	7	—	—
バッタ	7	44	8	41	8	40	2	—
ナナフシ	1	1	1	2	1	3	—	—
カメムシ	29	105	31	130	35	161	1	—
アミメカゲロウ	6	11	7	15	8	21	—	—
シリアゲムシ	2	4	2	4	3	7	—	—
トビケラ	4	4	4	5	8	12	—	—
チョウ	31	516	44	781	42	775	4	1
ハエ	6	28	10	41	22	103	1	—
コウチュウ	41	339	44	403	52	448	2	2
ハチ	16	77	18	119	19	150	4	2
合計	168	1214	193	1650	226	1804	15	5
	2649							

注)1. 重要種の選定基準は以下のとおりである。

- ・国、県、市町村指定の天然記念物(文化財保護法)
- ・「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」における国内希少野生動植物種
- ・レッドデータブック(環境省編)の掲載種(平成19年に公表した見直しリストの掲載種)
- ・福井県レッドデータブックの掲載種(平成14年の動物編の掲載種)

注)2. 外来種の選定基準は以下のとおりである。

- ・「外来種ハンドブック」(日本生態学会,平成14年)の国外外来種
- ・「特定外来生物」及び「要注意外来生物」

出典:6-3 「平成4年度ダム自然環境調査報告書」

- 6-6 「平成5年度ダム自然環境調査報告書(昆虫類)」
- 6-16 「平成11年度ダム自然環境調査業務報告書(昆虫類)」
- 6-24 「平成16年度ダム自然環境調査業務報告書(陸上昆虫類等)」
- 6-58 「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-5 昆虫類」
- 6-63 「哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物Ⅰ及び植物Ⅱのレッドリストの見直しについて」
- 6-64 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 福井県レッドデータブック(動物編)」
- 6-100 「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律に基づき規制される生物リスト」
- 6-101 「要注意外来生物リスト」
- 6-102 「外来種ハンドブック」

2)重要種

重要種は、表 6.2-12(2)に示すとおり、ムカシトンボ、オオムラサキ、フクイアナバチ等の 13 科 15 種を確認した。

表 6.2-12(2) 陸上昆虫類等（重要種）の確認状況

No.	科名	種名	調査年度			選定基準			
			平成4-5年 (1992-3)	平成11年 (1999)	平成16年 (2004)	天然 記念物	種の 保存法	環境省 RL	福井県 RDB
1	ムカシトンボ科	ムカシトンボ	○						要注目
2	コオロギ科	カワラスズ	○						要注目
3	バッタ科	カワラバッタ	○						準危惧
4	ツチカメムシ科	ヨコヅナツチカメムシ		○					要注目
5	セセリチョウ科	スジグロチャバネセセリ	○					NT	準危惧
6	タテハチョウ科	ウラギンスジヒョウモン		○				NT	
7		オオムラサキ	○		○			NT	準危惧
8	ジャノメチョウ科	ツマジロウラジャノメ			○				危惧Ⅱ
9	ハナアブ科	スズキナガハナアブ	○						要注目
10	オサムシ科	アオヘリアオゴミムシ	○					CR+EN	
11	タマムシ科	アオナガタマムシ			○				要注目
12	アリ科	ケブカツヤオオアリ	○	○	○				危惧Ⅱ
13		エゾアカヤマアリ	○						危惧Ⅱ
14	ドロバチ科	ハグロフタオビドロバチ			○				危惧Ⅰ
15	アナバチ科	フクイアナバチ		○				NT	準危惧
合計	13科	15種	9種	4種	5種	-	-	5種	13種

注)1. 重要種の選定基準は以下のとおりである。

- ・国、県、市町村指定の天然記念物(文化財保護法)
- ・「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」における国内希少野生動植物種
- ・レッドデータブック(環境省編)の掲載種(平成 19 年に公表した見直しリストの掲載種)
- ・福井県レッドデータブックの掲載種(平成 14 年の動物編の掲載種)

出典: 6-3 「平成 4 年度ダム自然環境調査報告書」

6-6 「平成 5 年度ダム自然環境調査報告書(昆虫類)」

6-16 「平成 11 年度ダム自然環境調査業務報告書(昆虫類)」

6-24 「平成 16 年度ダム自然環境調査業務報告書(陸上昆虫類等)」

6-58 「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-5 昆虫類」

6-63 「哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物Ⅰ及び植物Ⅱのレッドリストの見直しについて」

6-64 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 福井県レッドデータブック(動物編)」

3)外来種

外来種は、表 6.2-12(3)に示すとおり、オオタバコガ、ブタクサハムシ、セイヨウミツバチ等の 4 科 5 種を確認した。

表 6.2-12(3) 陸上昆虫類等（外来種）の確認状況

No.	科名	種名	調査年度			外来生物法		外来種 ハンドブック
			平成4-5年 (1992-3)	平成11年 (1997)	平成16年 (2004)	特定	要注意	
1	ヤガ科	オオタバコガ	○		○			●
2	ハムシ科	アズキマメゾウムシ			○			●
3		ブタクサハムシ			○			●
4	アナバチ科	ニッポンモンキジガバチ	○					●
5	ミツバチ科	セイヨウミツバチ	○	○				●
合計	4科	5種	3種	1種	3種	-	-	5種

注)1. 外来種の選定基準は以下のとおりである。

- ・「外来種ハンドブック」(日本生態学会, 平成 14 年)の国外外来種
- ・「特定外来生物」及び「要注意外来生物」

出典: 6-3 「平成 4 年度ダム自然環境調査報告書」

6-6 「平成 5 年度ダム自然環境調査報告書(昆虫類)」

6-16 「平成 11 年度ダム自然環境調査業務報告書(昆虫類)」

6-24 「平成 16 年度ダム自然環境調査業務報告書(陸上昆虫類等)」

6-100 「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律に基づき規制される生物リスト」

6-101 「要注意外来生物リスト」

6-102 「外来種ハンドブック」

### 6.3 生物の生息・生育状況の変化の検証

真名川ダムの存在・供用に伴い影響を受けると考えられる場所（ダム湖内、流入河川（流入河川、流入支川）、下流河川、ダム湖周辺）ごとに、環境の状況と生物の生息・生育状況の経年的な変化を把握した上で、ダムによる影響について表 6.3-1 及び図 6.3-1 に示す視点で検証した。

表 6.3-1 生物の生息・生育状況の変化の検証の視点

視点		設定範囲
ダム湖内		真名川ダムのダム湖。平常時最高貯水位（旧常時満水位）EL365.0m を基本とする。
流入河川	流入河川 （真名川） （笹生川） （雲川）	真名川は「ダム湖内」から、笹生川、雲川合流点まで、笹生川と雲川はこの合流点から、笹生川は細ヶ谷合流点付近まで、雲川は中島トンネル上流付近までの河川域及び周辺陸域
	流入支川 （持籠谷川） （仙翁谷川） （日の谷川）	「ダム湖内」から、持籠谷川は約 100m 上流、仙翁谷川は約 1 km 上流、日の谷川は「ダム湖内」との境界付近までの河川域及び周辺陸域
下流河川	本川 （真名川頭首工下流側） （真名川頭首工上流側）	佐開橋から真名川頭首工まで、及び真名川頭首工から真名川ダム堤体までの河川域及び周辺陸域
ダム湖周辺		平常時最高貯水位（旧常時満水位）と接する水際線から概ね 500m 以内の範囲からダム湖内を除く陸域

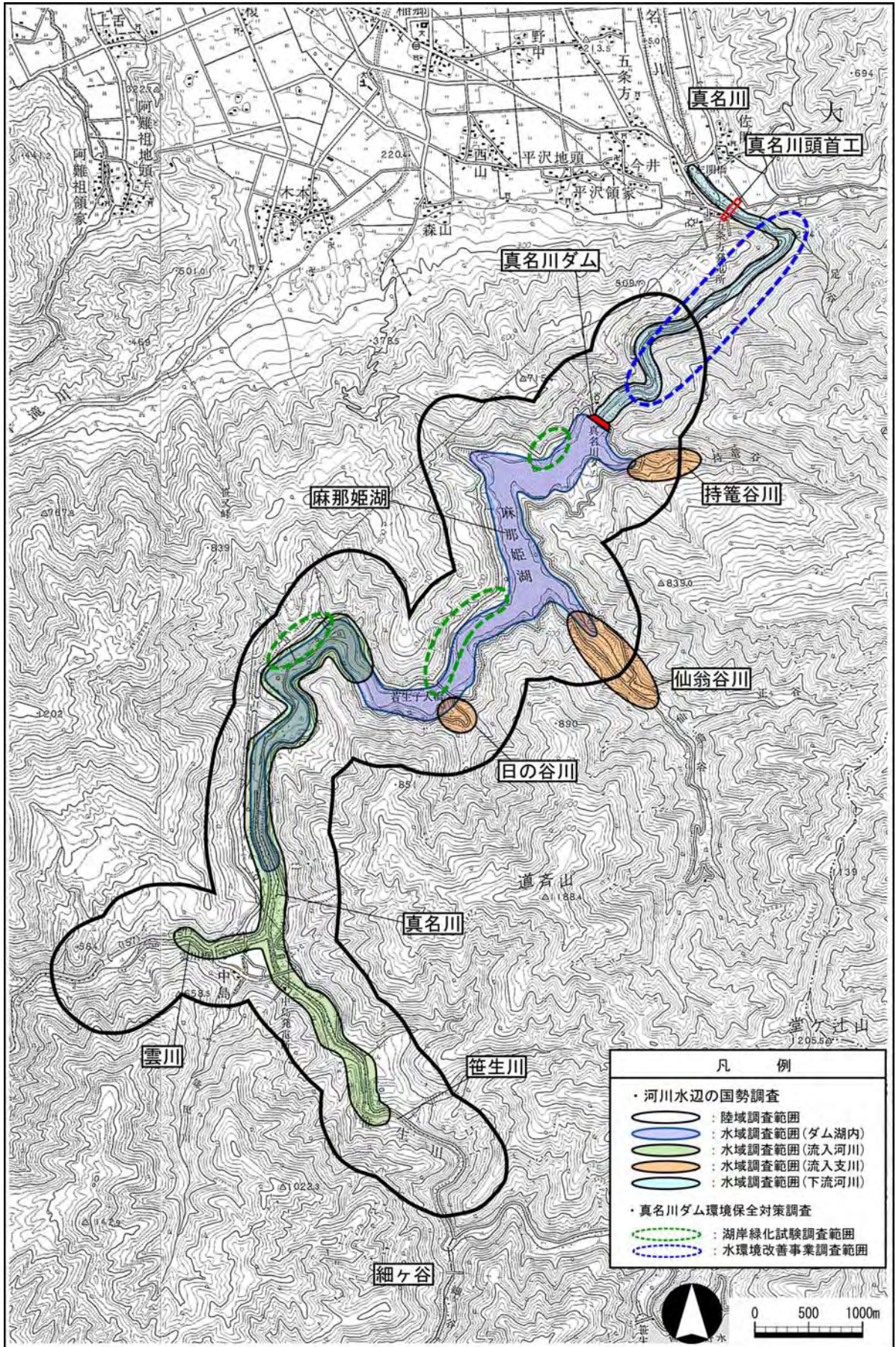


図 6.3-1 生物の生息・生息状況の変化の検証の視点

### 6.3.1 ダム湖内における変化の検証

ダムの存在・供用により、ダム湖内において環境条件の変化が起こり、ダム湖内を利用する様々な生物の生息・生育状況に変化を引き起こすと想定される。

そのため、ここでは真名川ダム湖内における環境条件の変化及びそれに引き起こされる生物の生息・生育状況の変化を図 6.3-2 のように想定し、真名川ダムの存在・供用によりダム湖内の生物の生息・生育状況が変化について、以下の手順で検証した。

#### (1) 環境条件の変化の把握

- ・ 真名川ダム貯水位変動状況
- ・ 真名川ダム貯水池の水質
- ・ 魚類の放流実績等
- ・ 人によるダム湖の利用状況

#### (2) 生物の生息・生育状況の変化の把握

- ・ 魚類の生息状況（止水性魚類、回遊性魚類、外来種）の変化
- ・ 底生動物の生息状況の変化
- ・ 動植物プランクトンの生息状況の変化
- ・ 湖面を利用する鳥類の生息状況の変化

#### (3) ダムによる影響の検証

真名川ダムの生物の生息・生育状況の変化について、環境条件の変化やダム以外の要因等と照らし合わせて検討し、ダムによる影響を検証した。

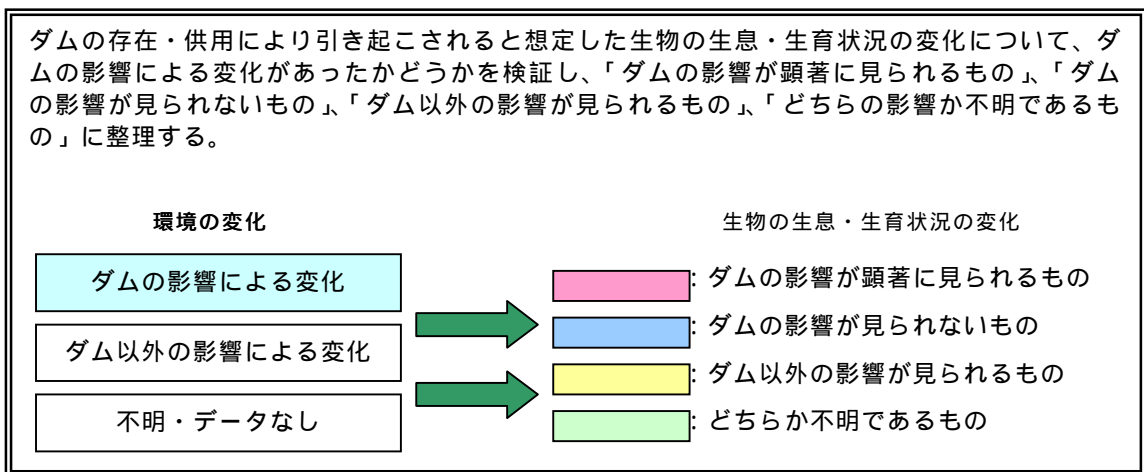
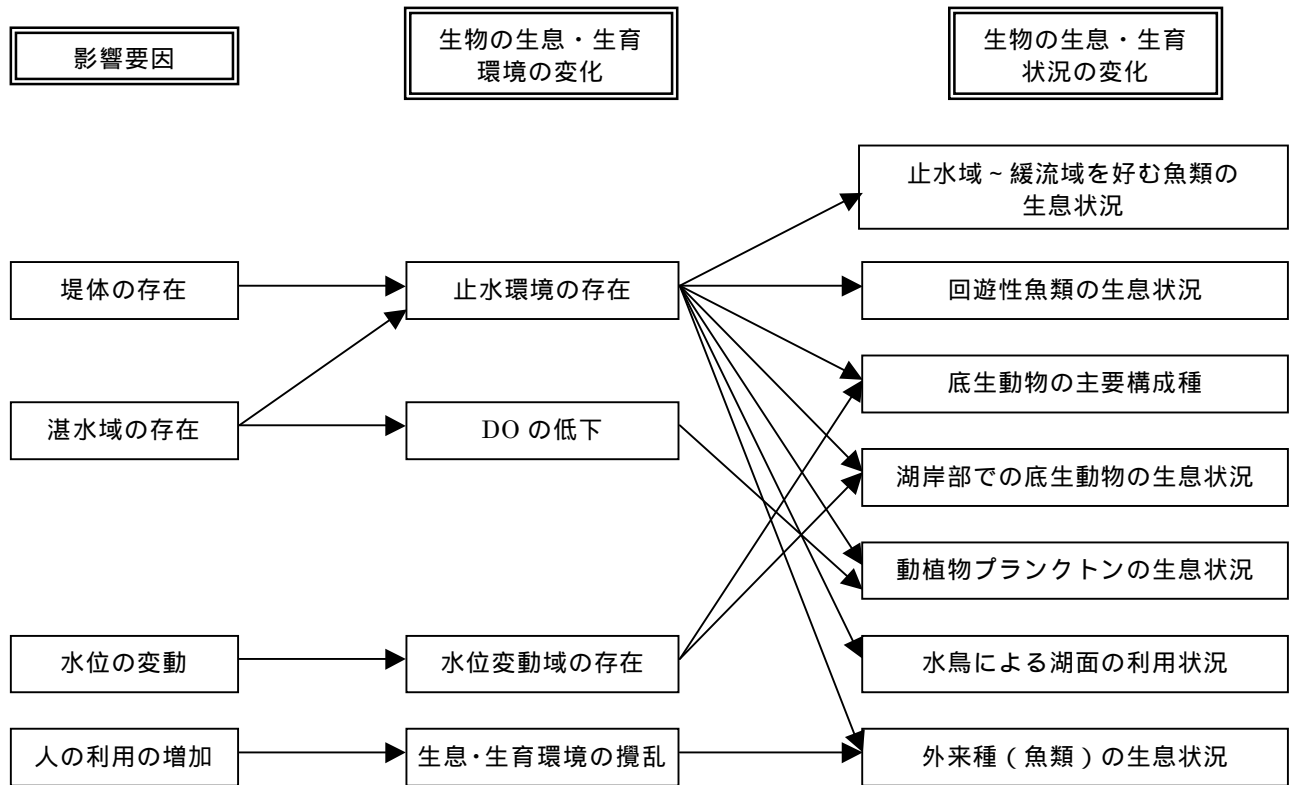


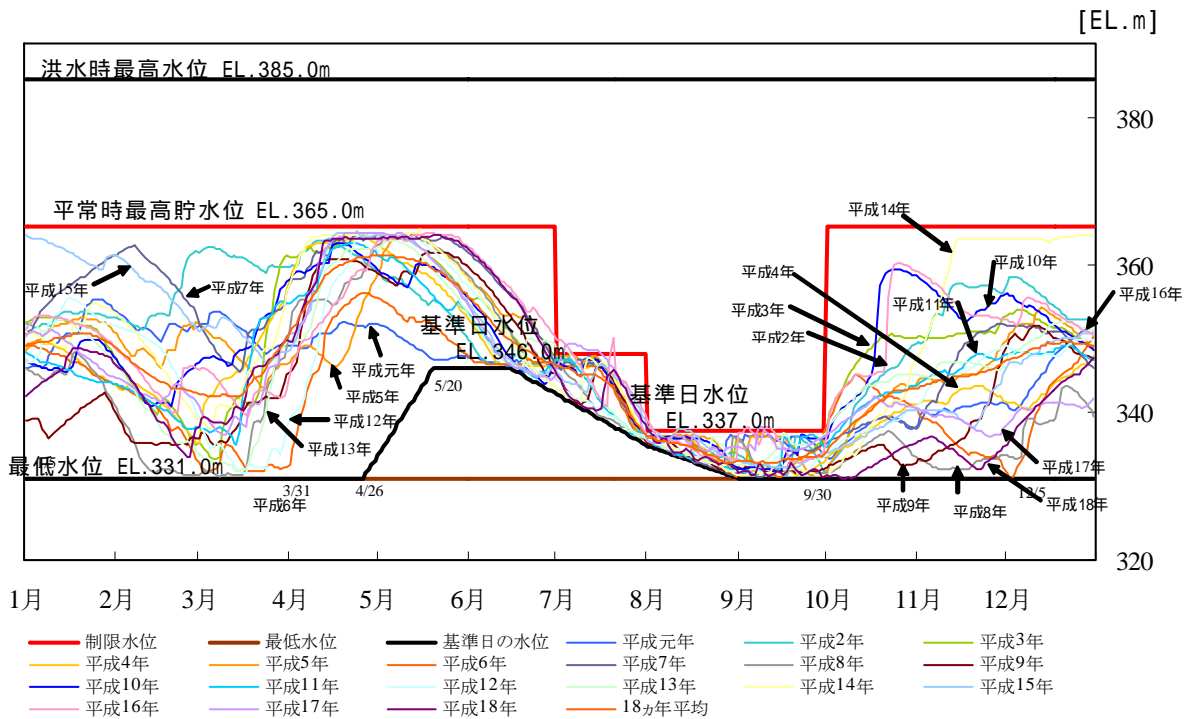
図 6.3-2 ダム湖内で想定される環境への影響要因と生物の生息・生育環境の変化



(1)環境条件の変化

1)水位変動

国勢調査を開始した平成2年度であることから、その前年にあたる平成元年以降のダム湖内の水位変動を図6.3-3に示す。図に示すとおり、ダム湖の貯水位は331～平常時最高水位の365mの間でほぼ規則的な変化を繰り返していた。



出典：「3.利水補給」より抜粋

図 6.3-3 水位の変化

2)水質

平成元年以降のダム湖内の水質変化は、図6.3-4に示すとおりである。

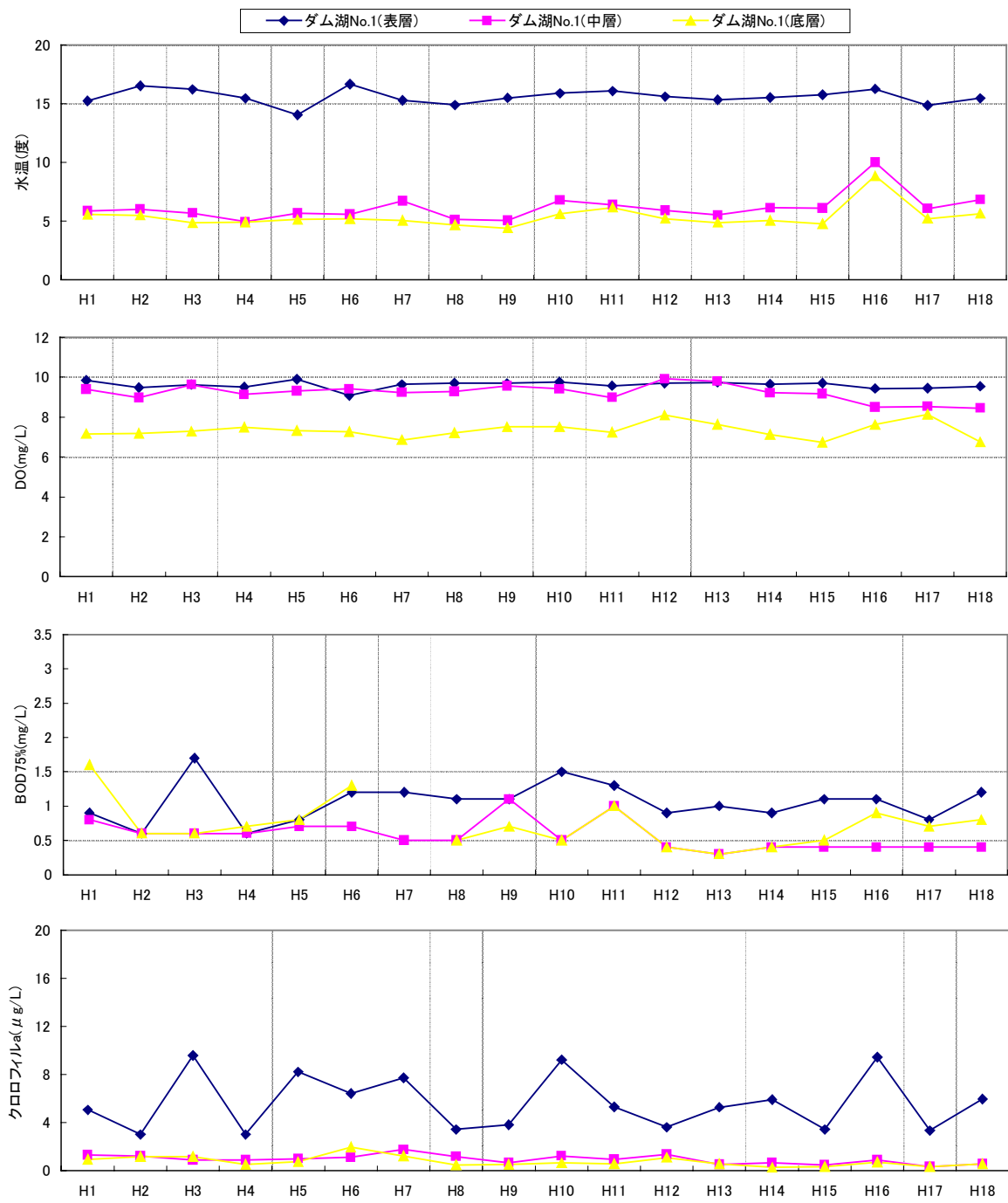
水温、D0、BOD75%、クロロフィル a については、経年的な増減の傾向は認められない結果となっている。なお、項目ごとの概要は以下のとおりである。

水温：表層で 14～17、中層で 5～10、底層で 4～9 の間で推移。

D0：表層で 10mg/l 前後、中層で 9mg/l 前後、底層で 7～8mg/l の間で推移。

BOD75%：表層で 1mg/l 前後、中層、底層で 0.5mg/l 前後の間で推移。

クロロフィル a：表層で 2～9 μg/l、中層、底層で概ね 1 μg/l 前後で推移。



出典：「5.水質」より抜粋

図 6.3-4 水質の変化

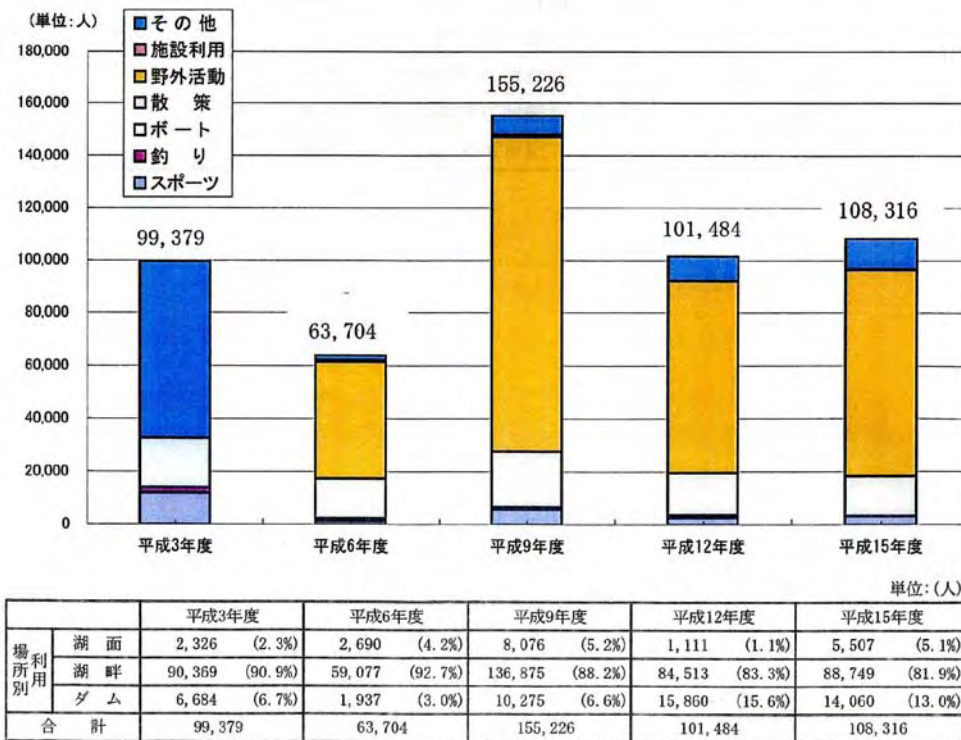
### 3)ダム湖内における魚類の放流状況

ダム湖内に漁業権は設定されておらず、魚類の放流実績はない。しかし、ダム上流において釣り人等によるアユ等の私的な放流が行われている。

出典：6-19 「平成13年度自然環境調査業務報告書（魚介類）」

### 4)人によるダム湖の利用

真名川ダムにおけるダム湖利用実態調査によると、真名川ダムでは「野外活動」としての利用がほぼ大部分を占める結果であった。ダム湖流入部に位置する、麻那姫湖青少年旅行村の公園（キャンプ場）施設利用が多く、過去の調査結果から見てアウトドア的な利用が大半を占めており、釣りは利用者の約0.2%から1.7%である。



出典：6-23 「平成15年度ダム湖利用実態調査業務報告書」

図 6.3-5 河川水辺の国勢調査（ダム湖版）結果による真名川ダム年間利用者数



「7.水源地域動態」より抜粋

図 6.3-6 中島地区麻那姫湖青少年旅行村での気球体験

(2)生物の生息・生育状況の変化の把握

1)魚類

ダム湖内における魚類の確認状況を表 6.3-2 に、捕獲個体数の推移を図 6.3-7 に示す。

魚類は、平成 3 年度から平成 13 年度の間に行った 4 回の調査で 18 種（1 回当たりの確認種数は 12～14 種）を確認した。このうち、コイ科のオイカワ、アブラハヤ、ウグイ等、アユ科のアユ、サケ科のイワナ、アマゴ（サツキマスは平成 13 年度に確認）については、過去 4 回の調査で継続して確認した。優占種は全ての調査年度でウグイであり、個体数の変動はあるものの、種構成に大きな変化は認められなかった。

表 6.3-2 ダム湖内における魚類の確認状況

No	確認種		遊泳性	生活型	産卵場所	調査年度				合計
	科名	種名				平成3年 (1991)	平成5年 (1993)	平成8年 (1996)	平成13年 (2001)	
1	コイ科	コイ	遊泳魚	純淡水魚	水草など			7		7
2		ギンブナ	遊泳魚	純淡水魚	水草など		8	30	73	111
3		フナ類	遊泳魚	純淡水魚	水草など	28				28
		ハス	遊泳魚	純淡水魚	砂礫	1		1		2
4		オイカワ	遊泳魚	純淡水魚	砂礫	7	19	1	4	31
5		アブラハヤ	遊泳魚	純淡水魚	砂礫	10	32	43	73	158
6		ウグイ	遊泳魚	純淡水魚	砂礫	216	257	717	378	1568
7		ビワヒガイ	遊泳魚	純淡水魚	二枚貝				1	1
8		カマツカ	遊泳魚	純淡水魚	砂礫	35	11	50	28	124
9		ニゴイ	遊泳魚	純淡水魚	砂礫		1	22	14	37
10	ギギ科	ギギ	底生魚	純淡水魚	石下		4	13	15	32
11	キュウリウオ科	ワカサギ	遊泳魚	遡河回遊魚	砂礫、水草など	1	15	1		17
12	アユ科	アユ	遊泳魚	両測回遊魚	砂礫	62	20	6	5	93
13	サケ科	イワナ	遊泳魚	遡河回遊魚	礫	19	5	38	15	77
14		ニジマス	遊泳魚	純淡水魚	礫		2		1	3
15		ヤマメ	遊泳魚	遡河回遊魚	砂礫	4		1		5
16		アマゴ (サツキマス)	遊泳魚	遡河回遊魚	砂礫	27	7	9	3 (3)	46 (3)
17	カジカ科	カジカ	底生魚	純淡水魚	石下	3			2	5
18	ハゼ科	トウヨシノボリ	底生魚	両測回遊魚	石下		24			24
	7科	18種	種数合計			12	13	14	13	18
			個体数合計			413	405	939	615	2372

注 1)表中の数値は年間の合計捕獲個体数を示す。

注 2)調査の概要は以下のとおりである。

平成 3 年度：調査回数 2 回（6、9 月） 調査地点 4 地点（St. 5、St. 10、St. 16、St. 19）

平成 5 年度：調査回数 1 回（9 月） 調査地点 4 地点（St. 6、St. 10、St. 17、St. 20）

平成 8 年度：調査回数 2 回（5、10 月） 調査地点 6 地点（St. 6、St. 8、St. 12、St. 15、St. 17、St. 21）

平成 13 年度：調査回数 2 回（5、10 月） 調査地点 5 地点（St. 5、St. 9、St. 10、St. 16、St. 19）

出典：6-2 「平成 3 年度水生生物調査作業報告書」

6-7 「平成 5 年度ダム自然環境調査報告書（魚介類）」

6-12 「平成 8 年度ダム自然環境調査業務報告書（魚介類）」

6-19 「平成 13 年度ダム自然環境調査業務報告書（魚介類）」

6-66 「日本の淡水魚」

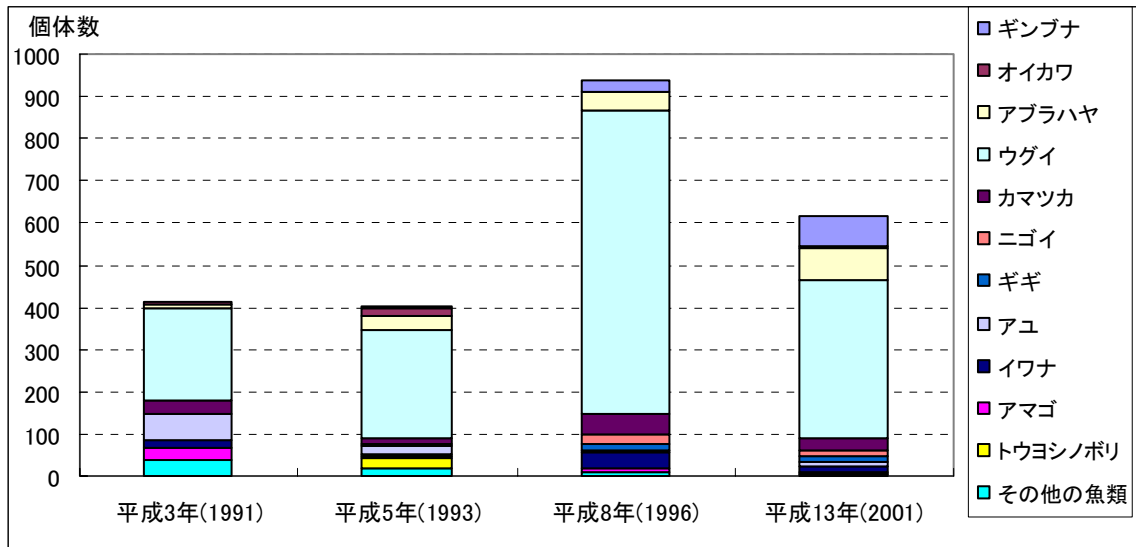


図 6.3-7 ダム湖内における魚類の捕獲個体数の推移

注 1) グラフの個体数は、年間の合計捕獲個体数を示す。

注 2) 調査の概要は以下のとおりである。

平成 3 年度：調査回数 2 回（6、9 月） 調査地点 4 地点（St. 5、St. 10、St. 16、St. 19）

平成 5 年度：調査回数 1 回（9 月） 調査地点 4 地点（St. 6、St. 10、St. 17、St. 20）

平成 8 年度：調査回数 2 回（5、10 月） 調査地点 6 地点（St. 6、St. 8、St. 12、St. 15、St. 17、St. 21）

平成 13 年度：調査回数 2 回（5、10 月） 調査地点 5 地点（St. 5、St. 9、St. 10、St. 16、St. 19）

出典：6-2 「平成 3 年度水生生物調査作業報告書」

6-7 「平成 5 年度ダム自然環境調査報告書（魚介類）」

6-12 「平成 8 年度ダム自然環境調査業務報告書（魚介類）」

6-19 「平成 13 年度ダム自然環境調査業務報告書（魚介類）」

(a) 止水域～緩流域を好む魚類の生息状況の変化

ダム湖内では、一般的に止水域や緩流域を好むコイ、ギンブナ、ビワヒガイなどのコイ科魚類やナマズ目のギギに加えて、緩流域を主な生息環境としているニゴイ、アブラハヤ、ウグイを確認し、止水域～緩流域を好む魚類が生息していた。特にギンブナについては捕獲数が増加していること、次項に示す図 6.3-9 に示すとおり体長 6cm 以下の個体も確認していること、いくつかの年級群が存在することが示唆されることから、ダム湖内で繁殖しているものと考えられる。

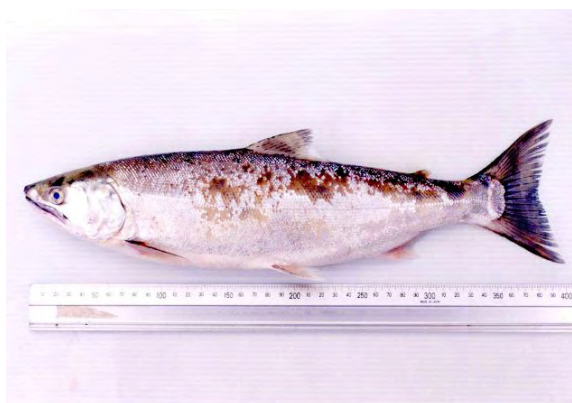
(b) 回遊性魚類の生息状況の変化

ダム湖内で確認した回遊性魚類は、ワカサギ、アユ、イワナ、ヤマメ、アマゴ（サツキマス）、トウヨシノボリの 6 種類である<sup>1</sup>。

ワカサギは平成 3 年度、5 年度、8 年度に少数を確認したが、平成 13 年度には確認していない。アユは各調査で確認しているものの、捕獲数は少なく、ダム湖の上流河川で放流された個体を確認したのと考えられる。ヤマメは平成 3 年度、8 年度に少数を確認したが、平成 13 年度には確認していない。トウヨシノボリは平成 5 年度の調査でのみ確認している。

アマゴは平成 3 年度以降 4 回の調査で確認している。なお、降湖型のサツキマスを平成 13 年度に 3 個体確認している。図 6.3-10 に示すとおり、体長は 21.5～34.0 cm で、同年に捕獲されたアマゴの 2～3 倍の大きさである。アマゴは、元来、九頭竜川水系には分布していない種であるが、10 cm 程度の小型個体も確認していることから、放流によるアマゴが陸封化し、定着しているものと考えられる。

イワナは平成 3 年度以降 4 回の調査で確認している。図 6.3-11 に示すとおり、大小の個体が混ざって確認していることから、陸封化されていると考えられる。



出典：6-19 「平成 13 年度ダム自然環境調査業務報告書（魚介類）」

図 6.3-8 アマゴ（サツキマス）

<sup>1</sup> ワカサギとアマゴは、元々九頭竜川水系には生息せず、人為的に持ち込まれた「国内外来種」である。  
出典：6-64 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 福井県レッドデータブック（動物編）」

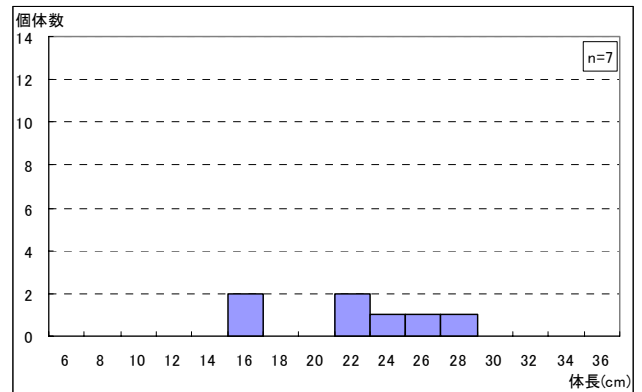
(c) 外来種の生息状況の変化

ダム湖内で確認した外来種は、要注意外来生物のニジマス 1 種のみである。

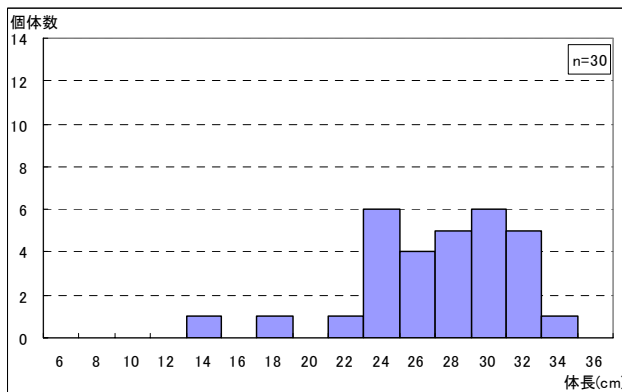
ニジマスは平成 5 年度に 2 個体、平成 13 年度に 1 個体の計 3 個体を確認している。本種は明治 10 年に北アメリカから日本に移入され、その後、各地の溪流や湧水地帯で養殖、放流が行われている。真名川ダム湖への侵入経緯は不明であるが、確認数が少ないことからダム湖内に定着している可能性は低いと考えられる。

なお、特定外来種のおオクチバス（ブラックバス）は確認されなかった。

平成 3 年度は  
ギンブナは確認されなかった。

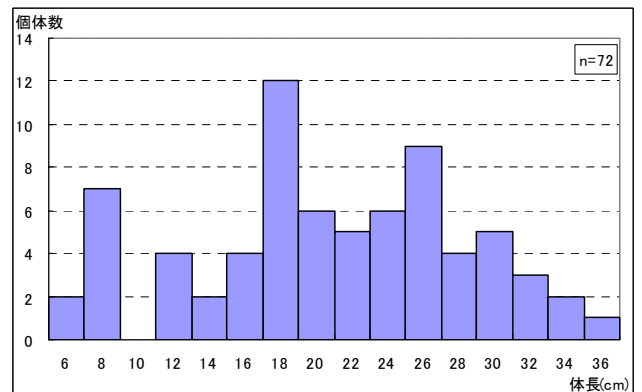


平成 3 年度 (全長)



平成 8 年度

平成 5 年度



平成 13 年度

図 6.3-9 ギンブナの体長組成比較 (ダム湖内)

注 1) グラフの個体数は、年間の合計捕獲個体数を体長別に示したものである。

注 2) 調査の概要は以下のとおりである。

平成 3 年度：調査回数 2 回 (6, 9 月) 調査地点 4 地点 (St. 5, St. 10, St. 16, St. 19)

\* 平成 3 年度の捕獲個体は全長で計測されており、その最大値、最小値、平均値のみが記録されているため、サイズの特定できる記録のみを抽出した。

平成 5 年度：調査回数 1 回 (9 月) 調査地点 4 地点 (St. 6, St. 10, St. 17, St. 20)

平成 8 年度：調査回数 2 回 (5, 10 月) 調査地点 6 地点 (St. 6, St. 8, St. 12, St. 15, St. 17, St. 21)

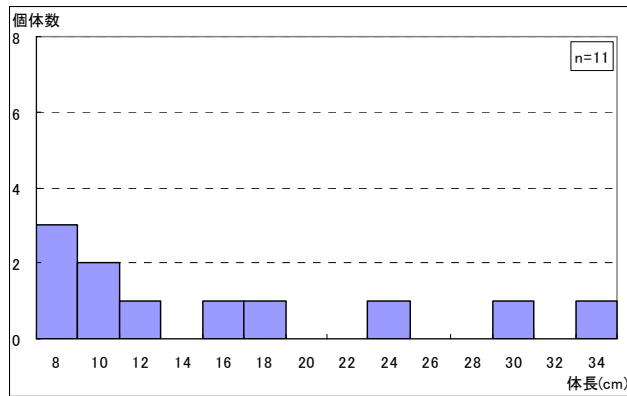
平成 13 年度：調査回数 2 回 (5, 10 月) 調査地点 5 地点 (St. 5, St. 9, St. 10, St. 16, St. 19)

出典：6-2 「平成 3 年度水生生物調査作業報告書」

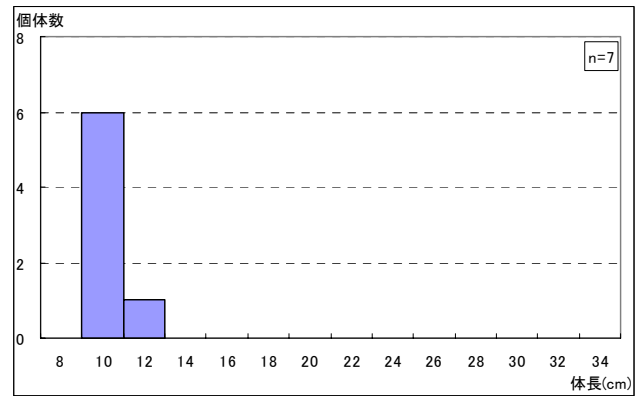
6-7 「平成 5 年度ダム自然環境調査報告書 (魚介類)」

6-12 「平成 8 年度ダム自然環境調査業務報告書 (魚介類)」

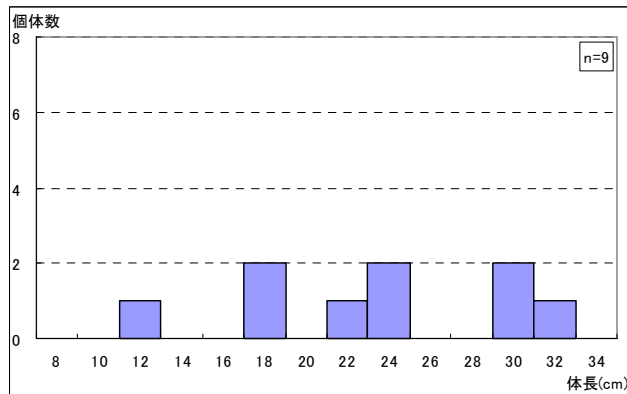
6-19 「平成 13 年度ダム自然環境調査業務報告書 (魚介類)」



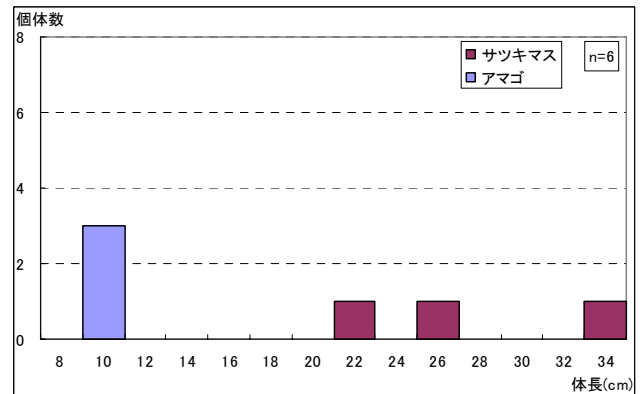
平成3年度 (全長)



平成5年度



平成8年度



平成13年度

図 6.3-10 アマゴ (サツキマス) の体長組成比較 (ダム湖内)

注 1) グラフの個体数は、年間の合計捕獲個体数を体長別に示したものである。

注 2) 調査の概要は以下のとおりである。

平成3年度：調査回数2回(6,9月) 調査地点4地点(St.5, St.10, St.16, St.19)

\* 平成3年度の捕獲個体は全長で計測されており、その最大値、最小値、平均値のみが記録されているため、サイズの特定できる記録のみを抽出した。

平成5年度：調査回数1回(9月) 調査地点4地点(St.6, St.10, St.17, St.20)

平成8年度：調査回数2回(5,10月) 調査地点6地点(St.6, St.8, St.12, St.15, St.17, St.21)

平成13年度：調査回数2回(5,10月) 調査地点5地点(St.5, St.9, St.10, St.16, St.19)

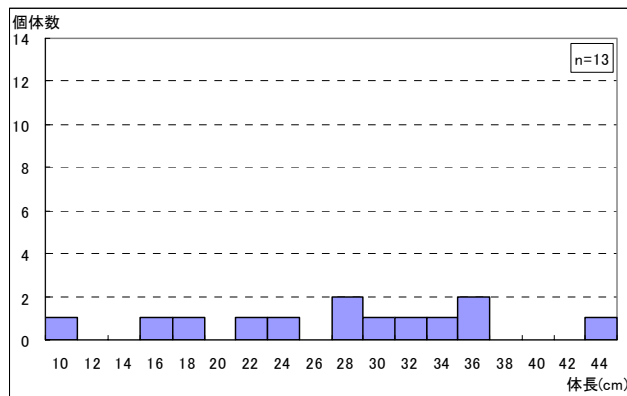
出典：6-2 「平成3年度水生生物調査作業報告書」

6-7 「平成5年度ダム自然環境調査報告書(魚介類)」

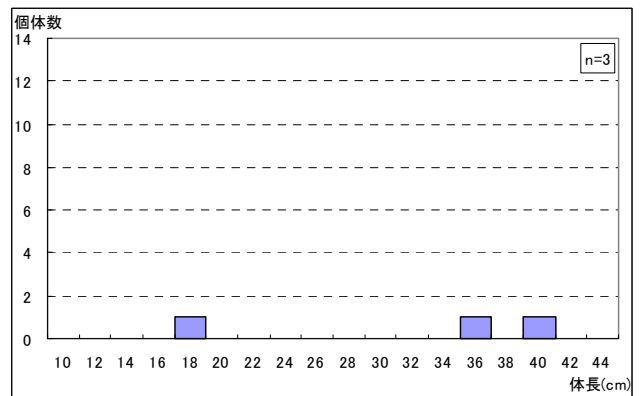
6-12 「平成8年度ダム自然環境調査業務報告書(魚介類)」

6-19 「平成13年度ダム自然環境調査業務報告書(魚介類)」

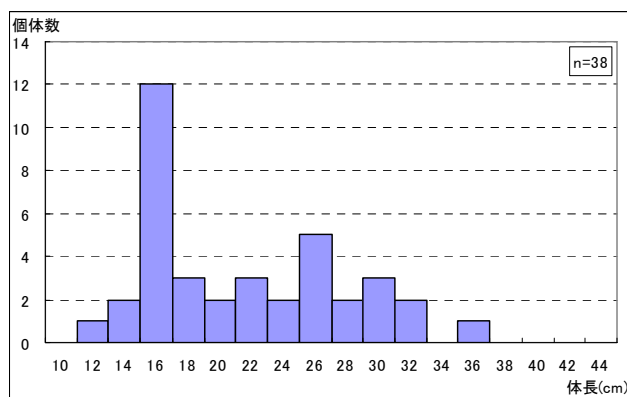




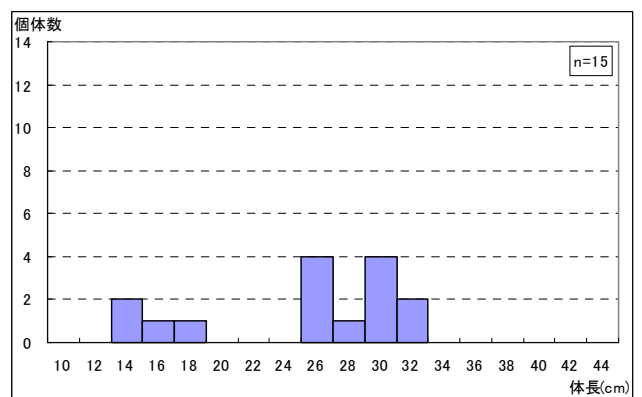
平成3年度（全長）



平成5年度



平成8年度



平成13年度

図 6.3-11 イワナの体長組成比較（ダム湖内）

注 1) グラフの個体数は、年間の合計捕獲個体数を体長別に示したものである。

注 2) 調査の概要は以下のとおりである。

平成3年度：調査回数2回（6、9月） 調査地点4地点（St.5、St.10、St.16、St.19）

\*平成3年度の捕獲個体は全長で計測されており、その最大値、最小値、平均値のみが記録されているため、サイズの特定できる記録のみを抽出した。

平成5年度：調査回数1回（9月） 調査地点4地点（St.6、St.10、St.17、St.20）

平成8年度：調査回数2回（5、10月） 調査地点6地点（St.6、St.8、St.12、St.15、St.17、St.21）

平成13年度：調査回数2回（5、10月） 調査地点5地点（St.5、St.9、St.10、St.16、St.19）

出典：6-2 「平成3年度水生生物調査作業報告書」

6-7 「平成5年度ダム自然環境調査報告書（魚介類）」

6-12 「平成8年度ダム自然環境調査業務報告書（魚介類）」

6-19 「平成13年度ダム自然環境調査業務報告書（魚介類）」

2) 底生動物

底生動物は、平成6年度から平成18年度の間に行った4回の調査で147種(1回当りの確認種数は15~125種)を確認した。ダム湖最深部や中央部ではイトミミズ目が優占する単調な生物相であった。一方、流入河川や支川の流入部では、止水性のゲンゴロウ類や流水性のカワゲラ目、トビケラ目など、多くの底生動物を確認した。ダム湖内でも、流入河川や支川の流入部の環境では、多様な底生動物が生息していると考えられる。

表 6.3-3(1) ダム湖内における底生動物の生息状況

No.	科名	種名	調査年度				摂食機能群	生活型
			平成6年 (1994)	平成9年 (1997)	平成14年 (2002)	平成18年 (2006)		
1	ヒドドラ科	ヒドドラ科の一種					2) 捕食者	固着型
2	サンカクアタマズムシ科	ナミズムシ					28) 堆積物収集者	匍匐型
-	-	ウスムシ目の一種			1		捕食者	匍匐型
3	ハリヒモムシ科	ハリヒモムシ属の一種					1) 捕食者	匍匐型
4	モノアラガイ科	コシダカヒメモノアラガイ					1) 剥ぎ取り食者	匍匐型
5	ヒメミミズ科	ヒメミミズ科の一種					21) 不明	不明
6	イトミミズ科	ユリミミズ属の一種					27) 堆積物収集者	掘潜型
7	-	イトミミズ					49) 堆積物収集者	掘潜型
8	-	ヤドリミミズ属の一種					42) 不明	不明
9	-	ミズミミズ属の一種					52) 堆積物収集者	匍匐型
10	-	クロオビミミズ					2) 不明	不明
11	-	ミズミミズ属の一種					8) 堆積物収集者	掘潜型
12	-	ヨゴレミズミミズ					3) 堆積物収集者	掘潜型
-	-	イトミミズ亜科の一種	25267	56607	36144	4310	堆積物収集者	掘潜型
13	ツリミミズ科	ツリミミズ科の一種					4) 堆積物収集者	掘潜型
14	フトミミズ科	フトミミズ科の一種					1) 堆積物収集者	掘潜型
15	ミズムシ科	ミズムシ	12	4	2		36) 堆積物収集者	匍匐型
16	ヨコエビ科	ニッポンヨコエビ	1	1	3		堆積物収集者	匍匐型
17	ヌマエビ科	ヌマエビ	3	3	23		1) 堆積物収集者	匍匐型
18	テナガエビ科	スジエビ	9	28	19		捕食者	匍匐型
19	サワガニ科	サワガニ	1		1		2) 堆積物収集者	匍匐型
20	ヒメフタオカゲロウ科	ヒメフタオカゲロウ属の一種			2		7) 剥ぎ取り食者・堆積物収集者	遊泳型
21	コカゲロウ科	フタバコカゲロウ					76) 剥ぎ取り食者	遊泳型
22	-	ヨシノコカゲロウ					11) 剥ぎ取り食者	遊泳型
23	-	フタモンコカゲロウ					6) 剥ぎ取り食者・堆積物収集者	遊泳型
24	-	シロハラコカゲロウ			1	203	剥ぎ取り食者	遊泳型
25	-	フコカゲロウ					28) 剥ぎ取り食者・堆積物収集者	遊泳型
-	-	コカゲロウ属の一種					32) 剥ぎ取り食者・堆積物収集者	遊泳型
26	-	1コカゲロウ					36) 剥ぎ取り食者・堆積物収集者	遊泳型
27	-	フタバカゲロウ属の一種					2) 剥ぎ取り食者・堆積物収集者	遊泳型
28	-	ヒメウスバコカゲロウ属の一種					27) 剥ぎ取り食者・堆積物収集者	遊泳型
29	ヒラタカゲロウ科	オビカゲロウ			2		剥ぎ取り食者	匍匐型
30	-	ミヤマタニガワカゲロウ属の一種					1) 剥ぎ取り食者	匍匐型
31	-	ミドリタニガワカゲロウ			8		剥ぎ取り食者	匍匐型
-	-	タニガワカゲロウ属の一種					30) 剥ぎ取り食者	匍匐型
32	-	キイロヒラタカゲロウ					95) 剥ぎ取り食者	匍匐型
33	-	ウエノヒラタカゲロウ					1) 剥ぎ取り食者	匍匐型
34	-	エルモンヒラタカゲロウ					11) 剥ぎ取り食者	匍匐型
35	-	ユミモンヒラタカゲロウ					5) 剥ぎ取り食者	匍匐型
-	-	ヒラタカゲロウ属の一種					24) 剥ぎ取り食者	匍匐型
36	-	ヒメヒラタカゲロウ属の一種					60) 剥ぎ取り食者	匍匐型
37	フタオカゲロウ科	オオフタオカゲロウ	6	8			堆積物収集者・剥ぎ取り食者	遊泳型
38	トビロカゲロウ科	ウエストントビロカゲロウ					1) 堆積物収集者・剥ぎ取り食者	匍匐型
-	-	トビロカゲロウ属の一種			2		89) 堆積物収集者・剥ぎ取り食者	掘潜型
39	モンカゲロウ科	フタスジモンカゲロウ			5	15	濾過食者	掘潜型
40	-	モンカゲロウ	45				濾過食者	掘潜型
41	カワカゲロウ科	キイロカワカゲロウ					1) 堆積物収集者	掘潜型
42	マダラカゲロウ科	クロマダラカゲロウ			5		3) 堆積物収集者	匍匐型
-	-	トウヨウマダラカゲロウ属の一種					87) 堆積物収集者・剥ぎ取り食者	匍匐型
43	-	ヨシノマダラカゲロウ					28) 剥ぎ取り食者・捕食者	匍匐型
44	-	フタマダラカゲロウ					23) 捕食者	匍匐型
45	-	ミットゲマダラカゲロウ					1) 捕食者	匍匐型
-	-	トゲマダラカゲロウ属の一種					27) 剥ぎ取り食者・捕食者	匍匐型
46	-	マダラカゲロウ属の一種					2) 堆積物収集者	匍匐型
47	-	エラブタマダラカゲロウ					1) 堆積物収集者	匍匐型
48	-	アカマダラカゲロウ					1) 捕食者	匍匐型
49	カワトンボ科	カワトンボ属の一種					1) 捕食者	匍匐型
50	サナエトンボ科	クロサナエ	3				捕食者	掘潜型
-	-	タビドサナエ属の一種			2	2	4) 捕食者	掘潜型
51	-	コオニヤンマ	1				捕食者	掘潜型
-	-	サナエトンボ科の一種					5) 捕食者	掘潜型
52	エゾトンボ科	コヤマトンボ	1				捕食者	匍匐型
53	オナシカワゲラ科	フサオナシカワゲラ属の一種			2	18	破砕食者	匍匐型
54	-	オナシカワゲラ属の一種			1	16	破砕食者	匍匐型
55	-	ユビオナシカワゲラ属の一種				142	破砕食者	匍匐型
56	ミドリカワゲラ科	ミドリカワゲラ科の一種			1	15	捕食者	匍匐型
57	カワゲラ科	モンカワゲラ属の一種					2) 捕食者	匍匐型
-	-	カワゲラ科の一種					20) 捕食者	匍匐型

表 6.3-3(2) ダム湖内における底生動物の確認状況

No.	科名	種名	調査年度				摂食機能群	生活型	
			平成6年 (1994)	平成9年 (1997)	平成14年 (2002)	平成18年 (2006)			
58	アミメカワゲラ科	ヤマトヒロハネアミメカワゲラ				1	捕食者	匍匐型	
59		ヒメアミメカワゲラ属の一種				4	捕食者	匍匐型	
60		アサカワヒメカワゲラ属の一種				3	捕食者	匍匐型	
61		コクサヒメカワゲラ属の一種			1	1	捕食者	匍匐型	
62		アズクサカワゲラ		1			捕食者	匍匐型	
-		クサカワゲラ属の一種		1			捕食者	匍匐型	
-		アミメカワゲラ科の一種				28	捕食者	匍匐型	
63	アメンボ科	シマアメンボ				1	捕食者	水表面型	
64		コセアカアメンボ				2	捕食者	水表面型	
65		ヒメアメンボ				5	捕食者	水表面型	
66	タイコウチ科	ミスカマキリ		1			捕食者	遊泳型	
67	ヘビトンボ科	ヘビトンボ				1	捕食者	匍匐型	
68	アミメシマトビケラ科	アミメシマトビケラ属の一種				1	濾過食者	造網型	
69	ムネカクトビケラ科	ムネカクトビケラ属の一種				1	濾過食者	造網型	
70	シマトビケラ科	ミヤマシマトビケラ属の一種				4	濾過食者	造網型	
71		コガタシマトビケラ属の一種				1	濾過食者	造網型	
72		シロスシマトビケラ				15	濾過食者	造網型	
73		ウルマーシマトビケラ				70	濾過食者	造網型	
-		シマトビケラ属の一種				172	濾過食者	造網型	
74	カワトビケラ科	タニカワトビケラ属の一種				80	濾過食者	造網型	
75	イワトビケラ科	ミヤマイワトビケラ属の一種				4	捕食者	造網型	
76	ヒゲナガカワトビケラ科	ヒゲナガカワトビケラ				14	濾過食者	造網型	
-		ヒゲナガカワトビケラ属の一種				1	濾過食者	造網型	
77	ヤマトビケラ科	ヤマトビケラ属の一種				45	刮き取り食者	携巢型	
78	カワリナガレトビケラ科	ツメナガレトビケラ				32	捕食者	匍匐型	
79	ナガレトビケラ科	ナガレトビケラ属の一種				28	捕食者	匍匐型	
80	コエグリトビケラ科	コエグリトビケラ属の一種				51	刮き取り食者	携巢型	
81	カクスイトビケラ科	ハナセマルツツビケラ				31	刮き取り食者	携巢型	
82		マルツツビケラ				1	刮き取り食者	携巢型	
-		マルツツビケラ属の一種				17	刮き取り食者	携巢型	
83	ニンギョウトビケラ科	ニンギョウトビケラ属の一種				8	刮き取り食者	携巢型	
84	カクツツビケラ科	フトヒゲカクツツビケラ			1	1	破砕食者	携巢型	
85		コカクツツビケラ			1	1	破砕食者・堆積物収集者	携巢型	
86		オオカクツツビケラ				3	破砕食者	携巢型	
-		カクツツビケラ属の一種				62	破砕食者	携巢型	
87	ヒゲナガトビケラ科	タデヒゲナガトビケラ属の一種				4	破砕食者	携巢型	
88		ヒゲナガトビケラ属の一種				2	破砕食者・堆積物収集者	携巢型	
89		アオヒゲナガトビケラ属の一種				1	破砕食者・堆積物収集者	携巢型	
90	エグリトビケラ科	エグリトビケラ属の一種		1	1		破砕食者・堆積物収集者	携巢型	
91	キタガミトビケラ科	キタガミトビケラ		1			濾過食者	固着型	
92	フトヒゲトビケラ科	フタスジキソトビケラ				1	破砕食者・堆積物収集者	携巢型	
93	マルバナトビケラ科	マルバナトビケラ属の一種				11	破砕食者・堆積物収集者	携巢型	
94	ガガンボ科	ガガンボ属の一種			2	2	捕食者	匍匐・掘潜型	
95		ブリオノケラ属の一種				1	堆積物収集者	匍匐型	
96		ウスバガガンボ属の一種				18	刮き取り食者	固着型	
97		オトヒメガガンボ属の一種				1	捕食者	匍匐型	
98		ヒゲナガガガンボ属の一種				6	捕食者	匍匐・掘潜型	
99		ホシヒメガガンボ属の一種				1	破砕食者	匍匐型	
100	アミカ科	ヤマトアミカ属の一種				1	刮き取り食者	固着型	
101		ヒメアミカ属の一種				5	刮き取り食者	固着型	
102	ヌカカ科	ヌカカ科の一種				20	捕食者	掘潜型	
103	ユスリカ科	カユスリカ属の一種				65	捕食者	匍匐型	
104		ダンダラヒメユスリカ属の一種				2	捕食者	匍匐型	
-		モンユスリカ亜科の一種			46	2	357	捕食者	匍匐型
105		ヤマユスリカ属の一種				2	堆積物収集者	匍匐型	
106		タニユスリカ属の一種				26	刮き取り食者・堆積物収集者	匍匐型	
107		バガスティア属の一種				24	堆積物収集者	匍匐型	
108		トゲヤマユスリカ属の一種			1	6	堆積物収集者	匍匐型	
109		ケブカユスリカ属の一種				18	破砕食者・堆積物収集者	掘潜型	
110		ハダカユスリカ属の一種				10	堆積物収集者	匍匐型	
111		ツヤユスリカ属の一種				29	破砕食者・堆積物収集者	掘潜型	
112		エラノリユスリカ属の一種				1	不明	不明	
113		テンマクエリユスリカ属の一種				34	刮き取り食者	掘潜型	
114		ホソケブカユスリカ属の一種				5	堆積物収集者	匍匐型	
115		エリユスリカ属の一種				133	堆積物収集者	掘潜型	
116		トゲアシユスリカ属の一種				16	堆積物収集者	掘潜型	
117		ヌカユスリカ属の一種				1	捕食者	匍匐型	
118		トウベテニア属の一種				4	堆積物収集者	匍匐型	
-		エリユスリカ亜科の一種				184	破砕食者・堆積物収集者	掘潜型	
119		オオユスリカ		3	116		濾過食者	掘潜型	
-		ユスリカ属の一種				137	433	濾過食者	掘潜型
120		クリプトキロノムス属の一種				5	捕食者	掘潜型	
121		クロユスリカ属の一種				269	1	濾過食者	掘潜型
122		エンドキロノムス属の一種				1	濾過食者	掘潜型	
123		オオミドリユスリカ属の一種				2	濾過食者	掘潜型	
124		ツヤムネユスリカ属の一種				3	濾過食者	掘潜型	
125		バラクラドベルマ属の一種				5	堆積物収集者	掘潜型	
126		カワリユスリカ属の一種			113	26	堆積物収集者	掘潜型	
127		ハモンユスリカ属の一種			192	425	濾過食者	掘潜型	
128		キサキユスリカ属の一種			273		濾過食者	掘潜型	
129		ハモクリユスリカ属の一種				3	破砕食者	不明	
130		アシマダラユスリカ属の一種			5	24	堆積物収集者	掘潜型	
131		ヒワヒゲユスリカ属の一種				2	濾過食者	掘潜型	
132		マイクロセクトゥラ属の一種				320	堆積物収集者	匍匐型	
133		ナガレユスリカ属の一種				2	濾過食者	掘潜型	
134		タニタルス属の一種				32	濾過食者	掘潜型	
-		ユスリカ亜科の一種		500	705	115	79	濾過食者	掘潜型

表 6.3-3(3) ダム湖内における底生動物の確認状況

No.	科名	確認種 種名	調査年度				摂食機能群	生活型
			平成6年 (1994)	平成9年 (1997)	平成14年 (2002)	平成18年 (2006)		
135	ホソカ科	ホソカ属の一種				1	堆積物収集者	匍匐型
136	アコ科	アシマダラアコ属の一種				20	濾過食者	固着型
137	タマバエ科	タマバエ科の一種				1	捕食者・寄生者	多様
138	アシナガバエ科	アシナガバエ科の一種				1	捕食者	掘潜型
139	オドリバエ科	オドリバエ科の一種				4	捕食者	掘潜型
-	-	ハエ目				3	多様	多様
140	ゲンゴロウ科	クロスマメゲンゴロウ	1				捕食者	游泳型
141		マメゲンゴロウ	1	2			捕食者	游泳型
142		クロスマメゲンゴロウ			1		捕食者	游泳型
143		モンキマメゲンゴロウ	2	1	3		捕食者	游泳型
144		ヒメゲンゴロウ		2			捕食者	游泳型
-		ヒメゲンゴロウ亜科の一種				8	捕食者	游泳型
145		コシマゲンゴロウ		1			捕食者	游泳型
146	ガムシ科	ガムシ	1				捕食者	游泳型
-		ガムシ科の一種				3	捕食者	游泳型
147	ヒメドロムシ科	キスジミゾドロムシ				1	剥ぎ取り食者	匍匐型
-		ヒメドロムシ亜科の一種				16	剥ぎ取り食者・捕食者	匍匐型
合計種数			11目16科 19種	9目11科 15種	11目21科 31種	16目54科 125種	-	-
			17目61科147種					

分類	区分	解説
摂食機能群	破碎食者	落葉等を細かくかみ砕いて摂食する。
	濾過食者	網を張ったり、口器や前肢に生える長毛により有機物を集めて摂食する。
	堆積物収集者	堆積物を集めて摂食する。
	剥ぎ取り食者	基質上の藻類等を剥ぎ取る様に摂食する。
	捕食者	動物(死体も含む)を捕食する。
	寄生者	宿主に寄生、または自由生活しつつ宿主の血液や体液を吸う。

分類	区分	解説
生活型	造網型	分泌絹糸を用いて捕獲網を作るもの。
	固着型	強い吸着器官または鈎着器官をもって他物に固着するもの。
	匍匐型	匍匐するもの。
	携巢型	簡巢をもつ多くのトビケラ目の幼虫。
	游泳型	移動の際は主として游泳するもの。
	掘潜型	砂または泥の中に潜っていることが多いもの。
	水表型	水表上で生活するもの。
	寄生型	主に寄生生活をするもの。

注 1) 表中の数値は年間の合計個体数を示す。

注 2) 調査の概要は以下のとおりである。

平成 6 年度：調査回数 3 回 (5、8、11 月) 調査地点 5 地点 (定点調査：St.7、St.9、St.19 定性調査 St.2、St.13)

平成 9 年度：調査回数 3 回 (5、8、11 月) 調査地点 6 地点 (定点調査：St.7、St.9、St.16 定性調査 St.2、St.11、St.15)

平成 14 年度：調査回数 3 回 (5、7~8、11 月) 調査地点 10 地点 (定点調査：St.7、St.9、St.16 定性調査：St.2、St.3、St.8、St.10~12、St.17)

平成 18 年度：調査回数 3 回 (6、8、11 月) 調査地点 3 地点 (定点調査：St.7 定性調査：St.15、St.18)

出典：6-9 「平成 6 年度ダム自然環境調査報告書 (底生動物)」

6-13 「平成 9 年度ダム自然環境調査業務報告書 (底生動物)」

6-20 「平成 14 年度ダム自然環境調査業務報告書 (底生動物)」

6-27 「平成 18 年度ダム自然環境調査業務報告書 (底生動物)」

6-67 「原色川虫図鑑」

6-73 「Ecology and classification of North American freshwater invertebrates.Academic press」

6-74 「An Introduction to the Aquatic Insects of North America」

6-75 「溪流生態砂防学」

6-76 「琉球列島の陸水生物」

6-77 「底生動物の生活型と摂食機能群による河川生態系評価」

(a) ダム湖内の主要構成種の変化

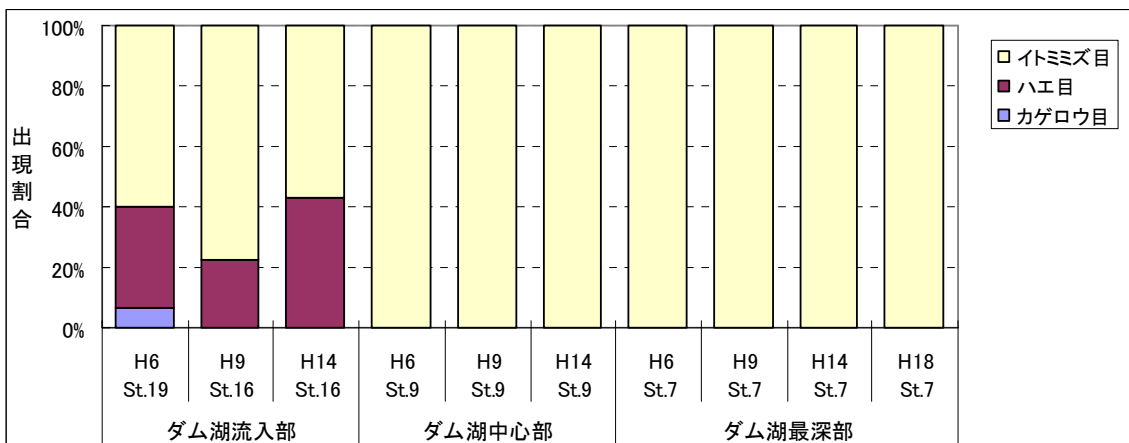
ダム湖最深部、ダム湖中央部、ダム湖流入部の 3 地点の定点採集（定量調査）より、各地点での出現種、生活型、摂食機能群の比較を行った。

目別の確認種数割合及び生活型別割合、摂食機能群別割合を図 6.3-12 に示す。

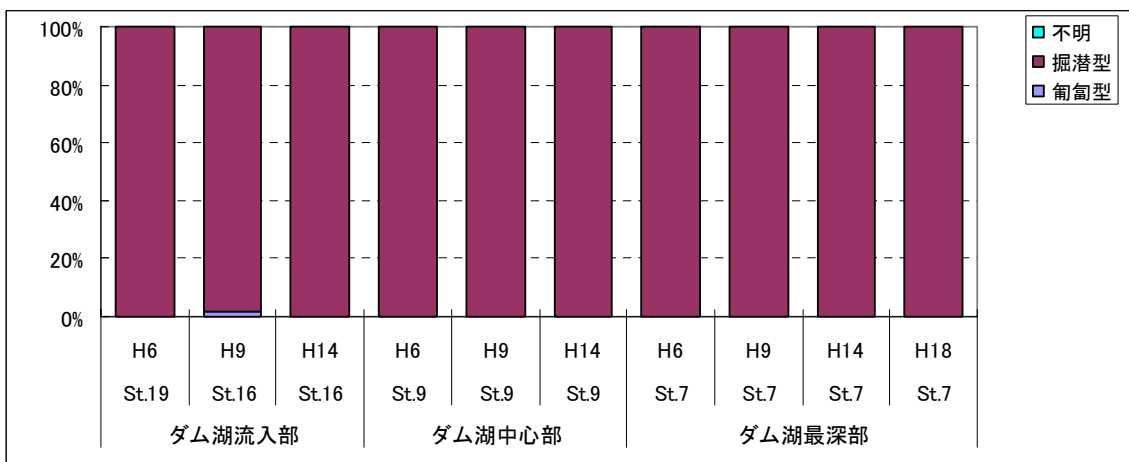
ダム湖流入部ではイトミミズ目（イトミミズ亜科の一種）が優占しており、次いでハエ目（ユスリカ属の一種、クロユスリカ属の一種等）となっている。これらは主に止水の堆積物に潜って生活している掘潜型で、堆積物を集めて摂食する堆積物収集者である。そのほか、少数ではあるが、匍匐型のモンユスリカ亜科の一種、ハモンユスリカ属の一種、濾過食者のモンカゲロウなども出現している。

ダム湖最深部と中央部では、ハエ目もほとんどみられなくなり、イトミミズ目のみが優占している。これは、ダム湖最深部や中央部の底層の DO 濃度が、ダム湖流入部に比べて低下しているとみられ、低い DO 濃度でも生息可能なイトミミズ目が優占する結果となったことが考えられる。

このように、ダム湖内において掘潜型のイトミミズ目やハエ目が優占するのは、一般的なダム湖にみられる傾向で、平成 6 年以降 3 回の調査でも大きな変化はみられない。

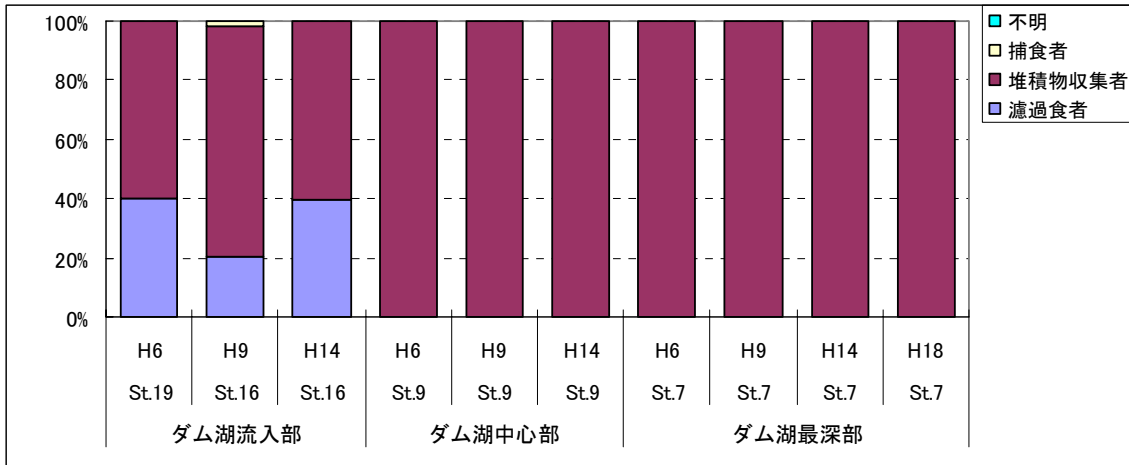


目別出現割合



生活型別割合

図 6.3-12(1) ダム湖内における目別、生活型別、摂食機能群別の出現割合の比較



摂食機能群別割合

図 6.3-12(2) ダム湖内における目別、生活型別、摂食機能群別の出現割合の比較

注 1) 調査の概要は以下のとおりである。

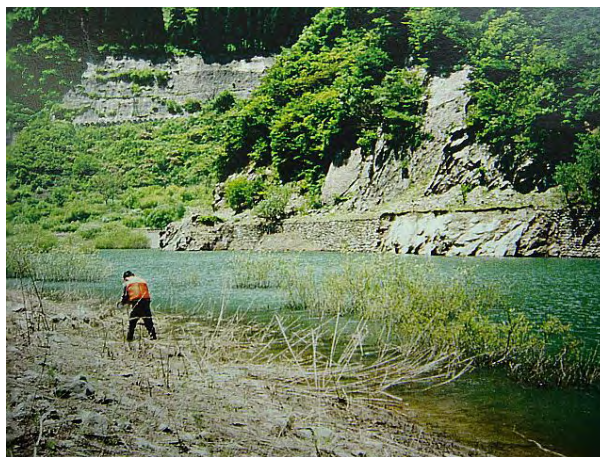
- 平成 6 年度：調査回数 3 回（5、8、11 月） 定点調査地点 3 地点（St.7、St.9、St.19）
- 平成 9 年度：調査回数 3 回（5、8、11 月） 定点調査地点 3 地点（St.7、St.9、St.16）
- 平成 14 年度：調査回数 3 回（5、7～8、11 月） 定点調査地点 3 地点（St.7、St.9、St.16）
- 平成 18 年度：調査回数 3 回（6、8、11 月） 定点調査はダム湖最深部（St.7）のみで実施

- 出典：6-9 「平成 6 年度ダム自然環境調査報告書（底生動物）」  
 6-13 「平成 9 年度ダム自然環境調査業務報告書（底生動物）」  
 6-20 「平成 14 年度ダム自然環境調査業務報告書（底生動物）」  
 6-27 「平成 18 年度ダム自然環境調査業務報告書（底生動物）」  
 6-67 「原色川虫図鑑」  
 6-73 「Ecology and classification of North American freshwater invertebrates.Academic press」  
 6-74 「An Introduction to the Aquatic Insects of North America」  
 6-75 「溪流生態砂防学」  
 6-76 「琉球列島の陸水生物」  
 6-77 「底生動物の生活型と摂食機能群による河川生態系評価」

(b)湖岸部での底生動物の生息状況の変化

ダム湖湖岸部の底生動物のうち、代表的な止水性の底生動物の確認状況を次項の表 6.3-4 に示す。

ダム湖湖岸では、流水域にも生息するホソクロマメゲンゴロウの確認はなかったが、アメンボ、ミズカマキリ、オオユスリカ、ゲンゴロウ類等、主に止水域に生息する 10 種を確認した。ダム湖湖岸で確認した種は、真名川(St.16、St.19)や持籠谷川(St.2)、仙翁谷川(St.11)などのダム湖流入部で主に確認した。湖岸に流木や落葉が堆積した箇所や水際の植物が浸かった箇所などで多くの底生動物を確認しており、このような環境がダム湖内での生息環境になっているものと考えられる。



出典：6-9 「平成 6 年度ダム自然環境調査報告書（底生動物）」

図 6.3-13 ダム湖流入部（真名川）の状況

表 6.3-4 ダム湖湖岸部の止水性底生動物の確認状況

種名	調査年度								生息環境
	ダム湖岸				流入河川・流入支川				
	平成6年 (1994)	平成9年 (1997)	平成14年 (2002)	平成18年 (2006)	平成6年 (1994)	平成9年 (1997)	平成14年 (2002)	平成18年 (2006)	
オオアメンボ								1	池、沼、川などに生息する。
アメンボ								4	池や沼、水田、川などに生息する。
コセアカアメンボ				2					山間のうす暗い池や沼などに生息する。
ヒメアメンボ				5				5	池や沼、水田、湿地、小流などに生息する。
ミズカマキリ	1								深くて挺水植物の多い止水域に生息する。
オオユスリカ	3	116							池沼、池などの止水域に生息する。
クロズマメゲンゴロウ	1								溜池、湿地などに生息する。
マメゲンゴロウ	1	2							一般的に止水域に生息するが、あらゆる水域にみられる。
ホソクロマメゲンゴロウ					1				小河川の石や落葉の下、湿地、水溜まりなどでみられる。
コシマゲンゴロウ		1							池や水田に生息する。
ヒメゲンゴロウ		2					7		あらゆる止水域に生息する。
ガムシ	1								池や水田に生息する。
シジミガムシ						2	1		池に生息する。
キスジミドリムシ				1					水田、池に生息する。
合計種数	5種	4種	0種	3種	1種	2種	1種	3種	—
	10種				6種				

注 1) 表中の数値は年間の合計個体数を示す。

注 2) 種の選定にあたっては、止水域を主な生息環境とする種を選定した。

注 3) 調査の概要は以下のとおりである。

平成 6 年度：調査回数 3 回（5、8、11 月）ダム湖内の調査地点 5 地点（St. 2、St. 7、St. 9、St. 13、St. 19）、流入河川の調査地点 3 地点（St. 5、St. 14、St. 20）

平成 9 年度：調査回数 3 回（5、8、11 月）ダム湖内の調査地点 6 地点（St. 2、St. 7、St. 9、St. 11、St. 15、St. 16）、流入河川の調査地点 3 地点（St. 4、St. 14、St. 22）

平成 14 年度：調査回数 3 回（5、7～8、11 月）ダム湖内の調査地点 10 地点（St. 2、St. 3、St. 7～12、St. 16、St. 17）、流入河川の調査地点 3 地点（St. 6、St. 14、St. 23）

平成 18 年度：調査回数 3 回（6、8、11 月）ダム湖内の調査地点 3 地点（St. 7、St. 15、St. 18）、流入河川の調査地点 2 地点（St. 24、St. 14）

（平成 18 年度の St. 14 の調査は、6 月のみの実施である。）

- 出典：6-9 「平成 6 年度ダム自然環境調査報告書（底生動物）」  
 6-13 「平成 9 年度ダム自然環境調査業務報告書（底生動物）」  
 6-20 「平成 14 年度ダム自然環境調査業務報告書（底生動物）」  
 6-27 「平成 18 年度ダム自然環境調査業務報告書（底生動物）」  
 6-68 「日本産水生昆虫 - 科・属・種への検索」  
 6-69 「改訂版 図説日本のゲンゴロウ」  
 6-70 「原色日本甲虫図鑑(II)」  
 6-71 「ユスリカの世界」  
 6-72 「アメンボのふしぎ」



### 3)動植物プランクトン

植物プランクトン及び動物プランクトンについては、平成 6 年度から平成 18 年度の間に行った 4 回の調査で、前者は珪藻類や緑藻類等の 80 種を、動物プランクトンはワムシ類とミジンコ類等の甲殻類を含む 45 種を確認した。

表 6.3-5 ダム湖内における確認種リスト (植物プランクトン)

No.	分類	種名	調査年度												水質階級		
			平成6年(1994)				平成12年(2000)				平成17年(2005)					平成18年(2006)	
種名	科名	種名	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	春	夏	秋	冬
1	藍藻綱	クロコッコク科	<i>Synechocystis minuscula</i>														
2		コレモ科	<i>Lyngbya</i> sp.														
3			<i>Oscillatoria</i> sp.														
4	クリプト藻綱	クリプトモナス科	<i>Cryptomonas</i> sp.														
5	渦鞭毛藻綱	ギムノディニウム科	<i>Gymnodinium</i> sp.														
6			<i>Glenodinium</i> sp.														
7		ペリディニウム科	<i>Peridinium bipes f. occultatum</i>														
8			<i>Peridinium cunningtonii</i>														
9	黄金色藻綱	ディノブリオン科	<i>Dinobryon divergens</i>														
10			<i>Dinobryon sertularia</i>														
11		シヌラ科	<i>Mallomonas</i> sp.														
12	珪藻綱	クラシオンラ科	<i>Cyclotella comta</i>														
13			<i>Cyclotella glomerata</i>														
14			<i>Cyclotella meneghiniana</i>														
15			<i>Cyclotella radiosa</i>														
16			<i>Cyclotella stelligera</i>														
17			<i>Cyclotella</i> spp.														
18			<i>Stephanodiscus</i> spp.														
19		メロシラ科	<i>Thalassiosira pseudonana</i>														
20			<i>Thalassiosira distans</i>														
21		リソレニア科	<i>Rhizosolenia tenuis</i>														
22			<i>Rhizosolenia tenuis</i>														
23			<i>Rhizosolenia tenuis</i>														
24		ピドルフィア科	<i>Attheya zachariasii</i>														
25		ディアトマ科	<i>Asterionella formosa</i>														
26			<i>Ceratoneis arcus</i>														
27			<i>Diatoma hiemale</i>														
28			<i>Diatoma mesodon</i>														
29			<i>Diatoma tenue</i>														
30			<i>Fragilaria crotonensis</i>														
31			<i>Fragilaria vaucheriae</i>														
32			<i>Fragilaria</i> spp.														
33			<i>Synedra acus</i>														
34			<i>Synedra nana</i>														
35			<i>Synedra rumpens</i>														
36			<i>Synedra ulna</i>														
37			<i>Synedra</i> spp.														
38		ナビクラ科	<i>Cymbella gracilis</i>														
39			<i>Cymbella minuta</i>														
40			<i>Cymbella sinuata</i>														
41			<i>Cymbella turcibula</i>														
42			<i>Cymbella ventricosa</i>														
43			<i>Cymbella</i> spp.														
44			<i>Diploneis ovalis</i>														
45			<i>Gomphonema angustatum</i>														
46			<i>Gomphonema gracile</i>														
47			<i>Gomphonema quadripunctatum</i>														
48			<i>Gomphonema vastum</i>														
49			<i>Gomphonema</i> sp.														
50			<i>Gyrosigma acuminatum</i>														
51			<i>Navicula nitica</i>														
52			<i>Navicula radiosa</i>														
53			<i>Navicula viridula</i>														
54			<i>Navicula</i> spp.														
55			<i>Rhizosolenia curvata</i>														
56		アクナンテス科	<i>Achnanthes japonica</i>														
57			<i>Achnanthes lanceolata</i>														
58			<i>Achnanthes</i> spp.														
59			<i>Cocconeis placentula</i>														
60		ニッチア科	<i>Hantzschia amphioxys</i>														
61			<i>Hantzschia acicularis</i>														
62			<i>Hantzschia dissoluta</i>														
63			<i>Hantzschia frustulum</i>														
64			<i>Hantzschia fruticosa</i>														
65			<i>Hantzschia holsatica</i>														
66			<i>Hantzschia palea</i>														
67			<i>Hantzschia</i> spp.														
68		スリレラ科	<i>Surirella angusta</i>														
69			<i>Surirella ovata</i>														
70			<i>Surirella robusta</i>														
71		ミドリムシ藻綱	<i>Euglena</i> sp.														
72			<i>Rhacis</i> sp.														
73			<i>Trachelomonas</i> sp.														
74	緑藻綱	クラミドモナス科	<i>Chlamydomonas</i> sp.														
75		オオヒゲマワリ科	<i>Eudorina elegans</i>														
76			<i>Pandorina morum</i>														
77		クロコッコク科	<i>Planktosphaeria gelatinosa</i>														
78		バルズラ科	<i>Sphaerocystis Schroeteri</i>														
79		オオキステイス科	<i>Ankistrodesmus falcatus</i>														
80			<i>Oocystis</i> sp.														
81			<i>Selenastrum</i> sp.														
82		ゴレンキニア科	<i>Colenkinia paucispina</i>														
83		セネデスムス科	<i>Scenedesmus incrassatulus</i>														
84			<i>Scenedesmus</i> sp.														
85		コッコクサ科	<i>Flakatothrix gelatinosa</i>														
86		カエトフオラ科	<i>Stigeoclonium subsecundum</i>														
87		ツツミモ科	<i>Cosmarium</i> sp.														
88			<i>monas</i> sp.														
細胞数合計			6387000	924000	377000	138000	307400	1381400	101000	272800	128925	70116	51825	373100	87200	226900	47700
種数合計			14	13	13	11	21	21	26	16	38	24	24	16	18	17	13

注 1) 水質階級  
 PS : - 強腐水性    PS : - 強腐水性    ms : - 中腐水性    ms : - 中腐水性    os : 貧腐水性  
 : 記載なし

注 2) 調査の概要は以下のとおりである。  
 平成 6 年度 : 調査回数 4 回 (5, 8, 10, 12 月)    調査地点 1 地点 (St.1)  
 平成 12 年度 : 調査回数 4 回 (5, 8, 10, 12 月)    調査地点 1 地点 (St.1)  
 平成 17 年度 : 調査回数 3 回 (5, 8, 10 月)    調査地点 1 地点 (St.1)  
 平成 18 年度 : 調査回数 4 回 (7, 8, 11, 12 月)    調査地点 1 地点 (St.1)  
 出典 : 6-10 「平成 6 年度ダム自然環境調査報告書 (動植物プランクトン)」  
 6-18 「平成 12 年度ダム自然環境調査報告書 (動植物プランクトン)」  
 6-26 「平成 17 年度ダム自然環境調査業務報告書 (動植物プランクトン)」  
 6-28 「平成 18 年度ダム自然環境調査業務報告書 (動植物プランクトン)」  
 6-78 「汚水生物学」  
 6-80 「日本淡水産動植物プランクトン図鑑」

表 6.3-6 ダム湖内における確認種リスト（動物プランクトン）

(単位:個体/m<sup>3</sup>)

No.	分類			調査年度												水質階級		
				平成6年(1994)				平成12年(2000)				平成17年(2005)		平成18年(2006)				
				春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬	春	夏	春	夏			
1	葉状根足虫綱	アルケラ科	<i>Arcella vulgaris</i>									16.5				ms- ms		
			<i>Arcella</i> sp.									8.3				-		
2		ディフルギア科	<i>Diffugia corona</i>											1471		ms		
			<i>Diffugia</i> spp.									7.8		1887		-		
3		セントロピキス科	<i>Centropixis aculeata</i>				15				13					ms-os		
4	糸状根足虫綱	エウグリファ科	<i>Acanthocystis</i> sp.		11							33.3				-		
5			<i>Heliozoa</i> sp.										12.8			-		
6	-	-	ACTINOPODA sp.								50					-		
	-	-	SARCOMASTIGOPHORA sp.									0.3				-		
7	キネトフラグ	トラケリウス科	<i>Dileptus</i> sp.										7.8			-		
8	ミノフォーラ綱		<i>Paradileptus</i> sp.						35	15		8.3				-		
9			<i>Kinetofragminophora</i> sp.	373	98	16										-		
10	少膜綱	ボルティケラ科	<i>Vorticella</i> sp.	2105		1						625		96	1070	-		
			<i>Peritrichida</i> sp.											64		-		
11	多膜綱	ラッパムシ科	<i>Stentor</i> sp.	57												-		
12		フデツツカラムシ科	<i>Tintinnidium</i> spp.	520	145		32				29		8.8	565	256	32		
13		スナカラムシ科	<i>Tintinnopsis cratera</i>	176	209	40		462	45	25				51		ms		
			<i>Tintinnopsis</i> spp.				80	15				241.8	15			-		
			<i>Oligotrichida</i> sp.	91	110	47		280	513	29						-		
			CILLOPHORA sp.	11			19	35	31	27	14.3	58.3	43	51	352	-		
14	単生殖葉綱	ツボワムシ科	<i>Brachionus angularis angularis</i>					20								ms- ms		
15			<i>Kellicottia longispina</i>			5	11	227	15279	12273	11700					ms-os		
16			<i>Keratella quadrata quadrata</i>	57	231	64						8.3	24.5			ms-os		
17			<i>Keratella quadrata</i>											96	115	64		
18		ハオリウムシ科	<i>Lepadella</i> sp.									0.3				ms- ms		
19		ツキガタムシ科	<i>Lecane luna</i>						5	10						ms		
			<i>Lecane</i> sp.					3								-		
20		ネスミウムシ科	<i>Trichocerca</i> sp.										12.8			-		
21		ハラアシウムシ科	<i>Ascomorpha</i> sp.										12.8	26		-		
22		ヒゲワムシ科	<i>Ploesoma hudsoni</i>											160		ms-os		
23			<i>Ploesoma truncatum</i>			3	5			35	14	53	591.5	47.3	3806	ms-os		
			<i>Ploesoma</i> sp.	2												-		
24			<i>Polyarthra euryptera</i>					15								ms-os		
25			<i>Polyarthra trigla vulgaris</i>	1081	5	12	42	496	877		9.3	275	404	128		ms-os		
			<i>Polyarthra</i> spp.		156	2	26	263	106							ms-os		
26			<i>Synchaeta</i> spp.	2	357	1159	307	1413	541	2277	146.3	491.8	425.8		288	32		
27		フクロワムシ科	<i>Asplanchna priodonta</i>	645	146	185	9	2626	739	13	173	483.3	230.5			ms-os		
			<i>Asplanchna</i> sp.											4138	1343	153		
28		ミジンコワムシ科	<i>Hexarthra mira</i>						43			525.3	2389.8			ms		
29		ヒラタワムシ科	<i>Pompholyx complanata</i>										7.8			ms-os		
30		テマリウムシ科	<i>Conochilus unicornis</i>	12490				49556	341	10		358.3	2185.3			ms-os		
			<i>Conochilus</i> sp.											180	2335	-		
31		ハナビウムシ科	<i>Collotheca</i> sp.			37										-		
32	ヒルガタムシ綱	ミスヒルガタムシ科	Philodinidae sp.					5								-		
	-	-	EUROTATOREA sp.				33									-		
	-	-	ASCHELMINTHES sp.					354	711	296	17					-		
33	-	-	NEMATODA sp.	4				27			23	214				-		
34	甲殻綱	ミジンコ科	<i>Daphnia galeata</i>	1	181	205	615									-		
35			<i>Daphnia longispina</i>			25	64									os		
			<i>Daphnia</i> sp.													8		
36		ゾウミジンコ科	<i>Bosmina longirostris</i>	63	5201	65	761	199	33640	1732	528	0.3	46	100.5	26	768	5960	1860
37			<i>Bosminopsis deitersi</i>		6	9	59		8138	315	273	1616.5	180.3		2111		ms- ms	
38		マルミジンコ科	<i>Chydorus</i> sp.												64			
			<i>Brachionoda</i> sp.			170		11								-		
39		ヒゲナガケンミジンコ科	<i>Eodiaptomus laponicus</i>										729			76		
40			<i>Calanoida</i> sp.									8.3	2776.8		32	19		
41			<i>Harpacticoida</i> sp.									0.8				-		
42		キクロピナ科	Cyclopinae sp.				7									-		
43		キクロブス科	<i>Cyclops vicinus</i>			11	35		5		74	19	216.5	303		38		
44			<i>Thermocyclops hyalinus</i>													96		
			Cyclopidae sp.										67.8			-		
			Cyclopoidea sp.		119	331	482	83	394	1294	1092	1616.8	1414.3	128	608	535	609	
			Copepoda sp.	16	1551	1094	1414	155	5664	3534	3781	63.3	4975	12321.8	206	4733	2178	
45	昆虫綱	ユスリカ科	Chironomidae sp.									4.3	0.5			-		
	不明	不明	UNIDENTIFIED ANIMAL			175	5				2					-		
			個体数合計	88	25202	4219	3869	1858	119290	22246	19958	693.9	12208.4	23742.6	5531	20438	10144	3439
			種数合計	6	15	15	14	11	14	12	14	11	17	22	8	14	7	

注1) 水質階級

PS : -強腐水性 PS : -強腐水性 ms : -中腐水性 ms : -中腐水性 os : 貧腐水性  
: 記載なし

注2) 調査の概要は以下のとおりである。

平成6年度 : 調査回数4回(5,8,10,12月) 調査地点1地点(St.1)  
平成12年度 : 調査回数4回(5,8,10,12月) 調査地点1地点(St.1)  
平成17年度 : 調査回数3回(5,8,10月) 調査地点1地点(St.1)  
平成18年度 : 調査回数4回(7,8,11,12月) 調査地点1地点(St.1)

出典 : 6-10 「平成6年度ダム自然環境調査報告書(動植物プランクトン)」  
6-18 「平成12年度ダム自然環境調査報告書(動植物プランクトン)」  
6-26 「平成17年度ダム自然環境調査業務報告書(動植物プランクトン)」  
6-28 「平成18年度ダム自然環境調査業務報告書(動植物プランクトン)」  
6-78 「汚水生物学」  
6-80 「日本淡水産動植物プランクトン図鑑」

#### (a) 植物プランクトン

ダム湖内では、80種の植物プランクトンを確認した。これらの優占種と植物プランクトン群集型を表6.3-7に示すとともに、分類群別確認種数の比較を図6.3-14に示す。

優占種（細胞数の多い種）は、貧栄養型珪藻類群集に属する *Aulacoseira distans*、*Rhizosolenia eriensis*、中栄養型珪藻類に属する *Asterionella formosa*、*Cyclotella stelligera*等の珪藻類で、上位種は調査年度や調査時期で異なるが、貧栄養から中栄養型のプランクトンで構成されていた。平成17年度夏季と平成18年度冬季を除いて、優占種は珪藻類の占める割合が多かった。

こうした植物プランクトンの増殖は、水温や日照、流入量など様々な要因により規定されるため一概に言えないが、平成17年度以降はクリプト藻類や緑藻類の占める割合がやや多くなってきており、今後の変遷が注目される。<sup>\*1</sup>

生物指標となる植物プランクトンの水質階級別確認種数の比較を図6.3-15に示す。

図に示すとおり、いずれの調査年度も貧腐水性を好む種（珪藻類の *Ceratoneis arcus* や *Diatoma hiemale* 等）、貧腐水性から中腐水性の水域に生息する種（珪藻類の *Cyclotella* 属や *Asterionella formosa* 等）が多い傾向が認められた。この他、中腐水性から強腐水性の水域に生息する種として、珪藻類の *Synedra ulna*、*Nitzschia palea* 等がわずかに確認された。

また、ダム湖表層の窒素、リン、化学的酸素要求量は経年的にほぼ横ばい状態で変化はなく、植物プランクトンの群集型及び水質階級別確認種数に大きな変化は認められなかった。

なお、国勢調査以外で、平成元年から18年の間に淡水赤潮や水面変色を流入部と上流部で8回確認しており、景観上の問題となっている。

\*1 引用：6-26 「平成17年度ダム自然環境調査業務報告書（動植物プランクトン）」

## (b)動物プランクトン

ダム湖内では、45種の動物プランクトンを確認した。これらの優占種と動物プランクトン群集型を表6.3-8に示すとともに、分類群別確認種数の比較を図6.3-14に示す。

優占種(個体数の多い種)は、中栄養型鰓脚類群集に属するゾウミジンコ科の *Bosmina longirostris*をはじめとする甲殻類や、中栄養型輪虫類群集に属するテマリワムシ科の *Conochilus unicornis*、ツボワムシ科の *Keratella quadrata* 等のワムシ類等であり、上位種は調査年度や調査時期で異なるが、ほぼ中栄養型のプランクトンで構成されている。

生物指標となる動物プランクトンの水質階級別確認種数の比較を図6.3-15に示す。

いずれの調査年度においても、貧腐水性から中腐水性の水域に生息する種(ワムシ類の *Asplanchna priodonta* や *Conochilus unicornis* 等)が多い傾向が認められ、強腐水性の水域を好む種は確認されなかった。

また、ダム湖表層の窒素、リン、化学的酸素要求量は経年的にほぼ横ばいで変化はなく、動物プランクトンの群集型及び水質階級別確認種数に大きな変化は認められなかった。

表 6.3-7 植物プランクトンの変化の状況

調査時期	総細胞数 cells/ml	優占1位			優占2位			優占3位			
		種名	群集型	%	種名	群集型	%	種名	群集型	%	
平成 6 年度 (1994)	春	6387000	<i>Stephanodiscus</i> spp. (珪藻類)	-	96	<i>Asterionella formosa</i> (珪藻類)	中栄養型珪藻類群集	2	<i>monas</i> sp. (鞭毛虫類)	-	1
	夏	924000	<i>Asterionella formosa</i> (珪藻類)	中栄養型珪藻類群集	44	<i>Stephanodiscus</i> spp. (珪藻類)	-	37	<i>monas</i> sp. (鞭毛虫類)	-	8
	秋	377000	<i>Stephanodiscus</i> sp. (珪藻類)	-	63	<i>Oscillatoria</i> sp. (藍藻綱)	-	8	<i>Pandorina morum</i> (緑藻類)	-	8
	冬	138000	<i>Nitzschia</i> spp. (珪藻類)	-	23	<i>Stephanodiscus</i> sp. (珪藻類)	-	18	<i>Navicula</i> spp.	-	10
平成 12 年度 (2000)	春	307400	<i>Asterionella formosa</i> (珪藻類)	中栄養型珪藻類群集	58	<i>Melosira variaus</i> (珪藻類)	貧栄養型珪藻類群集	30	<i>Cyclotella</i> spp. (珪藻類)	-	4
	夏	1381400	<i>Cyclotella stelligera</i> (珪藻類)	中栄養型珪藻類群集	40	<i>Asterionella formosa</i> (珪藻類)	中栄養型珪藻類群集	23	<i>Cyclotella</i> spp. (珪藻類)	-	16
	秋	101000	<i>Cyclotella stelligera</i> (珪藻類)	中栄養型珪藻類群集	36	<i>Melosira variaus</i> (珪藻類)	貧栄養型珪藻類群集	29	<i>Asterionella formosa</i> (珪藻類)	中栄養型珪藻類群集	14
	冬	272800	<i>Synedra acus</i> (珪藻類)	中栄養型珪藻類群集	43	<i>Asterionella formosa</i> (珪藻類)	中栄養型珪藻類群集	28	<i>Cyclotella stelligera</i> (珪藻類)	中栄養型珪藻類群集	12
平成 17 年度 (2005)	春	128925	<i>Cyclotella</i> spp. (珪藻類)	-	43	<i>Cyclotella stelligera</i> (珪藻類)	中栄養型珪藻類群集	14	<i>Asterionella formosa</i> (珪藻類)	中栄養型珪藻類群集	14
	夏	70116	<i>Eudorina elegans</i> (緑藻類)	-	51	<i>Nitzschia holsatica</i> (珪藻類)	-	17	<i>Cryptomonas</i> sp. (クリプト藻類)	-	10
	秋	51825	<i>Cyclotella stelligera</i> (珪藻類)	中栄養型珪藻類群集	24	<i>Cryptomonas</i> sp. (クリプト藻類)	-	20	<i>Nitzschia holsatica</i> (珪藻類)	-	16
	冬	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
平成 18 年度 (2007)	春	186550	<i>Asterionella formosa</i> (珪藻類)	中栄養型珪藻類群集	53	<i>Rhizosolenia eriensis</i> (珪藻類)	貧栄養型珪藻類群集	20	<i>Ankistrodesmus falcatus</i> (緑藻類)	-	8
	夏	43600	<i>Rhizosolenia eriensis</i> (珪藻類)	貧栄養型珪藻類群集	32	<i>Cryptomonas</i> sp. (クリプト藻類)	-	18	<i>Synedra acus</i> (珪藻類)	中栄養型珪藻類群集	9
	秋	113450	<i>Cyclotella stelligera</i> (珪藻類)	中栄養型珪藻類群集	59	<i>Rhizosolenia eriensis</i> (珪藻類)	貧栄養型珪藻類群集	17	<i>Cryptomonas</i> sp. (クリプト藻類)	-	9
	冬	23850	<i>Cryptomonadaceae</i> spp. (クリプト藻類)	-	62	<i>Cryptomonas</i> sp. (クリプト藻類)	-	14	<i>Asterionella formosa</i> (珪藻類)	中栄養型珪藻類群集	9

注) 調査の概要は以下のとおりである。

平成 6 年度：調査回数 4 回 (5、8、10、12 月) 調査地点 1 地点 (St.1)

平成 12 年度：調査回数 4 回 (5、8、10、12 月) 調査地点 1 地点 (St.1)

平成 17 年度：調査回数 3 回 (5、8、10 月) 調査地点 1 地点 (St.1)

平成 18 年度：調査回数 4 回 (7、8、11、12 月) 調査地点 1 地点 (St.1)

出典：6-10 「平成 6 年度ダム自然環境調査報告書 (動植物プランクトン)」  
 6-18 「平成 12 年度ダム自然環境調査報告書 (動植物プランクトン)」  
 6-26 「平成 17 年度ダム自然環境調査業務報告書 (動植物プランクトン)」  
 6-28 「平成 18 年度ダム自然環境調査業務報告書 (動植物プランクトン)」  
 6-80 「日本淡水産動植物プランクトン図鑑」

表 6.3-8 動物プランクトンの変化の状況

調査時期	総個体数 (n/1)	優占1位			優占2位			優占3位			
		種名	群集型	%	種名	群集型	%	種名	群集型	%	
平成 6 年度 (1994)	春	88	<i>Bosmina longirostris</i> (ゾウミジンコ科)	中栄養型 鯀脚類群集	72	<i>Copepoda</i> sp. ( <i>Nauplius</i> ) (甲殻類幼生)	-	18	NEMATODA sp. (線虫類)	-	5
	夏	25202	<i>Conochilus unicornis</i> (テマリワムシ科)	中栄養型 輪虫類群集	50	<i>Bosmina longirostris</i> (ゾウミジンコ科)	中栄養型 鯀脚類群集	21	<i>Vorticella</i> sp. (ボルティケラ科)	-	8
	秋	4219	<i>Synchaeta</i> spp. (ヒゲワムシ科)	-	26	<i>Copepoda</i> sp. ( <i>Nauplius</i> ) (甲殻類幼生)	-	25	<i>Cyclopoida</i> sp. ( <i>Copepodite</i> ) (甲殻類幼生)	-	7
	冬	3869	<i>Copepoda</i> sp. ( <i>Nauplius</i> ) (甲殻類幼生)	-	37	<i>Bosmina longirostris</i> (ゾウミジンコ科)	中栄養型 鯀脚類群集	20	<i>Daphnia galeata</i> (ミジンコ科)	-	16
平成 12 年度 (2000)	春	1858	ASCHELMINTHES sp. (袋型動物)	-	19	<i>Synchaeta</i> spp. (ヒゲワムシ科)	-	17	<i>Keratella quadrata</i> (ツボワムシ科)	中栄養型 輪虫類群集	12
	夏	119290	<i>Conochilus unicornis</i> (テマリワムシ科)	中栄養型 輪虫類群集	42	<i>Bosmina longirostris</i> (ゾウミジンコ科)	中栄養型 鯀脚類群集	18	<i>Keratella quadrata</i> (ツボワムシ科)	中栄養型 輪虫類群集	13
	秋	22246	<i>Keratella quadrata</i> (ツボワムシ科)	中栄養型 輪虫類群集	55	<i>Copepoda</i> sp. (甲殻類)	-	16	<i>Bosmina longirostris</i> (ゾウミジンコ科)	中栄養型 鯀脚類群集	8
	冬	19958	<i>Keratella quadrata</i> (ツボワムシ科)	中栄養型 輪虫類群集	59	<i>Copepoda</i> sp. (甲殻類)	-	19	<i>Synchaeta</i> spp. (ヒゲワムシ科)	-	11
平成 17 年度 (2005)	春	693.5	NEMATODA sp. (線虫類)	-	31	<i>Asplanchna priodonta</i> (フクロワムシ科)	中栄養型 輪虫類群集	25	<i>Synchaeta</i> spp. (ヒゲワムシ科)	-	21
	夏	12208.4	<i>Copepoda</i> sp. (甲殻類)	-	41	<i>Cyclopoida</i> sp. (甲殻類)	-	13	<i>Bosminopsis deitersi</i> (ゾウミジンコ科)	中栄養型 鯀脚類群集	13
	秋	23742.6	<i>Copepoda</i> sp. (甲殻類)	-	52	<i>Calanoida</i> sp. (甲殻類)	-	12	<i>Hexarthra mira</i> (ミジンコワムシ科)	-	10
	冬	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
平成 18 年度 (2007)	春	5531	<i>Asplanchna</i> sp. (フクロワムシ科)	-	75	<i>Tintinnidium</i> spp. (フデヅツカラムシ科)	-	10	<i>Copepoda</i> sp. (甲殻類)	-	4
	夏	20438	<i>Copepoda</i> sp. (甲殻類)	-	23	<i>Ploesoma truncatum</i> (ヒゲワムシ科)	中栄養型 輪虫類群集	19	<i>Conochilus</i> sp. (テマリワムシ科)	-	11
	秋	10144	<i>Bosmina longirostris</i> (ゾウミジンコ科)	中栄養型 鯀脚類群集	59	<i>Copepoda</i> sp. (甲殻類)	-	21	<i>Vorticella</i> sp. (ボルティケラ科)	-	11
	冬	3439	<i>Bosmina longirostris</i> (ゾウミジンコ科)	中栄養型 鯀脚類群集	54	<i>Copepoda</i> sp. (甲殻類)	-	19	<i>Cyclopoida</i> sp. (甲殻類)	-	18

注) 調査の概要は以下のとおりである。

平成 6 年度：調査回数 4 回 (5、8、10、12 月) 調査地点 1 地点 (St.1)

平成 12 年度：調査回数 4 回 (5、8、10、12 月) 調査地点 1 地点 (St.1)

平成 17 年度：調査回数 3 回 (5、8、10 月) 調査地点 1 地点 (St.1)

平成 18 年度：調査回数 4 回 (7、8、11、12 月) 調査地点 1 地点 (St.1)

出典：6-10 「平成 6 年度ダム自然環境調査報告書 (動植物プランクトン)」

6-18 「平成 12 年度ダム自然環境調査報告書 (動植物プランクトン)」

6-26 「平成 17 年度ダム自然環境調査業務報告書 (動植物プランクトン)」

6-28 「平成 18 年度ダム自然環境調査業務報告書 (動植物プランクトン)」

6-80 「日本淡水産動植物プランクトン図鑑」

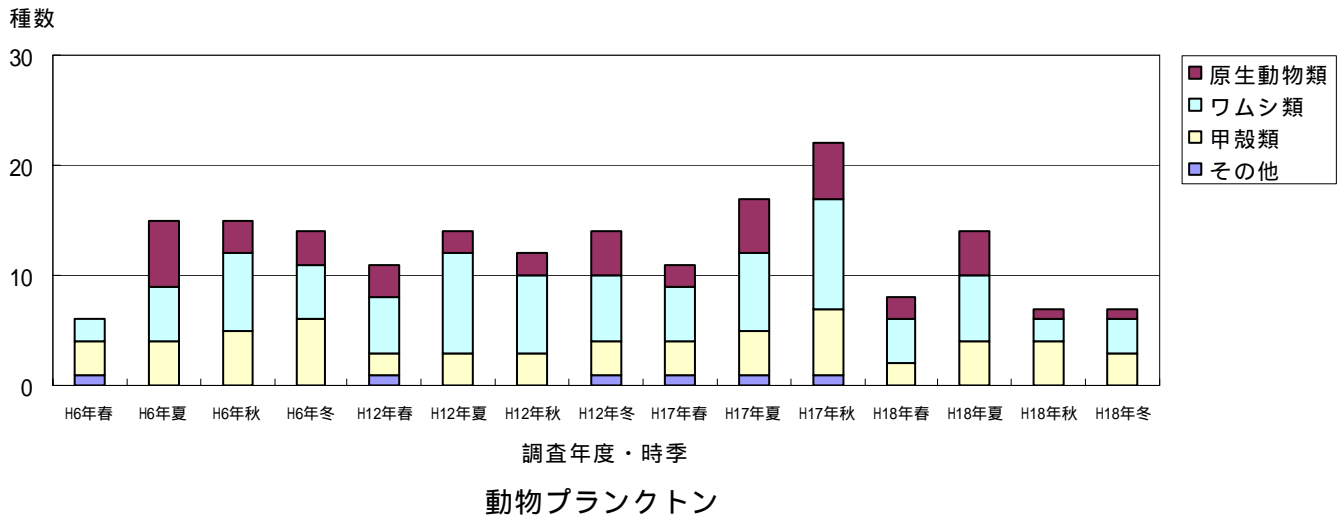
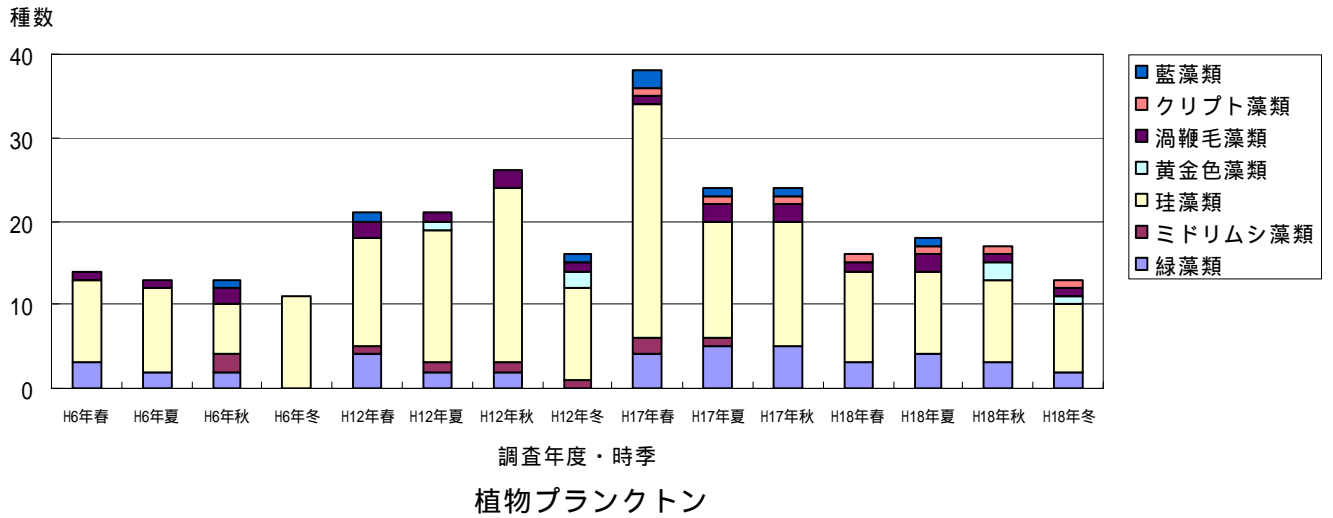


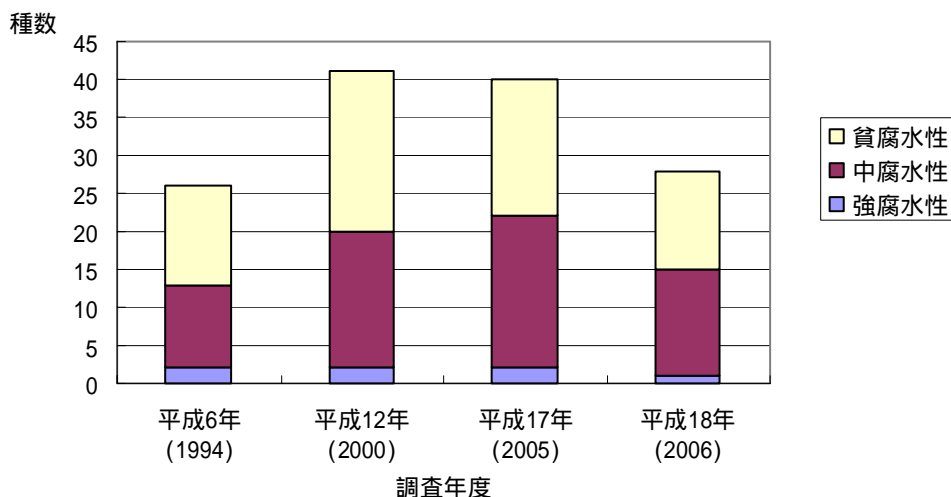
図 6.3-14 動植物プランクトン分類群別確認種数の比較

注) 調査の概要は以下のとおりである。

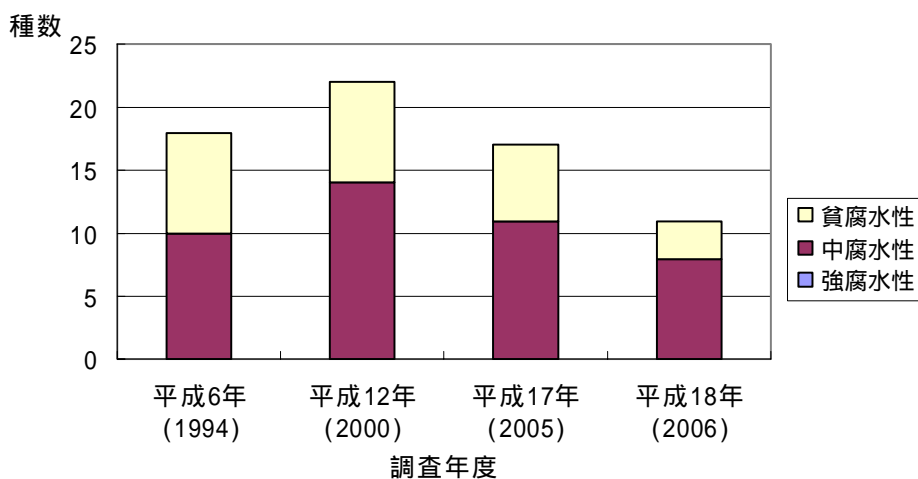
- 平成 6 年度：調査回数 4 回（5、8、10、12 月） 調査地点 1 地点（St.1）
- 平成 12 年度：調査回数 4 回（5、8、10、12 月） 調査地点 1 地点（St.1）
- 平成 17 年度：調査回数 3 回（5、8、10 月） 調査地点 1 地点（St.1）
- 平成 18 年度：調査回数 4 回（7、8、11、12 月） 調査地点 1 地点（St.1）

- 出典：6-10 「平成 6 年度ダム自然環境調査報告書（動植物プランクトン）」  
 6-18 「平成 12 年度ダム自然環境調査報告書（動植物プランクトン）」  
 6-26 「平成 17 年度ダム自然環境調査業務報告書（動植物プランクトン）」  
 6-28 「平成 18 年度ダム自然環境調査業務報告書（動植物プランクトン）」





### 植物プランクトン



### 動物プランクトン

図 6.3-15 動植物プランクトンの水質階級別確認種数の比較

注 1) 表 6.3-6、7 の水質階級より、以下に示す区分に従って種数を計数した。なお、複数の階級にわたる種については、それぞれの階級で 1 種として計数した。

Os : 貧腐水性      -ms・ -ms : 中腐水性      ps : 強腐水性

注 2) 調査の概要は以下のとおりである。

- 平成 6 年度 : 調査回数 4 回 (5、8、10、12 月)    調査地点 1 地点 (St.1)
- 平成 12 年度 : 調査回数 4 回 (5、8、10、12 月)    調査地点 1 地点 (St.1)
- 平成 17 年度 : 調査回数 3 回 (5、8、10 月)    調査地点 1 地点 (St.1)
- 平成 18 年度 : 調査回数 4 回 (7、8、11、12 月)    調査地点 1 地点 (St.1)

- 出典 : 6-10 「平成 6 年度ダム自然環境調査報告書 (動植物プランクトン)」  
 6-18 「平成 12 年度ダム自然環境調査報告書 (動植物プランクトン)」  
 6-26 「平成 17 年度ダム自然環境調査業務報告書 (動植物プランクトン)」  
 6-28 「平成 18 年度ダム自然環境調査業務報告書 (動植物プランクトン)」  
 6-78 「汚水生物学」  
 6-80 「日本淡水産動植物プランクトン図鑑」

#### 4)ダム湖面を利用する鳥類の確認種数の変化

##### (a)水鳥の確認状況（止水環境を水鳥に利用されているか）

ダム湖内で確認した鳥類のうち、水鳥の確認個体数の経年変化を表 6.3-9 及び図 6.3-16 に示す。

ダム湖内で確認した水鳥は、マガモ、カルガモ、コガモ、キンクロハジロ等のカモ科 11 種と、ウ科が 1 種の合計 12 種であった。このうち、マガモ、カルガモ、コガモは経年的に確認しており、その個体数も多かった。このことから、真名川ダム湖がこれらカモ類の安定した越冬地になっていると考えられる。

また、平成 14 年度には、はじめてカワウを確認した。カワウは近年全国的に増加しており、エサである魚類を大量に捕食するなど、水産被害が増加しているほか、大規模なねぐらやコロニーでは糞による樹木の枯死など、林業被害も報告されている（図 6.3-17 参照）。地元聞き取りによると、近年、上流の笹生川ダムや近隣の九頭竜川ダムでもコロニーの形成が報告されるなど、今後はカワウの生息状況に注意する必要があると考えられる。

表 6.3-9 水鳥の確認種、種別個体数の経年比較

科名	種名	調査年度			季節移動型
		平成 4 年 (1992)	平成 9 年 (1997)	平成 14 年 (2002)	
ウ科	カワウ			(4)	留鳥
カモ科	オシドリ		2	(4)	留鳥
	マガモ	312	802	435 (29)	冬鳥
	カルガモ	161	148	151 (7)	留鳥
	コガモ	21	152	76 (15)	冬鳥
	ヨシガモ		1		冬鳥
	ヒドリガモ		20		冬鳥
	オナガガモ		10		冬鳥
	ハシビロガモ	70		2	冬鳥
	ホシハジロ		20	14 (1)	冬鳥
	キンクロハジロ	40	6		冬鳥
	カワアイサ	20	10		冬鳥
合計種数		6 種	10 種	7 種	
合計個体数		624 個体	1171 個体	678(60) 個体	-

注 1) 水鳥はカイツブリ科、ウ科、カモ科を対象とした。

注 2) 季節移動型

- ・留鳥：その地域で一年中見られるもので、その地域で繁殖する。同じ個体が一年中留まっているとは限らない。また、山地から平地や地域内で小規模な移動を行うものを漂鳥という。
- ・冬鳥：冬までに渡来して、その地域で越冬するもの。

注 3) 表中の数値はカモ用ルート（冬季 1 ルート）の合計個体数を示す。平成 14 年度の( )の中はカモ用ルート以外の地点による年間の合計個体数を示す。

注 4) 調査の概要は以下のとおりである。

- 平成 4 年度：調査回数 1 回（11 月） 調査地点 1 地点（St.3）
- 平成 9 年度：調査回数 1 回（11 月） 調査地点 1 地点（St.4）
- 平成 14 年度：調査回数 1 回（12 月） 調査地点 1 地点（St.5）

出典：6-3 「平成 4 年度ダム自然環境調査報告書」  
 6-14 「平成 9 年度ダム自然環境調査業務報告書（鳥類）」  
 6-21 「平成 14 年度ダム自然環境調査業務報告書（鳥類）」

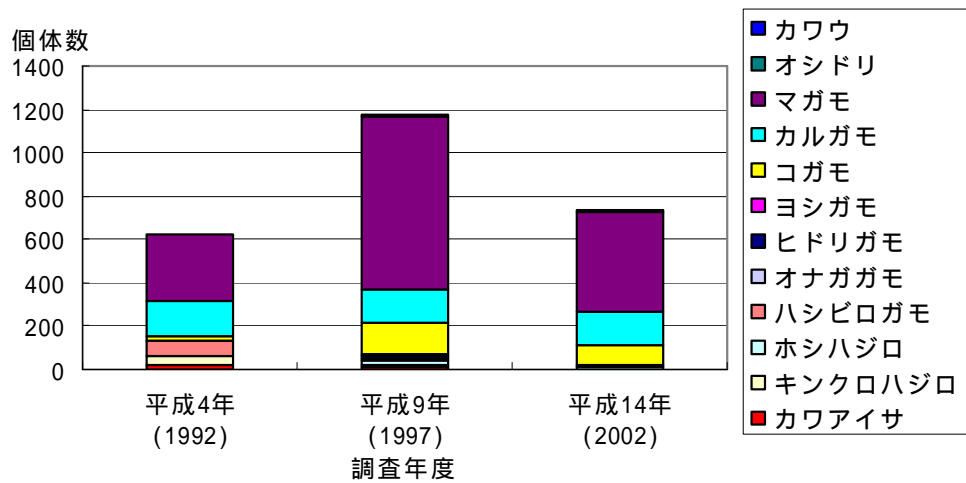


図 6.3-16 水鳥の確認種、種別個体数の経年比較

注 1) 水鳥はカイツブリ科、ウ科、カモ科を対象とした。

注 2) 個体数はカモ用ルート（冬季 1 ルート）の合計個体数を示す。

注 3) 調査の概要は以下のとおりである。

平成 4 年度：調査回数 1 回（11 月） 調査地点 1 地点（St.3）

平成 9 年度：調査回数 1 回（11 月） 調査地点 1 地点（St.4）

平成 14 年度：調査回数 1 回（12 月） 調査地点 1 地点（St.5）

出典：6-3 「平成 4 年度ダム自然環境調査報告書」

6-14 「平成 9 年度ダム自然環境調査業務報告書（鳥類）」

6-21 「平成 14 年度ダム自然環境調査業務報告書（鳥類）」

# カワウも大事 アユも大事

営巣地は保護優先

食害は年45億円



## 対策、自治体に不協和音

水辺の鳥カワウによるアユの食害が増え、国と関係自治体が対策に乗り出した。一時、絶滅の危機にあったカワウが増殖しすぎたため、「被害」は年間45億円超ともいわれる。ところが、川釣りの人気スポットを抱える県から悪鳴が上がる一方、営巣地がある都市部の自治体は「他県の被害に税金は出せない」。対策協議会は年内にも指針をまとめるが、県境を越えて飛び回るカワウを相手に、自治体間の不協和音ばかりが目立っている。

「まるでカワウのエサをまいているようだ」鬼怒川など釣りの人気スポットを抱える栃木県の担当者は嘆く。アユの放流で釣り客を集めている同県だが、近年カワウによる被害が増え、天然はここ数年で2割以上減

も合わせてカワウが食べる魚は、金額にして年々億円と推定される。担当者は「アユがいけない、釣れない」という情報は伝わるのが速く死活問題だ」と言い、釣り客はここ数年で2割以上減



- ☆ 1982年に確認されたねぐら
- 1984~90年 / 新たに確認されたねぐら
- 1991~95年 / 新たに確認されたねぐら
- ★ 1996~98年 / 新たに確認されたねぐら
- 1999年 / 新たに確認されたねぐら
- 2000年 / 新たに確認されたねぐら

カワウの環境への影響 魚食性の大型水鳥で、魚を通じて栄養分を吸収し河川の富栄養化を抑えているといわれる。長期的には、はいせつで営巣地を肥沃(ひよこ)にする一

方、短期的には枝折れやフン害で樹木を枯れさせることもある。90年代には、東京・浜離宮恩賜庭園でフン害が問題化。東京や千葉にあるコロニーは、この際に追い出された一部とみられる。

増殖に伴い90年代後半から、関東地方などの河川で、養殖して放流されたアユが食い荒らされる。増殖に伴い90年代後半から、関東地方などの河川で、養殖して放流されたアユが食い荒らされる。増殖に伴い90年代後半から、関東地方などの河川で、養殖して放流されたアユが食い荒らされる。

にあった。だが、80年代以降、水質の浄化が進んだことなどから増加。環境省生物多様性センターが全国を1200区画に区切って調査したところ、74~78年に5区画だった繁殖・生息分布は、97~02年は62区画に増えた。現在、5万~6万羽が生息するといわれる。

山梨の関係都県に参加を呼びかけ、協議会を設立。関係都県による一斉調査の必要性を盛り込んだ対策指針をまとめる方針だが、協議会での議論でも負担については決着していない。

環境省の担当者は「国は調査費を出せない。各都県が歩み寄って理解できる範囲でやるしかない」と頭を抱えている。

特に行徳、小櫃川と？カ所の大きなコロニーがある千葉県は、カワウを県のレッドデータブックに記載し、保護対策を取っている事情もある。

一方、カワウの集団営巣地(コロニー)を抱える東京都、千葉県は、ともに「他県の被害のための公費支出は、都民、県民の理解が得られない」と消極的だ。

朝日新聞  
平成 17 年 9 月 22 日掲載

図 6.3-17 カワウの被害を伝える新聞記事

(4)ダムによる影響の検証

ダム湖内の生物の変化に対するダムによる影響の検証結果を 6.3-10 及び図 6.3-18 に示す。

表 6.3-10(1) ダム湖内の生物の変化に対するダムによる影響の検証結果

検討項目		生物の変化の状況	ダムの存在・供用に伴う影響	ダムの存在・供用以外の影響	検証結果	
生息状況の変化	a) 止水性魚類	ギンブナ、ギギ等の止水性魚類は平成 5 年度の調査から継続確認しており、個体数は増加傾向にある。	止水環境の存在	-	止水環境に適応した種が生息しているものと考えられる。	
	b) 回遊性魚類	ワカサギ、アユ、イワナ、ヤマメ、アマゴ、トウヨシノボリを確認している。アマゴは降湖型のサツキマス、イワナはダム湖内で大小の個体を確認しており、ダム湖で陸封されたものと考えられる。	止水環境の存在	釣り人等による放流	アマゴやイワナは、止水環境の存在によって陸封されているものと考えられる。 アユの確認は放流によるものと考えられる。	
	c) 外来種	平成 5 年度および平成 13 年度にニジマスを確認した。放流による可能性が考えられる。	-	釣り人等による放流	ニジマスのダム湖への侵入経緯は不明であるが、確認数が少なく、ダム湖に定着する可能性は低いと考えられる。	?

注)検証結果

- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によるものと考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によるものと考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- : 生物の生息・生育状況に、大きな変化が見られなかった場合
- ? : 生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合

表 6.3-10(2) ダム湖内の生物の変化に対するダムによる影響の検証結果（底生動物）

検討項目		生物の変化の状況	ダムの存在・供用に伴う影響	ダムの存在・供用以外の影響	検証結果
生息状況の変化	a) ダム湖心部の底生動物	ダム湖内ではイトミミズ目やハエ目（ユスリカ科）などの堀潜型の種類が優占しており、その種構成に変化はみられない。	止水環境の存在	-	止水環境に適応した種が生息しているものと考えられる。
	b) ダム湖岸部の底生動物	ダム湖湖岸部ではミズカマキリやゲンゴロウ類などの止水性種を確認している。	止水環境の存在	-	止水環境に適応した種が生息しているものと考えられる。

注)検証結果

- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- : 生物の生息・生育状況に、大きな変化が見られなかった場合
- ? : 生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合

表 6.3-10(3) ダム湖内の生物の変化に対するダムによる影響の検証結果

(植物プランクトン)

検討項目		生物の変化の状況	ダムの存在・供用に伴う影響	ダムの存在・供用以外の影響	検証結果
生物相・生息状況の変化	植物プランクトン相	貧栄養型から中栄養型に属する珪藻類の占める割合が大きいが、平成 17 年度以降には、クリプト藻類と緑藻類がやや増加している。全ての調査年度で、貧腐水性及び、貧腐水性から中腐水性の水域に生息する種が多く、強腐水性の種が少ない傾向が認められた。	止水環境の存在	-	止水環境の存在によって浮遊性の植物プランクトンが生息している。貧腐水性から中腐水性の水域に生息する種を多く確認した。 ダム湖表層の水質に経年的な変化はなく、植物プランクトンの群集型及び水質階級別確認種数に大きな変化は認められなかった。

注)検証結果

- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- : 生物の生息・生育状況に、大きな変化が見られなかった場合
- ? : 生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合

表 6.3-10(4) ダム湖内の生物の変化に対するダムによる影響の検証結果

(動物プランクトン)

検討項目		生物の変化の状況	ダムの存在・供用に伴う影響	ダムの存在・供用以外の影響	検証結果
生物相・生息状況の変化	動物プランクトン相	動物プランクトンは、中栄養型鯀脚類群集や中栄養型輪虫類群集に属する種が優占していた。 水質階級別種数では、貧腐水性から中腐水性の水域に生息する種を多く確認した。	止水環境の存在	-	止水環境の存在によって浮遊性の動物プランクトンが生息している。貧腐水性から中腐水性の水域に生息する種を多く確認した。 ダム湖表層の水質に経年的な変化はなく、動物プランクトンの群集型及び水質階級別確認種数に大きな変化は認められなかった。

注)検証結果

- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- : 生物の生息・生育状況に、大きな変化が見られなかった場合
- ? : 生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合



表 6.3-10(5) ダム湖内の生物の変化に対するダムによる影響の検証結果（鳥類）

検討項目		生物の変化の状況	ダムの存在・供用に伴う影響	ダムの存在・供用以外の影響	検証結果
生息状況の変化	水鳥	3回の調査全てにおいてマガモ、カルガモ、コガモが多く飛来している。 平成14年度に初めてカワウを確認した。	止水環境の存在	-	ダム湖面は、カモ類の越冬時の休息場所等で利用されている。

注)検証結果

- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- : 生物の生息・生育状況に、大きな変化が見られなかった場合
- ? : 生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合

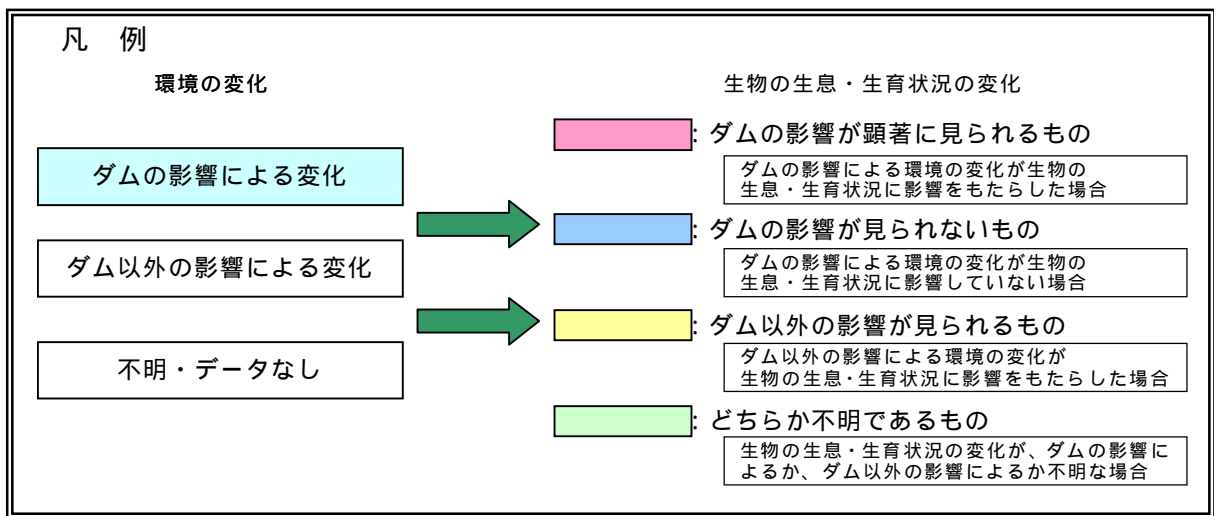
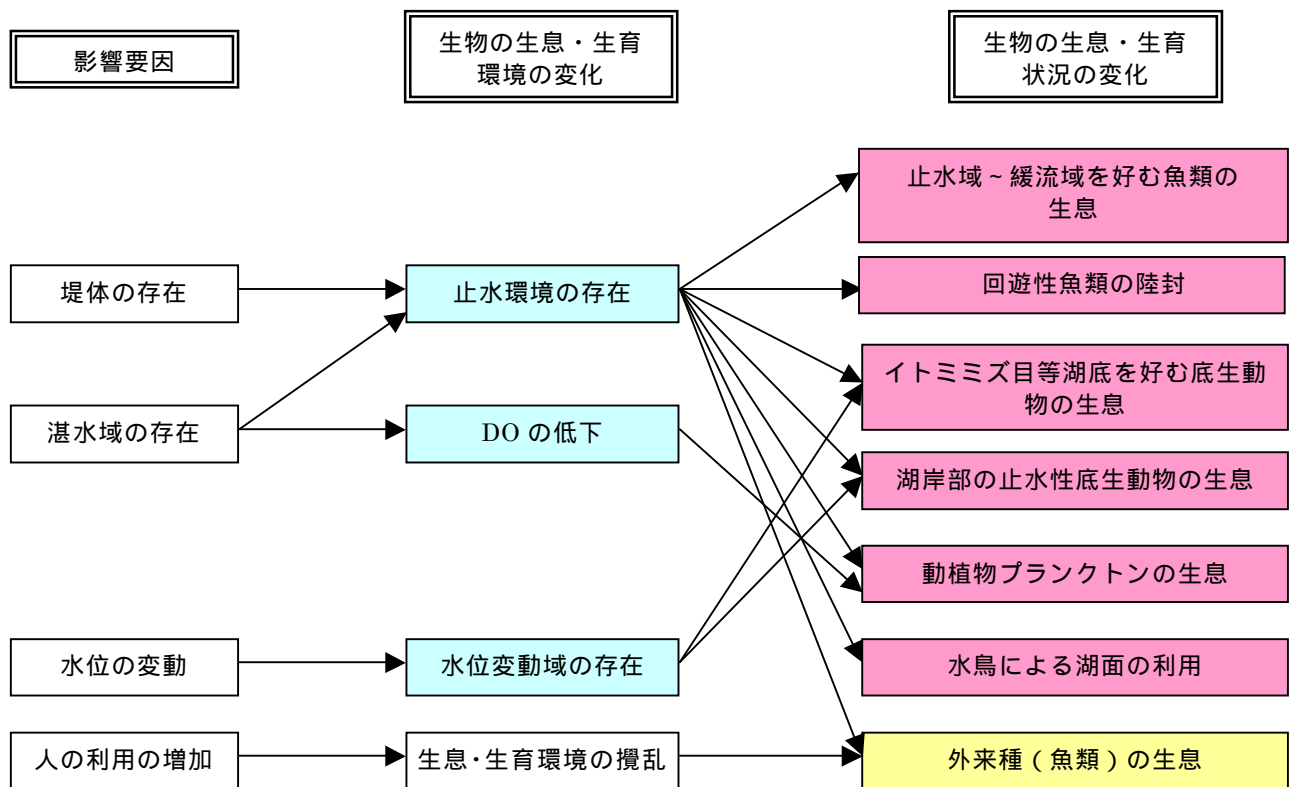


図 6.3-18 ダム湖内の生物の変化に対する影響の検証結果

### 6.3.2 流入河川（流入河川、流入支川）における変化の検証

ダムが存在・供用により、流入河川において環境条件の変化が起こり、流入河川を利用する様々な生物の生息・生育状況に変化を引き起こすと想定される。

そのため、ここでは真名川ダム流入河川及び流入支川における環境条件の変化及びそれに引き起こされる生物の生息・生育状況の変化を図 6.3-19 のように想定し、真名川ダムの存在・供用により流入河川の生物の生息・生育状況が変化しているかどうかの検証を以下の手順で行った。

#### (1) 環境条件の変化の把握

- ・流入河川における魚類の放流状況

#### (2) 生物の生息・生育状況の変化の把握

- ・魚類の生息状況（止水性魚類、回遊性魚類）の変化
- ・底生動物の生息状況（主要構成種）の変化
- ・鳥類の生息状況（溪流環境利用種、河原環境利用種）の変化
- ・両生類・爬虫類・哺乳類の生息状況（溪流環境利用種、河原環境利用種）の変化
- ・陸上昆虫類等の生息状況（河原環境利用種、外来種）の変化

#### (3) ダムによる影響の検証

真名川ダムの生物の生息・生育状況の変化について、環境条件の変化やダム以外の要因等と照らし合わせて検討し、ダムによる影響を検証した。

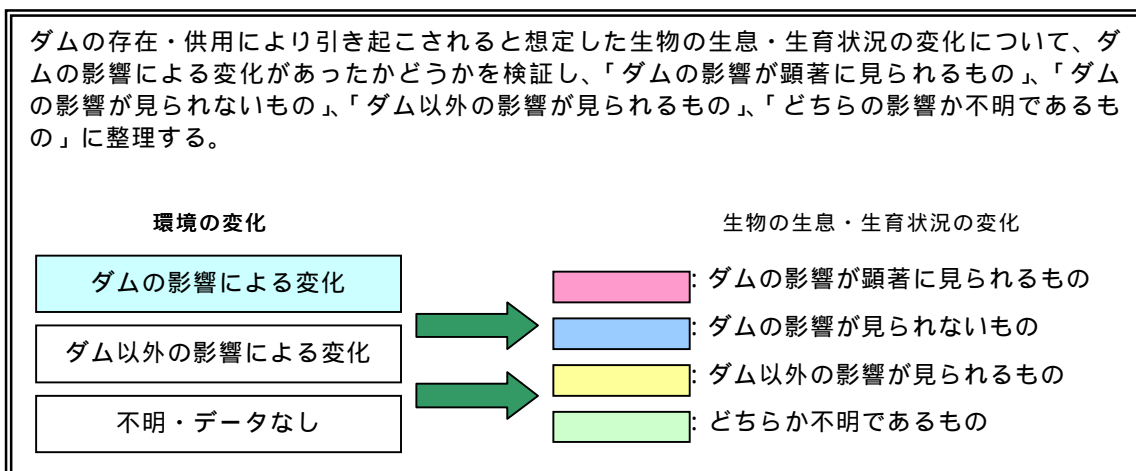
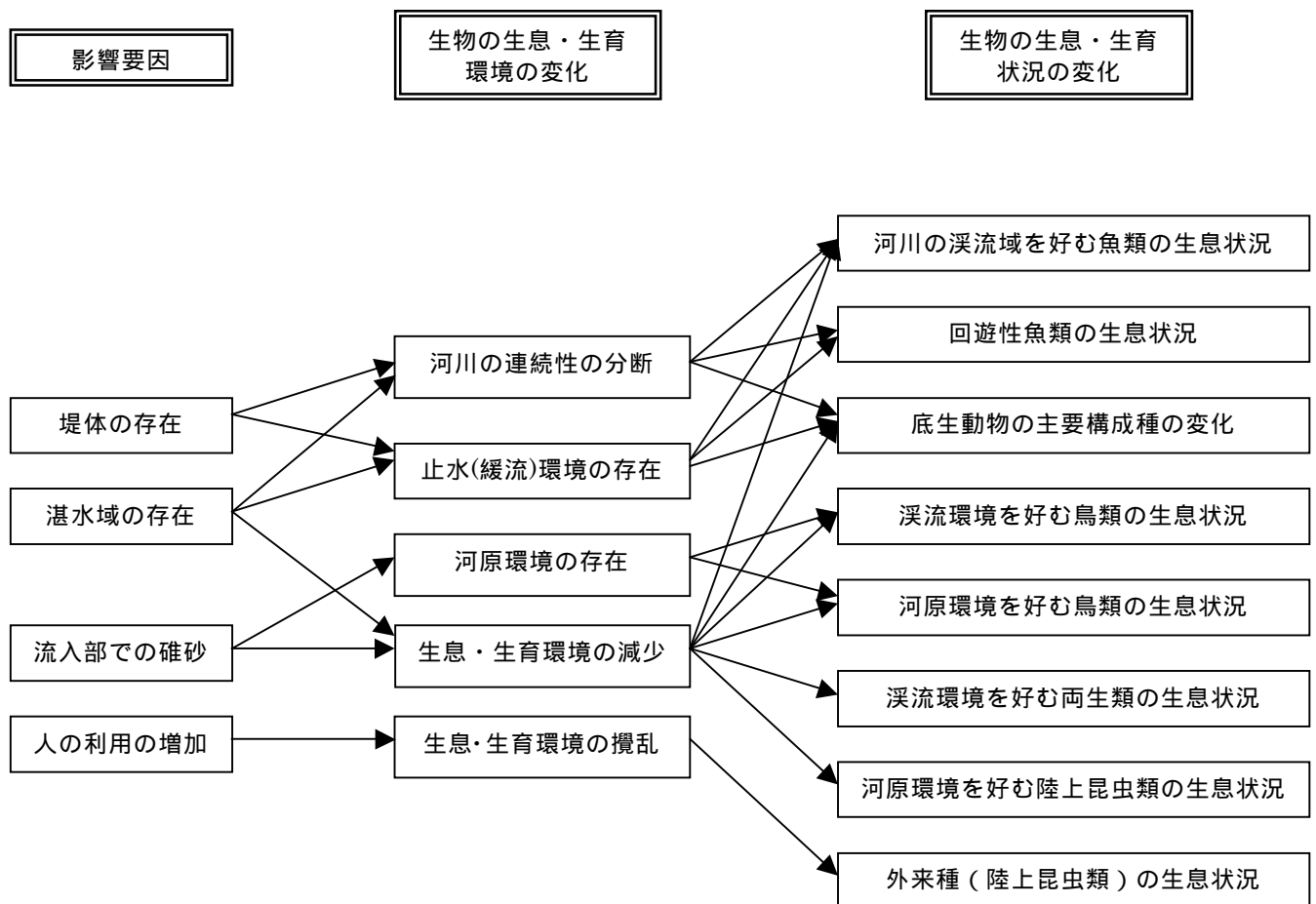


図 6.3-19 流入河川で想定される環境への影響要因と生物の生息・生育環境の変化

(1)環境条件の変化

1) 流入河川（流入河川、流入支川）における魚類の放流状況

流入河川（流入河川、流入支川）に漁業権は設定されていないが、大野市漁業協同組合によって昭和 61 年～平成 2 年までの間に、雲川（雲川ダムから中島付近）にアマゴが放流されている。そのほか、釣人等によるアユ等の私的な放流が行われている。

出典：6-1 「平成 2 年水生生物（魚貝類）調査作業報告書」  
6-19 「平成 13 年度自然環境調査業務報告書（魚介類）」

(2)生物の生息・生育状況の変化の把握

1)魚類

流入河川（真名川・笹生川・雲川）における魚類の確認状況を表 6.3-11 に、捕獲個体数の推移を図 6.3-20 に示す。なお、流入支川（持籠谷川・仙翁谷川・日の谷川）の確認状況は表 6.3-12～14 に、捕獲個体数の比較を図 6.3-20 に示す。

流入河川（真名川・笹生川・雲川）では、平成 2 年度から平成 13 年度の間に行った 4 回の調査で 13 種（1 回当たりの確認種数は 5～12 種）の魚類を確認した。このうち、アブラハヤ、ウグイ、アマゴは、4 回の調査で継続して確認された。優占種は全ての調査年度でウグイであった。オイカワ、アブラハヤ、タカハヤ等、流れの緩やかな中・上流河川に特徴的な魚種が多い。

流入支川の持籠谷川では、平成 5 年度から平成 13 年度の間に行った 3 回の調査で 7 種（1 回当たりの確認種数は 1～6 種）、仙翁谷川では 11 種（1 回当たりの確認種数は 3～10 種）、日の谷川では 5 種（1 回当たりの確認種数は 2～4 種）の魚類を確認した。ウグイ、イワナ、アマゴ（サツキマスは平成 13 年度に確認）などが 3 回の調査で継続して確認されており、主な優占種はウグイとアマゴであった。各支川は瀬と淵が連続する上流域であるため、イワナやアマゴなどの渓流魚が多い。

表 6.3-11 流入河川（真名川・笹生川・雲川）における魚類の確認状況

No	確認種		遊泳性	生活型	産卵場所	調査年度				合計
	科名	種名				平成2年 (1990)	平成5年 (1993)	平成8年 (1996)	平成13年 (2001)	
1	コイ科	ハス	遊泳魚	純淡水魚	砂礫			1		1
2		オイカワ	遊泳魚	純淡水魚	砂礫			40	25	65
3		アブラハヤ	遊泳魚	純淡水魚	砂礫	35	2	76	35	148
4		タカハヤ	遊泳魚	純淡水魚	砂礫			47	5	52
5		ウグイ	遊泳魚	純淡水魚	砂礫	77	27	67	127	298
6		カマツカ	遊泳魚	純淡水魚	砂礫			1	1	2
7	ドジョウ科	アジメドジョウ	底生魚	純淡水魚	礫中			1	7	8
8	アユ科	アユ	遊泳魚	両測回遊魚	砂礫	1	3		1	5
9	サケ科	イワナ	遊泳魚	遡河回遊魚	礫		2	13	25	40
10		ヤマメ	遊泳魚	遡河回遊魚	砂礫	16		15	13	44
11		アマゴ	遊泳魚	遡河回遊魚	砂礫	43	23	50	27	143
12	カジカ科	カジカ	底生魚	純淡水魚	石下			1		1
13	ハゼ科	トウヨシノボリ	底生魚	両測回遊魚	石下			10	13	23
	6科	13種	種数合計			5	5	12	11	13
			個体数合計			172	57	322	279	830

注 1) 表中の数値は年間の合計捕獲個体数を示す。

注 2) 調査の概要は以下のとおりである。

平成 2 年度：調査回数 2 回（6、10 月） 調査地点 1 地点（St.24）

平成 5 年度：調査回数 1 回（9 月） 調査地点 1 地点（St.20）

平成 8 年度：調査回数 3 回（5、8、10 月） 調査地点 3 地点（St.21、St.26、St.28）

平成 13 年度：調査回数 3 回（5、7、9～10 月） 調査地点 3 地点（St.22、St.27、St.29）

出典：6-1 「平成 2 年度水生生物（魚貝類）調査作業報告書」

6-7 「平成 5 年度ダム自然環境調査報告書（魚介類）」

6-12 「平成 8 年度ダム自然環境調査業務報告書（魚介類）」

6-19 「平成 13 年度ダム自然環境調査業務報告書（魚介類）」

6-66 「日本の淡水魚」

表 6.3-12 流入支川（持籠谷川）における魚類の確認状況

No	確認種		遊泳性	生活型	産卵場所	調査年度				合計	
	科名	種名				平成2年 (1990)	平成5年 (1993)	平成8年 (1996)	平成13年 (2001)		
1	コイ科	アブラハヤ	遊泳魚	純淡水魚	砂礫				6	6	
2		ウグイ	遊泳魚	純淡水魚	砂礫			29	19	48	
3	ドジョウ科	アジメドジョウ	底生魚	純淡水魚	礫中				1	1	
4	サケ科	イワナ	遊泳魚	遡河回遊魚	礫			14	13	27	
5		アマゴ (アマゴ銀毛)	遊泳魚	遡河回遊魚	砂礫		1	3	38 (2)	42 (2)	
6	カジカ科	カジカ	底生魚	純淡水魚	石下			2		2	
7	ハゼ科	トウヨシノボリ	底生魚	両測回遊魚	石下			4	2	6	
	5科	7種	種数合計			実施せず		1	5	6	7
			個体数合計					1	52	81	134

注 1) 表中の数値は年間の合計捕獲個体数を示す。

注 2) 調査の概要は以下のとおりである。

平成 5 年度：調査回数 1 回（9 月） 調査地点 1 地点（St.6）

平成 8 年度：調査回数 3 回（5、8、10 月） 調査地点 1 地点（St.6）

平成 13 年度：調査回数 3 回（5、7、9～10 月） 調査地点 1 地点（St.7）

出典：6-7 「平成 5 年度ダム自然環境調査報告書（魚介類）」

6-12 「平成 8 年度ダム自然環境調査業務報告書（魚介類）」

6-19 「平成 13 年度ダム自然環境調査業務報告書（魚介類）」

6-66 「日本の淡水魚」

表 6.3-13 流入支川（仙翁谷川）における魚類の確認状況

No	確認種		遊泳性	生活型	産卵場所	調査年度				合計	
	科名	種名				平成2年 (1990)	平成5年 (1993)	平成8年 (1996)	平成13年 (2001)		
1	コイ科	ハス	遊泳魚	純淡水魚	砂礫			1		1	
2		オイカワ	遊泳魚	純淡水魚	砂礫			11		11	
3		アブラハヤ	遊泳魚	純淡水魚	砂礫			52	5	57	
4		タカハヤ	遊泳魚	純淡水魚	砂礫			3		3	
5		ウグイ	遊泳魚	純淡水魚	砂礫		1	61	57	119	
6	アユ科	アユ	遊泳魚	両測回遊魚	砂礫				1	1	
7	サケ科	イワナ	遊泳魚	遡河回遊魚	礫		1	10	2	13	
8		ヤマメ	遊泳魚	遡河回遊魚	砂礫			4		4	
9		アマゴ (サツキマス)	遊泳魚	遡河回遊魚	砂礫		3	26	106 (1)	135 (1)	
10	カジカ科	カジカ	底生魚	純淡水魚	石下			15	21	36	
11	ハゼ科	トウヨシノボリ	底生魚	両測回遊魚	石下			6	1	7	
	5科	11種	種数合計			実施せず		3	10	7	11
			個体数合計					5	189	194	388

注 1) 表中の数値は年間の合計捕獲個体数を示す。

注 2) 調査の概要は以下のとおりである。

平成 5 年度：調査回数 1 回（9 月） 調査地点 1 地点（St.10）

平成 8 年度：調査回数 3 回（5、8、10 月） 調査地点 2 地点（St.12、St.14）

平成 13 年度：調査回数 3 回（5、7、9～10 月） 調査地点 2 地点（St.11、St.13）

出典：6-7 「平成 5 年度ダム自然環境調査報告書（魚介類）」

6-12 「平成 8 年度ダム自然環境調査業務報告書（魚介類）」

6-19 「平成 13 年度ダム自然環境調査業務報告書（魚介類）」

6-66 「日本の淡水魚」

表 6.3-14 流入支川（日の谷川）における魚類の確認状況

No	確認種		遊泳性	生活型	産卵場所	調査年度				合計	
	科名	種名				平成2年 (1990)	平成5年 (1993)	平成8年 (1996)	平成13年 (2001)		
1	コイ科	ウグイ	遊泳魚	純淡水魚	砂礫			2		2	
2	サケ科	イワナ	遊泳魚	遡河回遊魚	礫		1	4	5	10	
3		アマゴ (サツキマス)	遊泳魚	遡河回遊魚	砂礫		2	3	7 (1)	12 (1)	
4	カジカ科	カジカ	底生魚	純淡水魚	石下		1			1	
5	ハゼ科	トウヨシノボリ	底生魚	両測回遊魚	石下			4		4	
	4科	5種	種数合計			実施せず		3	4	2	5
			個体数合計					4	13	13	30

注 1) 表中の数値は年間の合計捕獲個体数を示す。

注 2) 調査の概要は以下のとおりである。

平成 5 年度：調査回数 1 回（9 月） 調査地点 1 地点（St.17）

平成 8 年度：調査回数 3 回（5、8、10 月） 調査地点 1 地点（St.17）

平成 13 年度：調査回数 3 回（5、7、9～10 月） 調査地点 1 地点（St.18）

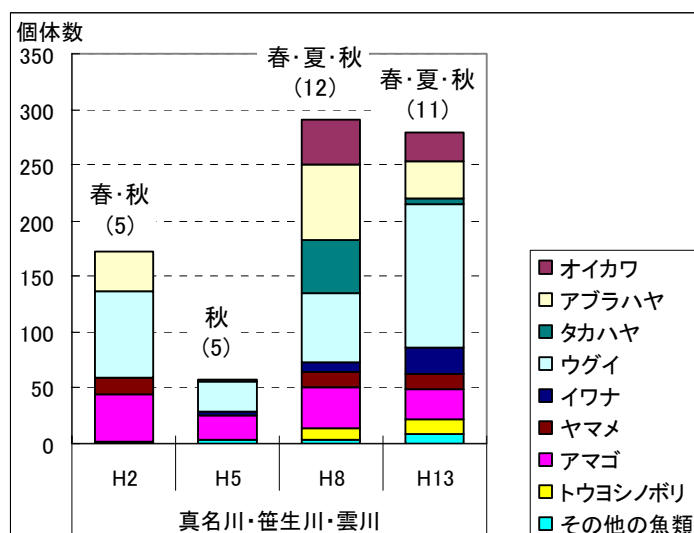
出典：6-7 「平成 5 年度ダム自然環境調査報告書（魚介類）」

6-12 「平成 8 年度ダム自然環境調査業務報告書（魚介類）」

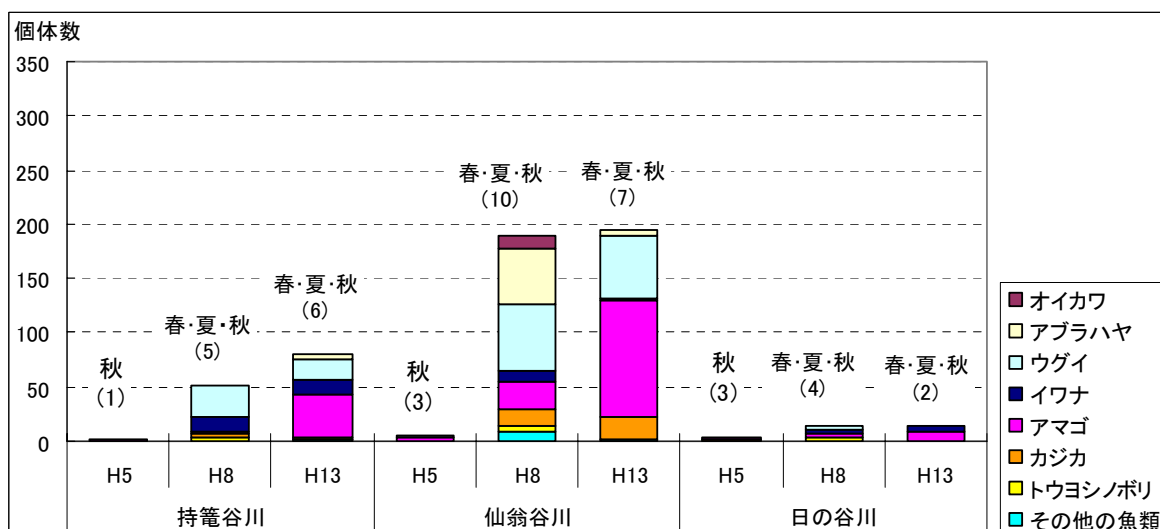
6-19 「平成 13 年度ダム自然環境調査業務報告書（魚介類）」

6-66 「日本の淡水魚」





流入河川（真名川・笹生川・雲川）



流入支川（持籠谷川・仙翁谷川・日の谷川）

図 6.3-20 流入河川（流入河川、流入支川）における魚類の捕獲個体数の推移

注 1) 表中の数値は年間の合計捕獲個体数を示す。なお、( ) 内は種類数を示す。

注 2) 調査の概要は以下のとおりである。

平成 2 年度：調査回数 2 回（6、10 月） 調査地点 1 地点（St.24）

平成 5 年度：調査回数 1 回（9 月） 調査地点 4 地点（St.6、St.10、St.17、St.20）

平成 8 年度：調査回数 3 回（5、8、10 月） 調査地点 7 地点（St.6、St.12、St.14、St.17、St.21、St.26、St.28）

平成 13 年度：調査回数 3 回（5、7、9～10 月） 調査地点 7 地点（St.7、St.11、St.13、St.18、St.22、St.27、St.29）

出典：6-1 「平成 2 年度水生生物（魚貝類）調査作業報告書」

6-7 「平成 5 年度ダム自然環境調査報告書（魚介類）」

6-12 「平成 8 年度ダム自然環境調査業務報告書（魚介類）」

6-19 「平成 13 年度ダム自然環境調査業務報告書（魚介類）」

#### (a) 流水性魚類の生息状況の変化

流入河川（真名川・笹生川・雲川）では、主に中・上流域に生息するアブラハヤやアマゴ、流水域に広く生息するウグイなどが多く確認されており、いずれも4回の調査で継続して確認された。

流入支川（持籠谷川・仙翁谷川・日の谷川）では、ウグイや溪流魚のアマゴやイワナなどが多く確認されており、いずれも3回の調査で継続して確認された。

全体的にみると種組成に大きな変化はなく、コイやギンブナ等の主に止水環境に生息する種も確認されていないことなどから、流水性魚類の生息状況に変化はみられないと考えられる。

#### (b) 回遊性魚類の生息状況の変化

流入河川（流入河川・流入支川）で確認された回遊性魚類は、アユ、イワナ、ヤマメ、アマゴ（サツキマス）、トウヨシノボリの5種類である。

アユはほぼ継続的に確認しているが捕獲数はいずれの年度も少ない。ダム湖上流で行われている私的な放流による個体を確認している可能性がある。

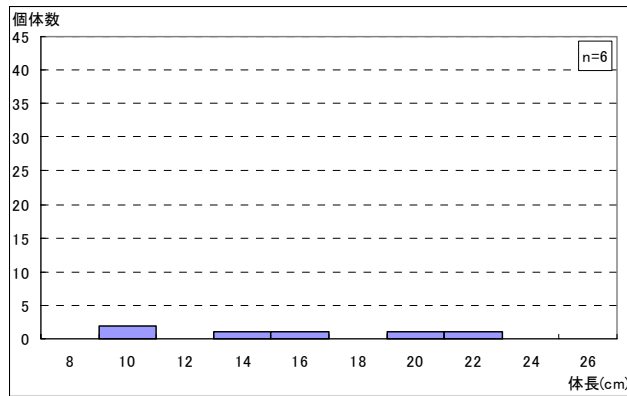
イワナは平成5年度から継続して確認しており、流入河川（真名川・笹生川・雲川）での捕獲数は増加傾向にあることから、ダム湖で陸封されていると考えられる。

ヤマメは平成8年度から継続して確認している。主に流入河川（真名川・笹生川・雲川）で確認しているが捕獲数が少ないことから、ダム湖で陸封されているかは不明であると考えられる。

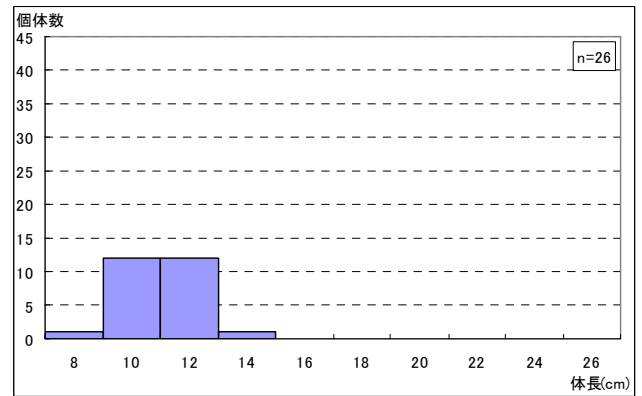
アマゴは平成2年度から継続して確認しており、ウグイに次いで捕獲数が多い。平成13年度には降湖型のサツキマス（婚姻色：体長24.2、26.0 cm）とアマゴ（銀毛：体長11.7、14.7 cm）を各支川で確認した。流入河川（流入河川・流入支川）で確認したアマゴの体長組成を図6.3-21に示す。流入河川で確認されたアマゴの平均体長は11.0 cmであった。一方、ダム湖内で確認されたアマゴの平均体長は16.8 cmで比較的大きな個体が多かった<sup>1</sup>。アマゴは平成2年以降は放流されておらず、ダム湖で陸封された個体が大型化し、流入河川や流入支川で繁殖していると考えられる。

トウヨシノボリは平成8年度の調査から確認しており、近年にダム湖上流に侵入した可能性がある。真名川をはじめ、各支川でも確認されており、ダム湖によって陸封された個体が繁殖して分布を広げていると考えられる。

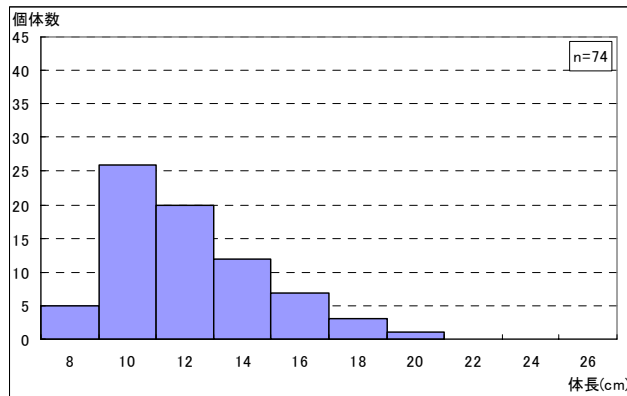
<sup>1</sup> アマゴの体長について、1年で13～17 cm、2年で20 cmほどが、河川残留魚の標準的な成長である。  
資料：6-104 「原色日本淡水魚類図鑑」



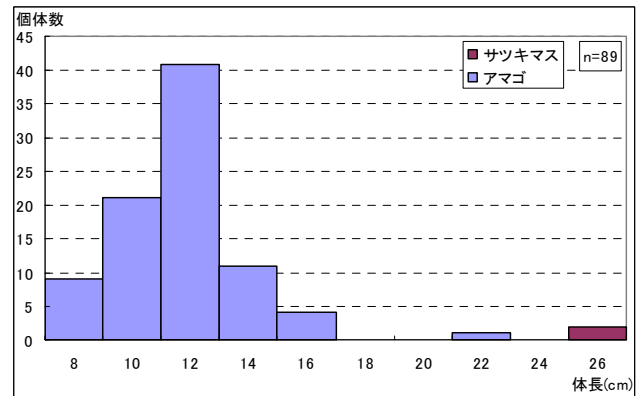
平成 2 年度 (全長)



平成 5 年度



平成 8 年度



平成 13 年度

図 6.3-21 アマゴ (サツキマス) の体長組成比較 (流入河川、流入支川)

注 1) グラフの個体数は、年間の合計捕獲個体数を体長別に示したものである。

注 2) 調査の概要は以下のとおりである。

平成 2 年度：調査回数 2 回 (6、10 月) 調査地点 1 地点 (St.24)

\* 平成 2 年度の捕獲個体は全長で計測されており、その最大値、最小値、平均値のみが記録されているため、サイズの特定できる記録のみを抽出した。

平成 5 年度：調査回数 1 回 (9 月) 調査地点 4 地点 (St.6、St.10、St.17、St.20)

平成 8 年度：調査回数 3 回 (5、8、10 月) 調査地点 7 地点 (St.6、St.12、St.14、St.17、St.21、St.26、St.28)

平成 13 年度：調査回数 3 回 (5、7、9~10 月) 調査地点 7 地点 (St.7、St.11、St.13、St.18、St.22、St.27、St.29)

出典：6-1 「平成 2 年度水生生物 (魚貝類) 調査作業報告書」

6-7 「平成 5 年度ダム自然環境調査報告書 (魚介類)」

6-12 「平成 8 年度ダム自然環境調査業務報告書 (魚介類)」

6-19 「平成 13 年度ダム自然環境調査業務報告書 (魚介類)」

2)底生動物

流入河川（流入河川・流入支川）における底生動物の確認状況を表 6.3-15 に示す。

底生動物は、平成 6 年度から平成 18 年度の間に行った 4 回の調査では 265 種（1 回当りの確認種数は 90～221 種）を確認した。

確認種にはカゲロウ目、カワゲラ目、トビケラ目、ハエ目などの昆虫綱に属する種が多く、全体の約 9 割を占めた。フタバコカゲロウ、エルモンヒラタカゲロウ、ウルマーシマトビケラなどの河川に広く生息する種が多いほか、山地溪流性のミヤマノギカワゲラ、オオナガレトビケラ、ニホンアミカなども確認した。

カゲロウ目、カワゲラ目、トビケラ目の確認種数は、良好な水質や河川環境の多様性を表す指標（EPT 指数）とされることから、流入河川の生物相は豊かで、水質も良好であることが伺える。

表 6.3-15(1) 流入河川（流入河川、流入支川）における底生動物の確認状況

No.	科名	種名	調査年度				摂食機能群	生活型	
			平成6年 (1994)	平成9年 (1997)	平成14年 (2002)	平成18年 (2006)			
1	サンカクアタマウスムシ科	ナミウスムシ	21			390	堆積物収集者	匍匐型	
2	ヒラタウスムシ科	ホソウスムシ属の一種				2	捕食者	匍匐型	
-	-	ウスムシ目の一種		22	131	1	捕食者	匍匐型	
3	ハリヒモムシ科	ハリヒモムシ属の一種				18	捕食者	匍匐型	
4	ザラハリガネムシ科	ザラハリガネムシ科の一種				1	寄生者	寄生型	
5	ハリガネムシ科	ハリガネムシ科の一種				1	寄生者	寄生型	
6	カワニナ科	カワニナ			1	91	剥き取り食者	匍匐型	
-	-	カワニナ属の一種				3	剥き取り食者	匍匐型	
7	マメシジミ科	マメシジミ属の一種				1	濾過食者	掘潜型	
8	ヒメミズシ科	ヒメミズシ科の一種				14	堆積物収集者	掘潜型	
9	イトミミズ科	ミツグミズミズ				16	堆積物収集者	匍匐型	
-	-	ミズミズ属の一種				1008	堆積物収集者	匍匐型	
10	-	Ripistes parasi ta				16	堆積物収集者	匍匐型	
11	-	ヨゴレミズミズ				52	堆積物収集者	掘潜型	
-	-	ヨゴレミズミズ属の一種				1	堆積物収集者	掘潜型	
-	-	ミズミズ亜科の一種				83	堆積物収集者	掘潜型	
-	-	イトミミズ亜科の一種		1	2	16	堆積物収集者	掘潜型	
12	ツリミズシ科	ツリミズシ科の一種				7	堆積物収集者	掘潜型	
13	イシビル科	ヒロウドイシビル				1	捕食者	匍匐型	
-	-	イシビル科の一種				2	捕食者	匍匐型	
-	-	ヒル細	3				不明	不明	
14	ヒョウタンダニ科	ヒョウタンダニ科の一種				11	不明	不明	
15	アオイダニ科	アオイダニ科の一種				20	不明	不明	
16	ナガレダニ科	ナガレダニ科の一種				97	不明	不明	
17	ケイリュウダニ科	ケイリュウダニ科の一種				5	不明	不明	
18	オヨギダニ科	オヨギダニ科の一種				11	不明	不明	
19	タマミズダニ科	タマミズダニ科の一種				10	不明	不明	
-	-	ダニ目の一種				10	不明	不明	
20	ヨコエビ科	ニッポンヨコエビ	37	65	49		堆積物収集者	匍匐型	
21	アゴナガヨコエビ科	ヤマトヨコエビ				482	剥き取り食者・堆積物収集者	匍匐型	
22	ミズムシ科	ミズムシ	2	1		2	堆積物収集者	匍匐型	
23	ヌマエビ科	ヌマエビ	1				堆積物収集者	匍匐型	
24	テナガエビ科	スジエビ	3				捕食者	匍匐型	
25	サワガニ科	サワガニ	7	17	7	14	堆積物収集者	匍匐型	
26	ヒメフタオカゲロウ科	マエグロヒメフタオカゲロウ	15				剥き取り食者・堆積物収集者	遊泳型	
-	-	ヒメフタオカゲロウ属の一種		89	50	268	剥き取り食者・堆積物収集者	遊泳型	
27	コカゲロウ科	ミジカオフタバコカゲロウ			11	27	剥き取り食者・堆積物収集者	遊泳型	
-	-	ミジカオフタバコカゲロウ属の一種				1	剥き取り食者・堆積物収集者	遊泳型	
28	-	フタバコカゲロウ	1451	653	1872	1118	剥き取り食者	遊泳型	
29	-	ヨシノコカゲロウ				809	剥き取り食者	遊泳型	
30	-	サホコカゲロウ				262	剥き取り食者・堆積物収集者	遊泳型	
31	-	フタモンコカゲロウ				1126	剥き取り食者・堆積物収集者	遊泳型	
32	-	シロハラコカゲロウ			1453	1662	剥き取り食者	遊泳型	
33	-	コカゲロウ				9	218	剥き取り食者・堆積物収集者	遊泳型
34	-	Jコカゲロウ				4	剥き取り食者・堆積物収集者	遊泳型	
-	-	コカゲロウ属類	2049	2049		158	剥き取り食者・堆積物収集者	遊泳型	
35	-	フトヒゲコカゲロウ				94	剥き取り食者・堆積物収集者	遊泳型	
-	-	フトヒゲコカゲロウ属の一種				108	剥き取り食者	遊泳型	
36	-	トビロコカゲロウ	5	35	21	5	剥き取り食者・堆積物収集者	遊泳型	
37	-	Iコカゲロウ				49	剥き取り食者・堆積物収集者	遊泳型	
38	-	Eコカゲロウ				28	434	剥き取り食者・堆積物収集者	遊泳型
39	-	Hコカゲロウ				6	剥き取り食者・堆積物収集者	遊泳型	
40	-	フタバカゲロウ		2		1	剥き取り食者・堆積物収集者	遊泳型	
-	-	フタバカゲロウ属の一種				16	剥き取り食者・堆積物収集者	遊泳型	
41	-	ヒメウスバコカゲロウ属の一種				82	剥き取り食者・堆積物収集者	遊泳型	

表 6.3-15(2) 流入河川（流入河川、流入支川）における底生動物の確認状況

No.	科名	確認種 種名	調査年度				摂食機能群	生活型
			平成6年 (1994)	平成9年 (1997)	平成14年 (2002)	平成18年 (2006)		
42	ヒラタカゲロウ科	オビカゲロウ				4	剥き取り食者	匍匐型
43		ミヤマタニガワカゲロウ属の一種	34	110	57	55	剥き取り食者	匍匐型
44		オニヒメタニガワカゲロウ				12	剥き取り食者	匍匐型
45		キブネタニガワカゲロウ		17	6		剥き取り食者	匍匐型
46		マダラタニガワカゲロウ				2	剥き取り食者	匍匐型
47		ミドリタニガワカゲロウ				6	剥き取り食者	匍匐型
48		シロタニガワカゲロウ	25	88	16	20	剥き取り食者	匍匐型
-		タニガワカゲロウ属の一種				462	剥き取り食者	匍匐型
49		キイロヒラタカゲロウ		124	237	33	剥き取り食者	匍匐型
50		ウエノヒラタカゲロウ	279	87	64	101	剥き取り食者	匍匐型
51		エルモンヒラタカゲロウ	526	491	101	1527	剥き取り食者	匍匐型
52		ユミモンヒラタカゲロウ	37	35	18	8	剥き取り食者	匍匐型
-		ヒラタカゲロウ属の一種				522	剥き取り食者	匍匐型
53		キハダヒラタカゲロウ属の一種				1	剥き取り食者	匍匐型
54		ヒメヒラタカゲロウ	14	49	107		剥き取り食者	匍匐型
55		サツキヒメヒラタカゲロウ	1	28	23	2	剥き取り食者	匍匐型
-		ヒメヒラタカゲロウ属の一種				310	剥き取り食者	匍匐型
56	チラカゲロウ科	チラカゲロウ	30	21	6	56	濾過食者	遊泳型
57	トビロカゲロウ科	ウエストトビロカゲロウ				24	堆積物収集者・剥き取り食者	匍匐型
-		トビロカゲロウ属の一種	1	23	21	220	堆積物収集者・剥き取り食者	掘潜型
58	モンカゲロウ科	フタスジモンカゲロウ	84	148	146	620	濾過食者	掘潜型
59		モンカゲロウ	40	34	32	550	濾過食者	掘潜型
-		モンカゲロウ属の一種				3	濾過食者	掘潜型
60	カワカゲロウ科	キイロカワカゲロウ	3				堆積物収集者	掘潜型
61	マダラカゲロウ科	クロマダラカゲロウ	171	84	81	68	堆積物収集者	匍匐型
62		オオクママダラカゲロウ	3	4			堆積物収集者	匍匐型
63		チェルノバマダラカゲロウ	10	88	1	29	堆積物収集者・剥き取り食者	匍匐型
-		トウヨウマダラカゲロウ属の一種		39		590	堆積物収集者・剥き取り食者	匍匐型
64		オオマダラカゲロウ	62	102	168	4	捕食者	匍匐型
65		ヨシノマダラカゲロウ	20	145	320	1622	剥き取り食者・捕食者	匍匐型
66		コウノマダラカゲロウ		28	27	1	剥き取り食者・捕食者	匍匐型
67		フタマタマダラカゲロウ	163	283	249	101	捕食者	匍匐型
68		ミットゲマダラカゲロウ	3	2	5	5	捕食者	匍匐型
-		トゲマダラカゲロウ属の一種				440	剥き取り食者・捕食者	匍匐型
69		シリノガマダラカゲロウ	4			4	堆積物収集者	匍匐型
70		ボソバマダラカゲロウ		3	6		堆積物収集者	匍匐型
71		クシゲマダラカゲロウ	31	255		337	堆積物収集者	匍匐型
-		マダラカゲロウ属の一種			75	806	堆積物収集者	匍匐型
72		エラブタマダラカゲロウ			1	157	堆積物収集者	匍匐型
73		アカマダラカゲロウ	24	27	31	613	捕食者	匍匐型
74	ヒメシロカゲロウ科	ヒメシロカゲロウ属の一種				218	堆積物収集者	匍匐型
75	カワトンボ科	ミヤマカワトンボ	1		6	27	捕食者	匍匐型
76		カワトンボ	1	1		4	捕食者	匍匐型
-		カワトンボ属の一種				1	捕食者	匍匐型
77	ヤンマ科	ミルンヤンマ				1	捕食者	匍匐型
78	サナエトンボ科	クロサナエ	18	16			捕食者	掘潜型
79		ダビドサナエ	5	1	6	9	捕食者	掘潜型
-		ダビドサナエ属の一種		6	62	69	捕食者	掘潜型
80		ヒメクロサナエ		1		1	捕食者	掘潜型
81		コオニヤンマ		1	3	1	捕食者	掘潜型
-		サナエトンボ科の一種				38	捕食者	掘潜型
82	オニヤンマ科	オニヤンマ	1		1	67	捕食者	匍匐型
83	トワダカワゲラ科	ミネトワダカワゲラ			1		捕食者	匍匐型
84	クロカワゲラ科	クロカワゲラ科の一種			4		破砕食者	匍匐型
85	ホソカワゲラ科	ホソカワゲラ科の一種				70	破砕食者	掘潜型
86	オナシカワゲラ科	フサオナシカワゲラ属の一種	99	43	16	58	破砕食者	匍匐型
87		クロオナシカワゲラ				200	破砕食者	匍匐型
88		オナシカワゲラ属の一種	89		24	116	破砕食者	匍匐型
89		ユビオナシカワゲラ属の一種	12	17	95	984	破砕食者	匍匐型
-		オナシカワゲラ科の一種		31			堆積物収集者	匍匐型
90	ヒロムネカワゲラ科	ノギカワゲラ	1		1	56	捕食者	匍匐型
91		ミヤマノギカワゲラ	3	1	24	1	捕食者	匍匐型
92	シタカワゲラ科	シタカワゲラ科の一種	4	3	5		剥き取り食者・堆積物収集者	匍匐型
93	ミドリカワゲラ科	ツヤミドリカワゲラ属の一種				112	捕食者	匍匐型
-		ミドリカワゲラ科の一種	86	100	239	1018	捕食者	匍匐型
94	カワゲラ科	モンカワゲラ	30			2	捕食者	匍匐型
-		モンカワゲラ属の一種		14	76	17	捕食者	匍匐型
95		キカワゲラ属の一種		13	5	1	捕食者	匍匐型
96		ヤマトカワゲラ		1		3	捕食者	匍匐型
97		エダオカワゲラ		4	9		捕食者	匍匐型
-		エダオカワゲラ属の一種				7	捕食者	匍匐型
98		ナガカワゲラ属の一種		1			捕食者	匍匐型
99		ヒメナガカワゲラ属の一種		1		39	捕食者	匍匐型
100		オオヤマカワゲラ	19		34	19	捕食者	匍匐型
-		オオヤマカワゲラ属の一種		15	19	7	捕食者	匍匐型
101		クロヒゲカワゲラ				2	捕食者	匍匐型
102		カワゲラ			234	39	捕食者	匍匐型
103		ウエノカワゲラ				81	捕食者	匍匐型
-		カワゲラ属の一種	147	322	12	42	捕食者	匍匐型
104		オオクラカケカワゲラ				1	捕食者	匍匐型
-		クラカケカワゲラ属の一種	1	31	33	5	捕食者	匍匐型
105		キベリトウゴウカワゲラ				1	捕食者	匍匐型
-		トウゴウカワゲラ属の一種				13	捕食者	匍匐型
106		フタツメカワゲラ属の一種	23	10	4	103	捕食者	匍匐型
-		カワゲラ科の一種	27	83		144	捕食者	匍匐型

表 6.3-15(3) 流入河川（流入河川、流入支川）における底生動物の確認状況

No.	科名	種名	調査年度				摂食機能群	生活型
			平成6年 (1994)	平成9年 (1997)	平成14年 (2002)	平成18年 (2006)		
107	アマメカワゲラ科	ヤマトヒロバネアマメカワゲラ	20	66	15	3	捕食者	匍匐型
108		ニッコウアマメカワゲラ	3		3	1	捕食者	匍匐型
109		アサカワヒメカワゲラ属の一種				157	捕食者	匍匐型
110		ユグサヒメカワゲラ属の一種	49	43	44		捕食者	匍匐型
111		ホソクサカワゲラ				1	捕食者	匍匐型
112		フタスジクサカワゲラ			5		捕食者	匍匐型
-		クサカワゲラ属の一種	9	6	4		捕食者	匍匐型
-		アマメカワゲラ科の一種		14		181	捕食者	匍匐型
113	アメンボ科	シマアメンボ				7	捕食者	水表面型
114		オオアメンボ				1	捕食者	水表面型
115		アメンボ				4	捕食者	水表面型
116		ヒメアメンボ				5	捕食者	水表面型
117	ヘビトンボ科	ヘビトンボ	6	36	7	39	捕食者	匍匐型
118		クロスジヘビトンボ	3	2	1	2	捕食者	匍匐型
119		ヤマトクロスジヘビトンボ				1	捕食者	匍匐型
120	ヒロバカゲロウ科	ヒロバカゲロウ科の一種				2	捕食者	游泳型
121	アマメシマトビケラ科	アマメシマトビケラ属の一種		3	13		濾過食者	造網型
122		シロフツヤトビケラ				1	濾過食者	造網型
-		シロフツヤトビケラ属の一種		1			濾過食者	造網型
123	シマトビケラ科	DAミヤマシマトビケラ		2	4		濾過食者	造網型
124		DCミヤマシマトビケラ			1		濾過食者	造網型
-		ミヤマシマトビケラ属の一種				19	濾過食者	造網型
125		コガタシマトビケラ	4				濾過食者	造網型
-		コガタシマトビケラ属の一種				10	濾過食者	造網型
126		シロズシマトビケラ			11	34	濾過食者	造網型
127		イカリシマトビケラ			1		濾過食者	造網型
128		ウルマシマトビケラ	1399	1017	784	297	濾過食者	造網型
129		セリーシマトビケラ				1	濾過食者	造網型
130		ナカハラシマトビケラ			9	17	濾過食者	造網型
-		シマトビケラ属の一種			2	413	濾過食者	造網型
131	カワトビケラ科	タニガワトビケラ属の一種			2	93	濾過食者	造網型
132		ヒメタニガワトビケラ属の一種		13			濾過食者	造網型
133	イワトビケラ科	キソイワトビケラ属の一種		2			捕食者	造網型
134		ミヤマイワトビケラ属の一種		11	8	76	捕食者	造網型
-		イワトビケラ科の一種	2				捕食者	造網型
135	クダトビケラ科	クダトビケラ属の一種				49	堆積物収集者・剥ぎ取り食者	造網型
136	ヒゲナガカワトビケラ科	ヒゲナガカワトビケラ	580	503	133	79	濾過食者	造網型
137		チャバネヒゲナガカワトビケラ	8	30	8	6	濾過食者	造網型
-		ヒゲナガカワトビケラ属の一種	42	53	6	102	濾過食者	造網型
138	ヤマトビケラ科	ニチソカタヤマトビケラ				3	剥ぎ取り食者	携葉型
-		ヤマトビケラ属の一種	234	253	64	500	剥ぎ取り食者	携葉型
139	カワリナガレトビケラ科	ツメナガレトビケラ	30	20	7	64	捕食者	匍匐型
140	ヒメトビケラ科	カクヒメトビケラ属の一種				2	剥ぎ取り食者	携葉型
141		ヒメトビケラ属の一種				65	剥ぎ取り食者	携葉型
142	ナガレトビケラ科	オオナガレトビケラ	1	18			捕食者	匍匐型
143		ニワナガレトビケラ		4	8		捕食者	匍匐型
144		イトウナガレトビケラ				5	捕食者	匍匐型
145		キノナガレトビケラ		20			捕食者	匍匐型
146		トランスクイナガレトビケラ			4		捕食者	匍匐型
147		ヒロアタマナガレトビケラ		84	76	40	捕食者	匍匐型
148		カワムラナガレトビケラ			66	4	捕食者	匍匐型
149		ナガレトビケラ属の一種				8	捕食者	匍匐型
150		ムナグロナガレトビケラ	71	63	33		捕食者	匍匐型
151		シヨツナガレトビケラ		1		1	捕食者	匍匐型
152		トウダナガレトビケラ	11	12			捕食者	匍匐型
153		レゼイナガレトビケラ				3	捕食者	匍匐型
154		ヤマナカナガレトビケラ	14	35	4	7	捕食者	匍匐型
155		クレメンツナガレトビケラ	2	3	14	4	捕食者	匍匐型
156		RBナガレトビケラ			1	1	捕食者	匍匐型
157		RCナガレトビケラ			2		捕食者	匍匐型
158		RKナガレトビケラ				9	捕食者	匍匐型
-		ナガレトビケラ属の一種				233	捕食者	匍匐型
159	コエグリトビケラ科	コエグリトビケラ属の一種				99	剥ぎ取り食者	携葉型
160	カクスイトビケラ科	オオハラツツトビケラ属の一種				14	剥ぎ取り食者	携葉型
161		ハナセマルツツトビケラ			11	165	剥ぎ取り食者	携葉型
162		マルツツトビケラ	415	3206	434	1699	剥ぎ取り食者	携葉型
163		ウエノマルツツトビケラ				25	剥ぎ取り食者	携葉型
164		MBマルツツトビケラ				1	剥ぎ取り食者	携葉型
-		マルツツトビケラ属の一種	3			6	剥ぎ取り食者	携葉型
165	ニンギョウトビケラ科	ニンギョウトビケラ	18	1		7	剥ぎ取り食者	携葉型
-		ニンギョウトビケラ属の一種				91	剥ぎ取り食者	携葉型
166	カクツツトビケラ科	フトヒゲカクツツトビケラ	1	30	12		1 破砕食者	携葉型
167		コカクツツトビケラ	10	7	26		破砕食者・堆積物収集者	携葉型
168		ヌカヒラカクツツトビケラ		3	12		破砕食者	携葉型
169		オオカクツツトビケラ		7	1	1	破砕食者	携葉型
-		カクツツトビケラ属の一種		4	5	2066	破砕食者	携葉型
170	ヒゲナガトビケラ科	タテヒゲナガトビケラ属の一種				57	破砕食者	携葉型
171		ヒゲナガトビケラ属の一種				4012	破砕食者・堆積物収集者	携葉型
172		アオヒゲナガトビケラ属の一種				23	破砕食者・堆積物収集者	携葉型
173		クサツミトビケラ属の一種				335	破砕食者・堆積物収集者	携葉型
174		セトトビケラ属の一種				6	堆積物収集者	携葉型
175		センカイトビケラ属の一種				4	剥ぎ取り食者	携葉型
176		ヒメセトトビケラ				304	破砕食者・堆積物収集者	携葉型
177	エグリトビケラ科	トピモンエグリトビケラ属の一種		1		8	破砕食者・堆積物収集者	携葉型
178		NAホタルトビケラ		5		3	破砕食者・堆積物収集者	携葉型

表 6.3-15(4) 流入河川（流入河川、流入支川）における底生動物の確認状況

No.	科名	確認種 種名	調査年度				摂食機能群	生活型
			平成6年 (1994)	平成9年 (1997)	平成14年 (2002)	平成18年 (2006)		
179	キタガミトビケラ科	キタガミトビケラ		1			濾過食者	固着型
180	フトヒゲトビケラ科	ヨツメトビケラ				3	破碎食者・堆積物収集者	携巢型
181	トビケラ科	ムラサキトビケラ	1		1	5	捕食者	携巢型
182	マルバネトビケラ科	マルバネトビケラ属の一種				75	破碎食者・堆積物収集者	携巢型
183	ケトビケラ科	グマゴトビケラ			2		破碎食者・堆積物収集者	携巢型
-	-	グマゴトビケラ属の一種				68	破碎食者・堆積物収集者	携巢型
184	クロツツトビケラ科	ニッポンアツバエグリトビケラ	4	21	125		剥き取り食者	携巢型
185	-	クロツツトビケラ			4	17	剥き取り食者	携巢型
186	ガガンボ科	ガガンボ属の一種	3	34	11	27	捕食者	匍匐・掘潜型
187	-	ブリオノケラ属の一種			9		堆積物収集者	匍匐・掘潜型
188	-	ウスバガガンボ属の一種	47	152	40	368	剥き取り食者	固着型
189	-	オトヒメガガンボ属の一種	9		8	25	捕食者	匍匐・掘潜型
190	-	クロヒメガガンボ属の一種	33	56	23		捕食者	匍匐・掘潜型
191	-	ヒゲナガガガンボ属の一種				145	捕食者	匍匐・掘潜型
192	-	カスリヒメガガンボ属の一種				27	捕食者	匍匐・掘潜型
193	-	ハネビロヒメガガンボ属の一種				8	堆積物収集者	匍匐・掘潜型
-	-	ガガンボ科の一種				64	多様	掘潜型
194	アマミカ科	ミヤママミアミカ	6		28		剥き取り食者	固着型
195	-	クロバミアミカ属の一種				1	剥き取り食者	固着型
196	-	ニホンアマミカ	13	167	25	57	剥き取り食者	固着型
197	-	シラキスカミアミカ	3	2			剥き取り食者	固着型
198	-	アルプスヒミアミカ	4	4	4	47	剥き取り食者	固着型
199	-	ヒミアミカ					剥き取り食者	固着型
200	チョウバエ科	ペリコマ属の一種				373	堆積物収集者	匍匐・掘潜型
201	-	テルマトスコプス属の一種				100	堆積物収集者	匍匐・掘潜型
202	ヌカカ科	ヌカカ科の一種				196	捕食者	掘潜型
203	ユスリカ科	モンユスリカ亜科の一種		23	5	848	捕食者	匍匐型
204	-	ヤマユスリカ属の一種			19	67	堆積物収集者	匍匐型
205	-	タニユスリカ属の一種				18	剥き取り食者・堆積物収集者	匍匐型
206	-	バガスティア属の一種				74	堆積物収集者	匍匐型
207	-	サウユスリカ属の一種				219	堆積物収集者	匍匐型
208	-	ユキユスリカ属の一種				1	剥き取り食者・堆積物収集者	匍匐型
-	-	ヤマユスリカ亜科の一種				63	剥き取り食者・堆積物収集者	匍匐型
209	-	ケプカユスリカ属の一種			5	89	破碎食者・堆積物収集者	掘潜型
210	-	ハダカユスリカ属の一種			64	88	堆積物収集者	匍匐型
211	-	ツヤユスリカ属の一種			3	69	破碎食者・堆積物収集者	掘潜型
212	-	エラノリユスリカ属の一種			2	85	不明	不明
213	-	デンマクエリユスリカ属の一種				29	剥き取り食者	掘潜型
214	-	ナノクラディウス属の一種				1	破碎食者・堆積物収集者	掘潜型
215	-	ホソケプカユスリカ属の一種				8	堆積物収集者	匍匐型
216	-	エリユスリカ属の一種			123	916	堆積物収集者	掘潜型
217	-	シンオールソクラディウス属の一種				36	堆積物収集者	匍匐型
218	-	トゲアシユスリカ属の一種				31	堆積物収集者	掘潜型
219	-	コナユスリカ属の一種				8	捕食者	匍匐型
220	-	メトゥリックネムス属の一種				32	堆積物収集者	匍匐型
221	-	ヌカユスリカ属の一種				21	捕食者	匍匐型
222	-	トッパテナ属の一種				47	堆積物収集者	匍匐型
-	-	エリユスリカ亜科の一種	411	136	37	675	破碎食者・堆積物収集者	掘潜型
223	-	クリプトキロノムス属の一種				10	捕食者	掘潜型
224	-	ツヤムネユスリカ属の一種				311	濾過食者	掘潜型
225	-	バラクラドベルマ属の一種				3	堆積物収集者	掘潜型
226	-	ハモンユスリカ属の一種			18	580	濾過食者	掘潜型
227	-	ハモグリユスリカ属の一種				8	破碎食者	不明
228	-	アシマダラユスリカ属の一種				4	堆積物収集者	掘潜型
229	-	クラダニタルス属の一種				29	堆積物収集者	掘潜型
230	-	ナガレユスリカ属の一種				96	濾過食者	掘潜型
231	-	タニタルス属の一種				420	濾過食者	掘潜型
-	-	ユスリカ亜科の一種	36	20		64	濾過食者	掘潜型
-	-	ユスリカ科類	232				濾過食者	掘潜型
232	カ科	カ科の一種				51	捕食者	遊泳型
233	ホソカ科	ホソカ属の一種			3	3	堆積物収集者	匍匐型
234	ブコ科	キアシオオブコ				599	濾過食者	固着型
-	-	オオブコ属の一種	98	57		1472	濾過食者	固着型
235	-	アシマダラブコ属の一種	3901	441	815	856	濾過食者	固着型
236	ナガレアブ科	ミヤマナガレアブ				1	捕食者	掘潜型
237	-	ハマダラナガレアブ		9	58	20	捕食者	掘潜型
-	-	ナガレアブ属の一種				2	捕食者	掘潜型
238	-	クロモンナガレアブ			1	46	捕食者	掘潜型
239	-	サツモンナガレアブ				8	捕食者	掘潜型
240	アブ科	アブ科の一種		1	1	1	捕食者	掘潜型
241	アシナガバエ科	アシナガバエ科の一種				9	捕食者	掘潜型
242	オドリバエ科	オドリバエ科の一種				115	捕食者	掘潜型
243	ミギワバエ科	ミギワバエ科の一種				75	捕食者	掘潜型
-	-	ハエ目				25	多様	多様
244	ゲンゴロウ科	ゴマダラチビゲンゴロウ				4	捕食者	遊泳型
245	-	ホソクロマメゲンゴロウ	1				捕食者	遊泳型
-	-	マメゲンゴロウ属の一種	1				捕食者	遊泳型
246	-	モンキマメゲンゴロウ	10	12	1	1	捕食者	遊泳型
247	-	サウダマメゲンゴロウ			1		捕食者	遊泳型
248	-	ヒメゲンゴロウ		7			捕食者	遊泳型
-	-	ヒメゲンゴロウ亜科の一種				55	捕食者	遊泳型
-	-	ゲンゴロウ科の一種		1			捕食者	遊泳型
249	ミズスマシ科	オナガミズスマシ				1	捕食者	遊泳型
-	-	オナガミズスマシ属の一種				31	捕食者	遊泳型
250	ダルマガムシ科	ハセガワダルマガムシ				1	剥き取り食者	匍匐型

表 6.3-15(5) 流入河川（流入河川、流入支川）における底生動物の確認状況

No.	科名	確認種 種名	調査年度				摂食機能群	生活型
			平成6年 (1994)	平成9年 (1997)	平成14年 (2002)	平成18年 (2006)		
251	ガムシ科	マルガムシ	7	2	1	1	剥き取り食者・捕食者	遊泳型
252		シジミガムシ			2	1	剥き取り食者・捕食者	遊泳型
-		ガムシ科の一種				2	剥き取り食者・捕食者	遊泳型
253	ヒメドロムシ科	ツヤナガアシドロムシ				1	剥き取り食者	匍匐型
254		ツヤヒメドロムシ				25	剥き取り食者	匍匐型
255		キスジミゾドロムシ				1	剥き取り食者	匍匐型
256		ゴトウミゾドロムシ				2	剥き取り食者・捕食者	匍匐型
257		アカモンミゾドロムシ				2	剥き取り食者	匍匐型
258		ツブシドロムシ				1	剥き取り食者	匍匐型
259		ツヤドロムシ				38	剥き取り食者・捕食者	匍匐型
260		ミンツヤドロムシ				1	剥き取り食者	匍匐型
-		ヒメドロムシ亜科の一種			8	800	剥き取り食者・捕食者	匍匐型
261		ヒラタドロムシ科	チビヒゲナガハナノミ				3	剥き取り食者
262	クシヒゲマルヒラタドロムシ					26	剥き取り食者・捕食者	匍匐型
263	チビマルヒゲナガハナノミ属の一種					1	剥き取り食者	匍匐型
264	ヒラタドロムシ属の一種			3			剥き取り食者	匍匐型
265	ホタル科	ゲンシボタル				2	捕食者	匍匐型
合計種数			11目40科 90種	12目44科 110種	12目46科 122種	21目82科 221種	-	-

分類	区分	解説
摂食機能群	破砕食者	落葉等を細かくかみ砕いて摂食する。
	濾過食者	網を張ったり、口器や前肢に生える長毛により有機物を集めて摂食する。
	堆積物収集者	堆積物を集めて摂食する。
	剥き取り食者	基質上の藻類等を剥ぎ取る様に摂食する。
	捕食者	動物（死体も含む）を捕食する。
	寄生者	宿主に寄生、または自由生活しつつ宿主の血液や体液を吸う。

分類	区分	解説
生活型	造網型	分泌絹糸を用いて捕獲網を作るもの。
	固着型	強い吸着器官または鈎着器官をもって他物に固着するもの。
	匍匐型	匍匐するもの。
	携巢型	筒巢をもつ多くのトビケラ目の幼虫。
	遊泳型	移動の際は主として遊泳するもの。
	掘潜型	砂または泥の中に潜っていることが多いもの。
	水表型	水表上で生活するもの。
寄生型	主に寄生生活をするもの。	

注 1) 表中の数値は年間の合計個体数を示す。

注 2) 調査の概要は以下のとおりである。

平成 6 年度：調査回数 3 回（5、8、11 月） 調査地点 3 地点（St. 5、St. 14、St. 20）

平成 9 年度：調査回数 3 回（5、8、11 月） 調査地点 3 地点（St. 4、St. 14、St. 22）

平成 14 年度：調査回数 3 回（5、7～8、11 月） 調査地点 3 地点（St. 6、St. 14、St. 23）

平成 18 年度：調査回数 3 回（6、8、11 月） 調査地点 2 地点（St. 14、St. 24）

（平成 18 年度の St. 14 の調査は、6 月のみの実施である。）

出典：6-9 「平成 6 年度ダム自然環境調査報告書（底生動物）」

6-13 「平成 9 年度ダム自然環境調査業務報告書（底生動物）」

6-20 「平成 14 年度ダム自然環境調査業務報告書（底生動物）」

6-27 「平成 18 年度ダム自然環境調査業務報告書（底生動物）」

6-67 「原色川虫図鑑」

6-73 「Ecology and classification of North American freshwater invertebrates. Academic press」

6-74 「An Introduction to the Aquatic Insects of North America」

6-75 「溪流生態砂防学」

6-76 「琉球列島の陸水生物」

6-77 「底生動物の生活型と摂食機能群による河川生態系評価」

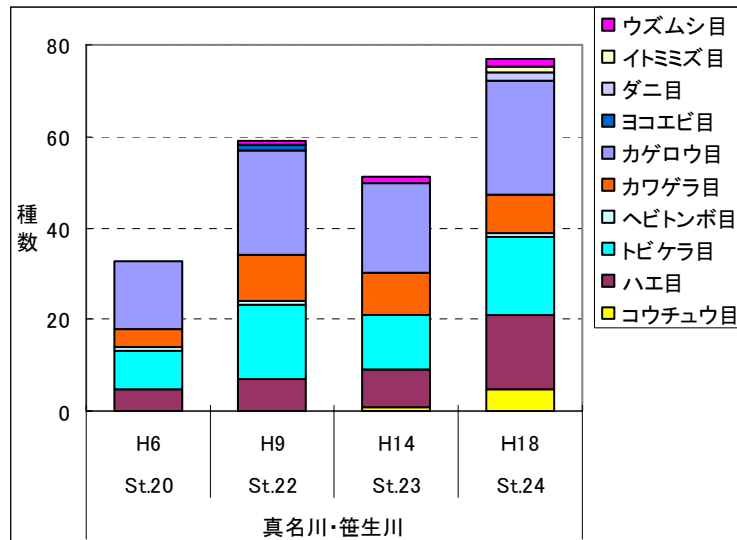


#### (a) 流入河川（流入河川・流入支川）の主要構成種の変化

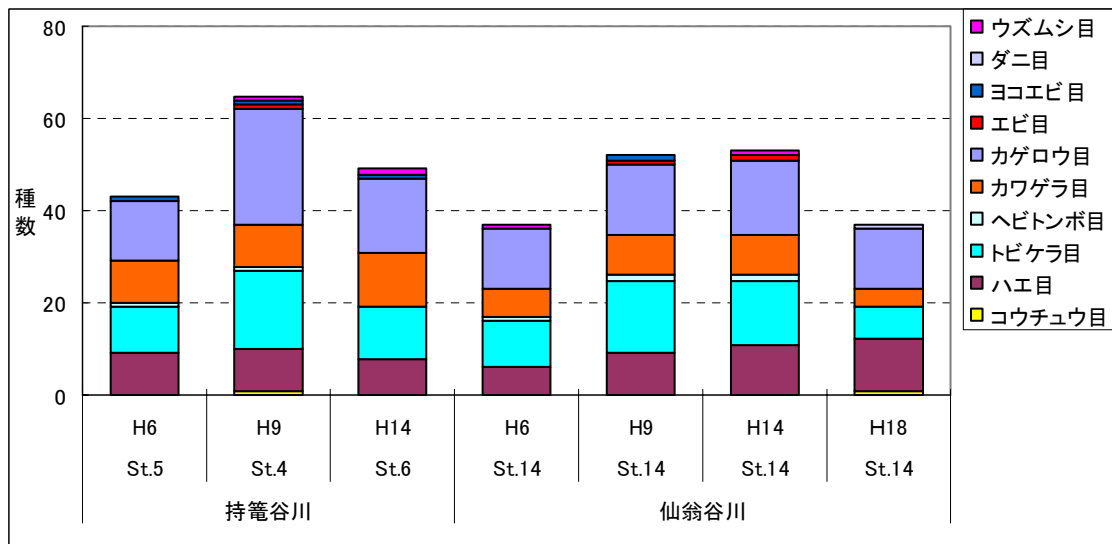
定量調査で確認した底生動物の目別種数、生活型別割合、摂食機能群別割合、EPT 指数の比較を図 6.3-22～25 に、優占種（定量採集による確認種のうち各調査年度の上位 6 位を示した）の比較を表 6.3-16 に示す。

流入河川（真名川・笹生川）では、定量調査により 10 目 41 科 108 種の底生動物を確認した。目別の確認種数は、いずれの調査年度もカゲロウ目が最も多く、次いでトビケラ目やハエ目、カワゲラ目が多かった。この構成比に年度間で大きな変化はみられなかった。生活型は、いずれの調査年度も匍匐型（ヒラタカゲロウ科、カワゲラ科、ナガレトビケラ科等）が優占しており、遊泳型（コカゲロウ科等）や造網型（シマトビケラ科等）も確認されたが、それらの割合は小さかった。この構成比も年度間で大きな変化はみられなかった。摂食機能群は、剥ぎ取り食者（コカゲロウ科、ヒラタカゲロウ科等）や捕食者（カワゲラ科、ナガレトビケラ科等）が最も多く、次いで堆積物収集者（ヤマユスリカ属、サワユスリカ属等）や濾過食者（ウルマーシマトビケラ等）が多かった。これらの順位は調査年度でやや異なるが、構成比に年度間で大きな変化はみられなかった。EPT 指数は、いずれの調査年度もカゲロウ目が最も多く、続いてトビケラ目、カワゲラ目の構成比に年度間で大きな変化はみられなかった。平成 9 年以降は概ね 40～50 台の値で推移している。優占種は、コカゲロウ属、フタバコカゲロウ、ウルマーシマトビケラ、エルモンヒラタカゲロウ等が各調査年度で継続して確認されており、大きな変化はみられなかった。

流入支川の持籠谷川では、定量調査により 9 目 34 科 83 種、仙翁谷川では 10 目 33 科 85 種の底生動物を確認した。目別や優占種の種構成、生活型、摂食機能群、EPT 指数、優占種等の構成比などに、流入河川と比較して大きな違いはみられなかった。なお、確認種数や EPT 指数の値は流入河川が高く、河川規模の違いが関係していると考えられる。



流入河川（真名川・笹生川）



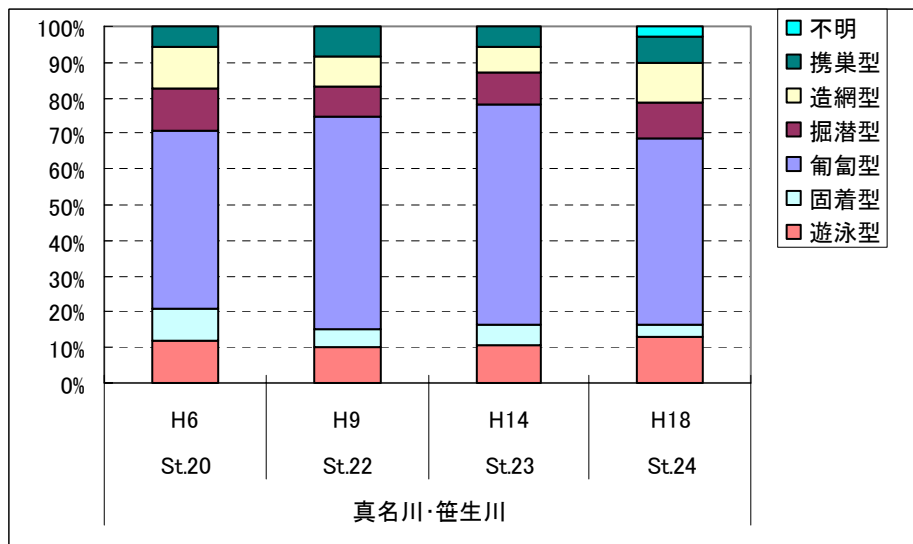
流入支川（持籠谷川、仙翁谷川）

図 6.3-22 流入河川（流入河川、流入支川）の底生動物の目別種数の比較

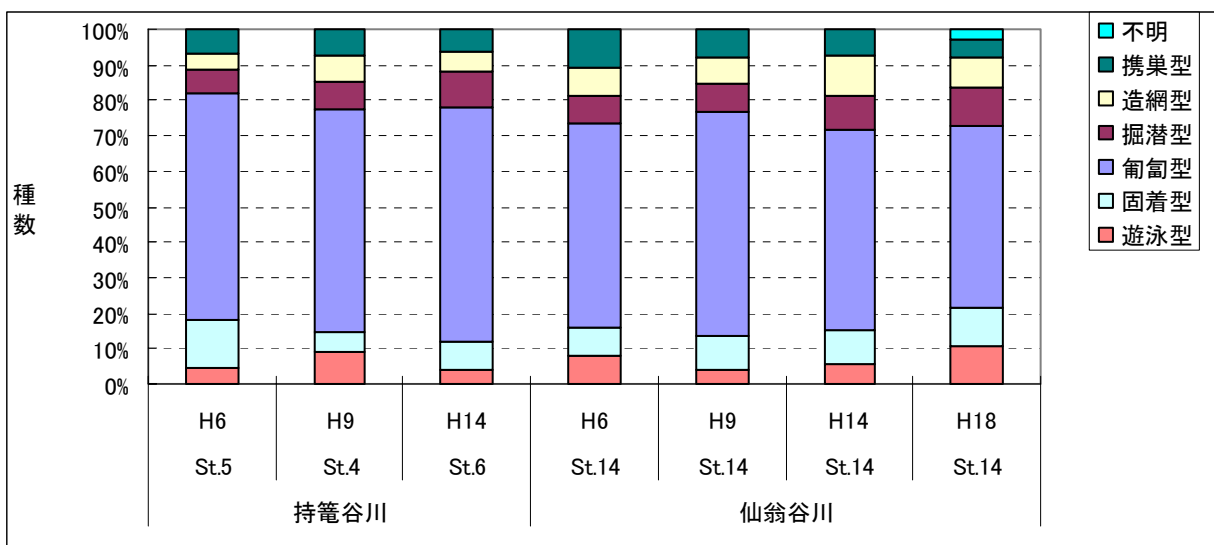
注) 調査の概要は以下のとおりである。

- 平成 6 年度：調査回数 3 回（5、8、11 月） 調査地点 3 地点（St.5、St.14、St.20）
- 平成 9 年度：調査回数 3 回（5、8、11 月） 調査地点 3 地点（St.4、St.14、St.22）
- 平成 14 年度：調査回数 3 回（5、7～8、11 月） 調査地点 3 地点（St.6、St.14、St.23）
- 平成 18 年度：調査回数 3 回（6、8、11 月） 調査地点 2 地点（St.14、St.24）  
（平成 18 年度の St.14 の調査は、6 月のみの実施である。）

- 出典：6-9 「平成 6 年度ダム自然環境調査報告書（底生動物）」
- 6-13 「平成 9 年度ダム自然環境調査業務報告書（底生動物）」
- 6-20 「平成 14 年度ダム自然環境調査業務報告書（底生動物）」
- 6-27 「平成 18 年度ダム自然環境調査業務報告書（底生動物）」



流入河川（真名川・笹生川）



流入支川（持籠谷川、仙翁谷川）

図 6.3-23 流入河川（流入河川、流入支川）の底生動物の生活型別種数の比較

注) 調査の概要は以下のとおりである。

平成 6 年度：調査回数 3 回（5、8、11 月） 調査地点 3 地点（St.5、St.14、St.20）

平成 9 年度：調査回数 3 回（5、8、11 月） 調査地点 3 地点（St.4、St.14、St.22）

平成 14 年度：調査回数 3 回（5、7～8、11 月） 調査地点 3 地点（St.6、St.14、St.23）

平成 18 年度：調査回数 3 回（6、8、11 月） 調査地点 2 地点（St.14、St.24）

（平成 18 年度の St.14 の調査は、6 月のみの実施である。）

出典：6-9 「平成 6 年度ダム自然環境調査報告書（底生動物）」

6-13 「平成 9 年度ダム自然環境調査業務報告書（底生動物）」

6-20 「平成 14 年度ダム自然環境調査業務報告書（底生動物）」

6-27 「平成 18 年度ダム自然環境調査業務報告書（底生動物）」

6-67 「原色川虫図鑑」

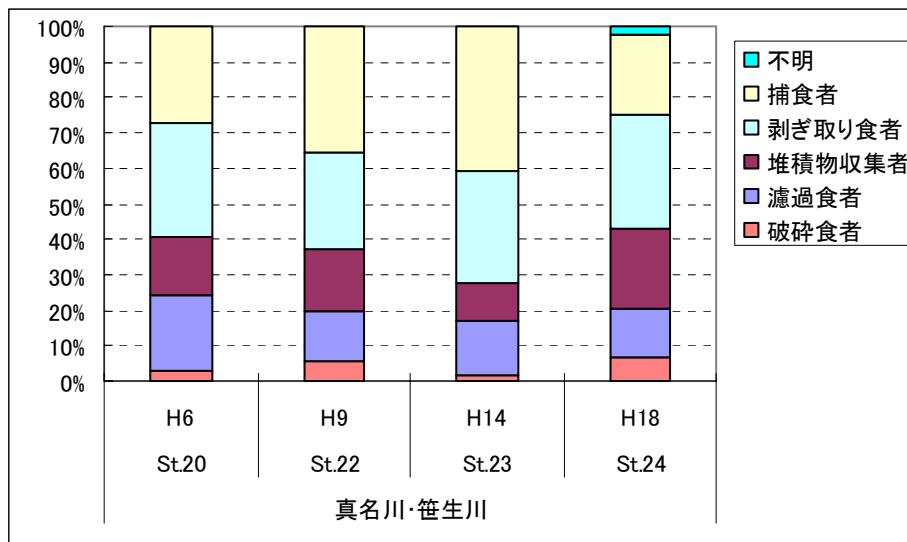
6-73 「Ecology and classification of North American freshwater invertebrates.Academic press」

6-74 「An Introduction to the Aquatic Insects of North America」

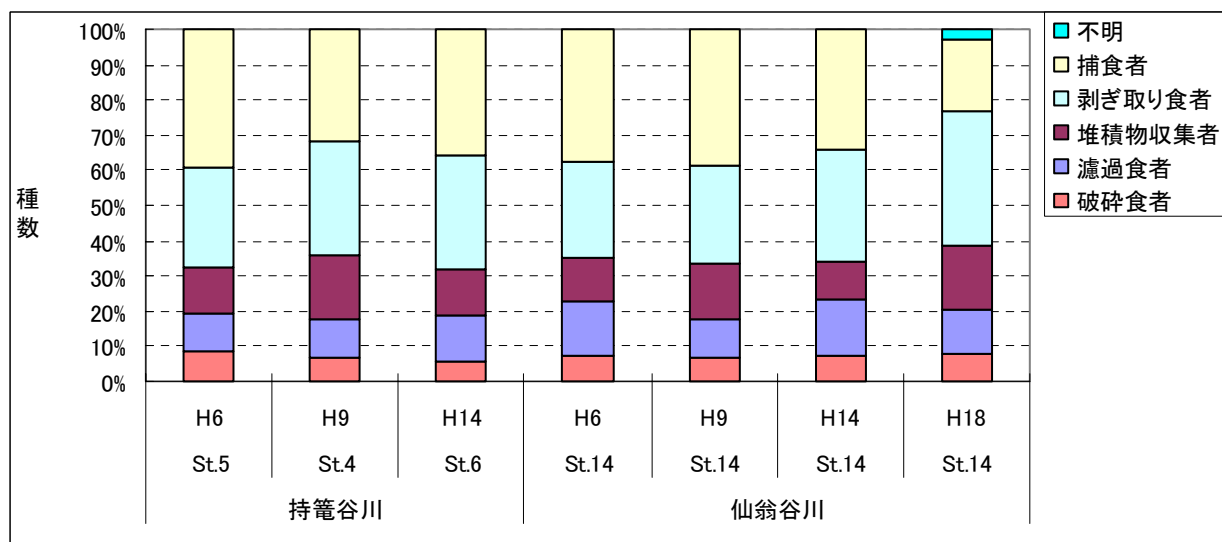
6-75 「溪流生態砂防学」

6-76 「琉球列島の陸水生物」

6-77 「底生動物の生活型と摂食機能群による河川生態系評価」



流入河川 (真名川)



流入支川 (持籠谷川、仙翁谷川)

図 6.3-24 流入河川 (流入河川、流入支川) の底生動物の摂食機能群別種数の比較

注) 調査の概要は以下のとおりである。

平成 6 年度：調査回数 3 回 (5、8、11 月) 調査地点 3 地点 (St.5、St.14、St.20)

平成 9 年度：調査回数 3 回 (5、8、11 月) 調査地点 3 地点 (St.4、St.14、St.22)

平成 14 年度：調査回数 3 回 (5、7~8、11 月) 調査地点 3 地点 (St.6、St.14、St.23)

平成 18 年度：調査回数 3 回 (6、8、11 月) 調査地点 2 地点 (St.14、St.24)

(平成 18 年度の St.14 の調査は、6 月のみの実施である。)

出典：6-9 「平成 6 年度ダム自然環境調査報告書 (底生動物)」

6-13 「平成 9 年度ダム自然環境調査業務報告書 (底生動物)」

6-20 「平成 14 年度ダム自然環境調査業務報告書 (底生動物)」

6-27 「平成 18 年度ダム自然環境調査業務報告書 (底生動物)」

6-67 「原色川虫図鑑」

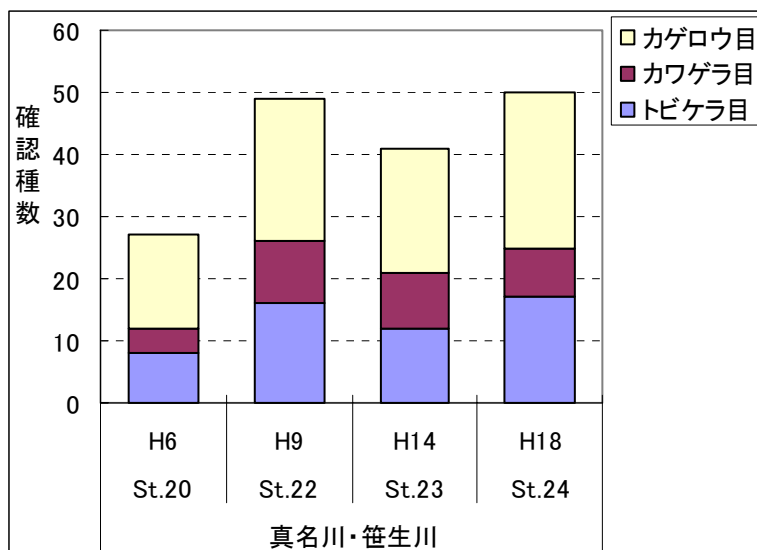
6-73 「Ecology and classification of North American freshwater invertebrates.Academic press」

6-74 「An Introduction to the Aquatic Insects of North America」

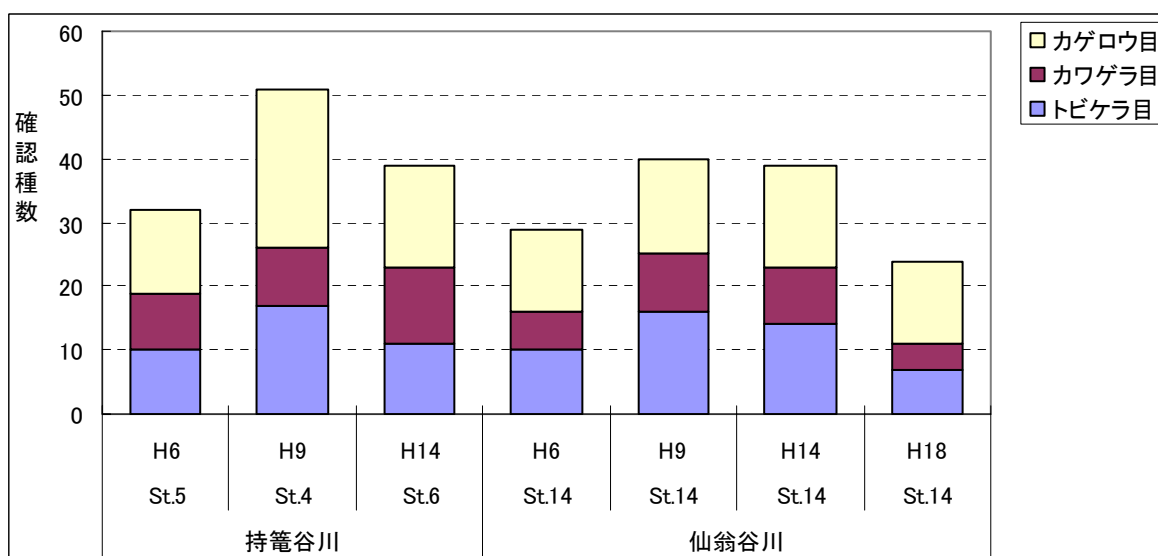
6-75 「溪流生態砂防学」

6-76 「琉球列島の陸水生物」

6-77 「底生動物の生活型と摂食機能群による河川生態系評価」



流入河川（真名川）



流入支川（持籠谷川、仙翁谷川）

図 6.3-25 流入河川（流入河川、流入支川）における EPT 指数の比較

注 1)EPT 指数：カゲロウ目、カワゲラ目、トビケラ目の種類数

調査地の水質の指標として使われており、カゲロウ目、カワゲラ目、トビケラ目の多くは、水質汚濁に弱いことから考え出されたもの。EPT 指数が高いと水質が良いとされている。

注 2)調査の概要は以下のとおりである。

平成 6 年度：調査回数 3 回（5、8、11 月） 調査地点 3 地点（St.5、St.14、St.20）

平成 9 年度：調査回数 3 回（5、8、11 月） 調査地点 3 地点（St.4、St.14、St.22）

平成 14 年度：調査回数 3 回（5、7～8、11 月） 調査地点 3 地点（St.6、St.14、St.23）

平成 18 年度：調査回数 3 回（6、8、11 月） 調査地点 2 地点（St.14、St.24）

（平成 18 年度の St.14 の調査は、6 月のみの実施である。）

出典：6-9 「平成 6 年度ダム自然環境調査報告書（底生動物）」

6-13 「平成 9 年度ダム自然環境調査業務報告書（底生動物）」

6-20 「平成 14 年度ダム自然環境調査業務報告書（底生動物）」

6-27 「平成 18 年度ダム自然環境調査業務報告書（底生動物）」

6-74 「An Introduction to the Aquatic Insects of North America」

6-79 「指標生物学 - 生物モニタリングの考え方」

表 6.3-16 流入河川（流入河川、流入支川）の底生動物の上位優占種の比較

(単位:個体/m<sup>2</sup>)

流入河川(真名川・笹生川)								
順位	調査年度							
	平成6年(1994)		平成9年(1997)		平成14年(2002)		平成18年(2006)	
	種名	個体数/m <sup>2</sup>	種名	個体数/m <sup>2</sup>	種名	個体数/m <sup>2</sup>	種名	個体数/m <sup>2</sup>
1位	コカゲロウ属類	197	コカゲロウ属類	249	アシマダラブコ属の一種	125	フタバコカゲロウ	60
2位	エリコスリカ亜科の一種	122	エルモンヒラタカゲロウ	79	フタバコカゲロウ	89	コカゲロウ属類	44
3位	フタバコカゲロウ	112	ウルマーシマトビケラ	76	コカゲロウ属類	71	エルモンヒラタカゲロウ	25
4位	ウルマーシマトビケラ	91	ヒゲナガカフトビケラ	69	カワゲラ	33	シマトビケラ属の一種	23
5位	ヒゲナガカフトビケラ	67	クシゲマダラカゲロウ	57	ウルマーシマトビケラ	32	ウルマーシマトビケラ	16
6位	エルモンヒラタカゲロウ	37	フタマタマダラカゲロウ	55	エリコスリカ属の一種	19	ヨシノマダラカゲロウ	13

流入支川(持壽谷川)								
順位	調査年度							
	平成6年(1994)		平成9年(1997)		平成14年(2002)		平成18年(2006)	
	種名	個体数/m <sup>2</sup>	種名	個体数/m <sup>2</sup>	種名	個体数/m <sup>2</sup>	種名	個体数/m <sup>2</sup>
1位	アシマダラブコ属の一種	1239	マルツツトビケラ	1035	フタバコカゲロウ	150	実施せず	
2位	コカゲロウ属類	206	コカゲロウ属類	205	キアシオオブユ	83		
3位	フタバコカゲロウ	191	ウルマーシマトビケラ	71	ウルマーシマトビケラ	55		
4位	ウルマーシマトビケラ	131	ヤマトビケラ属の一種	61	コカゲロウ属類	34		
5位	マルツツトビケラ	99	フタバコカゲロウ	51	マルツツトビケラ	29		
6位	ヤマトビケラ属の一種	62	エルモンヒラタカゲロウ	43	キイロヒラタカゲロウ	27		

流入支川(仙翁谷川)								
順位	調査年度							
	平成6年(1994)		平成9年(1997)		平成14年(2002)		平成18年(2006)	
	種名	個体数/m <sup>2</sup>	種名	個体数/m <sup>2</sup>	種名	個体数/m <sup>2</sup>	種名	個体数/m <sup>2</sup>
1位	コカゲロウ属類	151	ウルマーシマトビケラ	141	コカゲロウ属類	103	アシマダラブコ属の一種	26
2位	フタバコカゲロウ	80	アシマダラブコ属の一種	137	フタバコカゲロウ	70	コカゲロウ属類	24
3位	ウルマーシマトビケラ	55	フタバコカゲロウ	121	マルツツトビケラ	40	エリコスリカ亜科の一種	20
4位	エルモンヒラタカゲロウ	51	コカゲロウ属類	115	ウルマーシマトビケラ	38	フタバコカゲロウ	18
5位	マルツツトビケラ	36	コホンアミカ	53	ヨシノマダラカゲロウ	16	エリコスリカ属の一種	15
6位	フタマタマダラカゲロウ	23	マルツツトビケラ	29	ユピオナシカワゲラ属の一種	11	ミドリカワゲラ科の一種	14
	ヒゲナガカフトビケラ	23						

注 1) 平成 14 年度で確認されたシロハラコカゲロウ、E コカゲロウ、F コカゲロウは、コカゲロウ属に含まれる種である。これらは平成 6 年度および平成 9 年度では同定不能であることから、表中ではコカゲロウ属として扱った。

注 2) 調査の概要は以下のとおりである。

平成 6 年度：調査回数 3 回（5、8、11 月） 調査地点 3 地点（St. 5、St. 14、St. 20）

平成 9 年度：調査回数 3 回（5、8、11 月） 調査地点 3 地点（St. 4、St. 14、St. 22）

平成 14 年度：調査回数 3 回（5、7～8、11 月） 調査地点 3 地点（St. 6、St. 14、St. 23）

平成 18 年度：調査回数 3 回（6、8、11 月） 調査地点 2 地点（St. 14、St. 24）

（平成 18 年度の St. 14 の調査は、6 月のみの実施である。）

出典：6-9 「平成 6 年度ダム自然環境調査報告書（底生動物）」

6-13 「平成 9 年度ダム自然環境調査業務報告書（底生動物）」

6-20 「平成 14 年度ダム自然環境調査業務報告書（底生動物）」

6-27 「平成 18 年度ダム自然環境調査業務報告書（底生動物）」

3) 鳥類

流入河川（流入河川・流入支川）における鳥類の確認状況を表 6.3-17 に示す。

鳥類は、平成 14 年度調査において 19 種が確認されており、イワツバメ、セキレイ類、カワガラス等の確認個体数が多かった。

なお、真名川ダムでは平成 4 年度から平成 14 年度にかけて 4 回の国勢調査を実施しているが、流入河川における調査は平成 14 年度に初めて実施した。

表 6.3-17 流入河川（流入河川・流入支川）における鳥類の確認状況

確認種		調査年度	季節 移動型	溪流環境を 利用する種	河原環境を 利用する種
科名	種名	平成 14 年 (2002)			
ウ科	カワウ	1	留鳥		
サギ科	アオサギ	5	留鳥		
カモ科	マガモ	2	冬鳥		
	カワアイサ	7	冬鳥		
タカ科	トビ	2	留鳥		
チドリ科	イカルチドリ	2	留鳥		
ハト科	キジバト	3	留鳥		
ツバメ科	イワツバメ	20	夏鳥		
セキレイ科	キセキレイ	15	留鳥		
	セグロセキレイ	11	留鳥		
カワガラス科	カワガラス	19	留鳥		
ミソサザイ科	ミソサザイ	1	留鳥		
ツグミ科	ルリビタキ	1	冬鳥		
	ジョウビタキ	3	冬鳥		
	ノビタキ	8	旅鳥		
ウグイス科	ウグイス	1	留鳥		
	オオヨシキリ	2	夏鳥		
ホオジロ科	ホオジロ	19	留鳥		
アトリ科	ベニマシコ	1	冬鳥		
合計種数		7 目 14 科 19 種	-	1 種	3 種

注 1) 表中の数値は年間の合計個体数を示す。

注 2) 個体数は 3 季(1 ルート)の合計値

注 3) 流入河川で実施されたのは平成 14 年度のみである。

注 4) 季節移動型

留鳥：その地域で一年中見られるもので、その地域で繁殖する。同じ個体が一年中留まってい  
るとは限らない。また、山地から平地や地域内で小規模な移動を行うものを漂鳥という。

夏鳥：夏までに渡来して、その地域で繁殖をするもの。

冬鳥：冬までに渡来して、その地域で越冬するもの。

旅鳥：渡りの途中で一時的にその地域に立ち寄るもの。

出典：6-21 「平成 14 年度ダム自然環境調査業務報告書（鳥類）」

6-103 「原色日本野鳥生態図鑑 陸鳥編・水鳥編」

(a) 渓流環境を利用する種の生息状況

渓流性鳥類の出現状況は、カワガラス 1 種を樹林内の水域で確認し、確認個体数も比較的多かった。

カワガラスは滝の裏の岩の隙間、堰堤の水抜き穴などに営巣し、主な餌は水生昆虫であるため、これらの生物が生息できる水量が豊富な沢や溪流といった山地の河川等が一般的な生息環境となっている。

(b) 河原環境を利用する種の生息状況

河原環境利用種は、河原の砂礫地を中心に歩いたり飛び跳ねたりしながら昆虫等を捕食する、イカルチドリ、キセキレイ、セグロセキレイの 3 種を確認した。

イカルチドリには、氾濫原の礫や砂利の多い河原に生息し、国内では営巣適地の減少で個体数が減少している種といわれている。<sup>2</sup>

また、キセキレイは、河川の上流域の砂礫地などに生息する種であり、現地調査で繁殖行動及び幼鳥を確認した。繁殖の可能性があると考えられることなどから、流入河川周辺は本種にとって好適な環境が存在すると考えられる。



出典：6-21 「平成 14 年度ダム自然環境調査業務報告書（鳥類）」

図 6.3-26 流入河川の河原環境

<sup>2</sup> イカルチドリの生息状況については、資料 6-91 「近畿地区鳥類レッドデータブック」に記載されている国内の現状を参考とした。



#### 4) 両生類

両生類は、平成 17 年度に調査が実施され、沢等の環境で繁殖するヒダサンショウウオ、草地や森林が隣接している溪流環境に生息するカジカガエル等の 5 種を確認した。

なお、真名川ダムでは平成 5～6 年度から平成 17 年度にかけて 3 回の国勢調査を実施しているが、流入河川における調査は平成 17 年度に初めて実施した。

##### (a) 溪流環境を利用する種の生育状況

流入河川の確認種の中で溪流環境に依存する種は、表 6.3-18 に示すヒダサンショウウオ、ナガレヒキガエル、カジカガエルの 3 種であり、特にカジカガエルは幼体を含め 27 個体と最も多く確認している。

表 6.3-18 溪流環境を利用する種

科名	種名	調査年度
		平成 17 年(2005)
サンショウウオ科	ヒダサンショウウオ	1
ヒキガエル科	ナガレヒキガエル	1
アオガエル科	カジカガエル	27
合計種数		3 種

注) 表中の数値は年間の合計個体数を示す。

出典：6-25 「平成 17 年度ダム自然環境調査業務報告書（両生類・爬虫類・哺乳類）」



出典：6-25 「平成 17 年度ダム自然環境調査業務報告書（両生類・爬虫類・哺乳類）」

図 6.3-27 溪流環境を利用する種（カモシカガエル）

5) 陸上昆虫類等

陸上昆虫類は、平成 4～5 年度から平成 16 年度の間に行った 3 回の調査で、水域に依存するカワゲラ目やトビケラ目に属する種を含む 2072 種（1 回当りの確認種数は 497～1450 種）を確認した。いずれの調査年度においても、コウチュウ目やチョウ目に属する種数が多かった。

(a)河原環境を利用する種の生息状況

河原環境を利用する陸上昆虫類の確認状況を表 6.3-19 に示す。

河原環境を利用する種を多く含むトンボ、バッタ、コウチュウの各目から 8 種を抽出して比較した。これらの種のうち、カワトンボ科とヒシバッタ科の種は河原環境において比較的普通にみられる種であるが、アイヌハンミョウは近年河川環境の変化に伴い減少しているといわれる種である。<sup>3</sup>

表 6.3-19 河原環境を利用する種の種類数、種別個体数の経年比較

科 名	種 名	調査年度		
		平成 4～5 年 (1992～1993)	平成 11 年 (1999)	平成 16 年 (2004)
カワトンボ科	ミヤマカワトンボ			
コオロギ科	カワラスズ			
	ヤチスズ			
	エゾスズ			
バッタ科	カワラバッタ			
ヒシバッタ科	ハネナガヒシバッタ			
	コバネヒシバッタ			
ハンミョウ科	アイヌハンミョウ			
合計種数		8 種	3 種	0 種

出典：6-3 「平成 4 年度ダム自然環境調査報告書」  
 6-6 「平成 5 年度ダム自然環境調査報告書（昆虫類）」  
 6-16 「平成 11 年度ダム自然環境調査報告書（昆虫類）」  
 6-24 「平成 16 年度ダム自然環境調査業務報告書（陸上昆虫類等）」

<sup>3</sup> アイヌハンミョウの生息状況については、資料 6-96「北海道の希少野生生物 北海道レッドデータブック 2001」（北海道 平成 13 年）に記載されている国内の現状を参考とした。

(b)外来種

流入河川（流入河川・流入支川）における陸上昆虫類の外来種の確認状況を表 6.3-20 に示す。

流入河川で確認された陸上昆虫類の中には、外来種としてブタクサハムシ、ニッポンモンキジガバチ、セイヨウミツバチ、オオタバコガの 4 種を確認したが、環境省により選定された特定外来生物、要注意外来生物に該当する種はなかった。

ブタクサハムシは、国内では平成 8 年に侵入を確認した種で、福井県では平成 10 年に初めて採集されているが、真名川ダムでは平成 16 年度の国勢調査によって、はじめて確認した。

ニッポンモンキジガバチは、比較的古くから国内に生息する種であるが、近年、河川環境の変化に伴って減少しているといわれる。真名川ダムにおける国勢調査では、初年度である平成 4～5 年度に確認した。

セイヨウミツバチは、養蜂に利用するため人為的に持ち込まれた種であり、真名川ダムの流入河川では、初年度である平成 4～5 年度と平成 11 年度に確認された。

オオタバコガは、各種植物の害虫とされる種であり、真名川ダムにおける国勢調査では、平成 4～5 年度と平成 16 年度に確認した。

表 6.3-20 流入河川（流入河川・流入支川）における外来種の比較

種名	調査年度			備考
	平成 4～5 年 (1992～3)	平成 11 年 (1999)	平成 16 年 (2004)	
ブタクサハムシ				外来種
ニッポンモンキジガバチ				外来種
セイヨウミツバチ				外来種
オオタバコガ				外来種
合計種数	3 種	1 種	2 種	-

注) 外来種：「外来種ハンドブック」の掲載種

- 出典：6-3 「平成 4 年度ダム自然環境調査報告書」  
6-6 「平成 5 年度ダム自然環境調査報告書（昆虫類）」  
6-16 「平成 11 年度ダム自然環境調査報告書（昆虫類）」  
6-24 「平成 16 年度ダム自然環境調査業務報告書（陸上昆虫類等）」  
6-102 「外来種ハンドブック」

(4)ダムによる影響の検証

流入河川の生物の変化に対するダムによる影響の検証結果を表 6.3-21 及び図 6.3-28 に示す。

表 6.3-21 (1) 流入河川の生物の変化に対するダムによる影響の検証結果 (魚類)

検討項目		生物の変化の状況	ダムの存在・供用に伴う影響	ダムの存在・供用以外の影響	検証結果	
生息状況の変化	a) 回遊性魚介類	流入河川では、アユ、イワナ、ヤマメ、アマゴ(サツキマス)、トウヨシノボリの5種の回遊性魚類を確認した。	下流の止水環境の存在	釣り人等による放流	イワナ、アマゴ(サツキマス)、トウヨシノボリは、ダム湖で陸封されたものと考えられる。 アユの確認は放流によるものと考えられる。	

注)検証結果

- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によるものと考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によるものと考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- : 生物の生息・生育状況に、大きな変化が見られなかった場合
- ? : 生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合

表 6.3-21(2) 流入河川の生物の変化に対するダムによる影響の検証結果 (底生動物)

検討項目		生物の変化の状況	ダムの存在・供用に伴う影響	ダムの存在・供用以外の影響	検証結果	
生息状況の変化	a) 主要構成種	目別確認種数、生活型、摂食機能群、EPT指数、優占種等の種構成には大きな変化は認められなかった。	-	-	流水性の底生動物を継続して確認している。	-

注)検証結果

- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によるものと考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によるものと考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- : 生物の生息・生育状況に、大きな変化が見られなかった場合
- ? : 生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合

表 6.3-21(3) 流入河川の生物の変化に対するダムによる影響の検証結果（鳥類）

検討項目		生物の変化の状況	ダムの存在・供用に伴う影響	ダムの存在・供用以外の影響	検証結果	
生息状況の変化	a) 渓流環境を利用する種	平成 14 年度調査で、カワガラスを確認した。	-	-	渓流性の種を確認したが、流入河川における調査は平成 14 年度に初めて実施したため、変化の検証はできなかった。	？
	b) 河原環境を利用する種	平成 14 年度調査で、イカルチドリ、キセキレイ、セグロセキレイの 3 種を確認した。	-	公園整備による河原環境の存在	河原環境を利用する種を確認したが、流入河川における調査は平成 14 年度に初めて実施したため、変化の検証はできなかった。	？

注)検証結果

- ：生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によると考えられる場合
- ：生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によると考えられる場合
- ：生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- ：生物の生息・生育状況に、大きな変化が見られなかった場合
- ？：生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合

表 6.3-21(4) 流入河川の生物の変化に対するダムによる影響の検証結果（両生類）

検討項目		生物の変化の状況	ダムの存在・供用に伴う影響	ダムの存在・供用以外の影響	検証結果	
生息状況の変化	a) 渓流環境を利用する種	平成 17 年度にヒダサンショウウオ、ナガレヒキガエル、カジカガエルの 3 種を確認した。	-	-	渓流性の種を確認したが、流入河川における調査は平成 17 年度に初めて実施したため、変化の検証はできなかった。	？

注)検証結果

- ：生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によると考えられる場合
- ：生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によると考えられる場合
- ：生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- ：生物の生息・生育状況に、大きな変化が見られなかった場合
- ？：生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合

表 6.3-21(5) 流入河川の生物の変化に対するダムによる影響の検証結果（陸上昆虫類）

検討項目		生物の変化の状況	ダムの存在・供用に伴う影響	ダムの存在・供用以外の影響	検証結果
生息状況の変化	a) 河原環境を利用する種	河川環境を利用する種として抽出した 8 種のうち、平成 4～5 年度に 8 種、平成 11 年度に 3 種を確認したが、平成 16 年度には確認がなかった。	-	公園整備による河原環境の存在	平成 16 年度に河原環境を利用する種が確認されておらず、変化に対する影響要因が不明である。
	b) 外来種	平成 4～5 年度にニッポンモンキジガバチ、セイヨウミツバチ、オオタバコガを、平成 11 年度にセイヨウミツバチを、平成 16 年度にブタクサハムシ、オオタバコガを確認した。	-	人の利用の増加 外来種の分布拡大	人の利用の増加や外来種の分布拡大などが影響したものと考えられる。

注)検証結果

- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- : 生物の生息・生育状況に、大きな変化が見られなかった場合
- ? : 生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合

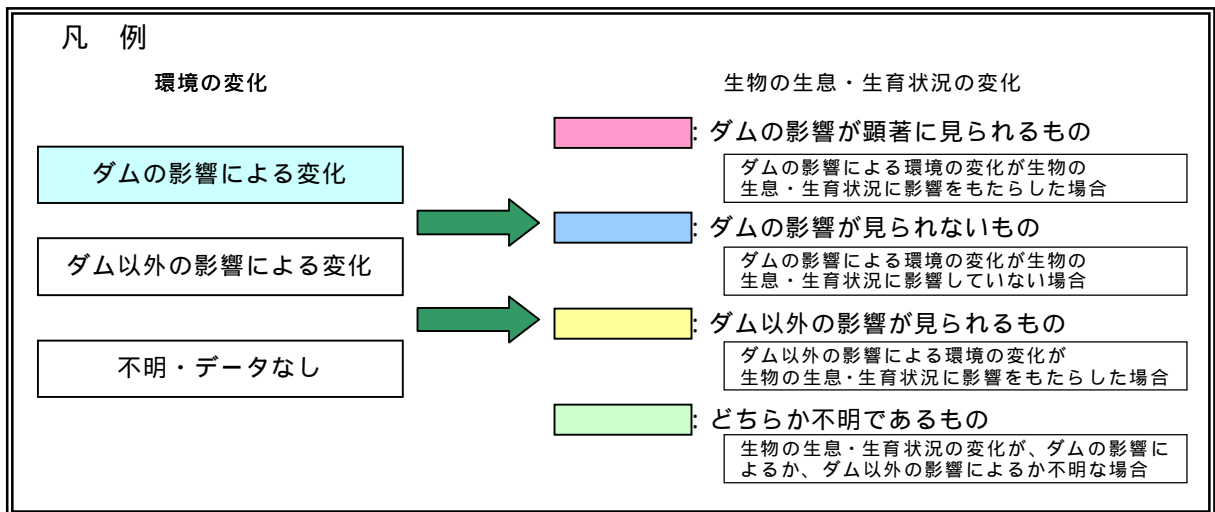
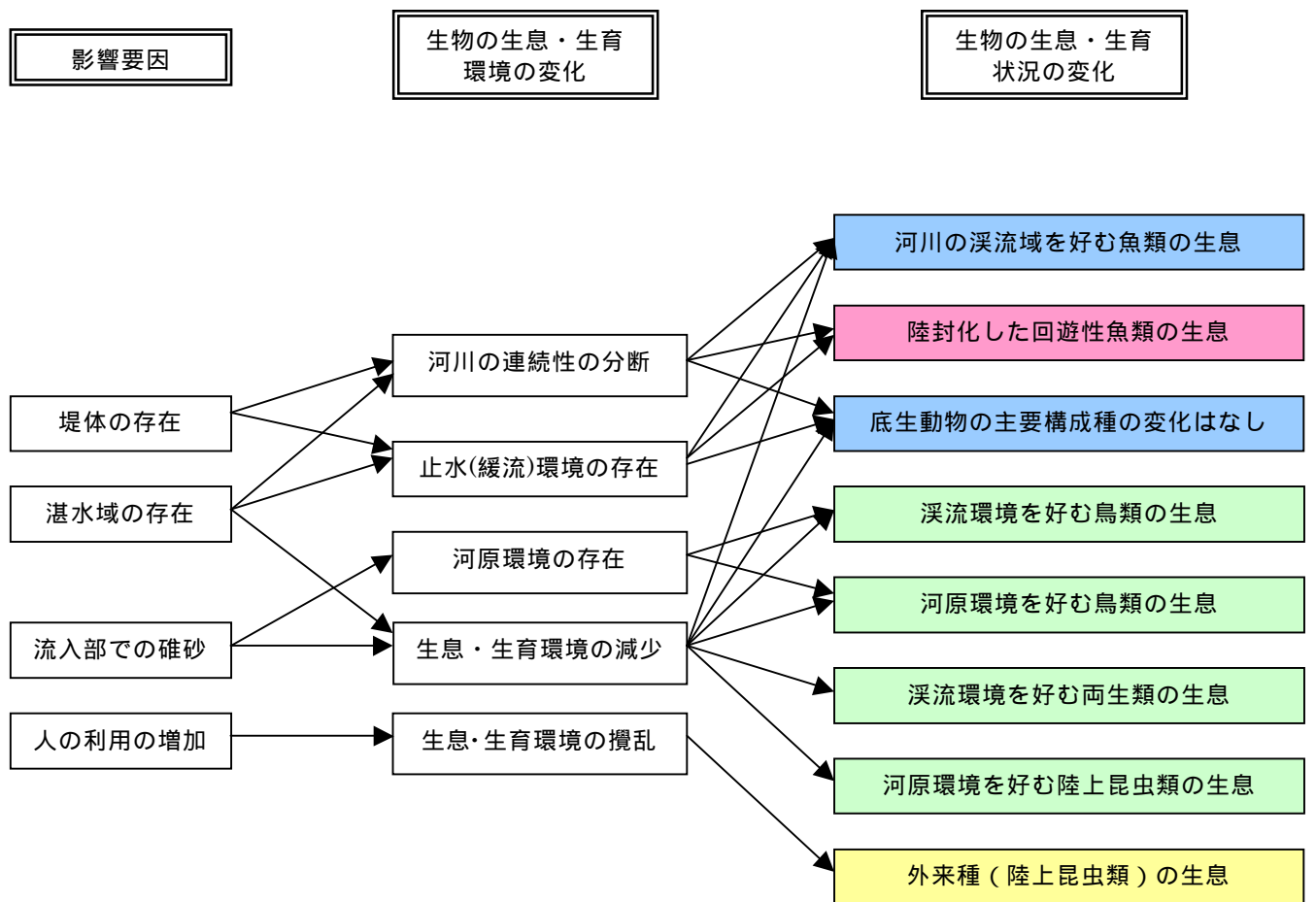


図 6.3-28 流入河川の生物の変化に対する影響の検証結果

### 6.3.3 下流河川における変化の検証

ダムが存在・供用により、下流河川において環境条件の変化が起こり、下流河川を利用する様々な生物の生息・生育状況に変化を引き起こすと想定される。

そのため、ここでは真名川下流河川における環境条件の変化及びそれに引き起こされる生物の生息・生育状況の変化を図 6.3-29 のように想定し、真名川ダムの存在・供用により下流河川の生物の生息・生育状況が変化しているかどうかの検証を以下の手順で行った。

#### (1) 環境条件の変化の把握

- ・下流河川の流況の平滑化
- ・下流河川の水質の変化
- ・下流河川における魚類の放流状況

#### (2) 生物の生息・生育状況の変化の把握

- ・魚類の生息状況（砂礫を好む魚類、回遊性魚類、外来種）の変化
- ・底生動物の生息状況（主要構成種の流入河川との比較）
- ・両生類・爬虫類・哺乳類の生息状況（溪流環境利用種）の変化
- ・陸上昆虫類等の生息状況（河原環境利用種）の変化

#### (3) ダムによる影響の検証

真名川ダムの生物の生息・生育状況の変化について、環境条件の変化やダム以外の要因等と照らし合わせて検討し、ダムによる影響を検証した。



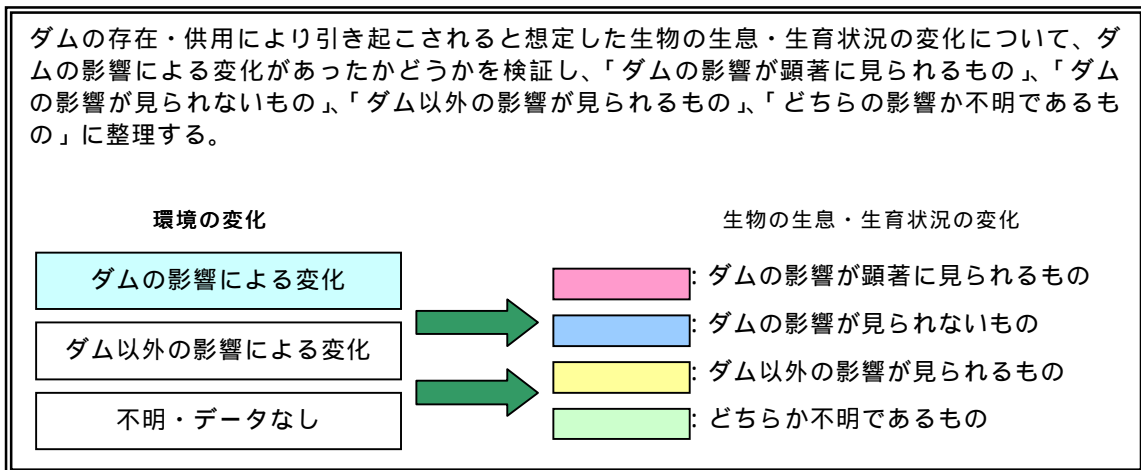
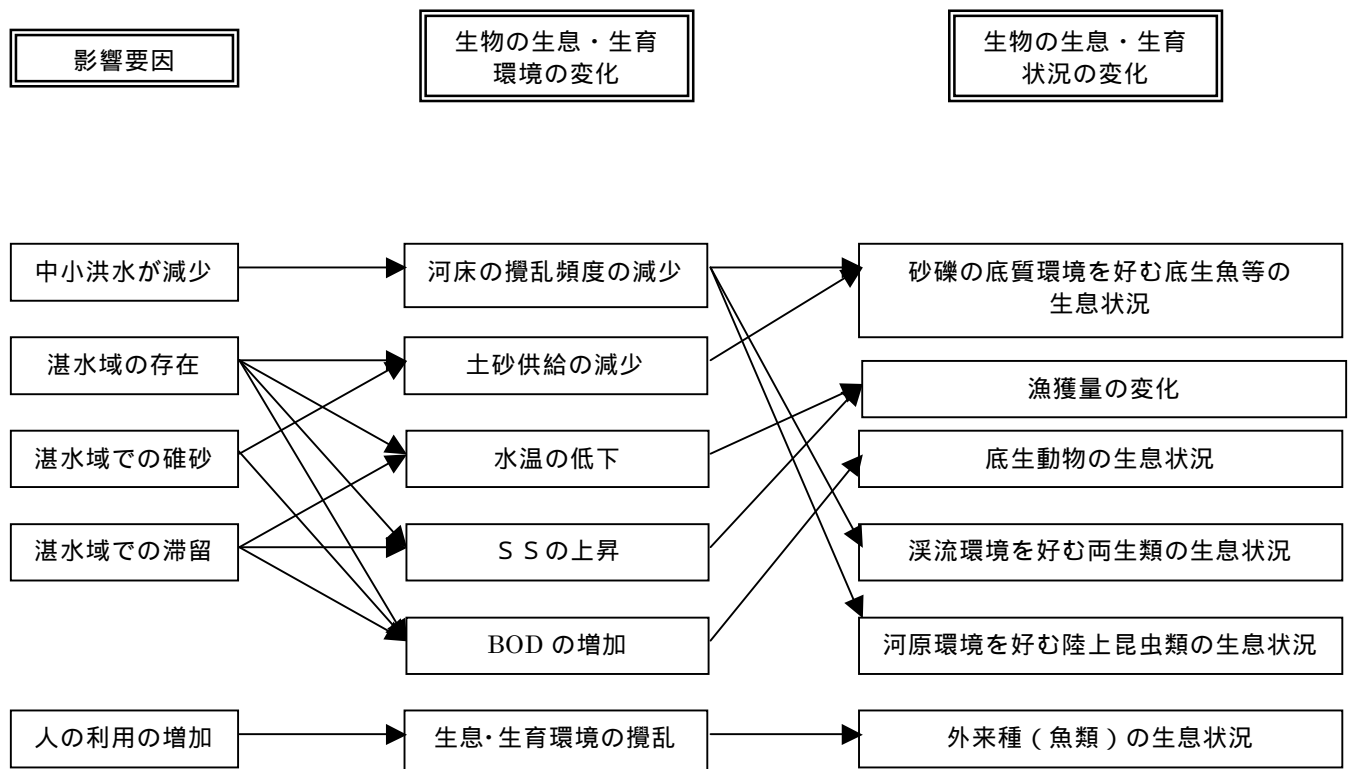


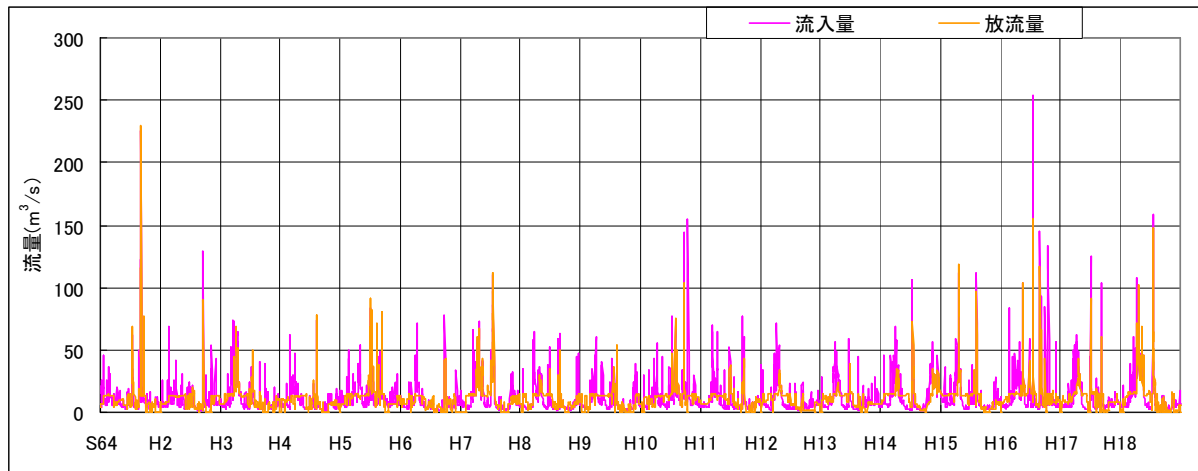
図 6.3-29 下流河川で想定される環境への影響要因と生物の生息・生育環境の変化

(1)環境条件の変化

1)流量の変化

生物の調査を開始した前年から平成 18 年にかけて、真名川ダムの流量（流入量・放流量）の推移をグラフ化したものを図 6.3-30 に示す。

図に示すとおり、真名川ダムの運用に伴って、流入量に比べて放流量の変動幅は小さくなっている。



出典：「5.水質」より抜粋

図 6.3-30 真名川ダムの流量（流入量・放流量）の推移

## 2) 水質の変化

下流河川（五条方）、流入河川（雲川・笹生川）の水質の変化を図 6.3-31 に示す。

水温、DO、BOD75%、SS、クロロフィル a については、経年的な増減の傾向は認められない結果となっている。出水などの影響を受けた場合以外では、環境基準を満たす良好な水質となっている。項目ごとの概要は以下のとおりである。

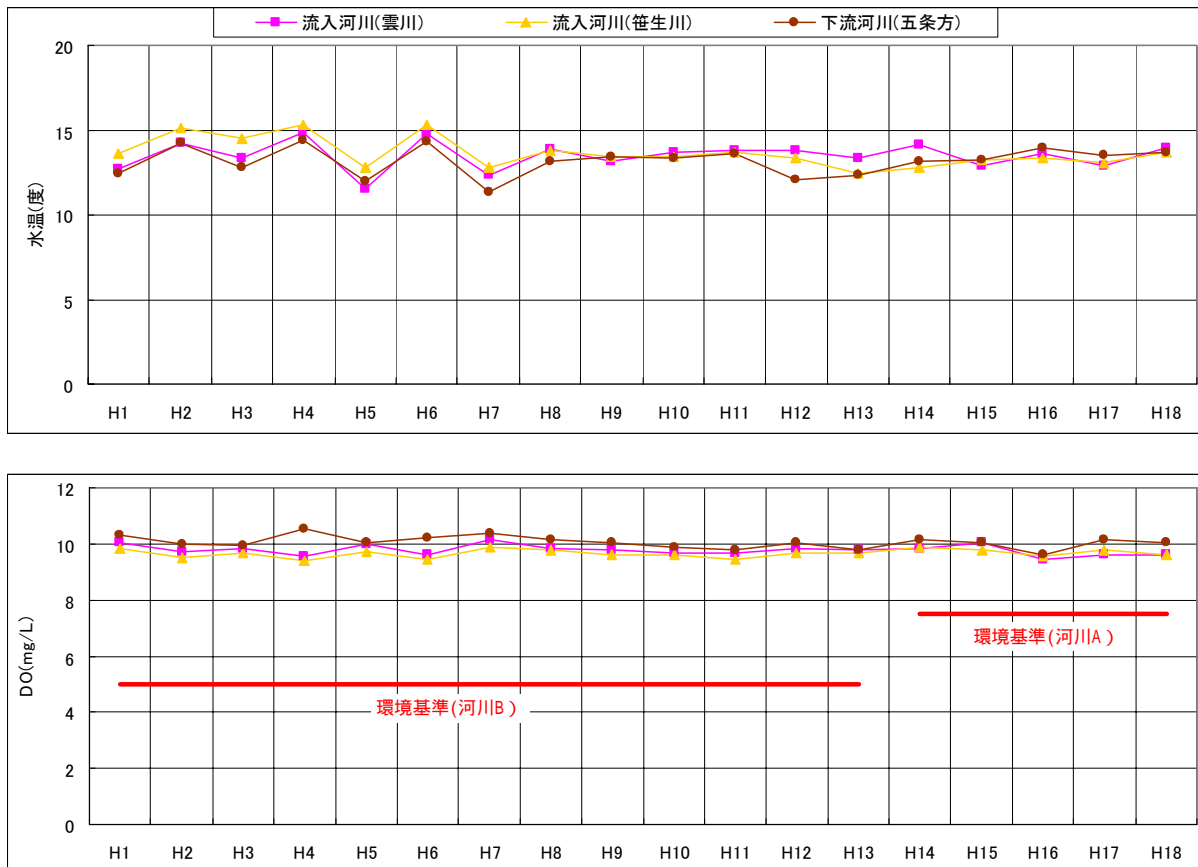
水温の平均値は、五条方で 13.1、雲川で 13.4、笹生川で 14.0 で、下流河川が若干低いことがある。

DO の平均値は、五条方で 10.1mg/l、雲川で 9.8mg/l、笹生川で 9.7mg/l で、概ね同程度の値で推移している。

BOD75%の平均値は、各地点とも 0.8mg/l で、概ね同程度の値で推移している。

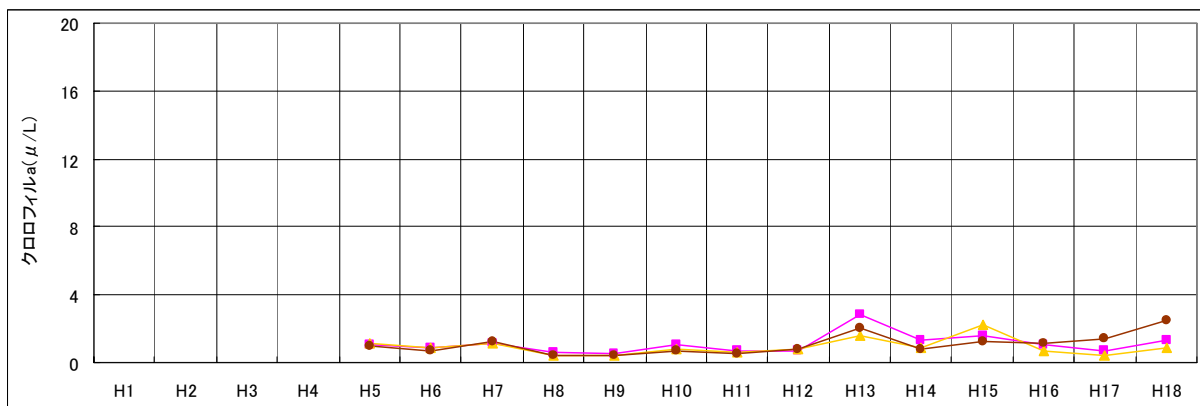
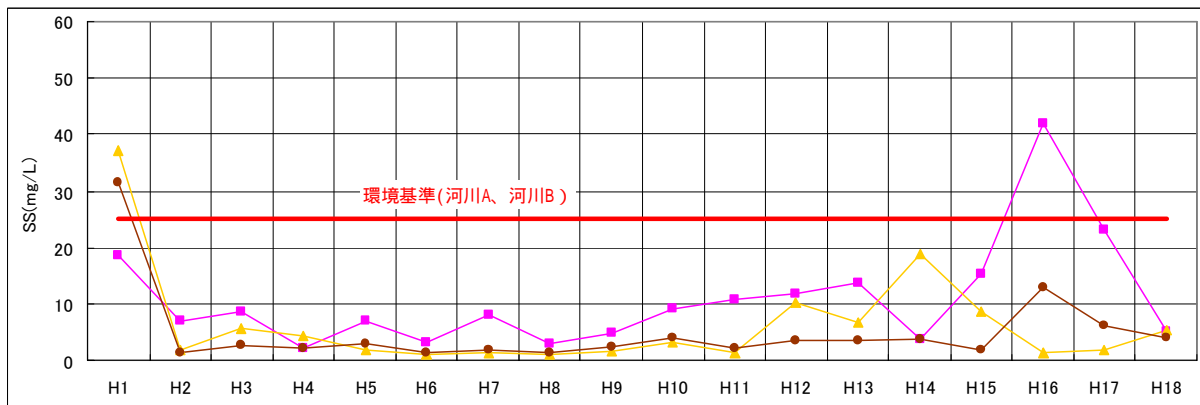
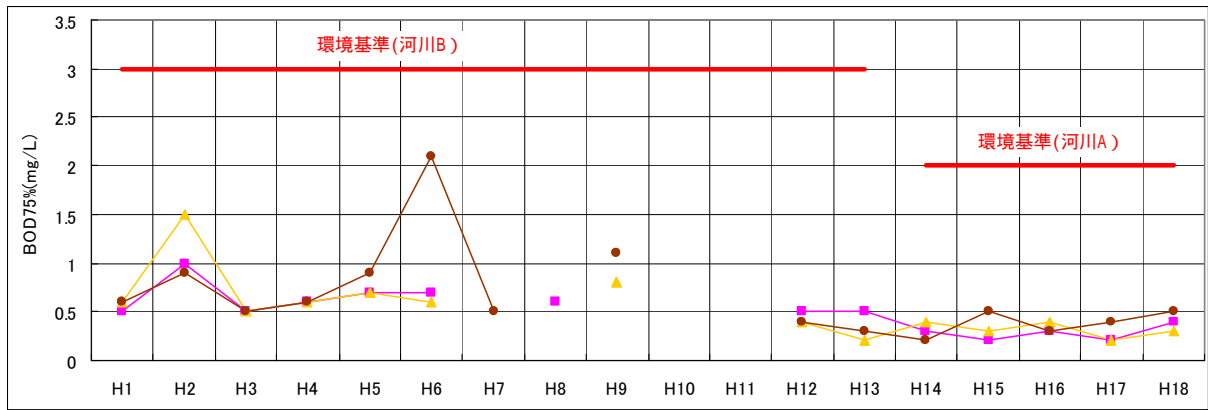
SS の平均値は、五条方で 4.4mg/l、雲川で 11.5mg/l、笹生川で 5.7mg/l で、出水（平成 16 年の福井豪雨など）の影響による数値のばらつきがみられる。

クロロフィル a の平均値は、五条方で 1.1 $\mu$ g / l、雲川で 1.1 $\mu$ g / l、笹生川で 1.0 $\mu$ g / l で、概ね同程度の値で推移している。



出典：「5.水質」より抜粋

図 6.3-31(1) 水質の変化



出典：「5.水質」より抜粋

図 6.3-31(2) 水質の変化

### 3) 下流河川における魚類の放流状況

下流河川では、大野市漁業協同組合によって昭和 61 年～平成 18 年の間に、コイ、フナ、アユ、イワナ、ニジマス、ヤマメ、アマゴが放流されている。

(2)生物の生息・生育状況の変化の把握

1)魚類

下流河川において確認した魚類の確認状況を表 6.3-22～23 に示す。

魚類は、平成 2 年度から平成 13 年度の間に行った 3 回の国勢調査及び国勢調査以外の調査で 17 種（1 回当りの確認種数は 7～14 種）を確認した。このうち、真名川頭首工下流では 7 種、ダム直下の頭首工上流では 13 種（1 回当りの確認種数は 8～12 種）を確認した。優占種は頭首工下流はヤマメ、頭首工上流はアブラハヤであった。アブラハヤ、タカハヤ、ウグイ、ニジマス、ヤマメ、アマゴ、カジカの計 7 種は、頭首工上流で継続して確認している。

表 6.3-22 下流河川（真名川頭首工下流）における魚類の確認状況

No	確認種		遊泳性	生活型	産卵場所	調査年度					合計
	科名	種名				平成2年 (1990)	平成8年 (1996)	平成9年 (1997)	平成10年 (1998)	平成13年 (2001)	
1	コイ科	オイカワ	遊泳魚	純淡水魚	砂礫	5					5
2		アブラハヤ	遊泳魚	純淡水魚	砂礫	1					1
3		ウグイ	遊泳魚	純淡水魚	砂礫	43					43
4	アユ科	アユ	遊泳魚	両測回遊魚	砂礫	12					12
5	サケ科	ヤマメ	遊泳魚	純淡水魚	砂礫	88					88
6		アマゴ	遊泳魚	遡河回遊魚	砂礫	10					10
7	カジカ科	カジカ	底生魚	純淡水魚	石下	1					1
	4科	7種	種数合計			7	実施せず	実施せず	実施せず	実施せず	7
			個体数合計			160					160

表 6.3-23 下流河川（真名川頭首工上流）における魚類の確認状況

No	確認種		遊泳性	生活型	産卵場所	調査年度					合計
	科名	種名				平成2年 (1990)	平成8年 (1996)	平成9年 (1997)	平成10年 (1998)	平成13年 (2001)	
1	コイ科	アブラハヤ	遊泳魚	純淡水魚	砂礫		279	471	317	178	1245
2		タカハヤ	遊泳魚	純淡水魚	砂礫		7	54	48	21	130
3		ウグイ	遊泳魚	純淡水魚	砂礫		60	166	205	150	581
4	ドジョウ科	アジメドジョウ	底生魚	純淡水魚	礫中			1		1	2
5	アカザ科	アカザ	底生魚	純淡水魚	石下		4			1	5
6	キュウリウオ科	ワカサギ	遊泳魚	遡河回遊魚	砂礫、水草など				1		1
7	アユ科	アユ	遊泳魚	両測回遊魚	砂礫					4	4
8	サケ科	イワナ	遊泳魚	純淡水魚	礫			8	8	1	17
9		ニジマス	遊泳魚	純淡水魚	礫		2	2	2	2	8
10		ヤマメ	遊泳魚	純淡水魚	砂礫		6	7	18	6	37
11		アマゴ	遊泳魚	遡河回遊魚	砂礫		14	17	113	10	154
12	カジカ科	カジカ	底生魚	純淡水魚	石下		1	4	3	3	11
13	ハゼ科	トウヨシノボリ	底生魚	両測回遊魚	石下			3	8	2	13
	8科	13種	種数合計			実施せず	8	10	10	12	13
			個体数合計				373	733	723	379	2208

注 1)表中の数値は年間の合計捕獲個体数を示す。

注 2)調査の概要は以下のとおりである。

平成 2 年度：調査回数 2 回（7、10 月） 調査地点 1 地点（St.1 真名川頭首工下流）

平成 8 年度：調査回数 2 回（5、10 月） 調査地点 1 地点（St.2）

平成 9 年度：調査回数 3 回（5、8、10 月） 調査地点 2 地点（St.3、St.4）

平成 10 年度：調査回数 3 回（6、8、10 月） 調査地点 2 地点（St.3、St.4）

平成 13 年度：調査回数 2 回（5、10 月） 調査地点 1 地点（St.3）

出典：6-1 「平成 2 年度水生生物（魚貝類）調査作業報告書」

6-12 「平成 8 年度ダム自然環境調査業務報告書（魚介類）」

6-33 「平成 9 年度ダム自然環境調査業務報告書（魚介類）」（国勢調査以外の調査）

6-34 「平成 10 年度ダム自然環境調査業務報告書（魚介類）」（国勢調査以外の調査）

6-19 「平成 13 年度ダム自然環境調査業務報告書（魚介類）」

6-66 「日本の淡水魚」

(a) 砂礫の底質環境を好む底生魚等の生息状況の変化

産卵場として礫底を利用するアブラハヤ、タカハヤ、ウグイ、ニジマス、ヤマメ、アマゴ、石下に産卵するカジカなどを継続して確認した。また、捕獲個体数は少ないが、礫中に産卵するアジメドジョウを平成9年と平成13年に、石下に産卵するアカザを平成8年と平成13年に確認した。アジメドジョウは水の澄んだ上・中流域の礫間に生息する種で、流入河川（真名川・笹生川・雲川）でも確認している。アカザは下流河川だけで確認している。

全体的にみると種組成に大きな変化はなく、砂礫の底質環境を好む底生魚等の生息状況に大きな変化はみられないと考えられる。また、アブラハヤやウグイの個体数が多く、この傾向は流入河川（真名川・笹生川・雲川）でもほぼ同様であり（図6.3-32、33参照）、下流河川と流入河川に大きな傾向の違いはみられなかった。

(b) 外来種の生育状況

外来種は、ニジマスを平成8年度より継続して確認している。

真名川ダム下流河川では、ニジマスは平成5年に漁協による0.2千尾/年の放流が行われており、確認個体は放流によるものと考えられる。

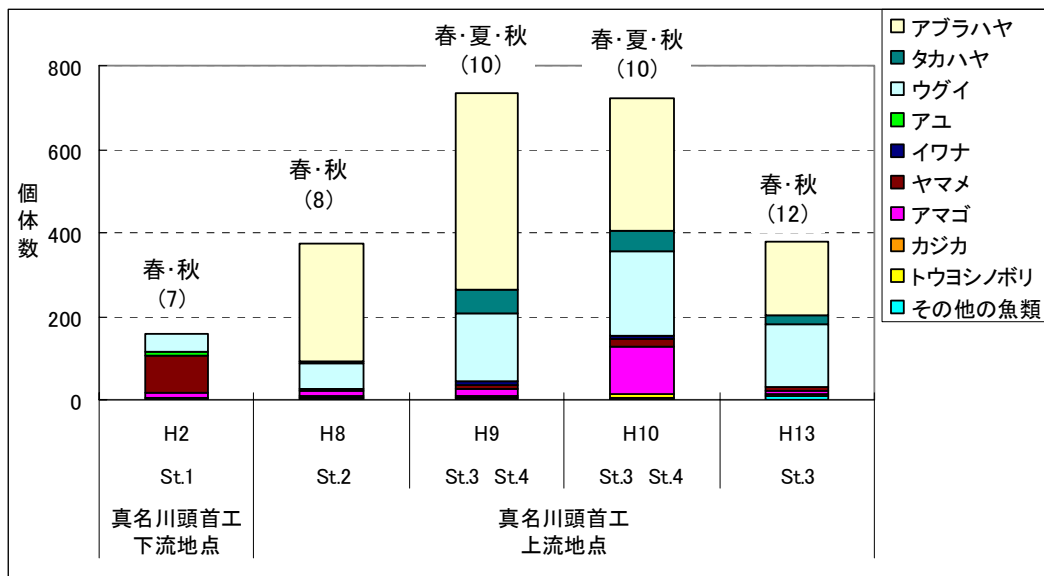


図 6.3-32 下流河川における魚類の捕獲個体数の推移

注 1) 図中の数値は年間の合計捕獲個体数を示す。なお、( ) 内は種数を示す。

注 2) 調査の概要は以下のとおりである。

平成2年度：調査回数2回(7,10月) 調査地点1地点(St.1 真名川頭首工下流)

平成8年度：調査回数2回(5,10月) 調査地点1地点(St.2)

平成9年度：調査回数3回(5,8,10月) 調査地点2地点(St.3,St.4)

平成10年度：調査回数3回(6,8,10月) 調査地点2地点(St.3,St.4)

平成13年度：調査回数2回(5,10月) 調査地点1地点(St.3)

出典：6-1 「平成2年度水生生物(魚貝類)調査作業報告書」

6-12 「平成8年度ダム自然環境調査業務報告書(魚介類)」

6-33 「平成9年度ダム自然環境調査業務報告書(魚介類)」(国勢調査以外の調査)

6-34 「平成10年度ダム自然環境調査業務報告書(魚介類)」(国勢調査以外の調査)

6-19 「平成13年度ダム自然環境調査業務報告書(魚介類)」

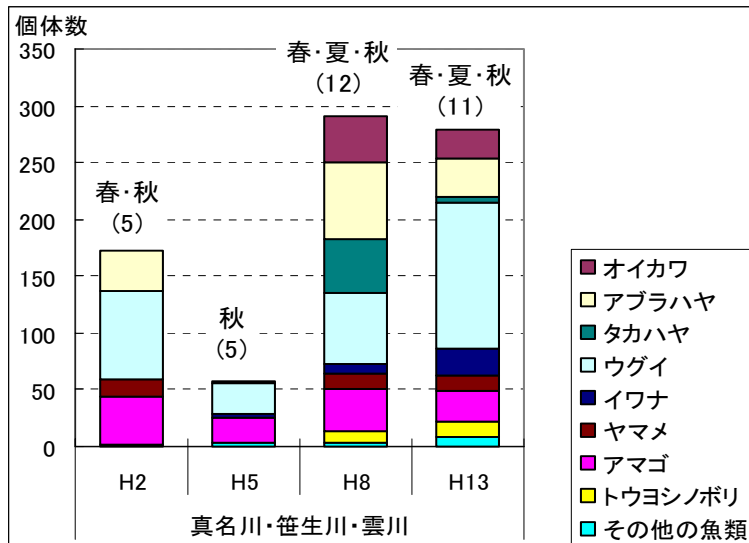


図 6.3-33 流入河川（真名川・笹生川・雲川）における魚類の捕獲個体数の推移

注 1) 図中の数値は年間の合計捕獲個体数を示す。なお、( ) 内は種数を示す。

注 2) 調査の概要は以下のとおりである。

平成 2 年度：調査回数 2 回（6、10 月） 調査地点 1 地点（St.24）

平成 5 年度：調査回数 1 回（9 月） 調査地点 1 地点（St.20）

平成 8 年度：調査回数 3 回（5、8、10 月） 調査地点 3 地点（St.21、St.26、St.28）

平成 13 年度：調査回数 3 回（5、7、9～10 月） 調査地点 3 地点（St.22、St.27、St.29）

出典：6-1 「平成 2 年度水生生物（魚貝類）調査作業報告書」

6-7 「平成 5 年度ダム自然環境調査報告書（魚介類）」

6-12 「平成 8 年度ダム自然環境調査業務報告書（魚介類）」

6-19 「平成 13 年度ダム自然環境調査業務報告書（魚介類）」

### (c) 漁獲量の変化

ダムの下流河川においては、冷水放流や濁水放流の魚類への影響がしばしば問題となることから、国勢調査の結果及び下流河川を漁場とする大野市漁業協同組合の漁獲量から、魚類の生息状況とダムによる冷水放流及び濁水放流の関連を推測することとする。

下流河川においては、前項の表 6.3-22 及び表 6.3-23 に示したとおり、平成 2 年度から平成 13 年度の間は国勢調査を 3 回、国勢調査以外の調査を 2 回行い、その結果から種構成の傾向に大きな変化がないことを確認した。

また、平成 8 年度と 13 年度について、冷水環境を好むサケ科魚類の捕獲個体数をみると、イワナについては平成 8 年度は捕獲個体なし、平成 13 年度は 1 個体、ヤマメについては平成 8 年度は 6 個体、平成 13 年度も 6 個体、アマゴについては平成 8 年度は 14 個体、平成 13 年度は 10 個体であった。

一方、下流河川と流入河川の水温差をみると、図 6.3-34 に示すとおり、平成 8 年は  $-2.3 \sim 0.7$  で推移し、下流河川の方が水温が低かったのは 4 月、5 月、7 月、8 月、10 月、12 月の 6 回であった。また、平成 13 年は、 $-7.5 \sim 2.4$  で推移し、下流河川の方が水温が低かったのは 6 月、7 月、8 月の 3 回であった。

また、下流河川の SS 濃度をみると、図 6.3-35 に示すとおり、平成 8 年及び 13 年ともに水産用水基準の 25mg/L 以下であった。

以上より、平成 8 年度及び 13 年度の調査結果からは、魚類の生息状況への冷水放流及び濁水放流の影響は不明であった。

次に、下流河川を漁場とする大野市漁業協同組合の漁獲量から、魚類の生息状況とダムによる冷水放流及び濁水放流の関連を推測することとする。

下流河川においては、アユ、アマゴ、イワナ、ヤマメ、コイ及びフナについて漁が行われており、その漁期は、アユについては 7 月～11 月の約 5 ヶ月間、その他の魚類については 2 月～11 月の 10 ヶ月間である。

また、平成 15 年から 18 年の漁協による漁獲量は、図 6.3-36 に示すとおり、アユについては、平成 15 年は 10,500kg であったが、平成 16 年は 7,000kg、平成 17 年 7,500kg に減少し、平成 18 年には 21,000kg に増加した。なお、アユの放流量については、2,500kg～3,550kg で推移していた。

一方、平成 15 年～18 年の流入河川と下流河川における水温差をみると、図 6.3-34 に示すとおり、アユの漁獲量が減少した平成 16 年は  $-1.6 \sim 2.75$  で推移し、下流河川の方が水温が低かったのは 4 月、7 月、9 月の 3 回であり、平成 17 年は  $-3.2 \sim 3.15$  で推移し、下流河川の方が水温が低かったのは 3 月、5 月、6 月、8 月の 4 回であった。また、平成 15 年は  $-2.1 \sim 1.4$  で推移し、下流河川の方が水温が低かったのは 6 月、7 月、8 月、11 月の 4 回であり、平成 18 年は  $-3.4 \sim 2.95$  で推移し、下流河川の方が水温が低かったのは 3 月、6 月、7 月、10 月の 4 回であった。

また、平成 15 年～18 年の下流河川の SS 濃度をみると、図 6.3-35 に示すとおり、アユの漁獲量が減少した平成 16 年及び平成 17 年において、水産用水基準の 25mg/L を超過した月が 4 回あり、平成 16 年 9 月及び 10 月が 29.6 mg/L、11 月が 41.8mg/L、平成 17 年 7 月が 25 mg/L であった。これらの 4 回は、いずれもダム湖内において濁水長期化



現象が発生している期間にあたる。また、平成 16 年には 7 月に福井豪雨、8 月に台風 16 号、10 月に台風 23 号が発生し、平成 17 年には 9 月に台風 14 号が発生した。

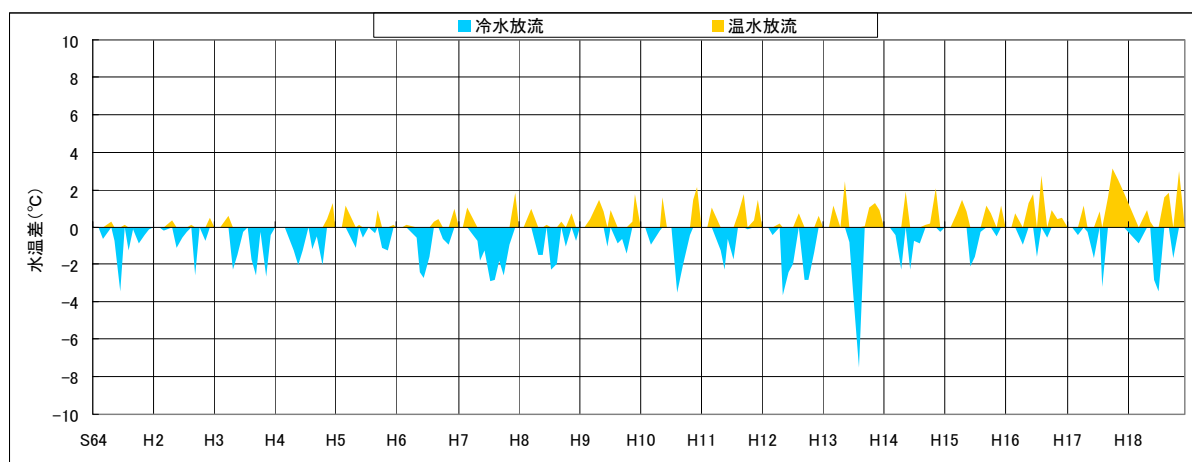
なお、平成 15 年及び 18 年の下流河川の SS 濃度は、水産用水基準の 25mg/L 以下であった。

以上より、平成 15 年度～18 年度におけるアユの漁獲量については、冷水放流の影響は不明であるが、濁水放流の影響があった可能性があると考えられる。

また、アユ以外の漁獲量については、アマゴ、イワナ及びヤマメは、平成 15 年から経年的に増加しており、フナについては、平成 16 年に減少したが、平成 17 年には放流が行われ漁獲量も増加し、平成 15 年以降は放流されていないコイについては、平成 16 年以降は漁獲量が 0 であった。

なお、アマゴ、イワナ及びヤマメの放流量については、アマゴは 150～200kg、イワナは 130～200kg、ヤマメは 50～200kg で推移していた。

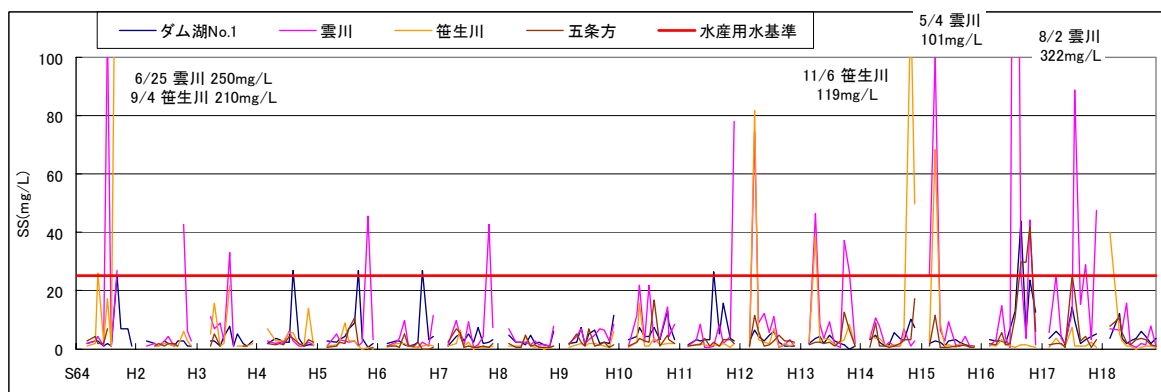
以上より、アユ以外の漁獲量については、冷水放流の影響は不明であり、平成 16 年度及び平成 17 年度の濁水放流の影響は認められなかった。



注) 流入河川の水温は、雲川と笹生川の水温の平均値を示し、下流河川の水温は五条方における水温を示す。

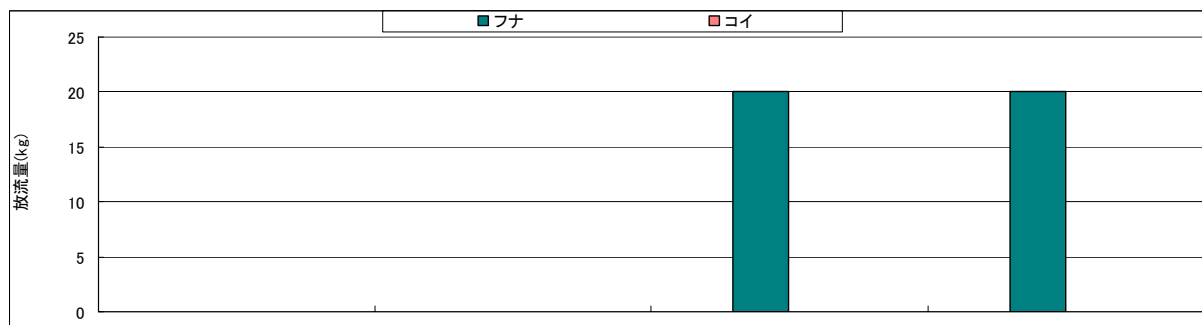
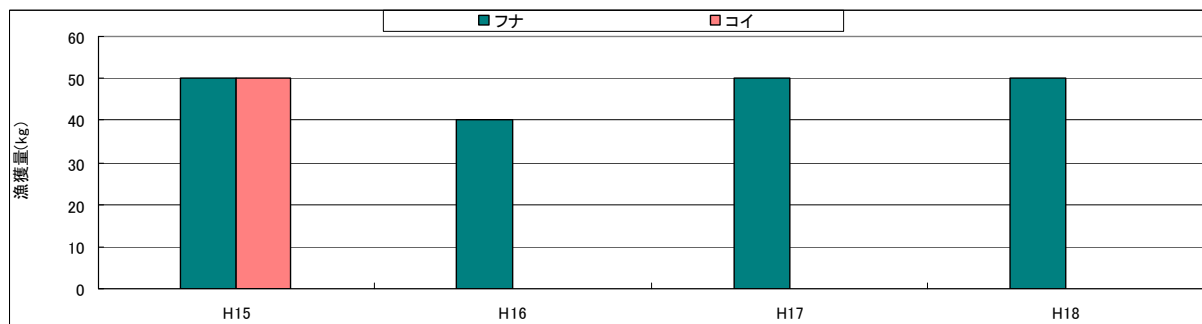
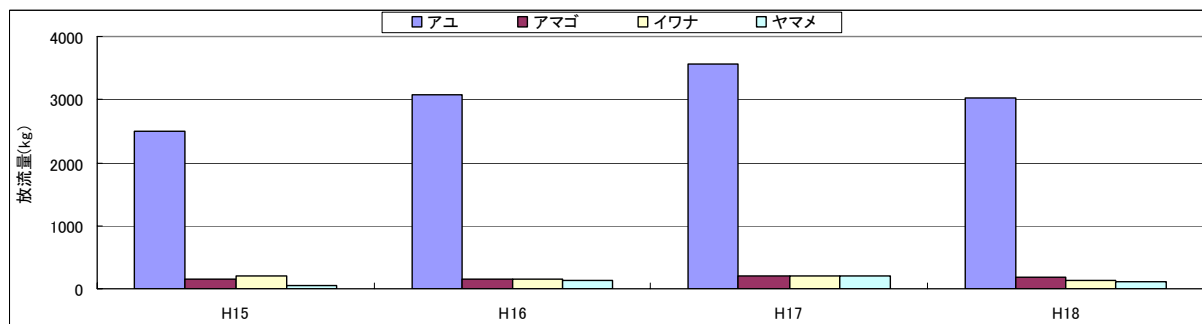
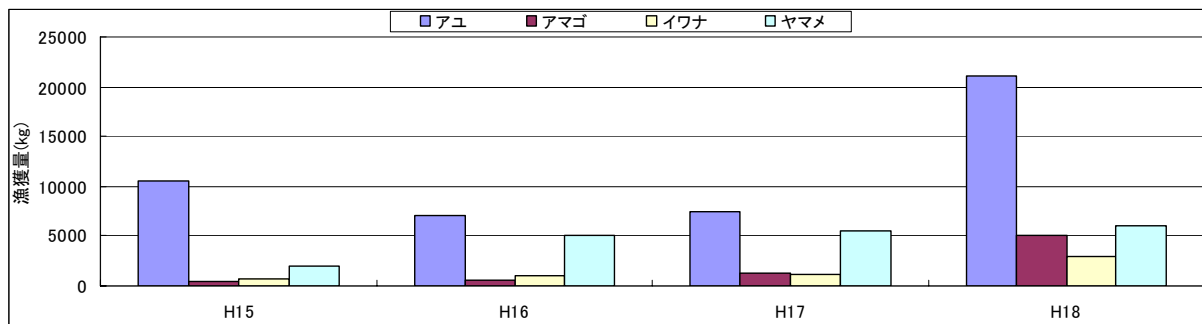
出典)「5.水質」より抜粋

図 6.3-34 流入河川（雲川及び笹生川）と下流河川（五条方）の水温差



出典)「5.水質」より抜粋

図 6.3-35 下流河川（五条方）における SS 濃度



注) 漁獲量及び放流量は、大野市漁業協同組合の漁場の全区域を対象としたものである。

出典：6-49「大野市漁業協同組合聞き取り結果」

図 6.3-36 大野市漁業協同組合の漁獲量及び放流量（平成 15 年～18 年）

## 2)底生動物

真名川ダム下流では、平成 14 年度までの調査においては調査地点を設定していなかったが、「平成 17 年度河川水辺の国勢調査全体計画の策定（真名川ダム・九頭竜ダム）報告書」において、今後の調査において下流河川に調査地点を新規設定することを計画した。この計画に基づき、「平成 18 年度ダム自然環境調査」において下流河川での底生動物の調査を実施した。今後も調査を継続し、ダム下流河川における河川環境を適切に把握することが重要である。

下流河川において確認された底生動物の確認状況を表 6.3-24 に示す。

底生動物は、平成 18 年度の国勢調査で 20 目 61 科 141 種を確認した。

確認種にはカゲロウ目、トビケラ目、ハエ目などの昆虫綱に属する種が多く、全体の約 9 割を占めた。サホコカゲロウ、アカマダラカゲロウ、ウルマーシマトビケラなどの河川に広く生息する種が多く、これらの種には流入河川との共通種も多くみられる。その一方、下流河川ではカワゲラ目の確認種数が少ないなど、流入河川との違いもみられる。流入河川の上流にもダムが存在するが、下流河川はダム直下に位置することから、よりダムの影響を受けているものと考えられる。

表 6.3-24(1) 下流河川における底生動物の確認状況

No.	確認種		調査年度 平成18年 (2006)	摂食機能群	生活型	
	科名	種名				
1	タンスイカイメン科	ヨウカイメン	100	捕食者	固着型	
2	ヒドラ科	ヒドラ科の一種	158	捕食者	固着型	
3	サンカクアタマウスムシ科	ナミウスムシ	321	堆積物収集者	匍匐型	
4	ヒラタウスムシ科	ホソウスムシ属の一種	221	捕食者	匍匐型	
5	ハリヒモムシ科	ハリヒモムシ属の一種	20	捕食者	匍匐型	
6	マメシジミ科	マメシジミ属の一種	8	濾過食者	掘潜型	
7	オヨギミズ科	オヨギミズ属の一種	18	堆積物収集者	遊泳型	
-	-	オヨギミズ科の一種	112	堆積物収集者	遊泳型	
8	イトミミズ科	ユリミミズ属の一種	2	堆積物収集者	掘潜型	
9		ミツゲミズミミズ	20	堆積物収集者	匍匐型	
-		ミズミミズ属の一種	406	堆積物収集者	匍匐型	
10		クロオビミズミミズ	21	不明	不明	
11		ヨコレミズミミズ属の一種	4	堆積物収集者	匍匐型	
-		イトミミズ亜科の一種	3	堆積物収集者	掘潜型	
12	ナガレダニ科	ナガレダニ科の一種	15	不明	不明	
13	ケイリュウダニ科	ケイリュウダニ科の一種	27	不明	不明	
14	オヨギダニ科	オヨギダニ科の一種	8	不明	不明	
15	アコナガヨコエビ科	ヤマトヨコエビ	1312	剥ぎ取り食者・堆積物収集者	匍匐型	
16	ミズムシ科	ミズムシ	157	堆積物収集者	匍匐型	
-	-	ミズムシ属の一種	17	剥ぎ取り食者・堆積物収集者	匍匐型	
17	ヌマエビ科	ヌマエビ	5	堆積物収集者	匍匐型	
18	サワガニ科	サワガニ	1	堆積物収集者	匍匐型	
19	ヒメフタオカゲロウ科	ヒメフタオカゲロウ属の一種	4	剥ぎ取り食者・堆積物収集者	遊泳型	
20	コカゲロウ科	ミジカオフトバコカゲロウ	77	剥ぎ取り食者・堆積物収集者	遊泳型	
21		フタバコカゲロウ	259	剥ぎ取り食者	遊泳型	
22		ヨシノコカゲロウ	42	剥ぎ取り食者	遊泳型	
23		サホコカゲロウ	450	剥ぎ取り食者・堆積物収集者	遊泳型	
24		フタモンコカゲロウ	459	剥ぎ取り食者・堆積物収集者	遊泳型	
25		シロハラコカゲロウ	299	剥ぎ取り食者	遊泳型	
26		Fコカゲロウ	2	剥ぎ取り食者・堆積物収集者	遊泳型	
27		Jコカゲロウ	3	剥ぎ取り食者・堆積物収集者	遊泳型	
-		コカゲロウ属の一種	74	剥ぎ取り食者・堆積物収集者	遊泳型	
28		フトヒコカゲロウ	2	剥ぎ取り食者・堆積物収集者	遊泳型	
29		Dコカゲロウ	1	剥ぎ取り食者・堆積物収集者	遊泳型	
30		Iコカゲロウ	301	剥ぎ取り食者・堆積物収集者	遊泳型	
31		Eコカゲロウ	33	剥ぎ取り食者・堆積物収集者	遊泳型	
32		Hコカゲロウ	76	剥ぎ取り食者・堆積物収集者	遊泳型	
33		フタバカゲロウ属の一種	28	剥ぎ取り食者・堆積物収集者	遊泳型	
34		ヒメウスバコカゲロウ属の一種	8	剥ぎ取り食者・堆積物収集者	遊泳型	
35		ヒラタカゲロウ科	オニヒメタニガワカゲロウ	2	剥ぎ取り食者	匍匐型
36			シロタニガワカゲロウ	151	剥ぎ取り食者	匍匐型
-			タニガワカゲロウ属の一種	621	剥ぎ取り食者	匍匐型
37			エルモンヒラタカゲロウ	29	剥ぎ取り食者	匍匐型
-	ヒラタカゲロウ属の一種		13	剥ぎ取り食者	匍匐型	
38	キハダヒラタカゲロウ属の一種	18	剥ぎ取り食者	匍匐型		
39	サツキヒメヒラタカゲロウ	1	剥ぎ取り食者	匍匐型		
40	チラカゲロウ科	チラカゲロウ	82	濾過食者	遊泳型	
41	トビロカゲロウ科	ウエストントビロカゲロウ	24	堆積物収集者・剥ぎ取り食者	匍匐型	
-		トビロカゲロウ属の一種	3	堆積物収集者・剥ぎ取り食者	匍匐型	
42	モンカゲロウ科	モンカゲロウ	100	濾過食者	掘潜型	
43	マダラカゲロウ科	トウヨウマダラカゲロウ属の一種	46	堆積物収集者・剥ぎ取り食者	匍匐型	
44		ヨシノマダラカゲロウ	2	剥ぎ取り食者・捕食者	匍匐型	
45		クシゲマダラカゲロウ	4	堆積物収集者	匍匐型	
-		マダラカゲロウ属の一種	33	堆積物収集者	匍匐型	
46		エラブタマダラカゲロウ	190	堆積物収集者	匍匐型	
47		アカマダラカゲロウ	1736	捕食者	匍匐型	
48		ヒメシロカゲロウ科	ヒメシロカゲロウ属の一種	511	堆積物収集者	匍匐型
49		カワトンボ科	ミヤマカワトンボ	8	捕食者	匍匐型
50	サナエトンボ科	コオニヤンマ	22	捕食者	掘潜型	
51	オニヤンマ科	オニヤンマ	2	捕食者	匍匐型	
52	エソトンボ科	コヤマトンボ	22	捕食者	匍匐型	
53	ホソカワゲラ科	ホソカワゲラ科の一種	594	破砕食者	掘潜型	
54	オナシカワゲラ科	フサオナシカワゲラ属の一種	1	破砕食者	匍匐型	
55		クロオナシカワゲラ	3	破砕食者	匍匐型	
56		オナシカワゲラ属の一種	36	破砕食者	匍匐型	
57	カワゲラ科	ヒメナガカワゲラ属の一種	19	捕食者	匍匐型	
58		オオヤマカワゲラ	4	捕食者	匍匐型	
-		オオヤマカワゲラ属の一種	14	捕食者	匍匐型	
59		カワゲラ	32	捕食者	匍匐型	
60		ウエノカワゲラ	1	捕食者	匍匐型	
-		カワゲラ属の一種	12	捕食者	匍匐型	
61		フタツメカワゲラ属の一種	278	捕食者	匍匐型	
-	カワゲラ科の一種	12	捕食者	匍匐型		
62	アメンボ科	アメンボ	1	捕食者	水表面型	
63	ヘビトンボ科	ヘビトンボ	1	捕食者	匍匐型	
64	クロスジヘビトンボ	クロスジヘビトンボ	1	捕食者	匍匐型	
65	ムネカクトビケラ科	ムネカクトビケラ属の一種	1	濾過食者	造網型	
66	シマトビケラ科	ミヤマシマトビケラ属の一種	6	濾過食者	造網型	
67		ナミコガタシマトビケラ	458	濾過食者	造網型	
-		コガタシマトビケラ属の一種	630	濾過食者	造網型	
68		ウルマーシマトビケラ	1196	濾過食者	造網型	
69		ナカハラシマトビケラ	39	濾過食者	造網型	
-		シマトビケラ属の一種	1071	濾過食者	造網型	
70	カウトビケラ科	タニガウトビケラ属の一種	20	濾過食者	造網型	
71	イウトビケラ科	ミヤマイウトビケラ属の一種	73	捕食者	造網型	
72	クダトビケラ科	クダトビケラ属の一種	2	堆積物収集者・剥ぎ取り食者	造網型	

表 6.3-24(2) 下流河川における底生動物の確認状況

確認種			調査年度	摂食機能群	生活型
No.	科名	種名	平成18年 (2006)		
73	ヒゲナガカワトビケラ科	ヒゲナガカワトビケラ	145	濾過食者	造網型
74	-	チャバネヒゲナガカワトビケラ	7	濾過食者	造網型
-	-	ヒゲナガカワトビケラ属の一種	73	濾過食者	造網型
75	ヒメトビケラ科	ハゴイタヒメトビケラ属の一種	10	剥ぎ取り食者	携巢型
76	-	ヒメトビケラ属の一種	828	剥ぎ取り食者	携巢型
77	ナガレトビケラ科	ヒロアタマナガレトビケラ	16	捕食者	匍匐型
78	-	レゼイナガレトビケラ	3	捕食者	匍匐型
79	-	ヤマナカナガレトビケラ	9	捕食者	匍匐型
-	-	ナガレトビケラ属の一種	96	捕食者	匍匐型
80	コエグリトビケラ科	コエグリトビケラ属の一種	2	剥ぎ取り食者	携巢型
81	カクスイトビケラ科	オオハラツツトビケラ属の一種	1	剥ぎ取り食者	携巢型
82	-	マルツツトビケラ	1	剥ぎ取り食者	携巢型
83	-	ウエノマルツツトビケラ	1	剥ぎ取り食者	携巢型
84	ニンギョウトビケラ科	ニンギョウトビケラ属の一種	19	剥ぎ取り食者	携巢型
85	カクツツトビケラ科	カクツツトビケラ属の一種	3	破砕食者	携巢型
86	ヒゲナガトビケラ科	タテヒゲナガトビケラ属の一種	166	破砕食者・堆積物収集者	携巢型
87	-	ヒゲナガトビケラ属の一種	101	破砕食者	携巢型
88	-	アオヒゲナガトビケラ属の一種	125	破砕食者・堆積物収集者	携巢型
89	-	クサツツトビケラ属の一種	9	破砕食者・堆積物収集者	携巢型
90	-	セトトビケラ属の一種	4	堆積物収集者	携巢型
91	ケトビケラ科	グマガトビケラ属の一種	30	破砕食者・堆積物収集者	携巢型
92	ガガンボ科	ガガンボ属の一種	16	捕食者	匍匐・掘潜型
93	-	ウスバガガンボ属の一種	35	剥ぎ取り食者	固着型
94	-	ヒゲナガガガンボ属の一種	1	捕食者	匍匐・掘潜型
-	-	ガガンボ科の一種	25	多様	掘潜型
95	チョウバエ科	ベリコマ属の一種	86	堆積物収集者	匍匐・掘潜型
96	ヌカカ科	アトゥリコボコン属の一種	20	捕食者	匍匐型
-	-	ヌカカ科の一種	5	捕食者	掘潜型
97	ユスリカ科	カユスリカ属の一種	1	捕食者	匍匐型
98	-	ダンダラヒメユスリカの一種	23	捕食者	匍匐型
-	-	モンユスリカ亜科の一種	643	捕食者	匍匐型
99	-	ヤマユスリカ属の一種	86	堆積物収集者	匍匐型
100	-	タニユスリカ属の一種	1	剥ぎ取り食者・堆積物収集者	匍匐型
101	-	バガステリア属の一種	10	堆積物収集者	匍匐型
102	-	サウユスリカ属の一種	11	堆積物収集者	匍匐型
-	-	ヤマユスリカ亜科の一種	61	剥ぎ取り食者・堆積物収集者	匍匐型
103	-	ケブカユスリカ属の一種	27	破砕食者・堆積物収集者	掘潜型
104	-	ハダカユスリカ属の一種	47	堆積物収集者	匍匐型
105	-	ツヤユスリカ属の一種	76	破砕食者・堆積物収集者	掘潜型
106	-	エラノリユスリカ属の一種	1	不明	不明
107	-	テンマクエリユスリカ属の一種	11	剥ぎ取り食者	掘潜型
108	-	ナノクラディウス属の一種	8	破砕食者・堆積物収集者	掘潜型
109	-	エリユスリカ属の一種	2238	堆積物収集者	掘潜型
110	-	シンオルソクラディウス属の一種	14	堆積物収集者	匍匐型
111	-	リムノファイエス属の一種	20	破砕食者・堆積物収集者	掘潜型
112	-	ヌカユスリカ属の一種	8	捕食者	匍匐型
113	-	トゥベテニア属の一種	91	堆積物収集者	匍匐型
-	-	エリユスリカ亜科の一種	636	破砕食者・堆積物収集者	掘潜型
114	-	ユスリカ属の一種	6	濾過食者	掘潜型
115	-	デミクリフトキロノムス属の一種	4	捕食者	匍匐型
116	-	ディクロテンディベス属の一種	1	濾過食者	掘潜型
117	-	ツヤムネユスリカ属の一種	328	濾過食者	固着型
118	-	ハモンユスリカ属の一種	302	濾過食者	掘潜型
119	-	ハモグリユスリカ属の一種	2	破砕食者	不明
120	-	アシマダラユスリカ属の一種	1	堆積物収集者	掘潜型
121	-	クラドタニタルス属の一種	11	堆積物収集者	掘潜型
122	-	マイクロセクトゥラ属の一種	21	堆積物収集者	匍匐型
123	-	ナガレユスリカ属の一種	11	濾過食者	掘潜型
124	-	タニタルス属の一種	125	濾過食者	掘潜型
-	-	ユスリカ亜科の一種	190	濾過食者	掘潜型
125	ブユ科	アシマダラブユ属の一種	56	濾過食者	固着型
126	ナガラエブ科	ハマダラナガラエブ	1	捕食者	掘潜型
127	-	クロモンナガラエブ	8	捕食者	掘潜型
128	アシナガバエ科	アシナガバエ科の一種	1	捕食者	掘潜型
129	オドリバエ科	オドリバエ科の一種	13	捕食者	掘潜型
130	ミギワバエ科	ミギワバエ科の一種	13	捕食者	掘潜型
-	-	ハエ目	10	多様	多様

表 6.3-24(3) 下流河川における底生動物の確認状況

確認種			調査年度	摂食機能群	生活型
No.	科名	種名	平成18年 (2006)		
131	ゲンゴロウ科	ゴマダラチビゲンゴロウ	1	捕食者	遊泳型
-		ケシゲンゴロウ亜科の一種	5	捕食者	遊泳型
132		モンキマメゲンゴロウ	1	捕食者	遊泳型
-		ヒメゲンゴロウ亜科の一種	16	捕食者	遊泳型
133	ツブミスムシ科	クロサウツブミスムシ	1	剥ぎ取り食者	匍匐型
134	ガムシ科	ガムシ科の一種	1	剥ぎ取り食者・捕食者	遊泳型
135	ヒメドロムシ科	ゴトウミソドロムシ	2	剥ぎ取り食者・捕食者	匍匐型
136		ツヤドロムシ	2	剥ぎ取り食者・捕食者	匍匐型
-		ヒメドロムシ亜科の一種	35	剥ぎ取り食者・捕食者	匍匐型
137		ヒラタドロムシ科	マルヒゲナガハナノミ	1	剥ぎ取り食者
138	ヒラタドロムシ科	チビヒゲナガハナノミ	9	剥ぎ取り食者	匍匐型
139		クシヒゲマルヒラタドロムシ	34	剥ぎ取り食者・捕食者	匍匐型
-		マルヒラタドロムシ属の一種	2	剥ぎ取り食者	匍匐型
140		マスタチビヒラタドロムシ	106	剥ぎ取り食者・捕食者	匍匐型
141	ハネコケムシ科	ハネコケムシ科の一種	96	捕食者	固着型
合計種数			20目61科 141種	-	-

注 1)表中の数値は年間の合計個体数を示す。

注 2)調査の概要は以下のとおりである。

平成 18 年度：調査回数 3 回（6、8、11 月） 調査地点 1 地点（St.1）

出典：6-27 「平成 18 年度ダム自然環境調査業務報告書（底生動物）」

6-67 「原色川虫図鑑」

6-73 「Ecology and classification of North American freshwater invertebrates.Academic press」

6-74 「An Introduction to the Aquatic Insects of North America」

6-75 「溪流生態砂防学」

6-76 「琉球列島の陸水生物」

6-77 「底生動物の生活型と摂食機能群による河川生態系評価」

分類	区分	解説
摂食機能群	破碎食者	落葉等を細かくかみ砕いて摂食する。
	濾過食者	網を張ったり、口器や前肢に生える長毛により有機物を集めて摂食する。
	堆積物収集者	堆積物を集めて摂食する。
	剥ぎ取り食者	基質上の藻類等を剥ぎ取る様に摂食する。
	捕食者	動物（死体も含む）を捕食する。
	寄生者	宿主に寄生、または自由生活しつつ宿主の血液や体液を吸う。

分類	区分	解説
生活型	造網型	分泌絹糸を用いて捕獲網を作るもの。
	固着型	強い吸着器官または鈎着器官をもって他物に固着するもの。
	匍匐型	匍匐するもの。
	携巢型	筒巢をもつ多くのトビケラ目の幼虫。
	遊泳型	移動の際は主として遊泳するもの。
	掘潜型	砂または泥の中に潜っていることが多いもの。
	水表型	水表上で生活するもの。
	寄生型	主に寄生生活をするもの。

(a) 下流河川での主要構成種

定量調査で確認した底生動物の目別種数、生活型別割合、摂食機能群別割合、EPT 指数の比較を図 6.3-37～40 に示す。

下流河川では、定量調査により 12 目 30 科 67 種の底生動物を確認した。目別の確認種数は、いずれの調査年度もカゲロウ目が最も多く、次いでハエ目やトビケラ目が多かった。生活型は、匍匐型（ヒラタカゲロウ科、カワゲラ科等）が優占しており、次いで遊泳型（コカゲロウ科等）や堀潜型（エリユスリカ亜科等）が多かった。摂食機能群は、剥ぎ取り食者（ヒラタカゲロウ科、カクスイトビケラ等）と堆積物収集者（イトミミズ科、エリユスリカ属等）がほぼ同様に多かった。EPT 指数の値は 36 で、トビケラ目が最も多かった。

これらの結果を流入河川（真名川・笹生川）と比較すると、目別の確認種数、生活型、摂食機能群の構成に大きな違いはみられなかったが、堀潜型や堆積物収集者の割合が流入河川よりやや多かった。EPT 指数は流入河川に比べて低く、流入河川ではカゲロウ目が最も多かったが、下流河川ではトビケラ目が最も多かった。一般的にダムの下流部では、ダムから流下した有機物を栄養源に造網型トビケラ類が増加することが知られており、下流河川でトビケラ目や堀潜型、堆積物収集者が比較的多いのはダムの影響と考えられる。

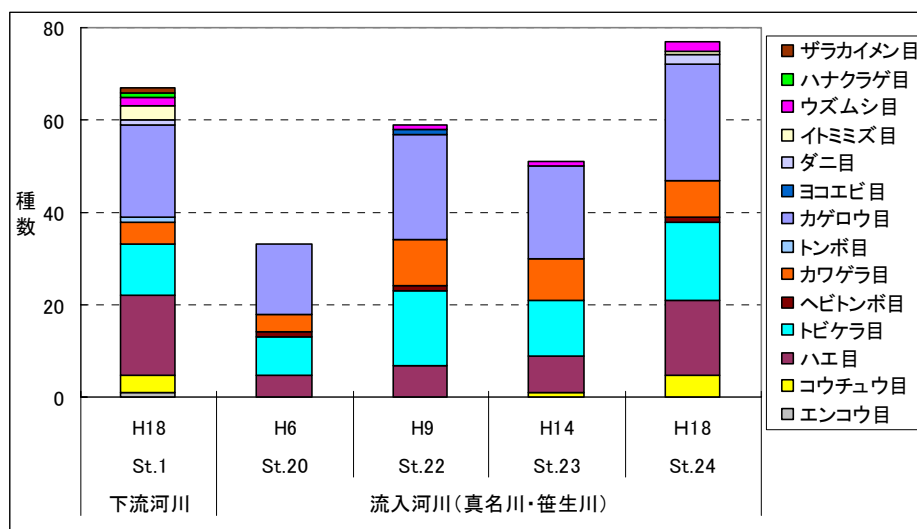


図 6.3-37 下流河川の底生動物の目別種数と流入河川との比較

注) 調査の概要は以下のとおりである。

下流河川

平成 18 年度：調査回数 3 回（6、8、11 月） 調査地点 1 地点（St.1）

流入河川

平成 6 年度：調査回数 3 回（5、8、11 月） 調査地点 1 地点（St.20）

平成 9 年度：調査回数 3 回（5、8、11 月） 調査地点 1 地点（St.22）

平成 14 年度：調査回数 3 回（5、7～8、11 月） 調査地点 1 地点（St.23）

平成 18 年度：調査回数 3 回（6、8、11 月） 調査地点 1 地点（St.24）

出典：6-9 「平成 6 年度ダム自然環境調査報告書（底生動物）」

6-13 「平成 9 年度ダム自然環境調査業務報告書（底生動物）」

6-20 「平成 14 年度ダム自然環境調査業務報告書（底生動物）」

6-27 「平成 18 年度ダム自然環境調査業務報告書（底生動物）」

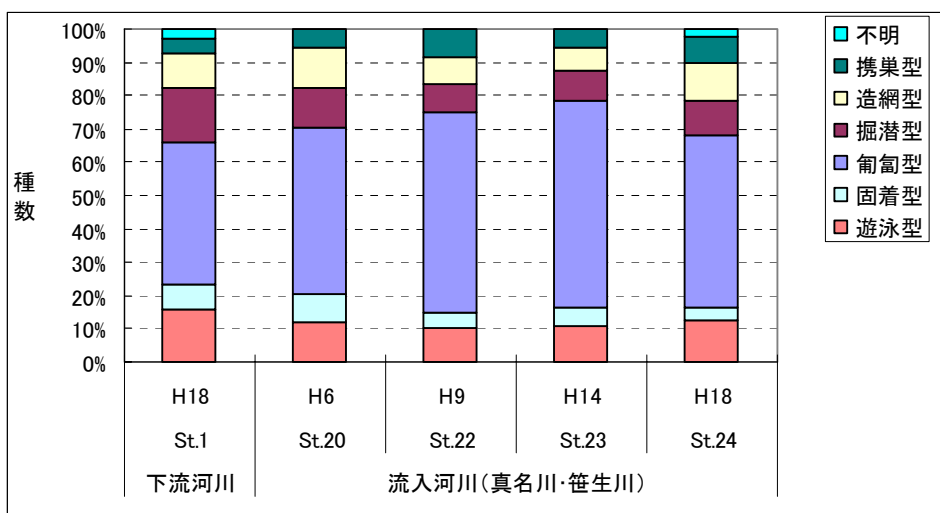


図 6.3-38 下流河川の底生動物の生活型別種数と流入河川との比較

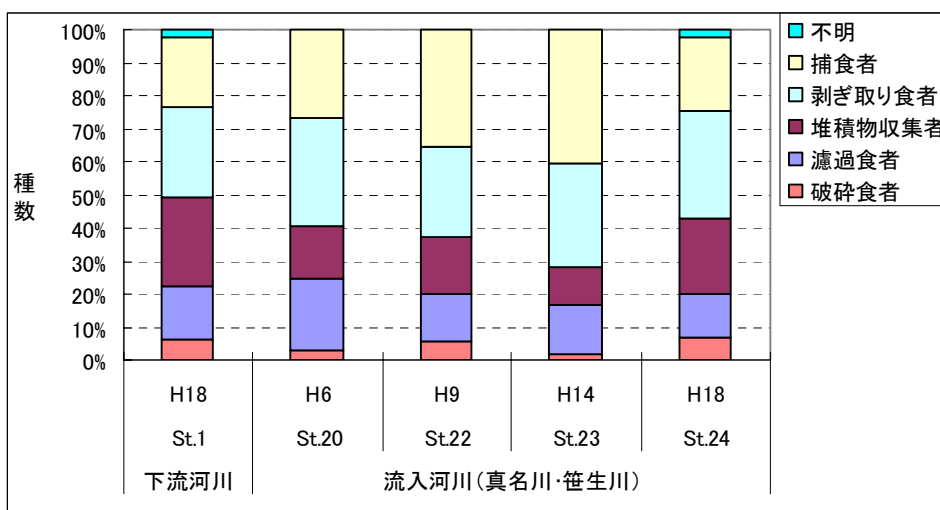


図 6.3-39 下流河川の底生動物の摂食機能群別種数と流入河川との比較

注)調査の概要は以下のとおりである。

下流河川

平成 18 年度：調査回数 3 回（6、8、11 月） 調査地点 1 地点（St.1）

流入河川

平成 6 年度：調査回数 3 回（5、8、11 月） 調査地点 1 地点（St.20）

平成 9 年度：調査回数 3 回（5、8、11 月） 調査地点 1 地点（St.22）

平成 14 年度：調査回数 3 回（5、7～8、11 月） 調査地点 1 地点（St.23）

平成 18 年度：調査回数 3 回（6、8、11 月） 調査地点 1 地点（St.24）

- 出典：6-9 「平成 6 年度ダム自然環境調査報告書（底生動物）」  
 6-13 「平成 9 年度ダム自然環境調査業務報告書（底生動物）」  
 6-20 「平成 14 年度ダム自然環境調査業務報告書（底生動物）」  
 6-27 「平成 18 年度ダム自然環境調査業務報告書（底生動物）」  
 6-67 「原色川虫図鑑」  
 6-73 「Ecology and classification of North American freshwater invertebrates.Academic press」  
 6-74 「An Introduction to the Aquatic Insects of North America」  
 6-75 「溪流生態砂防学」  
 6-76 「琉球列島の陸水生物」  
 6-77 「底生動物の生活型と摂食機能群による河川生態系評価」



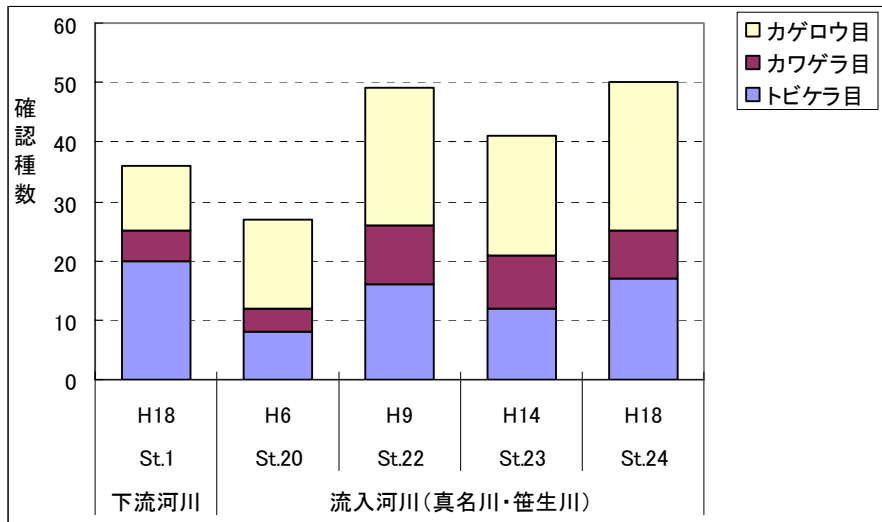


図 6.3-40 下流河川における EPT 指数の比較

注 1) EPT 指数：カゲロウ目、カワゲラ目、トビケラ目の種類数

調査地の水質の指標として使われており、カゲロウ目、カワゲラ目、トビケラ目の多くは、水質汚濁に弱いことから考え出されたもの。EPT 指数が高いと水質が良いとされている。

注 2) 調査の概要は以下のとおりである。

下流河川

平成 18 年度：調査回数 3 回（6、8、11 月） 調査地点 1 地点（St.1）

流入河川

平成 6 年度：調査回数 3 回（5、8、11 月） 調査地点 1 地点（St.20）

平成 9 年度：調査回数 3 回（5、8、11 月） 調査地点 1 地点（St.22）

平成 14 年度：調査回数 3 回（5、7～8、11 月） 調査地点 1 地点（St.23）

平成 18 年度：調査回数 3 回（6、8、11 月） 調査地点 1 地点（St.24）

出典：6-9 「平成 6 年度ダム自然環境調査報告書（底生動物）」

6-13 「平成 9 年度ダム自然環境調査業務報告書（底生動物）」

6-20 「平成 14 年度ダム自然環境調査業務報告書（底生動物）」

6-27 「平成 18 年度ダム自然環境調査業務報告書（底生動物）」

6-74 「An Introduction to the Aquatic Insects of North America」

6-79 「指標生物学 - 生物モニタリングの考え方」

### 3)両生類

両生類は平成 17 年度の調査で、イモリ、タゴガエル、カジカガエルの計 3 種を確認した。

なお、真名川ダムでは平成 5～6 年度から平成 17 年度にかけて 3 回の国勢調査を実施しているが、下流河川における調査は平成 17 年度に初めて実施した。

#### (a) 溪流環境を利用する種の生息状況

下流河川の確認種の中で溪流環境に依存する種は、表 6.3-25 に示すカジカガエルのみであった。繁殖期にあたる 5 月の調査で、溪流沿いにおいて成体と鳴き声を確認した。卵からの孵化時期にあたる 8 月には幼体（幼生含む）を確認しており、下流河川で繁殖していると考えられる。

表 6.3-25 溪流環境を利用する種

科名	種名	調査年度
		平成 17 年(2005)
アオガエル科	カジカガエル	18
合計種数		1 種

注) 表中の数値は年 3 回の調査の合計個体数を示す。

出典：6-25 「平成 17 年度ダム自然環境調査業務報告書（両生類・爬虫類・哺乳類）」



出典：6-25 「平成 17 年度ダム自然環境調査業務報告書（両生類・爬虫類・哺乳類）」

図 6.3-41 溪流環境を利用する種

#### 4)陸上昆虫類

陸上昆虫類は平成 16 年度の調査で、水域環境に依存するカワゲラ目やトビケラ目に属する昆虫類を含む、413 種を確認した。

なお、真名川ダムでは平成 4～5 年度から平成 16 年度にかけて 3 回の国勢調査を実施しているが、下流河川における調査は平成 16 年度に初めて実施した

(a)河原環境を利用する種（河原環境が変り、河原性種の生息状況が変化しているか）

河原環境利用種として、ミヤマカワトンボ、カワラスズ、ヤチスズ、エソスズ、カワラバッタ、ハネナガヒシバッタ、コバネヒシバッタ、アイヌハンミョウの計 8 種を確認した。

カワラバッタやアイヌハンミョウは、近年の河川環境の変化に伴い減少しているといわれる種であり、カワラバッタは福井県レッドデータブックで「県域準絶滅危惧」に指定されている。また、アイヌハンミョウも北海道、福島県、富山県、兵庫県等のレッドデータブックに掲載されている。

出典：6-64「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 福井県レッドデータブック 動物編」

6-96「北海道の希少野生生物 北海道レッドデータブック 2001」

6-97「富山県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックとやま」

6-98「レッドデータブックふくしま 福島県の絶滅のおそれのある野生生物（植物・昆虫類・鳥類）」

6-99「改訂・兵庫の貴重な自然 兵庫県版レッドデータブック 2003」

(4)ダムによる影響の検証

下流河川の生物の変化に対するダムによる影響の検証結果を表 6.3-26 及び図 6.3-42 に示す。

表 6.3-26(1) 下流河川の生物の変化に対するダムによる影響の検証結果（魚類）

検討項目		生物の変化の状況	ダムの存在・供用に伴う影響	ダムの存在・供用以外の影響	検証結果	
生息状況の変化	a) 砂礫の底質環境を好む底生魚等の生息状況	産卵場として礫底を利用するアブラハヤ、ウグイ、ヤマメ等や、石下に産卵するカジカ、底生魚のアジメドジョウ、アカザ等を確認している。	河床の攪乱頻度の減少。 土砂供給量の減少。	-	アブラハヤ、ウグイ、ヤマメ、カジカ等を継続して確認しており、生息状況に大きな変化はみられない。	-
	b) 外来種	平成 8 年度以降、ニジマスを確認している。	-	水産資源として放流	平成 5 年に漁協によって放流されたニジマスに起因している可能性がある。	
	c) 漁獲量	SS 濃度が水産用水基準を超過した平成 16 年、17 年に、アユの漁獲量が減少した。	水温の低下 SS 濃度の上昇	-	SS 濃度が水産用水基準を超過した平成 16 年、17 年に、アユの漁獲量が減少しており、濁水放流の影響があった可能性がある。	

注)検証結果

- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- : 生物の生息・生育状況に、大きな変化が見られなかった場合
- ? : 生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合

表 6.3-26(2) 下流河川の生物の変化に対するダムによる影響の検証結果（底生動物）

検討項目		生物の変化の状況	ダムの存在・供用に伴う影響	ダムの存在・供用以外の影響	検証結果	
生息状況の変化	a) 主要構成種	下流河川の EPT 指数は流入河川より低く、トビケラ目や堀潜型、堆積物収集者等が比較的多かった。	河床の攪乱頻度の減少。 土砂供給量の減少。	-	ダムから流下した有機物を栄養源に、造網型トビケラ類や堀潜型、堆積物収集者等が増加し、底生動物相が変化した可能性がある。	

注)検証結果

- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- : 生物の生息・生育状況に、大きな変化が見られなかった場合
- ? : 生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合

表 6.3-26(3) 下流河川の生物の変化に対するダムによる影響の検証結果（両生類）

検討項目		生物の変化の状況	ダムの存在・供用に伴う影響	ダムの存在・供用以外の影響	検証結果	
生息状況の変化	a) 渓流環境を利用する種	平成 17 年度にカジカガエルを確認した。	生息域の攪乱	-	渓流環境を利用する種を確認したが、下流河川における調査は平成 17 年度に初めて実施したため、変化の検証はできなかった。	?

注)検証結果

- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- : 生物の生息・生育状況に、大きな変化が見られなかった場合
- ? : 生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合

表 6.3-26(4) 下流河川の生物の変化に対するダムによる影響の検証結果（陸上昆虫類）

検討項目		生物の変化の状況	ダムの存在・供用に伴う影響	ダムの存在・供用以外の影響	検証結果	
生息状況の変化	a) 河原環境を利用する種	河原環境を利用する種として、ミヤカマワトンボ、カワラスズ、ヤチスズ、エゾスズ、カワラバッタ、ハネナガヒシバッタ、コバネヒシバッタ、アイヌハンミョウの計 8 種を確認した。	-	-	河原環境を利用する種を確認したが、下流河川における調査は平成 16 年度に初めて実施したため、変化の検証はできなかった。	？

注)検証結果

- ：生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によると考えられる場合
- ：生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によると考えられる場合
- ：生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- ：生物の生息・生育状況に、大きな変化が見られなかった場合
- ？：生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合

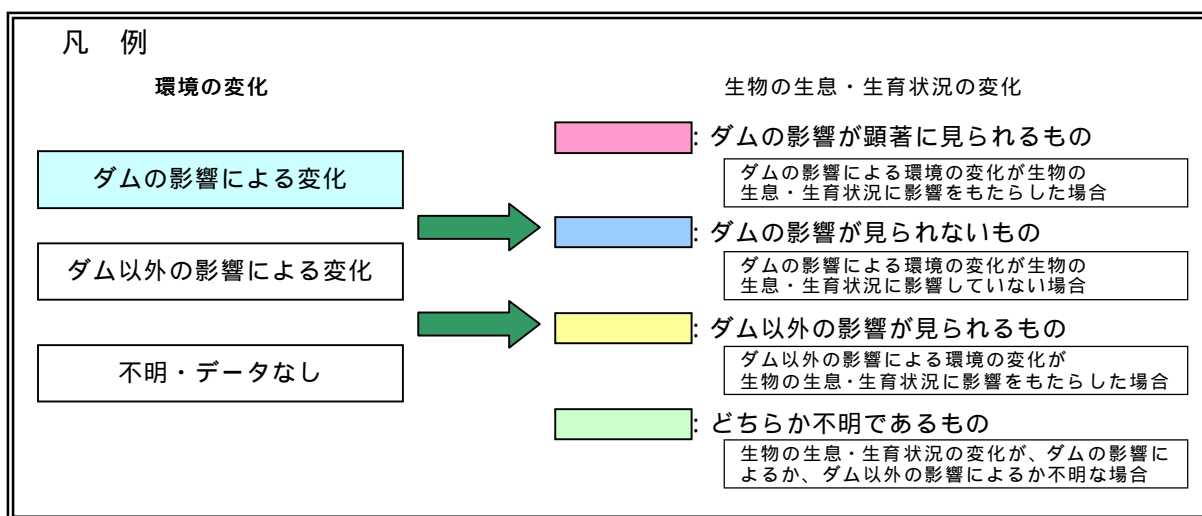
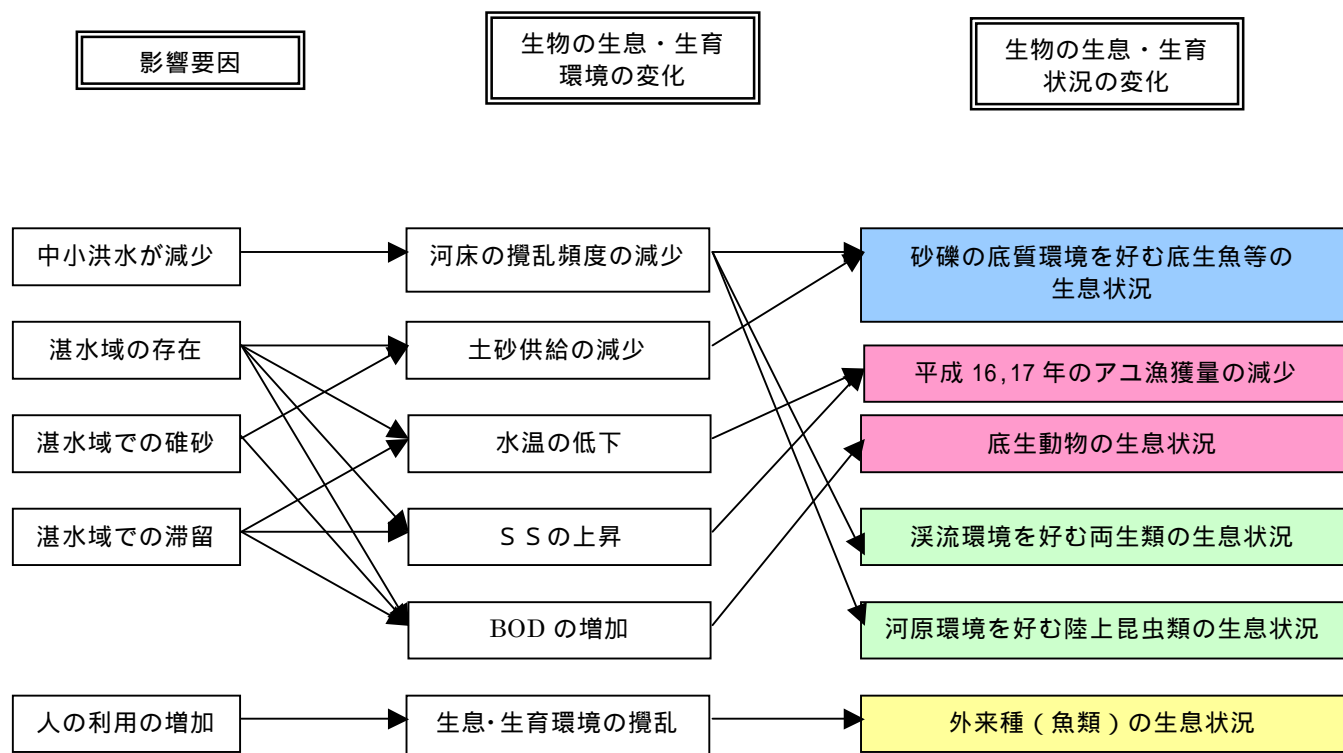


図 6.3-42 下流河川の生物の変化に対する影響の検証結果

#### 6.3.4 ダム湖周辺における変化の検証

ダムの存在・供用により、ダム湖周辺において環境条件の変化が起こり、ダム湖周辺を利用する様々な生物の生息・生育状況に変化を引き起こすと想定される。

そのため、ここでは真名川ダム湖周辺における環境条件の変化及びそれに引き起こされる生物の生息・生育状況の変化を図 6.3-43 のように想定し、真名川ダムの存在・供用によりダム湖周辺の生物の生息・生育状況が変化しているかどうかの検証を以下の手順で行った。

##### (1) 生物の生息・生育状況の変化の把握

- ・植物の生育状況（植物相、外来種）の変化
- ・鳥類の生息状況（樹林性鳥類、猛禽類）
- ・両生類・爬虫類・哺乳類の生息状況（樹林性の哺乳類、ロードキル）の変化
- ・陸上昆虫類等の生息状況（樹林性のチョウ類、止水性水生昆虫）の変化

##### (2) ダムによる影響の検証

真名川ダムの生物の生息・生育状況の変化について、環境条件の変化やダム以外の要因等と照らし合わせて検討し、ダムによる影響を検証した。



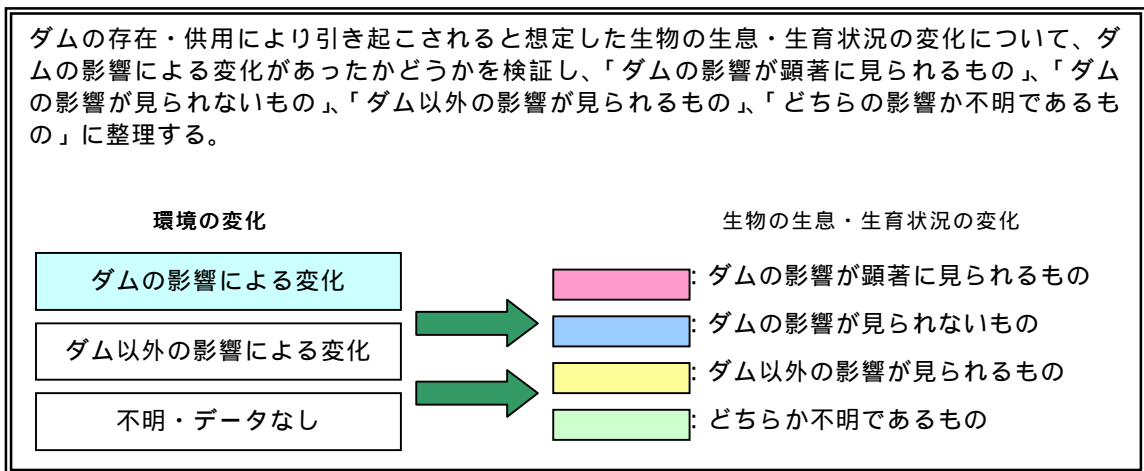
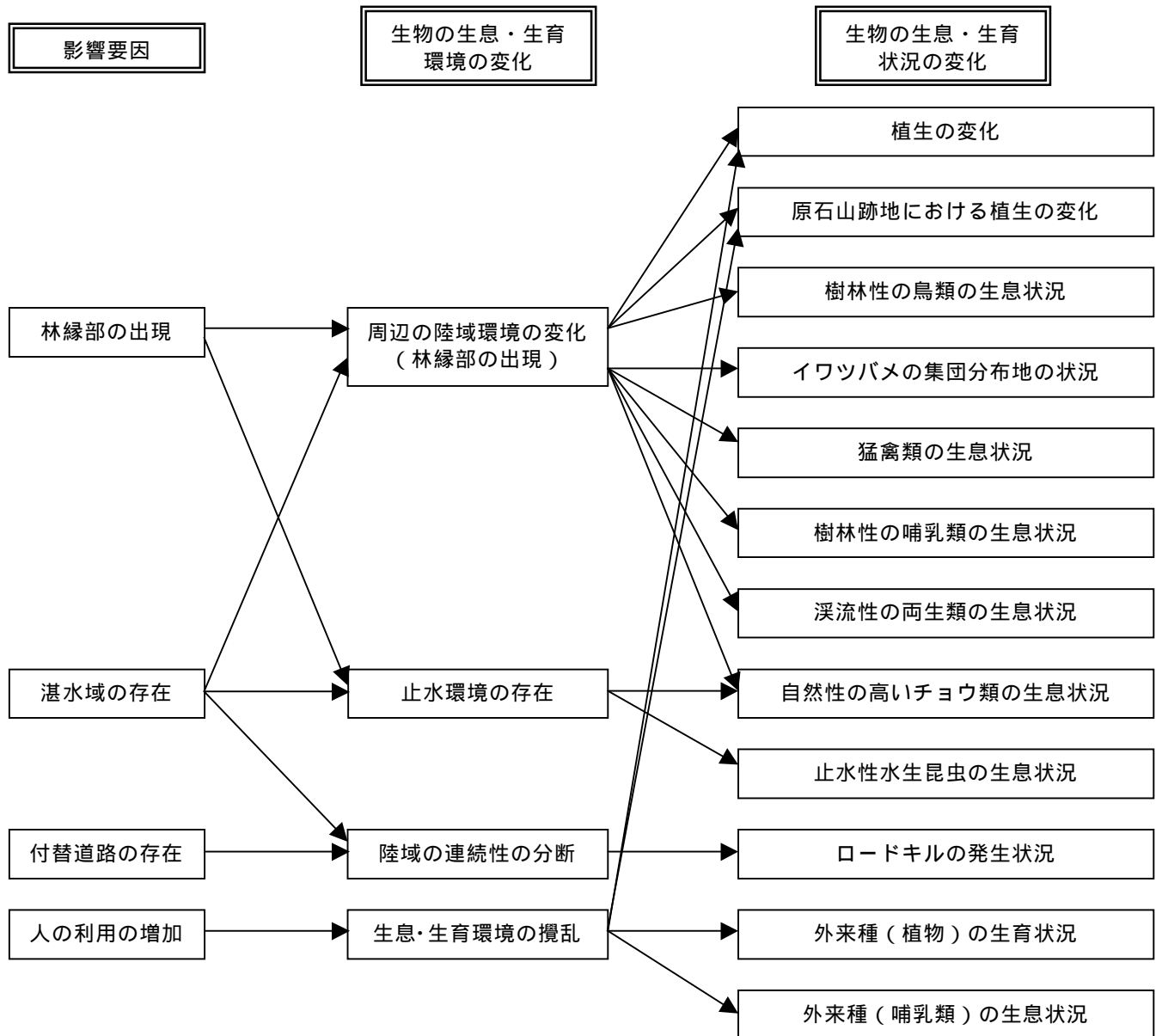


図 6.3-43 ダム湖周辺で想定される環境への影響要因と生物の生息・生育環境の変化

## (1)生物の生息・生育状況の変化の把握

### 1)植物

植物は昭和 53 年度から平成 15 年度の間に行った 3 回の国勢調査及び、昭和 53 年に実施した国勢調査以外の調査で、1159 種（1 回当りの確認種数は 392～883 種）を確認した。

ダム湖完成時に実施された湛水域の植生調査（昭和 53 年度）では、斜面部にクリ - ミズナラ群落やスギ植林等が残存し、河床部にはヤナギ群落やヨシ群落等の湿生植物群落が見られた。さらに前述した 3 回の国勢調査で、ダム湖周辺の植生が明らかになり、いずれの調査年度においても、代償植生の木本群落（クリ コナラ群落等）の分布面積が最も大きく、次いで植林（スギ・ヒノキ植林等）が大きかった。

### (a)ダム湖周辺の植生の変化

ダム湖周辺に分布する植生の、面的分布状況の変化を表 6.3-27 と図 6.3-44 に示す。また、植生図を図 6.3-45 に示す。

ダム湖周辺の植生の大部分は、クリ - コナラ群落をはじめとする落葉広葉樹群落が広く分布しているが、トチノキ - サワグルミ群落やヤナギ低木群落をはじめとする自然植生の木本群落、ツルヨシ群落で代表される自然植生の草本群落、ススキ群落で代表される代償植生の草本群落も分布していた。これらの面積比率にほとんど変化は認められなかった。

なお、平成 16 年度の国勢調査でカシノナガキクイムシが確認された<sup>1</sup>。本種は、ミズナラに穴を開けて病原菌を持ち込み、餌として菌を培養する。ミズナラは菌に内部を破壊され枯れ始める。被害は 1997 年に福井県境にある加賀市の刈安山で確認されて以来、徐々に広がっている（図 6.3-46 参照）。真名川ダム湖周辺においてもミズナラの立枯れが散見され（図 6.3-47 参照）、今後はカシノナガキクイムシの生息状況に注意する必要があると考えられる。

- 出典：6-11 「平成 7 年度ダム自然環境調査業務報告書（植物）」  
6-15 「平成 10 年度ダム自然環境調査業務報告書（植物）」  
6-22 「平成 15 年度ダム自然環境調査業務報告書（真名川ダム編）」  
6-32 「真名川ダム貯水池周辺植生調査報告書」

<sup>1</sup> 中島付近で行ったライトトラップ調査（カーテン法）で成虫 1 個体が採集された。  
出典：6-24 「平成 16 年度ダム自然環境調査業務報告書（陸上昆虫類等）」

表 6.3-27 真名川ダムの周辺における群落面積の変化（植物）

植生区分	調査年度					
	平成 7 年 (1995)		平成 10 年 (1998)		平成 15 年 (2003)	
	面積 (ha)	%	面積 (ha)	%	面積 (ha)	%
自然植生 木本群落 (トチノキ - サワグルミ群落等)	3.42	0.2	3.42	0.2	17.24	1.1
自然植生 草本群落 (ツルヨシ群落)	17.99	0.9	17.99	0.9	13.52	0.8
代償植生 木本群落 (クリ - コナラ群落等)	1288.37	67.0	1281.41	66.6	1066.87	66.4
代償植生 草本群落 (ススキ群落等)	89.20	4.6	88.47	4.6	119.07	7.4
植 林 (スギ・ヒノキ植林等)	452.97	23.5	460.66	23.9	260.04	16.2
その他 (公園、造成池等) * 開放水域除く	72.18	3.8	72.18	3.8	130.94	8.1
合 計	1924.13	100.0	1924.13	100.0	1607.68	100.0

注) 植生区分の ( ) 内は、代表的な群落名を示す。

なお、平成 15 年度より、植生区分の「その他」に「道路」が新たに区分された。

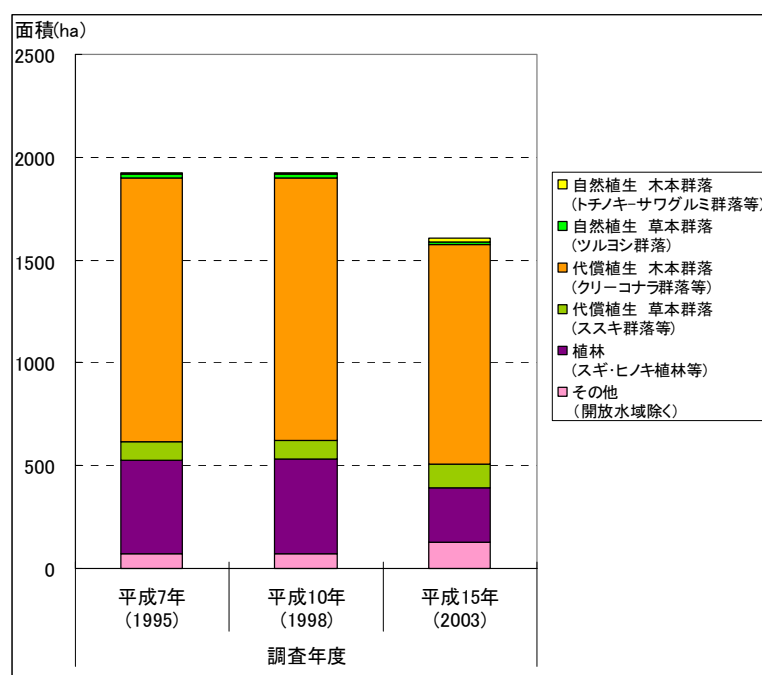
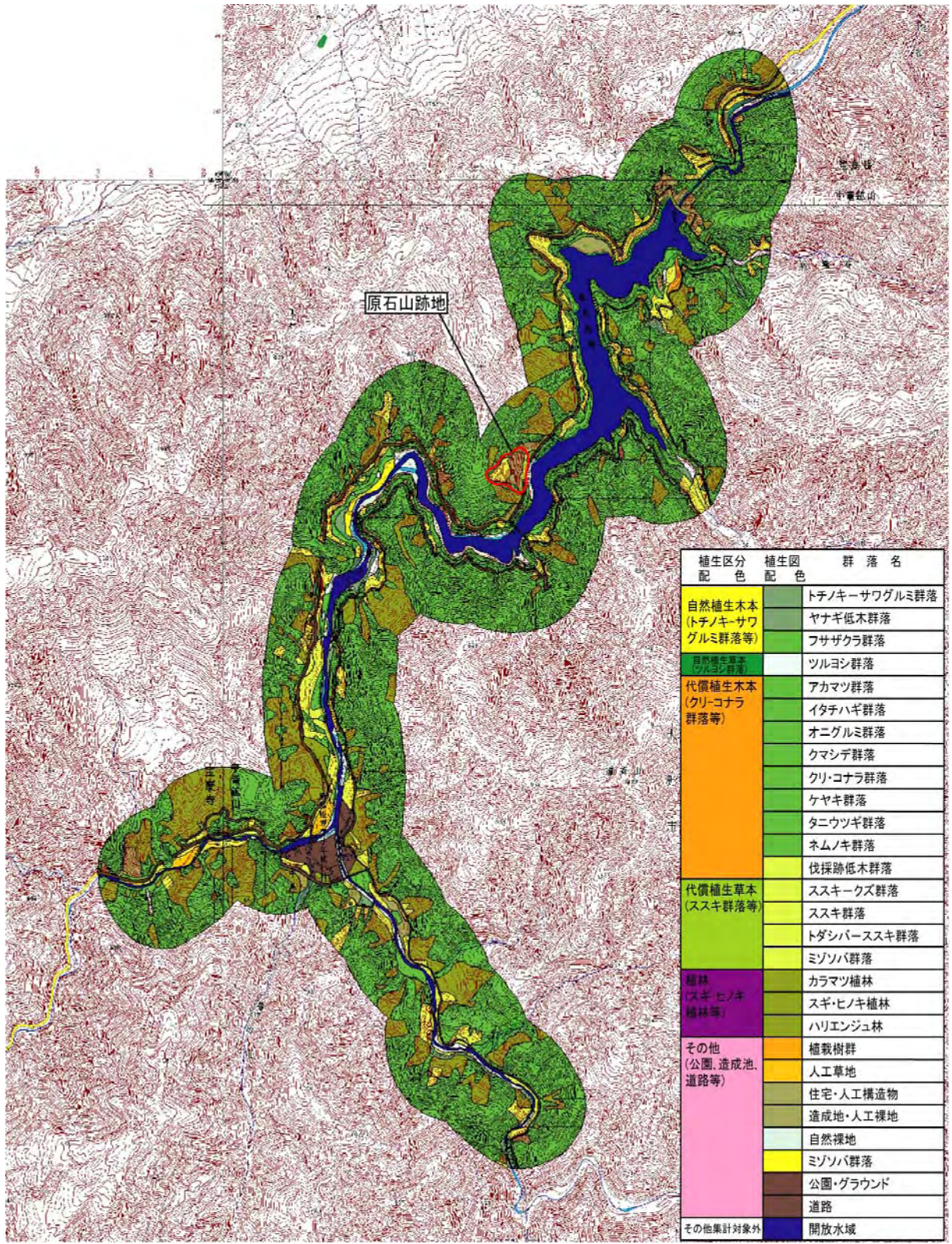


図 6.3-44 真名川ダムの周辺における群落面積の変化（植物）

出典：6-11 「平成 7 年度ダム自然環境調査業務報告書（植物）」  
 6-15 「平成 10 年度ダム自然環境調査業務報告書（植物）」  
 6-22 「平成 15 年度ダム自然環境調査業務報告書（真名川ダム編）」



出典 6-22:「平成 15 年度ダム自然環境調査業務報告書」(真名川ダム編)

図 6.3-45 真名川ダムの周辺における植生図(植物)

# ミズナラ枯死 急速に拡大

## 医王山系など 被害面積、去年の20倍超

**繁殖力強い 虫が原因 有効な対策なし**

山に広がる赤茶けたまだら模様。富山、石川両県にまたがる医王山(九一九)で次々とミズナラが枯れ、紅葉さながらの景色になっている。

「犯人」は長わすか杉から百六十秒に。有効な対策はなく関係者は頭を悩ませている。

この虫はミズナラに穴を掘り始めて約二週間後、枯死生体系統を破壊され、水や養分を吸収できなくなるためと考えられている。

一九九七年に福井県境(報道部・伊藤弘憲)



カシノナガキクイムシによる立ち枯れで、紅葉のちに赤くなった木が点在する石川・富山県境の医王山系。手前は大沼(16日、金沢市・保町で(木口慎子撮影))

北陸中日新聞  
平成 17 年 9 月 17 日  
掲載

図 6.3-46 カシノナガキクイムシの被害を伝える新聞記事



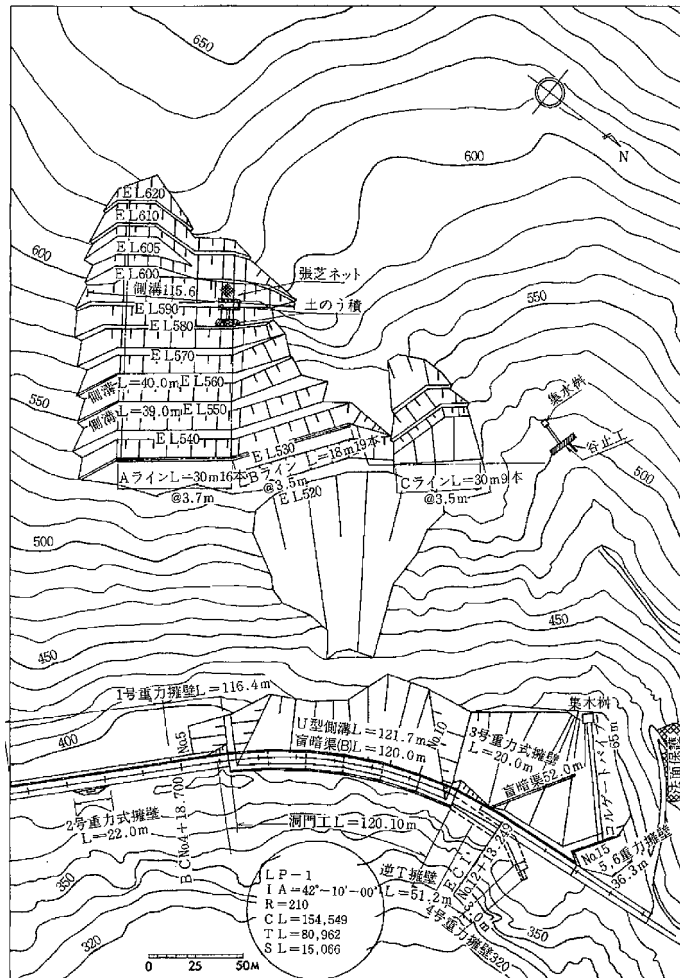
真名川ダム管理支所  
平成 19 年 9 月撮影

図 6.3-47 真名川ダム湖周辺におけるナラ枯れの状況

(b)原石山跡地の植生の変化

原石山跡地では、原石採取中に発生した地滑り対策として図 6.3-48 に示す対策工が実施された<sup>2</sup>。原石山跡地における植生の変化を図 6.3-49 に示した。平成 7 年度、10 年度と変化はなく、斜面上部は張芝等による人工草地、斜面中部にはススキ群落やカワラハハコ群落、斜面下部の国道 157 線沿いには小規模なハリエンジュ群落が見られた。平成 15 年には、人工草地がススキ群落に置き換えられたが、そのほかに大きな変化はみられなかった。

ハリエンジュ群落については、平成 7 年度～15 年度までの 3 回の調査で確認しているが、昭和 54 年時点の貯水池周辺の環境整備計画において、原石山跡地は「洞門工沿いにできた緩斜面は落石の危険があるため、人を中に入れないで転石も道路までに止まり、しかも修景的に好ましいような植栽による整備をする。これ等は道路構造の一部として位置づけ、将来道路管理者と一体的に管理するようそれぞれの道路管理者に引き継ぐこととした。」<sup>3</sup>としており、環境整備の一環として導入された可能性が考えられる。



出典：6-48 「真名川ダム工事誌」

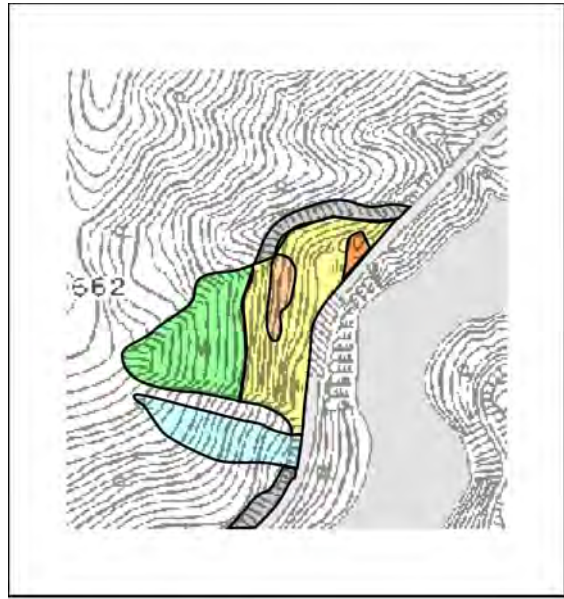
図 6.3-48 原石山における地滑り対策工平面図

<sup>2</sup> 出典)6-48 「真名川ダム工事誌」

<sup>3</sup> 出典)6-48 「真名川ダム工事誌」より引用



平成7年度



平成10年度



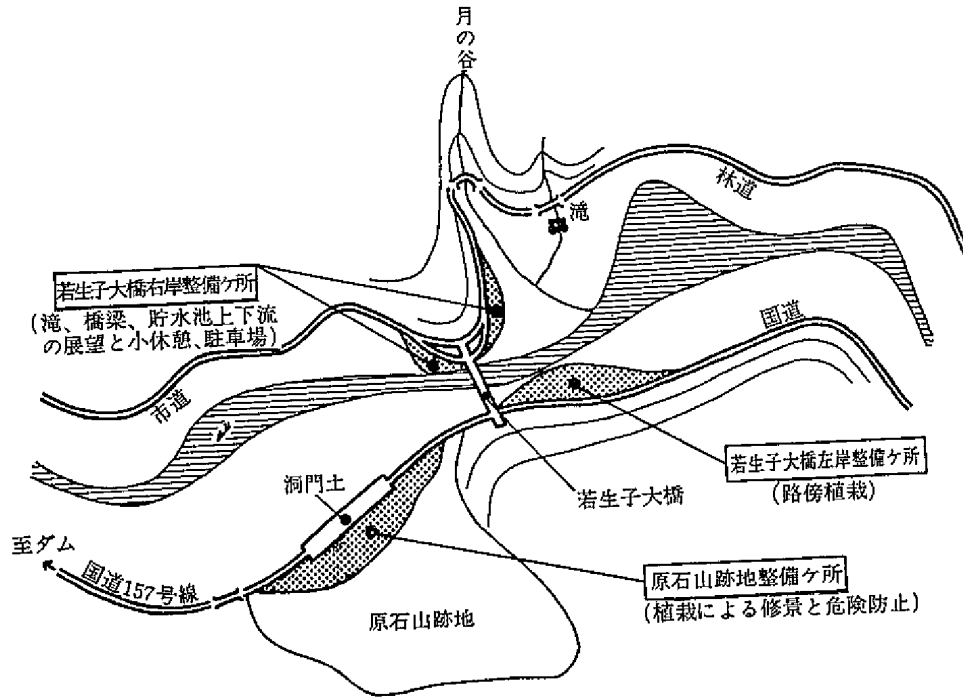
平成15年度

【凡例】

- カワラハハコ群落
- ススキ群落
- スギ植林
- ハリエンジュ群落
- 人工草地
- 自然裸地
- 道路・人工構造物

図 6.3-49 原石山跡地の植生の変化

出典：6-11 「平成7年度ダム自然環境調査業務報告書（植物）」  
 6-15 「平成10年度ダム自然環境調査業務報告書（植物）」  
 6-22 「平成15年度ダム自然環境調査業務報告書（真名川ダム編）」



出典：6-48 「真名川ダム工事誌」

図 6.3-50 原石山跡地整備計画



(c) 外来種の生育状況

ダム湖周辺では、平成7年度、平成10年度、平成15年度の3回の国勢調査で、1060種の植物種を確認した。

ダム湖周辺における在来種と外来種の確認種数の変化を図6.3-51に示す。

平成7年度には59種(比率7.0%)、平成10年度には64種(比率7.2%)、平成15年度には56種(比率6.6%)、合計で78種の外来種を確認した。外来種の確認種数を3回の国勢調査で比較すると、ほぼ同数の外来種を毎回確認した。

外来種のうち、イタチハギとハリエンジュは、植生単位としての群落を構成する種となっている。両群落の経年変化を図6.3-52に示す。ハリエンジュ群落は平成7年度以降確認されているが、面積比率は低い値で推移している。イタチハギ群落は平成15年度にダム湖岸で確認されており、分布面積は植生図図化範囲の約3%となっている。

ただし、イタチハギは、植物種として平成7年度以降経年的に確認されている。なお、平成7年度には「真名川ダム湖岸裸地対策調査」の緑化試験が実施され、緑化種にイタチハギを使用しており、これが移出し、ダム湖岸周辺に分布を広げている可能性が考えられる。

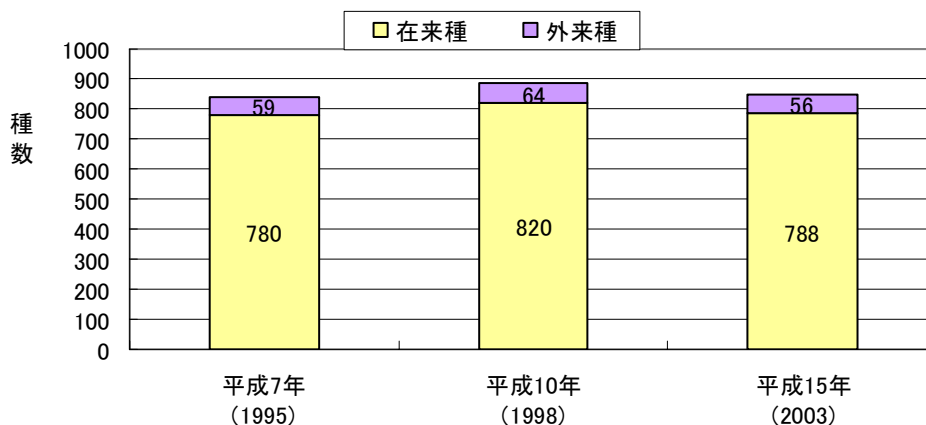


図 6.3-51 在来種と外来種の確認種数の比較

- 出典：6-11 「平成7年度ダム自然環境調査業務報告書(植物)」  
6-15 「平成10年度ダム自然環境調査業務報告書(植物)」  
6-22 「平成15年度ダム自然環境調査業務報告書(真名川ダム編)」

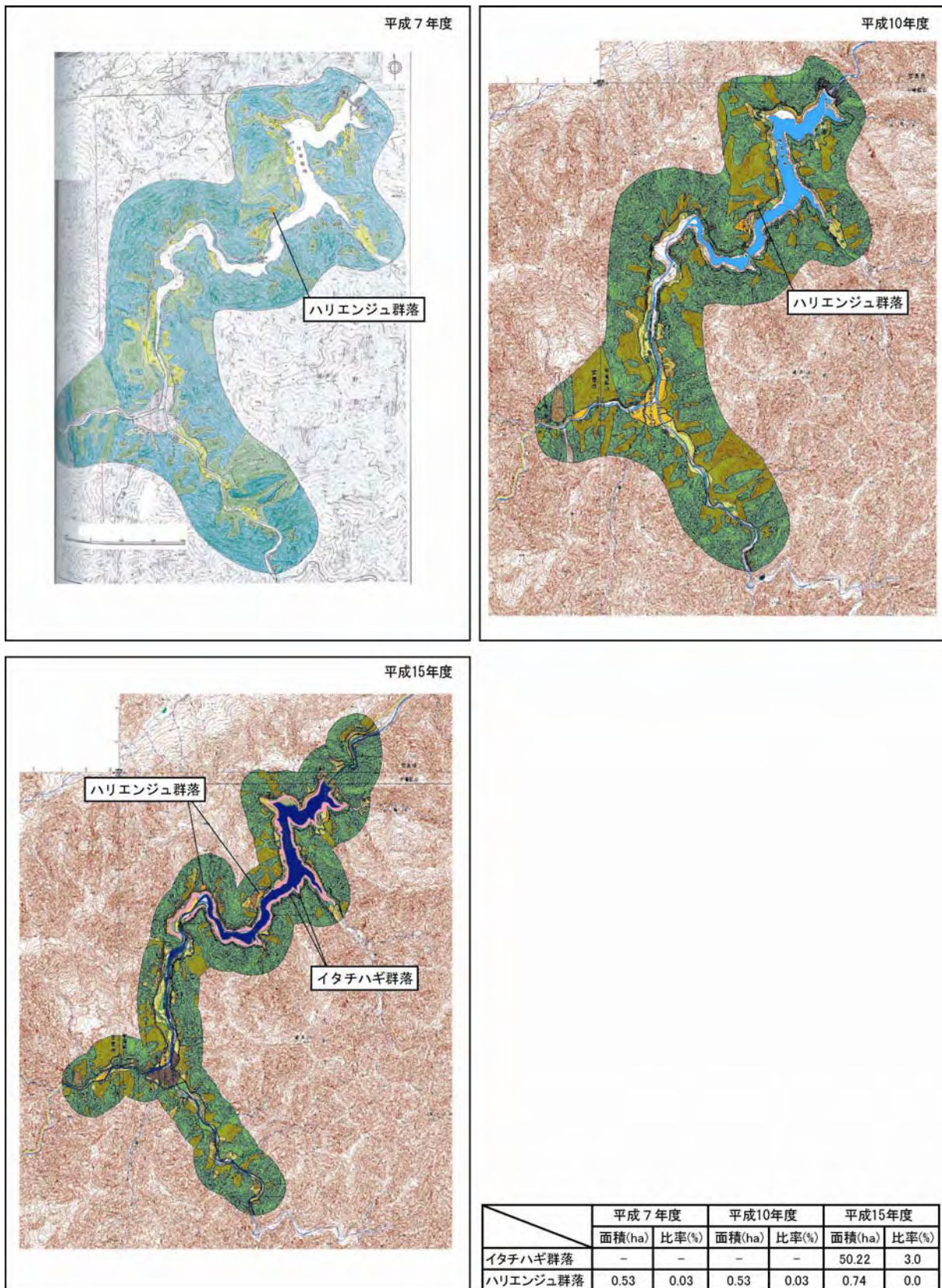


図 6.3-52 外来種の群落の経年変化

出典：6-11 「平成7年度ダム自然環境調査業務報告書（植物）」  
 6-15 「平成10年度ダム自然環境調査業務報告書（植物）」  
 6-22 「平成15年度ダム自然環境調査業務報告書（真名川ダム編）」

## 2)鳥 類

ダム湖周辺では、3回（平成4～5年度、平成9年度、平成14年度）の国勢調査で13目33科91種（1回当りの確認種数は47～74種）の鳥類を確認した。シジュウカラをはじめとするカラ類等の森林性の種、ウグイス等の林縁性の種、カワラヒワ等の草地性の種を継続して確認している。

### (a)樹林性種生息状況

確認種の生態分類別種数は、図6.3-53に示すとおりであり、いずれの調査年度も確認種の約半数が樹林性鳥類であった。

また、ダム湖周辺における樹林性鳥類の出現状況は表6.3-28に示すとおりであり、3回の調査で40種を確認した。確認種のうち、ツツドリ、コゲラ、サンショウクイ、クロツグミ、シジュウカラ等、半数にあたる20種を継続して確認している。継続的に確認されていない20種のうち、14種は渡り鳥であり、その大部分は確認個体数も少なかった。

調査年度による調査回数や調査地点などの差異を考慮すると、各調査年度における樹林性鳥類の種構成には、大きな変化はないと考えられる。

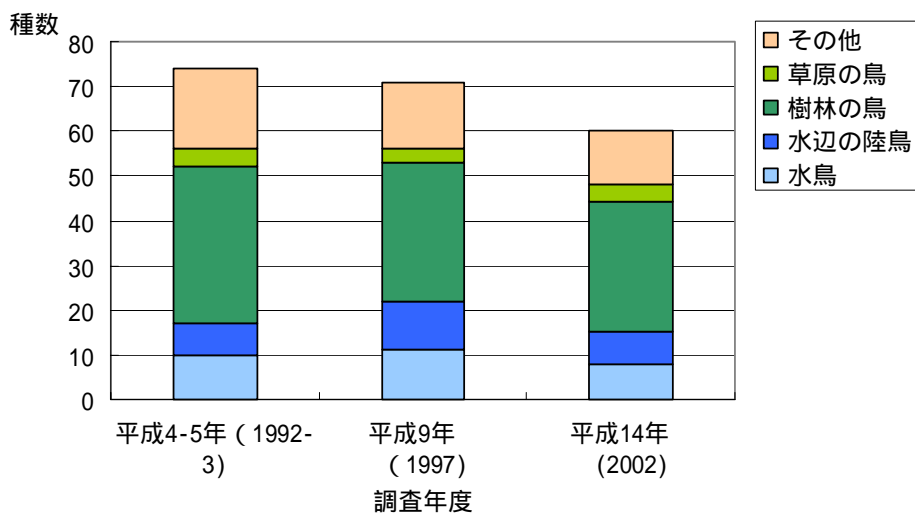


図 6.3-53 生態分類別構成種数の経年変化

注) 鳥類の生態分類は、「原色日本野鳥生態図鑑 陸鳥編・水鳥編」(保育社 平成7年)に従った。

出典：6-3 「平成4年度ダム自然環境調査報告書」  
 6-4 「平成5年度ダム自然環境調査報告書(鳥類)」  
 6-14 「平成9年度ダム自然環境調査業務報告書(鳥類)」  
 6-21 「平成14年度ダム自然環境調査業務報告書(鳥類)」  
 6-103 「原色日本野鳥生態図鑑 陸鳥編・水鳥編」

表 6.3-28 ダム湖周辺の樹林性種の個体数、繁殖状況の経年比較

種名	季節移動型	調査年度					
		平成 4-5 年(1992-3)		平成 9 年(1997)		平成 14 年(2002)	
		個体数	繁殖	個体数	繁殖	個体数	繁殖
アオバト	留鳥	-	-	-	-	3	
カッコウ	夏鳥	2		1		-	-
ツツドリ	夏鳥	8		3		5	
ホトトギス	夏鳥	4		1		11	
コノハズク	夏鳥	-	-	1		-	-
ヨタカ	夏鳥	-	-	3		4	
アカショウビン	夏鳥	-	-	-	-	2	
アオゲラ	留鳥	43		14		1	
アカゲラ	留鳥	2		1	×	-	-
オオアカゲラ	留鳥	4		-	-	-	-
コゲラ	留鳥	30		15		11	
キツキ科の一種	留鳥	-	-	1		6	
サンショウクイ	夏鳥	10		3		3	
ミソサザイ	留鳥	14		12	×	7	×
コマドリ	留鳥	1		-	-	-	-
コルリ	夏鳥	1		-	-	-	-
ルリビタキ	冬鳥	4		5	×	6	×
トラツグミ	夏鳥	5		4		5	
クロツグミ	夏鳥	4		4		3	
シロハラ	旅鳥	2		-	-	-	-
ツグミ	冬鳥	110		26	×	-	-
ヤブサメ	夏鳥	26		14		6	
メボソムシクイ	旅鳥	-	-	3	×	-	-
センダイムシクイ	夏鳥	4		-	-	-	-
キビタキ	夏鳥	3		-	-	1	
オオルリ	夏鳥	44		11		3	
エナガ	留鳥	82		57		7	×
コガラ	留鳥	13		7	×	12	×
ヒガラ	留鳥	9		49		28	
ヤマガラ	留鳥	22		51		9	
シジュウカラ	留鳥	61		56		47	
ゴジュウカラ	留鳥	2		2	×	2	×
メジロ	夏鳥	59		15		49	
アオジ	冬鳥	4		-	-	2	×
アトリ	冬鳥	-	-	628	×	20	×
マヒワ	冬鳥	10		30	×	-	-
ウソ	留鳥	1		-	-	5	×
イカル	留鳥	14		93		7	
シメ	冬鳥	-	-	2	×	-	-
カケス	留鳥	81		39		125	
ヤマドリ	留鳥	1		-	-	2	×
合計種数		33 種		29 種		28 種	
		40 種					

注 1) 表中の数値は各年度の合計個体数を示す。

注 2) 季節移動型

- ・留鳥：その地域で一年中見られるもので、その地域で繁殖する。同じ個体が一年中留まっているとは限らない。  
また、山地から平地や地域内で小規模な移動を行うものを漂鳥という。
- ・夏鳥：夏までに渡来して、その地域で繁殖をするもの。
- ・冬鳥：冬までに渡来して、その地域で越冬するもの。
- ・旅鳥：渡りの途中で一時的にその地域に立ち寄るもの。

注 3) 繁殖の判定は、国勢調査報告書の記載に従った。繁殖の記号は、以下のとおりとする。

：繁殖を確認した、：繁殖の可能性がある、：繁殖については何も言えない、×：繁殖の可能性は低い  
-：未確認

出典：6-3 「平成 4 年度ダム自然環境調査報告書」

6-4 「平成 5 年度ダム自然環境調査報告書（鳥類）」

6-14 「平成 9 年度ダム自然環境調査業務報告書（鳥類）」

6-21 「平成 14 年度ダム自然環境調査業務報告書（鳥類）」

(b) 集団分布地の状況

鳥類の集団分布地の状況を表 6.3-29 と図 6.3-54 に示す。ダム湖周辺では、真名川ダム堤体本体や橋桁等のコンクリート構造物にイワツバメの集団営巣を確認している。

イワツバメは、山地や海岸の岩壁や洞穴などに渡来して集団営巣するが、近年は橋桁などのコンクリート製建造物に営巣することも多く、真名川ダム湖周辺でも同様の傾向が見られる。

\* 参考：6-89 「川の生物図典」

表 6.3-29 ダム湖周辺における集団繁殖地の状況

集団分布	存在場所	調査年度		
		平成 4-5 年(1992-3)	平成 9 年(1997)	平成 14 年(2002)
イワツバメ 集団 営 巣 地	真名川ダム 本体	ダムの構造物でイワツバメのコロニーを確認している。	夏季に真名川ダム堤体の施設へ頻繁に出入りする数羽を観察し、上空でも約 50 羽の飛翔を観察した。	夏季に真名川ダム堤体および周辺施設で、約 30 個の営巣を確認している。
	麻那姫湖 青少年旅行村	-	キャンプ場非難棟の屋根で現在使用されている巣と古巣、計 10 個を確認している。	-
	麻那姫湖 青少年旅行村	-	夏季にキャンプ場内に架かる橋の裏で現在使用されている巣と古巣計 45 個を確認している。	-
	鎌谷川	-	夏季に鎌谷橋の裏で現在使用されている巣を 8 個確認している。	-
	雲川橋	-	-	夏季に雲川橋の裏で約 20 個の営巣を確認している。

出典：6-3 「平成 4 年度ダム自然環境調査報告書」  
 6-4 「平成 5 年度ダム自然環境調査報告書（鳥類）」  
 6-14 「平成 9 年度ダム自然環境調査業務報告書（鳥類）」  
 6-21 「平成 14 年度ダム自然環境調査業務報告書（鳥類）」

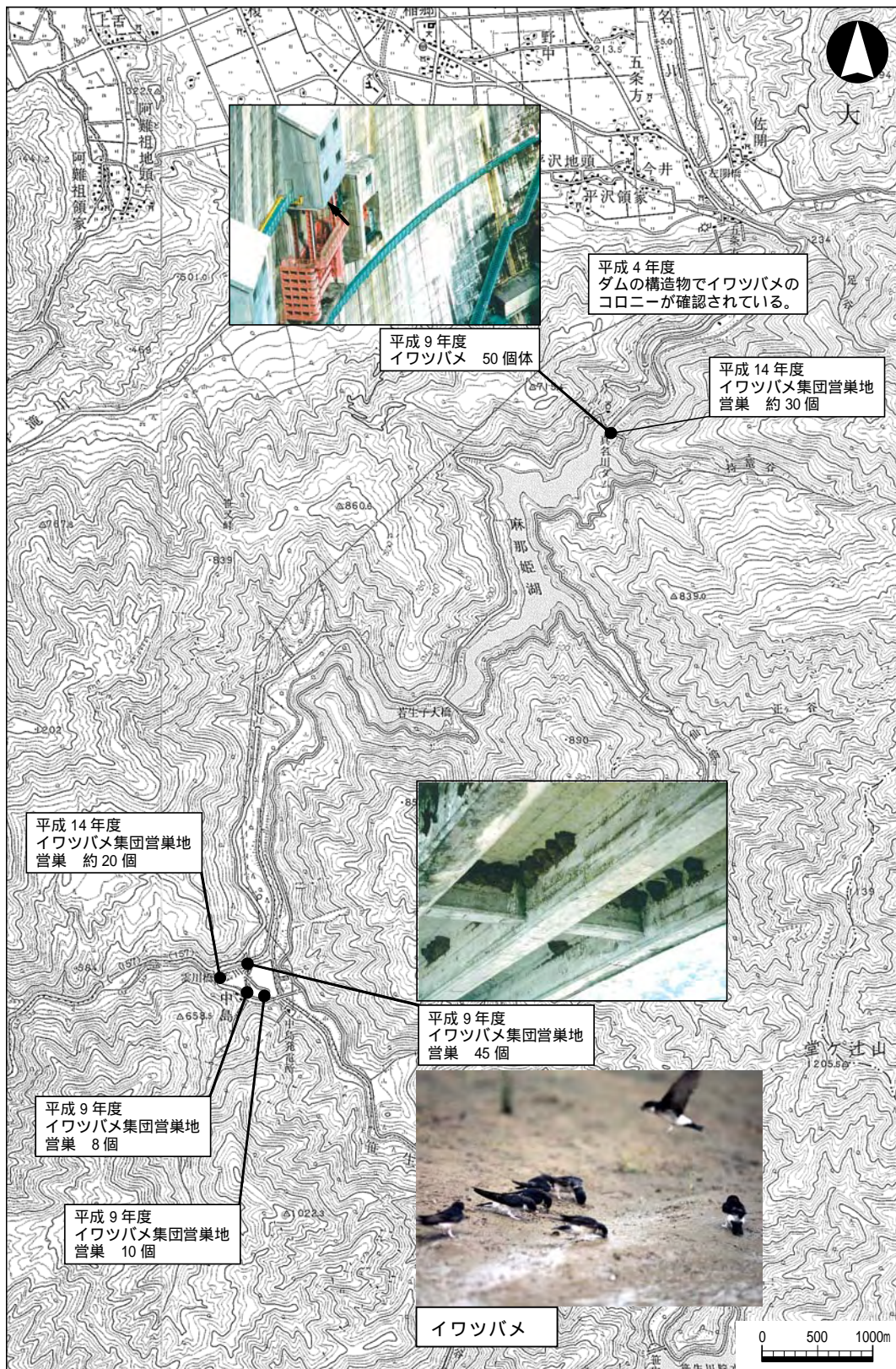


図 6.3-54 ダム湖周辺における集団繁殖地の状況

- 出典：6-3 「平成4年度ダム自然環境調査報告書」  
 6-4 「平成5年度ダム自然環境調査報告書（鳥類）」  
 6-14 「平成9年度ダム自然環境調査業務報告書（鳥類）」  
 6-21 「平成14年度ダム自然環境調査業務報告書（鳥類）」

(c)猛禽類の生息状況

猛禽類の確認状況は表 6.3-30 に示すとおりであり、ダム湖周辺では 8 種の猛禽類を確認した。確認種のうち、クマタカを継続して確認している。

また、地元の学識者により、平成 13 年の春にハヤブサがコンクリート人工構造物を利用して営巣しているのが発見された。その後のモニタリング調査において、ハヤブサの繁殖は 4 年連続で成功し、全部で 9 羽の雛の誕生を確認した。

表 6.3-30 猛禽類の確認状況の経年比較

種名	調査年度					
	平成 4-5 年(1992-3)		平成 9 年(1997)		平成 14 年(2002)	
	個体数	繁殖	個体数	繁殖	個体数	繁殖
オジロワシ	-	-	2	×	-	-
オオタカ	1		-	-	1	×
ツミ	2		2	×	-	-
ハイタカ	-	-	1	×	-	-
サシバ	7		-	-	-	-
クマタカ	5		4		3	×
イヌワシ	-	-	1		-	-
ハヤブサ	-	-	-	-	3	
合計種数	4 種		5 種		3 種	

注 1) は、平成 5 年度調査のみの確認個体数を示す。平成 4 年度調査のクマタカの確認個体数は不明である。

注 2) 表中の数値は各年度の合計個体数を示す。

注 3) 繁殖の判定は、国勢調査報告書の記載に従った。繁殖の記号は、以下のとおりとする。

○：繁殖の可能性がある、△：繁殖については何も言えない、×：繁殖の可能性は低い

出典：6-3 「平成 4 年度ダム自然環境調査報告書」

6-4 「平成 5 年度ダム自然環境調査報告書（鳥類）」

6-14 「平成 9 年度ダム自然環境調査業務報告書（鳥類）」

6-21 「平成 14 年度ダム自然環境調査業務報告書（鳥類）」



雛鳥たち

真名川ダム管理支所

平成 16 年撮影

図 6.3-55 確認されたハヤブサの雛鳥

(d)外来種（外来種をどの程度確認しているか）

外来種の種別個体数の経年比較を表 6.3-31 に示す。ダム湖周辺では平成 9 年度にドバトを確認したのみである。

表 6.3-31 外来種の確認種、種別個体数の経年比較

種名	調査年度			備考
	平成 4-5 年 (1992-3)	平成 9 年 (1997)	平成 14 年 (2002)	
ドバト	-	3	-	外来種
合計種数	0 種	1 種	0 種	-

注 1)表中の数値は年間の合計個体数を示す

注 2)外来種：「外来種ハンドブック」の掲載種

出典：6-3 「平成 4 年度ダム自然環境調査報告書」  
6-4 「平成 5 年度ダム自然環境調査報告書（鳥類）」  
6-14 「平成 9 年度ダム自然環境調査業務報告書（鳥類）」  
6-21 「平成 14 年度ダム自然環境調査業務報告書（鳥類）」  
6-102 「外来種ハンドブック」



### 3)両生類・爬虫類・哺乳類

両生類・爬虫類・哺乳類は、平成5～6年度から平成17年度の間に行った3回の調査で、両生類と爬虫類はそれぞれ10種、哺乳類は24種を確認した。両生類では、溪流環境に生息するカジカガエル等を継続して確認している。爬虫類では、林縁から草地環境に生息するトカゲやカナヘビ、水辺環境を好むシマヘビやヤマカガシ等を継続して確認している。哺乳類では、アカネズミ等の小型哺乳類やタヌキ等の中型哺乳類及び、カモシカ等の大型哺乳類を継続して確認している。

#### (a)樹林性種の生息状況

ダム湖周辺では、2目6科10種の両生類、2目5科10種の爬虫類、7目14科24種の哺乳類を確認した。確認種の中で、主に樹林環境を利用する種を抽出した結果は、表6.3-32に示すとおりである。ダム湖周辺は6-150頁の表6.3-27に示すとおり、約8割が樹林環境となっている。このため、ニホンリス、ヒメネズミなどの小型哺乳類から、ツキノワグマやカモシカなどの大型哺乳類を含む10種を確認した。これらの種のうち、樹上空間を利用するテンヤ、木本及び草本類の葉を餌とするカモシカを継続して確認している。

表 6.3-32 ダム湖周辺における樹林性種の確認個体数の経年比較

種名	調査年度		
	平成 6 年(1994)	平成 12 年(2000)	平成 17 年(2005)
ニホンザル	3	33	5
ニホンリス	-	23	12
モモンガ	-	1	-
ムササビ	-	1	4
スミスネズミ	1	-	-
ヒメネズミ	10	4	-
ツキノワグマ	-	-	5
テン	16	9	26
アナグマ	-	3	3
カモシカ	11	18	8
合計種数	5 種	8 種	7 種

注) 表中の数値は年間の合計個体数を示す

出典：6-8 「平成 6 年度ダム自然環境調査報告書（哺乳類）」  
 6-17 「平成 12 年度ダム自然環境調査業務報告書（両生類・爬虫類・哺乳類）」  
 6-25 「平成 17 年度ダム自然環境調査業務報告書（両生類・爬虫類・哺乳類）」



出典:6-17 「平成 12 年度ダム自然環境調査業務報告書（両生類・爬虫類・哺乳類）」

図 6.3-56 確認された樹林性種

(b)ロードキル<sup>4</sup>の確認状況

道路上で確認されたロードキル等の確認状況を表 6.3-33 に、確認位置を図 6.3-57 に示す。

道路上で確認した死体は平成 6 年度に 1 種 1 個体、平成 12 年度に 5 種 23 個体、平成 17 年度に 11 種 16 個体を確認した。これらのうち、車両に轢かれた形跡があるものは、両生類のイモリ、爬虫類のカナヘビ、タカチホヘビ、シマヘビ、シロマダラ、ヤマカガシ、マムシであった。

また、平成 17 年度に確認数が増加しているのは、調査範囲の差異に由来すると考えられる。

なお、車両に轢かれた形跡の無いもの（ヒミズおよびモグラ属の一種、アナグマ、カモシカ等）もあり、これらは、車両によるロードキル以外（自然死など）の可能性も考えられる。

表 6.3-33 ロードキル等の確認状況

種名	調査年度			
	平成 5 年 (1993)	平成 6 年(1994)	平成 12 年(2000)	平成 17 年(2005)
イモリ			5	1
カナヘビ				1
タカチホヘビ				2
シマヘビ			3	1
アオダイショウ				1
シロマダラ				2
ヤマカガシ			5	2
マムシ			1	
ヒミズ		1	9	3
モグラ属の一種				1
アナグマ				1
カモシカ				1
合計種数	0 種	1 種	5 種	11 種

注 1) は国勢調査のマニュアル策定前の調査

注 2) 表中の数値は年間の合計個体数を示す

出典：6-5 「平成 5 年度ダム自然環境調査報告書（両生類・爬虫類）」

6-8 「平成 6 年度ダム自然環境調査報告書（哺乳類）」

6-17 「平成 12 年度ダム自然環境調査業務報告書（両生類・爬虫類・哺乳類）」

6-25 「平成 17 年度ダム自然環境調査業務報告書（両生類・爬虫類・哺乳類）」

<sup>4</sup> ロードキル：道路上で発生した野生動物の死亡事故。

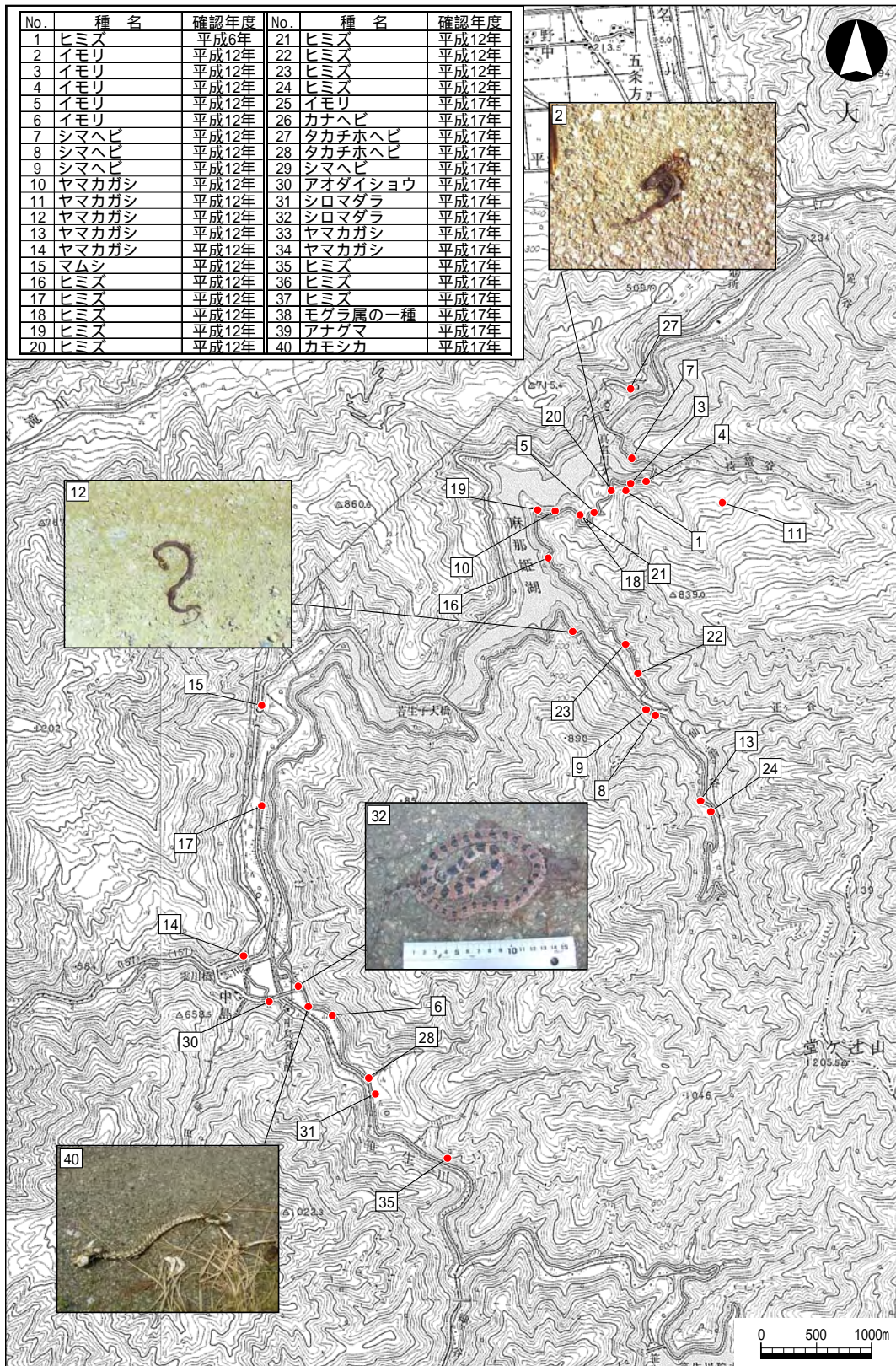


図 6.3-57 ロードキルの確認状況

- 出典：6-5 「平成5年度ダム自然環境調査報告書（両生類・爬虫類）」  
 6-8 「平成6年度ダム自然環境調査報告書（哺乳類）」  
 6-17 「平成12年度ダム自然環境調査業務報告書（両生類・爬虫類・哺乳類）」  
 6-25 「平成17年度ダム自然環境調査業務報告書（両生類・爬虫類・哺乳類）」

(c)両生類の繁殖状況

両生類の繁殖状況（卵塊、卵のう、幼生の確認箇所数）を表 6.3-34 に示す。卵塊、卵のう、幼生は平成 5 年度に 1 種 3 箇所、平成 12 年度に 4 種 27 箇所、平成 17 年度に 5 種 19 箇所を確認した。

環境別では側溝や水たまりなどの一時的水域でイモリ、アズマヒキガエル、ヒキガエル属の一種、モリアオガエル、ヤマアカガエルなどを確認し、ダム湖周辺の沢や細流でカジカガエル、ヒダサンショウウオを確認した。

ヒキガエル属の一種とヒダサンショウウオは平成 12 年度以降、モリアオガエルは平成 5 年度以降に継続して確認しており、繁殖状況に大きな変化はないと考えられる。

表 6.3-34 両生類の卵塊、卵のう、幼生確認箇所数の経年比較

種名	調査年度			確認内容
	平成 5 年(1993)	平成 12 年(2000)	平成 17 年(2005)	
イモリ		1		幼生
アズマヒキガエル		1		卵塊
ヒキガエル属の一種		2	1	卵塊、幼生
カジカガエル			6	幼生
ヒダサンショウウオ		10	3	卵のう、幼生
モリアオガエル	3	13	2	幼生
ヤマアカガエル			7	幼生
合計種数	1 種	4 種	5 種	

注 1)表中の数値は年間の合計個体数を示す

出典：6-5 「平成 5 年度ダム自然環境調査報告書（両生類・爬虫類）」

6-17 「平成 12 年度ダム自然環境調査業務報告書（両生類・爬虫類・哺乳類）」

6-25 「平成 17 年度ダム自然環境調査業務報告書（両生類・爬虫類・哺乳類）」



出典：6-17 「平成 12 年度ダム自然環境調査業務報告書（両生類・爬虫類・哺乳類）」

図 6.3-58 確認されたヒダサンショウウオの卵塊

(d)外来種（外来種をどの程度確認しているか）

外来種は、ハツカネズミとハクビシンの2種を確認した。外来種の確認状況を表6.3-35に示す。

ハツカネズミは平成6年度調査で1個体確認されたが、以降の調査では確認されず、生息状況は不明である。

ハクビシンは戦中から戦後にかけて日本各地に移入された種であり、ダム湖周辺では継続して確認している<sup>5</sup>。

表 6.3-35 ダム湖周辺における外来種の確認個体数の経年比較

種名	調査年度			備考
	平成6年 (1994)	平成12年 (2000)	平成17年 (2005)	
ハツカネズミ	1	-	-	外来種
ハクビシン	12	3	5	外来種
合計種数	2種	1種	1種	-

注1)表中の数値は年間の合計個体数を示す

注2) 外来種：「外来種ハンドブック」(日本生態学会 平成14年)掲載種

出典：6-8 「平成6年度ダム自然環境調査報告書（哺乳類）」

6-17 「平成12年度ダム自然環境調査業務報告書（両生類・爬虫類・哺乳類）」

6-25 「平成17年度ダム自然環境調査業務報告書（両生類・爬虫類・哺乳類）」



出典：6-17 「平成12年度ダム自然環境調査業務報告書（両生類・爬虫類・哺乳類）」

図 6.3-59 確認された外来種

<sup>5</sup> ハクビシンについて、現在、福井県以北の本州と四国に広く生息しており、今後も分布域を広げる可能性が高い。

資料：6-102 「外来種ハンドブック」

#### 4)陸上昆虫類

陸上昆虫類では、平成4～5年度から平成16年度の間に行った3回の調査で、1900種を確認した。確認種の中には、止水環境に依存するトンボ類やチビゲンゴロウ等のゲンゴロウ類をはじめ、樹林環境や草地環境などに依存する種が含まれていた。

#### (a)チョウ類の指標性別確認状況（植生の変化で樹林性のチョウ類の生息状況が変化しているか）

ダム湖周辺では、16目226科1900種の陸上昆虫類を確認し、その中には表6.3-36に示すとおり60種のチョウ類が含まれていた。なお、「福井県昆虫目録（第2版）」（福井県平成10年）によると、福井県からは偶産種を含め116種のチョウ類が記録されているが、そのうち真名川ダム周辺では半分強が記録されたことになる。各調査年度の確認種を比較すると、平成11年度にタテハチョウ科のヒョウモンチョウ類が多かったが、それ以外はほぼ同様な種構成であった。

巢瀬(1993)のチョウ類にとっての環境の状態を判断する環境指数によると、図6.3-60に示すとおり、いずれの調査年度も多自然種と準自然種で多くを占めていた。また、平成4～5年度と平成16年度のEI値は74と86であり、ダム湖周辺は農村や人里的な中自然環境と判断され、平成11年度のEI値は102で、ダム湖周辺は良好な林や草原が存在する多自然と判断された。

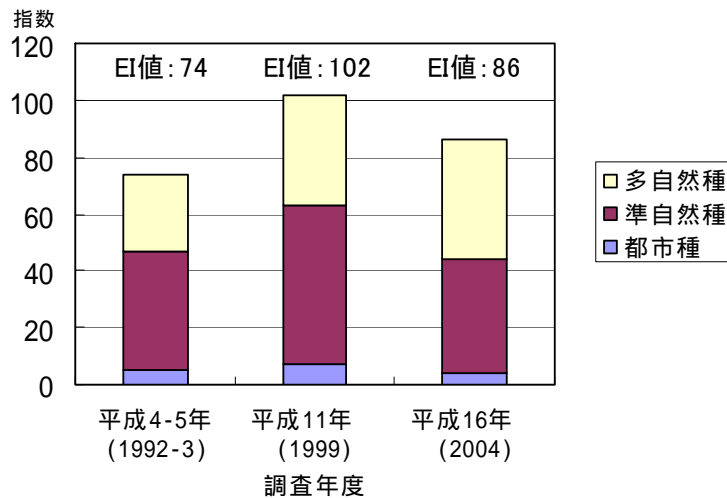


図 6.3-60 チョウ類の経年確認状況

注) 図中の(指数)及び環境指数EIは、巢瀬(1993)が考案したチョウ類の指数。

環境指数  $EI = \sum X_i$  ただし  $X_i$  は  $i$  番目の種の指数。

- EI 0 - 9: 貧自然 (都市中心部)
- 10 - 39: 寡自然 (住宅地・公園緑地)
- 40 - 99: 中自然 (農村・人里)
- 100 - 149: 多自然 (良好な林や草原)
- 150 - : 富自然 (極めて良好な林や草原)

- 出典: 6-3 「平成4年度ダム自然環境調査報告書」  
 6-6 「平成5年度ダム自然環境調査報告書(昆虫類)」  
 6-16 「平成11年度ダム自然環境調査報告書(昆虫類)」  
 6-24 「平成16年度ダム自然環境調査業務報告書(陸上昆虫類等)」

表 6.3-36(1) チョウ類の確認種と指数及びE I 値の経年比較

種 名	調査年度		
	平成 4-5 年 (1992-3)	平成 11 年 (1999)	平成 16 年 (2004)
ミヤマセセリ			3
ダイミョウセセリ	3	3	3
アオバセセリ			2
コチャバネセセリ	3	3	3
ホソバセセリ		2	
ヒメキマダラセセリ		2	
コキマダラセセリ	3		
キマダラセセリ	2	2	
チャバネセセリ	2	2	2
イチモンジセセリ	1	1	1
ウスバシロチョウ	2	2	2
ナミアゲハ	1	1	1
キアゲハ	2	2	2
モンキアゲハ	3		
クロアゲハ	2	2	
オナガアゲハ	3	3	3
カラスアゲハ	3	3	3
ミヤマカラスアゲハ	3	3	3
モンキチョウ	2	2	
キタキチョウ(キチョウ)	2	2	2
スジボソヤマキチョウ	2		
ツマキチョウ			2
モンシロチョウ	1	1	1
ヤマトスジグロシロチョウ	3	3	3
スジグロシロチョウ	2	2	2
ウラゴマダラシジミ		2	
ウラクロシジミ		3	
オナガシジミ		2	
ウスイロオナガシジミ		3	3
ミドリシジミ			3
アイノミドリシジミ		3	
ジョウザンミドリシジミ	3	3	3
トラフシジミ	2		2
ベニシジミ	1	1	
ウラナミシジミ	1	1	
ヤマトシジミ		1	1
ルリシジミ	2	2	2
スギタニルリシジミ			3
ツバメシジミ	2	2	2
ウラギンシジミ	2	2	2
テングチョウ	2	2	
アサギマダラ		3	3
ウラギンスジヒョウモン		2	
オオウラギンスジヒョウモン		2	
メスグロヒョウモン		2	
ミドリヒョウモン		2	2
ウラギンヒョウモン		3	3
ツマグロヒョウモン		1	
イチモンジチョウ	2	2	2
アサマイチモンジ		2	2
コミスジ	2	2	2
ミスジチョウ			3
サカハチチョウ	2	2	2
ヒオドシチョウ			2



表 6.3-36(2) チョウ類の確認種と指数及びE I 値の経年比較

種 名	調査年度		
	平成 4-5 年 (1992-3)	平成 11 年 (1999)	平成 16 年 (2004)
ルリタテハ	2	2	2
アカタテハ	2	2	2
ヒメアカタテハ		2	2
スミナガシ		3	
コムラサキ	2	2	
オオムラサキ	2		
合計種数	35 種	48 種	38 種
環境指数 (EI)	74	102	86

注) 表中の数値 (指数) 及び環境指数 EI は、巢瀬 (1993) が考案したチョウ類の指数。

指数 1: 都市種 指数 2: 準自然種 指数 3: 多自然種

環境指数  $EI = \sum X_i$  ただし  $X_i$  は  $i$  番目の種の指数。

EI 0 - 9 : 貧自然 (都市中心部)  
 10 - 39 : 寡自然 (住宅地・公園緑地)  
 40 - 99 : 中自然 (農村・人里)  
 100 - 149 : 多自然 (良好な林や草原)  
 150 - : 富自然 (極めて良好な林や草原)

出典 : 6-3 「平成 4 年度ダム自然環境調査報告書」

6-6 「平成 5 年度ダム自然環境調査報告書 (昆虫類)」

6-16 「平成 11 年度ダム自然環境調査報告書 (昆虫類)」

6-24 「平成 16 年度ダム自然環境調査業務報告書 (陸上昆虫類等)」

(b) 止水性水生昆虫（止水性水生昆虫の成虫が飛来しているか）

ダム湖周辺における止水性水生昆虫（成虫）の出現状況を表 6.3-37 に示す。

止水性水生昆虫類を多く含むと考えられるトンボ目、コウチュウ目の中から典型的な止水性水生昆虫類 18 種を抽出し、各調査年の確認状況を比較した。

年度別の確認種数は、平成 4～5 年度が 5 種、平成 11 年度が 18 種、平成 16 年度が 4 種であった。平成 11 年度には、図 6.1-3(7)に示すとおり、ダム湖周辺を中心に調査地点の選定を行い他年度より調査範囲が広がったため、多くの種を確認したと考えられる。また、ダム湖内における底生動物の調査においても、ミズカマキリやゲンゴロウ類等の水生昆虫を確認した。

表 6.3-37 止水性昆虫（成虫）の確認状況

種名	調査年度		
	平成 4-5 年 (1992-3)	平成 11 年 (1999)	平成 16 年 (2004)
シオカラトンボ			
シオヤトンボ			
オオシオカラトンボ			
ウスバキトンボ			
コシアキトンボ			
コノシメトンボ			
ナツアカネ			
マユタテアカネ			
アキアカネ			
ノシメトンボ			
ミヤマアカネ			
チビゲンゴロウ			
ホソセスジゲンゴロウ			
ヒメゲンゴロウ			
キベリヒラタガムシ			
シジミガムシ			
ガムシ			
ヤマトゴマフガムシ			
合計種数	5 種	18 種	4 種

出典：6-3 「平成 4 年度ダム自然環境調査報告書」  
6-6 「平成 5 年度ダム自然環境調査報告書（昆虫類）」  
6-16 「平成 11 年度ダム自然環境調査報告書（昆虫類）」  
6-24 「平成 16 年度ダム自然環境調査業務報告書（陸上昆虫類等）」

(4)ダムによる影響の検証

ダム湖周辺の生物の変化に対するダムによる影響の検証結果を表 6.3-38 及び図 6.3-61 に示す。

表 6.3-38(1) ダム湖周辺の生物の変化に対するダムによる影響の検証結果 (植物)

検討項目	生物の変化の状況	ダムの存在・供用に伴う影響	ダムの存在・供用以外の影響	検証結果	
生息状況の変化	ダム湖周辺の植生	-	土地改良や土壌の攪乱	ダム湖周辺の群落やその群落面積比率にほとんど変化がみられないことから、植生に大きな変化はみられないと考えられる。	-
	原石山跡地の植生の変化	-	-	斜面上部の人工草地在りススキ群落に置き換わったほかに大きな変化はみられなかった。	-
	外来種の生育状況	人の利用による外来種の侵入	-	ほぼ同数の外来種を毎回確認している。	-
		一般に法面緑化に利用される種であるイタチハギは昭和 53 年度には確認はなく、平成 7～15 年度に確認した。	生息域の攪乱 人利用の増加による外来種の侵入	裸地対策試験による外来性緑化種の導入	イタチハギについては、平成 7 年度から実施した「真名川ダム湖岸裸地対策調査」における緑化試験で使用したイタチハギが、移出して分布を広げている可能性が考えられる。

注)検証結果

- ：生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によると考えられる場合
- ：生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によると考えられる場合
- ：生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- ：生物の生息・生育状況に、大きな変化が見られなかった場合
- ？：生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合

表 6.3-38(2) ダム湖周辺の生物の変化に対するダムによる影響の検証結果（鳥物）

検討項目		生物の変化の状況	ダムの存在・供用に伴う影響	ダムの存在・供用以外の影響	検証結果	
生息状況の変化	樹林性種	ツツドリ、コゲラ、サンショウクイ、クログミ、シジュウカラ等、多くの樹林性鳥類を確認した。	-	-	多くの樹林性種を継続して確認している。	-
	集団分布地	イワツバメの集団営巣を継続して確認している。	人工建造物の存在	-	橋桁等の人工建造物が継続して営巣場所として利用されている。	
	猛禽類	ダム湖周辺では、オジロワシ、オオタカ等の 8 種類の猛禽を確認し、ハヤブサについては繁殖を確認している。	人工建造物の存在	-	ダム湖周辺は、猛禽類を確認するなど、豊かな森林環境が広がっている。ハヤブサが人工建造物に営巣している。	-

注)検証結果

- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- : 生物の生息・生育状況に、大きな変化が見られなかった場合
- ? : 生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合

表 6.3-38(3) ダム湖周辺の生物の変化に対するダムによる影響の検証結果

(両生類・爬虫類・哺乳類)

検討項目		生物の変化の状況	ダムの存在・供用に伴う影響	ダムの存在・供用以外の影響	検証結果	
生息状況の変化	a) 樹林性種	ネズミ類などの小型哺乳類からツキノワグマ等の大型哺乳類を含む 10 種を確認した。	-	-	樹林を生息場所とし木本や草本の葉を餌とするカモシカと、樹上空間を多く利用するテンを継続して確認している。	-
	b) 道路上の轢死体	道路上で平成 6 年度に 1 種(1 個体)、平成 12 年度に 5 種(23 個体)、平成 17 年度に 11 種(16 個体)の動物の死体を確認した。	-	国道の供用 通行車両の増加	ダム湖周辺道路では、主に両生類・爬虫類のロードキルを確認しており、その確認種数は増加している。	
	c) 両生類の繁殖状況	イモリ、カジカガエル、ヒダサンショウウオ等 6 種の両生類の繁殖(卵塊、卵のうち、幼生)を確認した。	-	-	沢などで繁殖するヒダサンショウウオをはじめ、3 種の両生類について、平成 12 年以降継続して繁殖を確認している。	-
	d) 外来種	ハクビシン、ハツカネズミを確認し、ハクビシンは継続して確認した。	-	人の利用による 外来種の侵入	ハクビシンは平成 6 年度の調査より継続して確認している。	

注)検証結果

- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- : 生物の生息・生育状況に、大きな変化が見られなかった場合
- ? : 生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合

表 6.3-38(4) ダム湖周辺の生物の変化に対するダムによる影響の検証結果（陸上昆虫類）

検討項目		生物の変化の状況	ダムの存在・供用に伴う影響	ダムの存在・供用以外の影響	検証結果	
生息状況の変化	a) チョウ類相	いずれの調査年度も多自然種と準自然種で多くを占めていた。平成 4～5 年度と平成 16 年度の EI 値は 74 と 86 であり、ダム湖周辺は中自然環境と判断された。また、平成 11 年度の EI 値は 102 であり、多自然と判断された。	-	-	ダム湖周辺のチョウ類の生息環境に大きな変化は認められない。	-
	b) 止水性水生昆虫	平成 4～5 年度には 5 種、平成 11 年度には 18 種、平成 16 年度には 4 種の止水性水生昆虫を確認した。	止水域の存在	-	ダム湖周辺で、止水性昆虫類を継続的に確認しており、ダム湖内でミズカマキリやゲンゴロウ類の生息を確認した。	

注)検証結果

- ：生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によると考えられる場合
- ：生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によると考えられる場合
- ：生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- ：生物の生息・生育状況に、大きな変化が見られなかった場合
- ?：生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合

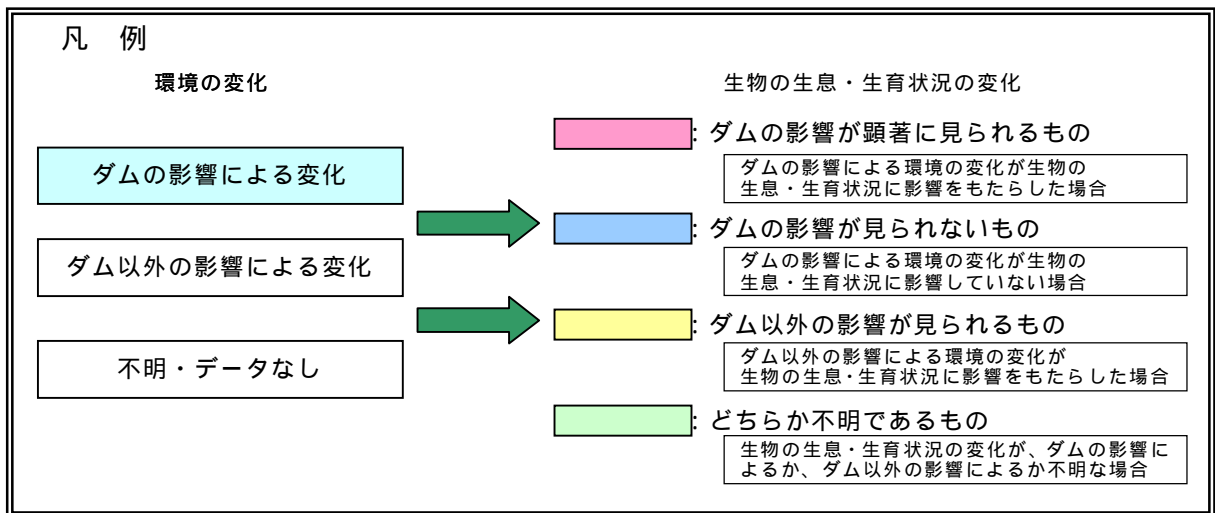
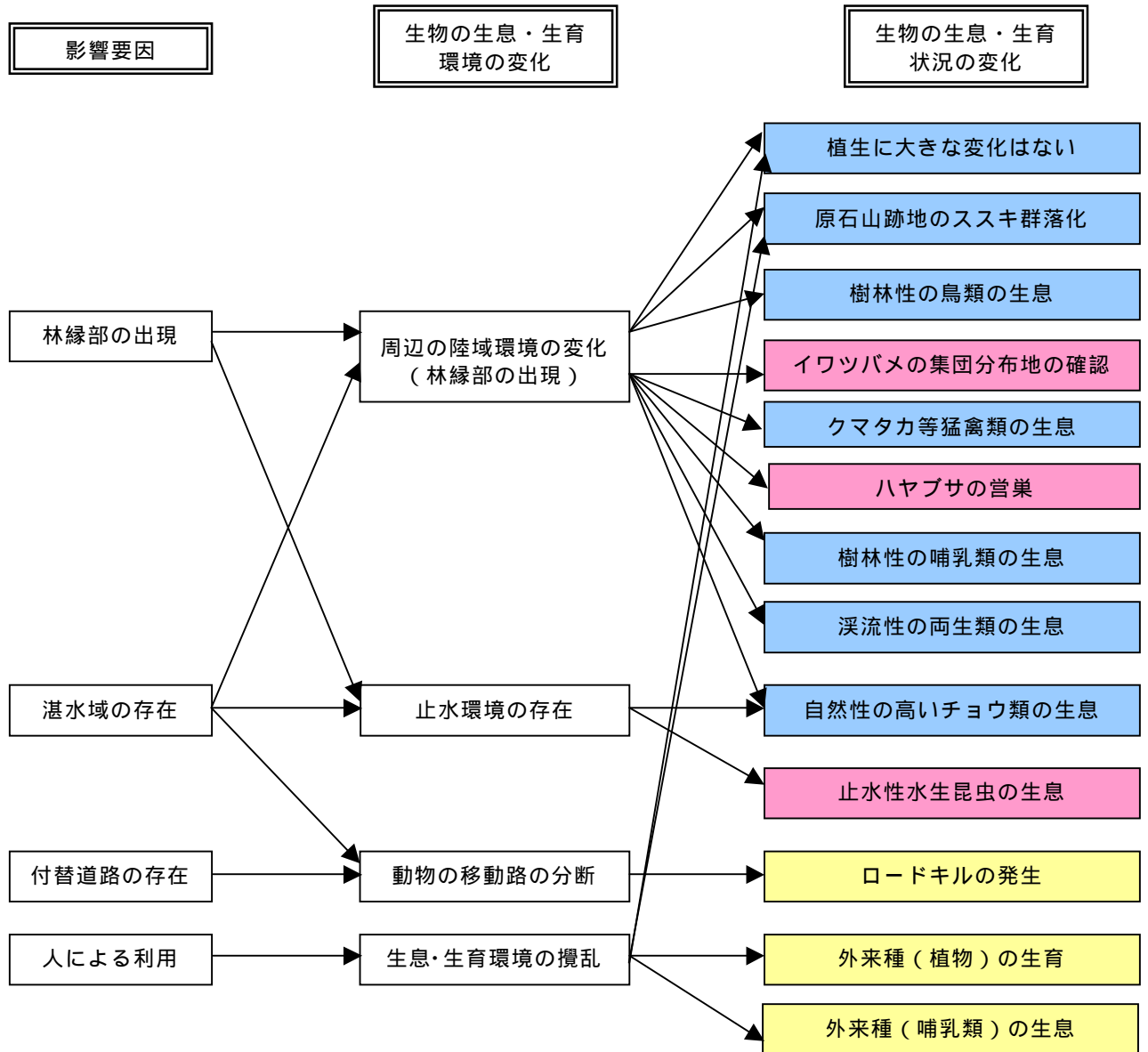


図 6.3-61 ダム湖周辺の生物の変化に対する影響の検証結果

6.3.5 連続性の観点からみた生物の生息・生育状況の変化の検証

ダムが存在により、ダム湖周辺において連続性の分断が生じ、ダム湖周辺を利用する様々な生物の生息・生育状況の変化を引き起こすと想定されている。

そのためここでは、真名川ダム湖周辺において引き起こされる生物の生息・生育状況の変化を図 6.3-62 のように想定し、真名川ダムの存在により連続性の観点からダム湖周辺の生息・生育状況が変化しているかどうかの検証を以下の手順で行った。

(1) 生物の生息・生育状況の変化の把握

- ・ 回遊性魚類の確認状況

(2) ダムによる影響の検証

真名川ダムの生物の生息・生育状況の変化について、連続性の観点から検討し、ダムによる影響を検証した。

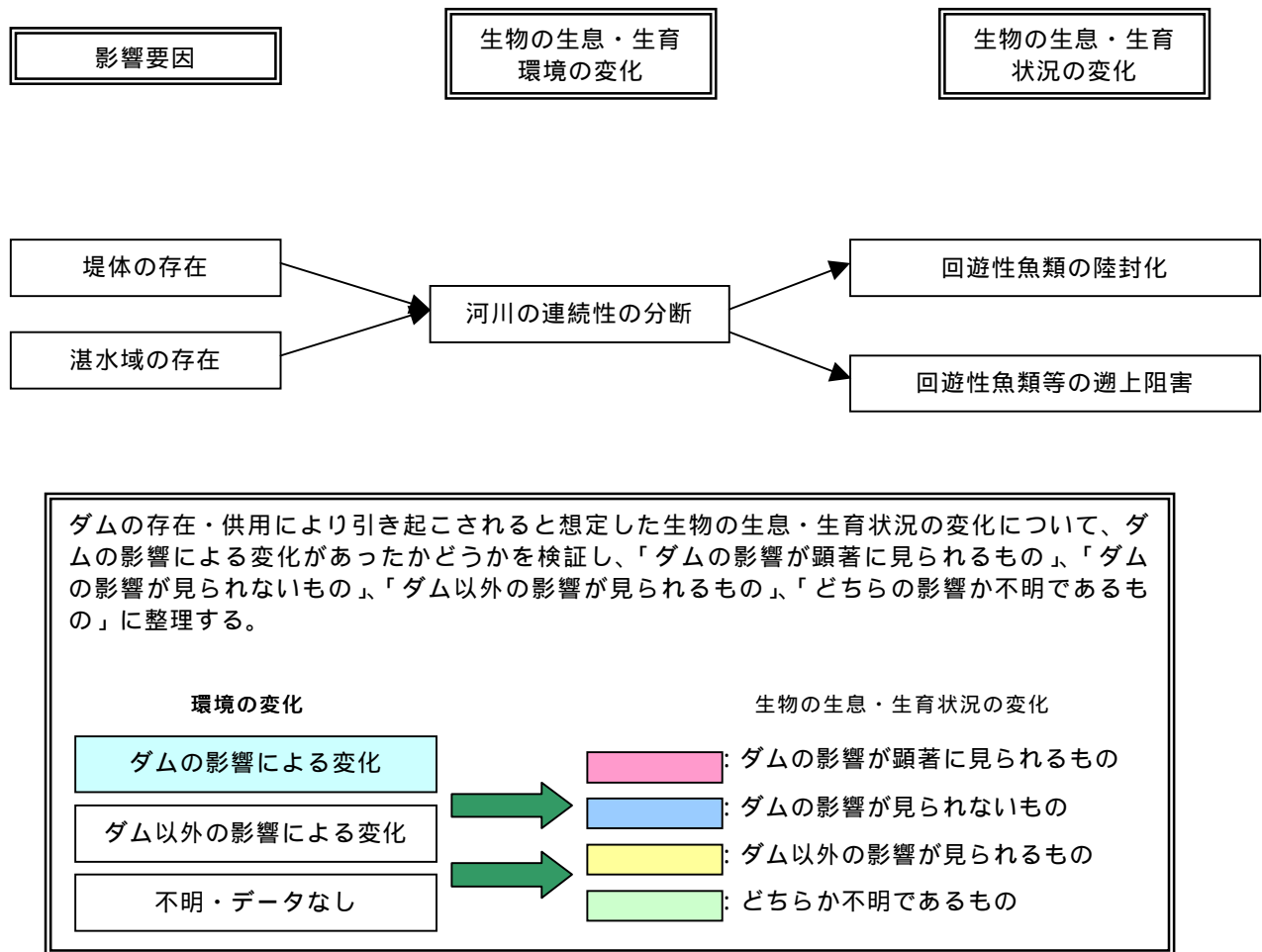


図 6.3-62 連続性の観点から想定される環境への影響要因と生物の生息・生育環境の変化



(1)生物の生息・生育状況の変化の把握

1)回遊性魚類の確認状況

(a) 回遊性魚類の陸封化

ダムが存在により、ダム湖周辺において連続性の分断が生じ、回遊性魚類の生息状況が変化する可能性がある。

そこで、ダム湖内及び流入河川における回遊魚の生息状況を整理した結果、ダム湖内ではワカサギ、アユ、イワナ、ヤマメ、アマゴ(サツキマス)、トウヨシノボリの6種を、流入河川ではアユ、イワナ、ヤマメ、アマゴ(サツキマス)、トウヨシノボリの5種を回遊魚として確認した。

ワカサギは平成3年度、5年度、8年度にダム湖内で少数を確認したが、平成13年度には確認しておらず、生息状況は不明である。

アユはダム湖の上流河川で釣り人等により私的に放流されていることから、これらの個体を確認している可能性がある。

イワナは平成3年度以降4回の調査で確認している。大小の個体が混ざって確認していることから、陸封化されていると考えられる。

ヤマメは平成8年度から継続して確認しているが捕獲数が少ないことから、ダム湖で陸封されているかは不明であると考えられる。

アマゴ(サツキマス)はダム湖内及び流入河川において、4回の調査で継続して確認した。ダム湖内で確認したアマゴ(平均体長16.8cm)は流入河川(平均体長11.0cm)より大きな個体が多く、平成13年度には降湖型のサツキマスを3個体(体長21.5~34.0cm)確認した。小型の個体(体長10cm程度)も確認しており、ダム湖上流河川(雲川)では平成2年以降に放流されていないことなどから、陸封されていると考えられる。

トウヨシノボリは流入河川で平成8年度の調査から継続して確認した。真名川をはじめ、各支川でも確認されており、ダム湖によって陸封された個体が繁殖して分布を広げていると考えられる。

(b)回遊性魚類等の遡上阻害

回遊性魚類の確認状況を表 6.3-39 に示す。

回遊魚は、ワカサギ、アユ、イワナ、ヤマメ、アマゴ（サツキマス）、トウヨシノボリの6種を確認した<sup>1</sup>。真名川ダムには魚道が設置されていないことから、回遊性魚類等の遡上は阻害されている。

ワカサギ、イワナ、ヤマメ、アマゴ（サツキマス）、トウヨシノボリは、湖やダム湖等により陸封化することが知られており、イワナ、アマゴ（サツキマス）、トウヨシノボリはこれまでの調査結果から陸封化していると考えられる。ワカサギとヤマメについては、いずれの調査でも捕獲数が少なく、確認されない年もあることから、陸封化を判断できなかった。なお、アユはダムの上流、下流で確認されているが、ダム湖上流における放流によって個体群が維持されているものと考えられる。

表 6.3-39 ダム湖上下流における回遊性魚類の確認状況

種名	下流河川		ダム湖内	流入河川 (流入河川) (流入支川)	評価
ワカサギ	(1/5)	真名川 ダム	(3/4)		陸封化?
アユ	(2/5)		(4/4)	(3/4)	放流による維持
イワナ	(3/5)		(4/4)	(3/4)	陸封化
ヤマメ	(5/5)		(2/4)	(3/4)	陸封化?
アマゴ (サツキマス)	(5/5)		(4/4) (1/4)	(4/4) (1/4)	陸封化
トウヨシノボリ	(3/5)		(1/4)	(2/4)	陸封化

注1)( )内の数字は調査回数あたりの確認回数を示す。例：4回中1回確認 (1/4)

注2)調査の概要は以下のとおりである。

- 平成2年度：調査回数2回(6~7,10月) 調査地点2地点
- 平成3年度：調査回数2回(6,9月) 調査地点4地点
- 平成5年度：調査回数1回(9月) 調査地点7地点
- 平成8年度：調査回数3回(5,8,10月) 調査地点10地点
- 平成9年度：調査回数3回(5,8,10月) 調査地点2地点
- 平成10年度：調査回数3回(6,8,10月) 調査地点2地点
- 平成13年度：調査回数3回(5,7,9~10月) 調査地点13地点

- 出典：6-1 「平成2年度水生生物(魚貝類)調査作業報告書」  
 6-2 「平成3年度水生生物調査作業報告書」  
 6-7 「平成5年度ダム自然環境調査報告書(魚介類)」  
 6-12 「平成8年度ダム自然環境調査業務報告書(魚介類)」  
 6-33 「平成9年度ダム自然環境調査業務報告書(魚介類)」(国勢調査以外の調査)  
 6-34 「平成10年度ダム自然環境調査業務報告書(魚介類)」(国勢調査以外の調査)  
 6-19 「平成13年度ダム自然環境調査業務報告書(魚介類)」  
 6-66 「日本の淡水魚」

<sup>1</sup> ワカサギとアマゴは、元々九頭竜川水系には生息せず、人為的に持ち込まれた「国内外来種」である。真名川ダムの湖内には移入されたワカサギが少数生息している。  
 出典：6-64 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 福井県レッドデータブック(動物編)」

(2)ダムによる影響の検証

連続性の観点からみた生物の変化に対するダムによる影響の検証結果を表 6.3-40 及び図 6.3-63 に示す。

表 6.3-40 連続性の観点からみた生物の変化に対するダムによる影響の検証結果

検討項目	生物の変化の状況	ダムの存在・供用に伴う影響	ダムの存在・供用以外の影響	検証結果	
生息状況の変化	a) 回遊性魚類の陸封化	ダム湖内ではワカサギ、アユ、イワナ、ヤマメ、アマゴ(サツキマス)、トウヨシノボリの6種を、流入河川ではアユ、イワナ、ヤマメ、アマゴ、トウヨシノボリの5種を回遊魚として確認した。	堤体・湛水域の存在	-	調査結果より、イワナ、アマゴ(サツキマス)、トウヨシノボリの3種が陸封されていると考えられる。 ダム湖の環境に適応し、陸封化したと考えられる。
	b) 回遊性魚類等の遡上阻害	回遊魚は、ワカサギ、アユ、イワナ、ヤマメ、アマゴ(サツキマス)、トウヨシノボリの6種を確認した。	堤体・湛水域の存在	-	真名川ダムには魚道が設置されていないことから、回遊性魚類等の遡上は阻害されている。 確認した回遊魚は、陸封化や放流によって個体群を維持していると考えられる。

注)検証結果

- ： 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によると考えられる場合
- ： 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によると考えられる場合
- ： 生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- : 生物の生息・生育状況に、大きな変化が見られなかった場合
- ? : 生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合

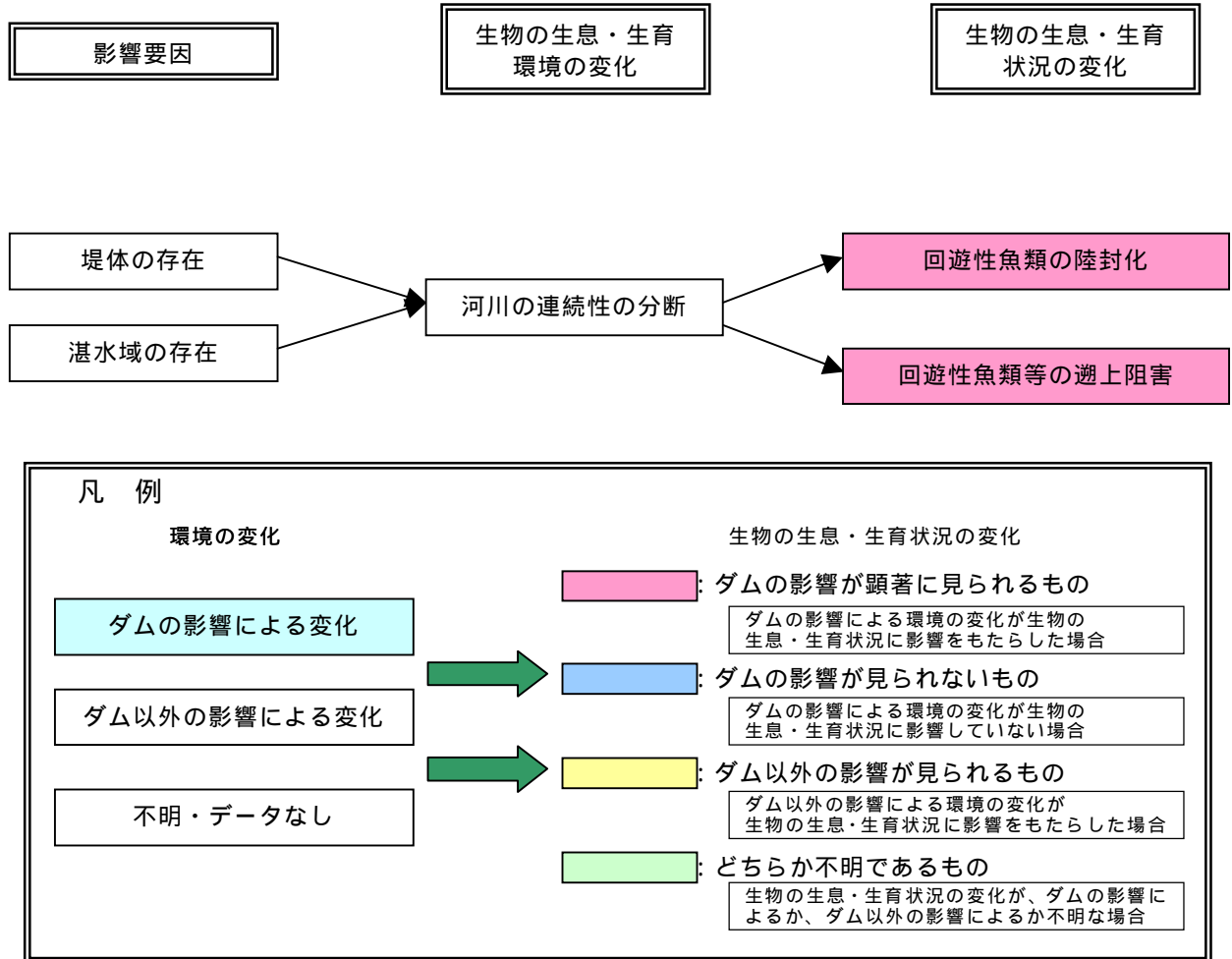


図 6.3-63 連続性の観点からみた生物の変化に対する影響の検証結果

6.3.6 重要種の生息・生育状況の変化の検証

(1)変化状況の把握

1)重要種の生息状況(動物)

重要種の生息状況の変化を表 6.3-41～表 6.3-49 に示す。

表 6.3-41(1) 重要種（魚類）の生息状況の変化

種名	指定区分	生息状況等	生態的特徴	確認年度											変化の状況			
				ダム湖内				流入河川				下流河川						
				H3	H5	H8	H13	H2	H5	H8	H13	H2	H8	H9		H10	H13	
ハス	VU 県 CR+EN	ダム湖内、流入河川において確認した。	魚食性である。食物の供給が保証される大河川や湖沼に連なる河川でないと生存は困難である。															H3、H8 と確認されていたが、H13は確認されていない。
アジメドジョウ	VU 県 VU	流入河川、下流河川において確認した。	水の澄んだ上・中流域にすみ、付着藻類を食べる。秋には上流へ移動し、晩秋伏流水中にもぐる。															H8、H9、H13 と確認している
アカザ	VU 県 VU	下流河川において確認した。	河川の水のきれいな上・中流域の礫下に潜み、夜間または濁水時に出て水生昆虫類を食べる。															H8、H13 と確認している
ワカサギ	県 VU	ダム湖内、下流河川において確認した。	純淡水性のものと、汽水性や降海性のものもあり、容易に陸封される。餌は動植物プランクトンを主とする雑食性。砂礫底、湖岸で産卵する。															H3、H5、H8、H10 と確認されていたが、H13は確認されていない。
イワナ	県 VU	ダム湖内、流入河川、下流河川において確認した。	水の澄んだ河川の上流域に生息し、瀬や淵、岸の岩陰に潜み主に水生・陸上の昆虫を食べる。砂礫底にくぼみを作って産卵する。															H3 より継続して確認している。

表 6.3-41(2) 重要種(魚類)の生息状況の変化

種名	指定区分	生息状況等	生態的特徴	確認年度												変化の状況			
				ダム湖内				流入河川				下流河川							
				H3	H5	H8	H13	H2	H5	H8	H13	H2	H8	H9	H10		H13		
ヤマメ	県 VU	ダム湖内、流入河川、下流河川において確認した。	水の澄んだ上流域にすみ、イワナ域の下手に分布し、すみ分ける。主に水生・陸生の昆虫を餌とする。瀬頭の砂礫底にくぼみを作り産卵する。																H2 より継続して確認している。
カジカ	NT 県 NT	ダム湖内、流入河川、下流河川において確認した。	水の澄んだ河川の上流域から中流域上部にすみ。瀬のれき底に潜み、主に水生昆虫、底生の小甲殻類を餌とする。																H2 より継続して確認している。
トウヨシノボリ	県 NT	ダム湖内、流入河川、下流河川において確認した。	雄は沈み石に巣を作り、卵を保護する。雑食性で底生小動物や水生昆虫などを主体に、付着藻類も食べる。																H5 より継続して確認している。

注) 指定区分

- VU:「レッドデータブック」(環境省編 平成 18 年、19 年の見直しリスト) 絶滅危惧 類  
 NT:「レッドデータブック」(環境省編 平成 18 年、19 年の見直しリスト) 準絶滅危惧 類  
 県 CR+EN:「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(動物編)-」  
 (福井県 平成 14 年) 県域絶滅危惧 類  
 県 VU:「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(動物編)-」  
 (福井県 平成 14 年) 県域絶滅危惧 類  
 県 NT:「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(動物編)-」  
 (福井県 平成 14 年) 県域準絶滅危惧 類

- 出典: 6-1 「平成 2 年度水生生物(魚貝類)調査作業報告書」  
 6-2 「平成 3 年度水生生物調査作業報告書」  
 6-7 「平成 5 年度ダム自然環境調査報告書(魚介類)」  
 6-12 「平成 8 年度ダム自然環境調査業務報告書(魚介類)」  
 6-33 「平成 9 年度ダム自然環境調査業務報告書(魚介類)」  
 6-34 「平成 10 年度ダム自然環境調査業務報告書(魚介類)」  
 6-19 「平成 13 年度ダム自然環境調査業務報告書(魚介類)」  
 6-57 「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生動物 - レッドデータブック - 4 汽水・淡水魚類」  
 6-63 「哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物 及び植物 のレッドリストの見直しについて」  
 6-64 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 福井県レッドデータブック(動物編)」

表 6.3-42 重要種（底生動物）の生息状況の変化

種名	指定区分	生息状況等	生態的特徴	確認年度								変化の状況			
				ダム湖内				流入河川					下流河川		
				H6	H9	H14	H18	H6	H9	H14	H18		H18		
ミネトワダカワゲラ	県要注目	流入河川において確認した。	山間の細流，水温の低い源流域で，水の落ち込む淵の周辺部，落ち葉の間などで見つかる場合が多い。												H14 しか確認されていない。
ミヤマノギカワゲラ	県要注目	流入河川において確認した。	山地の、滝の飛沫などで常にぬれている湿潤な石面上にみられる。												4 回のいずれの調査においても確認している。
オオナガレトビケラ	NT	流入河川において確認した。	山地溪流に分布し、勾配が急で、大岩が積み重なるような激流に生息する。												H6、H9 と確認されていたが、H14 以降は確認されていない。

注) 指定区分

NT:「レッドデータブック」(環境省編 平成 18 年、19 年の見直しリスト) 準絶滅危惧  
 県要注目:「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(動物編)-」  
 (福井県 平成 14 年) 要注目

- 出典: 6-9 「平成 6 年度ダム自然環境調査業務報告書(底生動物)」  
 6-13 「平成 9 年度ダム自然環境調査業務報告書(底生動物)」  
 6-20 「平成 14 年度ダム自然環境調査業務報告書(底生動物)」  
 6-27 「平成 18 年度ダム自然環境調査報告書(底生動物)」  
 6-58 「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生動物 - レッドデータブック - 5 昆虫類」  
 6-63 「哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物 及び植物 のレッドリストの見直しについて」  
 6-64 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 福井県レッドデータブック(動物編)」

表 6.3-43(1) 重要種（鳥類）の生息状況の変化

種名	指定区分	生息状況等	生態的特徴	確認年度			変化の状況
				H4-5	H9	H14	
オシドリ	DD 県 NT	ダム湖内において確認した。	大木の多い広葉樹林に囲まれた河川、湖沼に生息する。雑食性であるが特にドングリ類を好む。繁殖期は4～7月で、主に水辺に近い樹洞に営巣する。冬は山間の河川、ダム湖、湖沼などでみられる。				H9 に確認し、H14 も引き続き確認している。
トモエガモ	VU 県 VU	ダム湖周辺において確認した。	冬鳥として、主として湖沼や河川に生息する。樹林に囲まれたある程度大きさの水域を好む。ドングリ類や草の種子など主に植物質を食べるが、水生小動物も食べる。				H4～5、H9 と確認したが、H14 は確認していない。
ヨシガモ	県 NT	ダム湖内において確認した。	草の種子水草など主に植物質を食べるが、水生小動物も食べる。				H9 しか確認していない。
カワアイサ	県要 注目	ダム湖内、流入河川において確認した。	広い湖沼や大きな河川でみられ、越冬地では数羽～数十羽の群れで生活する。魚食性で潜水して魚を捕らえる。				3 回のいずれの調査においても確認している。
ミサゴ	NT 県 CR+ EN	ダム湖内において確認した。	平野部から山地帯の海岸、湖沼、河川などに留鳥として生息し、周辺の岩の上や大径木で繁殖する。				H9 しか確認していない。
オジロワシ	天 保存 EN 県 CR+ EN	ダム湖周辺において確認した。	冬鳥としてきた日本や日本海側の地域の海岸や河口、大型河川、湖沼に渡来する。餌は主に魚類であるが、水鳥の集結地などでは群れを追い回して捕獲する。				H9 しか確認していない。
オオタカ	保存 NT 県 CR+ EN	ダム湖周辺において確認した。	平地から山地の林に生息し、農耕地や牧草地、水辺などの開けた場所にも飛来する。産卵期は4～6月、営巣木には枝分かれした太いアカマツが好まれる。餌は主に中小型の鳥類だが、ネズミやウサギなどの哺乳類も捕食する。				H9 は確認はなかったが、H14 に再確認している。
ツミ	県 NT	ダム湖周辺において確認した。	平地から亜高山の林で繁殖する。小鳥類を待ち伏せし、林内を敏捷に追跡して捕らえる。				H4～5、H9 と確認したが、H14 は確認していない。
ハイタカ	NT 県 VU	ダム湖周辺において確認した。	平地から亜高山帯の林に生息するが、冬季は河川敷、ヨシ原、林近くの農耕地にも現れる。林内や林縁部で、ツグミ程度の大きさの小鳥類を捕らえるが、ネズミやリスなどの哺乳類を捕食することもある。				H9 しか確認していない。
サシバ	VU 県 NT	ダム湖周辺において確認した。	丘陵地や低山帯の落葉広葉樹林、アカマツ林、スギ林などで繁殖する。主に林縁部でカエル、ヘビ、トカゲ、ネズミ、モグラ、バッタなどの昆虫類を捕らえる。				H4-5 しか確認していない。



表 6.3-43(2) 重要種(鳥類)の生息状況の変化

種名	指定区分	生息状況等	生態的特徴	確認年度			変化の状況
				H4-5	H9	H14	
クマタカ	保存 EN 県 CR+ EN	ダム湖周辺において確認した。	低山～山地の森林に生息し、急峻な山腹のある深い渓谷でよくみられる。産卵期は3～4月、営巣場所としては急斜面のある大木の林が好まれる。餌はノウサギ、ヤマドリ、ヘビ類が多いが、その他中型以上の鳥類や哺乳類も捕食する。				3回のいずれの調査においても確認している。
イヌワシ	天 保存 EN 県 CR+ EN	ダム湖周辺において確認した。	成熟した落葉広葉樹林、雪崩跡の草地、林縁部や林内のギャップ、伐採地などでノウサギ、ヤマドリ、ヘビ類などを捕食する。				H9 しか確認していない。
ハヤブサ	保存 VU 県 VU	ダム湖周辺において確認した。	広い空間で狩りをするため、海岸、広い河原、原野、農耕地などを生活域とする。産卵期は3～4月、海岸などの崖地に営巣する。餌は主にヒヨドリ程度の中型の小鳥で、稀にネズミやウサギも捕らえる。				「真名川におけるハヤブサの営巣について」(真名川ダム管理支所資料)によると、平成13年から4年連続で繁殖成功を確認している。
イカルチドリ	県 VU	流入河川、ダム湖周辺において確認した。	大きな河川の中流域の氾濫原や扇状地の砂礫地に生息する。繁殖期は3～7月、河原の砂礫地上に営巣する。昆虫類を主食としている。				H9 に確認し、H14 も引き続き確認している。
コノハズク	県 NT	ダム湖周辺において確認した。	大きな木のある深い森に夏鳥として渡来し、樹洞で繁殖する。夜行性で昆虫類を主食とする。ミミズ、トカゲやカエル類、小鳥類、小型哺乳類等も捕食する。				H9 しか確認していない。
ヨタカ	VU 県 VU	ダム湖周辺において確認した。	平地から山地の明るい林や草原に生息する。産卵期は5～8月、林内の地上に直接産卵する。夜行性で、飛びながら飛翔性の昆虫類を捕食する。				H9 に確認し、H14 も引き続き確認している。
ヤマセミ	県 NT	ダム湖内、ダム湖周辺において確認した。	山地の渓流や湖沼に生息する。繁殖期は3～8月、林道法面や川沿いの崖に横穴を掘って営巣する。主に魚食性で、イワナ、ヤマメ、ウグイ、フナ類などを餌とする。				3回のいずれの調査においても確認している。
アカショウビン	県 NT	ダム湖周辺において確認した。	主に山地の落葉広葉樹林に生息する。よく茂った薄暗い大木のある谷間を好む。繁殖期は5～7月、樹洞や崖の樹洞に営巣する。小魚、サワガニ、カエル、昆虫など様々な小動物を餌としている。				H14 に初めて確認している。

表 6.3-43(3) 重要種(鳥類)の生息状況の変化

種名	指定区分	生息状況等	生態的特徴	確認年度			変化の状況
				H4-5	H9	H14	
オオアカゲラ	県 NT	ダム湖周辺において確認した。	自然林を主な生息地としている。枯れ木で採食することが多く、カミキリムシなどの甲虫の幼虫や、アリ類などを食べる。また、植物の実も食べる。巣穴やねぐら穴を掘るためには、穴位置で直径40cm近い大木が必要である。				H4-5 しか確認していない。
サンショウクイ	VU 県 VU	ダム湖周辺において確認した。	主に標高1000m以下の山地、丘陵地、平地の広葉樹林に生息する。樹上性の種で地上に降りることはほとんどない。繁殖期は5~7月、高木の上部にウメノキゴケをクモの巣で貼り付けた巣を作る。昆虫やクモ類を餌としている。				3回のいずれの調査においても確認している。
イワヒバリ	県 VU	ダム湖周辺において確認した。	本州の高山帯の岩場で繁殖し、冬季は山麓や低地へ移動する。繁殖期には、高山の岩場やハイマツなどが生育する環境に生息し、昆虫類や草木の果実を食べる。				H9 しか確認していない。

注) 指定区分

天: 文化財保護法 天然記念物

保存: 絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律 国内希少野生動植物種

EN: 「レッドデータブック」(環境省編 平成18年、19年の見直しリスト) 絶滅危惧 B類

VU: 「レッドデータブック」(環境省編 平成18年、19年の見直しリスト) 絶滅危惧 類

NT: 「レッドデータブック」(環境省編 平成18年、19年の見直しリスト) 準絶滅危惧

DD: 「レッドデータブック」(環境省編 平成18年、19年の見直しリスト) 情報不足

県 CR+EN: 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(動物編)-」

(福井県 平成14年) 県域絶滅危惧 類

県 VU: 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(動物編)-」

(福井県 平成14年) 県域絶滅危惧 類

県 NT: 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(動物編)-」

(福井県 平成14年) 県域準絶滅危惧

県要注目: 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(動物編)-」

(福井県 平成14年) 要注目

出典: 6-3 「平成4年度ダム自然環境調査報告書」

6-4 「平成5年度ダム自然環境調査報告書(鳥類)」

6-14 「平成9年度ダム自然環境調査業務報告書(鳥類)」

6-21 「平成14年度ダム自然環境調査業務報告書(鳥類)」

6-55 「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生動物-レッドデータブック-2 鳥類」

6-62 「鳥類、爬虫類、両生類及びその他無脊椎動物のレッドリストの見直しについて」

6-64 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 福井県レッドデータブック(動物編)」

6-90 「真名川におけるハヤブサの営巣について」

表 6.3-44 重要種（哺乳類）の生息状況の変化

種名	指定区分	生息状況等	生態的特徴	確認年度			変化の状況
				H6	H12	H17	
モモジロコウモリ	県要注目	ダム湖周辺において確認した。	洞窟をめぐらし、水の流れているところを好み、導水トンネルなどにも入る。水辺に多く、川面や樹冠を飛びながらガや甲虫、カゲロウなどを採る。				H17 に初めて確認している。
モモンガ	県 NT	ダム湖周辺において確認した。	山地から亜高山帯の森林に生息し、夜行性で、足の間の飛膜を広げて木々の間を滑空する。木の枝に小枝で巣を作るほか、樹洞や巣箱、山小屋の天井裏や戸袋にも巣を作り、餌はほとんど植物質である。				H12 しか確認していない。
カモシカ	特天	流入河川、ダム湖周辺において確認した。	丘陵地から亜高山帯に生息し、草食性で、各種木本類の葉、広葉草本、ササ類等を選択的に採食する。				3 回のいずれの調査においても確認している。

注) 指定区分

特天：文化財保護法 特別天然記念物

県 NT：「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(動物編)-」

(福井県 平成 14 年) 県域準絶滅危惧

県要注目：「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(動物編)-」

(福井県 平成 14 年) 要注目

出典：6-8 「平成 6 年度ダム自然環境調査報告書(哺乳類)」

6-17 「平成 12 年度ダム自然環境調査業務報告書(両生類・爬虫類・哺乳類)」

6-25 「平成 17 年度ダム自然環境調査業務報告書(両生類・爬虫類・哺乳類)」

6-54 「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-1 哺乳類」

6-63 「哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物 及び植物 のレッドリストの見直しについて」

6-64 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 福井県レッドデータブック(動物編)」

表 6.3-45 重要種（両生類）の生息状況の変化

種名	指定区分	生息状況等	生態的特徴	確認年度			変化の状況
				H5	H12	H17	
ヒダサンショウウオ	NT	流入河川、ダム湖周辺において確認した。	標高 200～1000m の森林に生息する。繁殖期は 2～5 月頃で、産卵は溪流の源流域で行われる。幼生は溪流内の流れの緩やかな場所に生息する。				H12 に確認され、H17 も引き続き確認している。
イモリ	NT	流入河川、下流河川、ダム湖周辺において確認した。	平地から山地の池沼、湿地、水田などに生息する。非常に貧食で、動物質のものならなんでも食べる。繁殖期は 4～7 月で、水中の水草や枯れ葉などに産卵する。				3 回のいずれの調査においても確認している。
ナガレヒキガエル	県 NT	流入河川、ダム湖周辺において確認した。	標高 500～1700m 近くの山地帯に生息し、繁殖は 4～5 月に山地溪流でなされる。成体は陸貝、ミミズ、ヤスデ、地表性の甲虫、直翅類、サワガニなどをよく食べる。				H12 は確認されなかったが、H17 に再確認している。

注) 指定区分

NT: 「レッドデータブック」(環境省編 平成 18 年、19 年の見直しリスト) 準絶滅危惧

県 NT: 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(動物編)-」

(福井県 平成 14 年) 県域準絶滅危惧

出典: 6-5 「平成 5 年度ダム自然環境調査報告書(両生類・爬虫類)」

6-17 「平成 12 年度ダム自然環境調査業務報告書(両生類・爬虫類・哺乳類)」

6-25 「平成 17 年度ダム自然環境調査業務報告書(両生類・爬虫類・哺乳類)」

6-56 「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生動物-レッドデータブック-3 両生類・爬虫類」

6-62 「鳥類、爬虫類、両生類及びその他無脊椎動物のレッドリストの見直しについて」

6-64 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 福井県レッドデータブック(動物編)」

表 6.3-46 重要種（爬虫類）の生息状況の変化

種名	指定区分	生息状況等	生態的特徴	確認年度			変化の状況
				H5	H12	H17	
イシガメ	DD	ダム湖周辺において確認した。	平地よりも山間部や山麓部に多い。湧水のある池や山あいの湖沼、田んぼや周辺の小川などに生息する。雑食性で魚や甲殻類、水草などを餌とする。				H12 に確認し、H17 も引き続き確認している。
タカチホヘビ	県要注目	流入河川、下流河川、ダム湖周辺において確認した。	平地から山地まで見られ、地中性かつ夜行性で倒木の下や石の下で見つかることが多く、夜間は地表を這っているのが目撃される。				H17 に初めて確認している。
シロマダラ	県要注目	ダム湖周辺において確認した。	山地から平地まで様々な環境に生息し、夜行性で、トカゲ、ヘビなどを主に食べる。				H12 に確認し、H17 も引き続き確認している。

注) 指定区分

DD: 「レッドデータブック」(環境省編 平成 18 年、19 年の見直しリスト) 情報不足

県要注目: 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(動物編)-」

(福井県 平成 14 年) 要注目

出典: 6-5 「平成 5 年度ダム自然環境調査報告書(両生類・爬虫類)」

6-17 「平成 12 年度ダム自然環境調査業務報告書(両生類・爬虫類・哺乳類)」

6-25 「平成 17 年度ダム自然環境調査業務報告書(両生類・爬虫類・哺乳類)」

6-56 「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生動物-レッドデータブック-3 両生類・爬虫類」

6-62 「鳥類、爬虫類、両生類及びその他無脊椎動物のレッドリストの見直しについて」

6-64 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 福井県レッドデータブック(動物編)」

表 6.3-47(1) 重要種（昆虫類）の生息状況の変化

種名	指定区分	生息状況等	生態的特徴	確認年度			変化の状況
				H4-5	H11	H16	
ムカシトンボ	県要注目	ダム湖周辺において確認した。	山間の森林に囲まれた、河川の上流部や源流部に生息する。成虫は4月下旬～6月上旬に出現する。幼虫は急流の早瀬の石下などに生息する。				H4～5しか確認していない。
カワラスズ	県要注目	流入河川周辺において確認した。	河原や鉄道線路内に生息し、チリチリチリと鳴く。成虫は灯火にも飛来する。				H4～5しか確認していない。
カワラバッタ	県 NT	ダム湖・流入河川周辺において確認した。	分布は局地的で、中流域に広い氾濫原を残す大きな河川でのみみられる。全国的に減少している。				H4～5しか確認していない。
ヨコツナツチカメムシ	県要注目	ダム湖周辺において確認した。	暖地性の昆虫で照葉樹林の落ち葉の下や地表で生活する。夜間灯火に飛来することもある。				H11しか確認していない。
スジグロチャバネセセリ	NT 県 NT	流入河川周辺において確認した。	成虫は年1回、7～8月に出現する。日当たりのよい溪流沿いの草地に生息、ヒメジョオン、オカトラノオなどの花によく集まる。幼虫の食草としては、カモジグサなどが記録されている。				H4～5しか確認していない。
ウラギンスジヒョウモン	NT	ダム湖周辺において確認した。	低地から山地の疎林や林縁の草地に生息する。成虫は6月上旬に出現する。幼虫の食草はタチツボスミレ、フモトスミレである。				H11しか確認していない。
オオムラサキ	NT 県 NT	ダム湖・流入河川・下流河川周辺において確認した。	低山地から山地に生息する。成虫は6月下旬から7月下旬に出現し、樹液、果実に飛来する。幼虫の食草はエノキ、エゾエノキである。				H11は確認はなかったが、H16に再確認している。
ツマジロウラジャノメ	県 VU	下流河川周辺において確認した。	北海道、本州、四国に分布するが生息域は限られる。溪流沿いの崖や岩場の周辺に生息する。幼虫の食草はノガリヤスなど。				H16に初めて確認している。
スズキナガハナアブ	県要注目	流入河川周辺において確認した。	北海道、本州、四国に分布するが、多くない。自然度の高い山林で採集される。				H4～5しか確認していない。
アオヘリアオゴミムシ	CR+EN	流入河川周辺において確認した。	本州、四国、九州に分布するが、南方系の種で本州では極めて稀である。湿地に生息する。				H4～5しか確認していない。
アオナガタムシ	県要注目	下流河川周辺において確認した。	山地に生息し、クルミに飛来するが、稀。サワグルミ林等の高い梢に止まっていると考えられている。				H16に初めて確認している。
ケブカツヤオオアリ	県 VU	ダム湖・流入河川・下流河川周辺において確認した。	山麓、河岸、湿地帯などに生息、枯れ木に営巣する。本州の中部から東北地方に分布するが比較的稀。				3回のいずれの調査においても確認している。

表 6.3-47(2) 重要種（昆虫類）の生息状況の変化

種名	指定区分	生息状況等	生態的特徴	確認年度			変化の状況
				H4-5	H11	H16	
エゾアカヤマアリ	県 VU	流入河川周辺において確認した。	平地から山地に生息する。比較的明るいところに営巣し、枯葉や茎を巣口近くに積み上げ蟻塚を作る。本州の中部以北に分布する。				H4～5 しか確認していない。
ハグロフタオビドロバチ	県 CR+EN	下流河川周辺において確認した。	県内では河川周辺で採集されている。本州の関東以西と四国、九州に分布するが、記録例は少ない。竹筒やコウチュウ類が作った朽木の坑道内に、ガ類の幼虫を蓄えて巣を作っていると考えられる。				H16 に初めて確認している。
フクイアナバチ	NT 県 NT	流入河川周辺において確認した。	山道の道路脇、人家の庭や空き地などの地中に営巣し、幼虫の餌としてバッタ目のハネナシコロギスを狩る。海岸近くから標高 500m の中山帯まで分布する。				H11 しか確認していない。

注) 指定区分

CR+EN: 「レッドデータブック」(環境省編 平成 18 年、19 年の見直しリスト) 絶滅危惧 類

NT: 「レッドデータブック」(環境省編 平成 18 年、19 年の見直しリスト) 準絶滅危惧

県 CR+EN: 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(動物編)-」(福井県 平成 14 年) 県域絶滅危惧 類

県 VU: 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(動物編)-」(福井県 平成 14 年) 県域絶滅危惧 類

県 NT: 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(動物編)-」(福井県 平成 14 年) 県域準絶滅危惧

県要注目: 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(動物編)-」(福井県 平成 14 年) 要注目

出典: 6-3 「平成 4 年度ダム自然環境調査報告書」

6-6 「平成 5 年度ダム自然環境調査報告書(昆虫類)」

6-16 「平成 11 年度ダム自然環境調査業務報告書(昆虫類)」

6-24 「平成 16 年度ダム自然環境調査業務報告書(陸上昆虫類等)」

6-58 「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 5 昆虫類」

6-63 「哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物 及び植物 のレッドリストの見直しについて」

6-64 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 福井県レッドデータブック(動物編)」

表 6.3-48(1) 重要種(植物)の生育状況の変化

種名	指定区分	生育状況等	生態的特徴	確認年度			変化の状況
				H7	H10	H15	
ナガホノナツノハナワラビ	県要注目	流入河川周辺において確認した。	山林中に生じる夏緑性のシダ。				H15 に初めて確認している。
イワトラノオ	県 VU	ダム湖周辺において確認した。	林内の岩上に着生する常緑性のシダ。				H7、H10 と確認したが、H15 は確認していない。
イワヤシダ	県 VU	流入河川周辺において確認した。	山地の陰湿な林下に生じる夏緑性のシダ。				H10 しか確認していない。
フクロシダ	県 CR+EN	ダム湖周辺において確認した。	林下の岩上、岩壁に着生する夏緑性のシダ。				H15 に初めて確認している。
ナガオノキシノブ	県要注目	下流河川周辺において確認した。	林内の樹幹や岩上に生じる常緑性のシダ。				H15 に初めて確認している。
コバノチョウセンエノキ	県 CR+EN	ダム湖周辺において確認した。	暖地の山地に生える落葉小高木。				H10 しか確認していない。
ハルニレ	県 NT	下流河川周辺、流入河川周辺において確認した。	山地の斜面下部から谷筋、平坦な湿潤地に生える落葉高木。				H15 に初めて確認している。
ハルトラノオ	公園	下流河川周辺、流入河川周辺、ダム湖周辺において確認した。	山地の木陰に生える多年草。				3 回のいずれの調査においても確認している。
ノダイオウ	NT 県 VU	ダム湖周辺において確認した。	道ばたや畑地などに生える多年草。				H7 しか確認していない。
オオヤマフスマ	県 NT	下流河川周辺において確認した。	山地の草原に生える多年草。				H15 に初めて確認している。
フタバアオイ	県要注目	流入河川周辺、ダム湖周辺において確認した。	山地の樹陰に生える多年草。				H15 に初めて確認している。
ウスバサイシン	県要注目	流入河川周辺、ダム湖周辺において確認した。	山地の林下の湿った所に生える多年草。				3 回のいずれの調査においても確認している。
ヤマシャクヤク	NT 県 VU	流入河川周辺において確認した。	山地の落葉広葉樹林内や林縁に生える多年草。				H10 しか確認していない。
ツメレンゲ	NT 県 CR+EN	下流河川周辺において確認した。	日当たりのよい岩上や屋根上に生える多年草。				H15 に初めて確認している。
オオダイコンソウ	県 VU	ダム湖周辺において確認した。	山地の草原に生える多年草。				H7、H10 と確認したが、H15 は確認していない。
エイザンスミレ	県 NT	流入河川周辺において確認した。	山地の木陰に生える多年草。				3 回のいずれの調査においても確認している。
アカネスミレ	県要注目	ダム湖周辺において確認した。	低地、丘陵地に生える多年草。				H7、H10 と確認したが、H15 は確認していない。

表 6.3-48(2) 重要種(植物)の生育状況の変化

種名	指定区分	生育状況等	生態的特徴	確認年度			変化の状況
				H7	H10	H15	
ハナビゼリ	県要注目	流入河川周辺において確認した。	山地の谷間に生える多年草。				H7、H10 と確認したが、H15 は確認していない。
イワナシ	公園	ダム湖周辺において確認した。	山地の林縁の斜面に生える常緑小低木。				3 回のいずれの調査においても確認している。
サツキ	県要注目	下流河川周辺、ダム湖周辺において確認した。	山地の川岸の岩上に生える半常緑低木。				H10 に確認し、H15 も引き続き確認している。
シオジ	県 VU	流入河川周辺において確認した。	山地の谷間に生える落葉高木。				3 回のいずれの調査においても確認している。
アキギリ	公園	流入河川周辺、ダム湖周辺において確認した。	山地の木陰に生える多年草。				3 回のいずれの調査においても確認している。
サツキヒナノウスツボ	県 VU	下流河川周辺、ダム湖周辺において確認した。	山地の林中に生える多年草。				H15 に初めて確認している。
イワタバコ	公園	下流河川周辺、流入河川周辺、ダム湖周辺において確認した。	日陰の岩壁などに生える多年草。				3 回のいずれの調査においても確認している。
オトコヨウゾメ	県要注目	ダム湖周辺において確認した。	温帯林や林縁に生える落葉低木。				H15 に初めて確認している。
ヤマホタルブクロ	公園	ダム湖周辺において確認した。	山地に生える多年草。				H7 しか確認していない。
シデシャジン	県要注目	流入河川周辺において確認した。	山地に生える多年草。				3 回のいずれの調査においても確認している。
チョウジギク	公園	下流河川周辺において確認した。	深山の多湿の斜面に生える多年草。				H15 に初めて確認している。
カガノアザミ	県 VU	下流河川周辺、流入河川周辺、ダム湖周辺において確認した。	山地に生える大型の多年草。				3 回のいずれの調査においても確認している。
ハクサンアザミ	公園	ダム湖周辺、流入河川周辺において確認した。	深山の谷間に生える多年草。				H10 に確認し、H15 も引き続き確認している。
ノニガナ	県 VU	ダム湖周辺において確認した。	たんぼ道に生える 1 年草。				H7、H10 と確認したが、H15 は確認していない。
オタカラコウ	公園	ダム湖周辺において確認した。	深山の谷川のほとりに生える大型の多年草。				H7、H10 と確認したが、H15 は確認していない。
ヒメヒゴタイ	VU 県 CR+EN	ダム湖周辺において確認した。	日当たりのよい草原に生える越年草。				H7 しか確認していない。



表 6.3-48(3) 重要種（植物）の生育状況の変化

種名	指定区分	生育状況等	生態的特徴	確認年度			変化の状況
				H7	H10	H15	
カタクリ	公園	ダム湖周辺において確認した。	山野に群生する多年草。				3回のいずれの調査においても確認している。
ショウジョウバカマ	公園	流入河川周辺、ダム湖周辺において確認した。	山野のやや湿った所に生える多年草。				3回のいずれの調査においても確認している。
マルバサンキライ	県 CR+EN	流入河川周辺において確認した。	山地に生えるつる性半低木。				H15に初めて確認している。
エンレイソウ	公園	流入河川周辺、ダム湖周辺において確認した。	山地の林内のやや湿った所に生える多年草。				3回のいずれの調査においても確認している。
カキツバタ	NT 県 VU	ダム湖周辺において確認した。	水湿地に生える多年草。				H10しか確認していない。
アシウテンナンショウ	県要 注目	流入河川周辺において確認した。	山地の林縁に生える多年草。				H15に初めて確認している。
タタラカンガレイ	県 CR+EN	ダム湖周辺において確認した。	池沼に生える多年草。				H10に確認し、H15も引き続き確認している。
エビネ	NT 県 VU	流入河川周辺、ダム湖周辺において確認した。	雑木林の下などに生える多年草。				H10に確認し、H15も引き続き確認している。
セッコク	公園 県 CR+EN	下流河川周辺において確認した。	山地の常緑樹林内の樹上や岩上に着生する多年草。				H15に初めて確認している。

注) 指定区分

- 公園：「自然公園法」指定植物（白山国立公園の指定植物）
- VU：「レッドデータブック」（環境省編 平成18年、19年の見直しリスト） 絶滅危惧 類
- NT：「レッドデータブック」（環境省編 平成18年、19年の見直しリスト） 準絶滅危惧
- 県 CR+EN：「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(植物編)-」（福井県 平成16年） 県域絶滅危惧 類
- 県 VU：「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(植物編)-」（福井県 平成16年） 県域絶滅危惧 類
- 県 NT：「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(植物編)-」（福井県 平成16年） 県域準絶滅危惧
- 県要注目：「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(植物編)-」（福井県 平成16年） 要注目

- 出典：6-11 「平成7年度ダム自然環境調査業務報告書（植物）」  
 6-15 「平成10年度ダム自然環境調査業務報告書（植物）」  
 6-22 「平成15年度ダム自然環境調査業務報告書（真名川ダム編）」  
 6-61 「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生動物-レッドデータブック-8 植物（維管束植物）」  
 6-63 「哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物及び植物のレッドリストの見直しについて」  
 6-65 「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 福井県レッドデータブック（植物編）」  
 6-83 「日本の野生植物 木本」  
 6-84 「日本の野生植物 木本」  
 6-85 「日本の野生植物 草本」  
 6-86 「日本の野生植物 草本」  
 6-87 「日本の野生植物 草本」  
 6-88 「日本の野生植物 シダ」

表 6.3-49 重要種（植物）の生育状況の変化〔指定区分別〕

指定区分		確認年度		
		H7	H10	H15
自然公園法	公園	10	10	11
	確認種数（小計）	10	10	11
レッドデータブック	VU	1		
	NT	1	3	3
	確認種数（小計）	2	3	3
福井県レッドデータブック	県 CR+EN	1	2	5
	県 VU	6	9	4
	県 NT	1	1	3
	県要注目	4	5	8
	確認種数（小計）	12	17	20
確認種数（合計）		21	26	29
重要種の確認種数は、平成7年度が21種、平成10年度が26種、平成15年度が29種となっており、確認種数が増加する傾向がみられる。				

注) 指定区分

- 公園：「自然公園法」指定植物（白山国立公園の指定植物）
- VU：「レッドデータブック」（環境省編 平成18年、19年の見直しリスト）絶滅危惧類
- NT：「レッドデータブック」（環境省編 平成18年、19年の見直しリスト）準絶滅危惧類
- 県 CR+EN：「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(植物編)-」（福井県 平成16年） 県域絶滅危惧類
- 県 VU：「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(植物編)-」（福井県 平成16年） 県域絶滅危惧類
- 県 NT：「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(植物編)-」（福井県 平成16年） 県域準絶滅危惧類
- 県要注目：「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(植物編)-」（福井県 平成16年） 要注目

- 出典：6-11「平成7年度ダム自然環境調査業務報告書（植物）」  
 6-15「平成10年度ダム自然環境調査業務報告書（植物）」  
 6-22「平成15年度ダム自然環境調査業務報告書（真名川ダム編）」  
 6-61「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 8 植物（維管束植物）」  
 6-63「哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物及び植物のレッドリストの見直しについて」  
 6-65「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 福井県レッドデータブック（植物編）」

(2)ダムによる影響の検証

重要種のうち、過去2回以上確認しているにもかかわらず、最新の現地調査において確認がなく、生息・生育状況に変化があった可能性がある種を抽出し、ダムによる影響について整理した。

表 6.3-50 重要種（魚類）に関するダムによる影響の検証

種名	確認年度							ダムによる影響の検証
	H2	H3	H5	H8	H9	H10	H13	
ハス								? : ダム湖内で H3 に 1 個体、H8 に 1 個体、流入河川で H8 に 2 個体が確認している。いずれの調査でも確認個体数が少なく、生息状況の変化は不明である。
ワカサギ								? : ダム湖内で H5 に 15 個体を確認したが、それ以外の調査は 1 個体のみ確認である。確認個体数のばらつきが大きく、生息状況の変化は不明である。

注)検証結果の凡例

- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- : 生物の生息・生育状況に、大きな変化がみられなかった場合
- ? : 生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合

表 6.3-51 重要種（底生動物）に関するダムによる影響の検証

種名	確認年度				ダムによる影響の検証
	H6	H9	H14	H18	
オオナガレトビケラ					? : 流入河川の真名川や支川の持箆谷川、仙翁谷川で確認している。確認個体数が少なく、生息状況の変化は不明である。なお、本種の確認時期はいずれも夏季と秋季で、H18 では春季にのみ仙翁谷川で調査を行っており、調査時期の設定による差異の可能性も考えられる。

注)検証結果の凡例

- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- : 生物の生息・生育状況に、大きな変化がみられなかった場合
- ? : 生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合

表 6.3-52 重要種（鳥類）に関するダムによる影響の検証

種名	確認年度			ダムによる影響の検証
	H4-5	H9	H14	
トモエガモ				? : 冬鳥として渡来するが少なく、年により変動が大きい。そのため再確認が難しいと考えられる。生息状況の変化は不明である。
ツミ				? : ダム湖周辺に生息している可能性はあるが、生息密度が低いいため再確認が難しいと考えられる。生息状況の変化は不明である。

注)検証結果の凡例

- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- : 生物の生息・生育状況に、大きな変化がみられなかった場合
- ? : 生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合

表 6.3-53 重要種（植物）に関するダムによる影響の検証

種名	確認年度			ダムによる影響の検証
	H7	H10	H15	
イワトラノオ				? : 本種は H16 発行の福井県レッドデータブックに記載された新規の重要種である。詳細な生育場所が記録されておらず、生育状況の変化が不明である。
オオダイコンソウ				? : 本種は H16 発行の福井県レッドデータブックに記載された新規の重要種である。詳細な生育場所が記録されておらず、生育状況の変化が不明である。
アカネスミレ				? : 詳細な生育場所が記録されておらず、生育状況の変化が不明である。
ハナビゼリ				? : 本種は H16 発行の福井県レッドデータブックに記載された新規の重要種である。詳細な生育場所が記録されておらず、生育状況の変化が不明である。
ノニガナ				? : 本種は H16 発行の福井県レッドデータブックに記載された新規の重要種である。詳細な生育場所が記録されておらず、生育状況の変化が不明である。
オタカラコウ				? : 詳細な生育場所が記録されておらず、生育状況の変化が不明である。

注)検証結果の凡例

- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- : 生物の生息・生育状況に、大きな変化がみられなかった場合
- ? : 生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合

#### 6.4 生物の生育・生息状況の変化の評価

「生物の生息・生育状況の変化の検証」における検証結果について、評価の視点を定めて場所ごとに評価を行い、今後の方針を整理した。

評価の視点は「新・生物多様性国家戦略」等を参考に、生物の生息・生育環境の視点から設定することとした。

視点の例として以下のものがあげられる。

- ・種の絶滅、地域個体群の消滅を回避する。
- ・その川（地域）がもともと有していた多様な環境の保全・復元を図る。
- ・連続した環境を確保する。
- ・その川（地域）らしい生物の生育・生息環境の保全・復元を図る。
- ・外来種対策による生物多様性を確保する。

平成4年のリオデジャネイロで開催された国連環境開発会議（地球サミット）で調印された「生物の多様性に関する条約」を受け、生物多様性の保全と持続可能な利用に関する基本方針と国のとるべき施策の方向を定めたものであり、平成7年に策定された。

(1)ダム湖内

ダム湖内の生物の生息・生育状況に関する評価を表 6.4-1 に示す。

表 6.4-1(1) 生物の生息・生育状況に関する評価 (ダム湖内)

検討項目		生物の状況	ダムとの関連の 検証結果	評価		今後の方針	
				視点	評価結果		
魚類	生息状況の変化	止水性魚類	ギンブナ、ギギ等の止水性魚類は平成5年度の調査から継続確認しており、個体数は増加傾向にある。	: 止水環境に適応した種が生息しているものと考えられる。	地域に特有な生態系を保全する。	止水域に特徴的な生物が継続して出現しており、現状で問題はほとんどないものと考えられる。	-
		回遊性魚類	ワカサギ、アユ、イワナ、ヤマメ、アマゴ、トウヨシノボリを確認している。アマゴは降湖型のサツキマス、イワナはダム湖内で大小の個体を確認しており、ダム湖で陸封されたものと考えられる。	: アマゴやイワナは、止水環境の存在によって陸封されているものと考えられる。アユの確認は放流によるものと考えられる。	地域に特有な生態系を保全する。	環境に適応し生息していることから、現状で問題はほとんどないものと考えられる。	-
		外来種	平成5年度および平成13年度にニジマスを確認した。放流による可能性が考えられる。	? : ニジマスのダム湖への侵入経緯は不明であるが、確認数が少なく、ダム湖に定着する可能性は低いと考えられる。	生物多様性を適切に保全する。	外来種による影響が懸念されるため、在来種の保全の視点から現状は好ましくない。	・分布域の拡大や在来種への影響に注意しながら、生息状況を継続的に調査して把握に努める。
底生動物	生息状況の変化	ダム湖湖心部の底生動物	ダム湖内ではイトミミズ目やハエ目(ユスリカ科)などの堀潜型の種類が優占しており、その種構成に変化はみられない。	: 止水環境に適応した種が生息しているものと考えられる。	地域に特有な生態系を保全する。	止水域に特徴的な生物が継続して出現しており、現状で問題はほとんどないものと考えられる。	-
		ダム湖湖岸部の底生動物	ダム湖湖岸部では、ミズカマキリやゲンゴロウ類などの止水性種を確認している。	: 止水環境に適応した種が生息しているものと考えられる。	地域に特有な生態系を保全する。	止水域に特徴的な生物が確認されており、現状で問題はほとんどないものと考えられる。	-

表 6.4-1(2) 生物の生息・生育状況に関する評価（ダム湖内）

検討項目		生物の状況	ダムとの関連の 検証結果	評価		今後の方針
植物プランクトン	生物相・生息状況の変化	植物プランクトン相	<p>： 止水環境の存在によって浮遊性の植物プランクトンが生息している。</p> <p>貧腐水性から中腐水性の水域に生息する種を多く確認した。</p> <p>ダム湖表層の水質に経年的な変化はなく、植物プランクトンの群集型及び水質階級別種数に大きな変化は認められなかった。</p>	地域に特有な生態系を保全する。	<p>大きな変化が認められないことから、現状で問題はないものと考えられる。</p> <p>クリプト藻類と緑藻類は汚濁や栄養型と関係する種が多いことから、今後の推移に注意が必要と考えられる。</p>	-
動物プランクトン	生物相・生息状況の変化	動物プランクトン相	<p>： 止水環境の存在によって浮遊性の植物プランクトンが生息している。</p> <p>貧腐水性から中腐水性の水域に生息する種を多く確認した。</p> <p>ダム湖表層の水質に経年的な変化はなく、動物プランクトンの群集型及び水質階級別種数に大きな変化は認められなかった。</p>	地域に特有な生態系を保全する。	<p>大きな変化が認められないことから、現状で問題はないものと考えられる。</p>	-
鳥類	生息状況の変化	水鳥	<p>： ダム湖面は、カモ類の越冬時の休息場所等で利用されている。</p>	地域に特有な生態系を保全する。	<p>人の近づかない水域と採餌場となる水際が維持されており、現状で問題はないものと考えられる。</p> <p>カワウは全国的に水産被害や林業被害が報告されていることから、今後の生息状況に注意が必要と考えられる。</p>	-
ダム湖内のまとめ		<p>(1)ダム湖内の特徴</p> <p>ダム湖内の止水環境に適応した魚類、底生動物等が生息し、ダム湖面ではマガモ、カルガモ、コガモ等の水鳥に利用されている。また、流入河川や支川の流入部では流水性の種も多く生息しており、ダム湖内で最も多様な生物相がみられる。なお、ダム湖内では要注意外来生物であるニジマスを確認している。</p> <p>(2)ダムによる影響</p> <p>ダム湖ができたことにより、ダム湖内に適応した生物が生息するようになった。重要種のオシドリや在来種のイワナなどが経年的に確認されるなど、良好な環境が維持されている。なお、淡水赤潮の発生が懸念される。</p> <p>(3)ダム以外による影響</p> <p>-</p>				

注)検証結果の凡例

- ： 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によると考えられる場合
- ： 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によると考えられる場合
- ： 生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- : 生物の生息・生育状況に、大きな変化がみられなかった場合
- ? : 生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合

(2) 流入河川

流入河川の生物の生息・生育状況に関する評価を表 6.4-2 に示す。

表 6.4-2(1) 生物の生息・生育状況に関する評価（流入河川）

検討項目			生物の状況	ダムとの関連の 検証結果	評価		今後の方針
					視点	評価結果	
魚類	生息状況の変化	回遊性魚類	流入河川では、アユ、イワナ、ヤマメ、アマゴ(サツキマス)、トウヨシノボリの5種の回遊性魚類を確認した。	:イワナ、アマゴ(サツキマス)、トウヨシノボリは、ダム湖で陸封されたものと考えられる。アユの確認は放流によるものと考えられる。	地域に特有な生態系を保全する。	陸封化され、ダムでの生息は維持されていると考えられる。	-
		主要構成種	目別確認種数、生活型、摂食機能群、EPT 指数、優占種等の種構成には大きな変化は認められなかった。	- : 流水性の底生動物を継続して確認している。	地域に特有な生態系を保全する。	大きな変化が認められないことから、現状で問題はほとんどないものと考えられる。	-
鳥類	生息状況の変化	渓流環境を利用する種	平成 14 年度調査で、カワガラスを確認した。	? : 渓流性の種を確認したが、流入河川における調査は平成 14 年度に初めて実施したため、変化の検証はできなかった。	地域に特有な生態系を保全する。	単年度調査であり、現段階では評価できない。	継続した調査が必要である。
		河原環境を利用する種	平成 14 年度調査で、イカルチドリ、キセキレイ、セグロセキレイの3種を確認した。	? : 河原環境を利用する種を確認したが、流入河川における調査は平成 14 年度に初めて実施したため、変化の検証はできなかった。	地域に特有な生態系を保全する。	単年度調査であり、現段階では評価できない。	継続した調査が必要である。
両生類	生息状況の変化	渓流環境を利用する種	平成 17 年度にヒダサンショウウオ、ナガレヒキガエル、カジカガエル、3 種の両生類を確認した。	? : 渓流性の種を確認したが、流入河川における調査は平成 17 年度に初めて実施したため、変化の検証はできなかった。	地域に特有な生態系を保全する。	単年度調査であり、現段階では評価できない。	継続した調査が必要である。



表 6.4-2(2) 生物の生息・生育状況に関する評価（流入河川）

検討項目			生物の状況	ダムとの関連の 検証結果	評価		今後の方針
					視点	評価結果	
陸上昆虫類	生息状況の変化	河原環境を利用する種	河川環境を利用する種として抽出した8種のうち、平成4～5年度に8種、平成11年度に3種確認したが、平成16年度には確認がなかった。	：平成16年度に河原環境を利用する種が確認されておらず、変化に対する影響要因が不明である。	地域に特有な生態系を保全する。	流入河川環境の保全の観点から好ましくない。	ダム湖の水位や河原付近での工事などに留意し、河原環境の把握に努める。
		外来種	平成4～5年度にニッポンモンキジガバチ、セイヨウミツバチ、オオタバコガを、平成11年度にセイヨウミツバチを、平成16年度にブタクサハムシ、オオタバコガを確認した。	：人の利用の増加や外来種の分布拡大などが影響したものと考えられる。	生物多様性を適切に保全する。	外来種による影響が懸念されるため、在来種保全の観点から現状は好ましくない。	・分布域の拡大や在来種への影響に留意しながら、生息状況を継続的に調査し、把握に努める。
流入河川のまとめ			<p>(1)流入河川の特徴 流入河川では、本川の真名川や笹生川で流れが緩やかな中・上流域を好むオイカワ、アブラハヤなどが、支川の持籠谷川や仙翁谷川ではイワナ、アマゴなどの渓流魚が多く確認されている。これらの流水性の魚類や回遊性魚のアマゴ（サツキマス）などを継続して確認している。底生動物も流水性の種が多く出現しており、EPT指数の高さから流入河川の生物相が豊かで、水質も良好であることが伺える。そのほか、渓流性の鳥類（カワガラス）や両生類（カジカガエル等）、河川環境を利用する鳥類（主に開けた河原で見られるイカルチドリ）などの生息も確認している。</p> <p>(2)ダムによる影響 イワナ、アマゴ（サツキマス）、トウヨシノボリは、ダム湖で陸封されたものと考えられる。</p> <p>(3)ダム以外による影響 外来種の昆虫類を確認している。</p>				

注)検証結果の凡例

- ：生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によると考えられる場合
- ：生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によると考えられる場合
- ：生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- ：生物の生息・生育状況に、大きな変化がみられなかった場合
- ?：生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合

(3)下流河川

下流河川の生物の生息・生育状況に関する評価を表 6.4-3 に示す。

表 6.4-3(1) 生物の生息・生育状況に関する評価(下流河川)

検討項目		生物の状況	ダムとの関連の 検証結果	評価		今後の方針	
				視点	評価結果		
魚類	生息状況の変化	砂礫の環境を好む底生魚等の生息状況	産卵場として礫底を利用するアブラハヤ、ウグイ、ヤマメ等や、石下に産卵するカジカ、底生魚のアジメドジョウ、アカザ等を確認している。	- : アブラハヤ、ウグイ、ヤマメ、カジカ等を継続して確認しており、生息状況に大きな変化はみられない。	地域に特有な生態系を保全する。	大きな変化が認められないことから、現状で問題はほとんどないものと考えられる。	-
		外来種	平成 8 年度以降、ニジマスを確認した。	: 平成 5 年に漁協によって放流されたニジマスに起因している可能性がある。	生物多様性を適切に保全する。	外来種による影響が懸念されるため、在来種の保全の視点から現状は好ましくない。	分布域の拡大や在来種への影響に注意しながら、生息状況を継続的に調査して把握に努める。
		漁獲量	SS 濃度が水産用水基準を超過した平成 16 年、17 年に、アユの漁獲量が減少した。	: SS 濃度が水産用水基準を超過した平成 16 年、17 年に、アユの漁獲量が減少しており、濁水放流の影響があった可能性がある。	地域に特有な生態系を保全する。	下流河川環境の保全の観点から好ましくない。	継続した調査とともに、濁水長期化軽減対策を継続して実施する必要がある。
底生動物	生息状況の変化	主要構成種	下流河川の EPT 指数は流入河川より低く、トビケラ目や堀潜型、堆積物収集者等が比較的多かった。	: ダムから流下した有機物を栄養源に、造網型トビケラ類や堀潜型、堆積物収集者等が増加し、底生動物相が変化した可能性がある。	地域に特有な生態系を保全する。	下流河川環境の保全の観点から好ましくない。	継続した調査が必要である。
両生類	生息状況の変化	溪流環境を利用する種	平成 17 年度にカジカガエルを確認した。	? : 溪流環境を利用する種を確認したが、下流河川における調査は平成 17 年度に初めて実施したため、変化の検証はできなかった。	地域に特有な生態系を保全する。	単年度調査であり、現段階では評価できない。	継続した調査が必要である。
陸上昆虫類	生息状況の変化	河原環境を利用する種	河原環境を利用する種として、ミヤカマワトンボ、カワラスズ、ヤチスズ、エゾスズ、カワラバッタ、ハネナガヒシバッタ、コパネヒシバッタ、アイヌハンミョウの計 8 種を確認した。	? : 河原環境を利用する種を確認したが、下流河川における調査は平成 16 年度に初めて実施したため、変化の検証はできなかった。	地域に特有な生態系を保全する。	単年度調査であり、確認数も少ないため現段階では評価できない。	継続した調査が必要である。

表 6.4-3(2) 生物の生息・生育状況に関する評価（下流河川）

<p>下流河川の まとめ</p>	<p>(1)下流河川の特徴 下流河川では、アブラハヤ、ウグイ、ヤマメなど礫等の存在する環境を利用する魚類や、カジカ、トウヨシノボリなどの底生魚を継続して確認している。また、草地や森林が隣接する渓流環境に生息するカジカガエルや、河原環境を利用するカワラバッタ、アイヌハンミョウ等の昆虫類も確認した。 なお、「平成 17 年度河川水辺の国勢調査全体計画の策定（真名川ダム・九頭竜ダム）報告書」によると、魚類調査の既往調査地点はダムサイトから離れた場所にあったため、調査地点を上流部に移動し、新規設定する計画となっている。</p> <p>(2)ダムによる影響 魚類について、SS 濃度が水産用水基準を超過した平成 16 年、17 年に、アユの漁獲量が減少しており、濁水放流の影響があった可能性がある。 また、底生動物について、下流河川の EPT 指数は流入河川より低く、トビケラ目や堀潜型、堆積物収集者等が比較的多かった。ダムから流下した有機物を栄養源に、造網型トビケラ類や堀潜型、堆積物収集者等が増加し、底生動物相が変化した可能性がある。</p> <p>(3)ダム以外による影響 外来種のニジマスの確認は、漁協による放流に起因している可能性がある。</p>
----------------------	--

注)検証結果の凡例

- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- : 生物の生息・生育状況に、大きな変化がみられなかった場合
- ? : 生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合

(4)ダム湖周辺

ダム湖周辺の生物の生息・生育状況に関する評価を表 6.4-4 に示す。

表 6.4-4(1) 生物の生息・生育状況に関する評価 (ダム湖周辺)

検討項目		生物の状況	ダムとの関連の 検証結果	評価		今後の方針
				視点	評価結果	
植物	生育状況の変化	ダム湖周辺の植生は、主にクリ - コナラ群落、ヤナギ低木群落、ツルヨシ群落、ススキ群落等で、これらの面積比率は、3回の調査でほとんど変化は認められなかった。なお、ダム湖周辺のミズナラに立枯れが散見され、カシノナガクイムシの被害がおよんでいる可能性がある。	- : ダム湖周辺の群落やその群落面積比率にほとんど変化がみられないことから、植生に大きな変化はみられないと考えられる。	生物多様性を適切に保全する。	大きな変化が認められないことから、現状で問題はないものと考えられるが、ミズナラの立枯れには注意が必要である。	緑化などの工事の際には、改訂された「湖岸緑化マニュアル(案)」をもとに在来種を用いた緑化を行う方向になっており、外来種の分布の拡大や新たな種の侵入防止に努める。  ミズナラの立ち枯れをモニタリングする。
	原石山跡地の植生の変化	斜面上部は人工草地、斜面中部にはススキ群落、カワラハハコ群落がみられ、平成7、8年度に変化は認められなかった。平成15年度には人工草地がススキ群落に置き換わった。	- : 斜面上部の人工草地がススキ群落に置き換わったほかに変化はみられなかった。	地域に特有な生態系を保全する。	大きな変化が認められないことから、現状で問題はほとんどないものと考えられる。	
	外来種	平成7年度には59種(比率7.0%)、平成10年度には64種(比率7.2%)、平成15年度には56種(比率6.6%)の外来種を確認した。一般に法面緑化に利用される種であるイタチハギが昭和53年度には確認されず、平成7~15年度に確認した。	: ほぼ同数の外来種を毎回確認している。平成7年度から実施した「真名川ダム湖岸裸地対策調査」における緑化試験で使用したイタチハギが、移出して分布を広げている可能性が考えられる。	生物多様性を適切に保全する。	外来種による影響が懸念されるため、在来種保全の視点から現状は好ましくない。	

表 6.4-4(2) 生物の生息・生育状況に関する評価（ダム湖周辺）

検討項目		生物の状況	ダムとの関連の 検証結果	評価		今後の方針	
				視点	評価結果		
鳥類	生息状況の変化	樹林性種	ツツドリ、コゲラ、サンショウクイ、クロツグミ、シジュウカラ等、多くの樹林性鳥類を確認した。	- : 多くの樹林性種を継続して確認している。	地域に特有な生態系を保全する。	大きな変化が認められないことから、現状で問題はほとんどないものと考えられる。	-
		集団分布地	イワツバメの集団営巣を継続して確認している。	: 橋桁等の人工構造物が継続して営巣場所として利用されている。	地域に特有な生態系を保全する。	大きな変化が認められないことから、現状で問題はほとんどないものと考えられる。	イワツバメの営巣地を保護し、橋脚の管理に注意する。
		猛禽類	ダム湖周辺では、オジロワシ、オオタカ等の 8 種類の猛禽が確認され、ハヤブサについては繁殖を確認している。	: ダム湖周辺は、猛禽類が確認されるなど、豊かな森林環境が広がっている。ハヤブサが人工構造物に営巣している。	地域に特有な生態系を保全する。	環境に適応し生息していることから、現状で問題はほとんどないものと考えられる。	ハヤブサの営巣地を保護し、繁殖状況をモニタリングする。

表 6.4-4(3) 生物の生息・生育状況に関する評価（ダム湖周辺）

検討項目		生物の状況	ダムとの関連の 検証結果	評価		今後の方針	
両生類・爬虫類・哺乳類	生息状況の変化	樹林性種	ネズミ類などの小型哺乳類からツキノワグマ等の大型哺乳類を含む10種を確認した。	- : 樹林を生息場所とし木本や草本の葉を餌とするカモシカと、樹上空間を多く利用するテンを継続して確認している。	地域に特有な生態系を保全する。	大きな変化が認められないことから、現状で問題はほとんどないものと考えられる。	-
		ロードキル	道路上で平成6年度に1種（1個体）、平成12年度に5種（23個体）、平成17年度に11種（16個体）の動物の死体を確認した。	: ダム湖周辺道路では、主に両生類・爬虫類のロードキルを確認しており、その確認種数は増加している。	地域に特有な生態系を保全する。	確認箇所が少なく、動物の移動経路が保護されているかどうか評価できない	巡視の際に、場所や種に注意して情報を収集し、発生状況を把握する。
		両生類の繁殖状況	イモリ、カジカガエル、ヒダサンショウウオ等6種の両生類の繁殖（卵塊、卵のうち、幼生）を確認した。	- : 沢などで繁殖するヒダサンショウウオをはじめ、3種の両生類について、平成12年以降経年的に繁殖を確認している。	地域に特有な生態系を保全する。	大きな変化が認められないことから、現状で問題はほとんどないものと考えられる。	-
		外来種	ハクビシン、ハツカネズミを確認し、ハクビシンは継続して確認した。	: ハクビシンは平成6年度の調査より継続して確認している。	生物多様性を適切に保全する。	外来種による影響が懸念されるため、在来種保全の視点から現状は好ましくない。	分布域の拡大や在来種への影響に留意しながら、生息状況を継続的に調査し、把握に努める。

表 6.4-4(4) 生物の生息・生育状況に関する評価（ダム湖周辺）

検討項目			生物の状況	ダムとの関連の 検証結果	評価	今後の方針	
陸上昆虫類	生息状況の変化	チョウ類相	いずれの調査年度も多自然種と準自然種で多くを占めていた。平成 4～5 年度と平成 16 年度の EI 値は 74 と 86 であり、ダム湖周辺は中自然環境と判断された。また、平成 11 年度の EI 値は 102 であり、多自然と判断された。	- : ダム湖周辺のチョウ類の生息環境に、大きな変化は認められない。	地域に特有な生態系を保全する。	チョウ類の生息環境に大きな変化は認められないことから、現状で問題はほとんどないものと考えられる。	-
		止水性水生昆虫	平成 4～5 年度には 5 種、平成 11 年度には 18 種、平成 16 年度には 4 種の止水性水生昆虫を確認した。	: ダム湖周辺で、止水性昆虫類を継続して確認しており、ダム湖内でミズカマキリやゲンゴロウ類の生息を確認した。	地域に特有な生態系を保全する。	継続的に止水性昆虫を確認していることから、現状で大きな問題はないと考えられる。	-
ダム湖周辺のまとめ			<p>(1)ダム湖周辺の特徴 ダム湖周辺には、クリ - コナラ群落をはじめとする代償植生の木本群落が広く分布しており、木本および草本植生の分布面積に大きな変化は認められない。植物の外来種は毎回同様に確認されている。また、在来種の両生類の繁殖や樹林性の鳥類、哺乳類、昆虫類等についても大きな変化は認められない。猛禽類については、人工構造物でのハヤブサの繁殖を確認した。なお、ダム湖周辺道路では、主に両生類・爬虫類のロードキルを確認しており、その確認種数は増加している。</p> <p>(2)ダムによる影響 人工構造物を利用してイワツバメとハヤブサが繁殖している。</p> <p>(3)ダム以外による影響 外来種のイタチハギは、平成 7 年度から実施されている「真名川ダム湖岸裸地対策調査」における緑化試験で使用したイタチハギが、移出して分布を広げている可能性が考えられる。平成 15 年度にはイタチハギ群落がダム湖岸沿いに確認された。</p>				

注)検証結果の凡例

- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- : 生物の生息・生育状況に、大きな変化がみられなかった場合
- ? : 生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合

(5)連続性

連続性の観点からみた生物の生息・生育状況に関する評価を表 6.4-5 に示す。

表 6.4-5 生物の生息・生育状況に関する評価（連続性）

検討項目	生物の状況	ダムとの関連の 検証結果	評価		今後の方針
			視点	評価結果	
回遊性魚類 の陸封化	ダム湖内ではワカサギ、アユ、イワナ、ヤマメ、アマゴ（サツキマス）、トウヨシノボリの 6 種を、流入河川ではアユ、イワナ、ヤマメ、アマゴ（サツキマス）、トウヨシノボリの 5 種を回遊魚として確認した。	調査結果より、イワナ、アマゴ（サツキマス）、トウヨシノボリの 3 種が陸封されていると考えられる。ダム湖の環境に適応し、陸封化したと考えられる。	地域に特有な生態系を保全する。	陸封化され、ダムでの生息は維持されている。	-
回遊性魚類 等の遡上阻 害	回遊魚は、ワカサギ、アユ、イワナ、ヤマメ、アマゴ（サツキマス）、トウヨシノボリの 6 種を確認した。	真名川ダムには魚道が設置されていないことから、回遊性魚類等の遡上は阻害されていると考えられる。	地域に特有な生態系を保全する。	陸封化や放流によって個体群は維持しているが、生活史は分断されている。	回遊魚の生息状況をモニタリングする。
連続性のま とめ	(1)ダムの影響 ダム湖の存在により、回遊性魚類が陸封されている。また、回遊性魚類等の遡上がダムの存在によって阻害されている。				

(6)重要種

重要種の生息・生育状況に関する評価を表 6.4-6 に示す。

表 6.4-6 生物の生息・生育状況に関する評価（重要種）

検討項目	生物の状況	ダムとの関連の 検証結果	評価		今後の方針
			視点	評価結果	
生息状況の 変化が不明 であった重 要種	過去の調査で生息を確認したが、最新の調査で確認していない。	? : 生息密度の低さや過去に詳細な記録がないことなどで再確認が難しいため、生息状況の変化が不明である。	地域個体群を維持する。	生息状況の変化が不明であるため、評価できない。	今後も引き続き調査を行い、生息状況を把握していく。
ハヤブサ	「真名川におけるハヤブサの営巣について」(真名川ダム管理支所資料)によると、平成 13 年から 4 年連続で繁殖成功が確認している。	: ダム湖周辺は、高次消費者である猛禽類の生息範囲の一部になっている。	地域に特有な生態系を保全する。	環境に適応し生息していることから現状で問題はないものと考えられる。	ハヤブサの生息環境の保全が望まれる。
重要種のま とめ	(1)ダムの影響 ダムの存在による重要種への影響について、特に明確なものはみられず、影響要因は不明である。 (2)ダム以外の影響 ダム以外の影響については不明であるが、周辺環境の変化、外来種の侵入の影響等も考えられる。				

注)検証結果の凡例

- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- : 生物の生息・生育状況に、大きな変化がみられなかった場合
- ? : 生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合



## 6.5 環境保全対策の効果の検討

真名川ダムでは、環境保全対策として湖岸緑化試験、ダム水環境改善事業、ダムの弾力的管理試験を実施している。これらの保全対策について、それぞれの保全対策の分析評価を行って課題を抽出し、課題が認められた場合については、それらの各課題について改善の必要性の検討を行った。

### 6.5.1 環境保全対策の整理

#### (1)環境保全対策の実施状況

真名川ダムの環境保全対策の実施状況を表 6.5-1 に示す。

表 6.5-1 真名川ダムの環境保全対策の実施状況

No.	手法	場所	概要
1	湖岸緑化試験	ダム湖周辺	ダム湖岸の裸地化対策として、貯水池左岸の東向き斜面に緑化試験地（4区域）を設置し、生育適正及び工法適正について検討を行った。
2	ダム水環境改善事業	下流河川	ダム下流の維持流量未設定区間の解消、及び流水の正常な機能の維持のために設置した放流設備の効果を確認するため、魚類調査を行った。
3	ダムの弾力的管理試験	下流河川	下流河川の環境改善を目的として実施している試験結果として、改善効果を確認するため、アユ調査、付着藻類調査等を行った。

## 6.5.2 湖岸緑化試験

### (1)湖岸緑化試験の概要

真名川ダムは制限水位方式をとっているため、洪水貯留準備水位(旧洪水期制限水位)の期間中に湖岸に裸地が出現していた。湖岸緑化試験は、上記のダム湖岸裸地対策の試験として強い耐冠水性の植物(木本・草本)の評価と湖岸緑化の適正工法の検討を行うことを目的として実施した。

湖岸緑化試験の実施内容を表 6.5-2 に示す。なお緑化試験地及び試験区の実施位置を図 6.5-1 に、配置状況を図 6.5-2 に示す。

表 6.5-2 湖岸緑化試験の実施内容

項目	概要	
調査内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 緑化試験地付近の気象状況</li> <li>・ 緑化試験地の冠水状況</li> <li>・ 緑化試験植物の生育状況</li> <li>・ 緑化試験地法面の安定状況</li> </ul>	
調査方法	気象状況	真名川ダム管理所での気象データに基づき、気象、降水量、風向、風速について整理した。
	冠水状況	真名川ダム管理所での貯水位データに基づき、冠水期間・日数、水位昇降頻度等について、試験区の標高別に整理した。
	植物の生育状況	試験植物の生育量・個体密度・個体成長について平成7年から10年にかけて追跡調査を実施した。
	法面の安定状況	浸食による法面等の損壊・流亡の状況、冠水による土層圧や土層硬度の変化について調査を実施した。
調査地点	A区、B'区、C区、C"区にa <sub>2</sub> 、a <sub>3</sub> 、f <sub>1</sub> 工法による。	
調査工法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ A : 在来草本類・木本類の播種</li> <li>・ B' : 草本類・木本類の播種</li> <li>・ C : 在来木本類の植栽</li> <li>・ C" : 在来木本類の植栽(挿し木のみ)</li> <li>・ a<sub>2</sub> : 丸太柵工+マルチングを採用し、在来・外来草本・木本類の播種および在来木本の植栽を行った。</li> <li>・ a<sub>3</sub> : 丸太柵工+植生マット工を採用し、外来草本・木本類の播種および在来木本類の植栽を行った。</li> <li>・ f<sub>1</sub> : 二重ネット張り工を採用し、外来草本・木本類の播種および在来木本類の植栽を行った。</li> </ul>	
調査時期	気象状況及び冠水状況	平成7年10月3日～平成7年11月22日 平成7年11月23日～平成8年10月24日 平成8年10月25日～平成9年9月10日
	植物の生育状況及び法面の安定状況	平成9年8月上旬(第1回) 平成9年9月上旬(第2回) 平成7年10月～平成10年10月(巡視による確認)

注) 真名川ダムでは10月1日～6月30日が非洪水期に該当する。

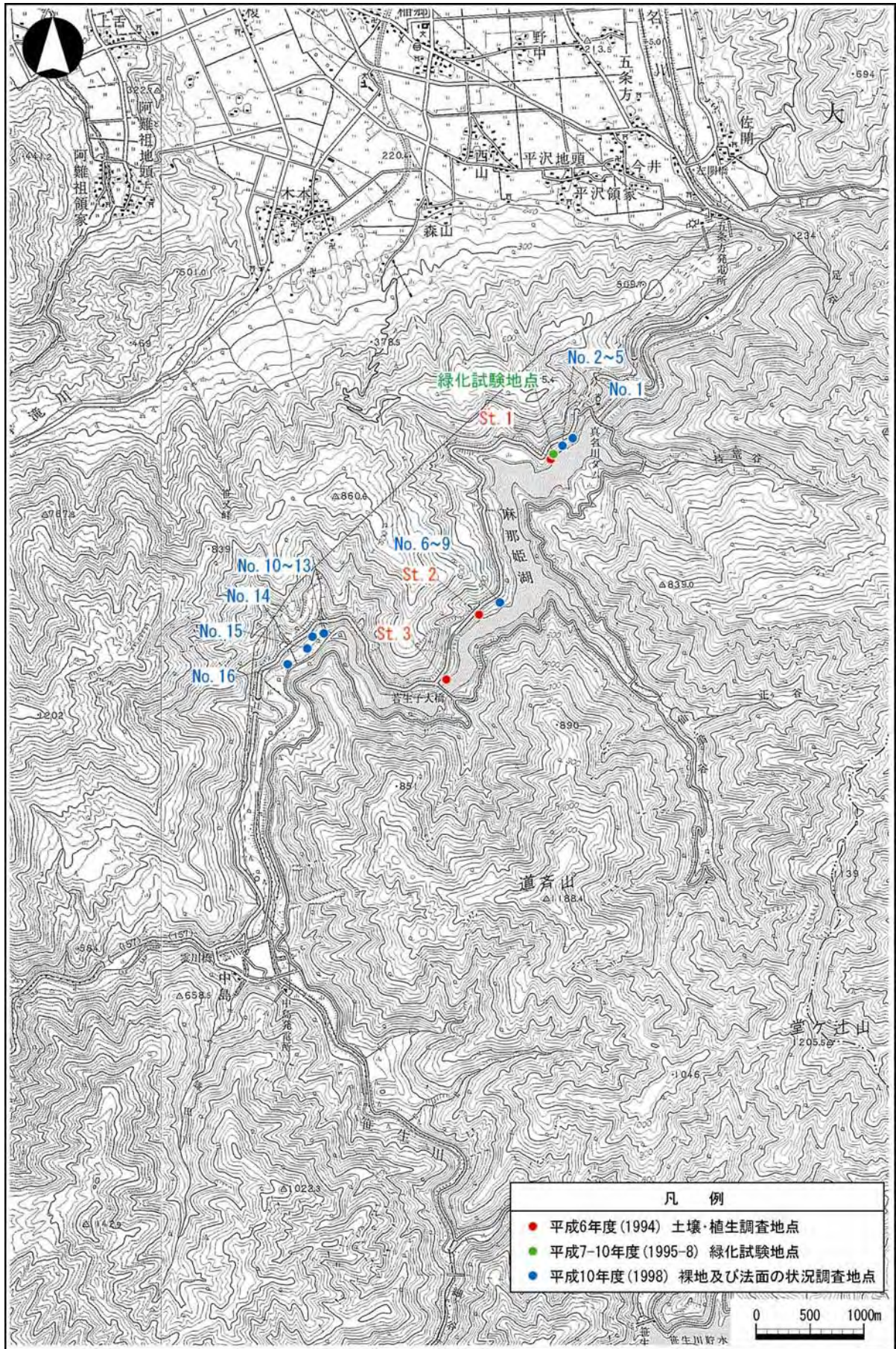
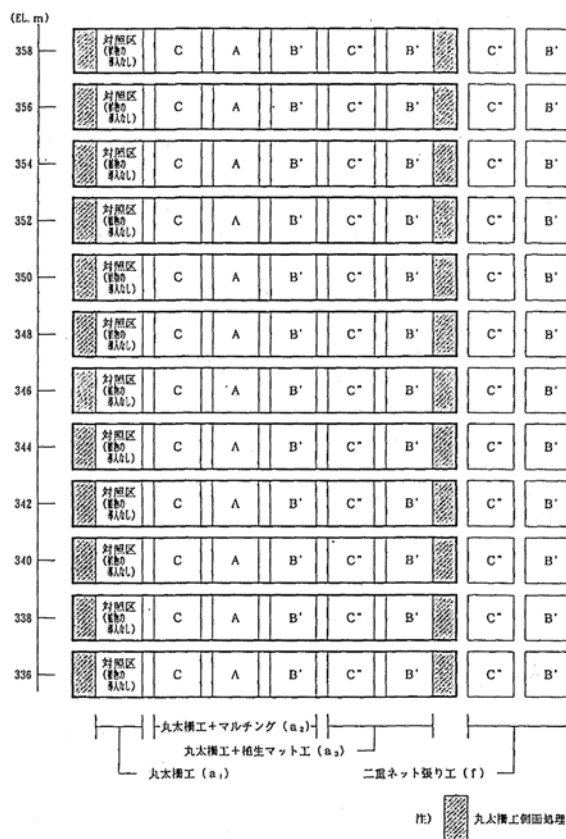


図 6.5-1 真名川ダムの環境保全対策（湖岸緑化試験）の実施位置



出典：6-38 「真名川ダム緑化現地調査報告書」

図 6.5-2(1) 緑化試験区の全景（平成 10 年 9 月 3 日撮影）



植物の配合・配植様式

A (在来の草本類・木本類の播種)				B' (外来の草本類・木本類の播種)				C (在来の木本類の植栽)			
種類	構成	期待本数	種子配合量	種類	構成	期待本数	種子配合量	種類	構成	期待本数	植栽本数
エノコログサ	●	500/m <sup>2</sup>	11.8 g/m <sup>2</sup>	シロツメクサ	○	200/m <sup>2</sup>	0.3 g/m <sup>2</sup>	針杉種(1-2)	▲	2/m <sup>2</sup>	2本/m <sup>2</sup>
メヒシバ	●	500/m <sup>2</sup>	0.6 g/m <sup>2</sup>	K31フェスタ	○	200/m <sup>2</sup>	0.7 g/m <sup>2</sup>	ヤマハンノキ	■	2/m <sup>2</sup>	2本/m <sup>2</sup>
オオイヌタデ	●	500/m <sup>2</sup>	17.1 g/m <sup>2</sup>	ルイイフシ	○	200/m <sup>2</sup>	0.1 g/m <sup>2</sup>	ネムノキ	■	1/m <sup>2</sup>	1本/m <sup>2</sup>
メドハギ	○	500/m <sup>2</sup>	5.1 g/m <sup>2</sup>	イタチハギ	○	200/m <sup>2</sup>	4.4 g/m <sup>2</sup>				
ヤマハンノキ	○	100/m <sup>2</sup>	2.8 g/m <sup>2</sup>								

C* (在来の木本類の植栽：挿し木のみ)		
種類	構成	植栽本数
針杉種(1-2)	▲	4/m <sup>2</sup>
		4本/m <sup>2</sup>

凡例

- ：保存種子
- ：市販種子
- ：市販苗木
- ▲：現地採枝

出典：6-38 「真名川ダム緑化現地調査報告書」

図 6.5-2(2) 緑化試験地における試験区の配置

(2)湖岸緑化試験の結果の整理

1)気象状況

真名川ダム緑化試験地付近における平成7年10月の緑化試験区設置以降の月平均気温および月間降水量は表6.5-3(1)～(2)に示すとおりである。また、月平均風速及び月別日最多風向は表6.5-3(3)～(4)に示すとおりである。

表 6.5-3(1) 平成7年10月の緑化試験区設置以降の月平均気温( )

月年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	平均
H7年	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14.1	5.6	0.6	6.8
H8年	0.0	-1.4	3.4	8.0	14.8	19.7	23.3	24.3	18.4	13.8	8.3	2.2	11.2
H9年	-0.4	-0.5	4.8	10.6	15.8	19.7	22.5	24.1	22.9	-	-	-	13.3
平均	-0.2	-1.0	4.1	9.3	15.3	19.7	22.9	24.2	20.7	14.0	7.0	1.4	11.4

注) H7.10.1～H9.9.10までのデータを集計した。

- は未調査

表 6.5-3(2) 平成7年10月の緑化試験区設置以降の月間降水量(mm)

月年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	平均
H7年	-	-	-	-	-	-	-	-	-	123.6	330.8	325.0	779.4
H8年	336.0	273.0	215.0	70.0	121.0	304.0	107.0	330.0	165.0	123.0	217.0	310.0	2571.0
H9年	368.0	214.0	138.0	152.0	316.0	177.0	340.0	189.0	59.0	-	-	-	1953.0
平均	352.0	243.5	176.5	110.0	218.5	240.5	223.5	259.5	112.0	123.0	273.9	317.5	2651.7

注) H7.10.1～H9.9.10までのデータを集計した。

- は未調査

表 6.5-3(3) 平成7年10月の緑化試験区設置以降の月平均風速 (m/s)

月年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	平均
7年	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.9	1.2	1.0	1.0
H8年	0.9	1.3	1.4	1.4	2.0	2.0	1.5	1.7	1.4	1.5	1.7	1.6	1.5
H9年	1.1	1.2	1.1	1.5	1.6	1.6	1.2	1.4	0.8	-	-	-	1.3
平均	1.0	1.3	1.2	1.5	1.8	1.8	1.3	1.5	1.1	1.2	1.4	1.3	1.4

注) H7.10.1～H9.9.10までのデータを集計した。

- は未調査

表 6.5-3(4) 平成7年10月の緑化試験区設置以降の月別日最多風向

月年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
H7年	-	-	-	-	-	-	-	-	-	WSW (7)	WSW (11)	SW (6)
H8年	WSW (6)	WSW (11)	WSW (8)	E (8)	WSW (10)	WSW (11)	WSW (14)	WSW (12)	WSW (8)	WSW (15)	E (10)	WSW (12)
H9年	WSW (7)	WSW (6)	E (6)	WSW (7)	WSW (10)	WSW (8)	WSW (9)	N (6)	SW (2)	-	-	-

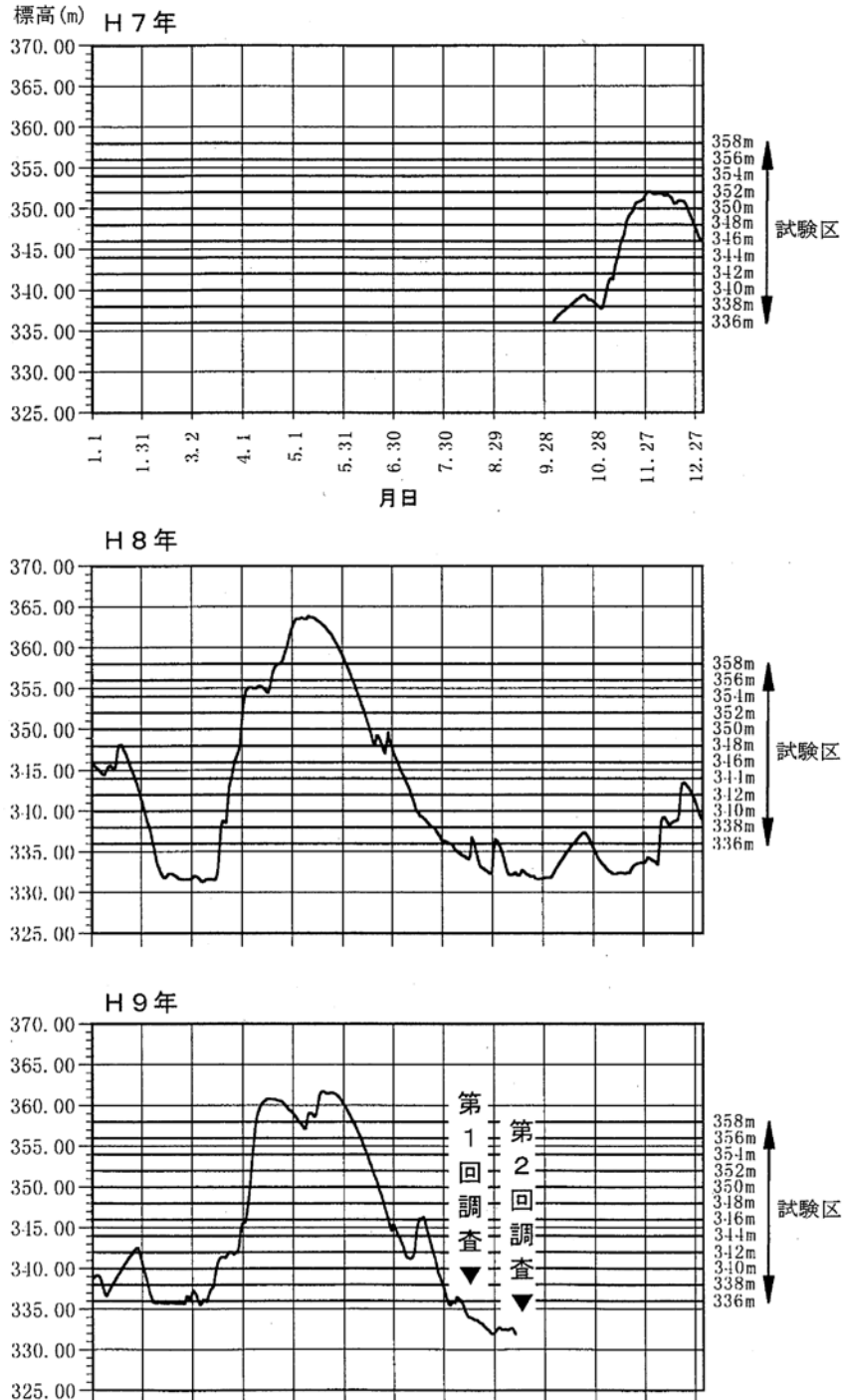
注) H7.10.1～H9.9.10までのデータを集計した。

( )内は日数

- は未調査

## 2)冠水状況

緑化試験地設置以降の平成7～平成9年にかけてのダム湖水位変動は図6.5-3に示すとおりであり、平成7年には試験区の標高352mまで、平成8年と9年には試験区全域が冠水した。



出典：6-37 「平成9年度真名川ダム湖岸裸地对策調査業務報告書」

図6.5-3 平成7年10月の緑化試験地設置以降のダム湖の水位変動(H7.10.3～H9.9.10)

### 3) 緑化試験の追跡調査

平成 7 年 10 月から平成 10 年 10 月にかけて、緑化試験施工後の追跡調査を行った。調査結果の概要は表 6.5-4 に示すとおりであり、木本類ではイタチハギとヤナギ類、多年生草本ではリードカナリーグラス、一年生草本ではオオオナモミ等に耐冠水性があることを確認した。

表 6.5-4 湖岸緑化試験の結果の概要

項目	概要	
試験区の植物の生育状況	導入種(播种植物)の生育状況	在来草本：エノコログサ及びメドハギを確認 (エノコログサ植被率 25%) 外来草本：リードカナリーグラスを確認(植被率 70%) 外来木本：イタチハギ(植被率 60~100%)
	導入種(植栽植物)の生育状況	在来木本：ヤナギ類:生育状況は良好 ヤマハンノキ:上部で良好 ネムノキ:最上段のみで確認 外来木本：イタチハギ：ヤナギ類同様に生育良好
	侵入植物の生育状況	全段でオオオナモミを確認(植被率 90%) 試験地の上部ではイタチハギを確認(植被率 75%) 試験地の下段ではアメリカセンダングサを確認 在来種の侵入種は上部にコブナグサ、カワラケツメイが、下部ではヌカキビ、イヌビエを確認
	植物の耐冠水性の評価	木本類：イタチハギ、ヤナギ類が冠水日数 120 日未満で優占する傾向にあることから耐冠水性ありと判断。 多年生草本：リードカナリーグラスが冠水日数 60 日未満で優占したことから弱い耐冠水性があると判断。 一年生草本：オオオナモミが冠水日数 220 日未満であったことから特に強い耐冠水性があると判断。その他、オオイヌタデ 180 日未満、アメリカセンダングサ、ヌカキビ 120 日未満メヒシバ、マルバルコウ 60 日未満で優占することが判明。
法面の状況	全 96 試験区中、26 試験区が損傷度 1(損傷無し)、57 試験区が損傷度 2(軽微な土砂流出や客土陥没が認められる)、13 試験区が損傷度 3(法面の状況が悪化)であった。	
工法の施工適性	緑化試験工法ごとの損傷度別の試験区数を指標として、緑化試験工法の施工適性を評価した結果、全国の各試験ダムに共通して試験施工されている丸太柵工+マルチング(a <sub>2</sub> )・丸太柵工+植生マット(a <sub>3</sub> )と、二重ネット張り工(f <sub>1</sub> )の 3 工法は施工適性が高いことを確認。	

### (3)湖岸緑化試験の効果の評価と課題

湖岸の緑化試験について、効果の評価結果と課題を表 6.5-5 に示す。

表 6.5-5 湖岸緑化試験の効果の評価と課題

結 果	<ul style="list-style-type: none"><li>植物の耐冠水性の検討 平成 7 年度から 10 年度の確認調査の結果、木本類はイタチハギやヤナギ類、多年生草本はリードカナリーグラスに耐冠水性があることを確認した。</li><li>緑化試験方法の施工適性の検討 工法毎の損傷度別の試験区数を指標として、工法の施工適正を評価した結果、丸太柵工+マルチング、丸太柵工+植生マット、二重ネット張り工法の 3 工法は施工適正が高いことを確認した。</li></ul>
効果の評価	<p>耐冠水性がある種及び施工適正の高い工法を確認したことから試験の目的を達成した。さらに検討結果は「湖岸緑化マニュアル(案)」(平成 10 年、財団法人ダム水源地環境整備センター)の策定に反映された。</p> <p>また、当該試験を実施した平成 10 年度時点当時は、外来種を用いた試験を行ったが、外来種が在来生態系に与える影響を考慮し、平成 18 年に改訂された「ダム湖岸緑化の手引き(案)」(平成 18 年 国土交通省河川局河川環境課)では、外来種を用いず在来種を用いた緑化を行うこととしている。</p>
課 題	-



### 6.5.3 ダム水環境改善事業

#### (1)ダム水環境改善事業の概要

真名川ダムにおいては、発電を通して下流に利水補給を行っているため、下流（ダム直下から約 3km 区間）が維持流量未設定区間であった。この維持流量未設定区間の解消に必要な少量流量の設備を備え、河川本来の姿に戻すことを目的に、「ダム水環境改善事業（平成 5 年から平成 8 年）」によりバイパス放流設備を設置した。これにより年間を通して一定水量が河川に放流され、魚類等の生息が可能になり、真名川溪谷の景観も大きく改善されることになる。なお、実施位置は次頁の図 6.5-5 に示すとおりである。

#### (2)ダム水環境改善事業の結果の整理

##### 放流量

平成 9 年度より放流を開始し、当初は放流量を  $0.142\text{m}^3/\text{s}$  としていたが、平成 10 年度に  $0.284\text{m}^3/\text{s}$  とした結果、図 6.5-6 に示すように維持流量未設定区間の河川環境が改善された。さらに平成 15 年度からは地元の要望により放流量を  $0.671\text{m}^3/\text{s}$  に増加させている。



出典：6-50 「真名川ダム水環境改善事業パンフレット」

図 6.5-5 放流前後の河川状況

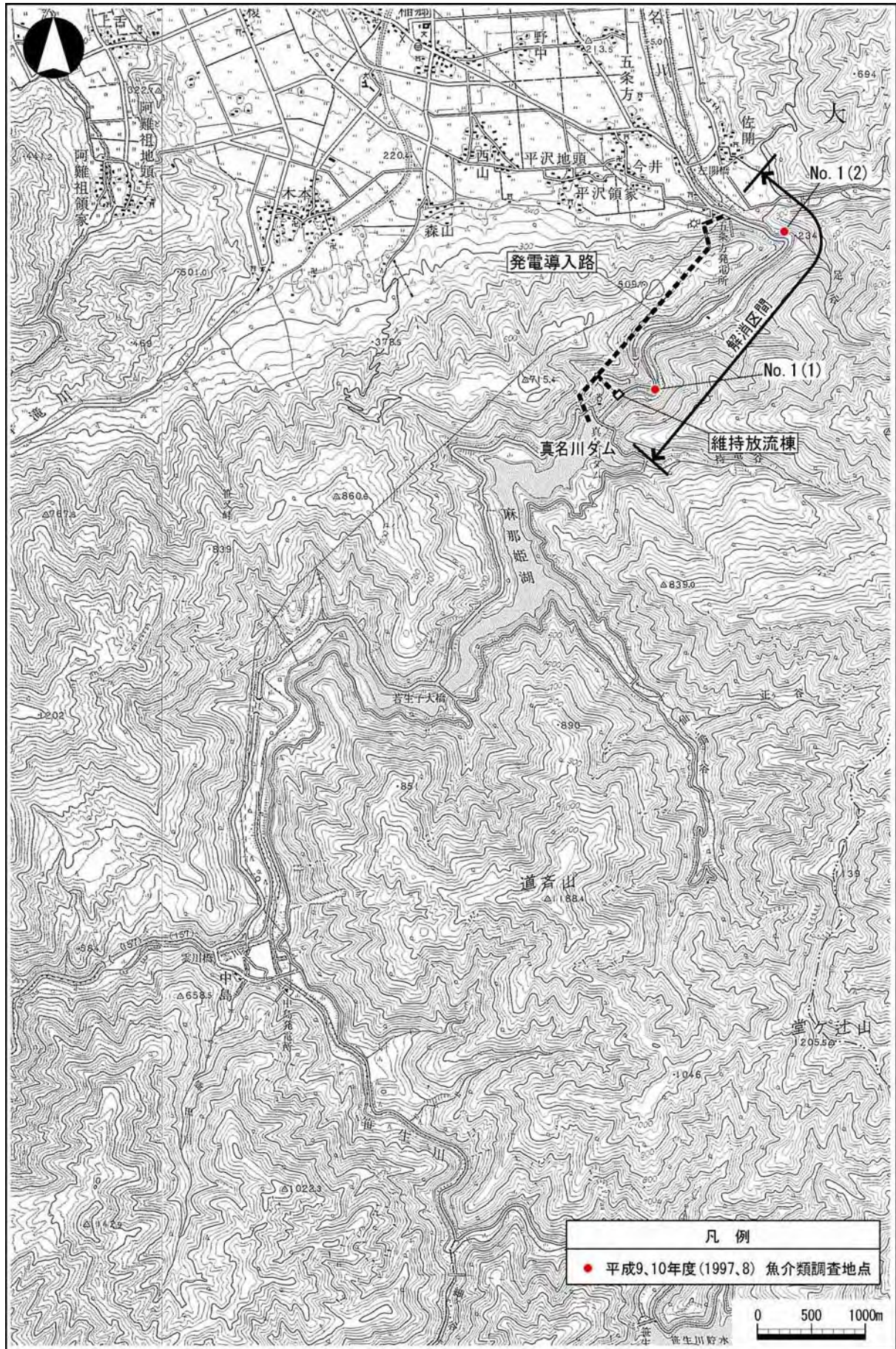


図 6.5-4 真名川ダムの環境保全対策（水環境改善事業）の実施位置

魚介類調査

平成9年度及び10年度に実施した魚介類調査の実施内容は表6.5-6(1)に、調査結果は表6.5-6(2)に示すとおりである。

調査地点 No.1(1)では、放流前の確認種が5種であったが、放流後の平成9年8月から平成10年の10月までに実施した7回の調査で9種確認した。また、放流量を平成9年度の0.142m<sup>3</sup>/sから平成10年度に0.284m<sup>3</sup>/sとした後の調査では、アマゴなどの確認個体数が増加した。

調査地点 No.1(1)の約3km下流に位置する調査地点 No.1(2)の確認種は、放流前の2回の調査(平成8年度、平成9年5月)で9種確認し、放流後の平成9年8月から平成10年の10月までに実施した6回の調査でも、ほぼ同数の8種を確認した。また、平成13年度に実施した河川水辺の国勢調査では、12種の魚類を確認した。

表6.5-6(1) ダム水環境改善事業における魚介類調査の調査内容

項目	概要	
調査方法	投網、タモ網、刺網による捕獲 ・投網(2種:目合12mm、18mm) ・タモ網(2種:目合2mm、7mm) ・刺網(3種:目合15mm、24mm、30mm)	
調査地点	ダムサイト下流 No.1(1) 0.7km 付近、 No.1(2) 2.9km 付近	
調査時期	平成9年度 (維持流量0.142m <sup>3</sup> /s)	平成9年5月13~15日(春季):放流前 平成9年8月21~22日(夏季):放流中 平成9年10月15~16日(秋季):放流中
	平成10年度 (維持流量0.284m <sup>3</sup> /s)	平成10年6月2~3日(春季):放流中 平成10年8月12日、25~26日(夏季):放流中 平成10年10月22~23日(秋季):放流中

表6.5-6(2) ダム水環境改善事業における魚介類調査結果

(単位:個体/地点)

		1(1)								1(2)									
		平成9年度(1997)				平成10年度(1998)				平成8年度 (1996)	平成9年度(1997)				平成10年度(1998)				平成13年度 (2001)
		5/15	8/21	10/15	10/16	6/2-3	8/12	8/25-26	10/22-23		5/15	8/21	10/15	6/2-3	8/12	8/25-26	10/22-23		
魚類	1 アブラハヤ	5.0	40.0	21.0	4.0	73.0	31.0	8.0	13.0	139.5	335.0	39.0	27.0	117.0	51.0	6.0	18.0	89.0	
	2 タカハヤ			5.0		10.0		1.0	4.0	3.5	26.0	8.0	15.0	25.0	3.0		5.0	10.5	
	3 ウグイ	11.0	38.0	3.0	8.0	45.0	3.0	7.0	11.0	30.0	24.0	40.0	42.0	55.0	36.0	14.0	34.0	75.0	
	4 アジメドジョウ		1.0															0.5	
	5 アカザ									2.0								0.5	
	6 ワカサギ						1.0												
	7 アユ																	2.0	
	8 イワナ	1.0	1.0	2.0		2.0	2.0		1.0		2.0		2.0		2.0		1.0	0.5	
	9 ニジマス									1.0		1.0	1.0	2.0				1.0	
	10 ヤマメ	1.0	1.0	2.0		13.0	1.0		1.0	3.0	2.0	1.0		2.0			1.0	3.0	
	11 アマゴ	1.0	6.0		5.0	34.0	14.0	6.0	10.0	7.0		3.0	2.0	9.0	30.0		10.0	5.0	
	12 カジカ									0.5	3.0	1.0			1.0		2.0	1.5	
	13 トウヨシノボリ		3.0			1.0	1.0	2.0	4.0									1.0	
	個体数合計	19.0	90.0	33.0	17.0	178.0	53.0	24.0	44.0	186.5	392.0	93.0	89.0	210.0	123.0	20.0	71.0	189.5	
	種類数合計	5								8								12	
		9								12									
注	1 カワニナ		5.0	4.0		4.0			3.0	0.5		1.0	3.0	3.0	4.0		2.0	2.0	
	2 ヌマエビ											2.0							

注 〇は放流前を示す。  
平成8年度と13年度は、河川水辺の国勢調査の結果である。

### (3)ダム水環境改善事業の効果の評価と課題

ダム水環境改善事業における評価結果と課題を表 6.5-7 に示す。

表 6.5-7 水改善事業における評価と課題

結果	平成 9 年度調査の放流前(春季)においては、7 種の魚類の生息を確認したのに対し、0.142m <sup>3</sup> /s の維持流量の放流が開始された調査(夏・秋季)では 10 種の魚類の生息を確認した。また、平成 10 年度調査で維持流量を 0.283m <sup>3</sup> /s に設定した際には、捕獲魚種は同じであったが、その流量の増加によってできた早瀬の存在により、比較的早い瀬を好むアサギ等の個体数が増加している傾向が見られた。
効果の評価	下流河川の維持流量未設定区間が改善されたこと、生息魚種及び生息数の増加が認められたことから、ダム水環境改善事業の効果は確認できた。
課題	調査は長期的展望に立って、継続的に行われる必要があるため、今後も、平成 9 年度、10 年度と同一地点において調査を実施し、魚類の生息状況のデータを蓄積することが必要である。

### 6.5.4 ダムの弾力的管理試験

#### (1)ダムの弾力的管理試験の概要

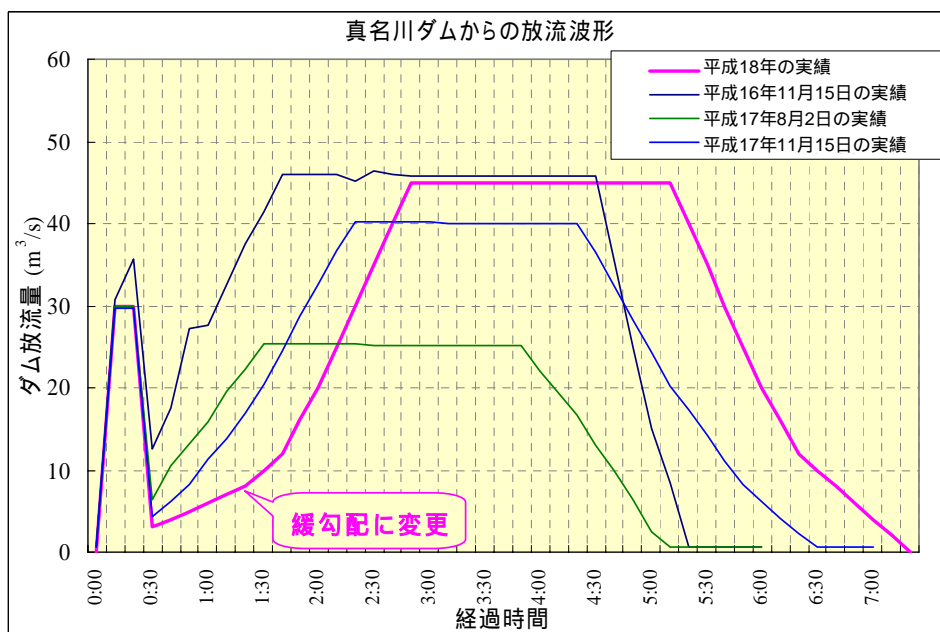
ダムの弾力的管理試験は平成12年度から実施し、平成14年度までは、魚類の生息環境改善等を目的として、 $0.284\text{m}^3/\text{s}$  河川維持用水に  $1.000\text{m}^3/\text{s}$  の上乘せ放流の試験を行った。その後、平成15年度に河川維持用水を  $0.671\text{m}^3/\text{s}$  に増量したため、弾力的管理試験は、平成15年度より維持流量未設定区間より下流の河川環境改善を目的とし、より改善効果を得るためにフラッシュ放流を実施することとした。これによる下流河川の付着藻類の生育環境の向上、アユの生息環境の改善効果を確認するため、アユ調査、付着藻類調査等を実施した。さらに、平成16年度からは、土砂還元を組み合わせたフラッシュ放流を実施した。フラッシュ放流の実施状況は表6.5-8に、フラッシュ放流の放流波形は図6.5-6に示すとおりである。

また、平成12年度から18年度にかけて実施したダムの弾力的管理試験のフローを図6.5-7に示すとともに、ダムの弾力的管理試験における調査の実施状況を表6.5-9に示した。なお、実施位置は図6.5-8に示すとおりである。

また弾力的管理試験の計画や調査結果の評価検討を行うため、平成12年度より「弾力的管理試験検討委員会」を設置し、平成18年度までに9回実施している。

表 6.5-8 フラッシュ放流の実施状況

実施期日	河川流量	還元土砂量
平成15年9月30日	$30\text{m}^3/\text{s}$	(土砂還元は実施しなかった)
平成16年11月15日	$50\text{m}^3/\text{s}$	約 $220\text{m}^3$ (貯水池上流端より八千代橋上流に還元)
平成17年8月2日	$30\text{m}^3/\text{s}$	(土砂還元は実施しなかった)
平成17年12月8日	$53\text{m}^3/\text{s}$	約 $200\text{m}^3$ (君が代橋上流の河道陸地部の掘削・投入)
平成18年11月15日	$53\text{m}^3/\text{s}$	約 $200\text{m}^3$ (貯水池上流端より君が代橋上流に還元)



出典：6-51 「平成18年度ダム下流河川環境向上等検討業務報告書」

図 6.5-6 フラッシュ放流の放流波形

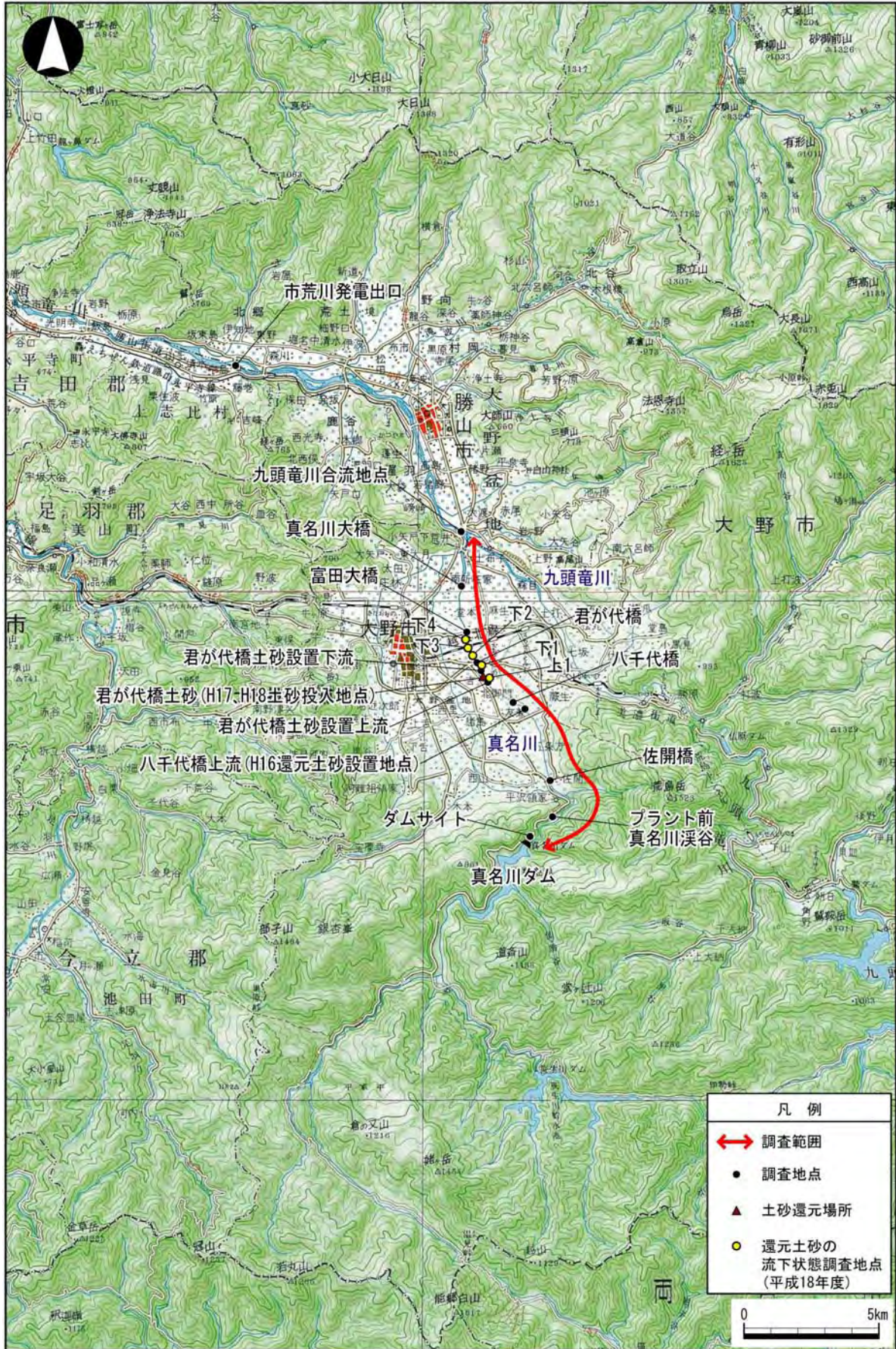
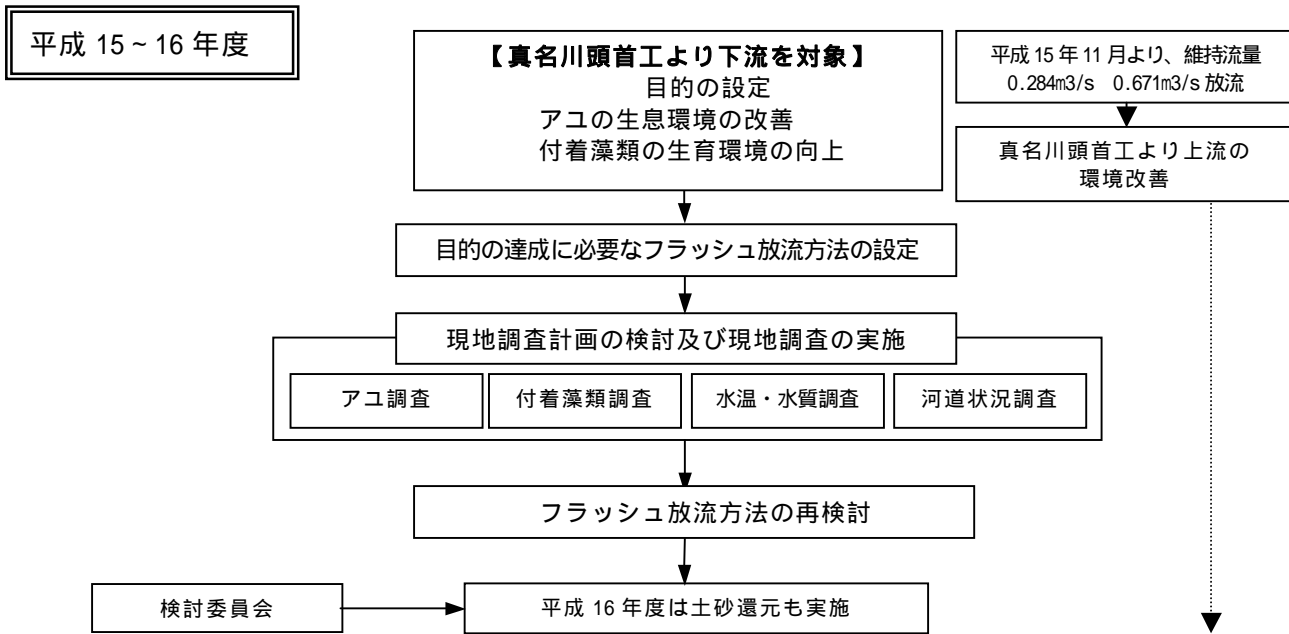
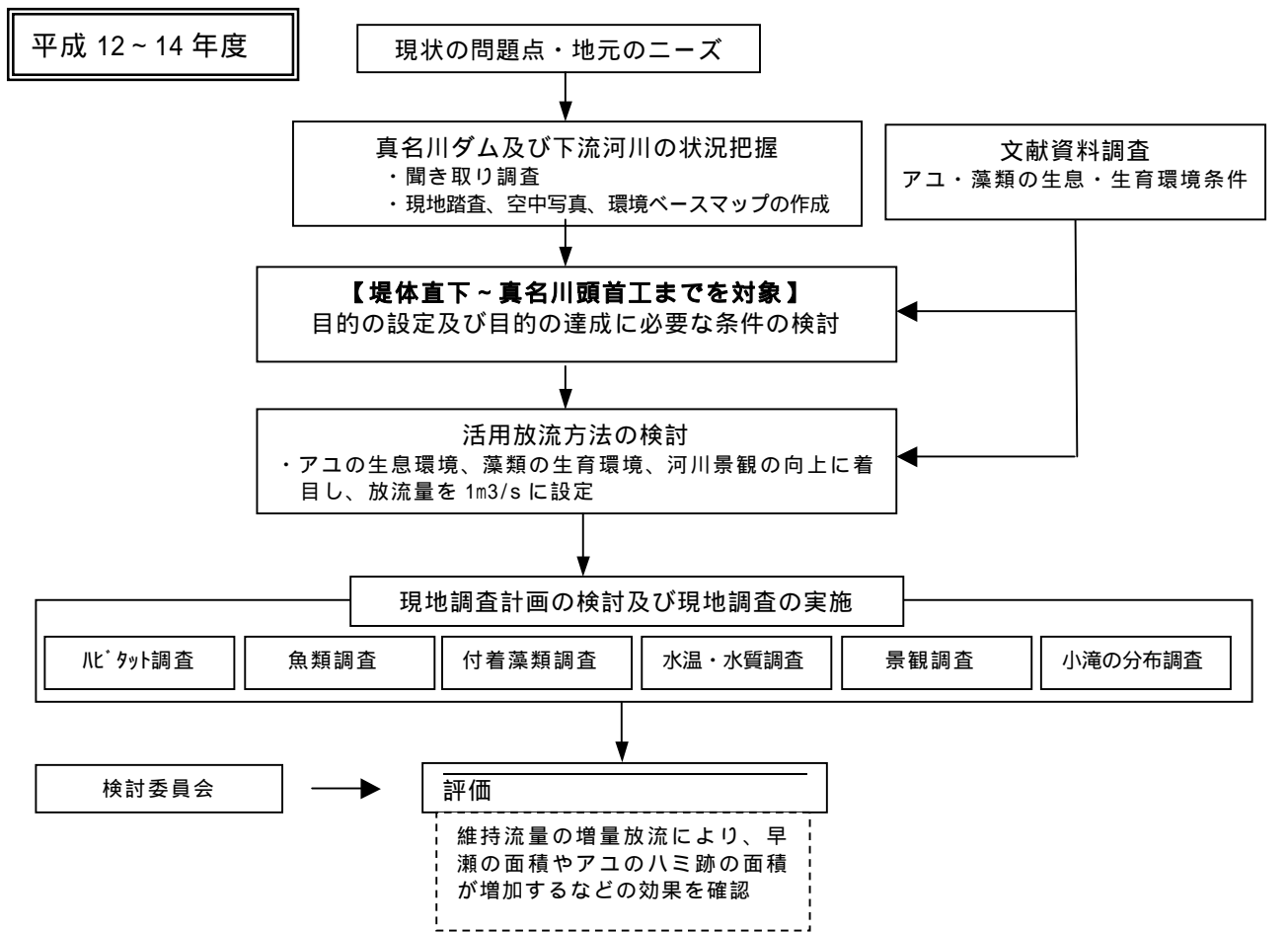


図 6.5-8 ダムの弾力的管理試験の実施位置



参考：6-47 「平成 17 年度真名川ダム弾力的管理試験効果調査業務報告書」  
6-51 「平成 18 年度ダム下流河川環境向上等検討業務報告書」

図 6.5-7(1) 真名川ダムにおけるダムの弾力的管理試験のフロー図

平成 15 ~ 16 年度

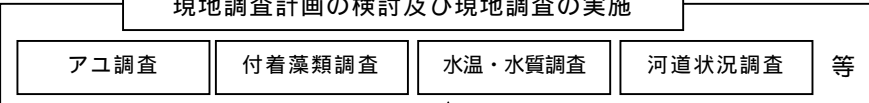
平成 15 年 11 月より、維持流量  
0.284m<sup>3</sup>/s 0.671m<sup>3</sup>/s 放流

真名川頭首工より上流の  
環境改善

平成 17 年度

フラッシュ放流に関する縦断方向の効果・懸念の把握

現地調査計画の検討及び現地調査の実施



土砂、流量と現地調査結果の解析（過去のデータ含む）

0.671m<sup>3</sup>/s  
の効果確認

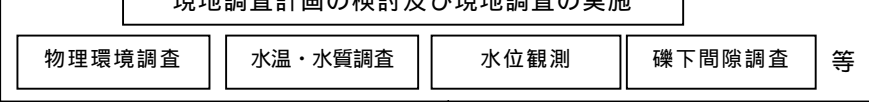
検討委員会

本格運用にむけた “効果的な活用放流運用案” を検討

平成 18 年度

本格運用に向けた安全性、活用効果の妥当性の把握

現地調査計画の検討及び現地調査の実施



効果的な弾力的管理運用の検討  
事前放流の検討等 洪水時の操作に関する検討  
活用容量の貯留と活用についての検討

検討委員会

弾力的管理の運用要領の作成

参考：6-47 「平成 17 年度真名川ダム弾力的管理試験効果調査業務報告書」  
6-51 「平成 18 年度ダム下流河川環境向上等検討業務報告書」

図 6.5-7(2) 真名川ダムにおけるダムの弾力的管理試験のフロー図



表 6.5-9 ダムの弾力的管理試験の実施内容

項目	概要	
調査内容	放流効果確認のための調査として以下の項目を実施した。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ アユ調査</li> <li>・ 付着藻類調査</li> <li>・ 物理環境調査</li> <li>・ 水質調査</li> <li>・ 河道状況調査</li> <li>・ 還元土砂の流下状況調査</li> </ul>	
調査範囲	ダム直下から真名川大橋までの間	
調査工法	アユ調査	アユの全長、重量の計測により成長度合い(肥満度等)を把握し、さらにアユの採餌状況(はみ跡)及び胃内容物を分析することにより把握した。
	付着藻類調査	付着藻類の生育状況(クロロフィル a、強熱減量、無機物質)の変化を把握した。
	物理環境調査 (ハビタット調査)	河床型、河床材の分布変化やフラッシュ放流中の流速を計測し、清掃力等を把握した。
	水質調査	フラッシュ放流により発生する濁度、SS の変化の様子を把握した。
	河道状況調査	フラッシュ放流による河道への影響(ごみが残る、魚が取り残される等)を把握した。
	還元土砂の流下 状況調査	還元土砂を組み合わせたフラッシュ放流による河床への影響(礫下間隔の変化)を把握した。
	平成 16 年度～18 年度は、フラッシュ放流時に細砂を流すことにより、河床材料表面のクレンジング効果向上を目的とした土砂導入を行った。(表 6.5-10 参照)	
調査時期	平成 12 年度	平成 12 年 6 月 28 日 平成 12 年 8 月 10 日
	平成 13 年度	平成 13 年 6 月 4、5 日 平成 13 年 6 月 28、29 日 平成 13 年 7 月 15～18 日 平成 13 年 7 月 31～8 月 3 日
	平成 14 年度	平成 14 年 6 月 26、27 日 平成 14 年 8 月 21～24 日 平成 14 年 9 月 25～29 日
	平成 15 年度	平成 15 年 8 月 31 日、9 月 2～3 日、9 日 平成 15 年 9 月 28～29 日 平成 15 年 10 月 1～3 日 平成 15 年 10 月 16 日
	平成 17 年度 (夏季)	平成 17 年 7 月 19～26 日 平成 17 年 8 月 1～18 日
	平成 17 年度 (冬季)	平成 17 年 12 月 3～7 日 平成 17 年 12 月 8 日 平成 17 年 12 月 9～10 日、平成 18 年 2 月 7～8 日
	平成 18 年度	平成 18 年 11 月 14～18 日、平成 18 年 11 月 30 日 平成 19 年 1 月 19 日

表 6.5-10 平成 16 年～18 年に実施した土砂還元及び投入概要

方法	手法選定 (期待される効果)		還元する場所(選定の理由)	60% 粒径	設置のコスト
	河川形状	河床			
平成 16 年 貯水池内堆積土砂 の運搬 「土砂還元」	特になし	細粒土砂によるクレンジング効果が期待できる。	関連調査として実施する土砂トラップ調査、付着藻類調査の都合上、八千代橋上流に土砂を設置した。	20.0mm	平成 16 年 貯水池内堆積土砂の運搬 「土砂還元」
平成 17 年 河川敷の掘削 「土砂投入」	河川敷を掘削することにより、締め固まった河川敷を再生(ツルヨシ除去など)する効果が期待できる。	細粒土砂によるクレンジング効果が期待できる。	夏季(8月2日)の結果から、八千代橋付近では出水により移動する土砂が多く堆積していることが確認されたため、還元土砂設置場所は、移動土砂量が少なく、かつアユの生息場として改善が期待されている君が代橋付近とした。	14.6mm	平成 17 年 河川敷の掘削 「土砂投入」
平成 18 年 貯水池内堆積土砂 の運搬 「土砂還元」	特になし	細粒土砂によるクレンジング効果やシルト堆積物のフラッシュ等が期待できる。	岸付近の平瀬で、測定対象となる適当な大きさの礫(こぶし半分またはそれ以上の大きさ)が多くあり、また、細礫、砂等がある君が代橋上流とした。	置土 6.95 mm  置土 11.92 mm	平成 18 年 貯水池内堆積土砂の運搬 「土砂還元」

注)置土 および :平成 18 年の土砂還元は、置土形状の変化による土砂流出状況の違いを把握するため、形状の異なる 2 つの置土を配置した。

## (2)ダムの弾力的管理試験の結果の整理

ダムの弾力的管理試験調査において、平成 17 年度には、フラッシュ放流アユ調査、付着藻類調査、物理環境調査、水質調査、河道状況調査等を実施し、平成 18 年度には、水質調査や礫下間隙調査等を実施した。

### 1)フラッシュ放流アユ調査結果

#### アユの体長、体重、肥満度

フラッシュ放流前後で八千代橋、富田大橋ともに、フォローアップ調査時のアユの体長、体重、肥満度の変化は表 6.5-11 に示すとおりであり、体長、体重、肥満度に有意な差は認められなかった。

表 6.5-11 アユの体長(cm)、体重(g)、肥満度の平均値と標準偏差の比較

調査地点	フラッシュ放流前 (7/26) N	フラッシュ放流前 (8/2) N	フラッシュ放流後 (8/4) N	フォローアップ (8/18) N
	平均値±標準偏差	平均値±標準偏差	平均値±標準偏差	平均値±標準偏差
八千代橋	体長(cm) 14.4±1.0	5 13.4±0.7	5 12.6±0.1	5 12.6±0.9
	体重(g) 45.0±9.3	5 35.2±4.1	5 30.4±7.0	5 37.3±8.3
	肥満度 15.1±1.0	5 14.6±1.0	5 14.8±1.1	5 13.4±0.5
富田大橋	体長(cm) 13.7±0.5	5 13.2±0.5	5 13.0±0.7	5 13.0±0.7
	体重(g) 38.4±5.5	5 33.6±6.0	5 29.8±4.2	5 38.8±5.0
	肥満度 14.9±0.9	5 14.4±1.5	5 13.5±0.5	5 13.5±0.9

注) 平均肥満度は、肥満度 = 体重(g) × 10<sup>3</sup> / 体長(cm)<sup>3</sup> で算出した。

アユ分析については 10 検体について胃の内容分析を行い、残りの個体のうち 1 検体について藻類の種名分析等を実施した。

出典：6-47 「平成 17 年度真名川ダム弾力的管理試験効果調査業務報告書」

#### はみ跡調査

フラッシュ放流による河床材の移動により、底質の礫表面がクレンジングされ、よりアユの採餌に適した付着藻類の繁茂を想定し、フラッシュ放流前後で、はみ跡調査を実施した。

八千代橋では河床材の移動は確認できたが、はみ跡の顕著な変化は見られなかった。

表 6.5-12 アユのはみ跡状況

	八千代橋	富田大橋
フラッシュ放流前 (8月1日)	<p>流心部では、粒径 10cm 以上の河床構成材料で確認。早瀬では河床構成材料の表面積の 5 割程で確認。</p> <p>流れの緩い平瀬になると、はみ跡は確認されるが、早瀬に比べると河床構成材料の表面積の 3 割程度であった。また、流れの緩い場所の河床構成材料にはシルト系の付着物がかなり多く、手で擦り取れるほど付着物が目立った。</p>	<p>八千代橋と比べると、調査範囲全体的にアユのはみ跡が多い。特に水深が 30～50cm 程度で早瀬あるいは平瀬の部分では粒径 10cm 以上の河床構成材料の表面は殆どアユのはみ跡を確認した。しかし、流れが殆どなくよどんでいる様な場所では、1 割にも満たないほどはみ跡は確認できなかった。</p>
フラッシュ放流後 (8月3日)	<p>フラッシュ放流前からはみ跡がついている河床構成材料については、古いのはみ跡が剥離したという感じはみられない。</p> <p>八千代橋右岸側は、フラッシュ放流中の流心部にあたり、事後調査でも粒径 5cm 程の河床構成材料の堆積が確認されるほど、上流から流下してきた河床構成材料が確認され、はみ跡のついていない河床構成材料が点在した。</p>	<p>はみ跡は確認したが、フラッシュ放流前の状況と大きな変化はなく、付着物も剥離されたようにはみられない。</p>
フォローアップ (8月18日)	<p>水の濁りがひどく、潜水による目視は困難であった。河床構成材料を手にとりて観察した結果、早瀬を中心に粒径 10cm 以上の河床構成材料でははみ跡が確認された。確認されたはみ跡についても、新しいはみ跡もいくつか確認されたが、殆どのはみ跡の上にシルト系物質が薄く堆積しているようなことから、はみ跡は古いものではないかと考えられる。</p>	<p>早瀬を中心にはみ跡を確認したが、八千代橋同様に、確認しれたはみ跡の上にシルト系物質が堆積しており、はみ跡は古いと考えられる。八千代橋では最近のものと思われるはみ跡が確認できたが、富田大橋で確認したはみ跡は、ほぼすべてはみ跡上にシルト系物質が堆積しており、古いものが多いと考えられる。</p>



フラッシュ放流前 8月1日



フラッシュ放流後 8月3日

出典：6-47 「平成 17 年度真名川ダム弾力的管理試験効果調査業務報告書」

図 6.5-9 アユのはみ跡状況 (八千代橋付近で採取)

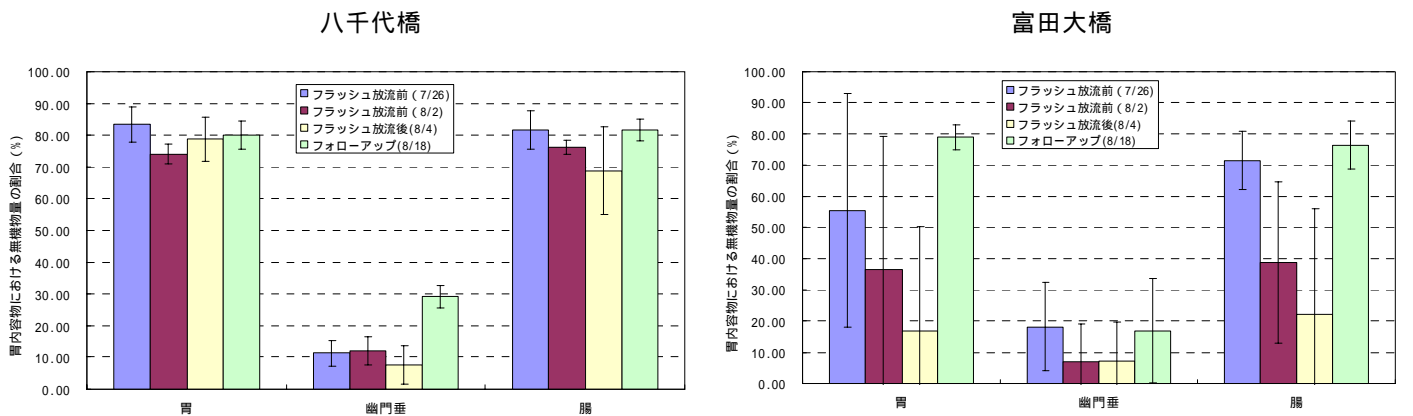
### アユ胃内容物調査

フラッシュ放流前後、フォローアップの各部位の無機物量の比較を図 6.5-10 に示した。捕獲した個体の胃内容物の無機物量の割合を無機物量 / 乾燥重量で表わし、フラッシュ放流前後、フォローアップで比較してみると、八千代橋においてはフラッシュ放流前後で顕著な差はみられず、また変化の傾向も見られなかった。

一方、富田大橋で捕獲した個体については、フラッシュ放流前に比べフラッシュ放流後に無機物量は減少し、フォローアップ時に再び増加の傾向を示した。

なお、胃内容物から検出された付着藻類は、フラッシュ放流前、フラッシュ放流後及びフォローアップともに、珪藻類ではツメケイソウ (*Achnanthes pyrenaica*) が優占し、藍藻類ではホモエオスリックス (*Homoeothrix varians*) が優占する結果となった。

また、捕獲されたアユの胃内容物は、藻類の他ではシルトが優占する結果となった。



平均値	胃	幽門垂	腸
フラッシュ放流前 (7/26)	83.50	11.28	81.55
フラッシュ放流前 (8/2)	73.95	12.13	76.15
フラッシュ放流後 (8/4)	78.80	7.58	68.80
フォローアップ (8/18)	80.20	29.13	81.58
標準偏差			
フラッシュ放流前 (7/26)	5.54	4.03	6.02
フラッシュ放流前 (8/2)	3.19	4.44	2.22
フラッシュ放流後 (8/4)	7.02	5.94	13.66
フォローアップ (8/18)	4.42	3.53	3.39

平均値	胃	幽門垂	腸
フラッシュ放流前 (7/26)	55.48	18.25	71.40
フラッシュ放流前 (8/2)	36.73	7.03	38.80
フラッシュ放流後 (8/4)	16.73	7.23	22.40
フォローアップ (8/18)	78.93	17.03	76.48
標準偏差			
フラッシュ放流前 (7/26)	37.45	14.15	9.41
フラッシュ放流前 (8/2)	42.43	12.19	25.83
フラッシュ放流後 (8/4)	33.45	12.52	33.77
フォローアップ (8/18)	3.98	16.64	7.60

注) 各部位から得られた乾燥重量に含まれる無機物量の割合 図中の縦棒は標準偏差を示す  
出典: 6-47 「平成 17 年度真名川ダム弾力的管理試験効果調査業務報告書」

図 6.5-10 各部位における無機物量の割合

2) 付着藻類

フラッシュ放流の剥離効果を確認するため、過去4回のフラッシュ放流と付着藻類の剥離状況を表6.5-13及び図6.5-11に整理した。図中にはフラッシュ放流中の流速の最大値を示した。

付着藻類は、4回分のデータのある八千代橋をみると、平成15年は30m<sup>3</sup>/sを放流したが、フラッシュ放流前のクロロフィル量が少なかったこともあり、減少率が25～50%と顕著な効果は見られなかった。

この結果をもとに、放流量を50m<sup>3</sup>/sに設定し、さらに土砂還元し、平成16年に放流した結果、放流前に藻類が繁茂していたこと、土砂還元も相乗したことから剥離が進み、統計的にも有意な差が認められ、減少率が50%以上と明瞭な効果があった。

なお、平成17年度の放流（土砂投入あり）結果では、放流量30m<sup>3</sup>/s、45m<sup>3</sup>/s共に減少率50%未満の値であった。

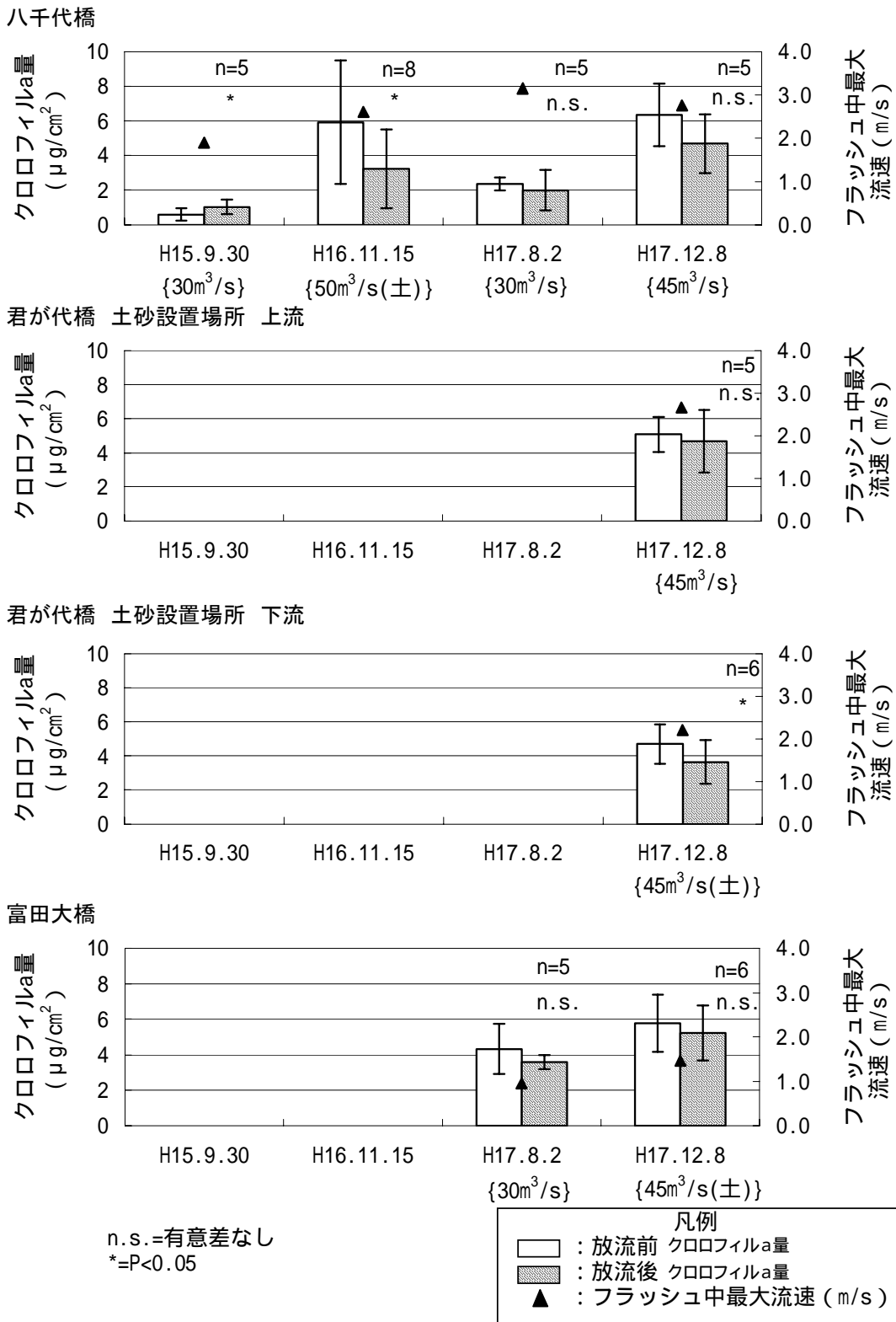
表6.5-13 フラッシュ放流後の調査項目ごとの効果の評価（クロロフィルaについて）

	付着藻類の剥離・細粒土砂の掃流						
	プラント前	八千代橋上流	八千代橋	君が代橋土砂上流	君が代橋土砂下流	君が代橋	富田大橋
平成15年 9月30日 30m <sup>3</sup> /s 土砂なし		-		-	-	-	-
平成16年 11月15日 50m <sup>3</sup> /s 土砂有り	-			-	-	-	-
平成17年 8月2日 30m <sup>3</sup> /s 土砂なし	平瀬	-		-	-	-	
	早瀬	-		-	-	-	
平成17年 8月15日 72m <sup>3</sup> /s 自然出水	平瀬	-		-	-	-	
	早瀬	-		-	-	-	
平成17年 12月8日 45m <sup>3</sup> /s 土砂有り	平瀬	-				-	
	早瀬	-				-	

: 減少率50%以上     
  : 減少率25～50%     
  : 減少率25%未満     
 - : 調査未実施  
 : Wilcoxonの符号順位検定で有意差あり  
 平成17年度データは、早瀬3サンプルと平瀬3サンプルであり、各々での検定はサンプル数が少ないため、平瀬、早瀬を合わせて6サンプル検定した。  
 無機物量：乾燥重量と強熱減量の差から算出する。  
 減少率：フラッシュ放流前後を比較し、その減少量を百分率で示した。

注) 既往調査において付着藻類調査が実施されているがフラッシュ放流検証に使用しなかったデータとその理由。  
 平成13年度調査・・・維持流量調査として実施されているため。  
 平成14年度調査・・・7月に1回大きな出水があり、フラッシュ放流として扱うことが可能であるが、その事後調査を出水後1ヵ月後くらいに実施しているため、データとして適正でないと判断。  
 平成16年度調査・・・夏季に台風が発生し、台風後に調査を実施しているが、クロロフィル、フェオ色素などの値が無い。

出典：6-47 「平成17年度真名川ダム弾力的管理試験効果調査業務報告書」



検定結果は、Wilcoxonの符号順位検定による  
各フラッシュの実施日時の上に記した流量は、フラッシュ時に放流した流量を示す。  
流量の後に(±)と記載したものは各地点の上流部に流下させるための土砂を設置したことを示す。

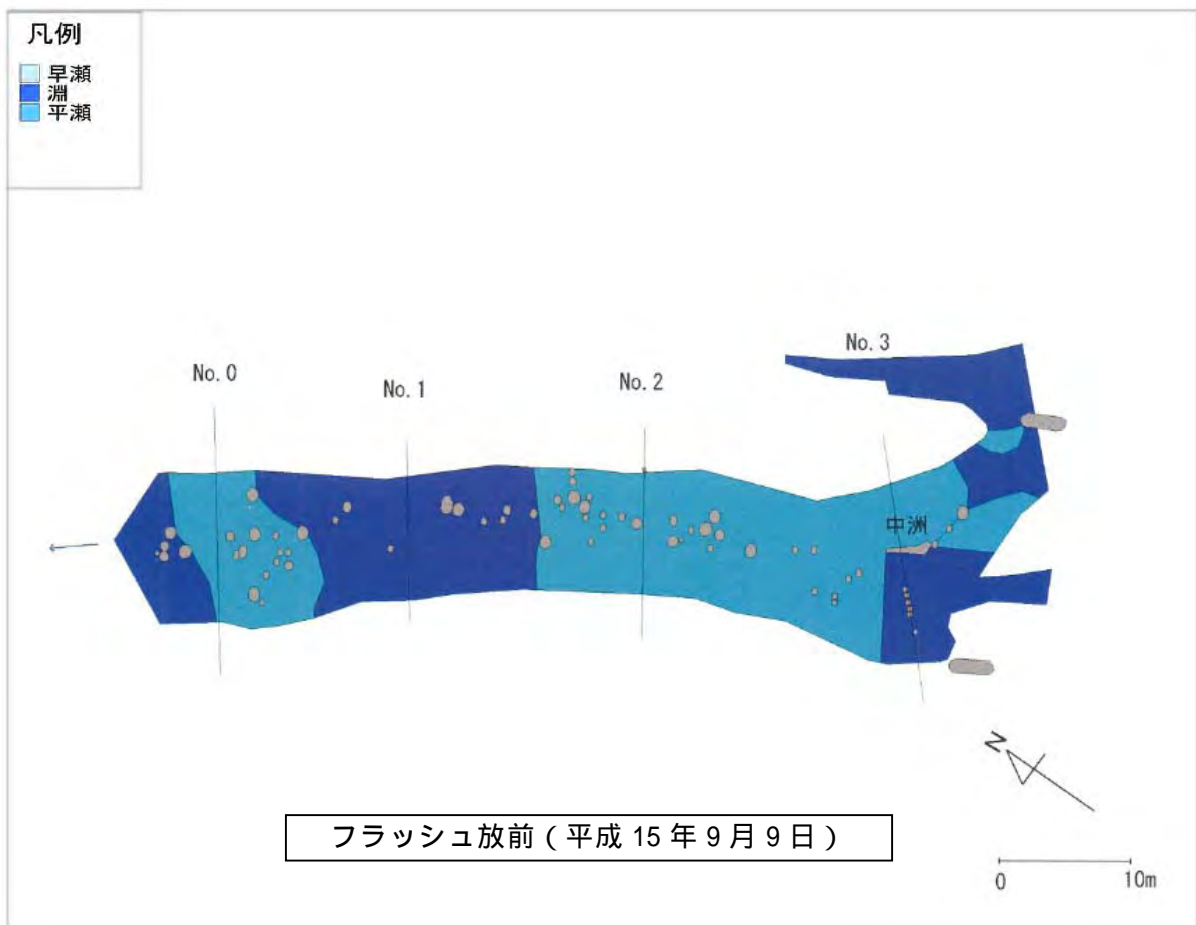
出典：6-47 「平成 17 年度真名川ダム弾力的管理試験効果調査業務報告書」

図 6.5-11 過去 4 回のフラッシュ放流と付着藻類の剥離状況

### 3) 物理環境調査

#### 河床状況の変化

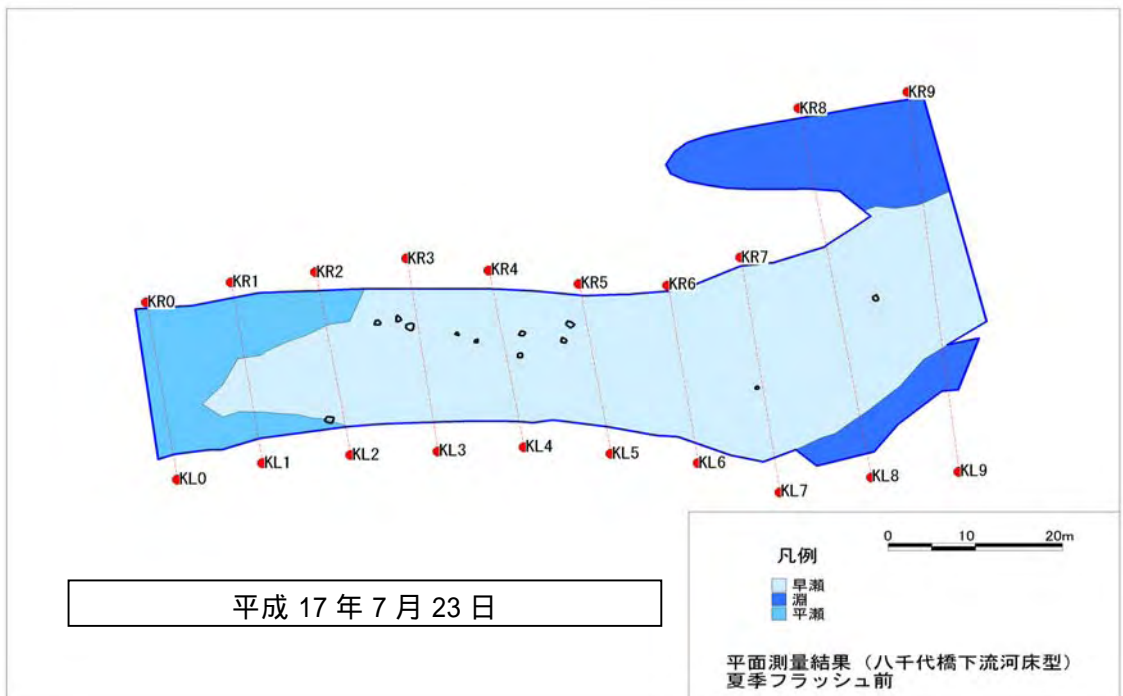
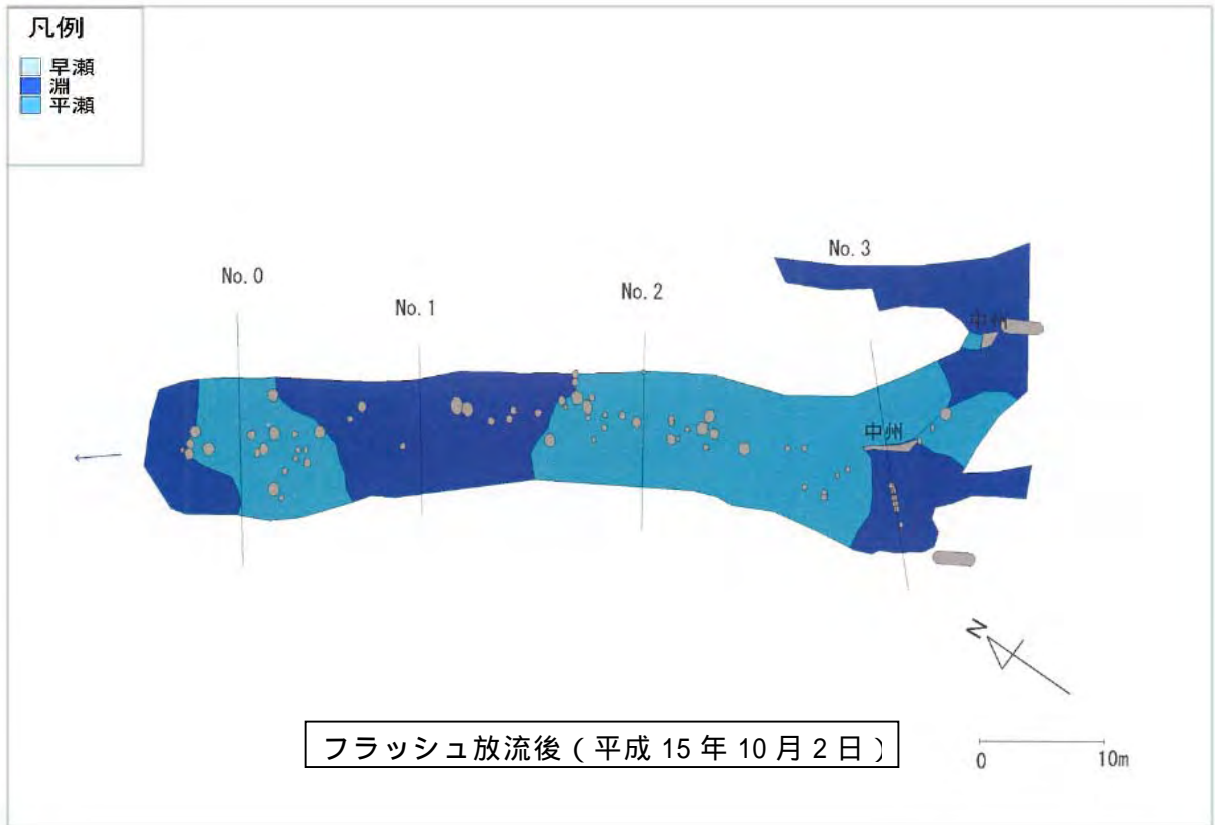
河床形状の変化については、フラッシュ放流前後で、瀬、淵に大きな変化はなく、顕著な変化はみられなかった。しかし、平成 15 年と 17 年の八千代橋の河床形状結果を比較すると、調査範囲が若干異なるものの、図 6.5-12 に示すとおり、平成 17 年は早瀬の分布面積がやや広がっていた。これは、平成 16 年に頻繁に生じた出水の影響によって河床状況が変化したものと考えられる。このように、 $30\text{m}^3/\text{s}$  規模のフラッシュ放流では、河床状況の攪乱効果は小さいものと考えられる。



出典：6-47 「平成 17 年度真名川ダム弾力的管理試験効果調査業務報告書」

図 6.5-12(1) 八千代橋河床型分布





出典：6-47 「平成 17 年度真名川ダム弾力的管理試験効果調査業務報告書」

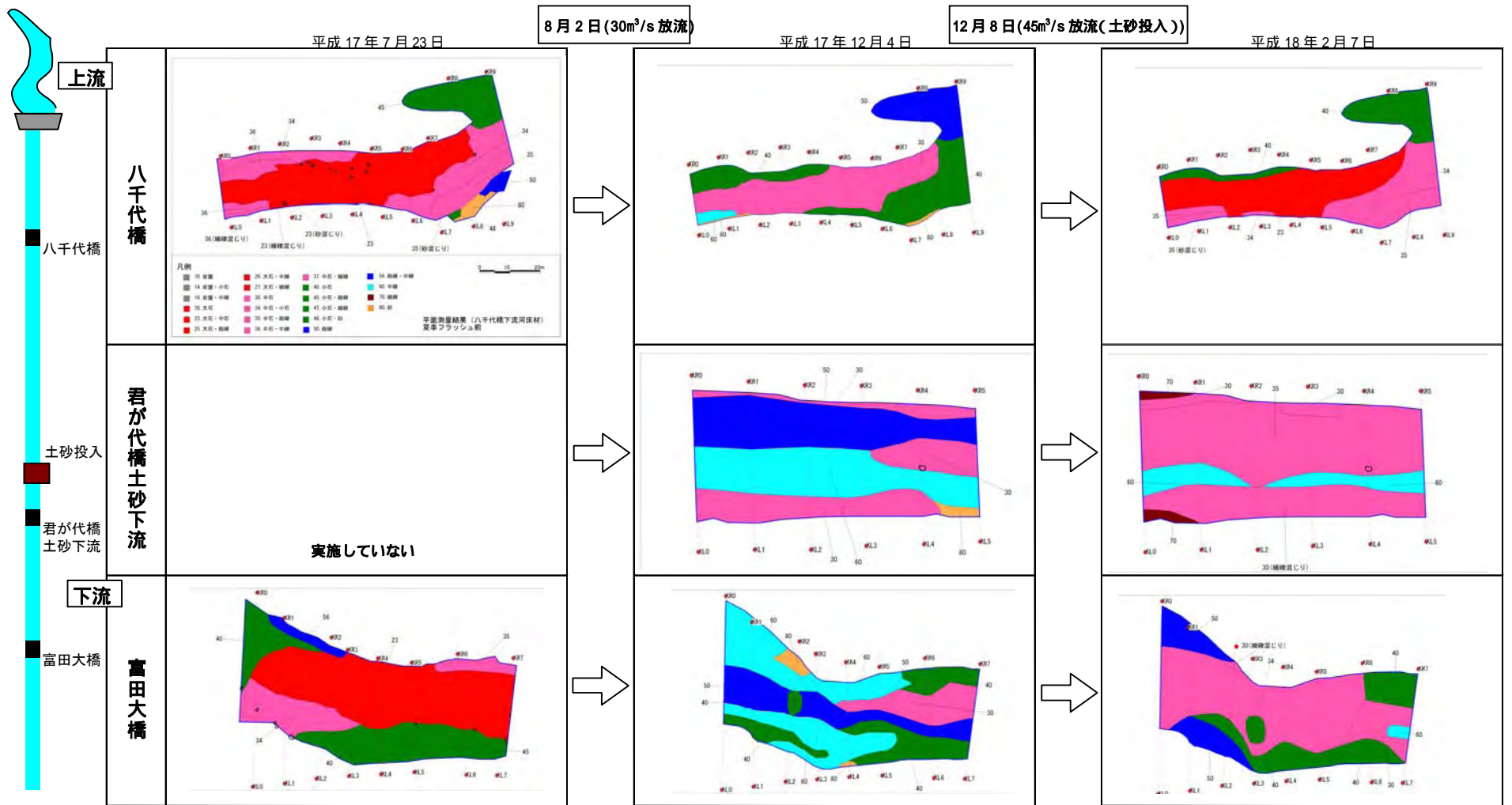
図 6.5-12(2) 八千代橋河床型分布

### 河床構成材料の変化

河床構成材料の分布では、平成 17 年度調査時に変化がみられた。図 6.5-13 に河床材料構成変化を示す。(平成 17 年度に調査を実施した地点から変化が顕著にみられた地点を抜粋し示した)

八千代橋においては、小石～中石までの河床構成材料の移動が顕著であった。平成 17 年度の 8 月 2 日のフラッシュ放流の際の河床構成材料トラップ調査において八千代橋では河床構成材料を多量に捕捉した。この原因としては、「八千代橋よりやや上流において、平成 16 年度に土砂還元を実施し、まだこの周辺に堆積している」、「平成 16 年度の頻繁な出水で、河床が攪乱されて、粒径の細かなものが出水により流下している」などが考えられる。

君が代橋土砂下流、富田大橋においては、平成 17 年 8 月 2 日のフラッシュ放流時には殆ど河床構成材料量を捕捉できなかった。しかし、平成 17 年 12 月 8 日のフラッシュ放流後にはトラップボックスに捕捉できた。これは放流量の違いもあるが、土砂投入による影響や平成 17 年 9 月 7 日の台風 14 号の出水による河床の攪乱の影響と考えられる。



出典：6-47 「平成 17 年度真名川ダム弾力的管理試験効果調査業務報告書」

図 6.5-13 河床構成材料の変化

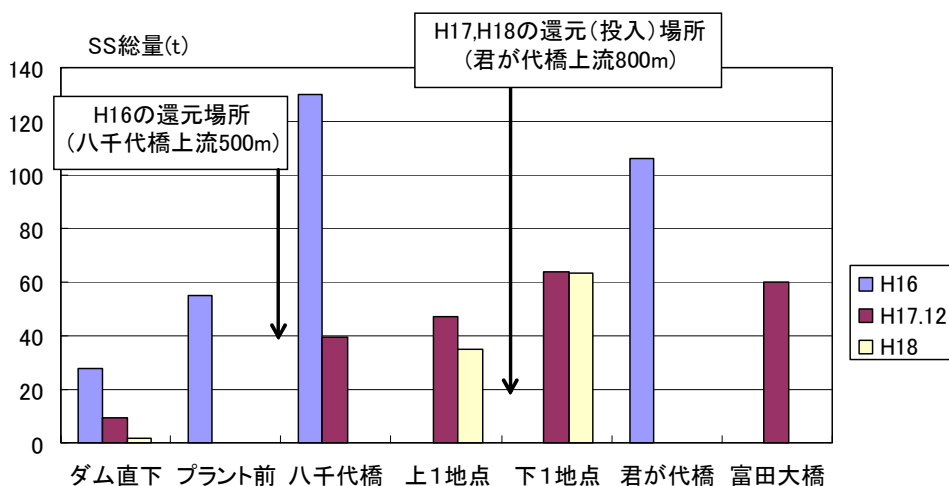
#### 4)水質調査

水質調査は、フラッシュ放流時の水質の変化を把握するため実施した。

平成 17 年度に、フラッシュ放流を実施した 8 月 2 日と 12 月 8 日を含む 7 月 25 日～12 月 9 日に、八千代橋において濁度の連続観測を実施した結果、次項の図 6.5-14 に示すとおり、フラッシュ放流時の濁度は自然出水時の範囲内であったことから、フラッシュ放流による問題は少ないと考える。

また、SS については、平成 17 年度には、ダム直下と土砂投入地点の下流で増え、土砂投入地点下流では他の地点よりやや濁水の流下する時間が長い傾向にあった。しかし、SS は流量の増加にともない上昇し、一時的であることから、河床に堆積していた細粒分が巻き上がったものと考えられた。

また、平成 18 年度には、図 6.5-15 に示すとおり、過去のフラッシュ放流（土砂還元あり）と比べて、ダム直下の濁りは最も小さいが、流下に従い濁りが増大し、土砂還元地点の下流である下 1 地点では平成 17 年度と同様の SS 量となった。

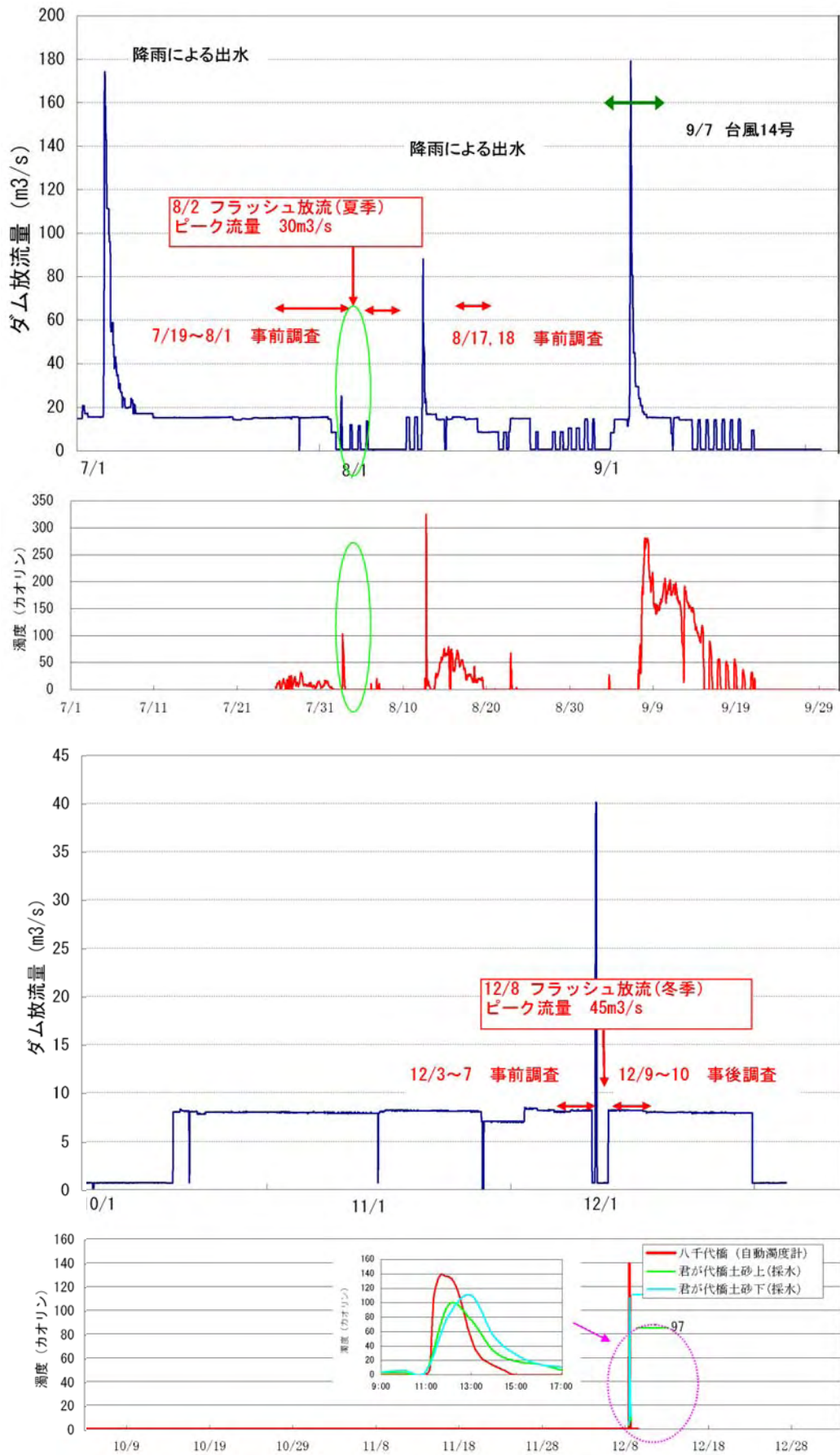


期日	河川流量	置土量
H16.11.15	50m <sup>3</sup> /s	約220m <sup>3</sup>
H17.12.8	45m <sup>3</sup> /s	約200m <sup>3</sup>
H18.11.15	45m <sup>3</sup> /s	約200m <sup>3</sup>

注)「上 1 地点」は還元土砂設置場所の上流で、君が代橋から 960m 上流の地点であり、「下 1 地点」は還元土砂設置場所の下流で、君が代橋から 360m 上流の地点である。

出典：6-51 「平成 18 年度ダム下流河川環境向上等検討業務報告書」

図 6.5-15 フラッシュ放流中に各地点を通過した SS の総量



出典：6-47 「平成 17 年度真名川ダム弾力的管理試験効果調査業務報告書」

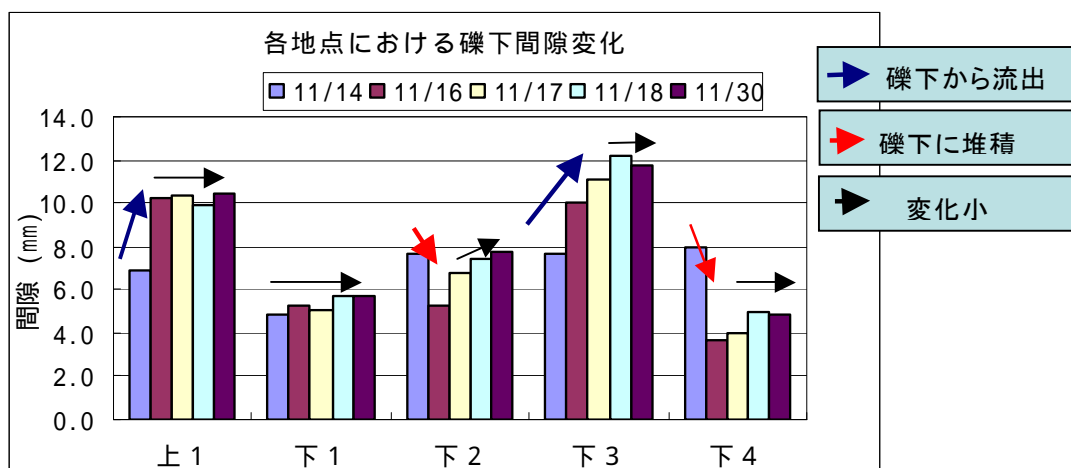
図6.5-14 平成17年7月25日～12月9日における濁度の変化

#### 5) 礫下間隙調査

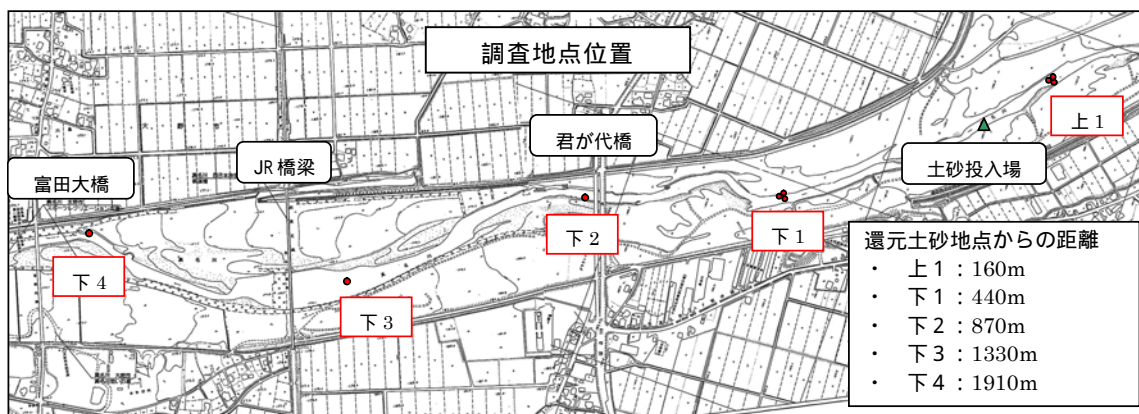
礫下間隙調査は、土砂還元の計画作成の基礎資料を得ることを目的として実施した。

平成 18 年度の調査は土砂還元場所上流に 1 地点(上 1)、土砂還元場所下流に 4 地点(下 1～下 4)の計 5 地点で実施した。各調査地点における礫下間隙の変化は図 6.5-16 に示すとおりである。下 1 地点ではフラッシュ放流前後の礫下間隙の変化は小さかったが、他の地点ではフラッシュ放流前と 1 日後の変化が大きく、上 1、下 3 地点についてはフラッシュ放流後に礫下間隙が大きくなり、下 2、下 4 地点についてはフラッシュ放流後に礫下間隙が小さくなった。これらの結果から、下 1 地点は他地点に比べ川幅が広いため、フラッシュ放流の効果が小さくなったものと考えられる。また、上 1、下 3 地点は、微小土砂堆積量に比べ流出量が多くなり、礫下間隙が大きくなり浮石が増加したと考えられ、下 2、下 4 地点は、微細土砂堆積量が流出量に比べ多くなり、礫下間隙が小さくなり沈石が増加したと考えられる。

全体的にみると、礫下から土砂が流出するか、礫下に堆積したとしても回復する傾向にあるようである。

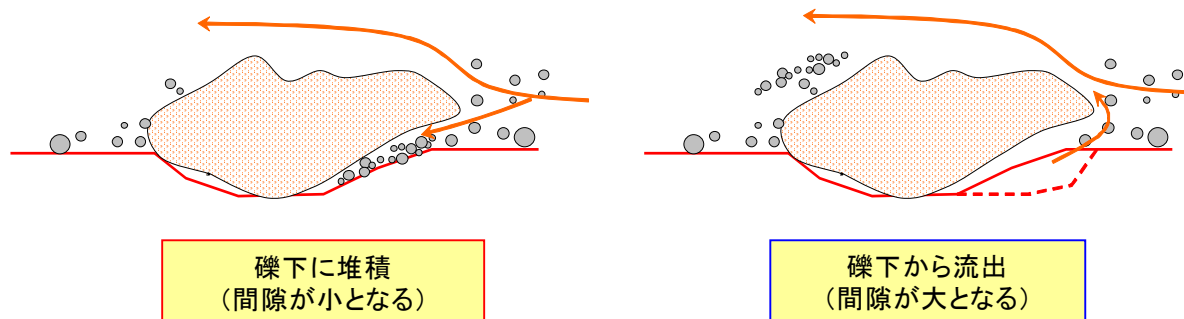


注) 11/14: フラッシュ放流 1 日前 11/16: フラッシュ放流 1 日後 11/17: フラッシュ放流 2 日後  
 11/18: フラッシュ放流 3 日後 11/30: フラッシュ放流 15 日後



出典: 6-51 「平成 18 年度ダム下流河川環境向上等検討業務報告書」

図 6-5.16 各地点における礫下間隙変化



出典: 6-51 「平成 18 年度ダム下流河川環境向上等検討業務報告書」



図 6-5.17 礫下間隙の変化の模式図



6) 河道状況調査

河道状況調査は、フラッシュ放流による懸念事項（魚の取り残され、ゴミの残り）の有無を確認することを目的として実施した。

夏季調査結果

夏季調査では魚類の逃げ遅れは確認できなかったが、季節的にも河道付近にツルヨシ等の植生が生い茂っており、それらがフラッシュ放流によりちぎれ、流れてきた草本類を富田大橋付近及び水辺の楽校付近で確認している。このことは八千代橋等ではフラッシュ放流により流量とともに流速も平常時より大幅に増加するため、ゴミ等は下流へ流され、流れが緩やかになる富田大橋及びその下流の中洲や堰で捕捉されたものと考えられる。

調査定点：富田大橋の上流（堰）	
フラッシュ放流前(7月26日)	フラッシュ放流後(8月3、4日)
	
ブロック堰によるゴミの捕捉が懸念された。若干ではあるが、ツルヨシやコンクリートブロックの間にツルヨシの枝（折れちぎれた枝など）が確認された。	

調査定点：水辺の楽校付近	
フラッシュ放流前(7月26日)	フラッシュ放流後(8月3、4日)
	
中洲にある巨石あるいは岩に流下してきた草本類が残っているのが確認された。	

出典：6-47 「平成17年度真名川ダム弾力的管理試験効果調査業務報告書」

図 6.5-18 流下ゴミ状況写真（夏季調査）



### 冬季調査結果

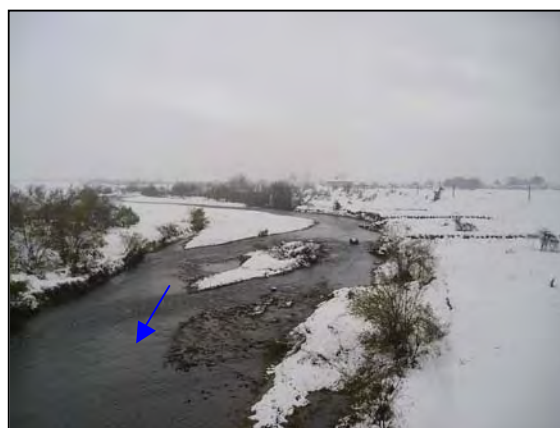
冬季調査では、夏季調査時に注意した地点を基に、フラッシュ放流前に全域踏査を実施した。夏季に河道内に生い茂っていたツルヨシ等が枯れ、フラッシュ放流時の観察状況からも草本等のゴミの流下は夏季ほどではなかった。

冬季の調査では、フラッシュ放流翌日から降雪、積雪が多く、フラッシュ放流前日に見廻った地点すべてを確認することはできなかったが、冬季調査時に懸念事項（魚の取り残され、ゴミの残り）の発生の可能性が高いと想定された地点（富田大橋の左岸側の寄り洲、本川から分岐した細流部など）は確認しており、その結果ゴミ等の確認はなかった。

なお、夏季の河道状況調査時に魚、ゴミ等が取り残される可能性のあった地点についての冬季フラッシュ放流後の状況写真を示した。



富田大橋左岸側の寄り洲（川幅が狭くなる場所）  
ゴミが陸上に残っている形跡は確認されなかった（平成 17 年 12 月 10 日）。



真名川大橋上流の中洲付近  
ゴミが残っている形跡は確認されなかった（平成 17 年 12 月 10 日）。

出典：6-47 「平成 17 年度真名川ダム弾力的管理試験効果調査業務報告書」

図 6-5.19 冬季フラッシュ放流後の状況写真（懸念地点）

## 7)フラッシュ放流のピーク流量の検討

フラッシュ放流を実施する際の適切なピーク流量について、下流の対象区間の環境改善目的の達成に必要な水理条件、下流河道の河況係数等に関する検討を行った。

### 目的の達成に必要な水理条件

改善目標地点であるプラント前地点、八千代橋地点、君が代橋地点の3地点において、等流計算を行い、目的の達成に必要な流量を算出した。等流計算を行うための諸条件を表6.5-14及び表6.5-15に示し、計算結果を表6.5-16に示す。計算の結果、君が代橋及び八千代橋では流量30 m<sup>3</sup>/s以上、プラント前では流量10m<sup>3</sup>/s以上になれば、付着藻類の剥離更新に必要な流速130cm/s以上を確保できると考えられた。したがって、付着藻類を剥離させるためには、30 m<sup>3</sup>/s以上の放流量が必要であると考えられた。

表 6.5-14 設定条件【粗度係数】

距離(km)	粗度係数	備考
0.0～5.2	0.035	君が代橋地点(4.6km付近)
5.4～10.4	0.035	八千代橋地点(7.4km付近)
10.6～12.2	0.04	プラント前地点(12km付近)

距離は、九頭竜川合流点からの距離を示す。

出典：6-47 「平成17年度真名川ダム弾力的管理試験効果調査業務報告書」

表 6.5-15 設定条件【各地点河床勾配】

地点名	河床勾配
君が代橋地点	1/167
八千代橋地点	1/167
プラント前地点	1/167

出典：6-47 「平成17年度真名川ダム弾力的管理試験効果調査業務報告書」

表 6.5-16 各地点の等流計算結果

【君が代橋地点】

流量(m <sup>3</sup> /s)	水深(m)	流速 (m/s)	勾配 i	河積A(m <sup>2</sup> )	潤辺S(m)	径深R(m)
5.0	0.6	1.0	0.006	5.2	18.2	0.3
10.0	0.8	1.2	0.006	8.5	22.0	0.4
15.0	0.9	1.2	0.006	12.2	29.4	0.4
20.0	1.0	1.3	0.006	15.8	36.7	0.4
25.0	1.1	1.3	0.006	19.7	45.2	0.4
30.0	1.1	1.3	0.006	23.2	51.7	0.4
35.0	1.3	1.4	0.006	25.6	52.8	0.5
40.0	1.3	1.4	0.006	28.0	53.8	0.5
45.0	1.4	1.5	0.006	30.3	54.8	0.6
50.0	1.4	1.5	0.006	32.4	55.8	0.6
55.0	1.4	1.6	0.006	34.6	56.7	0.6
60.0	1.5	1.6	0.006	36.6	57.6	0.6
65.0	1.5	1.7	0.006	36.7	58.4	0.6
70.0	1.6	1.7	0.006	40.7	59.2	0.7
75.0	1.6	1.8	0.006	42.6	60.0	0.7
80.0	1.6	1.8	0.006	45.5	64.1	0.7

・流速 1.3m/s を越える流量は、30 m<sup>3</sup>/s 以上の時である。

【八千代橋点】

流量(m <sup>3</sup> /s)	水深(m)	流速(m/s)	勾配i	河積A(m <sup>2</sup> )	潤辺S(m)	径深R(m)
5.0	0.63	0.71	0.006	7.0	38.6	0.2
10.0	0.71	0.874	0.006	11.4	46.0	0.2
15.0	0.77	1.021	0.006	14.7	46.9	0.3
20.0	0.83	1.125	0.006	17.8	49.0	0.4
25.0	0.88	1.217	0.006	20.5	50.3	0.4
30.0	0.94	1.291	0.006	23.2	52.1	0.4
35.0	1.15	1.336	0.006	26.2	55.8	0.5
40.0	1.18	1.327	0.006	30.2	64.8	0.5
45.0	1.21	1.338	0.006	33.6	71.5	0.5
50.0	1.23	1.352	0.006	37.0	77.3	0.5
55.0	1.26	1.377	0.006	39.9	81.2	0.5
60.0	1.28	1.403	0.006	42.8	84.6	0.5
65.0	1.31	1.445	0.006	45.0	85.2	0.5
70.0	1.33	1.484	0.006	47.2	85.7	0.6
75.0	1.38	1.522	0.006	49.3	86.3	0.6
80.0	1.40	1.558	0.006	51.4	86.8	0.6

・流速 1.3m/s を越える流量は、30 m<sup>3</sup>/s 程度以上の時である。

【プラント地点】

流量(m <sup>3</sup> /s)	水深 (m)	流速 (m/s)	勾配 i	河積A(m <sup>2</sup> )	潤辺S(m)	径深R(m)
5.0	0.7	1.1	0.006	4.7	11.7	0.4
10.0	0.9	1.3	0.006	7.5	13.1	0.6
15.0	1.1	1.5	0.006	9.8	14.0	0.7
20.0	1.2	1.7	0.006	12.1	15.2	0.8
25.0	1.4	1.8	0.006	14.2	16.5	0.9
30.0	1.5	1.8	0.006	16.3	17.6	0.9
35.0	1.6	1.9	0.006	18.1	18.1	1.0
40.0	1.7	2.0	0.006	19.8	18.6	1.1
45.0	1.8	2.1	0.006	21.5	19.0	1.1
50.0	1.9	2.2	0.006	23.1	19.4	1.2
55.0	2.0	2.2	0.006	24.6	19.8	1.2
60.0	2.0	2.3	0.006	26.1	20.2	1.3
65.0	2.1	2.4	0.006	27.6	20.6	1.3
70.0	2.2	2.4	0.006	29.1	20.9	1.4
75.0	2.3	2.5	0.006	30.5	21.2	1.4
80.0	2.3	2.5	0.006	31.9	21.5	1.5
85.0	2.4	2.6	0.006	33.2	21.8	1.5
90.0	2.5	2.6	0.006	34.6	22.1	1.6
95.0	2.5	2.6	0.006	35.9	22.5	1.6
100.0	2.6	2.7	0.006	37.3	22.9	1.6

・流速 1.3m/s を越える流量は、10.0 m<sup>3</sup>/s 以上の時である。

### 河況係数からの検討

弾力的管理試験において、フラッシュ放流を実施している他ダムの既往事例では、フラッシュ放流のピーク流量と維持流量との比は、概ね 10 倍程度であった。これらの事例を参考にし、真名川ダムの下流においても、フラッシュ放流のピーク流量は、平水流量の 10 倍程度の流量が必要であると考えた。

表 6.5-17 に河況係数から算出した真名川の各地点での放流量の適正値を示した。真名川の真名川頭首工下流の平水流量はおよそ  $5 \text{ m}^3/\text{s}$  であることから、ピーク流量は  $50 \text{ m}^3/\text{s}$  が適正であると考えられた。

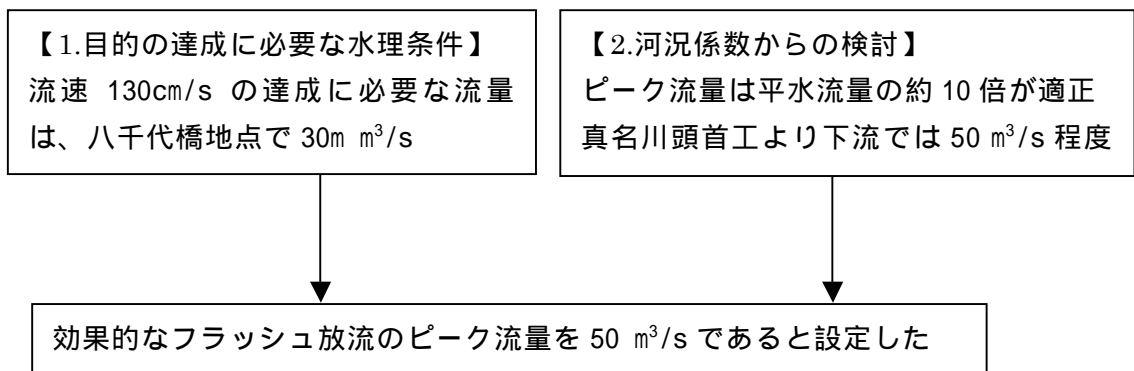
表 6.5-17 河況係数より算出した真名川ダムにおける適正なフラッシュ放流量

地点名	平水流量	適正なフラッシュ放流量
プラント前地点	$0.28 \text{ m}^3/\text{s}$	$2.8 \text{ m}^3/\text{s}$
八千代橋地点	約 $5.0 \text{ m}^3/\text{s}$	$50 \text{ m}^3/\text{s}$
君が代橋地点	約 $5.0 \text{ m}^3/\text{s}$	$50 \text{ m}^3/\text{s}$

出典：6-47 「平成 17 年度真名川ダム弾力的管理試験効果調査業務報告書」

### ピーク流量の設定

「目的の達成に必要な水理条件」、「河況係数からの検討」の 2 項目で検討した結果、効果的なフラッシュ放流のピーク流量は  $30 \sim 50 \text{ m}^3/\text{s}$  であると考えられた。これらの結果をもとに、さらに「放流時間」、「放流波形（流量増加・減衰）」の検討結果を踏まえて、必要なピーク流量を  $50 \text{ m}^3/\text{s}$  と設定した。



## 8) 河川流量の増量検討

河川環境の改善を目的とした河川流量の設定について、魚類等の生息空間の向上、真名川渓谷の景観の向上という二点に着目して検討した。なお、真名川ダムでは平成15年11月から河川維持流量を $0.671\text{m}^3/\text{s}$ に増量して放流している。

### 魚類等の生息空間に適した流量

平成14年8月21日(放流量 $0.284\text{m}^3/\text{s}$ )、9月25日(放流量 $0.284\text{m}^3/\text{s}$ )に、プラント前において川幅×流路延長100mの範囲で潜水調査を実施した結果、遊泳魚ではアブラハヤ、ウグイ、ヤマメを確認した。これらの3種の魚類のうち、ヤマメとウグイの生息空間に適した水深及び流速は以下の通りであると考えられる。

そこで、魚類の生息に適した水深及び流速の条件から5ケースを設定し、プラント前の断面における流量を Manning 式より算定した。

その結果、表6.5-18に示すとおり、魚類の生息空間として適した流量は、例外はあるものの、現況の維持流量 $0.671\text{m}^3/\text{s}$ より少ない $0.14\sim 0.3\text{m}^3/\text{s}$ であるという算定結果となった。

しかし、一般にダム下流で問題となるのは、流量の減少に伴う魚類の生息空間の減少であり、自然状況下より少ない流量は河川にとって好ましくはないと考えられる。

また、河川においては、水深や流速は河床のわずかな形状でも異なることから、魚類は各々適した箇所へ移動して生活すると考えられるため、流量が増加した場合でも大きな影響はないと考える。

したがって、真名川においても、算定結果にしたがって流量を現況の $0.671\text{m}^3/\text{s}$ より減少させることは、魚類の生息空間を減少させることになり、好ましくないといえる。

なお、アブラハヤについては、生息空間に適した水深及び流速が不明であったため検討対象としなかった。

### (ヤマメ)

水深：成魚 51cm～60cm 及び 121cm 以深に高頻度に分布  
流速：成魚 定位位置の流速  $0.2\sim 0.9\text{m}/\text{s}$

### (ウグイ)

水深：成魚 20cm～100cm  
流速：仔雑魚 10cm/s 以下 成魚 30cm/s～80cm/s

表 6.5-18 各ケースにおける流量（プラント前）

CASE		水深 (cm)	流速 (cm/s)	流量 (m <sup>3</sup> /s)	
ヤマメの 生息	CASE-1：ヤマメの生 息に適した水深	水深 51cm	51	130	1.4
		水深 60cm	60	140	2.0
	CASE-2：ヤマメの生 息に適した流速	流速 20cm/s	4	20	0.002
		流速 90cm/s	31	90	0.42
ウグイの 生息	CASE-3：ウグイの生 息に適した水深	水深 20cm	20	64	0.14
		水深 100cm	100	203	6.4
	CASE-4：ウグイの生 息に適した流速	流速 30cm/s	6	30	0.07
		流速 80cm/s	27	80	0.3
真名川溪 谷の景観	CASE-5：景観調査時 の流量	流量 0.39m <sup>3</sup> /s	30	88	0.39
		流量 1.06m <sup>3</sup> /s	45	127	1.06
		流量 2.45m <sup>3</sup> /s	67	154	2.45

CASE-1：流速 20～90cm/s（ヤマメの生息に適した流速）が確保できる流量

CASE-2：水深 51～60cm（ヤマメの生息に適した水深）が確保できる流量

なお、121cm 以深（ヤマメの生息に適した水深）は、淵に該当するため検討対象としない。

CASE-3：水深 20～100cm（ウグイの生息に適した水深）が確保できる流量

CASE-4：流速 30～80cm/s（ウグイの生息に適した流速）が確保できる流量

CASE-5：流量 0.39、1.06、2.45m<sup>3</sup>/s のときの流速（景観）

出典：6-47 「平成 17 年度真名川ダム弾力的管理試験効果調査業務報告書」











### 真名川溪谷の景観

真名川溪谷の景観を向上させるためには、白波立つ瀬が形成されることが望ましい。

そこで、ダムの放流量が 0.39m<sup>3</sup>/s、1.06 m<sup>3</sup>/s、2.45m<sup>3</sup>/s の 3 ケースについて、真名川溪谷の状況を撮影した写真を比較した結果、放流量が 1.06 m<sup>3</sup>/s のケースが、波立ちが目立ち景観上好ましいと判断した。なお、上記の 3 ケースの写真を、次項の表 6.5-19 に示す。

以上の検討の結果、河川流量は 1.000m<sup>3</sup>/s 程度が望ましいと考える。

表 6.5-19 放流量が異なるケースにおける真名川溪谷の景観

撮影表題及び評価項目	平成 13 年 7 月 17 日 放流量 1.00m <sup>3</sup> /s	維持流量放流中 (平成 17 年 8 月) 放流量 0.67m <sup>3</sup> /s	平成 13 年 8 月 3 日 放流量 0.29m <sup>3</sup> /s	
眺望点からの景観				
眺望点からの景観 (ズーム)				
白波 (ズーム①)				
白波 (ズーム②)				
備	落水がある	+1 淵と淵の間に流れの落ち込みがある。	+1 淵と淵の間に流れの落ち込みがある。	+1 淵と淵の間に流れの落ち込みがある。
	瀬や淵などにより平的な変化がある	+1 ステップアンドプール状になっている。	+1 ステップアンドプール状になっている。	+1 ステップアンドプール状になっている。
	印象的な波立ちがある	+2 流量が多く、白波が目立つ。	0 流量が少なく、波立ちが目立たない。	0 流量が少なく、波立ちが目立たない。
総合評価	+4 流量を感じる。白波が目立つ波立ちがあり、良いイメージを受ける。	+2 流量を感じない。波立ちはあるが、印象は小さく、評価は低くなる。	+2 流量を感じない。波立ちはあるが、印象は小さく、評価は低くなる。	

出典：6-47 「平成 17 年度真名川ダム弾力的管理試験効果調査業務報告書」

(3)ダムの弾力的管理試験の効果の評価と課題

下流河川のダムの弾力的管理試験について、効果の評価結果と課題を表 6.5-20 に示す。

表 6.5-20(1) ダムの弾力的管理試験の効果の評価と課題

結 果	
	<p>アユ調査：平成 15 年 9 月 30 日のフラッシュ放流 30m<sup>3</sup>/s のアユの胃の内容物と付着藻類の無機物量を調査した。フラッシュの放流前、放流後（40 時間後）フォローアップ（2 週間後）のアユの胃と腸に含まれる無機物量（灰分）の割合は、放流前の約 54% に対し、放流後には 63% に増加した。フォローアップ（2 週間後）では無機物量の割合は約 50% に減少し、フラッシュ放流前に対して約 4% の減少となった。また、アユの餌となる付着藻類に含まれる無機物量の割合も、胃の内容物調査と同様に、放流前に対し放流後には増加した。フォローアップ（2 週間後）には無機物量の割合は減少し、フラッシュ放流前に対して減少した。これは、フラッシュ放流に伴い一時的にシルト分等の無機物が河床に堆積し、その後掃流されたことにより、付着藻類が剥離更新し、その良質な藻類をアユが採餌したためであると考えられる。これより、フラッシュ放流によりアユの餌質が向上する効果が確認されたと考えられる。</p> <p>付着藻類：平成 12 年度から 17 年度の試験の結果、付着藻類の剥離更新は、平成 16 年度のフラッシュ放流のピーク流量 50m<sup>3</sup>/s に設定して土砂還元を行った場合、クロロフィル a 量の著しい減少により付着藻類の剥離を確認し、土砂還元およびフラッシュ放流によって、アユの餌資源である付着藻類の剥離更新の効果が確認できた。</p> <p>物理環境：河床形状の変化について河床砂礫の移動を調査した。平成 17 年 12 月のフラッシュ放流 45 m<sup>3</sup>/s で移動した 90% 粒径は八千代橋で 11cm、君が代橋で 5cm、富田大橋で 1.9cm であった。また、これらの移動可能な砂礫は八千代橋上流では数キロに渡って存在するが、八千代橋下流には逆に移動可能な砂礫は少ない状況であった。</p> <p>水質調査：フラッシュ放流中に、水産用水基準、漁業公害調査報告書に挙げられる基準値を一時的に超過したが、減水とともに落ち着き、フラッシュ放流による長期化はなかった。また、自然出水時の値と比べて小さく、その影響は小さかった。</p> <p>礫下間隙調査：土砂還元を組み合わせたフラッシュ放流（50 m<sup>3</sup>/s、H18 年 11 月 15 日）の調査結果では、河床変化量で侵食を示した置土地点上流ではフラッシュ直後に礫下の間隙が大きくなり土砂の侵食による浮き石化傾向が見られた。一方、河床変化量で堆積を示した置土地点下流では、礫下間隙の調査結果からフラッシュ直後の土砂の流下状況は見られなかった。</p>



表 6.5-20(2) ダムの弾力的管理試験の効果の評価と課題

(結 果)	<p>河道状況：平成 16 年度に若干の魚類の取り残されを確認した。また、下流でゴミ(草本類の枝など)の取り残されも合わせて確認した。</p> <p>河川流量の増量検討：魚類の生息空間の拡大及び景観の向上のため、河川流量は 1.000 m<sup>3</sup>/s 程度が望ましい流量と考える。</p>
効果の評価	<p>これまでの試験により、土砂還元を組み合わせることで、礫上の付着藻類の剥離効果が増進されることが確認でき、魚類の餌環境の改善に期待ができることがわかった。さらに、50 m<sup>3</sup>/s 程度のフラッシュ放流をより効果的とするために、河道内の移動可能な礫を調査し、必要に応じて土砂投入・還元を行うことで、真名川(全長 14km)の約 8 割 2) の区間で藻類の剥離効果が期待できることがわかった。</p>
課 題	<p>今後の課題としては、季節ごと、また河川縦断ごとの河道内の環境変化を継続的にモニタリングし、その効果を放流履歴とともに検討していくことが重要である。</p> <p>放流には、融雪出水、洪水期制限水位への水位低下に伴う放流、弾力的管理による放流、台風等による放流が有り、これらの出水に土砂投入・還元を効果的に組み合わせ、一年を通じた最も効果的な貯水池堆砂の管理及び河川環境改善の方法を確立する必要がある。</p>

## 6.6 まとめ

### 6.6.1 生物の生息・生育状況の変化の評価と今後の方針

各場所におけるダム及びダム以外の影響と生物の生息・生育状況の変化を検証し、影響要因が検証された場合に、評価の視点を定めて、評価を行った。

表 6.6-1(1) 生物の生息・生育状況の変化の検証・評価と今後の方針

場所等	ダムとの関連の検証及び評価	今後の方針
ダム湖内	<p>(1)ダム湖内の特徴</p> <p>ダム湖内の止水環境に適応した魚類、底生動物等が生息し、ダム湖面ではマガモ、カルガモ、コガモ等の水鳥に利用されている。また、流入河川や支川の流入部では流水性の種も多く生息しており、ダム湖内で最も多様な生物相がみられる。なお、ダム湖内では要注意外来生物であるニジマスを確認している。</p> <p>(2)ダムの影響</p> <p>ダム湖ができたことにより、ダム湖内に適応した生物が生息するようになった。重要種のオシドリや在来種のイワナなどが経年的に確認されるなど、良好な環境を維持している。なお、淡水赤潮等の発生が懸念される。</p> <p>(3)ダム以外の影響</p> <p>-</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 外来種について、分布域の拡大や在来種への影響に注意しながら、生息状況を継続的に調査し、今後変化の把握に努める。</li> <li>・ 赤潮の原因となっている藻類（ペリディニウム）の生育状況について継続して監視していく必要がある。</li> </ul>
流入河川 (流入河川) (流入支川)	<p>(1)流入河川の特徴</p> <p>流入河川では、本川の真名川や笹生川で流れが緩やかな中・上流域を好むオイカワ、アブラハヤなどが、支川の持籠谷川や仙翁谷川ではイワナ、アマゴなどの渓流魚が多く確認されている。これらの流水性の魚類や回遊性魚のアマゴ（サツキマス）などを継続して確認している。底生動物も流水性の種が多く出現しており、EPT 指数の高さから流入河川の生物相が豊かで、水質も良好であることが伺える。そのほか、渓流性の鳥類（カワガラス）や両生類（カジカガエル等）、河川環境を利用する鳥類（主に開けた河原で見られるイカルチドリ）などの生息も確認している。</p> <p>(2)ダムの影響</p> <p>イワナ、アマゴ（サツキマス）、トウヨシノボリは、ダム湖で陸封されたものと考えられる。</p> <p>(3)ダム以外の影響</p> <p>外来種の昆虫類を確認している。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 外来種について、分布域の拡大や在来種への影響に留意しながら、生息状況を継続的に調査し、今後の変化の把握に努める。</li> <li>・ 流入河川の鳥類、両生類、陸上昆虫類について、継続した調査が必要であり、データの蓄積に努める。</li> </ul>

表 6.6-1(2) 生物の生息・生育状況の変化の検証・評価と今後の方針

場所等	ダムとの関連の検証及び評価	今後の方針
下流河川	<p>(1)下流河川の特徴</p> <p>下流河川では、アブラハヤ、ウグイ、ヤマメなど礫等の存在する環境を利用する魚類や、カジカ、トウヨシノボリなどの底生魚を継続して確認している。また、草地や森林が隣接する渓流環境に生息するカジカガエルや、河原環境を利用するカワラバツタ、アイヌハンミョウ等の昆虫類も確認した。</p> <p>なお、「平成 17 年度河川水辺の国勢調査全体計画の策定（真名川ダム・九頭竜ダム）報告書」によると、魚類調査の既往調査地点はダムサイトから離れた場所であったため、調査地点を上流部に移動し、新規設定する計画となっている。</p> <p>(2)ダムの影響</p> <p>魚類について、SS 濃度が水産用水基準を超過した平成 16 年、17 年に、アユの漁獲量が減少しており、濁水放流の影響があった可能性がある。</p> <p>また、底生動物について、下流河川の EPT 指数は流入河川より低く、トビケラ目や堀潜型、堆積物収集者等が比較的多かった。ダムから流下した有機物を栄養源に、造網型トビケラ類や堀潜型、堆積物収集者等が増加し、底生動物相が変化した可能性がある。</p> <p>なお、濁水長期化軽減対策、下流河川の環境改善を目的としたダム水環境改善事業及びダムの弾力的管理試験を実施している。</p> <p>(3)ダム以外の影響</p> <p>外来種のニジマスの確認は、漁協による放流に起因している可能性がある。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 外来種について、分布域の拡大や在来種への影響に注意しながら、生息状況を継続的に調査し、今後の変化の把握に努める。</li> <li>・ 下流河川の魚類、底生動物、両生類、陸上昆虫類について継続した調査を実施し、データの蓄積に努める。</li> <li>・ 濁水長期化軽減対策の検討を引き続き実施する。</li> <li>・ ダムの弾力的管理試験については、今後も引き続き、最適な放流量・放流継続時間（時期）、土砂還元・投入の効果についてデータの蓄積に努める。</li> </ul>

表 6.6-1(3) 生物の生息・生育状況の変化の検証・評価と今後の方針

場所等	ダムとの関連の検証及び評価	今後の方針
ダム湖 周辺	<p>(1)ダム湖周辺の特徴 ダム湖周辺には、クリ - コナラ群落をはじめとする代償植生の木本群落が広く分布しており、木本および草本植生の分布面積に大きな変化は認められない。植物の外来種は毎回同様に確認されている。また、在来種の両生類の繁殖や樹林性の鳥類、哺乳類、昆虫類等についても大きな変化は認められない。猛禽類については、人工構造物でのハヤブサの繁殖を確認した。なお、ダム湖周辺道路では、主に両生類・爬虫類のロードキルを確認しており、その確認種数は増加している。</p> <p>(2)ダムの影響 ダム事業に関連した人工構造物を利用してイワツバメとハヤブサが繁殖している。</p> <p>(3)ダム以外の影響 外来種のイタチハギは、平成 7 年度から実施されている「真名川ダム湖岸裸地対策調査」における緑化試験で使用したイタチハギが、移出して分布を広げている可能性が考えられる。平成 15 年度にはイタチハギ群落がダム湖岸沿いに確認された。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 外来種について、分布域の拡大や在来種への影響に留意しながら、生息状況を継続的に調査し、今後の変化の把握に努める。</li> <li>・ 工事において緑化等を実施する際には、改訂された「湖岸緑化マニュアル(案)」における在来種の活用の趣旨を踏まえ、できる限り在来種を用いた緑化を行う方向になっており、外来種の分布拡大や新たな種の侵入防止に努めるとともに、緑化後の状況を継続的に調査し、今後の変化の把握に努める。</li> <li>・ ミズナラの立ち枯れ等、周辺の植生変化の状況などについて、定点写真を撮影するなど長期的なモニタリングの視点を踏まえて、継続的に調査し、今後の変化の把握に努める。</li> <li>・ イワツバメやハヤブサの営巣状況を踏まえ、営巣箇所等の保全に配慮して人工構造物の管理を行う。ハヤブサについては、引き続き、繁殖状況のモニタリングを行う。</li> <li>・ ロードキルについては、巡視の際に、発生箇所や確認種を写真撮影して巡視時に記録するなど、注意して情報を収集し、周辺における発生状況の把握に努める。</li> </ul>
連続性	<p>(1)ダムの影響 ダム湖の存在により、回遊性魚類が陸封されている。また、回遊性魚類等の遡上がダムの存在によって阻害されている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 回遊魚の生息状況について、引き続きデータの蓄積に努める。</li> </ul>
重要種	<p>(1)ダムの影響 ダムの存在による重要種への影響について、特に明確なもののみならず、影響要因は不明である。</p> <p>(2)ダム以外の影響 ダム以外の影響については不明であるが、周辺環境の変化、外来種の侵入の影響等も考えられる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 今後も引き続き、河川水辺の国勢調査において継続的に調査を行い、今後の重要種の変化の把握に努める。</li> </ul>

## 6.7 文献リストの作成

表 6.7(1) 使用資料リスト

区分	No	報告書またはデータ名	発行者または 著者名	発行年月	箇所
河川水辺の 国勢調査 (ダム湖版)	6-1	平成2年度 水生生物(魚貝類) 調査作業報告書	財団法人北陸公衆 衛生研究所	平成3年1 月	魚類
	6-2	平成3年度 水生生物調査作業 報告書	財団法人北陸公衆 衛生研究所	平成3年11 月	魚類
	6-3	平成4年度 ダム自然環境調査 報告書	財団法人北陸公衆 衛生研究所	平成5年3 月	鳥類、陸上昆 虫類
	6-4	平成5年度 ダム自然環境調査 報告書(鳥類)	財団法人北陸公衆 衛生研究所	-	鳥類
	6-5	平成5年度 ダム自然環境調査 報告書(両生類・爬虫類)	財団法人北陸公衆 衛生研究所	-	両生類・爬虫 類・哺乳類
	6-6	平成5年度 ダム自然環境調査 報告書(昆虫類)	財団法人北陸公衆 衛生研究所	-	陸上昆虫類
	6-7	平成5年度 ダム自然環境調査 報告書(魚介類)	財団法人北陸公衆 衛生研究所	-	魚類
	6-8	平成6年度 ダム自然環境調査 報告書(哺乳類)	財団法人北陸公衆 衛生研究所	平成7年3 月	哺乳類
	6-9	平成6年度 ダム自然環境調査 報告書(底生動物)	財団法人北陸公衆 衛生研究所	平成7年3 月	底生動物
	6-10	平成6年度 ダム自然環境調査 報告書(動植物プランク トン)	財団法人北陸公衆 衛生研究所	平成7年3 月	動植物プラン クトン
	6-11	平成7年度 ダム自然環境調査 業務報告書(植物)	財団法人北陸公衆 衛生研究所	平成8年3 月	植物
	6-12	平成8年度 ダム自然環境調査 業務報告書(魚介類)	財団法人北陸公衆 衛生研究所	平成9年3 月	魚類
	6-13	平成9年度 ダム自然環境調査 業務報告書(底生動物)	財団法人北陸公衆 衛生研究所	平成10年3 月	底生動物
	6-14	平成9年度 ダム自然環境調査 業務報告書(鳥類)	財団法人北陸公衆 衛生研究所	平成10年3 月	鳥類
	6-15	平成10年度 ダム自然環境調査 業務報告書(植物)	財団法人北陸公衆 衛生研究所	平成11年3 月	植物
	6-16	平成11年度 ダム自然環境調査 報告書(昆虫類)	国際航業株式会社	平成11年3 月	陸上昆虫類
	6-17	平成12年度 ダム自然環境調査 業務報告書(両生類・爬虫類・ 哺乳類)	株式会社北陸環境 科学研究所	平成13年3 月	両生類・爬虫 類・哺乳類
	6-18	平成12年度 ダム自然環境調査 報告書(動植物プランク トン)	財団法人北陸公衆 衛生研究所	平成13年3 月	動植物プラン クトン
	6-19	平成13年度 ダム自然環境調査 業務報告書(魚介類)	株式会社北陸環境 科学研究所	平成14年3 月	魚類
	6-20	平成14年度 ダム自然環境調査 業務報告書(底生動物)	株式会社北陸環境 科学研究所	平成15年3 月	底生動物
	6-21	平成14年度 ダム自然環境調査 業務報告書(鳥類)	株式会社北陸環境 科学研究所	平成15年3 月	鳥類
	6-22	平成15年度 ダム自然環境調査 業務報告書(真名川ダム編)	応用地質株式会社	平成16年3 月	植物
	6-23	平成15年度 ダム湖利用実態調 査業務 報告書	株式会社協立測量 設計	平成16年1 月	環境条件の変 化
	6-24	平成16年度 ダム自然環境調査 業務報告書(陸上昆虫類等)	財団法人北陸公衆 衛生研究所	平成17年3 月	陸上昆虫類

表 6.7(2) 使用資料リスト

区分	No	報告書またはデータ名	発行者または 著者名	発行年月	箇所
河川水辺の 国勢調査 (ダム湖版)	6-25	平成 17 年度 ダム自然環境調査 業務報告書(両生類・爬虫類・ 哺乳類)	株式会社環境総合 テクノス	平成 18 年 3 月	両生類・爬虫 類・哺乳類
	6-26	平成 17 年度 ダム自然環境調査 業務報告書(動植物プランク トン)	株式会社環境総合 テクノス	平成 18 年 3 月	動植物プラン クトン
	6-27	平成 18 年度 ダム自然環境調査 業務報告書(底生動物)	いであ株式会社	平成 19 年 3 月	底生動物
	6-28	平成 18 年度 ダム自然環境調査 業務報告書(動植物プランク トン)	いであ株式会社	平成 19 年 3 月	動植物プラン クトン
	6-29	平成 18 年度 ダム自然環境調査 業務報告書(環境情報図)	いであ株式会社	平成 19 年 3 月	植物 重要種
河川水辺の 国勢調査概 要編	6-30	河川水辺の国勢調査の概要[ダ ム湖版](生物調査編)	国土交通省河川局 河川環境課	平成 16 年度	外来種
河川水辺の 国勢調査全 体計画	6-31	河川水辺の国勢調査全体調査計 画の策定(真名川ダム、九頭竜 ダム)報告書	-	平成 18 年 3 月	底生動物
その他生物 調査	6-32	真名川ダム貯水池周辺植生調査 報告書	三井共同コンサル タント株式会社	昭和 53 年 10 月	植物
	6-33	平成 9 年度 ダム自然環境調査 業務報告書(魚介類)	財団法人北陸公衆 衛生研究所	平成 10 年 3 月	魚類
	6-34	平成 10 年度 ダム自然環境調査 業務報告書(魚介類)	財団法人北陸公衆 衛生研究所	平成 11 年 3 月	魚類
その他真名 川ダムに関 する資料	6-35	平成 7 年度 真名川ダム湖岸裸 地対策調査業務報告書	財団法人ダム水源地 環境整備センター	平成 8 年 3 月	緑化試験
	6-36	平成 8 年度 真名川ダム湖岸裸 地対策調査業務報告書	財団法人ダム水源地 環境整備センター	平成 9 年 3 月	緑化試験
	6-37	平成 9 年度 真名川ダム湖岸裸 地対策調査業務報告書	アジア航測株式会社	平成 10 年 3 月	緑化試験
	6-38	真名川ダム緑化現地調査報告書	アジア航測株式会社	平成 10 年 10 月	緑化試験
	6-39	真名川ダム弾力的管理環境現況 調査業務報告書	財団法人北陸公衆 衛生研究所	平成 12 年 10 月	弾力的管理
	6-40	平成 12 年度 真名川ダム弾力的 管理試験評価検討業務報告書	財団法人ダム水源地 環境整備センター	平成 13 年 3 月	弾力的管理
	6-41	平成 13 年度 真名川ダム弾力的 管理試験評価検討業務報告書	財団法人ダム水源地 環境整備センター	平成 14 年 3 月	弾力的管理
	6-42	平成 13 年度 弾力的管理試験効 果調査業務報告書	応用地質株式会社	平成 13 年 10 月	弾力的管理
	6-43	平成 13 年度 真名川ダム弾力的 管理試験事前生態調査業務報告書	応用地質株式会社	平成 13 年 10 月	弾力的管理
	6-44	平成 13 年度 放流鮎生態事前調 査業務報告書	応用地質株式会社	平成 13 年 10 月	弾力的管理
6-45	真名川ダム弾力的管理試験効果 調査業務 これまでの調査・検 討業務の概要	応用地質株式会社	平成 15 年 5 月 13 日	弾力的管理	
6-46	平成 15 年度 真名川ダム弾力的 管理試験効果調査業務報告書	応用地質株式会社	平成 16 年 1 月	弾力的管理	

表 6.7(3) 使用資料リスト

区分	No	報告書またはデータ名	発行者または 著者名	発行年月	箇所
その他真名 川ダムに 関する資料	6-47	平成 17 年度 真名川ダム弾力的 管理試験効果調査業務報告書	応用地質株式会社	-	弾力的管理
	6-48	真名川ダム工事誌	建設省近畿地方建設局 真名川ダム工事事務所	昭和 54 年 7 月	植物
	6-49	水質調査業務（真名川ダム）報 告書・デジタルデータ	国土交通省近畿地方 整備局 九頭竜川ダ ム統合管理事務所	昭和 54～平 成 18 年	環境条件の変 化
	6-50	真名川ダム水環境改善事業パン フレット			水環境改善事 業
	6-51	平成 18 年度 ダム下流河川環境 向上等検討業務報告書			弾力的管理
	6-52	九頭竜ダム・真名川ダム パンフレット	国土交通省近畿地方 整備局 九頭竜川ダ ム統合管理事務所	平成 19 年度	環境の概況
出版物	6-53	指定植物図鑑 - 関東・中部（山 岳）編 -	環境庁	昭和 57 年	重要種
	6-54	改訂・日本の絶滅のおそれのある 野生生物-レッドデータブック-1 哺乳類	環境省	平成 14 年	重要種
	6-55	改訂・日本の絶滅のおそれのある 野生生物-レッドデータブック-2 鳥類	環境省	平成 14 年	重要種
	6-56	改訂・日本の絶滅のおそれのある 野生生物-レッドデータブック-3 両生類・爬虫類	環境省	平成 12 年	重要種
	6-57	改訂・日本の絶滅のおそれのある 野生生物-レッドデータブック-4 汽水・淡水魚類	環境省	平成 15 年	重要種
	6-58	改訂・日本の絶滅のおそれのある 野生生物-レッドデータブック-5 昆虫類	環境省	平成 18 年	重要種
	6-59	改訂・日本の絶滅のおそれのある 野生生物-レッドデータブック-6 陸・淡水産貝類	環境省	平成 17 年	重要種
	6-60	改訂・日本の絶滅のおそれのある 野生生物-レッドデータブック-7 クモ形類・甲殻類等	環境省	平成 18 年	重要種
	6-61	改訂・日本の絶滅のおそれのある 野生生物-レッドデータブック-8 植物（維管束植物）	環境庁	平成 17 年	重要種
	6-62	鳥類、爬虫類、両生類及びその 他無脊椎動物のレッドリストの 見直しについて	環境省	平成 18 年	重要種
	6-63	哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫 類、貝類、植物 及び植物 の レッドリストの見直しについて	環境省	平成 18 年	重要種
	6-64	福井県の絶滅のおそれのある野 生動物-福井県レッドデータブ ック(動物編)-	福井県	平成 14 年	重要種
	6-65	福井県の絶滅のおそれのある野 生植物-福井県レッドデータブ ック(植物編)-	福井県	平成 16 年	重要種

表 6.7(4) 使用資料リスト

区分	No	報告書またはデータ名	発行者または著者名	発行年月	箇所
出版物	6-66	日本の淡水魚	山と溪谷社	平成元年	魚類
	6-67	原色川虫図鑑	全国農村教育協会	平成 12 年	底生動物
	6-68	日本産水生昆虫 - 科・属・種への検索	東海大学出版会	平成 17 年	底生動物
	6-69	改訂版 図説日本のゲンゴロウ	文一総合出版	平成 14 年	底生動物
	6-70	原色日本甲虫図鑑(II)	保育社	昭和 60 年	底生動物
	6-71	ユスリカの世界	培風社	平成 13 年	底生動物
	6-72	アメンボのふしぎ	トンボ出版	平成 12 年	底生動物
	6-73	Ecology and classification of North American freshwater invertebrates. Academic press	H.T.James, P.C.Alan	平成 3 年	底生動物
	6-74	An Introduction to the Aquatic Insects of North America	R.W.Merritt and K.W. Cummins	平成 8 年	底生動物
	6-75	溪流生態砂防学	東京大学出版会	平成 11 年	底生動物
	6-76	琉球列島の陸水生物	東海大学出版会	平成 15 年	底生動物
	6-77	底生動物の生活型と摂食機能群による河川生態系評価	竹門康弘	平成 17 年	底生動物
	6-78	汚水生物学	北隆館	昭和 54 年	動植物プランクトン
	6-79	指標生物学 - 生物モニタリングの考え方	森下郁子	昭和 60 年	底生動物
	6-80	日本淡水産動植物プランクトン図鑑	田中正明	平成 14 年	動植物プランクトン
	6-81	日本帰化植物写真図鑑	清水矩宏ほか	平成 13 年	植物
	6-82	日本の帰化植物写真図鑑	清水建美ほか	平成 15 年	植物
	6-83	日本の野生植物 木本	平凡社	平成元年	植物
	6-84	日本の野生植物 木本	平凡社	平成元年	植物
	6-85	日本の野生植物 草本	平凡社	昭和 57 年	植物
	6-86	日本の野生植物 草本	平凡社	昭和 57 年	植物
	6-87	日本の野生植物 草本	平凡社	昭和 56 年	植物
	6-88	日本の野生植物 シダ	平凡社	平成 4 年	植物
	6-89	川の生物図典	財団法人リバーフロント整備センター	平成 8 年	鳥類
	6-90	真名川におけるハヤブサの営巣について	真名川ダム管理支所	-	鳥類
	6-91	近畿地区鳥類レッドデータブック	京都大学学術出版会	平成 14 年	鳥類
	6-92	フィールドベスト図鑑 日本の哺乳類	小宮輝之	平成 14 年	哺乳類
6-93	日本産蝶類の衰亡と保護 第 2 集	日本鱗翅学会	平成 5 年	陸上昆虫類	
6-94	福井県昆虫目録(第 2 版)	福井県	平成 10 年	陸上昆虫類	
6-95	チョウの調べ方	日本環境動物昆虫学会	平成 10 年	陸上昆虫類	



表 6.7(5) 使用資料リスト

区分	No	報告書またはデータ名	発行者または著者名	発行年月	箇所
出版物	6-96	北海道の希少野生生物 北海道 レッドデータブック 2001	北海道	平成 13 年	陸上昆虫類
	6-97	富山県の絶滅のおそれのある野 生生物 レッドデータブックと やま	富山県	平成 14 年	陸上昆虫類
	6-98	レッドデータブックふくしま 福島県の絶滅のおそれのある野 生生物(植物・昆虫類・鳥類)	福島県	平成 15 年	陸上昆虫類
	6-99	改訂・兵庫の貴重な自然 兵庫 県版レッドデータブック 2003	兵庫県	平成 15 年	陸上昆虫類
	6-100	特定外来生物による生態系等に 係る被害の防止に関する法律に 基づき規制される生物リスト	環境省	-	外来種
	6-101	要注意外来生物リスト	環境省	-	外来種
	6-102	外来種ハンドブック	日本生態学会	平成 14 年	外来種
	6-103	原色日本野鳥生態図鑑 陸鳥・ 水鳥編	保育社	平成 7 年	鳥類
	6-104	原色日本淡水魚類図鑑	保育社	昭和 61 年	魚類

6.8 参考資料

表 6.8-1 にあげた参考資料を、次項以下に示す。

表 6.8-1 参考資料リスト

区 分	資 料 名
確認種リスト	真名川ダム 重要種リスト 1/3～3/3
	真名川ダム 外来種リスト 1/2～2/2
	真名川ダム 魚類確認種リスト
	真名川ダム エビ・カニ・貝類確認種リスト
	真名川ダム 底生動物確認種リスト 1/4～4/4
	真名川ダム 植物プランクトン確認種リスト 1/2～2/2
	真名川ダム 動物プランクトン確認種リスト 1/2～2/2
	真名川ダム 植物確認種リスト 1/15～15/15
	真名川ダム 鳥類確認種リスト 1/2～2/2
	真名川ダム 両生類確認種リスト
	真名川ダム 爬虫類確認種リスト
	真名川ダム 哺乳類確認種リスト
	真名川ダム 陸上昆虫類確認種リスト 1/30～30/30
調査努力量リスト	真名川ダム 魚類調査における調査努力量 1/3～3/3
	真名川ダム 底生動物調査における調査努力量 1/4～4/4
	真名川ダム 動植物プランクトン調査における調査努力量
	真名川ダム 植物調査における調査努力量
	真名川ダム 鳥類調査における調査努力量 1/2～2/2
	真名川ダム 両生類・爬虫類・哺乳類調査における調査努力量 1/2～2/2
	真名川ダム 陸上昆虫類等調査における調査努力量 1/3～3/3

真名川ダム 重要種リスト

(1/3)

	分類群	科名	種名	選定基準				
				天然 記念物	種の 保存法	自然 公園法	環境省 RL	福井県 RDB
1	魚類	コイ科	ハス				VU	危惧
2		ドジョウ科	アジメドジョウ				VU	危惧
3		アカザ科	アカザ				VU	危惧
4		キュウリウオ科	ワカサギ					危惧
5		サケ科	イワナ					危惧
6			ヤマメ					危惧
7		カジカ科	カジカ				NT	準危惧
8		ハゼ科	トウヨシノボリ					準危惧
合計		7科	8種	-	-	-	4種	8種

	分類群	科名	種名	選定基準				
				天然 記念物	種の 保存法	自然 公園法	環境省 RL	福井県 RDB
1	底生動物	トワダカワゲラ科	ミネトワダカワゲラ					要注目
2		ヒロムネカワゲラ科	ミヤマノギカワゲラ					要注目
3		ナガレトビケラ科	オオナガレトビケラ				NT	
合計		3科	3種	-	-	-	1種	2種

	分類群	科名	種名	選定基準					
				天然 記念物	種の 保存法	自然 公園法	環境省 RL	福井県 RDB	
1	鳥類	カモ科	オシドリ				DD	準危惧	
2			トモエガモ				VU	危惧	
3			ヨシガモ						準危惧
4			カワアイサ						要注目
5		タカ科	ミサゴ				NT	危惧	
6			オジロワシ	国天			EN	危惧	
7			オオタカ				NT	危惧	
8			ツミ						準危惧
9			ハイタカ				NT	危惧	
10			サシバ				VU	準危惧	
11			クマタカ				EN	危惧	
12			イヌワシ	国天			EN	危惧	
13		ハヤブサ科	ハヤブサ				VU	危惧	
14		チドリ科	イカルチドリ					危惧	
15		フクロウ科	コノハズク					準危惧	
16		ヨタカ科	ヨタカ				VU	危惧	
17		カワセミ科	ヤマセミ						準危惧
18			アカショウビン						準危惧
19		キツキ科	オオアカゲラ					準危惧	
20		サンショウクイ科	サンショウクイ				VU	危惧	
21		イワヒバリ科	イワヒバリ					危惧	
合計		10科	21種	2種	5種	-	12種	21種	

真名川ダム 重要種リスト

(2/3)

	分類群	科名	種名	選定基準				
				天然 記念物	種の 保存法	自然 公園法	環境省 RL	福井県 RDB
1	両生類	サンショウウオ科	ヒダサンショウウオ				NT	
2		イモリ科	イモリ				NT	
3		ヒキガエル科	ナガレヒキガエル					準危惧
合計		3科	3種	-	-	-	2種	1種

	分類群	科名	種名	選定基準				
				天然 記念物	種の 保存法	自然 公園法	環境省 RL	福井県 RDB
1	爬虫類	イシガメ科	イシガメ				DD	
2		ヘビ科	タカチホヘビ					要注目
3			シロマダラ					要注目
合計		2科	3種	-	-	-	1種	2種

	分類群	科名	種名	選定基準				
				天然 記念物	種の 保存法	自然 公園法	環境省 RL	福井県 RDB
1	哺乳類	ヒナコウモリ科	モモシロコウモリ					要注目
2		リス科	モモンガ					準危惧
3		ウシ科	ニホンカモシカ	特別				
合計		3科	3種	1種	-	-	-	2種

	分類群	科名	種名	選定基準				
				天然 記念物	種の 保存法	自然 公園法	環境省 RL	福井県 RDB
1	陸上昆虫類	ムカシトンボ科	ムカシトンボ					要注目
2		コオロギ科	カワラスズ					要注目
3		バッタ科	カワラバッタ					準危惧
4		ツチカメムシ科	ヨコヅナツチカメムシ					要注目
5		セセリチョウ科	スジグロチャバネセセリ				NT	準危惧
6		タテハチョウ科	ウラギンスジヒョウモン				NT	
7			オオムラサキ				NT	準危惧
8		ジャノメチョウ科	ツマジロウラジャノメ					危惧
9		ハナアブ科	スズキナガハナアブ					要注目
10		オサムシ科	アオヘリアオゴミムシ				CR+EN	
11		タマムシ科	アオナガタマムシ					要注目
12		アリ科	ケブカツヤオオアリ					危惧
13			エゾアカヤマアリ					危惧
14		ドロバチ科	ハグロフタオビドロバチ					危惧
15		アナバチ科	フクイアナバチ				NT	準危惧
合計		13科	15種	-	-	-	5種	13種

No.	分類群	科名	種名	選定基準				
				天然 記念物	種の 保存法	自然 公園法	環境省 RL	福井県 RDB
1	植物	ハナヤスリ科	ナガホノナツノハナワラビ					要注目
2		チャセンシダ科	イワトラノオ					危惧
3		メシダ科	イワヤシダ					危惧
4			フクロシダ					危惧
5		ウラボシ科	ナガオノキシノブ					要注目
6		ニレ科	コバノチョウセンエノキ					危惧
7			ハルニレ					準危惧
8		タデ科	ハルトラノオ					
9			ノダイオウ				NT	危惧
10		ナデシコ科	オオヤマフスマ					準危惧
11		ウマノスズクサ科	フタバアオイ					要注目
12			ウスバサイシン					要注目
13		ボタン科	ヤマシャクヤク				NT	危惧
14		ベンケイソウ科	ツメレンゲ				NT	危惧
15		バラ科	オオダイコンソウ					危惧
16		スマレ科	エイザンスミレ					準危惧
17			アカネスミレ					要注目
18		セリ科	ハナビゼリ					要注目
19		ツツジ科	イワナシ					
20			サツキ					要注目
21		モクセイ科	シオジ					危惧
22		シソ科	アキギリ					
23		ゴマノハグサ科	サツキヒナノウスツボ					危惧
24		イワタバコ科	イワタバコ					
25		スイカズラ科	オトコヨウゾメ					要注目
26		キキョウ科	ヤマホタルブクロ					
27			シデシャジン					要注目
28		キク科	チョウジギク					
29			カガノアザミ					危惧
30			ハクサンアザミ					
31			ノニガナ					危惧
32			オタカラコウ					
33			ヒメヒゴタイ				VU	危惧
34		ユリ科	カタクリ					
35			ショウジョウバカマ					
36			マルバサンキライ					危惧
37			エンレイソウ					
38		アヤメ科	カキツバタ				NT	危惧
39		サトイモ科	アシウテンナンショウ					要注目
40		カヤツリグサ科	タタラカンガレイ					危惧
41		ラン科	エビネ				NT	危惧
42			セッコク					危惧
合計		26科	42種	-	-	13種	6種	31種

注1)重要種のカテゴリー

天然記念物(文化財保護法)

国天:国指定天然記念物

特別:特別天然記念物

種の保存法:「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(環境省,1993)における

国内希少野生動植物種

自然公園法:「自然公園法」指定植物(白山国立公園の指定植物)

環境省RL:「鳥類、爬虫類、両生類及びその他無脊椎動物のレッドリストの見直しについて」(環境省,2006)

「哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物及び植物のレッドリストの見直しについて」(環境省,2007)

CR+EN:絶滅危惧 類

EN:絶滅危惧 B類

VU:絶滅危惧 類

NT:準絶滅危惧

DD:情報不足

福井県RDB:「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 - 福井県レッドデータブック(動物編) - 」(福井県,2002)

「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 - 福井県レッドデータブック(植物編) - 」(福井県,2004)

危惧 :県域絶滅危惧 類

危惧 :県域絶滅危惧 類

準危惧:県域準絶滅危惧

要注目:要注目

真名川ダム 外来種リスト

(1/2)

	分類群	科名	種名	外来生物法		外来種 ハンドブック
				特定	要注意	
1	魚類	サケ科	ニジマス			
合計		1科	1種	-	1種	1種

	分類群	科名	種名	外来生物法		外来種 ハンドブック
				特定	要注意	
1	鳥類	ハト科	ドバト			
合計		1科	1種	-	-	1種

	分類群	科名	種名	外来生物法		外来種 ハンドブック
				特定	要注意	
1	哺乳類	ネズミ科	ハツカネズミ			
2		ジャコウネコ科	ハクビシン			
合計		2科	2種	-	-	2種

	分類群	科名	種名	外来生物法		外来種 ハンドブック
				特定	要注意	
1	陸上昆虫類	ヤガ科	オオタバコガ			
2		ハムシ科	アズキマメゾウムシ			
3			ブタクサハムシ			
4		アナバチ科	ニッポンモンキジガバチ			
5		ミツバチ科	セイヨウミツバチ			
合計		4科	5種	-	-	5種

	分類群	科名	種名	外来生物法		外来種 ハンドブック
				特定	要注意	
1	植物	タデ科	ヒメスイバ			
2			ナガバギシギシ			
3			エゾノギシギシ			
4		ヤマゴボウ科	ヨウシュヤマゴボウ			
5		ナデシコ科	オランダミミナグサ			
6			ムシトリナデシコ			
7			コハコベ			
8		ヒコ科	アオビユ(ホナガイヌビユ)			
9		オトギリソウ科	コゴメバオトギリ			
10		アブラナ科	シロイヌナズナ			
11			ミチタネツゲバナ			
12			マメグンバイナズナ			
13		ペンケイソウ科	ツルマンネングサ			
14		バラ科	オランダイチゴ			
15			ユキヤナギ			
16		マメ科	イタチハギ			
17			エニシダ			
18			アレチヌスビトハギ			
19			ハリエンジュ			
20			ムラサキツメクサ			
21			シロツメクサ			
22		トウダイグサ科	オオニシキソウ			
23			コニシキソウ			
24		ニガキ科	シンジュ			
25		ウリ科	アレチウリ			
26		アカバナ科	メマツヨイグサ			
27			オオマツヨイグサ			
28		ヒルガオ科	アメリカネナシカズラ			
29			マルバルコウ			
30		シソ科	ヒメオドリコソウ			
31		ナス科	ホオズキ			
32			ワルナスビ			
33		ゴマノハグサ科	タチイヌノフグリ			
34			オオイヌノフグリ			
35		オオバコ科	ヘラオオバコ			
36		キク科	ブタクサ			
37			ユウゼンギク			
38			アメリカセンダングサ			

真名川ダム 外来種リスト

(2/2)

	分類群	科名	種名	外来生物法		外来種 ハンドブック	
				特定	要注意		
39		(キク科)	フランスギク				
40			アレチノギク				
41			オオアレチノギク				
42			ベニバナボロギク				
43			タカサブロウ				
44			ダンドボロギク				
45			ヒメムカシヨモギ				
46			ハルジオン				
47			チチコグサモドキ				
48			ブタナ				
49			オオハンゴンソウ				
50			ノボロギク				
51			セイタカアワダチソウ				
52			オニノゲシ				
53			ヒメジョオン				
54			ヘラバヒメジョオン				
55			アカミタンポポ				
56			セイヨウタンポポ				
57			イガオナモミ				
58			オオオナモミ				
59			ヒガンバナ科	ラップズイセン			
60			アヤメ科	キシウブ			
61				ヒメヒオウギズイセン			
62			イネ科	コヌカグサ			
63				クロコヌカグサ			
64				ノハラスズメノテッポウ			
65				ハルガヤ			
66				イヌムギ			
67		カモガヤ					
68		オオニワホコリ					
69		コスズメガヤ					
70		オニウシノケグサ					
71		ハガワリトボシガラ					
72		ヒロハノウシノケグサ					
73		オオクサキビ					
74		ツルスズメノカタビラ					
75		コイチゴツナギ					
76		ナガハグサ					
77		オオスズメノカタビラ					
78		ナギナタガヤ					
合計		22科	78種	2種	21種	75種	

注1) 特定外来生物、要注意外来生物、外来種の抽出は、以下の文献、資料の掲載種とした。

特定外来生物、要注意外来生物：要注意外来生物リスト(環境省)

外来種：「外来種ハンドブック」(日本生態学会, 2002)

「日本の帰化植物写真図鑑」(清水建美ほか, 2003)

「日本帰化植物写真図鑑」(清水矩宏ほか, 2001)

真名川ダム 魚類確認種リスト

No	確認種			調査年度				重要種	外来種	
	目名	科名	種名	平成2-3年 (1990-1)	平成5年 (1993)	平成8年 (1996)	平成13年 (2001)			
1	コイ	コイ	コイ							
2			ギンブナ							
			フナ類							
3			ハス						VU、県CR+EN	
4			オイカワ							
5			アブラハヤ							
6			タカハヤ							
7			ウグイ							
8			ビワヒガイ							
9			カマツカ							
10			ニゴイ							
11		ドジョウ	アジメドジョウ					VU、県VU		
12	ナマス	ギギ	ギギ							
13			アカザ	アカザ					VU、県VU	
14	サケ	キュウリウオ	ワカサギ					県VU		
15			アユ							
16			サケ	イワナ					県VU	
17				ニジマス						要注意
18				ヤマメ						県VU
19				アマゴ						
	サツキマス									
20	カサゴ	カジカ	カジカ					NT、県NT		
21	スズキ	ハゼ	トウヨシノボリ					県NT		
確認種数				3目5科12種	5目7科14種	5目9科20種	6目8科18種	8種	1種	
				5目9科21種						

注1)重要種のカテゴリー

VU:「哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物 及び植物 のレッドリストの見直しについて」(環境省,2007) 絶滅危

NT:「哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物 及び植物 のレッドリストの見直しについて」(環境省,2007) 準絶滅

県CR+EN:「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(動物編)-」(福井県,2002) 絶滅危惧I類

県VU:「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(動物編)-」(福井県,2002) 絶滅危惧II類

県NT:「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(動物編)-」(福井県,2002) 準絶滅危惧

注2)外来種

要注意:要注意外来生物リスト(環境省)掲載種



真名川ダム エビ・カニ・貝類確認種リスト

No	確認種			調査年度				重要種	外来種
	目名	科名	種名	平成2-3年 (1990-1)	平成5年 (1993)	平成8年 (1996)	平成13年 (2001)		
1	ニナ	カワニナ	カワニナ						
2	エビ	テナガエビ	スジエビ						
3		ヌマエビ	ヌマエビ						
4		サワガニ	サワガニ						
確認種数				1目1科1種	0種	2目4科4種	2目3科3種	0種	0種
				2目4科4種					

真名川ダム 底生動物確認種リスト

(1/4)

No.	確認種			調査年度				重要種	外来種
	綱名	目名	科名	種名	平成6年 (1994)	平成9年 (1997)	平成14年 (2002)		
1	普通海綿綱	ザラカイメン目	タンスイカイメン科	ヨウカイメン					
2	ヒトリ虫綱	無類目(花クラゲ目)	ヒドリ科	ヒドリ					
3	渦虫綱	順列目	サンカクアタマウスムシ科	ナミウスムシ					
4			ヒラウズムシ科	Phaeocata属(ホソウスムシ属)					
5	有針綱	ハリヒモムシ目	Prostomatidae	Prostoma属					
6	ハリガネムシ綱	ハリガネムシ目	ザラハリガネムシ科	ザラハリガネムシ科					
7			ハリガネムシ科	ハリガネムシ科					
8	腹足綱	盤足目	カウニナ科	カウニナ					
9		基眼目	モノアラガイ科	コシダカヒメモノアラガイ					
10	二枚貝綱	マルスタレガイ目	マメシジミ科	Pisidium属(マメシジミ属)					
11		オヨギミズ目	オヨギミズ科	Lumbriculus属(オヨギミズ属)					
12	ミズミズ綱	イトミズ目	ヒメミズ科	ヒメミズ科					
13			イトミズ科	Chaetogaster属(ヤドリミズミズ属)					
14				Limnodrilus属(ユリミズ属)					
15				ミツゲミズミズ					
16				Nais属(ミズミズ属)					
17				クロオビミズミズ					
18				Ripistes parasita					
19				ヨコレミズミズ					
20				Slavina属(ヨコレミズミズ属)					
21				イトミズ					
22				イトミズ亜科					
23				イトミズ科					
24				イトミズ科					
25				イトミズ科					
26				イトミズ科					
27				イトミズ科					
28				イトミズ科					
29				イトミズ科					
30				イトミズ科					
31				イトミズ科					
32				イトミズ科					
33				イトミズ科					
34				イトミズ科					
35				イトミズ科					
36				イトミズ科					
37				イトミズ科					
38				イトミズ科					
39				イトミズ科					
40				イトミズ科					
41				イトミズ科					
42				イトミズ科					
43				イトミズ科					
44				イトミズ科					
45				イトミズ科					
46				イトミズ科					
47				イトミズ科					
48				イトミズ科					
49				イトミズ科					
50				イトミズ科					
51				イトミズ科					
52				イトミズ科					
53				イトミズ科					
54				イトミズ科					
55				イトミズ科					
56				イトミズ科					
57				イトミズ科					
58				イトミズ科					
59				イトミズ科					
60				イトミズ科					
61				イトミズ科					
62				イトミズ科					
63				イトミズ科					
64				イトミズ科					
65				イトミズ科					
66				イトミズ科					
67				イトミズ科					
68				イトミズ科					
69				イトミズ科					
70				イトミズ科					
71				イトミズ科					
72				イトミズ科					
73				イトミズ科					
74				イトミズ科					
75				イトミズ科					
76				イトミズ科					
77				イトミズ科					
78				イトミズ科					
79				イトミズ科					
80				イトミズ科					
81				イトミズ科					
82				イトミズ科					
83				イトミズ科					
84				イトミズ科					
85				イトミズ科					
86				イトミズ科					
87				イトミズ科					
88				イトミズ科					
89				イトミズ科					
90				イトミズ科					
91				イトミズ科					
92				イトミズ科					

真名川ダム 底生動物確認種リスト

(2/4)

No.	確認種			調査年度				重要種	外来種
	綱名	目名	科名	種名	平成6年 (1994)	平成9年 (1997)	平成14年 (2002)		
-	(昆虫綱)	(トンボ目(蜻蛉目))	「サナエトンボ科」	サナエトンボ科					
93			オニヤンマ科	オニヤンマ					
94			モトトンボ科	コヤマトンボ					
95		カワゲラ目(セキ翅目)	トウダカワゲラ科	ミネトウダカワゲラ					重要注目
96			クロカワゲラ科	クロカワゲラ					
97			ホソカワゲラ科	ホソカワゲラ					
98			オナシカワゲラ科	Amphinemura属(フサオナシカワゲラ属)					
99				クロオナシカワゲラ					
100				Nemoura属(オナシカワゲラ属)					
101				Protonemura属(ユビオナシカワゲラ属)					
-				オナシカワゲラ科					
102			ヒロムネカワゲラ科	ノギカワゲラ					
103				ミヤマノギカワゲラ					重要注目
104			シタカワゲラ科	シタカワゲラ					
105			ミドリカワゲラ科	Suwalia属(ツヤミドリカワゲラ属)					
-				ミドリカワゲラ科					
106			カワゲラ科	Acronemura属(キカワゲラ属)					
107				モンカワゲラ					
-				Calineuria属(モンカワゲラ属)					
108				エダオカワゲラ					
-				Caroberia属(エダオカワゲラ属)					
109				Gibosia属(コナカワゲラ属)					
110				クロヒゲカワゲラ					
111				カミムラカワゲラ					
112				ウエノカワゲラ					
-				Kaminuria属(カミムラカワゲラ属)					
113				Kotina属(ナガカワゲラ属)					
114				Neoperla属(ワタツミカワゲラ属)					
115				ヤマトカワゲラ					
-				オオヤマカワゲラ					
116				Oyamia属(オオヤマカワゲラ属)					
-				オオクラカケカワゲラ					
117				Paraonemura属(クラカケカワゲラ属)					
-				キベリトウゴウカワゲラ					
118				Tocoperia属(トウゴウカワゲラ属)					
-				カワゲラ科					
119			アミメカワゲラ科	アイスクサカワゲラ					
120				ホソクサカワゲラ					
121				フタスジクサカワゲラ					
-				Isoperlina属(クサカワゲラ属)					
122				Kocotus属(アサカワヒメカワゲラ属)					
123				Ostrovlus属(コグサヒメカワゲラ属)					
124				ヒロハネアミメカワゲラ					
125				Skwala属(ヒメアミメカワゲラ属)					
126				ニッコウアミメカワゲラ					
-				アミメカワゲラ科					
127		カメムシ目(半翅目)	アメンボ科	オオアメンボ					
128				アメンボ					
129				コセウカアメンボ					
130				ヒメアメンボ					
131				シマアメンボ					
132			タイコウチ科	ミスカマキリ					
133		ヘビトンボ目	ヘビトンボ科	タイリククロスジヘビトンボ					
134				ヤマトクロスジヘビトンボ					
135				ヘビトンボ					
136		アミメカゲロウ目(鱒翅目)	ヒロハカゲロウ科	ヒロハカゲロウ					
137		トビケラ目(毛翅目)	アミメシマトビケラ科	Arctopsyche属(アミメシマトビケラ属)					
138				シロフツヤトビケラ					
-				Parapsyche属(シロフツヤトビケラ属)					
139			ムネカクトビケラ科	Ecnomus属(ムネカクトビケラ属)					
140			シマトビケラ科	コガタシマトビケラ					
141				ナミヨガタシマトビケラ					
-				Cheumatopsyche属(コガタシマトビケラ属)					
142				Diplectrona sp.DA(D.Aシヤシマトビケラ)					
143				Diplectrona sp.DC(D.Cシヤシマトビケラ)					
-				Diplectrona属(シヤシマトビケラ属)					
144				シロスシマトビケラ					
145				イカリシマトビケラ					
146				ウルマーシマトビケラ					
147				サリシマトビケラ					
148				オカハラシマトビケラ					
-				Hydropsyche属(シマトビケラ属)					
149			カウトビケラ科	Dolophilodes属(タニガウトビケラ属)					
150				Wormaldia属(ヒメタニガウトビケラ属)					
151			イウトビケラ科	Paranyctophylax属					
152				Plectrocnemia属(シヤマイウトビケラ属)					
-				イウトビケラ科					
153			クダトビケラ科	Psychomyia属(クダトビケラ属)					
154			ヒゲナガカウトビケラ科	ヒゲナガカウトビケラ					
155				チャバネヒゲナガカウトビケラ					
-				Stenopsyche属(ヒゲナガカウトビケラ属)					
156			ヤマトビケラ科	ニチンカヤマトビケラ					
-				Glossosoma属(ヤマトビケラ属)					
157			カウリナガレトビケラ科	ツメナガレトビケラ					
158			ヒメトビケラ科	Hydroptila属(ヒメトビケラ属)					
159				Oxethira属(ハコイタヒメトビケラ属)					
160				Stactobia属(カクヒメトビケラ属)					
161			ナガレトビケラ科	オオナガレトビケラ					NT
162				ヒロアタマナガレトビケラ					
163				クレムズナガレトビケラ					
164				イトウナガレトビケラ					
165				カワムラナガレトビケラ					
166				キソナガレトビケラ					
167				クワヤマナガレトビケラ					
168				レセイナガレトビケラ					
169				ムサゲロウナガレトビケラ					
170				モリナガレトビケラ					
171				シコツチナガレトビケラ					
172				トウダナガレトビケラ					
173				トランスクイナガレトビケラ					
174				ヤマナガレトビケラ					
175				Rhyacophila sp.RB(R.Bナガレトビケラ)					
176				Rhyacophila sp.RC(R.Cナガレトビケラ)					
177				Rhyacophila sp.RK(R.Kナガレトビケラ)					
-				Rhyacophila属(ナガレトビケラ属)					
178			コエグリトビケラ科	Apatania属(コエグリトビケラ属)					
179			カクスイトビケラ科	Eobrachycentrus属(オオハラツツトビケラ属)					
180				ハナセマルツツトビケラ					
181				マルツツトビケラ					
182				ウエノマルツツトビケラ					
183				Micrasema sp.MB(M.Bマルツツトビケラ)					
-				Micrasema属(マルツツトビケラ属)					
184			ニンキョウトビケラ科	ニンキョウトビケラ					
-				Goera属(ニンキョウトビケラ属)					
185			カクツツトビケラ科	フトヒゲカクツツトビケラ					
186				オオカクツツトビケラ					
187				コカクツツトビケラ					
188				ヌカヒラカクツツトビケラ					

真名川ダム 底生動物確認種リスト

(3/4)

No.	確認種			調査年度				重要種	外来種
	綱名	目名	科名	種名	平成6年 (1994)	平成9年 (1997)	平成14年 (2002)		
-	(昆虫綱)	(トビケラ目(毛翅目))	(カクツツビケラ科)	<i>Lepidostoma</i> 属(カクツツビケラ属)					
189			ビゲナトビケラ科	<i>Ceraclea</i> 属(タネビゲナトビケラ属)					
190				<i>Mystacodes</i> 属(アオビゲナトビケラ属)					
191				<i>Qaetas</i> 属(カサツミトビケラ属)					
192				<i>Setodes</i> 属(セトビケラ属)					
193				<i>Trienodes</i> 属(センカイトビケラ属)					
194				ヒメセトビケラ					
195									
196			エグリトビケラ科	<i>Hydatophylax</i> 属(トビキエグリトビケラ属)					
197				<i>Limnephilus</i> 属(エグリトビケラ属)					
198				<i>Nothopsyche</i> sp.NA(NAホタルトビケラ)					
199			キタガミトビケラ科	キタガミトビケラ					
200			フトビゲトビケラ科	ヨツトビケラ					
201				フタジキソトビケラ					
202			トビケラ科	ムラサキトビケラ					
203			マルバネトビケラ科	<i>Phryganopsysche</i> 属(マルバネトビケラ属)					
204			ケトビケラ科	<i>Gumaga</i> 属(グマガトビケラ属)					
205			クロツツビケラ科	ニッポンアツバエグリトビケラ					
206				クロツツビケラ					
207		ハエ目(双翅目)	ガガンボ科	<i>Antocha</i> 属(ウスバガガンボ属)					
208				<i>Dicranota</i> 属					
209				<i>Erioptera</i> 属(ホシヒメガガンボ属)					
210				<i>Hexatoma</i> 属(ヒゲナガガガンボ属)					
211				<i>Limnophila</i> 属(カスリヒメガガンボ属)					
212				<i>Ormosia</i> 属					
213				<i>Phonocera</i> 属					
214				<i>Tipula</i> 属(ガガンボ属)					
-				ガガンボ科					
215			アミカ科	フタトゲミヤマヤマトアミカ					
-				<i>Agathon</i> 属(ヤマトアミカ属)					
216				<i>Bibioccephala</i> 属(クロバアミカ属)					
217				ニホンアミカ					
218				シラキスカシアミカ					
219				アルプスヒメアミカ					
220				ヒメアミカ					
-				<i>Phylorus</i> 属(ヒメアミカ属)					
221			チョウバエ科	<i>Pericoma</i> 属(ナガレチョウバエ属)					
222				<i>Telmatoecopus</i> 属(オオケチョウバエ属)					
223			ヌカカ科	<i>Atrichopogon</i> 属					
-				ヌカカ科					
224			ユスリカ科	<i>Ablabesmyia</i> 属(ダングラヒメユスリカ属)					
225				<i>Biwattendipes</i> 属(ビワヒゲユスリカ属)					
226				<i>Boreoheptaerua</i> 属(タニユスリカ属)					
227				<i>Brillia</i> 属(ケブカエリユスリカ属)					
228				<i>Cardiocladius</i> 属(ハダカユスリカ属)					
229				<i>Chaetocladius</i> 属(トゲアシエリユスリカ属)					
230				<i>Chironomus</i> 属(ユスリカ属)					
231				<i>Cladotanytarsus</i> 属(エダケヒゲユスリカ属)					
232				<i>Corvoneura</i> 属(コナユスリカ属)					
233				<i>Cricotopus</i> 属(ツヤユスリカ属)					
234				<i>Cryptochironomus</i> 属(カマカケユスリカ属)					
235				<i>Demicytichironomus</i> 属(スジカマガタユスリカ属)					
236				<i>Diamesa</i> 属(ヤマユスリカ属)					
237				<i>Dicrotendipes</i> 属(ホソミユスリカ属)					
238				<i>Einfeldia</i> 属(クロユスリカ属)					
239				<i>Endochironomus</i> 属(ミズクサユスリカ属)					
240				<i>Eptoecoladius</i> 属(エラリユスリカ属)					
241				<i>Eukiefferiella</i> 属(テンマクエリユスリカ属)					
242				<i>Limnophyes</i> 属(ムナトケユスリカ属)					
243				<i>Lipinella</i> 属(オオミドリユスリカ属)					
244				<i>Metricnemus</i> 属(ケバネエリユスリカ属)					
245				<i>Micropsectra</i> 属(ナガスネユスリカ属)					
246				<i>Microtendipes</i> 属(ツヤムネユスリカ属)					
247				<i>Monodiamesa</i> 属(トゲヤマユスリカ属)					
248				<i>Nanocladius</i> 属(コガタエリユスリカ属)					
249				<i>Neobrillia</i> 属(ホソケブカエリユスリカ属)					
250				<i>Orthocladius</i> 属(エリユスリカ属)					
251				<i>Pagastia</i> 属(オオコキユスリカ属)					
252				<i>Paracladopelma</i> 属(ケバコユスリカ属)					
253				<i>Paratendipes</i> 属(カワユスリカ属)					
254				<i>Polypedium</i> 属(ハモンユスリカ属)					
255				<i>Prothastia</i> 属(サウユスリカ属)					
256				<i>Rhectanvntarsus</i> 属(カコユスリカ属)					
257				<i>Serania</i> 属(キザユスリカ属)					
258				<i>Stenochironomus</i> 属(ハムグリユスリカ属)					
259				<i>Stictochironomus</i> 属(アシマダラユスリカ属)					
260				<i>Syndiamesa</i> 属(ユキユスリカ属)					
261				<i>Synorthocladius</i> 属(ムナクボエリユスリカ属)					
262				<i>Tanytarsus</i> 属(ヒゲユスリカ属)					
263				<i>Thienemanniella</i> 属(ヌカユスリカ属)					
264				<i>Tyterenia</i> 属(ニセテンマクエリユスリカ属)					
265				ユスリカ亜科					
-				ヤマユスリカ亜科					
-				エリユスリカ亜科					
-				モンユスリカ亜科					
-				ユスリカ科					
266			カ科	カ亜科					
267			ホソカ科	<i>Dixa</i> 属(ホソカ属)					
268			フコ科	キアシオブコ					
-				<i>Prosimulium</i> 属(オオブコ属)					
269				<i>Simulium</i> 属(アシマダラブコ属)					
270			タマバエ科	タマバエ科					
271			ナガレアブ科	クロモンナガレアブ					
272				ミヤマナガレアブ					
273				ハマダラナガレアブ					
-				<i>Atherix</i> 属(チナガレアブ属)					
274				サツマモンナガレアブ					
275			アブ科	アブ科					
276			アシナガバエ科	アシナガバエ科					
277			オドリバエ科	オドリバエ科					
278			ミギウバエ科	ミギウバエ科					
-				ハエ目(双翅目)					
279		コウチュウ目(鞘翅目)	ゲンゴロウ科	クロスマゲンゴロウ					
280				マメゲンゴロウ					
-				<i>Aqabus</i> 属(マメゲンゴロウ属)					
281				コシマゲンゴロウ					
282				コマダラチビゲンゴロウ					
283				クロスマゲンゴロウ					
284				ホソクロメゲンゴロウ					
285				モンキマメゲンゴロウ					
286				サワダメゲンゴロウ					
287				ヒメゲンゴロウ					
-				ヒメゲンゴロウ亜科					
-				ゲンゲンゴロウ亜科					
-				ゲンゴロウ科					
288			ミススマシ科	オナガミススマシ					
-				<i>Orectochilus</i> 属(オナガミススマシ属)					

真名川ダム 底生動物確認種リスト

(4/4)

No.	確認種				調査年度				重要種	外来種		
	綱名	目名	科名	種名	平成6年 (1994)	平成9年 (1997)	平成14年 (2002)	平成18年 (2006)				
289	(昆虫綱)	(コウチュウ目(鞘翅目))	ツブミズムシ科	クロサウツブミズムシ								
290			ダルマガムシ科	ハセガワダルマガムシ								
291			ガムシ科	マルガムシ								
292				ガムシ								
293				シジミガムシ								
-			ヒメドロムシ科	ガムシ科								
294				ツヤナガアシドロムシ								
295				ツヤヒメドロムシ								
296				キスジミドロムシ								
297				コトウミドロムシ								
298				アカモンミドロムシ								
299				ツブスドロムシ								
300				ツヤドロムシ								
301				ミツツヤドロムシ								
-				ヒメドロムシ亜科								
302				ヒラタドロムシ科	チビヒゲナガハナノミ							
303			クシヒゲマルヒラタドロムシ									
-			<i>Eubrianax</i> 属(マルヒラタドロムシ属)									
304			<i>Macroebria</i> 属(チビマルヒゲナガハナノミ属)									
305			<i>Mataeopsephus</i> 属(ヒラタドロムシ属)									
306			マスタチヒラタドロムシ									
307			ホルタル科	ホルタル								
308			ハネコケムシ科	ハネコケムシ								
309			被口綱	掩眼目	ハネコケムシ科							
確認種数					98	113	132	260	3	0		

注1)重要種のカテゴリー

NT: 哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物、及び植物のレッドリストの見直しについて(環境省, 2009) 準絶滅危惧  
 県要注目: 福井県の絶滅のおそれのある野生動物(福井県レッドデータブック(動物編)) (福井県, 2002) 要注目

真名川ダム 植物プランクトン確認種リスト

(1/2)

No	確認種				調査年度				
	門名	綱名	科名	種名	平成6年 (1994)	平成12年 (2000)	平成17年 (2005)	平成18年 (2006)	
1	藍色動物	藍藻綱	クロオコックス	<i>Synechocystis minuscula</i>					
2			ユレモ	<i>Lyngbya</i> sp.					
3				<i>Oscillatoria limosa</i>					
4				<i>Oscillatoria</i> sp.					
5	クリプト植物	クリプト藻綱	クリプトモナス	<i>Cryptomonas</i> sp.					
				Cryptomonadaceae gen. spp.					
6	渦鞭毛植物	渦鞭毛藻綱	ギムノディニウム	<i>Gymnodinium</i> sp.					
7			ペリディニウム	<i>Peridinium bipes</i> f. <i>occultatum</i>					
8				<i>Peridinium cunningtonii</i>					
9	不等毛植物	黄金色藻綱	ディノブリオン	<i>Dinobryon divergens</i>					
10					<i>Dinobryon serturalia</i>				
					<i>Dinobryon</i> sp.				
11			シヌラ	<i>Mallomonas akrokomos</i>					
12				<i>Mallomonas</i> sp.					
13			<i>Synura</i> spp.						
14			珪藻綱	タラシオンラ	<i>Cyclotella glomerata</i>				
15					<i>Cyclotella meneghiniana</i>				
16					<i>Cyclotella radiosa</i>				
					<i>Cyclotella stelligera</i>				
		<i>Cyclotella</i> spp.							
17				<i>Stephanodiscus</i> spp.					
18				<i>Thalassiosira pseudonana</i>					
19		メロシラ		<i>Aulacoseira distans</i>					
20				<i>Aulacoseira italica</i>					
21				<i>Melosira varians</i>					
22		リゾソレニア	<i>Urosolenia longiseta</i>						
23			<i>Rhizosolenia eriensis</i>						
24			<i>Rhizosolenia longiseta</i>						
25		ビドルフィア ディアトマ	<i>Attheya zachariasii</i>						
26			<i>Asterionella formosa</i>						
27			<i>Ceratoneis arcus</i>						
28			<i>Diatoma elongatum</i>						
29			<i>Diatoma hiemale</i>						
30			<i>Diatoma mesodon</i>						
31			<i>Diatoma tenue</i>						
32			<i>Diatoma vulgare</i>						
33			<i>Fragilaria crotonensis</i>						
34			<i>Fragilaria vaucheriae</i>						
			<i>Fragilaria</i> spp.						
35			<i>Synedra acus</i>						
36			<i>Synedra goulardii</i>						
37			<i>Synedra inaequalis</i>						
38			<i>Synedra nana</i>						
39			<i>Synedra rumpens</i>						
40			<i>Synedra rumpens</i> var. <i>familiaris</i>						
41			<i>Synedra ulna</i>						
42		<i>Synedra ulna</i> var. <i>oxyrhynchus</i>							
43		ユーノチア	<i>Eunotia lunaris</i>						
44			<i>Eunotia pectinalis</i>						
			<i>Eunotia</i> sp.						
45		ナビクラ	<i>Amphora ovalis</i>						
46			<i>Amphora</i> sp.						
47			<i>Caloneis silicula</i>						
48			<i>Cymbella aspera</i>						
49			<i>Cymbella gracilis</i>						
50			<i>Cymbella lanceolata</i>						
51			<i>Cymbella minuta</i>						
52			<i>Cymbella naviculiformis</i>						
53			<i>Cymbella prostrata</i>						
54			<i>Cymbella sinuata</i>						
55			<i>Cymbella tumida</i>						
			<i>Cymbella turgidula</i>						
			<i>Cymbella</i> spp.						
56			<i>Diploneis ovalis</i>						
57			<i>Diploneis puella</i>						
			<i>Diploneis</i> sp.						
58			<i>Frustulia rhomboides</i>						
59			<i>Frustulia vulgaris</i>						
60			<i>Gomphonema angustatum</i>						
61			<i>Gomphonema gracile</i>						
62			<i>Gomphonema parvulum</i>						
63			<i>Gomphonema quadripunctatum</i>						
64			<i>Gomphonema vastum</i>						
		<i>Gomphonema</i> spp.							
65		<i>Gyrosigma acuminatum</i>							
66		<i>Navicula cryptocephala</i>							
67		<i>Navicula mutica</i>							
68		<i>Navicula pupula</i>							

真名川ダム 植物プランクトン確認種リスト

(2/2)

No	確認種				調査年度				
	門名	綱名	科名	種名	平成6年 (1994)	平成12年 (2000)	平成17年 (2005)	平成18年 (2006)	
69	(不等毛植物)	(珪藻綱)	(ナビクラ)	<i>Navicula radiosa</i>					
70				<i>Navicula viridula</i>					
				<i>Navicula</i> spp.					
71				<i>Pinnularia borealis</i>					
72				<i>Pinnularia gibba</i>					
				<i>Pinnularia</i> sp.					
73						<i>Rhoicosphenia curvata</i>			
74						<i>Stauroneis smithii</i>			
75					アクナンテス	<i>Achnanthes japonica</i>			
76						<i>Achnanthes lanceolata</i>			
77						<i>Achnanthes lanceolata var. rostrata</i>			
						<i>Achnanthes</i> spp.			
78						<i>Cocconeis pediculus</i>			
79						<i>Cocconeis placentula</i>			
80					ニッチア	<i>Bacillaria paradoxa</i>			
81						<i>Hantzschia amphioxys</i>			
82						<i>Nitzschia acicularis</i>			
83						<i>Nitzschia dissipata</i>			
84						<i>Nitzschia frustulum</i>			
85						<i>Nitzschia fruticosa</i>			
86						<i>Nitzschia holsatica</i>			
87						<i>Nitzschia linearis</i>			
88						<i>Nitzschia obtusa</i>			
89						<i>Nitzschia palea</i>			
			<i>Nitzschia</i> spp.						
90			スリレラ	<i>Cymatopleura solea</i>					
91				<i>Surirella angusta</i>					
92				<i>Surirella linearis</i>					
93				<i>Surirella ovata</i>					
94				<i>Surirella robusta</i>					
			<i>Surirella</i> sp.						
95	ミドリムシ植物	ミドリムシ藻綱	ミドリムシ	<i>Euglena</i> sp.					
96				<i>Phacus</i> sp.					
97				<i>Trachelomonas verrucosa var. macrotuberculosa</i>					
			<i>Trachelomonas</i> sp.						
98	緑色植物	緑藻綱	クラミドモナス	<i>Chlamydomonas</i> sp.					
99				オオヒゲマワリ	<i>Eudorina elegans</i>				
100				<i>Pandorina morum</i>					
101			パルメロプシス	<i>Gloeocystis gigas</i>					
102			クロロコックム	<i>Planktosphaeria gelatinosa</i>					
103				<i>Schroederia setigera</i>					
104			パルメラ	<i>Sphaerocystis schroeteri</i>					
105			オオキスティス	<i>Ankistrodesmus falcatus</i>					
106				<i>Oocystis</i> sp.					
107				<i>Selenastrum</i> sp.					
108			ゴレンキニア	<i>Golenkinia paucispina</i>					
109			セネデスムス	<i>Scenedesmus bijuga</i>					
110				<i>Scenedesmus incrassatulus</i>					
				<i>Scenedesmus</i> spp.					
111			コッコミクサ	<i>Elakatothrix gelatinosa</i>					
112			ヒビミドロ	<i>Ulothrix zonata</i>					
113			カエトフォラ	<i>Stigeoclonium subsecundum</i>					
114			ツツミモ	<i>Closterium acerosum</i>					
		<i>Closterium</i> sp.							
115		<i>Cosmarium</i> sp.							
116		<i>Hyalotheca mucosa</i>							
確認種数					67	62	75	38	
					116				

真名川ダム 動物プランクトン確認種リスト

(1/2)

No	確認種				調査年度						
	門名	綱名	科名	種名	平成6年 (1994)	平成12年 (2000)	平成17年 (2005)	平成18年 (2006)			
1	肉質鞭毛虫門	葉状根足虫綱	アルケラ科	<i>Arcella vulgaris</i>							
				<i>Arcella</i> sp.							
				<i>Arcellidae</i> sp.							
2					ディフルギア科	<i>Diffugia corona</i>					
						<i>Diffugia</i> spp.					
3					ケントロピキシス科	<i>Centropyxis aculeata</i>					
						<i>Centropyxis</i> spp.					
4					糸状根足虫綱	エウグリファ科	<i>Euglypha</i> sp.				
5					真正太陽虫綱	-	<i>Acanthocystis</i> sp.				
						-	<i>Heliozoa</i> sp.				
						-	SARCOMASTIGOPHORA sp.				
6			繊毛虫門	キネトフラグミノフォール綱	ホロフリア科	<i>Didinium nasutum</i>					
7							<i>Didinium balbiani</i>				
8							トラケリウス科	<i>Dileptus</i> sp.			
9								<i>Paradileptus</i> sp.			
						-	Prostomatida sp.				
						Kinetofragminophora sp.					
10		少膜綱			ボルティケラ科	<i>Carchesium</i> sp.					
11						<i>Vorticella</i> sp.					
						-	Peritrichida sp.				
12					多膜綱	ラッパムシ科	<i>Stentor</i> sp.				
13						ケナガコムシ科	<i>Halteria</i> sp.				
14						フデツツカラムシ科	<i>Tintinnidium</i> spp.				
15						スナカラムシ科	<i>Tintinnopsis cratera</i>				
							<i>Tintinnopsis</i> spp.				
						-	Oligotrichida sp.				
				-	CILIOPHORA sp.						
16	輪形動物門	単生殖巣綱	ツボワムシ科	<i>Brachionus angularis angularis</i>							
17					<i>Kellicottia longispina</i>						
18					<i>Keratella quadrata quadrata</i>						
19					<i>Keratella quadrata</i>						
						<i>Keratella</i> sp.					
20					ハオリワムシ科	<i>Colurella</i> sp.					
21						<i>Euchlanis dilatata</i>					
22						<i>Lepadella</i> sp.					
23					ツキガタワムシ科	<i>Lecane luna</i>					
						<i>Lecane</i> sp.					
24						<i>Monostyla</i> sp.					
25					セナカワムシ科	<i>Cephalodella</i> sp.					
26					ネズミワムシ科	<i>Trichocerca</i> sp.					
27					ハラアシワムシ科	<i>Ascomorpha</i> sp.					
28					ヒゲワムシ科	<i>Ploesoma hudsoni</i>					
29						<i>Ploesoma truncatum</i>					
						<i>Ploesoma</i> sp.					
30						<i>Polyarthra euryptera</i>					
31						<i>Polyarthra tripla vulgaris</i>					
						<i>Polyarthra</i> spp.					
32						<i>Synchaeta</i> spp.					
33					フクロワムシ科	<i>Asplanchna priodonta</i>					
						<i>Asplanchna</i> sp.					
34					ミジンコワムシ科	<i>Hexarthra mira</i>					
35			ピラタワムシ科	<i>Pompholyx complanata</i>							
36			テマリワムシ科	<i>Conochilus unicornis</i>							
				<i>Conochilus</i> sp.							
37			ハナビワムシ科	<i>Collotheca</i> sp.							
38		ヒルガタワムシ綱	ミズヒルガタワムシ科	<i>Philodinidae</i> sp.							
			-	ROTIFERA sp.							
39	線形動物門	-	-	NEMATODA sp.							
40	節足動物門	甲殻綱	ミジンコ科	<i>Daphnia galeata</i>							
41					<i>Daphnia longispina</i>						
					<i>Daphnia</i> sp.						
42					ソウミジンコ科	<i>Bosmina longirostris</i>					
43						<i>Bosminopsis deitersi</i>					
44					マルミジンコ科	<i>Alona</i> sp.					
45						<i>Alonella</i> sp.					
46						<i>Chydorus sphaericus</i>					
						<i>Chydorus</i> sp.					
					-	Brachiopoda sp.					
47					ヒゲナガケンミジンコ科	<i>Eodiaptomus japonicus</i>					
			-	Calanoida sp.							
48			-	Harpacticoida sp.							
49			キクロピナ科	Cyclopinae sp.							
50			キクロプス科	<i>Cyclops kikuchii</i>							
51				<i>Cyclops vicinus</i>							
				<i>Cyclops</i> sp.							



真名川ダム 動物プランクトン確認種リスト

(2/2)

No	確認種				調査年度				
	門名	綱名	科名	種名	平成6年 (1994)	平成12年 (2000)	平成17年 (2005)	平成18年 (2006)	
52	(節足動物門)	(甲殻綱)	(キクロプス科)	<i>Thermocyclops hvalinus</i>					
53				Cyclopidae sp.					
				-	Cyclopoida sp.				
					Copepoda sp.				
				nauplius of Copepoda					
54		昆虫綱		カゲロウ科	Ephemeroptera sp.				
55				カワゲラ科	Plecoptera sp.				
56	ユスリカ科			Chironomidae gen. sp.					
	不明	不明	不明	UNIDENTIFIED ANIMAL					
確認種数					31	35	32	19	
					56				

真名川ダム 植物確認種リスト

(1/15)

No.	分類群	確認種		調査年度			重要種	外来種	
		科名	種名	平成7年 (1995)	平成10年 (1998)	平成15年 (2003)			
1	シダ植物門	ヒカゲノカズラ科	ヒカゲノカズラ						
2			ホソバトウゲシバ						
3		イワヒバ科	カタヒバ						
4			クラマゴケ						
5			イワヒバ						
6		トクサ科	スギナ						
7			イヌドクサ						
8		ハナヤスリ科	オオハナワラビ						
9			ナガホノナツノハナワラビ				県要注目		
10			フユノハナワラビ						
11			ナツノハナワラビ						
12		ゼンマイ科	ヤマドリゼンマイ						
13			ゼンマイ						
14		キジノオシダ科	キジノオシダ						
15			ヤマソテツ						
16		コケシノブ科	アオホラゴケ						
17			ウチワゴケ						
18			コウヤコケシノブ						
19			ハイホラゴケ						
20			ヒメハイホラゴケ						
21			コケシノブ						
22		コバノイシカグマ科	イヌシダ						
23			コバノイシカグマ						
24			イワヒメワラビ						
25			フモトシダ						
26		ワラビ	ワラビ						
27			シノブ科	シノブ					
28		ミズワラビ科	クジャクシダ						
29			イワガネゼンマイ						
30			ウラゲイワガネ						
31			イワガネソウ						
32			カラクサシダ						
33		イノモトソウ科	オオバノイノモトソウ						
34		チャセンシダ科	トラノオシダ						
35			クモノスシダ						
36			コタニワタリ						
37			イワトラノオ					県VU	
38			チャセンシダ						
39			シシガシラ科	シシガシラ					
40		オシダ科	ホソバナライシダ						
41			ナンゴクナライシダ						
42			オニカナワラビ						
43			リョウメンシダ						
44			タカヤマナライシダ						
45			ヤブソテツ						
46			ヤマヤブソテツ						
47			ヒロハヤブソテツ						
48			イワヘゴ						
49			オシダ						
50			オオクジャクシダ						
51			ベニシダ						
52			トウゴクシダ						
53			マルバベニシダ						
54			オオベニシダ						
55			クマワラビ						
56			ミヤマベニシダ						
57			ミヤマイタチシダ						
58			オクマワラビ						
59			イワイタチシダ						
60			ヤマイタチシダ						
61			ツルデンダ						
62			ツヤナシイノデ						
63			イノデ						
64			サイゴクイノデ						
65			サカゲイノデ						
66			イノデモドキ						
67			ジュウモンジシダ						
68			ヒメカナワラビ						
69			ヒメシダ科	ゲジゲジシダ					
70				ミソシダ					
71				ハリガネワラビ					
72				ヤワラシダ					
73				ヒメシダ					
74		ヒメワラビ							

真名川ダム 植物確認種リスト

(2/15)

No.	分類群	確認種		調査年度			重要種	外来種	
		科名	種名	平成7年 (1995)	平成10年 (1998)	平成15年 (2003)			
75	(シダ植物門)	メシダ科	カラクサイヌワラビ						
76			サトメシダ						
77			ホソバインヌワラビ						
78			トガリバインヌワラビ						
79			ヌリワラビ						
80			イヌワラビ						
81			タニイヌワラビ						
82			ヤマイヌワラビ						
83			オオサトメシダ						
84			ヘビノネゴザ						
85			ヒロハヘビノネゴザ						
86			シケチシダ						
87			セイタカシケシダ						
88			シケシダ						
89			オオヒメワラビ						
90			ミヤマシケシダ						
91			ハクモウイノデ						
92			ウスゲミヤマシケシダ						
93			イワヤシダ					県VU	
94			オニヒカゲワラビ						
95			キヨタキシダ						
96			イヌガンソク						
97			クサソテツ						
98			コウヤワラビ						
99	フクロシダ					県CR+EN			
100			イワデンダ						
101		ウラボシ科	ノキシノブ						
102			ナガオノキシノブ				県要注目		
103			ヒメサジラン						
104			オシャグジデンダ						
105	種子植物門	マツ科	カラマツ						
106	裸子植物亜門		アカマツ						
107			クロマツ						
108			スギ科	アシウスギ					
109			ヒノキ科	ヒノキ					
110			イヌガヤ科	ハイイヌガヤ					
111		イチイ科	チャボガヤ						
112	種子植物門	クルミ科	オニグルミ						
113	被子植物亜門		サワグルミ						
114	双子葉植物綱	ヤナギ科	ヤマナラシ						
115	離弁花亜綱		バッコヤナギ						
116			アカメヤナギ						
117			オオネコヤナギ						
118			カワヤナギ						
119			ネコヤナギ						
120			イヌコリヤナギ						
121			キヌヤナギ						
122			オノエヤナギ						
123			コゴメヤナギ						
124			タチヤナギ						
125			カバノキ科	ミヤマカウラハンノキ					
126		ケヤマハンノキ							
127		ヤマハンノキ							
128		ハンノキ							
129		ヒメヤシャブシ							
130		オオバヤシャブシ							
131		ミズメ							
132		サワシバ							
133		クマシデ							
134		アカシデ							
135		イヌシデ							
136		ツノハシバミ							
137		ブナ科	クリ						
138			ブナ						
139			ミズナラ						
140			ウラジロガシ						
141			コナラ						
142			ミズコナラ						
143		ニレ科	コバノチョウセンエノキ				県CR+EN		
144			エゾエノキ						
145			エノキ						
146			ハルニレ				県NT		
147			オヒョウ						
148			ケヤキ						

真名川ダム 植物確認種リスト

(3/15)

No.	分類群	確認種		調査年度			重要種	外来種	
		科名	種名	平成7年 (1995)	平成10年 (1998)	平成15年 (2003)			
149	(種子植物門 被子植物亜門 双子葉植物綱 離弁花亜綱)	クワ科	ヒメコウゾ						
150			コウゾ						
151			クワクサ						
152			カナムグラ						
153			マグワ						
154			ヤマグワ						
155			イラクサ科	カラムシ					
156				メヤブマオ					
157				アカソ					
158				ヤマトキホコリ					
159		ウワバミソウ							
160		ムカゴイラクサ							
161		ミヤマイラクサ							
162		ミス							
163		アオミス							
164		ビャクダン科		ツクバネ					
165		ヤドリギ科	ヤドリギ						
166		タデ科	ミスヒキ						
167			ハルトラノオ					公園	
168			サクラタデ						
169			ミヤマタニソバ						
170			ヤナギタデ						
171	オオイヌタデ								
172	イヌタデ								
173	オオネバリタデ								
174	タニソバ								
175	イシミカワ								
176	ハナタデ								
177	ナガボハナタデ								
178	ボントクタデ								
179	サナエタデ								
180	ママコノシリヌグイ								
181	アキノウナギツカミ								
182	ミソソバ								
183	オオミソソバ								
184	ヤマミソソバ								
185	イタドリ								
186	ベニイタドリ								
187	ケイタドリ								
188	スイバ								
189	ヒメスイバ							外来種	
190	ナガバギシギシ							外来種	
191	ギシギシ								
192	ノダイオウ						NT、県VU		
193	マダイオウ								
194	トガマダイオウ								
195	エソノギシギシ							要注意	
196	ヤマゴボウ科		ヨウシュヤマゴボウ					外来種	
197	ザクロソウ科		ザクロソウ						
198	スベリヒユ科		スベリヒユ						
199	ナデシコ科		ノミノツツリ						
200		オランダミミナグサ					外来種		
201		ミミナグサ							
202		フシグロセンノウ							
203		オオヤマフスマ					県NT		
204		ツメクサ							
205		ムシトリナデシコ					外来種		
206		フシグロ							
207		ケフシグロ							
208		ノミノフスマ							
209		ウシハコベ							
210		サウハコベ							
211		オオサウハコベ							
212		コハコベ					外来種		
213		オオヤマハコベ							
214		ミドリハコベ							
215		ミヤマハコベ							
216	アカザ科	シロザ							
217	ヒユ科	ヒカゲイノコスチ							
218		ヒナタイノコスチ							
219		イヌヒユ							
220		アオヒユ					外来種		
221	モクレン科	ホオノキ							
222		タムシバ							

真名川ダム 植物確認種リスト

(4/15)

No.	分類群	確認種		調査年度			重要種	外来種			
		科名	種名	平成7年 (1995)	平成10年 (1998)	平成15年 (2003)					
223	(種子植物門 被子植物亜門 双子葉植物綱 離弁花亜綱)	マツバサ科	サネカズラ								
224			マツバサ								
225		クスノキ科		ヤマコウバイ							
226				ダンコウバイ							
227				ウスゲクロモジ							
228				クロモジ							
229				オオバクロモジ							
230				アブラチャン							
231				ケアブラチャン							
232				シロモジ							
233				ケシロモジ							
234				フサザクラ科		フサザクラ					
235						ウラジロフサザクラ					
236		カツラ科		カツラ							
237		キンポウゲ科		ニリンソウ							
238				イチリンソウ							
239				キクザキイチゲ							
240				シロバナキクザキイチゲ							
241				ヤマオダマキ							
242				キケンショウマ							
243				イヌショウマ							
244				サラシナショウマ							
245				ボタンヅル							
246	クサボタン										
247	センニンソウ										
248	トリガタハンショウヅル										
249	タチクサボタン										
250	オウレン										
251	セリバオウレン										
252	ウマノアシガタ										
253	イブキキンポウゲ										
254	キツネノボタン										
255	カラマツソウ										
256	アキカラマツ										
257	メギ科		ルイヨウボタン								
258			キバナイカリソウ								
259			トキワイカリソウ								
260	アケビ科		アケビ								
261			ミツバアケビ								
262			ゴウアケビ								
263	ツツラフジ科		アオツツラフジ								
264			コウモリカズラ								
265			ツツラフジ								
266	ドクダミ科		ドクダミ								
267	センリョウ科		ヒトリシズカ								
268			フタリシズカ								
269	ウマノスズクサ科		フタバアオイ				県要注目				
270			ウスバサイシン				県要注目				
271	ボタン科		ヤマシャクヤク				NT、県VU				
272	マタタビ科		サルナシ								
273			サビサルナシ								
274			ウラジロマタタビ								
275			マタタビ								
276	ツバキ科		コキバツツバキ								
277			ヒサカキ								
278			ナツツバキ								
279			チャノキ								
280	オトギリソウ科		オトギリソウ								
281			コケオトギリ								
282			コゴメバオトギリ					外来種			
283			サワオトギリ								
284	ケシ科		クサノオウ								
285			ムラサキケマン								
286			ヤマエンゴサク								
287			ヒメエンゴサク								
288			ミヤマキケマン								
289			タケニグサ								
290			ケナシチャンパギク								
291			アブラナ科		シロイヌナズナ					外来種	
292	ハクサンハタザオ										
293	ヤマハタザオ										
294	ニシノオオタネツケバナ										
295	タネツケバナ										
296			タチタネツケバナ								

真名川ダム 植物確認種リスト

(5/15)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種	
	分類群	科名	種名	平成7年 (1995)	平成10年 (1998)	平成15年 (2003)			
297	(種子植物門 被子植物亜門 双子葉植物綱 離弁花亜綱)	(アブラナ科)	ミチタネツケバナ					外来種	
298			ジャニンジン						
299			コンロンソウ						
300			オオバタネツケバナ						
301			マルバコンロンソウ						
302			ワサビ						
303			マメゲンバイナズナ						外来種
304			イヌガラシ						
305			スカシタゴボウ						
306			マンサク科	マンサク					
307		マルバマンサク							
308		ウラジロマルバマンサク							
309		ベンケイソウ科	ツメレンゲ					NT、県CR+EN	
310			コモチマンネングサ						
311			ツルマンネングサ						外来種
312			ヒメレンゲ						
313		ユキノシタ科	アカショウマ						
314			トリアシショウマ						
315			クサアジサイ						
316			ホクリクネコノメソウ						
317			ツルネコノメソウ						
318			ネコノメソウ						
319			ヤマネコノメソウ						
320			ヒダボタン						
321			ウツギ						
322			ピロードウツギ						
323			ヒメウツギ						
324			コアジサイ						
325			タマアジサイ						
326			ヤマアジサイ						
327			エゾアジサイ						
328			ノリウツギ						
329			ゴトウツル						
330			コチャルメルソウ						
331			バイカウツギ						
332			ケバイカウツギ						
333			シコクウツギ						
334	ヤグルマソウ								
335	ダイヤモンドソウ								
336	ウチワダイヤモンドソウ								
337	カエデダイヤモンドソウ								
338	ハルユキノシタ								
339	ユキノシタ								
340	イワガラミ								
341	バラ科	キンミズヒキ							
342		ヒメキンミズヒキ							
343		ザイフリボク							
344		ヤマブキショウマ							
345		ヘビイチゴ							
346		ヤブヘビイチゴ							
347		オニシモツケ							
348		オランダイチゴ						外来種	
349		オオダイコンソウ					県VU		
350		ダイコンソウ							
351		ヤマブキ							
352		ズミ							
353		オオウラジロノキ							
354		ミツバツチグリ							
355		オヘビイチゴ							
356		エチゴキジムシロ							
357		カマツカ							
358		ケカマツカ							
359		ミヤマチョウジザクラ							
360		イヌザクラ							
361		ウワミズザクラ							
362		キンキマメザクラ							
363		ヤマザクラ							
364		エドヒガン							
365		エゾヤマザクラ							
366		カスミザクラ							
367		ミチノクナシ							
368		ノイバラ							
369		ウスアカノイバラ							
370		ミヤコイバラ							

真名川ダム 植物確認種リスト

(6/15)

No.	分類群	確認種		調査年度			重要種	外来種			
		科名	種名	平成7年 (1995)	平成10年 (1998)	平成15年 (2003)					
371	(種子植物門 被子植物亜門 双子葉植物綱 離弁花亜綱)	(バラ科)	クマイチゴ								
372			ミヤマフユイチゴ								
373			クサイチゴ								
374			バライチゴ								
375			ニガイチゴ								
376			ミヤマニガイチゴ								
377			ナガバモミジイチゴ								
378			モミジイチゴ								
379			キクバキイチゴ								
380			ナワシロイチゴ								
381			コバノフユイチゴ								
382			エビガライチゴ								
383			アズキナシ								
384			ナナカマド								
385			ナンキンナナカマド								
386			ウラジロノキ								
387			シモツケ								
388			ユキヤナギ						外来種		
389			マメ科		クサネム						
390					ネムノキ						
391					イタチハギ						要注意
392					ヤブマメ						
393					ウスバヤブマメ						
394					ホドイモ						
395					カワラケツメイ						
396					ユクノキ						
397					エニシダ						外来種
398					フジカンゾウ						
399					アレチヌスビトハギ						外来種
400					ヌスビトハギ						
401					ヤブハギ						
402					シロバナヌスビトハギ						
403					ノササゲ						
404					ツルマメ						
405					コマツナギ						
406					マルバヤハズソウ						
407					ヤハズソウ						
408					ヤマハギ						
409		キハギ									
410		メドハギ									
411		ネコハギ									
412		ピッチュウヤマハギ									
413		タテヤマハギ									
414		ミヤコグサ									
415	イヌエンジュ										
416	ハネミイヌエンジュ										
417	ケハネミイヌエンジュ										
418	クス										
419	ハリエンジュ								要注意		
420	クララ										
421	ムラサキツメクサ								外来種		
422	シロツメクサ								外来種		
423	モモイロシロツメクサ										
424	ヤハズエンドウ										
425	ナンテンハギ										
426	ヤブツルアズキ										
427	フジ										
428	カタバミ科		カタバミ								
429			アカカタバミ								
430			エゾタチカタバミ								
431			ミヤマカタバミ								
432	フウロソウ科		ゲンショウコ								
433			ミツバフウロ								
434	トウダイグサ科		エノキグサ								
435			オオニシキソウ					外来種			
436			タカトウダイ								
437			ナツトウダイ								
438			コニシキソウ						外来種		
439			アカメガシワ								
440			ヤマアイ								
441			ヒメミカンソウ								
442	ユズリハ科		ユズリハ								
443			エゾユズリハ								
444	ミカン科		マツカゼソウ								

真名川ダム 植物確認種リスト

(7/15)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種	
	分類群	科名	種名	平成7年 (1995)	平成10年 (1998)	平成15年 (2003)			
445	(種子植物門 被子植物亜門 双子葉植物綱 離弁花亜綱)	(ミカン科)	コクサギ						
446			キハダ						
447			オオバノキハダ						
448			ツルシキミ						
449			カラスザンショウ						
450			サンショウ						
451			ヤマアサクラザンショウ						
452			アサクラザンショウ						
453			イヌザンショウ						
454			ニガキ科	シンジュ					外来種
455				ニガキ					
456			ヒメハギ科	ヒメハギ					
457			ドクウツギ科	ドクウツギ					
458			ウルシ科	ツタウルシ					
459				ヌルデ					
460				ヤマハゼ					
461				ヤマウルシ					
462			カエデ科	チドリノキ					
463				ミツデカエデ					
464				ウリカエデ					
465				ヒトツバカエデ					
466	ハウチワカエデ								
467	コミネカエデ								
468	ウラゲエンコウカエデ								
469	エンコウカエデ								
470	オニイタヤ								
471	エゾイタヤ								
472	アカイタヤ								
473	メグスリノキ								
474	テツカエデ								
475	オオモミジ								
476	ヤマモミジ								
477	ウリハダカエデ								
478	コハウチワカエデ								
479	ヒナウチワカエデ								
480	トチノキ科	トチノキ							
481		ウラゲトチノキ							
482	アワブキ科	アワブキ							
483		ミヤマハハソ							
484	ツリフネソウ科	キツリフネ							
485		ツリフネソウ							
486	モチノキ科	イヌツゲ							
487		ハイイヌツゲ							
488		ヒメモチ							
489		アオハダ							
490		ソヨゴ							
491		クロソヨゴ							
492	ニシキギ科	ツルウメモドキ							
493		オニツルウメモドキ							
494		オオツルウメモドキ							
495		コマユミ							
496		ツルマサキ							
497		ムラサキマユミ							
498		サワダツ							
499		ツリバナ							
500		エゾツリバナ							
501		マユミ							
502		カントウマユミ							
503	ミツバウツギ科	ゴンズイ							
504	クロウメモドキ科	ミツバウツギ							
505		イソノキ							
506		ケケンボナシ							
507		クロウメモドキ							
508		コバノクロウメモドキ							
509		ブドウ科	ノブドウ						
510	キレバノブドウ								
511	ツタ								
512	ヤマブドウ								
513	エビヅル								
514	キクバエビヅル								
515	サンカクヅル								
516	シナノキ科	シナノキ							
517	グミ科	トウグミ							
518		アキグミ							



真名川ダム 植物確認種リスト

(8/15)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種			
	分類群	科名	種名	平成7年 (1995)	平成10年 (1998)	平成15年 (2003)					
519	(種子植物門 被子植物亜門 双子葉植物綱 離弁花亜綱)	スミレ科	エイザンスミレ				県NT				
520			タチツボスミレ								
521			コタチツボスミレ								
522			アオイスミレ								
523			コスミレ								
524			オオタチツボスミレ								
525			マキノスミレ								
526			スミレ								
527			アカネスミレ						県要注目		
528			フモトスミレ								
529			ナガハシスミレ								
530			スミレサイシン								
531			ツボスミレ								
532			アギスミレ								
533			シハイスミレ								
534			ノジスミレ								
					viola属の一種						
535			キブシ科	キブシ	キブシ						
536					ケキブシ						
537			ウリ科	アマチャヅル	アマチャヅル						
538					スズメウリ						
539					ミヤマニガウリ						
540					アレチウリ						特定
541			ミソハギ科	ミソハギ	ミソハギ						
542					キカラスウリ						
543			アカバナ科	タニタデ	タニタデ						
544					ミズタマソウ						
545					イワアカバナ						
546					アカバナ						
547					チョウジタデ						
548					メマツヨイグサ						要注意
549					オオマツヨイグサ						外来種
550			アリノトウグサ科	アリノトウグサ							
551			ウリノキ科	ウリノキ							
552	ミズキ科	ヒメアオキ	ヒメアオキ								
553			ヤマボウシ								
554			ベニヤマボウシ								
555			ミズキ								
556			クマノミズキ								
557			ハナイカダ								
558			ケヤマウコギ								
559			オカウコギ								
560			コシアブラ								
561			ヤマウコギ								
562	ウコギ科	ウド	ウド								
563			タラノキ								
564			メダラ								
565			タカノツメ								
566			キツタ								
567			ハリギリ								
568			トチバニンジン								
569			セリ科	ノダケ	ノダケ						
570					ハナビゼリ					県要注目	
571					シラネセンキュウ						
572	シシウド										
573	ミヤマシシウド										
574	ジャク										
575	セントウソウ										
576	ミツバ										
577	ウシミツバ										
578	オオハナウド										
579	ノチドメ										
580	オオチドメ										
581	チドメグサ										
582	ヒメチドメ										
583	セリ										
584	ヤブニンジン										
585	ウマノミツバ										
586	カノツメソウ										
587	ヒカゲミツバ										
588	ヤブジラミ										
589	オヤブジラミ										
590	種子植物門	イワウメ科	イワウチワ								
591	被子植物亜門		トクワカソウ								

真名川ダム 植物確認種リスト

(9/15)

No.	分類群	確認種		調査年度			重要種	外来種
		科名	種名	平成7年 (1995)	平成10年 (1998)	平成15年 (2003)		
592	双子葉植物綱 合弁花亜綱	リョウブ科	リョウブ					
593		イチヤクソウ科	イチヤクソウ					
594		ツツジ科	イワナシ				公園	
595			ネジキ					
596			ウスギヨウラク					
597			サツキ				県要注目	
598			ユキグニミツバツツジ					
599			ヤマツツジ					
600			ホツツジ					
601			ウスノキ					
602			アキシバ					
603			ケアキシバ					
604			ナツハゼ					
605			オオバスのノキ					
606			ヤブコウジ科	ヤブコウジ				
607			サクラソウ科	オオトラノオ				
608				ヌマトラノオ				
609				ナガエコナスビ				
610				コナスビ				
611			カキノキ科	カキノキ				
612				ヤマガキ				
613			エゴノキ科	エゴノキ				
614				ハクウンボク				
615			ハイノキ科	サワフタギ				
616				タンナサワフタギ				
617			モクセイ科	アラゲアオダモ				
618				アオダモ				
619				ヤマトアオダモ				
620				ウラゲオオトネリコ				
621				マルバアオダモ				
622				シオジ				県VU
623				イボタノキ				
624				ミヤマイボタ				
625				エソイボタ				
626			リンドウ科	フデリンドウ				
627				アケボノソウ				
628				ツルリンドウ				
629			キョウチクトウ科	テイカカズラ				
630			ガガイモ科	イケマ				
631				ガガイモ				
632				オオカモメツル				
633			アカネ科	キクムグラ				
634				キヌタソウ				
635				オオバナヤエムグラ				
636				ヤエムグラ				
637				ヨツバムグラ				
638				オククルマムグラ				
639				オオハシカグサ				
640				ハシカグサ				
641				ツルアリドシ				
642				ヘクソカズラ				
643				ツツナガヤイトバナ				
644				アカネ				
645			ヒルガオ科	ヒルガオ				
646				ネナシカズラ				
647				アメリカネナシカズラ				要注意
648				マルバルコウ				外来種
649			ムラサキ科	ハナイバナ				
650				ヤマルリソウ				
651				ミズタヒラコ				
652				コシジタヒラコ				
653				キュウリグサ				
654			クマツヅラ科	ムラサキシキブ				
655				カリガネソウ				
656				クサギ				
657			シソ科	カワミドリ				
658			キランソウ					
659			ジュウニキランソウ					
660			ニシキゴロモ					
661			ジャコウソウ					
662			クルマバナ					
663			ヤマクルマバナ					
664			トウバナ					
665			イヌトウバナ					

真名川ダム 植物確認種リスト

(10/15)

No.	分類群	確認種		調査年度			重要種	外来種		
		科名	種名	平成7年 (1995)	平成10年 (1998)	平成15年 (2003)				
666	種子植物門 被子植物亜門 双子葉植物綱 合弁花亜綱	(シソ科)	ヤマトウバナ							
667			ヒロハヤマトウバナ							
668			ミヤマトウバナ							
669			ナギナタコウジュ							
670			フトボナギナタコウジュ							
671			カキドオシ							
672			ヒメオドリコソウ						外来種	
673			デンニンソウ							
674			フジデンニンソウ							
675			シロネ							
676			ヒメサルダヒコ							
677			コシロネ							
678			ラショウモンカズラ							
679			ヒメジソ							
680			イヌコウジュ							
681			レモンエゴマ							
682			ウツボグサ							
683			ヤマハッカ							
684			サンインヒキオコシ							
685			クロバナヒキオコシ							
686			アキギリ						公園	
687			ツクシタツナミソウ							
688			デワノタツナミソウ							
689			ヤマタツナミソウ							
690			イヌゴマ							
691			ツルニガクサ							
692			ナス科	イガホオズキ						
693				ホオズキ						外来種
694				ワルナスビ						要注意
695				ヤマホロシ						
696				ヒヨドリジョウゴ						
697			ゴマノハグサ科	マルバノホロシ						
698				サウトウガラシ						
699				アゼトウガラシ						
700				アゼナ						
701				ムラサキサギゴケ						
702				トキワハゼ						
703				ミゾホオズキ						
704				コシオガマ						
705	ヒナノウスツボ									
706	サツキヒナノウスツボ							県VU		
707	タチイヌノフグリ							外来種		
708	ムシクサ									
709	オオイヌノフグリ						外来種			
710	ノウゼンカズラ科	キリ								
711	キツネノマゴ科	ハグロソウ								
712	イワタバコ科	イワタバコ						公園		
713	ハエドクソウ科	ハエドクソウ								
714		ナガバハエドクソウ								
715	オオバコ科	オオバコ								
716		ヘラオオバコ						要注意		
717	スイカズラ科	ツクバネウツギ								
718		ケツクバネウツギ								
719		スイカズラ								
720		ニワトコ								
721		オオバニワトコ								
722		オオニワトコ								
723		ガマズミ								
724		コバノガマズミ								
725		オオカメノキ								
726		オトコヨウゾメ						県要注目		
727		ケナシヤブデマリ								
728		ミヤマガマズミ								
729		オオミヤマガマズミ								
730		タニウツギ								
731	オミナエシ科	オトコエシ								
732		ツルカノコソウ								
733	キキョウ科	ソバナ								
734		ツリガネニンジン								
735		シロバナツリガネニンジン								
736		ホタルブクロ								
737		ヤマホタルブクロ						公園		
738		ツルニンジン								
739		ミゾカクシ								

真名川ダム 植物確認種リスト

(11/15)

No.	分類群	確認種		調査年度			重要種	外来種			
		科名	種名	平成7年 (1995)	平成10年 (1998)	平成15年 (2003)					
740	種子植物門 被子植物亜門 双子葉植物綱 合弁花亜綱	(キキョウ科)	タニギキョウ								
741			シデシャジン				県要注目				
742		キク科		ノブキ							
743				オクモミジハグマ							
744				キッコウハグマ							
745				ブタクサ					要注意		
746				ヤマハハコ							
747				ホソバナヤマハハコ							
748				カワラハハコ							
749				チョウジギク					公園		
750				ヒメヨモギ							
751				ヨモギ							
752				オトコヨモギ							
753				イヌヨモギ							
754				オオヨモギ							
755				ホソバコンギク							
756				シロヨメナ							
757				ノコンギク							
758				ゴマナ							
759				シロバナノコンギク							
760				コウゼンギク						外来種	
761				アメリカセンダングサ						要注意	
762				モミジガサ							
763				ウスゲタマブキ							
764				オオカニコウモリ							
765				タイミンガサ							
766				ガンクビソウ							
767				サジガンクビソウ							
768				トキンソウ							
769				フランスギク						外来種	
770				ノアザミ							
771				カガノアザミ						県VU、公園	
772				ハクサンアザミ						公園	
773				ホッコクアザミ							
774				ケハクサンアザミ							
775				アズマヤマアザミ							
776				エチゼンアザミ							
777				サワアザミ							
						cirsium属の一種					
778						アレチノギク					外来種
779						オオアレチノギク					要注意
780						ベニバナボロギク					外来種
781			リュウノウギク								
782			タカサブロウ					外来種			
783			ダンドボロギク					外来種			
784			ヒメムカシヨモギ					要注意			
785			ハルジオン					要注意			
786			ヨツバヒヨドリ								
787			ヒヨドリバナ								
788			サワヒヨドリ								
789			ハハコグサ								
790			チチヨグサモドキ					外来種			
791			ブタナ					要注意			
792			オオチシバリ								
793			ニガナ								
794			ハナニガナ								
795			ノニガナ				県VU				
796			イワニガナ								
797			キクバチシバリ								
798			コウガギク								
799			アキノゲシ								
800			ホソバアキノゲシ								
801			ヤマニガナ								
802			センボンヤリ								
803			オタカラコウ				公園				
804			ミヤマヨメナ								
805			クルマバハグマ								
806			フキ								
807			コウゾリナ								
808			オオハンゴンソウ					特定			
809			ヒメヒゴタイ				VU、県CR+EN				
810			ハンゴンソウ								
811			ノボロギク					外来種			
812			タムラソウ								

真名川ダム 植物確認種リスト

(12/15)

No.	分類群	確認種		調査年度			重要種	外来種	
		科名	種名	平成7年 (1995)	平成10年 (1998)	平成15年 (2003)			
813	種子植物門 被子植物亜門 双子葉植物綱 合弁花亜綱	(キク科)	コメナモミ						
814			メナモミ						
815			セイタカアワダチソウ						要注意
816			アキノキリンソウ						
817			オニノゲシ						外来種
818			ノゲシ						
819			ヒメジョオン						要注意
820			ボウズヒメジョオン						
821			ヘラバヒメジョオン						外来種
822			ヤブレガサ						
823			ヤマボクチ						
824			オヤマボクチ						
825			セイタカタンポポ						
826			アカミタンポポ						要注意
827			セイヨウタンポポ						要注意
828			イガオナモミ						外来種
829			オオオナモミ						要注意
830			ヤクシソウ						
831			オニタビラコ						
			キク科の一種						
832	種子植物門 被子植物亜門 単子葉植物綱	オモダカ科	ヘラオモダカ						
833		ユリ科	ノギラン						
834		ノビル							
835		シライトソウ							
836		ホウチャクソウ							
837		チゴユリ							
838		エダウチチゴユリ							
839		カタクリ						公園	
840		ショウジョウバカマ						公園	
841		ヤブカンゾウ							
842		オオバギボウシ							
843		オオウバユリ							
844		ササユリ							
845		ジャノヒゲ							
846		ツクパネソウ							
847		ナルコユリ							
848		ミヤマナルコユリ							
849		オオナルコユリ							
850		アマドコロ							
851		ツルボ							
852		ユキザサ							
853		サルメ							
854		サルトリイバラ							
855		タチシオデ							
856		シオデ							
857		ヤマカシュウ							
858		トゲナシヤマカシュウ							
859		マルバサンキライ						県CR+EN	
860		ヤマジノホトギス							
861		タマガワホトギス							
862		エンレイソウ						公園	
863		ヒガンバナ科	ラッパズイセン					外来種	
864		ヤマノイモ科	タチドコロ						
865		ヤマノイモ							
866		ウチウドコロ							
867		キクバドコロ							
868		オニドコロ							
869		アヤメ科	ハナショウブ						
870		シャガ							
871		カキツバタ						NT、県VU	
872		キショウブ						要注意	
873		アヤメ							
874		ヒメヒオウギズイセン						外来種	
875		イグサ科	ハナビゼキショウ						
876		ヒロハノコウガイゼキショウ							
877		イ							
878		コウガイゼキショウ							
879	クサイ								
880	スズメノヤリ								
881	ヤマスズメノヒエ								
882	ヌカボシソウ								
883	ツユクサ科	ツユクサ							
884	ケツユクサ								
885	イボクサ								

真名川ダム 植物確認種リスト

(13/15)

No.	分類群	確認種		調査年度			重要種	外来種
		科名	種名	平成7年 (1995)	平成10年 (1998)	平成15年 (2003)		
886	種子植物門 被子植物亜門 単子葉植物綱	ホシクサ科 イネ科	ヒロハイヌヒゲ					
887			アオカモジグサ					
888			タチカモジグサ					
889			カモジグサ					
890			コヌカグサ					外来種
891			ヤマヌカボ					
892			ヌカボ					
893			クロコヌカグサ					外来種
894			スズメノテッポウ					
895			ノハラスズメノテッポウ					外来種
896			ハルガヤ					外来種
897			コブナグサ					
898			トダシバ					
899			ウスゲトダシバ					
900			ヤマカモジグサ					
901			イヌムギ					外来種
902			スズメノチャヒキ					
903			キツネガヤ					
904			ホガエリガヤ					
905			ケノガリヤス					
906			ノガリヤス					
907			ヒメノガリヤス					
908			ヒゲノガリヤス					
909			チョウセンガリヤス					
910			カモガヤ					要注意
911			タツノヒゲ					
912			メヒシバ					
913			コメヒシバ					
914			アキメヒシバ					
915			アブラススキ					
916			イヌビエ					
917			ケイヌビエ					
918			ヒメタイヌビエ					
919			タイヌビエ					
920			オヒシバ					
921			カゼクサ					
922			ニワホコリ					
923			オオニワホコリ					外来種
924			コスズメガヤ					外来種
925			ナルコビエ					
926			オニウシノケグサ					要注意
927			ハガワリトボシガラ					外来種
928			トボシガラ					
929			ヒロハノウシノケグサ					外来種
930			ドジョウツナギ					
931			チガヤ					
932			チゴザサ					
933			エゾノサヤヌカグサ					
934			サヤヌカグサ					
935			コメガヤ					
936			ササガヤ					
937	キタササガヤ							
938	ヒメアシボソ							
939	アシボソ							
940	イブキヌカボ							
941	オオヒゲナガカリヤスモドキ							
942	オギ							
943	ススキ							
944	カリヤス							
945	コシノネズミガヤ							
946	タチネズミガヤ							
947	ネズミガヤ							
948	オオネズミガヤ							
949	ケチヂミザサ							
950	コチヂミザサ							
951	ヌカキビ							
952	オオクサキビ					外来種		
953	スズメノヒエ							
954	チカラシバ							
955	クサヨシ							
956	ヨシ							
957	ツルヨシ							
958	マダケ							
959	ミゾイチゴツナギ							

真名川ダム 植物確認種リスト

(14/15)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種		
	分類群	科名	種名	平成7年 (1995)	平成10年 (1998)	平成15年 (2003)				
960	種子植物門 被子植物亜門 単子葉植物綱	(イネ科)	スズメノカタビラ							
961			ツルスズメノカタビラ					外来種		
962			コイチゴツナギ					外来種		
963			オオイチゴツナギ							
964			ナガハグサ					外来種		
965			イチゴツナギ							
966			オオスズメノカタビラ					外来種		
967			ヒエガエリ							
968			ハイヌメリ							
969			ヌメリグサ							
970			チシマザサ							
971			チマキザサ							
972			クマイザサ							
973			イヌアワ							
974			アキノエノコログサ							
975			コツブキンエノコロ							
976			キンエノコロ							
977			エノコログサ							
978			ムラサキエノコロ							
979			ミヤマアブラスキ							
980			カニツリグサ							
981			ナギナタガヤ						外来種	
982			シバ							
					イネ科の一種					
983				サトイモ科	アシウテンナンショウ				重要注目	
984					コウライテンナンショウ					
985					マムシグサ					
986					ザゼンソウ					
987				ガマ科	ヒメガマ					
988					ガマ					
989				カヤツリグサ科	ハタガヤ					
990					ショウジョウスゲ					
991			アオスゲ							
992			メアオスゲ							
993			ミヤマシラスゲ							
994			ヒメカンスゲ							
995			ナルコスゲ							
996			アゼナルコ							
997			カサスゲ							
998			ミヤマジュズスゲ							
999			シラスゲ							
1000			ピロースゲ							
1001			オクノカンスゲ							
1002			ハバピロースゲ							
1003			マスクサ							
1004			ヤマアゼスゲ							
1005			アイズスゲ							
1006			カワラスゲ							
1007			ヒロバスゲ							
1008			アオバスゲ							
1009			ジュズスゲ							
1010			ヒゴクサ							
1011			テキリスゲ							
1012			ゴウソ							
1013			ヒメシラスゲ							
1014			ホソバカンスゲ							
1015			ミヤマカンスゲ							
1016			オタルスゲ							
1017			コジュズスゲ							
1018			ヒメゴウソ							
1019			タヌキラン							
1020			イトアオスゲ							
1021			コカンスゲ							
1022			アズマナルコ							
1023			タガネソウ							
1024			ニシノホンモンジスゲ							
1025			アゼスゲ							
1026			ヤワラスゲ							
			Carex属の一種							
1027			ナガエスゲ							
1028			チャガヤツリ							
1029			ヒメクゲ							
1030			タマガヤツリ							
1031			アゼガヤツリ							

真名川ダム 植物確認種リスト

(15/15)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種		
	分類群	科名	種名	平成7年 (1995)	平成10年 (1998)	平成15年 (2003)				
1032	種子植物門 被子植物亜門 単子葉植物綱	(カヤツリグサ科)	コゴメガヤツリ							
1033			カヤツリグサ							
1034			ウシクグ							
1035			カワラスガナ							
1036			ミズガヤツリ							
1037			ハリイ							
1038			ヌマハリイ							
1039			シカクイ							
1040			ヒメヒラテンツキ							
1041			テンツキ							
1042			ヒデリコ							
1043			アゼテンツキ							
1044			ヤマイ							
1045			ヒンジガヤツリ							
1046			ホタルイ							
1047			タタラカンガレイ					県CR+EN		
1048			カンガレイ							
1049			サンカクイ							
1050			アブラガヤ							
1051			シデアブラガヤ							
1052			ショウガ科	ミョウガ						
1053			ラン科	エビネ				NT、県VU		
1054				サイハイラン						
1055				シュンラン						
1056				セッコク				県CR+EN、公園		
1057				アケボノシュスラン						
1058				コケイラン						
1059				オオバトソウ						
1060				ネジバナ						
確認種数				839種	884種	844種	42種	78種		
				1060種						

注1)重要種のカテゴリー

VU:「哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物I及び植物IIのレッドリストの見直しについて」(環境省、2008)絶滅危惧 類  
 NT:「哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物I及び植物IIのレッドリストの見直しについて」(環境省、2007)準絶滅危惧 類  
 県CR+EN:「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 - 福井県レッドデータブック(植物編) -」(福井県、2004)絶滅危惧 類  
 県VU:「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 - 福井県レッドデータブック(植物編) -」(福井県、2005)絶滅危惧 類  
 県NT:「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 - 福井県レッドデータブック(植物編) -」(福井県、2006)準絶滅危惧 類  
 県要注目:「福井県の絶滅のおそれのある野生動物 - 福井県レッドデータブック(植物編) -」(福井県、2007)要注目  
 公園:「自然公園法(白山国立公園)」の指定植物

注2)外来種

特定:「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」(平成16年法律第78号)に基づく特定外来生物  
 (第3次指定まで、平成18年9月1日現在)  
 要注意:「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」(平成16年法律第78号)に基づく要注意外来生物  
 (第3次指定まで、平成18年9月1日現在)  
 外来種:以下の資料に掲載の種  
 「外来種ハンドブック」(日本生態学会、2002)  
 「日本帰化植物写真図鑑」(清水矩広・森田弘彦・廣田伸七、2001)  
 「日本の帰化植物」(清水建美、2003)



真名川ダム 鳥類確認種リスト

(1/2)

	確認種			調査年度			重要種	外来種		
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成9年 (1997)	平成14年 (2002)				
1	カイツブリ目	カイツブリ科	カイツブリ							
2	ペリカン目	ウ科	カワウ							
3	コウノトリ目	サギ科	アオサギ							
4	カモ目	カモ科	オシドリ				DD、県NT			
5			マガモ							
6			カルガモ							
7			コガモ							
8			トモエガモ					VU、県VU		
9			ヨシガモ					県NT		
10			ヒドリガモ							
11			オナガガモ							
12			ハシビロガモ							
13			ホシハジロ							
14			キンクロハジロ							
15			カワアイサ					県要注目		
16			タカ目	タカ科	ミサゴ				NT、県CR+EN	
17					トビ					
18	オジロワシ							天、保存、EN、県CR+EN		
19	オオタカ							保存、NT、県CR+EN		
20	ツミ							県NT		
21	ハイタカ							NT、県VU		
22	サシバ							VU、県NT		
23	クマタカ							保存、EN、県CR+EN		
24	イヌワシ							天、保存、EN、県CR+EN		
25	ハヤブサ科	ハヤブサ						保存、VU、県VU		
26	キジ目	キジ科	キジ							
27			ヤマドリ							
28	チドリ目	チドリ科	イカルチドリ				県VU			
29		シギ科	アオシギ							
30	ハト目	ハト科	ドバト					外来種		
31			キジバト							
32			アオバト							
33	カッコウ目	カッコウ科	カッコウ							
34			ツツドリ							
35			ホトギス							
36	フクロウ目	フクロウ科	コノハズク				県NT			
37	ヨタカ目	ヨタカ科	ヨタカ				VU、県VU			
38	ブッポウソウ目	カワセミ科	ヤマセミ				県NT			
39			アカショウビン					県NT		
40			カワセミ							
41	キツツキ目	キツツキ科	アオゲラ							
42			アカゲラ							
43			オオアカゲラ					県NT		
44			コゲラ							
-			キツツキ科の一種							
45	スズメ目	ツバメ科	ツバメ							
46		イワツバメ								
47		セキレイ科	キセキレイ							
48			ハクセキレイ							
49			セグロセキレイ							
50			ピンズイ							
51			サンショウクイ科	サンショウクイ				VU、県VU		
52		ヒヨドリ科	ヒヨドリ							
53		モズ科	モズ							
54		カワガラス科	カワガラス							
55		ミソサザイ科	ミソサザイ							
56		イワヒバリ科	イワヒバリ				県VU			
57		ツグミ科	コマドリ							
58			コルリ							
59			ルリビタキ							
60			ジョウビタキ							
61			ノビタキ							
62			イソヒヨドリ							
63			トラツグミ							
64			クロツグミ							
65			シロハラ							
66			ツグミ							
67			ウグイス科	ヤブサメ						
68				ウグイス						
69				オオヨシキリ						
70		メボソムシクイ								

真名川ダム 鳥類確認種リスト

(2/2)

	確認種			調査年度			重要種	外来種
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成9年 (1997)	平成14年 (2002)		
71	(スズメ目)	(ウグイス科)	センダイムシクイ					
72		ヒタキ科	キビタキ					
73			オオルリ					
74		エナガ科	エナガ					
75		シジュウカラ科	コガラ					
76			ヒガラ					
77			ヤマガラ					
78			シジュウカラ					
79		ゴジュウカラ科	ゴジュウカラ					
80		メジロ科	メジロ					
81		ホオジロ科	ホオジロ					
82			カシラダカ					
83			ミヤマホオジロ					
84			アオジ					
85		アトリ科	アトリ					
86			カワラヒワ					
87			マヒワ					
88			ハギマシコ					
89			ベニマシコ					
90			ウソ					
91			イカル					
92			シメ					
93		ハタオリドリ科	スズメ					
94		ムクドリ科	ムクドリ					
95		カラス科	カケス					
96			ハシボソガラス					
97			ハシブトガラス					
確認種数				10目26科74種	11目27科71種	12目29科60種	21種	1種
				14目35科97種				

注1)重要種のカテゴリ-

天:文化財保護法(文化庁) 天然記念物

保存:種の保存法(環境省) 国内希少野生動植物種

EN:「鳥類、爬虫類、両生類及びその他無脊椎動物のレッドリストの見直しについて」(環境省,2006) 絶滅危惧IB類

VU:「鳥類、爬虫類、両生類及びその他無脊椎動物のレッドリストの見直しについて」(環境省,2006年) 絶滅危惧II類

NT:「鳥類、爬虫類、両生類及びその他無脊椎動物のレッドリストの見直しについて」(環境省,2006) 準絶滅危惧

DD:「鳥類、爬虫類、両生類及びその他無脊椎動物のレッドリストの見直しについて」(環境省,2006) 情報不足

県CR+EN:「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(動物編)-」(福井県,2002) 絶滅危惧I類

県VU:「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(動物編)-」(福井県,2002) 絶滅危惧II類

県NT:「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(動物編)-」(福井県,2002) 準絶滅危惧

県要注目:「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(動物編)-」(福井県,2002) 要注目

注2)外来種

外来種:「外来種ハンドブック」(日本生態学会,2002)掲載種

真名川ダム 両生類確認種リスト

No	確認種			調査年度			重要種	外来種
	目名	科名	種名	平成5年 (1993)	平成12年 (2000)	平成17年 (2005)		
1	サンショウウオ目	サンショウウオ科	ヒダサンショウウオ				NT	
2		イモリ科	イモリ				NT	
3	カエル目	ヒキガエル科	アズマヒキガエル					
4			ナガレヒキガエル				県NT	
-			ヒキガエル属の一種					
5		アマガエル科	アマガエル					
6		アカガエル科	タゴガエル					
7			ヤマアカガエル					
8		アオガエル科	シュレーゲルアオガエル					
9			モリアオガエル					
10			カジカガエル					
確認種数				2目5科6種	2目6科9種	2目5科8種	3種	0種
				2目6科10種				

注)重要種のカテゴリー

NT:「鳥類、爬虫類、両生類及びその他無脊椎動物のレッドリストの見直しについて」(環境省,2006) 準絶滅危惧  
 県NT:「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(動物編)-」(福井県,2002) 準絶滅危惧

真名川ダム 爬虫類確認種リスト

No	確認種			調査年度			重要種	外来種
	目名	科名	種名	平成5年 (1993)	平成12年 (2000)	平成17年 (2005)		
1	カメ目	イシガメ科	イシガメ				DD	
2	トカゲ目	トカゲ科	トカゲ					
3		カナヘビ科	カナヘビ					
4		ヘビ科	タカチホヘビ					県要注
5			シマヘビ					
6			ジムグリ					
7			アオダイショウ					
8			シロマダラ					県要注
9			ヤマカガシ					
10		クサリヘビ科	マムシ					
確認種数				1目4科7種	2目5科9種	2目5科9種	3種	0種
				2目5科10種				

注)重要種のカテゴリー

DD:「鳥類、爬虫類、両生類及びその他無脊椎動物のレッドリストの見直しについて」(環境省,2006) 情報不足  
 県要注目:「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(動物編)-」(福井県,2002) 要注目

真名川ダム 哺乳類確認種リスト

No	確認種			調査年度			重要種	外来種
	目名	科名	種名	平成6年 (1994)	平成12年 (2000)	平成17年 (2005)		
1	モグラ目(食虫目)	モグラ科	ヒミズ					
2			アズマモグラ					
-			モグラ属の一種					
3	コウモリ目(翼手目)	キクガシラコウモリ科	キクガシラコウモリ					
4		ヒナコウモリ科	モモジロコウモリ				県要注	
-			ヒナコウモリ科の一種					
-			コウモリ目(翼手目)の一種					
5	サル目(霊長目)	オナガザル科	ニホンザル					
6	ウサギ目	ウサギ科	ノウサギ					
7	ネズミ目(齧歯目)	リス科	ニホンリス					
8			モモンガ				県NT	
9			ムササビ					
-			リス科の一種					
10			ネズミ科	スミスネズミ				
11		アカネズミ						
12		ヒメネズミ						
13		カヤネズミ						
14		ハツカネズミ						外来種
-		ネズミ科の一種						
15	ネコ目(食肉目)	クマ科	ツキノワグマ					
16		イヌ科	タヌキ					
17			キツネ					
18		イタチ科	テン					
19			イタチ					
-			イタチ属の一種					
20			アナグマ					
21	ジャコウネコ科	ハクビシン					外来種	
22	ウシ目(偶蹄目)	イノシシ科	イノシシ					
23		シカ科	ホンドジカ					
24		ウシ科	カモシカ				特天	
確認種数				6目9科14種	7目12科18種	7目14科19種	3種	2種
				7目14科24種				

注1)重要種のカテゴリー

特天:文化財保護法(文化庁) 特別天然記念物

県NT:「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(動物編)-」(福井県, 2002) 準絶滅危惧

県要注目:「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(動物編)-」(福井県, 2002) 要注目

注2)外来種

外来種:「外来種ハンドブック」(日本生態学会, 2002)掲載種

真名川ダム 陸上昆虫類確認種リスト

(1/30)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成11年 (1997)	平成16年 (2004)		
1	クモ目	ウスグモ科	マネキグモ					
2		ユウレイグモ科	ユウレイグモ					
3		タナグモ科	クサグモ					
4			コクサグモ					
5			クロヤチグモ					
6			ヨドヤチグモ					
7		コガネグモ科	キザハシオニグモ					
8			ナカムラオニグモ					
9			ヌサオニグモ					
10			ヤマイロオニグモ					
11			イシサウオニグモ					
12			コゲチャオニグモ					
13			ツノオニグモ					
14			ヤマオニグモ					
15			ハラピロミドリオニグモ					
16			ムツボシオニグモ					
17			ナガコガネグモ					
18			コガタコガネグモ					
19			キンナガコミグモ					
20			コミグモ					
21			ヨツデコミグモ					
22			オオトリファンダマシ					
23			ヨツボシジョウジョウグモ					
24			シロスジジョウジョウグモ					
25			ゴマジロオニグモ					
26			ヤマシロオニグモ					
27			サツマノミダマシ					
28			カラフトオニグモ					
29		ハタケグモ科	ハタケグモ					
30			ヤマハタケグモ					
31		サラグモ科	ニセアカムネグモ					
32			チビサラグモ					
33			クスマサラグモ					
34			アシナガサラグモ					
35			ユノハマサラグモ					
36		コモリグモ科	ウツキコモリグモ					
37			ハリグモコモリグモ					
38			クラークコモリグモ					
39			カイソクコモリグモ					
40			チビコモリグモ					
41			キバラコモリグモ					
42		キシダグモ科	スジフトハシリグモ					
43			スジアカハシリグモ					
44			イオウイロハシリグモ					
45			アズマキシダグモ					
46		アシナガグモ科	オオシロカネグモ					
47			コシロカネグモ					
48			キララシロカネグモ					
49			キンヨウグモ					
50			タニマドヨウグモ					
51			メガネドヨウグモ					
52			ジョウロウグモ					
53			トガリアシナガグモ					
54			ヤサガタアシナガグモ					
55			アシナガグモ					
56			シナノアシナガグモ					
57			ウロコアシナガグモ					
58		ヒメグモ科	カグヤヒメグモ					
59			オオヒメグモ					
60			アシフトヒメグモ					
61			オナガグモ					
62			ヤリグモ					
63			キボシヒメグモ					
64			ボカシミジグモ					
65			ムラクモヒシガタグモ					
66			ハラキヒメグモ					
67			タカユヒメグモ					
68		イツツグモ科	イツツグモ					
69		フクログモ科	アシナガコマチグモ					
70			カバキコマチグモ					
71			ヤマトコマチグモ					
72			ヤサコマチグモ					
73			ヤマトフクログモ					
74			ハマキフクログモ					
75			トビイロフクログモ					
76			ムナアカフクログモ					
77		シボグモ科	シボグモ					
78		ワシグモ科	フタホシテオノグモ					
79			エビチャヨリメケムリグモ					
80			ヤマヨリメケムリグモ					
81			メキリグモ					
82		アシダカグモ科	コアシダカグモ					
83		エビグモ科	キンイロエビグモ					
84			キエビグモ					
85			アサヒエビグモ					
86			スジシャコグモ					
87			シャコグモ					
88		ハエトリグモ科	ネコハエトリ					
89			マミジロハエトリ					
90			チビクロハエトリ					

真名川ダム 陸上昆虫類確認種リスト

(2/30)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種			
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成11年 (1997)	平成16年 (2004)					
91	クモ目	(ハエトリグモ科)	ヤハズハエトリ								
92			オスクロハエトリ								
93			ヨダンハエトリ								
94			ヤサアリグモ								
95			アリグモ								
96			チャイロアサヒハエトリ								
97			ムロテハエトリ(マガネアサヒハエトリ)								
98			キアシハエトリ								
99			メガネアサヒハエトリ								
100			デーニツハエトリ								
101			イナズマハエトリ(キツネハエトリ)								
102			カラスハエトリ								
103			アオオビハエトリ								
104			ウススジハエトリ								
105			カニグモ科		コハナグモ						
106					アシナガカニグモ						
107					アマギエビスグモ						
108					ハナグモ						
109					ワカバグモ						
110	ガザミグモ										
111	チクニエビスグモ										
112	フナジグモ										
113	トラフカニグモ										
114	セマルトラフカニグモ										
115	ヤミロカニグモ										
116	カラカニグモ										
117	アズマカニグモ										
118	チシマカニグモ										
119					オオヤミロカニグモ						
120	カゲロウ目	ヒラタカゲロウ科	シロタニガワカゲロウ								
121			エルモンヒラタカゲロウ								
122			チラカゲロウ科	チラカゲロウ							
123		モンカゲロウ科	フタスジモンカゲロウ								
124	トンボ目	アオイトトンボ科	オオアオイトトンボ								
125			カワトンボ科	ハグロトンボ							
126		ミヤマカワトンボ									
127		カワトンボ									
128		ムカシトンボ科	ムカシトンボ						県要注目		
129		ヤンマ科	ルリボシヤンマ								
130			オオルリボシヤンマ								
131			ミルンヤンマ								
132		サナエトンボ科	ヒメクロサナエ								
133		ムカシヤンマ科	ムカシヤンマ								
134		オニヤンマ科	オニヤンマ								
135		エソトンボ科	コヤマトンボ								
136		トンボ科		ハラビロトンボ							
137				シオカラトンボ							
138				シオヤトンボ							
139	オオシオカラトンボ										
140	ウスバキトンボ										
141	コシアキトンボ										
142	コノシメトンボ										
143	ナツアカネ										
144	マユタテアカネ										
145	アキアカネ										
146	ノシメトンボ										
147			ミヤマアカネ								
148	カマキリ目	ヒメカマキリ科	ヒメカマキリ								
149			カマキリ科	コカマキリ							
150				オオカマキリ							
151	ハサミムシ目	クロハサミムシ科	クロハサミムシ								
152			クギヌキハサミムシ科	コブハサミムシ							
153				キバネハサミムシ							
154			オオハサミムシ								
155	カワゲラ目	オナシカワゲラ科	オナシカワゲラ								
156			カワゲラ科	キアシクロフタツメカワゲラ							
157				オオメコガタフタツメカワゲラ							
158				カミムラカワゲラ							
159				マエキフタツメカワゲラモドキ							
160				クロフタツメカワゲラモドキ							
161				オオクラカケカワゲラ							
162				キベリトウゴウカワゲラ							
163	バッタ目	コロギス科		ハネナシコロギス							
164			コロギス								
165		カマドウマ科	クチキウマ								
166			マダラカマドウマ								
167			ハヤシウマ								
168			モリスミウマ								
169			Diestrammena属の一種								
170		キリギリス科		コバネヒメギス							
171				ウスイロササキリ							
172				オナガササキリ							
173				ホシササキリ							
174	エソツユムシ										
175	セスジツユムシ										
176	ヒメギス										
177	イブキヒメギス										
178	キリギリス										
179			ハタケノウマオイ								

真名川ダム 陸上昆虫類確認種リスト

(3/30)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種		
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成11年 (1997)	平成16年 (2004)				
180	(バッタ目)	(キリギリス科)	ヤマウマオイ							
181			ヤマクダマキモドキ							
182			ヒメクサキリ							
183			クサキリ							
184			ヒメツユムシ							
185			ツユムシ							
186			アシグロツユムシ							
187			ヘリグロツユムシ							
188			ホソクビツユムシ							
189			ヤブキリ							
190		ヒトコブササキリモドキ								
191		ササキリモドキ								
192		コオロギ科	マダラスズ							
193			ヒゲシロスズ							
194			カワラスズ						県要注目	
195			シバラスズ							
196			ヤマトヒバリ							
197			ハラオカメコオロギ							
198			モリオカメコオロギ							
199			カンタン							
200	ヒメスズ									
201	エソスズ									
202	ヤチスズ									
203	クマスズムシ									
204	エンマコオロギ									
205	キアシヒバリモドキ									
206	ツツレサセコオロギ									
207	バッタ科	ショウリョウバッタ								
208		マダラバッタ								
209		ヒナバッタ								
210		ヒロバネヒナバッタ								
211		カウラバッタ						県NT		
212		クルマバッタ								
213		トノサマバッタ								
214		ナキイナゴ								
215		ハネナガフキバッタ								
216		コバネイナゴ								
217		イナゴモドキ								
218		ヒメフキバッタ								
219		ミカドフキバッタ								
220		キンキフキバッタ								
221		オンブバッタ科	オンブバッタ							
222		ヒシバッタ科	ハネナガヒシバッタ							
223			コバネヒシバッタ							
224	ハラヒシバッタ									
			Tetrix属の一種							
225	ノミバッタ科	ノミバッタ								
226	ナナフシ目	ナナフシ科	ナナフシモドキ							
227			ヤスマツヒナナフシ							
228			エダナナフシ							
229	カメムシ目	コガシラウカ科	スジコガシラウカ							
230			ハスオビヒシウカ							
231		ヒシウカ科	イボタヒシウカ							
232			ヨモギヒシウカ							
233			ヒシウカ							
234			ヨスジヒシウカ							
235			ウンカ科	セジロウカ						
236				クロバネテラウチウカ						
237		ハネナガウンカ科	アカハネナガウンカ							
238			アヤヘリハネナガウンカ							
239			マダラハネナガウンカ							
240		テングスケバ科	テングスケバ							
241			ツマグロスケバ							
242		アオバハゴロモ科	アオバハゴロモ							
243		マルウンカ科	クサビウンカ							
244			スケバハゴロモ							
245		ハゴロモ科	ベッコウハゴロモ							
246			アミガサハゴロモ							
247		ゲンバイウンカ科	タテスジゲンバイウンカ							
248			ヒシウカモドキ							
249			ヒラタゲンバイウンカ							
250		セミ科	アブラセミ							
251			ミンミンセミ							
252			ニイニイセミ							
253			ヒグラシ							
254			エソセミ							
255	ツノゼミ科	オヒマルツノゼミ								
256		トビイロツノゼミ								
257		モジツノゼミ								
258	アワフキムシ科	シロオビアワフキ								
259		モンキアワフキ								
260		ヒメシロオビアワフキ								
261		コガタアワフキ								
262		マエキアワフキ								
263		ヒメモンキアワフキ								
264		ホシアワフキ								
265		オオアワフキ								
266		マダラアワフキ								
267		ミヤマアワフキ								
268		テングアワフキ								



真名川ダム 陸上昆虫類確認種リスト

(4/30)

No.	目名	確認種		調査年度			重要種	外来種	
		科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成11年 (1997)	平成16年 (2004)			
269	(カメムシ目)	コガシラアワフキ科	コガシラアワフキ						
270		トゲアワフキムシ科	タケウチトゲアワフキ						
271		ヨコバイ科	ツマグロオオヨコバイ						
272			オオヨコバイ						
273			フチミヤクヨコバイ						
274			ウスフチミヤクヨコバイ						
275			フタテンオオヨコバイ						
276			シダヨコバイ						
277			マエジロオオヨコバイ						
278			ミドリヒロヨコバイ						
279			ミミスク						
280			ヨモキシロテンヨコバイ						
281			ツマグロヨコバイ						
282			シロズオオヨコバイ						
283			オヌキシダヨコバイ						
284			クワキヨコバイ						
285			クルミヒロズヨコバイ						
286			クロヒラタヨコバイ						
287			ヒトツメヨコバイ						
288			シマサジヨコバイ						
289			シロズキンヨコバイ						
290			イナスマヨコバイ						
291		サシガメ科	アカサシガメ						
292			クビグロアカサシガメ						
293			モモフトヒイロサシガメ						
294			クロモンサシガメ						
295			ホソサシガメ						
296			クビアカサシガメ						
297			シマサシガメ						
298		ヤニサシガメ							
299	ゲンバウムシ科	コアカソゲンバイ							
300		トサカゲンバイ							
301	ヒラタカメムシ科	ヒメヒラタカメムシ							
302		ヒラタカメムシ							
303		ノコギリヒラタカメムシ							
304		クロヒラタカメムシ							
305		オオヒラタカメムシ							
306	ハナカメムシ科	ヤサハナカメムシ							
307	カスミカメムシ科	ヨツモンカスミカメ							
308		ウスモンカスミカメ							
309		ウススジカスミカメ							
310		ナカグロカスミカメ							
311		フチヒゲクロカスミカメ							
312		フタモンアカカスミカメ							
313		ヒゲナガクロバカスミカメ							
314		コアカスミカメ							
315		クロバカスミカメ							
316		モモアカハギカスミカメ							
317		ツマグロハギカスミカメ							
318		モンキカスミカメ							
319		クルミツヤクロカスミカメ							
320		ヒメセダカカスミカメ							
321		マダラカスミカメ							
322		オオモンキカスミカメ							
323		カワヤナギツヤカスミカメ							
324		<i>Deraeocoris salicis</i>							
325		アカスジヒゲブトカスミカメ							
326		メンガタカスミカメ							
327		アカスジオオカスミカメ							
328		コブヒゲカスミカメ							
329		ナガミドリカスミカメ							
330		ハナグロミドリカスミカメ							
331		シマアオカスミカメ							
332		ズアカシダカスミカメ							
333		アカアシカスミカメ							
334		オオチャイロカスミカメ							
335		クロマルカスミカメ							
336		トビマダラカスミカメ							
337		オオマダラカスミカメ							
338		オオクロセダカカスミカメ							
339		アカミヤクカスミカメ							
340		フタトゲムギカスミカメ							
341		ウスモンミドリカスミカメ							
342		ケブカカスミカメ							
343		マキバサシガメ科	ホソマキバサシガメ						
344	アカマキバサシガメ								
345	ハラヒロマキバサシガメ								
346	コバネマキバサシガメ								
347		ハネナガマキバサシガメ							
348	オオホシカメムシ科	ヒメホシカメムシ							
349	ホシカメムシ科	フタモンホシカメムシ							
350	ホソヘリカメムシ科	キベリヘリカメムシ							
351		ホソヘリカメムシ							
352	ヘリカメムシ科	オオクモヘリカメムシ							
353		ホソハリカメムシ							
354		ハリカメムシ							
355		ヒメトゲヘリカメムシ							
356		ハラヒロヘリカメムシ							
357		ホシハラヒロヘリカメムシ							
358		オオツマキヘリカメムシ							

真名川ダム 陸上昆虫類確認種リスト

(5/30)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種	
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成11年 (1997)	平成16年 (2004)			
359	(カメムシ目)	(ヘリカメムシ科)	ツマキヘリカメムシ						
360			オオヘリカメムシ						
361		キバラヘリカメムシ							
362		ヒメヘリカメムシ科	アカヒメヘリカメムシ						
363			ケブカヒメヘリカメムシ						
364			フチヒゲヒメヘリカメムシ						
365		ナガカメムシ科	セスジナガカメムシ						
366			ヒョウタンナガカメムシ						
367			コバネナガカメムシ						
368			オオチャイロナガカメムシ						
369			チャイロナガカメムシ						
370			ホソメダカナガカメムシ						
371			ヒメナガカメムシ						
372			ヒラタヒョウタンナガカメムシ						
373			クロスジヒゲナガカメムシ						
374			モンシロナガカメムシ						
375			チャモンナガカメムシ						
376			キベリヒョウタンナガカメムシ						
377			オオメナガカメムシ						
378			チャイロホソナガカメムシ						
379			ムラサキナガカメムシ						
380			ヤスマツナガカメムシ						
381			イチゴチビナガカメムシ						
382			コバネヒョウタンナガカメムシ						
383			メダカナガカメムシ科	メダカナガカメムシ					
384			ツノカメムシ科	セアカツノカメムシ					
385		ハサミツノカメムシ							
386		アオモンツノカメムシ							
387		ベニモンツノカメムシ							
388		ヒメツノカメムシ							
389		セグロヒメツノカメムシ							
390		エサキモンキツノカメムシ							
391		モンキツノカメムシ							
392		ツチカメムシ科		ヨコツナツチカメムシ					県要注目
393				チビツヤツチカメムシ					
394			ヒメツヤツチカメムシ						
395			コツチカメムシ						
396		カメムシ科	ツチカメムシ						
397			シロヘリカメムシ						
398			トゲカメムシ						
399			フチヒゲカメムシ						
400			ハナダカカメムシ						
401			ナガメ						
402			トゲシラホシカメムシ						
403	マルシラホシカメムシ								
404	オオトゲシラホシカメムシ								
405	ニセオオトゲシラホシカメムシ								
406	シラホシカメムシ								
407	ツヤアオカメムシ								
408	エビイロカメムシ								
409	アカスジカメムシ								
410	クサキカメムシ								
411	ヨツボシカメムシ								
412	トホシカメムシ								
413	ナカボシカメムシ								
414	スコットカメムシ								
415	ツマジロカメムシ								
416	エゾアオカメムシ								
417	ツノアオカメムシ								
418	イチモンジカメムシ								
419	アカアシクチフトカメムシ								
420	チャバネアオカメムシ								
421	ヒメカメムシ								
422	ルリクチフトカメムシ								
423	マルカメムシ科		ヒメマルカメムシ						
424		キボシマルカメムシ							
425		マルカメムシ							
426	キンカメムシ科	チャイロカメムシ							
427		アカスジキンカメムシ							
428	クヌギカメムシ科	ナシカメムシ							
429		ヘラクヌギカメムシ							
430		サシクヌギカメムシ							
431		クヌギカメムシ							
432	アメンボ科	アメンボ							
433		コセアカアメンボ							
434		ヤスマツアメンボ							
435		ヒメアメンボ							
436	ミズムシ科	コミズムシ							
437	マツモムシ科	マツモムシ							
438	アミメカゲロウ目	ヘビトンボ科	クロスジヘビトンボ						
439			ヘビトンボ						
440		ヒロバカゲロウ科	ヒロバカゲロウ						
441			スカシヒロバカゲロウ						
442			キマダラヒロバカゲロウ						
443		クシヒゲカゲロウ科	クシヒゲカゲロウ						
444		カマキリモドキ科	カマキリモドキ						
445			ヒメカマキリモドキ						
446		クサカゲロウ科	ヨツボシクサカゲロウ						
447			ニッポンクサカゲロウ						
448			スズキクサカゲロウ						

真名川ダム 陸上昆虫類確認種リスト

(6/30)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種			
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成11年 (1997)	平成16年 (2004)					
449	(アミメカゲロウ目)	(クサカゲロウ科)	ムモンクサカゲロウ								
450			タイワンクサカゲロウ								
451		セスジクサカゲロウ									
452		キタオオクサカゲロウ									
453		ヒメカゲロウ科	エグリヒメカゲロウ								
454			チャバネヒメカゲロウ								
455			ミヤマヒメカゲロウ								
456			シロタエヒメカゲロウ								
457			マルバネヒメカゲロウ								
458			ニセヒメカゲロウ								
459			ツノトンボ科	オオツノトンボ							
460		ウスバカゲロウ科	カスリウスバカゲロウ								
461			ホシウスバカゲロウ								
462			ニセコウスバカゲロウ								
463			ウスバカゲロウ								
464			シリアゲムシ目	ガガンボモドキ科	トガリバガガンボモドキ						
465		シリアゲムシ科		キシタゲシリアゲ							
466				ヤマトシリアゲ							
467				ホソマダラシリアゲ							
468				マルバネシリアゲ							
469				フライヤシリアゲ							
470		シリアゲモドキ科		スカシシリアゲモドキ							
471		トビケラ目		シマトビケラ科	キマダラシマトビケラ						
472					ウルマーシマトビケラ						
473				ヒゲナガカワトビケラ科	シロフツヤトビケラ						
474			ヒゲナガカワトビケラ								
475			チャバネヒゲナガカワトビケラ								
476			ナガレトビケラ科	トワダナガレトビケラ							
477			ニンギョウトビケラ科	ニンギョウトビケラ							
478			ヒゲナガトビケラ科	アオヒゲナガトビケラ							
479			エグリトビケラ科	ウスバキトビケラ							
480			フトヒゲトビケラ科	ホタルトビケラ							
481				ヨツメトビケラ							
482			トビケラ科	ムラサキトビケラ							
483			チョウ目	コウモリガ科	キマダラコウモリ						
484				マガリガ科	ケフカヒゲナガ						
485		ヒゲナガガ科		クロハネシロヒゲナガ							
486				ホソオビヒゲナガ							
487				ヒロオビヒゲナガ							
488				ツマモンヒゲナガ							
489				ウスベニヒゲナガ							
490				キオビクロヒゲナガ							
491				ホソガ科	チャハハマキホソガ						
492	ヒロズコガ科			クシヒゲキヒロズコガ							
493				マエモンクロヒロズコガ							
494				クロクモヒロズコガ							
495	カザリバガ科	カザリバ									
496	キバガ科	シロモンクロキバガ									
497		カバイロキバガ									
498		フジフサキバガ									
499		ウスボシフサキバガ									
500		カバオオフサキバガ									
501		キイロオオフサキバガ									
502		イッシキオオフサキバガ									
503		ナラクロオビキバガ									
504		クロオビハイキバガ									
505		ヒゲナガキバガ科		コマフシロキバガ							
506		マルハキバガ科		モンシロヒラタマルハキバガ							
507				ムジチャヒラタマルハキバガ							
508	ホソオビキマルハキバガ										
509	クロマイコモドキ										
510	キオビキバガ										
511	シロスジベニマルハキバガ										
512	シロスジカバマルハキバガ										
513	ニセマイコガ科	オビマイコガ									
514	ホソハマキモドキガ科	シロオビホソハマキモドキ									
515	スガ科	マルギンハネスガ									
516		オオボシハイスガ									
517		ニシキギスガ									
518		マユミハイスガ									
519		オオボシオオスガ									
520		ツマクロハイスガ									
521		スカシバガ科		セスジスカシバ							
522	ボクトウガ科	コマフボクトウ									
523	ハマキガ科	アカネハマキ									
524		ヒメサザナミハマキ									
525		アトキハマキ									
526		ホソアトキハマキ									
527		ミダレカクモンハマキ									
528		オオアトキハマキ									
529		シリグロハマキ									
530		マツアトキハマキ									
531		カクモンハマキ									
532		コホソスジハマキ									
533		トビモンコハマキ									
534		フタモンコハマキ									
535		キンヨスジハマキ									
536		アシブトヒメハマキ									
537		クリミガ									
538		キオビヘリホシヒメハマキ									

真名川ダム 陸上昆虫類確認種リスト

(7/30)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成11年 (1997)	平成16年 (2004)		
539	(チョウ目)	(ハマキガ科)	ヨモギネムシガ					
540			ブライヤヒメハマキ					
541			ヒロオビヒメハマキ					
542			ヒノキカワモグリガ					
543			ハナウドモグリガ					
544			トビモンシロヒメハマキ					
545			ブドウホリハマキ					
546			ホシオビハマキ					
547			コスソキモンヒメハマキ					
548			シロモンヒメハマキ					
549			オオサザナミヒメハマキ					
550			オオフタスジハマキ					
551			コシロアシヒメハマキ					
552			クロテンツマキヒメハマキ					
553			コケキオビヒメハマキ					
554			クローバヒメハマキ					
555			ウツギヒメハマキ					
556			オオツヤスジモンヒメハマキ					
557			ニセギンボシモトキヒメハマキ					
558			ニセウツギヒメハマキ					
559			オオクリモンヒメハマキ					
560			ウストビハマキ					
561			アカトビハマキ					
562			トビハマキ					
563			ナカオビナミスジキヒメハマキ					
564			サトウヒメハマキ					
565			オオギンズシアカハマキ					
566			ヤナギサザナミヒメハマキ					
567			オオヤナギサザナミヒメハマキ					
568			ギンボシトビハマキ					
569			シロヒメシンクイ					
570			キモンヒメハマキ					
571			コシロモンヒメハマキ					
572			ウスアミメキハマキ					
573		セミヤドリガ科	ハゴロモヤドリガ					
574		イラガ科	カギバイラガ					
575			マダライラガ					
576			クロマダライラガ					
577			テングイラガ					
578			イラガ					
579			ナシイラガ					
580			ヒロスイラガ					
581			アオイラガ					
582			クロシタアオイラガ					
583			タイワンイラガ					
584			アカイラガ					
585		マダラガ科	ウスグロマダラ					
586			シロシタホタルガ					
587		セセリチョウ科	アオバセセリ					
588			ダイミョウセセリ					
589			ミヤマセセリ					
590			ホソバセセリ					
591			ヒメキマダラセセリ					
592			コキマダラセセリ					
593			イチモンジセセリ					
594			ミヤマチャバネセセリ					
595			チャバネセセリ					
596			キマダラセセリ					
597			コチャバネセセリ					
598			スジグロチャバネセセリ					NT、県NT
599		マダラチョウ科	アサギマダラ					
600		テングチョウ科	テングチョウ					
601		シジミチョウ科	ウスイロオナガシジミ					
602			オナガシジミ					
603			ウラゴマダラシジミ					
604			ルリシジミ					
605			スギタニルリシジミ					
606			アイノミドリシジミ					
607			ウラギンシジミ					
608			ツバメシジミ					
609			ジョウザンミドリシジミ					
610			エゾミドリシジミ					
611			ウラクロシジミ					
612			アカシジミ					
613			ウラナミシジミ					
614			ベニシジミ					
615			ミドリシジミ					
616			ヒメウラナミシジミ*1					
617			ヤマトシジミ					
618			トラフシジミ					
619			ウラギンシジミ					
620		タテハチョウ科	コムラサキ					
621			サカハチチョウ					
622			ミドリヒョウモン					
623			ツマグロヒョウモン					
624			ウラギンズジヒョウモン					NT
625			オオウラギンズジヒョウモン					
626			ヒメアカタテハ					
627			メスグロヒョウモン					
628			スミナガシ					

真名川ダム 陸上昆虫類確認種リスト

(8/30)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種		
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成11年 (1997)	平成16年 (2004)				
629	(チョウ目)	(タテハチョウ科)	ウラギンヒョウモン							
630			ルリタテハ本土亜種							
631			イチモンジチョウ							
632			アサマイチモンジ							
633			ミスジチョウ							
634			コムスジ							
635			ヒオドシチョウ							
636			キタテハ							
637			オオムラサキ						NT、県NT	
638			アカタテハ							
639			アゲハチョウ科	カラスアゲハ						
640				モンキアゲハ						
641				ミヤマカラスアゲハ						
642				キアゲハ						
643				オナガアゲハ						
644		クロアゲハ								
645		ナミアゲハ								
646		ウスバシロチョウ								
647		シロチョウ科	ツマキチョウ							
648			モンキチョウ							
649			キチョウ							
650			スジボソヤマキチョウ							
651			スジグロシロチョウ							
652			エゾスジグロシロチョウ本州以南亜種							
653			モンシロチョウ							
654			ジャノメチョウ科	ツマジロウラジャノメ					県VU	
655				クロヒカゲ						
656				コジャノメ						
657		ヒメジャノメ								
658		サトキマダラヒカゲ								
659		ヤマキマダラヒカゲ								
660		ヒメウラナミジャノメ								
661		ヒメキマダラヒカゲ								
662		トリバガ科	オダマキトリバ							
663			ヨモギトリバ							
664			ブドウトリバ							
665			エゾキクトリバ							
666			フキトリバ							
667		ツトガ科	ウスムラサキノメイガ							
668			クロウスムラサキノメイガ							
669			キボシノメイガ							
670			シロヒトモンノメイガ							
671			シロモンクロノメイガ							
672			ヒメトガリノメイガ							
673			ツツガ							
674			オオキノメイガ							
675			アカウスグロノメイガ							
676			シロテウスグロノメイガ							
677			モンウスグロノメイガ							
678			キスジツツガ							
679			シロツツガ							
680			ハナダカノメイガ							
681			ニカメイガ							
682			ウスクロスジツツガ							
683			テンスジツツガ							
684			キベリハネボソノメイガ							
685			ミナミホソバノメイガ							
686			キボソノメイガ							
687			カキバノメイガ							
688			コブノメイガ							
689			モモノゴマダラノメイガ							
690			クロスカシトガリノメイガ							
691			スカシトガリノメイガ							
692	シロスジツツガ									
693	ニセシロスジツツガ									
694	ワタヘリクロノメイガ									
695	キアヤヒメノメイガ									
696	シロアヤヒメノメイガ									
697	ヒメマダラミスメイガ									
698	アヤナミノメイガ									
699	ナノメイガ									
700	クロスジツツガ									
701	シロエグリツツガ									
702	ミヤマエグリツツガ									
703	ツゲノメイガ									
704	スカシノメイガ									
705	ヨツボシノメイガ									
706	トビヘリキノメイガ									
707	クロズノメイガ									
708	ワタノメイガ									
709	ウスオビクロノメイガ									
710	モンキクロノメイガ									
711	キモンウスグロノメイガ									
712	クロフキマダラノメイガ									
713	キマダラクロノメイガ									
714	マエキノメイガ									
715	ケナガチビクロノメイガ									
716	ウスグロヨツモンノメイガ									
717	ミツテンノメイガ									
718	マメノメイガ									

真名川ダム 陸上昆虫類確認種リスト

(9/30)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成11年 (1997)	平成16年 (2004)		
719	(チョウ目)	(ツトガ科)	ハイロホソバノメイガ					
720			チビツトガ					
721			スジマガリノメイガ					
722			シロテンキノメイガ					
723			サツマキノメイガ					
724			クロフキノメイガ					
725			ネモンノメイガ					
726			クロフタオビツトガ					
727			ホシオビホソノメイガ					
728			ワモンノメイガ					
729			アトモンミスメイガ					
730			ギンモンミスメイガ					
731			マエウスキノメイガ					
732			ヒメクロミスジノメイガ					
733			シロアシクロノメイガ					
734			アスキノメイガ					
735			フキノメイガ					
736			ヨスジノメイガ					
737			ヘリジロキンノメイガ					
738			マエベニノメイガ					
739			マエウスモンキノメイガ					
740			マエアカスカシノメイガ					
741			キイロフチグロノメイガ					
742			フチグロノメイガ					
743			ゼニガサミスメイガ					
744			モンキノメイガ					
745			キイロノメイガ					
746			クビシロノメイガ					
747			コガタシロモンノメイガ					
748			クロスジキンノメイガ					
749			ホソミスジノメイガ					
750			シロハラノメイガ					
751			ウスキノモンノメイガ					
752			オオキバラノメイガ					
753			コヨツメノメイガ					
754			ウスイロキンノメイガ					
755			ヨツメノメイガ					
756			ウコンノメイガ					
757			キオビミスメイガ					
758			ナカキトガリノメイガ					
759			ミカエリソウノメイガ					
760			ホソスジツトガ					
761			モンスカシキノメイガ					
762			コマダラノメイガ					
763			クロオビノメイガ					
764			カクモントビノメイガ					
765			トモンノメイガ					
766			キオビトビノメイガ					
767			マエキモンノメイガ					
768			ヒトモンノメイガ					
769			ムモンシロオオメイガ					
770			ダテシマノメイガ					
771			セスジノメイガ					
772			ヒメセスジノメイガ					
773			ウラグロシロノメイガ					
774			マエキシタグロノメイガ					
775			シロオビノメイガ					
776			シロスジエグリノメイガ					
777			クロヘリノメイガ					
778			モンシロクロノメイガ					
779			タイワンモンキノメイガ					
780			ウンモンシロノメイガ					
781			フタオビノメイガ					
782			クロスジノメイガ					
783			チビマルモンノメイガ					
784			ウドノメイガ					
785			オオモンシロルリノメイガ					
786			ウラジロキノメイガ					
787			モンシロルリノメイガ					
788		メイガ科	キンマダラメイガ					
789			ナシマダラメイガ					
790			ツマグロシマメイガ					
791			ウスアカムラサキマダラメイガ					
792			マエグロツツリガ					
793			スジグロマダラメイガ					
794			ウスアカネマダラメイガ					
795			クシヒゲマダラメイガ					
796			アカフマダラメイガ					
797			オオアカオビマダラメイガ					
798			ツツマダラメイガ					
799			マツノマダラメイガ					
800			マツアカマダラメイガ					
801			オオマエジロホソメイガ					
802			ウスオビトガリメイガ					
803			オオウスベントガリメイガ					
804			キペリトガリメイガ					
805			ウスベントガリメイガ					
806			ナシハマキマダラメイガ					
807			フタスジツツリガ					
808			ウスモンマルバシマメイガ					

真名川ダム 陸上昆虫類確認種リスト

(10/30)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種	
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成11年 (1997)	平成16年 (2004)			
809	(チョウ目)	(メイガ科)	トビロシマメイガ						
810			アカフツツリガ						
811			キイフトメイガ						
812			ナカムラサキフトメイガ						
813			トサカフトメイガ						
814			シロスジクマダラメイガ						
815			エチゴマダラメイガ						
816			ヤマトマダラメイガ						
817			マエナミマダラメイガ						
818			ミカドマダラメイガ						
819			ツマクロフトメイガ						
820			サンカクマダラメイガ						
821			アカマダラメイガ						
822			ナカトビフトメイガ						
823			クロモンフトメイガ						
824			アオフトメイガ						
825			ネアオフトメイガ						
826			フタスジシマメイガ						
827			ツマアカシマメイガ						
828			トビスジマダラメイガ						
829			オオクロモンマダラメイガ						
830			マエジロホソマダラメイガ						
831			ヒトスジホソマダラメイガ						
832			ウスグロマダラメイガ						
833			クロマダラメイガ						
834			ハイロマダラメイガ						
835			オオフトメイガ						
836			ハラウスキマダラメイガ						
837			ヒゲフトマダラメイガ						
838			トビロフトタスジシマメイガ						
839			ネグロフトメイガ						
840			クシヒゲシマメイガ						
841			ナカアオフトメイガ						
842			フタスジフトメイガ						
843			ソトベニフトメイガ						
844			ナカジロフトメイガ						
845			クロフトメイガ						
846			ミドリフトメイガ						
847			マドガ科	ハスオビマドガ					
848				チビマダラマドガ					
849				マダラマドガ					
850				アカジママドガ					
851			マドガ						
852			オオカギバ科	オオカギバ					
853				ギンズジカギバ					
854			カギバ科	マエキカギバ					
855	ヒトツメカギバ								
856	マダラカギバ								
857	ウスイロカギバ								
858	ギンモンカギバ								
859	ホシベッコウカギバ								
860	フタデンシロカギバ								
861	オビカギバ								
862	オガサワラカギバ								
863	エゾカギバ								
864	ヤマトカギバ								
865	アシベニカギバ								
866	クロスジカギバ								
867	ヒメハイロカギバ								
868	ウスオビカギバ								
869	ウコンカギバ								
870	トガリバ科	タケウチトガリバ							
871		ニッコウトガリバ							
872		ナガトガリバ							
873		アヤトガリバ							
874		ナミスジトガリバ							
875		ネグロトガリバ							
876		ウスジロトガリバ							
877		ギンモントガリバ							
878		オオバトガリバ							
879		オオマエベニトガリバ							
880		ホソトガリバ							
881		ヒトテントガリバ							
882		モントガリバ							
883		ナカジロトガリバ							
884	アゲハモドキガ科	アゲハモドキ							
885		キンモンガ							
886	フタオガ科	クロホシフタオ							
887		クロオビシロフタオ							
888		カバイロフタオ							
889		クロフタオ							
890	シャクガ科	シロテントビスジエダシャク							
891		スキタニシロエダシャク							
892		クロマダラエダシャク							
893		ヒトスジマダラエダシャク							
894		ユウマダラエダシャク							
895		ヒメマダラエダシャク							
896		ルリオピナミシャク							
897		ハントビスジエダシャク							
898		コガタイチモジエダシャク							

真名川ダム 陸上昆虫類確認種リスト

(11/30)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成11年 (1997)	平成16年 (2004)		
899	(チョウ目)	(シャクガ科)	ナカウスエダシャク					
900			コケエダシャク					
901			ウスイロオエダシャク					
902			ゴマフキエダシャク					
903			クロクモエダシャク					
904			ヨスジアカエダシャク					
905			シロホシエダシャク					
906			キシクエダシャク					
907			ブライヤエダシャク					
908			キジマエダシャク					
909			ヨモギエダシャク					
910			キムジシロナミシャク					
911			ムスジシロナミシャク					
912			キマダラシロナミシャク					
913			オオヨスジアカエダシャク					
914			キエダシャク					
915			トビモンオオエダシャク					
916			キリバナホソナミシャク					
917			ミスジコナフエダシャク					
918			アトグロアミエダシャク					
919			ヒラヤマシロエダシャク					
920			ソトシロオビエダシャク					
921			オオナミシャク					
922			ツマキシロナミシャク					
923			ヒロバトガリナミシャク					
924			ホソバトガリナミシャク					
925			ハラアカアオシャク					
926			ホソバハラアカアオシャク					
927			コウスアオシャク					
928			ハラアカウスアオナミシャク					
929			ウラモンアオナミシャク					
930			クロスジアオナミシャク					
931			ルリモンエダシャク					
932			シロテンエダシャク					
933			カバエダシャク					
934			ヘリジロヨツメアオシャク					
935			クロモンアオシャク					
936			ヨツモンマエジロアオシャク					
937			コヨツメアオシャク					
938			ウコンエダシャク					
939			ツマキエダシャク					
940			キオビゴマダラエダシャク					
941			アカアシアオシャク					
942			セブエダシャク					
943			トンボエダシャク					
944			ヒロオビトンボエダシャク					
945			マツオエダシャク					
946			ハスオビエダシャク					
947			ウスアオシャク					
948			ナミスジユアオシャク					
949			オオトビエダシャク					
950			セキナミシャク					
951			オオハガタナミシャク					
952			シロスエダシャク					
953			ウストビスジエダシャク					
954			フトフタオビエダシャク					
955			オオトビスジエダシャク					
956			キンオビナミシャク					
957			ヒメキンオビナミシャク					
958			ツマキリエダシャク					
959			モミジツマキリエダシャク					
960			キリバエダシャク					
961			サラサエダシャク					
962			フタシロスジナミシャク					
963			ハンノナミシャク					
964			ウスオビヒメエダシャク					
965			マルモンシロナミシャク					
966			キベリシロナミシャク					
967			ヨコジマナミシャク					
968			ウストビモンナミシャク					
969			ハコベナミシャク					
970			クロテンヤスジカバナミシャク					
971			フタモンカバナミシャク					
972			ソトカバナミシャク					
973			ハラキカバナミシャク					
974			シロジマエダシャク					
975			ミヤマアミメナミシャク					
976			キアミメナミシャク					
977			ハガタナミシャク					
978			セスジナミシャク					
979			オイワケキエダシャク					
980			エグリエダシャク					
981			キガシラオオナミシャク					
982			キマダラオオナミシャク					
983			キバラエダシャク					
984			ツバメアオシャク					
985			ヒロバツバメアオシャク					
986			ヒメツバメアオシャク					
987			カギシロスジアオシャク					
988			コシロオビアオシャク					



真名川ダム 陸上昆虫類確認種リスト

(12/30)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成11年 (1997)	平成16年 (2004)		
989	(チョウ目)	(シაკガ科)	クロスジアオシヤク					
990			フタデンオエダシヤク					
991			ウスオエダシヤク					
992			シャンハイオエダシヤク					
993			ケブカチピナミシヤク					
994			コシロスジアオシヤク					
995			キバラヒメアオシヤク					
996			ウラベニエダシヤク					
997			ベニスジエダシヤク					
998			コウスグモナミシヤク					
999			ウスグモナミシヤク					
1000			ミツボシナミシヤク					
1001			サザナミオビエダシヤク					
1002			クロスジハイイロエダシヤク					
1003			テンスジヒメナミシヤク					
1004			チビヒメナミシヤク					
1005			キスジハイイロナミシヤク					
1006			アキバエダシヤク					
1007			オオバナミガタエダシヤク					
1008			ウスバミスジエダシヤク					
1009			ハミスジエダシヤク					
1010			ヨスジキヒメシヤク					
1011			ウスキヒメシヤク					
1012			モンウスキヒメシヤク					
1013			オオウスモンキヒメシヤク					
1014			オイウケヒメシヤク					
1015			ベニヒメシヤク					
1016			ホソスジキヒメシヤク					
1017			ミジンキヒメシヤク					
1018			キタウンモンエダシヤク					
1019			ナミガタウスキアオシヤク					
1020			ウスキヒメアオシヤク					
1021			フタオビシロエダシヤク					
1022			キブサヒメエダシヤク					
1023			シロスジヒメエダシヤク					
1024			キホソスジナミシヤク					
1025			シロオビヒメエダシヤク					
1026			フタホシシロエダシヤク					
1027			クロスウスキエダシヤク					
1028			ウスフタスジシロエダシヤク					
1029			バラシロエダシヤク					
1030			フタオモドキナミシヤク					
1031			ナカジロナミシヤク					
1032			ウスクモエダシヤク					
1033			イチゴナミシヤク					
1034			フタモンクロナミシヤク					
1035			キバネトビスジエダシヤク					
1036			クロミスジシロエダシヤク					
1037			ホソスジシロエダシヤク					
1038			ゴマダラシロナミシヤク					
1039			キマエアオシヤク					
1040			シロオビコバネナミシヤク					
1041			ウチムラサキヒメエダシヤク					
1042			マエキトビエダシヤク					
1043			エグリツマエダシヤク					
1044			キイロエグリツマエダシヤク					
1045			ヨツメエダシヤク					
1046			キスジシロエダシヤク					
1047			シロツバメエダシヤク					
1048			ウスキツバメエダシヤク					
1049			ノムラツバメエダシヤク					
1050			コガタツバメエダシヤク					
1051			フトスツバメエダシヤク					
1052			ヒメツバメエダシヤク					
1053			オオアヤシヤク					
1054			アカモンゴナミシヤク					
1055			フタスジウスキエダシヤク					
1056			ウスアオエダシヤク					
1057			ヒロバウスアオエダシヤク					
1058			シナトビスジエダシヤク					
1059			シロモンキエダシヤク					
1060			ウスクロオビナミシヤク					
1061			クロフヒメエダシヤク					
1062			コトビスジエダシヤク					
1063			シダエダシヤク					
1064			ウスグロナミエダシヤク					
1065			ネグロウスベニナミシヤク					
1066			クワエダシヤク					
1067			リンゴツノエダシヤク					
1068			ナカキエダシヤク					
1069			トビモンシロナミシヤク					
1070			クロフオオシロエダシヤク					
1071			オオクロオビナミシヤク					
1072			ヒトツメオオシロヒメシヤク					
1073			シロモンクロエダシヤク					
1074			オレクキエダシヤク					
1075			キイロナミシヤク					
1076			フタナミトビヒメシヤク					
1077			ナミスジエダシヤク					
1078			フタスジエダシヤク					

真名川ダム 陸上昆虫類確認種リスト

(13/30)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成11年 (1997)	平成16年 (2004)		
1079	(チョウ目)	(シャクガ科)	フタヤマエダシャク					
1080			ハラゲチビエダシャク					
1081			ソトキクロエダシャク					
1082			クロテンシロヒメシャク					
1083			ミスジハイロヒメシャク					
1084			ヤスジマルバヒメシャク					
1085			ウスキクロテンヒメシャク					
1086			ハイロヒメシャク					
1087			モントビヒメシャク					
1088			マエキヒメシャク					
1089			ウスサカハチヒメシャク					
1090			ヨツボシウスキヒメシャク					
1091			キナミシロヒメシャク					
1092			タカオシロヒメシャク					
1093			ウスムラサキエダシャク					
1094			ハガタムラサキエダシャク					
1095			ムラサキエダシャク					
1096			ピロードナミシャク					
1097			シロオビマルバナミシャク					
1098			ウンモンオオシロヒメシャク					
1099			ツマトビシロエダシャク					
1100			ハグルマエダシャク					
1101			マルハグルマエダシャク					
1102			スジハグルマエダシャク					
1103			ミスジシロエダシャク					
1104			デンツマナミシャク					
1105			ヨツメアオシャク					
1106			キマダラツバメエダシャク					
1107			ミヤマツバメエダシャク					
1108			フトベニスジヒメシャク					
1109			コベニスジヒメシャク					
1110			ウスベニスジヒメシャク					
1111			シロオビクロナミシャク					
1112			シタコバナナミシャク					
1113			クロオビシロナミシャク					
1114			ホソバナミシャク					
1115			マエモンハイイロナミシャク					
1116			ヒロオビオオエダシャク					
1117			シロスジオオエダシャク					
1118			ナカシロスジナミシャク					
1119			トビスジコナミシャク					
1120			フタトビスジナミシャク					
1121			ツマクロナミシャク					
1122			フダクロテンナミシャク					
1123			モンシロツマキリエダシャク					
1124			ミスジツマキリエダシャク					
1125			トガリエダシャク					
1126			キマダラツマキリエダシャク					
1127		イカリモンガ科	イカリモンガ					
1128		カイコガ科	クワコ					
1129			オオクワゴモドキ					
1130		オビガ科	オビガ					
1131		カレハガ科	ツガカレハ					
1132			タケカレハ					
1133			オビカレハ					
1134			リンゴカレハ					
1135			ギンモンカレハ					
1136		ヤママユガ科	オオミズアオ					
1137			エソヨツメ					
1138			ヤママユ					
1139		スズメガ科	ブドウスズメ					
1140			ハネナガブドウスズメ					
1141			エビガラスズメ					
1142			フトオビホソパスズメ					
1143			ホソパスズメ					
1144			モンホソパスズメ					
1145			アジアホソパスズメ					
1146			ケルマスズメ					
1147			ホシヒメホウジャク					
1148			ウンモンズズメ					
1149			トビイロスズメ					
1150			ベニスズメ					
1151			ヒメサザナミスズメ					
1152			サザナミスズメ					
1153			クロスキバホウジャク					
1154			スキバホウジャク					
1155			クロテンケンモンズズメ					
1156			ヒメクロホウジャク					
1157			ホシホウジャク					
1158			クロホウジャク					
1159			モモスズメ					
1160			ヒメクチパスズメ					
1161			クチパスズメ					
1162			エソシモフリスズメ					
1163			エソズズメ					
1164			ピロードズズメ					
1165			ミスジピロードズズメ					
1166			コスズメ					
1167			セスジズズメ					
1168		シャチホコガ科	オオモクメシャチホコ					

真名川ダム 陸上昆虫類確認種リスト

(14/30)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種				
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成11年 (1997)	平成16年 (2004)						
1169	(チョウ目)	(シャチホコガ科)	ツマアカシャチホコ									
1170			ハイバラシロシャチホコ									
1171			シロシャチホコ									
1172			トビモンシャチホコ									
1173			コトビモンシャチホコ									
1174			シロテンシャチホコ									
1175			ヤスジシャチホコ									
1176			ホソバシャチホコ									
1177			ナカグロモクメシャチホコ									
1178			ホシナカグロモクメシャチホコ									
1179			アカシャチホコ									
1180			クワゴモドキシヤチホコ									
1181			ハガタエグリシャチホコ									
1182			ツマジロシャチホコ									
1183			タカオシャチホコ									
1184			クロスジシャチホコ									
1185			ウスツマシャチホコ									
1186			ブライヤエグリシャチホコ									
1187			ヒナシャチホコ									
1188			ハイロシャチホコ									
1189			ヒメシャチホコ									
1190			ナカスジシャチホコ									
1191			マエジロシャチホコ									
1192			トビスジシャチホコ									
1193			ナカキシヤチホコ									
1194			アカネシャチホコ									
1195			ルリモンシャチホコ									
1196			モンクロシャチホコ									
1197			ススキシャチホコ									
1198			ウグイスシャチホコ									
1199			オオエグリシャチホコ									
1200			スジエグリシャチホコ									
1201			エソエグリシャチホコ									
1202			クロエグリシャチホコ									
1203			エグリシャチホコ									
1204			セダカシャチホコ									
1205			アオセダカシャチホコ									
1206			カエデシャチホコ									
1207			ニッコウシャチホコ									
1208			クビワシャチホコ									
1209			ギンモンシャチホコ									
1210			ウスイロギンモンシャチホコ									
1211			エソギンモンシャチホコ									
1212			アオシャチホコ									
1213			ブライヤアオシャチホコ									
1214			ブナアオシャチホコ									
1215			ギンモンズメモドキ									
1216			タテスジシャチホコ									
1217			ムラサキシヤチホコ									
1218			アオバシャチホコ									
1219			ヒトリガ科		カノコガ							
1220					キハダカノコ							
1221					シロヒトリ							
1222					アカスジシロコケガ							
1223					キシタホソバ							
1224					ヒメキホソバ							
1225					ムジホソバ							
1226					キマエホソバ							
1227					ツマキホソバ							
1228					ヒメツマキホソバ							
1229					クロフシロヒトリ							
1230					キマエクロホソバ							
1231					キベリネズミホソバ							
1232					カクモンヒトリ							
1233					クロバナヒトリ							
1234					ヨツボシホソバ							
1235					クビワウスグロホソバ							
1236					クロスジチビコケガ							
1237					ハガタバニコケガ							
1238					ハガタキコケガ							
1239					ベニヘリコケガ							
1240					ゴマダラベニコケガ							
1241					スジベニコケガ							
1242					フタホシキコケガ							
1243					ホシオビコケガ							
1244					クロスジホソバ							
1245					チャオビチビコケガ							
1246					ホシベニシタヒトリ							
1247					ベニシタヒトリ							
1248					セスジヒトリ							
1249					フトスジモンヒトリ							
1250					スジモンヒトリ							
1251					キハラゴマダラヒトリ							
1252					アカハラゴマダラヒトリ							
1253					ゴマダラキコケガ							
1254					モンクロベニコケガ							
1255					ドクガ科		ヒメシロドクガ					
1256							スカシドクガ					
1257							エルモンドクガ					
1258							スギドクガ					

真名川ダム 陸上昆虫類確認種リスト

(15/30)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種			
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成11年 (1997)	平成16年 (2004)					
1259	(チョウ目)	(ドクガ科)	スズキドクガ								
1260			リンゴドクガ								
1261			マメドクガ								
1262			キドクガ								
1263			ゴマフリドクガ								
1264			モンシロドクガ								
1265			フタホシドクガ								
1266			ドクガ								
1267			ブドウドクガ								
1268			スゲドクガ								
1269			スゲオオドクガ								
1270			パンタイマイマイ								
1271			マイマイガ								
1272			ハラアカマイマイ								
1273			カシワマイマイ								
1274			ナンネマイマイ								
1275			シロオビドクガ								
1276			ヒメシロモンドクガ								
1277			ウチジロマイマイ								
1278			クロモンドクガ								
1279			ニワトコドクガ								
1280			ヤガ科		ミヤマダラウワバ						
1281					ウスグロマダラウワバ						
1282					ニシキキンウワバ						
1283					オオケンモン						
1284					ヒメモクメトウ						
1285					シラナミクロアツバ						
1286					アケビコノハ						
1287					タマナヤガ						
1288	カブラヤガ										
1289	ショウブヨトウ										
1290	オオウスツマカラスヨトウ										
1291	カラスヨトウ										
1292	オオシマカラスヨトウ										
1293	シマカラスヨトウ										
1294	ツマジロカラスヨトウ										
1295	シロデンツマキリアツバ										
1296	ヒメシロテンコヤガ										
1297	サヒロコヤガ										
1298	クロテンカバアツバ										
1299	ウスベリケンモン										
1300	カバマダラヨトウ										
1301	オオアオバヤガ										
1302	アカスジキヨトウ										
1303	ヒメアカキリバ										
1304	アカキリバ										
1305	ヒロードコヤガ										
1306	ハイイロモクメトウ										
1307	ギンボシキンウワバ										
1308	アカモクメトウ										
1309	ネスジシラクモトウ										
1310	フクラスズメ										
1311	ギンボシリンガ										
1312	ヒメトラガ										
1313	ニッコウフサヤガ										
1314	シロデンウスグロヨトウ										
1315	デンウスイロヨトウ										
1316	ヒメウスグロヨトウ										
1317	シロモンオビヨトウ										
1318	ヒメサビスジヨトウ										
1319	エゾウスイロヨトウ										
1320	ツマトビコヤガ										
1321	タマナギンウワバ										
1322	クロハナコヤガ										
1323	モクメトウ										
1324	ハジマヨトウ										
1325	アオケンモン										
1326	フダスジアツバ										
1327	シロスジアツバ										
1328	コウンモンクチバ										
1329	ムラクモアツバ										
1330	ホシムラサキアツバ										
1331	ウスツマアツバ										
1332	アイモンアツバ										
1333	ミヤマソトジロアツバ										
1334	ハンクローアツバ										
1335	ヤマガタアツバ										
1336	シラクモアツバ										
1337	コイチモジキノヨトウ										
1338	ウスアオモンコヤガ										
1339	ヒメツマキリヨトウ										
1340	ムラサキツマキリヨトウ										
1341	アヤナミツマキリヨトウ										
1342	マダラツマキリヨトウ										
1343	オオエグリバ										
1344	キタエグリバ										
1345	キンイロエグリバ										
1346	ウスエグリバ										
1347	ハイイロコヤガ										
1348	ヨシノキシタバ										

真名川ダム 陸上昆虫類確認種リスト

(16/30)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成11年 (1997)	平成16年 (2004)		
1349	(チョウ目)	(ヤガ科)	エゾシロシタバ					
1350			シロシタバ					
1351			ゴマシオキシタバ					
1352			キシタバ					
1353			カギモンヤガ					
1354			ヒトデンヨトウ					
1355			ハルタギンガ					
1356			ウスズギンガ					
1357			ヒロオビクロギンガ					
1358			ムジギンガ					
1359			クロハナギンガ					
1360			ヒメギンガ					
1361			ホソバネキンウワバ					
1362			イチジクキンウワバ					
1363			カクモンキシタバ					
1364			ホソバネグロヨトウ					
1365			ハナオヘアツバ					
1366			キンイロキリガ					
1367			テンスジウスキヨトウ					
1368			キンスジアツバ					
1369			ネグロケンモン					
1370			オオホシミヨトウ					
1371			カパイロシマコヤガ					
1372			モモイロシマコヤガ					
1373			ツマベニシマコヤガ					
1374			シマキリガ					
1375			ニレキリガ					
1376			ツマグロキリガ					
1377			シラオビキリガ					
1378			キシタキリガ					
1379			シラホシキリガ					
1380			イタヤキリガ					
1381			クロフケンモン					
1382			ニッコウケンモン					
1383			ハイイロキノコヨトウ					
1384			スジキノコヨトウ					
1385			マダラキノコヨトウ					
1386			ミツモンキンウワバ					
1387			エゾキクキンウワバ					
1388			ハイイロセダカモクメ					
1389			ハガタクチバ					
1390			オオバコヤガ					
1391			コウスチャヤガ					
1392			アカフヤガ					
1393			ウスイロアカフヤガ					
1394			ウスツマクチバ					
1395			ムラサキアツバ					
1396			ウスクロモクメヨトウ					
1397			コクロモクメヨトウ					
1398			クロモクメヨトウ					
1399			ホソオビアシブトクチバ					
1400			ヒメアシブトクチバ					
1401			モンオビヒメヨトウ					
1402			オオシラホシアツバ					
1403			ケンモンキリガ					
1404			シロモンコヤガ					
1405			モンシロムラサキクチバ					
1406			モンムラサキクチバ					
1407			ウスムラサキクチバ					
1408			アカデンクチバ					
1409			キンスジキンウワバ					
1410			ベニチラシコヤガ					
1411			ヒメシマヨトウ					
1412			シマヨトウ					
1413			ウスムラサキヨトウ					
1414			アカガネヨトウ					
1415			ムラサキアカガネヨトウ					
1416			コフサヤガ					
1417			フサヤガ					
1418			クロヤガ					
1419			ハイイロリンガ					
1420			クロオビリンガ					
1421			シロフヒメケンモン					
1422			フタスジエグリアツバ					
1423			コボウトガリヨトウ					
1424			ハナマガリアツバ					
1425			ヒメハナマガリアツバ					
1426			ソトウスアツバ					
1427			フタデンヒメヨトウ					
1428			シラクモコヤガ					
1429			オオタバコガ					外来種
1430			ツメクサガ					
1431			アトヘリヒトホシアツバ					
1432			ウスキミスジアツバ					
1433			フシキアツバ					
1434			クロスジアツバ					
1435			シラナミアツバ					
1436			トビスジアツバ					
1437			クロクモヤガ					
1438			ソトウスグロアツバ					

真名川ダム 陸上昆虫類確認種リスト

(17/30)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成11年 (1997)	平成16年 (2004)		
1439	(チョウ目)	(ヤガ科)	ヒロオビウスグロアツバ					
1440			キシタケンモン					
1441			クロキシタアツバ					
1442			トビモンアツバ					
1443			ムラサキミツボシアツバ					
1444			タイウンキシタアツバ					
1445			ミツボシアツバ					
1446			モンキコヤガ					
1447			シロテンクチバ					
1448			オオシロテンクチバ					
1449			カバイロリンガ					
1450			シロマダラヒメヨトウ					
1451			ツマモンキリガ					
1452			ヤナギキリガ					
1453			マエキリンガ					
1454			ハンノケンモン					
1455			ハネモンリンガ					
1456			スジシロコヤガ					
1457			キモンコヤガ					
1458			クロモンコヤガ					
1459			ミドリシロモンコヤガ					
1460			ムクゲコノハ					
1461			シーモンキンウワバ					
1462			トビフタスジアツバ					
1463			コマエアカシロヨトウ					
1464			ミカドアツバ					
1465			キマダラアツバ					
1466			モモイロツマキリコヤガ					
1467			キクギンウワバ					
1468			キンモンシロウワバ					
1469			カマフリンガ					
1470			ヒメオビコヤガ					
1471			ネジロコヤガ					
1472			ヒメネジロコヤガ					
1473			オオマエモンコブガ					
1474			シラホシヨトウ					
1475			アトジロシラホシヨトウ					
1476			シロスジトモエ					
1477			フタホシコヤガ					
1478			スジモンアツバ					
1479			ウスオビチビアツバ					
1480			ニセウンモンクチバ					
1481			ウンモンクチバ					
1482			コマケンモン					
1483			キクビゴマケンモン					
1484			アオバセダカヨトウ					
1485			フサキバアツバ					
1486			マダラキヨトウ					
1487			オオフタオビキヨトウ					
1488			ミヤマフタオビキヨトウ					
1489			クロシタキヨトウ					
1490			フタデンキヨトウ					
1491			スジシロキヨトウ					
1492			フタオビキヨトウ					
1493			ニッコウアオケンモン					
1494			ベニトガリアツバ					
1495			フタオビコヤガ					
1496			シロフクロケンモン					
1497			フタデンチビアツバ					
1498			ネジロキノカワガ					
1499			マエモンコヤガ					
1500			エソコヤガ					
1501			チャオビヨトウ					
1502			ヒゲブトクロアツバ					
1503			ヒメコブガ					
1504			ウスカバシジコブガ					
1505			クロスジシロコブガ					
1506			ミスジコブガ					
1507			コマバシロキノカワガ					
1508			ミヤマクロスジキノカワガ					
1509			マエジロヤガ					
1510			ソトキイロアツバ					
1511			セアカヨトウ					
1512			クサビヨトウ					
1513			ヒメエグリバ					
1514			アカエグリバ					
1515			ノコメセダカヨトウ					
1516			ホソバキリガ					
1517			カシワキリガ					
1518			クロミキリガ					
1519			ツマシロツマキリアツバ					
1520			マエモンツマキリアツバ					
1521			キモンツマキリアツバ					
1522			リンゴツマキリアツバ					
1523			シロツマキリアツバ					
1524			ウンモンツマキリアツバ					
1525			シロモンツマキリアツバ					
1526			シロモンアツバ					
1527			オビアツバ					
1528			シロテムラサキアツバ					

真名川ダム 陸上昆虫類確認種リスト

(18/30)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種	
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成11年 (1997)	平成16年 (2004)			
1529	(チョウ目)	(ヤガ科)	ミスジアツバ						
1530			クルマアツバ						
1531			キボシアツバ						
1532			スモモキリガ						
1533			ウスベニコヤガ						
1534			モンキアカガネヨトウ						
1535			シラオビアカガネヨトウ						
1536			ヨモギコヤガ						
1537			シロテンクロヨトウ						
1538			マダラエグリバ						
1539			ツマモンコブガ						
1540			マンレイツマキリアツバ						
1541			キクビヒメヨトウ						
1542			シロマダラコヤガ						
1543			シロフコヤガ						
1544			アオスジアオリンガ						
1545			マエホシヨトウ						
1546			マエテンアツバ						
1547			トガリアツバ						
1548			トビモンシロコブガ						
1549			スミコブガ						
1550			クロスジコブガ						
1551			オオコブガ						
1552			ナカグロコブガ						
1553			タケアツバ						
1554			クリイロアツバ						
1555			テンクロアツバ						
1556			トビイロトラガ						
1557			ベニモントラガ						
1558			シロシタヨトウ						
1559			ソトウスベニアツバ						
1560			クロスジヒメアツバ						
1561			ハガタキリバ						
1562			イネヨトウ						
1563			テンオビヨトウ						
1564			オオアカマエアツバ						
1565			ニセアカマエアツバ						
1566			ミツオビキンアツバ						
1567			クロミツボシアツバ						
1568			ヒメクロアツバ						
1569			ウスイロカバシヤガ						
1570			カバシヤガ						
1571			オオカバシヤガ						
1572			アミメリンガ						
1573			マルモンシロガ						
1574			ハグルマトモエ						
1575			オスグロトモエ						
1576			スジキリヨトウ						
1577			ハスモンヨトウ						
1578			ホソツマキリアツバ						
1579			シロスジキノコヨトウ						
1580			ニセシロフコヤガ						
1581			ネモンシロフコヤガ						
1582			アヤシラフクチバ						
1583			シラフクチバ						
1584			キクキンウバ						
1585			オオシロテンアオヨトウ						
1586			オオホソバケンモン						
1587			リンゴケンモン						
1588			ゴマシケンモン						
1589			キハダケンモン						
1590			シロホシキシタヨトウ						
1591			シロオビクルマコヤガ						
1592	ナシケンモン								
1593	シロフアオヨトウ								
1594	シロモンヤガ								
1595	キシタミドリヤガ								
1596	クロフトビイロヤガ								
1597	ハコベヤガ								
1598	ハイイロキシタヤガ								
1599	ウスグロアツバ								
1600	ツマオビアツバ								
1601	キイロアツバ								
1602	ヒメコブヒゲアツバ								
1603	コトラガ								
1604	ハエ目	ガガンボ科	ヒメクシヒゲガガンボ						
1605			ネグロクシヒゲガガンボ						
1606			ベッコウガガンボ						
1607			オオキマダラヒメガガンボ						
1608			ミスジガガンボ						
1609			クチバシガガンボ						
1610			オオヒゲナガガガンボ						
1611			マダラクロヒメガガンボ						
1612			マエモンヒメガガンボ						
1613			ウスナミガタガガンボ						
1614			エソホソガガンボ						
1615			オオマキハガガンボ						
1616			キイロホソガガンボ						
1617			キリウジガガンボ						
1618			マダラガガンボ						

真名川ダム 陸上昆虫類確認種リスト

(19/30)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成11年 (1997)	平成16年 (2004)		
1619	(ハエ目)	(ガガンボ科)	ヒメキリウジガガンボ					
1620			ヤチガガンボ					
1621		コシボソガガンボ科	オビコシボソガガンボ					
1622		ケバエ科	ニセアシブトケバエ					
1623			メスアカアシボソケバエ					
1624			ハグロケバエ					
1625			ヒメセグロケバエ					
1626		コガシラアブ科	シバカウコガシラアブ					
1627			イトウセダカコガシラアブ					
1628			セダカコガシラアブ					
1629		シギアブ科	キアシキンシギアブ					
1630			キイロシギアブ					
1631		ミスアブ科	エソホソルリミスアブ					
1632			トゲナシミズアブ					
1633			ハラヒロミスアブ					
1634			ネグロミスアブ					
1635			ヒメネグロミスアブ					
1636			ハラキンミスアブ					
1637		アブ科	ホルバートアブ					
1638			イヨシロオビアブ					
1639			アカウシアブ					
1640			ヤマトアブ					
1641			ウシアブ					
1642		ムシヒキアブ科	トラフムシヒキ					
1643			イッシキイシアブ					
1644			アオメアブ					
1645			オオイシアブ					
1646			アメイロホソムシヒキ					
1647			オタネガウイシアブ					
1648			マカリケムシヒキ					
1649			シロズヒメムシヒキ					
1650			シオヤアブ					
1651			サキグロムシヒキ					
1652		ツリアブ科	コウヤツリアブ					
1653			ニトベハラボソツリアブ					
1654			スズキハラボソツリアブ					
1655			スキバツリアブ					
1656		アシナガバエ科	マダラアシナガバエ					
1657		オドリバエ科	ネウスオドリバエ					
1658		ハナアブ科	ツマグロコシボソハナアブ					
1659			ナガヒラタアブ					
1660			マダラコシボソハナアブ					
1661		キアシクロハナアブ						
1662		フタホシヒゲナガハナアブ						
1663		ヤマトヒゲナガハナアブ						
1664		ヒゲナガハナアブ						
1665		フタスジヒラタアブ						
1666		オビヒラタアブ						
1667		マルヒラタアブ						
1668		ホソヒラタアブ						
1669		キゴシハナアブ						
1670		シマハナアブ						
1671		ハナアブ						
1672		マドヒラタアブ						
1673		ナミホシヒラタアブ						
1674		アシフトハナアブ						
1675		ミケモモフトハナアブ						
1676		ムツモンホソヒラタアブ						
1677		ホシツヤヒラタアブ						
1678		カクホシツヤヒラタアブ						
1679		オビホソヒラタアブ						
1680		カオグロオビホソヒラタアブ						
1681		アリスアブ						
1682		シロスジナガハナアブ						
1683		シママメヒラタアブ						
1684		キアシマメヒラタアブ						
1685		ノヒラマメヒラタアブ						
1686		ニセキアシマメヒラタアブ						
1687		オオハナアブ						
1688		ハナダカハナアブ						
1689		ナガヒメヒラタアブ						
1690		ホソヒメヒラタアブ						
1691		ヒメヒラタアブ						
1692		スズキナガハナアブ					県要注目	
1693		キイロナミホシヒラタアブ						
1694		ベッコウハナアブ						
1695		ルリイロハナガハナアブ						
1696		ルリイロナガハナアブ						
1697		ハラアカナガハナアブ						
1698	メバエ科	マダラメバエ						
1699		チャイロフタオレメバエ						
1700		クロフタオレメバエ						
1701		ウスグロメバエ						
1702	ショウジョウバエ科	オオホシショウジョウバエ						
1703		ミナミコフキヒメショウジョウバエ						
1704		コフキヒメショウジョウバエ						
1705	シマバエ科	シモフリシマバエ						
1706		ヒラヤマシマバエ						
1707	ヒロクチバエ科	ダイズコンリョウバエ						
1708	デガシラバエ科	コマダラハチモドキバエ						



真名川ダム 陸上昆虫類確認種リスト

(20/30)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種	
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成11年 (1997)	平成16年 (2004)			
1709	(ハエ目)	ツヤホソバエ科	ヒトテントツヤホソバエ						
1710			クロハスジハマダラミバエ						
1711		ミバエ科	チャイロハススジハマダラミバエ						
1712			ヒラヤマアミメケバミバエ						
1713			ヨモギマルフシミバエ						
1714			ネジロクロミバエ						
1715			ミスジハマダラミバエ						
1716			ミスジミバエ						
1717			クロバエ科	キンバエ					
1718				ツマグロキンバエ					
1719			フンバエ科	アメイロオオフンバエ					
1720			ヤドリバエ科	シナヒラタヤドリバエ					
1721				マルボシヒラタヤドリバエ					
1722				クロツヤハリバエ					
1723				ウスグロハリバエ					
1724				クチナガハリバエ					
1725				ヨコジマオオハリバエ					
1726				セスジハリバエ					
1727	トガリハリバエ								
1728	シロオビハリバエ								
1729	コウチュウ目	ホソクビゴミムシ科		オオホソクビゴミムシ					
1730			コホソクビゴミムシ						
1731		オサムシ科	キイロチビゴモクムシ						
1732			アオグロヒラタゴミムシ						
1733			タンゴヒラタゴミムシ						
1734			ヒメツヤマルガタゴミムシ						
1735			ホシボシゴミムシ						
1736			ゴミムシ						
1737			ヒメゴミムシ						
1738			キベリゴモクムシ						
1739			ムネミソチビゴモクムシ						
1740			アキタクロナガオサムシ						
1741			スジミスアトキリゴミムシ						
1742			クロスカタキバゴミムシ						
1743			ガロアミスギワゴミムシ						
1744			オオアオミスギワゴミムシ						
1745			ヨツボシミスギワゴミムシ						
1746			アトモンミスギワゴミムシ						
1747			ヒメスジミスギワゴミムシ						
1748			ヒラタアオミスギワゴミムシ						
1749			キモンナガミスギワゴミムシ						
1750			ハマベミスギワゴミムシ						
1751			ツマキミスギワゴミムシ						
1752			キガシラアオアトキリゴミムシ						
1753			エゾカタヒロオサムシ						
1754			オオオサムシ						
1755			マヤサンオサムシ						
1756			ヤマトオサムシ						
1757			アカガネアオゴミムシ						
1758			コアトワアオゴミムシ						
1759			オオアトボシアオゴミムシ						
1760			アトボシアオゴミムシ						
1761			キボシアオゴミムシ						
1762			アオヘリアオゴミムシ					CR+EN	
1763			ムナヒロアトボシアオゴミムシ						
1764			コガシラアオゴミムシ						
1765			アトワアオゴミムシ						
1766			クロモリヒラタゴミムシ						
1767			チビモリヒラタゴミムシ						
1768			オオアオモリヒラタゴミムシ						
1769			ヤセモリヒラタゴミムシ						
1770			ハコネモリヒラタゴミムシ						
1771	ムラサキモリヒラタゴミムシ								
1772	ハラアカモリヒラタゴミムシ								
1773	イクビモリヒラタゴミムシ								
1774	キンモリヒラタゴミムシ								
1775	ハギキノコゴミムシ								
1776	ダイミョウアトキリゴミムシ								
1777	マイマイカブリ								
1778	ミスギワアトキリゴミムシ								
1779	ルリヒラタゴミムシ								
1780	セアカヒラタゴミムシ								
1781	ベーツホソアトキリゴミムシ								
1782	ホソアトキリゴミムシ								
1783	イクビホソアトキリゴミムシ								
1784	アオヘリホソゴミムシ								
1785	ムラサキスジアシゴミムシ								
1786	ベーツヒラタゴミムシ								
1787	スジアオゴミムシ								
1788	オオズケゴモクムシ								
1789	ヒメケゴモクムシ								
1790	アカアシマルガタゴモクムシ								
1791	コゴモクムシ								
1792	ケゴモクムシ								
1793	ヤマトトックリゴミムシ								
1794	キクピアアトキリゴミムシ								
1795	フタホシアトキリゴミムシ								
1796	アトグロシユウジアトキリゴミムシ								
1797	シユウジアトキリゴミムシ								
1798	ヤホシゴミムシ								

真名川ダム 陸上昆虫類確認種リスト

(21/30)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成11年 (1997)	平成16年 (2004)		
1799	(コウチュウ目)	(オサムシ科)	クロナガオサムシ					
1800			キノコゴミムシ					
1801			ノグチアオゴミムシ					
1802			ウスオビコムズギワゴミムシ					
1803			オオヒラタアトキリゴミムシ					
1804			ミツアナアトキリゴミムシ					
1805			キアシヌレチゴミムシ					
1806			カドツブゴミムシ					
1807			ホソチビゴミムシ					
1808			フタホシスジバネゴミムシ					
1809			オオヒラタゴミムシ					
1810			コヒラタゴミムシ					
1811			ホソヒラタゴミムシ					
1812			ムナビロナガゴミムシ					
1813			コガシラナガゴミムシ					
1814			キンナガゴミムシ					
1815			ヒョウゴナガゴミムシ					
1816			アシミノナガゴミムシ					
1817			ヨリトモナガゴミムシ					
1818			ケブカヒラタゴミムシ					
1819			ムネアカマメゴモクムシ					
1820			ニッポンツヤヒラタゴミムシ					
1821			キアシツヤヒラタゴミムシ					
1822			クロツヤヒラタゴミムシ					
1823			コクロツヤヒラタゴミムシ					
1824			オオクロツヤヒラタゴミムシ					
1825			ヒラタコムズギワゴミムシ					
1826			ヨツモンコムズギワゴミムシ					
1827			ヒラタキイロチビゴミムシ					
1828			ヒメツヤゴモクムシ					
1829			オオクロツヤゴモクムシ					
1830			クビアカツヤゴモクムシ					
1831			ナガツヤゴモクムシ					
1832			アカガネオオゴミムシ					
1833		ハンミョウ科	ハンミョウ					
1834			アイヌハンミョウ					
1835			ニワハンミョウ					
1836		ゲンゴロウ科	ホソセスジゲンゴロウ					
1837			チビゲンゴロウ					
1838			コシマゲンゴロウ					
1839			モンキマメゲンゴロウ					
1840			ヒメゲンゴロウ					
1841		コガシラミズムシ科	コガシラミズムシ					
1842		ガムシ科	ヤマトゴマフガムシ					
1843			ゴマフガムシ					
1844			アカケシガムシ					
1845			キバネケシガムシ					
1846			キベリヒラタガムシ					
1847			ガムシ					
1848			シジミガムシ					
1849		エンマムシ科	ヤマトエンマムシ					
1850			オオヒラタエンマムシ					
1851			コエンマムシ					
1852		デオキノコムシ科	コカメノコデオキノコムシ					
1853			ヒメデオキノコムシ					
1854			ヤマトデオキノコムシ					
1855			ヘリアカデオキノコムシ					
1856		シデムシ科	オオモモフトシデムシ					
1857			モモフトシデムシ					
1858			クロシデムシ					
1859			マエモンシデムシ					
1860			ヨツボシモンシデムシ					
1861			ウスイロオサシデムシ					
1862			コクロシデムシ					
1863		ハネカクシ科	ツヤケシブチヒゲハネカクシ					
1864			オサシデムシシモドキ					
1865			ヤマトシリグロハネカクシ					
1866			キイロツヤシデムシシモドキ					
1867			ハラビロハネカクシ					
1868			ハイイロハネカクシ					
1869			サキアカバナガハネカクシ					
1870			コアリガタハネカクシ					
1871			アリガタハネカクシ					
1872			アカバナガハネカクシ					
1873			サビイロモンキハネカクシ					
1874			オオサビイロモンキハネカクシ					
1875			サビハネカクシ					
1876			エゾアリガタハネカクシ					
1877			クロコガシラハネカクシ					
1878			クロガネハネカクシ					
1879			アカハハネカクシ					
1880			カラカネハネカクシ					
1881			キアシホソメダカハネカクシ					
1882			クロズマルクビハネカクシ					
1883		マルハナノミ科	イシハラチビマルハナノミ					
1884			ホソチビマルハナノミ					
1885			トビイロマルハナノミ					
1886		センチコガネ科	センチコガネ					
1887		クワガタムシ科	クワガタ					
1888			ミヤマクワガタ					

真名川ダム 陸上昆虫類確認種リスト

(22/30)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種	
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成11年 (1997)	平成16年 (2004)			
1889	(コウチュウ目)	(クワガタムシ科)	スジクワガタ						
1890			アカアシクワガタ						
1891			ノコギリクワガタ						
1892		コガネムシ科	コイチャコガネ						
1893			カブトムシ						
1894			ドウガネブイブイ						
1895			サクラコガネ						
1896			ツヤコガネ						
1897			ハンノヒメコガネ						
1898			ヒメコガネ						
1899			ケブカマダコガネ						
1900			カタモンコガネ						
1901			セマダラコガネ						
1902			オオヒラタハナムグリ						
1903			トゲヒラタハナムグリ						
1904			ヒメアシナガコガネ						
1905			ハナムグリ						
1906			アオハナムグリ						
1907			コヒゲシマヒロウドコガネ						
1908			ナガチャコガネ						
1909			ヒメトラハナムグリ						
1910			アカヒロウドコガネ						
1911			ヒロウドコガネ						
1912			ヒメヒロウドコガネ						
1913			オオヒロウドコガネ						
1914			マルガタヒロウドコガネ						
1915			オオスジコガネ						
1916			ヒメスジコガネ						
1917			コガネムシ						
1918			スジコガネ						
1919			ヒラタハナムグリ						
1920			コアオハナムグリ						
1921			ハイロヒロウドコガネ						
1922			オオトラフコガネ						
1923			キスジコガネ						
1924			マメコガネ						
1925			ヒゲナガヒロウドコガネ						
1926			ヤマトヒロウドコガネ						
1927			モモケヒロウドコガネ						
1928			ツヤチャイロコガネ						
1929			キラチャイロコガネ						
1930			ルイスチャイロコガネ						
1931			マツシタチャイロコガネ						
1932			トラハナムグリ						
1933			ヒメドロムシ科	キスジミゾドロムシ					
1934				ツヤドロムシ					
1935			ヒラタドロムシ科	ヒラタドロムシ					
1936			ナガハナノミ科	エダヒゲナガハナノミ					
1937			タマムシ科	ヒシモンナガタマムシ					
1938				アオナガタマムシ					
1939	ブドウナガタマムシ								
1940	アサキナガタマムシ								
1941	ケヤキナガタマムシ								
1942	ウグイスナガタマムシ								
1943	シロオビナカボソタマムシ								
1944	アラメホソツタマムシ								
1945	クスノチビタマムシ								
1946	ドワイロチビタマムシ								
1947	マルガタチビタマムシ								
1948	ヤナギチビタマムシ								
1949	ソーンターズチビタマムシ								
1950	ズミチビタマムシ								
1951	コメツクムシ科	クロフトヒラタコメツク							
1952		サビキコリ							
1953		ムナヒロサビキコリ							
1954		ヒメサビキコリ							
1955		ヒメクロコメツク							
1956		アカハラクロコメツク							
1957		アカアシクロコメツク							
1958		ダイミョウヒラタコメツク							
1959		クロツヤヒラタコメツク							
1960		クロハナコメツク							
1961		ドウガネヒラタコメツク							
1962		ミヤマベニコメツク							
1963		ニホンベニコメツク							
1964		キハネホソコメツク							
1965		ヨツキボシコメツク							
1966		カバイロコメツク							
1967		オオナガコメツク							
1968		ヒメキマダラコメツク							
1969		メスアカキマダラコメツク							
1970		ホソツヤケシコメツク							
1971		クロツヤハダコメツク							
1972		ルリツヤハダコメツク							
1973		チャグロヒサコメツク							
1974		ムラサキヒメカネコメツク							
1975		オオサビコメツク							
1976		アカアシオオクシコメツク							
1977		ヒゲコメツク							
1978		オオハナコメツク							

真名川ダム 陸上昆虫類確認種リスト

(23/30)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種	
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成11年 (1997)	平成16年 (2004)			
1979	(コウチュウ目)	(コメツキムシ科)	ヒメホソキコメツキ						
1980			クチブトコメツキ						
1981		オオツヤハダコメツキ							
1982		ミドリヒメコメツキ							
1983		ジョウカイボン科	ムネアカクロジョウカイ						
1984			クロジョウカイ						
1985			ウスチャジョウカイ						
1986			セスジジョウカイ						
1987			クラヤミジョウカイ						
1988			ジョウカイボン						
1989			セボシジョウカイ						
1990			ヒメジョウカイ						
1991			クビボシジョウカイ						
1992			ミヤマクビボシジョウカイ						
1993			ヒメクビボシジョウカイ						
1994			ウスイロクビボシジョウカイ						
1995			マルムネジョウカイ						
1996			アオジョウカイ						
1997			キンイロジョウカイ						
1998			カタキンイロジョウカイ						
1999	キペリコバナジョウカイ								
2000	ムネアカジョウカイ								
2001	ホタル科		ムネクリイロボタル						
2002			カタモンミナミボタル						
2003		オバボタル							
2004		ゲンジボタル							
2005		ヘイケボタル							
2006		クロマドボタル							
2007	ベニボタル科	ネアカクロベニボタル							
2008		カクムネクロベニボタル							
2009		コクロハナボタル							
2010		ベニボタル							
2011		カクムネベニボタル							
2012		ミヤマクシヒゲベニボタル							
2013		アカゲハナボタル							
2014		クロアミボタル							
2015	ホタルモドキ科	ホソボタルモドキ							
2016	カッコウムシ科	ホソカッコウムシ							
2017		キオビナガカッコウムシ							
2018		ツマグロツツカッコウムシ							
2019		キムネツツカッコウムシ							
2020		イガラシカッコウムシ							
2021		コアジョウカイモドキ							
2022	ジョウカイモドキ科	ケシジョウカイモドキ							
2023		キアシオビジョウカイモドキ							
2024		ツマキアジョウカイモドキ							
2025	コクヌスト科	チビコクヌスト							
2026		セダカコクヌスト							
2027	クスイモドキ科	クスイモドキ							
2028	テントウムシ科	カメノコテントウ							
2029		シロトホシテントウ							
2030		ムーアシロホシテントウ							
2031		シロジュウシホシテントウ							
2032		シロジュウゴホシテントウ							
2033		ヒメアカホシテントウ							
2034		ナナホシテントウ							
2035		マクガタテントウ							
2036		トホシテントウ							
2037		ヤマトアザミテントウ							
2038		オオニジュウヤホシテントウ							
2039		ナミテントウ							
2040		ショウサンホシテントウ							
2041		ツマフタホシテントウ							
2042		フタホシテントウ							
2043		キイロテントウ							
2044		セスジヒメテントウ							
2045		ヒメカメノコテントウ							
2046		コカメノコテントウ							
2047		ハレヤヒメテントウ							
2048		ベニヘリテントウ							
2049		ハバヒメテントウ							
2050		チョウジョウヒメテントウ							
2051		オニヒメテントウ							
2052		クロヒメテントウ							
2053		カワムラヒメテントウ							
2054		コクロヒメテントウ							
2055		クロツヤテントウ							
2056		シロホシテントウ							
2057		ヒラタムシ科	キボシチビヒラタムシ						
2058	テントウムシダマシ科	ヨツボシテントウダマシ							
2059		カタベニケブカテントウダマシ							
2060		ルリテントウダマシ							
2061		キボシテントウダマシ							
2062	オオキノコムシ科	カタモンオオキノコ							
2063		シベリアチビオオキノコ							
2064		カタベニチビオオキノコ							
2065	コメツキモドキ科	キムネヒメコメツキモドキ							
2066		ツマグロヒメコメツキモドキ							
2067		ルイスコメツキモドキ							
2068		クロアシコメツキモドキ							

真名川ダム 陸上昆虫類確認種リスト

(24/30)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種	
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成11年 (1997)	平成16年 (2004)			
2069	(コウチュウ目)	ケシキスイ科	クロモンクゲケシキスイ						
2070			クロハナケシキスイ						
2071			ホソキヒラタケシキスイ						
2072			カクムネケシキスイ						
2073			モンチビヒラタケシキスイ						
2074			ヨツボシケシキスイ						
2075			ネアカマルケシキスイ						
2076			マルヒラタケシキスイ						
2077			キノコヒラタケシキスイ						
2078			ウスグロキハケシキスイ						
2079			クロキマダラケシキスイ						
2080			ミジンムシモドキ科	ミジンムシモドキ					
2081			ヒメハナムシ科	ベニモンアシナガヒメハナムシ					
2082			ネスイムシ科	ヤマトネスイ					
2083			ニセクビボソムシ科	ヤマトニセクビボソムシ					
2084			クチキムシ科	オオクチキムシ					
2085				クチキムシ					
2086				ウスイロクチキムシ					
2087				クロツヤバネクチキムシ					
2088				フナガククチキムシ					
2089	アリモドキ科	ヘリアカアリモドキ							
2090		ホソクビアリモドキ							
2091		コクビボソムシ							
2092		キアシクビボソムシ							
2093		ケナガクビボソムシ							
2094		ミヤマホソアリモドキ							
2095		ヨツボシホソアリモドキ							
2096		クロホシホソアリモドキ							
2097	クビナガムシ科	クビナガムシ							
2098	ホソカタムシ科	ツヤナガヒラタホソカタムシ							
2099		マダラホソカタムシ							
2100	ハムシダマシ科	アオハムシダマシ							
2101		ハムシダマシ							
2102		ナガハムシダマシ							
2103	ナガクチキムシ科	フタオビホソナガクチキ							
2104		ヨツボシヒメナガクチキ							
2105		アオバナガクチキ							
2106		キスジナガクチキ							
2107		アオオビナガクチキ							
2108		モモキホソナガクチキ							
2109		キオビホソナガクチキ							
2110		クロホソナガクチキ							
2111		ツチハンミョウ科	マメハンミョウ						
2112			ヒメツチハンミョウ						
2113	キイロゲンセイ								
2114	ハナノミ科	キンオビハナノミ							
2115	コキノコムシ科	クロコキノコムシ							
2116	カミキリモドキ科	ハネアカカミキリモドキ							
2117		アオグロカミキリモドキ							
2118		モモフトカミキリモドキ							
2119		キアシカミキリモドキ							
2120		マダラカミキリモドキ							
2121		ハラグロカミキリモドキ							
2122		キイロカミキリモドキ							
2123		キバナカミキリモドキ							
2124		アオカミキリモドキ							
2125		アカハネムシ科	オオクシヒゲピロウドムシ						
2126			ムナグロオニアカハネムシ						
2127			オニアカハネムシ						
2128			ムナピロアカハネムシ						
2129			アカハネムシ						
2130	チビキカワムシ科	オオクチキムシダマシ							
2131	ヒラタナガクチキムシ科	ヒメコメツキガタナガクチキ							
2132		ナガニジゴミムシダマシ							
2133	ゴミムシダマシ科	モンキゴミムシダマシ							
2134		コマルキマワリ							
2135		コスタゴミムシダマシ							
2136		スナゴミムシダマシ							
2137		ホソスナゴミムシダマシ							
2138		ヒメカクスナゴミムシダマシ							
2139		クロホソゴミムシダマシ							
2140		ヒメキマワリ							
2141		キマワリ							
2142		ヒメナガキマワリ							
2143		ニジゴミムシダマシ							
2144		ヨツゴブゴミムシダマシ							
2145		エクリゴミムシダマシ							
2146		カミキリムシ科	ピロウドカミキリ						
2147			センノカミキリ						
2148			ニセピロウドカミキリ						
2149			ミヤマクロハチカミキリ						
2150			ゴマダラカミキリ						
2151	シナノクロフカミキリ								
2152	コブスジサビカミキリ								
2153	シロスジカミキリ								
2154	ヒメアカハチカミキリ								
2155	クロトラカミキリ								
2156	エグリトラカミキリ								
2157	シラケトラカミキリ								
2158		ハイイロツツクビカミキリ							

真名川ダム 陸上昆虫類確認種リスト

(25/30)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成11年 (1997)	平成16年 (2004)		
2159	(コウチュウ目)	(カミキリムシ科)	キスジトラカミキリ					
2160			トゲヒゲトラカミキリ					
2161			ホタルカミキリ					
2162			ヒナルリハナカミキリ					
2163			ホソカミキリ					
2164			ヨツキボシカミキリ					
2165			ハンノアオカミキリ					
2166			シラホシカミキリ					
2167			ミヤマホソハナカミキリ					
2168			マルガタハナカミキリ					
2169			キバネニセハムシハナカミキリ					
2170			ヤツボシハナカミキリ					
2171			ヨツスジハナカミキリ					
2172			オオヨツスジハナカミキリ					
2173			ウスバカミキリ					
2174			オニグルミノキモンカミキリ					
2175			キモンカミキリ					
2176			マヤサンコブヤハズカミキリ					
2177			カタシロゴマフカミキリ					
2178			ナガゴマフカミキリ					
2179			ゴマフカミキリ					
2180			クワサビカミキリ					
2181			ヒメヒゲナガカミキリ					
2182			ヘリグロリンゴカミキリ					
2183			ムネグロリンゴカミキリ					
2184			リンゴカミキリ					
2185			ソボリンゴカミキリ					
2186			ホソキリンゴカミキリ					
2187			シロトラカミキリ					
2188			ホソハナカミキリ					
2189			ニンフホソハナカミキリ					
2190			ニセシラホシカミキリ					
2191			キクスイカミキリ					
2192			チャイロヒメハナカミキリ					
2193			セスジヒメハナカミキリ					
2194			ミワヒメハナカミキリ					
2195			シラネヒメハナカミキリ					
2196			フタオビチビハナカミキリ					
2197			ナガバヒメハナカミキリ					
2198			ニセヨコモヒメハナカミキリ					
2199			ネジロカミキリ					
2200			チャボハナカミキリ					
2201			クリサビカミキリ					
2202			トガリシロオビサビカミキリ					
2203			アトモンサビカミキリ					
2204			エゾサビカミキリ					
2205			アトジロサビカミキリ					
2206			ヘリグロベニカミキリ					
2207			ヒメクローラカミキリ					
2208			フタオビアラゲカミキリ					
2209			ヒトオビアラゲカミキリ					
2210			トゲバカミキリ					
2211			ルリボシカミキリ					
2212			クロカミキリ					
2213			トワダムモンメダカカミキリ					
2214			アオハホソハナカミキリ					
2215			シロオビチビカミキリ					
2216			モモグロハナカミキリ					
2217			ヤハズカミキリ					
2218			アカガネサルハムシ					
2219			キクピアオハムシ					
2220			ハンノキハムシ					
2221			カミナリハムシ					
2222			スジカミナリハムシ					
2223			コカミナリハムシ					
2224			ツブミハムシ					
2225			オオキイロマルノミハムシ					
2226			アカイロマルノミハムシ					
2227			ムナグロツヤハムシ					
2228			オオキイロノミハムシ					
2229			ウリハムシモドキ					
2230			ウリハムシ					
2231			クロウリハムシ					
2232			チャイロサルハムシ					
2233			アオバナサルハムシ					
2234			ムネアカサルハムシ					
2235			サムライマメゾウムシ					
2236			ネムノキマメゾウムシ					
2237			アスキマメゾウムシ					
2238			ハラグロヒメハムシ					
2239			ルリヒラタヒメハムシ					
2240			オオルリヒメハムシ					
2241			ヒメジンガサハムシ					
2242			カメノコハムシ					
2243			ヒメカメノコハムシ					
2244			アオカメノコハムシ					
2245			コガタカメノコハムシ					
2246			ヒメドウガネトビハムシ					
2247			ヒサゴトビハムシ					
2248			ムシクソハムシ					

真名川ダム 陸上昆虫類確認種リスト

(26/30)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成11年 (1997)	平成16年 (2004)		
2249	(コウチュウ目)	(ハムシ科)	ヨモギハムシ					
2250			ハッカハムシ					
2251			ヤナギハムシ					
2252			ウエツキブナハムシ					
2253			ヨツボシナガツハムシ					
2254			キムネアオハムシ					
2255			イモサルハムシ					
2256			ミドリトビハムシ					
2257			バラルリツツハムシ					
2258			キアシルリツツハムシ					
2259			タテスジキツツハムシ					
2260			ヨツモンクロツツハムシ					
2261			カシワツツハムシ					
2262			クロボシツツハムシ					
2263			キペリトゲハムシ					
2264			マダラアラゲサルハムシ					
2265			カサハラハムシ					
2266			クワハムシ					
2267			イタドリハムシ					
2268			スグロアカハムシ					
2269			ムツキボシハムシ					
2270			クルミハムシ					
2271			ミヤマヒラタハムシ					
2272			スグロキハムシ					
2273			コガタリハムシ					
2274			サクラムジハムシ					
2275			ヤツボシハムシ					
2276			フジハムシ					
2277			ヒゲナガルリマルノミハムシ					
2278			クロトゲハムシ					
2279			クロセスジハムシ					
2280			ルリクビボソハムシ					
2281			キオビクビボソハムシ					
2282			スゲクビボソハムシ					
2283			アカクビボソハムシ					
2284			ヤマイモハムシ					
2285			ホソクビナガハムシ					
2286			アカクビナガハムシ					
2287			ルリハムシ					
2288			クロウスバハムシ					
2289			コフキサルハムシ					
2290			フタスジヒメハムシ					
2291			ホタルハムシ					
2292			ムネアカウスイロハムシ					
2293			ヒメウスイロハムシ					
2294			キイロクワハムシ					
2295			モンキアシナガハムシ					
2296			ルリマルノミハムシ					
2297			コマルノミハムシ					
2298			ドウガネツヤハムシ					
2299			アオグロツヤハムシ					
2300			ヒメツヤハムシ					
2301			フタクサハムシ					外来種
2302			ハギツツハムシ					
2303			ヒメキバネサルハムシ					
2304			アトボシハムシ					
2305			チャバネツヤハムシ					
2306			ヤナギルリハムシ					
2307			フタホシオオノミハムシ					
2308			クビボソトビハムシ					
2309			イタヤハムシ					
2310			ニレハムシ					
2311			アカタデハムシ					
2312			エノキハムシ					
2313			ドウガネサルハムシ					
2314			キボシルリハムシ					
2315			キイロナガツツハムシ					
2316			ムナキルリハムシ					
2317			アケビタマノミハムシ					
2318			ツマキタマノミハムシ					
2319			ムネアカタマノミハムシ					
2320			キイロタマノミハムシ					
2321			チビウスバハムシ					
2322			ルリウスバハムシ					
2323			ヒゲナガウスバハムシ					
2324			クロバヒゲナガハムシ					
2325			イチモンジカメノコハムシ					
2326			トビサルハムシ					
2327			キカサハラハムシ					
2328			ワモンナガハムシ					
2329			アラハダトビハムシ					
2330			ガマズミトビハムシ					
2331		ヒゲナガソウムシ科	キスジヒゲナガソウムシ					
2332			エグリバネヒゲナガソウムシ					
2333			キノコヒゲナガソウムシ					
2334			エグリコブヒゲナガソウムシ					
2335			カオジロヒゲナガソウムシ					
2336			キマダラヒゲナガソウムシ					
2337		ホソクチソウムシ科	マメホソクチソウムシ					
2338		オトシブミ科	チャイロチョッキリ					

真名川ダム 陸上昆虫類確認種リスト

(27/30)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種	
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成11年 (1997)	平成16年 (2004)			
2339	(コウチュウ目)	(オトシブミ科)	ウスモンオトシブミ						
2340			ヒメクロオトシブミ						
2341			セアカヒメオトシブミ						
2342			ムツモンオトシブミ						
2343			ウスアカオトシブミ						
2344			ブドウハマキチョッキリ						
2345			ベニホシハマキチョッキリ						
2346			コナライクビチョッキリ						
2347			ルリホソチョッキリ						
2348			ナラルリオトシブミ						
2349			ケシルリオトシブミ						
2350			カシルリオトシブミ						
2351			リュイスアシナガオトシブミ						
2352			ピロウドアシナガオトシブミ						
2353			オオケブカチョッキリ						
2354			ヒメケブカチョッキリ						
2355			ハイロチョッキリ						
2356			ヒゲナガオトシブミ						
2357			ゴマダラオトシブミ						
2358			アシナガオトシブミ						
2359			ヒメコブオトシブミ						
2360			モモチョッキリ						
2361			ゾウムシ科	チビデオゾウムシ					
2362				アトジロカレキゾウムシ					
2363				ウスモンカレキゾウムシ					
2364				トゲアシゾウムシ					
2365				イチゴハナゾウムシ					
2366				シラホシヒメゾウムシ					
2367				エゾヒメゾウムシ					
2368				マダラヒメゾウムシ					
2369				カナムグラサルゾウムシ					
2370				クロタマゾウムシ					
2371				ハスジゾウムシ					
2372				コナラシギゾウムシ					
2373				クロシギゾウムシ					
2374				クリシギゾウムシ					
2375	ヤノシギゾウムシ								
2376	チビクチカクシゾウムシ								
2377	タバゲサザラゾウムシ								
2378	ヒメシロコブゾウムシ								
2379	モンイネゾウモドキ								
2380	ヤナギイネゾウモドキ								
2381	アカイネゾウモドキ								
2382	フタアナアキゾウムシ								
2383	タマゴゾウムシ								
2384	マダラアシゾウムシ								
2385	クワゾウムシ								
2386	シロコブゾウムシ								
2387	コブキゾウムシ								
2388	アシナガオニゾウムシ								
2389	チャバネキクイゾウムシ								
2390	タデサルゾウムシ								
2391	クロトゲサルゾウムシ								
2392	フタバアナアキゾウムシ								
2393	マツアナアキゾウムシ								
2394	ハラクロノコギリゾウムシ								
2395	コボウゾウムシ								
2396	オオゴボウゾウムシ								
2397	ハバスケヒメゾウムシ								
2398	ハスジカツオゾウムシ								
2399	ナガカツオゾウムシ								
2400	カツオゾウムシ								
2401	アイノカツオゾウムシ								
2402	ウスアオクチフトゾウムシ								
2403	オオクチフトゾウムシ								
2404	マダラメカクシゾウムシ								
2405	アラムネクチカクシゾウムシ								
2406	キスジアシナガゾウムシ								
2407	オジロアシナガゾウムシ								
2408	トゲハラヒラセクモゾウムシ								
2409	ヒラセクモゾウムシ								
2410	キボシコハンゾウムシ								
2411	ケブカクチフトゾウムシ								
2412	カシウクチフトゾウムシ								
2413	クロホシクチフトゾウムシ								
2414	ワシバナヒメキクイゾウムシ								
2415	リンゴコブキゾウムシ								
2416	ヒラズネヒゲボソゾウムシ								
2417	リンゴヒゲナガゾウムシ								
2418	クチフトヒゲボソゾウムシ								
2419	手ビスグリゾウムシ								
2420	クロクチフトサルゾウムシ								
2421	ガロアノミゾウムシ								
2422	クワヒョウタンゾウムシ								
2423	チビコフキゾウムシ								
2424	オオクチカクシゾウムシ								
2425	ミツオビヒメクモゾウムシ								
2426	ナガキクイムシ科	カシノナガキクイムシ							
2427	オサゾウムシ科	トホシオサゾウムシ							
2428		オオゾウムシ							



真名川ダム 陸上昆虫類確認種リスト

(28/30)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成11年 (1997)	平成16年 (2004)		
2429	(コウチュウ目)	キクイムシ科	ミカドキクイムシ					
2430	ハチ目	ミフシハバチ科	ニホンチュウレンジ					
2431			ルリチュウレンジ					
2432		コンボウハバチ科	フトオビコンボウハバチ					
2433		ハバチ科	ウンモンアシナガハバチ					
2434			ハグロハバチ					
2435			メスグロシダハバチ					
2436			ウツギハバチ					
2437			セグロカブラハバチ					
2438			カブラハバチ					
2439			クロムネハバチ					
2440			ヒゲナガハバチ					
2441			コマルクロハバチ					
2442			クロハバチ					
2443			チャイロハバチ					
2444			ルイスアカマルハバチ					
2445			コシマハバチ					
2446			ミネヤナキタマハバチ					
2447			セマダラハバチ					
2448			オオコシアカハバチ					
2449			ツノキクロハバチ					
2450			ツマジロクロハバチ					
2451			モンククロハバチ					
2452			アオメツマグロハバチ					
2453			ヤマブキハバチ					
2454			コシアキハバチ					
2455			ハラナガハバチ					
2456		クロムネアオハバチ						
2457		クキバチ科	バラクキバチ					
2458		コマコバチ科	ヨコハママダラコマコバチ					
2459		ヒメバチ科	クロハラヒメバチ					
2460			クロモンアメバチ					
2461			ムラサキウスアメバチ					
2462			シコクホシアメバチ					
2463			ベッコウアメバチモドキ					
2464			アゲハヒメバチ					
2465	アカエグリヒメバチ							
2466	アシブトコバチ科	キアシブトコバチ						
2467	セイボウ科	ホソセイボウ						
2468		リンネセイボウ						
2469		ツمامラサキセイボウ						
2470		オオセイボウ						
2471	アリ科	アシナガアリ						
2472		オオハリアリ						
2473		クロオオアリ						
2474		ミカドオオアリ						
2475		ナウヨツボシオオアリ						
2476		ケブカツヤオオアリ					県VU	
2477		ヒラスオオアリ						
2478		ムネアカオオアリ						
2479		ヨツボシオオアリ						
2480		ホソウメマツオオアリ						
2481		ケブカクロオオアリ						
2482		クボミシリアゲアリ						
2483		キイロシリアゲアリ						
2484		ハヤシクロヤマアリ						
2485		クロヤマアリ						
2486		エゾアカヤマアリ					県VU	
2487		シベリアカタアリ						
2488		ヒメトビロケアリ						
2489		クロクサアリ						
2490		トビロケアリ						
2491		ヒゲナガケアリ						
2492		クサアリモドキ						
2493		ムネボソアリ						
2494		シワクシケアリ						
2495		アメイロアリ						
2496		アズマオオズアリ						
2497		トゲアリ						
2498	アミアリ							
2499	トビイロシワアリ							
2500	ドロバチ科	ケブカスジドロバチ						
2501		オオフタオビドロバチ本土亜種						
2502		ハグロフタオビドロバチ					県CR+EN	
2503		フタスジスズバチ						
2504		ミカドトックリバチ						
2505		キアシトックリバチ						
2506		ムモントックリバチ						
2507		サムライトックリバチ						
2508		カバオビドロバチ						
2509		オオカバフドロバチ						
2510		スズバチ						
2511		カバフドロバチ						
2512		カタグロチビドロバチ						
2513		チビドロバチ						
2514	ムナグロチビドロバチ							
2515	ハラナガハムシドロバチ							
2516	スズメバチ科	ムモンホソアシナガバチ						
2517		トウヨウホソアシナガバチ						
2518		ヤマトアシナガバチ						

真名川ダム 陸上昆虫類確認種リスト

(29/30)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成11年 (1997)	平成16年 (2004)		
2519	(ハチ目)	(スズメバチ科)	キボシアシナガバチ					
2520			キアシナガバチ					
2521			コアシナガバチ					
2522			コガタスズメバチ					
2523			オオスズメバチ					
2524			キイロスズメバチ					
2525		ヒメスズメバチ						
2526		クロスズメバチ						
2527		ベッコウバチ科	ヤマトクロベッコウ					
2528			ミカドクロベッコウ					
2529			リュウキュウクロベッコウ					
2530			オオモンクロベッコウ					
2531			ヒメベッコウ					
2532			ハナナガヒメベッコウ					
2533			クロハヒメベッコウ					
2534			<i>Auplopus pygialis</i>					
2535			スキハラベッコウ					
2536			コフタスジベッコウ					
2537			オオシロフベッコウ					
2538			キバネトゲアシベッコウ					
2539			トゲアシオオベッコウ					
2540			カオコフトゲアシベッコウ					
2541		アリバチ科	ミカドアリバチ					
2542			アリバチモドキ					
2543		コツチバチ科	ヤマコツチバチ					
2544			マメコガネコツチバチ					
2545	アカハコツチバチ							
2546	ニカコツチバチ							
2547	ツチバチ科	ヒメハラナガツチバチ						
2548		アカスジツチバチ						
2549		キオビツチバチ						
2550	アナバチ科	ヤマジガバチ						
2551		オオアウフキバチ						
2552		ヒメツチスガリ						
2553		ナミツチスガリ						
2554		ニッポンツチスガリ						
2555		ルリジガバチ						
2556		アタマギンギチ						
2557		カタゲギンギチ						
2558		ミスジアウフキバチ						
2559		アルマンアナバチ						
2560		キバネアナバチ						
2561		コクロアナバチ						
2562		クビワギンギチ						
2563		ヒメコオロギバチ						
2564		ワモンイスカバチ						
2565		アバタアリマキバチ						
2566		オオグシアリマキバチ						
2567		カオキンブセン						
2568		ジンムブセン						
2569		オオアゴマエダテ						
2570		クロアシマエダテ						
2571		ニッコウマエダテ						
2572		クロギンギチ						
2573		コシジロギンギチ						
2574		コイケギンギチ						
2575		ニッポンモンキジガバチ						
2576	フクイアナバチ					NT、県NT		
2577	オオハヤバチ							
2578	ニッポンジガバチモドキ							
2579	ナミジガバチモドキ							
2580	ヒメハナバチ科	アキツシマヒメハナバチ						
2581		アブラナマヒメハナバチ						
2582		アトヒラアシヒメハナバチ						
2583		ホオナガヒメハナバチ						
2584		カグヤマヒメハナバチ						
2585		キバナヒメハナバチ						
2586		ミカドヒメハナバチ						
2587		アキノヤマヒメハナバチ						
2588		ミヤモトヒメハナバチ						
2589		クロツヤヒメハナバチ						
2590		タカチホヒメハナバチ						
2591		コガタウツギヒメハナバチ						
2592		ワタセヒメハナバチ						
2593		コシブトハナバチ科	スジボソコシブトハナバチ					
2594	ケフカハナバチ							
2595	キオビツヤハナバチ							
2596	ヤマトツヤハナバチ							
2597	クロツヤハナバチ							
2598	シロモンヤドリハナバチ							
2599	キンランキマダラハナバチ							
2600	ダイミョウキマダラハナバチ							
2601	カオモンキマダラハナバチ							
2602	ニッポンキマダラハナバチ							
2603	ナシモンキマダラハナバチ							
2604	コキマダラハナバチ							
2605	タイチョウキマダラハナバチ							
2606	ミツクリヒゲナガハナバチ							
2607	ルリモンハナバチ							
2608	クマバチ							

真名川ダム 陸上昆虫類確認種リスト

(30/30)

No.	確認種			調査年度			重要種	外来種		
	目名	科名	種名	平成4-5年 (1992-3)	平成11年 (1997)	平成16年 (2004)				
2609	(ハチ目)	ミツバチ科	ニホンミツバチ							
2610			セイヨウミツバチ						外来種	
2611			コマルハナバチ							
2612			トラマルハナバチ							
2613			オオマルハナバチ							
2614		クロマルハナバチ								
2615		ムカシハナバチ科	アシフトムカシハナバチ							
2616			スミスチビムカシハナバチ							
2617			ニッポンチビムカシハナバチ							
2618			ヤマノチビムカシハナバチモドキ							
2619		コハナバチ科	アカガネコハナバチ							
2620			ツマルコハナバチ							
2621			ニジロコハナバチ							
2622			シオカワコハナバチ							
2623			ネッタイコハナバチ							
2624			エブマーツヤコハナバチ							
2625			ニッポンチビコハナバチ							
2626			エゾカタコハナバチ							
2627			サビロカタコハナバチ							
2628			ニッポンカタコハナバチ							
2629			シロスジカタコハナバチ							
2630			オオエチビコハナバチ							
2631			<i>Lasioglossum pallilomum</i>							
2632			ヒラシマチビコハナバチ							
2633			ツヤチビコハナバチ							
2634			アオスジハナバチ							
2635			フクイハラアカハナバチ							
2636			ミスホハラアカハナバチ							
2637			マルヤマハラアカハナバチ							
2638			ヤマトハラアカハナバチ							
2639			オクエツハラアカハナバチ							
2640			エサキハラアカハナバチ							
2641			ハキリバチ科	オオハキリバチ						
2642				ヒメガリハナバチ						
2643				ヤノガリハナバチ						
2644				ハラアカハキリバチヤドリ						
2645				スミスハキリバチ						
2646				キヌゲハキリバチ						
2647		ザカガミハキリバチ								
2648		バラハキリバチモドキ								
2649		ムナカタハキリバチ								
確認種数				15目168科1214種	15目193科1650種 16目252科2649種	16目226科1804種	15種	5種		

注1)重要種のカテゴリー

CR+EN:「哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物 及び植物 のレッドリストの見直しについて」(環境省, 2007) 絶滅危惧 類  
 NT:「哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物 及び植物 のレッドリストの見直しについて」(環境省, 2007) 準絶滅危惧  
 県CR+EN:「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(動物編)-」(福井県, 2002) 絶滅危惧I類  
 県VU:「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(動物編)-」(福井県, 2002) 絶滅危惧II類  
 県NT:「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(動物編)-」(福井県, 2002) 準絶滅危惧  
 県要注目:「福井県の絶滅のおそれのある野生動物-福井県レッドデータブック(動物編)-」(福井県, 2002) 要注目

注2)外来種

外来種:「外来種ハンドブック」(日本生態学会, 2002)掲載種

注3)\*1:種の分布状況から記載ミスと考えられる。

## 7 . 水源地域動態

## 7. 水源地域動態

### 7.1 水源地域の概況

#### 7.1.1 水源地域の概要

九頭竜川流域は、福井県嶺北地方の7市4町（大野市と旧和泉村が合併、福井市と旧清水町、旧美山町が合併、旧芦原町と旧金津町が合併しあわら市、旧坂井町と旧春江町、旧丸岡町、旧三国町が合併し坂井市、旧朝日町と旧織田町、旧宮崎村が合併し越前町、旧今立町と旧武生市が合併し越前市、旧南条町と旧今庄町、旧河野村が合併し南越前町、旧上志比村と旧永平寺町、旧松岡町が合併し永平寺町、勝山市、鯖江市）を中心に、岐阜県郡上市石徹白地区（旧白鳥町）を含め2県の8市4町にまたがっている。

九頭竜川の流域では、古代から人々の生活の跡が、いろいろな地区で見られる。流域での生活の様子は、九頭竜川本川、日野川、足羽川の三大河川がもたらす恵み多い自然の中で、大和や京都の影響を受けながら風土に根ざした文化を育み、歴史を刻んできた姿を数多い遺跡や古墳、文化財などから窺い知ることができる。

現在は、福井平野を中心に武生盆地や大野盆地などで市街地の拡大伸展が見られる。人口は、福井平野を中心とした西側の市町で増加傾向にあり、東側の山間部市町では減少傾向が見られる。西側市町の核は、商業・サービス業を中心とする福井市、工業や商業を中心とする鯖江市と越前市である。また、農業は福井平野を中心として展開されており、東側山間部市町村では若干の工業の展開が見られるものの、林業の不振もあって過疎化が進みつつある。

大野市域の80%を占める森林がもたらす「水」は、名水百選御清水に代表されるように、本市の大きな魅力となっている。清らかで豊かな水は、農業をはじめ素晴らしい食文化を育んできたほか、地場産業である繊維工業の振興にも大きな役割を果たしてきた。

一方、市街地は戦国時代からの町割りが色濃く残り、城下町の風情が味わえる歴史と文化に満ちた空間となっている。今日まで脈々と受け継がれてきた幕末の大野藩に代表される進取の精神や、シンボルの亀山、越前大野城、寺町などは市民の誇りである。

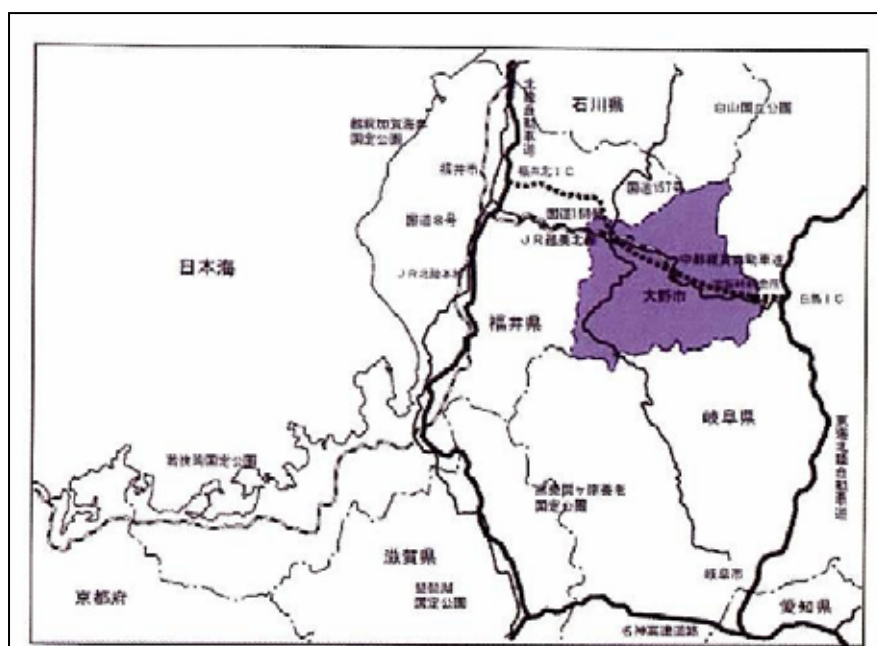
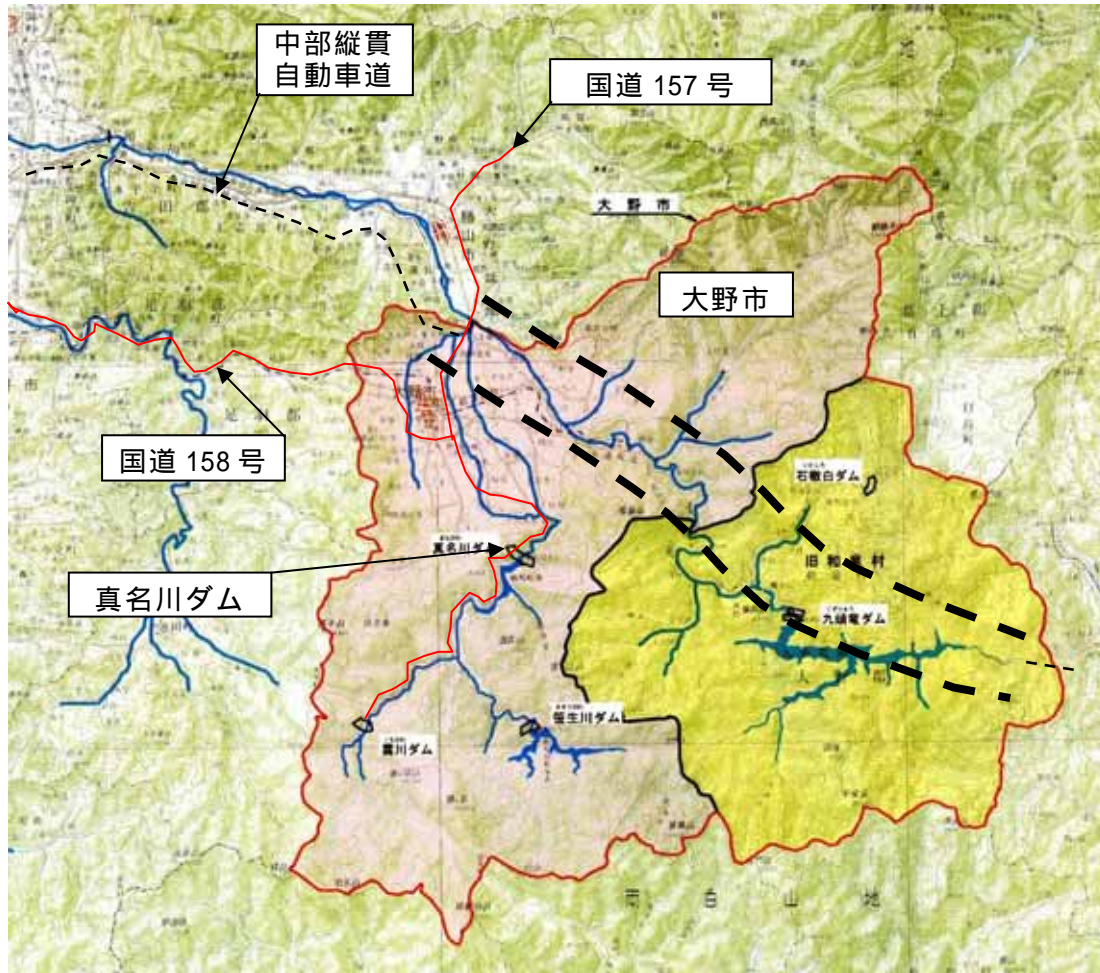


図 7.1 - 1 水源地域の概要図

### 7.1.2 ダムの立地条件

真名川ダムへのアクセス道路である国道 157 号、158 号は、北陸、中部経済圏の産業、文化の交流を図る幹線道路で地域の振興に欠かすことのできない道路である。なお、真名川ダムには、この道路を利用して行く。

現在、中部縦貫自動車道路が建設中（一部開通）で、これが完成すれば福井県の東玄関口となる奥越前にとっては、地域活性化の強力な起爆剤として期待されている。



#### 交通アクセス（大野まで）

東京から

- JR/東海道新幹線・北陸特急で
- 飛行機/羽田 - 小松 - 福井（バス）
- 高速バス/東京駅八重洲南口 - 福井

大阪から

- JR/湖西線特急で
- 自動車/名神・北陸自動車道で

名古屋から

- JR/北陸線特急で
- 高速バス/名鉄バスセンターJR 名古屋駅 - 福井

福井まで

- 3 時間 24 分
- 約 2 時間 15 分
- 約 8 時間 10 分

大野まで

- 1 時間 44 分
- 約 3 時間

- 2 時間
- 約 2 時間 30 分

- ・ JR 越美北線で  
約 1 時間
- ・ 京福バス大野線で  
約 1 時間

## 7.2 ダム事業と地域社会情勢の変遷

### (1) 水源地域の人口・世帯数の推移

真名川ダム水源地域である旧大野市の人口・世帯数の推移を表 7.2 - 1、図 7.2 - 1 に示す。

昭和 40 年から 45 年にかけて約 2000 人の人口が減少した。それ以降、ダム建設時期を含む昭和 60 年までは横ばい状況が続き、平成以降減少が顕著になってきた。それに対し世帯数は大幅に増加しており、核家族化が進行しているものと考えられる。

表 7.2 - 1 真名川ダム水源地域の人口・世帯数の推移

	S40	S45	S50	S55	S60	H2	H7	H12	H17
旧大野市(人)	43,747	42,241	41,918	41,901	41,926	40,991	40,245	38,880	37,173
世帯数(戸)	9,729	10,090	10,306	10,334	10,485	10,463	10,538	10,829	10,934

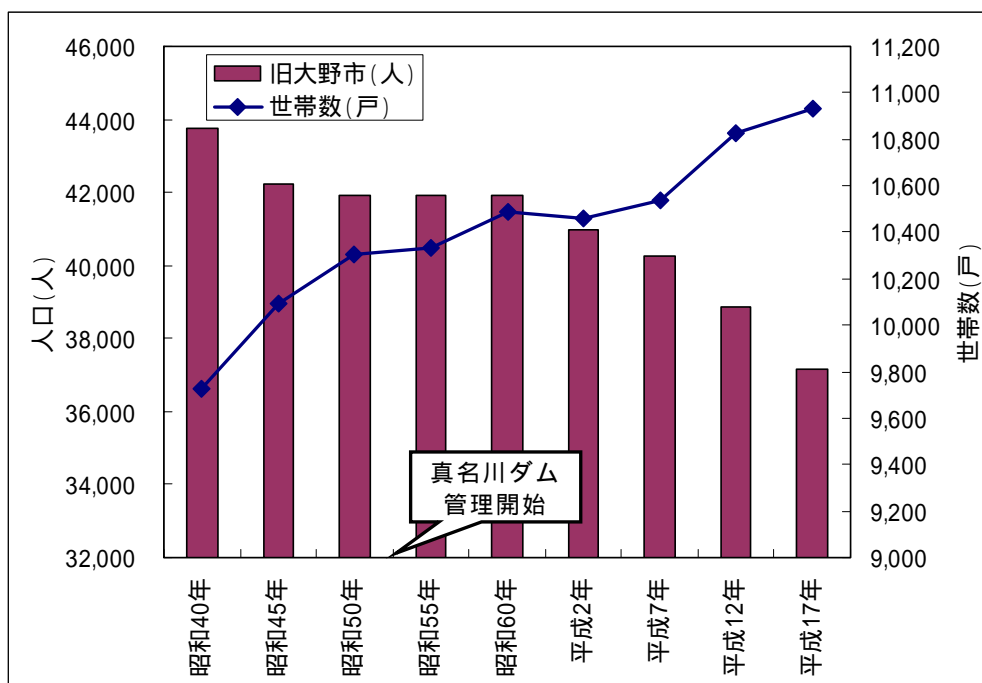


図 7.2 - 1 人口・世帯数の経年変化

出典：資料 7 - 1

### (2) 産業別就業者人口

図 7.2 - 2 に事業所数の経年変化を、図 7.2 - 3 に就業者人口の経年変化を、そして図 7.2 - 4 に産業構造の経年変化を示す。就業者人口は、事業所数と比例して減少している。また産業別就業者人口は、第一次産業が大幅に減少し、第三次産業が大幅に増加した。

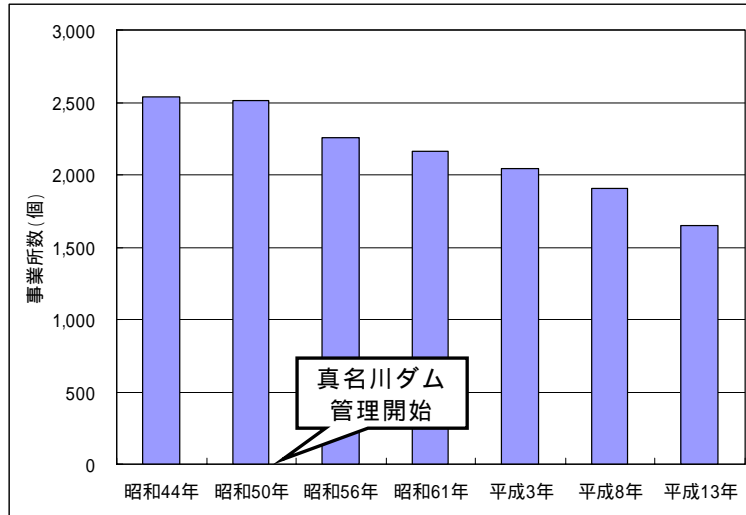


図 7.2 - 2 事業所数の経年変化

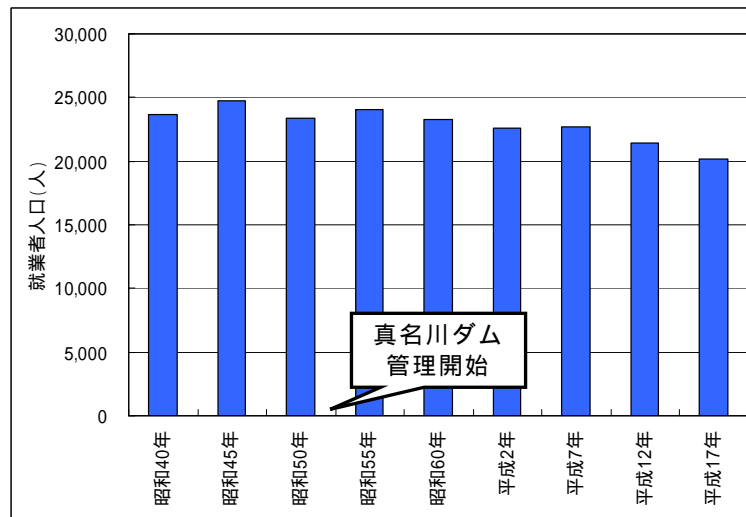


図 7.2 - 3 就業者人口の経年変化

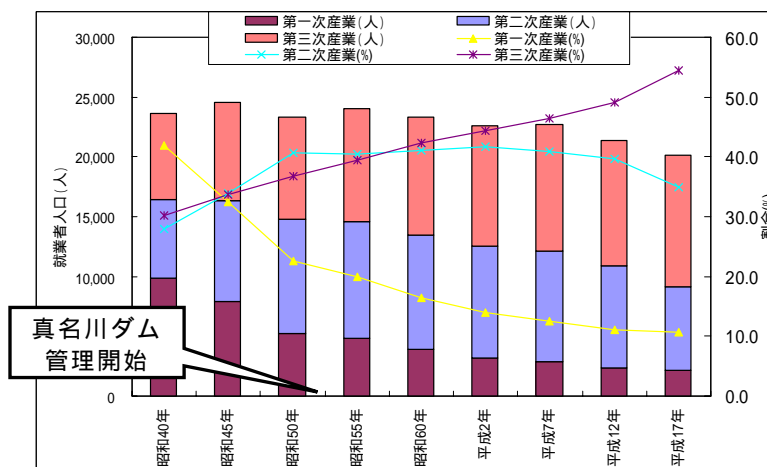


図 7.2 - 4 産業構造の経年変化

出典：資料 7 - 2 , 7 - 3



### (3) 観光イベント等の開催

水源地域の大野市では、下記のような観光イベントが開催されている。

#### 大野城さくらまつり(4月)

大野城さくらまつりは、越前大野城(亀山城)周辺において、観桜期間に合わせて各種イベントや体験などが楽しめる。

#### 七間朝市・山菜フードピア(5月)

山菜フードピアは、旬の味覚・山菜を中心に、新鮮野菜や手作り加工品など豊富な量と品揃えが自慢である。



七間朝市・山菜フードピア

#### 九頭竜新緑まつり

九頭竜新緑まつりは、九頭竜ダム一帯がさわやかな新緑につつまれる頃、「食とふれあい」をテーマに毎年恒例の新緑まつりが開催される。



九頭竜新緑まつり

#### おおの城まつり

夏の一大イベント「おおの城まつり」は、毎年8月のお盆期間に市内の各会場で踊りやイベントを開催する。大花火大会や「越前おおのおどり」など、浴衣の市民や帰省客で、情緒ある町は賑わいをみせる。



おおの城まつり

### 三大朝市物産まつり

三大朝市物産まつりは、毎年10月の第4土・日7間通  
りで開催される秋の食祭である。大野の朝市を始め、有  
効市町の朝市や物産の即売など、各地のとれたての山海  
の幸が勢揃いする人気のイベントである。



三大朝市まつり

### 九頭竜紅葉まつり

紅葉まつりの会場となる国民休養地はひと際美しい紅葉が目  
にしみる。特産品のマイタケをはじめとする地区の特産品がず  
らりと並び、多彩な催しとともに来場者を楽しませてくれる。



九頭竜紅葉まつり

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
日	11/20	11/23	11/24	11/25	11/26	11/27	11/28	11/29	11/30	12/1	12/2	12/3
まつり	九頭竜まつり 花壇まつり 宇波神社の神楽盆舞 丸岡城まつり	丸岡の土舞 丸岡の土舞 宇波神社の神楽盆舞 丸岡城まつり	丸岡の土舞 丸岡の土舞 宇波神社の神楽盆舞 丸岡城まつり	丸岡の土舞 丸岡の土舞 宇波神社の神楽盆舞 丸岡城まつり	丸岡の土舞 丸岡の土舞 宇波神社の神楽盆舞 丸岡城まつり	丸岡の土舞 丸岡の土舞 宇波神社の神楽盆舞 丸岡城まつり	丸岡の土舞 丸岡の土舞 宇波神社の神楽盆舞 丸岡城まつり	丸岡の土舞 丸岡の土舞 宇波神社の神楽盆舞 丸岡城まつり	丸岡の土舞 丸岡の土舞 宇波神社の神楽盆舞 丸岡城まつり	丸岡の土舞 丸岡の土舞 宇波神社の神楽盆舞 丸岡城まつり	丸岡の土舞 丸岡の土舞 宇波神社の神楽盆舞 丸岡城まつり	丸岡の土舞 丸岡の土舞 宇波神社の神楽盆舞 丸岡城まつり
ところ	丸岡町	丸岡町	丸岡町	丸岡町	丸岡町	丸岡町	丸岡町	丸岡町	丸岡町	丸岡町	丸岡町	丸岡町

福井県年間行事日程

### 7.3 ダムと地域の関わりに関する評価

#### 7.3.1 地域におけるダムの位置づけに関する整理

真名川ダムは、「名水のまち」大野市の近郊に立地するダムであるが、雄大な奥越山岳地帯に位置する奥山型ともいえる立地条件にあり、周辺は福井県内で有数の林業地帯でもある。都市域との広域的な交流は比較的利便性が良く、大野市街地との連携・ネットワークにより、その活用が大いに見込める条件にある。

##### (1) 真名川ダム水源地域ビジョン

「水源地域ビジョン」は、従来の水源地対策から、ダムを活かした水源地域の自立的・持続的な活性化を図り、流域内の連携と交流によるバランスのとれた流域圏の発展を図る総合的な整備への転換を目指したものである。ダム水源地域の自治体・住民等がダム事業者・管理者と共同で策定主体となり、下流の自治体・住民や関係行政機関に参加を呼びかけながら策定する水源地域活性化のための行動計画である。

平成 16 年(2004)3 月に策定した水源地域ビジョンの基本方針は、以下のとおりである。

#### 里山の再生 - 水源林を保全する

健全な水循環を確保する第一歩として、美しい森林の緑のダムを人々の理解や愛着によって再生する必要があります。  
林業の活性化だけでなく、国土保全としての防災的な必要性とともに、雇用確保などの今後の社会的な課題となることが考えられます。

#### 清水や水路の自然再生 - 地域的な水管理に取り組む

様々な用途で利用され重要な地域資源となっている大野の地下水や、市内の水路や河川などの地下水涵養の供給源を保全し、大野の情緒ある生活環境やうるおいのある自然環境を再生します。  
従来の地域用水の様々な管理状況を見直し、真名川ダムの貯水池運用の工夫とともに、下流の水路網の整備による農業用水の配水管理を検討します。  
イトヨやホタルが生息する水空間の再生や豊かな地下水を取り戻すとともに、水管理における関係機関での調整や市民参加での取り組みが極めて重要となります。

#### 人間関係の再生 - 上下流交流を促進する


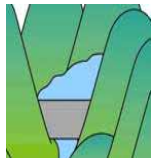
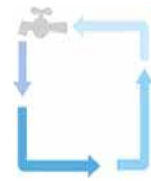


大野の水環境を改善しながら、高齢者福祉まで含めて地域の相互扶助が拡充していく必要があります。  
地域の水環境の保全に向けて地域の共同体を再生し、さらに下流との広域交流の受け入れ体制づくりなどを進め、地域の結束を高めて人間関係を豊かにすることが重要です。

図 7.3 - 1 真名川ダム水源地域ビジョン基本方針

出典：資料 7 - 4

真名川ダム水源地域ビジョンにおける具体的な施策を以下に示す。

## 「水のグランドデザイン」としてのビジョン施策のメニュー

施策の柱	施策	具体的内容	
<b>水源林の保全</b> (水源涵養と 林業の活性化) 	森林施業との連携	・健全な水循環・水源涵養機能保全や観光資源の保全のための森林施業と連携した山林の維持管理・保全	
	雑木林(里山)の活用	・交流拡大のための下草刈りや落葉かき等、山林保全活動と組合せて楽しめる多彩なイベント・メニューの提供	
	林業ボランティア	・循環型社会や環境をテーマに活動する各種の組織・団体等の幅広い環境ボランティアとの連携の検討 ・環境保全活動へのボランティア参加についてのメニュー企画や、意識啓発及び地域間交流の促進	
<b>大野の「水」</b> 	ダム管理と周辺整備	河川の維持流量等の確保の研究 ・適正な水利用、河川及び市内水路での流量確保の研究 ・非かんがい期の「目に見える水路」に水を流す検討	
	大野盆地の健全な水環境 	地下水保全を図る貯水池運用の研究	・真名川ダム貯水池運用の工夫による放流可能量の確保や、それによる地下水涵養等の研究
		中島公園の充実	・日帰り・宿泊用のレクリエーションの機能の充実 ・周辺の山を生きた自然観察園としての活用 ・川や湖面での釣り等、水面の活用についての研究
		水路網の復元	・大野市の風景として市内を流れる水路網の景観保全 ・覆蓋されている水路での「せせらぎ」の可視化
	水と社会との関わり (情操や環境啓蒙活動) 	水を活かした公園づくり	・水環境・親水性のある公園(ビオトープ)の整備
		農業用水管理との連携	・地下水涵養源である田圃による湛水期間と面積の拡大 ・用排水路に可能な限りの通水
		地下水位のモニタリング	・市内中心部の地下水位の監視の継続 ・市民や地下水利用者への理解のための地下水状況の広報
		水文化や愛護活動	・水文化や水の歴史をテーマにしたフォーラム等の開催 ・水環境保全の活動(河川清掃・生き物観察等)企画
	<b>上下流交流</b> (都市との 広域交流) 	親和性の高い水生生物の保全	・イトヨなどの水生生物とその生息環境保全の活動の継続 ・水辺の再生とそこに生きる動植物の保全活動
		家庭排水対策	・家庭雑排水の市内水路への直接排水の防止 ・市民の「水に関する意識」の高揚
NPO活動の拡充		・山林・河川の維持管理等、循環型社会や環境に関する各種の組織・団体・環境ボランティア等との連携や活動拡充	
活動の人材の確保・育成		・交流活動の活性化に関する人材の発掘、人材ネットワークの作成、活性化活動をリードする団体・個人等の育成 ・各分野のマイスターや環境学習インストラクターの募集	
近隣地域との相互訪問		・環境保全活動へのボランティア参加についてのメニュー企画や、意識啓発及び地域間交流の促進	
県外との交流	・受益地等の関係地域の住民による水源地域の維持管理の参加のため、環境ボランティアの参加・受入れ体制の確立		
中山間地域の活用	・周辺市町村からの誘致などによるグリーンツーリズム		
各種情報の発信	・水源地の実態や都市交流のための情報発信 ・地域の相互連携や都市との交流のための各種情報の発信 ・光ファイバー網の活用		

## (2)真名川ダム・九頭竜ダム水源地域ビジョンの推進

平成 17 年 11 月の大野市と旧和泉村の合併に伴い、真名川ダム・九頭竜ダムの一体となった水源地域ビジョンを推進するため、平成 18 年 2 月には、「真名川ダム・九頭竜ダム水源地域ビジョン推進委員会」を立ち上げた。

「真名川ダム・九頭竜ダム水源地域ビジョン」は、ダム水源地域の自治体・住民等がダム事業者・管理者と共同で策定主体となり、下流の自治体・住民や関係行政機関に参加を呼びかけながら策定する、水源地域活性化のための行動計画である。

真名川ダム・九頭竜ダム水源地域ビジョンでは、「森林」、「水」、「交流」を 3 つの柱のもとに水源林の保全や活用、健全な水環境の形成、多様な水辺の活用、活発な地域間の交流など様々な施策を実行することにより、水源地域の持続的な発展を目指す。

真名川ダム・九頭竜ダム水源地域ビジョンの施策のイメージおよび施策の体系は、図 7.3-2 および図 7.3-3 に示すとおりである。



御清水



奥越高原県立自然公園



九頭竜紅葉まつり

図 7.3 - 2 施策の実施イメージ

出典：資料 7 - 4



図 7.3 - 3 施策の体系

出典：資料 7 - 4

また、真名川ダム・九頭竜ダム水源地域ビジョン推進委員会の下部組織として、地域の活動団体等で構成する「森林」、「水」、「交流」の3部会を設立した。

ビジョンの推進組織の構成と多様な活動主体との協働関係を図 7.3 - 4 に示す。

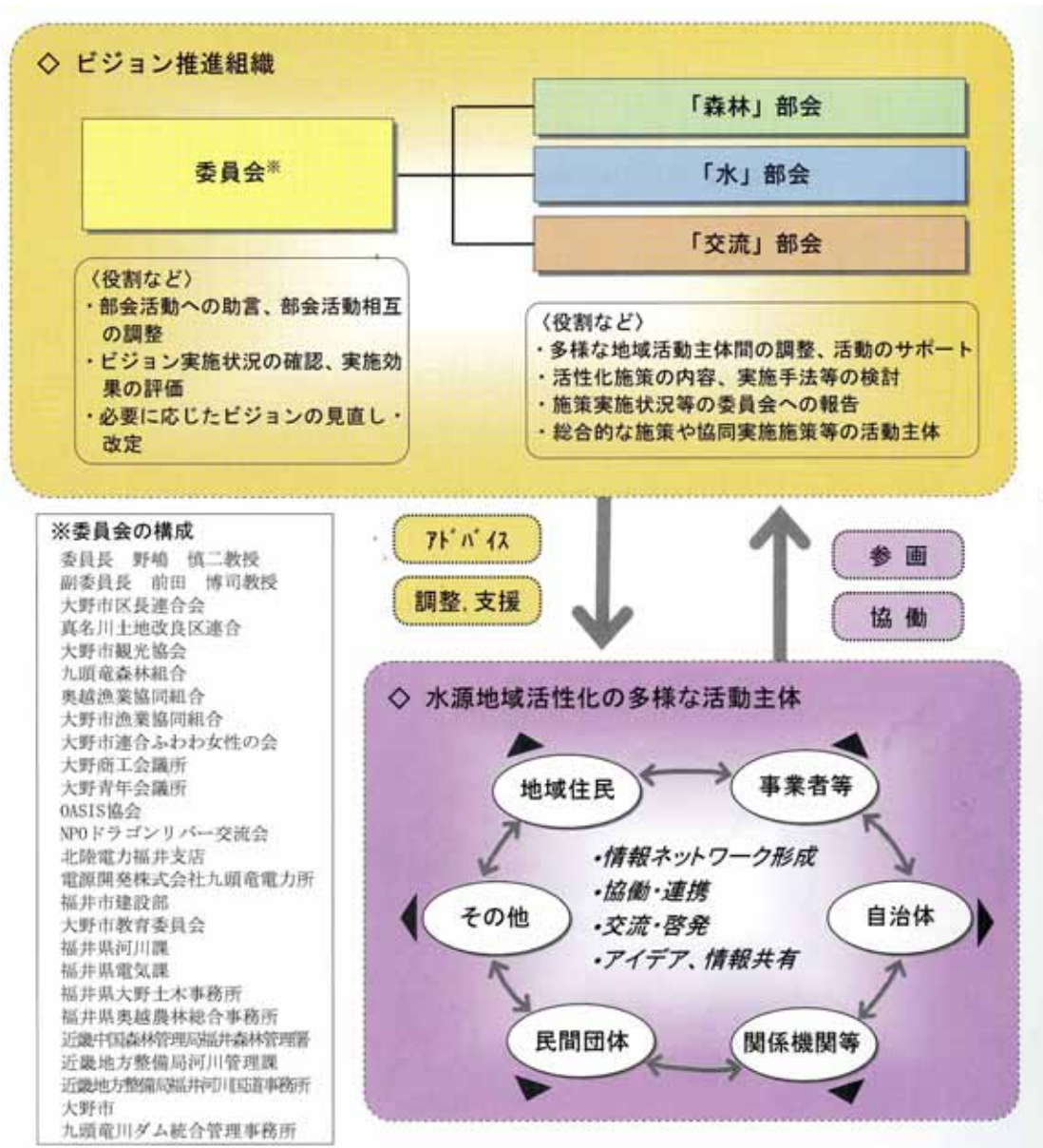


図 7.3 - 4 ビジョン推進組織と多様な活動主体との協働

出典：資料 7 - 4



これまで、真名川ダム・九頭竜ダム水源地域ビジョンの一貫として以下の施策が実施されている。



植樹会



森と湖のキャンプ

写真 7.3 - 1 実施施策

### 7.3.2 地域とダム管理者との関わり

真名川ダムでは、「森と湖に親しむ旬間」の行事の一環として、中島公園において大野市主催による「おおのネイチャーフィールド」を開催するとともに、ダム管理所では組織として地域との関わりを深めるために活動を行っている。真名川ダム見学会は、その活動の1つである。ダム見学者数は、図 7.3 - 5 に示すとおり、平成 16 年を除き、毎年増加している。



写真 7.3 - 2 真名川ダム見学会

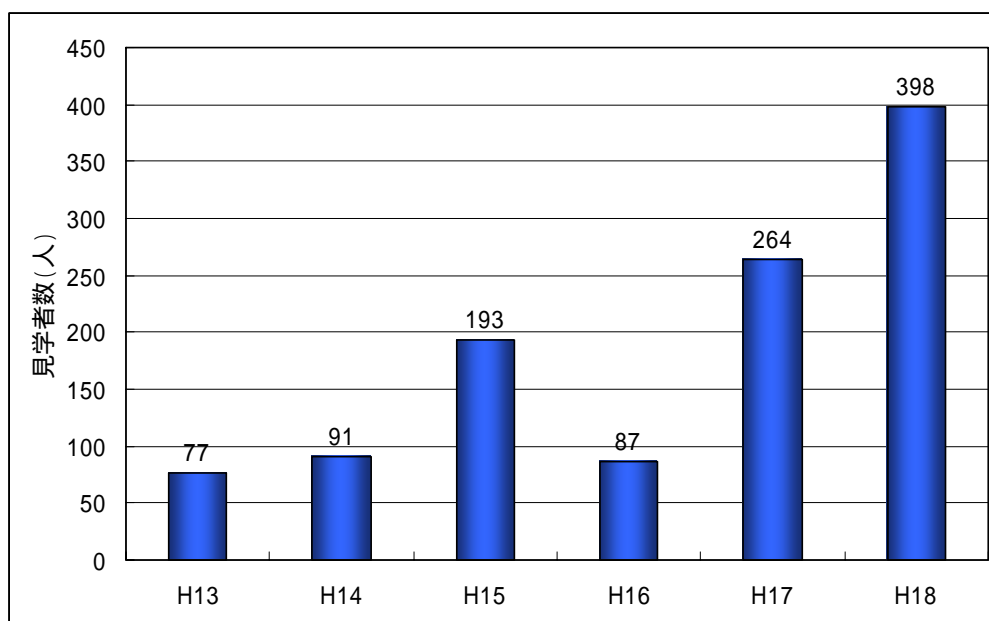


図 7.3 - 5 ダム見学者数の推移

## 7.4 ダム周辺の状況

### 7.4.1 ダム周辺整備の状況

真名川ダム周辺では、図 7.4 - 1 に示す施設を、ダム周辺環境整備で実施した。

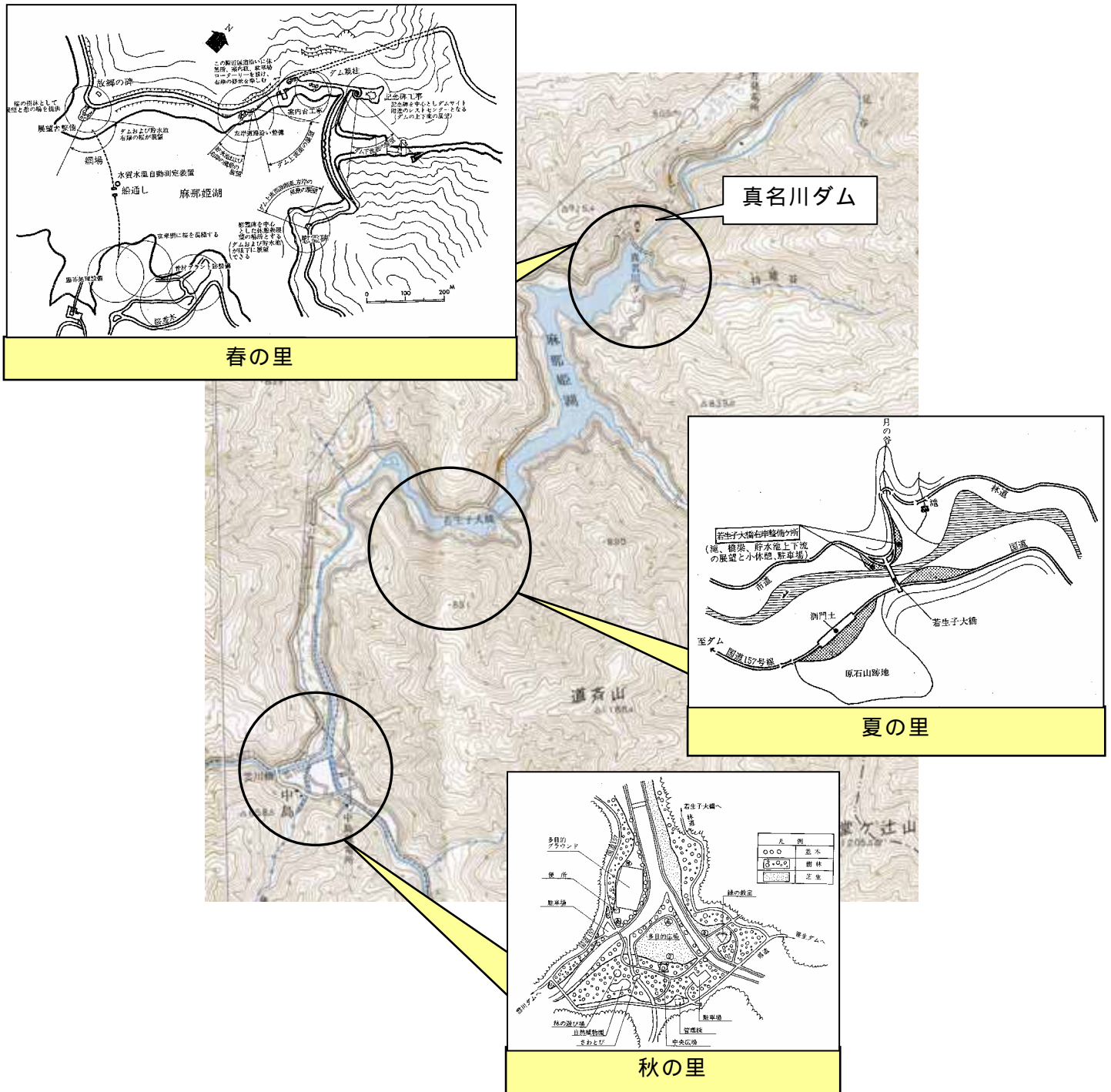


図 7.4 - 1 ダム周辺環境整備状況

## 7.4.2 ダム及びダム周辺のイベント等の開催状況

### (1) 森と緑に親しむ旬間行事

真名川ダムでは、「森と湖に親しむ旬間」の行事の一環として、ダム見学会や中島公園におけるイベントが行われている。

平成18年度は、1) 森と湖に親しむ集い in 真名川 2) 親子水源地見学バスツアー、3) 真名川ダム見学会、4) フォーラム開催「水源地域の明日を考える、に合計888人の来場者があった。平成20年には、九頭竜ダム・真名川ダムを会場として「森と湖に親しむつどい全国行事」(主催「九頭竜ダム・真名川ダム「森と湖に親しむ旬間」全国行事現地実行委員会」)が開催される予定である。

図 7.4 - 2 森と湖に親しむ旬間パンフレット



図 7.4 - 3 気球体験



図 7.4 - 4 ダム見学会

出典：資料 7 - 5

## 7.5 河川水辺の国勢調査（ダム湖利用者実態調査）結果

ダム湖利用者実態調査は、「河川水辺の国勢調査（ダム湖版）（国土交通省河川局河川環境課）」により、平成3年度（1991）から3年ごとに実施しており、四季を通じた休日5日、平日2日の合計7日の現地調査（利用者アンケート調査：直接ヒアリング、利用者カウント調査）を実施し、年間利用者数の推定を行うものである。

ダム湖利用実態調査のブロック区分施設位置図を図7.5-1に示す。真名川ダムのダム湖利用実態調査では、2つのブロックに区分して調査を実施している。

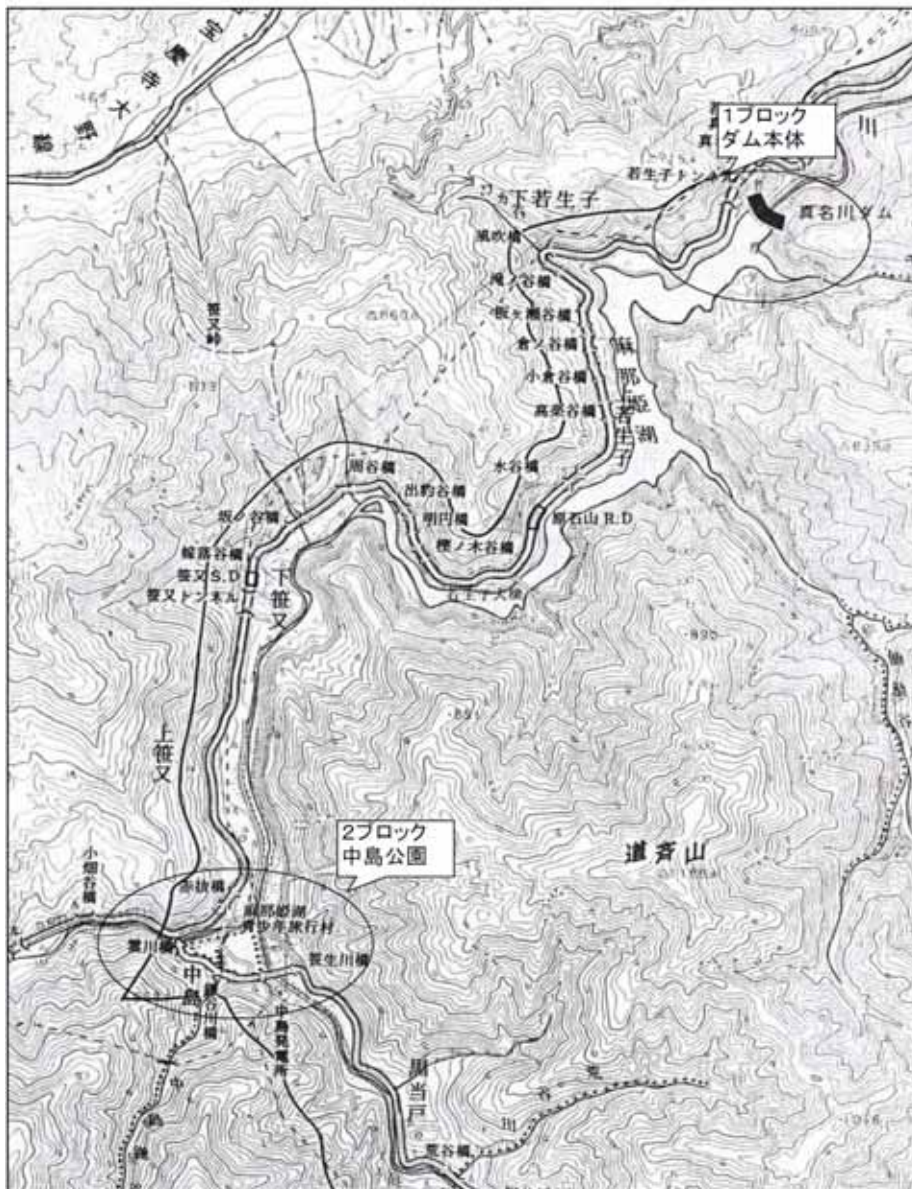


図 7.5 - 1 ブロック区分施設位置図

年間のダム湖利用者数の推計に当たっては、季節、休日と平日の違いを考慮し、各季節の休日、土曜日、平日の利用者数（実測値を基本とする）を原単位とし、それに各季節の休日・土曜日・平日の日数を乗じた推計値にイベント調査結果を加えることにより、年間利用者数の推計を行っている。

各季節の期間、休日・平日の日数は以下のとおりの区分とした。

春季：3/1～5/31（休日 16 日、土曜日 11 日、平日 65 日）

夏季：6/1～8/31（休日 15 日、土曜日 13 日、平日 64 日）

秋季：9/1～11/30（休日 18 日、土曜日 13 日、平日 61 日）

冬季：12/1～2/29（休日 17 日、土曜日 13 日、平日 61 日）

各季節の土曜日および秋季・冬期の平日については実測値がないため、平成 4 年度に行った補足調査結果より得られた全国平均の比率を乗じる（土曜日 =  $0.37 \times$  休日、平日 =  $0.18 \times$  休日）ことにより、原単位を求めた。

平成 15 年度における年間利用者数は約 10 万 8 千人と推計される。なお、年間のダム湖利用者数の推計に当たっては、季節、休日と平日の違いを考慮し、各季節の休日、土曜日、平日の利用者数（実測値を基本とする）を原単位とし、それに各季節の休日・土曜日・平日の日数を乗じた推計値にイベント調査結果を加えることにより、年間利用者数の推計を行った。

真名川ダム（麻那姫湖）の目的は、「野外活動」がほぼ大部分を占めており、ダム上流部にある麻那姫湖青少年旅行村の公園（キャンプ場）施設利用が多く、過去の調査結果から見てもアウトドア的な利用が大半を占めている。なお、平成 3 年度の調査の来場目的の設問は、「スポーツ」、「釣り」、「ボート」、「散策」および「その他」であったが、平成 6 年度の調査からは、設問に「野外活動」と「施設利用」を追加している。

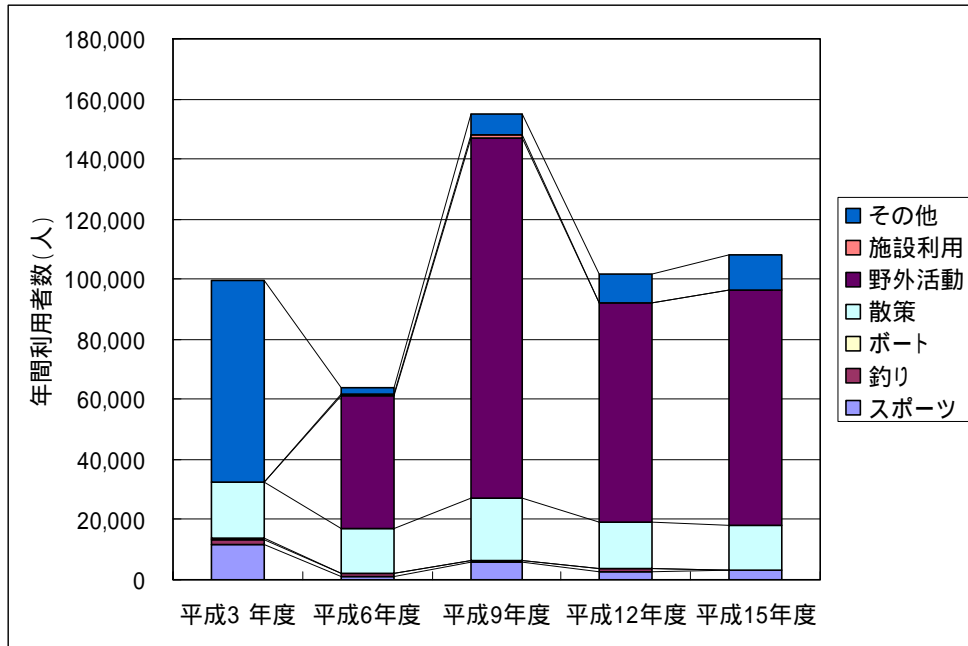


図 7.5 - 2 河川水辺の国勢調査 (ダム湖版) 結果

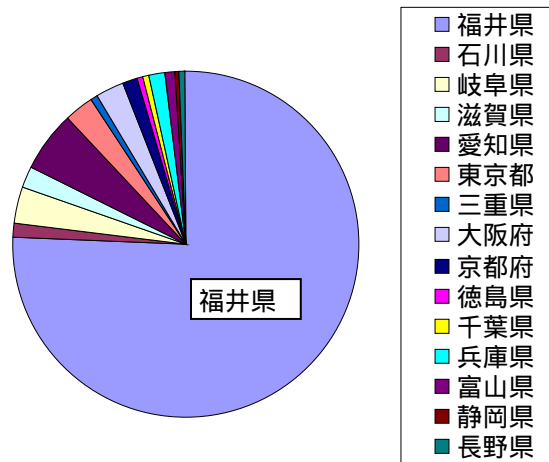
表 7.5 - 1 ダム周辺施設利用人数 (河川水辺の国勢調査による)

(単位: 千人)

		平成3年度	平成6年度	平成9年度	平成12年度	平成15年度
利用 場所 別	湖面	2,326 (2.3%)	2,690 (4.2%)	8,076 (5.2%)	1,111 (1.1%)	5,507 (5.1%)
	湖畔	90,369 (90.9%)	59,097 (92.7%)	136,875 (88.2%)	84,513 (83.8%)	88,749 (81.9%)
	ダム	6,684 (6.7%)	1,937 (3.0%)	10,275 (6.6%)	15,860 (15.6%)	14,969 (13.0%)
合計		99,379	63,704	155,226	101,484	108,316

出典: 資料 7-6

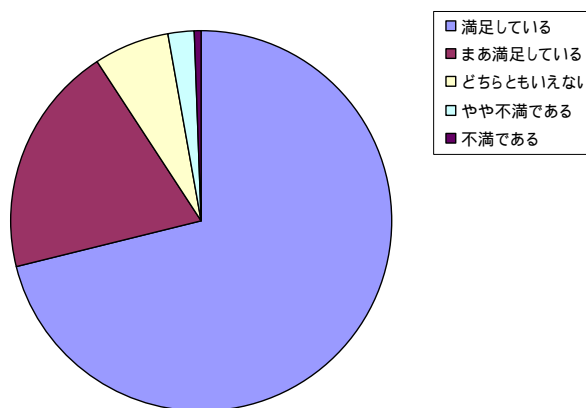
平成 18 年度のアンケート結果から、真名川ダム及び周辺施設への来訪者は、福井県内からが約 75%、県外からが約 25%である。



出典：資料 7-7

図 7.5 - 3 真名川ダムおよび周辺施設へ来訪者の発地調査結果

また、来訪者への満足度調査結果から、「満足している」、「まあ満足している」と回答した人は、合計約 90%であった。また、来訪理由としては「景色がきれい」、「自然が豊である」が多い。



出典：資料 7-7

図 7.5 - 4 真名川ダムおよび周辺施設へ来訪者の満足度調査結果



## 7.6 まとめ

ダムを活かした水源地域の自立的、持続的な活性化を図るため、平成 16 年 3 月に「真名川ダム水源地域ビジョン」、平成 17 年 3 月に「九頭竜ダム水源地域ビジョン」を策定した。さらに平成 18 年 2 月には、大野市、旧和泉村の合併に伴い両ビジョンを一体的に推進する「真名川ダム・九頭竜ダム水源地域ビジョン推進委員会」を設立し、施策の推進を図っている。

ダム湖周辺のイベントとして「森と緑に親しむ旬間」、「おおのネイチャーフィールド 2005」などのイベントを実施しており、受益地域と水源地域の交流や地域コミュニティの向上に努めている。

### < 今後の方針 >

今後も引き続き、水源地域の活性化を図れるよう、積極的に地域と関わり水源地域ビジョンを推進していく。

また、受益地域と水源地域の交流や地域コミュニティの向上に努めていく。

## 7.7 文献リスト

表 7.7 - 1 使用した文献・資料リスト

No.	報告書またはデータ名	発行者	発行年月日	箇所
7-1	国勢調査（人口・世帯）	（財）統計情報研究会開発センター	昭和 40 年～平成 17 年	人口・世帯
7-2	事業所統計調査報告	総務庁統計局	昭和 44 年～平成 13 年	事業所数
7-3	国勢調査（就業者人口）	総務庁統計局	昭和 40 年～平成 17 年	就業者
7-4	真名川ダム・九頭竜ダム水源地域ビジョン	大野市、九頭竜川ダム統合管理事務所	平成 18 年 3 月	水源地域ビジョン
7-5	平成 17 年度真名川ダム管理フォローアップ年次報告書	九頭竜川ダム統合管理事務所	平成 18 年 1 月	水源地域ビジョン
7-6	平成 15 年度河川水辺の国勢調査〔ダム湖版〕（ダム湖利用実態調査編）	国土交通省河川局河川環境課	平成 16 年 8 月	ダム別の利用実態調査
7-7	真名川ダム ダム湖利用実態調査結果	九頭竜川ダム統合管理事務所	平成 18 年	利用者アンケート